真剣に私と貴方で恋をしよう！！

春夏秋冬　廻

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
真剣に私と貴方で恋をしよう！！

【Ｎコード】
Ｎ１８３８Ｖ

【作者名】
春夏秋冬　廻

【あらすじ】
ある雨の日、川神院の門前に1人の赤ん坊が置き去りにされていた……ある雪の日、少年は最も尊敬する人を失った……この作品は『真剣で私に恋しなさい！』の二次創作作品です。風間ファミリーに2人のオリキャラを加えたパラレル物語。百代より強いオリ主、女子たちより強いオリキャラが一応のメイン。物語は原作の話である直江大和のどれかのルートにオリキャラ達が介入するものなので、一応は原作に沿った展開をしていきます。やっと原作突入。続けていた連日投稿は終了。ペースが落ちます。“それでも問題なし！”

という方はよろしくお願いします。ＰＶ１００万・ユニーク１０万超えました！　ありがとうございます！

プロローグ　ＳＩＤＥ　Ｊ（前書き）

初めまして。初投稿となります。この物語はオリキャラが登場しますので、苦手な方はご遠慮ください。
小説執筆初心者ですが頑張っていきます。

ではプロローグをどうぞ。

プロローグ　SIDE　J

雨。

僕は雨が苦手だ。

僕は雨に日に置き去りにされていたらしい。
生まれて数ヶ月の赤ん坊の時らしく、全く記憶にないが心的外傷（トラウマ）というのは物心がつくつかないは関係ないみたいだ。

気付いた時には雨の日が苦手だった。

まあ、吐き気がするとか体調が悪くなるとか酷いものではないのが救いだが、物心がついて以降に雨の日が嫌いになるような出来事がない以上、これは立派な心的外傷（トラウマ）と言っていいだろう。

幸い、捨てられていたのが武術で有名な寺院の門前だった為、死ぬ事も病気になる事もなく保護され、僕はその寺院ー川神院ーで育てられた。

扱いとしては居候の孤児。
出生届は出されていなかったが置手紙があり、その手紙に名前が書かれていた為、養子ではなく孤児として川神院の居候扱いとする事になったらしい。
養子にするとの意見もあったらしいが、せっかく親からもらった姓名があるのだから、という鉄心さんの言葉で現在の立場となったらしい。

まあ居候だろうと養子だろうと、川神院の人たちは僕を“家族”と

して扱ってくれているので問題は全くないし、僕にとっても川神院の人たちは間違いなく“家族”だ。

だからといって生みの親をなんとも思っていないわけではない。恨みたい気持ちも確かにあるし、何か事情があって仕方がなかったのかもしれないという気持ちもある。正直、どう考えていいのか持て余しているといった所だが今は思い悩んでいる暇がない。

「こんな所で何を黄昏ておるんじゃ？」

廊下の窓から庭を眺めていた僕に声が掛った。
声のした方を見るとそこには立派なヒゲをたくわえた袴姿の老人がいた。

この人が僕を拾って保護者代わりをしてくれている人でこの川神院の代表、川神鉄心さんだ。

「いえ、特に何も」

そう簡単に答え再び外を眺める。

「ただ単に雨だなぁ、と思って」

僕の隣に並び、同じように窓の外を眺めていた鉄心さんは、真の武芸者ともいえる堅い掌を僕の頭に置き、少し荒っぽく撫でながら再び問い掛けてきた。

「何か思う事や思い出す事でもあるか？」

「物心がつかなくても心的外傷は生まれるんだなぁ、と思ったんです」

「心的外傷のう……」

鉄心さんは僕の答えに少し唸るような声音で言葉を返してきた。

「別にこの間の話の事で考え込んでいたわけじゃないんです。ただ……僕は雨の日を嫌いになるような出来事がなかったのに雨の日が苦手だからどうしてだろうかな？　ってずっと思っていたんです」

いったん言葉を区切り、鉄心さんの方を向く。

「で、この間の話から物心がつかなくても心的外傷は生まれるんだ、という結論に達したからそういう事もあるんだなぁ、と思って外を眺めていただけです」

僕の言葉を聞いてこちらを向いた鉄心さんは、なんとも呆れたような顔をしていた。

「どこの哲学者じゃお主は。もう少し子供らしい考えは持てんのか」

子供らしい考え、と言われてもそう思ってしまったのだから仕方ない。

「それよりも僕に何か用があったんじゃないんですか？」

「おお！　そうじゃった！」

ヒゲを撫で今まさに思い出したように言う。

「モモが探しとったぞ。『遊ぶ約束をしていたのにジンがいない』と騒いどったわ」

そういえばと思い出す。

昨日の夜に遊ぶ約束を確かにした。だけど今日の朝から降っていた雨に考え込んでいた為すっかり忘れてしまっていた。

鉄心さんに礼をし、急いでその場を離れ道場へと向かう。

怒られるなぁ、と思いつつも笑みが零れる。

僕が家族のことで思い悩むことがないのは間違いなく彼女のおかげであり、彼女のせいでもある。

鉄心さんの言葉に出た「モモ」と呼ばれる人物。

川神百代。

この川神院の娘で僕の1歳年上の幼馴染み。と言っても家族のように育てられている為、余り年上と思ったことはない。

彼女はとても破天荒な子で、僕は物心ついた頃には既に彼女に振り回されていた。

その証拠に、僕の一番古い記憶は彼女に襟首を掴まれたまま引きずられる、という何とも間抜けなものだ。

そんな彼女に振り回され、毎日を面白おかしく慌ただしく過ごしているおかげで僕は生みの親に対して負の感情を余り持つ事なく、また性格も歪む事なく生きてこられた。（尤もこの感想は主観的なものであり、周りから見たら少し歪んでしまっているかもしれない）

「遅いぞジン！！」

道場の入り口にいたモモちゃんが左手を腰に当て、右手で指さしながら言う。

「ごめん、ちょっとぼぅっとしてた」

謝りながら駆け寄る。

怒られる覚悟はしていたがそんな事はなく、モモちゃんは僕の手を取ると道場の外に僕を引きずるように走り出す。

「ちょっとモモちゃん。外は雨だよ？　外に出たら濡れちゃうよ」

「軟弱だな。子供は雨の子元気な子って言うだろ！　気合いでなんとかなる！」

「それを言うなら『子供は風の子』だよ」

僕の訂正の言葉もなんのその。いつの間にか追いかけっこのような感じで2人して走り回っていた。

僕こと暁（あかつき）　神（じん）。

子供らしくないと言われる考えを持ちつつも、なんとも子供らしい楽しく充実な日々を送っている。

そんな事を思った7歳の春の日だった。

プロローグ　ＳＩＤＥ　Ｊ（後書き）

あとがき～！！

何かを書こうかと思っておりますが、何をやるかはまだ検討中です。

自分の想像（妄想）設定をきちん生かせるような物語にできるように頑張っていきます。

プロローグ　ＳＩＤＥ　Ｈ（前書き）

別サイド、もう1人のオリキャラのプロローグです。

プロローグ　SIDE　H

「無能な奴だったな」

それが、僕の父に与えられた祖父からの最後の言葉だった。

父は剣士だった。
現在大衆に広まっている剣道とは違う昔から、それこそ江戸時代より前の頃から続く武家の血と流派を受け継ぐ、れっきとした剣術家だった。

父親として優しく、師として厳しく偉大な父を僕はとても尊敬していたし、大好きだった。

そんな父が死んだ。

直接の死因は病気。
叔母さんが言うには、既に末期のガンだったらしい。
最期まで必死で生き続け、病気に負けないように頑張った立派な人だった。

でも祖父に言わせれば、『剣士として名誉ある試合に負けた役立たず』『家名、流派を継ぐのにも値しない無能』。
つまり、祖父にとって大事なものは“息子”ではなく“家名・流派のためになる後継者”だったという事。

事実、父は剣士にとって名誉ある称号を懸けた試合に敗れた。
その時に大きなケガをしたが、それは直接の死因にはなっていない。
しかし祖父はそれが直接の死因だとでも言うような言い草だった。

祖父は相手を罵るのではなく父を罵った。

『無能が』と……

僕は相手の人を憎いと思った事はない。
その人もまたとても尊敬できる人だったからだ。
勝負の相手だった父を敬い、病気で入院していた時もきちんと見舞に来てくれていたし、僕の事を子供扱いはしていたが、1人の人間として接してくれていた。
父と並んで僕にとってとても尊敬できる人だった。

その人が僕に向かって言った。

『君のお父さんはとても素晴らしい人だった。剣士としてももちろん、人間的にも立派な人だった。
私は彼と真剣な試合をできて嬉しく思うし、彼の最後の真剣勝負の相手を務める事が出来た事を一生涯の誇りにしている』

そして、僕の頭をその大きな手で撫でながら優しい笑顔を浮かべた。

『お父さんを亡くして辛いかもしれない、悲しいかもしれない。
だけど君はあのお父さんの息子である事に誇りを持ってほしい。
君にもお父さんと同じ血と才能が流れているんだ。きっと素晴らしい剣士になれる。私はそれを楽しみにしているよ』

そう言うと、その人は後ろにいた小さな女の子を連れて帰って行った。

まだ小さかった僕にすら、その言葉はとても心に残るものだった。

深々と雪の降る寒い日の出来事。
その手と、その笑顔と、その言葉は当時まだ5歳だった僕の将来をある意味決定付けるものとなった。

§　§　§

部屋の窓を開け一面の銀世界を見つめる。
昨日から降り続いた雪は今朝の明け方に降り止んだが、膝下ぐらいの高さまで降り積もったようだった。

「さっむ！」

突然後ろから声があがる。
振り向けばそこにいたのは1人の女性。
ノックもなしに部屋に入ってきたその女性は、寒さに耐えるように腕を組みながら僕に近づき言葉を掛ける。

「よくもまあ、こんな寒い日に朝っぱらから窓を全開にできるな」

「叔母さん寒がりだもんね」

バシンッ

声にした直後、間髪いれず後頭部をはたかれる。

「叔母さんと呼ぶなと何度言えばわかる」

「ご、ごめんなさいぃ」

叩かれた所を両手で押さえ、蹲りながらも何とか声を出す。

この人が僕の叔母さんで現在、僕の保護者でもある父の妹。
父の葬儀の後、見捨てられるような形で祖父に置いて行かれた僕を引き取ってくれたのが、祖父とはほぼ絶縁、勘当状態になっていたこの人だった。
祖父にとって、僕は無能の父の息子で価値のない存在だったらしい。
それを察知したらしい叔母さんが、まるで連れ去るように着の身着のままの僕を、自分が住んでいるこの川神市に連れ帰った。
そのためか実家では僕もすでに叔母と同様、ほぼ絶縁状態になっているらしい。

『あんなくそジジイが威張り散らしていた堅っ苦しい家にいなくてせいせいするだろ？　感謝しなさい』

なぜ連れ帰ったのかと聞いた後の叔母が言い放った言葉だ。
この言葉を聞いた瞬間、祖父と叔母の仲がなぜ悪いのかを一瞬で理解してしまった。

「で？　朝っぱらから窓を開けて外を見ていたあんたは何を考えてたんだい？」

「ちょっとあの日の事を思い出していただけだよ。あの日も雪が降っていたなぁ、って」

「そう言えばあっちにしては珍しく雪が降ってたね……」

思い出したくない人の顔でも思い出したのか、叔母は少し眉をひそめた。

数分の間、同じように窓の外を眺めていた叔母だったが、急に寒さを思い出したかのように身を震わせると、僕の横から手を伸ばし開け放たれていた窓を閉める。鍵まできちんと閉める徹底ぶり。

「そう言えば、風間の坊主が下であんたのこと呼んでたぞ」

「何で？」

「こんだけ雪が積もってんだ。雪合戦かなんかでもやるつもりだろう。直江んとこの坊主もいたし、岡本さん家の犬っ娘も呼んでたみたいだからな」

「行ってきてもいいの？」

「おう、しっかり遊んで来い」

親指で窓の外を指しながら言う叔母の言葉に頷き急いで着替える。そんな僕を楽しそうに眺めていたが、着替えが終わり部屋を出ようとした時、後ろから声が掛った。

「緋鷺刀、昼までには帰って来い。私は今日、仕事が休みだから昼飯作ってやるよ。ついでに坊主達も連れて来い」

「うん、行ってきます」

叔母の言葉に元気良く頷くと、僕は飛び出す勢いで玄関を開けマンションの階段を下り外へと駆け出した。

篁（たかむら）　緋鷺（ひろと）刀８歳。

一面を覆う雪に、あの日のあの人の言葉を思い出しながらも、少し先で大きく手を振る友達のもとへと駆けて行った。

プロローグ　ＳＩＤＥ　Ｈ（後書き）

あとがき～！

何を書くかはまだ検討中ですが、座談形式の次回予告でもやろうかな？

自分の首を絞めるような事になりそうですが……

第1話　ある日のある朝、いつもの日常（前書き）

第1話投稿。

いろいろ考えて、最初は幼少時のファミリー集合のお話を。

7／28本文中の日付に関して変更訂正

第1話　ある日のある朝、いつもの日常

――２００２年　５月５日　日曜日　ＡＭ４：４５――

ほんのり薄っすらと朝日の差し込む廊下を、僕は足音を立てずに歩く。

腰に届くであろう長い黒髪を後頭部で一纏めに縛っている所謂“馬の尻尾（ポニーテール）”だ。

自分としては鬱陶しいのだが、誰かさんが面白可笑しく伸ばせとのたまうのでここ数年、髪先を切り揃えるだけでほとんどハサミを入れていない。

そんな馬の尻尾を揺らしながらゆっくりと目的の部屋へと足を運ぶ。

遠くでは気合の入った掛け声が響いている。

ここは川神院。全国、いや恐らく全世界より選び抜かれた武人たちが、切磋琢磨と己の武の業を高める場所であり、武術の総本山としても有名な寺院でもある。

小さいながらも確かに響いてくる修練の掛け声を、どことなく心地良く感じながら、僕、暁神（あかつきじん）は目的の部屋の前に辿り着くと、少しだけ声を張り上げて部屋の中に声を掛けた。

「モモちゃん朝だよー！」

返事はない。

まあ、最初から期待していなかったので表情も変えることなく再度声を掛けた。

「モモちゃん！　早く起きないと朝の修練に遅れるよ！」

それでも返事がない事に、流石に呆れて溜息が1つ漏れて出た。
彼女――川神百代が素直に起きてくる事はないと分かっていた。だからこそ自分が起こしに行けと命を授かってきたのだ。

目の前の襖に手を添えると躊躇う事なく左右に開け広げる。
襖を開けた事で日の光が差し込まれたが、それでも室内はまだ薄暗く朝の訪れを拒んでいるような錯覚を受けた。
視線をベッドの方に向けると、掛け布団をすっぽりとかぶっているのか頭が見えず、布団が少しだけ盛り上がっていた。
結構大きな音を立てて襖を開いたというのに、部屋の住人は未だ起き上がってくる気配がない。
それ以前にモモちゃんが起きていないとかありえないと思う。

モモちゃんは武の天才で子供ながらに相手の気配を察知したり、小さな物音や声も聞き逃さない超人的な感覚器官を持っている。
モモちゃんや鉄心さんからは『お前もだろ！』と声を揃えて言われるが、なんと言うか“野性的な感”といったような第六感的なものは、圧倒的にモモちゃんが上回っていると思う。
いや確実に上回っていると断言できる。

恐らく起きるのが面倒臭い、あるいは何か悪戯をしようとしていると考えて間違いないだろう。
十中八九、前者だと思われるが……

「モモちゃん、いい加減起きようね」

ズカズカと遠慮なく部屋に踏み込み、かぶっている掛け布団を引き？がすように持ち上げる。
案の定、彼女は眼を覚ましていた。が、やはり起き上がるのが面倒

臭かったのだろう、うつ伏せに寝転がったまま顔だけをこちらに向けると、不貞腐れたような声を上げた。

「なんで休みの日の朝なのに修練なんかしなくちゃいけないんだよ～　しかもまだ5時にもなってないじゃんか～　世間はゴールデンウィークだぞ～　しかも日曜日だぞ～　もっと自由に寝かせろ～」

「昨日も一昨日もゴールデンウィークだけど朝に修練したじゃん。しかも一昨日は朝5時でもちゃんと起きてたじゃん。何で今日に限って起きてこないんだよ……」

不満げな言葉にきちんと答えを返す。
無視してもいいが、無視したらしたで一層不機嫌になるし場合によっては物理的手段を取ってくる。
軽く溜息を吐きながら今度はこちらから問い掛ける。

「ねえモモちゃん、今日が何の日か覚えてる？」

「もちろんだ～　ゴールデンウィーク真っ最中～　5月5日だぞ～」

言葉尻を伸ばした気の抜けたような返答。

「そうだね5月5日。子供の日だよ」

「そうだな～　端午の節句だな～」

「そうだね、端午の節句だね」

「何が言いたいんだ～？　はっきりしろ～？」

「昨日鉄心さんが言ってたじゃん。今日は子供の日だから市内の子供たちの為に院内を開放するって。そのための準備があるから朝の修練は少し時間を前倒しするぞって」

僕のその言葉にガバッと手をついて勢いよく起き上がる。

「そういやああのジジイがそんなこと言ってたな」

やっと思い出してくれたのか、少し呆然としながら呟いたモモちゃんの少し寝癖のついた髪を撫でる。

「そう言う事だから早く起きて着替えようね」

撫でられているのが気持ちいいのか目を細めてまどろんでいたが、急に腕の力を抜き再びうつ伏せに寝転がった。

「準備なんてめんどくさい～」

またもや不機嫌に言葉を発する彼女に、身をひるがえし部屋の外に向かいながら最後通牒を渡す。

「集合時間に1分でも遅れたら今日1日ご飯抜きだって」

「なにぃ！？」

今度こそ跳ね起きた。

そんなモモちゃんの様子を視界の隅に収めながら、僕は後手に開いた襖の取っ手に手を添えると止めのひと言を言い渡す。

「集合時間の5時までもう10分ないからね」

「ちょっと待ってくれ～！！」

そのまま襖を閉め廊下を足早に移動する僕の背中に悲痛な叫び声が届いた。

§　§　§

「ふむ、全員揃っとるようじゃの」

道場でそれぞれ稽古をしている門下生を見渡し、川神院の総代の川神鉄心さんが満足げに頷く。

その道場の端で早くも疲れたような表情を見せているモモちゃんに気付いたのか、こちらに歩み寄って来た。

「なんじゃモモ。すがすがしい朝だというのに辛気臭い顔をしおって」

「黙れジジイ！　飯抜きとかそういう重要な事は昨日のうちに言えよな！」

「川神院のイベントよりお主にはそっちの方が重要なのか」

「当たり前だ！　育ち盛りの美少女には1食でも抜いたら大変なことになるんだぞ！？」

「1日ぐらいご飯食べなくてもそんなに変わらないと思うんだけどな……」

2人のやり取りをモモちゃんの隣で眺めていた僕のツッコミ。
もちろん2人とも何も言い返してこない。僕も別に返答がほしくて呟いたわけでない。

喧々囂々（けんけんごうごう）と言い合う2人を眺めながら、いつも通りの型の修練をしている僕に別方向から声が掛った。

「相変わらズ賑やかな2人だネ」

そこに居たのは川神院の師範代の1人、ルー・イーさん。

「お早うございます、ルー師範代」

「お早ウ、神」

穏やかな笑顔を浮かべて人の良さそうな外見のルー師範代。確かに性格は穏やかで優しいが、川神院の師範代の地位に身を置くこの人。強さはある意味やはり非常識なところがある。
だがこの人も僕がそう言うと『キミの方が非常識だヨ』と返して来る。
僕自身はそんな非常識な強さは持っていないと思っているのだが、そう思うたびに周りの人たちは『もっと自覚しろ』と口を揃えて言う。

そんな事を頭の片隅で考えつつも、ルー師範代と取りとめのない会話を続けていたら、ふと隣から不穏な言葉が聞こえてきた。

「どうやらまた痛い目を見んと理解せんようじゃな！」

「いいだろうジジイ！　今日こそギャフンと言わせてやる！」

いつも通り、言い争いから物理的手段へ移行し始めたようだ。

僕とルー師範代は同時に深い溜息を吐くとお互いアイコンタクトで頷き合いそれぞれ行動に移す。

すなわち――

「ハイハイ皆、急いで道場の外に出るようニ！」

「見取稽古になるような試合ではないので、巻き添えを食う前に早く外に出てください！」

門下生たちの避難誘導だ。

ドゴォォォォン

ルー師範代と協力して門下生の人たちを全員道場の外に避難させた直後、背後から何かが爆発したような轟音が響いた。

再びルー師範代と顔を見合わせ深い溜息を吐くと、今日はどうやって2人のコミュニケーションと言うには些かデンジャラス過ぎるスキンシップを止めるか――

そんな事を考えながら、道場内に戻る為に足を踏み出す暁（あかつき）　神只今（じん）9歳です。

第1話　ある日のある朝、いつもの日常（後書き）

あとがき～！

「はい、ついに始まりました『真剣に私と貴方で恋をしよう！！』作者の春夏秋冬　廻です～

前回投稿のあとがきでも言ったように、座談形式で進行していこうと思いま～す。では、記念すべき第1回目のお相手は――」

「初めまして、暁（あかつき）　神（じん）です」

「自己紹介ありがとう。この物語のオリキャラの1人にして“一応”主人公の暁神くんです。しかし何かね、君の名前って振り仮名がないとどんな名前か分かり辛いね」

「この名前に決めたの貴方なんですけど……というか、なんで一応のところを強調したんですか？」

「いや、実は言い切る自信がないんだ。できるだけ文章は一人称で行こうと思っているけど、その関係で視点がコロコロ変わる可能性が大いにあるので」

「見通しなく始めたせいで今になって慌てているって感じですね」

「君って本当に9歳？」

「はい、只今9歳の川神小学校4年生になって1ヶ月です」

「凄い小学4年生がいたもんだ……」

第2話　風間ファミリー、川神院にて（前書き）

第2話投稿。

第1話の数時間後、緋鷺刀視点のお話。

第2話　風間ファミリー、川神院にて

「山門を抜けるとそこはお祭り騒ぎだった～」

川神院の大きな正門を通り抜け広い境内を視界に収めると、そこはいろんな出店が並びたくさんの子供たちがいた。

今日は5月5日の子供の日。

今年の川神院はこの日、川神市内の子供たちの為に院内を開放し、小規模ではあるがお祭りのように出店が並ぶちょっとしたイベントを開催していた。

「ねえねえ大和。『サンモン』ってなに？」

前をキャップたちと歩いていた一子ちゃんが大和くんの言葉が聞こえたのか、振り返りながら僕の隣を歩いていた大和くんに問い掛けた。

「いい質問だワン子。

山門とは山に門と書く。仏教寺院の正門である、数字の3に門と書く『三門』の異称のことだ。寺院とは本来、山に建てられ山号というものを付けて呼んでいたんだ。その時の名残りで今現在は平地に建てられていても寺院の正門は山門と呼ばれている」

「へ～そうなんだ」

感心したように頷く一子ちゃんに対し、その横にいた岳人くんは眉間にしわを寄せていた。

「説明長すぎるだろ！　しかも全く言っている事の意味が分らん！」

「あはは、やっぱガクトは馬鹿なんだ～！」

「ンだとこのワン子！　じゃあテメェはさっきの大和の説明で分かったのかよ！？」

「ぜんっぜん分かんない！」

「胸張って言うこと！？　てかそれじゃあなんでさっき頷いたのさ！？」

間髪入れず卓也くんのツッコミが入った。

「分かんなくても頷いておけば賢く見えるって大和が言ってたもん」

全員の視線が大和くんに集まる。

みんなの注目を集めた大和くんは前髪を軽く払うと腕を組む。

「フン。しょせん人間は見た目とその行動に騙されるということさ」

ニヒルに返す大和くん。

「お前さあ、そのアニメキャラっぽい喋り方どうにかしろよ」

呆れたように呟くキャップに一子ちゃんも岳人くんも卓也くんも一様に頷いた。

今僕の周りに居る５人の友達。

先頭を歩くのはバンダナがトレードマークの風間翔一くん。
僕の隣に並ぶのが最近やけにニヒルな言動が多くなった直江大和くん。
こちらを向き後ろ歩きしている1人だけ女の子だけど元気一杯の岡本一子ちゃん。
頭の後ろで腕を組み翔一君の隣にいる背が高く力持ちで喧嘩が強い島津岳人くん。
後ろからついて来ている物静かだけどいつもみんなに気遣っている師岡卓也くん。
そして僕、篁（たかむら）　緋鷺（ひろと）刀。

去年の今頃から一緒に遊ぶようになった6人組は、リーダーでキャップと呼ばれている翔一くんの名字を取って《風間ファミリー》と称している。

学年は僕以外同級生で僕だけがただ1人の年下。
といっても、僕とキャップと大和くんと一子ちゃんは3人が小学校に入る前からの友達だから、僕以外が上級生でも特に仲間外れにされたり、扱いが変わる事もなかった。
まあ岳人くんがやたらと僕を子ども扱いしているが、特に不満に思わない。

『年下を子ども扱いすることで自分の方が大人なんだと誇示したいのさ。そういった態度をとるほうが子供じみてるのにな』

と大和くんは言う。

「よし！　今日はここにある出店をすべて制覇するぞ！」

「よっしゃあ！　俺様は全部の食べ物を食ってやる！」

「いやそんなにお金持っていないし。そもそもそんなに食べたら絶対お腹壊すから！」

腕を振り上げ威勢よく宣言するキャップと岳人くんに卓也くんのツッコミが絶妙なタイミングで入る。

「なんだよモロ感じ悪いな。もう少しテンション上げろよな」

「現実問題、卓也くんは凄くまともなことを言ってると思うよ岳人くん。そもそも今日お小遣いいくら持ってきてるの？」

唇を尖らせて言う岳人くんに、卓也くんをフォローするように僕が言葉を掛ける。

すると急に肩を落とした。

「俺様今日は母ちゃんに５００円しか貰えなかった……」

「それで全部の食べ物を食べるって無茶にもほどがあるよ」

「そもそもみんな今日の軍資金はいくらだ？」

「グンシキン？」

「今日の為にお小遣いいくら持ってきたかって事だよ一子ちゃん」

落ち込む岳人くんを無視して質問をしてきた大和くん。

軍資金の意味が分かっていなかった一子ちゃんに砕けた意味を教え

る僕。

「俺様さっき言ったように５００円」

「僕もお母さんから５００円貰ったよ」

「同じく５００円！」

「アタシもアタシも！」

「俺も５００円だ。という事はみんなだいたい同じか……ヒロはいくら持ってきた？」

全員に確認するように聞いていた大和くんは最後に僕に問いかけてきた。

僕は財布を取り出しながら答える。

「６，５００円」

「「「「「「「なにぃぃ！」」」」」」」

僕を囲むように身を乗り出し、全員の口から同じ驚いた言葉が出た。

驚くのも無理はないと思う。

１，０００円持っているだけでも凄いと言われる僕たちの年齢で、年下のしかもまだ小学３年生の僕が５，０００円以上の大金を持っていたら誰でも驚くだろう。

といってもこれは全部僕のお金ではない。

「セレブだ！　セレブがここにいるぞ！」

「何を基準にガクトがセレブって言ってるか意味分かんないけど、小学生がお小遣いで貰う金額越えてるよね、それ！？」

「すげーなヒロ！」

「セレブって何だっけ？　あのクッキーみたいなお菓子？」

「ワン子、それサブレだ」

ワイワイと騒ぐみんなに囲まれつつも、僕は財布から千円札を5枚取り出すと、扇状に広げてみんなの前に差し出す。
突然に僕の行動にいったいなんだと首を傾げるみんな。

「おば――凛奈（りんな）さんからみんなにお小遣いだって」

叔母さんと言い掛けた瞬間、背筋になにか薄ら寒いものが奔ったので慌てて言い直しながら、なぜ僕がこんなにお金を持っていたかの種明かしをする。

「「「「「「「「」」」」」」」」

みんな一瞬、僕の言葉の意味が理解できなかったのかポカンと口を開けていたが、次の瞬間またしても全員の口から同じ驚いた言葉が出てきた。

今日なぜこんなにお金を持っていたかというと、理由は至って単純。
僕の叔母さんである篁凛奈（たかむら）さんがお前と坊主たちの分だ、と言って千円札を6枚手渡してきた。それがなければ僕のお小遣いもみんなと同じ５００円だった。
はじめは申し訳なく持っている分で十分だと断ったのだが、凛奈さ

ん曰く――

『子供が遠慮なんかすんな。それに今日は子供の日だからな。ただ外に遊びに行くなら別にそれで問題ないかも知れんが、川神院に行くんなら出店も並んでいるだろうしな。ああいう所で遊ぶならそれなりに金がいるんだよ。分かったら持って行ってあいつらにも渡しておけ。今日は昼飯準備する時間がないから昼も食って来い』

らしく、ほぼ無理やり持たされた。

言い方はぶっきらぼうでいい加減なところがあるけど、それが凛奈さんの優しさだと分かっているから『ありがとう』とひと言お礼を言って家を出てきたのだ。

「サンキュー！　なんだよタカ、お前の叔母さんめちゃくちゃ気前がいいな！」

「ありがとうタカ。そうだ帰ったらありがとうございましたって伝えておいて」

「有りがたく貰うぜ！　よしゃあ！　今日は遊びまくるぞ～！」

「ありがとうねヒロ！　うん、いっぱいお店回れるね」

「サンキューヒロ。みんなを代表して後でお礼に行くから凛奈さんにそう伝えておいてくれ」

口々に感謝の言葉を出しながら、僕の手から1枚ずつ千円札を取って行く。

みんなに渡った事を確認しながら僕も財布中を覗く。きちんと千円札が入っていることを確認すると、財布の口を閉じてジャケットの

ポケットにしまう。

「よっしゃあ！　今日は遊んで遊んで遊びまくるぞ！　皆の者！　続け！」

「「「「「「「「「「おぉ～！！」」」」」」」」」」

勢いよく腕を振り上げたキャップに倣うように、みんな声をあげて同じように腕を振り上げた。

周りの大人たちの温かな笑顔に見守られている事に気付く事なく、僕たち風間ファミリーは意気揚々と川神院の境内を進んで行くのだった。

第2話　風間ファミリー、川神院にて（後書き）

あとがき～！

「はい第2話終了。あとがき座談会、司会の春夏秋冬　廻です。
今回のお相手は――」

「篁（たかむら）　緋鷺（ひろと）刀です」

「2人目のオリキャラにして『プロローグ　ＳＩＤＥ　Ｈ』の語り手だった緋鷺刀くんですが、君の名前も振り仮名がないと分かり辛いね」

「貴方が付けた名前なんですけど……その辺ちゃんと分かってますよね？」

「いやまあ、そうなんだけどね。オリキャラだからカッコイイ名前にしようと思ったんだけど『普通なら読めねえだろ』って名前になってしまったのだよこれが」

「そもそも貴方の作者名ですら『普通なら読めません』からね」

「『一年』の別の読み方が『ひととせ』だから『春夏秋冬』を『一年』に見立てて『ひととせ』と呼ばせているからね。これでも『春夏秋冬』にしようか『四季』にしようか迷ったんだよね」

「あの、物語に関係のないどうでもいい事はここまでにしませんか？」

「どうでもいい事って……ホントの事だけど身も蓋もないね……」

第3話　直江大和、篁緋鷺刀について語る（前書き）

第3話投稿。

みんなの軍師、原作主人公の視点。

第3話　直江大和、篁緋鷺刀について語る

ヒロの叔母さんから持ったお金をプラスして、全員が1，５００円となったお小遣いを持ち、とりあえずみんなで歩き回る。

「これからどーすんだキャップ。このまま全員で行動すんのか？」

ガクトの言葉に振り向き足を止めたキャップに倣い、みんなその場でいったん立ち止まる。といっても通行人の邪魔にならないように端に寄る事だけは忘れない。

ただ1人その場でぼうっと立ち止まったワン子をさりげなく引っ張りながらこちらに来るヒロを確認する。

「そうだなぁ、それはそれでおもしれーけど……どうする？　軍師大和」

「分散行動をお勧めする。全員で行動するのも悪くはないがそれだと全員の行きたいところに回ったとしても時間がかかり過ぎる。だったら最初から少人数で行動して、それぞれが行きたいところに行くのがベストだし多くの出店を回る事が出来る」

キャップの問い掛けに考えを述べる。

特に反対意見は出ないようだがワン子は俺の言葉に首を傾げる。どうやらあまり理解していないようだ。

まあ、またさりげなくヒロが分かりやすい言葉で説明するだろう。

ワン子を放っておいてキャップに視線を向ると、俺の視線に答えるように頷く。

「よし！　それじゃあ行動は各自自由に！　集合場所はあの大きな

門の下だ！」

そう言って入ってきた山門を指さす。

「1度お昼になったら集まろう。正午の合図に寺院の鐘を3回鳴らすみたいだから、それを聞いたらいったん集合場所に来るように」

キャップの言葉に集まる時間帯と注意を付け加えると、みんな分かったと頷く。

「よし、じゃあ俺は早速食いもんのところに行ってくるぜ！」

「僕はガクトについて行くよ。急にお金が多くなったから絶対に食べ物を大量に買うのが目に見えてるからなんとか止めてくる」

意気揚々と食べ物系の出店に向かって歩いて行くガクトの後を、俺でも予想できる結末を止めるべくモロがついて行く。

「よっしゃあワン子！　じゃあ俺たちはまず射的から行くぞ！」

「え～？　アタシも食べ物の方がいい！」

「ンなもん後でもいいだろ。どうせ昼に1度集まるんだ。その時に食べ物を買えばいいだろ」

遊び系の出店に誘って行こうとしたキャップに、ワン子が抗議の声を上げる。

そんなワン子の手をお構いなしに取って駆け出して行くキャップ。

ワン子もキャップの言葉に納得したのか特に抵抗する事なく一緒になって走って行った。

「さて、どうするヒロ？」

その場に残ったヒロに問い掛ける。

ヒロは直ぐには答えず、キャップとワン子が走って行った方を眺めて何やら考え事をしていたかと思うと、こちらを向き少しだけ呆れたような顔をしたが、直ぐに笑顔になって言葉を発した。

「僕は道場の方をゆっくりと見て回るよ」

「そういやあお前、武術習ってたもんな」

「うん。実家が古くからの剣術流派の道場だからね。こっちに来てからも凛奈さんに教わってるから」

嬉しそうに言うヒロ。

今俺の隣にいる篁緋鷺刀。

俺たち風間ファミリーでただ1人の下級生で身長も1番低い。しかも首筋が隠れるボブカットのような少し赤みがかった茶髪で肌もどちらかといえば白い。ヒロ本人は嫌がっているが中性的な顔立ちはどちらかといえば女顔といえる。

訂正する“ほぼ”女顔だ。

服装にもよるが初対面の人は十中八九ヒロを女の子だと判断する。

しかもヒロの叔母さんの凛奈さんも、面白がってヒロの服を男でも女でも着れるようなユニセックスな服を買ってきては着せている。

ワン子もガクトもモロも、かく言う俺も最初に会った時は名前を聞

くまで女の子と思っていた。
最初から男だと見抜いてたのはキャップ1人だけだった。

今日の服もヒロ曰く『これしか着る物がなかったから仕方なく着ている』せいか、遠目に見ても女の子にしか見えない。
正直に言うと集合時、見慣れている俺ですら遠くからは女の子に見えた。

そんな女のような見た目と素直な性格のヒロだが、先ほど言っていたように剣術を習っている。剣道ではなく剣術。しかも古流剣術。

事実ヒロは物凄く強い。

普段や素手の時はそうではないが、ひとたび竹刀に代わる棒状の物を持てば、俺たちの中で1番喧嘩に強いガクトですらあっという間に倒してしまう。

ガクトとモロを仲間に入れた去年の今頃。
あれは掃除の時間だった。同じクラスになって仲間に入ったガクトとモロをヒロに会わせたのだ。
初対面のヒロの容姿をからかい爆笑したガクトに、珍しく怒ったヒロはちょうどその時、手に持っていた箒を構えると瞬く間に打ちのめしたのだ。

あれには俺もキャップもワン子も驚いた。

小学3年生で同学年でも背が高いガクトを、小学2年生で同学年でも背が低いヒロが打ちのめし、うつ伏せに倒れているガクトを見下ろしていたヒロの姿。

ガクトの情けなさとヒロが手に持っていたのが箒だったため、物凄くシュールな光景だった。

俺たちの中でも1番の強さを持つヒロだが、決して自分からその強さを見せびらかそうとはしない。

キャップやガクトはどうしてだと何度か問い詰めたが、ヒロはちょっと困ったような顔をするためなかなか踏み込んで聞く事が出来ないでいた。

『性格的なもんだからあんま突っ込むな。お前らと違ってあいつは自分から目立つような事はしたくない性質(たち)なんだよ』

凛奈さんにその言葉と共に後頭部を思いっきり叩かれたキャップとガクトは、それ以降ヒロに問い詰める事はしなくなった。

強くても弱くてもヒロはヒロだから関係ない。

結局はそう結論付けた俺たちは、変わることなくヒロを仲間として接している。

「大和くんはどうするの？」

少しの間、去年の出来事を思い返していた俺にヒロが言葉を掛ける。

「そうだな。とりあえず軽く何か食べてからぐるりと出店を回るよ。それよりもヒロ……」

「うん？」

「なんでさっき一瞬だけど呆れた顔してたんだ？」

こちらを振り向いたときの表情を思い出し、少し気になって問いかけてみる。

俺のその言葉が意外だったのか、少しだけ驚いた表情を浮かべるが直ぐにまた呆れたような、微笑ましいものを見たかのような表情に変わる。

「別に深い意味はないよ。たださっきキャップが一子ちゃんに食べ物は後で買えばいいって言ってたけど、あの調子じゃあキャップも一子ちゃんもお昼前にお金全部使い切っちゃうんじゃないかなって思ったんだ」

「大いにあり得るな……ガクトもやりそうだけどあっちはモロが付いているから何とかなると思うけど、キャップにワン子の組み合わせじゃあ、まず間違いなく使い切るな」

「うん。だから少しばかりお金を残しておかなきゃなって思ってただけだよ」

年下の小学3年生とは思えないヒロの気の遣い方と、心配されるキャップとワン子の情けなさに思わず溜息が漏れる。

微笑んだまま俺を見ているヒロの頭に手を乗せると、少し乱暴気味に髪の毛をかき回す。

「変に気を使うなと言いたいが、そのせいでキャップとワン子が昼飯抜きになるのも可哀そうだしな」

撫でていた手を止め最後に軽くヒロの頭を叩くと、俺は人ごみへと1歩踏み出し背を向けながら言葉を続ける。

「回るついでにキャップとワン子を探して使い切らないように注意はしておくよ。でも見つけた時には手遅れになっているかもしれないから、お前は一応ワン子の分を買えるぐらい残しておいてくれ。俺はキャップの分を担当する。まあ、お前なら無駄遣いはしないだろうしな」

そう言葉を締めくくり、右手を軽く上げ後ろにいるヒロに見えるように小さく振りながら、俺はキャップとワン子を探すために遊び系の出店がある方へと足を進めた。

「分かった。じゃあまた後でね」

後ろから掛る声に答えるように1回だけ大きく手を振る。
少したった後、確認するように振り返ってみるとヒロは既に背を向けて川神院の本堂、道場の方に小走りで向かっていた。

あんな外見で素直な性格のヒロだが、やっぱり武術に対しては強い思い入れがあるのだろう、道場に向かう足取りがいつもより軽やかに見えるのは錯覚ではないと思う。

そんなヒロの後姿を何となく微笑ましく思いながら眺めていた俺は、さてキャップとワン子を探しに行くかな、と思考を切り替えて再び歩き出した。

第3話　直江大和、篁緋鷺刀について語る（後書き）

あとがき～！

「第3話終了。あとがき座談会、司会の春夏秋冬　廻です。今回のお相手は――」

「どうも初めまして直江大和です」

「さて、オリキャラ以外での初の別視点となったわけですが、いかがでしたか？」

「て言うか、何で今回俺の視点で話が進んだんだ？」

「今回は緋鷺刀についての簡単な説明だったんだが、本人に語らせるよりは別視点の方が分かりやすいと思ったんだ。自分の事って本人より他人の方がよく分かるって言うじゃん」

「まあ確かにな。それよりもヒロの外見、あれって何かイメージでもあるのか？」

「特にはないけど……そうだな、イメージに一番近いのはリリカルなのはのユーノだな」

「あぁ、なるほど……確かに女顔扱いが多いもんな……」

「そういうこと。あくまでも作者の脳内イメージなのでそこんところよろしくお願いします」

第４話　初めての勝負、その前に（前書き）

第４話投稿。

第４話　初めての勝負、その前に

――２００２年　５月１１日　土曜日　ＡＭ１０：３０――

体の内側から沸き上がってくる高揚感に、私は五月蝿いほど速くなる鼓動とにやけそうになる頬を懸命に抑え込む。
だがどうしても込み上げてくる嬉しさに、にやける事だけは止められない。

私は吊り上がってくる口端を、今度は止めることなく口元に笑みを浮かべると正面にいる人物を真っ直ぐに見つめる。

その顔を見れば困惑と呆れがありありと見てとれる。
きっと頭の中で『どうしてこうなったんだ？』と繰り返し考えてる事だろう。

だがあいつの都合や考えなんかは私の知った事じゃない。

私にしてみればやっと巡ってきた千載一遇のチャンスを早々逃す訳にはいかないのだ。

『まだ幼い』　『力の加減が出来ない内は絶対に駄目だ』

そう言われ続けて２年。やっとジジイから許可が下りた。
望んで望んで、もうどうしようもなくなっていた私の心は、ようやく待ちわびたこの時に、もはや自分を抑え込む事が出来なくなっていたのだ。

真正面にいるのだからあいつも私の表情がはっきりと見えているは

ずだ。
案の定、浮かべる笑みに私の心情を悟ったのだろう、一瞬だけ引きつったように顔を歪めるが直ぐに諦めたような深い溜息を吐いた。
そんな表情や行動にますます嬉しさが込み上げてくる。
「さあ！　とっと始めろジジイ！」
審判と見届け役を買って出たジジイ――祖父である川神鉄心に私は感情を抑えることなく叫ぶ。
「こりゃモモ！　いい加減にジジイと呼ぶのはやめろと言っとるだろうが！」
そんなジジイの抗議の声は今の私にはまったく聞こえてなどいない。
さあ、始めようじゃないかジン。
私とお前のこれから一生続くであろう闘争の始まりの試合を！

§　§　§

――遡ること３０分前
「ジン！　私と勝負しろ！」
一通りの修練を終え、道場の隅で腰を下ろし休憩に入っていたジン

に、私は拳を突き出して宣言した。

私の急な言葉に間抜けにもポカンと口を開けていたジンだったが、言葉の意味を理解したのか戸惑った表情で首を傾げた。

「えっと……モモちゃん？　急にどうしたの？」

「急じゃない。2年も待ってやっとジジイから許可が下りたんだ。だから私と勝負しろ」

私の返答にさらに困惑したような顔を引きつらせるジン。

「いや……言葉を聞くとモモちゃんにとっては急じゃないかもしれないけど、今の今まで1度もそんなこと聞いてこなかった僕にとっては急過ぎて、何をどう答えていいのやら全く分かんないんだけど……ど？」

本当にどうしていいのか分かっていないジンは、助けを求めるように周囲を見渡し始めた。

と、私の後ろからついて来ていたジジイとルー師範代、釈迦堂さんの姿を確認したのか、明らかに安心したようにホッと息を吐いくと立ち上がって言葉を掛けた。

「鉄心さん、どうなっているかの説明して下さい」

「どうもこうも、モモがお主と勝負したいと言ってきての。ワシが許可したのじゃ」

ジジイの返答に呆れた溜息を吐くジン。

「僕が知りたいのは今のこの現状ではなくて、どうして勝負することになったのか、その経緯と経過が知りたいんです」

「ホッホッホ。察しのよいお主の事じゃ、説明せんでも大体は分かっとるじゃろうて」

「分かっていても僕には説明を要求する権利があり、鉄心さんには説明をする義務と責任があるはずです」

「相も変わらず年齢に不相応な言葉遣いをしおってからに」

「そんな事どうでもいい！　とっとと始めるぞ！」

いつまでも続く2人の問答に我慢のならない私は、会話に割り込むように声を荒げた。
そんな既に臨戦態勢に入っている私にジジイの厳しい言葉が掛った。

「少し落ち着かんかモモ！　お主の気持ちも分からんでもないが説明もなしに急に勝負と言われた神の身にもならんか！」

苛立ちを隠す事なくジジイを睨みつける。
私の気持ちが分かっているならとっとと始めろよな。てか私が昔から勝負がしたがっていた事ぐらい前もってジンに話しておけよ。
私からジンには言うなって念押ししたのジジイだろ！？

言いたい文句はあったが、それを言ってもしジンとの勝負がなしになったら拙い。
それでもここで大人しくなると何となくしゃくに障るから、私は腕を組むとそっぽを向いた。
そんな私の態度に、ジジイの呆れた溜息が聞こえてきたのだった。

「全くのこの孫娘は……まあよい。それでじゃ神」

「はい」

「実は以前より――だいたい2年ぐらい前からかのぉ、モモがお主と勝負したいと言っておったんじゃ。ワシとしてもいずれはモモとお主の手合わせを考えておった」

「でしょうね……」

ジジイの言葉に余り驚いた様子もなくジンは答える。
この言葉の感じからジンは私と戦いたかったというよりは、いつかそんな日が来るんじゃないかと呆れ半分で分かっていた、という風に取れた。

何となくムカつくな。

だが私の心情などお構いなしに2人の会話は続く。

「じゃが2年前は時期尚早と思い、モモにはワシが許可するまで戦う事を禁じておったんじゃ。
あの頃のモモはまだ自分の力を制御出来ておらんかったし、お主はモモと戦うにはまだ身体が出来上がっておらんかった。もし勝負をしたら間違いなくどちらかが大怪我を負うと判断したのじゃ」

「その判断は正しかったと思います。それで？　今になって許可をしたのはどうしてですか？」

「フム、1番の理由は先ほど言った条件がクリア出来ているという

事。双方十分に力をつけたからのぅ」

そう言ってジジイは髭を撫でると嬉しそうな視線を私とジンに向ける。

出来て当然だ。私はそのために修練を積んだんだ。認めてもらわなければ困る。

「でじゃ、２つ目の理由はいい加減お主に自覚させるためじゃ」

そのジジイの言葉に、ルー師範代と釈迦堂さんの気配が変わる。

かくいう私もそっぽを向いていた視線をジジイに戻した。

そこにはいつものおちゃらけたジジイではなく、この川神院を纏め上げる武人、川神鉄心の姿だった。

「自覚させる……ですか？」

周りの空気が変わったのをジンも確かに感じたはずだが、その言葉はやはりどうしてなのかを理解している感じではなかった。

そう、ジンは自覚していないのだ。

自分がどれだけ強いのか、という事を。

暁神は強い。

この認識は川神院にいる全ての人間に共通している。

だがジンは門下生はおろか師範代とも手合わせした事がない。
唯一手合わせした事があるのはジジイ1人なのだが、それを目撃した者も誰1人居ない。

しかもここが川神院でここに赤ん坊の頃から住んでいるにも係わらず、ジンの武術は川神流とは違う流派らしい。

師範代にまで至る門下生全員と1度も手合わせした事がない。手合わせをしたただ1人の人物が川神院の総代である川神鉄心のみ。その手合わせを目撃した者はいない。そして川神流以外の武術の遣い手。

その事実と噂によりジンの強さは川神院では謎めいたものになっていた。

だがその謎めいていたはずのジンの強さが、川神院全員の人間が確信するほどになったかにはもちろん理由がある。

まず何より日々の修練での風景。

門下生と手合わせをしないジンの修練は、1人で基礎訓練と型の往復練習になる。
だが見る人から見れば、動きに無駄がなくキレの良いその型の修練はかなり高いレベルのものだという事が分かるし、基礎訓練も誰よりも長い時間集中して行っている。
しかも他の門下生に対して、幼いながらも的確なアドバイスができるほど武に通じている。

そして師範代同士の手合わせをきちんと視ることのできる眼や反応できるほどの身体能力を持っている事と、私やジジイの喧嘩じみた手合わせに臆することなく対応し治める事が出来るという事実。

以上の事からジンは強くジジイしか相手にできない、という認識を川神院の全員に植え付けたのだ。

当の本人であるジン以外全員に。

「そうじゃ。お主は今に至るまで門下生とは誰1人として手合わせをしてこなかった。それがワシが言った事を守っての行動である事は十分理解しておる」

困惑するジンに諭すように言葉を掛けるジジイ。

「お主が遣うその特殊な流派。そのためにワシ以外との手合わせを禁じた。じゃがそのせいでお主は自分の強さを自覚できんようになっておった。それがなぜか分かるか？」

「比較対象がなかったからですか？」

ジンの返答にジジイは深く頷く。

「その通り。じゃがそうしたのはワシのせいでもあるが、自身の強さに自覚がないという事は自身の力を真の意味で理解しておらんという事じゃ。

お主はモモと違って無闇に力をふるう性質（たち）ではないから今まで問題はなかったが、これからそういう訳にはいかんからの」

そこでいったん言葉を切ったジジイは私に視線を向け頷き、次にジンの方に視線を向けると悪戯っぽい口調だったが反論を許さないような声音で告げた。

「暁神、川神百代と仕合え！」

その言葉に私の中の想いは一気に膨れ上がり爆発した。

第４話　初めての勝負、その前に（後書き）

あとがき～！

「第４話終了。あとがき座談会、司会の春夏秋冬　廻です。今回のお相手は――」

「川神百代だ！　おい作者、ここには視点になった奴が出るルールでもあるのか？」

「いきなりの質問だね……特にそんなルールはないけど、始まったばっかで相手がずっと同じっていうもの新鮮味がないだろ？」

「普通始まったばかりは固定メンバーでやるのがセオリーだろ……まあいいけどな。
それよりお前、私は今回の話に大いに不満がある！」

「えっ？　なんで？」

「それはだな……な・ん・で！　私とジンの勝負をとっとと始めないんだ！」

バキィ

「痛っ！　仕方ないだろ？　勝負をするにはそれ相応の意味をちゃんと書かなきゃいけないんだから。それにちゃんと次の話ではちゃんと手合わせするし」

「だったらとっとと次の話を書きあげろ！！」

バキィ

「だから痛いって！」

第5話　初めての勝負、その戦い（前書き）

第5話投稿。

初の三人称です。

第5話　初めての勝負、その戦い

川神院は静けさに包まれていた。

途中から門下生も話を聞いていたのか、いつの間にか自然と試合の場となる広い境内に集まってきた。そして中央で対峙する2人を囲うように円が出来上がる。

対峙する2人の様子は傍から見ても対照的だった。

片方は口端を上げ嬉しさを全く隠そうとしない首筋あたりで切り揃えたショートボブの少女。

片方は諦めたような表情を浮かべる腰までありそうな長髪を後頭部で一纏めに縛っている少年。

少女は楽しそうに笑みを浮かべたまま真正面の少年を見遣ると、下げていた両手に握り拳を作り腕を上げ顔の前で交差させる。

少年の方は未だに諦めたような表情を浮かべていたが、真正面の少女の行動を察知すると表情を引き締め、同じように握り拳を作り腕を上げ顔の前で交差させる。

「「ハアッ！」」

少女と少年が同じ構えを取って数秒動きを止めたかと思うと、同じタイミングで腕を振りおろし、裂帛の気合を吐く。

両者から放たれた気に圧されたのか、2人を囲っていた門下生たちが1歩退くかのように円が広がった。

「両者、準備はいいようじゃな」

その光景を見てとり、円の中に数歩踏み込んだ老人――川神鉄心は2人に声を掛ける。

「ああ！　いつでもいいぞ！」

溢れ出る激情そのままに叫ぶ少女。

「覚悟は決めました。いつでもどうぞ」

静かに落ち着いた声音で答える少年。

対照的な2人の返答に頷いた鉄心はさらに1歩踏み出すと右腕を上げ名乗りを始める。

「西方　川神百代！」

「ああ！」

名乗りに答え微かに腰を落とし握り拳のまま右手は少し前に、左手は腰の横に置きやや右半身に構える少女――川神百代。

「東方　暁神！」

「はい！」

同じく名乗りに答え軽く開いた掌を内側にし右手を胸の前に、左手を腰の前に置きまるで球状のものを抱えるかのように構える少年――暁神。

静かに見ていた門下生たちの間に、さらに静かで緊張感のある空気が漂い始める。だが誰もがこれから始まるであろう勝負を見逃してなるものかと目をそらす事なく構える。

「いざ尋常――始め！」

そんな緊張感の漂う空気を切り裂くかのように、開始を告げる声を響かせた鉄心は掲げていた右手を勢い良く振り下ろした。

ダンッ

先に動いたのは百代。

境内の石畳を蹴る音が響き渡り、次の瞬間には構える神の目の前に。一瞬で間合いに踏み入った百代は左足を踏ん張り一瞬でスピードを殺すと、神の顔めがけて振りかぶり気味の右正拳を繰り出す。だが当たると思った瞬間――

「は？」

間抜けな声が百代の口から洩れた。

視界に広がる青い空。突き出されたままの右拳。背中には石畳の感触。

その状況から仰向けに倒れている事を理解すると、瞬時に起き上がり振り返る。

その視線の先には未だ構えたままの神の姿。

だがその構えは右手と左手が反対になっていた。

（いなされた？　捌かれたのか！？）

起こったであろう可能性を考えるが、戦いに入った思考は次の行動を身体に命令している。

左手が上になった事で空いた右側頭部に狙いを定め、左足を鞭のようにしならせ蹴り上げる。それと同時に神の動きを見極めるため目を凝らしその姿を視界に収める。

そして蹴りが当たると百代が思った瞬間、神の姿がブレた。

潜るように身を沈みこませた神は、左手で蹴り足の左足をいなし右手で軸足である右足を払い上げた。

その結果、百代の視界は反転し上下逆さになった。

頭から地面に落ちる寸前に両手を着き体を持ち上げた百代は、その勢いのままに後ろに跳び下がりきちんと足から地面に着地した。

態勢を立て直し顔を上げ再び神の方を見ると、その構えは試合開始直後の構えに戻っていた。

見るたびに上下が変わる左右の手。その構えにようやく百代は神がやった事、そして自分がやられた事を理解した。

（なるほど、構えた両手を円に見立てて私の攻撃をその円に沿って滑らせ、いなしたという訳か）

その動き、その構え。

確かに神がこの2度の攻防に見せた業は、川神流にはないものだった。

だがそれを確認できたのは師範代以上のクラスの者たちだけであり、それ以外の者たちからしてみれば、何かしら攻防があったのだろうと理解できるが、百代が1人で勝手にひっくり返ったり回転していたようにしか見えなかった。

（はっ！　面白い！　ならどこまで出来るかやってやろうじゃないか！）

嬉しそうに口元を歪めた百代は再び神に向かって駆け出した。

「あの年齢であんな事が出来るなんテ……やっぱり神は天才だネ」

「あんなものを教えていたんですかい？」

目の前で繰り広げられた百代と神の攻防を眺めていたルー・イーと釈迦堂刑部。

ルーは感心したように呟き、釈迦堂は少しだけ驚きを含ませた声で斜め前にいる鉄心に言葉を掛けた。

2人の言葉に鉄心は振り向くことなく答える。

「ワシはあやつには何も手解きはしてはおらん」

「「　は？　」」

思いもよらぬ鉄心の返答に、ルーも釈迦堂も思わず間抜けな声を出す。

「先ほど言ったように神の遣う武術は川神流とは違うものじゃ。な

のになんで川神流の使い手たるワシが教える事が出来る」

当たり前すぎる鉄心の言葉ではあるが、だからといって納得出来るルーたちではない。

川神鉄心ほどの武人なら、例え川神流の動きではなくとも、先ほど神が見せた防御の業を教える事ぐらいは出来る筈だ。

「いやしかし、先生ならあれぐらい教える事は出来るでしょう？」

思った疑問をそのまま言葉に乗せる釈迦堂。それに同意するように頷くルー。

「確かに教える事は出来る」

そんな弟子2人に肯定の言葉を発する鉄心。

だが次に聞いた言葉は、釈迦堂とルーにとってある意味で自分たちの理解の範疇を超えるものだった。

「じゃが、ワシは確かに何も教えてはおらん。神はあの業を“覚えた”のではなく“思い出した”んじゃからな」

「それはいったい……どういう意味なのでしょうカ？」

呆然とそれでも少しだけ訝しく問い掛けるルーに鉄心は目の前の神と百代の攻防を眺めながら答える。

「暁神が……“暁”神たる由縁かのぉ……」

「アイツがアイツたる由縁ですか？」

「そうじゃ。だが今は語るべき時ではない。いずれお主たちにも話す時が来るだろうが、今はまだ神本人ですら知らぬ事……お主たちが先に知るのはフェアではないからの」

穏やかだが有無を言わさない雰囲気の鉄心の言葉に、ルーも釈迦堂も一瞬だけ目を合わせるが、示し合わせたかのように同時に首を小さく横に振った。

渾身の力を込めて放ったすくい上げるような左拳。今度は勢いよく宙に舞った。

一瞬の無重力に慌てるものの、なんとか態勢を立て直し足から地面に着く百代。

視線を上げて見ればそこにはやはり同じ構えを取ったままの神の姿。

再度攻撃を仕掛けてから数回の攻防。

そのうち3回ひっくり返り、2回前のめりに体制が崩れ、4回視界が反転した。

そして先ほどの攻防。

手数を増やして隙なく連続攻撃を繰り出した百代だったが、神は全ての攻撃を最小限の動きで捌き、焦れた百代の大振りの攻撃を見逃さず、迫り来るその攻撃の勢いを殺さずに盛大に吹き飛ばした。

試合が始まって12回の攻防。

全て百代から仕掛け、神は全てを難なく捌き、それでいて1度も攻撃を加えていない。

だが門下生たちからしてみれば、それだけで神の強さを感じ取るには十分だった。

“あの”川神百代の攻撃を全て捌いているのだ。しかも圧倒的な余裕を持って。

門下生たちにとって、もはや百代は相手にならないほどの強さを持つ存在だ。

修練に付き合えるのは師範代以上の人間で、本気になったら総代である川神鉄心と師範代の中でもトップ2のルー・イーと釈迦堂刑部の3人しか相手に出来ない。

既に川神院で5指に数えられるほどの強さを持つ百代を、いとも簡単にあしらって見せる神。

しかも自分たちの全く知らない、出来るかどうかも分からない防御の業をもって。

共通していた認識は事実をもって確信になった。

“暁神は強い”

そんな思いが門下生たちに伝わり始めた時、身体に圧し掛かるような重さを感じ、全員が本能的に1歩後ろに下がった。

威圧感さえ感じる圧倒的な闘気を放つ百代。本気になった証拠だった。

「思った通り！　楽しませてくれるじゃないかジン！」

「そうでもないよ。でも……『自覚しろ』って言うみんなの言葉の意味は分ったよ」

嬉しそう声を張り上げ放っていた闘気を言葉と共に神にぶつける百

代。
当てられる荒れ狂うような闘気に、静謐でいて鋭い闘気を放ち相殺し、対照的に静かに答えを返す神。

（なるほど……僕の強さはここまで来ていたんだ）

百代の強さは知っている。
本気の相手が出来るのは師範代ではルーと釈迦堂だけだという事は、その手合わせを見ていた神も知っていた。
そんな百代に対して難なく思い通りの行動がとれている。しかも比較的余裕を持って。
今も当てられている闘気に対しても、自分が放つ闘気で相殺出来ているため神は脅威に感じる事はない。

神の強さは、自分が思っていた以上のものだったと、今初めて自覚したのだ。

「だが、そろそろ終わりにしようかジン」

今まで浮かべていた笑みを消し、拳を握り構える百代。放たれていた闘気はさらに圧力を増した。
言葉では答えなかったが、神の放つ闘気もさらに鋭さを増した。

全体を包み込み圧し掛かるような百代の闘気に対し、自分の周りを円状に囲い天に突き抜けるような神の闘気。
２つの闘気に圧倒され門下生たちは誰も声を発する事なく静まり返った。

言葉にしなくても全員が次の一撃で勝負が決する事を悟る。

ハアァァァ

呼気をすぼめ息を吐くと同時に、包み込んでいた百代の闘気が圧縮するようにその身体に溜め込まれていく。
呼応するように神の闘気は幕が下りるように徐々に足元に集まっていく。

ほんの数秒、この川神院を覆っていた空気は全くの真空状態になった。

そして次の瞬間――

ドガンッ

疾駆する百代。
駆け出すために踏み抜いた石畳が陥没した。

今、自分が持てる最大の速さをもって神に肉薄、間合いに踏み入る。
初撃の攻防と同じく左足を踏ん張り一瞬でスピードを殺した百代は、圧縮した闘気を纏わせた右正拳を神の顔めがけて真っ直ぐに繰り出した。

そして腕を伸ばし切ったその瞬間――

ドンッ

まるで空気を突き破ったような轟音を聞いた百代は、だがその直後に感じた鳩尾から身体を突き抜けるような衝撃に意識を手放した。

気を失い倒れこんでくる百代を優しく抱き止める神。

その足元。右足のあった場所の石畳が百代が踏み出した所と同じように陥没していた。

あの瞬間。

百代の闘気の纏った拳を右手で払うようにいなした神は、今までのように百代の体勢を崩すのではなく、右足で地面を強く踏み、その振り払った勢いのまま同じように闘気を纏った右掌底を繰り出した。

結果、百代は自分の攻撃の勢いのまま停止した物体にぶつかったような状態になり、吹き飛ぶ事なくその場で気を失い倒れたのだ。

抱き止めた百代に打撲以外の怪我がないかを確認するように背中を撫でていた神は、安堵するように息を吐くと未だに気を失ったままの百代を横抱きに抱える。

所謂“お姫様抱っこ”だ。

その様子を満足そうに頷きながら眺めていた鉄心は、右手を上げ勝ち名乗りと共に試合の終了を告げる。

「勝者！　暁神！」

勝ち名乗りを受けた神は鉄心の方に身体を向けると小さく礼をする。

そしてすぐさま踵を返し、百代を抱えたまま軽やかに駆け去って行った。

恐らくは気を失った百代を寝かせるために、百代の部屋へ行ったのだろう。

またもや満足そうに頷きながら神の背中を眺める鉄心。

そしてその背中に、門下生たちから割れんばかりの拍手が送られるのであった。

第5話　初めての勝負、その戦い（後書き）

あとがき～！

「第5話終了。あとがき座談会、司会の春夏秋冬　廻です。今回のお相手は――」

「前回に引き続き、川神百代だ」

「今回はちょっとだけ長めで、初の三人称で物語を進めたわけですが……」

「なあ、そもそも何で今回は三人称だったんだ？」

「いや、それがね？　途中までは神の視点で書いていたんだけど、一視点での戦闘描写ってすごく難しいのよ」

「力量のなさを露呈した瞬間だな」

「今回は言葉の暴力ですか……否定できないけどさ。まあ今後も戦闘描写があるのは間違いないし、その時にはリベンジで一人称での戦闘描写を頑張るよ」

「頑張っても結果が出ないかもな」

「だから言葉の暴力はやめてよ……」

第６話　初めての勝負、その結果（前書き）

第６話投稿。

視点切替をしてみました。

第6話　初めての勝負、その結果

――２００２年　５月１８日　土曜日　ＰＭ７：００――

ｓｉｄｅ　暁神

最近、モモの様子がおかしい。

ボーっと外を眺めていたかと思うと、何かを思い出したかのようにハッとし、勢いよく頭を振る。

何をしているのだろうと声を掛けると、びくりと身体を震わせこちらに振り向く。

数秒の間視線を合わせ、もう１度声を掛けるが、ぼうっとしていた事が恥ずかしくなったのだろうか急に顔を赤くしたかと思うと、意味不明な言葉を漏らしながら勢いよく走り去っていく。

明らかに言動がおかしくなっている。

そんな行動がここ１週間何度かあった。

いつからだろうかと思い考えみると、あの初めての勝負の翌日からだった事に思い至った。

あの試合の後、気を失ったモモを抱えて彼女の部屋に戻った。

鳩尾の打撲以外の外傷もなかったし、衝撃は身体を突き抜けたはずだから後遺症もなかった。

案の定、モモは１０分後に目を覚ました。

最初は何が起こったのか分からなかったのか、少しの間ぼうっとしていたけど、今いるのが自分の部屋で俺がベッドの横に座っているのに気付いた。

目を覚ました時は特に変わったところはなかった。
となるとその後の会話に何かしら原因があるのだろう。
その後の会話を思い出してみる。

『私の負けか……』

『体は大丈夫？』

『ああ、特におかしいところはない』

『よかった。モモちゃんは今日はそのまま寝てた方がいいよ。鉄心さんには僕の方から言っておくから』

『分かった。そうする』

『うん、じゃあ僕はもう行くね』

『ジン』

『なに？　モモちゃん』

『これから私ことは“モモ”と呼び捨てで呼べ。それから自分の事は“僕”じゃなく“俺”と言え』

『急にどうしたの？』

『どうしたもない。私に勝った男がいつまでも子供っぽい口調で話すな』

『いや実際まだ子供だよ僕？』

『い・い・か・ら！　そうしろと言ってるんだ！』

『分かったよ。えっと……じゃあ俺はもう行くからモモはちゃんと寝ててね』

『ああ、分かった』

以上がモモが目を覚ました後で交わした会話の全て。

思い返してみても未だにモモの挙動不審の原因が分からない。

言われた通りに呼び捨てにしているし、自分の事もちゃんと俺と言っている。

それに合わせて口調も少し変え、ようやく慣れて意識しなくてもよくなってきた。

それなのに『モモ』と呼びかける度にびくりと身体を震わせるし、自分の事を『俺』と言う度にこちらの顔を見てくる。見てくるのに目が合うと急いで顔をそらす。

そんなモモの行動に訳も分からず顔を捻るしかない俺だった。

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

side　川神百代

私は今、自分がしでかした事に頭を悩ませる毎日を送っている。

事の起こりの1週間前、あの勝負の後のジンとの会話。

気を失って目が覚めたばかりで少し意識がぼうっとしていたのは否めない。だが呼び捨てで呼べと言った事も、ジン本人の呼び方を『俺』に変えろと言った事も後悔しているわけじゃない。

常々、と言うかこの1年、なんというかジンが私の事をちゃん付けで呼んだり、自分の事を僕と言うのに違和感のようなものを感じていた。

だからこそ、私に勝ったという事実にかこつけて呼び方を変えさせたのだが――

これが思いのほか恥ずかしいのだ！

自分の事を『俺』と呼ぶ方はまだいい。（まあその割には、そう言う度に振り向いて反応してしまうので完全にいいわけではないが……）

名前の方はダメだ。

私がそう呼ぶように命令したくせにダメだ。

ジジイと同じ呼び方なのにジンに呼ばれると何がダメなのか分からないがダメだった。

とにかくなぜか恥ずかしく感じてしまうのだ。

なんと言えばいいのか分からないが、ジンの声で『モモ』と呼ばれ

る度にこう、胸のあたりが締め付けられるような感覚が沸き上がってくる。
でもそれを私は不快に感じていない。どちらかといえば心地良いと感じてしまっている。

そう、心地良いのだ。

戦っている時の高揚感の心地良さとはまた違う、穏やかでいて心を落ち着かせるよな心地良さ。

確かに呼ばれる度に恥ずかしさが込み上げてくることは否定しない。

それでも……
もっとずっと……
何度でも呼んでほしい……
そんな欲求が後から後から沸き上がってくる――

――って!?　私はいったい何を考えているんだ!?

変な方向に辿り着きそうになった考えを振り払うように頭を振る。

この1週間、考えれば考えるほどループしているような感じがする。
なんというか、答えは分かっているのに本能的にその答えに辿り着く事を避けているようなもどかしさがあるのだ。

そんな思考に囚われている私の耳に奴の声が入ってきた。

「こんなところで何やってるんだ、モモ?」

ビクッ

思わず過剰に身体を震わせ反応しながら声のした方を向く。
もちろんそこには、この1週間の私の思考の大半を占めている人物
――ジンの姿があった。

ジンの言葉遣いは少しだけ変わった。
今までは優しげな口調だったが、今は俺と言う呼び方に合わせた少
し男っぽい口調になっている。

それがまた似合ってきている。
そしてその事が込み上げてくる恥ずかしさを一層強くしているのだ。

「モモ？　本当にどうしたんだ？」

黙ったままじっと見ていた私を、不思議に思ったのかもう1度問い
かけてきたジン。

その声から発せられた私の名前が聞こえた途端、確かに感じた心地
良さと共に、またしてもあの恥ずかしさが込み上げてきた。

顔が赤くなっている事が自分でも分かるほど、頬に血の気が集まっ
てきているのを感じる。

「う…あえ…ジ…ジン…そ…あ…う…」

何とか答えようとするが思うように口が動かない。
漏れて出るのは意味不明な言葉の羅列だけ。

その事実がより一層、恥ずかしさに繋がる。

「って？　モモ!?」

居た堪れなくなり、その場から逃げ出すように駆け去る私の背に戸惑ったジンの声が届いた。

ああ！　私はいったいどうしたいんだ～!?

自分の胸の内の思いに答えを見つけられない私は、いつになったらまともにジンの顔を見る事が出来るのだろうか？

最近あまりジンと話が出来ていない事に寂しさを感じながら、立ち止まると自己嫌悪で落ち込む私であった。

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

ｓｉｄｅ　ａｕｄｉｅｎｃｅ

廊下での百代と神のひと騒動を遠くで眺めていた鉄心は、面白そうにそれでいて嬉しそうな笑顔で自慢の髭を撫でおろしていた。

「どうかシましたか？　鉄心様」

後ろからルーが声を掛けた。

「いやなに、さっきあそこに神とモモがおってのう」

「あ～またアノやり取りですカ」

鉄心の言いたい事を理解したルーはその言葉を引き継いで呟いた。

この1週間の2人のやり取りはもはや川神院では知らない者はいなかった。

第3者の視点で見れば、百代の行動が何を意味するのか分かるのか、ほぼ全員が温かな眼差しで、ほんの一部は生温かい眼差しで2人のやり取りを見ていた。

ちなみにルーは前者で鉄心は後者だ。

普段の百代ならそんな視線で見られている事にすぐ気付くが、自分でも持て余している感情に周りを気に掛ける余裕がなかった。

一方の神は、見られている事には気づいていたが百代と2人1組で見られている事の意味が分からず、百代の反応も含めて、誰に聞く事もなく首を傾げる毎日だった。

「しかし、あの百代があんな風になるとは思いもよりませんでしたヨ」

「ホッホッホ、そうじゃのう。まあ、モモ本人は初めての感情に戸惑っておるようじゃがな」

「神の方はそれに全く気付いていないみたいですけどネ」

「あやつのようなタイプはそっち方面には間違いなく鈍感じゃて」

なおも楽しそうに笑顔を浮かべる鉄心。

ルーにしてみればそれは楽しいというよりも、面白そうな玩具を見つけ、どうやって弄ろうかと考えているニヤケ顔にしか見えなかっ

た。

「鉄心様、面白がって余計なチャチャを入れないようにして下さいヨ」

一応注意をしておく。

「分かっとるわい。この変化は百代にとっても神にとっても良いものじゃからな」

ルーの注意に真面目な表情に戻し、鉄心は答える。

個人個人の考えや思惑は別にして、今回の百代の言動の変化は川神院全体である意味で歓迎されていた。

武の天才である百代は、その強すぎる自分の力を持て余していた。
師範代クラスと手合わせが出来るといっても、それは修練の時だけ。
全力で戦う事が出来るのは鉄心、ルー、釈迦堂の3人だけなのだ。

そして生まれ持っての性（さが）なのか、百代には戦闘狂の面影が見え隠れし始めていた。

まだ10歳でしかない百代の危険な本質に、どのような対策を取るべきかと考えていた鉄心は、その一環として神との手合わせを許可したのだ。

その結果、自分が考えていた以上のものが得られた。

（まさかモモの奴が神に惚れるとはな）

百代が戸惑っている感情の正体を知っている鉄心は、またも面白そうにほくそ笑んだ。

（はてさて、モモが自分の感情に気付き自覚するか、神がモモの態度から感情を察しその気持ちに気付くか、果してどちらが先かのう）

そんな事を思いながら笑う鉄心の表示にルーは呆れたように溜息を吐く。

「鉄心様」

「分かっとると言っておろうが」

再度注意を促すルーに答えた鉄心は、楽しくなるであろうほんの先の未来を思い浮かべながら、夜空に浮かぶ月を眺めた。

ちなみに、百代が自分の感情の正体が分からないものの、なんとか意識せずに神を見られるようになったのは、それからさらに1週間後の事であった。

第6話　初めての勝負、その結果（後書き）

あとがき～！

「第６話終了。あとがき座談会、司会の春夏秋冬　廻です。今回のお相手は――」

「第１話以降久方ぶりの、暁神です」

「さて、今回は試験的に視点切替をやってみたのだが」

「いい感じに出来てると思うよ。ところで『ｓｉｄｅ　ａｕｄｉｅｎｃｅ』ってどういう意味？」

「えっと、『ａｕｄｉｅｎｃｅ』が『観客・視聴者』っていう意味だから、つまり三人称のつもりで付けたというわけ」

「なるほど」

「そのまま三人称の英語表記でもよかったんだけど、なんかカッコ悪かったからね。それよりも神くん、君本当になんで百代の言動がおかしいのか分かんないの？」

「原因が分からない以上、何を分かれって言うんですか？」

「ほんとに鈍感なんだね……」

「鈍感って俺の事ですか？　よく気がきくって言われるんだけどなぁ？」

「よく気がきく人間ってあっち方面は鈍感なのはデフォなのか……」

第7話　原っぱ争奪戦、用心棒依頼（前書き）

第7話投稿。

原作過去エピソードの1つ『原っぱの争奪戦』です。

第7話　原っぱ争奪戦、用心棒依頼

――２００２年　６月２日　日曜日　ＡＭ１１：００――

右から殴りかかってくる上級生をとりあえずいなしてひっくり返す。
受け身の取れない彼は背中を強かに打ちつけ悶えている。
それを無視して少しだけ身を屈める。
後ろから殴りかかって来た上級生の腕を掴み、勢いのまま片手で背負い投げる。
その途中で腕を放すと、３メートルほど飛んでいった。
あ、勢いがつき過ぎた。
背中から地面に着地。そのまま２メートルほど滑って行った。
やり過ぎたかな、と思うものの見ると元気にのたうち回っているので、大した怪我じゃない事を確信する。
「あはははは！」
いかにも楽しそうな笑い声に溜息を吐きながら隣を見る。
そこには案の定、笑顔を浮かべたまま上級生をボコボコにするモモの姿があった。
最初は男である俺に向かって来た上級生――全員６年生らしい１２人は、俺が３人ほど簡単にひっくり返したのを見て、半分以上がモモに標的を変え突っ込んでいった。

その結果、２秒足らずで決着。

俺に向かってきた５人は１人を除き足元で背中の痛みにのたうち回っている。

モモに向かった７人は派手にやられたのだろう。モモの足元でなんかやばい感じに痙攣している奴もいる。

モモには一応手加減するようにと言っておいたが、手加減ではなく力を入れるなと言っておくべきだったかもしれない。

そんな失敗に若干の後悔をしつつ、昨日の事を思い出していた。

§　§　§

午前の修練が終わりシャワーで汗を流した俺は、タオルで髪を拭きながら廊下でモモと合流して昼食のため食堂へ向かっていた。

隣に並んで歩いているモモの髪もまだ若干濡れている。

「モモ、ちゃんと拭かないと風邪ひくよ」

「ジン、お前の方が髪長いんだからちゃんと拭いておけよな」

してやったりと笑いながら返すモモ。

ちなみにモモの挙動不審は先週の終りにやっと落ち着いた。

なんであんな行動を取っていたのか聞きたかったが、落ち着いたのに聞き出した事で再び挙動不審になられても困るので、解決したものと判断し放っておいた。

「おお百代！　こんな所にいたネ」

ルー師範代が玄関側の廊下から声を掛け寄ってきた。

「どうしたんだ？　ルー師範代」

「今、山門の前に男の子がいるんだけど、百代を呼んで来てくれト頼まれたんだヨ」

「私をか？」

用件を述べたルー師範代の言葉にモモは首を傾げる。

「ああ、なんでも話したい事があるらしいヨ」

「話したい事……なんだろうな？」

ルー師範代の言葉に俺はモモの方を見ながら問い掛ける。

そんな俺に視線を合わせたモモは少し不貞腐れたように言葉を発する。

「私が分かるわけないだろ。まあ行けば分かる事だがな」

「そうだな。どうするモモ？」

「行ってみよう。もちろんお前も付いて来るよな？」

問い掛けながらも返答の有無も言わさず俺の手を引っ張るモモ。
初めから付いて行く事など決定事項かのようなモモの行動に、呆れながらも隣に並び玄関に向かう。

玄関を出て山門に到着した俺たちを待っていたのは、俺たちと同じぐらいの年の男の子だった。

「突然呼びだして申し訳ありません。でも、どうか力を貸して下さい」

こちらの姿を確認すると、そう言って頭を下げてきた。

これが、俺とモモと直江大和との出会いだった。

§　§　§

大和くんの話は、先週の土曜日に遊び場にしていた原っぱを上級生の６年生数人に力づくで奪い取られたというものだった。
しかも、人質を取られて無抵抗なところを痛めつけられ、彼らのリーダーらしき男の子はコンパスで耳に穴を空けられたらしい。

人質を取った事、多人数で年下を一方的に痛めつけた事、さらにコンパスで耳に穴を開けた事。
以上の３つの事が気に入らなかったのだろう、モモは大和くんの頼みごとを聞くことにした。

実はモモは卑怯な事や不誠実な事を嫌う気質にある。
大和くんからの話を聞いて、どうやらその6年生の取った行動がモモのそれに触れてしまったらしい。
自業自得ながらもその上級生には同情せずにはいられなかった。

その後、モモが集めていた野球カードのレアカードを献上した大和くんは、モモと舎弟契約を結んだ。（破ったら嬲り殺すという悪魔のような契約だったが）
ちなみになぜか俺も大和くんと舎弟契約を結ばされた。モモが言うには『私の舎弟はお前の舎弟でもあるんだ』らしく、ほぼ無理やりであった。（しかもモモと同じで破ったら嬲り殺すという契約）

あの時、大和くんに心の底から同情したのは人として当たり前な感情だと思う。

話は進みモモと俺は翌日の今日、大和くんに連れられて原っぱに来たのだった。

「人質とってお前の耳に風穴空けたのはどいつだ」

昨日の出来事を思い返していた俺は、モモのそんな言葉に考えを中断した。
声の方を見ると何やらモモが6年生の1人を脅していた。

「やめろ、やめろよ」

「命乞いは、媚びてするものだぞ」

楽しそうに微笑んでいるモモ。
笑ったモモの顔は可愛いが、たぶん脅されてる方は見ている余裕はないだろう。

「俺は本当に悪なんだ子猫を平気でイジメ殺せる！　お前も殺すぞこのアマ！」

「悪かぁ。素敵だなぁセンパイ。デートしてくれ」

あ、キレた。
たぶん子猫をイジメ殺せるってところが気に食わなかったんだろう。

「あそこの建物の3階……屋根まで付き合ってくれ」

「モモ～あんまりやり過ぎないようにな～」

ズルズルと6年生を引きずりながら指さした建物に向かうモモの背中に、無駄だろうと思いつつも一応注意を促す。

「おう～任せておけ～」

俺の言葉に語尾を伸ばしながら上機嫌で答えるモモ。
そんなモモの様子に不安がなくなる事はないが、恐らく酷い事にはならないだろう。たぶん。

「だ、大丈夫なんですか？」

同じように不安に思ったのか、見た目まるっきり女の子のような外見の男の子が声を掛けてきた。
どう答えるべきなのだろうか迷っていたら、モモが連れて行った6

年生を建物の屋根から突き落とした。
しかもちゃんと足から地面に着くように。
結果、絶叫を上げ落ちた6年生はその衝撃に耐えきれず、足を抱えながらのたうち回っている。
「な、何もここまで……」
「両足イったんじゃないのか、これ……」
バンダナを巻いた男の子と大和くんが呟く。
2人とも腰が引けてる。まあ、無理もないと思うが……
「大丈夫だと思うよ。数日は痛みが続くだろうけどたぶん骨に異常はないはずだから」
顔を引きつらせて目の前の光景を見る彼らを、安心させるようにあえて明るい口調で言葉を掛ける。
それに安心したのか全員腰が引けてるものの、引きつった表情は引っ込んだ。
「ひ……ひぃぃっぃぃぃいいいい！！！」
そんなやり取りをしているうちに、再び聞こえてきた絶叫に視線をモモたちの方に向ける。
なにやら再度、脅しを掛けているようだが、モモが何かを言ったのか6年生は涙目になりながら何かを言葉にすると、物凄い勢いで首を縦に振った。
その後、土下座するような勢いで頭を下げた6年生は、痛む両足を

引きずるように歩くと意識のあった仲間たちで気を失った人たちを抱え、逃げるように原っぱから去って行った。

満足したように腕を組みながら逃げていく上級生たちを眺めるモモ。その後頭部を軽く小突く。

「モモ、やり過ぎ。大した怪我じゃなかったからよかったものの、最後のあれは1歩間違えば大怪我になるところだよ」

「私がそんなヘマするか」

叩かれた場所を軽く押さえ、不機嫌そうに口を突き出しながらモモは答えた。

一応は最初に言っておいた『手加減しろ』と言う俺の言葉を守っていたらしい。その気になれば人間を数メートル吹き飛ばす事の出来るモモだ。相当手加減したんだろう。

「まあ、約束はちゃんと守ったようでなによりだよ」

「約束を守るのは当然だ！　……もし破ってお前に嫌われたらなんか嫌だからな……」

労うように頭を撫でる俺に、嬉しそうな笑顔を浮かべてモモは答えた。

最後の方は小声になっていたので何を言っていたかは聞こえなかったが、機嫌が良くなったのでそのまま頭を撫で続ける事にした。

「それで？　最後はなんて脅しを掛けたの？」

「脅しなんて心外だな。私はただ猫イジメのようなふざけた話をま

た聞いたら今以上のお仕置きがあるかもな、と優しく言い寄っただけだ」

「それを世間一般では脅しって言うんだよ」

「こんな美少女が言い寄るんだぞ。脅しであってたまるか」

他愛もない会話を続ける。

そうしている内に話し合いが纏まったのだろう、今まで俺たちの後ろで何やらヒソヒソ話をしていた大和くんたち6人が一斉に頷いたのを感じ取った俺は、掛けられるであろう言葉を待った。

「2人ともちょっといいか？」

掛けられた言葉にモモと一緒に振り返って見れば、6人を代表するようにバンダナを巻いた男の子が1歩前に出ていた。

そしてこのバンダナを巻いた男の子――風間翔一が放った言葉が、俺とモモの長い人生における最高の仲間たちとの絆の始まりとなるものになったのだ。

「なあ、俺らの仲間に――『風間ファミリー』に入ってくれよ！！」

第7話　原っぱ争奪戦、用心棒依頼（後書き）

あとがき～！

「第7話終了。あとがき座談会、司会の春夏秋冬　廻です。今回の相手は――」

「前回より引き続きの登場、暁神です」

「はい！　さてようやく7話にして原作エピソードを絡ませたわけですが……」

「原作エピソードと言っても過去話だけどね」

「まあ小学生時代から話を始めてるからそこは仕方がないと思ってほしい。で、今回の『原っぱ争奪戦』エピソードなのだが」

「勝手に名前付けちゃってるよ」

「いや名前付けた方が分かりやすいしね。まあ今回のエピソードなんですけど、オリキャラを介入させる事で若干違いが生じてます」

「と言っても上級生の人数が1人増えて、モモが相手した人数が減ったくらいでしょ？」

「そうなんだけどね。原作では回想で語られるエピソードなんだけど、余り弄りたくなかったというところかな？　次回のファミリー加入、自己紹介の話はほとんどオリジナルだからね」

「さりげなく次回の内容言っちゃってるけど……大丈夫？」

「大丈夫でしょ？　本文はまだ全然考えてないけど」

「大丈夫じゃないよそれ……」

第8話　原っぱ争奪戦、新生風間ファミリー（前書き）

第8話投稿。

ちょっと文字数多くなりました。

これからもちょくちょく多くなっていくかも？

第8話　原っぱ争奪戦、新生風間ファミリー

風間ファミリー。

川神小学校において有名な友達グループの1つだ。
5人の4年生と1人の3年生、計6人で構成されているグループは、破天荒なリーダー風間翔一のおかげで、学校内では有名だった。

そして今日この日、風間ファミリーに新たなメンバーが加入する。

ｓｉｄｅ　篁緋鷺刀

大和くんが助っ人で呼んできた2人は、物凄く強かった。

髪の長い男の子の方は殴り掛ろうとしていた6年生たちを、赤ん坊の手を捻るかのように片手で簡単にいなしひっくり返す。
髪の短い女の子の方は圧倒的な暴力と言っていいほどの力で、半数以上の6年生たちを完膚なきまでに打ちのめした。

しかも相当な手加減をしていたんだろう、2人とも物凄く余裕があるように見えた。

洗礼された武。
圧倒的な武。
そしてそれを御する心。

僕の目指すべき武人としての姿がそこにあった気がした。

side out

side 暁神

「なあ、俺らの仲間に――『風間ファミリー』に入ってくれよ！！」

バンダナの男の子の言葉に、俺はなるほどと思う。

この子たちが『風間ファミリー』か……

俺たちが通う川神小学校にはいくつか有名な友達グループがある。
その1つである『風間ファミリー』は同学年が多い俺にとってはまた別の意味でも有名だ。

ずらっと並ぶ6人をさらっと眺め見る。
ぱっと見は普通だが、気質や気配を読むとなにやら個性の強いメンバーだと分かる。
隣にいたモモもそれが分かったのか、面白そうに口元に笑みを浮かべていた。

「さて、どうしようかジン？」

「どうしようかって……モモ、答えが分かっているのに質問するのはどうかと思うよ？」

「だがお前の意見も聞かずに決めるわけにはいかんだろ」

最近と言うか挙動不審が終わった後、モモはたまにではあるが俺の意見を聞いてから行動する、という態度を取るようになった。

今までは問答無用で俺を引っ張ってきたモモの変化に、最初は何か意図があるのかと勘ぐった事もあったが、特におかしなところはなかった。まあ、たまにあるだけで殆どは以前のままではあるが……

「俺はモモの意見に任せることにするよ。モモの強さを見ても仲間に入れって言った子なんてこの子たちが初めてだろ？」

「そういやあそうだったな」

意外ときつい事実をさらりと流すモモ。

相変わらず自分の価値観でマイペースに行動するモモだが、実は友達と言えるのは俺だけしかいない。

だいたいみんなモモの強さを目の当たりにすると、逃げ腰になりそれ以降は近寄ってこようとはしなくなる。この子たちはある意味で奇特な存在ともいえるだろう。

「えっと姉さん、兄さん、そろそろ答えを聞きたいんだけど」

いい加減焦れたのか、大和くんが代表して声を掛けてきた。

話し合いの時に舎弟契約した事を話したのだろう、大和くんの『姉さん・兄さん』発言に他の子たちが反応しない。

そう言えば俺が同級生だという事を教えていなかった。

さて、いつ言うかな……

「舎弟から話は聞いてたが、私はお前たちが気に入った！　入ってやる！」

考え込む俺を放ってモモが答えを返す。

と言っても俺に反対する意思はないのでモモの言葉に頷く事で同意する。

「よっしゃあ！　新しい仲間が増えたぜ！」

嬉しそうにガッツポーズを取るバンダナの男の子に倣うように、他の子たちも嬉しそうに円になってはしゃいだ。

「キャップ、嬉しいのは分かるけど新しく仲間になったんだから自己紹介しなきゃいけないだろ」

一番最初に冷静になった大和くんが、バンダナの男の子に言う。

『キャップ』――恐らくキャプテンの事だろう。と言う事はあのバンダナの子がこのグループのリーダーの風間くんで間違いないだろう。

「おっと、そうだったな。じゃあ大和から順に自己紹介だ！」

風間くんは一番右にいた大和くんを指差して言った。

指名に小さく息を吐いた大和くんは、気を取り直すように２・３度服をはたくと笑顔を浮かべて自己紹介を始めた。

「えっと、昨日も自己紹介したけど改めて――
直江大和。軍師的な役割を任せてもらっている。これからもよろしく姉さん、兄さん」

「えっと、岡本一子！　一番の子と書いて『かずこ』って読むの！
よろしくお願いします！」

「俺様の名前は島津岳人だ！　これからよろしく頼むぜ！」

「僕は師岡卓也。まあ個性の強い人ばっかだけどよろしくね」

「篁緋鷺刀です。僕だけ年下の3年生ですけど、よろしくお願いします」

順に大和くん。髪を短く縛ったの女の子。一番体の大きい男の子。少し線の細い男の子。そして女の子のような外見の男の子。（やっぱり男の子のだった）

「で、俺がこの風間ファミリーのリーダー、風間翔一だ！」

締め括るように親指で自分を指しながら自己紹介を終えた風間くん。それを聞き終えたモモは、応えるように1歩前に出て己紹介を始めた。

「川神百代だ！」

腕を組み胸を張り、ふんぞり返って少し偉そうなモモ。

だがたった一言、名前を言っただけなのにその存在感は凄いものだった。

そんなモモの頭を軽く小突きながら、隣に並び俺も自己紹介をする。

「モモ、無駄に威張り過ぎ。

えっと、俺の名前は暁神。モモ共々よろしくお願いします」

『痛いな～』と言うモモの抗議を黙殺する。

これから仲間に入れてもらおうとしているのに、威張ってどうするんだよ。

「よし！　自己紹介も終わったし改めて新メンバーを歓迎する！　今日から新生風間ファミリーの出発だ！！」

宣言するかのように拳を天に突き出した風間くんの声が原っぱに響き渡った。

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

ｓｉｄｅ　篁緋鷺刀

「そう言えば、これからみんなの事はなんて呼べばいいんだ？　仲間になったんだから他人行儀な呼び方はやめた方がいいだろ？」

一通り全員の自己紹介が終わり、大和くんが川神さんと暁くんの舎弟になった話がちょうど途切れた頃、暁くんがキャップに問い掛けた。

「ねえねえ大和、『タニンギョウギ』ってどういう意味？」

「もっと仲が良くなる呼び方をしようって言ってるんだ」

一子ちゃんの質問に暁くんの言葉をかなり砕いて大和くんは答える。

「そうだなぁ……あ！　もちろん俺の事はキャップだぞ！　俺はこのファミリーのリーダーだからな」

「了解キャップ。それで他のみんなは？」

「俺はみんなを『大和』『ワン子』『ヒロ』『ガクト』『モロ』っ

て呼んでるけどな」

「僕とガクトは緋鷺刀のこと『タカ』って呼んでるけどね」

キャップの返答に卓也くんが僕の呼び名に対して補足した。

2人の言葉に暁くんは少しだけ考え込むと、確認するように聞いてきた。

「『ワン子』は名前が『一』の『子』だから分かるが、『タカ』ってのは名字の篁から付けてるんだろ？　何で使い分けてるんだ？」

「使い分けているわけじゃねーよ。ただ後から仲間になった俺とモロが勝手に『タカ』って付けて呼んでるだけだよ」

暁くんの質問に岳人くんが答えた。

そう、岳人くんと卓也くんが仲間に入った頃に岳人くんが僕の事を勝手に『タカ』と呼んでいたら、いつの間に卓也くんもそう呼ぶようになっていたのだ。

「ふぅん、追加メンバーは『タカ』って呼んでいるのか……そっちの方がカッコイイな。

よし！　私はお前たちを『キャップ』『大和』『ワン子』『タカ』『ガクト』『モロロ』と呼ぶ事に決めたぞ！」

「僕だけなんかおかしくなってない！？」

川神さんが決めた呼び名で、1人だけ呼び方が変わっていた卓也くんがさかさず突っ込んだ。

そんな卓也くんを川神さんは『いいツッコミだな』と褒めながら首

に手を回していた。

「モモ、絞め落とすなよ。
じゃあ俺の方はキャップ以外はみんなの名前の最初の2文字を取る事にするよ」

川神さんの行動に注意をしながら、暁さんは自分が決めた呼び方をみんなに伝える。
名前の最初2文字って事は、僕の事は『ヒロ』、大和くんの事は『ヤマ』と呼ぶって事かな？

「呼び方が決まったのなら私の事は『モモ先輩』と呼べ」

そう考えていたら、卓也くんを解放した川神さんがみんなに向かって宣言した。
川神さんは上級生だから誰も文句ないだろう。みんな頷いて答えた。
だけど、次に川神さんの口から出た言葉に全員が衝撃を受けた。

「おいお前、そう言う訳だから私がこのグループのリーダーになる。いいな」

キャップを指差し有無を言わせない威圧感を纏いながら川神さんは言い放った。
一瞬、何を言われたのか理解できなかったキャップだったけど、その言葉を理解した途端、物凄い勢いで言い返した。

「ふざけんな！　リーダーはキャップたる俺だ！　俺がリーダーだからこそ『風間ファミリー』だろうが！」

「集団というものは、その中で最強が統べるべきだ。だからこのグループは以後私が率いる。私はここが気に入ったから私のものにする」

「ここは俺のグループだ！　誰が譲るか！」

物凄い勢いで食って掛るキャップ。
呆然とする僕らの目の前で言い争いが続く。
ただ1人、暁くんだけが呆れたように頭を抱えていた。

「お前、さっき私の力を見ていただろう」

川神さんはそう言うと足元にあった石をつまみ上げ、それを握り潰し粉々にする。

「逆らうなよ……私にリーダーを譲るよな？」

薄ら寒くなる笑みを浮かべ畳み掛けるように言う川神さんに、キャップは一瞬だけ後ずさるように体を震わせたが、踏みとどまり握り拳を作ると毅然と、澄んだ瞳で川神さんを見返した。

「断る！！」

「いい加減にしようなモモ！！」

ゴッ

キャップの叫び声と、暁くんの言葉と、川神さんの頭を殴った音が

同時に響いた。

ポカンとするキャップ。
事態について行けない僕たち。
頭を押さえて蹲り痛みに耐えている川神さん。

「いきなり何するんだジン！？」

殴られたであろう場所を手で押さえ、少し涙目になりながら川神さんは暁くんを見上げる。
そんな川神さんの態度にも厳しい眼差しで暁くんは答える。

「モモが余りにも理不尽な事を言っているから止めたんだよ」

思っていた以上に厳しい眼差しだったのだろうか、そう言われた川神さんはバツが悪そうに視線をそらしそっぽを向いた。
そんな態度の川神さんに呆れたように溜息を吐いた暁くんは、蹲る彼女のそばに同じようにしゃがみ込むと、自分が殴った場所を優しく撫でながら言葉を掛けた。

「新参者のお前がいきなりリーダーになってどうするんだ。そんなことしたら直ぐにみんなバラバラになる」

「でもさぁ」

「でもじゃない。もしモモが言うように一番強い奴がリーダーになるんだったら、このグループのリーダーはキャップじゃなくヒロになっていたはずだ」

「そうだけどさぁ」

2人の会話に僕は一瞬だけ体を震わせた。
そんな僕に気付いていたはずなのに、気付かないふりをしている暁くんと川神さん。
2人は僕が剣術をやっている事に感付いている？
僕の思惑をよそに会話は続いていく。
「このグループは、キャップがリーダーをしているからこそ上手くいっているんだ。それは力が強いからじゃない。みんながキャップという人間を認めているからだ。それなのにお前が力だけでリーダーになってみろ。それはもう仲間じゃない。ただの支配だ」
ひと言ひと言、言い聞かせるように言葉にする暁くん。
「モモ、人間は気持を伝え合う言葉を持っている。考える知恵を持っている。相手を思いやる心を持っている。そして強い意志を持っている。あのままお前が力に訴えても、きっとキャップの心を折ることは出来なかったはずだ。それはあのキャップ目を正面から見ていたモモなら分かったはずだ」
その言葉に川神さんが頷くと同時に、たぶんキャップ以外の僕らも心の中で同意したはずだ。
だからこそ、キャップは僕たちのキャップなんだ。
「人にはそれぞれ役割というものがある。キャップはみんなのリーダー。それはもうみんなの中では当たり前な事なんだ。だからモモ――」

そこで言葉を切った暁くんは、川神さんと視線を合わせるように覗きこむと笑顔を浮かべる。

「お前はみんなを率いる役じゃなく、みんなを守る立場になるんだ」

「守る？」

「そう、今日みたいな上級生の理不尽な暴力や、それこそキャップにすらどうする事のも出来ない、もっと大きな脅威からみんなを守るんだ。それこそが年上で上級生たるモモのするべき事じゃないかな」

暁くんの言葉に少しの間考え込んでいた川神さんは勢いよく立ち上がると、握り拳を作っていた。

「そうだな！　みんなを守る！　それこそお姉さんである私のすべき役割だ！」

宣言するように叫ぶ川神さん。それを立ち上がりながら優しい笑みを浮かべて見る暁くん。
そんな2人を安堵した感じで見ていた僕たち。

そして急に真面目な顔になった川神さんは、キャップに声を掛ける。

「すまなかった。お前に嫌な思いをさせたようだ」

「いやまあ、分かってくれたらそれでいいさ」

「ああ、だから私はそんな真っ直ぐな目をしたお前を認める。これからもよろしくな『キャップ』」

「ああ！　よろしく頼むぜ！」

そう言ってキャップと川神さんは握手をした。

今日この日、新たに仲間に加わった川神百代と暁神。
その圧倒的な武で風間ファミリーの力のヒエラルキーの頂点に君臨することとなる2人との出会いだった。

ちなみにその後のひと騒動

岳「しっかしジンはすげえな。あのモモ先輩を簡単にあしらうなんて」
卓「あしらうっていうかコントロールしてるよね」
神「別にコントロールしてるわけじゃないけど」
大「さすが兄さんだ」
翔「よし決めた！　俺はジン兄と呼ぶことにするぜ！」
一「それいいわね！　アタシもそうする！」
岳「おお！　そりゃあいいな！」
卓「僕も賛成。上級生だしちょうどいいよね」
百「くっくっく」
緋「モモ先輩？　何で笑っているんですか？」
翔「よし！　じゃあ今日からみんな『ジン兄』って呼ぶぞ！」
神「俺の呼び名で盛り上がってるところ申し訳ないけど……」
大「うん？　どうしたんだ兄さん」
神「俺、４年生でみんなと同級生なんだけど」

翔・大・一・岳・卓・緋「「「「「「「えっ！？」」」」」」」

百「あはははは！」

第8話　原っぱ争奪戦、新生風間ファミリー（後書き）

あとがき～！

「第８話終了。あとがき座談会、司会の春夏秋冬　廻です。今回のお相手は――」

「キャップこと風間翔一参上！」

「風間ファミリーのリーダーついに参戦。ちなみに視点にならなかった人が初登場です。さて今回は神と百代がファミリーに加入するお話でした」

「その割には長かったよな」

「まあね、原作百代ルートにもあったキャップの座を巡る過去話も混ぜたからね」

「あれって本来、後日俺だけが呼び出されてタコられるって話だったよな？」

「その通り。それを何で今回の話に入れた理由は２つ。まず何より百代をコントロールできる神がいた事が１つ」

「それで２つ目は？」

「２つ目は原作をプレイして余りにもキャップがかわいそうだったから」

「って、同情かよ!?」

「ボコられる話の方が良かった？　なら書き直そうか？」

「いや……出来ればやめてほしいです（ＴＯＴ）」

「さて、次回あたりから竜舌蘭防衛エピソードを始めようかと考えている今日この頃」

「あの話をか？」

「そう、だって時系列から考えるとこの頃でしょ？　百代が加入済みで京が加入していない。そして８月」

「そういやあそうだな」

「という訳で、竜舌蘭防衛エピソードを始めるかも？」

「決定じゃないのかよ!?」

第9話　50年に1度の花、竜舌蘭を守れ（前書き）

第9話投稿。

原作過去エピソード『竜舌蘭防衛』です。

第9話　50年に1度の花、竜舌蘭を守れ

――2002年　6月21日　金曜日　PM4：30――

side　直江大和

それに最初に気付いたのはキャップだった。

いつもように秘密基地にしている原っぱで他愛のない遊びをしていた時、キャップからの召集が掛った。

何だろうとみんなで駆け寄ってみると、そこには以前見つけた他の雑草より背の高い草があった。

「なぁ、おかしくねーか、この草大きくなりすぎ」

「あーそう言われれば」

指差して言うキャップにワン子が答える。

確かに先月ごろ初めて見た時はもっと背が低かったはずだ。

俺たちの中で1番背の高いガクトより高かったから2メートルぐらいだと記憶している。

「今まで2メートルぐらいだったのに」

「3メートルぐらいありそうだね。背伸びてるね」

同じ事考えていたキャップの言葉に、ヒロが今の高さを推測して答える。

「1ヶ月で1メートルも伸びてるのか」

兄弟が少し感心したように呟いた。

俺が『兄弟』と称したのはこの前の事件で仲間に入った暁神の事だ。俺たちはずっと神は年上で姉さんよりも年上だと思っていたのだが、あの後、実は俺たちと同じ4年生だという事が神の言葉で判明した。

あの時は俺も素で驚いてしまった。それほどある意味で衝撃的だった。

最低でも姉さんと同い年、年上だと決めつけていた俺たちも悪いかもしれない。

だって考えてもみろ。あの姉さんに言う事を聞かせること出来る奴が同い年と思うはずがない。

結局、姉さんをコントロールできるという事実にみんなが尊敬の意を抱き、キャップが宣言したように『ジン兄』と呼ぶ事に決まった。ただし、舎弟契約した俺だけが『兄弟』と呼ぶ事にした。（というより神にそう呼んでくれと必死に頼まれた。さすがに同学年全員に『兄』なんて呼ばれたくはないらしい）

そんな事を思い出していると、ガクトとワン子の言い合いが耳に入ってきた。

「ワン子も言い返すようになったねぇ」

「私に弟子入りしたから当然だ」

「うん、アタシ強くなる」

ガクトとワン子の言い合いを眺めながら呟いたモロの言葉に、姉さんが胸を張りワン子が元気いっぱいに言う。

そう、このワン子。実はあの時の姉さんの強さに感銘を受けたらしくあの後に『強くして下さい』と姉さんに頼み込んでいたのだ。

そんなワン子を可愛がるように頭を撫でる姉さん。傍から見るとまるで姉妹のようだ。

「まぁこの草は成長期って事で」

「俺様もこれぐらい高くなりたいぜ」

この日は、そう締めくくったガクトの言葉でその草の話は終わったのだった。

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

§　§　§

――２００２年　８月１９日　月曜日　ＡＭ１０：３０――

ｓｉｄｅ　篁緋鷺刀

その草は遠目に見ても他の草とは違うことが明らかになっていた。

「オイオイこの草もう5メートルこしてるよ！？」

思わず叫んだ卓也くんの言葉に、みんなでこの草についての談義が始まった。

「実は妙な生き物じゃね」

みんながいろんな意見を言い合っていた時、岳人くんがポロリとこぼした言葉で話は妙な方向に行ってしまった。
みんなの視線が岳人くんに集まる。

「ある日ワン子の姿が消えた……するとこの植物はワン子の身長分伸びていた」

「怖いでしょうが！」

岳人くんの話に一子ちゃんが怯えたように体を震わせる。
ありえないと分かっていても確かに怖いものがあるよね、それ。

だが、それに面白おかしく便乗してしまうのが僕たちのキャップ。

「ある日、ガクトの姿が消えた。するとこの植物が花をつけた時、そこにガクトの顔が！」

「キャー！　気持ち悪いわ！！」

「さすがにそれはないよ」

ついにはモモ先輩とジン兄の後ろに隠れてしまった一子ちゃん。
僕も思わず突っ込んでしまった。

「ぬぬ……だが物理的に殴れるなら化け物も平気だ」

意外だったのが、ジン兄の服の袖を掴みながら少し震えた声で言うモモ先輩だった。

「あれ、姉さんお化け苦手？」

「ふん、うるさいな……ちょっとだけだ」

僕と同じ意外に思ったのか、問い掛けた大和くんにモモ先輩は強がって答える。だけど変わらずジン兄の服を掴み、さっきより体を寄せた格好では説得力がなかった。

「実はモモ、そういった類のものが嫌いなんだよ。その理由も『殴れないから』っていう実にシンプルなもの。しかも尊敬する人物が化け物退治の専門家だと思っている安倍晴明」

からかう口調で言うジン兄に、反論できないのかモモ先輩はその視線に顔をそらしながら不貞腐れたように言葉を発した。

「まだミサイルを撃ち込まれた方がマシだ」

「いや～それはどうなのさ？」

呆れかえった卓也くんの突っ込みに、きっとみんな同じ気持ちだったと思う。

そこに岳人くんのお母さん、麗子さんが岳人くんを怒鳴りながらこちらに来たので、大和くんが代表してこの草の事を聞いた。

麗子さんの説明の結果、この草の名前が『竜舌蘭』という花で、数十年に1度しか咲かない花だという事が判明した。（大和くんが言うには『センチュリー・プラント』というものらしい）

さらに詳しい事はモモ先輩のお爺さんに聞いた方がいいらしい。

と、いきなり呼ぶと宣言したモモ先輩が大きく息を吸い込む。

僕たちは反射的に耳を指で塞いだ。

「ボケはじめのブルセラジジイ！！！！！！！」

「モモ！　お前いい度胸しとるのう！！」

1秒の間も置かず登場した川神鉄心さん。

「一瞬で来ちゃったよ。この一族は全く……」

「鉄心さん……」

卓也くんは全員の気持ちを代弁して、ジン兄はどこか悲しそうな声音で呟いていた。

再び代表して事情を説明した大和くん。

鉄心さんの説明の結果、この花が『竜舌蘭』で間違いない事、以前は５０年前に咲いた事、今の花がその時の子株だという事、竜舌蘭は個体によって咲く時期が違う事、そしてこの花が明後日ぐらいで咲きそうな事が分かった。

急に湧いて出たイベントに、みんなで写真を取ろうと騒いでいた。

その時、遠くでこっちを見ていた女の子にキャップが僕たちのそばを離れて声を掛け、大和くんはそのキャップを追って行った。

ちょっと前からいたのに気付いていたし、たぶんジン兄もモモ先輩も気付いていたはず。特に接触しようとする気配がなかったため２人とも注意をしなかったんだと思う。

そう考えている内にその女の子はいなくなり、キャップと大和くんは少し言い合いながら戻ってきた。

あの子はいったい何だったんだろう……

そう思いながら、僕は写真の事で盛り上がるみんなの話に入っていた。

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

§　§　§

――２００２年　８月２１日　水曜日　ＰＭ７：３０――

ｓｉｄｅ　暁神

午後から強くなっていた雨風は、夜６時を過ぎたあたりから本格的な台風の様相を呈していた。

激しい雨が窓ガラスに打ちつけられ、唸りを上げる風は家を揺らさんばかりに吹き荒れていた。
そんな外を眺めながら、そういえばこの間の竜舌蘭がそろそろ咲くころだな、となんとなしに思い出した。

「ジン！　キャップより召集だ！　原っぱに急ぐぞ！」

俺の考えを遮断するように部屋に入ってきたモモが叫んだ。

「は？」

いきなりの事にまともに返事が出来なかった俺は、そのままモモに連れ去られるかのように引っ張られ、気付いた時には山門をくぐり抜けた後だった。

呆然としながらもきちんと2人分の雨ガッパを手に取っていた自分を、俺は凄く褒めてやりたい気分になった。

「それで？　キャップからの召集って事だけど、まさか竜舌蘭のことか？」

「そのまさかだ」

「無茶するなぁ」

取ってきた雨ガッパを着こみながら、モモと急いで原っぱに向かう。
その途中でガクとタクの2人と合流し、4人で原っぱに到着すると、そこには既にキャップたち4人がいた。

全員が集合すると、キャップが召集した目的を発表する。

「花がきちんと咲けるように保護するぞ！」

そんなキャップの言葉にヤマが代表して言葉を発する。

「……全く、この台風の中ムチャクチャだ！
なぁ竜舌蘭は普通に栽培されてるらしいぜ。今回ダメでも、どっかでそれを見ればよくね？」

ある意味で正論を唱えるヤマに、キャップは譲らない。

「あの花は、あの花だけなんだ。かわりなんてねぇ。空き地に咲いているあの花を、みんなで見たいんだ」

「アタシも！」

みんなのマスコットであるカズが同意した以上、反対意見は出ないだろう。
事実、ガクもモロもタクも同意している。

「分かってるさ俺だって！　ただ危険すぎるって事だ！」

同意を示すみんなに、ヤマは少しだけ声を荒げる。
本来なら、ヤマの言葉がこの場では一番正しい。子供でしかない俺たちが台風の中にいるのだ、世間一般的に見て、無茶な事をしているのは間違いないのだ。

でも今ここにこの場から帰ろうとする者はいない。

みんなを心配するヤマの肩に手を置く。
振り向いたヤマに俺は同情するように、それでいて諦めろと説得するように首を横に振る。

雨で濡れた髪を苛立たしげに掻き毟ったヤマは、一度落ち着かせるように大きな息を吐くと、思考を切り替えたのかモモと俺に顔を向けた。

「こうなったら姉さん、兄弟、よろしく頼みます」

「ああ、私がみんなを守る。必ずな」

「任せておけ」

ヤマの言葉に俺もモモも即答する。
そんな俺たちにヤマは呆れたように呟いた。

「なんと心強い」

「姉は心強いものだ、任せろ」

受け答えはモモに任せ、俺は持っていたロープでカズとタクの腰をきつく結び、それを同じようにモモの腰にしっかりと結び付ける。
吹き飛ばされないための処置だ。

実はこのロープ、雨ガッパを手に取った時に一緒になって引っ掴んだらしい。本当に自分自身を褒めたくなった。

結び付ける作業をしながら、ふとヒロの方を見たが首を横に振っていた。

その行動に必要がないと判断した俺は最後に確認するように強く引っ張るとモモに声を掛ける。

「カズとタクがロープで繋がっているからあまり無茶な動きはするなよ。周りは基本俺とヒロが押さえるから、モモはみんなを頼む」

「了解した」

答えながらも住宅建築中の現場から突風で飛んできた木材を苦もなく撃ち落とす。

同じように飛んできた別の木材を、ヒロがキャップたちを庇いながら叩き落としているのが視界の端に映る。

「守る人数は5人。何がどこから飛んでくるか分からない。突風も十分危険、か……ふ、ふふふ、あはははは！　ははははは！」

この状況を楽しそうに笑うモモに、俺は頼もしく感じたが、他のメンバーは少し不気味に感じたようだった。

気を引き締め全員一丸となり竜舌蘭のもとに向かうと、そこには先客がいた。

「……あ」

原っぱに置かれている土管の影に縮こまっていた1つの人影。

「っ！？　椎名？　椎名か！？」

姿を確認したキャップが駆け寄り、俺たちもそれに続く。

「なんでこんな時に出歩いていやがる！？」

語気を荒げたヤマが詰め寄る。

それに態度に少し怯えながら椎名と呼ばれた女の子は答えた。

「み、みんな、この花、さ、咲くの楽しみだって……でも嵐来たから、その……」

「聞いてたのか」

「お前関係ねーだろ、危ないからけーれ！」

珍しく呆れたように呟くキャップと、自分たちを棚に上げ帰れと促すガク。

「というか、よく今まで無事だったよね」

ヒロが安心したように呟いた。

椎名と呼ばれた子をどうしようかと考えていたが、キャップが最初に声を上げた。

「まあいい、今は手伝え！　人手は多い方がいいし、今ひとりで帰ると逆に危険だぜ」

キャップの言葉に全員が同意する。

「姉さん、兄弟、守る人数増えたけど……」

「川神百代だぞ私は」

心配するように言葉を掛けてきたヤマに、モモは問題なしとばかりに名前を言い、俺は安心させるように笑って頷いた。

俺たちは、だんだんと強くなっていく雨風の中、花弁が吹き飛ばされないようにビニールで覆ったりして花を保護した。
周りから飛んでくる色んな物は、基本は俺が、作業中はモモが、それでも間に合わない時はヒロが前面に出て叩き落としていった。
そのお陰もあってか、特に危険な事なく素早く作業をこなす事が出来た。

作業が終わり帰ることとなり、まずは女の子であるカズと椎名という子を先に送る事にする。
本来なら分散して帰るのが効率がいいだが、この台風の真っただ中、何が起こるか分からないので全員が一纏めになって行動する。

その後タク、ガク、ヒロ、キャップ、ヤマの順に家に送ってから、俺とモモは川神院に戻った。

余談ではあるが、俺もモモも鉄心さんに無断で嵐の中外出したことがバレて、文字通り『死にたくなる』ほど怒られた。

次の日。竜舌蘭は黄色の花を見事に咲かせていた。

必死になって守って、半世紀近く待たせたわりには凄く綺麗な花ではなかったが、みんな５０年に１度ということに感慨深い何かを感じたのは間違いなかった。

「ほら、写真撮るんだろ。パシャリといくわよ」

写真を取る役を頼んでおいた麗子さんが、カメラを構えて声を掛けてきた。

その時、遠くでこちらの様子を窺っていた椎名という子に気付いたキャップが、ヤマに連れて来るように命令する。

渋々ながらもヤマはその子を連れてきた。

椎名という子を入れて９人。俺たちはそれぞれの格好で竜舌蘭の前に並び写真を取った。

そしてまた次の花が咲くであろう５０年後、今と同じ格好でもう１度写真を取ろうと約束をしたのだった――

第9話　50年に1度の花、竜舌蘭を守れ（後書き）

あとがき～！

「第9話終了。あとがき座談会、司会の春夏秋冬　廻です。今回のお相手は――」

「お久しぶりですこんにちわ、篁緋鷺刀です」

「2話あとがき以来の登場となりましたね。さて今回のお話は前回あとがきでも言った通り、竜舌蘭防衛エピソードを書き上げました」

「原作である『マジ恋』のある意味で根幹になるエピソードですね」

「その通り！　と言いつつも最後はかなり詰め込みになってしまったのは反省」

「どうしてあんな風になったんですか？」

「とりあえずは1話で纏めようとしたんだけど、そうすると意外に長くなっちゃうと途中で気付いたんだ。その理由が会話文が多いということ」

「会話文ですか？」

「そう。原作は画面があるから会話テキストだけでもいいけど、これが文表示になると描写文章も書かなくちゃいけなくなるから結構膨大になっちゃったんだ」

「ああ、なるほど。納得です」

「だから削れる会話は削って、防衛翌日のシーンはエピローグ的な形にしたという訳」

「でもそれって……2話に分て書けばよかったんじゃないんですか？」

「それだけは言わないで！！」

第１０話　夏休み最強の敵、その名は（前書き）

第１０話投稿。

やっと２ケタの大台に乗りました。

第１０話　夏休み最強の敵、その名は

――２００２年　８月３１日　土曜日　ＡＭ９：００――

俺は部屋の窓を開ける。

まだ朝方と呼んでもいいこの時間帯なら、暑い日差しの中であっても心地の良い風が部屋の中に流れ込んでくる。
その風を巡回させるように扇風機を部屋の中に向けスイッチを押す。

俺はそのまま部屋の端に設置していたベッドに腰を下ろすと、枕元に置いてあった文庫本を手に取り栞を挿んでおいた場所から続きを読み始めた。

ヤマから借りた太宰治の代表作『人間失格』。
薦められて読んでいるのだが、これはどうみても小学４年生が読む本じゃないだろ。

だがある意味で納得する。
ヤマがニヒルに振る舞っているのは客観的に周りを観察する為なのだろう。やっぱり頭がいい。

「なあ兄弟」

「何だヤマ」

俺の下でベッドに背をもたれさせて座り、同じように本を読んでいたヤマが本に視線を向けたまま言葉を掛けてきたので、俺も本に視線を向けたまま答える。

ちなみにヤマが読んでいる本は芥川龍之介の『或阿呆の一生』。
これも小学４年生が読む本じゃないと思う。

「読んでみてどうだ？」

「人間とは愚かな生き物だな」

「そうだ、所詮人間は罪にまみれた動物なんだ」

「ところでヤマ」

「何だ兄弟」

「あれはあれで“人間失格”だよな？」

「間違いないな」

部屋の中央に置いたテーブルを囲うように座るメンバーを指差しながら、ふと思いついたように言った俺の言葉に、しみじみと頷いて答えるヤマ。

「２人とも現実逃避してないで少しは手伝ってよ！？」

そんな俺たちに容赦のないタクの悲鳴にも似たツッコミが入ったのだった。

夏休み最終日。

これを聞いて何を思い浮かべるかは人それぞれだが、今ここにいるメンバーはみんな同じ思いなのは間違いないだろう。

すなわち――

未だに終わっていない夏休みの宿題。

ちなみにさっきから本を読みながら会話していた俺とヤマ、そしてツッコミを入れてきたタクはもちろん宿題は既に終わらせている。今この場にいないヒロは凛奈さん（名前で呼べと脅された）に連れられて一昨日から旅行に行っているが、真面目なヒロが宿題を残している訳がない。

つまり宿題を終わらせていないメンバーは４人。

キャップ、カズ、ガク、そしてモモ。

カズとモモはまだいい。

カズの方はヤマが時々見てやっていらしいし、モモは俺が時々缶詰にして宿題をやらせていた。それでも４分の１近く残っているからいいとは言い切れない。

だがキャップとガクは最悪だった。

自由研究とポスター以外は全く手を付けていない状況なのだ。

どうしろというんだ。こんな悲惨な現状を？

早々にやる気をなくし、現実逃避に走った俺とヤマを誰も責める事は出来ないはずだ。

ＳＯＳ要請を受け取ったのは、昨日の夜１０時を回った頃だった。

もう寝ようかと思いベッドに潜り込んだ時に急にヤマから電話が掛ってきた。何かと思えば宿題をするために部屋を提供してほしいとの事だった。

詳しく聞いてみると、キャップが宿題を終わらせてなくタクからもガクの事で相談されたとの事。協議の結果、カズも終わらせているかの確認もするため、部屋が1番広い俺にお願いしようという事になったらしい。

特に用事もなかった俺は2つ返事で了承し、集合時間を決めて電話を切る。
その足でモモの部屋に行き、明日メンバーが宿題をするために集まる事、その時にモモの宿題も確認することを伝えた。

部屋に入る瞬間、モモはほんの少し顔を赤くし何となく慌てたような感じだったが、宿題の事を伝えると途端に表情を歪めた。
それでも特に文句を言わずに了承し、お休みの挨拶をしたモモはどことなく落ち込んだ雰囲気を纏っていた。

挨拶を返し部屋に戻った俺は、顔を赤くしていたモモを不思議に思いながら再びベットに潜り込んだのだった。

そして翌日の今日。

集まったメンバーの宿題を確認して発覚した事実に、俺たちは早くもやる気を失くしたのだった。

さすがに悲鳴を上げるタクを無視する事は出来ず、俺とヤマは読んでいた文庫本に栞を挿み、ベッドの上に置くとテーブルを囲うみん

なの中に割って入る。

「とりあえずモロはワン子を頼む。キャップとガクトに比べれば残りはだいぶ少ないから集中してやらせろ。分からないところを聞かれても答えは言うなよ」

「うん、分かった」

「お願いします……」

「兄弟は姉さんを頼む。お前なら5年生の問題でも大丈夫だろ。それから――」

「了解した。全部言わなくても分かってる」

「ジン助けてくれ～」

「それじゃあ頼む。さて――」

俺とタクにそれぞれ指示を出したヤマは腕を組んで最悪の2人の片割れを見下ろす。
その視線は物凄く冷めたものだった。

「キャップ……俺は夏休み入る前も、夏休み中にも何度も言ったよな？　宿題は定期的にやれと。ワン子を見てやっていた時もお前、来なかったから後で聞いた時もきちんとやるって言ってたよな？　信じていた俺が悪かったのかな？　どう思う？　しかも俺の信頼を裏切ったキャップはリーダーとしてどうだろうな？」

詰め寄りながら一気にまくし立てるヤマ。

その態度から本気で怒っているのに気付いたキャップは、冷や汗を流しながら顔を引きつらせる。

「わ、悪かったって」

「悪い？　悪いだけで済ませる気なのかキャップ？」

逃す気はさらさらないヤマは言い訳すらも聞く耳を持っていなかった。

その間にモモの方を見ていた俺は、集中してやる範囲を指定してやらせると、ヤマとキャップのやり取りを声をひそめ肩で笑っていたもう1人の最悪の片割れの後ろに回る。

俺が後ろにいる事に気付いていないそいつに、タクはカズの宿題を見ながら小さく溜息を吐いていた。

ゆっくりと腕を上げ握り拳を作った俺は、一瞬その動きを止め次に勢い良く振り下ろした。

ゴンッ　ガンッ

ぶつけたような音が2つ、連続して部屋に響いた。

俺がガクの後頭部を殴った音と、その勢いでガクがテーブルに額を打ち付けた音だ。

誰もテーブルが揺れた事に何も言わない。

余りの痛さに声が出せないのだろう。ガクは額をテーブルにくっつけたまま両手で後頭部を抑え痛みに悶えていた。

「キャップを笑うなんて大層いい身分だなガク？　お前自分がどんな状態なのかちゃんと分かっているのか？　俺もヤマもちゃんとタクの言いつけ通りに宿題をしろって念押ししたはずだよな？　なんでそんなことしたか分かってるか？　休み明けにお前が恥をかかないようにしたのに恩を仇で返すような仕打ちだな？」

自分ですら分かる冷めた口調で次々に問い掛ける。

答えなんぞ期待していない。これは確認させるための問い掛けだ。

「だからって……殴る事はねえだろーが」

「文句を言える立場にあると思っているのか？　お前は」

やっと声を上げたガクに弁明の余地を奪う。

そして俺はヤマの隣に並ぶと、同じように腕を組みげっそりとするキャップと、未だ痛みに悶えているガクを揃って見下ろした。

同時に笑顔を浮かべる。

どんな顔をしているのか自分でも分かる。そんな俺たちを見上げていたキャップとガクの顔から血の気が引いていく様は、声を上げて笑いたかった。

「「　さて、地獄へ行く覚悟は出来たか？　」」

一字一句変わらない全く同じ言葉を紡ぐ俺とヤマ。

それからお昼を挟んで約１０時間。俺の部屋からは何かが殴られる音と、悲鳴のような泣き声が時折廊下に響き渡ったのだった。

時刻は現在夜の7時。
ここは川神院の食堂。

今、俺たちは門下生に交じって夕飯を食べていた。

昼食は俺の部屋で素麺を食べたが、さすがに夕食まで部屋で食べるわけにはいかないという事で、みんなの家にも連絡して、鉄心さんの許可ももらい、門下生の人たちと一緒に食べる事なった。

「ホッホッホ、なんとも賑やかじゃのう」

ワイワイと会話しながら食べている俺たちを眺めて、鉄心さんは楽しそうに言う。

実はこれでも静かな方だと思う。なんせ元気よく話しているのはカズだけで、いつも騒がしいキャップとガクは、今日はそんな元気もないようでぐったりしながらご飯を食べていた。

自業自得なため誰も気に掛けていない。

そんな2人を無視して、夕飯食べ終えた俺たちが廊下を歩いていると、ルー師範代が声を掛けきた。

「神、頼まれていたもの、数は少なかったけど集めて中庭に置いておいたヨ」

「ありがとうございます、ルー師範代」

「ウン、準備はこっちでやっておいたけど、後片付けはちゃんとやるんだヨ」

「はい、分かっています」

俺たちの会話を不思議そうに見ているみんなに、ルー師範代を見送った後で声を掛ける。

「中庭に出よう。スリッパも用意してあるから今からでも大丈夫」

そう言ってみんなを率いて中庭に足を踏み入れる。

「何だ何だ？　何か始めるのか？」

「おい、俺様を忘れんなよ」

ちょうどその時遅れて廊下に出てきたキャップとガクも駆け寄って中庭に出てきた。

俺はぐるりと見渡し準備が出来ている事を確認すると、足元に置いてあった袋に手をかける。

「何を準備してもらってたんだ、ジン？」

手元を覗き込みながら問い掛けてくるモモに、袋を解きながら答える。

「今年の夏休み、まだみんなでやっていない事があるだろ？」

「やってない事？」

「そう。今日で夏休み終わっちゃうからな」

そう言って袋から取り出したものに、カズが目を輝かせて叫ぶ。

「花火だ！」

そう、花火だ。

夏休みでみんなといろいろな遊びをしたし、打ち上げ花火も見たが、手に持ってやる花火だけはまだやっていなかった。

だからちょうどメンバーが集まった今日、いい機会だと思いお昼の時にこっそりルー師範代に頼んでおいたのだ。

「花火は別にいいけど……どうせならタカがいる時が良かったね」

「そう言うだろうと思っていたよ。それについても――」

タクの残念そうな言葉に問題なしと答えかけた時、ちょうどタイミング良く最後の1人が姿を現した。

「みんなこんばんわ。ジン兄、呼ばれた通り来たよ」

「ヒロ！？」

廊下から顔を出し挨拶をしたヒロに、ヤマが驚いた声を上げる。

そして一斉に俺に視線が集中した。

実は夕飯の前に、もう帰ってきているだろうと思いヒロの家に連絡しておいたのだ。

予想通り帰宅していたヒロに花火をやることを伝えると、旅行から

帰ってきたばかりで疲れている筈なのに、嬉しそうに返事をしてきたので、7時過ぎに川神院に来るように言っておいたのだ。

「相も変わらず手筈がいいな兄弟」

その事をみんなに伝えた時の感心したヤマの言葉に俺は笑って答えた。

夜9時近くになり、少ないと言っていた割には結構な数があった花火も、みんなが持っているものが最後となった。

最後は定番の線香花火をやり、誰が最後まで残るかの勝負をする。

勝負の行方はまあ予想通りというか、自信満々に宣言していたガクがあっさりと脱落。その嫌がらせを受けたタクが2番目。モモにちょっかいを掛けられたヤマが3番目となり、そのちょっかいが仇となったモモが4番目。

普通にしていたヒロと俺がそれぞれ5番目6番目になり、持ち前の強運のキャップと日頃の行いがいいカズが最後まで残った。

結果としては僅差でカズの花火が最後まで残った。

悔しがるキャップと喜びはしゃぐカズを眺めながら後片付けをし、今年の夏休み最後の思い出は幕を閉じた。

俺の部屋に戻り用意されていたスイカを食べ終え、ヒロが持ってきた御土産を全員が受け取ると、誰ともなく静かになり数瞬だけ静寂が訪れた。

みんな夏休みが終わることを実感し始めたのだろう。

「よし、もう夜も遅いしそろそろ帰るか」

「うん、そうだね。いつまでもお邪魔してるのも迷惑になるしね」

名残惜しい余韻を断ち切るように言うヤマに、タクが同調するように答える。

みんなそれぞれ荷物を持つと、ゆっくりと立ち上がる。

「そんじゃあまた明日、集合場所でな」

「今日は楽しかったわ」

「花火の時だけの参加になっちゃったけど、呼んでくれてありがとう」

「お邪魔しました。また明日ね」

「さて、私も自分の部屋に戻るかな」

「おぅし！　俺様も帰って寝るぜ」

「今日は疲れたよな～俺も帰ってさっさと寝るか」

思い思いの挨拶をしながら部屋を出て行くみんな。

そんな仲間を笑顔で見送っていた俺だが、最後に出ていこうとした2人――ガクとキャップの腕を掴み帰るのを阻止する。

突然の俺の行動に意味が分からず振り返るみんな。

特に掴まれた2人はポカンと間抜けに口を開けている。

「キャップにガク……なにドサクサに紛れて帰ろうとしているのかな？」

笑顔で言う俺に、今日1日の事を思い出したのか顔を引きつらせるキャップとガク。

ヒロはわけが分からず首を捻っているが、他のみんなは同情に満ちた視線を2人に送っていた。

「まだ未処理の宿題が半分残っているだろ？」

「あ、あの、ジン兄？　もう夜なんですけど？」

震えるキャップの声。

「大丈夫だ。まだ明日まで時間はある」

「あと2・3時間じゃあ絶対に終わらない量だと思うんですけど？」

言い逃れようとするガク。

「大丈夫だ。１０時間で半分出来たんだ、後１０時間で残り半分も出来るだろ。なに、明日は日曜日だ。どれだけ寝ようが問題ない」

「「　か、完徹！？　」」

「大丈夫だ。お前たちの親には夕飯の確認の時に既に許可をもらっている。夕食中に着替えの用意も持ってきてもらったから安心しろ」

「「に、　逃げ場すらない！？　」　」

「さすが兄弟。相も変わらず見事な手筈でしかも退路まで断つ徹底ぶり。全くもって容赦がない」

静寂に包まれていた俺の部屋にヤマの呟きがやけに大きく響いた。

「忘れたのならもう1度言ってやろう。地獄へ行く覚悟は出来たか？」

「「う、ウソだろぉぉぉぉぉ！？　」　」

今日最大級の悲鳴が川神院に響き渡ったのだった。

第１０話　夏休み最強の敵、その名は（後書き）

あとがき～！

「第１０話終了。あとがき座談会、司会の春夏秋冬　廻です。今回のお相手は――」

「えっと、師岡卓也です。よろしくお願いします」

「みんなのツッコミヒーロー！　モロの登場だ！」

「ツッコミヒーローって何！？　カッコよく言ってるけど物凄くカッコ悪いよねそれ！？」

「さすがモロ、隙のないツッコミの嵐。さすがツッコミマスターだ」

「いやだからこんな事でマスターって呼ばれても嬉しくないから！　て言うかいい加減始めようよ！」

「はい、というわけで今回のお話は夏休み最終日の風景です」

「やっと始まったよ……でも、よく性格が出てるよね。意外だったのがモモ先輩だけど、まあ原作と違ってジン兄がいるからね」

「神の性格上、百代を放置ってのは絶対にありえないだろうね。さて、恒例の作者自爆タイムですが」

「このあとがきに今までそんなコーナーあった！？　て言うかたまに自爆してるだけで恒例になるほどやってないでしょ！」

「実は作者、作中で書いた『人間失格』も『或阿呆の一生』も読んだ事ありません。原作大和が当時、太宰と芥川にかぶれていたとあったので、代表作を適当に出しただけです」

「無視!?　しかもホントにぶっちゃけたよこの人!」

「五月蝿いよモロ。そんなにキング・オブ・ツッコミの称号が欲しいならいくらでもやるから少し大人しく黙っててよ」

「そんな称号いらないから!　て言うか片方が黙ったら座談会の意味なくなるじゃん!　そもそも僕突っ込んでばかりだけどこれホントに座談会!?」

「それでは次回投稿時にお会いしましょうね〜」

「最後の最後まで無視ってひどくない!?」

第１１話　今日生まれた君に、おめでとうの言葉を贈る（前書き）

第１１話投稿。

今日だけで３話も投稿してしまいました。

第１１話　今日生まれた君に、おめでとうの言葉を贈る

――２００２年　８月３１日　土曜日　ＰＭ１１：２０――

あと４０分で今日１日が終わる。

私は部屋でひとり窓の外を眺めながら今日１日の事を思い返していた。

楽しかったといえば確かに楽しかった。

夏休みの宿題の残りをやるという余り面白いものではなかったが、いつものメンバー（タカは旅行のためいなかったが）で集まってやれば、嫌な宿題もそれなりに楽しく出来たと思う。

まあ、キャップとガクトにしてみれば地獄だっただろう。

なんせあのジンと大和がコンビになって徹底的に監視していたのだ。この私ですら心の底から同情した。

だが同時に自業自得なため手助けする気はさらさらなかったがな。

その後もみんなで一緒に素麺を食べ、午後からは勉強をしているキャップたちをしり目にゲームに興じる。夕食もジジイの許可をもらい門下生と一緒になって食べた。

そしてジンが仕掛けたサプライズ的な花火。

旅行に行っていたタカも呼んで、風間ファミリー全員で花火。

手でやる花火だったから、打ち上げほど凄さはなかったが、それで

も楽しめた。
最後の線香花火まで楽しく勝負が出来たのは、きっとみんなこの仲間たちと一緒にいる事が本当に心地良いからだと断言できる。
去年以前では考えられないほど楽しい夏休みとなった。
だが、私の心は晴れなかった。

今日、８月３１日は私の誕生日だ。

もちろん、晩飯のときに川神院一同で誕生日を祝ってくれたし、仲間たちも今日が私の誕生日だった事に驚いてはいたが、ちゃんと『おめでとう』と言ってくれた。
しかも明日になってしまったが、私に誕生日プレゼントをくれると言っていたし、私もそれを楽しみしている。
確かに嬉しかったし楽しかった。
それでも晴れやかにならない私の心。

理由は分かっている。

ジンから誕生日を個人的に祝ってもらえなかったからだ。

別に去年まで個人的に祝ってもらえていた訳じゃない。
ジンも川神院のみんなと一緒になって祝ってくれていたし、去年まではそれでも十分に嬉しかったし満足していた。
今年もちゃんとみんなで祝ってくれたし、『おめでとう』とちゃん

と言ってくれた。

でも、今年からはどうしてもジン個人に、みんなとは別に『おめでとう』と言って欲しかった。

理由はある。

もう認めている。

自分の心に見て見ぬふりはもう限界だ。

私は――暁神が好きなんだ。

きっかけは間違いなく、あの初めての勝負。

私に勝ったという事実が、初めて私がジンを“家族”ではなく“ひとりの男”として意識する事に繋がったのだ。

そして私の願いで呼び捨てにする事と口調を変えた事。

その変化が、私の心に爆発的に暁神という存在を広げていった。

あの2週間、私は寝ても覚めてもジンの事ばかり考えていたかもしれない。

それでもその感情の正体が分からなかった私は、心の中に広がる感情に見て見ぬふりをしていた。

この感情に気付いたのは昨日の晩。

昨日の夜、話があるとジンが部屋に来たとき、私は期待していたの

だ。

ジンが個別に私の誕生日を祝ってくれるんじゃないかと――

だが結果はみんなが集まるから宿題を終わらせようという話だけ。

そのときの気持ちの落胆が、自分が思っていた以上のものだった。

なぜ自分がここまで落ち込んでいるんだと考えた時、私の中に潜んで見て見ぬふりをしていた感情が、一気に表に出てきた。

その瞬間、私は自分がジンが好きなのだと自覚したのだった。

今日が終わるまであと３０分。

毎年と変わらない私の誕生日がもうすぐ終わる、そう諦めかけていた時だった。

「モモ？　まだ起きてる？」

部屋の入り口である襖の向こうから、ジンの声が聞こえてきた。

びくりと震える体と早鐘を打つ鼓動。

顔全体に血の気が集まって顔が赤くなってきているのを自覚する。

落ち着け！　いいから落ち着け私！

いや！　落ち着けというのは無理だろ！？　私！

混乱する頭の中。

さっきまで好きだと考えていた奴からいきなり声を掛けられたのだ、落ち着けるわけがない。

「モモ？　寝ちゃったのか？」

しまった！　いつまでも返事しないから寝てると勘違いし始めた！

「起きてるぞ」

震わせる事も、張り上げる事も、上ずらせる事もしなかった自分の声を褒めてやりたい。

「遅くに悪いな」

襖を開けて1歩部屋に入って私を見るジン。

おかしなところはないはずだ。

鼓動の速さはどうにもできなかったが、赤くなった顔はなんとか元に戻した。

「どうした？　キャップたちの監視をしてるんじゃないのか？」

「今は休憩中。あの後からぶっ続けで2時間以上やってたからな」

なんとか普段通りの会話を心がけようと必死にいつも通りの声音で話す私に、ジンは気付いた風もなくいつもどおりの声音で答える。

「しかし、かなり容赦のない事をしたな」

「明日が休みだからといって後回しにしたら、絶対やらないだろうからなあの2人は」

呆れたように言うジンの言葉に、私の心は段々と落ち着いていく。

好きと自覚した。

心が落ち着かない事もある。

でもジンと話したり、ジンの隣にいるとなぜか逆に心が落ち着いていく時がある。

今がまさにその時だった。

「ところで、なんか私に用があったのか？」

「ああ、ちょっとだけ時間もらってもいい？」

「別にかまわないが……」

「じゃあ中庭に出ようか」

そう言って廊下を横切り中庭に出るジン。私もそれに続く。

これって、期待していいのか？

ジンの後姿を見ていると、先ほど振り払った期待がまた膨らんでくるのが分かる。

「それで？　どうしたんだこんな時間に」

少しだけドキドキしながら私から言葉を掛ける。

私の言葉に振り返り少し困ったように髪を掻いたジンは、区切りをつけるように短く息を吐き、ズボンのポケットから何かを取りだした。

そんなジンの行動に、私の鼓動はどんどん速くなっていく。

「今更、急に今年からこんな事すると変に思われるけど……」

そんなジンの言葉に、私の鼓動はどんどん速くなっていく。

「でも悪い事じゃないから、やろうと思ったんだ」

そう言うと私の方に向かって歩いてくる。
そして私の目の前で止まると、手にしていた小さな袋を差し出してきた。

その袋は小さいながらも、きちんとプレゼント用にラッピングされていた。

「遅くなっちゃったけど、誕生日おめでとう、モモ」

瞬間、私の頭はある意味で真っ白になった。

周りの色も、音も、何もかもがなくなり真っ白な世界に立っているような感じだった。

でもそれはほんの一瞬で、私は直ぐに気を取り直す。

まともな思考はまだ働いてくれない。
ほぼ反射的に手を出して差し出されたプレゼントを受けった。

この行動が出来た事に私は自分を褒めてやりたかった。

「あ、開けてもいいか？」

少し声が震えていたのは許してほしい。
平気そうに見せてるが、実は心も頭もいっぱいいっぱいなのだ。

頷いて答えるジンを見て、私は震えそうになっている手に力を入れて袋を開ける。
覗きこむと小さなものが入っていたから、袋を逆さにし右の掌の上にそれを落とした。

そこには四つ葉のクローバーの形をした小さなブローチがあった。

何も言わずじっとブローチを見る私に、ジンは慌てたように言葉を発する。

「いや、何にしようか悩んだんだけど、さすがにネックレスやブレスレットは高いし、髪を伸ばそうと言っていたけど、今髪留め贈るには早いし、だから小さいけどブローチにしたんだけど……」

段々と声が小さくなっていくジン。
私はまだブローチをじっと見ている。

私が黙ったままでいるのには理由がある。
赤くなった顔をなんとか元に戻そうしているのだ。ジンには悪いがもう少し待ってほしい。

「モ、モモ？」

数分経ち、さすがに黙ったままの私に不安になってきたのか、ジンが小さな声で問い掛けてくる。

「ジン」

やっと顔が元に戻った私は、ジンの問いかけに名前を呼ぶ事で答え、顔を上げる。

視界に入った少し困った顔のジンがおかしくて、私は思わず小さな笑いを漏らしてしまった。

私はその笑顔のままジンに言う。

「ありがとう、とてもうれしいぞ」

急に笑い出した私を不思議そうに見ていたが、その言葉を聞いたジンは安堵したように息と吐くと、私と一緒に笑い出したのだった。

そして、手の中のブローチを壊れ物のように優しく包むと、私はありったけの笑顔をジンに向ける。

「これ大切にするからな」

ジンの顔が赤くなっていくのが目に見えて分かる。

私をあれだけドキドキさせたんだ、少しぐらいは意趣返ししてもいいだろ？　ジン？

日付が変わるまであと5分。

２００２年８月３１日土曜日ＰＭ１１：５５分。

今日この年のこの日のこの時間は、私にとって一生忘れられない誕生日になった。

第１１話　今日生まれた君に、おめでとうの言葉を贈る（後書き）

あとがき～！

「第１１話終了。あとがき座談会、司会の春夏秋冬　廻です。今回のお相手は――」

「か、川神百代だ……」

「何やら恥ずかしがっております。今回のお話の語り手にして主役、川神百代ちゃんです」

「ちゃん付けで呼ぶな！」

「いや～乙女してますね？　百代ちゃん」

「う、うるさい！」

バキッ

「痛っ！　照れてもやっぱり力で訴えてくるのね君は……」

「もういいからとっとと進めろ！」

「はいはい。さていきなりですが今回のお話、実は予定になかったものでした」

「どうしてだ？」

「本来なら、クリスマスや正月などの時事ネタをやるつもりだったんだけど、前回のお話を書いている途中で、８月３１日が君の誕生日だという事に気が付いたんだ」

「なるほど、だから急に決まったという訳か」

「そう言う事。最初は閑話的に仕上げようと思ったけど、閑話にしては長いし本格的になっちゃったので、本編として追加したわけ」

「理由が分かったところで、私はお前に言いたい事がある」

「え、なに？」

「前回の話を書いているときに私の誕生日を思い出したと言ったな？　つまり、お前は私の誕生日を忘れていたということだな？」

「あ……」

「では作者。あっちでお仕置きタイムといこうか？」

「た、助けてぇぇぇぇ！！」

第１２話　終わる１年、きっと変わらない来年（前書き）

第１２話投稿。

第12話　終わる1年、きっと変わらない来年

――２００２年　１２月３１日　火曜日　ＰＭ１１：００――

「くらえ！　俺様のスーパーショット！」

吠えるように叫んだ岳人くんが、キャップに向かって手にしていた枕を勢いよく投げつける。

「当たるかよ！」

「急によけないでよキャップ！？　うわぁ！」

軽やかに飛んでくる枕をかわすキャップ。
その後ろにいた卓也くんは、急に目前に現れた枕を当然ながらよける事が出来ず、顔面で受け止めてしまった。

「よっしゃ！　モロ討ち取ったり～！　へぶっ！」

枕の直撃を受けた卓也くんに向かって高らかに宣言する岳人くんだったけど、モモ先輩の投げた枕が唸りを上げて左側頭部に当たり、もんどりうって倒れた。

「よそ見とはずいぶん余裕だな、ガクト？」

「やーい！　ガクト退場！　きゃうん！？」

顔をニヤつかせて言うモモ先輩の隣ではしゃいでいた一子ちゃんは、岳人くんの後ろで隠れていた大和くんが投げつけた枕を顔面で受け

た。

「姉さんが言ったろワン子、よそ見は禁物だ。ごはっ！？」

訓戒を垂れていた大和くんだったが、正面と右から同時に飛んできた2つの枕に視界を奪われる結果となっていた。

「大和討ち取ったり～！」

「そうだぞ弟、よそ見は禁物だ」

投げ抜いた恰好のまま大和くんに言い放つキャップとモモ先輩。

「だからって2人で狙うなよ……」

ある意味でもっともダメージを受けた大和くんは膝を吐いて蹲った。

大和くんが退場となり残りがキャップとモモ先輩だけとなった事を確認した僕は、横にいたジン兄に向かって視線を送る。
同じ考えだったのか、了解の意を伝えるように軽く頷いてきた。

手に持っていた枕を、静かに最小限の動きで振りかぶる。
こちらに気付いていないキャップとモモ先輩が互いに向き合った瞬間、僕とジン兄はそれぞれの標的に向かって枕を投げつけた。

「さあキャップ！　生き残りをかけた最後の勝負だ！　む？　あだ！」

「よっしゃあ！　受けて立つぜモモ先輩！　ふごっ！」

その枕は、ちょうど勝負の宣言をしあっていた2人の顔面に直撃した。
さすがにモモ先輩は迫りくる枕に直前で気付いたようだったが、予想外の速さによける暇はなかったみたいだった。

「モモ、油断大敵だぞ」

「キャップもきちんと周りを見ようね」

それぞれの標的だった相手に声を掛けるジン兄と僕。

「気配を消すとは卑怯だぞジン……」

「勝負事になると容赦ないなヒロ……」

悔しそうに最後の言葉を言うモモ先輩たちにジン兄は当然とばかりの口調で答える。

「何を言っている2人とも。お遊びでもこれはれっきとした勝負だ。ならもっとも効率のいい勝ち方をして何が悪い」

2人1組をくじで決め、乱戦形式の枕投げ勝負。

最初の方こそ普通にしていた僕たちだったけど、他のみんなが熱中し始めた頃から、気配を殺して静かに観戦していた。そして残りが2人になった時に勝負を仕掛けた。

その結果が今の現状。

「正々堂々でもよかったんだけど、キャップとモモ先輩に勝つには

たぶんこれしかないと思ったんだ」

「勝てば官軍、歴史は勝者によって作られる、って言うしな。なあ兄弟？」

「そこで俺に振るな兄弟……」

種明かしをする僕。少し含み笑いを浮かべながら言うジン兄。
同意を求められた大和くんは苦笑いを浮かべるしかなかったようだ。

今年１年の最後を締めくくる勝負は、僕、篁緋鷺刀と暁神のチームが勝利した。

今日は１２月３１日、大晦日。

僕たち風間ファミリーは川神院で今年最後の夜を迎えていた。

１２月２４日のクリスマスイブ。
僕の家で凛奈さんも入れてみんなで楽しく過ごしていた時、モモ先輩が『年越しを川神院でみんなで過ごそう』と提案してきた。
キャップと一子ちゃんと岳人くんは初めから乗り気で、大和くんと卓也くんは家族の事もあるし川神院にも迷惑になるんじゃあ、と最初は渋っていた。
ジン兄はモモ先輩が勝手に決めた事に呆れたような表情だったが、『許可取らなきゃなあ』と後の苦労を既に考えていた。

僕はその時すでに凛奈さんから許可が下りていた。凛奈さんは大晦日の日に既に約束が入っていたらしい。

結局、次の日に鉄心さんに許可を取ったジン兄が全員に連絡をしてくれたのだった。

「しっかし、今年もあっという間だったよな～」

枕投げのせいで踏み荒らされていた布団を直し、その上でうつ伏せに寝転がりながら岳人くんが感慨深く言う。

「そうだね。ホント去年より短く感じたよ」

その横で布団に座り込んでいた卓也くんが答える。

僕たちの布団の並びは横一列ではなく、頭を突き合わせるような円状に並べている。
みんなで楽しくお話が出来るようにと大和くんが提案したのだ。

「そうだな、私も今年はあっという間だったと感じるよ」

「楽しかったもんね～」

一子ちゃんの頭を膝に乗せて撫でるモモ先輩。撫でられて気持ちようさそうな一子ちゃん。

「今年もあと少しで終わりだ。そこでだ、今年1番のいい思い出と悪い思い出をみんなで発表し合おうぜ！」

座ったまま身を乗り出しながら言うキャップ。

「また唐突だなキャップ……しかも悪い思い出を発表する意味が分

からん」

「まあ、その方がキャップらしいけどね」

読んでいた本から顔を上げた大和くんと僕は、呆れたようにキャップの発言に苦笑する。

「おーい、飲み物とお菓子持ってきたぞ」

タイミング良く部屋に入ってきたジン兄は、手に持っていたトレイを円状に並べた布団の中央に出来た畳の上に置く。

みんなそれぞれコップにジュースを注ぎ、思い思いにお菓子をつまむ。

その間にジン兄はさっきのキャップの発言を大和くんから聞いていた。

「ふうん、で？　誰から発表するんだ？」

「そりゃあもちろん、年下からだろ」

そう言って僕を指す岳人くん。

やたらと僕を年下扱いしてくる岳人くんの発言だったけど、みんな慣れたものだし僕も気にしていない。

「そうだな、じゃあヒロから順に時計回りで発表だ」

岳人くんの言葉に乗っかりキャップが言う。

ちなみに発表順は僕を始まりとすると、僕→大和くん→ジン兄→モモ先輩→一子ちゃん→卓也くん→岳人くん→キャップという順番になった。

一番最初の僕に視線が集まる。

「そうだね……いい思い出はやっぱりジン兄とモモ先輩に会った事かな？　僕にとって本当に目指し甲斐のある目標に出会えたからね」

僕の言葉に意外そうな顔をしたジン兄。モモ先輩は面白そうな顔をしていた。

なぜだろう、モモ先輩の顔を見ると嫌な予感しかしない。

「悪い思い出はアレだね。僕の誕生日のモモ先輩と岳人くんからのプレゼント。アレは僕の尊厳を踏み躙るものだったね」

咄嗟に視線をそらした2人。

うん。そらしても無理だよ。まだあの時の怒りは忘れてないからね。

「えっと……次は俺だな」

気まずくなった雰囲気を取り直すように大和くんが続く。

「いい思い出ねぇ……これといって浮かばないし、やっぱ姉さんと兄弟に会えた事かな。悪い方は直ぐにでも思い浮かぶんだが……」

そう言った大和くんの視線が、一瞬ちらりとモモ先輩を捉えた。

それに気付いたのは僕とジン兄と向けられたモモ先輩。

火に油を注いだのはジン兄だった。

「モモ、ヤマはお前の舎弟になった事が悪い思い出だってさ」

「ほう、面白い事を言うな？　弟よ」

2人の言葉にぎょっとする大和くん。

「兄弟、お前！？　いや違う！　違うんだ姉さん！　舎弟になった事は後悔していない！　後悔していないがいい思い出かと聞かれれば首を傾げざるをえないんだ！　だから悪い思い出と言われて咄嗟に思い出してしまったんだ！」

「大和……墓穴掘り過ぎだよ」

卓也くんの力のないツッコミが入った。

「では姉のお仕置きの時間だ弟よ」

「嘘でしょ！？」

「はいモモ、そこまで」

指を鳴らし制裁を加えようとしていたモモ先輩を止めるジン兄。

止められた事に特に気分を悪くしていないモモ先輩だが、大和くんは恨みがましい視線をジン兄に向けていた。

それは仕方ないと思う。止めたけど煽ったのもジン兄だ。

そんな大和くんの視線に気付かない振りをしてジン兄は続いて発表する。

「次は俺か……俺もいい思い出はみんなと出会った事かな。前から

有名だったからな風間ファミリーは。だから加えてもらえて良かったと思ってる。まあ、悪い思い出もみんなの事なんだけどな」

苦笑いを浮かべるジン兄に、みんなは首を傾げる。
僕と同じでなんの事なのか思い当たる節がないのだろう。

「同級生なのになんで『兄』って呼ばれるんだろうな、俺は？　なあキャップ、これはいったい誰の陰謀なんだ？」

「あ～それはだな……」

疲れたように呟いた言葉に、みんなは苦笑いしか返せなかった。
特に名指しされたキャップは言葉を濁すだけで言い返せなかった。

そんなジン兄を慰めるようにモモ先輩は背中を撫でた。

「落ち込むなジン。次は私だが……悪い思い出は特にない。いい思い出はたくさんあり過ぎてどれか決めるのは難しいな。まあ、お前たちに会えた事は確かにいい思い出だな。……1番の思い出は言えないけどな……」

モモ先輩は笑顔で言う。
最後に小さい声で呟いていたが誰も聞きとることは出来なかった。

「次アタシ！　えっと、いい思い出はヒロと一緒！　2人に出会えた事！　悪い思い出はあんまりない！」

「ワン子の場合、覚えてないだけじゃね？」

「うるさいわよ！　ガクト！」

元気良く手を上げて発表した一子ちゃんに、岳人くんが横やりを入れるいつものやり取りが出来上がってしまった。
そしていつも通り落ち着かせる卓也くん。

「はいはい、ワン子もガクトも落ち着いて。これじゃあ僕が発表できないじゃない」

お互い牽制し合いながらも落ち着いた2人を見て、卓也くんは溜息混じりになりながらも言葉を紡ぐ。

「えっと、いい思い出はやっぱモモ先輩とジン兄と出会えた事。あの出来事以降はホントに楽しい事ばっかだったよね」

楽しい事を思い出していたのか、ちょっと目を細め笑顔を浮かべていた卓也くんだったけど、次の瞬間その顔は曇り急激に落ち込んだ雰囲気になった。

「悪い思い出はクリスマスイブ……さすがにアレは最悪だったよ。タカと同じで男としての尊厳が踏み躙られたよ……」

少し虚ろな笑みを浮かべた卓也くんに、あの時の加害者だったキャップ、モモ先輩、大和くん、岳人くんの4人は視線をそらす。

僕には卓也くんの気持ちが痛いほど分かった。

でもあの時って、どうなるか分かっていて止めなかったジン兄にも責任はあったと思うんだけどな……

「ま、まあそう落ち込むなモロ。過ぎた事じゃねえか」

「と言うか率先してモモ先輩の言葉に賛成したのガクトだったよね！？」

「さあ？　俺様もう覚えてないなあ」

慰めるつもりが、逆に問い詰められた岳人くんはあからさまにとぼけて見せた。

「さあ、次は俺様の番だな～」

卓也くんに胡乱げに睨まれながらわざとらしく声を上げる岳人くん。

「やっぱいい思い出はあれだ、みんなと同じだな。で、悪い思い出は……」

「いきなり言い淀んでどうした？　ガクト」

「嫌な事を思い出しちまったんだよキャップ。それから俺様は断言するぜ。俺様とキャップの悪い思い出はおそらく同じものだ」

岳人くんの言葉を着た途端、キャップの顔が歪んだ。

たぶんあの表情は岳人くんの言う通り、同じ悪い思い出を思い出したんだろう。

「アレか！？　あの悪夢の1日か！？」

「おう！　そうだぜキャップ！　今年の俺たちの1番悪い思い出といったらアレしかねーだろ！」

「地獄へ行く覚悟は出来たか？」

「「　ひいいいい！！　」　」

2人だけで分かりあった会話をしていたキャップと岳人くんは、唐突に呟いたジン兄の言葉に、反射的なのだろう、全く同じ悲鳴を上げていた。

「ああ！　確かにあの1日はお前たちにとっては悪夢だろうな」

何の事か思い出したモモ先輩の言葉に、僕以外の全員が頷いた。

後日、大和くんに教えられた僕は2人が怯えていた理由に納得したのだった。

「じゃあ最後にキャップだな」

大和くんの声に我に返るキャップ。

「いい思い出はやっぱ俺たち風間ファミリーに新しい仲間が入った事だな！　悪い思い出はもう思い出したくない！」

そう締めくくったキャップの言葉にみんなが笑い声を上げた。

「本当にいろいろあったけど、風間ファミリーとしての最高の思い出はやっぱアレだよな」

ファミリーとしての1番の思い出。

それはきっとあの夏の台風の日。

みんなで力を合わせて竜舌蘭を守った事。

正確には今ここには1人足りないけど、きっとこの思い出はみんなの心に残り続けるはずだ。

ゴーン　ゴーン

みんなであの日の事を思い返していると、除夜の鐘が聞こえてきた。

「もうすぐ年が明けるな」

部屋の時計を確認しながらジン兄が感慨深く呟いた。

と、キャップが勢いよく立ちあがる。

「よっしゃあ！　俺はこれから鐘を突きに行くぜ！」

「アタシも行く！」

「ここはやっぱ俺様の出番だろ」

「なんら私は拳で突いてやろう」

「ホントに出来そうだから怖いよね」

「鉄心さんに怒られるだけだぞモモ」

「怒られるのは俺たちだからやめてくれ姉さん」

キャップの言葉に答えるように一子ちゃんと岳人くんとモモ先輩は

元気に、卓也くんとジン兄と大和くんは呆れたように言いながら立ち上がる。

「なにやってんだヒロ？　行くぞ！」

ひとり遅れていた僕に振り返り声を掛けるキャップ。
部屋を出た廊下で遅れた僕を待つようにみんな並んでいた。

「うん！」

きっと変わらない。

来年も再来年も。

きっとずっと先も形は変わっても、僕たちの仲間の絆はきっと変わらない。

みんなのもとに駆け寄りながら、僕は確かにそう感じたのだった。

第１２話　終わる1年、きっと変わらない来年（後書き）

あとがき～！

「第１２話終了。あとがき座談会、司会の春夏秋冬　廻です。今回のお相手は――」

「篁緋鷺刀です」

「さて今回のお話についてですが――」

「前回あとがきのとき、『本来はクリスマスや正月などの時事ネタをやるつもりだ』って言ってませんでしたか？」

「自虐的なツッコミの前に突っ込まれた……はい、確かに言いました。そこで言い訳させて下さい」

「言い訳をする時点でダメな気もしますけど……どうぞ」

「ホントはクリスマスネタをやるつもりでした。だけど書き始めた瞬間、頭の中でひらめいたのはなぜか枕投げの風景。これは面白いと思いその勢いのまま書いてしまったのです」

「計画性が全くないですね」

「全くもって言い返せない」

「それで次回のお話はどうするんですか？」

「京の話かな？　そろそろ加入させようと思う」

「初期メンバー集合ですか。やっとですね」

「そうやっと。たぶん1話では書き切れないと思います」

「原作通りの進行ですか？」

「ほぼね。とりあえず大和が主役で神も動きますのでよろしく待っていて下さい」

「何か最後の挨拶おかしくないですか？」

第１３話　孤独な心、少女とイジメ（前書き）

第１３話投稿

残酷描写にチェック入れました。

８／３１　サブタイトル変更

第13話　孤独な心、少女とイジメ

――2003年　4月22日　火曜日　PM5：30――

ふらっと1人で原っぱに足を運んだ。

そのままなんとなしに竜舌蘭が咲いた場所まで歩いて行く。

「あ」

「……あ」

そこに、彼女はいた。

夕方、まさに陽が落ちる刹那の時間。誰もいないはずのデッドスペース。

俺たちは2人で偶然に出会った。

お互いに何も話すことなく無言。

俺は何を話せばいいのか分からなかったし、彼女は積極的に話しかける方じゃない。

でも、明らかに彼女はこちらを気にしていた。

「……なんか、用？」

その雰囲気に耐えられなくなった俺は、自分から声を掛ける。

誰もいない原っぱはやけに広く感じられた。

それでも答えず何もしゃべらない彼女。
そんな彼女に俺は以前から気になっていたい事を聞いた。

「……小説……芥川とか読んでたけど、好きなんだ？」

以前、教室で何となく視界に入った彼女が読んでいた本は、俺が読んでいた本と同じだった。
それから少し注意して読んでいる本を見てみると、結構同じ本を読んでいる事に気付いた。

話が合いそうだ。

そう思った瞬間、俺の中で彼女がイジメられている事に、何か思うところが出来たのだった。

「……うん……直江くんも読んでたよね」

「ああ俺も好きだ。日本のがいい」

「……私も」

会話が続いた。
読んでいる本の趣味で、話が合ったのだ。

気が付けば少しの間、話し込んでいた。
相変わらず彼女の暗い感じは払拭出来なかったが、深い知識と知性、落ち着いた雰囲気は嫌いではなかった。

「ここに咲いた花の前で写真撮影したよな」

竜舌蘭の時の事だ。

「……うん」

彼女も覚えていたらしく小さく頷く。

「あの時なんでここら辺をウロついていたの？」

「……楽しそうだなって。だから……話せればなって。直江くん……読んでる本の趣味同じだって分かってて」

恐らく図書室で借りた本の貸し出し履歴のカードを見ていたのだろう。

完全な孤独というのはどれだけ辛い事なんだろうか。

俺にはそれが分からないし、彼女はそれに慣れたものだと勝手に思い込んでいた。

彼女は、仲間に入りたいのだろうか？

たぶんそうなのだろう。

でも今の俺にはそれに答える義務も、答えてやる権利もない。

「もう完全に陽が暮れた……帰る」

「……うん」

そして俺はこの後、最低な事を言った。

「じゃあ帰るけど……椎名、学校では話しかけてこないでくれよ」

それでも彼女は頷き、ここで、誰もいない時なら話してもいいというふざけた条件なのに、彼女はとても嬉しそうに頷いたのだった。

§　§　§

椎名京。

彼女の名前。

いつからイジメられていたのかは覚えていない。
俺が椎名京という人物を認識した時には、既に同学年ほぼ全ての人間にイジメられている奴と認識されていた。

じゃべらないし暗い。何を考えているか分からないから気持ち悪い。

小学生とは残酷で、一度イジメの標的が決まると、自分がされたくないためその標的を生け贄に自分の気持ちを正当化する。
発端は椎名京に責任はなく、親の仕出かした事らしい。

初めは直接的な暴力が振るわれてようとしていたが、椎名京は実家で武道を習っているため強かった。だからイジメは間接的なネチネチしたものに変わっていく。
しかもそれに椎名京が反応しないからさらにエスカレートしていった。

そんな椎名京と今年の春、5年生になって初めて同じクラスになった。

この時、俺と同じクラスになったのはガクトだけ。
キャップとモロと兄弟が3人、ワン子も1人だけ違うクラスになった。

竜舌蘭を守った時から少し時間が経過していたため、俺とガクトの椎名京への認識は普通のイジメられっ子に戻っていた。

同じクラスになったと分かった時に嫌悪する言葉を言った俺とガクトに、兄弟は珍しく怒りをもって俺たちを窘めた。

だがそんな兄弟も椎名京については何も言わなかった。
1度その事を問いただしてみたのだが兄弟は言う。

『助けを求めているのなら助けるべきだろう。でも彼女は何も言わない。耐える事が偉いと思っているのか、それとも本当に言い出せないのか。でも何より俺たちは彼女をよく知らない。それなのに自分自身の自己満足で彼女を助けても、それは彼女のためじゃない。それはただの自分の利己主義（エゴイズム）だよヤマ。助けたいと思うならまず彼女を知ることだ。そして覚悟をすることだよ』

クラスの椎名京への待遇は既に決められていた。

基本的に女子からは完全にシカト。男子が物を隠したり机に落書きしたりする間接的なイジメ。

そして何より椎名京自身を病原菌に見立て、それを汚いモノと扱う精神的な嫌がらせ。

クラスメイトになった事でイジメの酷さを知った。
そして俺に出来たのは、せめて参加しない事だった。

§　§　§

――２００３年　４月３０日　水曜日　ＰＭ６：００――

今日も仲間と原っぱで遊んだ。
ふと気になり、竜舌蘭が咲いていた場所に視線を向ける。
そこに彼女はいた。
何をするでもなくそこにじっと座っていた。
この間の約束通り、みんながいる時に彼女は話しかけてはこなかった。
少しだけじっと見ていると、彼女と視線が合った。
それでも彼女は挨拶をしたり手を振ったりしてこない。
空気を呼んでいるんだ。
約束を守っているのだ。『ここで、誰もいない時なら話していい』

なんて俺が一方的に保身のために言い付けた約束を。

居た堪れなくなって視線をそらした。

自分の中に生まれた『何か』が少しだけ蠢いたような気がした。

結局その日は帰るまであの場所を振り返る事が出来なかった。

俺がどうしていたのかに気付いていたのか、別れ際に慰めるように頭を軽く叩いた兄弟の手に、幾分か救われたような気がした。

§　§　§

1度だけ椎名京のイジメの現状をワン子に話した事があった。

同じ同学年の女子としてどう思うのか聞いてみたかったのだ。

『……どう思うよワン子』

『よくないわよーなんでそこまで意地悪するの?』

ワン子は率直な素直な感想を述べた。

素直な性格のワン子にしてみればやっぱり許せるものじゃないらしい。

『他のクラスだとそこまでひどいって分からないね。アタシも大和

に聞くまでどんなふうにされていたのか想像もつかなかったもん』

やっぱり同じクラスになる事で見えてくる残酷な部分はあるらしい。
でも実際目撃していないワン子の言葉は、どこか信じがたいといった感じだった。

『うーん……アタシ、声かけてみようかな』

『やめとけ。１００％お前まで無視される』

間髪入れずにガクトが止めさせる。
それがワン子のためを思っての言葉だとこの場にいる俺と兄弟も、そしてワン子もちゃんと分かっている。

『でも、アタシには大和たちがいるしさ』

『俺様たちとは別に、女子との友達関係も大事だろ？』

『んー』

それでも食い下がろうとするワン子にガクトは諭すように言う。
それを見かねたのか、さっきから黙ったままだった兄弟がワン子の頭を撫でながら優しく話しかけた。

『カズ。ここはガクの言葉に頷いておけ。見過ごせないと思うけど彼女に対するイジメはもうクラスだけじゃなく学年全体に広がってる。ヤマとガクのどちらかが声を掛けたなら残りの１人がフォローする事が出来るけど――』

そこでいったん言葉を切った兄弟は俺とガクトの方に視線を向ける。

ガクトは不機嫌そうにそっぽを向いてたが、俺はなぜか気まずくなりうつむき視線をそらしてしまった。
そんな俺たちの態度に柔らかく息を吐いた後、再びワン子に話しかける。

『でも他のクラスのカズはダメだ。さっき言ったように学年全体に広まっているから、ガクが言ったように他の女子友達にカズが無視されるのは間違いない。キャップもタクも俺も他のクラスだからカズをフォローできる仲間が1人もいない。そんな状況になると今度はカズがそのクラスでのイジメの標的になる』

兄弟の言葉にその状況を想像したのか、ワン子は泣きそうな目をしていた。
ワン子を慰めるように、より一層優しく撫でる兄弟。

結局、具体的な対策は出せずにいた。

§　§　§

――２００３年　５月１３日　火曜日　ＰＭ６：００――

俺と彼女の関係は少し進んでいた。

時々原っぱの夕暮れ過ぎに会うようになる。
俺は自分の都合で時々だったが、この間の事を考えると分かるように彼女は毎日来ているようだった。

彼女と話すのを誰かに見られる訳にもいかないし、彼女も俺との約束を破るような行動は取ってこない。

俺としては仲間を巻き込むわけにはいかない。

だから、話す時は原っぱの奥の方で会った。

「それで、この話がね……」

「渋いの選ぶね。でも俺もそれ好きなんだよ」

話自体は本を中心に結構弾んだ。

「あの話でも作者の意図が分からない」

「あれはたぶん、メタファーだと思うの」

俺が驚くほど彼女は頭が良かった。

そんな頭のいい彼女は、やっぱり全てを察していたのだろう。

話せて嬉しいから何も言わなかった。

俺に話しかける時もやっぱり仲間がいなくなるまで待っていた。

本当に空気が読める奴だった。

だからこそ、俺は彼女のイジメに対して無力な自分がなぜかやるせなかった。

学校では彼女と関わらず、イジメに対しても肯定的でも否定的でも

なく、それでも巻き込まれた時は出来るだけ彼女の見ていないところで。

気まずくて教室に残れなかった時、やっぱり慰めるように頭を軽く叩いた兄弟の手に、幾分か救われたような気がした。

§　§　§

ある日、クラスで川の魚を飼育して命の観察をする事になった。

誰もやろうとしない飼育係に立候補したのは椎名京だった。

以前に飼っていた猫がどこかに行ってしまったと言っていた。

猫の代わりにはならないだろうが、せめてもの気晴らしのつもりだったのだろう。

博識な椎名京は、完璧な魚の飼育を始めた。

ヒーターでの管理が必要と判断すると担任教師に進言し、水槽内の状態を保つために無理のない手入れを欠かさず行っていた。

でもひょっとしたら、イジメっ子たちはその魚に何かをするかもしれない。

そう考えていた椎名京は常に警戒をしていた。

だが拍子抜けしたかのように魚には全く関心を示さなかった。
イジメっ子たちにとって椎名京をイジメるのにそれは関係がないようだった。

一生懸命な椎名京の飼育のおかげで、水槽の中の魚は順調に育ち増えていった。

魚に餌を上げる椎名京。

その時の笑みを見た俺は、素直に優しい横顔だなと思った。

だからこそ、その後に起きた事件が俺の中に生れ始めていた『何か』を一瞬にして芽吹かせたのだった。

第１３話　孤独な心、少女とイジメ（後書き）

あとがき～！

「第１３話終了。あとがき座談会、司会の春夏秋冬　廻です。今回のお相手は――」

「直江大和です」

「３話あとがき以来の再登場。原作主人公くんです。さて今回のお話ですが、前回のあとがきで予告した通り、京のファミリー加入話です」

「全体的にどシリアスだな」

「ギャグ入れる隙なんてなかったよ、ホントに」

「しかしなんだ、兄弟のセリフ。あれはどう見ても小学５年生のセリフじゃないだろ」

「あれはね、なんていうかイジメを解決するために必要な心構えと覚悟を作者なりに考えた結果のセリフだね」

「原作にないキャラだから作者の思いを投影したって事？」

「まあそう言う事。でもあんまり深く考えないでね。こう思っているって断言してるわけじゃないから。あくまでもこういう考えがあるんだよって事で」

「逃げ道必死に探してないか？」

「少しわね……さて急に話は変わりますが、今回のお話の中で京の呼び名に関する表記はある一定のパターンがあります」

「パターン？　そんなのがあるのか？」

「まあ簡単だからすぐ分かると思うけどね」

「ふぅん、それでこの事件はあと何話続くんだ？　前回あとがきで1話では終わらないって言ってたけど」

「3話構成。だからあと2話だね」

第１４話　孤独な心、大和の覚悟（前書き）

第１４話投稿。

子供ってある意味残酷だよね。

８／３１　サブタイトル変更

第１４話　孤独な心、大和の覚悟

――２００３年　６月５日　木曜日　ＡＭ８：１５――

その騒動は俺が登校した時にはすでに始まっていた。

「うわ！　なんだこいつは!?　クッセー！」

誰かが大声で叫び、それに便乗するかのように騒がしくなる教室。
何か嫌な予感がした俺は急ぎ足で教室に入った。

そこには水槽の前で呆然とする彼女と、騒ぎながらも面白そうな顔で彼女を取り巻く数人のクラスメイトたち。

その後ろからどういう状況なのかを確認するために覗きこむ。

水槽が白く濁っており、周囲には異臭が放たれていた。
原因は直ぐに分かった。彼女が飼育のために取り付けたヒーターが壊れて水槽内の水を熱湯にしてしまったのだ。

「そ……そんな……」

周りを気に掛ける余裕もないのだろう。彼女は呆然と水槽を見詰めたままだ。

水槽の中の川の生き物たちは全滅し、小さな生態系も完全に崩壊していた。

彼女を囲う児童達の中から『椎名菌』の単語を含めた言葉が飛び交

う。

最初に言いだしたのは男子の1人だが、なぜか男子よりも女子の声が多い事に気になった。

クラスの女子がやったのだろうか？

今まで直接的にしろ間接的にしろ彼女に嫌がらせをするのはもっぱら男子だった。女子は彼女の存在をないものと考え、イジメるにしろ遠巻きに陰口をたたくのが殆どだった。

「そんな……ヒーターが壊れるなんて……」

子供が1人で持つには少し大きい水槽を、彼女はフラフラしながらも運び教室を出ていった。

基本学校では関わらないと決めていた俺は、去っていく彼女の後姿を遠巻きに見る事だけしかできなかった。

でも疑問に思う事はやめられない。

ヒーターが壊れるなんておかしいと思った。

彼女が魚の世話を始めてからまだ1ヶ月経つか経たないかぐらいしか時間が過ぎていない。

いくらなんでもヒーターが壊れるのは不自然だ。

博識な彼女がヒーターの操作を間違うはずがない。

なにより、彼女が帰りに教室を出る時に水槽の温度をチェックしてるのをたまに見かけていた。彼女の性格から恐らく毎日やっているであろうと簡単に推測できた。

そんな彼女が昨日に限って毎日やっていた事を疎かにするとは思え

ない。

原因は別にある。そう思った時だった。

「ふふっ、ショック受けてたね、やっぱり。でもナイスアイデアだったわ。情を移させて心の拠り所にしてからコロスの」

「つかさ、クラスのペット死んだだけでショックとかキモイ。死んでほしい」

「ね？　代わりを捕まえてくりゃいいじゃん。リセットボタン押したノリでさ」

教室の隅で遠巻きに見ていた3人の女子の会話が聞こえてきた。

直感で分かった。この3人がやったんだ。

そういえば昨日の帰り道、兄弟が言っていた。

『ヤマのクラスって魚の世話してるだろ？　世話係の女子、熱心なんだな。1人残って水槽をあれこれ触ってたぞ』

俺はこの兄弟の言葉を聞いてその女子が彼女だと思っていた。

でもなんであの時に気が付かなかったのだろう。それが彼女なら、兄弟はわざわざ『世話係の女子』とは言わずに『あの子』と俺でも分かるような言葉で言うはずだ。

またしても俺の心の中の『何が』が大きく蠢いた。

俺はしばらくして彼女を探しに教室を出た。

「お、大和じゃん？　どうした？」

「ワリィ、急いでるんだ」

教室を出て直ぐに声を掛けてきたキャップに断りの言葉を告げ廊下を早足で歩く。

その俺の後姿を兄弟が見ているのに俺は気付かなかった。

彼女はグラウンドの片隅にいた。

「ごめんね……ごめん……」

グランドの土を両手で一生懸命に掘り、墓を作っていた。

「し、椎名……」

ああ、まただ。また蠢く。

心の中にある『何か』が、彼女のこんな姿を見る度にざわめいている。

それが何なのか分からない俺は、彼女に言葉を掛けようとしても声が出ない。

「お、直江くんもいた！　一緒にやる？」

そんな俺に声が掛けられた。

振り向いて見るとそこに１０人のクラスの男子がいた。

「何を？」

「椎名泣かせゲーム。あいつ泣かした奴が勝ち」

「俺は……」

「つか、俺たちの中で賭け成立してるし、悪いけど直江くんはジャッジでよろしく」

答えを詰まらせた俺を無視して話は決まってしまった。

面白そうな笑みを浮かべたまま男子たちはしゃがみ込んだままの彼女に近付いた。

「あーあ、椎名お前のせいで魚死んだぞ」

「違う！！　誰かがヒーターを！！」

自分のせいじゃないと分かっている彼女は必死に言い返す。

「それでもさ、お前が飼育しているからだろ？　イジメられてるお前が飼育しなかったら、その魚は元気だったんだぜぇ？」

「つまり椎名菌っていうのは、本当にあるんだよ」

「ねぇ、それでお前何で生きてるの？　死ねよ。関わってる奴不幸になるよ？　椎名菌で。よく考えて、自分に存在意義がない事を」

次々に捲し立てるように言い寄られ、言葉が出なくなる彼女。

そんな彼女を取り囲んでいた男子たちは手拍子を叩きだした。

――死ーね　死ーね　死ーね　死ーね　死ーね　死ーね――

その光景に以前『椎名京を自殺させる会』なんてものがあったのを思い出した。

心の中がざわめく。

どんどん大きくなっていく『何か』。

「うぅぅ……あぁぁっ……あ、あぁあ、ああ……っ！」

そして泣いた。

彼女が泣いた。

今までどんなに酷いイジメをされていても、泣き言ひとつ言わなかった彼女が、初めてその弱さを人の前でさらした。

その瞬間、自分の中の『何か』の正体に気付いた。

それは『怒り』だ。

イジメていた奴らに対してじゃない。

イジメを我慢していた彼女に対してじゃない。

イジメの事実を知りながら、耐えてる彼女が本当は辛い事を知りながら、それでも何もしなかった自分に対しての『怒り』だった。

男子の1人が何か言うが無視して言葉を吐く。

「俺が泣かせた……気付いていたのに……見て見ないふりして、ニヒル気取って、我が身可愛さにっ！　こんな状況になるまで俺は！！」

そんな中で父の言葉を思い出す。

『もし助けるなら覚悟が必要だ。自分も被害を受けるという覚悟がね。中途半端が1番いけないんだよ』

覚悟は出来た。

俺は思いっきり地面を蹴り彼女――椎名京の前に立ち、そしてクラスメイトたちに振り返る。

「みんなもう止めよう。本当に自殺してしまう」

俺の言葉に反発が上がる。
それでも根気よくイジメを止めるように説得する。
出口のない迷路を彷徨うような言葉の応酬が続く。
捲し立てはやし立てるような口調の男子たちに、俺は冷静に落ち着きながら言葉を返し続ける。

埒が明かない。

男子にとって椎名京をイジメて周りを楽しませる事は、既にクラスでは1つのステータスになっているのだ。さらにせっかく手元にあ

る苦痛の伴わない娯楽をなくしたくないのだ。

集団心理の1つ。

誰か1人を犠牲にして自分たちが優位に立ちたいんだ。

「こいつも椎名菌にやられたんだ！」

「なに？」

言い合いの中で1人の男子が声を荒げた。

「帰ってクラスのみんなに言いふらすぞ！　直江も椎名菌にやられたって！　きっと直江のつるんでる仲間たちも椎名菌に――」

問答無用で殴りつけた。

その言葉だけは駄目だった。

俺に対してだけ罵るなら別に我慢すれいい。

だけど、仲間を侮辱するような言葉だけ許せなかった。

「お前……今何て言った？」

腕を捻り上げる。いつも姉さんにやられているから仕掛けるのも慣れたものだ。

「仲間を巻き込もうとしたのかオイ。ああ！？」

悲鳴を上げるのを無視してさらに力を込める俺を、誰かが後ろから

叩く。
仕返しに頭突きをかます。怒りをあらわにした瞬間、さらに蹴り飛ばす。

連鎖反応的に怒りを露わにした男子たちが、俺を囲うように広り始めるのを確認すると、俺はその場を離れるように駆け出す。

弱い奴は囲まれるなと姉さんと兄弟に言われている。
そして先頭で追っかけてきた奴を振り向きざまに拳を入れる。

それでも限界がある。
人数が多い男子たちは俺が1人を殴った隙に俺を取り囲んだ。

俺1人に対して相手は10人。

ボコられるの決定かな、と思った瞬間。

「様子が気になって探してみれば喧嘩中とはな！」

囲んでいた男子の1人を蹴飛ばし、その男は風のように登場した。

「助太刀参上！　ずるいぞ大和、俺も混ぜろ！」

「そう言うことだ。仲間のピンチは俺たち全員のピンチだからな」

キャップの言葉に同意したそいつは、何の冗談か囲っていた男子たちの頭上を飛び越えて俺の隣に降り立った。

「さてここは理由を聞いておくべきなのかな？」

「理由はいらん！　俺たちは大和の側につくだけだぜ！」

キャップと兄弟が来たのならこちらが負ける事はない。
あっという間に囲んでいた１０人を叩きのめした。

「イェーイ！　２０の経験値を得たってところか」

キャップがバク転して勝ちポーズを取っていた。
そんなキャップを呆れたように見ていた兄弟は、俺の頭を軽く叩くと、今度は背中を押して俺を椎名京の前に押し出した。

「椎名さん……涙拭いて」

「……直江くん……」

少し躊躇ったが慰めるように抱き締める。
なにやらキャップの驚いた声が聞こえるが、それを無視して腕の中の椎名京に言葉を掛ける。

「今まで……ごめんね。でもこれからは大丈夫、俺がいる」

小さく身体を震わせる椎名京。

「もうイジメはさせないぞ！」

俺のその言葉に強張っていた力を抜き、少しだけ俺にもたれかかった。

俺たちの２人を眺めていた兄弟は、隣にいたキャップに現状の説明をしている。

「あーそれ関係か。なんか可哀想だったもんな」

あっさりと言うキャップは、やっぱりワン子と同じ素直で率直ん感想を述べた。

俺はキャップに向かってかねてから思っていた事を問い掛ける。

「ファミリーに加えられないかな？」

それにいち早く反応したのは兄弟だった。

「覚悟……決めたのか？」

「ああ」

多く語らなかった兄弟に、俺も短い返事で答えた。

「俺はいーぜ」

キャップは俺の問いに、こっちが拍子抜けするほどいともあっさりと答えた。

なんだか悩んでいた事が馬鹿らしく感じるのは、きっとキャップのキャップたる凄さなんだろう。

俺には一生真似する事が出来ないと思った。

「自由に生きる男、風間翔一だ！　よろしくな！」

椎名京にフレンドリーに手を伸ばすキャップ。

手を出された意味が分からず、呆然とキャップと差し出された手を見る椎名京。

「握手だよ、あーくーしゅ！」

「本当に周りを気にしないな、俺たちのキャップは」

戸惑う椎名京と焦れて手を出した意味を言葉にするキャップを眺めながら呟く兄弟の声を聞きながら、俺は仲間の説得と、この後の始末について考えていた。

第１４話　孤独な心、大和の覚悟（後書き）

あとがき～！

「第１４話終了。あとがき座談会、司会の春夏秋冬　廻です。今回のお相手は――」

「直江大和です」

「前回に引き続きの登場。さて今回のお話はお題通り大和が京を助けることを決意したシーンです」

「まさか1話使うとは思わなかったぞ」

「1話もかかるとは思わなかったよ。まあ最初から3話構成で考えてたからちょうど良かったかもしれないけど」

「行き当たりばったりだなホント」

「まあ長くなるのは分かっていたからね」

「そんなもんか？」

「そんなもんだよ。会話文だけだったら1話だけで纏められるかもしれんが、そこに場面描写、心理描写を加えるとどう考えても長くなる。だから最初から余裕をもって3話構成で考えていたというわけだよ」

「なるほど、つまり簡単な描写で読者に説明できないということだ

な」

「えぐって言わないでくれよ！？　実力不足は十分理解してんだから！」

「それじゃあ次回だけど」

「無視かよ。次回は京加入の話ですよ～よろしくね～」

「なんで投げやりなんだよ」

第１５話　孤独な心、新たな仲間（前書き）

第１５話投稿。

初期メンバーやっと集合です。

８／３１　サブタイトル変更

第１５話　孤独な心、新たな仲間

――２００３年　６月６日　金曜日　ＰＭ４：３０――

原っぱ、秘密基地。

俺、キャップ、ワン子、ガクト、モロ、ヒロ、姉さん、兄弟。

全員が俺の召集で集まり、昨日の朝に起こった事件の顛末を聞いていた。

俺が一緒に連れてきた椎名京は、遠くでこっちを不安そうに見ている。

「――以上が、今回の事件についての経過と昨日の出来事の顛末だ」

「なるほどね、だから傷だらけなわけだ」

話の後、真っ先に言葉を返したのは同じクラスで、昨日の俺の姿を見たガクトだった。

ガクトはイジメに関しては積極的に参加もせず、俺と同じ肯定的でも否定的でもなかったが、巻き込まれた時はその場のノリに任せて楽しんでいた。

だから今回の話、真っ先に反対するのはおそらくガクトだ。

そう考えながらも言葉を続ける。

「椎名は守ってやりたいと思った。許せないとも思った。そして、

知りながらも何もしてこなかった自分を1番許せなかった」

「うん……で？」

俺の言葉を黙って聞いていた姉さんは、簡潔に頷くと優しく聞いてくる。

こういうところは、やっぱり年上なんだと実感する。

「椎名を守るのは簡単だ。俺たちファミリーで守ればいい」

いったん言葉を切り、みんなを順に見渡す。

「椎名京を仲間に入れてやりたい！」

俺の決意の籠った言葉にやっぱり反論したのはガクトだった。

「ふざけんな！　入れる意味がねーよ！　椎名を入れたら、ワン子とかまで何を言われるか分からねーんだぞ！」

「俺は問題ないと思う。それとガク、みんなの心配をするのはいいが、自分の本音の逃げ道に使うなよ」

「私もいいと思うぞ。その弟の心意気を買う」

反対するガクトに問い詰めるように言う兄弟と、俺の意見に賛成してくれる姉さん。

ファミリー内のある意味で最大権力を持つ2人が賛成の意見のため、ガクトは一気に形勢不利となる。

「どういう意味だよジン兄！？　それにモモ先輩は1つ上だからい

いかもしんねーけど！　俺様と大和は同じクラスなんだよ！　冗談じゃねぇ！」

不機嫌に言い捨て遠くにいた椎名京を睨み付けるガクト。
その視線と椎名京の間に体を潜り込ませた俺はガクトに声を掛ける。

「そんだけでかい図体して怖いのかよガクト」

「あぁ！？　何えらそーに言ってんだ！　大和がこんな火種を持ちこんで来たんだろうが！？」

声を荒げ凄んで見せるガクトだが、今回ばかりは俺も引くつもりはない。

「俺の話を聞いて怒りを覚えねーのか！」

「そりゃあムカつくがよ！　女子どもに嫌われるのは勘弁なんだ」

ガクトは珍しく声を張り上げた俺に驚きながらも賛同したが、本音が漏れ声が小さくなる。

「やっぱり本音はそれか」

「……それはあんまり心配しなくてもいいだろ。元から余りいい印象を与えてないんじゃないか？」

「岳人くんの噂って大概が『怖い』『キモイ』『あんまり近寄りたくない』だよね」

「だあ！　ジン兄！　モモ先輩！　それにタカまで！？　酷い事言

わないでくれ！」

的確に心えぐるような3人の言葉にガクトは少しだけ泣きそうな声で言う。

確かにガクト個人の思いもあるかも知れない。
でも今回は何があろうとも引けない。中途半端は出来ないのだ。

「椎名を入れるのに反対だってんだな」

「ああ。だいたい大和も椎名のことを『イジメられる奴に責任がある』とか言って見下してたろ！」

痛いところを突いてくる。

確かに言った。しかもガクトの前で。
あの時の言葉を否定するつもりはない。あの時は関わり合いがなかったから言えた言葉ではあるが、本心から思って言った言葉を、心変わりしたからと言ってなかった事にはしたくない。

だからその言葉の責任を取るために、俺はこの件に関しては妥協しない。

「その事については考え方を改めたとしか言えん。もうニヒルはやめだ。何も解決しねぇ」

「おぉ？」

感心したように呟くガクト。
他のみんなからも同じような雰囲気を感じる。

「だからその事は忘れて頼むって言ってんだ。女子の事は別にいいだろ？　イジメから守ったから嫌いなんていう奴はこっちから願い下げろ」

「違うぜ！　話す機会とかも少なくなる！」

それでも食い下がるガクト。

だから吹っ掛ける。

プライドを揺する。

「……なんか、小せぇなガクトぉ？」

「ああん？」

案の定、思った通り挑発に乗ってきた。

俺の行動に、姉さんはどこか嬉しそうに、兄弟は呆れたように溜息を吐いた。

たぶん俺の考えをきちんと理解しているのだろう。

「俺様が小さければ大和は何だよ？　ふざけてんと腕力で軽くねじ伏せるぞ、この野郎！」

だから返された挑発にわざと乗っかる。

以前から感じていた鬱憤と一緒に。

「……今なんて言ったの？」

「あぁ！？」

一段低くなった俺の声に気付いていないガクトは変わらず声を荒げたままだ。

「軽くねじ伏せるって言ったのか？」

「だから何だと……」

ようやく俺の変化に気付いたのか声が途切れた。

「俺をそうやって軽く見てたの？」

「大和……？」

さあ怒りを込めろ。力を込めろ。

「ねじ伏せられねーよ。なめんな」

静かな怒りのまま拳を握った。

「上等じゃねぇか！　やるかコラ！　痛えっ！？」

言い切るのを待たずガクトの頬を思いっきり殴る。

「先手必勝だこの野郎！」

殴られた頬を抑えるガクトに喧嘩開始の宣言をするように声を張り上げた。

「始まっちゃったね」

「だーかーらー！　２人がやりあってどうするの！？」

俺たちを眺めながら普段通りの口調で呟くヒロと、止めようと声を上げるモロ。

だが姉さんが制止する。

「いいよやらせとけ。大和がキレてる。なめられてた事が我慢ならないらしいな」

「プライド意外と高いからなー」

呆れたキャップの呟きにワン子も頷くのだった。

「ブッ倒れろや！　オラァ！！」

声を上げパンチを繰り出して来るガクト。

だがそんな大振りの攻撃が当たるわけがない。

俺は事あるごとに姉さんに殴られてるんだ！　姉さんのパンチに比べて遅いんだよ！

（自慢できる事じゃないのが悲しいがな！）

いとも簡単にかわす俺に、ガクトは苛立ちながらさらに攻撃をしてくる。

焦った攻撃なんかさらに当たるわけがない。
距離を取りつつ牽制のパンチをガクトの体中に当てる。
だが、いくら回避に優れているとはいえいつまでも逃げられる訳じゃない。
何しろ体力が違い過ぎるのだ。
時間が経てば経つほど不利になってくるのは俺だった。

「よっしゃ！　ようやく捕まえたぜ！」

体力が落ちてきた頃、ついに捕まった。
そして捕まれば体格差の前に何もできなくなる。

「食らえ！」

抱え上げられ投げつけられる。

「ぐはぁ！」

背中から叩きつけられ思わず苦悶が漏れて出る。
だがこれで終わりと思わるわけにはいかない。

即座に身をひるがえして足に噛みつく。
痛みで戸惑っているところで蹴りを放つ。
だが蹴りが当たった途端にラリアットが胸を直撃する。

ふっ飛ばされる俺。

体格差、体力の違い、さらに喧嘩に慣れていない俺はボロボロにされる。

その視界に椎名京がこちらに駆け寄ろうとしているのを姉さんと兄弟が止めているのが見えた。

ありがたかった。

きっかけは椎名京の加入の事かもしれない。

でも今はお互いのプライドを掛けているのだ。余計な横やり入れてほしくなかった。

数十分後。

さすがに疲れたのか息を切らせるガクト。

そして俺はそれ以上に息が荒く全身ボロボロだった。

それでも倒れず諦めない俺に、ガクトが折れた。

「分かったよ……俺様が間違ってた……これでいいだろ？」

「ふん……分かればいい。いいかガクト、力ではお前は絶対的だけど、だからと言って俺を軽く捻れるとか思われてたらムカつくからな」

「だから悪かったって言ってるだろ！？　もう倒れておけ！」

「分かればいいんだ、分かれば」

実際もう限界だった。

ガクトの言葉に従うように俺は仰向けに倒れた。

「無茶するなよなヤマ」

呆れて、でも優しい笑顔を浮かべた兄弟が俺の手当てをする。

その間にみんなで話し合いがあった。

モロは賛成。俺の話を聞いて助けなければと思ったみたいだ。
ワン子も賛成。みんなでいれば頑張れるしイジメを止めさせられると思ったようだ。
ヒロも賛成。はっきり言えばもっとも関係ないのがヒロだが、心優しいヒロが反対する事はないだろう。

元よりキャップと姉さん、兄弟は賛成だったのだ。

後はガクトを説得するだけだ。

俺は立ち上がりガクトの前に進み出る。

「俺は椎名を助けたいんだガクト。俺を助けたい人を助けられる男にしてくれ」

姿勢を正し頭を下げる。

これは俺の我儘なんだ。だから最大級の誠意を示さなきゃならない。

「その胸の内から出てくる『誠』の言葉……私もお前に力を貸すぞ！」

そんな俺の行動に姉さんは感心し、俺の力になってくれると言ってくれた。

結果的にガクトは椎名京の加入に賛成した。
まあ、その理由が女子にモテなくなるのから嫌だっていうのがガクトらしかった。

ちなみに後で姉さんに元からモテてないと突っ込まれて落ち込んでいた。

こうして椎名京――これからは京と呼ぶ――は風間ファミリーに加入した。

ファミリーに入ることでの恩恵は大きい。
なにせ圧倒的な暴力を持つ川神百代が後ろに付いた事になる。
同学年で人気者の風間翔一、クラスで1番成績の良い直江大和、腕力ならけた外れの島津岳人。これらの仲間になるのだ。

無視されがちなのは変わらなかったが、報復を恐れ陰湿なイジメはやんだ。

それでもイジメられていた原因の1つに京の性格がある。
だから少しずつ京自身も改革させることにした。

京はイジメの発端となった自分の家庭環境の事もみんなに話した。
その結果で京が得たのは『親は関係ない、自分は自分』という事だった。

京の心的外傷（トラウマ）を癒すこと。

それが助けた俺の最重要事項だった。

後日、俺は兄弟に聞いた。

俺が原っぱで京と話していた事を知っていたいみたいだし、俺の気持ちを俺が気付く前に理解していたのも兄弟だった。

だからどうしても聞きたかったのだ。

『どうしてもっと早く京を助けようしなかったのか？　兄弟なら1人でも助けられたはずだ』と。

その問い掛けに兄弟はワン子と姉さんと遊ぶ京を眺めながら答えた。

『前にも言っただろ？　助けを求めているのなら助けるべきだと。そして助けたいと思うなら覚悟する事だと。そしてミヤから助けを求められたのはヤマ、お前だ。俺じゃない。全く関係のない俺が出しゃばるべきじゃないと思ったのさ』

『だから何も言わなかったのか？』

『それもある。でも何より俺はミヤとはクラスが違ったからな。同じクラスならたぶん俺1人でも出来たと思うけど、クラスが違うとどうしても手が回らないところが出てくる。下手に救いの手を出して、自分が知らないところでどうしようもない事態になったら救う以前の問題になるから』

そう言って俺を見た。

『だから、ヤマが覚悟を決めてミヤを救うと決めた時はよかったと思ったよ。それに、お前ならやってくれるって期待してたから、その期待に裏切られなくて安心したよ』

どこかからかうような兄弟の言葉に俺は照れ臭かった。

『買いかぶり過ぎだよ兄弟。結局俺は自分が許せなかったから行動を起こしたんだよ』

『それでもいいさ。人ってのは結局は自分のためにしか行動できないんだと思う。善意も感謝されたい心から生まれるんだ。それに他人のためってのはそれを見た周りの人の評価で自分が下す判断じゃない。だからヤマ――』

いつものように俺の頭を軽く叩く。

『お前は自分のやった事を誇れ。自分のためにやったからと卑下するな。俺はお前が取った行動を仲間として嬉しく思うよ』

そう言って締めくくった兄弟を見て、俺は一生この人には勝てないんだろうな、と思ったのだった。

ちなみに。

京が心的外傷（トラウマ）に怯える度に、落ち着かせるために抱きしめたり頭を撫でたりを約1年ほど続けていました。

するとどうでしょう。その結果――

「大和」

「なに？」

「好き？」

こうなりましたとさ。

第１５話　孤独な心、新たな仲間（後書き）

あとがき～！

「第１５話終了。あとがき座談会、司会の春夏秋冬　廻です。今回の相手は――」

「愛に生きる女、椎名京」

「はい、大和ＬＯＶＥのプチストーカーヤンデレ少女です」

「病んでない、愛し過ぎてるだけ」

「言い方変えればいいってもんじゃないでしょ、君の行動は。まあそれはいいとして、さて今回のお話で京加入エピソードは終了です」

「大和カッコイイ！　私のためにあんなになってくれるなんて！」

「お～い、別に君のためだけじゃないだろ。何かほかに感想はないのか？」

「特にない、私には大和がカッコよければ他はどーでもいい」

「そーですか……」

「あまり思い出したくない事だからね、イジメカッコワルイ」

「まあ、小学生のイジメってある意味残酷だよね。加減ってものを考えないから」

「あ、１つ思った事がある」

「何？」

「ジン兄ってつくづく小学生らしくない発言するよね」

「前にも言ったけどオリ主の彼はある意味で作者の考えの投影だからね」

「ふ～ん。そんなもんなんだ」

「そんなものですよ。さて、次回はちょっと脇道のお話。物語から逸れてはいませんがファミリーは登場しません」

「それじゃあ、次回も期待せずにお待ちくださいね」

「最後でキツイ言葉……」

第１６話　一期一会、ある少年の悩み（前書き）

第１６話投稿。

寄り道しつつ、今後の種蒔きを……

８／１１間違えていた時間表記を訂正

第１６話　一期一会、ある少年の悩み

――２００３年　７月２８日　月曜日　ＰＭ１：００――

今日は珍しく１人だった。

モモは鉄心さんに連れられてどこかで山籠り。
ヤマは両親と海外旅行。
カズはお世話になっていた孤児院に岡本のお婆さんと一緒に帰郷。
キャップは父親に連れられて行方知れず。
ヒロは凛奈さんに連れられて大分の由布院温泉。
ガクとタクは地域の林間学校に参加。
ミヤは父親と共に山梨の方に用事。

見事なまでに風間ファミリーは俺を除いて全員川神市から離れていた。

今日の修練は午前中のみで、鉄心さんもいない今の状況では充分な修練もなかなか出来ないだろうという事で午後は休養となった。

さてどうするか。

いきなりふって湧いた時間に何をしようかと考える。

行く当てもなく多馬川沿いを歩いていると、１人ぽつんと河川敷で佇んでいる男の子がいた。

背丈から見て同学年っぽいが見た事のない顔だった。

違う学区の子かな？

そう思ったがそれにしては珍しい。
違う学区の児童がこの多馬川に1人で来る事は殆どない。だいたいが学校の授業の一環として集団で訪れに来るのだ。

しかも今は夏休みだ。

それに雰囲気がどこかおかしい。

少し気になった俺はそちらに足を進めた。

驚かす必要も警戒する必要もなかったので、気配を殺すことなく近付く。
踏みしめる砂利石の音で気付いたのか、ゆっくりとこちらに振り向いた。

線の細い体。柔らかそうな質の髪。整った顔立ち。

そして思っていたより意思の強い瞳。

やっぱり別の学区の子で間違いないだろう。
こんな容姿をしている子は1度見たら忘れない。

何よりあの強い目が心象的に残るからだ。

急に近付いた事で警戒されるかなと思ったが、そんな素振りはなく驚く事もいぶかしむ事もなく、歩み寄ってくる俺を見ている。

すると興味を失ったのか、振り向いた顔を元に戻し見かけたときと

同じようにじっと多馬川の川面を見つめる。
俺は隣に並ぶと言葉を掛けるでもなく彼と同じように川面を眺めた。
数分間沈黙が続く。
「……私に、何か用があるのですか？」
先に声を掛けてきたのは彼の方だった。
視線を動かすことなく川面を眺めながら問い掛けてくる。
やけに丁寧な口調だな。小学生の話し方じゃないだろ。
そう思いながら返答する。
「いや特には」
「ではなぜここにいるのですか？」
いぶかしく再度問い掛けてくるが、それでも視線は前を向いたままだった。
だから俺も視線を前に向けたまま答える。
「別に深い意味はないさ。ただ学区の違う子が夏休みに1人で多馬川に来ているのが珍しいな、と思っただけだよ」
「私が違う学区の児童だと分かるのですか？」
「うん、見かけた事ないからね」

その答えに初めてこちらを向いた。
視線だけを動かし彼の顔を確認すると、呆れたような、それでいて驚いたような少し複雑な表情をしていた。
「その言い方ではまるで、学校の児童全員の顔を覚えている、とでも言っているみたいですよ」
「事実そうだしね。これでも記憶力はいいと自負しているんだ」
「デタラメですね。貴方の記憶力というものは」
フッと小さく息と吐き笑みを浮かべる彼。
どうやら警戒心をいくらか解いてくれたようだ。
とりとめのない会話をポツリポツリと続ける。
お互い顔を合わせず同じように多馬川の川面を眺めながら。
隣の学区、同じ5年生、互いに友達が川神市から離れている事、午後から急に暇になった事など、本当に何でもない事を話す。
「それで……もう1度お聞きしますが、私に何か用があるのですか？」
今度はちゃんとこっちを向いて問い掛けてきたので、俺もきちんと向き合って答える。
「さっきも言ったように特には」
「ではなぜここにいるのです？」

最初と同じやり取りだったが、俺は最初とは違う言葉を返した。

「俺にはなくても、君にはあるんじゃないかな？」

「どういう意味でしょうか？　私は今日初めて出会った貴方に用などありませんが」

さすがに怪しかったのか、彼は今まで浮かべていた笑顔を消した。

それはそうだろう。

いきなり会ったばかりの奴に『用があるのは自分じゃなくてそっちだろ？』と問い掛けられたのだ。

怪しく思わないわけがない。

でも俺は自分の言葉に確信を持っていた。だから言葉を続ける。

「もちろん俺という個人には用事はないだろうけど、君は誰でもいいから何かを聞いてほしいんじゃないかな？」

図星を指されたのか、あいるは思いもよらない返答だったのだろう、目に見えて表情が変化した。

驚愕の表情に。

「なぜ……そう思うのですか……？」

まだ立ち直れていないのかすれた声で問い掛けてきた。

さてなんて答えるかな。

正直に話して納得させることは難しいだろう。だからといって別の理由も思いつかない。
ありのまま正直に言った方が無難だろう。

「雰囲気というか気配というか……そういったものから感じ取ったんだよ」

「貴方は超能力者ですか……」

あ、やっぱり呆れたような口調だ。
でも多少は持ち直したようだ。

「違うよ。これでも武術を嗜んでるからね」

「ああなるほど。ここは川神ですからね。超能力者と名乗られるよりよっぽど納得できますね」

言葉通り納得したように頷く彼に俺も同意を示すように肩をすくめる。

ひとしきり笑い合った後、彼は疲れたような溜息を吐いた。

「そんな感じは見せないようにしていたのですが……いけませんね、ひとりになるとどうしても気が緩んでしまいますね」

「まあ、ひとりの時ぐらい気が抜けなきゃ息苦しくて気がおかしくなっちゃうよ」

「その意見には賛成ですね……それで、私の話を聞いてくれるのですか？」

「それを決めるのは君だよ」

決定権は俺にはない。

聞いてほしいなら聞くし、そうでなければ聞くつもりは全くない。

彼は頭がいいから話していてもつまらないと思う事はないし、とりとめのない世間話をするのもたまにはいいだろう。

黙り込んだ彼に今度は俺から話しかける。

「俺は川神院に住んでるけど、君はどのあたりに住んでるの？」

「川神院ですか。もしかして一族の方ですか？」

「いいや、ただの居候だよ」

「そうですか。私は父が病院関係に勤めていまして」

「という事は家はあっち側？」

「ええ、あの方向にありますね」

「ふぅん。病院関係か……立派な人なんだね」

隣の気配が深く重いものに変わった。

どうやらあまり踏み込んではいけないところに触れてしまったらしい。

でもそれもほんの一瞬の事で、直ぐにさっきと変わらない雰囲気に戻る。
だがどこか吹っ切れたような決意したような気配が伝わってきた。

「そうですね……尊敬できる父ですよ。ところで、いくつか聞いてもいいですか？」

「いいよ、答えられる事ならね」

「ありがとうございます」

律義に礼をした後、彼は少し躊躇ったような声音で問い掛けてきた。

「いきなりこんな事を聞かれて戸惑うと思いますが……貴方は、今まで自分がしてきた事が、自分が思い描いていた事と全く違うものだと知った時、どう思いますか？」

確かにいきなりだった。
まさかこんな重い質問をされるとはさすがの俺も思いもしなかった先ほどの会話から踏み込んではいけない所がどこなのかは理解したが、それが彼の琴線に触れるような事だったのだろうか？
疑問に思いながらも問い掛けにはきちんと答える。

「あくまで俺の答えでいいのなら答えるけど」

「ええ構いません」

確認する俺に問題なしと返してきた。だから自分の思いをそのまま

言う。

「そうだな、実際そうなってみないと実感できないから説得力ないかも知れいけど……たぶん、最初は絶望すると思う」

俺の答えに彼が肩を震わせたのが分かった。
それでもそれに気に掛けることなく言葉を続ける。

「でも、してきた事に対してまで絶望しないし、それをしてきた自分を否定もしない。だってそれは確実に自分のものになっているから。結果が自分の目指していたものと違っても、その過程で得たものは必ずこれからの自分を助けてくれる」

彼の方を向く。
呆然とした表情が見えた。

「現実は確かに裏切ったかもしれない。でも自分が費やしてきた時間は決して自分を裏切ったりしない。それはどんな事でも同じだと思うよ」

これは俺の持論でもある。
目標を持ちそれを目指してがむしゃらに頑張る。でもその目標に届かず結果が伴わなくても、それまで自分が頑張ってきた事は決して無駄じゃない。その頑張りで得たものは必ず自分の糧になっているのだから。

「貴方は常にそう思っているのですか？」

力なく問い掛けてくる彼に俺は苦笑を浮かべた。

「常に思っているっていうのは違うかな。でもそう思わないとさ、理不尽に押しつぶされてしまう気がするんだ。ただでさえ俺、親に置き去りにされていたらしいから」

「置き去りに……ですか？」

意外な言葉だったのだろうか、呆然とオウム返しに聞いてきた。

「そう置き去り」

何でもないように軽く答える。

「親を恨んだ事はないのですか？」

「昔は思ったよ。恨みたい気持ちも確かにあったし、何かしらの事情があって仕方がなかったかもしれないって諦めた気持ちもあった」

実際、昔ならいざ知らず今は何と思っていない。恨む気持ちも、諦めた気持ちも確かにあった。でも今はそんな思いすらない。

「でも俺は今幸せだと思っている。置き去りにされたけど、俺がそれから歩んできた道は今の俺を作ってるし、今の俺の幸せになっている。初めて聞かされた時は確かに絶望を感じたかもしれない。それでも俺は自分を否定しなかったか。だから俺は笑っていられるんだと思う」

「強いんですね、貴方は」

その言葉にハハっと軽く苦笑い。

実際は強くない。
たぶんひとりだったら耐えられなかったことだと思う。
でもそんな俺を振りまわしてくれた人がいた。

本人にはそんな意図は全くなく自分の思いのまま行動していたに違いない。それに救われたと思っているのは俺の自分勝手な勘違いかもしれない。

それでも救われたと俺は思っていたかった。

「では、もう1つ聞いてもいいですか？」

「俺の意見でいいのならね」

「構いません。貴方は自分が目指していたものが、自分の目の前に立ち塞がった時、どうしますか？」

またやけに抽象的でありながらどことなく具体的な質問だな。

なぜこんな質問をしてくるのだろうか？

ふと考えて思い出すのは彼が父親の事を話した時、一瞬見せた深く重い気配。
彼の言う『思い描いていたもの』『目指していたもの』はおそらく父親の事なのだろう。
そう当たりを付けながら1つ質問を返す。

「それは、今現在その状況をどうにかできる力があるという前提で考えるの？」

俺の意外な質問に、少し考える彼。

「そうですね……今はどうにもできない状況で、という前提で考えてください」

やはり彼は自分と父親の事を例えにして聞いてきている。

総合的に考えて恐らく、『彼は父親のようになることを目指し頑張ってきたが、その父親が自分が思っていたような人物ではなく、それどころか自分も同じような道を進んでいるのではないかと思い始めている。でも今の自分は父親にどうこう言える力がない』といったところだろう。

「そういう状況なら、まずは力をつける事を優先するかな」

考え込むように空を見上げながら答える。

「もどかしさを感じてしまうのはどうしようもないけど、力がないのにぶつかって行って、取り返しのつかない事になったらそれこそ次のチャンスを待つ事も出来ない」

いったん言葉を切り、彼の方を向く。

彼は俺を真っ直ぐ、真剣な表情で見ていた。

「だから今は我慢して力を溜めておく。そして立ち塞がったものを超える事が出来ると判断した時、それまで溜めておいた力を一気にぶつける」

最後は笑顔で。

「俺ならそうするかな？」

俺の笑顔につられたのか彼は小さく吹き出した。

2人でひとしきり笑った後、気持ちを落ち着かせるように気を吐く。

「で？　他に聞きたい事は？」

「いえ、もう大丈夫です。充分に聞かせて頂きましたから」

「そう？　なんだったらどういう手順を取るかも答えるけど？」

「そこまでは結構です。しかし貴方の考えは小学5年生のものではありませんね」

「それを理解できる君も小学5年生の思考じゃないよ」

「それもそうですね」

そう言って再び2人で笑い合う。

ふと腕時計を見ると結構時間が過ぎている事に気が付いた。

「そろそろ帰るよ。結構時間たったみたいだし」

「そうですね」

そう言って彼も時間を確認した。

「ではお開きとしましょうか。有意義な時間をありがとうございまし

た」

「いや、俺も暇つぶしになってよかったと思ってるよ。えっと――」

名前を呼ぼうとして聞いていなかった事に気付いた。

俺の言葉が途切れた意味に気付いたのか彼も思いだしたかのように言う。

「ああ、そう言えばお互い名乗り合っていませんでしたね」

「今更だけど自己紹介しようか？」

すると彼か苦笑しながら首を振った。

「いいえ、しないでおきましょう。今日の出会はそれこそ一期一会かもしれません。名乗り合わない方が面白いでしょう」

俺は彼の言葉に同意するように掌を上に向け方をすくめた。

そしてまた小さく吹き出し2人で笑い合った後、俺は小さく手を振ると背を向けて川神院に向けて足を進めた。

一期一会の出会い。

彼はそう言ったし俺もそう思っていた。

だがやがて訪れる未来で、俺と彼はこの時の出会いを必然の出会いと思うのだった。

「こんなところにいたのか」
「おや？　今日は用事があったと言っていませんでしたか？」
「もう終わったよ」
「そうですか。貴方もわざわざ私を捜さずゆっくり休めばいいものを」
「そういう訳にはいかないんだよ。親父にお前を捜して来いって言われてな」
「それは申し訳ない。お手数を掛けたようで」
「別にいいさ。それより何かいい事でもあったのか？　なんかすっきりした顔だな」
「ええ、いい出会いがありましたから」
「いい出会いねぇ……」
「その人が指し示してくれましたからね、私の行く道を」
「おい、まさか……」
「ええ、私は抵抗する事に決めました」
「本当にやるんだな？」
「ええ、もちろん貴方もついて来てくれますよね？」
「まあ決めたことだしな」
「ふふ、ありがとうございます。では行きましょうか『』」
「了解だ『』」

第１６話　一期一会、ある少年の悩み（後書き）

あとがき～！

第１６話終了。えっ？　何で今回は会話文じゃないのかって？

はい、今回は座談会形式ではありません。なぜかというと気分です。何とな～くです。深い意味はありません。

さて今回のお話ですが、ぶっちゃければネタバレです。分かる人にはモロバレの内容になっております。しかもある意味であのルートを潰してしまいました。

しかも最後の会話文でわざと名前表記をしませんでした。まあ誰と誰なのかは本文内容で簡単に分かると思いますが……

実はこの出会い、最初っから考えていました。

オリキャラだからこそ出来る事は何かを考えた時、原作キャラでは出来ない救済が出来るんじゃないかと思ったのがきっかけ。

さて今後どのように関わって行くかは期待しないで待っていて下さい。

あ、いまさらですが少し言い訳ぽい解説を。

本文で書かれている年月日時は作者が考えた適当です。この頃にこんなことがあったんじゃないかという推測の元で日付を決めています。

出来るだけ原作に通じるようにしていますが、矛盾しているところも必ずあると思いますので、そこら辺は突っ込まないでお願いします。

では、次回の投稿もよろしくお願いします。

第１７話　拳と剣、暁神ＶＳ篁緋鷺刀（前書き）

第１７話投稿。

順調に１日１話投稿出来てるけど、いつまで出るやら……

第17話　拳と剣、暁神ＶＳ篁緋鷺刀

――２００３年　１０月１３日　月曜日　ＰＭ２：００――

瞬く間も与えず放たれた右から襲ってくる袈裟斬りを、１歩踏み出し左手の甲で刀身の横、鎬（しのぎ）の部分に当て軌道を逸らす。

返す刀で斬り上げた斬撃を、今度は右手の甲で同じように鎬に当て逸らす。

剣を振り上げた事で無防備になった胴へ左掌底を叩き込むため踏み込んだ瞬間、後ろに下がられ距離を開けられる。

無理に距離を詰めず、その場に踏みとどまりいつもの構えを取る。

瞬きする間もなく行われた行動に、間抜けにぼけっと見ている男連中を視界の端に収めながら、私は目の前で繰り広げられる勝負に心を躍らせるのだった。

§　§　§

「今日は体育の日だ。ここは１つチーム分けをして戦闘をしよう」

私の言葉にポカンと口を開けて振り返るみんな。

ただ１人、ジンだけが呆れたような疲れたような溜息を吐いた。

「モモ、いきなり何を言い出すんだ」

「いきなりもない。1度ファミリーの戦闘能力を確認したいと前々から思っていたんだ」

そう思っていたのは本当だ。

以前からこの風間ファミリーは面白い奴が集まったと思っていた。

性格や気質ももちろんあるが、何より強い奴が結構いるのだ。

さらに京が加入した事で戦闘力は跳ね上がったと思う。大人しいが京は強い。

そして1番知りたいのがタカだ。

強いのは分かっている。

気配や身のこなしから何かしらの武道を習っているのは直ぐに分かった。

実際に去年のあの原っぱでの台風の時、私やジンと同じように飛んできた色んな物からみんなを守っていた。

それでもはっきりとした強さが見えないのだ。

今日は体育の日という事で、門下生全員を連れてどこかでイベントのようなものをしているらしく、川神院には余り人がいなかった。

だからジジイに許可をもらい、今日は道場にみんなを呼んで遊んでいたのだ。

ちょうどいいタイミングだと思った瞬間、私は先ほどの言葉を口にしたのだ。

「楽しそうだな、それ！　俺はやるぜ！」

イベント事の大好きなキャップは私の提案に乗るのは分かっていた。
キャップが参加するなら恐らくガクトも参加だ。

「おぉ！　俺様もやるぜ！　俺様の力がどれほどのものか見せてやるぜ！」

やっぱり馬鹿2人は参加だ。
こういう時は扱いやすくて実に楽だな。うん。

「僕はパス！　この中で1番弱いって分かってるのにやるわけないじゃん！」

ビビリのモロロは当然ながら不参加だが、期待はしていなかったから別にどうこう言うつもりはない。参加したらそれはそれで面白かったとは思うが。

「俺も不参加で」

「何だ弟。たまには男らしいところを見せろよ」

「無理だから姉さん。頭脳派の俺は武闘派の中に入るほど愚かじゃないから」

大和も当然不参加。
まあこいつの場合は切羽詰まったり、覚悟した時しか自分から闘う事はしないからな。

「アタシは参加！　どれだけ強くなったか確認するチャンスだわ！」

ワン子は今日も元気良く発言する。
京はどうするかと視線を向けると大和と何やら話してる。
大和と2言3言交わした後、京は小さく頷くと参加の意を示した。
どうやら戦ったらみんなに嫌われるかもと思っていたようだ。

「よし。キャップとガクト、ワン子と京は参加だな」

「モモ、仕切るのはいいけどお前は参加できないの分かってるよな？　鉄心さんに勝負禁止されてるの覚えてるよな？」

せっかく上げたテンションを下げるような事を言うジン。

「ちゃんと覚えている。私は今回は審判だ。という訳でジンとタカは強制参加な」

「どうしてですか！？」

突然の参加命令に、即座に驚いた声を上げたのはタカだった。
そんなタカに向かって私は笑みを浮かべる。

「決まっているだろ、ジンとお前が参加すればちょうど3対3になる。チーム分けをすると言っただろ？　奇数にしないと決着つかないだろ」

「そんな！？」

「ヒロ、諦めろ。姉さんが言いだした事に逆らうの得策じゃない」

それでも何かを言おうとしたタカの肩を大和が叩いて慰める。

さすが弟。よく分かっている。

「それじゃあチーム分けも私の判断でするぞ。
Aチーム、キャップ、ワン子、ジン。Bチーム、ガクト、京、タカ。ルールは参ったと言わせるか相手を気絶させたら勝ち。時間は無制限。2勝したチームが勝ちだ」

そうして体育の日風間ファミリー大決闘大会が開かれたのだった。

と、荘厳に言ったものの、私にとっての前哨戦の2戦は割愛させてもらう。

結果だけを言うなら――
キャップ対ガクト――不意を付いたキャップの勝利。
ワン子対京――地力の差から京の勝利。

そして、今回の私の目的でもあるジンとタカの勝負を私は眺めているのであった。

§　§　§

やっぱりタカは強かった。

普段は感じる事のなかった闘気が溢れ出んばかりにタカから放たれ

ている。

剣術を習ってるという事で川神院にあった刀を1振り渡した。
試合開始直後は躊躇っていたタカだったが、ジンの『本気でこい』の言葉に表情を引き締めると、鯉口を切り刀を抜き放った。

その瞬間にタカを纏う全てのものが変わった。

少なくとも私はそう感じた。

篁緋鷺刀の本領は刀を抜いた時に発揮する。

以降、仲間内で認識されるタカの強さはこのとき初めて解き放たれたのだった。

常に仕掛けているのはタカの方。

剣道三倍段という言葉がある。
武器を持たない者が剣を持っている者を相手にするには、その剣を持つ者の三倍の段数が必要という意味だ。

その考えからいうと不利なのはジンの方。
だがそんな常識に当てはなる男ではない。
タカもそれが分かっているからこそ、先手を取られないように、さらに反撃をさせないために常に自分から仕掛けているのだ。

「はっ！」

裂帛の気合から放たれるタカの5連斬。
ジンは殆どタイムラグなしの同時に襲い掛かってくるその斬撃を、

2つをかわし3つをいなす。最後の斬撃をいなした後、生まれた僅かな隙を突き刀を叩き落とそうとタカの手首を狙って左手刀を放つ。

それを察したタカは流れる刀の勢いを手首を返す事で振り上げる勢いに変え、逆にジンの手刀に向かって刀を振り下ろす。

それに対してジンの取った行動に私は度肝を抜かれた。

左手刀が空を切る否や、手首を返しなんと迫り来る刀に向かって振り上げたのだ。

「ヒッ！」

隣で京が息を飲む音が聞こえた。

タカが持っている刀は刃引きがしていない真剣だ。しかもタカほどの技量を持つ者が放った斬撃をくらえば腕が切り落とされるのは間違いない。

斬られる、と思った時――

ガンッ

鈍い音がした。

私は驚きで目を見開いた。

タカも信じられないものを見たかのように驚愕していた。

ジンはタカが振り下ろした刀を手刀で受け止めていた。

受け止めた場所がまた凄い。

ジンはタカの刀をハバキ――つばの上にある金具――の部分で受け止めていたのだ。

驚きで一瞬固まるタカに向かって蹴りを放つジン。それに気付き当たる直前で身を屈め、タカはそのまま飛び退いた。

「京、見えたか？」

「うん」

隣にいる京は私の言葉に短く頷いて答える。

「ていうか、姉さんも京もあれが見えてるの？」

未だにポカンと眺めている男ども代表して大和が問い掛けてきた。

「もちろんだ」

「私は辛うじてだけど」

答える私たちを、ありえないものを見るような表情でこっちを見るキャップとガクト。モロロは未だにポカンとしている。

「うおぉお！　なんだかよく分からねえけど、ジン兄もヒロもすげぇ！」

「人間じゃねえだろあの動き」

「すごいすごーい！」

はしゃいではいるが恐らくキャップもガクトも見えていないし、ワン子もまだ見えるまでにはなっていない。今この勝負を目にする事が出来るのは、私と京の2人だけだろう。

間合いを空けたタカは気を落ち着かせるように息を吐き、刀を握り直すと再び正眼の構えを取る。
対するジンは蹴り上げた右足を引き戻し、タカに向かって正面に位置を取ると、左足を少し前に出し両腕は力を抜きだらりと下げ、珍しく無形の構えを取った、

「思った通り、強いなヒロ」

「やめてよジン兄。全く勝てる気がしないのに褒められても嬉しくないから」

笑顔を浮かべるジンに苦笑で返すタカ。

一見すればタカが攻めていると言えるが、ジンはその攻めに慌てることなく対応し隙あらば攻撃もする。恐らく全く余裕がないのはタカの方で間違いないだろう。

「じゃあもう少し本気を出そうか」

その言葉に顔を引きつらせるタカ。
信じられないといった表情の京。

「安心しろヒロ。まだ俺から仕掛ける事はしない。だから存分に掛って来い」

ダンッ

答えるようにタカが道場の床を蹴った音が響いた。
一瞬で間合いを詰め袈裟斬りに放った斬撃を、ジンは触れたかどうかすら分からない柔らかなタッチで軌道を逸らしいなす。
右片手の持ち方にし返す刀で振り上げられた左切上を、今度は峰に手を添え真上に軌道を逸らす。

振りかぶる形になったヒロはその勢いのまま両手持ちになると、ジンの頭上から唐竹の斬撃を繰り出した。

左半身になり斬撃をやり過ごしたジンは、左蹴りを顔面に向かって蹴り上げる。
タカは上半身を後ろに反らし蹴りを鼻先ギリギリでやり過ごすと、再び右片手持ちに変えそのまま横薙ぎを放った。
しかしジンは振り抜いた蹴りの勢いそのままに身体を捻ると、正面から迫ってきた刀を飛び越え身体を1回転させたかと思うと、その回転の勢いを利用して右足で蹴りを放った。

思いもよらない反撃による暇もなく蹴りを受けたタカだったが、当たる瞬間ギリギリで首を捻りダメージを最小限に抑えたが、崩れた体制を整えるために再び間合いを取った。

アクロバットな動きをしたにも拘わらずジンはきちんと足から床に着地した。

道場にほんの少しの静寂が訪れた。

「人間離れもここまで来ると呆れるしかない」

ジンの最後の動きはさすがに見えたのだろう、ポツリと大和が呟い

た。

「ねぇ！　ちょっと待ってよ！」

いきなり声を張り上げたモロロに勝負している2人以外の視線が集まる。

「何でみんな納得して観戦しちゃってるわけ!?　タカの持ってるの真剣だよ!?　下手したら怪我じゃすまないよ!?」

「いやモロ、確かにそうだけど別にジン兄、怪我してねーじゃんかよ」

声を荒げるモロロにガクトが少し戸惑った様子で答えた。

「そんなこと言ってるんじゃないよ！　僕は怪我してからじゃ遅いって言ってるんだ！　見てよ！　タカなんか本気で斬りかかってるじゃないか!?」

「おーちーつーけ！　モロロ！」

ガクトに掴み掛らんばかりの勢いだったモロロの頭を後ろ押さえつける。

私が頭を押さえつけたことで多少、冷静さを取り戻した感じではあるが、まだ息は荒く肩を上下させていた。

モロロの心配も分からんではない。

普通なら受け入れられる状況ではないのは確かだ。目の前で繰り広げられている勝負はどう見ても小学5年生と4年生のものではない。

しかも片方は素手なのに、もう片方は刃引きをしていない本物の日本刀だ。

常識で考えればありえないだろう。だが――

「問題ないモロロ。タカが本気で斬り掛れるのはジンを信頼してるからだ。自分が本気になってもジンは怪我をしないと確信しているからこそ、あいつは今本気で勝負をしているんだ」

私たちの会話の間にも、2人の攻防は続いている。

実際きちんと見えている私にしか分からないだろうが、ジンは危な気なく余裕を持ってタカの斬撃を全部捌いている。

「うん大丈夫だと思う。ジン兄、タカの攻撃ちゃんと危な気なく捌いてる」

私の考えを肯定するように言葉を発する京。

「なんだよ～京は見えてるのかよ。いいな～」

「うん、弓は眼が命」

羨ましそうなキャップに京は珍しく自慢げに胸を張る。

「モロロ、心配するだけお前の損だ。私はまだあいつに1度も勝ったことがない」

「「「「「「「「「「えっ!?」」」」」」」」」」

全員が信じられないといった表情で私を見遣る。

う～ん。私としては情けなくてあまり話したくない事なんだが……

「私はこれまで3回、ジンと勝負をしている。だが結果は3戦3敗だ」

「いや……兄弟が強いのは知ってたけど……ホントに姉さんより強いの？」」

戸惑う大和の言葉にも無理はない。

ジンの強さは技術的な強さだとみんな思っている。現にあの原っぱで上級生を追っ払った時、ジンは軽く投げ飛ばすだけで圧倒的な力を見せつけたのは私だ。

その印象がみんな強いのだろう。だが――

「ジンは私なんかより遥かに強いよ。力の速さもジンの方が上だ。他者との隔絶が凄いからからこそ、普段のジンは基本的に力ではなく業（ワザ）をもって相手と対するんだ」

そう、それが真実だ。

1度だけ業（ワザ）なしの純粋な身体能力の身で勝負をした。その結果開始直後の気を失った。

そんな話をみんなにしていると、急に勝負をしている2人の気配が変わった。

見ればいつの間にかタカは刀を鞘に収め、抜刀術の構えを取っていた。

「次で決着が付くな」

私の呟きに全員が食い入るようにジンとタカを見る。

数秒の静寂の後、先に動いたのは抜刀術の構えをしたタカの方だった。

本来抜刀術は後の先。待ち技だ。

それなのに先に仕掛けたという事は、そういう技なのか。あるいは待っていても勝てないと判断したのか。

ジンの拳が届く1歩手前間まで間合いを詰めたタカは、納刀状態から鞘走りを利用し今日見せる最高速度の斬撃を放った。

だが――

「惜しかったな」

余りにもデタラメ過ぎるジンの行動に、私も含めた全員が目を見開き驚いた。

なんとジンは右手の人差し指と中指だけで、タカの放った最速の斬撃を挟んで止めてみせたのだ。

その瞬間タカの敗北が決定した。

驚き身を固めたタカの鳩尾にジンの掌底が吸い込まれるように入り、タカはそこで気を失った。

あの後、目を覚ましたタカは勉強になったとジンに頭を下げ、今日はお開きとなりみんな興奮が冷めないものの帰って行った。
私はタカの強さを見て取れ今日はとてもいい気分だったのだが――

帰ってきたジジイに子供だけで真剣を使い試合をした事がばれ、ジンと一緒に夜遅くまで説教をくらう羽目になってしまったのだった。

第17話　拳と剣、暁神VS篁緋鷺刀（後書き）

あとがき～！

「第17話終了。あとがき座談会、司会の春夏秋冬　廻です。さて今回のお相手は――」

「暁神です」

「何かお久し振りだね」

「本当だな。7話以来だから10話ぶり。俺は本当に主人公か？」

「主人公だよ、て言うか結構視点描写してるじゃん」

「なんか3回連続ヤマだったからどうもな……」

「まあ、京の事件はしょうがないさ。あれは大和がやってこそのものだからね。代わりに君がやったら京が君に惚れてしまう。さすがにそれは物語的にヤバイからね」

「納得せざるを得ないのか」

「そういう事。さて今回のお話ですが、意味合いには深い意味は全くありません。閑話、骨休め程度と考えて下さい」

「だったら書くなよ」

「まあそうなんだけど、とりあえずは一人称による戦闘描写の練習。

あと君と緋鷺刀の強さを見せるためのお話だと思ってね」

「ああ、そういえば以前のあとがきでも言ってたな」

「そ、今回は観戦者視点の一人称での戦闘描写。さすがに戦闘者視点の一人称はまだ出来なかった。これが凄く難しい。途中までは君の視点でやってたんだけど……」

「挫折してモモの視点に切り替えたと」

「その通り。つくづく戦闘描写は三人称でやった方が簡単と思い知ったよ」

「精進あるのみ。だな」

「全くもってそうだね。さて次回のお話なんですが、またも原作過去エピソードの1つ、一子が川神院の養女のなる話です」

「あの話を1話にするのか？」

「その通り。というわけで次回『真剣に私と貴方で恋をしよう！！』第18話『ワン子、川神一子になる』をお楽しみ下さい」

「なんでいきなり今までやった事ない次回予告をやるんだよ」

「君はワン子の涙を見る」

「それなんかのフレーズのパクリだろ？」

ＰＶ５０，０００突破記念　ロング座談会

作者
「老若男女の皆様方、おはこんばんちわ！　『真剣に私と貴方で恋をしよう！！』作者の春夏秋冬（ひととせ）　廻（めぐる）です！　私奴（わたくしめ）が拙くも投稿しておりますこの物語、たくさんの方の目に留めて頂き、先日ユニークアクセスが５，０００人を超え、ついにＰＶも５０，０００を超えました！　皆様！　どうもありがとうございまぁぁぁぁぁぁぁぁす！！！！

　という訳で！　今回はいつもはあとがきでやらせてもらっております座談会をロングヴァージョンでお送りしたいと思います！　でわでわ！　題してＰＶ５０，０００突破記念　ロング座談会『ポロリ？　ネタばらしあるかもね？　作者の魂の叫びを聞け！？』！！
　本日のゲストは――」

暁神
「前振り長すぎテンション高すぎ。少しは落ち着こう作者。えぇっと、『真剣に私と貴方で恋をしよう！！』の一応オリジナル主人公の暁神（あかつきじん）です」

篁緋鷺刀
「そもそも『おはこんばんちわ』って何ですか？　意味が分からないんですけど……同じく『真剣に私と貴方で恋をしよう！！』オリジナルキャラの篁（たかむら）　緋鷺刀（ひろと）です」

直江大和
「いや１番意味分からんのは題名だから。何？　その『ポロリ？　ネタばらしあるかもね？　作者の魂の叫びを聞け！？』って。簡単に言えばただの暴露だろ？　原作『真剣で私に恋しなさい！』主人

公の直江大和です」

作者
「容赦のないツッコミをありがとう！！　てなわけでロング座談会！　おっぱじめたいと思います！　Ｈｅｒｅ　ｗｅ　Ｇｏ！！」

３人
「「「「　だから落ち着けって　」」」」

・ロング座談会の主旨

作者
「初っ端からハイテンション誠に申し訳ありませんでした。改めて自己紹介、作者の春夏秋冬廻です」

暁神
「やっとまともに戻ったな。それで？　ロング座談会っていうけど実際は何やるんだ？」

作者
「さっき大和が突っ込んだけど、まあぶっちゃけるといろいろな暴露・ネタバレだね」

直江大和
「いや、確かに突っ込んだけど本当にやるのか？」

作者
「もちろんこの『真剣に私と貴方で恋をしよう！！』の物語の直接

的な暴露・ネタバレはしない。するわけがない。出来ないよ」

篁緋鷺刀
「じゃあ何に対する暴露・ネタバレなんですか？」

作者
「まあ、分かりやすく言えばどうしてこの物語を書こうと思ったのか、どういう経緯でオリキャラが生まれたのか、そういった部分の暴露だね」

暁神
「なるほど、だから『作者の魂の叫びを聞け！？』という訳だ」

作者
「その通り！　きちんと題名にも意味があったのだ！」

直江大和
「ただ単に勢いに任せて叫んだだけじゃなかったのか」

作者
「あ、それも否定しない。ノリと勢いで言った部分は大いにある」

3人
「「「「　あるのかよ！！　」」」」

・『真剣に私と貴方で恋をしよう！！』誕生のきっかけ

直江大和

「で？　どうしてあんたはこの物語を書こうと思ったんだ？」

篁緋鷺刀
「それは聞いてみたいね。オリキャラを出してまで考えた理由っていうものを」

暁神
「大した理由じゃない気もするがな」

作者
「その前に読者の皆様に言っておくことがあります」

3人
「「「ん？」」」

作者
「今このロング座談会に出席しております、暁神、篁緋鷺刀、直江大和の3名ですが、現在進行の物語の時間軸とは別の、原作と同じ時間軸の3人ですのであしからず」

暁神
「ああ、なるほどそれは言っておくべき事だな」

篁緋鷺刀
「文面だけだと分からないからね」

作者
「その通り。という訳で最初のお題について語って行こうか」

直江大和

「そもそも書こうと思ったきっかけは？」

作者
「いろいろあるが、やっぱり他の投稿者が書いている小説を読んで、自分も書いてみたいと思った事がきっかけだね」

篁緋鷺刀
「ありきたりな理由だね」

作者
「まあ最初はそうでしょ。あとは自分、頭の中ではいろいろ考えるのは好きなんだよね。空想とか妄想とか」

暁神
「妄想はあんまり褒められたものじゃないだろ。それで？」

作者
「それで、考えるのは好きなんだけど、それを文章にするという事はしてこなかった。というより、文章化に出来るほどの力が無いんだよね」

篁緋鷺刀
「今更それを言ってもいいものなのかな？」

直江大和
「いや、普通駄目だろ」

作者
「酷い事言われてるけど、どうにも自信が持てないんだなこれが。で、それでもやっぱり『ちょっとはやってみないかな？』というが

あったから、思いきってみたというわけ」

暁神
「なるほどね、話を書こうと思った理由は分かった。それじゃあこの話にしようと思ったのはどうしてだ？」

作者
「最初はオリジナルにしようかなとは思ったんだけど、自分の力量ではいきなりは無理だなと初っ端から判断した」

直江大和
「いや早すぎだろその判断！」

篁緋鷺刀
「少しは考えるぐらいして下さいよ！　頭の中で考えるのは好きなんじゃなかったんですか？」

作者
「ああ好きだ！　好きだとも！　でもなあ！　自信が無いとさっきからさんざん言ってるだろ！」

暁神
「落ち着け作者。ヤマもヒロも余計なツッコミはよそう。話が進まなくなる。それで作者、そう判断した結果どうしたんだ？」

作者
「はあ、はあ、はあぁぁぁ。そう考えた結果、まずは原作のある二次創作から始めようと決めて、何にしようかと考えていた時に目に入ったのが、『真剣で私に恋しなさい！』のパッケージだったというわけ」

直江大和
「原作決めた理由は本当に大した理由じゃないな」

作者
「確かに大した理由じゃないけど、好きだから決めたっていう理由もあるからな。で、原作も決まったから次はどういう話にするかなんだけど……」

篁緋鷺刀
「なんだけど？」

作者
「最初は大和を主人公にして、全ルートを通った結果の百代エンドにしようかと考えたわけ」

直江大和
「えっ！？　最初は俺が主人公だったのか！？」

作者
「ＹＥＳ。原作通りの主人公でＩＦストーリーという感じで考えていたんだけど、よくよく考えると全ルートを通るってのはかなり無茶がある」

暁神
「無茶どころじゃないだろ。モモをメインに考えたらまずクリスルートはほぼ全滅。カズルートも無理だろ」

作者
「そうなんだよ。交ぜられるといったら京ルートと由紀江ルート、

竜舌蘭ルートぐらい」

直江大和
「まあクリスは確かに無理だろ。なんてたってドイツまで行かなきゃならない。でもワン子ルートの場合川神大戦で何とかいけないか？」

篁緋鷺刀
「無理があると思うよ。そもそも個人の力を見るための試験だったでしょ？　川神大戦だと団体戦になっちゃうからね」

作者
「そういったいろんな理由から全ルートってのは不可能だと分かったから、安易だけどオリキャラを出そうと思ったわけ」

暁神
「確かに安易だな」

篁緋鷺刀
「確かに安易だね」

直江大和
「安易すぎるぞ」

作者
「はい！　厳しいツッコミありがとうございます！？　でもオリキャラ出せばそれはそれで難しいんだよね」

暁神
「オリキャラの俺が言う事じゃないけど、確かにそうだよな。原作

があるって事は物語の本筋はきちんと出来てるんだから、それにオリキャラを介入させなきゃならないんだからな」

直江大和
「だったらオリキャラのオリジナルストーリーにすればよったものを、なんでわざわざ風間ファミリーに入れることにしたんだよ」

通りすがりのメイドまゆっち
「禁則事項ＤＥＡＴＨ！」

直江大和
「オイ！？　なんださっき通り過ぎてったのは！？」

篁緋鷺刀
「いや、それよりも際どすぎるネタはやめて下さいよ！」

作者
「はてさて何のことやら？　まあ先ほどの通りすがりのメイドさんが言ったように、そのあたりは物語の根幹に触れますので、ネタばらしはなしという事で。」

暁神
「ホントはそこまで重要事項じゃなかったりして」

作者
「ホントはただ深く考えていなかっただけだったりして」

３人

「「「オイ!?」」」

・オリジナルキャラ『暁神（あかつきじん）』と『篁緋鷺刀（たかむらひろと）』について

作者
「さて次なるお題はオリキャラ2人についてです」

篁緋鷺刀
「実際本人である僕たちがいるのにその話題ですか」

暁神
「目の前で語られるってのもなんか変な感じだよな」

直江大和
「語るっていったって、どういう風に語るんだよ?」

作者
「3者3様の意見ありがとう。でも別に詳しく深く語るわけじゃない。どうしてそういうキャラにしたのかの簡単な理由を言うだけだ」

暁神
「そう言い切られるのもなんか不満だぞ」

作者
「ゴメン。オリキャラの詳細説明は本当に物語に関わってくるから、今言う訳にはいかないのよ」

直江大和

「ふ～ん、なるほどね。で？」

作者
「で？　とは？」

直江大和
「オイ、簡単な説明をするんじゃないのかよ」

作者
「そうでしたそうでした。ではまずオリ主なのに全然オリ主らしくない暁神のキャラ作り経緯からいこうか」

暁神
「それ以外とキツイぞ……」

作者
「（無視して）では考えていた時のメモ書きからの抜粋を」

・百代より強い（肉体的にも精神的にも）
・ファミリーのナンバー2
・メンバー全員のお兄さん的立場
・孤児
・武士テーマ「真」

直江大和
「姉さんより強いうというのは最初から決まっていたのか」

作者
「そうだね、オリ主を形作るのにもっとも重視した事だからね」

篁緋鷺刀
「ファミリーのナンバー2って言うのはどうして考えたんですか？」

作者
「それは3番目のものと殆ど同じ意味だね。キャップは確かに纏めてるけど、それってある意味キャップのカリスマと運だけな気がするんよ」

暁神・直江大和
「「否定できないな」」

作者
「そういったものではなく、立場でや性格、理をもってメンバーを纏める存在にしたいって思いからだね」

篁緋鷺刀
「でもそれだと……」

作者
「そう大和でも問題ない。けど大和は百代のストッパーにはなるけどコントローラーにはならない。立ち位置的に百代より上には絶対にいけない」

直江大和
「全くもって否定できん」

作者
「だからこそ最初に設定した『百代より強い』がある神が、ファミリーのナンバー2にしてお兄さん的立場、という設定になったわけ」

暁神
「なるほど、俺の性格はその設定から来たってわけね」

作者
「その通り。その設定を生かすために余り動揺しない冷静沈着で泰然自若な性格になったんだよ。だから全然小学生らしくない」

暁神
「悪かったな」

直江大和
「そう言えば兄弟の外見的イメージってあるのか？」

作者
「そう言えば緋鷺刀のイメージは『リリカルなのはのユーノ』って言ったっけ」

暁神
「それは成長しても変わらないのか？」

作者
「変わらないね。ちなみに神の作者脳内のイメージは『テイルオブヴェスペリアのユーリ』」

篁緋鷺刀
「ユーノにユーリですか」

直江大和
「名前が似てるからってわけじゃないよな？」

作者
「当たり前だろ。あくまでも作者脳内イメージだ」

直江大和
「まあいいさ、じゃあヒロのキャラ作り経緯は？」

作者
「じゃあ同じようにメモ書きからの抜粋を」

・年下
・実家からは絶縁状態（剣術の武家）
・礼儀正しい
・百代よりは弱いがメンバー女子よりは強い
・外見ほとんど女
・武士テーマ「信」

篁緋鷺刀
「『外見ほとんど女』ってどういう意味ですか！？」

作者
「いやまさか、真っ先にそこにツッコミが来るとは思わなかった」

直江大和
「いや普通はいくだろ」

暁神
「だったら最初っから女にしておけばよかったんじゃないか？」

作者
「実は最初は神の言う通り女だった」

篁緋鷺刀
「え？　本当だったんですか？」

作者
「ホントもホント。神が加わるという事で、ファミリーの男女比を考えて緋鷺刀は最初女だった。名前も決まっていて、女の時の名前は緋華瑠（ひかる）」

直江大和
「うわ、本当に女だったんだ。それでなんで男になったんだ？」

作者
「物語の展開にも関係してるけど、1番の理由はカップリングだね」

3人
「「「は？」」」

作者
「なにを3人して驚いてんだ。タグに『ヒロイン決定済み』って書いてあったろ」

直江大和
「いや……それってオリ主の兄弟だけだとばかり……」

篁緋鷺刀
「え？　それって僕の相手も決まってるって事ですか？」

作者
「その通り、よかったな緋鷺刀。彼女が出来るぞ」

暁神
「爆弾発言を何でもないように言うなよ……」

作者
「ちなみに性格は武士テーマと礼儀正しいというところで設定したから――って誰も聞いていないね。後々にオリキャラの設定を出そうと思いますので、よろしければ期待してお待ちください」

・直江大和は誰のルートを選ぶのか？

作者
「さて、今回のロング座談会最大のお題です」

直江大和
「自分の事なんだが何と言えばいいか分からんな。とりあえず姉さんのルートは消えてるのは確かだな。なあ？　兄弟？」

暁神
「こっちに振るな」

篁緋鷺刀
「照れてるね」

作者
「大和の言う通り百代ルートはない。まあ読んでる方にはモロバレでしたが、あえてここで発表します」

オリ主である暁神の相手ヒロインは川神百代!!

作者
「これはキャラ設定の頃からの決定事項」

直江大和
「何かしら理由があるのか？」

作者
「物凄く単純明快な理由がある」

篁緋鷺刀
「何ですか？」

作者
「作者はヒロインの中で百代が1番好きだから!!」

3人
「「「「……」」」」

作者
「ん？　どうしたみんな？」

暁神
「確かに単純明だな」

篁緋鷺刀
「単純すぎだよ」

直江大和
「待て、先の話題でヒロの相手も決まってるって言ってたよな？」

作者
「言ったね。ついでだから発表しておこうか？」

篁緋鷺刀
「えっ！？」

暁神
「いいのか？　物語としてはまだ先だろ？」

作者
「確かにまだ先の話だけど、たぶん原作内容を知っていて読んでる方は恐らく気付いていると思う。『プロローグ　ＳＩＤＥ　Ｈ』でそれなりにネタばらし的な文章があるからね」

直江大和
「ああ、『江戸時代より前の頃から続く武家の血と流派を受け継ぐ、れっきとした剣術家』とか」

暁神
「『剣士にとって名誉ある称号を懸けた試合』とか」

作者
「『その人は後ろにいた小さな女の子を連れて帰って行った』とかね。以上の事から推測すると、原作知ってる人は直ぐに分かったはず」

篁緋鷺刀
「いや、だからと言ってばらしてしまっていいんですか？」

作者
「まあ、原作知らない人や楽しみにしてる人には申し訳ないけど、大和のルートを発表する過程で発表しようと思う」

直江大和
「えっ！？　俺の方も発表するの？」

作者
「でわでわ、篁緋鷺刀のお相手を発表します！」

オリキャラである篁緋鷺刀の相手ヒロインは黛由紀江！！

作者
「原作を知ってる方はやっぱりと思うかもしれません。本当は女の友情でもよかったんだが、大和のルート選択を余り多くしたくなかったという理由から、緋鷺刀は女から男になり、まゆっちがヒロイン」

暁神
「何か理由があるのか？」

作者
「２番目にまゆっちが好きだから！！」

直江大和

「姉さんのときと同じ理由かよ！？」

暁神
「よかったなヒロ、彼女が決定したぞ」

篁緋鷺刀
「どう答えを返していいか全然分かんないよ」

作者
「だろうな」

篁緋鷺刀
「貴方が言わないで下さい」

作者
「さて、神と緋鷺刀の相手ヒロインを発表したところで、お待ちかねの大和のルートを発表します」

直江大和
「聞きたいような聞きたくないような……」

暁神
「残りはカズとミヤとクリスだな」

作者
「先に言っておきます。ファン方はごめんなさい。クリスルートはありません」

篁緋鷺刀
「えっと……どういった理由でですか？」

作者
「原作クリスルートをやれば分かると思うけど、最終的にドイツまで行ってしまうのは避けたいから。できれば川神での話で纏めたい」

直江大和
「という事はワン子と京の2択か……なんか嫌な予感しかしないんだが……」

暁神
「後ろの京にご注意ってか？」

直江大和
「兄弟、それはシャレになってない」

作者
「それでは発表します。大和のルートは……」

直江大和
「間が長すぎる！！」

作者
「エンターテイメント的な演出だ。では改めて発表します！」

直江大和のルートは川神一子！！

直江大和

「……は？」

作者
「なにを呆けておる原作主人公」

直江大和
「いや……だって……あの流れからすると普通は京と考えるだろ？」

暁神
「余りに予想外過ぎてさすがのヤマも戸惑ってるな」

篁緋鷺刀
「予想外も度が過ぎると恐ろしいね」

作者
「話的に京ルートはどのルートにも絡め易いんだよね。大和が発破をかけなくてもファミリーの誰かが行動すれば京ルートは出来ると思ったんよ」

暁神
「たしかにそうだな。で？　カズのルートにした本当の理由は？」

作者
「百代を姉さん、神を兄弟って呼ぶんだからいっそのこと本当『きょうだい』にしてやろうかと」

篁緋鷺刀
「そんな理由でですか」

作者

「それにこれは個人的な考えなんだが、京よりは一子の方が大和に合ってると思うんだよね。何がという訳ではなく何んとなくだけど。他のルートを期待していた方には申し訳ありませんが、作者の判断で決めさせていただきました。ご了承ください……そう言えばさっきから大和の返事がないが？」

暁神
「まだ固まってるよ」

篁緋鷺刀
「本当に予想外過ぎたんだね」

・終わりに

作者
「さてそろそろ終わるか」

暁神
「いきなりだな」

作者
「だって今現在で暴露する事はもうないし」

直江大和
「だからって唐突過ぎるだろ。俺たちになにか感想を聞くとか、終わりの口上を述べるとかしろよな」

作者

「分かったよ。えっと、長々とお付き合いいただきましたロング座談会『ポロリ？　ネタばらしあるかもね？　作者の魂の叫びを聞け！？』ですが、そろそろ終了のお時間となりました。かなり作者の自己満足の企画でしたが皆様どうだったでしょうか？」

直江大和
「やれば出来るじゃないか」

作者
「出来ないとはひと言も言ってないだろ。それじゃあそれぞれ感想を聞いてもいい？」

暁神
「まあ楽しかったかな。俺自身の暴露はそんなになかったからある意味客観的に楽しませてもらえた」

篁緋鷺刀
「驚きでしたよ。相手が決まっていたのもそうだけど、まさか初期設定では女の子だとは思いもよらなかったけどね。この外見がその名残だったなんて……」

直江大和
「予想外の暴露のせいでもはや最後は呆然自失だったよ。そうか俺の相手ワン子か……そうかワン子か……」

作者
「まだショックみたいなものが抜けてなのか大和は。まいいか。というわけでロング座談会、これにて終了させていただきます。もしからしたらまたアクセス記念で企画するかもしれませんが、その時はまたよろしくお願いします」

暁神
「確実にやるだろうな」

篁緋鷺刀
「間違いないよね」

直江大和
「賭けるか？」

作者
「そこ！　適当な事言ってないで最後の挨拶やるぞ。
では皆さん！　これからも『真剣に私と貴方で恋をしよう！！』
をよろしくお願いします」

3人
「「「「よろしくお願いします！！」」」」

第１８話　ワン子、川神一子になる（前書き）

第１８話投稿。

第１８話　ワン子、川神一子になる

――２００４年　５月１３日　木曜日　ＰＭ５：００――

ｓｉｄｅ　暁神

その出来事は俺たち風間ファミリーに衝撃を与えた。

ヤマからかかってきた電話を取ったモモが、受話器を持ったまま固まっていた。

「モモ……？」

珍しく呆然としてるモモに小さく声を掛ける。

振り向いた顔を見て驚いた。

目を見開き口も小さく開き、顔は血の気が引いていた。

「ヤマはなんて？」

驚きを隠しつつ、呆然とするモモを刺激しないようにゆっくりと静かに声を掛けた。

「ワン子の……さんが……んだって」

俺はモモの手から受話器を奪うように取ると、電話の向こうにいるヤマに話しかける。

「ヤマ、俺だ神だ」

「あ、ああ……神か……」

ヤマもショックを隠せないのだろう、電話越しの声は呆然としているし俺の呼び方もいつもとは違った。

心ここに在らずといった感じなのを落ち着かせるように声を掛ける。

「ヤマ、落ち着いて話せ。何があった？」

「ワン子のところのお婆さんが……今日の午後3時に……病院で亡くなったって」

頭の中が真っ白になった。

岡本のお婆さんが死んだ？

呆然とする意識を引き戻したのは、俺のシャツの袖を握るモモの小さく震えた手だった。

我に戻った俺は右手で持っていた受話器を左手で持ち直し、空いた右手で袖を掴み震えるモモの手に重ねて小さく力を込ながら、電話の向こうのヤマにも声に力を込めて言う。

「大丈夫か、ヤマ？」

「あ…ああ……大丈夫……」

「落ち着け。ゆっくり深呼吸しろ」

俺の言葉に従い深呼吸する音が受話器越しに聞こえてきた。

それと同時にモモの手を一定のリズムで優しく叩き気持ちを落ち着

かせる。

モモの震えが収まったのと同時に、受話器越しにひと際大きく息を吐く音が聞こえた。

「悪い兄弟。落ち着いた」

「気にするな。で？　カズは今どうしてる？」

1番気になる事を真っ先に聞く。

ヤマもその質問を予想していたのだろう、慌てることなく答えてきた。

「今はキャップの家にいる。やっぱり相当落ち込んでる。岡本のお婆さんの事は父さんが全部引き受けたみたい」

「そうか。他の連中にもう連絡したか？」

「まだしてない。連絡しようと思ったら真っ先に兄弟と姉さんの顔を思い出したから……」

いつも冷静なヤマもさすがに動揺していたのだろう。そんな中で俺たちを真っ先に頼ってくれたのは素直に嬉しかった。

だがまだヤマを落ち着かせるための時間が必要だ。

カズの次に岡本のお婆さんと付き合いが長いのがキャップとヤマだ。

亡くなった知らせを受けて恐らくまだ1時間も経っていないだろう。

本当に心が落ち着くには全然時間が足りていない。

「他の仲間への連絡は俺がする。ヤマ、お前はキャップと一緒にカ

ズの側にいてやってくれ。それからモモにもそっちに行くように言っておく」

その言葉に袖を掴んでいたモモの手に一層力が入った。

「悪い」

「謝るな。別に悪い事をしたわけじゃないだろ。後の事はとりあえず今は考えるな。お前はカズの側にいてやることだけを考えろ」

ヤマの了承の返事を聞き最後のひと言だけ告げると受話器を戻す。振り返ってモモの方を見るとだいぶ落ち着いているようで、いつも通りとまではいかないが、それでも目の強さは戻っていた。

「ジン」

「聞いての通りだ。モモは直ぐキャップの家に行け。説明は俺がしておく」

モモは頷いてそのまま玄関から物凄い勢いで出て行った。

その背中を見送りながら、他の仲間たちの家の電話番号を思い出しつつ、これから少し忙しくなるかと思ったのだった。

side out

§　§　§

――２００４年　５月１４日　金曜日　ＰＭ６：００――

ｓｉｄｅ　ａｕｄｉｅｎｃｅ

大和は一子の隣に座っていた。

今日は昨日亡くなった岡本のお婆さんの通夜。

お婆さんは昨日の昼に急に倒れ、それを見つけたのは翔一の母親だった。

急いで救急車で運ばれたものの既に息を引き取った後だった。

死因は高血圧性心疾患による心不全。

本当に急過ぎる死だった。

通夜や葬儀の段取りは大和の父親が一手に引き受けた。

岡本のお婆さんは夫にも先立たれ子供はいなかった。さらに近くに３親等内の親族もおらず、ある意味で天涯孤独の状況だったので孤児であった一子を養女として迎えていた。

本来なら喪主は一子が行うが、未成年でしかも小学生でしかない彼女にそもそも喪主など務められるわけがなく、結果、息子の大和がお世話になっており近所でもあった直江家が喪主の代理を務た。

代理を務めたといっても実質的に父親が取り仕切っており、大和にする事は何もなかった。

だからこそ大和は神に言われた通り、昨日からずっと一子の側にい続けた。

本当なら学校に行かなければならなかったが、両親は何も言わずに朝一で学校に休むことを伝えていた。
恐らく通夜や葬儀の手続きで両親は忙しく、一子にあまり構ってやることが出来ないと分かっていたのだろう。だから大和が休んでも一子の側にいる事を許したのだ。

一子は昨日から泣いてばかりだった。
でも大和はそれを止めないし、止めてはいけないと思っている。

『余計な事は言わずに泣きたいだけ泣かせてやれ。それからヤマ、お前も我慢せず泣きたいときは泣け』

昨日の電話の最後に大和が神から掛けられた言葉。
その言葉に従い、昨日から泣き続ける一子の隣で大和も少しだけ涙を流し、一緒にいた翔一も目に涙を浮かべていた。
途中、物凄い勢いで駆けつけてきた百代も、泣き続ける一子の背中をずっと撫で続けた。

一子が泣き疲れて寝静まった頃、神が鉄心を連れて風間家を訪問した。
そこで大和の父親や翔一の父親と相談した結果、通夜は岡本家で行い葬儀・告別式は川神院で執り行う事が決定したのだった。

その通夜で代理として喪主の席に座る父の後ろで、大和は一子の隣で彼女の手に自分の手を重ねて座っていた。

通夜には近所の人たちや地域の子供たちとその親も大勢訪れ、岡本のお婆さんがどれだけ慕われていたかを大和に感じさせてくれた。

そして通夜も滞りなく終了し、明日の葬儀のための準備や後片付けをしていた時、1人の男が怪しい足取りで入ってきた。

常識を弁えていない行動や男の雰囲気に大和の父親の顔が歪む。

そして一子の方に視線を向けると歩み寄って行く。

咄嗟に大和は一子を背に庇い1歩前に出る。いつの間にか翔一も隣に来ており、大和と同じように一子を庇うように立っていた。

だがその様子に気付いた大和の両親が男と子供たちの間に割って入ると、男に何やら話しかけた。

内容は声が小さくてあまり聞き取れなかったが、『家に来る』という単語が聞こえてきた時、大和の母の顔が怒りで歪み父の顔が表情を失くしたのを大和は見て取った。

両親が怒り狂っていると大和は直感した。

結局男は両親から感じ取れる雰囲気に圧されたのか、そそくさと逃げるようにどこか行ってしまった。だが部屋を出る時に一子をちらりと見やり、口元に不愉快にさせる笑みを見せていた。

その時に大和は直感した。

（ああ、あの大人はろくでなしの駄目な奴だ……）

その後で両親からさっきの男について聞いた時、大和は自分の直感通りと思った。

一応遠縁の親戚であり、以前何度か連絡は取っていたかがここ数年

は音信不通。その男の事を知っていた近所の人が一応という事で連絡したらしい。
お婆さんが一子を養子として引き取っていたのも知らなかったし、知ったのも今日この場。

引き取ると言っているが親切心や親心ではなく、どう見ても下種な下心からの申し出だ、と大和の父は言っていた。

今日の通夜はそれで終わったが、どうにも心に引っかかるものが残った大和は、翔一に告別式の前に秘密基地の原っぱに仲間を全員集めようと告げたのだった。

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

§　§　§

――２００４年　５月１５日　土曜日　ＡＭ１０：００――

ｓｉｄｅ　岡本一子

「うぅ……うぅぅぅ」

原っぱにみんなが集まる中でアタシはまだ泣いている。
一昨日から泣いているのに、涙は全然止まってくれなかった。

「よしよし、みんないるから大丈夫だよ」

モロが泣くアタシの頭を撫でて慰めてくれる。

誰も泣きやめと言わない。一昨日からずっと一緒にいてくれた大和も、お泊りさせてくれたキャップも、凄い勢いで駆けつけてくれたモモ先輩も。

こうして秘密基地の原っぱにみんな集まってくれて、みんな慰めるように頭を撫でてくれる。

『今は泣きたいだけ泣け』って1番最初に頭を撫でて言ってくれたジン兄の言葉が凄く嬉しかった。

「ワン子のばあちゃんが死んだなんて……まだ実感できねーよ」

「そうだな優しい人だった。私たちもよく和菓子もらってたしな」

愕然としてまだ実感できないガクトの呟きと、モモ先輩の優しい声。

アタシの中でおばあちゃんとの思い出がどんどん出てきて、また涙が溢れてくる。

ぎゅっと抱きしめてくれている京をアタシも抱きしめた。

みんなおばあちゃんの事を好きでいてくれたのが凄く嬉しくて、でもそう思う度におばあちゃんが死んじゃった事が凄く悲しくなって。

「1つ……問題がある」

大和の言葉にみんなが大和を見る。

「……ワン子の、行く先が無い」

辛そうに言う大和。

抱きしめてくれる京の腕に力が入り、涙をこらえるアタシの頭をモモ先輩が優しく撫でてくれる。

そう、アタシは元々孤児だ。

おばあちゃんは家族がいなかったから、アタシを引き取ってくれた。

親戚も全然いないと言っていたおばあちゃんは、アタシを見た瞬間に引き取る事を決めたって言っていた。

『一子を見た瞬間にこう、ビビビッてきたんだよ。この子となら仲良くやっていける、本当の家族になれるってね』

引き取ってくれた時のおばあちゃんの言葉が頭をよぎった。

「じゃあ、このままだとワン子はどうなるんだ？」

焦ったようなガクトの言葉に、ヒロの小さな呟きが耳に入った。

「施設……かな……」

嫌だ！　そんなの絶対嫌だ！

京にしがみついていた腕に力が入る。

いきなり強く抱きしめられた事に驚いた京だったけど、ヒロの言葉がアタシの耳に入ったのだと気付き、一層強く抱きしめてくれた。

「そんなの嫌だよぅ……みんなと離れたくないよぉ……」

心からの願いだった。絶対にみんなと離れ離れにはなりたくない。

「1人ぐらい親戚いるでしょ！？」

声を荒げるモロに大和は顔を歪めながら答える。

「うん、1人だけ遠縁の男がいるみたいだし、その人から『家に来るかい？』って言われてるんだけど……」

大和の言葉に昨日の男の人が見せた笑顔が浮かぶ。

ぞわっと背中を奔った悪寒に身体が勝手に震える。

嫌だ！　絶対あの人のところなんか行きたくない！

「言われてるんだけど？」

大和に言葉の続きを促すジン兄。

「昨日の通夜の時にチラッと見たけど、ヤバイ奴だ。今日の告別式にも来るだろうから、みんなちょっとそいつを見てくれ」

その大和の言葉にみんな頷いてくれた。

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

ｓｉｄｅ　川神百代

川神院で行われたワン子のお婆さんの告別式。

私たちは参加せず境内の一角でみんな集まっていた。大和とキャップも今日は私たちと一緒にいる。

ワン子と一緒に式に出ると言い張った大和だったが、昨日はワン子がまだ完全に落ち着いていなかったから大和に近くにいるようにしたが、今日は幾分落ち着いているから大丈夫だ、と父親に説得され渋々ではあったが納得した。

そんなわけで私たちはワン子が出てくるのを待っているのだ。

「どんな男なんだ？」

問い掛けるジンに大和もキャップも顔を歪める。

「見ればすぐ分かるよ」

「ああ、1発で分かる」

と、式が終わったのか本堂から次々に人が出てきた。

ワン子は大和の両親に連れられて参列してくれた人たちに頭を下げていた。

悲しいながらもきちんと礼儀正しい行動を取るワン子に、私は少しだけ胸を締め付けられる。

この瞬間に、私は自分の取るべき行動を決めた。

誰に何と言われようが絶対に私の思った通りにしてやる！！

決心する私の肩をジンが軽く触れてきた。
振り向けばまるで全部分かっているかのような笑顔を浮かべている。
ジンは間違いなく私を応援してくれる。それが凄くありがたかった。

「あいつだ」

大和の言葉に振り向くと、そこにはちょうど1人になったワン子に
近付き話しかける男がいた。

ああ、あいつは駄目だ。

「な？　駄目だろ。死んだ魚のような目をしてる」

「加えてあの震えてる手。ありゃあアル中だろ」

私の直感を肯定するように大和とキャップが吐き捨てるように言う。

「うん、あれに渡したら駄目」

「行ったら不幸になるのが目に見えてるね」

京とタカも同意見のようだ。

「ワン子みたいに純真なのは特に汚い存在から死守しなきゃならない」

全くもって同意見だ弟よ。相手があんな男ならこっちも思うままやるだけだ。

「私たちが揃っていれば何でも出来る。今回のこの問題は、私がいれば即時解決だ」

具体策を言い合う大和とガクト、キャップに私は宣言したのだった。

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

§　§　§

――２００４年　５月１６日　日曜日　ＡＭ１０：００――

ｓｉｄｅ　■■一子

「川神院（ウチ）に来ないかワン子」

「――え？」

モモ先輩の言葉にアタシは呆然と答えるしかなかった。

ウチに来いってどういう意味だろう？

「私はお前を妹のように思っている。お前も私を姉のように慕ってくれている。だったらいっそのこと、真の家族になろうじゃないか！」

「モモ先輩……」

思ってもいなかった事に声が震えてくる。
みんな何も言わない。アタシたちを見守っている。
「川神一子（かわかみかずこ）となれ、ワン子」
「……いいの？」
信じられない。でもそうなりたい。
「既に許可は取った。時々遊びに来てジジイの顔とか知ってるだろ？　『あの娘なら喜んで歓迎』だそうだ！　他の奴らもな！」
余りの嬉しさに声が出なかった。それでも何とか振り絞る。
「あ、アタシ……アタシは、絶対そうしたい！！　みんなと一緒にいたい！！　あんな不気味な人のところになんか行きたくない！！」
思いを全部吐き出した。我がままを全部言った。
でも、本当にそうしていいのか自信が持てなくて、アタシ震えた声でみんなに聞いた。
「い……いいんだよね？」
私が見たのはみんなの笑顔だった。
「あったり前だろ」
「……うん」

「聞くまでもねーだろ」

「聞かずに分かりなよ、それぐらい」

「一子ちゃんのしたいようにすればいいよ」

「よく言ったカズ」

「むしろ俺がリーダーとして命令してやる！」

「みんな……」

涙が溢れ出るのを止められない。

「決まりだな、妹よ。これからは私の事をお姉様と呼べ」

「うぅ……うぅぅ……うわ～～ん！！」

流れる涙を拭くことすら忘れて、アタシはモモ先輩――ううん、『お姉様』に抱きついた。

「お姉様……お姉様、ありがとうっ！！」

「ああ。可愛い妹が出来て私も嬉しいぞ」

必死で抱きつくアタシをお姉様は優しく撫でてくれた。

今日この日、アタシは川神一子になった。

第１８話　ワン子、川神一子になる（後書き）

あとがき～！

「第１８話終了。あとがき座談会、司会の春夏秋冬　廻です。今回のお相手は――」

「岡本改め、川神一子よ！」

「今回のお話の主役、ワン子嬢です」

「アタシもやっと川神になったのね」

「そうだね。いやしかし今回のお話はなかなか難しかったよ」

「どうして？」

「情報が少なすぎる。過去エピソードで回想があったけどはっきり言って短い。それを1話にしようとなると原作ない描写をしなきゃならない。しかもお婆さんの死因を勝手に作ってしまった」

「よかったのかな？」

「どうだろう？　でも原作をやってると何となく急死な気がしたんだよ。病気で入院してたような感じはしなかったからね。それだったらその後の身の振り方を周りの大人たちが考えていてもいいと思うんだよ」

「それがなかったから？」

「そういうこと。だから無茶苦茶原作をいじった」

「おお！　やるじゃない」

「褒められる事じゃないだろ、普通は」

「あはは、そうかもね。ねえ、ところで最後のアタシ視点の時なんで名字が塗りつぶされてんの？」

「それはワザと。名字が変わるのはわかってるから。もう岡本じゃいけどまだ川神でもないからあんな風にしたってわけ」

「なるほど～」

「では今回はここまで、次回投稿もよろしくお願いします」

第１９話　壊れかけの雪、少女との出会い（前書き）

第１９話投稿。

題名で分かると思いますが彼女との出会いです。

第１９話　壊れかけの雪、少女との出会い

――２００４年　７月３０日　金曜日　ＡＭ１０：００――

秘密基地の原っぱの真ん中で仰向けになり、ぼうっと空を眺める。

ここでこんな風にする事が出来るのもあと１ヶ月。

つい先月、この原っぱも市の都市開発でビルが建つことが決まった。

最初みんなで物凄く怒ったが、まだ子供の俺たちがどうする事も出来ず、仕方なく受け入れるしかなかった。

だがキャップやガクは秘密基地がなくなるのがどうしても許せないのか、次の候補をヤマとタクを巻き込んで探している。俺とヒロは不参加。

ヒロは『年下だから役に立たない』とガクが言って手伝い免除。

お前より役に立つぞ。

そう思ったのは俺とヤマだけの秘密だ。

俺は『なんか最近ジン兄がリーダーっぽいから俺が率先してやる！』というキャップの言葉で手伝い免除。

そんなわけで候補探しに忙しい男子連中とそれについて回るミヤ（というよりヤマについて回っているのだろう）。

モモはカズが妹になったことで何かにつけて構い倒している。今日もカズの修行にある意味で付きっきりだ。

そういう訳で最近はみんなこの原っぱに余り顔を出さない。
まあ来たところとでここの土地開発が中止になるわけでもないし、否応なしにも感じる喪失感を受けたくないのかもしれない。

「暇だなヒロ」

「そうだねジン兄」

だから今、俺と隣で座っているヒロとぼけっと空を眺める。
最近は原っぱに来ると2人になることが多く、たまに軽い手合わせをするだけで特にする事もなくぼうっとする事も少なくない。

今日はどうするかなと思った時、原っぱの入口辺りに知った気配を感じ勢いをつけて立ち上がる。
ヒロも同じ気配を感じたのだろう、同時に立ち上がっていた。

座って待つようにジェスチャーで示すと、素直に従いヒロは座り込む。
俺は体をほぐすように伸びをしながら、気配のした方へと歩みを進める。

そこには1人の女の子が立っていた。

視界に入った瞬間に感じたのは、ミヤと同じ雰囲気。

銀に見える白い長髪。赤みがかった瞳。そして普通の人より白い肌。

先天性白皮症――白子（アルビノ）か……

初めて見たことで驚き一瞬だけ歩みを止める。だが直ぐに再度踏み

出しボーっとこちらを見ている女の子に近付いた。

「どうかしたの？　こんなところで」

声を掛けるもなんの反応もない。

一応こっちを見ているのだろう。視線は俺の方を向いているが、視界に入れているだけでちゃんと認識していないのかもしれない。

対応に困った俺は彼女の赤い瞳を覗き込みながら、注意深く気を探った。

俺はさっき視界に入れた時、ミヤと同じ雰囲気を感じ取ったが、それは誤りだった。

同じじゃない。ミヤよりもこの少女の方がより深い雰囲気を纏っている。

「君、以前から時々この原っぱに来ていたよね？」

このままではまずいと思った俺は、咄嗟に声を掛けていた。

なぜその言葉に反応したのかは分からなかったが、彼女はただ視界に入れるだけだった俺の存在を、言葉の直後初めて認識した。

「気付いてたの？」

どこか現実離れした声音。

かなりヤバいところまで心が沈み込んでいるのを瞬間的に悟った。

「気付いていたというよりは、気配を感じてたかな？　俺自身は見かけた事なかったから」

「すご〜い。見た事ないのに知ってたんだ」

キャラキャラと楽しそうに笑ってはいるが、なぜか危うい気配だ。

「それで？　今日はどうしてここに来たんだ？　ここはもうすぐビルが建つ事になってるんだけど」

「そ〜なんだ〜。あのね僕、前にここで遊んでた男の子に仲間に入れてって頼んだんだけど〜、断られちゃったんだ」

遊んでた男の子というのは間違いなく俺たちの事だろう。

俺が見たことがないという事は、俺がいない時に誰かに聞いたってことか……

考えられるのはヤマがガクだな。

キャップは断りはしないだろう。タクやヒロは自分で断る前にキャップに相談するはずだ。

消去法で考えるならヤマだ。

ガクは女の子から声を掛けられたら断らない。だがヤマはキャップが言わない限り必要以上に仲間を増やそうとしない。

だがヤマの判断が悪いわけじゃない。

必要以上に仲間を増やしたくないという考えは、確かに俺にもある。

だからといって目の前の少女の危うさは放っておけるものではなか

った。

「俺もその仲間の1人なんだけど、確かに仲間に入るのは難しいかもしれない」

「そ～お？」

「うん。だからと言ってはなんだけど、個人的に俺と友達になろう」

俺の言葉にキョトンとする彼女。
言葉の意味を測りかねているのか、それとも意外だったのか。

「うん。それでもいいよ～！」

だが返事は俺が思ったより明るい声音だった。本当に嬉しく思っての言葉だというのは纏う明るい雰囲気で確信できた。

「じゃあ、僕も友達になるよ」

こちらが気になって近付いて来ていたヒロが俺の後ろから声を掛けてきた。

「ホント！？」

キラキラと目を輝かせながら、俺の後ろにいるヒロを見るために身を乗り出す彼女。

そんな彼女の姿を見て、この姿が本来の彼女の姿、気質なんだと感じた。
それを感じる事が出来ないほど彼女は心の奥に本質を沈み込ませて

いる。
それがいったい何を意味するのか。判断することの出来る材料がない今、うかつに彼女の心に踏み入る事は出来ない。

「うん、君がいいならだけど」

「うん！　ぜーんぜん問題ない！」

楽しそうに話す彼女にヒロもどこか安堵した表情を見せた。
恐らくヒロも彼女の雰囲気を察知したのだろう。だから俺の言葉に乗っかり彼女との繋がりを持とうと考えたのだろう。
そう考えているといきなり彼女が何かを差し出してきた。
なにかと思い見てみると――

「「　マシュマロ？　」」

俺とヒロの言葉が重なる。
それが面白かったのか、彼女はさらに笑顔を浮かべた。

「うんマシュマロ。お友達のしるし～！」

ニコニコする彼女の手からマシュマロを1つ受け取り口の中に放り込む。
何の事はない普通のマシュマロだった。
お友達の印ね。こちらも何か渡すべきかな？
だがあいにく今は何も持っていなかった。

隣のヒロにも視線で問い掛けて見るが、俺と同じで何も持っていないのだろう小さく首を振って答えてきた。

「これで今日から僕たちはお友達～」

きっと彼女はお返しを求めていたわけじゃないのだろう。
嬉しそうにはしゃぐ彼女を見てそう確信したのだった。

それからいろいろな話をした。

彼女の名前は『小雪』。

名字はなぜか言わなかったが、言いたくない、教えたくない理由があるのだろうと判断し、俺もヒロも聞き返さなかった。

もちろん俺たちはフルネームで自己紹介した。

彼女は隣の学区の子で俺と同じ小学６年生。

隣の学区と聞いた時、ふと去年の今頃に出会った同学年の男の子の事を思い出した。だが今は関係ないと判断しすぐその思い出を仕舞った。

同学年という事で俺は彼女のことを『コユキ』と呼ぶことにし、ヒロは『小雪さん』と呼ぶことにした。
一方の彼女はヒロのことは『ヒーくん』と呼び、なぜか俺のことは同学年なのに『ジンにー』と呼んできた。

あれか？　俺が仲間から同い年なのに『ジン兄』と呼ばれてる事を

話したせいなのか？　それを彼女が気に入ったというのか？

さりげなく落ち込む俺と慰めるヒロを、コユキは不思議そうに見ていた。

その後は本当に他愛もない遊びをした。

駆けっこ。鬼ごっこ。隠れんぼ。

人数が3人しかいないからそんなにいろんな遊びは出来なかったが、それでも彼女はとても楽しそうにしていた。

お昼が過ぎ、流石にお腹が空いてきたので今日はこれで解散となった。

そう言った時、コユキの顔が少しだけ歪んだように見えた。その感じはミヤと同じものだった。

家に帰りたくない？

瞬間的によぎった考えを余り肯定したくなかった。

だからと言って今すぐに何かを出来るわけでもない。結局解散となり、俺とヒロは原っぱを離れコユキはそんな俺たちを見えなくなるまで手を振って見送っていた。

「どう思うヒロ？」

隣を並んで歩くヒロに短く問い掛ける。

俺もヒロもさっきまでの笑顔を浮かべていない。

「京ちゃんと同じ雰囲気だったね。でもジン兄はそれ以上に感じたんだよね？」

「ああ、コユキはミヤより深い」

俺のように感じる事はなかったみたいだが、やっぱりヒロはコユキのおかしい雰囲気を察知していた。

ミヤと同じ雰囲気と言ったがもちろん今のミヤの事じゃない。

1年前のミヤと同じ雰囲気。

イジメられている雰囲気だ。しかもコユキはそれ以上に深い。

解散の時に見せた一瞬歪んだ表情。先に帰るのではなく俺たちを見送ったこと。

それから推測すると1番考えたくない答えが浮かんでくる。

先ほど瞬間的によぎった『家に帰りたくない』という考え。つまり、家では虐待、あるいはそれに近い何かを受けているという事だ。

「どうするジン兄。みんなに相談してみる？」

こちらに視線を向けるヒロに首を振る。

「やめよう。コユキが前に仲間に入るのを断られたのは聞いただろ？　推測だけど恐らく断ったのはヤマだ」

「大和くんが？」

「推測だがな。だけどもし本当だとしたらヤマは自分を責める」

それは間違いないと断言できる。

ミヤと同じ雰囲気を纏った子を仲間に入れなかったのに、ミヤは自分から率先して仲間に入れるようにした。その事実を知った時のヤマの心の傷を想像する事は容易だった。

俺の言葉に同意するようにヒロは頷いた。付き合いはヒロの方が長い。

「出来るだけ仲間のみんなとは会わせないようにしよう」

俺の言葉が意外だったのか顔ごと俺の方を向く。

「幸いにもキャップたちは次の秘密基地探しに必死だし、モモはカズを構うのが楽しくてしょうがない状態だ。なんとか会わせないようにするのは可能だろう」

「そうかもしれないけど、いったいどうするの？」

言葉にしながら考えを纏める。

「恐らくコユキが学校でイジメを受けているのは間違いないだろう。服装を見ただろ？　あれは間違いなく何日も同じ服を着ている証拠だ」

頷くヒロを見て俺は言葉を続ける。

一緒に遊んだコユキの服は、一応洗濯はしているようだったが、落ち切っていない汚れもあったしボロボロでよれていた。

「それから推測でしかないけど、家でも虐待に近い何かを受けている可能性がある」

その事は考え付かなかったのだろう。ヒロは俺の言葉を聞いて驚いた表情を見せた。

あくまでも俺の推測でしかない。だが確信めいた何かが俺の中にはあった。

ふと思った。

今回は俺の役目なのだろう。

ミヤはヤマに助けを求め、ヤマはきちんとミヤを救った。

だから今度は俺がやらなきゃならないのだろう。

コユキは別に助けを求めてはいなかったし、求めているような感じを受けなかった。

自分が不幸だという事を余り感じていないのだろう。

そして恐らく虐待、あるいはそれに近い何かを受けていても親が好きなのだろう。それで自分の心を守っているのだろう。

あるいはそう思う事すら出来なくなっているほど心が壊れか掛けているのか。

でも俺は見てしまった。

ほんの一瞬ではあるが歪んだあの顔を。

そして俺は自分から手を差し伸べてしまった。

友達になるという救いではないかもしれないが、彼女のために何か

したいと手を差し伸べてしまった。

ミヤの事は俺たち子供でもまだ何とかなる範囲だった。
コユキの事はもしかしたら子供でしかない俺が、どうこう出来る範囲をもう超えているかもしれない。

でもだからこそ覚悟をしなければならないのかもしれない。
子供である俺がどこまで出来るか、そしてどのような大人に頼らなければならないのか。

「ヒロ」

「なにジン兄？」

表情を引き締め言葉を返して来るヒロに俺は視線を向けることなく言葉を続ける。

「とりあえずさっき言ったようにみんなにはこの事は言うな。難しいとは思うけど感じ取られるような事はしないでくれ」

「モモ先輩に会わなければなんとかると思うけど……頑張る」

「悪いな」

「ううん。ジン兄が言うんだから何か理由があるんでしょ？　それでジン兄はいったいどうするの？」

心配層に問い掛けてきたヒロの頭に手を乗せ軽く叩く。

「俺が出来る事を出来る範囲でするさ。知ってしまった事を放って

おくことは出来ないからな」

「実際には？」

「まあ、まずはコユキの周りの状況を探ってみる。今日だけじゃあ分からない事が多すぎるからな」

「無茶しないでね。なんか僕たちの出来る範囲を超えてると思うんだ」

さすがヒロ。気付いていたか。

でもやめろと言わないのは俺を信じてくれているからかな？

「同感だ。だからこそ見極めるよ。どこまで出来るかをな。最悪どうにも出来ない状況だったら、ちゃんと大人に頼るから心配するな」

そう言い切った俺にヒロは呆れたような笑顔を浮かべてきた。

「ジン兄は僕たちにとって超人みたいな存在だからね。実際はジン兄の行動のどのあたりを心配していいのかさっぱり分からないよ」

「あのな、俺は普通の小学６年生だ」

「そう思ってるのはジン兄だけだよ。自覚しようね」

生意気にも言い返してきたヒロを軽く小突きながら、さて何から行動するかな、と思考を巡らせる俺だった。

第１９話　壊れかけの雪、少女との出会い（後書き）

あとがき～！

「第１９話終了。あとがき座談会、司会の春夏秋冬　廻です。今回のお相手は――」

「暁神です」

「さて、今回のお話なんですが……」

「やってしまったな」

「はい、やってしまいました。榊原小雪のお話」

「本格的なルート潰しだな。１６話のといい今回の話といい」

「否定はしない。この話も最初から考えていたから、つまりそれは最初っからあのルートを潰すということだからね」

「それより時間がずれていないか？　原作のエピソードだとミヤが入る前の頃だろ？」

「一応フォローは入れてるけどね。原作通りに断られた後の話。だから原作のあの頃よりも何となく深い感じにしたんだけど……」

「うまく伝わっているかどうかは不明だな」

「難しいね、ホント」

「それで、今回も続きだけど何話構成で考えてるんだ？」

「とりあえず3話構成。場合によっては4話になるかも」

「続きものとしては最長になるのか」

「まああのルートを潰すほどの話だからね。では次投稿も期待しないで待っていて下さい」

第２０話　壊れかけの雪、少女を囲う檻（前書き）

第２０話投稿。

ちょっときつい表現がありますので注意してください。

第２０話　壊れかけの雪、少女を囲う檻

ｓｉｄｅ　川神百代

最近ジンの様子がおかしい。

いや、様子というよりは行動がおかしい。

修練はちゃんとやっているが、それが終わるとここ2週間毎日出かけては夕方遅くまで帰ってこない。

何をしているのかさりげなく聞いても答えてはくれない。

だが何となく。何となくなのだが。

女の影があるような気がする。

確信はないし証拠もない。だが私の“女としての勘”が間違いないと言っている。

彼女が出来たのか、はたまた好きな子を口説いている最中なのか。

気になる事だが今の私にとっては実に些細な事だ。そう些細な事だ。

ふふふふふ……

笑いが込み上げてくる。

なぜか隣にいたワン子がガタガタと震えているが今はどうでもいい。

私の心を不愉快にしてくれた責任は取ってもらおう。なあ？

ジン？

side out

§　§　§

――2004年　8月13日　金曜日　PM1：00――

side　暁神

結果報告。

モモにばれました。

未だにばれた理由が分からない。

確かにこの2週間はコユキの事を調べたり、ヒロと一緒にコユキと遊んだりで毎日出かけていたが、怪しまれるような雰囲気は出していなかったし、直接聞かれてもごまかせていたはずだ。

なのに昨日。

さてそろそろ寝ようかと思ったその時。

部屋に入ってきたモモが言い放った言葉。

『さてジン。いい加減話してもらおうか。ここ2週間お前が一生懸命に何かをしているのはいったいどんな女のためだ?』

薄ら寒さが背中を奔った。悪い事をしてるわけじゃないのになぜか物凄い罪悪感を感じ、問答無用で土下座をしなくてはならない衝動に一瞬だけど駆られた。

正直に言おう。怖かった。

モモは笑顔を浮かべていたのに、その笑顔がなぜかさらに恐怖を煽った。

いわれもない罪悪感を感じつつも、えも言えない恐怖に真っ正直に全て洗いざらい話した。

あの原っぱで小雪いう少女と会った事。その雰囲気が昔のミヤ以上に危うかった事。恐らくイジメと家庭内で虐待に近い仕打ちを受けているだろうという事。

俺の話を聞いたモモは自分も手伝うと言ってきた。駄目だといっても無理やりついてくるのは目に見えていたため仕方なく了承した。

だがその言葉を聞きなぜか安堵している俺がいた。

その後、どうして気付いたのという俺の問いにモモは簡潔に答えた。

『女の勘だ』

返す言葉がなかった。

そして今日の朝、ヒロにモモにばれた事とその理由を話した時の返答。

『女の人って怖いね』

つくづく返す言葉がなかった。

「それでジン。今日は何を調べるんだ？」

隣をやけに上機嫌に歩くモモに小さく呆れた溜息を吐く。

今、俺とモモは川神市内だが隣の学区になる地区に来ている。本当はいつも通り俺ひとりで来るつもりだったが、昨夜モモにばれたので今日から同行となった。ちなみにヒロは原っぱでコユキと一緒に遊んでいる。

「とりあえず必要な事に関してはだいたい調べは付いた」

「それで？」

「思った通り、隣の学校でだがコユキはイジメを受けていた。しかももう3年ぐらい続いているらしい」

子供とはやっぱり残酷だ。

同年代であろう子たちに聞いてみたのだが、俺が隣の学区の児童だというのにそれすら関係がないかのように、いとも簡単に答えてくる。

恐らくクラスや学年だけでなく、学校の児童全員に認識されているイジメなのだろう。

「話を聞いて、理由も何ともふざけた理由だった」

「理由？　京の時みたいか？」

「大まかはな。最初は外見だった。コユキは白子（アルビノ）なんだ」

「アルビノ？」

聞いた事のない言葉にモモが首を傾げる。

「先天性白皮症の事だよ。遺伝子が関わっている生まれつきの病気で、髪や肌が白く眼も赤くなる」

「カッコイイじゃないか」

「そう思う子は少ないってことさ。子供たちにとってみれば自分たちとは違う存在は格好のイジメの標的になる。小学校に入ったばかりの頃は気味悪がれて無視されていたらしい」

真剣になって聞くモモに1度だけ視線を向け言葉を続ける。

「その状況が変わってきたのはコユキの外見じゃなくて格好だ」

「格好？」

「そう。聞いたところ殆ど同じ服を着て学校に来ていたらしい。場合によっては1週間もずっと同じ服だった時もあったそうだ。しか

も洗わずにいた時もあったらしい」

その結果がミヤと同じ病原菌扱い。

頻繁にイジメが起きだしたのが小学3年生の時。それから約3年、未だにイジメは続いている。

「理由は何だ？　なぜそんな格好で学校に行く？」

当然の疑問だった。

だからこそ俺は家庭内に問題があると考えたのだ。

「理由はコユキの家」

俺の答えにモモの表情が歪む。恐らくミヤの時の事を思い出したのだろう。

学校でのイジメについては、実は聞き込みを始めた1日目と2日目でほぼ全て調べが付いた。それほどまでに彼女のイジメは全児童が知っていた。

だから2週間のほとんどが理由があるであろう、コユキの家の事情についての調査だった。

これが意外と大変だった。子供はイジメる奴の家の事情などお構いなしだ。ある意味で最初は理由があったのかもしれないが、イジメが続けばそれ自体がイジメの理由になる。

つまり他がイジメるから自分もイジメる、といった感じだ。

だから親の世代に聞いてみたが、ほぼ全員が口を紡ぐ。

まあどう見ても小学生、よくても中学生でしかない俺が聞いてきたのだから、言っても意味がないという感じの人もいたが、あからさまに関わり合いたくないといった雰囲気で断ってきた人もいた。

だからあまりやりたくなかったのだが、コユキの家の近所のひとり暮らしお婆さんの家に聞き込みに行った。コユキの家の住所は子供たちの情報で既に入手していた。

「育児放棄（ネグレクト）と家庭内暴力があるんだよ。コユキの家は」

「ネグレクト？」

「育児放棄。親が子供を育てない虐待の一種だ」

言った俺も、聞いたモモも表情を曇らせた。

コユキの家は母子家庭。

父親は既に不在。死んだのか離婚したのかは不明。コユキが生まれた頃にはすでに父親の姿はなかったらしい。

家は母親の実家だが祖父母は既に他界。母親が高校を卒業する頃に事故で亡くなったらしく、実質コユキの家族は母親のみ。

この母親は中学生の頃から素行が悪く、高校生の頃には所謂札付きの不良と関係があったらしい。

近所のお婆さんの話では、コユキは恐らくその男との子供で男は母親が妊娠し堕ろせないと分かった途端に姿を消したのではないか、

と言うのが近所で広まっている噂。
根拠はないが殆どの人がそうだと確信しているらしい。

そして生まれた子供は先天性白皮症――白子（アルビノ）だった。

母親は狂乱して生まれたばかりのコユキを殺そうとしたらしい。

その時は医者によって止められ、子供が先天性の遺伝子疾患だという説明を受けたのだが、母親は気味悪さを拭いさる事が出来なかったようだ。

説明を受けてさすがに殺す事には躊躇いを感じるようになっていたらしいが、それでも育てるという事を殆ど放棄し、気味悪さから暴力をふるうようになった。

コユキが生まれて数年は祖父母の残した財産で生活出来ていたが、それが出来なくなり母親が働きに出だした頃から、本格的な虐待が始まった。

一応死なない程度の食事や着れるような服は与えていたらしいが、それも本当に最小限で母親はコユキの存在を殆ど無視し、気に入らない時は暴力をふるっているらしい。

近所の人たちは関わり合いをさけ、心配になったお婆さんが掛けあってみたものの、逆に悪し様に罵られたらしい。

その結果、腫れものを扱うかのような感じで誰もコユキの家について言及する人間はいなくなっていった。

聞いて調べた結果をモモに話した。

いつの間にか立ち止まっていたモモは、話の内容をどうやって受け止めていいのか分からないのだろう、複雑そうな顔をしていた。

話の内容が衝撃的過ぎたのだろう。

俺ですら最初はどう受け止めるべきなのか分からなかったのだ。

「それで……ジンは今日、どうするつもりなんだ」

何とか折り合いをつけたのだろう。モモは少し声を低く抑えて聞いてくる。

「とにかく1度コユキの家を訪問してみようと思ってる」

「追い返されるのが目に見えてるぞ」

「だろうな。でも別に何かするわけじゃない。ただの友達として1度は正攻法でいかないと反応が分からないかな」

まあ、それならそれで別の手段を講じるだけだけどな。

そう思いながらもモモと並んでコユキの家に向かう俺だった。

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

ｓｉｅｄ　篁緋鷺刀

今日遊ぼうと約束をしていた小雪さんが、時間になっても来なかっ

た。

いつもは僕たちより先に原っぱに着ているのが常だったのに、今日は僕が２０分前に着ても姿がなく先に待っていた。

最初はこんな日もあるだろうと思っていたが、約束の時間になってもまだ姿を現さないのをおかしく思いながら、同時に焦りを感じた。

友達になってまだ2週間だが、小雪さんが遅れる事は1度もなかった。

今日は僕が小雪さんと遊ぶと同時に、ジン兄とモモ先輩が小雪さんの家を訪問する事になっている。

何かあったのだと思うけど、もし何もなかった時に僕がここにいなかったら小雪さんはどう思うだろうか？

ジン兄から小雪さんの事を聞いた。

ジン兄の考えていた通り確かにイジメがあったみたいだし、詳しくは教えてくれなかったけど、家庭内でもやっぱり何かある様子だった。

そんな状況の小雪さんが僕がいない間に原っぱに来たら、裏切られたと思うかもしれない。

そう考えるとうかつにここから動く事はできなかった。

「ひとりでどうしたの、ヒロ？」

そんな僕に声を掛かる。
振り返ってみるとそこには一子ちゃんと京ちゃんがいた。

「2人はどうしたの？　最近はあんまりここに顔出さなかったのに」

焦りながらも普通に問い掛ける。

「もうすぐここもなくなっちゃうから、ちょっと行ってみようかって」

「うん、見納め」

感慨深く原っぱを見渡す一子ちゃんの京ちゃんだったが、僕にしてみればちょうどいいタイミングだった。

「ゴメン、ちょっと2人に頼みたい事があるんだけどいいかな？」

「なになに？」

「私たちに出来る事ならやるけど」

2人の了承の返事に頷く。

「実は今日、ここで友達と会う約束をしてたんだけど、時間になってもまだ来ないからちょっと様子を見てこようと思ってるんだ。でも行き違いになるかもしれないから少しの間ここにいてほしいんだ」

僕のお願いに顔を見合わせた2人。
お互い頷き合うと代表して京ちゃんが言葉を掛けてきた。

「別に構わないけど……いつまでここにいればいいの？」

「３０分ぐらいかな。それだけあれば往復できると思う」

「うん。じゃあ３０分以内にその子が来たら、タカが様子を見に行ったからここで待っていてほしいって伝えればいいんだね」

「うん。お願いね」

そう言うと、僕は２人の返事を聞く事なく駆け出した。

不思議そうな視線を背中に感じながら、僕は腕時計で時間を確認する。

ジン兄たちが家を訪問するのは、遊ぶ約束の時間から３０分後。

現在ＰＭ１：２０。

急げば直前でジン兄たちに追い付ける。

そう考えた僕は走る速度を上げた。

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

ｓｉｄｅ　暁神

目の前にある家を見る。

お世辞に綺麗とは言えないが、汚いと言うほどでもない。

コユキの母親は夜の仕事をいているらしく今の時間なら家にいるはずだ。

1度大きく息を吐き、インターフォンを押すが反応がない。

2度3度押してみるが音もしないところをみると、壊れているのかそれとも切っているのか。

「どうする？」

俺と代わって何度もインターフォンを押しているモモ。

「とえあえず直接玄関のドアをノックしよう」

そう言って門扉に手を掛けた時、後ろから声が掛けられた。

「ジン兄！　モモ先輩！」

そこにいたのは原っぱでコユキと遊んでいるはずのヒロだった。

「ヒロ？　何でここにいるんだ？　原っぱでコユキと遊ぶ約束じゃあ……」

「それが時間になっても来なかったんだよ！　今までそんな事なかったから気になって来てみたんだ！」

コユキが約束の時間になっても来なかった？

俺の言葉をさえぎって言ったヒロのありえない言葉に、嫌な予感がした。

手を掛けていた門扉を急いで開けると、玄関のドアに続く小さな階段を一足飛びで飛び越える。

「ごめん下さい！　すいません！　どなたかいらっしゃいませんか！？」

激しく玄関を叩きながら大声で呼びかけるが反応はない。
家の中の気配を探ってみれば、確かに2人の気配が感じられる。1つは間違いなくコユキの気配なのだが、何やら様子がおかしい。

嫌な予感がますます大きくなっていく。

返事を待たず玄関のドアレバーを引っ張るが鍵が掛けられていて開かない。

「ジン！」

家の中の異様な気配を察知したのだろう、後ろにいたモモが声を荒げる。
左で握っていたドアレバーを右に握り変えて思いっきり力を込めて引っ張る。
鍵が壊れる音と同時にドアが開き、俺は土足のまま玄関を上がり真っ先にリビングへと駆け込んだ。

視界に入ったのは、コユキの首を両手で絞めている女性の姿。

「コユキ！！」

馬乗りになっていた女性を突き飛ばす。
テーブルの脚に背を打ち付け痛みを耐えている女性を組み伏せた。

顔立ちが似ている。恐らくコユキの母親なのだろう。

「何をしているんだ！？　あんたは！？」

声を張り上げるが反応がない。

何も言ってこない事をいぶかしく思い、顔を覗き込んでぞっとした。

彼女の眼は何も見てはいなかった。焦点の合っていない眼がただ虚ろに見開かているだけだった。

「ジン！」

慌てるモモの声に女性を組み伏せながら顔を向ける。

モモは血の気の引いた顔をしていた。

「この子……息してない」

……っ！？

「緋鷺刀！　俺の代わりにこの人抑え込んでろ！！　百代！　急いで救急車と警察を呼べ！！　呆けるな！　早くしろ！！」

思考の空白は一瞬。

俺は組み伏せている女性から手を離し、未だに呆けているモモとヒロに指示を出すと、ぐったりと動かないコユキの側により心肺蘇生を始める。

恐らくそんなに時間は経っていないはずだ！　蘇生の可能性はまだ高い！

心臓マッサージと人工呼吸を繰り返す。

死ぬな！　絶対に死ぬんじゃないぞ！　コユキ！！

救急車が到着するまで5分。

俺はその間ずっと心肺蘇生を繰り返していた。

第２０話　壊れかけの雪、少女を囲う檻（後書き）

あとがき～！

「第２０話終了。あとがき座談会、司会の春夏秋冬　廻です。今回のお相手は――」

「引き続き、暁神です」

「さて今回のお話ですが、小雪のイジメ事情についてです」

「ある意味で壮絶だな」

「まあね、学校の方は京のイジメの時と殆ど同じだと思うけど、さすがに家庭内での描写はオリジナルで考えないといけなかったからね」

「それであの内容というわけか」

「矛盾してる点もあるかもしれないけど、あまりツッコミをしないでほしいと思う」

「コユキの生まれとか母親の経緯とかもオリジナルだろ？」

「そうだね、原作完全無視」

「しっかし最後のシーンは……」

「そうだね。あのシーンは原作にも似たシーンがあったけど小雪の

話をするには避けて通れないシーンだと思ったんよ」

「なるほどね。それであと何話ぐらい続くんだ？」

「う～ん、あと2話かな？　場合よっては3話」

「そんなに書くことがあるのか？」

「書くことというより、書いていくとだんだんと長くなってしまうのよ」

「収拾ぐらいつけような、ちゃんと」

「まあそんなんだけどね……では、まだ続く小雪のエピソードですが、次投稿もよろしくお願いします」

第２１話　壊れかけの雪、少年との再会（前書き）

第２１話投稿。

あの少年の再登場にしてついに正体が。

第２１話　壊れかけの雪、少年との再会

コユキは一命を取り留めた。

あの後到着した救急車の中で病院に向かう途中で息を吹き返した。
救急隊員の人も到着までの心肺蘇生の行為が的確だったと褒めてくれた。

到着した病院のロビーにある長椅子に腰を掛けた瞬間、一気に力が抜けた。

コユキはいったん集中治療室（ＩＣＵ）に入れられたが、医者の話では特に異常はなく、心肺停止したため一通りの検査はするが、恐らく異常は見つからないだろう、との事だった。
的確な心肺蘇生をしてくれていたお陰だと医者にも褒められた。

『もし』の可能性が消えなかった俺は、医者の言葉に本当に安堵したのだった。

救急車に乗ったのは蘇生行為をしていた俺だけ。
モモとヒロは現場だったコユキの家に、救急隊員の１人と一緒に警察の到着を待って事件の経緯を話しているだろう。

そうだ。鉄心さんたちにも連絡をしなきゃ……モモたちも連絡したかな？

そう思い、抜けていた力を入れ立ち上がるとロビーの一角にある公衆電話に向かって歩き出す。

「ハイ、川神院ですガ？」

数回の呼び出し音の後、電話に出たのはルー師範代だった。

「ルー師範代ですか？　神です」

「オー！　神！　大丈夫かイ？」

こちらの安否を聞いてきたという事は、連絡はいっていると考えて間違いないだろう。

思った通り、あの後すぐにモモが鉄心さんに連絡をして、鉄心さんはモモたちのいる現場の方に向かったらしい。

ルー師範代は鉄心さんの命で、俺の連絡を待っていたとの事だった。

「百代たちの方には鉄心様が向かったから大丈夫だと思うガ、神、君は今、病院からだと思うガ葵紋病院にいるネ？」

「はい……そうです」

「了解した。後で迎えに行くから少しの間、待ってなさイ」

そう言って電話を切ろうとしたルー師範代に少しだけ慌てる。

「あの！　モモとヒロの方はどうなりました？」

俺の質問に一瞬答えるかどうか迷った感じだったが、ルー師範代は隠さず答えてくれた。

「警察の相手は数分後に到着した鉄心様がしたヨ。百代と緋鷺刀くんは門下生に葵紋病院まで送るように言ってあるヨ」

「詳しい事情については……」

「ワタシはまだ分からない。君が帰ってから鉄心様と話せばイイ」

「分かりました。では待ってます」

電話を切り、１つ大きな息を吐く。

数秒公衆電話の前で目を閉じる。と、脳裏に浮かび上がってきた余りに衝撃的過ぎた光景に、暗い感情が沸き上がってきた。

その感情を振り払うように顔を振ると、閉じていた目を開け正面玄関前のロビーへと歩き始めた。

到着したロビーの一番端の長椅子の端っこに腰を下ろした俺は、天井を見上げだらしなく口を開いてぼけっと座る。

今はあまり考え事をしたくなかった。考えれば考えるほど嫌な感情しか浮かび上がってこないからだ。

１度心を空にしないと、心が全てその感情に喰われてしまう気がした。

「おや？　貴方は……」

そうやってぼうっとしていた俺に、思わずといった感じの声が掛る。

聞き覚えのある声に、そちらの方を振り向いた俺の視界に入った姿は、思った通り去年の夏の日の多馬川で出会ったあの少年だった。

「君は……」

いきなりの再会で少しだけ呆然とする俺に、彼は柔らかい笑みを浮かべる。

「こんなところでお会いするとは、何と言っていいのやら」

「不思議な気分だな」

その笑みにつられて俺も笑顔が出た。

空にした心に少しでけ穏やかで、心地の良い気が満ちてきた。

「去年の出会いは一期一会だと思ったから名乗り合わなかったけど、今回のこの出会いで一期一会ではなくなったな」

「そうですね。ではこの出会いは何でしょうかね？」

「さあ？　それはこれからの俺たちの行動で決まるんじゃないかな」

「どのような出会いになるのかは私たち自身で決める、という事ですか」

どこか問答のような会話の応酬に、あの時のやり取りを思い出し小さく吹き出した後2人して笑い合う。

彼は変わっていなかった。いや何か吹っ切れたような、それでいて強い決意を秘めているような雰囲気を纏っているから心境の変化はあったのだろう。

でも、彼の本質は去年のあの時のままだった。

「さて、それじゃあ改めて自己紹介と行こうか」

「そうですね。この出会いが一期一会でなくなったのなら、お互い

呼び名が必要になりますからね」

笑い声をひそめて言う俺の言葉に彼は肩をすくめて同意する。

俺は右手を差し出しながら自己紹介をする。

「暁神。以前も言ったけど川神院居候の孤児だ」

「葵冬馬です。この葵紋病院の院長の息子です」

彼――葵冬馬も自己紹介をしながら、俺が差し出した右手に自分の手を重ねるのだった。

「それで暁くんは今日はどういった用事で病院に？　どこか調子が悪いのですか？」

玄関ロビーの長椅子に並んで腰かけながら、お互いの近況を話しをした後、思い出したかのように葵くんは問い掛けてきた。

「俺の事は神でいいよ」

「では神くんと。私の事は冬馬で結構です」

「分かった」

「それで？　病院にいる理由はどうしてですか？」

お互いの呼び名を決めた後、改めて問い掛けてくる冬馬に俺は正直に答える。

「別に俺はどこも悪くないさ。ただ救急車で運ばれた子の付き添いで来ただけ」

俺の返事に心当たりがあったのだろうか。冬馬は考え込むように腕を組むとポツリポツリと言葉を発した。

「先ほど搬入された一時心肺停止したという女の子の事ですか？小学６年生ぐらいの女の子で同学年の男の子が付き添いで来ていたと。何でもその男の子が救急車に乗せる前に的確な心肺蘇生法（CPR）を行ったので一命を取り留めたと看護師の方たちが騒いでいるのを聞きました」

結構噂になっているようだ。

容体を聞いた後すぐにその場を離れたため、その男の子が俺だと言う事はまだばれていないみたいだ。

「どうやら貴方は今この病院で噂のヒーローのようですね」

「よしてくれ。そんな柄じゃない。だから冬馬も黙っててくれな」

そんな俺の反応が珍しかったのか、一瞬だけ驚いたような表情を見せたが直ぐにいつもの穏やかな笑顔を浮かべ答えてきた。

「ええ、分かりました。せっかく新たに出来た友人の嫌がる事はしないでおきましょう」

「友人じゃなかったら言いふらすつもりだったのか？」

言外から感じ取った不穏な気配にいぶかしげに問う俺を、面白そう

に見つめ口元を歪めた冬馬は肩をすくめるだけで答えた。

さてどうでしょうとでも言いたげだなこいつ。言いふらす気満々だったな。

問い詰めてやろうかとも考えたがやめておく。それよりも聞きたい事があるのを思い出し、躊躇いはあったが思いきって聞いてみる事にした。

「冬馬……その子、白子（アルビノ）なんだけど、知ってるよな？」

ピクリと小さく体を震わせる冬馬。やっぱり知っているようだった。

「同じ学校の同学年の子だよな？」

「……『白雪姫』のことですね」

「白雪姫？」

冬馬の口から出た単語にオウム返しに問い掛ける。

『白雪姫』ってあれだよな？　グリム童話が原作で絵本や世界名作劇場とかになってるあの『白雪姫』の事だよな？

でも『白雪姫』っていいイメージだろ？　何でイジメられているはずのコユキにそんなあだ名が付けられてるんだ？

軽く混乱している俺に冬馬は言葉を選ぶような感じで問い掛けてくる。

「神くんは……彼女の境遇を知っているんですね」

「ああ」

短い言葉で肯定する。

1度心を空にしたおかげで再び暗い感情が溢れ出て来る事はなかったが、今は余り自分の口からは出したくない話題だ。でも理由を知るためには我慢しなければならい。

「どこで知ったのですか？」

「知ったというより調べたんだよ」

そう言って俺はコユキとの出会いと、その危うい雰囲気を感じ境遇を調べるためにここ2週間、聞き込みをしていた事を説明する。

「なるほど、そう言う経緯があったのですね。なら隠しても意味はないでしょう」

いったん言葉を切り大きく息を吐く冬馬。

「彼女のそのあだ名はある意味で皮肉ですよ。最初に言い出したのは女子たちです。彼女は確かに白子（アルビノ）ですが外見は綺麗で可愛らしい女の子です。それを妬んだのでしょう。結果、その外見と名前の『姫川小雪』から付けられたのが『白雪姫』です」

そうか。コユキの名字は『姫川』だったのか。

そういえば門の表札を見ていなかった事に気付いた。そしてコユキがどうして名字を言わなかったのかが何となく分かった気がした。

聞けば俺も外見と名前から『白雪姫』を連想しただろう。

だからコユキはイジメに繋がる名前を、せっかく友達になった俺やヒロの口から聞きたくなかったのだろう。

「でもある意味でそのあだ名は効果的でしたよ。みな白雪姫の童話は知っていますからね」

どこか遠くを眺めながら話し続ける冬馬。
その瞳に浮かんでいる感情はいったい何だろうか？　後悔？　それとも懺悔？

「女子たちはここぞとばかりにイジメを始めましたね。その姿がまさに白雪姫に出てくる女王そのものの、醜い姿だと気付かずにね」

「皮肉だな。どっちにとっても」

「ええ、まさにその通りです。一時期は『毒リンゴ』と称したイジメまであったそうです」

冬馬の言葉の中の『毒リンゴ』という単語が気になった。
普通に考えれば食べのもの中に、何かを入れるといったイジメを想像するかもしれないが、コユキの雰囲気から察するに、それは揶揄的な表現なのだろう。

考え至った答えに思わず確認の言葉を発する。

「まさかその『毒リンゴ』って……」

「さすがですね。ご察しの通りです」

つまりはミヤの時の『自殺させる会』と同じことか。

だが揶揄的な表現にしても酷すぎる。それを意味するところは『殺す』ことだ。
確かにその場のノリや勢いがあったのかもしれないが、自分の優越や快楽、愉悦のために人の『死』を連想するような言葉を使うのはいただけない。

「ですがイジメは去年のある日を境に止まりました」

「止まった？」

「イジメがなくなったわけではないのですが、簡単に言うと関わりたくないから無視するようになったんです」

「どうしてだ？」

俺の問いに冬馬は厳しい表情で答える。

「笑ったんですよ……」

考えもよらなかった答えに、一瞬思考が停止する。
言葉の意味を考えても理解が出来なかった俺は、呆然と聞き返していた。

「笑った……？」

「そうです。去年の夏休み以降、何をしても笑うようになったんですよ、彼女は。だからみんな不気味になってイジメを止め、関わらないよう無視することにしたんです」

その言葉を聞いて唐突に悟った。

それはコユキが選んだ自己防衛手段だったのだろう。“笑う”という行為を取ることで壊れかけていく心を守るための本能的な手段。

コユキの心はそこまで深く沈んでいたのだ。

学校ではイジメ。家でも母親からの虐待。
自分の居場所がなく、頼れるはずの親から逆に煩わしく扱われる。
まだ小学生でしかない少女は周囲の大人に頼る術を持っていなかった。

その結果が壊れる前に心を閉ざす事。でも笑っていれば誰かが気付いてくれる。

コユキのあの態度や行動は恐らくそんな本能的な思いからのものなのだろう。

気付くのが遅すぎたのかもしれない。
そんな考えが頭をよぎるが、まだ俺は自分の出来る事を全てやったとは思っていない。それなのに諦めるのは無責任に投げ出すのと同義だ。

なら、出来る事をやろうじゃないか。

「冬馬、お前はコユキの家庭状況を知ってるか？」

「家庭状況ですか？　いいえ、さすがにそこまでは」

まあそうだろう。いくら何でも同じ学校の同級生という接点しかない子の家庭事情など、普通は知りもしないし知ろうとも思わない。
特にイジメられている子の事は。

「コユキは虐待を受けていたんだ」

そう言って俺は冬馬にコユキの家庭事情と現状を話した。

母親の事。生まれた時の事。今までの事。

そして今日病院に運び込まれた事件の事。

冬馬はいつもの笑みを消し、真剣な表情でずっと俺の話を聞いていた。膝の上に肘を置き組んだ両手で口元を隠し、ただじっと床を見つめながら。

その瞳に見えた感情は、嫌悪と同情。そして共感だった。

それを見て去年の会話を思い出す。そう冬馬は父親に絶望と嫌悪に近い感情を持っていた。今はそれに対して何かしらの行動を取っているように感じるが、詳しい事は聞く気はない。

「……子は親を選べないものですね」

話を聞き終わった後、数秒の沈黙の後にポツリと漏らした冬馬の言葉に、俺は言葉を返すことが出来なかった。

父親に絶望した冬馬。

母親に虐待されているコユキ。

そして親に置き去りにされた俺。

似ていないようで、どこか共感できる境遇が俺たちはあった。

だからこそ、俺は冬馬にコユキの家庭事情を話したのかもしれない。
普通なら小学生の冬馬に話しても意味がない事だと分かっていたのに。

「ジン！」

俺たちの間の静寂を破るように、玄関ホールに駆け込んできたモモの声が響く。
声のした方を見るとモモとヒロが門下生の人と一緒に立っていた。

「お友達が来たようですね」

「そうみたいだな」

俺は立ち上がると体をほぐすように伸びをする。
これからコユキのところに行くのだ。暗い顔をするわけにはいかない。

「じゃあまたな、冬馬」

「ええ、また会える日を楽しみしています」

手を上げて挨拶をする俺に、いつもの柔らかい笑みを浮かべて頷く冬馬。
俺はきびすを返しモモたちの方へと歩みを進める。

だから俺は冬馬が真剣な顔で考え込んでいるのを見る事はなかった。

「なんだ、まだ帰っていなかったのか」
「ええ、思いがけない再会があったもので」
「再会？」
「去年の今頃に多馬川で出会った人です」
「ああ。いい出会いって言ってたあの」
「はい。本当に偶然ですがここで再会したんですよ」
「ほぉ、俺も会ってみたかったな」
「ほんの数分前までいたんですけどね」
「間が悪いのかね俺は」
「ところで『準』。子供がいなくて困っていた先生はどなたでしたっけ？」
「なんだいきなり」
「いえ、少し気になる事がありましたから」
「気になることねぇ」
「それで？」
「ああ、内科部長の『榊原』先生だよ」
「『榊原』先生でしたか」
「何考えてんだ？　『若』」
「いえ、慈善活動的なものを少々ね。さて行きますよ『準』」
「全く唐突だな。了解した『若』」

第２１話　壊れかけの雪、少年との再会（後書き）

あとがき～！

「第２１話終了。あとがき座談会、司会の春夏秋冬　廻です。今回のお相手は――」

「どうもみなさん初めまして、葵冬馬と申します」

「まさかのあとがき登場。葵紋病院跡取り葵冬馬くん」

「なぜ今回は登場なのですか？　１６話の時は座談会すらなかったのに」

「あのときはまだ正体を明かしたくなかったんだよ。まあモロバレな気もしないでもなかったけど」

「たぶんバレていたでしょうね」

「だろうね。さて今回のお話ですが、実は予定になかったものです。ってこのセリフ、百代の誕生日話のときにも言ったな」

「予定になかったというのは、どういうことでしょうか？」

「うん。最初は次回の話を第２１話として考えて、最終的には風間ファミリーに入れようかと思っていたんだけど、やっぱり小雪は君と準の３人組の方がいいと思い至ったから、急遽今回の話を作ったというわけ」

「その理由は？」

「君と小雪の繋がりをきちんと作りたかったっていうのが最大の理由。いきなり榊原の養女になりましたっていうのはどうかなと思ったわけ」

「なるほど、ではその経緯も詳しく書くと？」

「いや、その予定はない。書いてもいいけどそれだけ長くなるから省略。誰も養子手続きやそれに関する法律の事なんか読みたくないでしょ」

「自分が調べたくないだけですよね？」

「本音は間違いないと言っておこう。だが建前を貫き通させてもらう」

「そうですか。しかし今回のお話、かなり原作を無視しましたね」

「はっはっは。原作ブレイクのオリジナル設定。小雪の名字とあだ名だね」

「ええ、言い得て妙ですけどね」

「実はこの名前とあだ名は今回の話を書いている途中で閃いた突発的なもの。ツッコミはしないでください」

「いい表現だとは思うのですがね」

「ありがとう。でも子どもの考える表現じゃないのは確かだね」

「それは否定できませんね」

「まあいいさ。さて次回はようやっと小雪再登場。しかも今までにない文章構成でいきたいと思います」

「それはいったい？」

「それは次回投稿のお楽しみ。ではそう言いながらも期待しないでお待ち下さい」

第２２話　壊れかけの雪、救われた心（前書き）

第２２話投稿。

ちょっとした冒険心からの文章構成。

会話文がありませんので読みづらいかも？

第２２話　壊れかけの雪、救われた心

僕は夢を見ている。

僕は家のリビングの椅子に座って、今か今かと待ちかまえている。
リビングの隣にはキッチンがあり、視線の向こうには女の人の背中が見える。
料理をしている女の人は楽しそうに歌を歌っている。歌のリズムに合わせて揺れる長い黒髪がその人の楽しさをより一層僕に教えてくれる。
振り向いたその女の人は僕のお母さん。視線が僕と合ったお母さんはにっこりと笑顔を浮かべると、手においしそうな料理が載せられた皿を持ってこっちに歩いてきた。

僕はこれが夢だとすぐに分かった。
だってお母さんが僕を見て笑ってくれているから。お母さんが僕のためにおいしいご飯を作ってくれているから。

こんな事ありえないと分かっている。だから僕はこれが夢なんだと分かってしまう。

そして、夢はいつか必ず終わる。

見ていた光景がかすむように白くなり、次第に音が消えていく。
僕は浮き上がっていくような感覚に身を任せる。ふわふわと浮かんでいるような感じだった身体に徐々に確かな感触が戻っていく。
覚醒した感覚は夢の中の僕の心と重なって夢の目覚めを告げる。
瞼に閉じられている眼に確かな光の感触があった。

そう言えば僕は気を失ったんだった。

ふと思い出したかのように気付いた。でも僕はどうして気を失ったんだろうか。

思い返してみる。

あれは確か、珍しくお昼なのに起きてきたお母さんとリビングでばったり顔を合わせた時だった。

僕はヒーくんと遊ぶ約束をしていたから、お昼御飯のパンを1枚だけ食べて、出かける準備をしていた。そこにお母さんがリビングに入ってきた。

お母さんと視線が合った瞬間に、僕は笑顔を浮かべる。
そうすれば叩かれる事はなかったから。笑っていい気子にしていれば、いつかお母さんは僕をきちんと見てくれる。
だから僕はいつも笑う事にしていた。

でも、今日のお母さんはいつものお母さんと違っていた。

いつもなら笑っていても無視するはずのお母さんが、何か聞こえないほど小さい声でブツブツ言いながら近付いてきた。
少し俯き気味に前髪で隠れていたせいで、僕はお母さんの虚ろな目に気付かなかった。

僕は笑顔のまま近付いてくるお母さん見る。
僕の前まで来たお母さんは、いきなり僕を突き倒した。
急な事で何の対応も出来なかった僕は、背中をリビングの床に打ち

つけた。幸い頭はソファーにぶつけたためそれほど痛くはなかった。
呆然と仰向けに倒れたまま僕はお母さんを見上げた。そんな僕にお母さんはまたブツブツ言いながらまたがって、馬乗りに僕の上に座り込んだ。

そしてゆっくり両腕を上げたかと思ったら、次の瞬間僕は急に絞め上げられる感触に息が出来なくなった。

ああ、僕はお母さんに首を絞められているんだ。

どこか他人事のように感じている自分にあまり驚かなかった。時々、自分が別の自分を見ているような感じがあったから、きっと今もそうなんだろうと思った。

息苦しくなりながらも、ぼんやりとお母さんを見上げる。
前髪の奥に見えたお母さんの目は何も映していなかった。虚ろに見開いたままブツブツと意味不明な言葉を、まるで取り憑かれたかのように繰り返す。

ああ……そうなんだ……

唐突に理解した。

僕より先に……お母さんが壊れてしまったんだ……

瞬間、全身の力が一気に抜けた。
もう生きている意味がないと思ってしまった。
壊れたお母さん。本当なら僕が先に壊れるはずだった。
でも先の耐えられなくなったのはお母さんだった。だったらもういいのかもしれない。

大好きなお母さんが壊れていくのを見たくなかった。それなら死んだ方がいいかもしれない。

大好きなお母さんの手で死ぬのなら、それも幸せかな。

遠のく意識の中、最後に聞いたのは最近友達になった子の声だった。

生きているんだ。

意識を取り戻した僕が最初に思った事だ。

目に入った天井は白く僕の知らない場所だと教えてくれる。

横から声が掛けられた。僕はゆっくりと顔を向ける。

そこにはジンにーとヒーくん。そして知らない女の子がいた。

3人とも安心したように息を吐いた。

何か心配させるような事でもしたのかな？　そうか、僕は今まで気を失っていたんだ。みんなはその事を心配しているんだ。

僕はジンにーたちに向かって笑った。

ヒーくんと女の子は安心したように小さく笑い返してくれたけど、ジンにーは笑い返さずに顔をしかめていた。

あれ？　おかしいな。こういう時は笑えば友達というものは笑い返してくれると聞いていたんだけどな。僕は何か間違った事をしたのかな？

首を傾げようかと思ったけど、首に走った小さな痛みにそれは出来

なかった。どうして痛いのか手で確かめてみようと思ったけど、それはジンにーに止められた。
何でも首に包帯が巻かれているから触らない方がいいみたい。

そういえばお母さんに首を絞められたんだ、と他人事のように思い出した。たぶんその痕を隠すために包帯が巻かれているんだろう。
別に痕なんか気にしないけどね。

そう言ったら女の子が、僕も女の子だから見た目ぐらい気にしろって注意されちゃった。そんなこと初めて言われたから僕はじーっとその女の事を見つめる。
そしたら女の子はいきなり自己紹介を始めた。本当にいきなりだったからびっくりしちゃった。

女の子の名前は川神百代ちゃん。僕より年上で今は中学1年生なんだって。

百代ちゃんって呼んだらなんか苦虫を噛み潰すって言うのかな？
そんな顔になると自分の事は『モモ先輩』と呼べって言われた。別にかまわないからいいよと返しておいた。
ちなみのモモ先輩は僕を『ユッキー』と呼ぶみたい。
初めて付けられたあだ名に僕は凄く嬉しくなって笑顔を浮かべた。

その笑顔にはジンにーは笑顔を返してくれた。
でもさっきは何で笑ってくれなかったのかな？　やっぱり僕が変な事をしたのかな？　うん反省しよう。笑ってくれればみんな怖い事はなくなるもんね。

少しだけ笑い合った後、ジンにーはここが病院だという事と、数日は様子見のため入院することになった事を教えてくれた。

僕自身はそんなに体調が悪いとは感じなかったけど、お医者さんの言う事は聞いておいた方がいい、とジンにーたちも言うから大人しく言う通りにしておこう。

そこでお開きになり、また明日来る事と今日はゆっくりと寝るようにと言い残してジンにーとヒーくん、モモ先輩は帰っていった。
みんなが出ていた後の病室は静かでちょっと寂しい感じがしたけど、僕が思っていた以上に体は疲れていたのだろう、目をつむっていたら自然と眠気が沸き上がり僕はそのまま眠りに身をゆだねた。

翌日、みんなは昨日の言葉通り僕の病室に来てくれた。
今日はお爺ちゃんみたいな人も一緒だった。名前は川神鉄心さん。
モモ先輩のお爺ちゃんであの川神院の総代さんなんだって。

『鉄爺』と呼んでくれと言われたので素直にそう言うと嬉しそうに笑ってくれた。

うん、僕も笑ってくれたら嬉しいな。

後ろでモモ先輩がニヤニヤして気持ち悪いぞジジイって言ってたけど、少しだけ同意してもいいかな。だってちょっとだけ気持ち悪かったのはホントだもん。

ぐっすり眠れたことで昨日より体調が良かった僕は、ジンにーとヒーくん以外の人と話すのがホントに久し振りだったから、今日は凄くしゃべったと思う。
鉄爺が持ってきてくれた果物の詰め合わせ。鉄爺が言うには病院のお見舞い品の定番らしいけど、その中のリンゴをヒーくんが綺麗に

剥いてくれてみんなで一緒になって食べた。

モモ先輩がヒーくんはとても刃物の扱いがうまいんだと言っていたけど、それを聞いヒーくんは何か言いたそうな顔をしていた。でもどこか楽しそうな雰囲気だったから、僕は笑顔でその言葉を聞いていた。

楽しくお話をした後ジンにーが今日、鉄爺を連れてきた訳を教えてくれた。

鉄爺が今日来たのは、昨日あの後にお母さんがどうなったかを教えるため。

僕のお母さんの事。そう言われた時、僕は昨日からお母さんの事をどこか他人事のように考えていた事に気付いた。

どうしてだろう。大好きなお母さんなのに。ああそうか、僕の中では壊れたお母さんは大好きなお母さんとは違う人になっている。壊れたお母さんは僕のお母さんじゃないんだ。

その事に心が少し痛くなった。

痛い？　どうして？　壊れてしまったお母さんは大好きなお母さんじゃないから？　それとも……僕がもう既にお母さんから見捨てられていた事に今更気付いたから？

黒く嫌なものに心が染め上げられそうで僕は笑顔を浮かべた。笑顔は僕の鎧だ。僕を守るものだ。僕の心に力をくれるものだ。お母さんとまた楽しく過ごすための大事な鍵だ。

でも……お母さんはもう壊れているんだよ？

大好きなお母さん。でもお母さんは壊れてしまっている。壊れたものはもう戻らないと分かっている。なのにどうして僕は笑うの？

分からない、分からない、わからない、ワカラナイ。

頭の中がこんがらがってきた時、ジンにーが優しく僕の頭を撫でてくれた。

ジンにーの手は痛んでいた心も、黒く嫌なものも、何もなかったかのようにしてくれた。

凄い魔法の手だと思った。

僕はそのままジンにーの手を頭に乗せながら鉄爺の話を聞く。

お母さんは僕が気を失った後、ジンにーに突き飛ばされそのまま組み伏せられたらしい。その後、ジンにーが僕に心肺蘇生を行うため離れたからヒーくんがお母さんを押さえていた。

すぐに到着した救急車に僕は乗せられ、ジンにーは僕の付き添いで救急車に乗り込んだ。その場に残るのがヒーくんとモモ先輩だけになるから、救急隊員の1人がその場に残ったらしい。

その後で到着した警察官に、その場にいたヒーくんとモモ先輩と残った救急隊員が事情を説明していたが、鉄爺が僕の家に着き対応は鉄爺とその救急隊員の人がしたそうだ。

お母さんはそのまま警察の車に乗せられて、警察署で事情聴取というものを受けたらしい。でも鉄爺が言うにはまともに話せる状態じゃなかったらしく、鉄爺は昨日はそのまま帰り、お母さんは今日もまだ警察署でその事情聴取を受けているみたいだった。

僕は話の意味の半分も理解できなかったけど、分かった事が1つだけあった。

それはやっぱりもうお母さんは、僕の知っている大好きなお母さんじゃなくなってしまったという事。もう大好きなお母さんは帰ってこないという事。

心が痛くなる。笑顔を浮かべる。失敗する。
心が痛くなる。笑顔を浮かべる。失敗する。
心が痛くなる。笑顔を浮かべる。失敗する。
心が痛くなる。笑顔を浮かべる。失敗する。

何度繰り返してもうまくいかない。笑顔が浮かべられない。ジンにーの魔法の手が頭に乗っかっているのに、心の痛みが全然なくなってくれない。

それでも笑顔を浮かべようとした時、頭に乗っかっていたジンにーの手が、撫でるのではなく軽く叩くように上下した。
僕はジンにーの方を向く。ジンにーは優しい笑顔を浮かべていた。

どうして？　僕は笑顔を浮かべらないのにどうしてジンにーはそんなにも優しい笑顔を浮かべているの？

混乱する僕にジンにーはひと言だけ僕に言った。

泣け。心がつらいなら泣け。

な……く……？

いいの？　それは弱い事だよ？
だってお母さんが昔言ってたもん。
泣くな。泣くとイライラする。泣くんじゃない弱虫が。
だから泣かなくなった。強くなった。強くなればお母さんを好きでいられる。

またジンにーは言う。

泣くのは決して弱い事じゃない。

弱い事じゃないの？
泣く事は弱くなる事じゃないの？
じゃあ泣いてもいいの？　泣いても弱くならないの？

ジンにーは1番の笑顔を浮かべて言った。

泣くというのは心に素直になる事だ。だから今は泣け。

壊れた。
僕の鎧が。
僕を守るものが。
僕の心に力をくれるものが。

泣いた。
僕は泣いた。
ただひたすらに泣き続けた。

心が痛かった。
お母さんが大好きだったから。
お母さんがもう戻ってこないから。
僕は既にお母さんに見捨てられていた事に気付いたから。
僕は心が上げる悲鳴を隠すことなくその心のまま素直に泣き続けた。
強くなろう。
泣いて、泣いて、泣きつくして、心の痛みがなくなったら、強くなろう。
目から溢れ頬を流れる涙と、喉を鳴らし口から漏れる嗚咽を隠すことなく泣きながら、僕は痛む心の奥底でそう決意した。
泣きはらした僕が落ち着くまで、みんなは何も言わずに側にいてくれた。
それが嬉しくて、でも恥ずかしくて僕は赤くなった目を隠すように俯くことで、同じく赤くなった頬を隠した。
落ち着いた僕を見計らって、鉄爺は続きを話し出した。
そう言えば途中で僕が泣いてしまったため、話は中断したままだった。
僕はモモ先輩から渡されたタオルに顔をうずめ、目から上だけを出して鉄爺の話を聞く。
鉄爺の話はお母さんの事じゃなく、僕のこれからの事だった。

娘の僕の首を絞め一時的とはいえ心肺停止になってしまった以上、お母さんは間違いなく殺人未遂で逮捕されるという事。
そして僕への育児放棄（ネグレクト）と家庭内暴力という児童虐待で保護責任者遺棄の罪でも逮捕され、僕の親権を失うのは確実だという事。
その事で僕に保護者がいなくなり、児童相談所あるいは保護施設に入ることになるだろうという事。

鉄爺は包み隠すことなく僕に教えてくれた。
難しい言葉があったため全部は理解できなかったけど、お母さんが僕を育てる事が出来なくなり、1人になった僕はあの家に住む事が出来なくなる事は分かった。

恐らく僕は天涯孤独というものになったのだろう。

その事実にまた心が痛くなったけど、僕は強くなるって決めたんだ。

そんな僕にジンにーは優しく声を掛けてくれる。

強くなる事は弱みを見せない事じゃない、誰にも頼らない事じゃない。

それはたぶん、1人で考えるなって事だと思う。誰かに頼ってもいいって事だと思う。
その言葉に鉄爺もいつでも頼ってくれと言ってくれた。考える時間はいくらでもある。その間ずっと病院で入院していてもいいと言ってくれた。

だから考えよう。

僕は強くなると決めた。でも今の僕に出来る事は限られている。だ

から自分の出来る事を考えよう。そうすればきっといい答えが見つかるはず。

僕は今日、今までとは違う新しい心を手に入れたのだから。

第２２話　壊れかけの雪、救われた心（後書き）

あとがき～！

第２２話終了。今回も座談会形式ではありません。

さて今回のお話はいかかでしたか？

ちょっとした冒険で会話文を全く入れないで書いてみたのですが、意外とうまくいったような気がします。

しかし小雪の心情は難しい。原作でも何を考えているかわからない不思議ちゃんな小雪。

今回のお話でも若干壊れかけの彼女の心情は本当に難しかったです。

とにかく笑うことを最大の事として、お母さんを大好きと思う事で自分を護っているといった感じにしてみたのですが、伝わったでしょうか？

そして完全に潰してしまったあのルート。もう皆さんお分かりかと思いますが、竜舌蘭ルートはありません。

それに代わるルートを作るか。それともなしのままやるのか。今のところ考え中です。

さて、１つのエピソードで今のところ最大の長話となった小雪救済話ですが次回で終了となります。

作者なりのハッピーエンドを目指したつもりですが、あまり期待しないでお待ち下さい。

第２３話　壊れかけの雪、新しく歩む道（前書き）

第２３話投稿。

小雪救済編、最終話になります。

第２３話　壊れかけの雪、新しく歩む道

――２００４年　８月３０日　月曜日　ＡＭ１０：００――

ｓｉｄｅ　暁神

「どうよこの場所！　新しい秘密基地にはもってこいだろ！？」

島津家が所有する土地に建っている廃ビルに１室で、キャップは自信満々に言い放った。
それに同意するように頷くヤマとガクとタク。

新しい秘密基地探しに参加しなかった俺とヒロと女子たちは、やや呆然としながら室内を見渡した。

「よくこんなところ見つけたね」

感心したように呟くミヤと頷くカズ。
キャップたちはその言葉に嬉しそうに笑顔を浮かべた。

確かにミヤの言う通り、よくこんなところを見つけたもんだ。
話を聞くとここの土地はガクの家、つまり島津家が所有している土地で１０年前ぐらいから使われていない廃ビルが建っていたらしい。

そこに目を付けたのがキャップとヤマ。

ビルの所有者が川神ではなく県外、九州の福岡にいる事を調べたヤマがこのビルが当分取り壊されない事を知り、秘密基地にしようと提案したのだ。

「でも大丈夫なの？　僕たちのような子供が使われなくなったと言っても、廃ビルで遊ぶなんて危ないと思われるよ」

ヒロのもっともな意見だが、ヤマが言うにはそれも既に解決済みらしい。

全くもって相変わらず見事な手筈だ。ファミリーの軍師を自称するだけのことはある。

「実際の管理はビルの所有者だけどその管理の代理をガクトのお母さん、つまり麗子さんが書類上なっているんだ。で、俺たちはボランティアとして忙しい麗子さんに代わりこのビルを見て回る」

「なるほど、そうすることでこのビルに入る代替的な理由になるわけだ。さらにビルの所有者にはボランティアは一応成人した人だと伝えておけば問題なしという事だな」

「さすが兄弟。みなまで言わなくても分かるとはな」

言葉を引き継いで言う俺にヤマは感心したように言葉を返してきた。

「電気は通ってないけど水道はなぜかまだ繋いだままだ。だから照明には困るかもしれないけど、秘密基地にするには申し分ないと思う」

ヤマの言葉に全員が頷く。

確かにここなら今までの原っぱと違っていろいろ持ち込む事が出来るし、雨の日でも気にせず集まる事が出来る。誰も文句を言わなかった。

満場一致で俺たちの新たな秘密基地が誕生したのだった。

ちなみにキャップが『風雲風間城』とか、ガクが『俺様ガクトキャッスル』とか名前を付けようとしていたが、モモとミヤにボコボコにされていた。

川神の工業地帯を見渡せる屋上で、手すりに肘をつきボーっとその景色を眺める。

既に日が傾き始めている。今日1日の半分は新たに出来た秘密基地の掃除に追われていた。だがなんとか人がすごせるぐらいには綺麗になり、明日から持ち込む物をみんなは話し合っていた。

俺は1人そこから抜け出し、こうして屋上からの景色を眺めていた。

「こんなところで何してるんだ、ジン？」

後ろからモモが声を掛けて来た。

気配で気付いていたので別段驚く事はない。モモも気にせず俺の隣に並び同じように屋上から見える景色を眺めた。

数分沈黙が続いたが、先にそれを破ったのはモモだ。

「ユッキーの事を考えてたのか？」

「まあな」

気付かれていた事に少しだけ自嘲気味な笑みが漏れた。

最近やけにモモに見抜かれることが多くなったような気がする。今回の事だけでなくいろいろな事に対して。俺自身気を抜いているつもりはないのだが、なぜかモモにはばれてしまう。

「何で分かった？」

「女の勘だ」

これだ。

何で分かったのかと聞くたびに返されるこの返答。そう言われて言い返せなくなる俺にも問題があると思うのだが、勘と言われて納得してしまっているところもある。

「何か納得のいかない結果だったのか？」

その言葉に首を振る。

そんな事はない。どんな結果であろうとコユキが幸せになるのならそれが1番いい。俺にそれを決める権利なんかないのだから。ただ――

「コユキにとって“最良の結果”だったかもしれないが、俺にとっては“最善の行為”じゃなかったからな……」

それが少し悔しいのかもしれない。結局俺は自分が出来なかったから他人に任せたのだ。

モモはそんな事を考えてる俺を慰めるように手を頭に乗せ撫でてきた。

「私たちはまだ子供だ。出来ない事の方が多い。でもお前は自分が出来る事の中でやれる事は全てやったんだろ？　だったらそれを誇れ。今回の件でお前を責める奴は誰ひとりいない」

モモの言葉に、俺は自分がヤマに言った言葉を思い出した。

そうだ。俺はミヤを仲間に入れた後で聞いてきたヤマに対して、今モモが言った事と同じような言葉をヤマに言った。

『自分のやった事を誇れ』と。

なら俺も自分のした事を誇ればいいんだ。確かに“最善”ではなかったかも知れない。でも結果は“最良”になったのだ。今はそれでいい。

「サンキュー、モモ」

笑顔を浮かべてお礼を言うと、モモの顔に朱がさすのが見た。珍しいその反応に俺は調子に乗って続けた。

「しっかしこうして撫でられているとやっぱりお姉さんだな、モモちゃん」

スパンッ

いい音を立てて後頭部をはたかれた。やっぱり『モモちゃん』は禁句のようだ。

「元気が出たならとっとと戻るぞ。早く戻らないと自分の持ち込みたい物が却下される事になりかねんぞ」

「了解」

去っていくモモの背中に、叩かれた頭を撫でながら返事をする。そしてもう1度振り返り屋上からの光景を眺めた俺は、気持ちを切り替えるように大きく息を吐くと、前を向きモモの背を追って屋上

から離れたのだった。

side out

§ § §

side 榊原小雪

今日この日、僕は榊原小雪になった。

あの日、ジンにーたちとたくさん話し、僕の今後の身の振り方を考えるように言われた日。午後になってみんなが帰った後、僕の部屋に1人の男の子がやって来た。

僕はその男の子を見た事があった。
同じ小学校に通う同じ学年の男の子だった。1年生の時に1度だけ同じクラスになったけど、話しかけ事も話しかけられた事もなかった。見た事があるだけ。
でも男の子はいつも誰かの中心にいる子だった。頭がよくてお話し上手。だから僕も覚えていた。
イジメられて無視されていた僕でもその子の存在だけは覚えていた。

初めましてと男の子は言った。

本当は初めましてじゃない。けど男の子は僕の事を覚えていないなのだろう。だから僕も初めましてと返事をした。

どうしてここに来たのと聞いたら、男の子は僕とお友達になるために来たと言った。
今までの僕だったら直ぐに喜んでいたかもしれないけれど、僕は少しだけ男の子の事を疑問に思ってしまった。
だって今まで同じ学校の子が僕のお友達になりたいなんて、ひとりもいなかったからだ。だから僕は違う学校の子とお友達になろうとした。

僕が男の子の言葉に答えずに考えていると、男の子は少し困ったような笑顔を浮かべていた。
その笑顔を見た時、この男の子は本当に僕とお友達になりたいのだと思った。

だって、男の子が浮かべたその困ったような笑顔は、ジンにーが親の話をした時に浮かべる笑顔と同じだったから。本当に僕の事を心配してくれている事が分かる笑顔だったから。

だから僕は男の子の事を信じようと思った。

僕は少し遅くなったけどお友達になろうと返した。男の子は安心したような笑顔を浮かべた。
そうして僕は初めて同じ学校のお友達を手に入れたのだった。

男の子は自己紹介をしてくれた。
名前は葵冬馬くん。僕は知っていたけどね。『トーマ』って呼んで下さいと言ったので、そう呼ぶことにする。

僕も自己紹介をする。たぶんトーマは僕の事を知っているはずだけど、自己紹介を受けたなら自己紹介で返さなきゃいけない。

少し心配だったけど、僕は強く生きる事を決意したのだから、きちんとフルネームの『姫川小雪』と名乗った。
ちょっとだけ考え込んだトーマは、僕の事を『ユキ』と呼ぶ事にしますと言った。
僕はまた嬉しくなった。だって昨日と今日で2つのあだ名をつけられたから。

嬉しくて笑顔を浮かべる僕にトーマはいろんな事を話してくれた。

1番驚いたのはトーマがジンにーとお友達だったという事。
驚いている僕を見るトーマの顔はまるでイタズラが成功した時のような笑顔だった。でも僕はその笑顔に不愉快になる事もなく、一緒になって笑ったのだった。

たぶんトーマはジンにーのお友達だから僕のお友達になってくれたんだろう。
でも僕はそれでもいいと思った。だって、例え最初のきっかけがそうだったとしても、トーマはちゃんと僕とお友達になりたいと思ってくれているし、これからお友達として過ごしていくのに、きっかけなんてすごく些細な事だと思ったからだ。

日が暮れてそろそろ門限だから帰るといったトーマは、また来ると約束してくれた。
それに頷き答えた僕は部屋を出ていくトーマに手を振って見送ったのだった。

翌日、お見舞いに来たのはジンにーとモモ先輩の2人だった。ヒーくんは別のお友達との用事で来れなかったらしい。

僕は昨日みんなが帰った後で、トーマとお友達になった事を2人に

話した。
モモ先輩はよく分からなかったみたいだけど、僕に新しいお友達が出来た事を喜んでくれたし、ジンにーも凄く優しい笑顔で僕によかったなって言ってくれた。

午後になって2人は帰っちゃったし、トーマも今日は来なかったけど、僕は悲しいとか寂しいとか思わなかった。明日が来る事が本当に楽しみで仕方がなかった。
こんな風に感じるなんて初めてで、僕はこの感情をずっと大事にしようと思った。

ある日、トーマは1人の男の子を連れてきた。

名前は井上準。
そういえば学校でもいつもトーマの近くにいる男の子だと気付いた。トーマと違ってなんていうのかな、存在感が余りないから僕は殆ど覚えていなかった。

素直にそう言ったらなんか落ち込んじゃって、でもトーマは慰めることなく笑っていたから僕も笑っちゃった。さらに落ち込んでいた背中がなんか凄く印象的だった。
その準も僕のお友達になってくれた。僕は『準』って呼んで、準も僕をトーマと同じ『ユキ』って呼ぶことになった。

でも今日トーマが準を一緒に連れてきたのは、ただ単に準を僕に紹介するためだけじゃなかった。

この前の自己紹介の時に、トーマのお父さんが今僕が入院しているこの大きな病院の院長さんだって事を聞いた。そして準のお父さんが副院長。

どうしていきなりそんな話をするのかな、って思っていたら、トーマが僕に養女になりませんかって聞いてきた。
僕は驚いたけど準は驚いていなかった。きっと先にトーマから話を聞いていたのかな。

トーマは僕の家の事情を知っていた。最初はどうしてって思ったけど、トーマはジンにーから聞かされたって言った。そしてジンにーに僕の力になってあげるようにと頼まれたって言った。

ジンにーはホントに凄いと思った。僕が考えている事のはるか先をいつも考えている。それでいて僕の事を凄く気に掛けてくれている。
僕にとってジンにーはヒーローだ。僕の命と心を救ってくれたヒーローだ。

トーマが言うには、トーマのお父さんの病院であるこの葵紋病院の先生の1人が、ずっと子供が生まれなくて、もう奥さんの年齢的にも出産は難しいから、養子を欲しがっているらしい。
もし僕が望めばその先生の養子としてこれから生きていく事も出来るし、もしそうなったらどんな事でも手伝うと言ってくれた。

分かったのはそれぐらいで後は弁護士がどーのこーの、養子手続きがどーのこーのと難しくて理解できなかったけど、もし僕が養子になる事を望めば、後の事はトーマたちが全部やってくれる事は分かった。

トーマは返事は早い方がいいって言ってたけど、僕はすぐには返事が出来なかった。
だから僕はその日の夕方に会いに来てくれたジンにーに相談した。

ジンにーは僕が望むならその方がいいって答えた。アドバイスは出来るけど決めるのは僕自身だと教えてくれた。

そう答えた後で、僕のお母さんの事を教えてくれた。

お母さんは結局、鉄爺が言った通りになった。

僕を殺そうとした殺人未遂と保護責任者遺棄の罪で逮捕され、僕の親権を剥奪された。

お母さんの事を聞いて悲しかったけど、涙は出なかった。慰めるように頭を撫でてくれたジンにーのおかげで、僕は強くなれるんだと思えた。

僕が取ることの出来る選択は3つ。児童相談所の保護施設に入るか、孤児院に入るか、トーマの提案の養女になるか。

ジンにーはしっかり考えて自分で決断しろって言った。例えどの決断をしても友達に変わりはないとも言ってくれた。

だから考えた。その日の夜は眠れなかった。たぶん僕は今まで生きてきた中で1番考えたと思う。

そして僕は決めた。

養女になる事を。

いっぱいいっぱい考えたけど、1番の理由はせっかくお友達になったトーマと準と離れたくなかったから。

ジンにーたちはずっと友達でいてくれると言ってくれたけど、トーマと準は僕がここを離れたらもう会えなくなっちゃう気がしたんだ。だからトーマと準と一緒にいられる道を僕は選んだ。

そう伝えた時、トーマはこれからもよろしくって言ってくれたし、準もこれからの長い付き合い仲良くしようと言ってくれた。ジンにーもモモ先輩もヒーくんも、僕の選んだ道を応援してくれるって言ってくれた。会う事は難しくなるかもしれないけどずっと友達だと言ってくれた。

だから僕は、自分が選んだこの道を一生懸命生きていこうと思った。

それからはホントにあっという間だった。

次の日には僕を養子にしてくれる榊原先生とその奥さんと会い、担当になる弁護士の先生とも面会した。僕にはホントに何が何だか分からなかったけど、あれよあれよと手続きはあっという間に終わり、僕の養子手続きは1週間で終わったのだった。

そして２００４年8月３０日。

「お〜い！　２人とも〜！　何やってんだ〜！」

遠くで準が呼ぶ声が聞こえてくる。

「行きますよユキ」

隣でトーマが優しく声を掛けてくる。

「うん！」

僕は元気よく答え、トーマと一緒に準の元へと歩いて行く。

今日この日、僕は榊原小雪になった。

第２３話　壊れかけの雪、新しく歩む道（後書き）

あとがき～！

「第２３話終了。あとがき座談会、司会の春夏秋冬　廻です。今回のお相手は――」

「榊原小雪だよ～」

「はい、今回エピソードの主役、榊原の姓になりました小雪ちゃんです」

「いえ～い！」

「救済されたってのに性格変わんないね君は。さて今回のお話ですが、これにて小雪救済エピソード終了となります」

「終わり終わり～」

「相変わらず小雪視点では会話文は入れませんでしたが、なかなか上手くいっていると思います。後日談の回想っぽい構成で終わりましたがなかなかいい終わり方ではなかったでしょうか？」

「自己満足自己満足！」

「話聞いてないってのに的確なツッコミだね」

「あははは～」

「もうわけ分かんないよこの子。さて5話に渡ってやりました今回のエピソードをもちまして、とりあえず原作突入前にやりたかった話はやり終えました。次回からの再び日常編を数話やりまして、そろそろ原作に入ろうと思っております」

「おお～！　頑張れ～！」

「はい、頑張らせていただきますよ。では次回投稿もよろしくお願いします」

第２４話　乙女の戦、バレンタイン前哨戦（前書き）

第２４話投稿。

第２４話　乙女の戦、バレンタイン前哨戦

――２００５年　２月１３日　日曜日　ＡＭ１０：００――

闘気を纏った右拳を繰り出す。

拳はいとも簡単に受け止められ、纏っていた闘気は同等の闘気で相殺され霧散する。

拳を引くと同時に左足を踏み込み、顎先目がけて真下から右脚を振り上げる。

的確に捉えるはずだった蹴りは、爪先を左の人差し指１本で抑えられた。かなり本気で蹴ったのにたった指１本で抑えられた事にかなりショックを受ける。

だが戦闘モードの思考は次の行動を指示する。すぐに蹴り脚を戻し地面に着く前にその脚を上段蹴りに変え左側頭部に向かって放つ。

だがその蹴りが当たる前に、右の肘鉄が私の鳩尾を打った。

私が吹っ飛ぶと同時に地面を蹴りる音が聞こえ、さらに飛ばされている私の横を何かが通り過ぎる音も聞こえたかと思うと、背中に衝撃を受け身体は面白いように宙に舞った。

仰向けで宙に浮いている私に影がさす。それに気付いた瞬間、腹に衝撃を受けたかと思ったら間髪入れずに背中に衝撃を受けた。

間違いなく背中から地面に叩きつけられたのだろう。一瞬だけ息が詰まり呼吸が出来なくなると同時に視界も一瞬暗転する。

視界が戻った私が真っ先に見たのは、喉元に突きつけられている手刀だった。

「俺も勝ちだなモモ」

小さな笑みを浮かべてジンは言うと、喉元に突きつけていた手刀を引っ込め倒れている私に向かって手を差し出す。私はその手を掴む。

「ちぇ、今回こそはと思ったのにな」

愚痴をこぼしながらジンの手を借りて起き上がる。

ジンはそんな私を落ち着かせるように頭を軽く叩く。

この行動をされる度にいつも思うんだが、こいつ私が年上だという事を時々忘れてないか？　私としてはみんなと同じ扱いをされていると思う時があり、嬉しいと思う反面どうしても腑に落ちない時がある。

まあ、今は素直に嬉しいんだけどな。

「なんじゃ、まぁた負けたんかモモ」

心地良さに浸っているとジジイの声が聞こえてきた。

言葉と共に突きつけられた事実に私の機嫌は一気に下降する。

「うるさいぞジジイ。今回はいけると思ったんだよ」

「前もそう言っておったのう。それで戦績は？」

「……7戦全敗だ」

視線を外し小さな声で答える。

いちいち聞いてくるなクソジジイ。いつも見てるくせに。どうせ今日の勝負もどっかで見ていたんだろ。

「お前は純粋な力では神には勝てんのだからもっと技を磨け」

「ふん！　これでも試合時間は延びているんだぞ！」

「それは神が手加減しておるからじゃろ。今回も攻勢に出られたら一瞬で終わったではないか」

「いや、でもモモの力もだんだん強くなっていますよ。このままいけば俺に勝つ日ももうすぐじゃないですかね？」

私とジジイの会話を遮るように言葉を掛けてきたジンに、

「お前が言っても説得力ないぞジン」

「お主が言うても説得力ないわ神」

同時に突っ込んだ。

「ワタシから言わせれば、全員非常識ですヨ」

そんな風に呟いたルー師範代の言葉は、私たち3人には全く聞こえていなかったのだった。

「そういえばモモ、今日はカズたちと出かける約束があるんじゃないのか？」

休憩で道場の床に腰を下ろした私にジンは確認するように問い掛けてきた。

そういえばと思い出し道場の時計に視線を向け時間を確認する。

只今の時刻ＡＭ１０：３０。約束では京が来る時間だ。

しまった！？　もう約束の時間だ！

そう思った瞬間、道場の入り口からワン子が顔を出した。

「お姉様？　京来たよ～」

ああ！　ワン子が呼びに来た！　まだ全く準備してないぞ私！

「ワン子！　すまないが京の相手をしていてくれ！　すぐに準備する！」

そう言葉を掛けた私は急いで汗を流すためにシャワーに向かったのだった。

きっかけは京の言葉からだった。

『今年は大和に手作りのチョコをあげる。そして大和の心を貰う』

手作りのチョコを作る。そう言った京の言葉に私は便乗する形で作ってみようと思った。

実は自分がジンの事を好きだと自覚した夏以降、私は一応ではあるがバレンタインにチョコを渡していた。まあ鈍感なジンは私がイベントを楽しんでいるだけと思っている節があり、私の気持ちに全くと言っていいほど気付いている感じがしない。

さすがに少しムカついてきたので、今回は京の言葉にならって手作

りのチョコを渡そうと思った。そうする事で少しは気持に気付いてほしいという願望を込めて。

そういった経緯から京とワン子と一緒に手作りチョコの材料を買いに行った。

チョコなんて作った事ない私は何を買えばいいのかさっぱり分からない。京のように事前に調べておくべきなのだろうか。

まあワン子は予想通り食べるためのチョコを買いこんでいた。一応仲間には渡す義理チョコは私たち3人で出し合って人数分買う事になっているのだから、ワン子が買っているのは自分で食べるためだろう。

逆に京はまさに真剣そのものだった。

材料買う時からそんなに力入れなくてもいいだろうと言ったのだが、京曰く。

『モモ先輩。バレンタインで手作りチョコを作るなら材料選びから既に戦いは始まっているんだよ』

らしい。よく分からん。

仕方ないので私の分の材料も京に任せた。あそこまで真剣なんだ、大丈夫だろう。

買い込んだ材料を持って川神院の台所を借りる。

事前に料理長には了解を取ってあるので問題はない。その料理長は女性で、私たちがバレンタインのチョコを手作りで作ると言ったら『若いわね～』と少しにやけた笑顔を浮かべたのだった。

取り出した材料を並べて思った事なのだが、手作りチョコは生クリ

ームが必要なんだな。チョコだけでいいと思っていた。
そう呟いたらまたも京が答えを返して来る。

『チョコだけでも問題ないけど、冷ました後でかたくなるよ。愛情を持って作るなら生クリームは必須！』

らしい。なるほどな。
だがどうして手作りチョコを作るための材料に七味があるのだろう。
なんか嫌な予感がしてならないんだけどな。

とりあえず作り始める。

これが以外と手間がかかった。
予想通りワン子はあっさりと諦めた。もともと共同で買った物を渡すつもりだったワン子だから問題ないだろう。作っていたのも私と京が作っていたから一緒にやりたかっただけらしい。かわゆい奴だ。

京は苦戦していた。恐ろしく気合を入れているのにかかわらずまるで空回りだ。
トリュフを作った京だったが、ガナッシュを作るのに3回失敗し、その後に成功したものはそれに気付かなかったワン子に食べられた。

京からの折檻を受けたワン子だが、流石にそれは庇えないぞ妹よ。

その後にも成功したがココアパウダーをまぶすと同時にやはりというか、七味も一緒にまぶしていたのでそれは廃棄させた。
さすがに七味が掛ったチョコを渡されては大和が可哀想だ。

感謝しろよ弟よ。お前の胃袋を私が事前に守ったぞ。

結局６回目にして完成。終わった頃にはもう既に夜になってた。
ちなみに私はレシピに軽く目を通した後、試しにと作ったら１発で成功した。
そのせいかもしれないが京にはなぜか睨まれた。理不尽だなオイ。

明日は秘密基地に全員集まることが決まっていたので、私と京が作ったチョコトリュフは料理長の了承を得て、川神院の冷蔵庫に置かせてもらうことにした。
学校が終わった後に取るに来る手筈だ。その間に食べられにようにきちんと見張っておいてくれるらしい。
夜遅いという事で京を家に送っていき、今日はお開きとなった。

§　§　§

――２００５年　２月１４日　月曜日　ＰＭ５：００――

バレンタインデー当日。
秘密基地の部屋の片隅で、毎年恒例でこの世の終わりかのような陰鬱な雰囲気を醸し出しながら落ち込む馬鹿が１人。

「おいモロロ、鬱陶しいからアレをなんとかしろ」

「いやあ、さすがに無理」

私の言葉に速攻で返すモロロ。苦笑いを浮かべているあたり、毎回の事だから何を言っても無駄な事を悟っているのだろう。ガクトの事だどうせバレンタインのチョコを1つも貰えなくて落ち込んでいるのだろう。
実に分かりやすい奴だ。

「なんだよ。チョコレート貰えないぐらいで落ち込むなよガクト」

事態が分かっているのかいないのか、ガクトにしてみれば絶対に言われたくないキャップのひと言にさらに落ち込む。
苦笑いを浮かべてその背中を眺めるしかない大和とモロロ。

「一撃必殺、会心の一撃、クリティカル」

京の含み笑いのこもった呟きに誰もが首肯した。
バレンタインデーは毎年いつもこうだ。今日は秘密基地の廃ビルの1室だが、以前は原っぱに集まり男どもの戦果を比べる日にもなっていた。

ちなみに毎年ガクトは1つも貰えていなかった。（親や私たちからのものは勘定しない決まりもある）

「それでは妹よ！　男どもにバラまけ！」

「了解！　お姉様！　受け取りなさい男ども！」

私の命令のもと、私たち3人でお金を出し合って買ったチョコを命令通りそれぞれに向かって投げ飛ばした。
ジンとタカとキャップは難なくキャッチ。大和とモロロは少し慌て

たが何とか受け取る。落ち込んだままだったガクトは後頭部に直撃した。

「よかったガクト、チョコ貰えて」

「仲間内のやつは数に入れねーって決めてるから意味ねーだろ！？」

からかうような大和の言葉に声を張り上げて反論するガクト。しかしそんな事を私たちの前で言っていいわけがない。そっちがそう言うならこちらも言い返してやろう。

「なんだガクト、いらないのなら返してもらおうか。ワン子ならたくさん食べるぞ」

「ありがたく貰っておきます！」

間髪入れずに貰ったチョコを掲げた頭を下げるガクト。分かればいいんだよ分かれば。

そんな馬鹿な事をやっている最中に、京は昨日一生懸命作った手作りチョコを大和に手渡していた。

「はい大和。私の愛情と情熱と恋慕がいっぱい詰まった手作りチョコ。愛の告白と共に受け取って。好きです」

「ありがとう京。チョコは受け取っておく。お友達で」

オイお前ら、なんだその言葉の応酬は。

「なにこの人たち。さりげなく告白した京も凄いけど、大和は何もなかったかのようにスルーしたよ？」

モロロのツッコミがみんなの心を如実に表している。

「そんなクールな大和はカッコイイ。愛してるから愛して」

「カッコイイは嬉しい。気持ちは嬉しいけどお友達で」

「くすん、今日もダメだった」

告白を玉砕されて座っていたソファーに身を沈める京。誰にでもばれる嘘泣きをしながら手で目を隠す。

そんな京にジンは呆れたように言葉を掛ける。

「もはや告白の大安売りだなミヤ。だけどそれじゃ駄目だ」

「どういうことジン兄？」

「言葉には重みが必要だ。いつも言っていればその言葉はに重みがなくなる。大事な言葉とはたまに言うからこそ、心に響くんだ」

何やら講釈を垂れるジンとその言葉を真剣に聞く京。

モロロとタカはそんな2人を苦笑いを浮かべながら眺め、キャップとガクトは私たちが渡したチョコを、ワン子は自分で持ってきたチョコを早くも食べていた。

大和はジンが何を言うのか気が気でないのだろう落ち着きがない。

「でもジン兄、私はいつでも大和に好きって言いたい」

「ならば方法は1つだミヤ」

「なに？」

「常に言いたいのならいつも本気の気持ちを込めて言い続けろ。一念岩をも通すだ」

「余計なことを言うな兄弟！」

さすがに旗色が悪くなると思ったのだろう。慌ててジンの言葉に詰め寄る大和。そんな大和を京は情熱のこもった眼差しで、ジンは温かな眼差しで見つめていた。

弟よ……少しだけ同情してやる。

「さぁて！　恒例の戦果報告タイムといこうじゃないか！」

そんな馬鹿をやっている3人を無視して私は高らかに宣言した。ガクトとモロロがあからさまに顔を引きつらせ、キャップとタカはなんか疲れたような溜息を吐く。変わらないのはジンと大和だけだ。

だが忘れないないかガクト。この報告会をやろうと言いだしのはお前だぞ。

さて始めようか。毎年恒例の行事『男の価値を決めろ！　バレンタインチョコ誰が1番多く貰えたか報告大会（ガクト命名）』。

さて、今年はいったい誰が1番の恥をかくのかな？

ニヤリと笑みを浮かべる私に、男どもは全員深い溜息を吐くのだった。

第２４話　乙女の戦、バレンタイン前哨戦（後書き）

あとがき～！

「第２４話終了。あとがき座談会、司会の春夏秋冬　廻です。今回のお相手は――」

「男の中の男。俺様島津岳人登場！」

「初期風間ファミリー最後の登場となりました、キング・オブ・馬鹿の登場です」

「おいコラ、誰がキング・オブ・馬鹿だ」

「君の事だ。なんらなアルティメット馬鹿のほうがいいか？」

「どういういう意味だそりゃ？」

「究極の馬鹿」

「もっとわりーじゃねかよ！？」

「馬鹿な話はここまでだ。さて今回のお話ですが、説明するまでもなくバレンタインのお話です。時事ネタですが季節感全く無視してます」

「これ投稿してるの夏真っ盛りだからな」

「物語の時間経過を重視、という事にしておいてくれ」

「いい加減な逃げ道を作ってるなオイ」

「いいだろ別に。さて話を読めば分かりますが、時事ネタにも関わらず前後編構成です」

「なんか意味あんのか？」

「それが全然ない。ただ単に書いてたら文字数が1万超えたから2話に分けただけ」

「1万超えって……」

「そういうことなので、次回投稿の後編もよろしくお願いします」

第２５話　乙女の戦、衝撃のバレンタイン（前書き）

第２５話投稿。

バレンタイン後編です。

第２５話　乙女の戦、衝撃のバレンタイン

いつもの秘密基地。

今日はバレンタインデー。

「さぁて！　恒例の戦果報告タイムといこうじゃないか！」

姉さんの宣言にガクトとモロがあからさまに顔を引きつらせたのが見えた。ガクトが今年も戦果ゼロなのは分かっていたが、どうやらモロも１つも貰えなかったようだ。

この恒例行事となった『男の価値を決めろ！　バレンタインチョコ誰が１番多く貰えたか報告大会（ガクト命名）』。これで実に４回目。

破滅的なネーミングセンスで分かるように、言い出したのはガクトだ。

恥かくだけだからやめろと言ったのを、全く聞く耳を持たないでやったのが行事の始まり。

それ以降、ガクトにとっての恥をさらす場になったのは言うまでもない。

「それじゃあいつも通り逆年功序列、誕生日が遅い順でタカからだな」

姉さんの言葉に盛大な苦笑いを浮かべたヒロは、足元に置いてあった紙袋をテーブルの上に乗せた。

うん、どうやら今年も大量のようだ。
紙袋から出したチョコをテーブルの上に1つずつ並べて数えていく。
並べられていく数が増える度にガクトの顔が歪んでいく。

「60…61…62…63……63個だね」

打ちひしがれているガクトをよそにヒロの報告は終了する。

「相も変わらず……なんて言うか凄いよね」

モロの引きつった顔と言葉が毎年のヒロのバレンタインチョコの凄さを物語る。
だがヒロにしてみればあまり嬉しくないらしい。ヒロが言うには――

『これは好きというよりはただ単にペットを可愛がりたいって感覚で僕にチョコを渡してるだけだよ』

らしいのだが、俺と兄弟は同情してヒロの言葉を肯定している。なんでもヒロは同学年より上級生からのチョコの数が圧倒的に多いらし。今年も50個は上級生から貰ったものらしい。

「可愛いからなタカは」

「うん、可愛いよねヒロは」

「可愛いは正義だよタカ」

容赦のない女子の言葉に打ちひしがれるヒロ。相も変わらず女顔にコンプレックスを持っているようだ。兄弟とモロに慰められているヒロの背中は少しだけ煤けて見えた。

「次はモロロな～」

「実は1個だけ貰ったんだ」

報告を促す姉さんの言葉にモロは少しだけ嬉しそうに報告した。

「なぁぁぁぁにぃぃぃぃ！？　どういう事だモロ！？」

真っ先に反応したのはやっぱりガクトだった。
モロは仲間だと思っていたのだろう。信じられないといった雰囲気をひしひしを感じる。

「ほう、モロロもついにゼロを脱出したな」

「と言ってもついでの義理みたいなもんだよ。隣の席の女子が1個だけ余ったからあげるって言って貰ったんだ」

「それもでも貰ったのならいい方。ガクトなんか義理すら貰ってない」

恥ずかしげに経緯を語るモロに京は言葉を返す。しかもガクトをいじるのを忘れない。

「次は大和だな」

司会進行する姉さんの言葉に俺は一瞬だけ表情を歪める。
本当に一瞬だけだったが姉さんにはしっかりとばれた。出し渋る俺に無言の圧力が掛ってくる。その圧力に耐えられなかった俺は仕方なく足元のバックからチョコを取り出しテーブルに置いた。

「3つだ」

「誰！？　私の大和をたぶらかした女は！？」

「なんで今年は大和も貰ってんだよ！？」

「落ち着けミヤ。そもそもヤマはお前のじゃない。うるさいぞガク。その言葉はヤマにもヤマに渡した女子たちにも失礼だ」

予想通り声を荒げる京。しかし興奮して声を荒げる京を兄弟は予想していたのか、即座に抑え込み落ち着かせつつ同時に声を上げたガクトをたしなめる。

ありがとう兄弟。お前のものになった覚えはないぞ京。貰って悪いかガクト。

ちらりと姉さんを見る。あれは意外だなと思っている顔だ。確かに俺も貰った時は驚いた。だがまあ自分でも言うのはなんだが、頭がいいという事は同年代の女子から見ればモテる要素の1つではあるのだろう。
それに来月は卒業だ。その事が今回の結果に繋がったのだろう。

「まあ来月で卒業だ。最後のチャンスで渡してみようと思った女子がいたんだろう。驚く事じゃないな」

案の定、姉さんは俺が思った事と同じ考えに至ったようだ。

「その言葉、この後でも言えたらいいよね」

これから起こるであろう出来事を予想して、俺は小さな声で呟いた。
小さく言ったとしても聞こえているはずなのに、姉さんは俺の言葉を聞き流し理由を聞いてくる事はなかった。

「次キャップ」

「なあ、毎年思うんだけどホントにこれやる意味あんのか？」

俺の言葉を無視して進める姉さんに、そう疑問を口にしながらもヒロと同じように、足元の袋からチョコを取り出しテーブルに並べるキャップ。またガクトが打ちひしがれるがみんな無視だ。

「２３！　２４！　２５！　２５個だ！」

「今年は少ないなキャップ」

「キャップに渡しても無駄だって事を理解したんだよ女子が」

姉さんの疑問に俺は的確に答える。
まあそうだろう。キャップは無駄に顔はいいくせに未だに男女の垣根を理解していない。よく言えば純朴だが悪く言えばまだガキだ。
恋に恋する年頃の女子には攻略が難しいのだろう。
というかキャップ、本当に思春期を迎えるのか不安に思っているのは俺だけじゃないはずだ。

「じゃあ次はジンな～」

姉さんの陽気な言葉が響く。
恐らく今年もゼロだと思っているのだろう。ライバルがいないという状況に嬉しくて笑顔がこぼれるのを隠せていない。

ちなみに言っておく。俺と京は姉さんが兄弟を好きな事に気付いている。
姉さんはバレていないと思っているから言い出していないけど。

陽気な姉さんとは逆に俺と京はどうしたもんかと少しせわしなくなる。
そんな俺たちを不思議そうに見ていた姉さんだったが、いつもならすぐに報告する兄弟が、今日はそうせずに部屋から出ていった事にいぶかしげな表情を浮かべる。

嫌な予感を感じているのだろう。その顔がどんどん険しくなっていく。
案の定、姉さんの思った通り、部屋に戻ってきた兄弟の両手にはチョコが大量に詰まった紙袋が４つ握られていた。

姉さんが混乱しているのが手に取るように分かってしまう。
同時に溜息を吐いてしまった俺と京。

予想外過ぎる事に呆然となる姉さんを余所に、兄弟は紙袋からチョコを次々に取り出すとテーブルの上に順次並べていく。
姉さんと同じ呆然となるガクトとモロ。ワン子とキャップとヒロは純粋にチョコの多さに驚いている。
よくよく見ると気合の入ったラッピングばかりだ。やはりどう見ても本命だろこれ。

「９８、９９、１００、１０１、１０２。１０２個だな」

「これはいったいどういう事だジン！？」

姉さんは余りにも完全に予想外の事に、高ぶる感情のままに兄弟に詰め寄った。だが肝心の兄弟の方はわけが分からないといった感じで姉さんに返答している。

「どういう事って、お前が報告しろって言うから貰ったチョコの数を報告してるだけだろ？　なに怒ってるんだモモ？」

「大和！！」

兄弟に直接聞いても埒が明かないと判断したのか、姉さんは見渡すと質問の矛先をやっぱり俺に向けてきた。

ガクトは完全に白くなってるしモロとヒロはガクトを慰めるのに必死だ。キャップとワン子は納得できる答えを持っていないだろう。だから6年生になって兄弟と同じクラスになった俺か京なら理由を知ってるとあたりを付けたのだろう。

姉さんの直感は時々凄すぎるぞ。

姉さんは逃げ出そうとしていた俺の首根っこを引っ掴み、腕を回して逃げられないように首を固定するとみんなに聞こえないように興奮しながらも器用に声をひそめて質問してきた。

「どうなっているんだ!?　何で今年は貰ってるんだ!?　しかも何でこんなに多いんだ!?　去年までは1個も貰ってなかったんだぞ!?」

「さっき姉さんが自分で言ったじゃん。来月で卒業だから最後のチャンスで渡してみようと思った女子がいたんだよ」

「さっきお前が呟いていた意味はこれか！？　でもなんで６年生になって急にモテだしたんだ！？」

「いや、前から兄弟は女子に人気あったよ」

「なにっ！？」

一瞬固まる姉さん。衝撃の事実だろう。
今まで気付いていなかったんだから当たり前か。

「じゃあなんで去年まで貰ってなかったんだ！？」

「そりゃあ姉さんがいたからでしょ」

「私が！？」

これまた衝撃の事実なのだろう。
『私がいったい何をした！？』って顔してる。

「去年までは兄弟の側にはいつも姉さんがいたんだ。前から兄弟はモテてたけどみんな姉さんが怖くて渡せなかったんだよ」

「だから私が卒業したから今年のバレンタインに渡そうって事になったのか！？」

「そういうこと」

俺がさっき呟いた言葉の意味を完全に理解したのだろう。
だがまさか姉さん自身が兄弟の虫よけになっていたとは思いもよらなかっただろう。

「にしては多くないか!?　3ケタだぞ!?　うちの小学校4クラスだろ!?　1クラスの女子が14・5人だとしても同学年の女子の数を軽く超えてるぞ!?」

「渡したのは5年と6年の女子ほぼ全員。しかも殆ど本命で」

「なんの冗談だそれは!?　油断も隙もあったもんじゃないぞ!?」

まさにその通りだ。女子は怖い。

姉さんと一緒に首だけ振り返ってみて見れば、未だわけが分からない顔でこちらを見ている兄弟。その顔を見て何かに思い至ったか、姉さんは京を手招きする。

「おい京。まさかジンの奴……」

「うん、モモ先輩の予想通り。渡した女の子たちが可哀想だけど本命だと気付いていない。たぶんもうすぐ卒業だからお別れにくれたと思ってる」

おいこら兄弟。鈍感にもほどがあるぞ。

同じ事を思ったのか姉さんの目が胡乱げに細まった。

俺は渡した女の子たちに同情したくなった。

何で兄弟は普段は人の機微にあんなに敏感で気配り上手なくせして、こういった手の話にはまったく気付かないし興味がないんだ。

あれか？　もしかしてキャップと同じ人種の人間か？

同じ考えに至ったのか姉さんの雰囲気が少しだけ重くなった。
頑張れ姉さん、俺と京はとりあえず姉さんを応援してやるから。だから兄弟に想いが届くのに数年掛ったとしても諦めないでくれ。

「で、最後はガクなわけだけど……」

姉さんに代わって先に進めた兄弟の言葉に、全員がガクトに視線を向ける。

そこには某ボクシング漫画の主人公のように、ソファーに座って真っ白に燃え尽きたガクトの姿があった。

誰も声を掛ける事が出来なった。

結果からみると今年のバレンタインにチョコを貰えなかったのはガクトだけ。
去年まではキャップとヒロ以外は貰っていなかったから、何とか1人だけ恥をさらすような事はなかったのだが、今年はガクト以外は義理とはいえ貰っている。

ついにガクト1人が恥をさらした。しかも言い出したのはガクトだ。だから声を掛けられなかったのだ。同情からじゃなく自業自得過ぎて。

燃え尽き魂の抜けたガクトを放っておいて、それぞれ貰ったチョコの処分を検討する。
毎年の事なのだが、キャップとヒロは貰う量が多すぎて1人では処分できないので、渡した女の子たちには申し訳ないが仲間内で分けている。
今年は3ケタを誇る兄弟のチョコの量で大変な事になるだろう。

１個貰ったモロと３個貰った俺はそれぞれ自分たちで食べる事にすると決まった。残りはヒロの６３個とキャップの２５個。そして兄弟の１０２個を足して合計１９０個。

どんな量だよいったい！？

全員そう思ったのは間違いないだろう。

とりあえず兄弟以外は１人２０個。兄弟だけ１番貰ったということで３０個持って帰る事になった。

姉さんにしてみれば複雑だろう。好きな男が他の女子から貰ったチョコを処分するために食べるなんて悲しすぎると思う。

そう思って姉さんを見ると意外とさっぱりした表情をしている。

なんていうか、そこらへんの気持ちの切り替えは本当に早い人だと思う。

さてもう時間もだいぶたったから、そろそろ帰ろうと未だに魂が抜けたままのガクトを叩き起こしながら辺りを見渡す。

みんなそれぞれ持ってきた紙袋に分けたチョコを入れてる最中だったが、兄弟と姉さん、そして京の姿がないのに気付いた。

屋上にでも行ったのかとあたりを付けて部屋を出て階段を上がっていくと、案の定屋上に続く扉の前に京がいた。

「京？　こんなところで何して――」

俺の言葉に振り向いた京は、人差し指を立ててそれを口に当て『静かに』のジェスチャーをする。それに従い俺は途中で言葉を切る。

静かになった俺を手招きした京は、少しだけ開いていた扉を指し外

を見てみろとジェスチャーをするので覗いてみると、そこには兄弟と姉さんの姿はあった。

なかなか面白い場面だと直感した俺は、京にならって身を寄せて息をひそめ様子を覗き見ることにした。

風に乗って姉さんたちの言葉がよく聞こえてくる。

「どうしたんだモモ？　急に屋上に行こうなんて言い出して」

「あのな……その……」

兄弟の質問に姉さんは照れ臭いのだろう、少しどもりながら声を出す。

後ろ手にラッピングされた箱を持っている。恐らく兄弟に渡すためのチョコなのだろう。姉さんらしくないモジモジした姿は意外と可愛かった。

数分経ったが未だに話し出さない姉さんに、兄弟は慌てる事も急かす事もなく黙って待っている。

相変わらずの大人な態度だなと感心していたら、決心したのか姉さんは持っていた箱を両手で持って兄弟に差し出した。

「あのなジン……今年はその……京が手作りのチョコを大和に渡してたろ？　私もその……ついでに作ってみたんだけど……よかったら……も、貰ってくれ」

しどろもどろに言う姉さん。ここからじゃ見えないがたぶん顔は赤くなっているだろう。

「ありがとうなモモ。お前から貰えるのが1番嬉しい。お前の気持

ちがこもったチョコ、1番最初に丁寧に大事にいただく事にするよ」

その兄弟の返事に、俺と京は思わず顔を見合わせる。

時々思うのだが、兄弟ってもしかして姉さんの気持ちに気付いているんじゃなか？　そんな考えを視線に乗せて京に問い掛けてみるが、分からないと首を捻って返してきた。

まあ腑に落ちない事はあるが今はそれよりも――

「可愛いねモモ先輩」

「同感だ」

2人を眺めながら言う京の言葉に頷く。

物凄く貴重なものを見せてもらった俺たちは満足気に扉を離れた。

だがその瞬間。

「さて、覗き見とはいい度胸だな？　大和に京」

地獄の闇魔が降臨したかのような声が後ろから掛った。もちろん闇魔の声なんか聞いた事ないが雰囲気的にそう感じた。

震え上がる体を叱責して振り返ると、そこには物凄くいい笑顔を浮かべた姉さんの姿と、呆れたように、同時に救いようがないと言った感じで肩をすくめる兄弟の姿。

どうやら救いは期待できないようだ。

「私たちが気付いていないとでも思ったのか？」

フルフルと首を横に振る俺と京。

一層いい笑顔になる姉さん。

「よろしい。ではこの後の末路は予想済みだな？」

そう言って近付いてくる姉さんに、俺と京は気が遠くなるのを必死になってこらえていたのだった。

第２５話　乙女の戦、衝撃のバレンタイン（後書き）

あとがき～！

「第２５話終了。あとがき座談会、司会の春夏秋冬　廻です。今回のお相手は――」

「川神百代だ」

「今回も乙女全開の百代ちゃんです」

「だからちゃん付けはやめろと言っているだろ」

「はいはい。さて今回のお話ですが『こんなのあるわけねーだろ』というツッコミはなしでお願いしします」

「まあ普通に考えてバレンタインのチョコ3ケタなんてありえないよな。しかも小学生で」

「そこはあれだよ、二次創作のフィクションということで。まあ少し言い訳させてもらうなら――」

「言い訳するなら？」

「小学５・６年の女の子って、同学年より年上に憧れる年頃じゃん。精神的な成長って男子より女子のほうが早熟って言うし」

「そうらしいな」

「で、神ってどう見ても精神年齢小学生じゃない。高校生、へたすりゃ大学生レベルの精神年齢。それでいて外見も悪くない。となると――」

「モテて当たり前ということか」

「そういうこと。まあそうなるように書いてるんだけどね。実際、神みないな小学生いるわけねーし」

「いたらいたで、大人ぶって背伸びしてるようにしか見えないだろうな」

「実際そうだろ」

「ところで私が神の虫よけってどういう意味だ？」

「はっはっはっは、さすが百代ちゃん。小学校時代も覇王の名をほしいままだね」

「はっはっはっは、うるさいよお前」

めきゃ！

「っ！？」

「あ、しまった。作者のしちゃった……まあいいか、それじゃあ次投稿もよろしくな」

第２６話　変わる関係、神の決意（前書き）

第２６話投稿。

第２６話　変わる関係、神の決意

いつから気なりだしたかと言われれば、たぶん正確には答えられないだろう。

いつも一緒にいたし、幼少の頃なんかまさに四六時中隣にいたと思う。

それが当たり前で、何の違和感を感じることなく今まで過ごしてきている。

俺たちはたぶんお互いが家族でもなく友達でもない想いを持っているだろう。でも絶対に何があろうともお互いの最も信頼する相手で心を預けられる１番の存在だし、彼女もそう思っていてくれると言い切れる。

でも、言葉にすると物凄く曖昧な関係だと言える。

家族とは違う。

友達という言葉も当てはまらない。

友達以上恋人未満とよく噂されるがそれもなんか違う。

相棒、という言葉がもしかして１番しっくりくるのかもしれない。

こんなあやふやな関係が実に３年以上続いている。

と言ってもこれは俺が感じているもので彼女は恐らく違うだろう。

彼女の想いに気付いていないわけじゃない。意外と恥ずかしがり屋な彼女が、時に驚くようなアプローチをしてくるのはちゃんと分かっていた。

それを気付かない振りをしていたのは自分だ。

曖昧であやふやだけど居心地のいいこの関係を変えたくなかった。
変えたところでお互い決定的に変わる事はないと分かっていても、
俺はその1歩を踏み出すことに躊躇していた。

何より俺は『俺という存在』を明確に持っていなかった。

赤ん坊の頃に川神院の門前で置き去りにされた孤児。
それは俺の境遇でしかなく、俺という存在の由来にはならない。
俺は自分が自分だという確かな認識はもちろん持っているが、その
俺がどう生まれで本来はどうやって生きる存在なのかを全く知らな
いのだ。

分かりやすく言えば、俺は“暁”という一族がいったいどういう一
族なのかを知りたかったのだ。

だから鉄心さんから“暁”の一族についての話を聞いた時、自分と
その周りをありのまま受け入れてもいいと思った。

それがきっかけになったのは間違いない。
彼女にしてみればかなり時間を掛けてしまったと思うだろう。

女の方が精神的な成長が早いとはよく言うが、全くその通りなのか
もしれない。
少なくとも、彼女は俺より先に2人の関係をどうにかしたいと思っ
て行動を起こしていたのは確かなのだ。

なら俺もそろそろ覚悟を決めなければならないのだろう。

先日聞いた俺という存在の意味を俺なりに受け入れたのだから、先に進むのは決して悪い事にはならないはずだ。

手の中の箱を眺めながら、俺は小さく笑みを浮かべたのだった。

§　§　§

――２００５年　３月１４日　月曜日　ＰＭ５：００――

今日はホワイトデー。

製菓会社の陰謀によって作られたバレンタインデーのお返しの日。ここ日本ではものの見事に製菓会社の陰謀にはまった人間が１ヶ月のお返しを切磋琢磨に励んでいた。

まあ偉そうに言ってみたものの、俺たちもファミリーの女子たちへのお返しをちゃんと用意しておく。

ちなみにファミリー以外の女子にはお返しはしない。可哀想とも思うが、数が数だけにお返しなんて用意できるはずがない。

チョコを貰うと同時に告白をしてきた女子もいたがその場で断っているし、手渡しすらされていない物に対してのお返しなんて出来るものじゃない。

実際キャップとヒロもファミリー以外にはお返しは一切していなかった。

昨日は男全員で今日のためのお返しを買いに行った。
今年は何にしようかといろいろ悩むのが毎年恒例だ。お菓子は確実に却下される。モモが言うにはバレンタインで俺たちが貰ったチョコを分けて食べたのに、ホワイトデーのお返しまで食べ物はやめてほしいのだそうだ。

分からんでもないが貰う人間が貰う物にダメだしをするのはどうなんだ？

だがお菓子は欲しくない心情が分かるから無駄なツッコミはしない。そうなると候補として挙がるのはアクセサリーなどのファッション系かぬぐるみなどのファンシー系、あるいはハンカチなど日常的に使うものぐらいだろう。

ちなみにガクがお笑いグッズにしようと言い出したが、その瞬間に物理的に黙らせた。そんなお笑い路線に行ったら去年みたいにモモにボコボコにされるのは目に見えている。

ただでさえ3倍返しが鉄則になっているのにそんなこと出来るか。

ノビてるガクを放置して残りで意見を出し合った結果、無難にもマグカップとハンカチにしようという意見で纏まった。
ちなみにヤマに個人的にミヤにお返しするのかと聞いてみたら速攻で否定してきた。

『そんなことしみろ！　次の日から彼女どころか妻ですって周囲に言いふらすに決まってる！　そんな怖いこと出来るか！』

必死に言うヤマの言葉に違和感なく頷いてしまった俺たちは、改めてミヤの一途な想いが常識とは違うものだと実感したのだった。

まあそんな事が昨日あったわけなのだが、今俺たちがいるのは秘密基地として使っている部屋の扉の前。
さっきまでお返しの品を取りに行っていたヤマを待っていたのだが、到着したので女子たちが待つ部屋の中に入る直前だ。

今日の朝、やけに機嫌のよかったモモの姿が目に浮かぶ。
あれは今日のホワイトデーのお返しを楽しみにしていると同時に、何か別の事を期待しているような雰囲気だった。
そして玄関でじっと俺を見つめて、物凄くいい笑顔を浮かべると颯爽と学校に向かって行った。

なぜか変なプレッシャーに襲われた俺だった。

もしかしてあれか？　俺のやろうとしている事ばれてるのか？　これもいつもの『女の勘』ってやつなのかな？

何やら背中を走った薄ら寒さに体を震わせた俺をカズが不思議そうに見ていた。

そんな朝のやり取りがあったため、俺は特別に用意したお返しを入れたポケットの上からさりげなく軽く叩くと、全員に目で合図を送ってきたキャップに向かって頷き返した。
そして扉を開いたキャップに続いて部屋の中に入るのだった。

「お～！　遅いぞお前ら」

入って正面のソファーに腰掛けていたモモが最初に声を掛けてきた。
カズはモモの隣に座り、ミヤはいつもの定位置の1人掛けの椅子に座っている。

「わりーなモモ先輩。ちょっと物を持ってくるのに時間が掛った」

代表してキャップが言葉を返す。

俺たちも部屋に入りそれぞれのいつもの定位置へと向かう。。

ちなみに風間ファミリーの基本の定位置を説明しておこう。

扉正面で窓を背にしたソファーにキャップとヤマ。

部屋に入って左側のソファーにガクとタク。

その対面右側のソファーにカズ。

扉を背にする手前のソファーにヒロ。

キャップたちが座るソファーの隣の1人掛け椅子にミヤ。

扉から1番奥に位置するタンスのような棚の上にモモ。

そして窓の前の掛けられたハンモックの上に俺。

以上の構図が秘密基地での基本の定位置だ。

今は正面のソファーにモモとカズが座っているのから、キャップとヤマは右側のソファーに腰を下ろした。

「さあ男ども、今年の献上品を差し出すがいい」

「とっとと出しなさい！」

全員が腰を下ろしたのを見てモモが早速催促し、カズがそれに合わせて声を上げる。

あの雰囲気から察するにカズは今年もお菓子だと思っているのだろう。可哀想だが期待に添えそうにないな。

「ワン子、気合入っているところ申し訳ないが、今年は食べ物じゃ

ないぞ」

「ガーン」

ヤマの注釈に目に見えて落ち込むカズ。そんな予想通りなカズに俺は持っていたカバンからマシュマロの袋を取り出すと、カズの太腿の上に投げて寄越した。

「ジン兄？　何これ」

「余りモン。それしかないけど良かったら食べろ」

俺の言葉に『ありがとー』と言って早速袋を開けるカズ。そんなカズの行動を見ていたモモは意味ありげな視線を俺に向けてきた。その視線が何を言っているのか分かっている俺は頷いて返す。小さく笑っているヒロの顔が視界の端に映った。

カズに渡したマシュマロは昨日、コユキに渡したホワイトデーのお返しだ。

実は先月の２月１３日にヒロと一緒にコユキからチョコを貰っていた。それのお返しとして昨日、俺が代表でコユキにお返しをしたのだった。

ちなみに何でマシュマロかというとコユキのリクエストだった。

「よし！　じゃあ今年の上納品だ大和！」

「了解だキャップ」

キャップの宣言にヤマが持っていた紙袋からお返しの品を取り出すと、ミヤには手渡ししモモとカズには目の前のテーブルの上に置い

て見せた。

なにやら儀式めいたやり取りたが恒例のやり取りだ。
3年前のホワイトデーの時にヤマが面白半分で献上の儀式をやったところ、モモがそれを気に入り毎年やるようにと決定したのだ。

「ほう、今年はネタものじゃないのか。去年と同じだったらそれなりの制裁を加えようと思っていたのにな」

「やっぱりその気だったんだ。ガクトが言い出したけどジン兄が一瞬で黙らせたよ」

「俺様の意見、聞かれる事なく終わってよかったのかもな」

モモの言葉にタクが真っ先に反応し、ガクの体がビクリと震える。
思った通りだ。ガク、俺に感謝しろよ。モモの制裁の方が俺の物理的強制沈黙よりも酷い事になるのはさすがのお前でも想像できるだろ。

渡したマグカップとハンカチは思いのほか好評だった。
カズには茜色のマグカップとハンカチとい言うよりはハンドタオルを。
ミヤには藍色のマグカップとレースの付いた白いハンカチを。
モモには黒色のマグカップとシルクのハンカチをそれぞれ選んだ。

意外と嬉しそうだったのがモモの反応。
恐らく余り女の子らしく扱われたり、女の子らしい贈り物もしてもらった事がないモモにとって、シルクのハンカチは予想外だったのだろう。

ああ見えて意外とロマンチストなところがあるからなモモは。

「それで、今年は誰の意見を採用したの？」

「マグカップは僕。ハンカチはジン兄の意見」

ミヤの質問にヒロが答える。

このお返しをした後のネタばらしみたいなやり取りも恒例の儀式となっている。

ミヤも今年は満足気だ。まあ去年、初めてのホワイトデーなのにネタもの渡されたミヤは可哀想だった。

「うん、ナイスセンス。キャップやガクトじゃこうはならないね」

「なんか僕もそこに入ってそうな気がするな」

「ちなみにモロの意見は？」

「僕はぬいぐるみ。お金がかかり過ぎるから却下された」

「仕方ないさ。7人の合計でも予算的に無理だった」

ミヤとタクのやり取りに割って入る。

別段タクの意見でも問題はなかったのだが、実際却下の理由はキャップとガクがぬいぐるみを持ったモモとカズの姿を想像して爆笑したからだ。もしタクの意見を採用していたら今頃キャップとガクはモモに叩きのめされていただろう。

「ねーねー大和。バレンタインで京に個人的にチョコ貰ったのに、大和は京に個人的なお返しはしないの？」

「いつでも大歓迎！　３６５日受け付けるよ大和！」

さすがミヤ。さっきまで俺たちとの会話に参加していたのにヤマのお返しの話が出た途端、カズの言葉に食いついた。相も変わらず変わり身の速い事だ。

そんなミヤに顔を引きつらせながら言葉を掛けるヤマ。

「もはやそれだとホワイトデー関係ないだろ。なあ京、もし俺がお前に個人的なお返しをしたらどうするつもりだ？」

「もちろん大和の近所の人たちに『大和の妻です』って自己紹介して回るの」

ヤマが想像したまさにその通りの返答に俺たち男連中は顔が引きつるのを止められなかった。

その返答を間違える事なく予測したヤマも凄いが、躊躇う事なく行動すると言い切ったミヤもある意味で凄いな。

「そう言うと思ったから個人的なお返しはしない」

「私の事をそこまで分かってるなんてさすが大和。もうこれは結婚しかないよね。だから好きです付き合って」

「言葉に脈絡がなさすぎるぞ京。お友達で」

もはや恒例なりつつあるやり取りに、突っ込むのすら無駄だというのが最近になってみんなで導き出した答えだ。

だからこのやり取りのきっかけを作ったカズも2人を無視して、今度は俺にさっきヤマにしたのと同じ質問をしてきた。

「ジン兄は？　お姉様に個人的なお返ししないの？」

まさかカズから言われるとは思っていなかった俺は、飲んでいたジュースをもう少しで吹き出すところだった。

そんな俺を見て先ほどのやり取りはどこに行ったのか、２人してニヤニヤした厭らしい笑みを浮かべて俺を見るヤマとミヤ。

「モモ先輩から個人的に貰ってたのかよジン兄！？」

「何でそこで驚くのさ？　去年も渡してたじゃないモモ先輩」

ただ１人驚くガクに速攻で突っ込むタク。キャップは興味がないのか眺めているだけで、ヒロは成り行きを静観している。

俺と同じようにカズに言われた事で少し驚いていたモモだったが、ニヤリと笑うとミヤと同じ返答をしてきた。

「いつでも大歓迎、３６５日受け付けるぞジン」

あの顔はアレだ。絶対にお返しがないと思ってるな。

まあ去年の一昨年も渡していないからそう思っているのかもしれないが、いい機会でいいきっかけだ。仲間がいる前でやってやろう。

「それじゃあ受け取ってもらおうか」

「えっ！？」

覚悟を決めて言った俺の言葉に、１番驚いたのは予想通りモモだった。

「カズ、ちょっと悪いがそこ代わってくれるか？」

ハンモックから飛び降りモモの隣にいたカズに声を掛ける。言葉もなくコクコクと頷いたカズはモモの隣を離れ、対面のヒロの隣へ腰を下ろす。全員が呆然としている中で俺はジャケットのポケットに入れていた箱を取り出しながらモモの隣へと腰を下ろした。

部屋の中を静寂が包んでいた。

モモは呆然と俺が取り出した箱に視線を向けている。そんな姿を可愛いと思いながら俺は緊張を振り払うように大きな息を吐くと、姿勢を正し座りながらもモモと正面から向き合う。

さて、一世一代の大舞台の始まりだ。

第２６話　変わる関係、神の決意（後書き）

あとがき～！

「第２６話終了。あとがき座談会、司会の春夏秋冬　廻です。今回のお相手は――」

「あ～暁神だ」

「何やら照れていらっしゃる模様」

「うるさいな……」

「迫力がないね。さて今回のお話ですが、主人公がついに覚悟を決めました」

「それなのに次回に続くのはどうなんだ？」

「別に意図したわけじゃない。理由は文字数が１万２千にいきそうだったから２話構成に分けただけ」

「バレンタインの話と同じ理由か」

「そういう事。最近ちょっと意味のあるエピソードを書こうとすると軽く１万文字超えちゃうんだよね」

「意味のあるって……その言い方だと意味のない話もあるのか？」

「言葉のあやだ。日常的な話ではなくイベント的な話って意味の事。

日常的な話は逆に文字数が増えなくて困ってるんだけどね……頑張って書いても5千～6千文字ぐらいかな？」

「約2倍の差か……確かに2話構成になったりするはな……ちょっと待て。最初の頃の話をみると大体3千～4千文字だぞ？　いつから5千以上になった」

「鋭いね君……いつってことはない。いつの間にか増えてるだけ。小雪編なんて全話5千文字超えてるからね」

「まあの話は仕方ないだろ……それで？　次はこの話の後編なんだろ？」

「もちろん。だた少しシリアスで小難しい話です。作者は書いている途中でわけ分からなくなりました」

「おい……それでいいのか……」

「まあちょっと変な話で終わり方も強引になっているかもしれませんが、次投稿もよろしくお願いします」

第２７話　変わる関係、始まりの始まり（前書き）

第２７話投稿。

ある意味でやっとここまで来ました。

第27話　変わる関係、始まりの始まり

自分なりに結構頑張っていたと思う。

いつも一緒にいて、小さい頃なんて常に連れまわしてた。
隣にいるのが当たり前で、いない事の方に違和感を感じるくらいだった。
私たちはお互いを言葉に表せない存在だと認識していたと思う。はっきり分かるのはお互いが最も信頼できる相手で隣にいて心地良い存在だということ。たぶんあいつもそう思ってくれている。

でもそれは凄く曖昧な関係だ。

家族じゃない。
友達なんて言葉でくくりたくない。
よく友達以上恋人未満なんて言われるけどそんなんじゃない。
たぶん相棒っていう関係が1番ぴったりと当てはまるんじゃないだろうか？

だけど私はあいつより先に自分の本当の気持ちに気付いた。

その気持ちを持ったままもう2年以上の月日が経った。
たぶんあいつは私の想いに気付いているだろう。私のアプローチにも気付いているはずだし、何より人の気を敏感に感じ取るあいつが私の気持ちに気付いてないわけがない。
恐らく気付かない振りをしているのだろう。

言葉に出来ないあやふやだけど心地良いこの関係。
でも私は言葉に出来る関係にしても決定的に何かが変わる事はない

と分かっていたから、1歩踏み出す決意をする事が出来たんだ。

でもあいつが躊躇う理由が分からない事もない。

あいつは時々、凄く遠くを見ているような気がする。

心ここに在らずでどこか遠くへ行ってしまうような雰囲気がある。

たぶん、自分のルーツを考えているんだろう。

あいつは孤児だ。赤ん坊の頃に川神院の門前に置き去りにされていたらしい。

だからと言って自分が何者なのかを悩んでいるわけではなく、自分がどのように生きるはずだったのかを考えているような感じだった。

それだけあいつにとって“暁”という血が思った以上に重く圧し掛かっていたのだろう。

だから何だって言うんだ。

あいつはあいつ以外の何者でもなく、例え“暁”の血がどんな意味を持っていようとも、私にとってあいつの存在は代える事の出来ないほどになっているのだ。

例えあいつがどんな人間だろうと、受け入れる覚悟はとっくに出来てるんだ。覚悟がなきゃあんなあからさまなアプローチなんかするか。

だからお前もそろそろ覚悟を決めてもいい頃なんじゃないか？

なあ、ジン？

§　§　§

「いつでも大歓迎、３６５日受け付けるぞジン」

恐らくお返しはないだろう。去年も一昨年もバレンタインにチョコを個人的に渡したが、ホワイトデーのお返しはなかった。だから今年もないだろう。
そう思っていたから軽い感じでからかうように言った。

「それじゃあ受け取ってもらおうか」

私の想いはまだ通らない。でも今年は少しだけど意識してもらえるように、学校に行く前に玄関でじっと見つめて笑顔を浮かべてやった。今年も無駄かもしれないけど。
そう思っていたからジンが言ったその言葉を理解できなかった。

「えっ！？」

返す事が出来たのはそのひと言だけだった。

座っているソファーの後ろにあるハンモックから飛び降りたジンが、私の隣に座っているワン子に声を掛ける。
その言葉に声もなく頷いたワン子は、私の隣を離れ対面に座っていたタカの隣へと移動する。

思考が目の前の変わりゆく光景に全くついてけない。

みんな呆然としているが、恐らく1番呆然としているのは私だろう。
部屋の中はさっきまでの喧騒がまるで嘘だったかのように静寂に包まれていた。

隣にジンが座った気配を感じ、未だはっきりとしない思考のまま視線を向ければ、その手にラッピングされた長細い箱を持っていた。
呆然としたままその箱を見つめる。

これってアレか？　期待してもいいって事なのか？

まるであの日の時の、私がジンの事が好きだと気付いた誕生日の日と全く同じような状況に、私は鼓動が速くなっていくのを感じた。

今この光景は、私の期待通りの展開になるのだろうか。見極めなければならないのに、まだ思考が正常に戻らない。

私は食い入るようにジンの手にある箱を見つめる。そんな私を優しく笑って見ている雰囲気を纏っていたジンが、急に大きな息を吐き姿勢を正し真剣な雰囲気を纏うと、座りながらも私と真正面に向き合うようにこっちを見た。

それにつられるように私もジンを真っ直ぐ見た。

ドクンッと大きく心臓が鳴ったような気がした。
こんな真面目な目でジンが私を見たのは、私が知る限り初めてだと思う。
ジンが纏っている雰囲気に私の浮ついていた鼓動はどんどん落ち着きを取り戻してく。

これは告白じゃない。ジンは恐らく最近悩んでいた事を私に話して

くれるんだ。なら私は落ち着いてジンの言葉を聞かなきゃいけない。

たぶんこの話は私とジンの新たな“何か”の始まりになるんだ。

「おいおいジン兄。真面目になるのはいいが告白するんならとっとやってくれや。俺様たちが証人になってやるからよ」

空気の読めていないガクトに大和と京の批難の視線が向く。

さすがの2人はこの雰囲気を読んだらしい。ワン子とタカとモロロは何かあると思って言葉を出さないでいるのだろうが、キャップはよく分からないが黙ったままだ。

「悪いガク、ちょっと真面目な話をするから茶化さないでくれ」

大和と京の視線にビビるガクトに、ジンは視線は私に向けたまま優しく声を掛ける。

「みんなにもきちんと聞いてほしい事だからここで話をする。悪いけど少しの間、黙って聞いててくれ」

そして決意のこもったジンの声に、みんながいっせいに頷く。

その気配を感じ取ったジンはいったん、視線を手に持っていた箱に向けるとそれを両手で持ち直し視線をそのままに話し出した。

「俺は孤児だ」

私以外が全員息を呑んだのが分かった。

特にワン子は驚いただろう。ジンが居候だという事は話してはいたが、自分と同じ孤児だたという事は伏せていた。

「赤ん坊の頃に川神院の門前に置き去りにされていたらしい。だから俺は正確な誕生日は知らない。生後数ヶ月経ってたのと置き去りにされた日から逆算して、語呂合わせで８月８日になった」

静寂が部屋を包む中、ジンの淡々とした声がやけに響いていた。急に話されたジンの出生にみんなどう反応していいのか分からないといった感じだろう。それでもみんな目を逸らす事なくジンを見る。

「つまりカズと同じで俺は両親の顔を全く知らない。生きているのか死んでいるのか、それすらも知る術が俺にはない」

ワン子に向かって軽く言っているように見えるが、全く笑える内容じゃない。だがワン子も理解しただろう。どうしてジンが自分に何かについて気に掛けていてくれた理由が。

私たちが風間ファミリーに入りワン子が孤児だと知った頃、ジンはいつもワン子を気遣っていた。それはおそらく同じ境遇からの共感があったのだろう。

「じゃあ兄弟は……ずっと川神院で暮らしていたのか？」

「まあな。だから川神院が俺の家なんだ」

やっと立ち直った大和の問いにジンは笑みを浮かべて答える。そしてその笑みのまま私に向かって言葉を掛けてくる。

「そういうわけでモモとの付き合いも――」

「文字通り生まれた時から。もう１２年と半年だな」

言葉を引き継ぎ笑みを返した私にジンは一層深い笑みを浮かべた。

懐かしいなんてものじゃない。まさに言葉通り『生まれた時からの付き合い』。お互い物心ついて初めて見た同年代の異性だ。

だから私たちの関係は曖昧なんだ。

一緒に暮らしているが血の繋がりはないから『家族』じゃない。

同年代の異性だが物心ついた時から一緒だったため『友達』とは少し違う。

だから『相棒』という関係が1番ぴったりと当てはまるが、正確に言えば『相棒』という関係も正しくはない。

だから曖昧。だけど確か繋がりがあるからそれで良かった。

それを崩したのが私だ。

あの誕生日の日。

ジンの事が好きだと気付いた私が、少しずつ曖昧だけど確かな繋がりのある私たちの関係に変化を入れてきた。

明確な言葉での繋がりを欲してしまったんだ。『家族』ではなく『友達』でもない。

『恋人』という繋がりを……

「正直に言うとモモの気持ちには気付いていた」

私から少しだけ視線を逸らしたジンの言葉に心臓が大きく脈打った。

恥ずかしさが込み上げてくると同時にやっぱりという思いもあった。

やっぱりジンは気付かない振りをしていたんだ。

ふと周りを見ると、キャップ、ワン子、ガクト、モロロ、タカの5

人はジンの言葉の意味が理解できずに首を捻っている。逆に大和と京は私と同じでやっぱり、といった表情をしていた。

瞬時に悟った。大和と京は私のジンに対する想いに気付いていたんだ、と。

恥ずかしさが増した。

確かにジンにアプローチをしてきたが、それは極力2人きりの時だけ。みんながいる前では出来る限りいつも通りの振る舞いをしてきたつもりだった。

まあ、もしかしてバレてるんじゃないかとは思っていたが、本当にバレていたんだと分かると思った以上に恥ずかしかった。

顔が赤くなっていくのを止められない。

そんな私を見て、ジンが優しげな笑みを浮かべてるのが雰囲気で伝わってくるからなおさら赤くなっていく。

「でも……その想いに答える事は出来なかった」

話が核心に入った。

「何で……？」

私の心情を悟ってくれたのだろう、静かにだが少しだけ怒りのこもった京の問い掛けに、それでもジンは揺らぐことなく答える。

「さっきも言ったように俺は孤児だ。もちろん川神院を自分の家だと言った言葉を撤回するつもりはない。だけど俺は『俺という存在』の由来を知りたかったんだ」

「由来……？」

難しい言葉に、モロロが首を傾げながら呟く。

「俺自身のルーツってやつだな。俺がどういう家の生まれで、本当はどういった生き方をするはずだったのか、それが知りたかったんだ」

どことなく自嘲的な笑みを浮かべるジン。

この笑顔だ。この笑顔を見る度に私はジンがどこか遠くへ行ってしまうんじゃないかという不安にかられるのだ。

「どういう家の生まれとか！　どう生きるはずだったとか！　そんなの関係ねぇ！　ジン兄はジン兄だろ！　今ここにいるジン兄が俺たちにとってのジン兄だ！」

叫ぶように放ったキャップに全員の視線が集まる。

真摯な目で真っ直ぐにジンを見ている。

こんな状況でそう言い切れるキャップはやはり凄いと思う。キャップが私たちのキャップたる理由はこういう心を持っているからだ。

そんなキャップの叫びと視線に嬉しそうに笑うジン。

「その言葉、ありがたく受け取っておくよキャップ。でも安心しろ、別に自分を疑ってるわけじゃない。俺はちゃんと俺なんだと認識しているし、それを疑ったことなんかない」

「じゃあ何が知りたいんだよジン兄は？」

いぶかしむガクトの質問に、言葉を選びながらジンは答える。

「俺自身の事じゃなくて『暁の家』について知りたかったんだ」

「どうして自分の家の事を？　捨てられたのに？」

不安そうに言うワン子。同じ捨てられた身であるワン子はジンと同じように生みの親を知らないし、連絡すら出来ない。同じ境遇のジンが自分の家を知りたいという言葉に、何かしら思うところがあったようだ。

「親の事じゃないよカズ。言ったろ？　俺が知りたいのは『暁の家』の事だって」

「どうして？」

「……言っても信じられないと思うけど……俺は武術を習った事がない」

「嘘でしょ！？」

ジンの言葉の意味を真っ先に理解し反論してきたのはやっぱりタカだった。

信じられないのも無理はない。私も最初は信じられなかった。何度か手合わせした事のあるタカはジンの強さをきちんと理解してる。だから信じられないのだ。

「武術を習った事がないって……川神院に住んでいて、あれだけの業を持っていながら……それはいくらなんでも嘘でしょ？」

愕然とするタカにジンは淡々と答える。

「本当だよヒロ。俺は今の今まで武術を習っていない。俺の使う業は“覚えた”ものじゃなくて“思い出した”ものだ」

「思い出す？」

「そう。なんて言うのかな……“血”っていうか“魂”っていうものが記憶していて、それを思い出したから使えるようになったって感じなんだ」

余りにも抽象的すぎるジンの言葉に、武術に通じるタカや京ですら首を傾げるしかないのだから、2人以外は全く理解出来ていないだろう。

「だから先日ジジイに聞いていたのか？」

「ああ。そして全部教えてくれたよ。鉄心さんは」

私の言葉にジンは私を真っ直ぐ見て言葉を返す。
恐らくここからの話がジンの言いたかった事の始まりなのだろう。

「その一族は現存するありとあらゆる武の始まりにして頂点に存在する一族。その肉体にではなく魂に血脈にあらゆる武の業を刻み込む。一族に連なるものは業を覚えるのではなく思い出す事で強くなっていく。最強にして無二。始まり故にその名を“暁”」

淡々と語ったジンの話に誰も言葉を返せなかった。
それがジンの家名『暁』の由来だと言うのかジジイ？　それがジンの正体だと？

「なるほど、全ての始まりだから夜明け前を意味する『暁』を名乗ったってわけだ」

名前の由来の意味を理解したのだろう静まり返った部屋の中、大和の呟きが小さい声でもやけに大きく聞こえた。

「それで？　それを俺たちに説明したからといってどうにかして欲しいわけじゃないだろ？　兄弟？　言いたい事はさっさと言えば？」

まるでジンの想いを全部分かっているかのような大和の口調。
確かに説明されたからといって、私たちのジンに対する接し方や考えが変わるわけじゃない。キャップが言ったように、今のここにいるジンが私たちにとってのジンなのだ。

「さすがヤマ、よく分かってる」

大和の言葉にさっきまでの緊張感をほぐすような笑みを浮かべ肩をすくめる。
そして改めて手にしていた箱に視線を向けて言葉を紡ぐジン。

「これはきっかけなんだ。俺が暁の一族の意味を知り、俺なりに受け入れ納得する事で、今までの自分よりさらに踏み込むためのきっかけなんだよ」

そこで言葉を切ったジンは、目を閉じ数回深呼吸を繰り返す。
その間、誰も何も言わずに静かにジンを見ていた。そして最後に大きな深呼吸をしたジンは、真っ直ぐに私を見つめ、手にしていた箱を私に差し出した。

「モモ、これを受け取ってほしい」

みんなが見つめる中、私はゆっくりと差し出された箱を受け取る。まるであの誕生日の日の夜のようなやり取りに、知らず笑みが浮かんでいた。

「開けてもいいか？」

ただ違うのはあの日のような緊張感はまるでなかった。

今日までの自分の行動を考えれば、心臓が破裂しそうなぐらい緊張していてもおかしくないのだが、なぜか心は穏やかだった。

ジンが頷いたのを確認して、ゆっくりラッピング用の包装をはがし箱を開ける。中に入っていた長細いケースの蓋を開けると、その中にはペンダントが入っていた。

私は急いで携帯のストラップに付けている小さいブローチを取り出し見比べる。やっぱりそのブローチと全く同じ四つ葉のクローバーの形をした飾りの付いたペンダントだった。

「ジン……これって」

呆然と聞き返す私にジンは穏やかな笑顔を浮かべて答える。

「何がいいか結構迷ったんだけど、1歩踏み込むのなら、俺たちの関係が変わり始めたあの日と同じ物の方がいいと思ったんだ」

あの日のあの時から気付かれていたんだ。

恥ずかしさと懐かしさと嬉しさがごっちゃ混ぜになって、なんて言葉を返していいか分からなくなった。

でも嬉しさがどんどん大きくなってきているのは分かった。

「いつからなのかは分からない。気付いた時には変わっていた。でも自分のルーツがはっきりしていないのにその想いを告げるわけにはいかなかった。だけどその問題もなくなった。だから今日ここで告げようと思う」

言葉を切り真っ直ぐ真摯に見つめてくるジンを私も真摯に見つめ返す。

これから紡がれるジンの言葉を聞き逃さないために全て神経を集中させる。

そして私たちのこれからを決める言葉がジンの口がら紡がれた。

「好きだモモ。『家族』でもなく『友達』でもない。『恋人』として、これから一緒に過ごしてほしい」

望んでいた、ずっと願っていた言葉。

爆発しそうな嬉しさを何とか抑え込み、私はありったけの笑顔を浮かべ、今の私の全てを込めて言葉を返す。

「ああ!!　これからもよろしくなジン!!」

２００５年3月１４日月曜日ＰＭ５：４５分。

今日この年のこの日のこの時間は、私の人生にとって忘れられない日になった。

第27話　変わる関係、始まりの始まり（後書き）

あとがき～！

「第27話終了。あとがき座談会、司会の春夏秋冬　廻です。今回のお相手は――」

「川神百代だ～！」

「浮かれてるね……さて今回のお話ですが。少しだけですが神の設定を暴露させました」

「暁の一族の事だな。あの設定はどういう意味でつけたんだ？」

「ん～あまり意味はないんだけど……キャラ作りの段階で君より強いということは決めていた」

「ロング座談会で言ってたな」

「うん、でもそうなると普通の人間じゃ無理だ。そこで考えたのが特別な血筋というわけ」

「なるほどな。名前からの後付けじゃなかったわけだ」

「……も、もちろんだとも」

「オイ、なんだその間は？　なんでドモってんだ？　正直に言えば殴らないでおくぞ？」

「すいません、思いっきり後付けです」

ゴンッ

「最初から言えばいいんだ」

「殴らないんじゃないのかよ！？」

「何となくな。ところであれだ、私の気持ちがまさか大和たちにバレていたとは……」

「まあ大和は人の気持ちの機微に聡いし、京は恋する乙女だしね。同じ恋する乙女の事なら分かるんだよ」

「お前が恋する乙女とか言うと気持ち悪いぞ」

「悪かったな！？」

第２８話　金曜集会、ファミリーのナンバー２（前書き）

第２８話投稿。

久し振りの三人称です。

第２８話　金曜集会、ファミリーのナンバー２

４月になり新たな年度を迎えた。

暁神、直江大和、風間翔一、川神一子、島津岳人、師岡卓也、椎名京の７人はこの４月から中学生になった。

しかし先月の３月、京は小学校を卒業すると同時に静岡県へと引っ越ししていった。

原因は両親の離婚。

それを機に京の父親は静岡へと居を移し、京はついて行かざるを得なかった。

それでも京は仲間たち――風間ファミリー以外の友達は考えられなかった。助けてくれて、守ってくれて、そして救ってくれたみんな。

今の京にとって風間ファミリーが自分の全てだった。

だから京は静岡に引っ越しても、時間を作り金曜日の夜には川神市のみんなの集まる秘密基地へと毎週通うことにしたのだ。

これが後々まで続く『金曜集会』の始まりだった。

§　§　§

――２００５年　４月１５日　金曜日　ＰＭ５：００――

緋鷺刀は1人定位置のソファーに座り本を読んでいる。
最近は秘密基地に来ても誰もいなくて、1人で待っている事が多くなった。だがそれも仕方ないと緋鷺刀は考える。
自分以外は全員中学生になり、1人だけ小学生の自分とは授業の時間帯も何もかも違うのだ。

待つ事は苦手じゃない。
学校でも有名なファミリーに入っているから勘違いされがちだが、緋鷺刀は元来物静かな方で1人で過ごす時間を余り苦に思わない性質だ。

階段を上ってくる気配を感じ、読んでいた本から視線を上げた。

（この気配からして岳人くんと卓也くんだ）

本を閉じ立ち上がると、点火棒ライターを手に取り照明代わりのランプに火を付けて回る。電気が通っていないため秘密基地の明かりは数個のランプのみ。
最初から点けていたテーブルの四隅以外の部屋の所々に置いてあるランプ全てに火を付けた時、部屋のドアが開いて緋鷺刀が予想した通りの人物が入ってきた。

「う〜い、俺様が来たぜ」

「あ、やっぱりまたタカが1番乗りだね」

思い思いの言葉を掛けて入ってきた岳人と卓也。
緋鷺刀は卓也の言葉に苦笑いを浮かべる事で返答すると、手に持っていた点火棒ライターを棚に戻し先ほどまで座っていたソファーに

腰を下ろした。
卓也も岳人も返事がない事を特に気にするでもなく、定位置であるソファーに座り込んだ。

「今日は学校から直接来たの？」

2人の足元に学生カバンがある事に気付いた緋鷺刀は何となしに問い掛ける。

「ま～な～。寄り道してたら結構時間が経っててな。家に帰ってから来るよりはと思ってな」

「だから早く帰ろうって言ったんだよ。今日は京が来る日なんだから」

悪気なく答える岳人に卓也は呆れたように言う。
中学生になってもいつもと変わらない2人のやり取りに、どこか安心を感じた緋鷺刀は、自分が思った以上に1人だけ取り残されたかのような不安を感じていたんだと気付いた。

でもこれはどうしようもない事だ。年齢と学年はどれだけ頑張っても変える事は出来ない。1年遅く生まれて来た自分の運命なのだろう。
恐らく1年早く生まれた百代も別の意味で同じような感情を持っていたに違いない。緋鷺刀はそう思いどうしようもない事で不安になる事を止めた。

「あ、キャップと大和くんも来たよ」

階段を再び上がってくる気配を感じた緋鷺刀は呟くように言った。

「ウィーッス」

「なんだまだみんな集まってないのか」

緋鷺刀の言葉通り翔一と大和が扉を開けて入ってきた。

「なんと言うか、相変わらずタカとジン兄とモモ先輩は凄いよね」

「気配だけで人が特定できるなんてもはや人間じゃねーよ」

卓也と岳人の呟きにも緋鷺刀はどくふく風といった感じで気にしてない。

日常的に起きている事なので今更気にしたところで意味がない。分かる事は悪いことではない。すぐに侵入者を察知できるからだ。

この秘密基地にしている廃ビルは立地条件からか結構、不良やアウトローに憧れてる人間から狙われやすい建物なのだ。

以前も数回そういった連中が入り込んできて、ちょうどその時部屋にいた神が撃退したという事件があった。

「しっかし京の執念はある意味ですげーよな」

男5人で喋りながら残りのメンバーを待っていると、岳人が唐突に言う。話題に上げたのは中学進学直前に静岡に引っ越した京の事だ。

「執念って言葉は可哀想だよ。それだけ気持ちが強いって言ってあげなきゃ」

卓也は岳人の言葉を窘めるように言う。

だが否定できないのもある意味で事実だった。確かにある意味で執念なのだろう。

「執念って言うより、京ちゃんは絆を大切にしたかったんじゃないかな？」

「特に大和とのな」

「否定できないから怖い。あんまり考えさせるなキャップ」

顔を引きつらせて言う大和。そんな大和を見てみんな声を上げて笑った。

その時、緋鷺刀は再度階段を上ってくる気配を感じた。だが少しだけおかしい雰囲気に訝しげに思いながらもみんなに伝えた。

「一子ちゃんが来たけど……」

「来たわよ～！」

緋鷺刀の言葉を遮るように一子がドアを蹴飛ばす勢いで入ってた。部屋に入ってきた一子を見て全員が『あれ？』と思う。一子が来たのだから残りの2人も一緒に来ていると思っていたのにそこにはなかった。

「ワン子、姉さんと兄弟はどうした？」

大和が代表して一子とに問い掛ける。

百代と神は先月のあの出来事以降、何かにつけて前以上に一緒に行動するようになった。2人の関係から考えれば当たり前なのかもしれないが、大和は余り見たいと思えなかった。

百代は仲間の前では行動を押さえようとはしない。ある意味で信頼されていると言えるのだろうが、そう頻繁に目の前でイチャつかれると精神的に疲れる。
神は神で百代に好きなようにさせている。もっともそれは仲間の前だけで公衆ではきちんと節度を取ってはいるが。

2人のやり取りは大和には死活問題だ。何より京が羨ましがってより一層執拗にアピールをしだした。これをかわすのがなかなかきつくなってきた大和なのであった。

「え？　お姉様とジン兄なら――」

「私ならここにいるぞ。弟よ」

一子の言葉を遮った百代の声が後ろから急に聞こえ、大和だけでなく全員が驚きその声のした方に視線を向けた。視線の先に間違いなく百代がいた。いつもの定位置である棚の上に胡坐をかいて座っている。

まさかと思った大和はすぐに視線を横に移す。
案の定、定位置であるハンモックの上に神が座っていた。

「いつからいたの2人とも!?」

卓也のツッコミが響き渡る。
いつの間にかいたなんて怖すぎる。神と百代の2人ならあり得ない事ではないが、いざやられると本当に怖い。

「モモ先輩もジン兄も気配を殺して入ってくるのはやめてよね。一

子ちゃんが扉を開けた瞬間に入ってきたんでしょ？」

「なんだタカ、お前は気付いていたのか？」

驚く大和、翔一、岳人、卓也とは違い、緋鷺刀だけはどこか呆れたような口調で言葉を掛ける。それが意外だったのか百代は少しだけ驚いた声だった。

百代にしてみれば完璧な気殺――気配を殺すこと――だった。

「気付いてはいなかったけど、逆に違和感があったからね」

「完璧すぎたってわけか」

神の言葉に頷く緋鷺刀。

完璧すぎたからこその違和感。緋鷺刀は一子が階段を上がってくる時、ぽっかりと空いた空間が近付いて来ているような感じを受けた。分かりやすく例えるとしたら、真っ暗な空間に真っ白な球体が動いているというような感じだ。百代の気殺は完璧すぎて自分の気配だけでなく、周りの空間までも殺していたのだ。

逆に神の気殺は違う意味で完璧だった。完全に周囲に溶け込み全く違和感を与えることのない、まさに自然そのものになっていた。

そう思いながらも、緋鷺刀は相変わらず自分が到底及ぶことのない領域に2人がいる事に、隔絶の差を感じながら同時に少しずつではあるが確実に近付いている確信を持った。

「でもそういう事はホントに止めてよね、下手すりゃ寿命が縮むよ」

「ビビリだなモロロは」

「悪かったな性質の悪い事して。モモがどうしてもやってみようって言うからな」

「ある意味で姉さんに甘いよな兄弟は」

「当然だ。ジンは私の彼氏だからな。な？　ジン」

「そうだな」

「だああぁ！　だから俺様たちの前でイチャつくなって言ってるだろ！」

「イチャついてなんかいない。ただの会話だろ」

思わず叫んだ岳人に神はしれっと返し百代は頷くだけで返した。２人にしてみれば先ほどの会話は恋人同士のコミュニケーションにも含まれないただの会話でしかないのだ。

「それよりも早く準備に取り掛かるぞ。もうすぐ来るころだろ？」

神の言葉に全員が壁に掛けられていた時計を見る。
時間はＰＭ５：３０分を過ぎていた。確かに到着時間を考えるともうそろそろこの秘密基地に来る頃だろう。

「準備って言ってもジン兄がいなきゃ意味なかったからな」

テーブルの上を片付けながらぼやく岳人。それに苦笑しながら神は持ってきた２つの風呂敷を解くと５段の重箱２つ、計１０個の箱をテーブルの上に並べ始める。
それを見た百代は自分が持ってきた小さなクーラーボックスの中か

らケーキを取り出しテーブルの中央に置く。同じように大和は買ってきた紙コップと紙皿、割り箸を取り出しテーブルの上に人数分並べる。
一子も持ってきた小さなクーラーボックスからペットボトルのジュースを数本取り出しテーブルに置く。

「しっかし、よくこんなにたくさん作れたなジン兄。ケーキも手作りだろ？」

テーブルに並べられていく料理を見ながら翔一は感心した声を出した。
その言葉に神は箱を並べながら答える。

「昨日の夜のうちに仕込みは全部終わらせておいたからな。後は仕上げるだけだったからそんなに大変じゃないさ。川神院の料理人たちも手伝ってくれたし」

「これ全部の仕込みが出来るだけでも凄いと思うけどね」

「ジン兄のお料理っておしいもんね」

卓也の感心したような言葉に一子が料理の感想を言う。

「彼女としてはどうなのさ姉さん」

「料理のうまい彼氏で私は幸せだな」

嫌味っぽく問い掛け大和だったが、百代には通じなかった。逆にまるで料理の出来る彼氏を自慢しまくりたい雰囲気だ。
これ以上突っ込んでは藪蛇だ、と悟った大和は百代の言葉に返事を

する事やめた。

「お？　ちょうど来たようだぞ」

全ての準備が整えた時、百代はタイミング良く階段を上がってっくる気配を感じた。いや正しくは駆け上がってくる気配だ。よほど急いでいるのだろう。普段の彼女からは考えられない雰囲気に神と緋鷺刀は小さく肩をすくめて笑い合った。

百代の言葉を合図に翔一は手に持っていたクラッカーを全員に１つずつ渡す。そして部屋の入り口である扉を囲うようにスタンバイする。

階段を上がる足音が聞こえてくる。上がるというより駆け上がって来るその足音に、彼女が凄く楽しみにしているのが分かり全員に笑顔が浮かぶ。

そして扉を勢い良く開け飛び込むように入って来た彼女に――

「「「「「「「「「誕生日おめでとう！　京！！」」」」」」」」」

パパンッ　パパンッ　パパンッ　パパンッ

京が言葉を発する前に全員で声を掛けクラッカーを鳴らす。

完全に挨拶のタイミングを外した京は、目を見開き呆然とした表情でクラッカーから飛び出した紙テープを頭からかぶった。

その顔にイタズラが成功したようにみんなが笑う。

「よっしゃ！　ドッキリ成功！」

「京の驚いた顔なんて久しぶりに見るな」

「後で何されるか分かんないけどね」

「モロ、ビビり過ぎよ～」

「ヤマ、帰り道は背後に気を付けろ」

「怖いだろうが兄弟！？」

「冗談に聞こえないよね、それ」

「びっくりしている京。かわゆな～」

口々から漏れる言葉に呆然としてた京は――

「うん、みんな久し振り」

満面の笑みを浮かべたのだった。

神が作った料理とケーキに全員で舌鼓を打ち、みんなで選んだ誕生日プレゼントを京に渡した後、穏やかな空気が部屋を包んでいた。京は久し振りに――正確には2週間ぶりに感じる大切な仲間との空気に、言葉に出来ない感動のようなものが胸から込み上げてきた。これから毎週、この場所でこの空気に触れる度に思うのだろう。自分の居場所はやっぱりみんなの側にあるのだと。

「そーいえばさ、私の誕生日、誰が企画したの？」

込み上げてくる感動を感じさせないように、いつもと変わらない表

情と声で問い掛ける京。ここで感情を顕わにすればいいようにからかわれるだけだと分かっているからだ。
百代に岳人、翔一に大和。仲間にはここぞとばかりにからかう人間が多い。

「企画したのはジンだ」

簡潔に言った百代の言葉に京は神の方に視線を向ける。

「13日、ミヤの誕生日だったろ？　今まではみんなで誕生日プレゼントを渡すだけだったけど、今年はミヤが引っ越しちゃったからな。せっかくミヤがこっちに来るんだから、同時に誕生日のお祝いもしようと思ったんだよ」

何でいつもこの人はこうなんだろう。
京だけじゃない。風間ファミリーの全員がそう思った。

風間ファミリー。
始まりは翔一と大和の出会いから。小学生になる前に一子、緋鷺刀が順に加わり、小学生の時に岳人、卓也、百代、神、そして最後に京が加わった。
総勢9人になってもう2年になろうかとしている。
翔一をリーダーとして今までみんな一緒に遊んできたが、このグループが崩壊することなくみんな思いのままやってこれたのは、間違いなく神がいたおかげだった。

ともすればバラバラになりがちな仲間を上手く纏め、でも仲間たちを引っ張り突き進むのはキャップである翔一に任せ、自分は後ろから仲間を見守る。
神がいるからこそ仲間たちも自由に自分の思うままに行動が出来た。

それでも仲間同士大きなぶつかりもなく上手くやってこれた。

風間ファミリーにとって暁神はまるで自分たちの兄のような存在だ。

いつも仲間の事を考えてくれる。迷っていたら背中を押してくれる。悩んでいたらそれとなく聞いてくれる。悲しかったらそっと寄り添ってくれる。嬉しかったら一緒に喜んでくれる。そして間違った事をしようとすると必ず止めてくれる。

風間ファミリーのリーダーは翔一だ。それは間違いなくみんな認めている。

でも神がいたからこそ今の風間ファミリーがある。それは歴然とした事実としてリーダーの翔一も感じている。

風間ファミリーのナンバー2。

明確に決めたわけじゃない。キャップである翔一から命名されたわけでもない。

それでも風間ファミリーのメンバーにとって、暁神はいつの間にかそう呼べるような存在になっていた。

「まったく……ジン兄はやっぱりジン兄だね」

隠しきれない嬉しさがにじんだ京の呟きに神以外の全員が頷いた。

「ん？　どういう意味だよ、それ？」

京の誕生日をみんなで祝う。神にとって当たり前な行動だったため、1人だけわけの分からない神は穏やかに笑うみんなを見て、不思議そうに首を傾げたのだった。

ちなみにその後のひと騒動

卓「ところで京。今日と明日、どこに寝泊まりするの？」
岳「大和の家だったりしてな」
大「そんなわけないだろ。怖い事言うなガクト」
京「そうなら良かったんだけどね」
百「残念だが京は川神院で寝泊まりする事になっている」
京「ホント残念。既成事実作るチャンスだったのに」
大「だから怖い事言わないで下さい！　本当に！」
一「ねーねージン兄。『キセイジジツ』って何？」
神「カズ、お前は知らなくていい事だ。残りのケーキでも食べてなさい」
一「わーい！　ありがとー！」
百「さすがに中学生の男女を1部屋に一緒にするわけにはいかないからな」
緋「それを言うなら1つ屋根の下だよね？　でもそれってモモ先輩が言える言葉なの？」
翔「別に問題ないだろ。仲間なんだからさ」
卓「キャップはもう少し男女について勉強した方がいいよ」

第２８話　金曜集会、ファミリーのナンバー２（後書き）

あとがき～！

「第２８話終了。あとがき座談会、司会の春夏秋冬　廻です。今回のお相手は――」

「お久し振りです。篁緋鷺刀です」

「本当に久し振りだね？　えっと前の登場が１２話だから……」

「実に１６話ぶりのあとがき登場ですね」

「そりゃ久し振りと思うわけだ。まあそれは置いといて、さて今回のお話ですがいかがだったでしょうか？」

「本当に日常的なお話でしたね」

「そうだね、ある意味で初めての金曜集会的なお話。久し振りの三人称でちょっとだけ大変だったよ」

「そういえば１話全部が三人称なのって５話だけでしたね」

「ホントだね。しかも今回の話はホントにあまり意味のない話だったしね。今回で書きたかったのって最後のところだけだもん」

「最後って言うと……ジン兄が風間ファミリーのナンバー２ってことですか？」

「そう、題名にもなっている事を書くのに半分以上が取り留めのない話になってしまった」

「別に問題ないと思いますけどね」

「優しい言葉をありがとう。さて次回のお話ですが、あの人が登場します」

「あの人ですか？」

「そうあの人。誰が登場するかは読んでのお楽しみ」

「今まで出てきた人ですか？」

「一応ね。あ、これだけ引っ張ってますけど、あまり期待しないで次投稿を待っていてい下さいね」

「最後で逃げ道作るのはどうかと思いますよ？」

第２９話　夏の海、衝撃と恐怖の事実（前書き）

第２９話投稿。

第２９話　夏の海、衝撃と恐怖の事実

――２００５年　８月１９日　金曜日　ＡＭ１１：００――

青い空。白い雲。燦々と照りつける太陽。
目の前に広がる海は遥か水平線の先で空との境界を曖昧にしている。
太陽より放たれる熱気に海面は熱を持ち、海水を蒸発させその曖昧な空と海の境界に蜃気楼を漂わせていた。

俺たちは今日、ヒロの叔母さんの凛奈さんに保護者をお願いして、海水浴に来ていた。

「暑いな……」

「暑いね……」

俺の隣でモロが同じように呟く。
荷物番と場所取りで今この場にいるのは俺とモロの２人だけ。着替えるのが簡単で、最初から海パンをはいていた男たちは既に準備は済んでいた。ちなみに女性陣は海の家で着替えの真っ最中だ。
全員でお願いされていたが、キャップは既に泳ぎに行ってしまっているし、ガクトは早くもナンパに行っている。

「中学１年生がナンパって……どうなんだよガクト」

「将来がちょっと心配だよね」

「おまけにヒロまで連れてったしな」

「後で凛奈さんに絶対ボコボコにされるよね」

思わず声に出してしまった心の声に、モロは的確なツッコミを入れてきた。

ちなみにガクトがヒロを連れていった理由は、恐らく女の人をおびき寄せるために餌代わりにするつもりなのだろう。

強く生きろヒロ……後でガクトは死ぬから堪えろな……

恐らく顔で笑って心で落ち込んでいるであろうヒロに、心からの同情を寄せておく。

「そういえばジン兄はどこに行ったんだろ？」

辺りを見渡して、いるはずの兄弟の姿が見えない事にモロが疑問の声を出す。

俺はその兄弟が突き立てたパラソルの影で、直射日光を避けるように座りながら兄弟の行き先を説明する。

「兄弟は見回りに行った。怪しい所がないかとか怪しい人物がいないかを探して、とりあえず先に目処を付けておくそうだ」

「なんか、ジン兄って完全に僕たちの保護者だよね。もう行動とかはっきり言って中学生じゃないよ」

「否定できんな」

モロの言葉に苦笑いしか浮かべられない。

確かに兄弟は俺たち風間ファミリーの『兄貴的存在』だが、こういう仲間全員で団体行動を取る時の兄弟は『兄貴』というよりも『父

親』と言ってもいい行動を取る。
まあ、おかげで多少無茶な事をやっても兄弟がフォローしてくれるし、別に『親父臭い』態度を取るわけじゃない。
分かりやすく言えばいつも見守ってくれている。同学年なのに同学年らしく感じないから『父親』みたいに感じる時がある。そういう事だ。

そんな取り留めのない会話をしていたら、不貞腐れた顔のヒロと明らかに落ち込んだ雰囲気のガクトが帰って来た。
あれは間違いなくナンパに失敗したな。というか中学1年でナンパできるわけがない。
落ち込んでいるガクトを無視して俺はクーラーボックスからペットボトルの烏龍茶を取り出しヒロに手渡す。

「お疲れさん。災難だったなヒロ」

「ありがとう大和くん。全くだよ」

烏龍茶を受け取りお礼を言った後で不満を一言で片付けた。
不貞腐れたように顔をそむけたヒロの髪が少しだけ乱れている事に気付く。恐らく女の人に撫で回されたのだろう。
ということはガクトが落ち込んでいるのは、女の人を引き寄せるために連れていったヒロが構われるだけで、誰1人としてガクトに興味を示さなかったのだろう。

「自業自得なだけに同情出来ないね」

俺と同じ結論に至ったのだろう、モロのツッコミが的確にガクトの心をえぐった。

そうこうしている内にひと泳ぎ終えたのだろう、キャップが海から上がってこっちに近寄って来た。それに気付いたヒロは飲んでいた烏龍茶のキャップを閉めクーラーボックスに戻すと、キャップの荷物からタオルを取り出し、キャップに投げて寄越す。

「サンキュー！　ヒロ！　いやー！　やっぱ海はいいな！」

受け取ったタオルで濡れた頭を拭きながら楽しそうに言うキャップに、俺たちは呆れた溜息しか吐けなかった。

「みんなまだ揃ってないのに、先に泳ぎに行ったんだキャップ」

「まーな。ところでヒロとガクトはどこに行ってたんだ？」

キャップが泳ぎに行く前にガクトがヒロを連れてナンパに行ったので、その事を聞いているのだろう。その言葉にガクトはピクリと震えモロが事情をキャップに説明している。
その話を聞いたキャップは少しだけ顔を歪ませる。

「そんな事してどーすんだよ。海で泳いだ方が楽しいじゃねーか」

キャップのもっともな意見なのだが、ガクトは納得がいかないようだ。

「うるせー！　ひと夏の出会いを期待して何が悪い！　俺様も彼女が欲しいんだよ！」

ガクトの魂の叫びを聞いた気がした。
否定できない。姉さんと兄弟を見ていると確かに俺も彼女が欲しい

と思った事がある。その度になぜが察知する京に迫られるが、それを差し引いてでもいいなと思った事があるのは確かだ。

ある意味で姉さんと兄弟の関係は理想的なのかもしれない。

姉さんの無茶や我がままをそれとなく叶えている兄弟。でも本当に無理な事はちゃんと無理だと言って逆に姉さんを窘めているし、振り回されているかと思いきや、どちらかと言えば姉さんをコントロールしている。

でもお互いに相手を認めて、依存ではなくて支え合って信頼し合っているのが見ている俺たちにも分かるような関係。

これを理想的と言わずして何を理想的と言うんだろうか？　2人を見ているとそんな感じを受けるのだ。

だがガクト。お前が姉さんと兄弟の関係を羨ましいと思って『彼女が欲しい』と言っているのならナンパはやめろ。ナンパで得た彼女とそんな関係を築けると思っているのか、お前は？

心の声は言葉にせず胸に仕舞っておく。ナンパで振られるガクトを見るのが実は楽しいなんて思っていない。思っていないぞ。うん。

「しっかし……せっかくタカを連れてったてのに、誰も俺様に声を掛けやしない。こんなんだったらタカを連れていかなければ――」

ゴギャッ！

何やら鈍い音がしたと思ったら、今まで不満そうに愚痴をこぼしていたガクトが顔面から太陽の光で灼熱と化した砂浜に沈んでいた。

突然後頭部に炸裂した痛みとその直後に襲った顔面への熱気。思い

もしなかった激痛と熱さだったのだろう。ガクトは砂浜を悶えるようにのた打ち回っていた。
驚き視線を向けると、まるで剛速球を投げ終えたピッチャーのような格好で、殴り倒したガクトを恐ろしいほど冷めた目で見下ろしている篁凛奈さんの姿があった。
正直に言おう……怖ぇよ！！
肌寒さではなく薄ら寒さで背筋を震わせる俺たち。
「おい、島津の坊主……私の可愛い緋鷺刀に何をやらせていたんだ？」
発せられた声により一層怖さが増した。
甘かった。何もかも甘すぎた。
俺とモロはボコボコにされるだろうと思っていた。だがこれは明らかに違う。
ボコボコなんて生易しい。凛奈さんのこの雰囲気。明らかにガクトを殺す気だ。
実は凛さん。よくヒロで遊ぶことがあるが、自分以外がヒロで遊ぶのを良しとしない。
独占欲が強くある意味で過保護。親馬鹿ならぬ『叔母馬鹿』。ある意味での『緋鷺刀至上主義』な人だ。
そんな人の機嫌を損ね怒らせた日には、命が幾つあっても足りない。
そう俺たちが思うには十分過ぎる迫力だった。
誰もがガクトの半死の姿を思い描いたと思う。でも凛奈さんは気持

ちを落ち着かせるように大きく息を吐くと、腰に手を当てて未だに悶えているガクトを見下ろす。

「まあいい、海で浮かれていた事にしておいてやる」

「ありがとう……ございます」

くぐもった声で答えるガクトにさらに追い打ちを掛ける凛奈さん。

「ただし島津の坊主。お前は昼飯抜きだ。買う事も許さん」

「分かり……ました」

さすが大人の対応だと思っていたが、やはりそこは凛奈さん。きちんと罰を与えるところは抜け目がないと言っていい。しかも底意地の悪い罰だ。

凛奈さんの制裁が終わると同時に女性陣が着替えを終えて戻ってきた。

先頭を歩くのは姉さん。黒の競泳水着だ。無駄のない理想のプロポーションと誇っている通り、見事としか言いようがない。

次に京。まあ中学1年生だ。青色のワンピースに可もなく不可もないスタイルだろう。

そして最後にワン子。だがその姿を見た時、俺たちは驚きに身を固まらせた。

ワン子……いくらなんでもスク水はないだろ？　お前もう中学生だぞ？

そこには学校指定のククール水着を着たワン子の姿があった。

思わず呆然としていた俺たちを見た凛奈さんと姉さんは、肩を揺らしながら笑いを堪えていた。俺たちの反応が予想通りだったのか、それともある意味でイタズラが成功して嬉しいのか、あの2人の顔では判断が出来なかった。

「おいワン子。スクール水着はねえだろ」

「うっさいわね。いいじゃない、お姉様がこれで問題ないって言ったんだから」

やっぱりあんたか姉さん！

ガクトに多少怒りを込めながら返したワン子の言葉に、俺たちはいっせいに姉さんに視線を向ける。視線の集中に気を良くして姉さんは胸を張った。

「純真爛漫、天真爛漫なワン子にはお似合いだろ？」

「似合いすぎて怖いよね」

京の呟きに同意したくなったのには責めないでほしい。でもだからと言って中学1年生にもなってプライベートの海水浴にスクール水着ってどうなんだろうな？

薦める姉さんも姉さんだけど、疑いを持たないワン子もワン子だ。

「ねえねえ。それよも大和、どう？　私の水着」

すり寄ってくる京を改めて眺めて見る。ここは素直に褒めておいた方がいいだろう。

「うん、可愛いと思うぞ」

「最近胸も大きくなってきたんだよ。触ってみる？　触ったら責任取ってね」

「うん、全くもって言葉に脈絡がないな」

「色気づくには早過ぎたな椎名の弓っ娘。中学生は中学生らしく川神の犬っ娘みたいに元気にはしゃいでおけ」

「そうだぞ京。色気はおねーさんに任せておけ」

俺と京のやり取りを声を殺して笑いながら割って入って来た凛奈さんと、それに便乗して会話に入り込んできた姉さん。
そりゃあ貴女たちにしてみれば京もまだお子様でしょう。貴方たちに比べれば。

「いいなお姉様も凛奈さんもそんなに胸が大きくて……アタシも大きくなるかな？」

「まだまだ先がある。頑張れば大丈夫だワン子。ちなみに私のバストは今は８３だ」

「犬っ娘の歳ならまだ気にする事じゃない。これからの成長期で大きくなる可能性は十分あるさ。ちなみに私のバストは８８だ」

「ねえ大和。私はワン子よりは大きいよ？」

ワン子の疑問に姉さんと凛奈さんの答え。そして京の自己申告。

いったい何にどう突っ込んでいいのか分からない俺はもはやグロッキー寸前だ。ガクトはだらしない顔しているし、キャップは全く興味がないのかコーラを飲んでるし、ヒロは恥ずかしそうに顔をそむけているし、頼むから突っ込んでくれモロ！　というか早く帰って来い兄弟！

「みんなもう少し羞恥心を持ってよ！　聞いてるこっちが恥ずかしいよ！」

期待通りの突っ込んだモロだったが、恥ずかしさからなのかいつものキレがなかった。しかも突っ込んだせいで女性陣の視線をいっせいに浴びてしまい、すぐに顔を赤くして目を逸らした。
分からんでもないが……情けないぞモロ！

だがモロが突っ込んだおかげでその話は終わり、みんなの話題は別の方へ移った。
それに安堵していたのも束の間、次なる騒ぎはヒロの言葉から始まった。

「それにしても凛奈さん……その水着はどうかと思うんだけど……」

あえて触れなかった事柄にヒロが勇気を出して遠慮がちに声を掛けた。
親戚だから突っ込めるのだろう。俺たちにはまず無理だった。モロなんか思いっ切り目を逸らしているしガクトなんか鼻の下伸びてるぞ。

「ん？　何かおかしいか？」

おかしくはないです。でも俺たちにはちょっと刺激が強すぎます。

深紅のビキニでトップも布地が少なく、ボトムに至っては結構なローライズだ。よほど自信がなければ着れない水着なのは男の俺ですら分かる。

「凛奈さんは恥ずかしいと思わないの？」

「水着としてちゃんと売っていたものだぞ？　何を恥ずかしがる必要がある」

ヒロの言葉をさらりと受け流す凛奈さん。

確かにその通りではあるが、だからと言ってこんなに人がいっぱいいるのにその水着を着ようと思う精神が凄いよ。この人は。

「あ～もしかしてあれか？　よくテレビとかで言ってるの聞くけどさ、もういい年なのに恋人がいない事に焦ってるってやつ？」

ドガッ！

再び鈍い音がしたと思ったら呟いたキャップが俺たちの視界から消えた。

見ると握り込んだ拳を突き出した格好の凛奈さんの姿。その拳の先に視線を向けると数メートル先に吹っ飛ばされて仰向けに倒れているキャップの姿。まずい感じに痙攣しているけど大丈夫なのだろうか……

「おい、風間の坊主。お前今なんて言った？」

地の底から這い上がって来た悪魔のような声で問い掛ける凛奈さん。気を失っているであろうキャップに答える術はない。と、今度は俺たちの方に視線を向けた凛奈さんは、その声音のまま問い掛けてき

た。

「お前らにも聞いておきたい。お前ら私を幾つだと思ってる？　正直に答えてみろ」

「幾つって……さんじゅう――」

ゴギャッ！

空気を読まずに本当に素直に答えようとしたガクトが、再び砂浜に顔面を沈める結果になった。

馬鹿が起こした結末に誰も同情する事はない。素直に答えろと聞かれて本当に思ったまま答える馬鹿が悪いのだ。

「アホだ」

「アホだね」

「アホとしか言いようがないよね」

「うんアホだよね」

「アホだわ」

「救いようのないアホだな」

「キャップが吹っ飛んでガクが沈んでるこの状況……いったい何があったんですか？」

俺たち全員の呟きの後、見回りを終えたのだろう後ろから現れた兄

弟が呆れたような声で、あろう事か怒り心頭の凛奈さんに問い掛けた。

救世主だ！

今まさに俺たち風間ファミリーの心は１つになったに違いない。俺たちはようやく文字通り『救いの神様』を得たのだ。

思った通り、凛奈さんの矛先は兄弟に向かった。

「いい時に来たな暁の坊主。お前にも聞いておきたいのだが、私を幾つだと思ってる？　正直に言ってみろ」

その凛奈さんの言葉と俺たちの雰囲気で、この場で何が起こっていたのかを瞬時に察したのだろう。吹っ飛んだヤップと顔面から沈んだガクトに呆れた眼差しを向けた兄弟は、小さく溜息を吐いて凛奈さんの質問に答えた。

「幾つって……凛奈さん、今年の３月に大学卒業して４月に誕生日迎えたばっかでしょ？　２３歳だと思ってたんですけど、違うんですか？」

「なんだ、お前は知っていたのか。つまらん」

兄弟の言葉にあっけなく纏っていた雰囲気を消した凛奈さん。

だがその事実について行けないのがヒロを除いた俺たち全員だ。

え？　２３歳？　それホント？

兄弟以外の視線がいっせいにヒロに向く。その視線の意味を悟ったのだろう、ヒロは何も言わずに頷いて答えた。どうやら本当らしい。

先入観があった事は否定しない。小さかったヒロを引き取ったと言っていたのでその時すでに成人していて働いていると思っていた。ヒロを引き取ったのが6年前だから計算すると若くても30歳ちょっと前。たぶんみんなそう思っていたはずだ。

でも事実だとすると何？　ヒロを引き取った時って高校2年生になる前？　凛奈さんって作家だよな？　その時すでに作家としての収入がちゃんとあったてこと？

衝撃的過ぎる事実に混乱していた俺たちはすっかり忘れていた。そうそれは――

「さて残りのガキども。直江の坊主に師岡の坊主。川神の戦っ娘に犬っ娘、椎名の弓っ娘。お前たちの答えを聞く気はない」

悪魔の声が聞こえた。あの姉さんすら顔を引きつらせている。誰も振り返れない。

「ああ、何で聞く気がないと言うのは、だな」

徐々に近付いてくる気配に足がすくんで動けない。

「お前らの雰囲気でどう思ってるか分かるからだ！！」

青い空。白い雲。燦々と照りつける太陽。

夏真っ盛りの浜辺に、鈍い音が5つ響き渡ったのだった。

第２９話　夏の海、衝撃と恐怖の事実（後書き）

あとがき～！

「第２９話終了。あとがき座談会、司会の春夏秋冬　廻です。今回のお相手は――」

「師岡卓也です」

「久し振りのモロ登場。さて今回のお話ですが……どうだった？」

「どうだったって言われても……凛奈さんの年齢はまさに驚愕だったよ」

「だよね～実は最初はもっと年上だった。大和の予想通り緋鷺刀を引き取った時は成人して働いており、しかも物凄く物静かな人という設定だった」

「それがいつどう変わったの？」

「１８０度変わったのは外見イメージを作者脳内で作り上げた瞬間」

「どういう外見を思い描けば設定が間逆になんの！？」

「劇場版空の境界の蒼崎橙子」

「……」

「あの姿をイメージした瞬間に全てが変わった」

「なんか納得するしかないような……」

「あの性格、プロポーションはもとより天才肌的な才能も初期設定に入り込んでしまい、その関係で高校在学中に学生作家としてデビューという設定が生まれたんだ」

「イメージにズルズル引きずられたって感じだね」

「全くもって否定しない！」

「威張る事じゃないから！」

「でもそのおかげで無茶苦茶書いてて楽しい人になった。しかもその後にいろいろ設定が浮かんできたからこの人だけでも短編が数本書けそうな勢い」

「無責任なことをここで言わないでよね!?」

「う～ん……原作に突入しても絡ませようかな？　いやそれとも別の何かで……」

「なんでのこの人こんなに乗り気なの!?　しかも無茶苦茶収集つきそうにない感じしかしなんですけど!?」

「まあいいか、後で考えよう。ではみなさん次回投稿もよろしくお願いします」

「またしても最後は僕を無視!?　結局前回と同じオチなの!?」

第３０話　ＶＳ四天王（未来の）、降臨鬼揚羽（前書き）

第３０話投稿。

原作突入前に３０話を超えちゃった……

第３０話　ＶＳ四天王（未来の）、降臨鬼揚羽

――２００５年　１０月１０日　月曜日　ＰＭ２：００――

連れてこられたのは大きな屋敷。

日本武道館真っ青の広さをもつ武道場に、１００以上の執事やメイドの姿をした人たちが囲うようにズラリと並んでいた。

俺の隣には川神鉄心さん。今日俺をここに連れてきた人だ。

目の前には２人。１人はがっしりした肉体の金髪の外国人。この人も執事の服を着ている。もう１人は少し年上だと思われる女の人。高校生ぐらいだろう。灰色の髪に額に大きなバツ字の傷跡がある。

２人とも普通に佇んでいるが、武術の心得があるのが見て取れる。特に大柄の外人さんは身体から溢れ出る闘気を隠そうとしていない。女の人も自信があるのだろう。執事さんの隣で腰に手を当てて堂々としている。

「久しいのぉヒューム」

「ふん、年老いたな鉄心」

鉄心さんは穏やかに、ヒュームと呼ばれた執事さんは嘲るように挨拶し合った。

どうやらこの２人は知り合いのようだ。という事は俺がここに連れてこられたのには何か意味があるのだろう。嫌な予感しかしない。

だってこの２人、挨拶が終わった途端にお互いの闘気をぶつけ合っ

ている。そのせいで俺たちを囲ってた人たちの数人が耐えきれずに膝をついている。

「ヒューム、こちらのご老人があの川神鉄心殿か？」

ぶつかり合う闘気の中で変わりなくヒュームさんに問い掛ける女の人。

思った通り強い人だ。この闘気の中かで顔色ひとつ変えることなく立っている。

「ああその通りだ揚羽様。この男こそ最強と呼ばれあの武術の総本山、川神院の総代を務める男だ」

ヒュームさん、一応執事なんだろうけどなんか偉そうな人だな……まあ、あれだけの闘気を放てる人なんだ、普段は人に仕えるというような考えはないのだろう。

なのにこの屋敷にいて執事の格好をしているという事は、よほどこの屋敷の一族を気に入っているんだろう。

そんな事を考えている内に女の人の自己紹介が始まった。

「お初にお目にかかります。我は九鬼揚羽。この九鬼家の長子にして恥ずかしながら未熟にも武の道を歩む者です。鉄心様のお話はかねてよりお聞きしておりました。今日お会いできた事、光栄に思っております」

九鬼家って、ここってあの九鬼家なのか？　あの世界的に有名な九鬼財閥？

いきなり知った事実に若干驚きながらも、それを微塵も外に出すこ

となく立っている俺。ここで慌てた姿を見えるのは鉄心さんの恥になるからだ。

「ほう、お主が帝の娘か……なかなかに見処のある女子（おなご）と聞いておったが、よもやヒュームから手ほどきを受けておったとはな」

「年老いてもさすがだな鉄心。初見で見抜くとはな」

「舐めるのも大概にするんじゃなヒューム。見抜く力はここ数年の方が増しておるわい」

ヒュームさんの猛禽類を思わせる鋭い笑みに、鉄心さんは底の見えない深い笑みで返した。

お互い牽制し合うのは別に構わないと思うけど、少しは周りの人たちを気に掛けてほしい。既に半分以上がぶっ倒れています。

「それで鉄心。隣にいる小童が貴様の弟子か？」

ヒュームさんがそう言って俺に視線が向けられると同時に、まるで圧殺するかのような膨大な殺気が圧し掛かってくる。

間違いなく俺の力量を推し量っているのだろう。だからと言ってこの方法はないだろう。下手な奴だと居竦んで気を失うぞ。

そう思いながらも圧し掛かってくる殺気に特に反応はしないでおく。抵抗するように闘気を放つでもなく、圧し負けないように闘気を張り巡らせるわけでもなく、ただ自分の身を守る鎧のように闘気を纏い、圧し掛かるヒュームさんの殺気を受け流す。

そんな俺の反応に何か思うところがあったのか、ヒュームさんは片眉を吊り上げ口元に笑みを浮かべると、より一層殺気をぶつけてき

た。
隣にいた揚羽さんですら圧され半歩後ろに下がるほど殺気をぶつけられているにも拘わらず、先ほどと同じようにやり過ごす。
はっきり言いちゃあなんだが、この程度の殺気でビビるほど弱くはないつもりだ。

「なかなか骨のあるガキを弟子に取ったな鉄心」

圧し掛かっていた殺気がなくなり、ヒュームさんはより一層獰猛な笑みを浮かべて鉄心さんに声を掛けた。対する鉄心さんは呆れた表情だ。

「全くお主は相変わらずじゃのう。じゃが勘違いするではないぞヒューム。こ奴はワシの弟子ではない」

「なに？」

「自己紹介せい神」

「はい」

鉄心さんの言葉に答え1歩前に出て、ヒュームさんと揚羽さんに対し一礼してから自己紹介を始める。

「初めまして。川神院に居候として身を置かせて頂いております暁神と言います」

俺の名前を聞いた途端、ヒュームさんの気配が変わったのが分かった。
どうやら彼は“暁の一族”の事を知っているようだ。外国人の彼が

どうして知っているかは分からないが、鉄心さんの『弟子ではない』発言の説明は必要ないだろう。

顔を上げ視線を戻した時、顔が歪みそうになるのを必死で堪えた。ヒュームさんが物凄くいい笑顔で俺を見ている。あれは間違いなく獲物に選んだ標的をロックオンした猛獣の眼差しだ。

「なるほど、こいつが今日の相手か。だがこれではどっちが試し試されているのか分からんぞ、鉄心」

「突然連絡を入れてきて、誰か連れて来いと言ったのはお主じゃ。ワシはそれに従ごうたまでじゃよ」

「タヌキジジイが。まあいい開始は１０分後だ。揚羽様」

ヒュームさんはそう言うと揚羽さんを促し、武道場の端へと移動した。俺も準備を始めるためにきびすを返した鉄心さんの後を追って壁際に移動する。

持ってきた道着に着替える。更衣室かなく多少恥ずかしかったが、周りにいた執事さんたちがバリケードになってくれたので、余り気を遣う必要はなかった。

「今日ここに連れてきた理由は揚羽さんと仕合う事ですか？」

準備運動に体をほぐしながら鉄心さんに問い掛ける。答えは分かっているがとりあえず確認のためだ。鉄心さんは声には出さなかったが案の定、頷く事で答えてきた。

準備運動を終え流していた髪を１つに縛り上げポニーテールにする。気を落ち着かせるように息を吐いた時、見計らったのか鉄心さんが

声を掛けてきた。

「ところで神。先ほどヒュームから殺気を当てられた時、なぜ【纏鎧】で受け流したのじゃ？　ワシはてっきり【封殺】で掻き消すかと思っておったのじゃがな」

【纏鎧】と【封殺】。両方とも暁の業だ。

【纏鎧】は字の通り鎧を纏うように自身の闘気を纏う業で、さっき俺がヒュームさんの気を受け流すために使った。もうひとつの【封殺】とは相手が放った気と自身が放った気の波長を合わせ強制的に掻き消す業。

やる気になった相手の気を殺ぐ暁の基本の業だ。

「特に意味はありませんよ。ただ【封殺】だともっと興味を惹かれかねない状況になりそうだったので【纏鎧】にしただけです」

「正しい判断じゃな。してどう思う？」

「それはどちらに対してですか？」

具体的な対象を示すことなく掛けられたと問いに、ヒュームさんと揚羽さんのどちらに対してなのかという質問で返す。

俺の問いに鉄心さんは気を悪くした感じではなかった。

「もちろん九鬼の娘の方じゃ。現状ではモモと同等ぐらいの強さと見たが」

「そうですね。地力――生まれ持っての身体能力はモモが上でしょうが、恐らく使う技の腕は揚羽さんの方が上ですね。モモはまだ力に頼る事が多いですから」

「ふむ、総合的に見て同等ということか……で、どうするつもりじゃ？」

再度の問いかけに少しだけ考え込む。

見て感じた通り、揚羽さんの強さがモモと同等なのは間違いないだろう。となるとまず負ける事はない。今回はどうやら揚羽さんの相手としてヒュームさんが呼び寄せたと言った感じのとようだ。

「本気で行きます」

「分かった。力加減はお主に任せる」

そう言い残し鉄心さんは俺の側から離れる。どうやら既に揚羽さんは準備が終わっているようだ。

武道場の中央で待ち構える揚羽さんの姿を見た俺は、深く息を吐き少し穏やかになった闘気に喝を入れるため、目を閉じ1回だけ柏手を打つ。弾けた闘気が武道場全体に行き渡る。

手を下ろし目を開け真っ直ぐに前を向き俺は中央に歩み寄る。既に待ち構えていた揚羽さんは両手を腰に当て、好戦的な笑みを浮かべたまま俺を見ている。

「準備は出来たか？」

「ええ、お待たせしました」

その会話を合図として1人のメイドさんが歩み寄ってくる。どうやら彼女が審判を務めるらしい。鉄心さんとヒュームさんはそれぞれ俺と揚羽さんの後ろで見届け役に徹するようだ。

特に掛け声を上げずに、メイドさんは右手を高く上げる。
それを合図に揚羽さんは腰を落とし半身に構え、左腕を引き右腕を前に出し握り拳を作る。相対する事になった俺は脚を肩幅に開き腰を軽く落とし、軽く開いた掌を内側にし右手を胸の前に、左手を腰の前に置く【円柳（えんりゅう）】の構えを取る。

「始め！」

一瞬の間の後、開始を告げる声とメイドさんは掲げていた筆を振り下ろした。
開始の合図に即座に反応し一瞬で間合いを詰めてきた揚羽さんは、既に右拳を繰り出す体制になっていた。間髪おかず放たれた右正拳に俺は慌てる事なく右腕をそわせて軌道を逸らすと同時に勢いを利用し揚羽さんをひっくり返す。

初めてモモと戦った時と同じように呆然となる揚羽さんを見下ろす。
そしてその後の反応も全く同じ。即座に立ち上がると左脚での蹴り上げを放ってきた。
俺もあの時と同じように身を沈み込ませ左腕で蹴り脚の左脚をいなし右腕で軸足である右脚を払い上げ、揚羽さんの身体を半回転させる。

だが今回はここからが違う。
上下逆さになり体制の整わずさらに背を向けている揚羽さんに左掌底を当てる。俺の行動を察知したのだろう、見えないながらも揚羽さんは背にありったけの気を集中させる。
だが俺はお構いなしに踏み足に力を込め、衝撃で揚羽さんを吹き飛ばす。

空中にいたため、無抵抗に吹っ飛ぶ。だが揚羽さんは地面に両手を着き身体を押し上げる勢いを利用し飛び退くと、足からきちんと着地した。
数秒痛みに耐えるかのように苦悶の声を漏らした揚羽さんだが、すぐに体勢を立て直すと再び構えを取りこちらを見据えてきた。

思っていた以上のダメージは与えられただろう。たった1度の攻防だけだったがやっぱり思った通り、総合的な強さはモモと同等ぐらいだ。ただ技のキレは揚羽さんの方が上なのは間違いない。
恐らく先ほどの攻防でこの構えの特性を見抜いたはず。【円柳】で下手に後手に回るよりは自分から責めた方がいいかもしれない。

そう判断した俺は拳を握り左半身に構えを取ると、左拳を顔の横に右拳をへその前に置く【夢幻(むげん)】の構えを取る。
構えを変えた俺を警戒しているのだろう、揚羽さんはその場から動かず俺を出方を窺っている。

来ないならこちらから行くまで。

床を蹴り踏み込んだ俺は一瞬にして揚羽さんの間合いに踏み入る。
驚く揚羽さん。無理もないだろう。さっきまでの俺と揚羽さんの距離は１０メートル以上離れていた。その距離を一瞬で詰めたのだ。
驚かない方がおかしいだろう。

だがさすがに驚きは一瞬。すぐに反応し迎え撃つように左拳を突き出してきた。俺はその左拳に前に出していた左腕を被せて抑え込むと、がら空きになった揚羽さんの顔面に向かって右正拳を繰り出す。
左腕が抑えられ不安定な体制ながらも、揚羽さんは俺の右拳を右手で受け止める。

一瞬の停止。その後すぐに揚羽さんは大きく飛び退いた。
ほんの数瞬前に揚羽さんがいたところを俺の蹴り上げた右脚が通過した。だが俺は蹴り上げた勢いをそのままに軸足にしていた左脚で地面を蹴る。
そのまま宙で身体を回転させ、着地したばかりの揚羽さんに向かって左踵落としを放つ。

「くっ！」

次々に襲い掛かってくる攻撃に対応しきれていないのだろう、吐き捨てるような苦悶の声を上げた揚羽さんは、俺の踵落としを受け止めるように両腕を頭上で交差させた。
それを見た俺は次の攻撃の準備に入る。

右膝を曲げ右足の位置を伸ばした左脚より下げると、そのまま左脚を交差した両腕に当て、受け止めた事に一瞬の安堵を浮かべた揚羽さんの顎に向かって、右足を振り上げ下から蹴り上げた。

思いもよらないところからの攻撃に全く反応できなかったのだろう、揚羽さんの顎に蹴りを直撃させた俺はその蹴りを遠慮なく振り抜いた。
その勢いに一瞬だけ宙に浮いた揚羽さんだったが、なんとか倒れる事なく着地したものの受けた衝撃を全く逃がす事が出来なかったのだろう、たたらを踏み膝を着いた。

振り抜いた蹴りの勢いで1回転した俺は足から地面に着き、膝を着いたまま俯いた揚羽さんに声を掛ける。

「まだ続けますか？」

「無論だ！」

静かに問い掛けた俺に吐き捨てるように返してきた。
手を抜いていると思われているのだろうか。睨みつけてきた視線には分かりやすい怒りの感情が込められていた。
そんなつもりはないのだが、はてさてどうしたものか……

考え込みながらも迫り来る蹴りを払い、出来た隙を突いて蹴りを返す。６発放った蹴りのうち、４発は受け止められ２発が脇腹と太腿に当たる。
痛みに体制をほんの少し崩したところで間合いに踏みこみ、蹴りを受け止めた右腕を掴み肩を胸に当て、震脚による衝撃を透すと同時にその勢いで投げ飛ばす。

「がはっ」

背中から地面に叩きつけられ息を吐き出す揚羽さん。
追い打ちを掛けようと左拳を振り下ろしたが、すでに体勢を立て直していた揚羽さんは飛び退くと大きく俺との間合いを取った。

肩を上下させ大きく息を乱している揚羽さんだったが、何を思ったのか俺を睨みつけていた目を緩めると口元に笑みを浮かべて声を掛けてきた。

「手を抜いていると思ったのだが……どうやらそれは我の思い上がりだったようだな。よもやこれ程までの力量差があるとは思いもよらなかったぞ」

呆れたような感心したような、だけどどこか悔しさのにじんだ声だった。そんな自分の感情を抑え込むかのように俯き大きく息を吐い

た揚羽さん。
次に顔を上げた時、その表情はどこか晴れやかなものだった。

「今の我では到底お前には勝てん。だから今我が持つ最高の技もって立ち向かおう！」

宣言と同時に気を練り始める揚羽さん。どやら次でこの勝負を終わらせるつもりだ。
俺もその思いに応え、迎え撃つように構えを取る。

そんな俺を見て嬉しそうに笑った揚羽さんは、すぐに表情を引き締めると、練り込んだ気を爆発させるように全身から闘気を放つと、今日1番の速度で俺の間合いに踏み込んで来た。

「九鬼家決戦奥義！　【古龍昇天破】！」

闘気が渦となり風を纏い竜巻となり迫り来る。
そのまま拳を振り上げればその竜巻は周囲を巻き込む巨大な力となるのだろうが、俺はその拳を左手で受け止める。
それと同時に拳に纏っていた闘気が霧散しことに、揚羽さんは予想外の出来事なのだろう驚愕の表情を浮かべている。

だがそれは霧散したわけじゃない。

俺はさっき揚羽さんが纏った闘気と同じ闘気を右腕に纏うと、未だに驚愕の表情のまま固まっている揚羽さんに向かって一気に振り上げた。
なす術のない揚羽さんは自分が放とうとした技の直撃をくらい、数メートル吹っ飛んだところで意識を失ったのだろう、動かなくなった。

「勝者！　暁神！」

倒れた揚羽さんの容体を確認していたメイドさんは、小さく首を振ると俺の方を向き腕を上げて勝ち名乗りをしたのだった。

目を閉じ礼をし、勝負で昂った気を落ち着かせるために少し長く息を吐く。自分以外の気を体内に入れたのだ。慎重に気の巡りを落ち着かせなければならない。

異常なしと感じたので目を開け顔を上げると、気を失ったままの揚羽さんを抱き上げたヒュームさんが近付いてきた。

その顔は思っていたより厳しい。

「1つ聞きたい事がある」

表情通りの厳しい声に身を正し答える。すぐ後ろには鉄心さんが来ていた。

「なんなりと」

「貴様が最後に使った技。あれは間違いなく古龍昇天破だ。だがあれは九鬼家にのみ伝わる技。貴様いったい何をした？」

静かだが最初の時よりも濃い殺気をぶつけてくるヒュームさんに、俺は今度は【封殺】を使って殺気を掻き消した。

「っ！？」

突然消えた自分の殺気に驚きの表情を見せていたヒュームさんだったが、俺はあえてそれを無視して質問に答えた。

「何をと言われましても……ただ単に揚羽さんが使おうとしていた技を取り込み、逆に私がその技を使っただけです」

「それも“暁”の業の1つか？」

「ええ、そうです。【鏡鳴（きょうめい）・流纏戒己（りゅうてんかいき）】と言います」

俺の返答に訝しげな視線を向けていたヒュームさんだったが、次の瞬間、豪快に笑いだした。

「フハハハハハ！　何ともふざけた一族だな暁というのは！　だがまあ面白いものを見せてもらった」

俺にそう言葉を掛けたヒュームさんは次に鉄心さんの方に視線を向けると、あの獰猛そうな笑みを浮かべた。

「鉄心、今日の借りは覚えておく。いずれたっぷりと利子を付けて必ず払ってやる」

捨てゼリフのようなものを言い残して、ヒュームさんは揚羽さんを抱えたままその場から去っていったのだった。

あの後、1人の執事さんの案内で見送られた俺と鉄心さんは、川神院への帰路を歩いている。

久し振りに全力とはいかないが本気をモモ以外の人に出せた俺は、少しだけ気分よくし隣を歩く鉄心さんに言葉を掛けた。

「揚羽さんはこれからも強くなりますね」

「そうじゃな。今日の勝負で恐らくある意味で初めての敗北を知ったはずじゃ。今日感じた気持ちを忘れなければ、近いうちに武道四天王の一角に入るやもしれんな」

「モモはずでに候補に入ってますからね」

目の前にはもう川神院の門が見えてきた。よく見ると門の前にモモとカズの姿がある。変える前に連絡を入れた事で出迎えてくれたようだ。

手を大きく振るカズに応えるように手を振り返しながら、今日の出来事を振り返りあの人の強さはどこまで行くのだろうと考える俺だった。

第３０話　ＶＳ四天王（未来の）、降臨鬼揚羽（後書き）

あとがき～！

「第３０話終了。あとがき座談会、司会の春夏秋冬　廻です。今回のお相手は――」

「ハハハ。九鬼揚羽、降臨である」

「はい揚羽様の登場です。さて今回のお話ですが、やっと戦闘者視点での一人称の戦闘描写に挑戦しました」

「して、どうであった？」

「難しい。本当に難しかった。一人称になると片方の心理描写しか書けないから相手の考えがすべて推測になってしまう。だから文章に『だろう』が増えるし、相手の呼び方も呼び捨てにできない」

「確かに我の呼び方は『さん』付けになっておるな」

「そう。さらに戦闘中にも相手に対する心理描写が多くなって……そのせいで文字数が７千を超えました。２話に分けるほどじゃなかったので１話の文字数では最大になりました」

「ところでヒュームの事なのだが」

「ああ、ヒュームさんね。次作の『まじ恋Ｓ』に出ることが決まってるから、今回出してみたんだけど……喋り方や性格は推測です。『こんなんだろう』という考えからですので突っ込まないでくださ

い」

「また自分の首を自分で絞めるような事をしおって……まあそれは良い。しかし今回の題名はどうなのだ？　なぜ“（未来の）”が付いておる？」

「ああそれはですね、原作開始プロローグで揚羽様は高校を卒業した事になっていますよね？」

「その通りである」

「そう考えると神との年齢差は2歳。現在神は中学1年生だから揚羽様は中学3年生という事。さすがにこの歳で四天王入りはしていないだろう、という考えから題名に“（未来の）”を付けました」

「理由があるのならばそれでよい。それで次回の事で何やら伝える事があるそうだな？」

「はい。実は次のお話ですが少し行き詰ってます。もしかしたら1日1話毎日投稿ができないかもしれません」

「無理な事をやり続けようとした結果であろうな」

「言い返せない。8月いっぱいは毎日投稿しようと思ってましたが、ちょっと難しいかも……でもなんとができるように頑張りますので、期待しないでお待ち下さい」

「精進あるのみだな」

第３１話　北の少女、初対面の再会（前書き）

第３１話投稿。

あの子の登場です。

第３１話　北の少女、初対面の再会

ｓｉｄｅ　？？？

あ！　また溜息を吐かれました！

かれこれ１時間。あの女の子はずっとあのベンチに座ったままです。

誰かを待っているのでしょか？

しかし待ち合わせをしている感じではありません。あれはまるで置いていかれてどうすればいいか悩んでいるような感じです。

ここはやはり声を掛けるべきなのでしょうか？

地元民としては困っている人を放っておくわけにはいきません。彼女はどう見ても観光客さんです。土地勘がないのは見ていても分かります。

え？　あんなところで１時間も座ってんだから当たり前だと？

すみませんそうですよね私ごときが偉そうに他人さまの様子を窺って心情を悟るなんてなんておこがましい事を考えてしまったんでしょうかすみませんもう一度生まれ直して今度こそ輪廻の果てでこの卑しい心を全て浄化しますからどうか許して下さい！！

え？　誰に向かって言ってるのかって？

えっと……誰でしょう？　何故か謝らなければならない衝動にかられてしまって、気付いたら土下座しそうな勢いになってしまいました。

なんかそうこうしている内に彼女に男の人が声を掛けてしまいました！？

失敗です！　何とう言う失態を犯してしまったのでしょうか！？

もっと早く私が声を掛けていれば今頃お友達になっていたのは私かもしてなかったというのにでもこれはやっぱり天罰かなにかなのですか学校にお友達1人もいないという事実に焦ってこのさい観光客でもいいや同年代だったら誰でもいいやなんていう投げやり的な思いでお友達を作ろうとした私に対する神様からの罰なのでしょうかごめんなさい！！

え？　よく見てみろ？

あ、困ってますね。恐らくナンパというものでしょうか？
でも納得ですね。だって彼女は遠目に見ても凄く可愛いです。今日は少し肌寒いのでパーカーにハーフパンツという格好をしていらっしゃいます。それが物凄く似合っているんです。

え？　助けに行け？　そうすればきっかけになるぞ？

な、なんという高等テク！　困っているあの子を助けてさらに行く先に困っている彼女を案内する事でお友達になるきっかけを作るというんですね！
さすがです！　私には思いもつかなかった事を考えるとはさすがです！

では行きます！　私ファイト、です！

あ……気合を入れているうちに彼女はナンパさんを撃退してしまい

ました。しかも結構と言うかかなりワイルドな方法です。
彼女なんとナンパさんの、あの、その、きん――ごほんごほん！
いえ失礼しました！　その、こ、こ、ここここ、股間を蹴り上げたんです！　しかもかなり容赦なくですよ！？
見て下さい！　ナンパさん蹴られたところを押さえてなんか危ない感じに痙攣してます！　男の方があそこを蹴られる痛みは女には一生分からないと言いますが、いったいどれ程なのでしょうか？

え？　気になるなら父上に聞いてみろ？

いえいえいえいえいえいえ！　気になっているって言っても一般常識的に気なっているだけでありまして個人的に聞くまで気になってはいませんからね！？

変な事に私が混乱していると、倒れてるナンパさんを男の人が2人で抱えていくのが見えました。恐らくナンパさんのお友達なのでしょう。
衝撃の光景が流れたベンチ前は、まるで全てが止まったかのような空白の雰囲気が漂っています。みんなさっきの光景を目の当たりにしたのでしょう、誰も彼女に近付こうとしません。

でもある意味でこれはチャンスなのでは？

そうですよね？　そうに決まってますよね！？

はい！　決めました！　声を掛けてみます！　玉砕覚悟です！

さあ行きますよ！　今日こそお友達1号を作るのです！！

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

§　§　§

――２００６年　５月３日　水曜日　ＡＭ１０：００――

ｓｉｄｅ　篁緋鷺刀

どうしようかな？

そう考えながらもぼけっとベンチに座っている僕。かれこれ１時間ぐらいここで座っているけど、どうしようもない状況にちょっとだけど参っている。

今年のゴールデンウィーク。

温泉好きの凛奈さんにいつも通り引きずられるように連れられ、来たのがここ加賀温泉郷のある石川県加賀市。北陸は加賀前田百万石の県だ。

昨日学校が終わり帰ってきた僕を文字通り引きずりながら、強行軍もびっくりな手際で高速バスに乗ると、昨日の夜にはすでにホテルにチェックインしていた。

どうやら既に予約は入れていたらしい。抜け目のない人なのは凄いと思うけど、事前に教えておいてほしかったと思う。

それなのに今日の朝になると書置き１つ残してどこかに消えてしまった。

その書置きが今僕の手の中にある。

『緋鷺刀へ
私はこれから自由気ままに加賀温泉を楽しむ。
チェックアウトの手続きはもう終えてあるから後はキーをフロントに返すだけだ。
荷物は先に次の宿泊先に送ってあるから気にするな。
それと次の宿泊先の住所はもう1枚の紙に書いてある。ちゃんと見ておけ。
午後6時半に夕食の予定だからそれまでに宿泊先に1人で来るように。
なにお前なら大丈夫だと信じているぞ。
ちなみにお前の財布に諭吉を1枚入れておいた。それで今日1日遊んで来い。

凛奈』

これでいったいどうしろって言うんですか凛奈さん。
再度手紙に目を通して思わず深い溜息が出てしまった。これで今日何回目の溜息だろう。かれこれこの1時間で10回ぐらい吐いてるような気がする。

でもまあこれはまだいいと思う。いつもの凛奈さんの行動を考えればそこまで突飛な事でもない。いい方だと思っておこう。僕の精神衛生上のために。

それよりさっきから気になっているのが僕を見つめる視線だ。

ここに座ってからずっと感じる視線。最初は僕の外見を見て勘違いした男の人の視線かと思っていたが、1時間近くも見られていると気にならない方がおかしいだろう。
さりげなく視線のする方を見てみたが、そこにいたのは1人の女の子だった。たぶん同学年か1つ上ぐらいだろう。長い髪を後ろで1つに纏めた可愛い子だと思う。

だが表情はなぜか険しかった。

僕が何かしたのだろうかと思い考えるが、見覚えもないし会った事もない女の子にあんな顔をされるような覚えなんかあるはずがなかった。
そもそもここに来るのも初めての僕が恨みを買うような事は出来ないはずだ。あ、また雰囲気がなんか変わった。おかしな子だ。

そんな事を考えていたら上から影がさした。何かと思って顔を上げると、そこにはなんと言うか大和くん的表現で言うとチャライ?格好をした男の人が1人僕を見下ろしていた。
その目を見てすぐに分かった。この人、僕を女と間違えている。

「ねぇねぇ彼女。さっきからずっとそこにいるけど誰かと待ち合わせ?」

ああ、やっぱりナンパだ。慣れたとはいえ去年あたりから増え過ぎだと思う。
最近凛奈さんが旅行先で僕を置いていく理由の1つがこれだ。旅行に行く度にナンパされる僕を面白がっているんだ。1月の旅行の時なんか凛奈さんと姉妹って言われてしまった。

小学6年生になったころから身長も伸びだしたし体つきもそれなり

に男っぽくなってきたつもりだったけど、生まれついての顔だけはどうにもならなかった。

モモ先輩曰く『可愛いは正義だぞ』
一子ちゃん曰く『可愛いからいいじゃない』
京ちゃん曰く『女の私より可愛いってどういうこと？』

らしい。モモ先輩何が正義なんですか？　一子ちゃん男にとって可愛いはいいことじゃないよ？　京ちゃんどうにも出来ない事で理不尽に怒るのはやめてくれないかな？

この女顔を1番どうにかしたいのは僕なんだけどね？

「ねぇ聞いてるの？」

考え込んでいた僕を見て無視されてたと思ったのか、男の人は少しだけイラついた声で問い掛けてきた。
さて、どう対応するかな。ていうかこの人、僕を幾つだと思ってるんだろうか。

「聞いていますよ。待ち合わせと言ったらどうするんですか？」

「嘘ついたらダメだよ。だってさっきからずっと見ていたけど、待ち合わせしてるって感じじゃなったもん」

見ていたのならわざわざ聞かなくていいと思うんだけどな……ナンパのパターンって意外と少ないんだよね。たいがいが『暇なの？』とか『待ち合わせ？』なんてセリフから始まる。たまにストレートに『遊びに行こうよ』と言う人もいるけど。

「それでお兄さんは何の用ですか？」

「暇だったら一緒に遊びに行こうよ。観光客でしょ？　この辺りを案内してあげるよ」

「結構です」

切って捨てるように言い放ち顔を背ける。ひと言で終わらせたかったが男の人は諦め悪く未だに何かを言っては側を離れようとしない。いい加減少しうるさくなってきた。

「いい加減にして下さい。下心が隠せていないのは見て分かります。犯罪者になりたいんですか、貴方は？」

「犯罪者って穏やかじゃないね。とこで君幾つなの？」

「今年の４月で中学１年生になった１２歳ですがなにか？」

「えっ？」

さすがに予想外だったんだろう。年齢を聞いて明らかに固まっている。

それも仕方ないだろう。認めたくはないが女顔だが背は同学年の女子より高い。それが相まって僕を女と勘違いする人は僕の事を１６・７だと思うらしい。

大和くんとジン兄の見解と推測だけど間違いないだろうと言っていた。

だがまあ怯んだのなら頃合いだ。そろそろ退場してもらおう。

僕の精神衛生上これ以上は不愉快だ。

「それと僕、男ですからナンパしても意味ないですよ」

「ええっ！？」

どうやらこっちの事実の方が驚きが大きかったみたいだ。

一瞬だけ信じられないといった表情を浮かべていたが、すぐに笑顔を浮かべる。

これはアレだ。信じていない。ナンパの断りの手段だと判断したのだろう。

面倒臭い人だな……あまりやりたくなかったけど強硬手段で行こう。

「だから嘘はいけないよ。それに大丈夫。俺年下好きだからぁっ！？」

言い終わる直前に言葉が跳ね上がり、男の人は見る見るうちに顔を青くすると、声にならない声を上げて蹲った。

まあ痛いだろう。思いっきり股間を蹴り上げたんだから痛いのは間違いなない。その痛みは僕も男だからよく分かる。分かるからこそあえてやったんだけど。

「痛いですか？　痛いですよね。僕も男ですからよく分かります。でもこれって自業自得ですよね？　僕は断ったはずです。しかも男だとちゃんと言いましたよね？」

股間を押さえ痛みに悶える男の人を見下ろし、笑顔を浮かべて問い掛けてみる。痛さからなのかそれとも僕が浮かべた笑顔のせいないのか、顔をさらに青くし顔を引きつらせながら頷く。

そうこうしている内に2人の男の人がやって来て、ナンパしてきた男の人を抱えるようにして連れていった。

たぶんあの人の友達なんだろう。それでナンパの理由が分かった。恐らく遊び感覚、勝負感覚で1人が僕に声を掛け、成功したら勝ちみたいな賭けでもしていたんだろう。僕からしてみればふざけるなと言いたい。

言いたい事はまだあるけど、終わった事にいつまでも愚痴を言っていてもしょうがない。それよりもこれからどうするかの方が先決だった。

今日の宿泊先は住所が書かれたメモを見れば分かる。場合によっては携帯のネットで検索すれば問題ないし、周りの地元の人に聞けば迷う事はないと思う。

ただそれまでの時間をどうやって潰すかが1番の問題だよね。只今ＡＭ１０：００過ぎ。今から宿泊先の夕食まで約8時間半もどこかで過ごさなければならないのだから。

どうせ凛奈さんの事だ、きちんと予約は入れているだろうが、チェックインは直前の6時ぐらいに設定しているはずだ。

そもそも未成年で中学生になったばかりの僕が、1人でチェックインしても門前払いを受けるだけ。どうせ『大人の人と一緒に来て下さい』って言われるのがオチだろう。

分かってる。絶対分かっててやってるよ凛奈さん……

またも落ち込んでしまう僕。

凛奈さんが僕を大切にしてくれているのはちゃんと理解しているけど、それなのに僕をいじるのはやめてほしいと思う。

あ、気配が動いた。

そんな風に考えて落ち込んでいると、さっきまでずっと僕を見ていた女の子の気配が動いたのが分かった。

僕がナンパされている時もじっとこっちを見ていたし、突然雰囲気がおかしくなるのを感じていた。せわしないなあと思いつつも、面白く感じていたのは事実だった。

そんな女の子が何やら決意したような雰囲気で近付いてきた。

さて、いったいどうなるのやら。なんだか怖いようで期待している自分に何故かおかしくなり笑ってしまった。

あ、なんかビックリしている気配がある。

いきなり笑ったから驚いたのかな？　なんていうか、人の気配に敏感……じゃないけど、たぶん人付き合いが苦手かあるいは人見知りな子なんだろう。

あれ？　それだと今近付いて来ている意味が分からない。なんだろうかこの子。物凄く興味が湧いてきてしまった。

驚き止まっていた気配が、ゆっくりとだけどまた近付いて来た。

本当に恐る恐るといった感じだ。

だが１つだけ気になる事があるんだけど、会話が聞こえるのはどういうことなんだろう。気配からは１人しか感じないのに声は２人分、ちゃんと会話している声が聞こえる。

その事がより一層興味を惹いている。

彼女が近付く度に湧きあがってくる面白さを表に出さないように抑

えながら、僕はこれからの彼女との会話がどんなものになるのか考えていた。

side out

驚きながらも強い決意を持って近付いていく彼女。

興味と面白さを隠しながら待ち構えている彼。

お互い初対面の初めての出会いと思っている。

だがこれが彼女と彼の、2度目の出会いだということには、まだお互いに気付く事はなかった。

第３１話　北の少女、初対面の再会（後書き）

あとがき～！

「第３１話終了。あとがき座談会、司会の春夏秋冬　廻です。今回のお相手は――」

「篁緋鷺刀です」

「はいよろしく。さて今回のお話でついにあの子が登場しました」

「といっても名前出てきてませんけどね。最初の視点も“？？？”ですからね」

「まあそうなんだけど、分かる人には分かると思う」

「文面とネタバレの座談会を見れば一目瞭然だと思いますけどね」

「そうだね。でもその文面なんだけど」

「文面がどうにかしたんですか？」

「いやあ、あの子の心理描写って難しいけど書いてて面白いね。テンパるところなんてなんかどんどん書けていけるのがいいよ」

「でも句読点が入っていないのはどう事なんですか」

「勢いだね。それだけ混乱しているのを表現する１つの方法」

「彼女らしい混乱時の言葉の表現ができないからじゃないんですね」

「……もちろんだよ」

「なんですかその間は？」

「さあて、次回で彼女の名前もきちんと登場しません」

「登場しないんですか？」

「うん登場しない。君たちの正式な自己紹介は原作突入後にしたいからね。まあさっきも言ったけど読んでる人は分かってると思うけどね」

「考えがあっての事なんですね。ところでなんで急に話をそらしたんですか？」

「な、何の事かな？」

「ですから表現が出来ない――」

「では皆さん！　次回投稿もよろしくお願いします！」

第３２話　北の少女、彼と彼女とストラップ（前書き）

第３２話登場。

名前出てないけどモロバレだよね。

第３２話　北の少女、彼と彼女とストラップ

ｓｉｄｅ　篁緋鷺刀

さて、どうしようかな。

首を捻りたくなるのを堪えて僕はちらりと隣に一瞬だけ視線を送る。ベンチの端っこに座っているのは先ほど近付いてきた彼女。驚かないでほしいんだけど彼女、動き出してからベンチに座るまで実に１０分も掛った。

隠れて覗いていたところからこのベンチまで７メートルぐらいしか離れていない。それなのに移動に１０分もかかるなんてある意味で凄い。

女の子はベンチに座っていても背もたれに背を預けることなく、険しい表情のまま握り拳を膝の上に置いて無茶苦茶震えているし、目は見開き肌寒いくらいの気温なのに汗を流している。

なんか葛藤が見て取れるような……迷ってるというよりは完全にテンパって混乱してるよねこの子……

これってどうするべきなんだろう。僕から声を掛けるべきなんだろか。でも近付いてきたのは彼女だし別段僕がここに座り続ける理由はないのだ。

今は彼女に少しだけど興味があるから座っているだけで、悪い言い方をすれば興味がなくなればすぐにでもこの場を離れるつもりでいた。

でもこんなにも慌てふためく姿を見るとどうしていいのか分からな

い。

こんな状態の彼女を放ってこの場を離れるのは、何故か良心の呵責に苛まれるような感じがして後味が悪くなりそうなのだ。

あ、またなんか雰囲気が変わった。なんかどんどん沈み込んでいっているのは勘違いじゃないと思う。見るからに落ち込んでいっているねこの子……

どうやら僕から声を掛けた方がいいみたいだ。

たぶん彼女から声を掛けられるのを待っていると、もっと時間がかかるだろう。下手をすればお昼を過ぎてしまう可能性もある。凄く可能性ありそうで怖いぐらいに。

さて声を掛けようと思った時、しまったと思った。

なんて言葉を掛ければいいのだろか？

勘違いのナンパで声を掛けられるのは慣れていたけど、僕自身は自分から誰かに声を掛けるという事はあまり慣れていない。

みんなと一緒にいる時はジン兄か大和くんがそういう対外的な役割を担っていたから、僕から率先して他の人に話しかけるような事はしてこなかった。どちらかと言えば京ちゃんや卓也くんと同じで、知らない人との対応は後ろから眺めていた事が多い。

どうすればいいんだろう。こういう時のジン兄や大和くんの対応は本当に凄いと思う。僕と1歳しか違わないのが嘘のように思えてきた。でも考えていても埒が明かないのは確かだ。

声を掛ける事すら忘れてテンパっている彼女と、どう言葉を掛けるべきなのかと迷っている僕。傍から見たら物凄く間抜けな光景かも

しれない。

考えるだけ無駄なら思ったままの言葉を掛ければいい。そう思った僕は気を取り直して隣に――と言っても端にいるから少し離れて座っている彼女に向かって声を掛けた。

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

ｓｉｄｅ　？？？

ああ！　どうしましょう！？

せっかく勇気を出して歩み寄り、かなり時間を掛けたとは言え隣に座ったというのに、なんて声を掛ければいいのか全く分かりません。

（オイオイまゆっち！　こんなに離れてちゃ隣に座った事にはならないぜ）

松風が私の心の中に話し掛けてきました。

さすが九十九神の松風。言葉に出すことなく心に言葉を届けるなんてさすがです！

ですが今はそんな事に気を取られている場合ではないのです。

何を言うんですか松風！？　これ以上近くに寄るなんてまだお友達にもなっていない私には出過ぎた事ですよ！　人との距離は心の距離なんです！

（おお、だからオイラはまゆっちと心で会話が出来るんだな）

その通りです松風。さすが私の心友です！！

（恥ずかしいぜまゆっち。そん事を臆面もなく言えるなんて……って今はそんな事を言っては場合じゃないぜ！）

松風にダメだしされて気が付きました。

そうです。今は隣に――いいえ同じベンチに座っている女の子になんて声を掛けるべきなのかを考える時です。

こんな時どういう言葉を最初に掛ければいいのでしょうか。経験のない私には到底思い浮かぶ事ではありません。ていうか経験がないからお友達がいないんでした。いえお友達がいないから経験がない？　あれこれって鶏が先か卵が先かとい有名な因果性のジレンマというものではないでしょうか？

（おお、まゆっちすげー！　哲学を体現してるぜ！）

ありがとうございます松風！

いえそうではなく、私がここで互いに循環する原因と結果の端緒を同定しようとする無益さの指摘を体現していても何ら問題の解決になりはしなくてですねああ見てます見られてます思いっきり見られていますどうしましょう手の震えが止まりませんどんどん汗が噴き出てきますああ何故か目の前がグルグル回るような感じがしますどうしましょう！？

（お、おおお落ち着けまゆっち！）

きっとこう思っているはずです『やっばー変な女の子に見初められちゃったどうしよー』って思っているはずです間違いありませんすみません私のような人間が厚かましくもお友達を作りたいという下

心満々の思いで近付いてしまいあまつさえ不信感を植え付けるような行動を取ってしまいさらに話しかけることなくただ震えて座っているだけの馬鹿丸出しの姿に不快感を与えてしまいましてどうもすみませんごめんなさいやっぱり私にはお友達を作るなんて無理なんですねどうしてですか神様!?

「あの……」

……えっ？

もしかして私、声を掛けられました……？

（ああ、先に声を掛けられてしまったぜ）

……ぇう!?

あああああああどどどどどどうしましょう先の声を掛けられてしまいました私から近付いたというのに相手の方から声を掛けさせるなんて失態を犯してしまいました全く気の利かない私はやっぱりお友達を作る資格なんてないんです間違いありませんごめんなさい私なんかのために嫌な思いをさせてしまって申し訳ありません!?

（謝罪が疑問形になってるぜまゆっち!?）

「えっと、どうして混乱しているか分からないけど落ち着いて下さいね？　1回大きく深呼吸をしてみて下さい」

テンパってどうしようも出来ない私に落ち着いた穏やかな声が掛け

られました。
未だ混乱する思考の中、声を掛けて頂いた女の子の方を見ると優しそうな笑顔を浮かべていらっしゃいました。

どうしましょうどうしましょう綺麗な笑顔です可愛い笑顔ですこんな私になんて素敵な笑顔を見せてくれるのでしょか彼女は凄く素敵な人に違いありませんなにせ卑しい心を持つ私にこんな笑顔を見せてくれてましてや優しい声で落ち着かせてくれるのですから私なんかと比べる事すらおこがましいと思いませんか松風ってなんで何も言ってくれないんですか松風松風ーー!!

「いやだから落ち着いて下さい。はい息を吸って~吐いて~」

スウゥゥ　　ハアァァ

彼女の指示に従って深呼吸をしました。深呼吸というよりは武道の息吹のようなものになってしまいましたが、そのおかげで落ち着く事は出来ました。
手の震えもなくなり噴き出ていた嫌な汗も治まり視界もクリアになりました。

そんな私の状態に気付いたのでしょう。女の子は安堵したように小さな息を吐くと変わらず優しい声で言葉を掛けて下さいました。

「落ち着きました?」

「はい、どうもありがとうございます」

なんとか普通に返答できました。松風やりましたよ。

（頑張れまゆっち！　まゆっちなら出来るぜ！）

はい！　頑張ります！

「本当にすみませんでした。お恥ずかしい姿をお見せしてしまって」

「いや別に大丈夫ですよ」

ああ、本当にいい人です。慌てていて怖い表情をしていたであろう私に怯えて離れて行ってしまう他のみなさんとは違います。もちろんその方たちが悪いと言っているわけではありません。悪いのは私だということは重々に承知しています。だからこそ私が落ち着くまで待って下さったこの方の優しさを嬉しく感じるのです。

「えっと話を戻すんですけど……ずっとこっちを見てましたよね？」

あ……バレていたようです。

この時、私は初めてじっくりと彼女を見ました。

座っている姿勢も正しく、服の上からなので確証はありませんが身体つきも引き締まっているように見えます。雰囲気も穏やかで落ち着いているし、何より私の気配や雰囲気をちゃんと察して下さっていました。

これだけの事でも分かります。彼女はきちんとした武に身を置く方だという事が。

私は嬉しく思いました。私と同じ年代の子が私と同じように武の道を歩んでくれていて、それでいて恐らく私より強いであろうと感じられる事が。

「はい、不快感を与えたのなら申し訳ありません」

自然と小さな笑みを浮かべる事が出来た私は、軽く頭を下げて謝罪の言葉を告げます。
そんな私に彼女は小さく手を振ると、苦笑いを浮かべて言葉を返してきました。

「別に不快感なんてありませんよ。ただどうして見ていたのかなって思って」

「えっとですね……遠目に見ていて何やらお困りのようでしたので……何かお力になれるような事はないかと思って見ていたんですが……」

自分が取っていた行動を思い返すと恥ずかしくなってしまい、言葉が段々と尻すぼみになってしまいました。

あああああでも今になって思いますが私のあの姿を外から見たら本当に恥ずかしいですよねだって1時間近くも物陰に隠れて1人の人をずっと見ていたんですから本当に何やっているんでしょうかね私！？

「だから落ち着いてって言ってるじゃないですか。確かに困っていたのは本当ですし、こうやって近付いて来てくれたのはありがたく思ってます」

再び混乱し始めた私の気配を悟ったのでしょう、彼女は声に多大な苦笑をにじませて私が近寄った事にお礼を言ってくれました。
またしても恥ずかしい失態を犯してしまった事に、穴に入りたい気持ちでしたがここでさらに同じ行動を取るほど愚かな事をするわけには行きません。私は落ち着くために息を整えました。

「そう言って頂けるのでしたら幸いです。でも何故ここでずっと座ってたんですか？」

落ち着き礼を言ってから疑問を口にします。
そんな私の問いに彼女は少し返答に困ったような表情を浮かべました。
もしや聞いてはいけない事だったのでしょうか？

「隠す事じゃないから話しますけど……」

そう言って彼女は理由を話して下さいました。
叔母さんが温泉好きで連休や大きな休みが取れるとすぐに旅行に行く事。学校の休みが重なると引きずられるように連れて行かれる事。
今回もゴールデンウィークでこの加賀温泉郷に連れてこられた事。
朝起きたら既に出かけた後でメモ書きが残されてた事。それを見てどうすべきか考えていた事。

一通り話してくれた彼女は私にその叔母さんが残されたメモの内容も私に教えてくれました。

何と言うか、そのメモ書きの文面を聞くだけで彼女の叔母さんがどれだけ自由奔放な方なのか分かるような気がします。
宿泊先に1人でこいとか、大丈夫だから信じているとか、お財布に1万円札だけ入れて遊んで来いとか本当に何と申しましょうか物凄くマイペースな方だと理解しました。

でも私は何故か彼女の言葉に違和感を覚えました。何やら彼女の口からは聞いてはいけない単語を聞いたような気がしたんです。
私の聞き間違いと思いたいのですが、何故かそう思う度に違和感が

大きくなっていきます。

仕方がありません、ここは正直に聞いてしまいしょう。

「あの……失礼を承知でお聞きします。さっきご自分の事を『僕』って言いましたよね？」

「えっと……言ったけど……もしかして君も僕を女だと思ってた？」

……

「ご、ごめんなさい！」

ああ！

やってしまいました！

やってしまいましたよ私ついに取り返しのつかない最大級の失態を犯してしまいましたどうしましょうそうすればいいんでしょうせっかくいい感じでお話が出来ていたのに男の方を女の方と勘違いしてしまうという何と恥知らずで失礼な事をしてしまったのでしょうかああやはり私にはお友達を作る資格なんてないんですね！！

思いっきり頭を下げて謝罪の意を示します。

本当に失礼極まりない事を私はしてしまったのです。謝って許されるものではありません。

でも彼女……いえ彼は笑っていました。

「えっと頭を上げて下さい。悪気がなかったのは分かっていますしもう慣れてますから大丈夫です」

ちょっと困ったような笑顔でした。でもちょっとだけ納得しました。

先ほどのナンパさんをあんな風に撃退したのは男としてプライドがあったからですね。
なんかそういうところは可愛いと思ってしまいます。
お互い顔を合わせて笑い合ってしまいました。
「それで話を戻しますけど、どうして僕のところに？」
「えっとですね、ご迷惑かと思ったんですけどよろしければこの辺りをご案内しようかと思いまして……どうしようか迷っていらっしゃるのが見えたもので」
「それじゃあお願いしていいですか？」
少し厚かましく思いながらも目的を告げると、彼は殆ど迷いなく答えてきました。
驚くなと言うのは無理かもしれません。私は断られると思っていたからです。
「即決即断とはやるじゃないか美少女ボーイ」
「は？」
ああ！　いきなり松風が喋りだしたのでビックリしています！　しかも何か失礼な事を言っていましたよ松風！？
私は慌てて財布についた馬のストラップを掌に載せました。急に取り出したことで彼はまじまじとこちらを見つめています。それに気付きながらも私と松風の会話は止まりません。

「オッス！　オイラ松風！　この木彫りの馬のストラップに宿った九十九神なんだぜ！　よろしくな美少女ボーイ！」

「こら松風！　先ほどから失礼な事を言っていますよ！」

「おうすまねえな。オイラ少し口が悪いからな。許してくれ」

ああ、彼が呆れていくのが分かります。今までの方々も私が松風と話をするとみんな私から離れていってしまいました。きっと彼も私から離れていくんでしょう。

と、私がそんな風に思っていた時、思いもよらない事が起きました。

「プッ……ククククク」

笑っていたんです。

彼が手で口元を押さえ笑い声をもらし小さく肩を震わせながら笑っていました。

私は呆然としてしまいました。だってこんな反応をされたのは初めてだからです。

呆れて笑っているわけじゃない。嘲て笑っているわけじゃない。本当に楽しくて面白くて笑っているのが分かりました。

「ごめんね、いきなり笑いだして。そうか松風だね。よろしく」

ああ、この人は何も聞かないんだ。どうして松風か話すのかを、どうして私が松風と会話しているのかを。何か理由があると分かっているのにそれを聞いてこないんだ。

きちんと松風を認めていてくれる。そんな人がいた事が私には嬉しかった。

「松風が自己紹介したのですから私も――」
私の言葉を遮るように彼は手を挙げました。
「自己紹介はなしにしよう」
「おう美少女ボーイ。それどういう意味だい？」
松風の少し怒りのこもった言葉に彼は少し愉快な表情を浮かべました。
「怒らないで。僕の友達が言った事があるんだ。『一期一会の出会いはお互いの名前を名乗らない方が面白い、その方が記憶に残る』ってね」
「えっとそれで？」
「うん。だから僕たちもそうしようかなって。ほら僕たちはもうお互いに凄い印象を与えているよね。君は僕を女の子だと思っていたし、僕は君を九十九神と友達な子だと知った。これって凄い印象だよね」
言われてみればそうです。こんな出会い方をすれば例え名前を知らなくてもまず忘れようがありません。確かに凄く印象に残っています。
この先に会う事がなかったとしても、この出会いは一生忘れないような気もします。
「ああ、でもこれから案内してもらうのに何も呼び名がないって言

うのも不便だよね」

その言葉を聞いた時に、私は彼が敬語ではなく友好的な口調になっている事に気が付きました。これは私との出会いが一期一会であっても仲良くしてくれるという事なのでしょうか。そうだと嬉しいです。

「では私の事は『まゆ』と呼んで下さい。松風はまゆっちと呼びますので」

「『まゆ』ちゃんだね。じゃあ僕の事は『タカ』って呼んでよ」

「分かりました。『タカ』さんですね。それから私の事は呼び捨てで結構です」

「いや、たぶん同い年ぐらいだから僕の事も呼び捨てでいいんだけど……」

「すみません。敬語で話すのは癖みたいなものですから気にしないで下さい」

そう言った私とタカさんはお互い顔を合わせて笑いました。同年代の人とこんな風に笑い合うのは初めてで、私はなぜか凄く泣きそうになりました。でもそれを悟られるわけにはいきません。

一期一会。

私とタカさんの出会いは今日1日だけ。ならその今日1日を楽しく過ごすには涙なんか必要ありません。私にはタカさんの案内という大切な使命があるのですから。

「じゃあ行こうかまゆ。この辺を案内してくれんでしょ？」

「はい、任せて下さいタカさん」

「オイラとまゆっちに任せな。タイタニックに乗ったつもりでいてくれ！」

「いや、それだと沈んじゃうでしょ松風……」

そんな取り留めのない会話をしながら、私と松風とタカさんは市内に向かって歩き出しました。

タカさん。一期一会の出会いでも私は貴方をお友達と思います。

思うだけならいいですよね？　ね？　松風。

第３２話　北の少女、彼と彼女とストラップ（後書き）

あとがき～！

「第３２話終了。あとがき座談会、司会の春夏秋冬　廻です。今回のお相手は――」

「オッス！　オイラ松風だぜ！」

「……」

「オイオイ作者、なに固まってんだＹＯ」

「おいコラ松風。本体はどこ行った？」

「本体ってなんだよ？　オイラはオイラだぜ。それとも何か？　オイラじゃ役不足だって言うのかよ」

「そうは言わないが……なんか調子狂うな」

「しっかし今回の話でも結局まゆっちの名前は最後まで出なかったな」

「いや、お前がまゆっちって連呼してるから誰のことかはモロバレだろ」

「隠す気があるのならオイラを出さなきゃいいじゃねーか。視点も“？？？”って小賢しい事しやがって」

「仕方ねーだろ。彼女の事を書こうと思うと絶対に松風は外せないんだから……って松風を出してるってだけでモロバレだろう。元々隠す気なんてなかったからな」

「じゃあ視点のときも名前出せばよかったじゃないか」

「いやでも文面に1回も本名が出てないのにそれはどうかなと思ったんだよ」

「それを小賢しいって言うんだよ」

「はいはいそうだね。さてこれで緋鷺刀の布石は一応できたからそろそろ原作突入前の最終エピソードに入ろうかな」

「なんかぞんざいな扱いだなオイ。それよりなんだよその最終エピソードってのは？」

「ここで言ったら意味ないだろ」

「それもそーかー。ところでそのエピソード何話ぐらい続くんだ？」

「不明。書く内容が書いてる時に変わるかもしれないから」

「行き当たりばったりじゃねーか！？」

「一応の見通しはつけてるよ。というわけで次投稿もよろしくお願いします」

第３３話　彷徨いの夜明け、消えた太陽（前書き）

第３３話投稿。

原作突入前の最終エピソード開始です。

第３３話　彷徨いの夜明け、消えた太陽

楽しい日々は続くと思っていた。

誰もそれを疑わずきっと変わるのはみんなもっと大人になった時だと思っていた。

風間翔一はいつもみんなで楽しく思いのまま自由なまま遊びたかった。

島津岳人は馬鹿をやりながらも笑っていられる空間が楽しかった。

師岡卓也はついて行けないみんなの暴走を呆れながらも見るのが好きだった。

椎名京はイジメられていた自分を助け認めてくれたみんなが宝物だった。

川神一子は泣き虫だった自分を強くしてくれた仲間が凄い誇りだった。

篁緋鷺刀は1人年下でもみんなと変わらず楽しくいられる事が嬉しかった。

直江大和は楽しく笑っていられるみんなとの空間が何より大切だった。

川神百代は恋人と仲間たちとの楽しい時間がずっと続くと信じていた。

だからみんな信じられなかった。

信じたくなかった。

そんなわけないと思った。

何かの間違いだと誰もが思いたかった。

そのニュースは風間ファミリーにあまりにも大きすぎる衝撃を与えたのだった。

§　§　§

――２００６年　８月２０日　日曜日　ＡＭ１１：００――

川神百代は今年の夏休みは不満でいっぱいだった。

いつも一緒に過ごしている暁神の姿は今、川神院にはない。いや川神院どころから川神市にも神奈川にも日本にも神はいなかった。

別に事件に巻き込まれたとか死んだとかそんな物騒な事ではない。

ただ単に海外に行っている。ただそれだけの事だ。

7月の終わり。

暑さが本格的になり始めた頃、神は川神鉄心に残りの夏休みで海外を見て回りたいといきなり申し出た。

驚いた鉄心に理由を聞かれた神は特に理由はないと答え、ただ単に見て回って見聞を広めたいと言ったのだった。

もちろん百代は反対した。なにより神とずっと一緒に夏休みを過ごす計画を立てていた百代にとっては、まさに寝耳に水だった。

妹の川神一子も無理やり巻き込んで――一子に巻き込まれたとは感

じないだろうが――猛烈に反対動議をしたが、神の意志を変える事は出来なかった。
祖父の鉄心も師範代のルー・イーほか、川神院の門下生の殆どが神の意志を尊重したせいで分が悪かったと百代は今でも思っている。

結局は百代の誕生日である８月３１日までには帰ってくる、という約束を強制的にさせることで、無理矢理自分を納得させた百代だった。

嬉しそうなそれでいて困ったような神の笑顔が何だか印象的だったのを今でも覚えている。

その日のうちに風間ファミリーのメンバーに海外に行く事を連絡したら、全員が一様に神の部屋に押し寄せてきた。

風間翔一は羨ましがっていた。どうやら自分も行きたかったらしい。
島津岳人は早速お土産を催促してきた。相変わらず現金な人間だった。
師岡卓也はそんな岳人を諫めつつ、どこに行くのかを聞いてきた。
椎名京は少し寂しそうな顔をしていた。夏休みで川神院に泊っていたのだ。
篁緋鷺刀はいつ頃帰ってくるのかを確認して、頑張ってと言った。
直江大和は要らない心配だと言いながらも、気を付けてと注意を促した。

みんな驚きは確かにあったが、誰も反対することなく神の行動に賛同した。
神はそんな仲間の温かい言葉を嬉しく思っていた。

言い出す前から準備はしていたのだろう。神はそれから殆ど日にち

を置かずに、海外に行くと申し出た2日後の7月30日には日本を後にし、まず今回の目的地のアメリカへと旅立っていった。

飛び立って行く飛行機の姿を百代は見えなくなるまで見送っていた。

それからの数日は百代にとって死ぬほど退屈な日の連続だった。

元より今年の夏休みも神と一緒にいる事が前提だった百代にとって、いきなり恋人がいなくなった状況もそうだが、何よりそれ以前から毎年ずっと一緒にいた相手がいなくなってしまった事で、どう過ごすべきなのか全く分からなかった。

修練をしていてもあまり身が入らないし、部屋でゴロゴロしても全然時間が経過したように感じない。でも仲間と一緒にいると楽しくなるので、百代の今年の夏休みの過ごし方はもっぱら風間ファミリーのメンバーをいじる事に徹したようなものだった。

メンバーにしてみれば堪ったものではないだろう。特に舎弟契約していた大和や空気の読めない岳人は殆ど標的にされていた。

そんな時に2人が共通して思った事、それが――

早く帰って来てくれ！　兄弟！

とっとと帰って来い！　ジン兄！

だったらしい。他のメンバーは同情するしかなかっただろう。

そんな日常が3週間ほど続いていたが、今週に入って百代の機嫌は上昇しだした。

大和や岳人をいじっても酷いものではなく、軽く小突くぐらいになった。たまに上機嫌過ぎて力加減が出来なくなる時もあったが、お

おむね優しくなったと言えた。

理由は物凄く簡単だった。
あと少しで神が日本に帰ってくるからだ。

百代の誕生日には帰ってくると約束した神は、少し余裕を持って25日には帰国すると言っていた。その約束の日まで今日を含めるとあと6日。
百代の機嫌がよくなっていくのは当たり前の事だった。

だからこそその事件は、百代の心を地の底に叩き落としたのだった。

始まりは1本の電話からだった。

百代は神の部屋の神のベッドの上で寝転がりながら漫画を読んでいた。
最近の百代も定位置だ。家にいる時はたいがい神の部屋で過ごすようにしている百代。少しでも神の存在を感じられる場所にいたいと言う恋人心からの行動だった。

まあ、さすがに寝る時は自分の部屋で寝ている。

最初は神のベッドで寝ようとしていたが、それを見つけた鉄心によって止められ叱られたのは、妹の一子には言えない醜態だった。

今日は京も泊りに来ているという事で午前中の鍛錬は軽くで終わり、いつものように神の部屋でくつろいでいた時だった。

枕元に置いてあった携帯から着信音が鳴る。着信音から風間ファミリーの人間だと分かる。
百代は漫画から視線を外さず手探りで携帯を取り、仲間の誰から掛ってきたかも確認せずに慣れた手つきで通話ボタンを押し電話に出る。

「どうした～モモ先輩だぞ～」

「姉さん！　今どこにいるの！？」

のんびりした声に返って来たのは切羽詰まった大和の声だった。
思わず漫画から視線を外しベッドの上に座り直した百代は、電話の向こうの大和に訝しげに問い掛ける。

「いったいどうした、大和？」

「いいから姉さん今どこにいるの！？」

「どこって、家にいるけど……」

言葉を無視して再度物凄い勢いで聞いてきた大和の声に、百代は思わずその勢いに少し呆然となりながらも答えた。
家にいると答えを聞いた大和は少しだけ落ち着く。だけどどこか切羽詰まった雰囲気を消すことは出来ずそれが声になって表れてしまった。

「姉さん、今すぐにテレビを点けて」

そんな大和の雰囲気に百代はえもいえない不安を感じてしまう。

「どうしたんだ大和。そんなに慌ててお前らしくないぞ」

「ごめん。でも早くテレビ点けてニュースを見て。俺が言うより分かると思うから」

訝しく不安に思いながらも百代は大和の言葉に従い神の部屋を出ると、テレビが置いてある居間に向かって携帯電話を耳に当てながら早足で廊下を進む。

その百代の姿を見て不思議に思ったのだろう、廊下ですれ違った一子と京は顔を見合わせると百代の後をついて行った。

百代も気配で2人が付いて来たのを察知する。

「いったい何があったって言うんだ」

「……」

「大和？」

廊下を進みながらも会話を続けていた百代だったが、核心を突く問い掛けに大和が言葉を返さない事に訝しく思った。

そうこうしている内に居間に着き、テレビを点ける。

大型の液晶テレビの画面に映ったのは、燃え盛る白い建物と消火作業を続ける消防士と消防車、たくさんの記者とカメラを持つ報道者たちの姿を捉えた光景だった。

どこかで火事があったのかと思った百代だが、よく見てみると映像に映っているのは日本人じゃない。外国人——恐らくＬＩＶＥ映像と出ていて背景が夕闇だからアメリカだろう——ばかりだ。

「大和？　このニュースがいったい――――」

訳が分からず、ニュースの映像を見ながら電話の相手の大和に問い掛けようとした百代の耳に、ニュースを伝えていたアナウンサーの言葉が入ってきた。

『もう1度お伝えします。行方不明者の身元は持っていた荷物から判明しました。名前は暁神。年齢は１４歳。恐らく夏休み利用して海外旅行をしていたかと思われます。
　繰り返しもう1度お伝えします。行方不明者の身元は持っていた荷物から判明しました。名前は暁神。年齢は１４歳。夏休みを――――』

頭の中が真っ白になった。

百代も一子も京も、呆然とテレビに映った映像を見ているだけだった。

神の名前。行方不明。未だに物凄いで燃えている白い建物。
いったい何が起きているのかニュースを見てすぐの3人には何が何だか分からなかった。

ただ神がこの事件に巻き込まれた。それだけしか判断できなかった。

この状況で真っ先に我に返ったのは京だった。隣にいた一子を見た後、ハッとなり急いで前にいる百代の正面に回り込む。
京が見た百代は完全に呆然自失の状態だった、

ニュースを伝えているアナウンサーの声も、電話で何かを話している大和の声も、ここが自分の家だという事も、ここに自分以外に一子と京がいるという事も、今の百代は忘れていた。
ただ食い入るようにテレビの画面を見つめていた。

初めて見る百代の姿に顔を歪めながらも、京は百代の持っていた携帯電話を取ると、通話相手を確認して電話の向こうにいる相手に問い掛ける。

「もしもし大和？」

「その声、京か？」

いきなり何の反応も示さなくなった百代に心配になり、ずっと呼びかけていた大和は、急に電話の相手が変わった事に驚いたが、それが京だと分かると少し安堵したように息を吐いた。

「姉さんはどうしてる？」

「完全に呆然としてる。何言っても聞こえてないと思う」

「ワン子は？」

「同じ」

「そうか……」

呻くように呟いた大和に京の表情がまた歪む。
京は大和が一生懸命に冷静になろうとしているのが分かった。本当はともすれば溢れだす感情のままに叫びたいのは大和も同じだと思

ったからだ。

風間ファミリーで百代の次に神に懐いていたのは他でもない大和だ。目標であり憧れだった存在。それが大和にとっての神だった。だからこそ舎弟契約とはいえ大和は神の事を『兄弟』と呼んで慕っていたのだ。

電話越しに沈黙する大和に京は声を掛ける術を持っていなかった。大好きな大和が苦しんでいるのに何も出来ない自分に凄くもどかしくなっていた京は、一子が自分の持っていた携帯を取っていくまで近付いてきた事に気が付かなかった。

「やまと……？」

擦れ震える一子の声に大和は我に返った。

「ワン子？　大丈夫か？」

「大和の方こそ大丈夫？」

一子の言葉を聞いた時、京は小さく体を震わせた。自分がどんなに頑張っても言えなかった言葉を、一子は簡単に大和に掛けた。共に過ごしてきた時間の差だと言われればそれまでかもしれないが、この時の京は一方的だったが一子に対して敗北感のようなものを感じてしまった。

直ぐに今はそんな事を考えている場合じゃないと思い直し、小さく首を振ると大和と電話で話す一子を見つめた。

「大丈夫だ……とは言い辛いけど、今は大丈夫だ。それよりさっき

京にも聞いたけど、姉さんは大丈夫か？」

「分かんない。お姉様さっきからずっとテレビを見たまま動かないもん」

百代のショックがまだ抜け切れてない事を一子の言葉で大和は悟った。

すぐに立ち直れというのが無理な事は大和にだって分かっている。

百代にしてみれば恋人の生死が不明になっているのだ、冷静でいろという方がおかしい。

「一子、代わりなさい」

いきなり声を掛けられた一子は、驚き顔を声のした方に向けると、そこには厳しい表情を浮かべた鉄心とルーの姿があった。

鉄心とルーは異様な居間の雰囲気を悟り修練を切り上げてここに来た。そして3人と同じようにテレビから流れるニュース見て、信じられない程に呆然とした百代の姿と顔を白くした京と携帯で話している一子の姿を見て、どういう状況なのを瞬時に判断したのだ。

そして鉄心は一子が携帯で話をしているのが大和だと当たりをつけて電話を替わるように促したのだ。

言われるがままに一子は持っていた携帯を鉄心に渡した。鉄心は心配そうな顔の一子に安心させように笑って頷くと、一子とたちに背を向ける。

それは厳しい表情を孫たちに見せないようにとの鉄心の優しさだった。

「直江か？　鉄心じゃ」

「て、鉄心さん!?」

再度相手がいきなり変わり、しかも思ってもいなかった人物からの言葉に、大和は少しだけ声を上ずらせた。だが鉄心はそんなことは気にせず話を続ける。

「状況はニュースを見て分かった。お主もそれを見てモモに電話をしたのじゃろ?」

「はい、最初にモモ先輩に知らせるべきだと思って」

「よい判断じゃ。手間を掛けさせたのう」

「いえ、そんな事ありません」

大和は対外性が優れている。物事を客観的に捉える事に優れ常に冷静でいるように努めている。以前より感じていた大和の性質を、鉄心は今回改めて強く感じた。

まだ中学2年生でしかない大和。本来なら呆然とする百代や、どうしていいか分からず顔を青くする一子や京のようになって当たり前なのに、そうなりそうな感情を押さえて冷静になろうとしている。

ある意味で凄い事だった。

「他に情報はないか、直江?」

「父が現地に知り合いがいるらしく、今詳しい情報を調べてもらっています」

「そうか。他の子供たちへの連絡はもうしたのか？」

「まだです」

大和の言葉に鉄心は頭の中でこれからのスケジュールを大まかに決める。

首だけを後ろに向けて未だに呆然としたままの百代を見ながら、鉄心はルーに向かって目配せをして頷く。その意味を悟ったルーは同じように目配せをして頷くと居間から出ていった。

それを確認した鉄心は改めて大和に声を掛ける。

「直江、お主はすぐに仲間たちに連絡を入るのじゃ」

「分かってますけど……モモ先輩は？」

「モモはワシと一緒にすぐにアメリカにつれて行く」

「え？」

「神の保護責任者はワシじゃ。何かあったらワシが保護者代わりじゃからな」

「分かりました。後はお願いします」

自分に出来る事は仲間に連絡して、後は待つだけしかないと悟った大和は、何も出来ず力のない自分に悔しさを覚えながらも、大人である鉄心に任せる事しか出来なかった。

大和の心の内を言葉で悟った鉄心は、安心させるように『心配するな』と声を掛け電話を切った。

「聞いておったな？」

振り返り自分を見ていた一子と京に声を掛ける鉄心。
2人がその言葉に小さく頷くのを見た鉄心は、持っていた携帯をテーブルの上に置き、両手でそれぞれの頭に手を乗せると優しく撫でる。

「直江の父親が何かの情報を得るじゃろうから、お主たちは直江の家に向かいなさい。他の仲間たちもすぐに集まるじゃろう」

「じいちゃん、お姉様は？」

心配そうに見え上げてくる一子により一層優しい笑顔を浮かべる。

「ワシと一緒にアメリカに行く。心配するな。じいちゃんに任せておけ」

不安そうだったがそれでも頷いた一子の頭を少しだけ強く撫でる鉄心。京はそんな祖父と孫のやり取りをどこか羨望の眼差しで見ていたが、落ち着いた一子の手を引っ張る。

「ワン子、大和の家に行こう」

「うん！　じいちゃん行ってきます！」

居間を出て行く2人を穏やかな眼差しで見送った鉄心は、今なお呆けている百代に近付くとその肩を強く揺すった。

「モモ！　しっかりせんか！！」

「ジジイ……？」

なんとか我に返った百代だったが、まだ声は呆然としたままだった。
そんな百代に喝を入れるように今後の予定を言い聞かせる。

「しっかりせい。これからワシと一緒にアメリカに行くぞ。はよう準備をせい。遅れれば遅れるほど向こうへの到着が遅くなるだけじゃぞ」

「っ！？」

鉄心の言葉に完全に我を取り戻した百代は、何故と聞く事すらなく急いで準備をするために居間から出て行った。
そんな孫娘の背中を見送りながら、鉄心は何もなくこの事件が終わればいいと心の底から願っていた。

第３３話　彷徨いの夜明け、消えた太陽（後書き）

あとがき～！

第３３話終了。

はい今回も座談会形式ではありません。

数話はどシリアスな展開になりますので座談会話はなしにします。

さて今回のお話いかがだったでしょうか？

驚愕の展開に驚いた方も多いかと思います。

あまり長く語れませんので今回はここまで。

では次回投稿もよろしくお願いします。

第３４話　彷徨いの夜明け、崩れかける絆（前書き）

第３４話投稿。

第３４話　彷徨いの夜明け、崩れかける絆

ｓｉｄｅ　風間翔一

「ウソだろ！？」

「そんなの信じるわけねーだろ！！」

「そんなの俺はゼッテー信じないからな！！」

「おい大和！！　今すぐ風間ファミリーを秘密基地に集めろ！！
いいな！！」

「俺もすぐに行く！！　詳しい話はそれからだ！！」

言いたい事だけを言って大和から掛って来た携帯を一方的に切った俺は、蹴り破る勢いで部屋のドアを開けると、急いで家を飛び出していった。
そんな俺を不思議そうに見ていたお袋には後で連絡を入れておけば問題ない。

とにかく今は秘密基地に行くことが最優先だ！

俺は絶対に信じないからな！！　ジン兄！！

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

ｓｉｄｅ　島津岳人

「はぁ!?」

「おい大和!　お前何言ってんだよ!?」

「嘘ついてんじゃねーよ!!　冗談にもほどがあるぞ!!」

「冗談じゃないって……マジなのかよそれ!?」

「キャップからの召集命令!?　分かった俺様もすぐに行く!!」

大和から掛って来た携帯を切って俺様は日課の筋力トレーニングを切り上げ急いで家を出る準備をすると、玄関から飛び出していった。
後ろでかーちゃんが何やら叫んでいたけどそんなの今はどうでもいい。

1秒でも早く秘密基地に行かなきゃなんねーんだ!

マジに何がどうなってんだよ!?　ジン兄が行方不明ってホントかよ!?

side　out

side　師岡卓也

「えっ!?」

「大和……それ本当なの……?」

「僕を担ごうと思ってみんなで嘘ついてるんじゃないの？」

「本当なんだ……それでみんなには連絡したの！？」

「キャップから召集命令？　うん分かった。僕もすぐに向かうよ！」

大和からの信じられない報告に一瞬呆然となりながらも何とか返事を返すと、僕はゲーム本体の電源を切ると、急いで出かける準備を整え、書置きを残して家を出た。

今日はたぶん遅くなるかもしれない。後でもう1度連絡しておこう。

それよりも今は早く秘密基地に向かわなくちゃ！

とにかく大和から詳しく話を聞くんだ！！

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

ｓｉｄｅ　篁緋鷺刀

「大和くん！？」

「ジン兄が行方不明って本当なの？」

「うん、僕もテレビ見てたからニュースで……」

「ねえ大和くん、僕たちどうすればいいのかな？」

「えっ？　キャップからの召集がかかった？　うん、すぐに行く」

ニュースを見て呆然としていた僕に大和くんから連絡が来た。とにかく秘密基地に集まるようにとキャップからの命令も出ているみたい。
僕は凛奈さんに事情を話して急いで家を出た。
何も出来ないけどまずは秘密基地でみんなと会わなくちゃ！！
ジン兄！　無事に決まってるよね？　信じていいんだよね！？

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

ｓｉｄｅ　椎名京

「大和……」

目の前でみんなへの連絡を終えた大和に声を掛ける。
私とワン子はあの後、鉄心さんに促されて大和の家に来た。私たちが家に着いた時、大和はちょうどキャップに連絡を取ってる時だった。
私たちが来た時に連絡を始めたという事は、それまでは大和のおじ様の情報を待っていたって事かな？
携帯を折り畳み１つ大きな溜息をついた大和は、玄関で立ち竦んでいる私たちの方に振り向いた。
その大和の顔を見た瞬間、私の隣にいたワン子が私の服の袖を強く掴んだ。私も思わず身を固まらせてしまった。
大和の顔が、今まで見た事のないぐらい悔しさで歪んでいた。

でもそれはほんの数秒だけで、大和は2・3度軽く首を振るといつもの表情とは言えないが、だいぶ落ち着いた表情に戻っていた。

「京、ワン子、キャップからの召集令だ。秘密基地に今から行くぞ」

端的の目的だけ言った大和は、リビングに顔を出しおば様に出かける旨を伝えると玄関に戻って来た。その大和にワン子は声を掛けた。

「大和……お姉様は――」

モモ先輩が鉄心さんと一緒にアメリカに行く事を伝えようとしたのだろうが、大和に手で止められた。

「知ってる。電話で話していた時に鉄心さんから聞いた。姉さんは鉄心さんと一緒にアメリカに行くんだろ？」

靴を履きながら言葉を掛けてきた大和に、ワン子と私は頷いて答える。

たぶんワン子も確認のために言ったんだと思う。鉄心さんと大和が話しているのを私たちは横で聞いてたんだから、大和も知っているはずなのは分かっていた。

「何か情報を大和のおじ様が持っているだろうって鉄心さんは言ってたけど……」

「詳しい事は基地に行ってから話す。今は急ごう」

私の言葉を引き継ぐように言い、爪先で床を叩き靴を調整すると、大和は玄関のドアを開けて私たちを外へ促した。

それに従ってワン子が先に次に私が外に出て、最後に大和が後ろに玄関のドアを閉めがら外に出た。

「とにかく行こう。みんな基地に向かってるはずだから」

そう言って歩き出した大和を先頭に、私たちは秘密基地へと歩みを進める。そんな大和の背中を見ていた私は、唐突に分かってしまった。

私たちは1番嫌な役を大和に押しつけてしまったんだという事を。

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

ｓｉｄｅ　川神一子

大和は秘密基地に向かっている今、ひと言も喋ろうとしない。ずっと難しいそうな、それなのにちょっと怖い顔のままじっと道の先だけを見て歩いていた。

アタシはそんな大和が少し怖くなって思わず隣を歩いている京の服を引っ張った。そんなアタシの行動がどんな意味を持っているのかを悟ってくれた京は、困ったような顔で小さく首を振った。

たぶん、アタシと同じで今の大和には何を言っても意味がないと思っているんだ。

でもそれは仕方ないかもしれない。

だって大和にとってジン兄は、アタシたち仲間の中でも特別な存在なんだと思う。

前にちょっとだけど言ってた。
大和にとってジン兄は憧れであり目標であり、でもたぶん一生勝てると思えない偉大な存在なんだって。いつかジン兄にどんな事でもいいから認めてもらう事が今の目標なんだって言ってた。

今の大和は、そんな頑張るための目標が突然いなくなったような感じを受けているんだと思う。

きっと大和にとってジン兄は、アタシにとってのお姉様と同じなんだ。
アタシがもし今、お姉様が消えてなくなったら凄く悲しくて何をしていいか分からなくなっちゃうもん。

でも大和は泣く事も、アタシたちみたいにどうしたらいいかって迷う事もしないでお姉様に電話してきたし、みんなにも連絡をしていた。
お姉様と同じですぐにでもジン兄のいるところに行きたいのは、アタシたちの中ではたぶん大和が1番強く思っているんだと思う。

やっぱり大和は大人なんだと思う。自分の気持ちよりも周りのみんなの、ファミリーの事を今は最優先に考えてくれている。

でもそうなると、大和はいつ自分の心の中の思いを出すんだろう。
アタシたちはたぶんこの後の秘密基地で集まってそれぞれ言い出すんだろう。
そして大和はそれを受け止めてみんなに説明をするんだろう。

アタシじゃどんな風になるか分かんないけど、何故か大和の心がどうなっちゃうかが心配だった。

お姉様はじいちゃんとアメリカに行っちゃうし、ジン兄は今回の事件でここにはいない。大和がアタシたちファミリーで頼りにしている2人がいない中、ホントに大和はどうなっちゃうんだろう。

アタシはそれが凄く気になっていた。

side out

side 直江大和

俺たちが秘密基地に着いた時、既にキャップ、ガクト、モロ、ヒロの4人は部屋の中にいていつもの定位置に座っていた。
でもみんないつもと雰囲気が全然違うのは一目瞭然だった。

「遅いぞ大和！　急いで来いって言ったよな俺！　なんでこんなに時間かかってんだ！」

入って来た俺に最初に声を掛けたのはキャップだった。
声の感じからして明らかに怒っている。いや怒っているというよりは苛立っているといった感じだろう。俺が言った事を信じたくないから苛立っているんだろう。
ただその苛立ちを他人にぶつけるのはキャップにしては珍しかった。

「おい大和！　オメー事の重大性が分かってんのか？　女とゆっくり来るなんてどういうこった？」

ガクトも苛立っている。
こいつはキャップとは違って状況が分からないから苛立っているんだろうが、だからといってその苛立ちを俺にぶつけるのはどうなん

だろうな？　ガクト？

「ガクト！　何で大和にそんな事言うんだよ！？　連絡してくれたの大和だろ！？　大和はみんなに連絡してくれたんだから遅くなるのは当たり前だろ！！　どうせガクトはニュース見てなかったんだろ！！」

モロも珍しく声を張り上げてガクトに食って掛かった。
そう今回はどう見てツッコミじゃない。たぶんモロも自分でも訳が分からない苛立ちを抱えてるんだろう。
珍しく声を荒げしかも馬鹿にしたような言葉にガクトは表情を歪める。

「ああ！？　今なんつったモロ！？」

「ガクトはニュース見てなかったんだろって言ったんだよ！！」

「オメーがそれ言えんのかよ！？　オメーもどうせゲームやってニュース見てなかったんだろ！？」

「ああそうだよ！！　だから僕たちは大和を悪く言う権利なんてないんだよ！！　なのに少し遅くなったからって厭味ったらしく言って！！」

「テメーモロ！！　俺様にそんな口きいていいと思ってんのか！？」

怒りを露わにして立ち上がったガクトは、隣に座っていたモロの襟元を掴み強制的にソファーから立たせた。そんなガクトの行動にモロは本当に珍しく挑戦的に嘲け笑った。

「ほら!?　自分の分が悪くなるとすぐそうやって暴力に訴える!!　前から言いたかったんだけど僕はガクトのそういうところが嫌だったんだよ!!」

「へっ!!　そりゃ奇遇だな!!　俺様はテメーのそんな根暗で陰険なところが大嫌いだったんだよ!!」

「何やってんだお前ら!!　今はそんなくだらない言い合いをしてる場合じゃねえだろ!!」

ともすれば掴みあいの喧嘩になりそうなヤバイ雰囲気になりだしガクトとモロにキャップが声を荒げた。2人はお互いを睨みつけた表情のままキャップに視線を向ける。

ああ、もう本当に嫌だこいつら。

「くだらないってなんだよキャップ!?　そんな事言われる筋合いはないんだけど!?」

「そうだぜキャップ!!　これは俺様とモロの問題だ!!」

「個人の問題じゃねーって言ってんだよ!!　今はジン兄の事をどうするかって話し合いをするから召集したんだ!!」

「それこそ意味ないじゃないか!!　僕たちみたいな子供が何か出来ると本気で思ってるの!?　そんなの無理に決まってるじゃないか!!」

「無理かどうかは俺が判断する事だ!!」

「お気楽なんだよキャップは!!　判断するってどう判断すんだよ!!　どう考えても無理だろ!!　俺様たちに何が出来んだよ!?」

「もうやめてよ!!」

キャップたちの言い合いに我慢が出来なかったんだろう。扉の前で佇む俺の隣にいた京が珍しく声を荒げて叫んだ。ちらりと視線を向けるとその目に涙を浮かべていた。

珍しかった。声を荒げる事もだけど涙を見せるのも京にしては珍しかった。俺たちの仲間になってからは泣く姿は殆ど見せてなかったのに。

京は前から仲間の絆を大切にしているところがあった。だから今回のこの状況に不安を感じてしまったのだろう。

なんせ、仲間の絆を繋いでいた最大の存在が消えてしまったのだから……

「やめてよ……今ここでみんなが言い合ってどうするの？　せっかく大和が情報を持ってきてくれたのに……これじゃあ集まった意味ないじゃない……」

嗚咽を漏らしながら懇願するように言う京。

だが今の3人にはそれすらも届かないくらいの苛立ちが心を覆ってた。

「いい加減にしてよね京。何かあるとすぐ『大和大和』って。京って結局いつも大和頼りで自分から何かしようとしないよね」

冷たいモロの言葉に京は身体をビクリと大きく震わせる。図星を突

かれたんだろう。縋るように俺を見上げてきた京だったが、俺はそれに何も応えなかった。

モロの言う通りだ。俺も前々から思っていた。京はいつも俺を頼る。いい機会だから少し自分でなんかしてもらおう。

顔を逸らし何も言わない俺に京は愕然と目を見開いて固まった。

「ちょっとモロ！！　何よその言い方！！　京に当たってんじゃないわよ！！」

モロの言葉に反論したのはワン子だった。文字通り犬が敵に威嚇するかのように唸り声でも上げそうな勢いだ。
その言葉に反応したモロはワン子と睨み合いを始めた。

「おいワン子！　モモ先輩はどうした！？　俺は全員集合だって言ったろ！！」

そんなワン子にキャップが声を掛ける。
ようやく姉さんがこの場にいない事に気付いたのだろう。本来のキャップなら真っ先に気付くはずなのにやっぱりいつもとは違うのだろう。

なんか本当にどうでもよくなってきた。

「うっさいわよキャップ！！　それを言う前にあんたたちが勝手に言い合いなんか始めたんでしょ！？　大和の話を全く聞こうとしないあんたたちが悪いんじゃない！！」

「んだとワン子！？」

今度はワン子とガクトの言い合いだ。
もう誰が誰に声を掛けても言い争いしか発生しない。

「ワン子にまで当たってどうするんだよガクト!!　凄めばどうにかなると思ってんの!?　いい加減力で解決しようとするのはやめなよ!!」

「黙れっつてんだろモロ!!」

「俺たちの一大事にどんな用があるってんだ!!　モモ先輩も薄情だ!!」

「お姉様がどんな気持ちでいるかも分かってないで!!　自分の言いたい事言ってんじゃないわよキャップ!!」

「や……やまとぉ……」

こんなに駄目になっちゃうものなんだろうか。こんなに脆かったんだろうか俺たちは。たった1人居なくなっただけでこうなっちゃう程に……

俺は本当にどうでもよくなった。

何なんだろうな今のこの状況。

ここは俺たちの憩いの場だったはずだ。
俺たちが楽しく笑うための場所だったはずだ。

それが今はどうだ？

兄弟がいない。
姉さんがいない。

キャップは苛立ちを他人にぶつけ。
ガクトはいつもより感情が昂り。
モロはあり得ないほど卑屈になり。
京は珍しく泣く姿を見せてしまい。
ワン子は感情のままに叫び。
ヒロは不気味なほど静かで。

全然いつもの俺たちじゃない。

いつもの俺たちと違う。

秘密基地にいる時の俺たちは……

キャップが勢いのまま振り回し。
ガクトが馬鹿な事をやって。
モロがそれにツッコミを入れ。
京が呆れたようにいじり。
ワン子が元気に笑い転げ。
ヒロが穏やかに慰めて。
姉さんが尊大に言い放ち。
俺がそのとばっちりを受け。
兄弟がさり気なくみんなをフォローする。

これがいつもの俺たちのはずだった。

いつもの風間ファミリーの姿のはずだった。

ここは俺たちにとって理想の場所のはずだった。

それなのに苦痛しか感じない。

この場所にいる事が嫌でたまらない。

自分の言いたい事だけ言い合うみんなが許せない。

それなのに冷静でいようとする自分が馬鹿らしくなってきた。

なんで俺はこんなところに居るんだろう。

なんで俺は何も言わずに佇んでいるんだろう。

なんで俺は自分の言いたい事をみんなみたいに曝け出さないんだろう。

なんで俺はこんなにも我慢をしているのだろうか？

ああもういい。

どうでもいい。

もう何も知らない。

もうどうにでもなってしまえ。

そう思っていても、俺は兄弟みたいにこの仲間たちを守りたいんだろうな。

全部を放棄しようとする思考の中で、俺はそんな事を思った。

そう思ったらもう終わりだ。何もしないわけにはいかない。

そう思ったらどうしても考えてしまう。どうするのかと。

こんな、みんなの纏まりがなくなってしまった状況で、あいつなら、兄弟なら、暁神ならどうするのかと考えてしまう。

そしてすぐに答えは出た。

兄弟なら簡単に治めてしまうんだろうなきっと。

何だろう。無性に笑いたくなった。

なんでこんな状況だっていうのに、俺は未だに兄弟には勝てないって思いが浮かんでくるのだろうか。

憧れで、目標で、いつか追い付きたい、いつか認めてほしい存在。

勝てない――いや違うな。

勝ちたくないんだ。

ずっと憧れでいてほしいんだ。

いつまでも憧れていたいんだ。

ずっと目標であってほしいんだ。

いつまでも目標にしていたいんだ。

ずっと俺の前を歩いて欲しいんだ。

いつまでもその背を追いかけたいんだ。

ならやろうじゃないか。

兄弟のように上手くはいかないだろう。

みっともなくてもいいじゃないか。上手くなくてもいいじゃないか。

俺は『直江大和』であって『暁神』じゃない。

俺は俺のやれる事を俺のやり方でやるだけだ。

だから失敗しても文句を言うなよ。兄弟。

第３４話　彷徨いの夜明け、崩れかける絆（後書き）

あとがき～！

第３４話終了。

内容的にはあまり進んでいません。

さて今回のお話ですが、初めてメンバー全員の視点をやりました。

最初の男４人は大和からの連絡を受けた時の状況です。

今回の大和の心境を考えるのが大変でした。

展開は遅々として進んでいませんが、次投稿もよろしくお願いします。

第３５話　彷徨いの夜明け、揺るがないモノ（前書き）

第３５話投稿。

展開が進まない……

第３５話　彷徨いの夜明け、揺るがないモノ

壊れていくのが分かる。

本当はみんなそんな事は言いたくないんだ。
でも口から出るのは相手を苛立たせる言葉ばかり。
たぶんどうしていいのか分からないんだ、みんな……

こんな時いつもファミリーを纏めていてくれたジン兄がいないという事が、こんなにも僕たちを不安定にさせるなんて思いもよらなかった。

ジン兄がいたからこそ風間ファミリーがあった。それは紛れもなく今、ここにいるみんなが感じている事だと思う。

いつも楽しく笑って、気が合って、喧嘩なんかする事ないと思っていたキャップと一子ちゃんが言い争っていて、小さな言い合いはあっても、いつも仲良くて、１番の親友同士のはずの岳人くんが卓也くんと掴み合っていて、澄ました顔でみんなを眺めていて、弱さを見せない京ちゃんが涙を見せていて、こんな時いつも率先して場を宥める大和くんが、何も言わずこの光景を見ている。

どうすればいいんだろう。
どうすればみんないつものように戻るんだろう。

情けないかもしれないが僕は何も言えないでいた。
たぶん僕自身が年下という事に甘えていたんだと思う。

いつも何かあると僕は１歩下がって見ていた。みんな僕が年下とい

う事は気にしていなかったかもしれないけど、どこかで僕はそれに甘えていたんだ。

だから僕は今何も言えない。言う権利がない。違うこれも既に甘えだ。

甘えたくないなら言え。対等でいたいなら言え。自分の思いを吐き出せ。

嫌われるかもしれない。生意気と言われるかもしれない。
でもここで言わなければ僕はこの仲間の中にいる資格はない。

さあ！　言うんだ！

「みんないい加減してよ！！」

ありったけの力を込めて叫んだ。
いきなり僕が声をあげた事で数瞬の空白が部屋を包んだ。
言い争っていたキャップと一子ちゃんも、掴み合っていた岳人くんと卓也くんも、涙を浮かべていた京ちゃんも、そしてただ黙っていた大和くんも僕に一斉に視線を向けた。

顔を上げみんなを見回す。いや、睨みつける。

「言い争っている事自体が時間の無駄だって分かってるでしょ！？」

「テメーは黙ってろ！　タカ！　年下の出る幕じゃねー！！」

声を荒げた僕に真っ先に反論してきたのは岳人くんだった。
いつもだったらその言葉に言い返さない。言い返したって無駄だっ

たから。
でも今回は違う。全力で言い返させてもらう。

「年下とかそんなの関係ない!!　これは僕たち風間ファミリー全員に関係している事なんだよ!?　黙ってろって言われて『はいそうですか』って訳にはいかないんだよ!!」

僕が言い返したのが本当に意外だったんだろう。岳人くんもみんなも呆然と僕を見ていた。
ううん、全員じゃない。大和くんだけは何故か笑顔を浮かべていた。
それでも僕の口は止まらなかった。

「みんな自分たちが今何をしているのか分かってるの!?　苛立ちをぶつけ合ってそれにすぐに反応して!!　相手の嫌なところしか見ないで!!　なんでここに集まったのかすら忘れて!!　そんなんじゃあジン兄に笑われるだけだよ!!」

言いたい事を言い切り肩で息をする僕。
まだ呆然と僕を見ているみんな。
喧騒に包まれていた部屋が一変して静寂に包まれた。

パンッ

その静寂を破るように手を叩く大きな音が響いた。
突然の音にビクリと体を震わせた僕は音のした方を見る。
視線の先には顔を伏せ手を叩き終わり両掌を合わせた大和くんの姿。
みんないきなりの音に驚いたのだろう、僕と同じように大和くんを呆然と見ていた。

自分に集中する視線に合わせていた手を離し顔を上げると、大和く

んはぐるりと見回し僕たちの顔を順次眺める。
そして何かに納得したように頷いた。

「よし。みんな言いたい事を言い終えたな？」

何故か笑顔を浮かべ満足そうに頷く大和くん。すると今度は窓際を指差すと僕たちに向かって言い放った。

「全員そこに並べ」

有無を言わせない命令口調に、呆然となっていた僕たちだったが、1番最初に我に返った岳人くんが猛然と抗議の声をあげた。

「ちょ！　なんでそんなことしなきゃ――」

「いいから並べ！　つべこべ言うな！」

岳人くんの言葉を遮り、大和くんは睨みつけて命令口調で再度叫んだ。
思いもよらない大和くんの言葉に、最初に反応したのは京ちゃんと一子ちゃん。大和くんの隣にいた2人は、恐る恐るといった感じで歩みを進め窓際に立った。
それを見ていた僕も2人に倣い窓際に立つと、ちょっとバツが悪そうな表情の卓也くんキャップと続き、最後にやや不満ながらも岳人くんも窓際に立って並んだ。

腕を組み言われた通りに並んだ僕たちに順に視線を送る大和くん。
ちなみに並び順は大和くんから見て右側からキャップ・岳人くん・卓也くん・京ちゃん・一子ちゃん・僕の順番だ。

一通り僕たちを見た大和くんはキャップの前に立つと、思いよらない行動に出た。

「あだ！」
「いって！」
「いた！」
「あう！」
「きゃん！」
「痛い！」

いきなり僕たちの頭を順に握り拳で殴りだした。
余り痛みはなかったが、思ってもなかった事に誰も反応できず素直に殴られてしまった。
大和くんは以外と痛かったのか、殴った方の右手を振りながら殴られた頭をさえる僕たちに背を向け、僕たちを全員見渡せる位置になると、きびすを返し振り向いた。

「さて、それじゃあ俺もみんなに言いたい事を順に言おうかな？」

キャップと岳人くんは殴られた事に文句を言いたがっていたが、そう言葉を発した大和くんの表情を見て出かけていた言葉を飲み込んだ。
そして大和くんはキャップを指さした。

「まずはキャップ！　俺が遅れるのは当たり前だ。キャップに連絡して召集命令を受けてから他に連絡したんだ。すぐ家を出たキャップとは違うんだ」

正論を突かれてバツ悪く顔を逸らせるキャップ。

「次にガクト！　俺がワン子と京と一緒に来たのは1番最初に姉さんに連絡したからだ。同じ川神院にいた2人が連絡の後、俺の家に来たから一緒にここに来たんだ」

反論を許さない勢に岳人くんは顔を歪めた。

「次にモロ！　今回の言い合いの最大の原因はお前だ。突っかかってどうする。苛立つのは分からんでもないが時と状況を考えろ」

原因だっていう自覚があるんだろう。卓也くんは小さく『ゴメン』と呟いた。

「次に京！　モロに言われた事図星だったろ。俺を頼ってくれるのは嬉しいけど、自分のやる事は放棄するな。そのうち自分が駄目になるぞ」

京ちゃんは素直に頷いた。

「次にワン子！　雰囲気に流されただろお前。冷静に考えればあの状況で叫ぶ必要はなかった。もう少し周りと自分を見ろ」

一子ちゃんはしゅんとなって小さく『分かりました』と言う。

「最後のヒロ！」

順番にみんなに向けられていた指先が僕に向けられた。

「言いたい事があったならもっと早く言え。自分が年下だからって甘えるな。同等な仲間なんだから遠慮なんかするな」

考え躊躇っていた事を的確に指摘されてしまい、全く反論が出来なかった僕は頷くことしか出来なかった。

一通り僕たちに意見を言い終えた大和くんは、大きな溜息を吐くと定位置のソファーに大きな音を立て座った。そして僕たちに座っていいとジェスチャーしたから、それに従い僕たちはそれぞれの定位置に座る。

「それで、俺になにか言いたい事はあるか？」

静かに問い掛ける大和くんに、僕たちはそれぞれの顔を確認するように目配りをする。それを見てみんな同じ意見だと感じ、キャップが代表して問い掛けた。

「大和はなんでそんなに冷静なんだよ。ジン兄が死んだかもしれないんだぞ？」

さっきまでの勢いが殺がれたのか、キャップの声は静かだった。言葉を掛けられた大和くんは、また大きな溜息を吐くと目を閉じ背もたれに体を預け、天井を仰ぎ見る。

「冷静なんかじゃなかったさ……最初はな。実際はみんなの苛立つ姿を見てどうでもよくなってた。全部投げ出して帰りたくなってた。でも、それが出来なくなった」

「なんで？」

僕は思わず声が出た。

だってどうしてそこまで思っていて冷静になれたのか不思議だったからだ。

「兄弟ならどうするかって考えてしまったんだ」

大和くんは笑顔を浮かべていた。
呆れと自嘲。けれど少しだけ誇りの混ざった小さな笑顔だった。

「そしたらすぐに答えが出た。兄弟なら簡単に治めてしまう。そう考えたらやるしかなかった」

天井を見上げたまま右手を伸ばす大和くん。それはまるで届かないと分かっているのに、それでも懸命に手を伸ばして何かを掴もうとする姿に見えた。

「俺にとって兄弟は憧れだ。目標だ。いつか追い付きたい存在だ。遠いその背中に追い付くために、俺は自分は今この場で冷静にならなきゃと思ったんだよ」

言葉の最後で掴むかのように手を握った大和くんは、その手を下ろし僕たちをぐるりと見渡した後、両肩を竦めておどけるように締めくくった。

「まあ、結局は兄弟のまねごとだよ。上手くいって何よりだ」

「確かにまねごとだね。大和だったら普通、殴らないもん」

「殴った手の方が痛そうだったよね」

「鍛えてないからそうなるのよ」

「じゃあなにか？　俺様たち殴られ損なわけ？」

「そのお陰でみんな冷静になれから殴られ損じゃないと思うよ」

「なんだよ。今度はジン兄にかぶれたのか、大和は？」

最後の大和くんのおどけたセリフに全員が思い思いの反応をする。

でもみんな笑っている。

これだ。この雰囲気。

この感じこそ僕たち風間ファミリーのいつもの雰囲気だ。

ひとしきりみんなで笑い合った後、少しだけ穏やかだった雰囲気が引き締まっていくのをみんな感じていた。ジン兄の情報を聞く体制をみんなが自然と取り始めた。

「で？　ジン兄の事、何か分かったのか大和？」

雰囲気を察してキャップが代表して大和くんに問い掛けた。

今日この秘密基地に集まった理由。キャップの召集に応えてみんながここに集まった理由。それが大和くんが得たジン兄の情報を聞く事。

キャップの声に全員が大和くんに視線を向ける。

「まず先に言っておく事がある」

そう言った大和くんはキャップの方に視線向けた。

「ジン兄は行方不明であって生死不明じゃない。って言うか、生きてる可能性の方が断然高いからな。死んだかもしれないなんて言う

なキャップ」

「「「「「え？」」」」」

大和くんの言葉に全員の驚きの声が重なる。
そんな僕たちに大和くんは呆れた表情を見せた。特に僕と一子ちゃんと京ちゃんを見て。

「あのさ、ヒロとワン子と京はニュースを見たんだろ？　アナウンサーも言ってただろ。『行方不明』だって」

ニュースの映像を思い返してみる。
たくさんの報道陣と燃え盛る白い建物。消火活動を続ける消防士と消防車。規制をする警察官。その映像の後にアナウンサーが言っていた言葉。

『行方不明者の身元は持っていた荷物から判明しました。名前は――』

「「あ！」」

僕と京ちゃんの声が重なる。恐らく同じ事を思い出したのだろう。
そう。ひと言も生死不明なんて言っていない。ニュースで流れた情報は行方不明だった。

「ヒロと京は思い出したか。そう、ニュースでは『行方不明』と言っただけで誰も『生死不明』なんて言ってない。それなのに死んだみたいに考えるのは兄弟に失礼だ」

キャップと岳人くんと卓也くんを見て言う大和くんに、視線を向け

られた3人は苦笑いを浮かべて顔を逸らした。だけど大和くんは特に何も言わず言葉続ける。

「それにさっきも言ったけど、生きている可能性の方が断然高い」

「でもそれってどうして言い切れるの？」

一子ちゃんの問いに再び全員の視線が大和くん集まる。

「それが今回の事件の詳細に繋がるんだよ」

そう前置きをして大和くんは事件の詳細を話し始めた。

事件は爆破テロ。

アメリカのとある大物政治家が慈善活動に、ある病院を慰問する事になったのが全ての始まり。

その情報をどこから入手した反政府組織の人間が、その政治家を狙って爆弾テロを仕掛ける計画を立てたらしい。

訪問の時間に合わせて病院に設置した数個の爆弾を起爆装置で爆発させるはずだったが、ちょうどその病院の側を通りかかった日本人の少年が、怪しい雰囲気の男を見つけて話しかけところ急に襲いかかってきたので咄嗟に抑え込んだ。

「その怪しい男がテロの犯人で、抑え込んだという日本人の少年が兄弟だ」

そこまでの大和くんの話を聞いて僕たちは何も答えを返せなかった。

たぶんみんな全く同じ事を思ったはずだ。

「なんだろう。ジン兄はどこに行ってもジン兄だね」

僕の思わずもれた言葉にやっぱりみんな同じ思いだったんだろう。

みんな小さく笑って頷いていた。

大和くんの話はまだ続く。

その男を取り押さえた事で、日本人の少年は男が持っていた起爆装置に気付き周囲の人に急いで警察を呼ぶようにお願いした。

駆けつけた警察官が、男が手配されていた反政府組織の人間だという事に気付き、すぐ近くの病院に政治家が慰問に来る事も知っていたため、男が爆弾テロを仕掛けようとしていた事を見抜いた。

その警察官は応援を呼び、政治家の病院の慰問は中止、警察は病院の中にいた人――医者から入院患者に至るまで全員を避難させた後で爆弾の捜索を始めた。男は爆弾テロの計画は暴露したものの、爆弾の設置場所までは供述しなかったためらしい。

事件が最悪化したのはその少し後。

なかなか見つからない爆弾を探す事に人員を割いたせいか、一瞬の隙を突かれて犯人が警察の拘束を脱して、近くの草むらに隠してあったもう1つの起爆装置を押して爆弾を爆発させた。

轟音とともに病院が爆破されるが、爆弾を捜索していた警察官はその時、全員一時的に病院の外に出ていて被害はなかった。

だが1人の女性が子供がまだ病院から出てきてないと叫んだ瞬間に事態は急転した。

燃え盛る病院の中に子供が1人取り残されている事が判明し騒然と

なる中、真っ先に動いたのが犯人を取り押さえた日本人の少年。
持っていた荷物を文字通り投げ捨てると、躊躇うことなく炎が吹き荒れる病院の中に駆け込んでいった。
誰もが呆然とそれを見送ってしまったが、次の瞬間にさらに周囲は騒然となり、警察も何人かは病院の中に入ろうとしたものの、入口や1階の窓は既に炎に塞がれて中に入る事が出来なかった。
集まった人たちが騒然と見つめる中、薬品かあるいはガスに引火したのだろう、ひと際大きな爆発が起こった。

それを見た人たちは子供も中に入った少年も、もう助からないだろうと思った。

だが消防車が到着し消火活動を行っている最中、1人の消防士が病院の裏手の川の土手に1人の子供が倒れているのを発見した。
母親の言葉でその子供が病院内に取り残された子供だった事が判明。
そして警察と消防がその子供に助けに入った少年の事を聞くと、少年は病院の2階で子供を見つけたが、その直後に大きな爆発に見舞われ咄嗟に近くの窓を突き破り外に飛び出したものの、下が川だと気付き抱き上げていた子供を土手へと放り投げて少年は川に落ちた、との事だった。

「結果、子供には多少の擦り傷があったが命に別条なし。その子供を助けた兄弟だけが今回の事件のただ1人の被害者だ」

言い終えて小さく息を吐いた大和くんに、卓也くんは少しだけ訝しそうに言葉を掛ける。

「その情報って本当なの？」

「たぶん。現地に住んでる父さんの知り合いの新聞記者からの情報だ。多少の誤差はあると思うけど大まか内容は間違いないと思う」

言い切った大和くんに卓也くんは小さく頷く。

僕たちもそれを疑うつもりはない。というより僕たちにはその情報の真偽を確認する術なんて持っていない。信じるしかないのが事実だ。

そして次に疑問を口にしたのは京ちゃん。

「でも川に落ちたのは間違いないんでしょ？　なんですぐに発見できないの？」

「それがそう簡単にはいかないらしい。前日まで降っていた雨のせいで川の水嵩が増し、流れも速くなっていて捜索が困難らしいんだ」

「なるほどな。だから今のところ行方不明ってわけか……」

大和くんの言葉を引き継ぐ形で、岳人くんは今のジン兄の状況を言葉にした。

だけど静寂に包まれそうになった時、大和くんが再度おどけたように言葉を発した。

「俺が生きてる可能性の方が断然高いって言った理由はそれ。兄弟が、あの暁神が、ちょっと水嵩が増して流れが速くなった程度の川に落ちて死ぬと思うか？」

一瞬の静寂。すぐに沸き起こったのは笑い声だった。

ジン兄には失礼なことかもしれないけれど、大和くんの言う通りなのかもしれない。

僕たちにとってジン兄はある意味で超人のような存在なんだ。本当に川に落ちたぐらいで死ぬなんて思えなくなってきた。

みんなで笑い合った後、大和くんは残った笑いを止めるように手を上げると、キャップに視線を向けた。

「兄弟は生きている。みんな同じ気持ちだと思うけど、助かっていても何か起きるかもしれないし、帰って来るのに時間がかかるかもしれない。しかもモロが言ったように俺たちが出来る事なんて何もない。こんな状況で俺たちのする事はなんだキャップ？」

みんなの視線がキャップに注がれる。集中する視線の中、キャップは腕を組んで静かに目を閉じていた。そして何か決意したかのように両手で膝を叩くと目を開けた。

「ジン兄は生きてる。なら俺たちのする事なんて１つだけだろ！」

立ち上がって僕たちを見回したキャップは、握り拳を作った右腕を前に突き出して宣言するように言い放った。

「俺たちのする事はただ１つ！！　何が起ころうとも！！　どれだけの時間がかかっても！！　ジン兄が俺たちの風間ファミリーのもとに帰ってくるのを信じて待ち続ける！！」

宣言に応えるように僕たちも立ち上がり、キャップと同じように握り拳作った右手を前に突き出す。

そんなみんなの行動にキャップは口元に笑みを浮かべ、一層声を大きくした。

「いいかみんな！！　それがリーダーの俺から風間ファミリーの全

員に下す命令だ！！　誰であろうともこの命令は絶対だ！！　いいな！！」

「「「「「「おうっ！！」」」」」」

第３５話　彷徨いの夜明け、揺るがないモノ（後書き）

あとがき～！

第３５話終了。

とりあえず百代以外のファミリーは決着。

大和、原作主人公の面目躍如かな？

さて今回のお話ですが、神の行方不明の理由……

皆さんどう思いましたか？

矛盾してる所もあると思いますが、まあこういう理由にしました。

ところで次投稿なのですが……またしても行き詰まり。

毎日投稿の危機に瀕しております。

なんとかできるように……頑張ります。

第３６話　彷徨いの夜明け、出口のない想い（前書き）

第３６話投稿。

第３６話　彷徨いの夜明け、出口のない想い

――２００６年　８月３１日　木曜日　ＰＭ３：００――

それは俺たちにとって意外な事だった。

俺たちが秘密基地で、仲間全員で兄弟を待ち続けると決めてから５日後の２５日に、姉さんは鉄心さんと共にアメリカから帰国した。

結局、鉄心さんも姉さんも俺が父さんから教えてもらった情報とそんなに大差のない情報しか得られず、滞在中に兄弟を見つける事も出来なかった。

帰国した時の姉さんの姿は見れたものじゃなかった。

兄弟が旅行に持って行ったバッグを抱きしめるように抱え、青くし表情のない顔を俯かせて姉さんは、まさに失望の言葉通りのままの姿で川神院に帰って来た。

その姿に、俺たち風間ファミリーのみんなが驚いたのは無理はないだろう。

俺たちにとって『川神百代』は絶大な存在だった。

兄弟、『暁神』が俺たちを繋ぎ支えてくれる存在だとしたら、姉さん、『川神百代』は圧倒的力で君臨する存在だった。

俺たちはひょっとして、絆の象徴と力の象徴を失いかけているのかもしれない。そんな事を唐突に思った。

そして姉さんが閉じ籠った。

姉さんは川神院に戻って来てから、１日の殆どを部屋で過ごすようになった。
自分の部屋じゃなくて兄弟の部屋に閉じ籠ってしまったのだ。

最初は俺たちも、姉さんの気のすむまでそっとして置こうと思っていたが、それが3日、４日と続くとさすがに心配になって来た。
気持ちの整理がつかないだろうと思って何も言わないでいたが、まさか姉さんがあそこまで酷い状況になるとは誰も思ってもいなかった。

それは俺たち風間ファミリーが初めて見た『川神百代』の弱さだった。

それほど姉さんにとって、兄弟の存在とその絆は変える事の出来ない大切なものだったという事なのだろう。

閉じ籠っているとは言っても一応食事は取っているし、人に気付かれないようにしてトイレや風呂にもきちんと入ってるらしいので体調面は大丈夫だと聞いているが、それでも衝撃的な出来事に俺たちはどう姉さんに対応すればいいか分からないでいた。

京はもうすぐ新学期が始まるから父親と住む静岡に帰っているが、最後まで学校を休んででも川神院に残ると言い張った。
なんとか京のお父さんにも協力してもらい説得したが、それでも完全に納得はしなかったので、逐一連絡をする約束をして帰らせた。

そして今日、８月３１日。

閉じ籠りが１週間も続き、根気よく毎日話し掛けていたワン子が、ついに俺たちに泣きついた。それに応えて俺とヒロが今、川神院の

兄弟の部屋の前に立っていた。

ガクトとモロは自分たちじゃあ力になれないと最初から辞退し、キャップは自分には出来ない事だからと、俺とヒロに全部任せてきた。俺もヒロも別に3人を無責任とは思わない。出来る人間が出来る事をすればいい。ただそれだけの事なのだ。

だが今日はいつもより酷い状況らしかった。

「朝から何も食べてない？」

ワン子の話に俺は眉をひそめた。

ずっと閉じ籠っている姉さんだが、食事はきちんと取っていると聞いていた。それが満足な食事量かと言われれば全くそんな事はないが、少なくとも食べてはいるらしい。

それなのに今日は食事を一切取っていないとの事。

「8月31日……今日、モモ先輩の誕生日だね」

理由を考えていた俺の横でヒロが呟くように言った。それで合点がいった。

俺は兄弟の部屋の隣、姉さんの部屋に入ると中を見渡し目的のものを探す。

急に俺が姉さんの部屋に入った事に驚いたワン子だったが、探し物が見つからなかった俺はすぐに部屋から出る。

「何を探してたの？」

「携帯」

ワン子の質問に簡潔に答える。
俺が探していたのは姉さんの携帯。正確には姉さんの携帯のストラップについているブローチだ。

以前姉さんが言っていた事を思い出したのだ。
姉さんの携帯のストラップについている四つ葉のクローバーの小さなブローチは、姉さんが初めて兄弟から貰った誕生日プレゼント。
そして今日が姉さんの誕生日。

「縋ってるんだね……」

俺と同じ答えにたどり着いたんだろう。ヒロが誰に言うでもなく呟く。
今の姉さんにとって、兄弟と繋がりのあるものが何よりも大切なのだろう。だから部屋に閉じ籠り、貰ったプレゼントを手元に置こうとしている。

ヒロの言った通り縋っているんだ。

少しでも兄弟を身近で感じられるように。
少しでも兄弟の思い出を忘れないように。

でも……それは違うんじゃないだろうか。

こんなの俺たちの知っている『川神百代』じゃない。

俺たちの知っている『川神百代』は、尊大で、傲慢で、我儘で、いつも自信満々で、でも自分の言葉には責任を持って、いつも俺たち

の事を思っていてくれて、何があっても俺たちを守ってくれる人だ。
こんな風に耳を塞いで目を閉じて、自分の周りを全て拒絶するような人じゃない。
それだけ兄弟が大事だったと言われればそうかもしれない。でも姉さんとの繋がりは兄弟だけじゃない。俺たち風間ファミリーだって確かな姉さんとの繋がりのはずだ。
それを否定されたような気がした。
それだけは許せなかった。それだけは認めたくなかった。
それだけじゃない。俺はあんな『川神百代』を認めたくなかった。
だから俺は目の前の部屋の中にいる姉さんに向かって言う。
「いつまでそうしてるつもりだ、姉さん」
答えが返ってこないのは初めから分かってたから期待はしていない。
聞いてくれるだけで良かった。
「いつまでそうしているかって聞いてるんだ。そんな風に閉じ籠ってたって何にもならない事ぐらい姉さんなら分かるはずだ」
淡々と言葉を続ける。
ともすれば姉さんには薄情に聞こえているかもしれない。いや、たぶん俺を薄情だと思っているだろう。
でも俺たちはもう乗り越えた。みんなと一緒にいた事で乗り越える事が出来た。
もし姉さんがあの時、俺たちと一緒に秘密基地に来ていれば、こん

な風になる事はなかったと思うが、過ぎた事を気にしていても仕方がない。

兄弟がいない今、姉さんを立ち直らせるのは俺たちの役目なのだから。

この貸しは大きいぞ兄弟。帰ってきたらしっかりと返して貰うからな。

「いい加減出てこいよ姉さん。そこに籠っても兄弟は帰ってこない」

「帰ってくる!!」

初めて声が返って来た。

抑えられない感情まま吐き出された声だった。

「約束したんだ!!　帰ってくるって!!　私の誕生日までには帰ってくるって!!　一緒に誕生日を祝うんだって約束したんだ!!」

懇願。願望。そんな感情で擦り切れたような声だった。心の奥底からの叫び声だった。

こっちの身すら切り裂きそうな声色に、隣にいたワン子が俺の服の袖口を掴んだ。姉さんの悲壮な雰囲気に呑み込まれかけたんだろう。

「私はジンが帰ってくるって信じてるんだ!!」

「それは信じてるんじゃないよ」

姉さんの言葉をヒロは即座に否定した。

ビックリしたというのが正直な思いだった。

今回、姉さんをこの部屋からどんな手を使っても引きずり出すのは俺の役目だと思っていた。そしてさっきヒロが言った言葉は俺が言おうとした言葉そのものだ。

思わずヒロの方に視線を向けると、俺の言いたい事、しようとしている事を理解しているのか、目線を合わせて『分かっている』という風に小さく頷いた。

この行動に対しても珍しいと思った。

ヒロはいつも後ろから眺めている事が多かった。別に消極的というわけじゃない。だけど唯一の年下という事があったかもしれないが、基本物静かなヒロは京やモロと一緒に率先して行動に出る方じゃなかった。

これもこの間の秘密基地での事が関係しているんだろう。

俺はあの時、ヒロに年下でも仲間として対等なんだから遠慮するなと言った。それを実行しようといているんだろう。

ならここはヒロに任せてみよう。俺には出来ないやり方があるかもしれない。

了解したように頷き返した俺は、隣にいたワン子を伴って1歩後ろに下がる。不思議そうに俺を見上げて来たので軽く頭を叩いた。

それに何かを感じたのか特に文句を言う事なく大人しく従った。

「モモ先輩。今の先輩はジン兄が帰ってくるのを信じてるんじゃない」

もう1度同じことを言ったヒロに姉さんの反応はない。それでも構わずヒロは事続ける。

「僕たちはみんなジン兄が帰ってくるのを待つ事に決めた。ちゃんと僕たちのもとに帰ってきてくれると信じている。でも今のモモ先輩は違う。先輩が1番ジン兄の事を信じていない」

「……なんだと？」

姉さんの言葉が部屋から低く響いてきた。
さっきまでの悲壮に叫ぶような声とは違う、低く怒りを押さえたような声だ。
だがヒロはその声に怯む事はなかった。

「聞こえなかったらもう1度言うよ。ジン兄の事を1番信じていないのはモモ先輩だ」

スパン

ヒロの言葉に答えるように兄弟の部屋の襖が勢いよく開いた。
誰が開けたかなんて考えるまでもない。そこには姉さんの姿があった。
少しやつれ、髪もいつものつやがなく目の下に隈も出来ていたが、纏っている雰囲気はとてもその恰好からは想像できないほど殺伐としたものだった。

それほど許せない言葉だったのだろう。

姉さんにとって兄弟を信じていないと否定される事は、例え言った相手が俺たちファミリーの仲間であろうが許せるものじゃないはず

だ。

でもだからこそヒロは言ったし、俺も言うつもりだった。

姉さんからの雰囲気に当てられ、俺は思わず唾を飲み込み隣にいたワン子は俺の服にしがみつき小さく体を震わせていた。

だがヒロは何でもないように佇んでいた。

「もう1度言ってみろタカ」

「何度でも言うよ。ジン兄の事を1番信じていないのはモモ先輩だ」

「言葉は選べ。お前らしくないなタカ」

「モモ先輩こそらしくないよ。そんな事やってる場合じゃないでしょ」

姉さんの表情が段々と険しくなっていく。

ヒロの言葉も段々と剣呑になっていく。

ヒロがやっている事は俺もやろうと思っていた事だ。それは姉さんを説得するのではなく怒らせて鬱屈した思いを発散させる。そうする事で姉さんをいつもの姿に戻させる。

それが俺が考え実行しようとしていた事。だからヒロを連れてきた。

身勝手かも知れないが、姉さんの鬱屈を晴らす相手をヒロにしてほしかったのだ。

だがそれは少し考えが甘かったとしか言いようがない。

怒らせるつもりだったが、まさか言葉だけで姉さんがここまで怒り

を露わにするとは思ってもいなかった。俺だったら今この時点で竦んで何も出来なくなっていただろう。

「今日はやけに反抗的だなタカ……力ずくで黙らせるぞ」

「いいよ。やってみる？」

ヒロの返答に姉さんが目を見開いた。恐らく思ってもいない答えだったのだろう。

そんな姉さんに、ヒロは少しだけ挑発的な笑みを見せた。

「僕と戦ってみたかったんでしょ？　モモ先輩。だったらやろうよ」

言い放ったヒロを見下ろすように見る姉さん。たぶんヒロの言葉の真意を掴もとしているのだろう。だが深く考える事を放棄したようにきびすを返した。

「ついてこい」

ひと言だけ言い残して姉さんは道場の方へ向って行く。

その後ろを少し離れて追い掛けるワン子。さらに後ろから追い掛けながら俺とヒロは姉さんに聞こえないように小さな声で会話をする。

「おいヒロ。何考えてるんだ？」

「大和くんが考えていた通りになったと思うんだけど……だから僕を連れて来たんでしょ？」

「それはそうだけど……大丈夫なのか？」

「たぶん勝てないけど……やるしかないよ」

小さく自嘲するかのように笑ったヒロに、何かを言おうとしたワン子を俺は手で制す。俺もなんて言葉を返せばいいか分からなかったからだ。

先に道場に足を踏み入れた姉さんに続いて俺たちも道場に入る。そこには、姉さんを説得する前に先に話をしておいた鉄心さんとルーさんが既に準備を終えて待っていた。

鉄心さんとルーさんには、姉さんの鬱屈した感情を戦わせる事で発散させる、という方法をあらかじめ説明しておいたのだ。

「やっと出てきおったか馬鹿孫が」

「ジジイ……そうか、大和か」

鉄心さんがいた事を訝しく思っていた姉さんは、すぐに答えに至ったのだろう。睨みつけるように俺を一瞥したがすぐに視線を外し道場の中央に向かって歩いて行った。

まるで九死に一生を得たような感じになった俺は、思わず胸を撫でおろした。そんな俺に苦笑いを浮かべながら近付いてきたルーさんの手には1本の刀が握られていた。

「一命を取り留めたって感じだネ、直江くん」

「命が幾つあっても足りないって感じだね大和くん」

俺にからかうような言葉を掛けながら、刀の受け渡しをするルーさんとそれを受け取るヒロ。他人事だからって言いたい事を言ってくれるよな2人とも……

「すまないネ、篁くん。嫌な役を君にさせてしまって……本来ならワタシたち大人がすべき役なのに……」

「大丈夫ですよ。最初から僕がやるつもりでしたし、１度はモモ先輩と戦ってみたいっていうのも本当ですから」

謝罪するルーさんに、ヒロは小さく笑顔を浮かべて答えた。

たぶん後半の言葉はヒロの本音なんだろう。浮かべた笑顔に悲観的な雰囲気はなく、例えるなら王者に戦いを挑む挑戦者のような、勝負を楽しむような雰囲気だった。

受け取った刀を、１度だけ確かめるように眼前で刃を鞘から半分ほど出したヒロは、刃を鞘に収め左手に持つと姉さんが待つ道場の中央へと歩みを進めた。

「最初からこうする事が決まっていたのか……随分安い挑発をしてくれたな」

真正面で足を止めたヒロに向かって、姉さんは腕を組み恐ろしいまでの低い声で話し掛けた。あれは間違いなく怒っている。しかも今まで俺たちが感じた事のないほどの怒りだ。

だがヒロはその怒りを一身に受けているのにもかかわらず怯えるそぶりすら見せていない。

「安い挑発のつもりはないよモモ先輩。何度でも言うけど、ジン兄の事を１番信じていないのはモモ先輩だ」

「私は言葉を選べと言ったぞ？　タカ？」

「ちゃんと選んでいるよ。選んでるからこその言葉だからね」

ドンッ

ヒロの言葉が終わった瞬間、道場の空気が弾け飛んだ。

錯覚じゃない。物理的に風圧が俺の体を圧し退けてきた。さらにまるで押し潰すかのような重苦しい空気に俺は思わず道場の床に膝をつき、息苦しくまでなって来た。

いきなり事に訳が分からない俺だったが、ワン子の様子を見ようとなんとか隣に視線を向けるとワン子も同じように床に座り込み、息苦しいのか胸を押さえていた。

「ワタシの後ろにいなさイ」

苦しむ俺たちに気付いたルーさんが庇うように前に出ると、不思議と息苦しいまでの圧迫感が和らいだ。

瞬間理解した。これが“気”というやつなのだろう。

恐らく姉さんから放たれた重圧すら感じさせる重苦しい気を、俺たちを庇うように前にいるルーさんが気を放つ事で和らげているのだろう。

視線を前に向けると、平然としている鉄心さんとヒロの姿があった。

鉄心さんは分からなくもないが……ヒロ、なんでお前は平気なんだよ？　それともこれが武術をやっている人間とそうでない人間の差なのか？　それともお前も非常識なのかヒロ？

「いいだろう。どうやら今日のお前は私をとことん怒らせたいらし

いな」

そう言った姉さんの姿が揺らいで見えた気がした。
目の錯覚と思いたかったがどうやら違うらしい。違うと判断できるのは、姉さんだけじゃなくヒロの姿も揺らいで見えたからだ。

「篁……下手をしたら止める事は出来んかも知れんぞ」

「構いません。とは言えませんけど……死なない程度にやります」

聞き逃してしまいそうなほど小さな鉄心さんとヒロの声が、何故か俺の耳には大きく響いて聞こえた。
同時にまたしても俺の考えが甘すぎた事を悟った。

姉さんの鬱屈を晴らすために戦う事。それ自体が非常に危険な事だったのだ。だから鉄心さんもルーさんの説明した時、顔をしかめたのだ。

「ヒロ！」

思わず出た声にヒロが俺を見た。
表情で俺の言いたい事が分かったのだろう、小さく笑って頷くだけでヒロは俺に向けていた視線をすぐに姉さんに戻した。
そんなヒロを見て俺は胸が締め付けられそうだった。

「君が自分を責める事じゃないよ。選んだのは彼だ」

俺の心情を悟ったのだろう。ルーさんが俯く俺に声を掛けてきた。
確かに選んだのはヒロ自身かもしれない。でもそれで納得出来る事じゃない。

「それでも提案したのは俺です」

「らなば、君は最後まで顔を上げて見ていなさイ」

そのルーさんの言葉に俺は俯いていた顔を上げる。俺を見ていたルーさんの表情はとても真剣なものだった。

「例え2人の動きが見えなくても見続けなさイ。それが君すべき事ダ」

「はい」

しっかりと頷いて俺は視線を前に向けた。

見続けろというなら何があろうとも見続けてやる。

だから姉さんの事を頼んだぞヒロ。

第３６話　彷徨いの夜明け、出口のない想い（後書き）

あとがき～！

第３６話終了。

なんとか投稿できました。

しかし全然進んでくれないよ……

書きたい事を書こうと思うと本当に展開が遅い。

結局、百代と緋鷺刀の勝負が書けませんでした。

一応の見通しは立てているけど……

本当にいつになったら原作に突入するんだろう。

できればあと２・３話で終わらせたいな……

第３７話　彷徨いの夜明け、信じるという事は（前書き）

第３７話投稿。

途中で話の目的を忘れました……

第37話　彷徨いの夜明け、信じるという事は

ジン。

私はどうすればいいんだ？

私はどうやってお前を待てばいい？

生きている。

そんな事は百も承知している。

それを疑う事なんかしない。

お前があんな事で死ぬわけがない。

でもこの心はどうすればいい？

信じているけど心が納得しないんだ。

信じているけど何をどうすればいいか分からないんだ。

不安なんだ。

不安で不安でどうしようもないんだ。

信じているけどお前が帰ってくるまで私の心が持つか分からないんだ。

いつもお前が隣にいてくれた。
いつもお前が私を支えてくれていた。
だから何も不安に思ったことなんかなかった。
そんなお前がいないから不安なんだ。
今の私にこの不安をなくす術がないんだ。
なあジン？
私はこの心の中に溢れかえっている不安をどうすればいいんだ？
教えてくれジン。

§　§　§

心が晴れず鬱屈が溜まっているのは自覚している。
想いの出口がなく、考えれば考えるほど彷徨い続けているのも分かっている。
自分の今の状態が何1ついい事に繋がらない事ぐらい自分が1番よく理解している。
でもだからこそ、今この状態を他人から指摘されるのがたまらなくムカつくのだ。

『閉じ籠ってたって何にもならない』

ああ分かっているよ。

『らしくない。そんな事してる場合じゃない』

そんな事は私が1番分かっているんだよ。

『1番信じてない』

それだけは許せない。

今の私の行動が何の解決にもなってないのは分かっている。ただただ蹲り立ち止まっていたってどうしようもないのも理解している。

だがその言葉だけは許せない。

お前たちに何が分かる?

信じていても不安の消えないこの心が分かるのか?

私の何を知って私の何を理解してその言葉を私に投げ掛ける?

今のその言葉は私を奮い立たせる言葉じゃない。

私を怒らせる言葉以外の何物でもない。

八つ当たりだという事も分かっている。理不尽だという事も分かっている。

鬱屈を晴らすための最も有効な事だというのも分かっている。
でもだからこそ手加減なんてものは出来ない。それでもいいならやってやる。

道場全体を圧し潰すかのような闘気を放ちながら、私は混乱し彷徨う思考の中で、目の前で平然と立っているタカの姿を見てそう決断する。

タカが私を怒らせようとしていたのは分かっていた。
その言葉に殆ど何も考えず彷徨う思考のまま反射的に言葉を返していた私は、深く考える事も出来ずに徐々に怒りが沸き上がって来ていた。
今の私にとってタカは許しがたかった。1番許せない言葉を何度も言ったこいつを許すことなんか出来るわけがなかった。

「いいだろう。どうやら今日のお前は私をとことん怒らせたいらしいな」

私はより強く闘気を放つ。呼応するようにタカの闘気も膨れ上がる。
そのタカとジジイが何やら小さな声で話しているが、耳にフィルターが掛っているかのように上手く聞き取る事が出来ない。
遠くで大和も何か叫んだようだがやはり聞き取れなかった。
その大和に向かって視線を向けたタカだったが、それも一瞬の事ですぐに私に戻した。

「もう1度だけ猶予をやる。さっきの言葉、訂正しろ」

「訂正する気はないよモモ先輩。僕は事実を言っているだけだからね」

ああ……本当にいい度胸だ。
なら本当に手加減なんかしてやらない。

「泣かせてやるよ……タカ！」

「出来るならね！」

ジジイが離れた瞬間に私とタカの気が爆発的に膨れ上がった。
タカは刀を使う。だが近付く暇なんか与えてやるつもりはないし、長々と続けるつもりもない。これは勝負じゃなくてただの喧嘩だ。
私は右手を突き出し込めていた気をタカに向かって解き放った。

【川神流・致死蛍（ちしぼたる）】。

いきなり間近での気弾にさすがのタカも反応できないだろう。タカはよけることなく気弾の直撃を受けると思ったが、その予測はいい意味で外れた。
抜刀術の要領でタカは私の放った気弾を刀で切り裂いた。恐らく抜き放つ刃に気を纏わせていたのだろう、紙を切るかのようにいとも簡単に斬って捨てたのだ。
抜き放ち空になった鞘を放り投げ、タカは刀を両手で持ち直し正眼に構えた。

「いきなり気弾はさすがに驚いたよモモ先輩。だけどそれで僕を倒せると思ったら大間違いだからね」

言葉が終わると同時に踏み込んできたタカ放った斬撃は、ほぼ同時に左右から襲い掛かって来た。私は驚く事な1歩後ろに下がり斬撃

をやり過ごす。
開いた間合いを詰めるようにタカも1歩踏み込み、今度は唐竹に渾身の斬撃を打ち降ろしてきた。それに対し私はかつてジンがタカと勝負した時のように、右手の甲を刀の鎬(しのぎ)に当てて斬撃の軌道を逸らす。

だがタカの剣撃はそこで止まらなかった。

逸らされた刀の軌道を手首を返しただけで修正すると、右片手に持ち横薙ぎを繰り出してきた。それを身を屈めやり過ごした私が、がら空きになったタカに左拳を繰り出そうとした瞬間、右から襲い掛かってくる剣気を感じ瞬時に攻撃を中断して後ろに飛び退き間合いを開ける。
さっきまで私がいたところを刃が通り過ぎて行った。

左片手に刀を持ったタカの姿を見て何が起こったのかを理解する。
虚撃(フェイント)だ。しかも本物の剣気まで乗せてきた。
右片手に刀を持ち直した瞬間に私がしゃがんでよけるのを察知したタカは、即座に刀から手を放し剣気だけを乗せた“右手刀”をフェイントにして、それをよけたところで左手で宙に浮いていた刀を握り直し横薙ぎを放ったのだ。

「ずいぶんと面白い技だなタカ」

「初見でよけられるとは思わなかったけどね」

表情を変えずに呟く私にタカは少しだけ顔を引きつらせながら答えた。

「名前を教えろ。覚えておいてやる」

「【霜月・灰椿（はいつばき）】」

「そうか」

タカの言葉に簡単に答えると、私は数歩で間合いを詰めタカの目の前に移動すると、反応する暇も与えず蹴り飛ばす。
ガードも出来ずに道場の壁まで吹っ飛ぶタカ。

これで決着がついただろう。

私は蹴り足を戻し、しばらくの間吹っ飛んだタカを見ていたが興味を失ったので背を向ける。そしてそのまま道場を去ろうと1歩踏み出した時だった。
背中に膨れ上がる気を感じ、踏み込まずにそのまま振り返る。
思った通りタカは立ち上がり、さらに刀を私に向けて突き出していた。

「まだ終わりじゃないよモモ先輩」

そのまま突き出した刀を引き戻し、刃を地面と水平に寝かせ左手を刃の上に添え腰を落とし重心を後ろかける。刺突で突っ込んでくるのが丸分かりな構えだ。
応えるように軽く拳を握り構える。
ずいぶん離れているがタカの呼気がすぼまっているのが聞こえてきた。弓を引き絞るかのようにさらに重心が後ろに掛っていくのが分かった。

―【水無月・水牡丹（みずぼたん）】―

呟くような小さな声が聞こえた瞬間、タカの姿が私の目の前まで来ていた。
突き出され刀をよけるため最小限の動きで頭を軽く左に傾ける。確かに速さはそれなりだが余りにも単調な攻撃に私は失望を隠せない。
突っ込んでくるタカの顔面を交差的に殴り飛ばすため、その軌道上に右手を突き出す。
私の拳がタカの顔面を捉えた時その姿が突然消え失せた。その直後に私の目の前に刀の切っ先が見えた。

「っ！？」

だが驚いてなどいられない。まずは迫る刀をよけるのが先だ。
私は上体反らしのように背を反らし、最短の回避で迫り来る突きをかわす。だが目の前を通る刀が水平から返り刃が私の方を向いた。
次に来る斬撃をよけるため体を無理やり捻り独楽のように回転しながら横に飛ぶ。
予想通り刺突から斬り下ろしに変化したタカの斬撃をかわし、右手を床に着きそのまま後方に飛んでバク転し床を滑りながら着地した。
振り下ろした刀を正眼に構え直すタカ。

またしても虚撃（フェイント）だったようだ。
しかも私に本物と思わせるほどの気で虚像を作っての時間差攻撃。
コレがタカの遣う本当の剣術か！

ほんの一瞬だけ、戦うことへの歓喜が沸き上がって来た。
だがそれも本当に一瞬の事。私の思考はすぐにタカを黙らせる事を考える。

虚実を織り交ぜる戦法なのか、ただ単にそういう技なだけなのか、判断はつかないが戦いにくい程のものじゃない。
翻弄してやればいいだけの事だ。虚実を織り交ぜられるのは私をよく見ているからだ。ならば私の方がタカの取った戦法を取ればいいだけの事。

即座に行動に移す。

今度は私から近付いて行く。
無造作に歩み寄るように足を進め、間合いが残りあと5歩にまで縮まった瞬間に床を強く蹴り一気に詰め寄る。
反応するように袈裟斬りを放つタカに対し爆発的に闘気を放出する。
恐らくタカにしてみれば、いきなり視界に幕を張られたような感覚を受けただろう。斬撃の軌道が少しだけズレるのを見た私は、その場に闘気の残滓を置きさらに1歩踏み込みタカの右横に身を滑らせる。
タカは咄嗟に反応し袈裟斬りの勢いを利用し、身体を回転させる事で横薙ぎを放ってくる。

だがソレこそ虚撃（フェイク）。

タカが切り裂いたのは虚像。
本物の私は動かずにただ身を沈ませただけ。
隙が出来たがら空きのタカの左脇腹めがけて、沈み込んだ体勢から浮き上がるように下から肘鉄を打ち上げた。
咄嗟に横に飛びダメージを和らげようとしたのだろうが遅い。飛んだことでの勢いもあるのだろうが、タカはまたしても壁に激突した。

今度は立ち上がれないだろう。

だが私の予想は再度裏切られた。

右手で強打された左脇腹を押さえながら、タカは左手1本で刀を構える。

その身体から放たれる闘気がいっこうに衰えていない事から、まだやる気をなくしていなのはすぐに分かった。

苛立ちが強くなっていく。

なんで立ち上がるかが分からない。

こんな事をしている意味が分からない。

今の私にジンを待つ事以外で煩わせないでほしい。

ゆっくりタカに近付いて行く。

私の行動にタカは脇腹に当てていた右手を放し、刀を両手で持ち直すと剣先を左に傾け水平に構えを取る。

もう私にはタカがどんな構えを取ろうが、どんな攻撃をして来ようが関係なかった。

ただタカを叩きのめす事以外考えていなかった。

―【如月・紅梅（べにうめ）】―

タカの刀の間合いまであと1歩まで踏み入った時、静かに呟いたタカは倒れ込むように身体を前に傾けた。

何をするか分からなかったが床を強く蹴った音を聞いた。

その直後、まるで地面を滑空するように私の間合いに踏み込んできたタカの姿が視界に映る。見た瞬間に嫌な予感が背を駆け上った私は、その予感に逆らうことなく従い小さく後ろに飛び退く。

私の足があった場所をタカが振り抜いた横薙ぎが通り過ぎて行った。

足元を狙った回転斬りか！？

―【文月・緑蓮（ろくはす）】―

呟きと共に放たれたのは、回転の勢いを利用した斜め下からの切り上げ。しかも踏み込んでいるため斬撃は確実に私に届く。それに対し私は下がらずに逆に踏み込んだ。

タカの間合いに肉薄するほど踏み込み、右手で振り上げてくる刀を持つ腕を掴み止める。

そして左拳を今度は右脇腹にぶつけようとした時、押さえているタカの腕が右腕だけだという事に気付いた。

気付いた時にはすでにタカの左拳が私の右脇腹に当てられていた。

―【師走・橙柊（とういいらぎ）】―

咄嗟に掴んでいた腕を放し横に飛んで回避を試みたが数秒遅かった。

震脚の衝撃がタカの左拳を通って全て私に突き刺さる。

なんとか気を脇腹に集中させダメージを軽減させたが、それも焼け石に水程度のものだった。

気を失うほどではなかったが、痛みに顔をしかめながらも私は宙で体勢を立て直して脚から床に着地する。

構え直すタカを見てますます苛立ちが強くなる。

邪魔をしないでほしかった。

私は今ジンを待つ事以外は何もしたくないんだ。

こんなくだらない喧嘩なんかしている場合じゃないんだ。

だから私を怒らせるな！！

「いい加減倒れろ！！」

何もかもを無視して身体能力任せの動きで、私は一瞬にしてタカの横に移動すると、反応すらしていないタカの横っ面に裏拳を叩きこんだ。

殺さない程度に手加減した攻撃にタカの身体はいとも簡単に吹っ飛んでいく。

だがそれでは終わらせない。ここで意識を絶っておく。

私はさらに床を蹴り、吹っ飛んでいくタカに追いつくと今度は鳩尾に裏拳を叩きこみ、道場の床にタカの体を背中から叩きつけた。

今度こそ終わりだ。

確認することなくきびすを返した私が道場から出ようと足を進めようとした、その時だった。

「まだやれるのか？　篁」

ジジイの声と同時に後ろで立ち上がる気配を感じた。

「いい加減にしろ！！」

私は苛立つ感情のまま叫んだ。

振り返ることなく背中を向けたままタカに向かって怒りをぶつける。

「何がしたいんだお前は！！　私に勝てない事ぐらい分かっている

だろ!!　いちいち私を煩わせる事をするな!!」

「モモ先輩が……ジン兄を信じていないからだよ……」

言うに事欠いて!?

「ふざけるな!!　お前たちに何が分かる!?　お前たちが私の何を理解しているっていうんだ!?　何も知らないのに分かったような事を言うな!!」

私はもう抑える事が出来なかった。

溢れだす殺気を抑える事なく、怒りに顔を歪めたまま振り向きタカを睨みつける。

「モモ先輩は……縋ってるだけだよ」

振り向き視界に入れたタカの顔は悲しみで満ちていた。

私は思わず怒りすら忘れてその顔に見入ってしまった。

あの顔は私を憐れんでの悲しみじゃない。

あの顔はまるで裏切られたかのような悲しみだった。

「ジン兄が生きている事を……モモ先輩が疑っているなんて……僕たちは誰もそんなこと思ってないよ……」

立っているのもやっとなんだろう。タカは持っていた刀を杖代わりにして辛うじて立っているような状態だった。

それでも私を見る眼には有無を言わせない力が込められていた。

「1番……モモ先輩が辛いんだって……それも分かってる……」

私はいったい何をやっているんだろう……

理不尽な八つ当たりだって分かっていたのに……

なんで止める事が出来なかったんだろうか……

「でも……それでも……モモ先輩が1番……信じていないよ」

そう言ったところで倒れこむタカ。

私は咄嗟に受け止めようと足を踏み出したが、いつの間にかタカの横に来ていた大和のワン子の姿にその足が止まる。

優しくタカを抱き止める2人の姿を見て、今の私にその権利がない事を知る。

確実に今、私とあの3人。いや私と私以外の仲間との間には越えられない境界線のようなものが存在している事を知った。

「モモ先輩は……不安に心が引っ張られてる……だからジン兄の部屋や持っていた物に……縋ろうとしている……」

図星だった。

今の私は心の不安をなくす事でいっぱいだった。

私の不安を取り除いてくれるのはジンだけだ。だからこそいつも身近に感じたかった。

「でも……モモ先輩の不安を取り除くのは……本当にジン兄だけなの？」

「えっ……？」

タカの言葉の意味が分からず呆然となる。
そんな私の反応に、タカだけじゃない、大和もワン子も悲しそうな顔をした。

私は今までずっと……最低な事をしていたんじゃないか？

そんな私の考えを肯定するように、タカの言葉が続く。

「その程度だったの？　僕たちと……モモ先輩の関係って……こんな時なのに頼ってもらえないほど……意味のないものだったの？
僕たちは……モモ先輩にとって……その程度だったの？」

そんな事ない。そう言いたかったのに、何故か声が出なかった。
でもそれは、私が心のどこかでそれを認めていたからじゃないだろうか？

私にとってジンが1番。それを否定するつもりもさせるつもりもない。

いつの間にか私にはそれにこだわり過ぎていたのかもしれない。それにこだわり過ぎるばかりに、私は他の絆をどこかないがしろにしていたのかもしれない。

「でも……仲間を頼らないって事は……ジン兄が言ってた……僕たち『風間ファミリーの絆』を……否定する事になるんじゃ……ないかな？」

タカはその言葉を最後に気を失った。

ずっと静かに私たちのやり取りを見守っていたルー師範代が、気を失ったタカを抱き上げて道場から出て行った。

静寂が道場を覆う。

大和もワン子もジジイも何も言わずに、ただじっと私を見ている。

「信じてないって……そういう事だったんだな……」

私は自嘲の呟きを止める事が出来なかった。

ずっと私は『ジンが生きている事』『ジンが帰ってくる事』を、信じていないんだと言われてるんだと思っていた。

だから許せなかった。私が1番信じているのにそれを否定されたのが許せなかった。

でも、許されない事をしていたのは私の方だった。

みんなは仲間を頼って、仲間と一緒に辛さを克服してジンを待つ事を決めたのに、私は仲間の事なんか最初から当てにしないで、ただジンを身近に感じるためだけに閉じ籠り、縋って待つ事を決めてしまった。

ジンは常に言っていた。

『風間ファミリーは絆が強いからこそ今、こうしてみんなでいられる』

私の取った決断は、ジンのこの言葉を否定するものだ。

それは同時にジンを信じていない何よりの証拠だ。

何でそれに気付かなかったんだろうか？
何でみんなとの絆に気付かなかったんだろうか？

知らず涙が溢れていた。

私は溢れ出る涙と嗚咽を止める事が出来なかった。

膝をつき両手で顔を覆い俯く私を、誰かが優しく抱きしめて、誰かが優しく頭を撫でてくれた。
気配で分かった。ワン子と大和だ。

「誰も姉さんの事を悪いとは言ってない。みんな姉さんの気持ちが分かっているつもりだ。それにヒロの事も気にしないで。あいつは自分があなる事を覚悟でやったんだ」

大和の言葉に私は小さく頷く。
たぶんタカもみんなも謝罪なんか求めていない。謝罪する事すらお門違いだ。

ただ、みんなは私に気付かせてくれただけだ。

例え今ここにジンがいなくても、私は1人じゃない事に気付かせてくれたんだ。

「お姉様。アタシたちと一緒にジン兄が帰ってくるのを待とうね」

ワン子の言葉に私は小さく頷く。

――ありがとう――

私はここにいる大和とワン子だけにじゃなく、風間ファミリーのみんなに聞こえるようにと祈りと、ありったけの感謝を込めて、ただそのひと言だけを声にした。

第３７話　彷徨いの夜明け、信じるという事は（後書き）

あとがき～！

第３７話終了。

さて今回のお話で百代も気持に決着をつけました。

なんで勝負をしたのかというツッコミはしないでください。

緋鷺刀の技名に関してもツッコミはノーサンキューでお願いします。

本文で語ったように百代の八つ当たりなんです今回は。

ぶっちゃけ書きたかったのは最後の２人の会話です。

話は変わりますがこのエピソードも次で終わり。

場合によっては２話になるかもしれませんが……

そういう訳で次回投稿もよろしくお願いします。

第３８話　彷徨いの夜明け、在る２つの出会い（前書き）

第３８話投稿。

毎日更新は今日までかな……

第３８話　彷徨いの夜明け、在る２つの出会い

ここはどこだろう……

ぼうっとする意識の中、揺れている事だけが分かった。

車で移動しているのだろうか？

背中に感じる一定の揺れと振動で今の状況を予測する。

何かを考えようと思うと頭が痛くなる。感じたままの事しか考えられない。

「気が付いたのか？」

横から声がした。

その声の方を向こうとしたが体が思うように動かないし、目を開ける事も億劫だった。

「無理に体を動かすんじゃねぇ。怪我は大したことないけど、頭を強く打ってるんだ。大事を取って動くな」

口調は荒いが声音からして女の人だ。

彼女は喋っているのは日本語。俺が日本人だからだろうか。

俺？　あれ……俺って……誰だっけ？

そう思ったところで、俺の意識は暗転した。

§　§　§

「記憶喪失だぁ！？」

ありのままを話したら彼女は顔を引きつらせた。

外見から見てやはり彼女は日本人だった。でも周りを見ればここが日本じゃない事ぐらい記憶をなくした俺でも分かった。

あれから数時間後、目を覚ました俺は自分の事を何も覚えていなかった。

名前を聞かれて答える事が出来なかった俺は、自分を記憶喪失と判断し、そう彼女に向かって正直に答えた。

「マジかよオイ……」

困惑したように彼女は額に手を当て、少しの間考え込んだ後、再び俺に問い掛けていた。

「記憶喪失ってどれ程だ？」

「どれ程って？」

「いろいろあるだろ。基本的な常識すら忘れているのか、それとも自分自信の事だけを忘れているのか」

そういう事か。

俺は彼女の言葉に頷くと、腕を組んで考え込んだ。
基本的な常識と言われても何を指すのかは分からないが、どうやらそこら辺は問題ないようだ。彼女の言葉も分かるし、日本語はすぐに思い浮かんだ。挨拶等の一般常識的な事も忘れていない。

「大丈夫です。どうやら本当に自分の事だけを忘れてるみたいです」

「器用な記憶喪失だな。オイ」

そもそも記憶喪失に器用も不器用もあるのだろうか？
その辺りを突っ込みたかったが、ややこしくなりそうだったので自重した。

「ところで……」

「あん？」

「俺って、発見された時どんな感じだったんですか？」

気になっていた事を聞いてみた。
記憶喪失で何も覚えていない俺にとって、荷物が何よりも１番の手がかりになるはずなのに、その荷物が何１つなかった。
おかげで名前も年齢も誕生日も分からない。
漠然と自分が日本人だというのは理解している。真っ先に出てきた言語が日本語だったのがその証拠だろう。

「ここから１０キロ先にある川のほとりに漂着していたんだよ。外傷はそうでもなかったが頭から血を流していてな。大事を取ってここに運んだってわけだ」

「荷物は？」

「あったらお前の名前なんて聞くか」

確かにその通りだ。

身元不審者の取り調べでまずやる事は荷物を調べる事だ。それがないから俺に直接名前を聞いてきたのだ。

「お前の取る選択肢は１つだけだ。すぐにでも大使館に駆け込め。そうすれば問題はすぐに解決だ」

確かにそうだ。

だけど何故かそれはしたくなかった。だからそれを素直に言う。

「今は大使館にはいきません」

「はぁ？」

俺の言葉の意味を理解出来なかったのだろう。彼女は間抜けな声を出した。

数秒間抜けな表情のまま口を開けていた彼女だったが、我に返ると額に手を当てて、とてつもなく大きな溜息を吐いた。

「何を言ってんだよこのガキが。大使館に行かないでどうする気だ」

「今は行かないと言ったんです」

「だからどうしてだ？」

「記憶を思い出してからにしたいんです。そうしないと、帰った時

に顔向けが出来ない気がするんですよ」

何でと問いかけられても答えられる自信はない。
だけど、何故かそう思ったのだ。彼女に『大使館に行け』と言われた途端に、今の俺では『あいつ』に会う資格なんていないと思ったのだ。

『あいつ』がいったい誰なのか分からないのにおかしなことだな。

何故か笑いが込み上がってきた俺は小さくその笑いをもらす。
俺のそんな笑みを見てどう思ったのかは分からないが、彼女は何を言っても無駄だという事は悟ったらしいく、もう1度だけ大きな溜息を吐いた。

そんな彼女に俺は言葉を掛ける。

「ところで、これから俺……どうなるんですか？」

「あたいが知るか」

俺の質問に彼女は吐き捨てるように言った。

そりゃそうだろう。

「Ｈｅｙ.　『Ｈｏｒｎｅｔ』（オイ、『女王蜂』）」

「Ｃｏｍｍａｎｄｅｒ？（隊長？）」

見捨てられたような言葉を貰い、俺がこれからの自分の身の振り方を考えていた時、部屋の中にがっしりした体格の厳つい中年の男性

が入って来て彼女に声を掛けた。
椅子から立ち上がり、一応といった感じでその男の人に敬礼をしが、彼女の目は『何しに来たんだ』と言っているようなものだった。
男の人の彼女の態度に何も言わなかった。

コマンダー？　司令官というよりは隊長といった感じの人だ。
呆然と見る俺を無視して2人の話は続く。

「Ｈｅ　ｓａｙｓ　ｔｈａｔ　Ｉ　ｄｏ？（そいつは何と言っているんだ？）」

「Ｔｈａｔ　ｉｓ　ｍｅｍｏｒｙ　ｌｏｓｓ．（記憶喪失だとさ）」

彼女たちが話している英語の意味をちゃんと理解出来るし、ここが日本ではない事も分かるという事は、知識の面においての喪失はないようだ。
やっぱり俺の記憶喪失はどうやら俺個人の情報のみのようだ。

「Ｉ　ｈａｖｅ　ｗｈａｔ　Ｉ　ｇｏｔｔａ　ｄｏ　ｔｈａｔ！？（何であたいがそんな事しなきゃならないんだ！？）」

「Ｊａｐａｎｅｓｅ　Ｄａｈｌｏｎｅｇａ　ｓａｍｅ？（同じ日本人だろ？）」

「Ｗｈａｔ？　Ｈｅｙ！　Ｗａｉｔ　ａ　ｍｉｎｕｔｅ！（は？　おい！　ちょっと待てよ！）」

どうやらいろいろ考えている内に俺の処遇が決まったらしい。
男の人が出て行った扉を彼女は思いっ切り蹴り飛ばしていた。そして俺の方を向く。

視線だけで人を殺せるなら俺は間違いなく殺されているだろう。それほどおっかない視線で俺を睨みつける彼女。

「本当に大使館に駆け込むつもりはねぇのか？」

「ないです。自分で思い出したんです」

さっき身の振り方について話した時の答えをもう1度彼女にしっかりと伝える。

普通に考えれば馬鹿な行動だと思うだろうが、何故か俺はそうしたくなかった。

本当に自分の力で自分の事を思い出したかったからだ。

「当分の面倒はあたいが見る事になった。いいか？　手を煩わせたらその場で殺すからな」

「分かりました。よろしくお願いします」

逆らわずに頷いておく。

今の俺にとってこの人に頼る以外は何も出来ない。もう少し状況を把握すれば何となるかもしれないが、そうなる前に殺されては意味がない。

こうして『俺』の生活が始まった。

§　§　§

同時に襲い掛かってくる左右の斬撃。
右からの斬撃に対しては左指の人差し指と中指、左からの斬撃に対しても同じように右手の人差し指と中指を突き出し、刃を指で挟んで打受け止める。

交差した腕を元に戻すように回転させた力を利用し、左手を放しその回転の勢いで彼女を投げ飛ばす。
なんとか足で地面に着地した彼女は、未だに挟まれたままの小太刀を無理して引き戻すさず、俺の顔面に向かって右脚で蹴りを放ってきた。

その蹴り脚を左手で叩き落とすと同時に再度彼女を投げ飛ばそうと、未だに小太刀を挟んでいた右手に力を入れ、彼女の身体ごと持ち上げるかのように腕を上げた。
さすがにまずいと思ったのだろう。彼女は俺の指にはさまれていた左手の小太刀を即座に放すと、腕を振り上げた事で出来た、がら空きの脇腹に向かって右逆手に持っていたもう1本の小太刀で斬り掛ってきた。

それに対して、俺は右手首を返して指で挟んでいた彼女のもう1本の小太刀を、彼女が放った斬撃の軌道上に持っていく。
甲高い音ともに、彼女の放った斬撃は皮肉にも自分のもう1本の小太刀の峰によって防がれた。

「ちぃっ！　器用なことするじゃねぇか！」

飛び下がりながら吐き捨てるように言い放った彼女に向かって、俺は持っていた小太刀を手首のスナップだけで投げ飛ばす。

俺に向かって駆け寄りながら器用に飛んできた小太刀を掴んだ彼女は、逆手に持っていた両の小太刀を準手に持ち直し、両腕を交差させ振り払い斬り掛ってきた。

俺は腰から護身用にと渡されたサバイバルナイフを抜くと、そのまま突き出しちょうど2本の小太刀が重なったところを的確に切っ先で押さえた。

「なっ!?」

思いもしなかった防御方法だったのだろう。驚きの声をあげた彼女の隙をついて放った右蹴りが綺麗に脇腹に決まり、彼女は数メートル吹っ飛んだ。
それに合わせるように俺も動き、空中で体勢を立て直し足から地面に着地した彼女の背後に回り込むと、立ち上がろうとした彼女の首筋に持っていたナイフを突き付ける。

一瞬の静寂の後、俺は彼女に問い掛ける。

「まだ続けますか?」

「あたいの負けだ」

武器を手放し両手を上げた彼女を確認した俺は、首筋に突き付けていたナイフを離し、もとの位置の腰のホルスターに戻したのだった。

「Ｈｅｙ.　『Ｄａｒｋｎｅｓｓ』.　Ａｌｓｏ　ｓｅｅｍｓ　ｔｏ　ｈａｖｅ　ｗｏｎ　『Ｈｏｒｎｅｔ』！（オイ、『黒髪』。また『女王蜂』に勝ったみたいだな！）」

「Ｉ　ｗａｓ　ｌｕｃｋｙ.（運がよかったんですよ）」

「Ｄｏｎ't　ｓａｙ.　Ｅａｃｈ　ｗａｓ　ｔｏ　ｓｕｌｋ　ｎｏ　ｏｖｅｒ　ｔｈｅｒｅ.（そう言うなよ。あっちで不機嫌になっていたぞ）」

その言葉に俺は苦笑を浮かべるしかなかった。

『俺』がこの部隊に拾われて、半年が過ぎていた。

俺を拾ってくれたのは特殊部隊の人たちだった。
それなのにフレンドリーな人たちが多く、身元不明で怪しすぎる俺を何の問題もなく受け入れてくれた。
特殊部隊としてはどうなんだろかと、首を傾げたくなる時は多々あるが、今ここを放りだされると野垂れ死にする可能性が高いので、そこら辺に関してのツッコミはしない。

俺の目の前にいる彼の口から出ら『女王蜂（ホーネット）』というのは、俺の面倒を見てくてれている彼女の事だ。
それもこの部隊の掟のようなもので、個人名を言い合わずに『あだ名（コード・ネーム）』でお互いを呼び合っている。
どうやらこの部隊の大半が傭兵らしく、余り名前を知られたくない人が多いから生まれた掟だと聞いた。

それに従って俺は『黒髪（ダークネス）』と呼ばれるようになった。

まあ俺の場合は記憶喪失で本名すら覚えていないから仕方ないが、髪が黒いから『黒髪（ダークネス）』って、ちょっと安直過ぎないか？

「Ｈｅｙ.　『Ｄａｒｋｎｅｓｓ』.（おい、『黒髪』）」

後ろから掛けられた声に振り向くと、そこにはこの部隊の隊長がいた。

「Ｃｏｍｍａｎｄｅｒ？　Ｄｏ　Ｉ　ｈａｖｅ　ｓｏｍｅｔｈｉｎｇ　ｆｏｒ　ｍｅ？（隊長？　何か用ですか？）」

「Ｄｏ　ｙｏｕ　ｔｒｙ　ｔｏ　ｐａｒｔｉｃｉｐａｔｅ　ｉｎ　ｔｈｅ　ｎｅｘｔ　ｍｉｓｓｉｏｎ？（次の任務にお前も参加してみるか？）」

は？　この人はいったい何を言っているんだ？

「Ｃｏｍｍａｎｄｅｒ!？　Ｗｈａｔ　ａｒｅ　ｙｏｕ　ｒｅａｌｌｙ　ｓａｙｉｎｇ!？（隊長!？　本気で言ってんのか!？）」

驚きの声をあげたのは俺とさっきまで話していた男だった。

そりゃあ驚くのも無理はない。お世話になっているとはいえ、俺は全くの部外者だ。本来この部隊にいる方がおかしい。

それなのに、そんな俺に次の任務に参加してみろ？

ふざけているとしか言いようがないよ。隊長さん。

「Ｉｆ　ｔｈｅｒｅ　ｉｓ　ｎｏ　ｐｌａｃｅ　ｔｏ　ｇｏ　ｆｏｒ　ａ　ｗｈｉｌｅ　ｗｉｌｌ　ｔｈｉｓ　ｗｏｒｋ　ｉｎ　ａ　ｕｎｉｔ.　Ｎｏ　ｐｒｏｂｌｅｍ　ｉｆ　ｙｏｕ　ａｒｅ　ｓｔｒｏｎｇ.（行く所がないならしばらくこの隊で働け。お前の強さなら問題ない）」

言いたいだけ言うと隊長さんは俺たちの前から去っていった。
反論する機会すら与えられず、俺はいつの間にかこの特殊部隊で働く事になったようだ。

オイ……それでいいのか？　特殊部隊？

呆然とする俺の方を誰かが同情をもって叩いたのだった。

こうして『俺』の仕事が決まった。

§　§　§

任務は要人警護とそれに伴う犯人の制圧だった。

任務自体は滞りなく完遂し、要人を狙っていた組織も一網打尽に取り押さえた。
俺の力なんか全くもって必要ないのに、今回の任務でどうして俺が参加させられたのかが分かった。

要人は日本の大財閥の総帥と御曹司。
そしてその財閥の御曹司は俺と同年代。

なるほどと納得した。

要は同じ日本人、同年代の同性として御曹司の気持ちを楽にさせる

のが狙いだったんだろう。と言ってもこの御曹司、気持ちを楽になんて全然関係なかった。
遠目に護衛をしていたが、周りをそれなりに強い執事たちに囲まれていたから俺の出番ははっきり言ってないと言ってもよかった。
実際、犯人グループが入って来た時も周りにいた人たちが守り切っていたし、俺がした事なんて遠目から殺気をぶつけて犯人の行動を牽制しただけだった。

そんな大財閥の御曹司が何故か俺の前に立っていた。

「貴様、日本人か？」

何とも尊大な態度の御曹司だ。いや御曹司だから尊大なのか？
どっちでもいいが、いったい何の用だろうか。

「ええ、一応日本人ですけ……ど？」

「一応とはどういう事だ」

何やら探りを入れられている。素直に答えるのがベストだろう。
俺は記憶喪失な事と自分の今の境遇を簡潔に話した。

「記憶喪失か……」

話を聞き終わった御曹司は、腕を組み何か考え込むでいたかと思うと、急に口端を吊り上げ自信満々の笑みを浮かべた。

「『黒髪（ダークネス）』とか言ったか、貴様、我のもとに来ぬか？」

「はい？」

「さっきも1人スカウトしたが、貴様も我のために仕えてみぬか？
我の力をもってすれば、貴様の事などすぐに調べ上げてくれよう。
我に仕えるという至高の喜びもある。悪い話ではないと思うがな」

つまりこういう事か。
俺の記憶、というより素性を調べる替わりに自分のもとで働かないか、そうすればお前も幸せに間違いない、と言っているのだ。

上から目線、物凄いなオイ。

「折角ですけどお断りします」

「何故だ？　貴様にとっていいことばかりではないか」

それは貴方の物差しで測った場合でしょうが。

「えっと……なんて言えばいいかちょっと言葉に困るんですけど……大切な思い出があるんです。でもその思い出は自分自身の力で思い出さなきゃいけない……そんな気がするんです」

これは嘘じゃない。
ずっと思っていた事だった。
確かに大使館に行ったり、調べてもらった方が簡単なのは間違いないだろう。俺の扱いは恐らく行方不明、あるいは生死不明だ。
大使館に行けばすぐに保護されるし、調べればすぐに分かるはずだ。
でも俺は自分の力で何とかしたかった。

そうしないと、俺がいた場所に胸を張って帰れない、誰よりも大切

な『あいつ』と笑顔で再会する事が出来ない、そんな思いがあったからだ。

顔も声も思い出せない『あいつ』。でも俺にとって誰よりも大切な存在だという事は、本能的に感じていた。

だから、折角の申し出は有難かったが、断る事にしたのだ。

「そうか。残念に思うが去る者は追わずだ」

もっとしつこく勧誘されると思っていのに、案外簡単に引き下がった事に驚いた。

それが顔に出ていたのだろう。御曹司はまたしても口端を上げて笑みを浮かべた。

「なんだ？　我がもっとしつこく勧誘すると思っておったのか？　なめるな！　我はそこまで卑しくないわ！　我はいずれ庶民の上に立つ選ばれし男！　些細な事に気を留めていたら器が知れるというものだ！」

自信満々に宣言する御曹司。上から目線もここまで来ると呆れしかない。

余りにも尊大な態度に呆然とした俺に御曹司は少し嬉しそうな表情を見せた。

「『黒髪（ダークネス）』よ。貴様が我を守っていた事、大義であった。恩着せがましくないその態度も、自分の信念に従うその気概も気に入った。これより貴様は我の『友』だ！　もし記憶が戻り日本に帰ってきたらまた会おうぞ！」

一方的に言いたい事を言い終えた御曹司は、満足気に頷くとそのまま俺の前から去って行った。

いやあのね御曹司？　友は分かったけど俺、あんたの名前聞いてないんだけど？

急展開過ぎる光景に、俺はついて行けなかったのだった。

こうして『俺』の友達が出来た……のかな？

そういえばあの御曹司。以前会った事のある誰かに似ていたよう……な？

彼との出会いは、確信はないが失ったはずの記憶を思い出す1つのピースになった……はず。たぶん。きっとそうだと思いたい。

ちなみに御曹司がスカウトしたと言っていたのは『女王蜂（ホーネット）』の事だった。

彼女がメイド服を着るのか……日本に帰って会うことになったら絶対に笑ってやろう。

第３８話　彷徨いの夜明け、在る２つの出会い（後書き）

あとがき～！

第３８話終了。

前回で次で終わるとか言っておきながら終わらなかったです。

さて今回のお話ですが、分かる方には分かりますね。

はい、そうです。

あの主従との出会いです。

一応布石にならない布石を作っておきました。

この布石が原作突入後にどう影響するかは分かりません。

今度こそ次で終わる……かな？

あ、ちなみに本文の英語の会話の表記は翻訳ページを使って訳したものなので『こんな風には言わない』とのツッコミはなしでお願いします。

というより、先に英語を書いてカッコ書きで日本語、この会話文の書き方はどうなんですかね……？

『良い』『悪い』の簡単な意見だけでもいいから聞いてみたい……

第３９話　彷徨いの夜明け、『黒髪』の噂（前書き）

第３９話投稿。

第３９話　彷徨いの夜明け、『黒髪』の噂

『俺』がこの部隊に拾われてもう１年がたった。

未だに記憶は戻らないが余り焦るつもりもない。

待っている人たちには悪いと思うが、ちゃんと待っていてくれてる確信があった。この程度で揺るがない絆があるのだと何故か確信できていた。

まあ記憶も完全に戻ってないわけじゃなく、断片的な事は思い出し始めている。

たとえばいつも一緒にいた仲間たちがいただろうという事。自分には恐らく両親と呼べる存在がいなかったのだろうという事。

そして何より恋人がいただろうという事。

俺が記憶を失ってでも大切と思っている『あいつ』とは、たぶんこの恋人の事なのだろう。

ところで、何故『だろう』という表現を使っている理由は、たぶん間違いないと思うが、それを今の段階では確実に証明する事が出来ないからだ。

荷物の１つでもあればそんな事なかったと思う今日この頃だった。

さて、最近は部隊の任務にいろいろと駆り出されているが、俺の事を思ってくれているのか、基本的は護衛の任務ばかりで制圧や殲滅といった任務には呼ばれた事はなかった。

その事をさりげなく隊長に聞いたところ、

『Ｗｅ　ａｎｄ　ｙｏｕ　ａｒｅ　ｄｉｆｆｅｒｅｎｔ．（君は我々とは違う）』

その言葉を聞いた時は少しだけ嬉しかった。
きちんと俺が帰るという事を考えていてくれている証拠だったからだ。

そんなこんなで持ちつ持たれつで部隊のお世話になっていたある日、
１人の女の人が突然部隊のキャンプ地を訪ねてきた。

「Ｕｎｈ？ｆｌｉｃｈ　ｓｅｉｎ．（失礼する）」

ドイツ語だった。

この部隊とは違う軍服を着た女性は、誰はばかることなく足を進めると、キャンプ地の中央で足を止め辺りを見渡す。
威風堂々としたその姿はある意味で格好イイと思えた。

というか、俺は英語以外にもドイツ語も知っていたんだ。
彼女の言葉がドイツ語だということ、彼女の言ったドイツ語の意味をなんの違和感もなく理解した自分に物凄く驚いた。

「Ｕｎｄ　ｆ？ｒ　ｄａｓ，　ｗａｓ　ｗｉｒ　ｔｕｎ？（我々に何の用かな？）」

隊長が代表してドイツ語で言葉を掛けた。

周囲はまるで一触即発な雰囲気だ。
それも仕方ないかもしれない。一応この部隊は某国の特殊部隊だ。
その特殊部隊のキャンプ地に、明らかに他国軍の軍服を着た軍人が現れれば警戒して当たり前だ。
だが警戒されているはずの彼女は、なんでもないように佇んでいた。

「Bitte mach dir keine Sorgen Heute kam mit einer pers?nlichen Auftrag.（安心しなさい。今日は個人的な理由できました）」

「Und zu glauben, seine Worte?（その言葉を信じろと？）」

警戒を緩めない隊長に彼女は小さく息を吐く。

「Jetzt ist es an meinem Urlaub. Dass dies das Kleid, das mein Stolz ist, gibt es keinen tieferen Sinn.（今の私は休暇です。この服を着ているのは私の誇りだからで、深い意味はありません）」

だったらややこしい格好をするなとみんな言いたいだろう。
事実、俺の周りの人たちは顔をしかめていた。

「Warum sollten Sie hierher kommen im Urlaub so.『Jagd Hund』？（それで休暇のはずの貴様がなぜここに来た。『猟犬』？」

「Wie kann ich wissen?（私の事を知ってい

るのですか？）」

ドイツ語の会話はまだまだ続く。

『ヤークトゥ・ハントゥ』――『猟犬』と言うのが彼女の異名なのだろう。その言葉を言った隊長を女性は意外そうな顔をして見ていた。

「Und aus gut bekannt.（有名だからな）」

「Lassen Sie uns als Lob zu akzeptieren.（称賛として受け取っておきましょう）」

少しだけ嬉しそうに顔に笑みを浮かべた彼女は、後ろで手を組み足を肩幅に広げると、キャンプ地全体に聞こえるかのように声を張り上げて叫んだ。

「Ich kam hierher, heute ist es, eine Person zu einem persönlichen Sieg Herausforderung! Sodie Aktionen unserer Truppen und dieses Mal ist mir egal, was es ist! Ich schwöre, sein Leben!（私が今日ここに来たのは、ある人物に個人的に勝負を挑むためです！　したがって、今回の私の行動は我が軍とは何も関係ない事です！　私の命を掛けて誓います！）」

なんとも自己満足的な理由だった。

個人的に勝負を挑みに来たって、そんなに暇なのかあんたの軍は。

他人事とだろうと決めつけた俺がその場から離れようと背を向けた

時、その言葉が彼女の口から出た。

「『Ｄａｒｋｎｅｓｓ』，ｂｉｔｔｅ ｋ？ｎｎｅｎ．Ｉｃｈ ｋａｍ，ｕｍ ｍｉｔ ｅｕｃｈ ｚｕ ｋ？ｍｐｆｅｎ．（『黒髪』、出てきなさい。私は貴方と戦いに来ました）」

さっき彼女は何と言った？　『黒髪（ダークネス）』って言ったのか？　聞き間違いだよな？　うん、そうに違いない！

自分の脳内で勝手に判決を下した俺は脱兎の勢いでその場から駆け出そうとした。

しかし――

「Ｉ'ｌｌ ｃａｌｌ ｙｏｕ ａ ｂｅａｕｔｙ．『Ｄａｒｋｎｅｓｓ』．（美女がお呼びだぜ。『黒髪』）」

逃げ出そうとした瞬間に首根っこを掴まれた俺は、そいつに引きずられるような形で彼女――『猟犬』さんの前につれてこられた。

面白い催しにニヤケ面を並べる隊員たちに囲まれた俺たち。不貞腐れてそっぽを向く俺とは対照的に、彼女は訝しそうに俺を見ていた。

「Ｅｉｎｅ『Ｄａｒｋｎｅｓｓ』ｏｄｅｒ ｗｅｎｎ Ｓｉｅｍ？ｃｈｔｅｎ？（貴様が『黒髪』なのか？）」

間違いなく疑っているよこの人。まあ疑うなと言うのは酷だろう。

俺だっていきなりどう見ても１０代半ばの子供を見せられて、『こいつが凄腕の傭兵です』って言われても信じない。

だが俺が『黒髪（ダークネス）』と呼ばれているのは本当だ。

半ばヤケクソ気味に答えた。

「Ｏｈ，ｊａ．Ｍｅｉｎ『Ｄａｒｋｎｅｓｓ』ｉｓｔ．（ええ、そうです。俺が『黒髪』です）」

「Ｋｉｎｄｅｒ ｗｉｅ Ｓｉｅ？（貴様のような子供が？）」

未だ信じられないのか眉をひそめて再度問い掛けてくる。

何度確認を取られても、この部隊にいる『黒髪（ダークネス）』に用があるなら俺が出るしかない。この部隊の中で『黒髪（ダークネス）』と呼ばれているのは俺だけなのだから。

「『Ｄａｒｋｎｅｓｓ』 Ｕｒｓｐｒｕｎｇ ｄｅｓ Ｎａｍｅｎｓ？（『黒髪』の名前の由来は？）」

答えるのも面倒臭いので自分の頭を指さす。髪が黒いから付けられたと無言で主張。

彼女は呆れて声が出ないのだろう。

少しの間呆然と俺を見ていたと思うと、明らかに落胆したような溜息を吐いた。

人を見て落胆の溜息を吐くのは、はっきり言って失礼以外の何ものでもないが、ここでそれに対して反論すると余計な事になりかねないのは、否が応にも理解出来る。

黙っているのが１番安全な対応だ。

「Ｗａｓ ｉｓｔ ｎａｃｈ ｄｅｒ ａｌｌｅｓ ｎｕｒ ｅｉｎ Ｇｅｒ？ｃｈｔ．（所詮はただの噂でしたか）」

噂？

いったいだの記憶喪失の身元不明の怪しい日本人でしかない俺に、どんな尾ヒレどころか背ビレや胸ビレまで付いた噂が広がったというんだろうか。

「Was bedeutet das die Ger?chte, 『Jagd Hund』.（噂とはどういう意味だ、『猟犬』）」

みんなの疑問を代表して隊長が『猟犬』さんに言葉を掛けた。

俺としてはいったいどんな噂が広まっているのか知りたいところだが、何故か嫌な予感がしてならないのは何でだろうか？

最近、ある意味で面白半分に部隊の任務を手伝っていた事へのしっぺ返しか？

そんな事を思う俺の気持ちなど意に掛けず、彼女は言葉を紡いだ。

「Das zwingt die 『K?nigin』 Ich habe geh?rt, die leicht zu behandeln, auch S?ldner haben.（この部隊にあの『女王蜂』すら簡単にあしらう傭兵がいると聞きました）」

『クニギン』？　ああドイツ語で『女王蜂』という意味だから、あの人の事か。

つい半年前まで俺の面倒を見ていてくれていた彼女を思い出した。

あの人は本当に日本でメイドをやってるのだろうか、怖いもの見たさで見たくなる。

確かに俺はあの人がまだこの部隊にいた時に何度か手合わせした事があり、その結果も全勝だった。だがあれはこの部隊の中での出来事であり、部隊外には漏れていないはず。

「Ｍｅｒｃｅｎａｒｉｅｓ ｕｎｄ ｄｉｅ『Ｄａｒｋｎｅｓｓ』Ｉｃｈ ｈａｂｅ ｇｅｈ？ｒｔ，ａｕｆｇｅｒｕｆｅｎ ｗｕｒｄｅ．（そしてその傭兵は『黒髪』と呼ばれていると聞きました）」

確かにあの人に圧勝している『黒髪（ダークネス）』は俺の事で間違いはない。が、いったいその情報はどこから聞いたのだろうか？　噂になるほどじゃないはずだ。

「Ｗｏ ｋａｎｎ ｉｃｈ ｉｎ ｄｉｅｓｅ Ｉｎｆｏｒｍａｔｉｏｎｅｎ ｚｕ ｇｅｌａｎｇｅｎ？（その情報はどこで手に入れた？）」

隊長が再び代表して聞く。

訝しく問い掛けるどころか、あの顔を見て確信をもって問い掛けているのが分かる。

しかも隊長だけじゃない。俺たちを囲っている部隊のみんなも噂の出どころが分かったのだろう、ニヤケ面をさらに深めて俺を見ている。

さっきから物凄く嫌な予感しかしない。

あの人との手合わせが部隊内の出来事でしかないのだから、その情報を噂として流したのは間違いなく内部の犯行だ。だが今のこの部隊で俺の事を外に漏らして得をする人なんていない。

そもそも身元不明と言っても、どう見ても１０代半ばの子供な俺を見て、どこかの国の軍関係者と誰が思うだろうか？　絶対に誰も思わない。

第一、俺の事を外に漏らしても有益にも損失にもならないのだ。誰

が好き好んでそんな無駄な事をするだろうか。
となると情報を噂として漏らしたのはかつてこの部隊にいた人。

さてここで問題です。
俺がこの部隊に拾われてからこれまで約1年。それまでにこの部隊を離れた人は何人いるでしょう？

答えは1人。
そう、あの御曹司にスカウトされて半年前にこの部隊を離れた『女王蜂』。彼女ただ1人です。

「Selbst dort, wo es hei?t, war ein Ger?usch auf sich selbst in seinem eigenen Namen.（どこでと言われても、本人が自分の名前で情報を流していました）」

「あの人はいったい何やってんだよ!?」

嫌な予感が的中。思わず日本語で叫んでしまった。
恐らく一種の意趣返しのつもりなのだろうが、他の軍の人間を巻き込むなんてやり方がえげつない。無事に日本に帰れて出会う事があったら絶対に指さして笑ってやる。

「Japanisch?（日本語?）　『黒髪（ダークネス）』、貴方は日本人ですか？」

俺の言葉を理解したのだろう、いきなり日本語で話しかけてきた『猟犬』さん。

「日本人以外の何に見えるんですか?」

「申し訳ない。東アジアの人種はみな同じに見えてしまうのです」

その答えにある意味で納得した。欧米人は日本人と中国人と韓国人の区別がなかなか付けられないとよく言われている。

元々この部隊の中では国籍不明扱いの俺だ、一応は『女王蜂』と話が出来たという事で日本人だとみんな思っているが、判別付かないと言われてもあまり文句はない。

「では改めて聞きます。貴方があの『女王蜂』にあしらったというのは本当ですか？」

「本当です。手合わせ程度の勝負ですが１２戦全勝ました」

誤魔化すのも面倒臭いので素直に答える。俺がもし誤魔化しても部隊のみんなが面白おかしくとんでもないホラ話を交えながら説明するに決まっている。

なら変な情報を与えるよりは素直に答えた方が得策だ。

だがその言葉に口元を歪めた彼女を見て、その考えが一瞬にして変わる。

「貴方のその淡々とした答えに周りの雰囲気。どうやら嘘ではないようですね」

どこで選択肢を間違えた？　どうみても勝負する雰囲気になってる。

何も言わずにどこからともなくトンファーを取り出し、やる気満々の闘気を放ち構えを取る彼女を見て周りを囲っていた人たちから喝采が沸き起こる。

どうやら俺たちが勝負すると勝手に勘違いしたようだ。

「Ｃｏｍｍａｎｄｅｒ！？（隊長！？）」

助け求めるように俺は隊長の方に振り向く。
だが彼は助けを出すどころか笑顔を浮かべて頷くと、右手で握り拳を作り親指だけ立てて俺に向けて合図を送ってきた。

何いい笑顔浮かべてサムズアップしてんだよ！？

心の叫びは声に出せることなく、雰囲気はまさに勝負一色に染まっていった。
この雰囲気では止める事なんて出来ないだろう。こんな時でも日本人気質『場の雰囲気に合わせておく』を発揮する自分を殴り飛ばしてやりたかった。

諦めの溜息を吐くと、俺は身体をほぐしながら彼女と対峙する。
だがまあ、やるからには最初から全力でやってもらおう。そう思い俺は彼女に言葉を掛ける。

「その眼帯を外して下さい。やるなら最初から本気でいきましょう」

相手も日本語が分かるんだ。わざわざドイツ語で話しかける必要はない。何より俺は彼女の都合で勝負をするのだから、俺が言葉まで彼女に合わせる必要はない。

俺の言葉に一瞬だけ驚いた顔をしたが、すぐに獰猛な笑顔を浮かべた彼女は、言葉に従うかのように左目を隠していた眼帯を外した。
その途端に彼女が纏っていた闘気の質ががらりと変わった。
それに当てられたのだろう、騒いでいた周りの人たちがいっせいに静かになった。

「私が力を抑えていたのをよく見抜きました。これを初見で見抜いたのは貴方が初めてです」

歓喜と称賛を交ぜた口調で言う彼女に、俺は答えることなく構えを取る。

強さは『女王蜂』と余り変わらないと思ったが見当違いだったようだ。まあ彼女との手合わせではお互い本気にならないのが暗黙の了解だったから、もしかしたら本気になればそんなに差はないかもしれない。

開始の合図はない。

先に動いたのは彼女の方だった。

地面を蹴ったかと思った時にはすでにこちらの間合いの中。右手に持ったトンファーを回転させながら下からの攻撃。それを慌てることなく右半身で回避すると同時に脇腹めがけて拳を繰り出す。

その拳を左手に持ったトンファーで受け止めた彼女は、振り上げたトンファーを今度は振り下ろしてきた。

間合いを取るために大きく下がる。

足が地面に着いた時には既に彼女は俺に肉薄していた。左右のトンファーを高速に回転させ両側からの攻撃。それに対し俺は両手を交差させ迫り来る高速回転しているトンファーを難なく掴む。

「っ！？」

音のない声で驚く彼女の一瞬の隙を突き、問答無用で交差した両腕を開くように回転させる。トンファーを掴まれていた彼女はその回転の勢いに体勢を崩し、見事に半回転する。そのがら空きになった

胴体の鳩尾に肘鉄を当て彼女を吹っ飛ばす。

痛みに顔をしかめ吹っ飛びながらも、彼女は体勢を立て直し足から地面に着地した。

追い打ちを掛けなかった俺を見て何を思ったか分からないが、表情から見るに恐らく手を抜かれていると思っているのだろう。

俺が本気になる必要はない。そう思っているのだが、どうやらそれを感じ取った彼女は気に入らないらしい。

あちらの都合に合わせて勝負しているのだから、俺が彼女の意志に合わせる必要はないと思うが、だからと言って後で根に持たれても困る。だが全力で行くかどうかは迷う。

たぶん俺は記憶を失う前も全力を出すほど本気になった事はない。

無意識なのか意識的なのかは分からないが、自分でその力をセーブしている気がする。だが1度ここでそれを解き放ってみるのもいいかもしれない。

自分の本当の力を把握するいいチャンスだろう。何より彼女は俺の全力を見たがっている。それに応えるだけだ。

そう思い思考を切り替えた瞬間、自分の中から何か途方もない『力の塊』みたいなものが、全身の神経や血管を駆け巡ったような感じを受けた。

瞬時に悟った。『覚醒』したのだと。

俺の変化を敏感に感じ取ったのだろう、彼女は本能的な恐怖からなのか後ろに下がろうとした。

が、それは既に遅すぎた。

彼女が飛び下がるため地面を蹴った時には、俺の右正拳突きは深々と彼女の鳩尾に突き刺さっていた。
完全に衝撃が身体を突き抜けたのだろう。彼女は突き飛ぶことなくその場で倒れ気を失ったのだった。

勝負の結果はもちろん俺の勝ち。
彼女は全治４ヶ月という怪我を負ったのにもかからず、翌日には思いっきりやせ我慢しているのが目に見えて分かるのに、何でもないように振る舞いゆっくりではあったが自分の足で帰っていった。
俺としては嵐が去ったような感じだったが、最後に彼女が残した言葉が非常に気になった。

さてあの言葉はいったい何を意味するのだろうか？　嫌な予感しかしない。
そう思いながらも、俺はいつものように失くした記憶の事を考えながら今日1日を終えたのだった。

結果報告。
戦いを挑みに来る人が増えました。

『貴方の強さ。身に染みました。私も貴方の強さを伝えておきます』

あの言葉はこういう意味だったのか！？　『猟犬』さん！？

第３９話　彷徨いの夜明け、『黒髪』の噂（後書き）

あとがき～！

第３９話終了。

終りませんでした。

おかしいなぁ、３７話あとがきで長くても２話だって言ったのに……

それはさておき、さて今回のお話ですがどうでしたか？

一応ワン子曰く『マルチーズ』さんとの出会いを描きました。

前回と同じで布石にならない布石です。

本当は戦闘描写をもっと長く書きたかったんですが……

気付けば４分の３が無駄な長話に。

精進しなければ。

ところでいつ原作突入するのでしょうか？

作者にも分からなくなってきました。

精進しなければ！

あとドイツ語に関してはツッコミノーサンキューで！

第４０話　彷徨いの夜明け、それぞれの変化（前書き）

第４０話投稿。

いつになったら原作に行くのやら……

第４０話　彷徨いの夜明け、それぞれの変化

――２００８年　３月７日　金曜日　ＰＭ４：００――

ジン兄が行方不明になって１年と半年が過ぎた。

その間に僕たちに変わった出来事はそれほどなかった。

強いて言うのなら、モモ先輩があの事件の半年後に中学卒業し、翌月に川神学園に入学。

そしてキャップ、大和君、一子ちゃん、岳人君、卓也君が卒業式を終え今日で中学校を卒業した事と、京ちゃんを含めた全員でモモ先輩と同じ川神学園に進学が決まった事ぐらいかな。

そして何故か特例という形で、ジン兄の卒業も決まった。

鉄心さん……もしかして川神院の力で何かしましたか？

一緒の高校に行くに当たり、京ちゃんは岳人君のお母さんが切り盛りしている川神学園の学生寮の島津寮に入る事になった。

そして両親が海外に行く大和君も島津寮に入る事が決まった。父親に一緒に来るかどうかの決断を求められていた大和君は、最初はついて行こうと考えていたみたいだたけど、結局はこの川神市に残る事に決めたらしい。

その事を少しだけ詳しく聞いてみたら、

『最初は兄弟の事があったからついて行こうと思ってたんだ。けど、みんなで待つ事を決めたのに俺だけ抜け駆けするわけにいかないだろ？　それにやっぱりみんなと一緒にいる方が楽しいからな』

そう言った大和君に僕は何故かジン兄の姿が重なって見えた。

あの事件以降、何かしらの形でみんなは自分について少しだけ見つめ直したんだと思う。

その中で顕著だったのが大和君。

大和君は仲間内での自分の立ち位置を決めた。今までジン兄に頼っていた部分を補うために必死になっていた時期もあったけど、自分とジン兄の違いを受け入れ、自分なりにこの風間ファミリーを纏める術を手に入れたんだと思う。

『軍師』。

そんな大和君を見てキャップとモモ先輩が付けた大和君のあだ名。

今までは例えとして使っていたこの名前は、今は名実共に大和くんの地位となった。

京ちゃんの変化も少しだったけど見て取れた。

中学に入ってから遠く離れた事も理由なのかもしれないけど、京ちゃんは僕たち風間ファミリーに依存しているところがあった。とりわけ大和君への信頼は盲目過ぎて時々ジン兄に注意されていたぐらいに。

でもあの事件以降は少しずつだったけどその依存が和らいできていた。

大和君に注意された事もあったし、自分でも思うところがあったんだろう。仲間依存が全くなくなったわけじゃないけど、いい傾向になってきたと思う。

そして、別の意味で顕著な変化をしたのがモモ先輩だった。

性格が変わったとか、みんなへの態度が変わったとかそういう事での変化じゃない。

いつもと変わらず力で僕たち風間ファミリーに君臨しているモモ先輩だけど、時折ジン兄がしていたような後ろから見守るスタンスを取るようになった。

仲間内で問題が起こった時、今までだったら率先して介入、あるいは引っかき回していたのに、この頃はみんなに意見を出させ合った後に収める。あるいは場合によっては強制加入して止めるような態度を取るようになった。

まるで大和君とモモ先輩、2人でジン兄の代わりをしているみたいだった。

それと服装や格好。

ジン兄が好んで着ていた服なんかを着るようになったし、小物なんかもジン兄の物を使うようになった。でもだからといって、行方不明になってすぐの頃のように縋っているという感じじゃない。

モモ先輩はちゃんと僕たちを頼ってくれているけど、それでも拭えない不安があるんだろう。それが『仲間』と『恋人』の違いなんだと思った。

みんないい方に向かってる。ジン兄がいないこの仲間の空間を大切にして、それでもいつでもジン兄が帰ってきてもいいように。

誰も焦っていない。この1年と半年、全くジン兄の情報はなかったけど、必ず帰ってくるとみんなで信じて待つと決めているから、誰1人として自棄になる事はなかった。

僕たち風間ファミリーは今、1番絆が強くなっていると言えた。

今日は卒業祝いのパーティーをする予定だ。

卒業組の5人は同じ卒業生の京ちゃんを迎えに行っている。

従って今この秘密基地にいるのは僕とモモ先輩の2人だけだった。

「タカ。料理はどうすればいい？」

「モモ先輩が作ったの！？」

いきなり掛けられた声とその言葉に驚きの声をあげてしまう。

その僕の返答に機嫌を悪くしたんだろう、モモ先輩は手に提げていた重箱を包んだ風呂敷をテーブルの上に置くと、背筋が凍りそうな薄ら笑いを浮かべた。

「なんだその反応は？　私が料理を作るのがそんなに意外か？」

まずいとはっきりと分かる。今の僕は蛇に睨まれた蛙も同然だろう。

なんとか脱出方法を取らなければならないのだけれど、こういった時のモモ先輩を相手にするのは基本的に大和君だ。

大和君が生け贄になっていると言った方が適切かもしれない。

その大和君はさっき言ったように京ちゃんの迎えでここにはいない。

なんとかして話を逸らさなければならいなけど、こういう時はどうすればいいだろうか？

とりあえず思ったままの言葉を口にする。

「驚いたのは意外だからじゃないよモモ先輩」

「ほう？　じゃあなんで驚いた？」

「作ってくるってモモ先輩、ひと言も言ってなかったから驚いただけだよ。まさか料理を持ってくるとは思わなかったから、ここに来る途中でお菓子をたくさん買ってくるってキャップも言ってたし」

素直に言ったことが功を奏したのだろう、僕の言葉にモモ先輩は少し困ったような顔をして人差し指で頬を小さく掻いた。

「言っておくべきだったか……驚かそうとして黙っておいたのが仇になったな」

「今から携帯に連絡入れておく？」

「まあ必要ないだろ。量もそんなに作ってきたわけじゃないし、ワン子もガクトもいるし８人で食えばすぐなくなるだろ」

そう言い切ったモモ先輩は気にする風でもなく準備を再開した。

とりあえず一命を取り留めた僕は安堵の溜息を小さく吐く。なんとか窮地は脱したと思っていいだろう。

その後は取りとめのない話をしながら準備を続ける。

「そういえばタカ。最近は川神院に顔を出さないけど何やってんだ？」

作業の手を止めずモモ先輩が問い掛けて来た。

実はあの時のモモ先輩との勝負以降、何故だか鉄心さんに気に入られた僕は時々ではあったが、川神院の修練に参加させてもらっていた。

それも2ヶ月ぐらい前の話で、最近はあまり顔を出していない。

まあ、それにもきちんとした理由があるんだけどね。

「急に行かなくなったのは申し訳ないと思ってるよ。でも最近は凛奈さんにまとまった休みが出来たから、集中的に鍛えてもらってたんだ」

「凛奈さんにか……なあタカ、ずっと聞きたかったんだが、凛奈さんてどれぐらいの強さなんだ？」

僕の答えにモモ先輩は少しだけ思案顔で問い返して来た。

答えを間違ったかな。モモ先輩が凛奈さんに興味を持ったような気がした。

そんな僕の雰囲気を感じ取ったのだろう、モモ先輩は誤解を解くような感じで言葉を続けた。

「いや、別に戦ってみたいという訳では――多少はあるが、純粋な武道家としての興味だ。私らの中では今のところ私に次いで強いお前が指導を請う人の強さが知りたいんだよ」

それなら大丈夫かな。

鉄心さんには余りモモ先輩の闘争心に触れるような事はするなと言われている。

一時期、ジン兄が行方不明になった後の頃は酷かった。
鉄心さんが言うには、僕とのあの勝負がある意味でモモ先輩の中の生まれ持っての性(さが)の、戦闘狂の部分を大いに刺激してしまったらしい。
それまではジン兄が時々勝負をして息抜きをしていたし、何より『恋人』という存在がその戦闘へ向かう心のエネルギーを『恋愛』に向けさせていたようだ。

だけどその『恋人』であるジン兄がモモ先輩の前からいなくなった事で、『恋愛』に向いていた心のエネルギーが、本来の『戦闘』に向かってしまい僕との勝負の結果、モモ先輩の戦闘狂の面が強くなってしまったのだ。

あの時はあするしかなかったとはいえ、そう言われてしまうと少しだけ罪悪感を感じてしまった。だから鉄心さんが僕の剣術を認めてくれた事もあり、言葉に甘えて川神院に1年ちょっと顔を出していた。

そんなモモ先輩から凛奈さんの事を聞かれたら、答えていいのか考えるのは仕方ないと思う。
だけど今のモモ先輩の雰囲気から察するに大丈夫そうだ。もしこの返答のせいで凛奈さんに勝負を仕掛けるような事があったら、ある意味で僕が凛奈さんに殺されかねない。
そうならない事を祈りつつ、僕はモモ先輩に答えた。

「うん、僕より強いのは間違いないよ。凛奈さんは篁の一族全員から『篁の歴史上至高の天才』って言われてたぐらいだからね」

「ふぅん、そうなのか」

僕の叔母である篁凛奈さん、実は１５歳で免許皆伝を受けるほどの天才だったらしい。なのに実家から勘当、絶縁状態にあるのには物凄い逸話が残っている。

今から１０年前の３月に凛奈さんは篁の業を全て修め、祖父――凛奈さんから見れば父親から免許皆伝の許しを得た。
一族誰もが次の篁家の当主は凛奈さんだと思っていた。
当時、僕の父も免許皆伝を受けていたが、凛奈さんは父のそれより１０年早かったため、天才と称されていた凛奈さんこそ相応しいと誰もが言っていたらしい。
ところが凛奈さんは免許皆伝を受けた直後に、一族全員が見ている中で持っていた刀で受けたばかりの皆伝の証を真っ二つに斬り捨てると、

『私は今日をもってこの篁の家を出る。悪いが今まで素直に教えを受けていたのは自分１人で生きられる力をつけるためだけだ。こんな腐れジジイがいる家を誰が好き好んで継ぐものか。』

そう吐き捨て、真っ二つになった皆伝の証を拾い上げ祖父に叩きつけると、時間が止まったかのように呆然となる道場から出て行きそのまま荷物を纏めて家を奔出していったらしい。
その結果、祖父は凛奈さんを勘当。絶縁まではさすがに周りの人たちから止められたが、殆ど絶縁と言ってもいい今の状況になったのだった。

余りに豪快すぎる逸話に、初めてその話を凛奈さんから聞いた時、僕はなんて言葉を返せばいいか分からなかった。

さすがに他人にこんな事を話す訳にもいかないからモモ先輩に言わないけどね。

「足元にも及ばない、とまでは言わないけど、僕がまだ教わっていない技もあるから、さっきも言ったように凛奈さんにまとまった休みが出来たら集中的に鍛えてもらうってわけ」

そこで話を切った僕にモモ先輩は少し笑顔を浮かべた。

「じゃあタカはまだまだ強くなるわけだな」

「まあ、目標はまだ全然先にあるからね。強くなりたい気持ちはもちろんあるよ」

「じゃあこれからを楽しみにしておこう」

聞きたくない言葉が耳に入ってきた。

モモ先輩は今なんて言った？　『これからを楽しみにしておこう』って言った？　どういう意味で『楽しみにしておこう』なの？

いやな予感が駆け巡り、僕は少しだけ顔を引きつらせながらモモ先輩の様子を窺うように視線を向けた。その視線の先にはいい笑顔のモモ先輩の姿。

いやな予感は当たったようだ。

「またいつか勝負するぞ。これはお願いじゃない決定事項だからな」

「分かりました……」

そう答えるしか出来ない僕だった。こんな時になればなるほど強く思う。

ジン兄……早く戻ってきてね。

僕とモモ先輩が準備を終えて２０分ぐらいたった後、今回のパーティーの主役である卒業組６人が秘密基地にやっていた。

モモ先輩が料理を作ってきた事に、僕の予想通りみんな驚いていたけど、空気の読める大和君と京ちゃんと卓也君はきちんと回避を取り、素直においしいと褒めたキャップや一子ちゃんはお咎めなし。ただ１人馬鹿正直に『食えるのか？』と呟いた岳人君のみ、モモ先輩のキツイ制裁を受けたのは、いつも通り過ぎる僕たち風間ファミリーの日常だった。

「クッソー。こんな時にジン兄がいればなんとかしてくれたのによ～」

思わず呟いた岳人君の言葉に、モモ先輩以外の全員の動きが止まる。それを見て自分が何を言ったのかに気付いたんだろう、岳人君はしまったとばかりに慌てて口を手で抑えた。

だけどもう遅かった。

あの後で、モモ先輩以外の僕たちだけで１つのファミリー内でのルールを作った。

それが『モモ先輩の前ではジン兄のことを話題にしない』という事だった。

別にモモ先輩を疑っているわけじゃない。ちゃんと僕たちと同じよ

うに、ジン兄が帰ってくるのを仲間全員で信じて待つ事に同意してくれているのは分かっている。

でもモモ先輩と僕たちとではジン兄と繋がる絆の形が違う。
僕たちにとってジン兄は『仲間』であり『憧れ』や『目標』という存在だけど、モモ先輩にとっては唯一無二の『恋人』という存在なんだ。僕たちとは感じる悲しみや喪失感が違う。ジン兄の事がファミリー内で話題に上がる度に、モモ先輩は小さくてもそういった感情を受けるかもしれないとみんな思った。

だからみんなでそんなルールを作ったのだ。

みんな恐る恐るといった感じでモモ先輩を窺い見た。
僅かでも傷ついた悲しい顔をしているだろうと誰もが思っていたが、その顔はいつもと変わらない穏やかだけど自信に溢れた顔だった。

予想外の表情に僕たちの方が驚きで表情を変えてしまった。
そんな僕たちを不思議そうに眺めていたモモ先輩は、雰囲気を察したんだろう小さく呆れた溜息をついて笑顔を浮かべた。

「なんだ、やっぱ気を使っていたのか」

「姉さん、気付いてたのか？」

「気付かない方がおかしいだろ。1年半も仲間内でジンの話題が出ないなんてありえないだろ？　気を使われているんだろうなっていうのは1ヶ月で分かったよ」

種明かしをするように肩をすくめて言うモモ先輩に、僕たちは返答に困ったというのが正直な思いだった。

モモ先輩はわりと始めの頃から気付いていた。でもそれを言わなかった。逆に気を使われていたのは僕たちの方だったのだ。

「あ～そうするとアレか？　俺たちのやった事って無駄な事だったのか？」

キャップが僕たちの思いを代表してちょっと困ったような表情で言う。

同意するように頷き目を合わせる僕たちも苦笑いしか浮かべられなかった。

そんな僕たちの考えを否定するようにモモ先輩は首を横に振った。

「いや、助かったのは事実だよ。ジンが行方不明って知って私は閉じ籠って……タカと大和のお陰でお前たちのありがたさに気付いて……でもやっぱりどうしようもない心の不安はなくならなかったからな」

あの頃の自分の思い出すかのように、自嘲的な笑みを浮かべながら話すモモ先輩に、隣にいた一子ちゃんは心配そうにモモ先輩の右手に自分の両手を重ねた。

そんな一子ちゃんの行動にモモ先輩は浮かべていた笑みを優しいものに変えると、安心させるように空いていた左手で重ねた一子ちゃんの手を軽く叩いた。

「でも今は大丈夫だ。完全に不安がなくなったわけじゃないが、ジンの話題を出されて塞ぎ込むほどでもない。変な心配を掛けさせて悪かったな」

最後は明るくこの場の不安な雰囲気を取り除くように言うモモ先輩

に、僕たちは頷き小さく安堵の溜息を吐いた。
そんな穏やかになった雰囲気に便乗するかのように、京ちゃんが珍しく少しおどけたような声で言葉を発した。

「分かる。私にはモモ先輩の気持ちがしみじみ分かる。私も大和に会えない時は不安だった。気が狂いそうなほど不安だった」

「いや京？　京は毎週の金曜集会で大和に会ってたじゃん」

卓也くんのツッコミが入る。だけど京ちゃんは聞く耳を持たないのだろう、そのツッコミを全く無視して言葉を続ける。

「だからこの不安をなくすためには恋人になるしかないよね。それが1番いい解決策だよね大和。だから好きです付き合って」

「お友達で」

すかさずいつも通りの言葉を返す大和君。そのお陰か部屋の雰囲気もいつもと変わらない僕たち風間ファミリー独特の楽しいのもになった。
大和君にいつも通り振られた事で、いつもなら落ち込む京ちゃんだが何故か今日は小さく含み笑いを浮かべてさらに言葉を続けた。

「クックックック……まあいいよ。チャンスはこれから幾らでもあるしね。なにせ寮の私の部屋は大和の部屋の真上だからね。これで大和がいない時に入り込める」

「ちょっと待て京！　俺はまだ入寮が決まったばかりだぞ！　何で既に俺の部屋が決まってるんだ！？」

その事実に驚きを隠せない大和君は声を張り上げた。そんな大和君の姿が面白いのだろう、京ちゃんはさらに笑みを深くした。

「麗子さんに頼んだの。大好きな韓流グッズを献上品にしてね」

「ガクトォ！！」

「なんで俺様！？　悪いのはかーちゃんだろ！？」

衝撃の事実に大和君の怒りは何故か岳人君に向かった。
とばっちりを受ける事になった岳人君には同情するしか出来ない。

「分かるぞ京。好きな男の部屋に入り浸りたい気持ち。私もジンの部屋に入り浸ってるからな」

モモ先輩のその言葉に一子ちゃん以外全員が一気に身を引いた。
訳が分からないモモ先輩と一子ちゃんを余所に、僕たちは離れて円陣を組み声を潜めて意見を出し合う。

「やばいんじゃねーかモモ先輩。ホントに立ち直ってんのか？」

「その言い方は失礼だよガクト。恋する乙女に常識なんてないの」

「本当に常識ないよな京、お前も。それより姉さんの事だ」

「ワン子が心配してないから大丈夫だと思うけど……」

「甘いぞモロ、ワン子にモモ先輩の機微を察知できると思うか？」

「それも一子ちゃんに失礼だよキャップ。でも確かにたまにジン兄

の部屋で過ごしてたのは見てたし、時々鉄心さんに叱られてたねモモ先輩」

川神院に顔を出していた頃の出来事を思い出す。何度かモモ先輩がジン兄の部屋から出てくるのを見ていたし、時々鉄心さんに怒られていた時もあった。なんでもジン兄の部屋で寝ている事もあるそうだ。

この行動を見ると立ち直っているのか怪しいところは確かにある。

「おいお前ら、内緒話なら私のいないところでやれ。全部聞こえているぞ」

モモ先輩の言葉に僕たちは体を震わせ顔を向ける。

怒っているだろうと思っていたがモモ先輩は呆れた顔をしているだけだった。

「全く失礼な奴らだな。いいかお前ら、これから私の事はかわゆい恋する乙女な美少女だと思え、いいな」

「モモ先輩が恋する乙女って無理だろ」

岳人君の呟きに対しすかさず飛んできたモモ先輩の蹴り。

思っていても口に出すなよ。

容赦のないモモ先輩の制裁を受ける岳人君の悲鳴を聞きながら、ここにいる全員の思いは今１つになった。

第４０話　彷徨いの夜明け、それぞれの変化（後書き）

あとがき～！

「第４０話終了。あとがき座談会、司会の春夏秋冬　廻です。今回のお相手は――」

「川神百代だ」

「はい、久し振りのあとがき座談会復活。８話振りかな？」

「なんでこのエピソードが始まった時はやらなかったんだ？」

「まあシリアスな話という事もあるからだけど、少し物語の方に集中したかったんだよ」

「見通しはつていなかったのか？　３７話で長くても２話で終わりとか言っておきながらもう３話だぞ？」

「見通しはついていたんだけど、書きたい事が増えたんだよ」

「行き当たりばったり過ぎるだろ。だから感想に『先行き不安』なんて書かれるんだ」

「ごめんなさい。精進します。さて急に話は変わりますが、今回のお話は神の行方不明後のファミリーのちょっとした変化を描きました」

「大した話じゃなかったな」

「まあね。でも今回の話で神がいたことで原作とスタンスが変わっていた大和と君が、ある意味で原作通りに戻ったと思う。さらに京も少しだけ原作開始時と変化を持たせる事が出来たと思う」

「多少なりにも意味はあったということか」

「まあ作者の自己満足でもあるけどね」

「で？　このエピソードはいつ終わる？」

「いつか終わります」

「なんだその投げやりな言い方は！？」

バキッ

第４１話　彷徨いの夜明け、取り戻したもの（前書き）

第４１話。

やっと少し進みました。

第４１話　彷徨いの夜明け、取り戻したもの

『俺』がこの部隊に拾われて、もう2年が過ぎようとしていた。
さすがに焦りが出てきた。

断片的には思い出しているけど、まだ決定的な記憶の回復兆候は見られていない。
部隊の人たちは焦るなと言ってくれているし、最悪思い出せなければこの国にずっといればいい、この部隊に正式入隊して働けばいいと言ってくれている。

悪い誘いではないと分かっているし、俺を思ってくれての言葉だと理解もしているが、最近はそう言葉を掛けられる度に焦りが募ってしょうがなかった。
そのせいかあまり余裕も持てなくなり、何かと部屋に籠る事が多くなっている気がする。

このままではいけないと思うのだが、どうすべきなのかも思いつかない。やっぱり変な意地を張らずに最初に言われた通り、素直に大使館に駆け込めば良かったのかもしれない。
でもこの部隊にそれなりに深く関わり合いを持ってしまったので、この国が素直に帰国させてくれるとは思えない。

隊長は記憶が戻ってから大使館に行っても、この国としてはこの部隊自体を余り公にしたくない事だから、俺がこの部隊にいた間の事は何とかしてくれるはずだ、とは言うけど本当かどうかは分からない。

進む事も出来ないし、戻る事は自分から絶ってしまった今の現状に、俺は少なからず精神的に参っているのだと思う。
手合わせをして発散させようにも、最近は部隊の人たち数十人を相手にしても数分で終わらせてしまうため、誰も相手にしてくれなくなった。

『Ｙｏｕ　ａｒｅ　ｔｏｏ　ｓｔｒｏｎｇ！（お前が強すぎるんだよ！！）』

口々にそう言われてしまい反論する事すら許されなかった。
あの『猟犬』さんとの勝負以降、『覚醒』したと自覚した途端、強さに上限が見えなくなってしまった。一応普段は意識的に抑えているが、それでも相手にならないのは本当だった。
そのせいかもしれないが、最近この部隊でも浮いてきている。
やっぱりこの部隊に居続けるのもそろそろ潮時なのかもしれない。

「勝負の時に考え事とは余裕ですね」

目の前で相対していた『猟犬』さんが掛けて来た声で、俺は思考の海から浮上する。そういえば手合わせをしている最中だった事を思い出す。

実はこの『猟犬』さん。あの初めての手合わせ以降、休暇が入ると何かと理由をつけて俺と勝負をするために訪れる。今回で４回目。
部隊が移動して何度かキャンプ地を変えているのにも拘わらず見つけ出して来るのだから、ある意味で性質が悪い。

「余裕というわけではないんですけどね……最近ちょっと何かにつけて考えてしまう事がありまして」

迫り来る左右のトンファーでの攻撃を、最小限の動きの紙一重でかわしながら言葉を返す。

そんな俺の姿が余裕綽々に見えたのだろう、小さく舌打ちした『猟犬』さんはトンファーの攻撃の間に鋭い左脚の蹴り上げを繰り出して来る。

それを読んでいた俺はその蹴りを右腕を上げて受け止めると同時に右脚を振り上げ、『猟犬』さんの顎をめがけて真下からの蹴りを放った。

その蹴りを首を反らす事でかわした『猟犬』さんだが、俺の攻撃はこれで終わりはしない。そのまま振り上げた右脚を、今度は踵落としとして即座に振り下ろした。

大きく飛び退き間合いを取ろうとした『猟犬』さんだったが、俺が受け止めた蹴り脚を腕で挟んで固定しているためそれが出来ない。

咄嗟にトンファーを構えた右腕を頭上に持っていき俺の踵落としを受け止めた。

だがその動作のせいで出来た隙を突き、がら空きになった右脇腹に腰の回転だけで勢いを付けた左拳を叩きこんだ。

「っ！」

苦悶の表情を浮かべ吹っ飛んでいく『猟犬』さんを追いかけるように地面を蹴り、体勢を立て直して地面に着地した『猟犬』さんの間合いに肉薄すると、右拳を鳩尾に当てた。

右足で地面を踏みしだき、引き絞った弓から矢を解き放つかのように身体を捻じり伸ばし右腕を突き上げた。

震脚によって発生した爆発的な衝撃は、身体を捻じったことで発生した回転のエネルギーも取り込み右拳一点集中し、『猟犬』さんの鳩尾から全身を突き抜けていった。

衝撃を受け止める体勢が取れていなかった『猟犬』さんは、数メートルも宙に浮くと気を失ったのだろう、体勢を整える事もせず落下してきた。

俺は落ちてきた『猟犬』さんを抱き止めると、そのまま医務室に運んでいった。

「Ｉｔ　ｉｓ　ｆｒｕｓｔｒａｔｅｄ．（苛立ってるな）」

気を失った『猟犬』さんをベッドに横にし、特に目立った外傷がないかを確認してシーツを掛け医務室を出た後、ドアの目の前の廊下の壁に背を預けて待っていた隊長が小さく声を掛けて来た。

「Ｃａｎ　ｙｏｕ　ｓｅｅ　ｉｔ？（そう見えますか？）」

「Ｙｅｓ．　Ｉ　ｗａｓ　ｓｏｒｒｙ　ｆｏｒ　ｈｅｒ　ｏｕｔｂｕｒｓｔ　ｏｆ　ａｎｇｅｒ．（見えるな。八つ当たりされたあいつが可哀想だ）」

小さく笑って多少の嫌味を含ませて、俺の背にあるドアを顎で指した。

俺はその隊長の言葉を否定する事が出来なかった。確かに八つ当たりめいたところがあったのは間違いないからだ。

いつまでたっても思い出す事の出来ない記憶と、本能的に感じている俺が帰ってくる事を間違いなく待っている人たちの存在。

焦りと不安。そして最近の部隊内で感じる孤立感。
最初は羨望や憧れとして見られるが、強すぎる力はやがて恐怖の対象へと変わっていく。

そういったものが、俺を苛立たせていたのは間違いなかった。

「Ｃｏｍｅ　ａｂｏｕｔ．（ついて来い）」

自分の苛立ちを抑えるように小さく息を吐いた俺をじっと見ていた隊長は、小さく呟くように言うともたれていた壁から背を離し、廊下の奥へと歩みを進めた。
珍しく有無を言わせない感じの声に、俺は何も言わずに従いその背を追う。

着いた場所は駐輪場だった。
訳が分からない俺は立ち止まり周囲を見渡していたが、隊長はそんな俺を無視して1台のジープに乗るとエンジンを掛けた。

「Ｒｉｄｅ　ｏｎ．（乗れ）」

未だに訳が分からない俺だが、言われた通りにジープに乗り、隊長はそれを確認するとギアを入れすぐに発進させた。
そのままキャンプ地内を走り、入出ゲートを通り抜ける時に見張りの隊員と何やら話していたが、すぐにゲートは開き隊長はまたしても何も言わずに車を走らせた。

それから１０分。
黙って車を走らせ続ける隊長に、俺はさすがに訳が分からず連れて行かれる事に耐えられず、沈黙を破り隊長に話し掛けた。

「Ｗｈｅｒｅ　ａｒｅ　ｙｏｕ　ｇｏｉｎｇ?（どこに行くんですか?）」

俺の問い掛けに隊長は短く視線を向けるだけで、最初は答えようとはしなかったが、じっと視線を向け続けると諦めたように溜息を吐いた。

「Ｙｏｕ　ｈａｖｅ　ｆｏｕｎｄ　ａ　ｐｌａｃｅ.（お前を発見した場所だ）」

その答えに心臓が大きく跳ねたような感じがした。

どうして今になって俺が見つかった場所に行くんだ?

何かその場所に意味があるとでも言うのか?

でもそれはないだろう。何より意味があるんだったらもっと初めの頃に連れて行ってくれたはずだ。それをしなかったという事は俺が発見された場所は俺にとって意味のない場所のはずだ。

混乱しているのが見て取れたのだろう、隊長はまた短く俺に視線を向けると、すぐに前に戻し少しだけスピードを落として話し掛けて来た。

「Ｄａｈｌｏｎｅｇａ　ｋｎｏｗ　ｙｏｕ　ｗｉｌｌ　ｂｅ　ｔａｋｅｎ　ｎｏｗ　ｔｏ　ｗｈｅｒｅ　ｉｔ　ｗａｓ　ｄｉｓｃｏｖｅｒｅｄ　ｗｈｙ.　Ｙｏｕ　ｃａｎ　ｓｅｅ　ｔｈｅ　ｃｏｎｆｕｓｉｏｎ.（どうして今さら発見された場所に連れて行かれるか分からないだろ。混乱するのも分かる）」

ゆっくり落ち着かせるような声音に、忙しなく駆け回っていた思考

が段々と落ち着いていく。考え込んでも分からないのだから説明してもらうしかない。
落ち着かせるように息を吐いた俺を見て、隊長は言葉を続けた。

「Ｉ　ｗａｓ　ｇｏｉｎｇ　ｔｏ　ｔａｋｅ　ｙｏｕ　ｒｉｇｈｔ　ａｗａｙ　ｒｅａｌｌｙ．　Ｂｕｔ　ｄｉｄ　ｉｔ　ｉｓ　ｓｅｌｆｉｓｈ　ｏｆ　ｍｅ．（本当はすぐにでもお前を連れて行くつもりだった。だけどそれをしなかったのは俺の我がままだ）」

我がまま？　どういう意味だろう。隊長が俺を連れて行かなかった事に罪悪感を感じるようなことなんか何もないはずだ。
それよりも充分によくしてくれた俺が表せないほどの感謝を感じているのに。

「Ｎｏｔ　ｔｈｅ　ｃａｓｅ．　Ｉ　ａｍ　ａｌｓｏ　ｇｒａｔｅｆｕｌ　ｔｏ　ｙｏｕ　ｄａｒｋ　ｅｎｏｕｇｈ．（そんな事ないですよ。俺は貴方に感謝しきれません）」

「Ｔｈａｔ　ｉｔ　ｉｓ　ｎｏｔ．　Ｉ'ｍ　ｎｏｔ　ｓｕｂｊｅｃｔｅｄ　ｔｏ　ｂａｌａｎｃｅ　ｔｈｅ　ｉｎｔｅｒｅｓｔｓ　ｏｆ　ｔｈｅｉｒ　ｏｗｎ　ｔｒｏｏｐｓ　ａｎｄ　ｙｏｕｒ　ｍｅｍｏｒｉｅｓ．（そういう事ではない。俺はお前の記憶と自分の部隊の利益を天秤にかけたんだ）」

その言葉にある考えが頭に浮かんだ。そうして理解した。
どうして隊長がすぐに俺を最初に発見した場所に連れて行かなかったのかを。それは確かに隊長の我がままかもしれない。けどその原因を作ったのは他でもない俺自身だった。
俺が『女王蜂』と手合わせして、それを隊長が見ていたのが原因だ

ったのだ。

「I understand that you look strong now. I've missed so many times submerged the battlefield, the ability to see what people are going there.（お前を見てすぐに強いのは分かった。これでも何度も戦場を潜り抜けて来たんだ、人を見る眼はあるつもりだ）」

その言葉にはさすがに驚いた。

この人は俺が強いという事を『女王蜂』と手合わせする前に見抜いていたらしい。歴戦の兵士の観察眼と洞察力といったものだろう。

感心する俺をよそに、隊長は言葉を続けた。

「And you are『Hornet』look of the game and that changes to the intuitive belief that, now feeling regret.（そしてお前が『女王蜂』と勝負しているのを見て、その直感が確信に変わり、惜しくなったんだ）」

そこでいったん言葉を切った隊長は、懺悔するかのように大きく息を吐くと、核心を突く言葉を口にした。

「I could not let go of you.（俺はお前を手放せなくなった）」

沈黙が続いた。

俺も隊長もお互いに声を掛ける事をしなかった。

正直、俺はなんて声を掛けるべきなのか分からなかったし、隊長はおそらく声を掛けて欲しくなかっただろう。何となくだがお互いの雰囲気を察し、目的地へ向かう車の中は静寂に包まれていた。

それから数分、沈黙の中で車を走らせていた隊長は目的地に着いたのだろう、車を止めエンジンを切ると『降りろ』とひと言いうと、車の中からシャベルを取り出して車から降りて行った。
それに従い、車から降りた俺に目の前に、大きな河があった。

ここで俺はこの人に拾われたのか……

ある意味で今の『俺』の誕生の場所と言ってもいいこの川辺で、俺はある種の感慨深い感情に流されかけていた。
すぐに首を振り気持ちを切り替える。

俺はここに以前の『俺』を取り戻しに来たんだ。

そう気持ちを持ち直した俺だったが、後ろにいる隊長に車の中でずっと考えていた事を振り向く事なく言葉にした。

「I'll have something selfishness too. If you come back and make sure to remember where the guarantee.（やはり我儘なんかじゃありませんよ。ここに来れば確実に記憶が戻るとは限りませんから）」

「No, you definitely remember if you come back here.（いや、ここに来れば間違いなくお前の記憶は戻る）」

努めて明るく言った俺に、隊長はやはり懺悔するような声音のまま答えて来た。

何故そう言い切るのか分からなかった。
現に今こうしてこの場に立っているのに、思い出すような兆しは見られない。頭が痛くなったり、突然頭の中に風景が浮かんできたり、今まで思い出す時に起きていた事が全くない。

「Ｗｈｙ ｄｏ Ｉ ｓａｙ ｃｕｔ. Ｗｈａｔ ｗｉｌｌ Ｉ ｄｏ ｃｏｍｅ ｔｏ ｔｈｉｓ ｐｌａｃｅ. Ｉ ｇｕｅｓｓ Ｉ'ｌｌ ｌａｙ ｈｅｒｅ ｗｉｔｈ ｌｕｇｇａｇｅ ｄｏ ｎｏｔ ｈａｖｅ ａｎｙ?（どうして言い切れるんですか。この場所に来て何になるんですか。俺は荷物も持っていない状態でここに倒れていたんですよね?）」

少しだけ苛立ちを含めた俺の言葉に、隊長は慌てて言葉を返してきた。

「Ｎｏ，ｎｏ，『Ｄａｒｋｎｅｓｓ』. Ｙｏｕ ｈａｄ ｙｏｕｒ ｌｕｇｇａｇｅ.（違う、違うんだ『黒髪』。お前は荷物を持っていた）」

「Ｗｈａｔ?（え?）」

思いもよらなかった返答に、俺は呆然と振り返った。
そこには苦しく表情を歪めた隊長の姿があった。

「Ｙｏｕ ｈａｄ ｙｏｕｒ ｌｕｇｇａｇｅ. Ｈａｄ ｃｅｒｔａｉｎｌｙ ｂｅｅｎ ａ ｓｍａｌｌ ｗａｉｓｔ ｐｏｕｃ

h.（お前は荷物を持っていた。小さなウエストポーチだったが確かに持っていたんだ）」

俺が……荷物を持っていた……？

いきなり判明した事実に思考がついていかなかった。

荷物があった。それだけは言葉から理解できたが。なら何故その荷物が目が覚めた時にはなかったのか？

あの時、確かに『女王蜂』は荷物がないと言い切った。

「Did we tell. I would have had to relinquish you feel regret table.（言っただろ。俺はお前を手放すのが惜しくなったと）」

そう言った隊長は俺に背を向けて歩き始めた。

呆然としながらもその背を追って歩き出した俺だったが、隊長のその背中が罪悪感に押しつぶされそうになっているのに気付いた。

ああ……この人は2年もの間ずっと、この罪悪感を抱えていたんだ……

「Your luggage when I was entrusted. When I heard that you have memory loss, but we are floating in the scary thought for me.（お前の荷物は俺が預かっていた。だがお前が記憶喪失だと聞いた時、俺の中に恐ろしい考えが浮かんできた）」

「How to hide luggage that?（それが

荷物を隠す事ですか？）」

俺が自分の言葉を引き継いで声を出した事に驚いたのか、それとも未だ立ち直ってなくて声を出せる状態じゃないと思っていたのか、隊長は体を小さく震わせた。

だが反応したのはそれだけで、俺の方に振り返る事はしなかった。

「That's right. Without the lead item on your memory and take time to think back and remember that the worst may be still long forgotten, though so.（そうだ。お前の記憶に繋がる物がなければ、記憶が戻るのに時間がかかると考えたし、最悪はずっと忘れたままかもしれない、そう思った）」

隊長の告白はまるで自分の身を切るようなものに聞こえた。

「So I thought I was immediately moved into action. And here you filled in your luggage.（そう思った俺はすぐに行動に移った。そしてここにお前の荷物を埋めた）」

立ち止まり振り返った隊長。

『ここ』というのは足元の地面の事なのだろう。

視線での問い掛けに言いたい事を理解した俺は黙って頷く。それを確認した隊長は持っていたシャベルで地面を掘り起こし始めた。

暫くの間、地面を掘る音が続く中で俺は疑問を口にした。

「Ｓｏｍｅ ｏｆ ｔｈｅ ｌｕｇｇａｇｅ Ｉ ｈａｄ，Ｉ'ｖｅ ｈａｄ ｔｈｉｎｇｓ ｔｏ ｐｒｏｖｅ ｍｙ ｉｄｅｎｔｉｔｙ？（俺の荷物の中に、俺の身元を証明するものがあったんですか？）」

そんな俺の問いに、隊長は地面を掘る手を止める事なく答える。

「Ｙｅｓ，ｔｈｅ ｐａｓｓｐｏｒｔ ｗａｓ ｃｏｎｔａｉｎｅｄ. Ｔｈｅｎ ａ ｌｉｔｔｌｅ ｓｍａｌｌ ｆｏｒ ａ ｈａｎｄｋｅｒｃｈｉｅｆ. Ａｎｄ――（ああ、パスポートがあった。それからハンカチとかの小物が少し。そして――）」

埋めた物が見つかったのか、隊長はそこで言葉を切るとシャベルを手放ししゃがみ込むと、土をかき分けるように両手を何度か動かし小さな金属の箱を手に立ち上がった。

その箱を手渡され俺は左腕で支え右手で蓋を開けた。

箱の中に入っていたのは、隊長の言葉通りパスポートと財布。そしてハンカチと濡れたせいで壊れたであろう携帯電話だった。

本来なら真っ先にパスポートを手に取るだろう。でも俺が１番最初に手にしたのは綺麗に折り畳まれたハンカチだった。

何故かハンカチになにか大切なものが包まれていると感じた。

持っていた箱を地面に下ろし、中から取り出した折り畳まれたハンカチを俺は少し震える手で恐る恐る開く。隊長はそんな俺を少し離れたところでじっと見っ持っている。

そのハンカチに大事そうに包まれたソレを見た時、俺の中から全て

が解き放たれた。

それは小さな四つ葉のクローバーの形をした飾りの付いたペンダントだった。

全部――思い出した。

川神院のみんな――鉄心さん。ルー師範代。門下生のみんな。

風間ファミリーの仲間たち――キャップ。ヤマ。カズ。ミヤ。ガク。タク。ヒロ。

そして誰よりも何よりも大切な恋人――モモ。

「Ｔｈａｔ'ｓ　ａｌｌ　Ｉ　ｒｅｍｅｍｂｅｒ　ｙｏｕ.（思い出したんだな全部）」

ペンダントを包んだ両手を額に当て、溢れ出てきそうな涙を必死に堪える俺に、彼はどこか安堵したような声で言葉を掛けて来た。

俺はその言葉に、頷く事でしか答えを返せなかった。

今、なにか１つでも声を出すとみっともなく泣き出してしまいそうだったから。

それを堪え、ただひたすら沸き上がってくる嬉しさに俺は身を震わせ続けたのだった。

２００８年８月３１日。

奇しくもモモの誕生日の日に。

『俺』は『暁神』を取り戻した。

第４１話　彷徨いの夜明け、取り戻したもの（後書き）

あとがき～！

「第４１話終了。あとがき座談会、司会の春夏秋冬　廻です。今回のお相手は――」

「記憶を取り戻しました。暁神です」

「はい久し振り。さて今回のお話で記憶を取り戻しましたが……」

「思ったより早かったのか？」

「話数的にみれば行方不明から9話だけど、時間経過的には2年だからね」

「そう考えると結構時間が経ってるんだな……この展開は考えていたのか？」

「記憶を取り戻すっていう展開の事？　実は最初迷った。取り戻さずに帰国させるか、それとも取り戻させるか。記憶喪失のままでも面白い展開になると思ったけど、それを書ききる自信がなかった」

「おい」

「いやだってメチャクチャ難しいぞ！　考えてみろ、話しかけた相手は自分を知っているのに自分はその相手の事を全く覚えていない。これを話にするのは技量的に無理だ！」

「再三、技量不足を嘆いているの見てるから否定できないじゃないか」

「だから記憶を取り戻すことにした」

「今後の展開は？　すぐに帰るのか？」

「すぐには帰れないと思う。だって2年も行方不明になっていた人間がいきなり現れたんだからそう簡単に何もかもいかないでしょ」

「そこら辺を書くのか？」

「いや、たぶん書かないし書けない」

「おい！」

「というわけで次回ぐらいでこのエピソードも本当に終わらせたいと思います。でも期待しないで待ってて下さい」

「ホントに終われればいいけどな」

第４２話　彷徨いの夜明け、そして始まる物語へ（前書き）

第４２話投稿。

ようやくここまで来ました。

第４２話　彷徨いの夜明け、そして始まる物語へ

――２００８年　８月３１日　日曜日　ＰＭ１０：３０――

ｓｉｄｅ　暁神

結論から言うと、やっぱりすぐに帰国は無理なようだ。

諸所の手続きや健康診断、事情聴取などで最短でも３ヶ月。

今回の俺の場合だと下手すりゃ最長で７・８ヶ月は掛るらしい。

まあ、事情が事情だし今までいた場所も公に出来ないとの事だし、仕方ないと言えば仕方ないのかもしれない。

あの後、記憶が戻り俺は彼に連れられてすぐに日本大使館に向かった。

到着した時は夜遅くだったが大使館はかつてないほどの喧騒に包まれたらしかった。

『君は２年前の爆弾テロを未然に防ぎ燃え盛る建物の中からその身を呈して子供を助けた。そしてその結果で行方不明。ある意味で君はこの国でも日本でも一種の英雄扱いだったんだ。そんな君がいきなりこの国の特殊部隊の隊長と一緒に来たんだ。驚くなと言う方が無理だよ』

そう言ったのは大使館に勤める外交官の１人だった。

英雄ね……なんかむず痒い気がしてならない。そんなこと言われたいから取った行動じゃない。子供を助けたのだってただ助けたかっ

たからだ。

その思いを言葉にして伝えたら、その人は笑ってこう言った。

『そんな考えで行動できるからこそ君は英雄なんだよ』

何を言っても無駄なんだと悟った。

大使館の職員たちは、俺が見つかった事をメディアを通じて大々的に発表しようと言ったが、それは全力でやめてもらった。さっきも言ったようにこんな風にして欲しくてやった事じゃないし、何より目立ちたくなかった。

何度も説得して何とか納得してもらい、とりあえず身近な人に連絡する許可だけを貰うと、俺は実に2年ぶりに川神院に電話をした。ダイヤルを押す指が微かに震えていたのは俺だけの内緒だ。

今日の日付と今の時間を考えると、日本では9月1日の昼前後ぐらいの時間帯だろう。

2学期の始業式の日だから鉄心さんは川神院にいないかもしれない。そういえばモモは川神学園に進学するって言っていたけど、ヤマたちはどうしたんだろう。たぶんみんな川神学園に進学した可能性は高い、というか間違いなく川神学園に進学しただろう。

受話器からのコール音を聞きながら、今のみんながどんな高校生活を送っているかを想像する。騒がしく、でも楽しいのは間違いないだろう。

そんな事を考えていたら、コール音が途切れ受話器の向こうから懐かしい声を聞いた。

『もしもし？　川神院ですが？』

「っ！」

聞き覚えのあるその声に、一瞬だけ息が詰まった。

だがそれも数秒。込み上げてくる嬉しさと溢れ出ようする涙を堪え、俺は声を出した。

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

§　§　§

――２００８年　９月１日　月曜日　ＡＭ１１：３０――

ｓｉｄｅ　ａｕｄｉｅｎｃｅ

学園の始業式も終り少しだけ暇になった学園長の川神鉄心は、少し早いが昼食のために川神院に戻っていた。

玄関をくぐり静かな廊下を歩きながら考える事は神の事。

行方不明になって既に２年が経過していた。事件を知ってからすぐにアメリカに渡り情報収集して分かった事は、殆どニュースで流れる事件の概要と同じものだけだった。

１番知りたかった神の行方は全く知る事は出来なかった。

生きている。

そんな事は鉄心も疑っていない。

でもあの神が2年も経つというのに全く連絡もしないという事実に、何かの事件に巻き込まれたのか、または連絡も出来ないような状況なのではないかと考える時もある。

『案外、記憶を失っているのかもしれませんネ』

ルーが冗談交じりで言った言葉を思い出し、鉄心は小さく笑みを零した。あながちその冗談は冗談じゃないのかもしれない。

そんな事を考えていたら、廊下の先にある電話が鳴っているのが聞こえた。

辺りに誰もいないのを気配で分かっていた鉄心は、少しだけ歩調を速め鳴り続ける電話のもとに着くと、受話器を取り少しだけよそ行きの声で対応した。

「もしもし？　川神院ですが？」

『っ！』

受話器の向こうの人間が息を呑んだのが分かった。

一瞬イタズラ電話かと思った鉄心だったが、受話器の向こうから何となく感じる雰囲気に、イタズラ電話でない事を感じ相手が声を出すまで待つ事に決めた。

沈黙は数秒。電話越しの相手は震えるような声で言葉を紡いだ。

『鉄心さん……ですか……？』

その声を聞いた瞬間、鉄心は全身に痺れが走ったと言ってもいい感じを受けた。

懐かしい声だった。

この2年間ずっと探し続けていた声だった。

生きていると信じて、帰ってくると信じて待ち続けた声だった。

鉄心は震える声を何とか抑えて、ゆっくりと確認するかのように言葉を掛けた。

「神……なのか？」

『はい。ご無沙汰です』

電話越しの神の声も感無量といった感じだった。

実際に神の方も何とか声を震えるのを抑えている状態だった。お互い抑え込んで言葉を紡げば、溢れ出す感情に何を言っていいか分からなくなりそうだった。

「元気にしておったか？」

『はい。2年もの間、何の連絡もせずご心配をおかけしましたが、変わりはありません』

「そうか……」

電話口にも拘わらず鉄心は深く頷いた。

本当に心から良かったと鉄心は思った。何故連絡してこなかった、何故連絡するのにこんなにも年月がかかった、などいろいろ聞きたかったが、今は何より無事を喜びたかった。

「今どこにおる？」

『大使館です。無理を言って夜遅くなのに入れてもらいました』

「そうか……すぐにそっちに向かう。詳しい事はその後じゃ」

『分かりました』

簡潔に用件だけを言い合う。

話し出せば止まらないのは鉄心も神も分かっていた。だから無駄な事は何も話さず、直接顔を合わせてからゆっくり話す事を暗黙の了解で察したのだった。

ひと言ふた言、確認を取り合った後、鉄心は万感の思いを込めて神に声を掛けた。

「神。生きておると信じておった。よう無事じゃったな」

『――はい！』

少しだけ震えた、それでいて力強い返事を受けた鉄心は『また後でな』と言葉を掛けて受話器を置いた。

ほんの数秒、その場で佇んでいた鉄心だったが、意を決したように顔を上げるとその口元に小さな笑みを浮かべ、颯爽と廊下を歩いて行った。

これから忙しくなる。

そう思いながらどうやって孫娘たちを驚かせようかと考える鉄心だった。

side out

§　§　§

――2008年　8月31日　日曜日　PM11：50――

side 暁神

「Or contact with?（連絡がついたか？）」

受話器を置く俺の背中に彼の声が掛けられた。

恐らく別室で行われていた事情聴取と、俺の今までとこれからの扱いについての説明も終わったのだろう、部屋の椅子に座ってこちらを見ていた。

振り返った俺も隊長の対面にある椅子に座り言葉を返す。

「Yes. Is like coming over here soon.（はい。すぐにこっちに来るそうです）」

「Do so.（そうか）」

小さく笑って俺の言葉に応えたと思ったら、彼は急にテーブルに手を着くと額をぶつけそうな勢いで頭を下げた。
突然の行動に呆然のなる俺に彼はその姿勢のままで話し出した。

「Ｎｏｔ　ｂｅ　ａｌｌｏｗｅｄ　ｔｏ　ａｐｏｌｏｇｉｚｅ　ｆｏｒ　ｉｓ　ｋｎｏｗｎ．　Ａｌｓｏ　ｋｎｏｗ　ｔｈａｔ　ｍｙ　ｓｅｌｆ－ｓａｔｉｓｆａｃｔｉｏｎ．　Ｓｔｉｌｌ，ｊｕｓｔ　ｌｅｔ　ｍｅ　ｓａｙ　ａ　ｗｏｒｄ　ａｎｄ　Ｉ　ｗａｎｔ　ａｎ　ａｐｏｌｏｇｙ．（謝って許される事じゃないのは分かってる。俺の自己満足なのも分かってる。それでも、謝罪とひと言だけ言わせてほしい）」

さらに頭を下げ、ついにテーブルにその額を押しあて、彼は全ての思いを吐きだすかのような声で謝罪の言葉を紡いだ。

「Ｓｏｒｒｙ．　Ｓｏｒｒｙ　ｔｏ　ｓｔｅａｌ　ｙｏｕｒ　ｐｒｅｃｉｏｕｓ　ｔｗｏ　ｙｅａｒｓ．（すまなかった。君の貴重な2年間を奪ってしまって申し訳なかった）」

そう言い切った後も頭を上げることなく伏せたままの彼に俺は首を振りながら声を掛ける。

「Ｐｌｅａｓｅ　ｆａｃｅ　ｕｐ．　Ｉ　ｔｈｏｕｇｈｔ　ｉｔ　ｉｎｔｅｎｔｉｏｎａｌｌｙ　ｄｉｆｆｉｃｕｌｔ　ｆｏｒ　ｙｏｕ　ｎｏｔ　ｅｖｅｎ　ｏｎｃｅ．（顔を上げて下さい。俺は1度も貴方を憎くいと思った事はありません）」

その言葉にゆっくりと顔を上げた彼に安心させるように頷くと、俺は彼の目を真っ直ぐ見てもう1度だけ感謝の意を述べた。

「I told you to. And also thank you enough.（貴方には言ったはずです。感謝しきれないと）」

「But……（しかし……）」

なおも言い募ろうとする彼に首を振る事で言葉を止めさせる。
俺自身がいいと言っているのだから謝罪はもうやめてほしい。これ以上言われると俺の方が変な罪悪感を感じてしまいそうだ。

そんな思いと彼の罪悪感を少しでも軽くするために、俺は思っている事をそのまま言葉にする。

「I do not think that the last two years also vain. I think the time has been spent and will always be my sustenance.（この2年間の事も決して無駄だと思っていません。俺は過ごしてきた時間は必ず自分の糧になると思っています）」

そう、記憶喪失の2年間を無駄かどうかを判断するのは彼ではなく俺自身だ。
かつて小学生の時に、あの多馬川で冬馬と初めて会った時に言った言葉。

『それをしてきた自分を否定しない』
『自分が費やしてきた時間は決して自分を裏切ったりしない』

それは今でも俺の持論だ。

確かに回り道だったかもしれない。確かに他人から見れば無駄な時間だったかもしれない。でもこの2年間は俺にとって意味のあるものなんだ。それを否定されたくはない。

『Ｇｏｔ ｓｐｅｎｄ ｗｈａｔ ｉｓ ｈｕｍａｎ，Ｗｈａｔｅｖｅｒ ｉｔ ｉｓ ｎｏｔ ｗａｓｔｅｄ ａｎｙｔｈｉｎｇ. Ｓｏ Ｐｌｅａｓｅ ｄｏ ｎｏｔ ａｐｏｌｏｇｉｚｅ. Ｙｏｕ ａｒｅ ｎｏｔ ａ ｂａｄ ｔｈｉｎｇ.（人が過ごして手にしたものは、何であろうとも無駄な事はなに1つありません。だから謝らないで下さい。貴方は悪い事はしていません）」

そう言って彼の前に右手を差し伸べる。

俺の行動に一瞬だけ訝しげな表情を見せたが、すぐに握手を求められているのだと気付いた彼はテーブルの上に置いていた右手を俺に右手に重ねた。

「Ｉ ｔｈｉｎｋ ｙｏｕ ａｎｄ ｇｌａｄ ｔｏ ｈａｖｅ ｍｅｔ. Ｐｌｅａｓｅ ｔｅｌｌ ｔｈｅ ｔｒｏｏｐｓ ｔｈａｎｋ ｙｏｕ ｔｏ ｔｈｅ ｐｅｏｐｌｅ.（貴方と出会えて良かったと思ってます。部隊の人たちにもありがとうと伝えて下さい）」

「Ｎｏ，ｔｈａｎｋ ｙｏｕ ｗｅｌｃｏｍｅ ｈｅｒｅ. Ｉ ｆｅｅｌ ｆｏｒｔｕｎａｔｅ ｔｈａｔ ｙｏｕ ｍｅｔ ｗｉｔｈ.（いや、こちらこそありがう。君と出会えた事を幸運に思うよ）」

そうしている内に大使館の人が部屋に入ってきて、寝室の準備が出来たと知らせてくれた。

俺と彼は手を離しお互い小さく笑い合うと、まだ話が残っている俺

はこの部屋に残り、彼は部屋から出て行くためにきびすを返した。
だが踏み込もうとした足を止め彼は再び俺に視線を向け声を掛けて来た。

「『Ｄａｒｋｎｅｓｓ』．Ｔｈｅｒｅ ｉｓ ｓｏｍｅｔｈｉｎｇ Ｉ ｗａｎｔ ｔｏ ａｓｋ ｙｏｕ．（『黒髪』。君に聞きたい事がある）」

「Ｗｈａｔ？（なんですか？）」

まだ何か重要な事でも残っていたのかと思った俺は身を正す。しかしその口から出た声はイタズラめいた口調だった。

「Ｗｈａｔ'ｓ ｙｏｕｒ ｎａｍｅ？（君の名前は？）」

一瞬だけ何を聞かれたか分からなかったが、そういえば彼が俺のパスポートの中身を見ておらず、俺もまだ本名を名乗っていない事に気付き、小さく吹き出してしまった。
数秒だけ肩を震わせて笑いを堪えていた俺は、落ち着かせるように息を突き、彼のその質問に笑みを浮かべて答えた。

「Ｊｉｎ……Ｊｉｎ Ａｋａｔｓｕｋｉ」

ｓｉｄｅ ｏｕｔ

§ § §

――２００８年　９月７日　日曜日　ＰＭ３：００――

ｓｉｄｅ　川神百代

「え？　鉄心さんが海外に行ってまだ帰ってきてない？」

大和の驚いた声に私は頷く事で答える。

今月の１日に川神学園から帰ってきたら、ジジイは急用でその日のうちに海外に行ったと聞いた。ルー師範代に事情を聞いても分からないと答えるばかりで何の用なのかは知る事は出来なかった。

まあルー師範代は川神学園の教師だし、あの日は私たちと一緒で川神学園にいたのだから、知っている方がおかしいがな。

「鉄心さんの事だから海外での講義が急に入ったんじゃないかな？　以前も急に海外に行って１週間ほど帰ってこなかった時があったよね」

「そうなんだがな……」

タカの言葉に相槌を打つものの、私は何故かその理由に納得できなかった。

何か私の本能が今回の海外出張はもっと深い理由があると言っている。だがそれを証明する確かな理由もないからどうももどかしいのだ。

「納得できないって感じだねモモ先輩」

京のツッコミに私はまたしての頷いて答える。
今秘密基地にいるのは私を含めて４人。
私以外は声を出した順に大和、タカ、京だ。他の４人は多馬川の川辺でワン子の修行に付き合って今はいない。ここにいるのは話の分かる奴らばかりだから素直に言っておこう。
「納得というより、なんか隠してるような気がするんだよ」
「鉄心さんが？」
「ああ、あのジジイ何かして私を驚かせようとしている、そんな気がするんだ」
「姉さんの勘って時々、とんでもなく正確に物事を捉えるからね」
呆れたような困ったような表情の大和に、タカも京も頷いて同意してきた。
失礼だな。それじゃまるで私が直感のみで生きているように聞こえるじゃないか。
あながち否定できない事ではあるけどな……
「ねえモモ先輩、前から気になっていた事があるんだけど聞いてもいい？」
取り留めのない会話をしていると京が急に私に問い掛けて来た。
「うん？　いいぞ、なんだ？」
携帯のメールをチェックしながら京に質問を促す。

そろそろ借金返済のためにバイトをしなければならないな……いいバイトがないか後でツバメにでもメールしてみるか。

「それ」

メールを打ちながら質問を待っていると、何かを指さしたような雰囲気と声に、私は携帯の画面から顔を上げ京の方を見た。
思った通り京は私の方を見て指を指していた。

何を指しているかと指先の延長線上に視線を持っていくと、京が指差したのは私が持っている携帯。正確にはその携帯にストラップとして付けている、ジンから貰った小さな四つ葉のクローバーのブローチだ。
何故これを指さすのか分からない。ファミリーのみんなはこれがジンからの初めての誕生日プレゼントだと知っているはずだ。

「このブローチがどうした？」

「ブローチの方じゃない。それを見て思ってたんだけど、ペンダントの方はどうしたの？　ここ最近っていうかジン兄が行方不明になってから付けてるの見た事ないよ」

私たちの会話が聞こえていたのだろう、大和のタカも読んでいた本から顔を上げてこっちを見ていた。

ああ、そういう事か。
京の言う通り、ジンが行方不明になってからあの告白してくれた時に貰ったペンダントは付けていない。
実際は付けようにも付けられないと言うのが正しいがな。

「別に付けたくないわけじゃない。持ってないから付けようがないだけだ」

「失くしたの？」

正直に言った私の言葉に最初に反応したのがタカだった。
まあ持ってないと言われれば当たり前な反応だろう。だが別に失くしたわけではない。というかジンから貰った物を失くすなんて愚かな事を私がすると思っているのか、タカは。

「失くしたわけじゃない。あれはジンにお守りとして渡した」

「お守り？　兄弟から貰った物をか？」

「ああ、必ず返すようにと約束も取り付けてな。恋人である私をほったらかして海外に行くんだ、必ず返してもらえるものをお守り代わりにしないといつ帰ってくるか分からんからな」

「それで行方不明になって……なんか皮肉だな」

「ほう？　面白い事を言うな大和？　何だ？　私が渡したせいでジンが行方不明になったとでも言いたいのか？」

自分が言った言葉が私の癪に障ったのに気が付いたのだろう、大和は座っていたソファーから飛び上がると、そそくさとタカの後ろに隠れた。

「失言だと思うなら口に出すなよ弟」

追い掛けてもよかったがそんな気も起きなかったので特別に許す事

にした。
自分の後ろで大きく安堵の息を着いている大和に、タカは呆れたような顔をしていた。逆に京は何故が不満げだった。

「何でタカの後ろに行くかな大和。私ならちゃんと（一生）守ってあげるのに」

「お前のその言葉は信用できない。どうせ守るの前に『一生』がついてるんだろ」

「大和凄い！　私の思考が読めるなんて相性の良さ抜群だね！　もうこれは一緒になる以外ないよ。だから結婚しよ大和」

「恋人すっ飛ばして夫婦かよ!?　お友達でお願いします！」

いつもの他愛のない2人のやり取りに私は厭らしく口端を上げると、割って入るように未だタカの後ろにいる大和に言葉を掛ける。

「いい加減、京の想いに応えてやったらどうだ？　なんら姉権限で命令してやる」

「モモ先輩ナイスアシスト！」

「越権行為だ！　舎弟契約を破棄するぞ姉さん！」

ほう、いい度胸だ弟よ。
よもやあの時の契約条件を忘れたとは言わせんぞ。

「いいのか？　契約不履行の場合、嬲り殺すという条件だったはずだが？」

「理不尽すぎるだろ!?　ヒロ！　助けてくれ！」

後ろから肩を掴みタカの体を激しく揺らす大和。揺らされながらもタカは顔に苦笑と諦めを交ぜたような笑顔を浮かべる。

「無理なの分かってるでしょ大和君。自分で何とかしてね」

最大の援軍を本人に断られた大和は絶望といってもいい表情を浮かべて、心の奥底からの絶叫を上げた。

「何でもいいから早く帰って来てくれ！　兄弟!!」

第４２話　彷徨いの夜明け、そして始まる物語へ（後書き）

あとがき～！

「第４２話終了。あとがき座談会、司会の春夏秋冬　廻です。今回のお相手は――」

「えっと、久しぶりです。直江大和です」

「あとがきでは本当に久しぶりだな。以前の登場が１４話だから……」

「実に２８話振りだぞ」

「おお！　アニメに例えると実に２クールも出てなかったのか！」

「何に例えてんだよいったい……」

「まあ細かい事は気にすんな。さて今回のお話ですが……何だろな？」

「俺に聞くな作者！　書いてるのお前だろ！？」

「そうなんだけど……とりあえずなんていうか、後日談みたいなものと思って下さい。一応今回でこのエピソードは終わりです」

「自信持って言えないのかよ……まあいい。ってことは次から原作突入？」

「っぽく行こうかと」

「どういう意味だよ？　時間軸的に原作だろ？　もう２００８年９月まで来てんだから」

「すぐに原作開始の時間軸にはいかないという事。ちょっとした予告になっちゃうけど、入学式で緋鷺刀と由紀江の再会を書こうかと思ってね」

「あ～、ヒロの相手まゆっちだって言ってたもんな」

「そろそろ緋鷺刀にもオリキャラとしての存在感を出させようかと……」

「うまく書けるのか？」

「誠意努力致しますので皆様のご期待に添えれるような気持ちで頑張ってみようかなと思う所存でございます」

「ややこしい言い回しはするなよ」

閑話　篁凛奈の優越な一時（前書き）

骨休めに閑話をひとつ。

凛奈さん視点でどうぞ。

閑話　篁凛奈の優越な一時

――２００２年　１０月２６日　土曜日　ＰＭ１３：３０――

今日は私の可愛い甥っ子、篁緋鷺刀の９歳の誕生日だ。

ん？　私がいったい誰だって？

名乗らんでも分かると思うが一応名乗っておこう。
篁凛奈（たかむらりんな）。花も恥じらう女子大生。只今２０歳。世間を騒がせる超売れっ子の作家だ。

おい誰だ。気持ち悪いと言った奴。
死にたくなければ後で私のところに来い。刀の錆にしてやるからな。

まあ今はそんな事どうでもいい。
今は可愛い緋鷺刀の誕生パーティーの最中だ。この前購入した最新のビデオカメラでヒロの姿を収めなければならない。
それが今の私に課せられた最上級の使命だ。

「あの～凛奈さん？」

―ん？　なんだ暁の坊主？

「ケーキの蝋燭に火を点けようと思うんですけど、凛奈さんが点けてくれませんか？」

―何故だ？　私は緋鷺刀の撮影で忙しい。いいからとっとと点けろ。さっさとしろ。早くしろ。

「いや、一応火を使うわけですから。俺たちじゃあ危ないじゃないですか」

―お前がそんな事で失敗するたまか。一応見ててやるからお前が点けろ。

「分かりました」

何故か呆れたような表情で頷き、暁の坊主はライターでテーブルの中央に置いてあるケーキの蝋燭に火を点けた。

テーブルの上座に座り蝋燭の炎で揺らめく緋鷺刀の顔を、私は真正面に陣取りカメラに収める。

うん。最前列（ベストポジション）でかぶりつきだ。

照明のスイッチに1番近かった直江の坊主が照明を落とし、部屋の明りが蝋燭の火のみになる。ある種の幻想的な雰囲気に、緋鷺刀の女の子ともとれるその姿がぼんやりとファインダー越しに見えた。

ああ、やっぱり可愛いな緋鷺刀は。

段々と母親の緋華瑠（ひかる）さんに似て来た。こいつは本当に男なのだろうか？

蝋燭を吹き消す緋鷺刀の姿をビデオカメラで収めながら、恍惚となる私。

ちなみにそんな姿は表には決して出さない。あくまでも自分の中での感情だ。

また1つ崇高な使命を果たせた満足感と充実感に包まれている私を

無視して、暁の坊主がケーキを切り分けている。

―おい、デコレーションのチョコ板は緋鷺刀に渡せよ。

「分かってますよ。おめでとうの言葉が書かれているのにヒロ以外に配ってどうなるんですか」

こいつは空気も読めるし頭もいいから話していて疲れない。他の坊主どもはまだまだガキなところが抜けてない。そのぶん暁の坊主は付き合いやすいところがあるから密かな私のお気に入りだ。

料理を摘みながらカメラを回し誕生会の風景を撮影し続ける。たまに横から飲み物を回して来る暁の坊主。何故か撮影の助手と化しているが、こいつは本当に使える。

川神の戦っ娘が何やら睨んでくる。どうやらあいつは暁の坊主が好きなんだろう。嫉妬の視線だぞあれは。

安心しろ。無駄な嫉妬だそれは。

そう視線に思いを込めて見つめ返してやると、私の言いたい事を悟ったのだろう、バツが悪そうに視線を反らした。川神の戦っ娘もまだまだ背伸びをして大人ぶっているのが可愛い。

―そろそろプレセント渡しに入れ。

隣にいた直江の坊主に声を掛ける。私の言葉に部屋の掛け時計に視線を向けた直江の坊主は、頷き子供たちに声を掛けた。

「料理もひと通り食べたし、プレゼントの献上に移るか」

「よっしゃあ！　待ってたぜこの時を！」

何故か気合を入れる島津の坊主。
大丈夫だろうか。こいつが気合を入れる時は大概ろくでもない事が起こる。

まあ、私の緋鷺刀を害するような献上品だったら私の制裁が待っているがな。覚悟をしておけ島津の坊主。

密かな私の決意を感じ取ったのか、島津の坊主は背中を震わせ感じた悪寒に首を傾げていた。

そうこうしている内に風間の坊主が持ってきたバッグからラッピングされた袋を取り出した。
どうやら個人ではなく全員でお金を出し合ってプレゼントを買ったようだ。まあまだ小学生でしかないこいつらには個人で買うのはまず無理だろう。

「まずは俺と大和とワン子とジン兄からのプレゼントだ！　受け取ってくれヒロ！」

やたら元気な声で風間の坊主は緋鷺刀にプレゼントを渡した。
もちろんその瞬間をビデオに収めるのは忘れない。

―大きさからして衣服か？　緋鷺刀開けて見ろ。

「開けてもいい？」

私の言葉で緋鷺刀は風間の坊主たちに伺いを立てた。
それに頷いて答えたのを見た緋鷺刀はゆっくりと丁寧にラッピングを剥がし、袋の中のものを取り出した。

予想通りそれは衣服だった。ただ少し予想と違っていた。

「これは……」

―ハーフパンツだな。

衣服を広げた緋鷺刀の言葉を引き継いで言う。
誕生日プレゼントに衣服とはな。結構な大盤振る舞いな事だ。

―かなり見栄を張ったな。お前たちからすれば高かっただろ？

「そうでもなかったです。兄弟が安いところを知っていたおかげで予算内で収まりましたから」

「サイズも1サイズ大きいのを買ってきたから、すぐに履けなくなるって事もないからね」

直江の坊主と岡本の犬っ娘が答えて来た。
ちゃんと考えたプレゼントのようだ。緋鷺刀も満足している。いい仕事だぞお前たち。

嬉しそうにしている緋鷺刀を忘れずにカメラに収める。

「次は私たちだな。モロロ！」

「ねえ、本当にこれ渡すの？　僕後が怖いんだけど」

恐る恐る、何故か私の方に伺いを立てながらプレゼントを取り出す師岡の坊主。

なんだ？　私の機嫌を損ねるようなプレゼントなのか？　見た感じさっきと同じ衣服だと思うんだが……

「えっと……これが僕とガクトとモモ先輩からのプレゼント。それから先に謝っておくねタカ。ごめん」

「凄く不安になるんだけど……」

師岡の坊主の言葉に困ったような表情を浮かべながらも、一応差し出されたプレゼントを受け取る緋鷺刀。困った顔もまた可愛い。もちろんカメラに収める。

「さあ！　早く開けてみろタカ！」

面白くて楽しくてしょうがないといった感じの笑顔で促す川神の戦っ娘。

何故かその顔が私が緋鷺刀をイジル時の顔とダブって見えた。

何となしにプレゼントの中身が分かってきた。なるほど、師岡の坊主が戦々恐々なわけだ。

袋を開けた緋鷺刀を見て私の予感が当たっていた事を確信する。

入っていたのは予想通り衣服。

だがそれは――

「何で女の子用のキャミソールなの！？」

愕然とした表情の緋鷺刀に川神の戦っ娘と島津の坊主の笑い声が重なる。

やはり予想通り緋鷺刀の外見から選んだネタ的なプレゼントだった。

喧々囂々と言い争う3人を眺めながら、私は少しの間考える。

キャミソールにハーフパンツか……ふむ。

―緋鷺刀。

「なに凛奈さん！」

興奮冷めやらぬ声で答えて来た緋鷺刀に私は問答無用で言う。

―それに着替えろ。

「えっ？」

―そのキャミソールとハーフパンに着替えろと言ったんだ。

呆然とする緋鷺刀に再度言う。

突然の私の行動に、さっきまで囃し立てていた川神の戦っ娘も島津の坊主も呆然としている。残りの5人も私を『なに言ってるんだこの人』といった感じで見ている。

唐突なのは分かっている。だが見たいのだ私は。

キャミソールとハーフパンツを着た可愛い緋鷺刀の姿を！

―いいからさっさと着替えて来い。家主命令だ。

最後通牒を渡され愕然としたまま自分の部屋に戻っていく緋鷺刀。ちゃんとプレゼントの衣装を持って行くあたり覚悟は決まったようだ。

さて、緋鷺刀が着替えている間に私も用意をしなければ。

持っていたビデオカメラを仕舞いながら目的のものを取り出す。

「あの～凛奈さん？」

―なんだ暁の坊主。私は今忙しい。

「何の準備をしているんですか？」

―決まっているだろう。可愛い緋鷺刀の姿を写真に収めるための準備だ。

「それ……一眼レフですよね？」

―それがどうした？　緋鷺刀の姿を取るんだ。最高級のものに決まっているだろ。

「……」

―まだ何か質問があるのか？

「いいえ……もういいです」

―そうか。

どこか疲れたような表情で引き下がる暁の坊主を無視して、私は久し振りに取り出した一式総額２５万もした一眼レフのカメラを構えた。

さあ緋鷺刀！　準備は出来た！　いつでもいいぞ！

私にお前の最高に可愛い姿を見せてくれ！！

閑話　篁凛奈の優越な一時（後書き）

あとがき～！

「閑話終了。あとがき座談会特別編、司会の春夏秋冬　廻です。今回のお相手は――」

「篁凛奈だ」

「特別編という事でゲストも特別です」

「おい貴様」

「はい？　何でしょうか」

「どうして最後に着替え終わった緋鷺刀の姿が出てこなかったんだ。私の楽しみを返せ」

「いや返せと言われましても……そもそも今回の話は１２話で緋鷺刀が言っていた『今年１番の悪い思い出』についての話ですから……理由が分かればいちいち姿を出さなくてもいいような……」

「黙れ、私は見たかったんだ」

「そんなに緋鷺刀が好きなんですか？」

「ああ好きだ。血縁関係がなければ私が婿にもらいたいぐらいだ。何故叔母と甥は結婚できないんだ」

「駄目だこの人、もはや変態になり下がってる」

「何を言う。私は“可愛い緋鷺刀だけ”を愛でたいのだ」

「よし。これから貴女を叔母馬鹿（アブノーマル）で緋鷺刀至上主義な篁凛奈（ヘンタイ）と呼ぼう」

「ほういい度胸だ。後で絞めてやるから覚悟しておけ。ところで緋鷺刀の母親の名前が出てきたがあの名前……」

「初期設定での緋鷺刀が女だったときの名前だね。再利用したんです」

「そうか、では疑問は解決した」

「あの～なんで刀を持っているんでしょうか？」

「さっき言っただろ。後で絞めてやるから覚悟しておけと」

「ではみなさんさよ～なら～」

「待て！　逃げる事は許さん！」

閑話　黛由紀江、元気です（前書き）

閑話第２話投稿。

まゆっちです

閑話　黛由紀江、元気です

拝啓。

早春の候、日増しに暖かくなってまいりましたが、いかがお過ごしでしょうか。

届く事も投函する事もない手紙を書き始め、早くも3年になろうとしています。

今日は私の近況をお知らせしようと思い筆を取りました。

暦も3月に入り、私も3年間お世話になりました中学を卒業する事となりました。

考えると感慨深い思いが込み上げてきます。

希望に満ちていた3年前、私は今度こそお友達を作ろうと頑張ってみたものの、結果は無残にも敗れ去りました。

何がいけないのか分からないまま日が過ぎ、いつの間にか学年で孤立する事になり寂しい思いを抱いていたのを懐かしく思います。

そんな折に貴方に出会い、私は人との触れ合いがこんなにも楽しいものなのだと改めて知りました。

貴方との1日だけの出会いの後、私なりになんとか頑張ってお友達作りに精を出したのですが、結果はやはり惨敗でした。

本当に何がいけなかったのでしょう。

私は１人部屋にこもり反省の毎日を送っていました。

そんな日が３年も続き、結局１人のお友達を作る事も出来ず、いつの間にか卒業を迎える事となってしまいました。

寂しい中学校生活と言われれば、返す言葉がない所存です。

ですがそれも中学までです。

翌月の４月からは父上の勧めもあり、県外の高校に入学する事になりました。

神奈川県川神市にある川神学園です。

機会を与えて下さった父上に感謝し、心機一転、私は新天地で新たな生活を始める事になります。

今までの私を誰も知らない新しい土地と学校で、私は今度こそお友達を作ってみせます。

この文を持って私は宣言いたします。

頑張れ友達１００人出来るかな。

松風も応援してくれています。

この目標のもとに、私は頑張っていきたいと思います。

貴方も４月より新しい生活が始まると思います。

届く事のないこの手紙で申し上げる事ではないかと思いますが、お体に気を付けてこれから始まるであろう学校生活を謳歌して下さい。

では、不順な天候が続いておりますゆえ、どうぞくれぐれもご自愛ください。

かしこ。

§　§　§

――２００９年　３月２９日　日曜日　ＡＭ１０：００――

「ふぅ」

私は手紙を書き終え筆を置くと、座ったまま背筋を伸ばし小さく息を吐きました。

振り返り部屋を見渡します。

がらんとした部屋には最小限の物しか置かれていません。

机の棚にも本棚にも何もなく、箪笥の中身も殆ど入っていません。

今日の昼に私はこの部屋、いいえ、この家を出て高校の学生寮に入ります。荷物は先に郵送しているので、持って行くものは数日分の着替えと身の周りの小物だけ。

そして、父上より賜りました日本刀と木彫りの馬のストラップ『松風』だけです。

１５年もの月日を過ごした家を出て行く事に、寂しさを覚えない方がおかしいですよね。

思い出せば思い出すほど懐かしい記憶が脳裏をよぎり、えもえいない想いが込み上げ、ともすれば溢れ出る涙を堪えるので精いっぱいになります。

私はそんな思いを振り払うように頭を小さく振りました。

ここを出て行くのは新しい生活のためです。

新たな生活に希望を持ってこの家を出て行くのです。

悲しみ暮れている暇なんかありません。

「よし」

気を取り直し気合を入れるため小さく呟いた私は、先ほどまで書いていた手紙に再び視線を落としました。

届く事はおろか、投函すらした事のない自己満足の手紙。

書き嗜み始めて既に３５通を数えます。

『タカ』さんと出会ってからほぼ毎月１通を書き上げてきましたが、住所はおろか本名さえ名乗り合っていない私たち。

手紙を送るなんて出来るはずがないと気付いたのは、１通目の手紙を書き終えて意気揚々と宛名を書こうとした時です。

あの時の脱力感は今でも覚えています。でも何故か止める事が出来

ず、いつの間にか毎月毎月必ず書くことになっていました。

今思えば、私の心が『タカ』さんとの繋がりが切れてしまうのを、恐れていたからなのかもしれません。それほどあの子との出会いは私にとって大切なものとなりました。

一方的ではありますが、私にとっての唯一のお友達です。そう簡単にこの絆を切りたくないのは当たり前だったのかもしれません。

「おうまゆっち。感傷に浸っているのはいいけどさ、そろそろ行く時間だぜ」

松風の声に私は部屋にかかっている時計に目を向けました。時間は既に１０時半を指しています。

「そうですね。そろそろ出立の準備をしないと電車に間に合いませんね」

手紙を丁寧に折り畳み、今まで書いた手紙を仕舞っていた箱に今日書いた手紙を入れると、その箱を抱えて立ち上がり足元にあったバッグに詰め込みました。

「そいつも持って行くのか？　まゆっち」

「はい。川神に行っても書き続けようかと思いまして」

「でもさまゆっち。もしかしたら会えるかもしれないぜ」

「え？」

松風の言葉に私は荷物を持とうとした手を止めました。
それはいったいどういう意味でしょう。いったい誰に会えるというんでしょうか。

「だってさ、考えてみろよまゆっち。川神学園ってのは武士の末裔がよく集まるらしいじゃん。って事は武術をやっている奴も集まって来る」

「武術をしている『タカ』さんも入学する可能性があると言う事ですか？」

自分の言葉にやっと気付きました。
そうです、父上が私に川神学園を薦めた理由もそれでした。

川神市には武家の末裔が多く、市内にある川神学園も学園長をあの川神院の総代の川神鉄心さんが務めているため、武家の末裔の子たちや武術を嗜んでいる子たちが進学してくる。

そういった理由から、私にも新しい刺激になるのではないかと父上が仰っていました。

松風の言う通り、可能性は高いかもしれません。

今でもはっきりと覚えています。
引き締まった身体つき、正しい姿勢、気配を読む洞察力、歩いている時の無駄のない足運び、どれをとっても洗礼された武を感じさせる姿。

私にとってあの時から目標となっている彼。恐らくあのまま強くなっているのなら、私より一段上に昇っているに違いありません。

そんな『タカ』さんに会う事が出来るかもしれない。
新たな希望が出来ました。

「まゆっち、可能性に賭けてみようぜ」

私の思いを後押しするように言う松風に笑顔を浮かべ答えます。

「そうですね。過度に期待し過ぎず、でもその可能性に希望を込めて」

「新しい生活、頑張ろうぜ！　まゆっち！」

「はい。頑張りましょう松風」

新たな決意のもと、私は荷物を取りこれから始まる生活の第1歩として、笑顔のままこれまで過ごしてきた部屋から足を踏み出しました。

『タカ』さん。

『まゆ』こと黛由紀江、元気です。

閑話　黛由紀江、元気です（後書き）

あとがき～！

「閑話終了。あとがき座談会特別編、司会の春夏秋冬　廻です。今回のお相手は――」

「ま、ま、まままま黛、ゆ、ゆ、ゆゆゆゆゆゆゆゆ由紀江です！」

「落ち着こうね、まゆっち」

「は、はいぃぃ！？」

「全然落ち着けてないじゃん。おい松風、どうにかしてくれ」

「オイラに頼るんじゃねーよ、おいまゆっち、深呼吸だ」

「すうぅ～～はあぁ～～」

「落ち着いた？」

「はい、無様な姿をお見せして申し訳ありません」

「いや、落ち着いたのならいいよ。さて今回のお話も閑話だったんだけど」

「なんでまゆっちを主役にしたんだ？」

「布石になっていない布石かな？」

「布石……ですか？」

「そう。前にも言ったけど次は緋鷺刀と君の入学式の日での再会の予定だからね。その前座って感じで書いてみたわけ」

「そうなんですか……」

「オイ！　ていうかここで言っちゃっていいのかよ？　まゆっちとタカっちが再会する事！」

「タカっちって誰の事だよ。まあ、あとがきと本文は違う世界ということにしてね」

「変な逃げ道作ってんじゃねーよ」

「こら松風。あまり失礼なことを言ってはいけません」

「はいオイラ反省」

「ホントにいつ見ても不思議なんだよね。この娘のこの光景……」

第４３話　川神学園入学、３度目の出会い（前書き）

第４３話投稿。

原作突入直前。

第４３話　川神学園入学、３度目の出会い

――２００９年　４月７日　火曜日　ＡＭ８：００――

ｓｉｄｅ　直江大和

暇だ。

内申のために入学式の案内係に立候補したのはいいが、人通りの少ない場所に配置されてしまい今は物凄く暇だ。
する事もないので街道に咲く満開の桜を眺めながら突っ立っていると横手から声が掛けられた。

「何やってるの大和君、案内係？」

声のした方に顔を向けるとそこにはヒロがいた。
その川神学院の制服姿を見て、そういえばヒロも新入生だったという事を思い出した。
いつも風間ファミリーで一緒にいるため、感覚がおかしくなってしまう時がある。気を付けなければ。

「なに？　その『そういえば新入生だったな』って顔」

「……何で分かった？」

「そういう顔してるから」

最近ヒロは雰囲気というか人の表情筋というか、そういうものを読んでこちらの思った事を的確に当てるようになった。

何でも凛奈さんとの修練の賜物と言っているが、侮れないなホント。

「ずいぶん早いな」

腕時計で時間を確認する。

時刻はまだ朝の8時だ。今日の入学式の開始は9時半だから新入生は9時までに集合場所に集まればいい事になっている。

「そうかな？」

「まだ集合時間まで1時間あるぞ。何でこんなに早いんだ？」

腕時計で時間を見せながら問い掛けると、ヒロはどこか困ったような呆れたような表情を浮かべ、何故か遠い目になった。

何やらとんでもない理由があるみたいだ。

「逃げて来たんだよ」

逃げて来た？

これまた物凄い言葉が出てきたな。あのヒロが逃げ出すほどの事っていったいなんだろう。予想がつきそうでもあるが。

「凛奈さんがね、昨日の夜から担当編集者もマネージャーも巻き込んで宴会やってたんだ」

「何の宴会だ？」

「僕の入学祝」

相も変わらずの『緋鷺刀至上主義』な人だな、あの人は。

ヒロが『凛奈さん』と呼ぶのはヒロの叔母さん（こう呼ぶと殺される）で、フルネームは篁凛奈さん。
甥であるヒロを溺愛する『叔母馬鹿』であり、ある意味でヒロのために全てを捧げている『緋鷺刀至上主義』の27歳である。
27歳である。

重要なので2回言っておく。

「で？　朝から絡まれたから逃げて来たのか？」

「その方がマシだよ……ねえ大和君、朝起きたら用意したはずの制服が女子のものになってたらどう思う？」

「どう思うってお前……」

ヒロの言いたい事が分かってしまった。それと同時になんて凛奈さんらしいんだろうとも思った。
普段は緋鷺刀至上のくせに、イジレる時はとことんまでイジル人だからなあの人。愛情の裏返しなのはたぶんヒロも理解して入ると思うが……難儀だな。

「男子の制服を巧みに隠しているし、着替えようと思ったら部屋にまで乱入してくるし、しかも女子の制服を持って着替えさせようとしてくるし、さらに酒臭いし……」

「強く生きろ、ヒロ」

肩を落としどう見ても新入生の雰囲気じゃないヒロを一応慰めてお

く。

ある意味でいつも通りの事だからそのうち浮上するのは分かっているので、あからさまな慰めの言葉なんか必要ないだろう。

数秒間、それでも何か愚痴のようなものを呟いていたが、鬱憤をすべて吐き出すように大きくいを吐いたヒロは予想通りいつもの状態まで浮上した。

「そういう事だから、早めに行って本でも読んでるよ」

「おう、じゃあまた秘密基地でな」

手を振って学院に向かうヒロに俺も軽く手を振り返して見送る。

ヒロも今年度から川神学院の生徒だ。また1年、兄弟を除くファミリー全員が同じ格好に通う事になり、騒がしくも楽しい1年が始まるんだろう。

そういえば兄弟が行方不明になってもう2年と8ヶ月か。生きてるのは間違いないんだからいい加減帰って来てもいい頃だろ。

何やってんだろうねあいつも。

そう考えながら再び満開の桜を眺めていたら、走ってきた誰かとぶつかった。

「うわっとと」

「後ろ回り受け身！」

俺はよろける程度だったが、かなりの勢いでぶつかってきた相手はこけるかなと思ったが、見事な回転を見せてダメージを失くしてい

た。
だが弾みで鞄などが地面に落ちていたので、拾ってあげようかと思いしゃがみ込むと、ぶつかってきた相手の顔が見えた。

「あああすすす、すみません」

「おおう」

意外と可愛い子だった。姉さんと同じ黒髪がさらりと伸びて彼女によく似合っている。

「わ、私……い、急いでて……その、あの」

なんだかテンパっているみたいなので、出来るだけ優しく言葉を掛ける。

「まだ開始まで時間あるし、慌てる時間じゃないよ」

「いえでも新入生なんだから早めに来ようと思いましてですね……ああ先輩に対していえなどという否定形から入ってしまった！！」

何やらさらにテンパらせてしまったらしい。
とりあえず無視しておいた方がいいだろうと判断し、俺は未だに地面に転がったままの鞄と何やら黒い馬のマスコットがついたストラップを拾う。っていうか携帯も持ってないのにストラップ持ってるのかこの子。

「はい、鞄と携帯ストラップ」

「あ……わ……わわわわ、わざわざ拾って頂いてありがとうござい

ますっ！？」

ねえ、親切で拾ってやったのに何故ガンつけられるわけ！？　いやでも緊張してるのかこの子？　なんか声も震えているし。だがその時、彼女が大切そうに抱えていた竹刀袋が目に入った。っていうかあれってもしかして日本刀じゃないか？

「それってもしかして刀？　サムライソード？」

「はい」

俺の質問に彼女は素で答える。
川神学院は武士の末裔が集まる学校でもある。各教室にも武器のレプリカが置いてあるくらいだ、武器のようなものを持ってくる新入生がいてもおかしくないだろう。

だが、ここは川神学院の“敷地外”だ。しかも武器を持つ人がいる、あるいは来るという話は受けていない。
俺は即座に携帯を取り出しある番号を押す。

「もしもし、こちらポイント２３。異常ありません。逆に退屈なぐらいですよ。では定時報告でした」

俺の突然の行動に訳が分からず首を傾げている新入生女子。
到着まであと数秒、時間を稼いでおくか。

「ごめんね、定時報告をしてたんだ。ほら腕章ついてるだろう？俺は案内係なんだ」

左腕に付けている腕章を指さしながら彼女に見えるように前に出す。

そんな彼女の後ろから警官が姿を見せたが、彼女はまだそれに気付いていない。それどころが呆然とした声を出した。

「そ、そうでしたか……」

はい、ゲームオーバー。

「いたいた。君、銃刀法違反を知ってるよね？」

「え　ぇ？」

「さぁ一緒に来てもらおうか」

「うわわわわっーーー！？」

警察官に腕を掴まれた彼女は瞬く間にひっ捕えられていった。異常ありませんって報告は異常があるという事なのだ。怪しい人を逃がさないためのもので、何も問題ない時は違う言葉でやり取りをする事が決まっていた。

しかし刀か……可愛かったのにな。少し残念だ。

その後、彼女は警官と共に戻ってきた。

どうやら刀の所持は許可が出ていたらしい。俺たち末端まで話が来てないのは警備としては駄目なところだろう。

彼女も怪しい人物でもなく、ちゃんとした新入生である事も判明し一件落着。

ただ、最後に感謝の言葉とは裏腹に睨まれたのだけはどうしようかと思った。

side out

side 篁緋鷺刀

今の時間は9時15分。
もうすぐ入学式が始まる時間だ。

学園に入って受付をし、その場でクラスを教えてもらい入学式が始まるまでそのクラスで待機する事になっていた。
予想通り1番に到着した僕は受付でクラスを教えてもらい1-Cの教室に入ると、席順は決まっていないので窓際の1番後ろの席に腰を下ろし、文庫本を呼んでいた。

そうやって30分ぐらい過ごしていると、徐々に同じ新入生が集まってきた。
特に目立つつもりもなく、入学式当日から友人を作るのも無理だろうと思うから僕はそのまま本を読む事にする。

中学校からの友達同士なのか、何人かの女子が固まりながらこちらを見て何やら内緒話をしているのを感じたが、とりあえずは無視をしておく。
どうせ僕の外見を見て何か憶測でも立てているのだろう。中学校の入学式の時にもあった事だから気にするだけ無駄だ。

そんな事を考えていると、3人の女子が僕に近付いて来た。
僕が座っている席を囲うように立つ3人。その中心にいた子が声を掛けてきた。

「ねぇ、何で男子の制服を着てるの？」

1番最初の発言がそれですか。貴女たちの中では僕が女の子なのは決定事項なんですか。そうなんですか。そうなんですね。

黙って何も言わない僕を見て、一緒にいた女子の1人がどこか苛立った口調で問い詰めてきた。

「聞いてんの？　何で男子の制服なんか着てるのかって言ってんの！　なに？　アンタ入学式から目立ちたいだなんていい度胸してるじゃん」

いい度胸しているのは貴女たちの方だと思うんだけどな。

なんなんだろうこの人たち。あれかな、入学初日から気に入らない子をシメようという魂胆なのかな。

でもまあ、そろそろ黙って聞いているのも我慢の限界にきている。

パン

僕は読んでいた本を勢いよく閉じた。

みんなこちらを窺っていたのだろう、その音は思った以上に教室に響き渡った。

突然の僕の行動に驚いていた彼女たちだったが、怒りに顔を引きつらせるのが見て分かった。だが、何かを言われる前に僕は受付の時に受け取った生徒手帳を取り出し、写真付きの身分証明の欄を彼女たちの眼前突き出した。

「なに？　生徒手帳がどうし――」

「篁緋鷺刀。性別は“男”です」

被せるように言った僕の言葉に、彼女たちは目を見開き広げた生徒手帳を食い入るようにみる。
そして僕の言ってる事が本当だと理解したのだろう、バツの悪そうな顔をすると3人ともまるで逃げるかのように僕から離れて行った。

何もなかったかのように生徒手帳を閉じ制服のポケットにしまう。
中学校の入学式の時は誤解を解くのにかなりの時間がかかったから、先に生徒手帳を受け取れてよかった。

やっぱりきちんと身分を証明できるものがあるのはいいね。説明が簡単だ。
だがどうやらある意味で目立ってしまったらしい。何やら僕を取り囲む雰囲気が怪しいものになり始めているのを感じた。

これから先、少し大変かなと考えていた時、教室の後ろのドアが物凄い勢いで開いた。
かなりの音を立てて開いたドアに、教室にいた全員の視線が集中した。

そこにいたのは1人の女生徒。よほど急いでいたのだろう肩を上下させ息を整えていたが、それもほんの数秒で持ち直し彼女は伏せていた顔を上げた。

その顔を見た瞬間、感じたのは懐かしさだった。

彼女は自分が注目されていると事に気付くと驚いた後で顔を引きつらせる。そして忙しなく顔を動かし僕の隣に空席を見つけ、小走りで駆け寄り隣の僕に小さく頭を下げると、恥ずかしさに身を小さくして座り込んだ。

そんな彼女の姿を横目で見る。
大事に抱えているあの竹刀袋……あれって中身は日本刀かもしれない。
学生で、しかも新入生の彼女が日本刀所持の許可を貰っているという事は、それなりの家柄の子なんだろう。
だけど今の僕にはそんな事どうでもよかった。
感じた懐かしさの正体が分かった。身を小さくして恥ずかしそうに座る彼女。その姿を見て3年前のゴールデンウィーク、石川県加賀市、あの一期一会の出会いを思い出していた。
机の上に置かれた黒い馬のマスコットがついたストラップ。
ああ、間違いない。彼女は『まゆ』なんだ。
思いがけない再会に、僕は誰にも気付かれないように小さく笑みをこぼした。
そんな僕の気配を察したのか、彼女は俯いていた顔を少しだけ上げると窺うように顔と視線をこっちに向けた。
「ひぅ！？」
視線がぶつかり、彼女は小さく意味不明な悲鳴を上げ慌ててもとの俯いた姿勢に戻った。
いや、もと姿勢じゃないねあれは。
険しい表情のまま抱えた竹刀袋を持つ腕が無茶苦茶震えているし、目は見開き肌寒いくらいの気温なのに汗を流している。

初めて会った時と同じでテンパってるのがよく分かる。
あれはいきなり目が合ってしかもすぐに逸らしてしまった事に後悔して、自分を卑下して心の中で謝罪しているんだろう。

本当に変わっていない。

そう思った僕は微笑ましくもあり、同時に呆れるような感じで気配に出さずに笑ったのだった。

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

ｓｉｄｅ　黛由紀江

入学式も滞りなく終了し、今は教室でＳＨＲ（ショートホームルーム）の時間です。
全員で簡単な自己紹介を終え、今は先生の話を聞いています。どうやら今日はこの時間が終われば解散、自由下校となるそうです。

ですが何故か空気がおかしいです。
担任の先生の最初座っていた席でいいから座りなさいとの言葉に、窓側から2列目の1番後ろの席に私は座っています。
なのに空気がおかしい――おかしいといのも変な例えですね。正確に言うなら私を気にしているみなさんの気配をヒシヒシと感じるのです。

この雰囲気に嫌な予感を私は感じてしまいます。
今、私を包むこの雰囲気は中学校の時と同じ雰囲気です。遠巻きに私を眺め、何か恐れ多いものに気を配る雰囲気……お友達を作る事すら躊躇うような雰囲気です。

またしてもお友達作りに初っ端から躓いてしまうのでしょうか!?
せっかく『友達１００人出来るかな?』の目標も立てたというのに!?

でもこの雰囲気ですが、もっと正確に言うなら私と隣に座る男子生徒さんに対する視線です。

男子の制服を着ていますし、自己紹介で名乗った名前も男性のものですから男子生徒で間違いないのですが、物凄く綺麗な顔立ちをしていらっしゃいます。とても男性には見えません。

なのにその姿を見て懐かしさが込み上げてくるのは何故でしょうか?

朝、遅れまいと急いで教室に入り注目される中で席を見つけ、取りに座っていた彼を見た時、最初に感じたのは懐かしさでした。

気になって横目で姿を確認した時、目が合ってしまい咄嗟に逸らしてしまいました。
大変失礼な事をしてしまった私に対し、彼は柔らかで穏やかな雰囲気で私を見ていたのです。

「――――さん?」

その瞬間に思ったのが私はこの人を知っているという事です。

「――ずみさん?」

いいえ、知っているではありません。
この雰囲気、私がずっと会いたかったあの子の――

「黛さん！」

「は、はいぃ！？」

急に掛けられた声に私は思わず上ずった声をあげてしまいました。
声の方に顔を向けると、隣に座っていた男子生徒が私の方を心配そうに、だけど少しだけ呆れを含ませた表情で見ていたました。

「大丈夫？　もうＳＨＲ（ショートホームルーム）終わってみんな帰ったよ？」

そう言われて私は慌てて周りを見渡しました。彼の言う通り、教室には私と彼以外は誰１人としていませんでした。

ああ何という事でしょう。私が馬鹿みたいに落ち込んで考え事をしている最中にＳＨＲ（ショートホームルーム）も終り、私はどうやらみなさんに置いていかれてしまったようです。
考え込んでいる姿が近寄りがたかったのでしょう。きっとそうです。
そうに違いありません！

自己嫌悪の谷底に落ちる私を心配そうに見ている彼を見て、ふと気が付きました。
何故この方は帰らずに私に声を掛けてくれたのでしょうか？

「あ、あの、どうして、あ、貴方は、か、かか帰らなかってんです

か！？」

「ちょっと黛さんに用事があったから」

震えながらの私の問いかけに彼は不思議な答えを返してきたのでした。

これは何でしょうか？　もしかしてナンパと言うものでしょうか？

いえいえいえいえ！　そんな事あるわけありません何を自惚れているのでしょうか私はこんな卑屈で何の取り柄のない私にこんな綺麗な顔をした方がナンパなんておこがましいったらありゃしませんよねそれよりもこんな誠実そうな雰囲気を纏う方がナンパなんてする訳ないですよね何を考えているんですか私はこの方に失礼ですよ黛由紀江！！

「えっと落ち着いてね？　はい息を吸って～吐いて～」

スウゥゥ　ハアァァ

彼の言葉に従って深呼吸をしました。

なんでしょう、このやり取りもあの子を思い出せます。やっぱりこの方があの子――『タカ』さんなのでしょうか？

確かめたいのに怖くてそれが出来ない私がいます。

「ここで話すのもなんだし、屋上に行こうか？」

期待と恐怖の板挟みに、自分で決断を付けられない私に彼は上を指さして提案してきました。

その提案に、私は少しの期待を込めながら頷いたのでした。

第４３話　川神学園入学、３度目の出会い（後書き）

あとがき～！

「第４３話終了。あとがき座談会、司会の春夏秋冬　廻です。今回のお相手は――」

「ようやく学園に入学しました箪緋鷺刀です」

「おめでとう。さて今回のお話ですが予告通り緋鷺刀と由紀江の再会です」

「その割にはまだ『まゆ』は確信してないですね」

「そうだね、次回できちんとした自己紹介があるからね。でもやっぱり読み返してみるとただのナンパだよねこれ」

「書いたの貴方でしょ……確かに入学初日に用事があってなんて普通はありえませんからね」

「後は君の入学式での通過儀礼」

「それはもういいです。っていうかもう僕も１５歳ですよ？　それなのに女に間違われるなんてどれほど女顔なんですか！？」

「いや、だからほぼ女顔だと前から言っているだろ」

「なんでこんな容姿にしたんですか？」

「なんでって、面白いから？」

「どうして疑問形なんですか……」

「そんなことはどうでもいいけど、今回でやっと原作突入直前まで来ました。次回で２人の再会も終わり間違いなく原作に突入します」

「本当にやっとですね。ところで１つ聞きたい事が」

「なに？」

「僕たちっていつになったら小さい時に１度だけお互いを見ていた事を思い出すんですか？」

「結構後かな」

「何でですか？」

「まだ何も考えていないから。という事で次回投稿もよろしくお願いします」

「そんなんでいいんですか！？」

第４４話　川神学園入学、篁緋鷺刀と黛由紀江（前書き）

第４４話投稿。

３度目の出会いにして２度目の再会、ついに本当のお友達に。

第４４話　川神学園入学、篁緋鷺刀と黛由紀江

僕と黛さんは屋上に続く階段を上っている。

あの後、不思議がりながらもどこか葛藤を見せていた彼女に屋上に行こうと誘った。

彼女は首を傾げどこか訝しみながらも僕の後ろをついて来た。

「あの……勝手に屋上に出てもいいんでしょうか？」

「問題ないよ、この学園の屋上は生徒に解放されているから」

心配そうに問いかけて来た彼女に安心させるように振り返って笑いかける。

以前から上級生の大和君たちから聞いているので、屋上が立ち入り自由なのは最初から知っている。

何故か急に顔を赤くして俯かせる彼女。

それを見た僕は不思議に思いながらも素直に可愛いなと思った。

『お前の笑顔はある種の凶器だ。やたらめったら振り撒くなよ』

『女殺しのタカ。中学での撃墜数は伝説だもんね』

唐突にモモ先輩と京ちゃんの言葉を思い出した。

なるほど、こういう事になると分かっているから注意してきたのか。

そんな彼女と一緒に屋上の扉の前に着くと、どうやら先客がいたようで話し声が扉越しに聞こえた。

まあ、屋上を利用するのは僕たちだけじゃないのは分かっていたか

ら、忙しなくなる彼女を安心させるように頷いてから扉を開けた。
そこにいたのは2人の男子生徒と1人の女子生徒。しかも女子生徒の方には見覚えがあった。

「お～！　ヒーくんだ！」

「小雪さん？」

見覚えのある女生徒はやはり榊原小雪さんだった。
川神学園に進学したのは聞いていたけど、まさか僕の入学初日に出会う事になるとは思わなかった。

「久し振りだねヒーくん。2週間振り？」

「そうだね、僕の卒業祝いで会った時以来だから」

「そうだね～！」

僕は後ろにいた黛さんに『ちょっと待ってて』と手を上げる事で合図する。
彼女もそれで察してくれたらしく頷いて答えるのを見て、僕は改めて小雪さんと相対した。

ほんの2週間前、僕の中学の卒業祝いとしてモモ先輩と一緒に会っていた。

「久しぶりだね。まさか入学初日に合うとは思っていなかったよ」

「そうだね～。うん！　これも僕とヒーくんが本当の友達っていう

証拠だね！」

「モモ先輩にはもう会ったの？」

「ううん、ヒーくんの卒業祝い以降はまだ会ってないよ」

小雪さんは何故か僕とモモ先輩、そしてジン兄以外の僕たちの仲間に会おうとはしなかった。
どうしてかを聞くのも憚れていたので、問い質した事はなかったが、この間の卒業祝いの時に少しだけ教えてくれた。

小雪さんは今以上に友達を作るつもりはないとの事。
今は僕たち3人といつもいる2人が友達ならそれでいいと言っていた。

それを聞いた僕は返す言葉がなく、モモ先輩は小さく『そうか』と言って小雪さんの頭を撫でるだけだった。
小雪さん自身がそう思っているのなら、僕たちの考えを強要させる事は出来なかった。

「ねぇねぇトーマ、準。この子がヒーくんだよ！」

僕の考えを中断するように小雪さんは後ろにいた2人の男子生徒を呼んだ。
聞いた事がある名前だった。そうか、この2人が小雪さんの友達の葵冬馬さんと井上準さんなんだ。

「初めまして、葵冬馬と言います。お話は常々ユキから聞いていましたよ」

「井上準だ。よろしくな『ヒーくん』」

「準！　ヒーくんをヒーくんって呼んでいいのは僕だけだよ！」

順に自己紹介をする2人。井上先輩は僕のあだ名を呼んで小雪さんに怒られていた。

仲のよさそうな雰囲気に僕は安堵の表情を浮かべながら応えるように自己紹介をする。

「初めまして、今日から川神学園1年の篁緋鷺刀です」

軽く頭を下げて挨拶をする僕を、葵先輩はじっと覗き込むように顔を近づけて来た。

線の細い体つきに少し日本人離れした顔つき。恐らくハーフなんだろう。だが何故か微笑んだその笑顔を見て背筋に悪寒が奔った。

「ユキに聞いていた通りですね。綺麗な顔立ちです」

この人ヤバイ。瞬間的に本能で悟った。

「気を付けろ篁。若はバイだからな。男でも有りだ」

知りたくもなかった情報をどうもありがとうございます。井上先輩。僕は思わず1歩下がって葵先輩との間合いを取る。そんな僕を庇うように小雪さんは僕と葵先輩との間に割って入ってきた。

「トーマダメ。ヒーくんとジンにーだけはいくらトーマでも許さない」

「冗談ですよユキ。ちょっとしたお茶目です」

「いや若、あの目は本気だっただろ」

とりあえず危機は去ったと思っていいのかな？

何となく安堵の息を吐き胸を抑える僕に、葵先輩は何か意味ありげな視線を向けた後、僕の後ろにいた黛さんに視線を送る。

「ユキ、どうやら彼は後ろの彼女とお話があるみたいですから、私たちはお邪魔なようですからそろそろ退散しますよ」

「若の言う通りだ、世間話はまた後日でも出来るだろ」

そんな2人の言葉に僕の後ろにいた黛さんの存在に気付いたのだろう、小雪さんは少し驚いたように僕の後ろを覗き込むように視線を向けた。

急に視線を集めた黛さんは恥ずかしそうに恐縮している。

「ヒーくん！　また遊ぼうね～！」

視線を向けたのもほんの一瞬。小雪さんはそう言い残すと、先に屋上を後にした先輩たちの後を追って手を振りながら屋上から去っていった。

まるである種の台風一過のような感じを受けた僕は、気持ちを切り替えるように小さく短い息を吐く。そして屋上に出る扉の横に佇んでいた黛さんに改めて声を掛ける。

「ごめんね、僕が連れて来たのにほったらかしにしちゃって」

「いえいえいえ、お気になさらずに！　お友達との付き合いは大切

ですから！」

「そう言ってもらえるとありがたいよ」

僕は黛さんに近付くと、屋上に出る扉の横の壁に背を預け、彼女に正面から対するのではなく同じ方向を向くように横に並ぶような位置を取った。

そんな僕の行動を不思議そうに見ていた黛さんは、暫くの間は僕と同じようにフェンスの向こうの空を眺めていたけど、意を決するかのように小さく頷いた。

「さっきの方はお友達ですか？」

「うん。女の人はね。小学生の頃からの友達」

「そうなんですか……」

少し寂しそうに言う黛さん。

そんな彼女を見て僕は悟ってしまった。

彼女は未だに心を許せるような友達がいなんだという事に気が付いてしまった。

3年前、市内を案内してもらった時に、思わずといった感じで彼女は自分には友達がいないという事をもらした。

僕がどんな言葉を返していいか迷っているのと、彼女は自分の発言に気付き『気にしないで下さい』と慌てて言い繕ったけど、それにすらどう反応していいか分からなかったのが事実だった。

僕にとってその日1日だけの出会いだったから、慰めるような言葉は言えなかったし、彼女も自分の言った言葉をなかったかのように振る舞ったため、以降その話題に触れることなく、僕と彼女の1日

は終わったのだった。

あれから3年もたっているのに、彼女には友達がいないんだ。
その寂しさと孤独をずっと心に抱いていたんだ。
例え松風がいたとしても、その心を誰にも知られる事なく過ごしていたいんだ。

可哀想だなんて思いは、持てる者のおこがましさだ。
同情なんて彼女は望んでいない。それこそ彼女に失礼だ。

なら、僕に出来る、僕にしか出来ない事をすればいんだ。

例えあの日のあの時の出会いが一期一会のものだったとしても、僕にとって『まゆ』はもう友達だった。忘れる事の出来ないインパクトを与えてくれた友達だった。

そして今日、再び彼女と出会った。

これで一期一会の出会いじゃなくなったのなら、改めて友達として過ごしていけばいい。
時間はいくらでもある。
だってこれからこの川神学園での3年間は、確実に一緒に過ごす時間になるのだから。ならばお互いにとって望んだ関係でいた方が楽しいに決まっている。

僕の心はすでに決まった。
ならなんて声を掛けようか。それも迷う事じゃない。

彼女が『まゆ』ならあの話題を持っていけばいい。

「今日は僕を女の子と間違えなかったね。少しは男らしくなったかな？　それともちゃんと男子の制服を着ていたお陰かな？」

おどけるような、からかうような僕の言葉に、黛さんは弾かれたように物凄い勢いで僕の方に顔を向ける。

僕も彼女に方に顔を向け驚き目を見開くその顔に対し、イタズラが成功したような笑みを見せた。

「久し振り『まゆ』。３年振りだけど元気にしてた？」

僕のその言葉にさらに目を見開き驚きのまま固まる『まゆ』。

でもそれもほんの数秒。すぐに我を取り戻したまゆだったが、それでも口から出た声はまるで信じられないといったような感じだった。

「本当に……『タカ』さん……なんですか？」

どうやら彼女も『もしかして』という思いはあったようで、恐る恐る確認するかのように震えた声で問い掛けて来た。

その問いにゆっくりと頷いて答える。

瞬間、まゆの目に涙が溢れた。

でもそれを隠すかのように顔を俯ける。

「まゆ？」

顔を伏せ竹刀袋を握る腕が物凄く震えている。

その姿を見てさすがに心配になった僕は、壁から背を離し俯くまゆの顔を下から覗き込むように身を屈める。

と、彼女はいきなり僕に抱きついて来た。

混乱したのは僕の方だった。
何故抱きつかれたのかが分からない。
でも混乱する僕の事なんかお構いなしに、まゆはあらん限りの力を込めて抱きついている。

抱きついていても刀を入れた竹刀袋を放さないのはさすがと言うべきなのだろうか。剣士の矜持もここまでくれば凄いものだと思う。

そんな場違いな事を考える僕の耳に、感極まったまゆの声が響く。

「本当に！　本当にタカさんなんですね!?」

「ま、まゆ!?」

「会いたかったです！　本当に会いたかったんです！」

その声から本当に僕に会いたくて仕方なかったのは理解出来るけど、余り耳元で叫ばないでほしい。
僕とまゆの背はそんなに変わらないので、抱きつかれた状態だとちょうど口が耳元に当たるため、叫ばれると鼓膜に直接響いて耳が痛くなる。

感極まっている彼女を何とか落ち着かせよう。

というより、僕としては早く離れてほしいというのが正直なところ。

さっきから言い訳がましい事を考えてるけど、考えたくない事を考えそうだったから思考を無理矢理フル回転させていたのだ。

だって密着しているから分かるんだけど、どう見てもまゆの身体は高校1年生のものじゃないよねこれ。

はいごめんなさい変な事考えてます。

そんな自分の思考も同時に落ち着かせるため、まゆの背中を一定のリズムで優しく叩いていたら、冷静になった思考が彼女の現状をやっと理解した。

泣いているのだ。

これは歓喜の涙じゃない。
もちろん嬉しさの涙もあるのかもしれない。

でも抱きついている彼女から感じる雰囲気は、まるで迷子の子供がやっと親を見つけて孤独を癒すために縋りついているような感じだった。

こんな彼女の様子を見て僕は自分の考えがまだ甘かったと知った。

孤独が平気な人間なんていない。
1人でいて寂しく感じない人間なんていない。
そんなの当たり前だ。

まゆが抱えていた寂しさと孤独は僕が思っていた以上に深いものだったんだ。

そんな中で出会った僕が、まゆにとってある意味で特別な存在になってしまったのは、仕方のない事なのかもしれない。

あの時の僕は、まゆとの出会いは本当に一期一会のものだと考えていた。
確かに一緒に市内を散策した時は楽しかったし、また会えるような事もあるかなと思っていた。まゆに対しては失礼かもしれないけど、友達と思っていても僕にとってはその程度でしか考えていなかった。
でもまゆは違った。

欲しくて欲しくてしょうがなかった『お友達』。
一期一会の出会いだったかもしれないけれど、まゆは確かに手に入れたのだ。『タカ』というただ1人、唯一の同年代の『お友達』を。

その存在がまゆの心の中にあったからこそ耐えられたんだ。
『松風』と『タカ』という2つの心の拠り所があったから、まゆはめげずに友達を作る事を何度失敗しても頑張り続けることが出来たんだ。

そして今この時、まゆは心の拠り所であった『タカ』に再会した。

縋るなと言う方が無理なのかもしれない。
さっきのまゆの言葉がそれを物語っている。

『会いたかったです！　本当に会いたかったんです！』

この言葉は本当に心からの叫びだったんだ。
無意識なのかもしれないけど、寂しさと孤独を癒すための言葉だったんだ。

背中を叩いていた右手を頭に持っていき、所在なさ気にぶら下げておくだけだった左手でまゆをしっかりと抱き止める。

泣いている子供をあやすような感じで、穏やかに優しく指先だけを使って彼女の体を叩く。

そんな僕の気持ちが伝わったのだろう、ビクリと1回だけ身体を震わせたまゆは、堰を切ったかのように身体を小さく震わせると、声は出さなかったが溢れ出る涙を止める事なく泣き続けた。

落ち着きを取り戻したのはそれから１０分後。

僕の前にはこれでもかと言うくらい真っ赤にした顔を俯かせるまゆの姿。

自分の今までの行動が恥ずかしくて、甘えてしまった自分が情けなくてどうしようもなくなっている雰囲気を感じる。

まあ確かに冷静に考えてみれば、お互い大胆だったなと思う。

お互い３年前とは違いもう１５歳だ。大人ではないかもしれないが、子供だと言い張るには無理がある年齢だ。しかも同性ではなく異性。男女だ。

それなのに１０分間も密着するほどお互いが抱きついていたのだ。

恥ずかしいねうん。考えるんじゃなかった。

顔が赤くなっていくのがはっきりと分かる。俯いているので彼女に気付かれないのが何よりの救いだった。

「あ、あああああああああああああああああの！？」

必死で顔の赤みを消そうとしていた僕に、物凄いあの羅列が聞こえ

て来た。
考えるまでもない、テンパってるまゆの声だ。

「ど、どど、どどどどどどど、す、すすすすすす、すすすすす！？」

「落ち着こうねまゆ。何言ってるか全然分かんないから」

逆に僕はそのまゆらしい姿に落ち着きを取り戻し、熱を持っていた顔も元に戻っていくのを感じていた。

過呼吸になり掛けているまゆに、落ち着いて深呼吸するように促す。まゆも僕の言葉に素直に従い、2度、3度と深呼吸を繰り返し、ようやく落ち着きを取り戻した。

真っ赤な顔だけは戻らなかったけどね。

「落ち着いた？」

「はい……どうもすみませんでした。お恥ずかしい姿を見せてしまって」

自分の言葉により一層真っ赤になってしまうまゆ。
墓穴掘っているのがよく分かる。

慌てている時により慌てている人を見ると逆に落ち着くっていうのは本当なんだね。今まさに僕がその状況だった。

「でも僕は嬉しかったよ」

「ううぇい！？」

僕の言葉に意味不明な叫び声をあげて、もうこれ以上は無理なんじゃないかと言うほど真っ赤になって固まるまゆ。そんな姿を見て可愛いなと思う僕はどこか変なのかな。

でも誤解は解いておこう。

「変な意味じゃないよ。まゆも僕と会いたいって思ってくれてたんだなって」

「あ……」

小さく言葉を漏らしたまゆは数秒だけ俯いたが、すぐに顔を上げ柔らかい自然な笑顔を浮かべた。

「はい、ずっと会いたいと思っていました。おこがましい事かもしれませんが、私にとってタカさんはもうお友達になっていました」

「うん」

「実は川神学園に来る時に期待していたんです。タカさんに会えるかもしれないって」

意外なその言葉に僕は首を傾げる。

そんな僕を見てまゆは少しだけおかしそうに笑って言葉を続けた。

「この学園は武士の末裔が多く集まるって聞いて、武術を嗜んでいるタカさんも入学してくるんじゃないかって」

そういう事か。
確かに川神学園は敷地のある川神市に武士の末裔が多い事から、武術を嗜んでいる生徒が多くいる。川神院の養成所ではないかと言われていた事もあったぐらいだ。

「じゃあその可能性に賭けて正解だったね」

「はい」

元気に頷いたまゆに僕は姿勢を正して右手を差し出した。

「じゃあ改めて自己紹介。篁緋鷺刀。これからも『タカ』でいいよ」

おどけるような僕の言葉にまゆは小さく吹き出した後、同じように右手を出し僕の右手と重ねしっかりと握手をした。

「黛由紀江です。これからも『まゆ』って呼んで下さい」

２００９年４月７日火曜日ＡＭ１１：３０分。

これが僕―篁緋鷺刀と彼女―黛由紀江の本当の始まりの時だった。

ちなみに……

「オイ、オイラを忘れてもらっちゃあ困るぜタカっち」
「相変わらずだね松風」
「ま～な～でもまゆっちと友達になったって事はもちろん」
「ええ、もちろん松風もタカさんとお友達ですよ。そうですよね？」

「もちろんだよ。これからもよろしくね、松風」
「おっしゃ～！　ついにオイラにも友達が出来たぜ～！」
「はい！　やりましたね松風！」
「なんか一気に騒がしくなったね……」
「オイタカっち、オイラのアイデンティティーを否定すんなよ」
「松風って騒がしいのがアイデンティティーなの？」
「えっと、どうなんですか松風？」
「オイラに聞くなよまゆっち！？」
「やっぱり騒がしくなったよね、間違いないよ」

第４４話　川神学園入学、篁緋鷺刀と黛由紀江（後書き）

あとがき～！

「第４４話終了。あとがき座談会、司会の春夏秋冬　廻です。今回のお相手は――」

「引き続き篁緋鷺刀です」

「さて今回のお話ですが、やっと緋鷺刀と由紀江が『本当の友達』になりました」

「恥ずかしいですね」

「いやしかし、今回の話を書いていて本当に原作の由紀江は強いなと思った。普通友達がいないと性格捻くれるぞ」

「それなのに真っ直ぐなままですよね」

「本当だね。まあこの話での由紀江は君の存在のおかげで耐えていたところがあったから、出会った瞬間に爆発しちゃったけどね」

「思い出させないでください」

「いや～君もやっぱり男だね緋鷺刀君。まゆっちの体つきに興奮しちゃった？」

「それ以上言うと物理的強制沈黙を執行しますよ？」

「はいごめんなさい」

「それより次でついに原作入りですか？」

「そうです！　ついにです！　やっとです！　物語が始まって今回で４４話！　次回でやっと原作に突入いたします！」

「長かったですね」

「はい長かったです！　というわけで次回からの物語に待っていた方もそうでない方も！　期待しないでお待ち下さい！」

「だから日本語変ですよ」

第４５話　学園の日常、変わらぬ仲間（前書き）

第４５話投稿。

原作突入しました。

第４５話　学園の日常、変わらぬ仲間

――２００９年　４月２０日　月曜日　ＡＭ７：３０――

眠い。

一週間の始まりである月曜日。
湧きあがる眠気に何とか抗いながらも、まどろみの中を漂っていると、誰かの手で布団がゆっくりと剥がされる。
そして微かに布団が沈むのを感じ、誰かが寝ている俺の身体を跨ぐように手を着いている事を察する。

「おはよう大和。そして好き」

迫り来る何かを防ぐように手でガード。いつもの事だから目を開けずともタイミングはばっちりだ。
目を開けると案の定、京が四つん這いで寝ている俺を見下ろしていた。

「おはよう京。お友達で」

ある意味でいつも通りのやり取りを終え京を部屋の外に出し、着替えようかと服に手を掛けた時、１体のタマゴ型のロボットが部屋に入ってきた。

「クッキー。また勝手に鍵を開けたな」

「お前が早起きしないのが悪い。ああ、布団がグチャグチャじゃないか」

「朝から小言を言うな」

「なんてこと言うんだよ！　お前のためを思っていい言ってんだろ！
――余り舐めた事を言ってると斬り刻むぞ」

言葉の途中で急に変形をする。無駄にハイテクだが質量保存の法則を無視してないかこのロボット？
九鬼財閥が最先端の技術で作ったロボット。故に『クッキー』。安直だな。しかも作成者のせいか無駄に偉そうなところがあるがまあ、いいロボットではある。

洗顔し着替え終えて気分をクリアにすると、部屋で飼っているヤドカリたちにも挨拶をして廊下に出る。
朝食のいい匂いがして空腹のお腹を刺激する。寮母の島津麗子さんがすでに朝飯を用意してくれているのだろう。
廊下を進むとその麗子さんとはち合わせた。

「おう、大和ちゃんおはよう！」

「おはようございます。今日も麗しいですね」

お世辞は忘れてはいけない。
例え四十路を過ぎガタイのいい肝っ玉母ちゃんそのものの容姿をしていようとも、朝のおかずの追加のためならば、舌先三寸口八丁。
結果はタマゴ追加の権利を手に入れた。

いつの間にか隣を歩いていた京が麗子さんと何やら言い合っているが無視。朝食が用意されている1階の居間へと足を運ぶ。
そこにはまさに代表的な日本の朝ごはんといった献立が並んでいた。

うん、やっぱり日本人の朝食は銀シャリだな。

「お、おはよう……ございますっ！！」

いきなり気合の入った挨拶をしてきたのは、あの入学式の時に出会った1年生の女子。

まさか同じ寮で生活するとは思ってもいなかった。しかもあの出来事のせいか何かにつけて睨まれてる。

根に持たれたのかもしれない。

ひと言ふた言、言葉を交わすがすぐに行き詰り黙り込んでしまう。

難しい年頃なんだろう、触れないでおいてあげるのが先輩の優しさだろう。

席に着き箸を手に取り味噌汁を口にする。お椀を下ろして席についている人数を見渡すと、男子2人に女子2人の計4人、1人居ない事に気付いた。

「キャップはどうした？」

「またいないね」

「マイスターなら土曜の夜から外出中だよ」

俺と京の疑問に答えたのはクッキーだった。

またしてもいつもの放浪癖が出たんだろうが、気にするだけ無駄なので放置する。

気を取り直した俺は朝食を続ける。
たまに京が自分用にカスタマイズされた激辛食材を提供してくるが、断固として拒否しながら俺としては楽しく食べ続けていると、もう1人の男子生徒が声を掛けてくる。

「ちったぁ黙って食えないのかテメーらは」

もう1人の寮生で同じクラスの男子生徒。
健康的な不良という新ジャンルを開拓した彼の名は源忠勝（みなもとただかつ）。名前が『源』なだけにあだ名はゲンさんだ。
強面な外見に騙される事なかれ、彼は結構いい人だ。今日も今日とてダメ元で頼んだきゅうりのおしんこを、文句を言いながらも1切れくれた。

うん、やっぱりいい人だ。

登校の準備を終え8時15分。いつも通り京と寮の前でガクトを待つ。
ちなみにゲンさんは何度一緒にこうと言っても先に行ってしまう。
遅刻しない不良って不良と言うんだろうか。

そんな事を考えていると、寮の隣にある島津家から麗子さんの怒鳴り声が聞こえて来た。
これもまたいつもの週初めの日常なので気にはしない。
案の定、愚痴をもらしながらガクトが出て来た。

ガクトの家である島津家は昔からここら辺の土地をいくつか持っており、その一部を寮として学校に提供している。
だから寮のすぐ隣にガクトの家があるのだ。

一時期、仲間内から裏口入学云々言われていたが仕方のない事だろう。

「やーおはよう」

くだらない取るに足りないやり取りをしながら、3人で学園に向かう多馬川沿いを歩いて行くと、後ろか漫画雑誌『少年ジャソプ』を読みながらモロが合流してきた。
モロの挨拶に俺たちも口々に挨拶を返す。そのまま並んで歩き出した俺たちを見てモロはキャップがいな事に気付いた。

「キャップまたいつもの病気？」

「ああ消えた、気にすんな」

俺の言葉通りいつもの事で気にしていないモロは、ガクトと持っていた雑誌を覗き込んで、ちょっとエッチで有名な漫画の評価を始めた。そんな男2人を見て呆れた溜息を吐く京。

男の性だ、察してやれ。

4人になっても変わらず多馬川沿いを歩いていると、前を行く同級生の女子グループの1人から挨拶の言葉が掛けられた。

「ナオっち、椎名っちおはよー」

同じ2‐Fのクラスメイト、小笠原千花だった。
人付き合いは俺の信条、どんな些細な付き合いでも大切なので俺は小さな笑顔を浮かべて挨拶を返す。

「おはよー」

「おはよう」

俺に倣うように京も挨拶を返す。

実に意外な事だったが、去年から同じ川神学園に通うようになって、京は仲間以外に対する排他的な行動をあまり取らなくなった。

兄弟が行方不明になった時の俺たちの間の事件がきっかけなのだろうが、俺はこの京の変化を素直に受け入れていた。

ガクトとモロが俺をだしにして何やら言い合っているが取りえず気にしなくてもいいだろう。相変わらず仲のいい事だ。

「あの2人からはやっぱりBL的なものを感じる」

京も無視だ。

こんな風にだらけながら川沿いを4人で歩いていると、前方に数十人の人だかりが出来ていた。

集団の視線の先である川岸を見ると、そこには明らかに『不良です！』といった外見の12・3人の男たちが、集団で1人の女の子を取り囲んでいた。

しかもバットとかの凶器も持っているというのに、周りで見ている川神学園の生徒たちは助けるどころが、これから起こるであろう見世物を今かと待ち構えてる感じだった。

これはアレか？　流れ的に俺が行かなきゃならのか？

思わず仲間たちに視線を送ると、当たり前だと言わんばかりに頷か

れ、ガクトにははっぱを掛けられた。

「とっとと行ってこい、弟だろ」

誰が弟だ。正確には舎弟だ。

だがまあ、ここで行かなきゃ後で何言われるか分かったもんじゃない。割って入るよりもその方が何倍もの恐怖だ。

覚悟を決めて人だかりを抜けて現場へと駆け込む。

「待て待て待てー！　ここは俺が食い止める！　だから今のうちに逃げろ！」

必死になって語りかける。

そう不良たちに！

「早く逃げろ！　相手を見て喧嘩を売れ！　っていうかこの女の人が誰だか分かって喧嘩売っているのか！？」

何やら言っているがそれを無視して捲し立てるように言い放つ。

心的外傷（トラウマ）は少しでも軽い方がいい。今らなそれすらも感じる事なく五体満足で帰る事が出来る。

だがそんな思いのこもった俺の説得も意味をなさず、県を跨いで千葉から来たと言っていた不良たちは、１人が持っていたテトリスの携帯ストラップを見た女の人の圧倒的な暴力のもと、抵抗する暇すらなく一瞬で吹っ飛ばされ、さらに人間テトリスにされたのだった。

それを見ていた周囲の生徒たちから歓声が沸き起こる。男子も女子も関係ない。まさにアイドルの追っかけをする熱心なファンのよう

な勢いだ。

「ふふ、美しく積み上がったな」

出来あった人間の塔を眺めながら満足そうに頷く姉さん―川神百代。
満足気なのは別にいいけどもはやホラーだ。小さい子が見たら泣きだすぞ。

その後、その人間の塔を後ろ回し蹴りで全員を吹き飛ばした姉さんは、俺に向かって声を掛けて来た。

「駆けつけるのが遅いぞ大和！　私の弟分なんだからキリキリしろ」

ホントその契約いったいいつまで続くのやら……

その後に起きた姉さんが新入生の女子を口説き、ガクトが苦言を呈するというひと悶着の後、死屍累々としている不良たちを放置して学園へと歩き始める。
1人増えて5人になっても取りとめないやり取りをしながら、多馬大橋に到着する。この橋を渡って向こう側に行けば川神学園だ。

その橋の入口近くの欄干に背を預けながら、俺たちが来るのを待っているヒロ。
絵になるその姿に、通り過ぎて行く女生徒たちが顔を赤らめている事を恐らく本人は気付いていない。
高校生になり、何やら色気が出てきたヒロだが何故かますます女顔に磨きがかかってきたのは気のせいだろうか。

「おはよう、タカ」

先頭にいたモロが掛けた挨拶に、ヒロは俺たちが来たことに気付くと欄干から背を離しこちらに近付いて来た。

「おはようみんな」

俺たちへ挨拶に、みんなそれぞれ返してきたのを受け取ったヒロは姉さんの方を見て少しだけ苦笑いを浮かべた。

「今日も派手にやったねモモ先輩。橋の上から見てたけど容赦なさ過ぎ」

「多人数で1人を囲むような奴らに容赦なんか必要ない」

「だからと言って1番不快な笑いをした人の腹部に8発入れるのはどうなの？」

「おお、やっぱりお前は見えていたか」

ヒロからの苦言を無視して撃ち込んだ拳の回数をきちんと見えていた事に感心した声を出した姉さん。
あれが見えていたなんてさすがヒロ、俺なんて1番近くで見ていたのに全然見えなかった。

ヒロも合流して6人になり改めて多馬橋に足を踏み入れる。
学園に続くこの橋だが、実は別名があり通称は『変態の橋』と呼ばれる。

別に本当の変態が出没するとかそういう事じゃない。
川神市の住民には有名なのだが、俺たちの通う川神学園はある意味で奇抜な生徒が多い。そんな生徒たちが毎朝この橋を通って登校す

るのだ。

故に付けられた名前が『変態の橋』なのだった。

「フハハハハハハハ」

その中でも最大級の変人が人力車の音とともにやってきた。
自動車並みのあり得ないスピードで道路を走っていた人力車がいきなり俺たちの隣で急停止する。
そして現れたのが――

「おはよう庶民！　我こそは九鬼英雄！　みなの英雄（ヒーロー）である！」

おかしなポーズで登場したこいつこそ世界が誇る九鬼財閥の御曹司、九鬼英雄だ。
自分付きのメイド―確か忍足あずみって言ったか、に人力車を引かせて登校してくる、川神学園が誇る（誇りたくはないが）変人中の変人である。

「君たち、英雄様が挨拶をしてくださっているんだから、キチンと対応しないとお命頂きますよ☆」

無視してやり過ごしたいが、そのメイドに笑顔のまま命を脅されて挨拶を促されるので、一応全員挨拶を返しておく。

「ところで庶民。我が愛しの一子殿の姿が見えんが？」

「妹は鍛錬中だ。努力家だからな」

ワン子を探す九鬼に姉さんが一応言葉を返す。

「おお、さすが一子殿。日々の切磋琢磨、その姿が我の心をときめかせるのだ！　フハハハハ、テンションが上がってきたぞ！　あずみ！　人力車発進！」

「了解しました、英雄様ぁー！」

来た時以上の速度で人力車は橋を渡って行った。
いったい何なんだろうか、あのメイドは……九鬼もそうだがアレらと同じクラスでなくてホントよかった。同じ学年ってだけでもダメージはあるが……

「相変わらずやるなあのメイド」

「まあ常人以上だよね、あの人は」

何やら武術な2人、姉さんとヒロが去っていたメイドを何やら評価していた。
1人でしかも女の身で人力車を引いて自動車並みの速度を出しているのを見て、タダ者じゃないと思わない人がいるなら連れて来てくれ。

「みんなー！　おっはよー！」

そんな事を思いながら橋を渡っていると、タイミングがいいのか悪いのか、後ろから物凄い勢いでタイヤを引きずりながら走ってきたワン子が俺たちに声を掛けた。
相変わらず朝っぱらから走り込んで来たのだろう。昨日は静岡まで行ったと言っていたが、今日はいったいどこまで行ったのやら。
俺たちと合流した事でワン子も走らず普通に歩き始めた。

「ワン子、歩く時ぐらいタイヤを外そうぜ」

「さすがにタイヤ引っ張る子と歩くのは僕たちが恥ずかしいよ」

「気にしなーい気にしなーい！　毎日が鍛錬鍛錬！　いつかお姉様みたいになワガママボディになるのよ！」

ガクトやモロの言葉にも馬耳東風なワン子。
夢見る犬っ娘に現実と言うものを教えてやらなければならない。そんな俺と同じ意見だったのか京が呆れたような表情で声を掛けた。

「スタイルでも並ぼうなんて無謀だよワン子」

「無謀かどうかはやってみなきゃ分からないでしょ！」

「頑張れ妹。私のバストは９０あるぞ」

衝撃の事実だった！

たしかに昔からスタイルがよかった姉さん。
４年前、みんなで行った海水浴の時は８３と言っていたが、まさかそれから7センチも増量するとは侮れないな。

改めて姉さんを上から順に見やる。
無駄な肉を鍛錬で落とした引き締まった身体だから、自己申告９０の大きな胸がより自己主張している。
くびれたウエストからしなやかな脚も伸びてる。
なんというか綺麗なんだけど凛々しい、美人なんだけどカッコイイ。

さすが学園最高の美人。

恋人がいる事と学園最強でなければ言い寄る男は星の数だっただろう。

だが改めて見て思った。

無理だろ。ワン子が姉さんに並ぶなんて。アリが像に喧嘩売るぐらい無謀だ。

みんな思いは一緒なのだろう、俺と京とガクトとモロは諦めを促すようにワン子の肩に手を置いて優しく、そして出来るだけ傷付けないように言葉を掛けた。

「現実見ろワン子」

「無理な事に挑戦するのは勇気じゃないよ」

「俺様にもはっきりと無理だと分かる」

「世の中には持てる人間とそうでない人間がいるんだから」

次々に掛けられる言葉に、俯き体を震わせてるワン子。

だが溢れ出てくる怒りを抑える事が出来なかったのだろう、勢いよく顔を上げて吠えるように叫んだ。

「なによあんたたち！　喧嘩売ってんのかー！？」

「みんな物凄く一子ちゃんに失礼だよね。可能性は無に等しくてもやらせてあげようよ」

いやヒロ、お前のその言葉もある意味失礼だぞ。

「お前ら妹いじめると私が相手するぞ」

ついに姉さんが参戦してきた。
ここぞとばかりにワン子は姉さんに泣きつく。
ワン子の場合、狙ってではなく天然だとは思うが。

だが暴君の参戦に俺たちは生け贄を差し出さなければいけない。
誰も被害をこうむりたくないのは一緒だ。

「受けて立つ。ガクトが」

「何で俺様に回ってくる？」

京が真っ先にガクトに矛先を向けた。
それならば俺もそれに乗らなければ。

「やるならまず名前の順番的にもガクトからだな」

「大和てめ――」

「妹キック！」

「姉パンチ！」

「いてぇぇぇぇぇ！」

俺に文句を言おうとしたガクトの言葉を遮るように、ワン子と姉さんの攻撃がガクトにクリーンヒットした。それを見てモロが感情の

こもらない声で言う。

「モテるじゃんガクト」

「あれはモテるって言っていいのかな？」

騒がしいがいつもの俺たちの風景。いつまでだってきっと続くこの日常。

俺たちは3年近くもこの風景、日常を守ってきた。お前がいなくなっても俺たちは変わらなかったよ。

もうお前に頼るだけのみんなじゃなくなった。今度はお前に頼ってもらえるような仲間になっているはずだ。

だからそろそろ帰ってきてもいいんじゃないか？

なあ、兄弟。

第４５話　学園の日常、変わらぬ仲間（後書き）

あとがき～！

第４５話終了。

待っていた方もそうでない方もお待たせしました！

ついに！　ようやく！　やっとのことで！

今回の第４５話を持ちまして！

原作突入しましたあぁぁぁぁぁぁ！！！

本当に長かったです！

こんなに長くなるなんて実は作者たる私が１番思っていませんでした！

第２３話あとがきで『あと数話』と言っておきながら２２話も積み重ね！

第３７話あとがきで『長くても２話』と言っておきながら８話も積み重ね！

優柔不断で全く見通しを立てれない私でしたが！

本当に長らくお待たせしていしまいました！

これからの展開は原作の話にオリジナルエピソードを織り交ぜつつ進んでいきます！

まずはゴールデンウィークの箱根旅行まで突っ走りたいと思います！

これまで読んで下さった方々！

これからもよろしくお願いします！

第４６話　学園の日常、緋鷺刀の噂（前書き）

第４６話投稿。

第４６話　学園の日常、緋鷺刀の噂

川神市――――――――

関東の南にある政令指定都市で人口全国９位。

市の北端には多馬川が流れ東京都との境となっており、東部には東京湾が広がってる。

江戸時代から栄えていた歴史ある街で、武家も多く馬も多かったか事から川に『多馬』の名前が付けられた。

古くから閑静な住宅街が多いが、ここ数十年で川神の駅前付近は東京との近さから一気に近代化が進み、若者の街と言われるようになっている。

駅周辺は昼夜を問わず人が多くなった。

駅から離れた多馬川沿いの低地は、のどかな田園風景が広がるが、東京湾に広がる埋立地は大規模な重工業地帯となっている。

１つの都市に近代、田園、工業と３つの地域性をもつ都市となっていた。

そして何より武術の総本山として有名な寺院、川神院が建立しているのもこの川神市である。

そのせいか、何かと土地柄的に武家の血を継ぐ人間が多い。

そして私立川神学園――――――

川神市の代表的な学校で、個性を重んじるための自由な校則とユニ

ークな行事と授業が特徴的。
学力的なレベルはそれなりで生徒数は多い。
中間試験は存在せず期末のみで評価をし、土日は休み。そしてアルバイトＯＫ。
そしてこの学校の最大の特徴が“決闘”といわれるシステム。
ある意味で生徒の自主性を尊重するこの校則は、生徒たちに大いに受け入れられ、この学校を目指す者もかなりいる。
川神市と川神学園。
それが風間ファミリーの過ごす日常の舞台だった。

§　§　§

ｓｉｄｅ　篁緋鷺刀

お昼になり僕は隣の席のまゆと机を並べて昼食の準備をする。
楽しそうに持参のお弁当を取り出し机の上に並べているまゆと、取り巻く雰囲気に少しだけ辟易しながら水筒に入っている烏龍茶をコップに注ぐ僕。
そんな僕たちの一挙手一投足を窺うような視線がここ最近付いて回る。

僕たち2人が一緒にいる事に、何か戦々恐々と感じる事があるのだろう。

分からないでもないが晒される身にもなって欲しい。

まゆは恐らく刀を持っている事。人付き合いが苦手で僕以外の人と話すと表情が強張ってしまう事。そして松風に話し掛けている事。

この3つが総じて『怖い人』と思われている。

そして僕はこの外見。入学式の日のあの騒動。そしてまゆと常に一緒にいるという事。これら3つとあの時に絡んできた女子3人が、僕とまゆが一緒にいる事に対し何やら変な噂をクラスに流しているようだ。

そんな双方の事情により、僕とまゆは早くもクラスで浮いてしまっていたのだった。

溜息を吐きたいのを堪えてお弁当を取り出し箸を付ける。

「タカさんは毎日お弁当を持ってきていますけど、お母様が毎朝作ってくれるんですか？」

視線を僕のお弁当に向けてまゆが問い掛けて来た。

この雰囲気の中、救いなのがまゆが自分に向けられている視線に気付いていないという事。たぶん僕と会えた事で少しだけ周りを見る事が出来なくなってるんだろう。

気付く前に何とかしなきゃいけないかな。

そんな事を考えながら僕はまゆの質問に答える。

「いや、作ってるのは僕。凛奈さんは朝は低血圧で起きられないから、基本朝の家事は僕が担当する事になってる」

あの人は朝は起きられないくせに徹夜は平気でこなす。
最長４日も寝ないで原稿を書き続けた事がある。それなのに平然としていられるくせに、１度寝ると絶対と言っていいほど朝は起きられない。

僕を引き取ってすぐの頃は何度学校に遅刻しかけた事か……そういえば凛奈さんはこの川神学園の卒業生だっけ。

「凛奈さん？　タカさんはお母様を名前で呼んでるんですか？」

首を傾げながら聞いてくるまゆに、そういえば僕の家族の事情を話していなかったのに気が付いた。
ちょうど話題に上がったのだから今ここで話しておこう。

「凛奈さんは僕の叔母さん。父さんの妹なんだけど『叔母さん』って言うと怒られるから名前で呼んでいるんだ」

「そういえばあの時も『叔母さんに連れられて』って言ってましたね。ご両親をその方と一緒に暮らしているんですか？」

「ううん。両親はもう既に亡くなっている。母親は生まれた時、父親も５歳の時に。両方とも病気でね」

何でもない風に応えた僕の言葉にまゆは目を見開いて固まった。
数秒で硬直は解けたものの、今まで合わせていた視線を忙しなく動かしながら小さく口を動かしている。

恐らく僕になんて言葉を掛けていいか迷っているんだろう。
僕自身、本当に気にしてないから何でもない風に言ったんだけど、逆に余計な気を使わせてしまったようだ。

「まゆが気にする事なんてないよ。もう10年以上も前の事だから僕の中ではとっくに整理がついてる」

僕の言葉にまゆは持っていた箸を弁当箱の上に置くと、姿勢を正し伸ばし重ねた両手を膝の上に置きゆっくりと少しだけ体を前に傾け謝意を表してきた。

「知らなかったとはいえ、気分を害するような事を言ってしまい、申し訳ありませんでした」

思いもよらない綺麗なお辞儀に一瞬だけ見惚れてしまった。
すぐに我に返り僕は手を振ってまゆに声を掛ける。

「だから気にしないでって言ったでしょ。僕の中ではもう整理はついてるし、凛奈さんもいい人だから不幸なんて思った事はないよ」

顔を上げ安堵するように頷いたまゆ。
安堵したのはむしろ僕の方だった。まさかあんなにはっきりと、しかも綺麗な謝意を貰う事になるとは思ってもみなかった。
いきなりまゆが頭を下げたから、僕たちを窺っていたクラスメイトも何事なのかとより一層、僕たちに気配を送っている。

そんな雰囲気を振り払うように僕は努めて明るく振る舞う。

「そういう事で僕は今、叔母さんの家に居候の身なんだ。実家は鹿児島だけど、僕自身が凛奈さんについて来たんだ」

連れられて来た事は伏せておく。下手に篁の家の事を話して心配させたくはなかった。

「まゆは今寮暮らしだからもちろんお弁当は手作りだよね？」

「はい、幼いころから家事は教え込まれていましたから、これでも料理は得意なんです」

僕の問いかけに可愛らしく握り拳を作って答えるまゆ。

3年前は気付かなかったけど、こう何でもない仕草が本当に女の子らしくて可愛く感じてしまう。

何なんだろうこの気持ち。自分でもよく分からない。

でもいやな感じは全然しなかった。

「まゆっちの料理は本当にスゲーんだぜ。タカっちも1回食ってみろよ」

今まで黙りこんでいた松風が急に喋り出した。

タイミングが唐突だねホント。でもそのお陰でしんみりとなりかけていた雰囲気も、僕たちを窺うクラスメイトの気配もいつも通りのものに戻った。

「じゃあ今度、作ってきたお弁当を交換しようか？」

「えぅ？　いえいえいえい！　そんな恐れ多いこと出来ませんよ！」

いきなりの提案にいつも通りうろたえる。

そんなまゆを面白そうに眺めながら、僕のお昼は過ぎて行く。

そんな時テレビから流れて来たニュースに、僕は思わず飲んでいた烏龍茶を吹き出しそうになったのだった。

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

ｓｉｄｅ　直江大和

昼はニュースを見るならテレビを付ける事を許されている。なんとなしに流れているニュースを眺めながら、クマちゃんに買ってきてもらったパンをかじる。

「なんか面白いニュースやってないかしら」

俺の斜め前の席でワン子が京と面向かいながら2杯目の牛乳を飲んでいる時だった。

埼玉で起きた無銭飲食の犯人を男子学生が取り押さえたというニュースが流れて来た。特に気にするニュースでもなくさらりと聞き流そうとした時、あろう事か聞き覚えのある名前が聞こえて来た。

『男を取り押さえたお手柄の男子学生は、神奈川県川神市在住の風間翔一さんで――』

ぶはっ

ワン子が吹き出した牛乳を京が華麗にかわしていた。

騒然となるクラスに小笠原さんの声が響く。

「ちょっと！　テレビに映ったの風間君！？」

「他にいないよね」

モロの呟きに頷く。

以前新聞に載ったのに今度はテレビか。話題に事欠かない男だなホント。

騒ぎだすクラスメイト（主に女子）を眺めながら、キャップの行動がもたらす影響というか被害というか、そういった物を考えると頭が痛くなる。

どうか警察のみなさんにお手数をおかけしていませんように……

「ダメだ繋がらない。やっぱりキャップ本人で間違いないよ」

「何をやってるんだ……うちのリーダーは……そのうち帰ってくるだろ」

本当に自由すぎる男だよ、俺たちのキャップ風間翔一は。

午後の授業も滞りなく終わり、下校時刻になった。

特にやる事のない俺とガクトとモロは、１時間ほど各々帰宅部としての自由行動を取りそののち校門前に集合した。

ちなみにワン子はすぐに修行のため川神院に帰り、京は今日は所属する弓道部に顔を出すと言っていた。

姉さんは基本用事がない限り帰りが一緒になる事は殆どない。

借りていた本を返し人脈を広げるための下準備をいろいろとやって俺は、集合場所の校門前に行く。すると既にガクトもモロも来ており、今日はヒロも待っていた。

「今日はもう帰るのかヒロ？」

ヒロは名目上ではあるが剣道部に入っている。
鉄心さんに頼まれて仕方なくといった感じだったが、ヒロの剣術は剣道とは全く違うもので余り剣道をやる事に意味はないとのこと。
そのため火曜と木曜の週2回と後は気が向いた時に顔を出せばいいとの条件で入部したらしい。

「顧問の先生に頼まれてた事はやったからね。この後川神院に顔を出すからみんなと一緒に帰るよ」

そう言って歩きだしたヒロと一緒に校門を出て帰宅の路につく。
ヒロは3年前ぐらいから時々ではあるが、川神院の修練に参加している。そのためか最近かなり力がついてきたらしく、武力でいえば現風間ファミリーでは姉さんに次ぐ強さを持っている。
全くそんな風に見えないのがヒロの凄いところでありおかしいところあった。

「しっかし男4人で帰宅っつうのも色気ねーな」

「ガクトは女の子の事ばっかだね」

「女みたいな顔した奴はいるけどな」

からかう感じでガクトはヒロに向かって言葉を掛ける。
それを聞いたヒロは満面の笑みを浮かべて逆にガクトに詰め寄った。

「なに？　岳人君。女顔の男で良かったら付き合ってあげようか？
その代わり3日3晩地獄の痛みを感じるようにしてあげるからね？」

笑顔で恐ろしい事を言うヒロはガクトは震えながら物凄い勢いで首を振る。
いい加減、女顔ネタでヒロをイジルのはやめろと何度も言っているのに全く学習能力のない男である。
特に最近はその女顔が顕著になってきており、私服の場合だとまず間違いなく女とな違われナンパされると嘆いていたばかりだ。

だがそれを否定できない俺たち。
今こうやって並んで歩いていても、昔から知っている俺たちですら遠目に見たら男子の制服を着ている女子に見えるだろう。

ヒロ本人は深刻に思っているようだが凛奈さんが言うには、

『あと5・6年、20歳を過ぎる頃には今度はいい男になってるさ。だから気にするな』

らしく、ヒロはその言葉を信じて今を生きているのである。
頑張れヒロ。

「彼女欲しいってよく言ってるけど、岳人君はどんな女の子が好みなの？」

変態橋を通り過ぎ朝と同じ多馬川沿いを歩いていると、ヒロが珍しくガクトに女子の話を切り出した。
いきなりのヒロの質問に多少は驚いていたガクトだったが、腕を組

み何かに納得しながら答えた。

「やっぱ胸だよな。ナイスガイな俺様に釣り合うような巨乳の美人だ」

「性格無視して外見だけ？　それって女の人に失礼じゃない？」

「性格なんて俺様にかかれば誰でも従順にしてやるよ」

その自信は言ったどこから来るんだろうかこの筋肉バカは。

俺と同じ事を思ったのだろう、モロもヒロも明らかにガクトの意見に引いていた。ヒロなんかは引くというより蔑むような視線だったが、いつも通り空気の読めないガクトはヒロの視線に気付く事はない。

「そういえば寮に1年生の女子が入ったって言ってたけどその子はどうなの？」

「1年なんざハナから眼中にない。同年か年上だ」

探るように聞いたヒロだったが、ガクトの言葉に何故か安堵したような表情を見せていた。

その表情の意味が分からず、問い掛けようかと思ったら、俺より先にモロがヒロに言葉を掛けた。

「そういえば噂になってるんだけど、もう彼女がいるんだって？　タカ？」

「ぬあにぃぃぃ！」

何故か真っ先に反応したのはガクト。
聞かれた本人であるヒロは間抜けにも口を開けたままモロを見ている。恐らく聞かれた事の意味を理解していないのだろう。
察しのいいヒロにしては珍しい反応だった。

「オイコラ、タカ！　なに俺様を差し置いて彼女なんか作ってんだよぉ！？」

呆然としたままのヒロに掴み掛ろうとしたガクトだったが、無意識のままに反応したヒロに数メートル先に投げ飛ばされた。
そのお陰で我に返ったヒロだったが、自分が投げ飛ばしたガクトを気に掛ける素振りすら見せずに、モロに食って掛かった。

「ちょ、ちょっと待ってよ卓也君！　なにその噂！？　何でそんな噂が流れているの！？　全然意味分かんないんだけど！？」

声を荒げ慌てるヒロ。ここまで取り乱すのは本当に珍しい。
そんな珍しいヒロの勢いに押されたモロは顔を引きつらせながらも噂を教える。

「いや、確証がある話じゃないから噂なんだろうと思うけど、タカがクラスの特定の女子と仲良くしてるってよく1年生が話してるから、彼女じゃないかなって思ったんだけど……違うの？」

モロの言葉に愕然と肩を落とすヒロ。

「僕って、噂になるほど目立つの？」

そんな外見をしていて自覚がないのか。
2年生や3年生でもかなりの噂が立っているっていうのに。

「物凄い話題の新入生だよお前は。その外見から本当は女で家の事情で性別偽って男子として過ごしてるんじゃないかって話が最有力。次に性同一障害だから男の制服を着ているんじゃないかって話。3番目が趣味で男の格好をしているって話」

2年・3年の間で広まっている噂を有力な順から教えてやると、ヒロはヤバイ感じに上半身をフラフラさせる。
まさに魂が抜けて立っているのがやっとといった感じだ。

「なんで……なんで……全ての噂が女の子前提なんだよ……」

ブツブツ小さな声で呟くヒロを見て俺とモロは声をひそめて話し合う。

「ねえ大和、今のタカにあの噂はまずいんじゃない？　下手したら数日間使い物にならなくなるよね絶対？」

「その可能性は大いにあるな。でも早めに知っておいた方がダメージは少ないぞ」

「止めを刺そうっていうの？」

そんな風にヒソヒソと話し合っていたため、飛ばされたガクトが起き上がりこっちに来ているのに気付かなかった。気付いていたらこの後に起こる惨劇を止める事が出来たかもしれなかった。
だが、今の俺たちにそれを止める事は出来なかったのだった。

「いってぇな……オイ、タカ！　テメー何しやがる！　ちったあ手

加減して投げろよ！　お前がレズだって噂、誇張して広めてやるぞ！」

「「あ」」

ガクトの言葉にその場が凍り付く。
俺たち以外誰もいなかったのが唯一の救いだっただろう。

そう、ヒロにまつわるもう1つの噂。
モロが教えた噂の事なのだが、モロはヒロが男だという事をちゃんと分かっているから『彼女』と勘違いしたが、ヒロを女だと思っている噂を広めている人にとって、特定の女子と仲良くしているという噂は、結果としてガクトがさっき言った噂となって広まっていた。

俺とモロはすぐに我に返りヒロの方を見る。
さっきまで上半身を揺らし小さく呟いていたヒロだったが、今は俯き静かに佇んでいる。だが纏う雰囲気はさっきとは別の意味でヤバくなっていた。

ゆっくりと顔を上げガクトの方を向くヒロ。その顔には完全に表情が消えていた。

あの顔は本当にヤバイ。
過去俺たちはあの顔を2回見た。
その2回とも目を覆いたくなるような惨劇が起きた。
しかもその2回とも被害者は今回と同じガクトだった。

本当に学習能力のない男だ。

表情の消えたヒロの顔を見て、自分の失言の拙さに気付いたのだろ

う、まるで助けを求めるかのようにガクトは俺たちを見る。
それに対する俺たちの答えは最初から決まっている。

俺とモロは万感の思いを込めて首を横に振った。

その直後、多馬川沿いにガクトの断末魔が響き渡ったのだった。

教訓。篁緋鷺刀に度が過ぎる女扱いでからかうな地獄を見るぞ。

第４６話　学園の日常、緋鷺刀の噂（後書き）

あとがき～！

「第４６話終了。あとがき座談会、司会の春夏秋冬　廻です。今回のお相手は――」

「直江大和です」

「原作突入したことで原作主人公です。さて今回のお話ですが……」

「しかし、２話使って１日しか進まないのかよ」

「まあ、前回と今回は原作開始１日目をやろうと思ってたからね…
…しかし思いもよらない弊害が」

「なんだよ？」

「いや原作に沿った物語の進行だからある程度原作でのシーンを使うわけなんだけど」

「会話文ばかりで描写文の挿入が難しい。描写文を増やすと会話文を削らないければならない」

「そうなんだよ！　原作を崩さないためにやるとどうしても描写文が難しくなるし文字数が増える。だから会話文を削ろうとすると厳選しなければならない。さらにそこにオリジナルシーンを追加しなければならないで大変なんだよ！」

「ある程度見通しを立ててから書けばいいだろ」

「見通して立ててんだけどね……これでも」

「投稿始めてもう1ヶ月半、投稿数も50本超えてんのにまだその程度のレベルなのか」

「うるさいよ。まあそういう事なので、原作にあるシーンもいくつか削っていくことになりますでご了承ください。原作知らないで読んで下さっている方には本当に申し訳ありません」

「それより今回の話で聞きたい事なんだけど、ヒロに対する噂が不憫すぎるぞ」

「それはあれだ、緋鷺刀の外見を強調させようという魂胆なんだよ。少しでも緋鷺刀を目立たせようという作者の親心だ」

「ヒロにしてみれば余計なお世話だろ……」

第４７話　百代の彼氏、その噂の実態は（前書き）

第４７話投稿。

第４７話　百代の彼氏、その噂の実態は

――２００９年　４月２１日　火曜日　ＡＭ７：２０――

ｓｉｄｅ　川神百代

今日も怠惰に流される１日が始まった。

朝食後にさらに走り込みに行くワン子に起こされ、私は渋々未だ眠気に支配される体を布団から引きずり出す。

寝癖で乱れた髪を手櫛で整えながら洗面所に向かうために廊下を歩いていると、前からタカが歩いてきた。シャワーを使った後なのだろう、髪の毛が濡れている。

そいえば今日の朝の鍛錬にも顔を出すと昨日の鍛錬の後に言っていたな。

「おー、朝から御苦労だなタカ」

半分閉じた目のまま挨拶をする私に、タカは少しだけ呆れたように息を吐くと小さく笑った。

「おはようモモ先輩。ジン兄の部屋から出て来たけど、鉄心さんにはバレなかったの？」

どうやら私がジンの部屋から出て来たのを見ていたようだ。

そう、私はたまにジンの部屋で寝起きをしている。ジジイは『そんなはしたない事はするな』と言うが別に問題ないはずだ。

何も毎日過ごしているわけじゃないし、人のいない部屋っていうのはたまには使ってやらないとすぐに生活感がなくなってしまう。
私はジンの奴がいつ帰ってきてもいいように、帰ってきてもすぐに部屋を使えるようにしてやってるんだから文句を言われる筋合いはないと思う。

まあ、私がジンの存在を感じていたいという思いがあるのは否定しないがな。

そんな私を見て、ジジイはいつも苦言を呈する。

『嫁入り前の娘が男の部屋に入り浸るどころか、寝起きをするとははしたないわ』

というのがジジイの言い分なのだが、男の部屋と言っても部屋の主は今いないし、嫁入り前の娘だけど私はジンと結婚するつもり満々だしジジイだって乗り気だったはずだ。
言い換えればジンは私の婚約者（フィアンセ）だ。ならば私は誰憚る事なくジンの部屋で過ごしていても問題はないはずだ。

そう言い返したらジジイに思いっきり殴られた。

何故殴られたのだろうか分からない。ジンの確認を取っていないのに婚約者（フィアンセ）と言ったのがまずかったのだろうか？　未だに分からない私だった。

「バレてないから出て来たんだろ。それより朝飯は食ったか？」

「これから。朝食も食べていけって言われたからお言葉に甘える事にしたんだ」

「そうか、じゃあ一緒に登校するか。どうせ準備はしてきてるんだろ？」

「分かったよ、じゃあまた後で」

そう言って私の横を通り過ぎて行ったタカの後姿を暫く眺める。

うん、最近は特に色っぽくなったな。凛奈さんが女子の制服を着せたがるのがよく分かる。本当に男に見えん。あいつは生まれてくる性別を間違えたに違いない。

そんな事を考えている私の気配を察知したのか、タカはビクリと背筋を震わせると胡乱気な視線を送って来たのだった。

春眠暁を覚えずという言葉を知っているだろうか？

ちなみに原文の漢詩で書くと『春眠不覺暁』だ。

まあそんな事はどうでもいいが、ようは春は陽気が降りそそいでいるからいつも眠たくなる、という事だ。

学校へ向かう多馬川沿いを歩きながら事を思う。何故思うかというと眠いからだ。

「そういやタカ。今度久しぶりに手合わせするか？」

「急にどうしたの？」

そんな眠気を何とか堪えながら、一緒に多馬川沿いを進む隣にいるタカに言葉を掛ける。

うなじで一纏めに縛った、背中辺りまである女ですら羨むようなサ

ラサラした髪をなびかせながら、私の問い掛けに答えるタカ。

「なに、最近挑戦者がなくてつまらなくてな」

ここ一週間は私に挑戦してくる武芸者が現れないため、やり場のない力が燻っている感じがしていた。私の噂を聞きつけて集団で襲ってくる不良たち相手では、逆に鬱憤が溜まるほど手加減しなければならない。

「鉄心さんに聞かないと分からないけど、たぶん許可は下りないと思うよ」

「ああ～まだ2ヶ月したかたってないもんな～」

タカとの手合わせはジジイの許可が必要で、しかも3ヶ月に1回と決められている。

そんなルールなんか無視してやりたいが、そうするともう一生タカと勝負が出来なくなるので堪えるしかない。今の私を満足させる仕合いが出来るのはジジイとタカだけだからな。

そんな事を話していると視線の先に仲間たちがいた。

「みんな揃ってるな。どうした道端で」

首を傾げているガクトと何かを咀嚼しているワン子。なんだこの状況は。

「……みんな揃っちまったし登校するか」

「サボって鬼小島に目をつけられる事もないよ」

どうやらキャップがサボるかどうするかの話が最初の話題だったようだ。だが内申を気にしていないキャップが担任に目をつけられてもどこ吹く風だろ。

「さぁ行くぜ、狂乱麗舞、風間ファミリー出陣だ！」

そんなキャップの気を入れ直した号令のもとで、揃った仲間８人で川辺を歩き始める。

傍から見れば仲良し幼馴染集団だが、中身を知る人間から見れば普通とはひと癖どころか全員癖があり過ぎて騒がしい集団だろう。

だが私はこの仲間との関係に心地良さを感じているし、みんなもきっと同じだ。

「ん？　誰かいるよ。しかもこっち見てる」

と、変態橋に差し掛かった時、京が橋の手前でこちらを見ている男に気付いた。

道着に身を包んだ格好と纏う雰囲気からして武芸者だ。大方私への挑戦者で間違いないだろう。

「お姉様への挑戦者かしら」

「面白い。昨日の奴らじゃつまらなかったんだ」

そう言って男の前に進み出る。

さて、こいつはどれだけ私を楽しませてくれるだろうか。

結果はあっけないものだった。
名乗り出た時は外見で判断して侮っていたが、すぐに私の強さを感じ取った事には褒めてやりたかった。だが申し出を受けて構えを取っても一向に攻撃をしてくる気配がなかった。
おそらく私の強さに当てられて尻込みしてしまったのだろう、最初の威勢は全くなかった。こちらから仕掛けて一撃で終わってしまった。

１０メートルほど吹っ飛び気絶した相手を見ながら、川神院に連絡を入れる私の心には、満たされない空しさが漂っていた。

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

ｓｉｄｅ　直江大和

昼休み。

今日も今日とてクマちゃんに頼んで買ってきてもらったパンを齧りながら、朝のＨＲでウメ先生――俺たち２－Ｆの担任小島梅子２８歳――が言っていた言葉を思い出す。

『今週の金曜日と来週の月曜日、このクラスに転校してくる生徒がいる。金曜日は留学生、川神の姉妹都市ドイツのリューベックから。そして月曜日は編入生だ』

留学生は分からんでもないが、この時期に編入生か……なにやら深い事情があるんだろうけど編入事態が珍しい事だからな。

ちなみに編入生ってのは学籍を持っていない、つまり学校に入学し

ていない人間が課せられた編入試験を受け合格し、その学力や年齢に見合った学年に途中入学する学生の事であり、厳密に言えば転校生とは違うものだ。

キャップが2人の留学生、編入生の性別を当てる賭けをしようと持ちかけて来たが、分が悪過ぎて割が合わず採算も取れないから止めさせておいた。

このクラスは今現在女子が1人多い。そんな時に2人も入ってくるのだからバランスを考えてどちらかが男、どちらかが女に決まっている。

分かり切ったこの状況で2人同時に性別を当てる賭けをしたら、よっぽど奇特な奴でない限り、片方に男、片方に女と掛けてみんな悪くても±0を狙うに違いない。

つまり賭けをやるだけ労力の無駄。賭け札作るだけ損するだけなのだ。

そう教えてやるとキャップはつまらない、といった感じで不貞腐れていたが賭けは止めたようだった。いくらキャップでも損するだけと分かっている賭けはやらないだろう。

そんな事を考えていると教室のスピーカーから音楽が流れて来た。毎週火曜昼休みの定番番組の始まりに、俺は耳を傾けた。

「ハァイエブリバディ、春と言えば恋だよねぇ。でも変な病気なるのだけは気をつけような。今週もラジオ番組ＬＯＶＥかわかみが始まるよー。パーソナリティーは俺、ハゲこと2年の井上準と――」

「人生、喧嘩上等諸行無常。3年の川神百代だ」

学園1の人気を誇る姉さんと放送委員によるラジオトーク番組だ。
何とか実績を作りたかった放送委員会が、姉さんに頼み込んで出演をしてもらったのが番組発足のきっかけらしい。

「今日も百代さんに相談のメールがたくさん来てます。前置きは俺の命が危ないので省略、手っ取り早く行きましょう。『好きな子が出来ました、どう接すればいいですか』」

「私にその娘を紹介しろ、味見してやる」

「ちなみに本気で言ってますから注意して下さいね。はい次、『モモ先輩好きです付き合って下さい！』」

「メールで言わず正面から来い。来ても彼氏いるから意味ないけどな」

「前々から思ってたんですけど、モモ先輩ホントに彼氏いるんスか？　なんか告白断るの面倒で嘘ついてるって噂があるんですけど？」

「ほほう誰が言い始めたか知らんがいい度胸だな。なんでそんな噂が流れてんだ？」

「何やら雲行きが怪しくなってきたな……1番の原因はそれらしい男の影がないって事ですね。次にモモ先輩が恋人に甘える姿が想像でき――ごはぁっ！？」

「あ、しまった。つい手が出て気絶させちまった……まあいい、曲流すぞ」

ぐだぐだなラジオだった。

姉さんのキャラが面白いという事で続いているようだが、なんであのラジオが人気あるのかが全然分からない。間違っても姉さんの前では言わないけど。

「ねぇねぇナオっち、ちょっといい？」

仲間たちと昼飯後の談話をしていると、小笠原さんが声を掛けて来た。

「ん？　どうしたの？」

「モモ先輩の事で聞きたい事あるんだけど……ナオっちたちって幼馴染みなんでしょ？」

その言葉に俺を含めて全員が頷く。

俺たち風間ファミリーが姉さんと幼馴染みだというのは、クラス内どころか学園全体でかなり有名な話だ。

隠す必要がないから広がるままに放っておいたら、俺たちが入学して2週間後には学園全体に浸透していたのだった。

姉さんの認知度の高さを知らしめる1つの証拠だ。

「さっきの放送でも言ってたけど、本当にモモ先輩って彼氏いるの？」

やっぱりその事か。

結論からいえば本当なのだが、その事実を知っているのは俺たち風間ファミリーだけ。姉さんも『彼氏がいる』と言っているだけで、兄弟の名前は1度として口にしていないらしい。

「おう、本当だぜ」

どうしたもんかと考える俺をよそに、キャップがあっさりと言ってしまう。
おいキャップ、確かに隠す事じゃないが当事者でない俺たちがそうあっさり言ってしまっていい案件じゃないぞ、これは。

「オイキャップ、ちったあ空気読めよ」

「ガクトに言われたくないセリフナンバー1」

「まったくだね」

「んだと!?　どういう意味だ京!　モロ!」

後ろで騒がし3人を放っておいて、俺は小笠原さんの言葉に改めて答える。

「キャップが言った通り本当。間違いなく恋人はいる」

俺の言葉にクラスの女子が黄色い声を上げる。どうやらみんな興味があって俺たちの話に耳を傾けていたらしい。
そんな中でも1番はしゃいでいる小笠原さんは、興奮冷めやらぬ勢いで質問を続ける。

「学園で見た事ないって事はやっぱり年上!?」

「いんや、年下」

「年下ぁ!?」

またしても湧きあがる嬌声。今度は男子の悲鳴までまじってる。まるでアイドルのスキャンダルに一喜一憂するファンそのものだ。

「年下と言う事は、直江ちゃんたちといつも一緒にいる今年入学してきた1年生さんですか？」

こんな勢いで質問が続くのかと若干、辟易していた俺だったが、1人冷静に質問してきたのがこのクラスの委員長――甘粕真与だった。さすが変わり者クラスを纏める委員長、小さいけどみんなのお姉さんを自負するだけあって冷静なようだ。小さいけど。

「あははは、ヒロは違うわよ」

ヒロが聞いたら竦み上がる委員長の質問にワン子が答える。だがその答えにいち早く反応したのは、まさかの小笠原さんだった。

「ヒロ！？　1-Cの篁緋鷺刀君！？　やっぱりワン子たちの幼馴染みだったの！？」

物凄い勢いで食い付かれ、少しだけ涙目になりながらワン子は激しく頷く。よほど怖かったのだろう、俺ですら引きかけるほどの勢いだったから気持ちは分からんでもない。

「タカがどうかしたの？」

京の言葉にもまるで聞こえていないかのような夢見心地で小笠原さんは言葉を紡ぐ。

「篁緋鷺刀、次期エレガンテ・クアットロ最有力候補の1年生。まるで女の子のような容姿に上級生女子から人気急上昇！　女より女

に見えるってのが玉に瑕だけど、将来を見据えれば優良物件間違いなし！」

「タカが聞いた物凄く不機嫌になりそうだね」

「そうだな」

興奮して叫ぶ小笠原さんと、賛同するように声を上げるクラスの女子を見ながら呟いたモロの言葉に、俺たちはみな一様に頷くのだった。

「えっと、何の話だったけ？」

「モモ先輩の彼氏さんが年下さんという話です」

脱線した話を元に戻すためにもとの話題を聞く俺に、やはり1人冷静な甘粕さんが答えて来た。というか本当に冷静だなこの人。

「それで？　モモ先輩の彼氏って誰なの？」

甘粕さんの言葉で最初の話題を思い出したのだろう、小笠原さんが姿勢は正したが興奮冷めやらぬ表情だった。

どうしたものかと思ったが、姉さんからは別に言うなと箝口令（かんこうれい）を布かれているわけでもないし、何より姉さん自身が恋人がいると言っているのだから、別に俺たちが話しても問題ないだろう。

「俺たちの最後の仲間、ジン兄だよ」

またしても俺の考えを無視してキャップがあっさりと言ってしまった。

「「ジン兄？」」

甘粕さんと小笠原さんの声が重なる。

「オイキャップ。そりゃ俺様たちの中での呼び名なんだから通じるわけねえだろ」

「ていうかさ、モモ先輩より年下だって言ってるのにジン兄って言っちゃうと矛盾しちゃうからね」

「俺たちにとってジン兄はジン兄だろ！」

「キャップが言うと混乱するから黙ってて。大和、説明お願い」

「はいはい」

騒がしいガクト、モロ、キャップを抑えながら京が俺に向かって説明を丸投げする。まあここは姉さんと兄弟、2人と舎弟契約を結んでる俺が説明するべきなのだろう。

呆然としている甘粕さんたちと向き合う。

「姉さんの恋人の名前は暁神。仲間内の立場で『ジン兄』って呼ばれてるけど、年齢は俺たちと同い年だから」

詳しく説明する必要はないからかいつまんで説明をする。もう3年近く前の出来事だから兄弟の事を覚えている人はそうそういないだろう。

案の定、小笠原さんは兄弟の名前を聞いても特に反応は示さなかった。

「ふぅん、別の学校の人なの？」

「ちょっと待って下さいチカちゃん」

なお質問をしてきた小笠原さんを遮り、甘粕さんはやたら真剣な目で俺を見て来た。

その目を見て分かった。甘粕さんは兄弟の事を覚えている。

「違ってたら申し訳ないんですけど……その暁さんって、3年前の夏にアメリカで行方不明になった方じゃないですか？」

その甘粕さんの言葉に、クラスがさっきまで騒いでいたのが嘘なくらい静まり返った。どうやら騒ぎながらもみんなちゃっかり俺たちの話を聞いていたらしい。

「私と同い年だったので凄く印象に残っていました。爆弾テロを計画していた犯人を取り押さえ未然に防ぎ、でも結局爆発してしまった病院から小さな子供を助け出したけど行方不明になった――」

「英雄って呼ばれた中学生!?」

言葉を引き継いで叫んだ小笠原さんに頷いて答える甘粕さん。やっぱり彼女は兄弟の事を覚えていた。

事件が起きた直後はニュースで連日報道されていたし、そのテロの標的だったアメリカの政治家が兄弟の事を『英雄だ』と言って称賛していたこともあり、両国で『暁神』の名前は一時期有名だった。

「でも行方不明になってもう3年近くたってるんでしょ？　もう死んでるんじゃ――」

「ジン兄は死んでなんかいない！！」

俺たちにとって最大の禁忌（タブー）な事を言おうとした小笠原さんの言葉を、遮るようにワン子が叫んだ。

突然のワン子の豹変に驚き固まる小笠原さん。そんな彼女に今まさに飛び掛からん勢いのワン子をガクトとキャップが取り押さえている。後ろにいる京とモロも目がヤバイ。

俺は椅子から立ち、ヤバイ感じの３人を落ち着かせるように軽く頭を叩くと、振り返って呆然とする小笠原さんに言葉を掛ける。

「悪いけど、俺たちはあいつは生きているんだって信じてる。絶対に帰ってくるって信じてるんだ。軽い気持ちで『死んだ』なんて言って欲しくないんだ」

出来るだけ穏やかに言ったつもりだったが、俺の言葉に込められた思いに気付いたんだろう、小笠原さんは所在なさげに視線を泳がせていたが、

「ゴメン」

意を決したかのように手を握り締めると、小さな声だったがちゃんと頭を下げて謝ったが、居た堪れなかったのかすぐにこの場を離れた。

きちんとした謝罪を受けた事で溜飲を下げたのだろう、京とモロは態度を軟化させたがワン子はまだ彼女を睨んだままだったので、落ち着かせるように頭を撫でてやる。

「ワン子、ちゃんと謝罪したんだからいつまでも怒るな」

「でも！」

「どれだけ時間がかかっても帰ってくるのを待つ。そうみんなと約束しただろ？　今更こんな事で揺らぐな」

「……うん」

撫でられて幾分落ち着いたのだろう、まだ腑に落ちない気持ちを持ってるだろうがワン子は俺の言葉に素直に頷いたのだった。
俺たちを心配そうに見えていた甘粕さんに、問題ないとジェスチャーで伝えると、彼女は安心したように頷くとバツが悪そうな雰囲気の小笠原さんのもとに歩いて行った。

何やら変な雰囲気に包まれた教室だったが、お調子者の多い２－Ｆの連中だ、すぐにいつもの騒がしいクラスに戻るだろう。

そう楽観的に考えながら、俺はワン子の頭を撫で続けたのだった。

第４７話　百代の彼氏、その噂の実態は（後書き）

あとがき～！

「第４７話終了。あとがき座談会、司会の春夏秋冬　廻です。今回のお相手は――」

「本編まだ再登場してないけど暁神だ」

「本文に登場してない人をあとがきに出すのは初めてだね」

「ていうか、なんで俺なんだ？」

「読者の方の『早く再登場』の要請が思いのほか多かったのでここに登場させたのさ」

「まだ時間かかるのか？」

「いや、今回のお話を読んでいただけたのなら、なんとなしに分かると思います。で、今回のお話ですが、まあ本当に読んだらわかりますね。学園でうわさになってる百代の彼氏についての話題でございます」

「世間一般じゃあ俺って死んでる扱いなのか？」

「何らかの事件・事故に巻き込まれ１年以上、音信不通なら危険失踪として失踪宣告を申し立てることが出来きて、認められれば死亡扱いになるからね」

「ってことは俺はすでに失踪宣告されているってことか？」

「鉄心がそんなことするわけないだろ。第４２話でも『ずっと探し続けていた』ってあるだろ？　でもまあそれを知らない世間一般じゃあもう死んでると思われていたかもな」

「切ないな。モモや仲間たち、鉄心さんの想いが心に沁みる」

「いやあ良かったね」

「そうなるように物語を展開させてるのは誰だよ……まあいい、で？　次回はどうなるんだ？」

「次回は皆さん予想通り、クリスの登場となります」

「原作風間ファミリー最後の１人登場か。一気にやるのか？」

「いんや、とりあえず登場からワン子との決闘で１話、放課後の案内から金曜集会で１話の２話構成で考えてる」

「自分で自分の首を絞めるなよ」

「肝に銘じておくよ」

第４８話　転入生歓迎、クリスティアーネ登場（前書き）

第４８話投稿。

やっとクリスが登場しました。

第４８話　転入生歓迎、クリスティアーネ登場

――２００９年　４月２４日　金曜日　ＡＭ８：３０――

今日の２-Ｆの生徒はいつもより早い時間に集合した。

理由は実に簡単である。

留学生を紹介する朝のＨＲもいつもより早く始めてもらうためだ。

その事実を知ってか知らずか、恐らく知っているであろう担任の小島梅子は、席に座る生徒たちを『俗物が』と思いながらもきちんと揃っていることに満足し、生徒たちが心待ちしているであろう話題を切り出した。

「それではお待ちかね、転入生を紹介しよう」

その言葉にざわつく生徒たちをひと睨みで黙らせた梅子は教室の前の扉に向かって声を掛けた。

「入りたまえ」

「Ｇｕｔｅｎ　Ｍｏｒｇｅｎ.」

ドイツ語の挨拶と共に教室に入ってきた人物を見て、色んな意味で２-Ｆの生徒たちは衝撃を受けた。

教室に入ってきたのは黒い軍帽と黒い軍服を着た中年の男性。どこからどう見ても明らかに高校生ではない。

いや、ただ単に老け顔なのかもしれないがそれでも衝撃的だった。

だがざわつく生徒の中で、教室に入ってきた軍服を着た中年に見覚えのある生徒もいた。

風間ファミリーの面々だ。

「え？　あの人が転入生なの？　ちょっと老けてるね」

「そこが問題じゃねーだろ！」

ボケをかます一子に岳人がさかさず突っ込む。

見覚えがあって当然である。

あの軍服を着た中年は今日の登校の時、大和がぶつかった相手だ。

今日の登校の時に変態の橋で百代の挑戦者が待っていた。相手はただ単に名を売りたい我流の自称空手家だったので、一瞬にしてケリは付いたのだが、その後で振り返った時に大和がぶつかったのだった。

すぐに頭を下げて謝った大和や、橋から薄っすらと見える富士山に気分よくし、日本の良さについて不敵に笑いながら去って行く姿を、風間ファミリーは印象強く覚えていた。

「みんな勘違いしないよう。この方は転入生の保護者だ」

生徒たちが拙い方へ勘違いしそうになっているのを察し、梅子は入ってきた人物の身元を明かす。それに安堵した熊飼満がピザを食べ始めたので鞭を振って叱るのは忘れない。

「――あのご息女は？」

「ご安心を。時間には正確な娘ですので間もなく駆けて参りましょう。グラウンドを見てみるがいい」

いい加減、場を進めようと問い掛けた梅子に軍服を着た中年、もとい転入生の父親は何故か自慢げに頷くと窓を指し外を見るように促した。

窓際に座っていた大和はそれにつられるように窓の外を見る。その時、校門から入ってきた影に思わず声を出した。

「げっ！？」

「どうした大和、何が見えんだ？」

「女の子が学校に乗り込んできた」

訝しそうに問いかける岳人に、大和は半ば呆然に答える。そんな大和の姿に梅子は生徒たちに窓の外を見る許可を出すと、殆どの生徒が身を乗り出してグランドを見下ろした。

そこにあったのは――

「確かに乗り込んできたね――馬で」

卓也がポツリと呟いた小さな声が何故かクラス中に大きく響き渡ったのだった。

そんなクラスの中の空気などいざ知らず、意気揚々に馬に跨りグランドの中央に進み出た転入生は、腰の位置よりも長い金髪を風になびかせてまるで一騎討ち前の武士のように名乗りをあげた。

「クリスティアーネ・フリードリヒ！！　ドイツ、リューベックよ

り推参！！　この寺子屋で今よりお世話になる！！」

「だっはっはっはっは！　馬かよ！？　面白ぇあいつめっちゃ面白ぇ！」

転入生が金髪の美少女であることに歓喜の咆哮を上げる男子生徒の中で、馬で乗り込んできた事がつぼに嵌ったのか大爆笑する翔一。馬で乗り込んできた事に呆れる千花が、転校生の父親と何やら問答をしている時、またも事態をややこしくする者がグランドに現れた。

「フハハハ！　転入生が朝から馬で登校とはな！」

自分以外に馬で登校する生徒がいないかを見渡していたクリスティアーネに、いつものようにあずみが引く人力車で登校してきた英雄が声を掛けた。
その人力車を見てクリスティアーネの目が輝く。

「おお！　ジンキリシャ！　馬上にてご免、自分はクリス！」

「うむ。我が名は九鬼英雄である！　いずれ世界を統べる者だ！この栄光の印！　その目に焼き付けるが良い！！」

名乗りと同時にいつもの構えを取る英雄に、まるで時代劇の『遠山の〇さん』を見たクリスティアーネは感嘆の声を上げるのだった。

「ねえ大和……この人たち」

「間違いないな」

グラウンドの光景と教室内での転入生の父の発言から、大和と京は

ある確信を得た。それはつまり――

“この2人は間違いなく日本を勘違いしてる外国人”だという事を。

「馬からは下りて来い！」

馬上のまま校舎に入ろうとするクリスティアーネを見て、さすがに梅子ですら頭を抱えたのだった。

ちなみに同じように窓からグランドを見ていた百代は、翔一と同じように大爆笑し、緋鷺刀は訳の分からない状況に現実逃避ぎみ視線を逸らし、由紀江はそんな緋鷺刀を不思議そうに見ていた。

改めてクリスティアーネ――クリスの自己紹介と質疑応答が教室で行われている。

彼女は故郷のリューベックにいる時に日本人の友達と接している間に覚えたらしく、日本語が違和感ないほどに上手だった。そんな中で1番最初に質問をする岳人。

「クリスは彼氏はいたりするのか？」

「そんなものいないに決まってるだろうが！！」

その質問に何故がクリス父の怒号が返された。

その余りにも凄すぎる迫力に静まり返すクラス。だがそんな空気が分かっていないのかクリスは平然と答えてきた。

「父様のおっしゃる通り、そんな関係の輩はいない」

「そ、そーですか……」

乾いた笑いのまま答えた岳人を筆頭に、クラスの全員が『ああ、この親父は間違いなく娘溺愛の親馬鹿だな』思った。そしてそれに間違いはなかった。

「クリスにちょっかい出す者は軍が殲滅する」

親馬鹿もここまでくれば立派な病気である。

「父様は任務に私情を持ち込まない軍人だ」

娘にはそんな行為が立派な人に見えているらしい。

その後も、クリスとクリス父による『間違いなく日本を勘違いしてる外国人』の典型のような問答が繰り返された。

クリスの知識が間違いなく友達が面白がって叩き込まれた偽知識であり、クリス父もひと昔前の日本の気質が今でも続いていると勘違いしているのを全員が理解した。

「父君。そろそろ……」

さすがにこのままズルズルと時間が過ぎるのは拙いと察したのだろう、梅子はクリス父に言葉を掛けた。

大人としてそこは雰囲気を悟ったのだろう、クリス父は頷くと生徒たちを見渡し、

「分かった。みんな娘をよろしく頼む」

一礼して教室を出て行って……戻ってきた。

「クリス、何かあれば戦闘機で駆けつけるからな」

そしてまた出て行った。後に残ったのは疲れた顔をした梅子と、せっかくの美少女なのに手を出したら殺されると悟りしょぼくれる男子連中だった。

だが、そんな中で1人ウキウキしている者がいた。

川神一子だ。

「はーい質問！　何か武道をやってるかしら？」

「フェンシングを小さい頃よりやっている」

「ＹＥＳ！！」

素直に答えたクリスに一子はガッツポーズを取って喜ぶと、勢い良く席から立ち上がり教壇にいる梅子に向かって手を挙げる。

「ウメ先生提案！　転入生を“歓迎”してあげたいと思いまーす！」

そう宣言した一子の『歓迎』の言葉の意味を悟り、クラスは騒然となった。

一子の言った『歓迎』が意味するものとは、川神学園に存在する“決闘”と呼ばれるシステムの事だ。相手とのいざこざを手っ取り早く片付けるために作られた制度で、最近では力試しに行われる事もある。

武家の末裔が多い川神にとって、ある意味で象徴ともいえる制度か

もしれない。

「血気盛んだな川神、だが面白い。クリス、そこのポニーテールがお前の腕前を見たいそうだ」

「！！」

いきなりの事に意味が分からず眉をひそめていたクリスだったが、梅子の言葉に自分に向かって質問してきた一子の言葉の意味を理解し、小さく笑みをこぼす。

「なるほど。新入りの歓迎、か」

クリスの反応に一子も笑みをこぼす。

「川神学園には決闘っていう儀式があるの。その意思を伝え自分のワッペンを机に置く！」

そう言って一子はポケットから取り出したワッペンを机の上に叩きつけた。

「クリス！　戦闘で勝負よ！」

そしてそれを見たクリスも生徒手帳と同時に貰ったワッペンを取り出しその上に重ねた。

「受けて立とう！」

喧騒が教室に広まり生徒たちが口々に騒ぐ中で、一子とクリスはお互いを見て技量を測り合っていた。

武力での決闘に職員会での了承を取ろうとした梅子だったが、クリスの父が来ていた事で様子を見に来ていた学長の鉄心が、ちょうど廊下で一子とクリスの決闘の話を聞いていたため学長特権で了承、すぐに開始となり見届けと審判も学長の鉄心が申し出た。

「ワン子、相手強いよ。たぶん私よりも」

騒ぐクラスの中で冷静にクリスの強さを見て取った京が一子に注意を促すも、一子はその忠告を重く受け止める事もせず、レプリカ武具の使用許可を貰った事で得意の薙刀を持って意気揚々と教室を出て行った。
そんな一子に溜息をついて見送った京は、慰めるように肩を叩いた大和と卓也を見て肩をすくめるのだった。

「決闘トトカルチョ開始！　どっちが勝つか張ってくれ！」

翔一は早くも一子とクリスの決闘の勝者がどちらかを賭けにしていた。その逞しさにまたしても呆れる大和と京と卓也だった。

決闘開始のアナウンスが入り、多くの生徒が見物に集まってくる。
そんな中で翔一のトトカルチョを手伝っていた大和は、百代が近付いていきたのに気付いた。

「おーやってるな弟たちよ。ショバ代納めてもらおうか？」

「まあまあ姉さん。アレ見てよ、うちの転入生」

上納金をむしり取ろうと声を掛けて来た百代に、大和は話を逸らすべくグランド中央で一子と相対しているクリスを指さした。

大和が指差した先に視線を向けた百代は、その金髪を見て叫んだ。

「上玉キターー！！　あの金髪綺麗だな！　撫で撫でしたいぞ！」

どうやら百代は1発でクリスを気に入った様子だった。

その姿を近寄らず遠くで見ていた緋鷺刀は、分かり易い百代の反応に苦笑いを浮かべ、その隣に立っていた由紀江は急に聞こえて来た大声にビックリしていた。

「入学の時に聞いた決闘システムってこういうものだったんだね」

「なんかもうオイラビックリしてばっかだぜ」

「新鮮な驚きですよね」

外見殆ど女な男子生徒と、刀を持ってストラップと話す女子生徒の組み合わせに、周りにいた生徒は敬遠がちに距離を取るのだった。

グラウンドで広がる生徒たちの喧騒の中で、それぞれ準備運動を終えた一子とクリスを見て、鉄心は生徒たちの輪より進み出た。

「これより川神学園伝統、決闘の儀を執り行う！　両者、前へ出て名乗りをあげるがよい！」

鉄心の言葉に従いまず一子が1歩前に出た。

「2年F組、川神一子！」

「今日より2年F組！　クリスティアーネ・フリードリヒ！」

お互いの名乗り出にそれぞれ声援が送られる。
一子には千花や岳人を代表としたクラスメイトの声援が、クリスには真与や翔一といった転入生を歓迎する生徒からの声援が上がった。

「ワシが立ち合いのもと決闘を許可する。勝負がつくまでは止めぬ。が、今回は武器を持っての決闘、どちらかが武器を手放した場合や、決した後にも関わらず相手を害しようとするならワシが介入する。よいな？」

「承知！」

「承った！」

告げた注意にそれぞれの言葉での了解を受け取った鉄心は、向かい合って互いを牽制し合う一子とクリスから1歩下がり手を振り上げ、

「いざ尋常に――はじめいっ！！」

勢い良く振り下ろした。

同時に地面を蹴り間合いを詰めて行く一子とクリス。
一子は手にする得物の長さを利用し、クリスを自分の間合いに踏み込ませないように薙刀での斬撃を繰り出す。
広い間合いを使える自分の方が、クリスが間合いに慣れるまでは戦闘を優位に進める事が出来るから、今のうちに優位を取っておきたいのが一子の考えだ。

横薙ぎから切り返しての斬り上げ、そして振り下ろしと薙刀の長さと重さを利用した振り回し気味の斬撃を切れ間なく続ける。

クリスは無理して間合いに入る事をせず、一子の攻撃が届くギリギリ1歩外で繰り出される連続攻撃をよけながらも、きちんと目で追い続ける。
クリス自身も武器の長さから自分が不利なのは気付いているが、逆に柄の長い武器は懐が深くなるため踏み入る事が出来れば、近い間合いで小回りの効くレイピアを持つ自分の方が有利になる。

互いの思惑の中、先に動いたのは一子。

「その腕……もらったぁー！！」

1歩大きく踏み込んで、間合いのギリギリ外にいたクリスを強引に薙刀の間合いに入れ、武器を持つクリスの右手を狙って横薙ぎを放つ。

「ふっ！」

冷静に一子の行動を見ていたクリスは慌てることなく飛び退き、迫り来る斬撃をかわす。一子も空いた間合いの分踏み込むと、よけたクリスを休ませる事なく再び連続攻撃を続ける。
その攻撃全てを金髪を躍らせて華麗にかわすクリス。

2人の勝負を見て、的確に推移を読む人間もいた。

「ワン子の攻めが単調すぎる。転校生の目がそろそろ慣れる頃だ」

大和の肩に手を回しながら見ていた百代が呟くように言う。
少し遠く離れたところで見ていた緋鷺刀と由紀江も同じ事を思った。

「今攻め込んでいる先輩の攻撃に転入生さん慣れてきましたね」

「あそこまで単調だとさすがにね……でも攻撃に移る瞬間を見極めて――仕掛ける！」

動きに気付き小さく鋭く言った緋鷺刀の言葉と同時に、クリスはかわす動きを急に止め強く間合いに踏みこむと突きを繰り出す。

「やーっ！」

「っ！？　迅いっ！」

急に踏み込み予想外の速さで放たれた突きに、一子は身を捻りすれすれで回避する。

仕切り直しに間合いを取り直す一子を見て、クリスは無理に追い掛けずにレイピアを引き構え直す。

だがクリスの攻撃速度に何より驚いたのは、周囲で勝負を見ていた生徒たちだった。一瞬の静寂の後、爆発するような歓声が上がった。

「すっげぇ！　２人ともやるなぁ！」

「今、攻撃したんだよな！？　突いたよな！？」

「そうみたいだけど……殆ど見えなかったね」

興奮する翔一と驚きの声を上げる岳人と卓也の横で、京は冷静に相対する２人を見て言う。

「あの突きの迅さは尋常じゃない。ワン子……次間合いに入られたら終わりだよ」

京の予測に添うように、クリスは一子の攻撃に目が慣れたため今度は自分から攻撃を仕掛けるための構えを取った。

「続けて行くぞ、次で仕留める！」

だがそれを黙って待ち受ける一子ではない。

「上等よっ！」

吐き捨てるように叫んだ一子は持っていた薙刀を勢いよく高速回転させる。回転させる事で攻撃の出処を分からせないと同時に遠心力を自分の攻撃に上乗せが出来る。

一子の構えや行動から必勝の技を繰り出す準備と感じ取ったクリスは、どんな動きにも反応できるように神経を緊張させつつも身体の余裕を持たせ構える。

（うかつに踏み込めばそこを斬られる。次の一撃を全力で避けてその隙を突く！）

（――なんて考えてるんでしょうけど、だったら……）

的確にクリスの思考を呼んだ一子は薙刀を回転させながらクリスに向かって突っ込む。

「おい違うぞワン子。そうじゃないだろ」

大和はいきなり呟いた百代の言葉の意味を理解できず首を傾げた。

だがその呟きが聞こえない一子は止まる事はなく踏み込み、回転させていた薙刀を頭上に大きく振り上げる。

誰もがそのまま頭への強烈な振り下ろしが放たれると思っていた。
が――

「川神流――【山崩し】！」

薙刀の刃筋は、予想を覆し斜めに流れて行きクリスの脚へと振り下ろされた。

フェンシングの試合において有効打撃部位は胴だけだが、薙刀の試合では脚への攻撃もルール上問題なく有効だ。脚への攻撃に不慣れな人間なら間違いなく今放った『すね技』をくらってしまう筈である。

一子のこの考えは間違っているわけではない。ただ1つの誤算があっただけだった。

フェンシングには一子の知らない全身が有効打撃部位になる種目があり、クリスが幼い頃から習っていたフェンシングがそれだったという事。

「ふっ！」

「よけ――！？」

「セェイ！！」

当たるはずと確信していた渾身の一撃をよけられ、驚愕に思考が止まる中でクリスの攻撃を見つめる一子だったが、次の瞬間、頭の中にある言葉がよぎった。

『戦闘中考えるのは別に悪い事じゃないが、動き出したら理性で考えるな、本能で考えて感じろ』

「うりゃあ！」

何も考える事なく本能のままに無理矢理右腕を引き戻し、振り下ろした薙刀を引き寄せると同時に今度は左腕を突き出し、薙刀の柄尻を迫り来るクリスが放った突きにぶつけた。

さすがのクリスもこの一子の攻撃は予測できなかったのだろう、武器がぶつかった瞬間、思わず力を緩めてしまいその衝撃でレイピアが吹っ飛んでいった。

一方の一子も無理矢理腕を引き戻した事で、大した力も入れられず武器がぶつかった衝撃で手が痺れ、薙刀を手放してしまった。

「そこまで！　この決闘の儀、引き分けとする！」

両者が武器を手放した事で鉄心は試合終了の号を上げる。

思いもよらなかった結果となったが、見物していた生徒から物凄い勢いで驚きと歓声が上がった。

だがある意味で1番驚いていたのは百代だった。

百代はあの瞬間、一子の攻撃がよけられクリスの攻撃がそのまま一子に当たると思っていたし、事実、クリスがよけた時まではまさにその通りの展開になるはずだった。

「ワン子、お前よくあの瞬間にあれだけの動きが出来たな」

無理な動きをしたせいで両腕が震えている一子に百代は言葉を掛けた。その言葉に一子は苦笑いの中にも確かな歓喜の笑みを見せた。

「ジン兄の言葉を思い出したの。『本能で考えて感じろ』って言葉。そしたら何も考えずに出来ちゃった」

百代は驚きに目を見開いたがそれもほんの一瞬、すぐに笑みを浮かべると嬉しそうに笑う一子の頭を少しだけ荒っぽく掻き雀った。

こんなところにも神の思い出が残っていた。
それが嬉しくて、でもやっぱり寂しくて、百代は心の中で少しだけ沸き上がった想いを隠すための笑顔を浮かべ続けたのだった。

第４８話　転入生歓迎、クリスティアーネ登場（後書き）

あとがき～！

「第４８話終了。あとがき座談会、司会の春夏秋冬　廻です。今回のお相手は――」

「クリスティアーネ・フリードリヒだ！」

「はい留学生クリスの登場です。さて今回のお話ですが……」

「しかし自分が出てくるのにこんなにかかるとはな。まゆっちですら１０話以上前に登場したというのに」

「ごめんね。でも君は原作までいかないとキャラに絡ませる事がなかなか出来ないんだよね」

「う～！　それ言うならマルさんはとっくに絡んだではないか！不公平だぞ！」

「ちょっと！？　名前出さないでよ！」

「うん？　なんでだ？　『猟犬』ってマルさんの事だろ？」

「どれだけ読み手の方にバレていようが、本文にはまだ『猟犬』＝マルギッテという言葉は１回も出てきてないの！　だから今あんたが言った言葉は思いっきりネタバレなの！」

「お前だって言ってしまったじゃないか。何故自分だけ怒られる」

「1回暴露したものを今更隠したってしょうがないだろ！　頼むから空気呼んでくれ！」

「うぅ～」

「貴様か？　私の愛しいクリスを泣かせたのは？」

「げっ！？」

「あ、父様」

「おお、我が愛しのクリス。可哀想にこんなに目を赤くしてしまって……だが安心するがいい、お前を泣かせたゴミは私が今すぐに排除してやる」

「ちょ！？　嘘だろ！？」

「やりなさいマルギッテ」

「Ｈａｓｅｎ　Ｊａｄｇ！！」

第４９話　転入生歓迎、クリスについて（前書き）

第４９話投稿。

大和とクリスのぶつかり合いの理由、これでいいかな？

第４９話　転入生歓迎、クリスについて

クリ。

犬。

さて、みなさんはこれを聞いてどう思うでしょうか？

犬はまあそのまま動物の犬を連想するでしょう。ではクリは？　真っ先に思いつくのはやはり植物の栗でしょうか。

だが違います。違うんですよみなさん。

この２つの言葉はワン子とクリスが互いにつけたあだ名なんです。

クリスという呼び名ですら本名のクリスティアーネの愛称だというのに、ワン子のアホはさらに短くして『クリ』などと呼びだしたんです。

それに対抗してか、クリスも一子がワン子と呼ばれているという理由から『犬』と呼びだしました。

馬鹿だと思いませんか？　子供っぽいと思いませんか？

正直に申しても結構ですよ、みんな馬鹿だ子供だと思っていますから。

ほら見て下さい。

「ねぇクリ」

「何だ犬」

両腕を無茶して使い筋肉が痙攣していて、保健室で今日1日治療していたと思っていたワン子が帰ってきたら、すぐにクリスに食ってかかってます。それに簡単に乗るクリスもクリスですよ。

「なに微笑ましそうな顔で2人を見てんのさ大和」

「大和の視線を独占するなんて……ワン子たち許せない」

「実際に微笑ましいだろモロ」

後ろで何か言っている京は無視してモロにのみ言葉を返す。そんな俺のいつもの揺らぐ事ない態度にモロは苦笑いを浮かべた。

朝のＨＲの大半の時間を、いきなり始まった決闘に取られたものの、何とか時間内に終わり教室に戻った俺たちはいつも通りの授業を受けた。

今は帰りのＨＲでウメ先生を待っている状況。そして間をおかず姿を現したウメ先生は教壇につくとさっさとＨＲを開始した。

「待たせたな。ＨＲを続ける。が、その前に」

と、いきなり言葉を切ったウメ先生は、俺たち風間ファミリーが集合する席に視線を向けると、代表してキャップに声を掛けて来た。

「クリスの事だが、彼女の面倒は風間たちに任せる」

「え、俺たちに？　いースけど」

「なんで？」

いきなりの言葉にその意味を深く考えずに答えるキャップと、眉をひそめ訝しげに言葉を発する京。そんな2人のウメ先生は分かりやすい理由を答えた。

「クリスは島津寮に入るからだ」

「なるほど、了解」

あっさりと了解するキャップに、俺と京とモロは呆れた表情を浮かべるしかなかった。

ガクトはどうやら聞いてなかったらしく驚きの声を上げていたが、クリスの入寮の理由が温泉を楽しみだという、何とも“日本を誤解している外国人が好きそうな場所”だったためガクトも呆れながら納得していた。

「椎名。隣の部屋なんだからお前が面倒見ろよ」

弓道部としての繋がりもあるためか、ウメ先生は当面のクリスの相手を京に任せたようだ。

まあ、男の俺やキャップ、ゲンさんよりはいいだろうが、京は果してウメ先生の要望通りクリスの面倒を見るか心配だ。

「よろしく」

「……よろしく」

律義に頭を下げるクリスに、京は一応言葉を返した。

そんな態度の京を見てウメ先生は何やら難しい顔をしていたが、小

さく息を吐くと気を取り直してＨＲを続ける。

「さて、先日も言ったが来週の月曜日に今度は編入生が来る。先に言っておくが性別は男だ。阿呆な賭けはするなよ」

騒ぎだす人間を先に牽制するウメ先生。

勢いよく質問しようとしていたガクトと小笠原さんが出鼻を挫かれ何やら悔しそうだ。あの２人って性格とは全然違うけど異性に対する行動理念って似てるよな。

その後特に問題なく帰りのＨＲは終了し、放課後となった。

帰る準備をしていると所在なさげにクリスが周りを見渡していたが、俺とキャップを見るとどこか安堵したような表情を見せた。

「ちょっといいだろうか？」

「おう。どーした」

キャップが答えると、クリスは困ったように眉を寄せた。

「部屋が隣という椎名殿に寮へ案内してもらおうと思っていたのだが、部活がある、という事で行ってしまったのだ」

やっぱり逃げたか京の奴。

他人への排他的態度は確かに“多少”は改善されたが、それでも本当に“多少”なだけでまだ他人との距離を自分から詰めるような行動は取らない。

「そりゃごめんな。あいつ取っ付きにくいけどいい奴だから。でも

案内してやりたいけど俺これからバイトだしな……」

「俺がやるよ。ついでに学校も軽く案内するよ、クリス」

キャップの言いたい事を悟り言われる前に申し出る。分からない事が多いだろうから、先にいんろな事を教えておいた方がいいだろう。

「ありがとう」

柔らかく微笑む顔を見て、素直に可愛いと思った。金髪とはある意味で得をしている部分があるのかもしれない。

とりあえず円滑な人間関係を築くための大切な出だしとして、当たり障りない自己紹介をしておこう。

「直江大和。同じ島津寮の1階。よろしくな」

俺の名前を聞いて日本の異称と同じだと気付き、何故か嬉しそうに俺を『大和』と呼ぶようにしたクリス。そんな俺たちをクラスの男子が複雑そうな顔で見ている。

恐らく言い寄りたいけどその後についてくる父親が怖い、のジレンマだろう。案内するという大義名分があってよかった。

時代劇が好きで、そのテーマとなっている『義』を重んじる事に誇りを持っている、などのクリスの趣味や気質を聞きながらも、廊下にある学校掲示板を指さす。

「掲示板に張り紙が多いでしょ？　バイトが許されてるからいろんな店からの求人募集があるんだ」

「他にも茶飲み友達募集や将棋対戦者受付中などの張り紙もあるが

……」

「勝負好きが多い学校だからね」

「様々な技能を競えるというわけだな。素晴らしい」

何やら都合のいい風に解釈したようだ。

別に技能を競うとかじゃなくて殆どの生徒が基本報酬目当てで、まれにその勝負を本当に楽しみたい人間が受ける。

基本的な場所を案内しつつ廊下を進むが、すれ違う生徒たちがクリスの美貌に振り返ってくる。中には俺の知り合いもいて話しかけてくる奴が多い。

その度にクリスの紹介をするため、ずいぶんと呼び止められてしまった。

「大和は友達が多いな。何度も呼び止められてしまった」

「悪いな、次から次に来て」

「おかげで転入初日でずいぶんと知人が増えた。逆にありがたいぐらいだ」

一応俺の謝罪を受け取りながらも、それをいい方へと捉えてくれた。たぶん気を使ったというよりはクリスの生まれ持っての気質なのだろう。騎士道精神とか言っていたからな。

そんな会話の中でクリスが学園の女子生徒というか、日本人女性の特色と言われる『大和撫子』について言っていたし、それについて土地柄の事も話したのでついでに街も案内する事にした。

通学路にもなる川沿いを歩きながら多馬川を最初に案内し、道すがらいろいろ説明をしながら連れて来たのが――

「ここが川神院」

案内された川神院の山門を見上げ、クリスは感嘆の声を上げた。

「おお。これが伝説の拳法寺！　日本の最終兵器！」

海外ではそんな風な話になっているんだ……全てを否定できないのが何故か悲しい。だって姉さんとか鉄心さんとかルー先生、それにここは兄弟の家でもある。

あの人たちを考えると本当に最終兵器と言っても過言じゃないからな。

「奥から溢れてくる闘気と品格！　素晴らしい――ん？」

山門の前で周りの目など全く気にせず大きな声で称賛を上げていたクリスだったが、門の奥から体操着姿のワン子が姿を現したのを見て言葉を飲み込んだ。

「あークリだ。何してんのウチの前で」

「街を案内してるんだ。京が部活だから」

ワン子の疑問に俺が答える。

それに納得したように頷いたワン子は、クリスを見て口端を上げると何故か偉そうに胸を反らした。

「どうよクリ。川神院は壮大でしょ！」

「ああ、素晴らしい。やはり日本に来てよかった」

ワン子の自慢もなんのその、クリスは大変素直に答えた。
その反応がちょっと物足りなかったのだろうか、ワン子は少し意地の悪い笑みを浮かべる。

「だったらお賽銭を払いなさいよ。ホレ出しなさい」

「おいワン子」

ワン子の言葉に急に顔をしかめたクリスを見て、俺は窘めるように名前を呼ぶ。もちろん俺は本気ではないとは分かっているし、ワン子も軽いジョークのつもりで言ったのだろうが、クリスはそんなワン子の態度と言葉にあからさまに嫌悪の表情を見せた。

「姉も学長もこの寺院も凄い風格だというのに、犬だけが妙に浮いているな」

そのクリスの言葉に俺は僅かながら反応してしまう。
クリスは知らないのだから仕方ないが、でもだからと言って本人がいるところで真正面に言っていい言葉じゃない。

「ふーんだ！　アタシはこれから走り込みだから馬鹿にかまってる時間なんてないわ」

だが当人であるはずのワン子は意外とあっけらかんとしていたので、俺も余りなにも言わずにこれから走り込み行くワン子を励ます意味も込めて頭を撫でた。

「おおぅ、何やらやる気が出てくるわ。頑張るわよアタシ！」

握り拳を作り気合を入れたワン子は、その場で駆け足をするようにバタつかせると、凄い勢いで駆け出して行った。

クリスは俺と一緒にそれを見送った後、感心したような声を上げた。

「犬は素晴らしい向上心だな」

「認めてるならあんまり喧嘩しないでね」

「あちらから売られている気がするのだか」

「……まぁね」

今はあまり突っ込んだ話はしない方がいいようだ。

どうもこの子、あの父親の親馬鹿な態度から分かるが、溺愛され甘やかされて育った感じが所々の仕草や態度で見て取れる。何より空気を読めないところがある。

いずれぶつかる事がありそうだな……

そんな事を考えつつ、クリスを川神院の門から続く仲見世通りを案内する。

下校中に買い食いするのは咎められるかと思ったが、そこまで頭は固くなかったらしく、素直に紹介した久寿餅の美味しさを喜んでいた。

久寿餅を食べながらいろいろとクリスの事を聞く。

甘いものが好きでぬいぐるみ集めが趣味。綺麗な外見とは違った凄い女の子らしい中身が意外だった。

だって姉さんの事を考えてみてよ。ああいう凛とした外見で実は趣味がぬいぐるみ集めだったら可愛いところがあるが、実際は――

『特技は敵を殲滅させる事。好きな漫画は『北〇の拳』』

性格まんまの人だし。

「大和は何が趣味なんだ？」

「読書に映画鑑賞。後ヤドカリとか飼ってる」

同じように質問してきたクリスに俺も答える。

当たり障りの話題だが、クリスのひと昔前の日本の映画や時代劇の話を、持っている広く浅い知識でなんとか拾っていく。

だがまあ話が全く合わないとい事もない。こっちがクリスの話題について行けるような知識があれば十分上手くやっていける。

そう思って連絡先に携帯番号も聞いておこうと思ったが、案の定、父親からの事前防衛策がしっかりと掛けられていた。

本当にお嬢様だね、この子。

このまま何もなく案内が終わると思っていたが、問題は思いもよらぬところから発生した。

「来日記念の奢るよ。ささやか過ぎるけど」

「嬉しいがそういうわけにはいかない。１人５００円だな」

事の起こりは食べた久寿餅を奢る奢らないから始まった。

実はクリスとワン子の決闘が引き分けだったため、勝者を賭けていたトトカルチョでキャップが胴元の1人勝ちをした。それを報酬1割で手伝っていた俺と京は、振って湧いた臨時収入があったのだ。それを使っての奢りだったため俺としては全然問題なかったのだが、その事を話した途端クリスの表情が変わった。

「それは詐欺ではないか。賭けとは払い戻しがあってこそ成立するものだ。私たちの勝負の結果を賭け事にしていた事も好ましく思わないが、お前たちのやった事は一種の詐欺だ」

「詐欺なんかじゃない。みんな納得しているからやっているんだ」

「だがお前たちは引き分けの際の払い戻しについて何も説明してないかったではないか！」

クリスの言葉には確かに一理ある。だがだからと言ってそう素直で全てが上手くいくわけがない。賭けもそうだが情報とは裏を呼んでこそ真の意味を発揮するのだ。

「それは説明から読み取れなかった方が悪い。冷静になって考えれば引き分けの際の事も事前に分かったはずだ」

「それは言い訳だ。情報とは全て公開してこそ公平性を持つ。お前たちのやった事は間違いなく詐欺だ！」

意見は平行線をたどったと同時に俺はその時に理解した。

俺とクリスは相容れない。

クリスは義を重んじ正々堂々、公平である事を最も大事だと思って

いるようだが、俺はあらゆる手を尽くしてでも勝つ事を信条にしている。
確かにクリスの言う通り正々堂々と公正である事も大事だと思っている。だがそれに拘って大事なものを取り零したら何の意味もなくなってしまう。
結局、俺たちは相容れない意見を前に互いを認める事は出来なかった。

「――って事がさっきあったわけなんだ」
金曜集会で俺は姉さん、京、ガクト、ヒロの前で放課後、クリスとの間にあった言い争いを話した。
「失礼な女だね。案内してくれた大和に対して」
うん京、怒ってくれるのは嬉しいけど、お前がウメ先生に頼まれてた案内をブッチしたのがそもそもの原因なんだけどな。まあちゃんと部活に顔出していたから溜飲は下げてやるけどな。
そんな俺たちを苦笑いを浮かべて見ていたヒロが声を掛けて来た。
「でも、相性はいいかもしれないけど根本的な考え方は合いそうにないね」
「大和とクリスが相性がいい？　どう聞いたらそんな感想が出るんだよタカ」
信じられないと言った感じで眉をひそめるガクトに、タカはそれこそ心外といった顔で答えた。

「そうかな？　なんかそのクリスさんって一子ちゃんと似た気質だと思うんだ。そう考えれば大和君とは相性いいと思うんだけど」

恐らくそう思っているのヒロだけだろう。

言われてみればそうとも思えない事もないかもしれないと思うのだか、俺もガクトも京も首を捻るしかなかった。

「お？　噂をすればこの気はワン子とモロロだな」

姉さんの言葉通り、すぐにワン子とモロが部屋に入ってきた。

後はキャップがバイトの残り物を持ってくるのを待つばかりだ。今か今かと待ち構えているワン子が微笑ましい。

キャップが来るまで他愛のない無駄話で時間を潰していた俺たちの耳に、外で原付を停車する音が聞こえキャップの到着を知る。

そうなると落ち着きがなくなるのがワン子。本当に尻尾が生えていたらまさに犬のように物凄い勢いで振っているに違いない。

「ウィース！」

「待ってたわよ晩ご飯！！」

部屋に入ってきたキャップに物凄い勢いで駆け寄ったワン子の声で、今日の金曜集会の晩餐会が始まったのだった。

「さぁて、今日の議題なんだか」

「明日どこで遊ぶか？」

食事が終わり、月末金曜集会の定番である姉さんの借金返済も終り、まったりとなった雰囲気の中で切り出したキャップに京が言葉を返す。
だがキャップはその京の言葉に首を振った。
「それも重要だが……転校生のクリスの事だよ」
「クリがどうかしたの？」
「俺たちのグループに入れようかって議題出てたろ？」
「今聞いたよ！？」
突飛ないキャップの言葉に全員の思いを代表してモロが突っ込んだ。というか何でその考えに到達するかが分からない。相も変わらず自由な男なのはいいが少しは俺たちの身にもなって欲しい。
「だってウメ先生にも頼まれたろ？　俺はいいと思ったんだけど」
「確かに面倒見ろと言われたけど……クラスメートとして仲良くはするけど、金曜集会にまで案内するって事とはレベルが違うよ」
キャップの言葉に納得しつつも反対の意思を強く示すモロ。
今回の議題でモロと京が反対するのはまず間違いないだろう。だがそんなモロの言葉もどこ吹く風でキャップは自分の我を通す。
「そんな事は分かってるって。でもクリスは逸材だし、ここの女子連中にも負けず気が強いし面白い！　俺、気に入ったし一緒に遊びてえって思った。久し振りの新メンバー加入になるけど、みんなど

う思う？」

「1人ずつ聞いてみな、キャップ」

もう何を言っても自分の意見を変える気がないのを、その言葉と態度で悟った俺は呆れながら提案する。そんな俺の思いを知ってか知らずか、恐らく気付いていないだろうキャップは、真っ先に姉さんに聞く。

「まずは牢名主のモモ先輩からどーぞ」

「賛成だ。クリスは欲しい。色んな意味で。いじくれる。いろいろな意味で」

姉さんは即答。答えは分かり切っていた。

「俺様賛成。理由は簡単、可愛いし骨もあるから」

ガクトも賛成。こいつは聞くだけ無駄だ。

「クリはいらん子だと思うけど……いつでも勝負を挑める相手が増えるのはいいわね。ただあいつ自身はこーいうの好きかしらね？」

ワン子は珍しく保留、様子見を取った。

「私は反対。他人は増やさなくていい」

京は予想通り反対。仲間を神聖化させている京は他人が入ってくるのが我慢ならないのだろう。

「僕も京と同じで反対かな。今更新しいメンバーを入れてもね」

モロも意見を変えず反対。

「僕はどっちでもいいと思うけど……キャップの意見に任せるよ」

1番クリスと接点のないヒロは様子見を取る。まあ当たり前だろうけどな。

今のところ賛成3に反対2、様子見が2という結果になっている。
ある意味で残りの俺の意見が重要になってくるのだろう。
そう考えていると思った通り、キャップが俺に期待を込めた眼差しを送ってきた。

さてどう答えるかな。
俺としては放課後の出来事があったせいで、今は余りクリスにいい感情を持っていない。だが主観で物事を判断するのはしたくない。
クリスの事情も考えなければならい。
となると意見は決まっていたようなものだ。

「俺は様子見。クリスも異国で1人は寂しいだろうと思うけど……ワン子の言うようにあいつ自身がここに馴染むかねぇ」

「そうだね。私はそれが何よりの不安」

俺が態度を軟化したせいなのか、京も反対と言っていた時のような雰囲気はなかったが、その言葉の奥に隠れた感情は察する事は出来る。
京はクリスが何かしたら全力で排除するつもりだ。

「とりあえず声を掛けることに問題はないわけだな」

確認するように見渡すキャップに俺たちは一応みんな頷いた。

しかしキャップはクリスを気に入ってるようだな。まあ自分の意見だけで全てを決めようとしてないだけ、ちゃんと俺たちの事を思ってくれているんだろう。

「まとめると、クリスには声を掛けるけど……空気悪くなりそうだったら遠慮なく切るって事で」

たぶん京のためを思ってワザと『切る』とか厳しい言葉を言っているんだろう。それが分かっているから京もキャップの意見に頷いた。

「でもな、俺もっと楽しくなる確信はあるんだよ。この数年、新規メンバーなんて俺が言い出したの初めてだろう？　それぐらい面白い奴だぜクリスは。俺を信じろ」

どこから沸いてくるのか分からないキャップの自信に、俺たちはいつものように呆れながらも頼もしいその姿に、一応は期待しておくのだった。

第４９話　転入生歓迎、クリスについて（後書き）

あとがき～！

「第４９話終了。あとがき座談会、司会の春夏秋冬　廻です。今回のお相手は――」

「よう！　久し振りだな！　キャップこと風間翔一参上！」

「おお！？　恐ろしいまでに久し振りだな。えっと……前回あとがき登場が……」

「そこまで考え込まないと思い出せないのかよ！？」

「だってお前、実に４１話振りの登場だぞ？　２つの閑話も合わせると４３話振り！　もはや記憶の片隅に追いやられて当然だろ？」

「そりゃあそうかもしれねーけどさ……まあいいか」

「そうだね。さて今回のお話ですがちょっとだけ原作と内容が違います」

「性別の賭けをやってないし決闘の賭けも引き分けだったからな。でもよ、実際胴元の俺の１人勝ちってありなのか？」

「どうなんだろうね。今回はクリスを怒らせるためにああいう風にしたけど、実際のところはよく分からないのでツッコミはしないでください」

「詐欺はひでー言い方だけどな」

「たぶん、本当なら引き分けの場合は払い戻しなんだろうね。でもまあ学生がやるものだから大目に見てください。物語進行のためです」

「で？　次回はどうなるんだ？」

「お楽しみにしてください。今回はそれしか言えません」

「ん？　まあいいか。ってことは今回の座談会これで終わり？」

「そういう事、では次投稿もよろしくお願いします」

「な～んか不完全燃焼だぜ」

読者の皆様にお聞きしたい事があります。

１話の長さなんですが、このままでいいでしょうか？　長くありませんか？　短くした方がいいでしょうか？

今現在１話を書き上げるのに大体６千文字～７千文字、場合によっては７千文字を超えています。

そこで皆様にお聞きします。

１．このままでも問題ない（今の文字数でＯＫ）

2．もっと長くても大丈夫（1万文字でもいいよ）
3．話数が増えてもいいから短い方がいい（3千文字～4千文字で）

以上の3択ならば皆様はどうお考えになりますか？
活動報告の方にも同じ質問をしておりますので、よろしければご協力頂ければと思います。
参考程度と考えていますのでお気楽にお答え下さい。
集計の結果で変えるとは今は考えていません。あくまでも参考です。

第５０話　夜明けの刻、太陽の帰還（前書き）

第５０話投稿。

ついに帰ってきました。

第５０話　夜明けの刻、太陽の帰還

――２００９年　４月２４日　金曜日　ＡＭ１０：３０――

実に２年８ヶ月ぶりに俺は川神の地を踏みしめた。

駅前のロータリーで足を止め、長時間の移動で固まった身体をほぐすように伸びをする。

飛行機で約１４時間と電車で約２時間。合計１６時間の殆どを乗り物に乗っているとさすがにくるものがあった。

飛行機は気を利かせてくれたのかファーストクラスだったが、それでも１０時間以上のフライトは慣れていないと精神的に疲れる。

そういえば２年８ヶ月前もアメリカについてすぐにそんな事を思ったな。

あの時はエコノミークラスだったから疲れも今の倍以上だったのを思い出した。

上げていた腕を下ろし時計で時間を確認する。今の時間は午前１０時半。日本に着いてすぐに時刻を合わせたから間違いはない。

時計から視線を戻し駅周辺を懐かしい気持ちで眺める。

特に変わったところはない。２年８ヶ月で劇的に変わるような事がある方がおかしいが、それでも込み上げてくる懐かしさは止められなかった。

「どうじゃ、約３年振りの故郷は」

後ろから急に掛けられた声にも、気配で誰が近付いて来ていたかは

分かっていたので俺は特に驚く事なく振り返る。
そこには予想していた通り、鉄心さんとルー師範代の姿があった。

「お久し振りです。鉄心さんとは2ヶ月ぶりですかね？」

「そうじゃな。元気にしておったか？」

「ええ、でもまあ帰るのに8ヶ月も掛かるとは思ってもみませんでしたよ」

俺の言葉に鉄心さんも苦笑いを浮かべた。

事情が事情だから仕方ないとは分かっていたが、さすがにあんなに待たされるとは思ってもいなかった。
俺が拾われ滞在したところがアメリカの特殊部隊だった事から、いろいろと調べなければならない事が多かったようだ。

まず何より俺が離れる事で部隊の情報が漏れないかどうかの確認。
俺がいったいどういう人物なのかのプロファイリングから始まり、部隊にいた全隊員に聞き込み。
漏らすような情報を持っていない事と、知っていても本当に誰にも話さない人間なのかを徹底的に調べられた。

だが何より調べるのに時間が掛ったのは、他国の軍人や傭兵と手合わせした事で、部隊の情報が漏れていないかという確認だった。

これは俺のせいではなく間違いなく『女王蜂』や『猟犬』のせいだ。

「まあ君は特殊なケースみたいだからネ。でも帰ってきてくれて嬉しいよ」

「本当にお久し振りです、ルー師範代」

少しだけ涙を見せているルー師範代に、俺は頭を下げて挨拶する。
そんな俺を見て本当に嬉しそうに頷くルー師範代に、待っていてくれる人がいるという事が、どれだけ嬉しい事なのかを改めて実感した。

「本当に久し振りだネ。でも見違えたよ、3年近く会っていないだけでここまで変わるとはネ」

そう言って俺を見上げたルー師範代を見て笑みがこぼれる。
これも本当に不思議でしょうがない。中学2年の時はルー師範代とそんなに変わらない身長だったのに、今は頭1つ大きくなっており現在の身長は185センチだ。

「それで……これから俺はどうすればいいんですか？　一応言われた通り気配を消していますけど」

そうなのだ。
今、俺は鉄心さんに言われた通り気配を完全に殺して川神に入ってきた。
気配を完全に殺したと言っても見えなくなるわけじゃない。ただ単にどれだけ優れた武芸者であろうと今の俺を見たら普通の人と認識するというだけ。
暁の業の1つ【衆寡（しゅうか）】。本来ならこんな時に使うものじゃない。

「なに、それは孫娘たちを驚かせるための仕込みじゃよ。お主のこれからじゃが、先月やった試験は覚えとるか？」

「ええ、覚えてますけど……あれっていったい何だったですか？勉強の総仕上げの割には意外と難しかったんですけど……」

先月、鉄心さんから送られてきた試験問題を思い出しながら、少しだけ顔を歪めた俺の疑問に答えたのはルー師範代だった。

「アレは川神学園の編入試験なんだヨ」

「編入試験？」

「ああ、君が戻ったら学校に通わせようと思っていてネ、ちょうど行方不明の間の勉強をすると聞いていたカラ、総仕上げとして受けてもらったんだヨ」

あの試験問題にまさかそんな意味があったとは思ってもいなかった。っていうか、俺は中学卒業した事になってるのか？

その疑問を口にした時の鉄心さんの顔を見て、ああこの人が何か無茶苦茶な事をやったんだな、と瞬時に悟った。

それはまあ置いておくとして、という事は俺は月曜から川神学園の生徒という事になるらしい。相も変わらず何というか、手際のいい人たちだ。

「そういうことじゃからな。家は今まで通り川神院じゃ。部屋はモモが時々っちゅうか、週に2度はお主の部屋で寝起きしとったから掃除とかは問題ないじゃろ」

何ともないように言う鉄心さんだったが、俺からしてみればとんで

もなく問題ありまくりな、ツッコミどころ満載な内容だった。

モモが俺の部屋で過ごしてたって……いいんですかそれで？　仮にも１０代の女ですよ？　普通注意すべき……ってモモが注意して聞くわけないか。

俺の考えが読めていたのだろう、鉄心さんもルー師範代も呆れたように肩をすくめてみせた。それに対してご苦労様です、と俺は声にせず視線だけで２人をねぎらった。

「してどうする？　荷物はそれだけみたいじゃが、すぐに帰るか？」

俺の持つバッグを見ながらの鉄心さんの提案に、腕を組んで考えた後で首を振る。

「荷物も数日分の衣服だけで少ないですし、持ったまま久し振りに川神を見て回りたいと思います。それに今日はちょうど金曜日ですから、秘密基地でみんなに会って、モモたちと一緒に帰ります」

そう、まず何よりあいつらに、モモに会いたかった。

俺の思いが言葉にこもっていたのだろう、鉄心さんは優しい笑みを浮かべて頷くと、俺に１枚のクレジットカードを渡してきた。

受け取ったものの意味が分からず首を傾げる俺に鉄心さんは言葉を掛ける。

「それで服とかを買ってこい。バッグに入っている分だけでは足りんだろうに。買った物は川神院に郵送すればよい」

「いいんですか？」

「お主なら無駄遣いはせんじゃろ。問題ない」

「いや、未成年の俺が使ってもいいんですか？」

「渋ったらワシの名を出せ、それで問題ないじゃろ」

そりゃあ川神で鉄心さんの名前を出せば、大抵の事は何とかなりそうですけどね。

でも今は鉄心さんの好意をありがたく受け取っておこう。衣服以外にもいろいろ必要な物を買い込まなければならないのは間違いない。

「ではワシとルーは学園に戻るからの」

「また今夜だネ」

そう言って鉄心さんとルー師範代は来た道を戻っていった。

残された俺は僅かな時間ながらもちゃんと出迎えに来てくれた2人をありがたく思い頭を下げた後、ショッピングモールに行くかデパートに行くかを考えながら、繁華街の方へと歩き始めたのだった。

日常品数点と服と下着を数着買った後、ぶらりと繁華街を回り終えた俺は、足の向くまま1つのビルが立つ土地の前に来ていた。

都市開発でなくなった以前の秘密基地の原っぱがあった場所だ。

ここにはいろんな思い出が詰まっている。

モモと一緒に風間ファミリーに入った事。竜舌蘭を守った事。コユキと出会った事。

風間ファミリーの原点とも言っていいここを最初に見ておきたかった。ここに来れば俺の中の思い出が変わってない事に確信を持てる

からだ。

2年間の記憶喪失の間に、自分の中の思い出まで変わってしまったかと思っていたけど、何も変わっていない。どうやら杞憂だったようだ。

数分、じっとビルを見上げ眺めていたが、そろそろ不審者に間違われると拙いのでその場から離れる事にする。
その足のまま今度は多馬川へと移動、川沿いから見える多馬橋を見上げる。あの橋の先に来週月曜から通う川神学園がある。

以前1度だけモモに連れられて行った事があるのを思い出した。あれは確か中学2年の夏休みになってすぐ、アメリカに行く前だったか、『来年から通うジジイの学校を1回は見てみないとな』と言うモモの言葉に、無理矢理同行させられたっけ。

またも頭をよぎる記憶に、思い出し笑いする俺。
いきなり笑い出したのでおかしい人と見られるかと思ったが、幸いにも俺の周囲に人の気配はなかった。

ひとしきり笑った後、時計を見て時間を確認、午後4時になろうかとしていた。

そろそろ秘密基地の方に行かないと誰かが来るかもしれない。下手すれば鉢合わせる事にもなりかねないから気持ち急ぐことにする。
過ぎ行く風景にも懐かしさを感じながら秘密基地への道を歩く。工業地帯に近付くにつれ景色の細かい変化は見られなくなった。
そう感じていたらすぐ目の前に秘密基地にしているビルが視界に入ってきた。

本当に変わってない。

見上げるその姿に多少の汚れや傷は増えているが、本当に変わっていないのが分かる。

モモ、ヤマ、キャップ、カズ、ガク、タク、ヒロ、ミヤ。風間ファミリーみんなの気配の残滓を感じる事が出来る。

待っていてくれたんだ。

鉄心さんの話から、みんなが変わらず俺の事を待っていてくれているのは聞いていた。でも、今ここで、この場でそれを感じる事が出来るのが、たまらなく嬉しかった。

だが建物に入ろうと1歩踏み出した時、何か違和感を感じた。

建物の中に『何か』が『ある』。

動いているのを感じるが気配からして人間のものじゃない。いや、人間どころかこの感じは生き物でもない。

だから直感で『ある』と思ったのだが、いったい何が中に『ある』んだろうか？

ロボット？

あり得ないと思ったが否定できない……だってあのキャップがいるんだ。ある日突然、

『いやー、ロボット拾っちまったぜ』

と言って本当にロボットを持ってきたとしても、十分あり得る事態だからだ。

少し疲れるがこれは完全に気配を殺して認識も出来ないようにした方がいい。
とりあえずロボットと予測を立てて、そのロボットに効果があるかは分からないが、堂々と入って行って何やら変なトラブルに巻き込まれるのも困る。

気配を完全に殺す【絶影(ぜつえい)】と認識齟齬を起こす【蜃陰(しんいん)】を使って秘密基地の中に入る。ついでに足音を立てない【空虚(くうほ)?】も使っておこう。

ゆっくりと建物の中の階段を上っていく。
1階から2階、3階まではその『何か（たぶんロボット?）』に遭遇する事なく昇り切る。そのまま4階へと足を踏み出そうとした時、上の階から『何か（たぶんロボット?）』が階段を下りてくる音を聞き、急いですぐ近くの物陰に身を潜ませる。

息をひそめ、その『何か（たぶんロボット?）』が通り過ぎるのを待つ。
思いもよらなかった緊張感を感じながら身を潜めている俺の視界に、それは映った。

「ふんふーん♪　ふふふーん♪　ふふーん♪」

何やら物凄くムーディーな曲を口ずさみ?ながら卵型の巨大な物体が、俺に気付く事なく目の前を通り過ぎて行った。

な、何なんだあれは?　いったい何故あんなものがこの秘密基地にあるんだ?

呆然としながらも視線を向こうに進んでいくロボット?に送りながら首を傾げたが、いつまでもここにいるのは拙いので、俺は業を維持しながら急ぎつつも慎重に階段を上り切り屋上へと辿り着いた。

【蜃陰】と【空?】を止めて安堵するように大きく息を吐く。

モモとヒロに感付かれないように【絶影】だけはそのままにしておく。

しかし、あのロボット?がいったい何なのか今は考えない方がいいだろう。キャップが何やら関わっているのは恐らく間違いないのだから、後でゆっくり聞けば済む事だ。

深く考えたくなかっていうのが本当のところだが、俺が行方不明になって2年8ヶ月もたっているんだ。俺の思いもよらない事が起こっていてもおかしくないだろう。今はそう思っておこう。

後頭部で手を組み、バッグを枕にして屋上に寝転がる。雲1つない夕暮れの空を眺めながら時間が過ぎるのをじっと待つ。

だからといって暇とは全く感じな。穏やかに流れる時間も嫌いじゃないし、何よりここにいればこれから集まってくる仲間たちの気配をすぐに察知する事が出来る。

そう思いながら時間を確認すると午後5時になっていた。と、確認すると同時に1つの気配がビルの中に入ったのを感じ取った。

この静かだけど、どこか深い想いを持つ気配は――ミヤだ。

そういえばミヤは高校はどこに行ってるんだろうか?　中学校の時は仕方なく父親について行ったが、高校は義務教育じゃない。

そう考えると、たぶんみんなと同じ川神学園に通っているんだろう。

しかし、あのヤマ大好きなミヤがよく3年間も我慢したもんだ。今現在のヤマの苦労が何故かよく分かってしまうな。

そんな事を考えていると、ミヤとあのロボット?が何やら話をしているような気配を感じる。やっぱりあれは風間ファミリーに関係のあるものだったようだ。

ミヤの到着から１０分後、感じた気配は２つ。
１つは荒々しい気配でもう１つは穏やかだけど芯の強い気配。間違いないガクとヒロだ。

ヒロの気配を注意深く探っていた俺は思わず感嘆の息を吐いた。
気配だけだから確かな事は言えないが、ヒロは強くなっている。初めて会った時の揚羽さんより上、恐らく武道四天王に並ぶぐらいだろう。

強くなるとは思っていたが、これほどまでとはな。

思った以上のヒロの成長に、後の楽しみが増えた事を嬉しく思っていると、ひと際大きな気配をかなり遠くにも関わらず感じ取る事が出来た。

強く、凛々しく、自信に充ち溢れた気配。それに最大級の懐かしさを感じた。
間違いなくモモの気配だ。

すぐにでも駆け寄りたかったが、今は我慢する。
今出て行ってしまえば、せっかく驚かせようと思って隠れていたのが全て水の泡になってしまう。企画した鉄心さんの面子はまあどうでもいいけど、俺も一応その提案に乗ったのだから最後までやり通

そう。

次にやって来たのはヤマだ。
ただ怒っているのを気配から感じるし、部屋の中で何やら愚痴をこぼしている風な雰囲気を感じた。
何やら嫌な事でもあったみたいだが、仲間と話している内に落ち着いてきのだろう、いつもヤマの気配に戻っていった。

ヤマも変わってないな。
お？　何やらモモとミヤに絡まれてるな。俺がいない間、あいつは舎弟という事でモモに関していらない苦労を押しつけてしまったに違いない。後で謝っておこう。

そうこうしている内にカズとタクが来て、最後にキャップが原付で到着した。
まさかキャップが原付の免許を取ったとはな。これも2年8ヶ月の時間経過の1つなんだろうが、俺の知らない事があるのはやっぱりどこか寂しく感じる。

数秒間だけ胸の内に湧きあがった空虚な感情に、仕方ないといった諦めにも近い笑みが浮かんできた。
どうしたって時間は戻らない。だけど俺は過ごしてきた時間を決して無駄だと思ってはいない。

寂しいと感じる事の方がおかしい。

そう感じていたのは俺だけじゃないんだ。みんなだってそう感じてくれていたのは間違いないはずなんだ。
そんな思いを感じさせるほどの心配を俺はみんなに掛けてきた。だからみんなの変化を近くで見ることが出来なかった事に、俺が何か

を言う権利なんてないんだ。

そんな事を思いながら、何やら議題をしているであろうみんなの気配を探る。

お？　モモとガクの嬉しそうな気配に対し、ミヤとタクが少し陰湿な気配になったぞ。ヒロはあんまり関心なさそうだな。カズとヤマは何だろう、少し迷ってるような感じだな。何かを心配しているのか？

いろいろな気配の移り変わりが起きていたが、結局キャップが何かを言って纏めたのだろう、１番変化が大きく強かったミヤがいつもの感じに戻った。

はてさていったいどういう議題がなされていたのやら。

気になるところではあるが、そろそろ俺も動こうかな。

穏やかな雰囲気が漂い始めたであろうみんなを驚かせるため、俺は纏ってた【絶影】を最初に解き、少し間をおいて【衆寡】を解いた。

さてどんな驚いた顔を見せてくれるかな。

若干、底意地の悪い考えをしながら俺は屋上のフェンスに手を置き、そこから見える川神の工業地帯を眺めていた。

第５０話　夜明けの刻、太陽の帰還（後書き）

あとがき～！

「第５０話終了。あとがき座談会、司会の春夏秋冬　廻です。今回のお相手は――」

「ハローボーイズアンドガールズ。川神鉄心じゃ」

「物凄い日本語英語ですね……まあいいか。はい、川神院総代にして川神学園学長、川神鉄心さん初登場です」

「うむ、改めてよろしくのう」

「よろしくお願いします。さて今回のお話ですが……」

「まだ神とモモたちはミートアゲインせんのか？」

「いきなりのツッコミですね。本当は再会させるつもりだったんですけど、いつの間にかこうなってしまいました」

「何故こうなったかアンダスタンドしておるのか？」

「まあ、神から見た、感じだ金曜集会の感じを書こうと思ったのが長くなった1番の理由ですね。気配だけで何やっているか察知できるのって神か貴方か百代ぐらいですからね」

「否定はせんがな。という事はネクストタイムでやっとミートアゲインという事かの？」

「そうですね、1話使ってってのは長いかもしれないですが、まあやっと帰ってきたからそれなりに見せ場にしないといけないですからね」

「ほっほっほ、ハッピーなモモたちのフェイスが目に浮かぶわ」

「という事ですので、次回が皆さんお待ちかねの神と百代たちの再会の話になります。皆さんの期待していたものになるかは分かりませんが、次回投稿もよろしくお願いします」

「うむ、今か今かとエンジョイしながらウェイトするがいいぞ」

「ところで鉄心さん」

「ん？　なんじゃ？」

「その話し方はいったい何ですか？」

「ふふ、ちょっと若者語を話してみたんじゃがどうかのう」

「若者というよりルー〇柴ですよそれ」

第５１話　夜明けの刻、涙と再会（前書き）

第５１話投稿。

ついに再会の時！

第５１話　夜明けの刻、涙と再会

ｓｉｄｅ　篁緋鷺刀

「周囲にロクな異性がいないと同性に走るっていうしな」

「それはモモ先輩のケースでしょうか！」

モモ先輩の言葉に卓也君のツッコミが入る。

さて、いったい何からこんな話題になってしまったんだろうか。
最初は明日何をして遊ぶかの話題だったのに、いつの間にやらモモ先輩のレズ疑惑？に話が移行していた。

というか、モモ先輩にはジン兄っていう恋人がいるのに、レズもなにもあったもんじゃないと思うのは僕だけだろうか。

「私はレズではない。ただジン以外に私をときめかせる男がいないだけだ。何だったら今ここで私をときめかせてみろ男ども」

いきなりの無理難題に呆れしか出てこない。

「僕には無理すぎてバス。ガクトどうぞ」

「俺様フられ続きでパス。タカいけ」

「ジン兄に殺されたくないからパス。キャップいく？」

「えー？　恋に生きるは切なすぎるぜ。大和いけよ」

「俺に来るのかよ」

やっぱり最後は舎弟という名の生け贄である大和君。ありがとう、僕たちは大和君の多大な犠牲を無駄にしないよ。

飛び込んでこいと両腕を広げて待ち構えるモモ先輩に対し、大和君は数秒どうするか迷っていたが意を決したのだろう、既に予測済みな自分の未来に顔を歪めながらも行動に移した。

「やってやるぁ！！」

まるで命綱なしのバンジージャンプをやるかのような決死の叫び声を上げて、大和君はモモ先輩の胸に飛び込んで行った。
まさか本当にやるとは思ってもいなかった僕はちょっとだけ驚いてしまった。

飛び込んできた大和君を待ちかまえていたモモ先輩は、一瞬だけ優しく抱き止めるものの、次の瞬間には背中に回していた両腕に一気に力を込めた。
あれは抱擁というよりさば折りだね。

「ぐおぉぉぉ！？　せ、背骨がぁぁぁ！？」

案の定、大和君の絶叫が部屋に響き渡った。
こうなると結果が分かっていたのにそれでも行くなんて……これがエンターテイメントというものなんだろうか。
僕には無理だ、絶対出来そうにない。

そんな大和君の行動にみんなが笑い声を開けていたその時だった。

「っ！？」

最初に気付いたのはモモ先輩。
さば折りしていた大和君の体を放すと、驚愕の表情を浮かべて物凄い勢いで顔を天井に向けた。

突然の行動にみんなが不思議そうにモモ先輩を見る中、次にそれに気付いたのは僕だった。
モモ先輩と同じように天井に――いや、その上の屋上に僕たち以外の誰かがいるのに気付き顔を上げたのだった。

突然だった。
本当に何の前触れもなく。
いきなり屋上に気配が現れたのだ。

空から降り立ってきたわけじゃない。
ビルの外壁を登ってきたのとも違う。

最初から屋上にいてずっと気配を殺していたんだ。
しかも、モモ先輩ですら察知する事が出来ないほどの完璧な気殺だ。

背中を流れ落ちる嫌な汗に顔の表情が歪むのを止められなかった。
急に現れた気配は普通の人のように感じるけど、さっきまで全く何も感じなかった事を考えると絶対に普通の人とは違う。そう感じるのも何か理由があるに決まっている。

僕とモモ先輩を呆然と見るみんな。一子ちゃんも京ちゃんも屋上の

気配に気づいていない。いきなり現れた事でまだ周囲の色んな気配と合致していないから感じ取る事が出来ないんだ。

でも分かる。屋上にいる人は強い。たぶん僕では足元にも及ばないだろう。

「タカ」

小さく警戒しながらの言葉に僕は頷く事だけで答える。

モモ先輩も感じ取っているのだろう、屋上にいる人の強さを。そして今ここにいる中で自分だけが唯一対抗できる存在なんだという事も。

モモ先輩は言葉に出す事なく身振り手振りでみんなに座るように指示を出すと、僕に視線を送り親指で指して扉に着くように指示をしてきた。

僕も無言で頷き扉の横の壁に背を預けるようにして立つ。

異様な雰囲気の僕たちを見て、さすがに何かやばい事が起きているんだと察したのだろう、みんな言葉に出す事なくモモ先輩の指示に従ってソファーに座った。

それを見たモモ先輩は小さく頷くと、部屋を出ようと扉のドアノブに手を掛けた。

その時だった。

「っ！？」

モモ先輩の表情が驚愕に染まる。
それと同時に気付いた僕も信じられなかった。
この気配……まさか！？

バンッ

勢いよく扉を開く音に我に返った。
視線を向けてもモモ先輩の姿は既になく、気配の正体を察知したと同時に駆け出して行ったのだと容易に想像できる。
すぐに追いかけるか一瞬だけ逡巡するが、答えは決まっているようなものだ。

僕は呆然としているみんなに声を掛ける。

「急いで屋上に行くよ！」

ハッとなり最初に動いたのは一子ちゃんと京ちゃん。
今になってようやく屋上に人の気配がするのに気付いたのだろう、視線を天井に向けて立ち上がった。その2人を見て大和君たちも頷き合って立ち上がり、僕に視線を向けて来た。

みんなの視線に僕は無言で小さく頷くと、モモ先輩の後を追って先頭で部屋から出た。

side out

side 川神百代

あの感じた気配は本物なんだろうか？

屋上へ出るための扉のドアノブを掴みながら、私はここから先に進めずにいた。

最初に感じたのは異常だった。

急に現れた気配はまるで何でもない素人そのものの気配。しかしそれがいきなり屋上に現れたという事の異常性を考えると、素人に感じるのも何かの技の可能性の方が高い。

私すら完全に騙す事の出来る気殺に認識を間違えさせる技。

注意深く気配を探りながら、タカにみんなを任せて部屋を出ようとした時だった。

……

あいつの気配を感じたのは。

気付いた時には駆け出していた。

無意識だった。

何考えずに階段を駆け上がり、屋上へ出る扉の前に辿り着いた。

そしてドアノブを回そうとした時になって、ようやく我に返ったのだ。

でもここから先には進めない。いや、進む勇気がないんだ。

この扉の向こう、屋上に人の気配を感じてるのは間違いない。けど、この気配は本当にあいつのものなのか？　もしかして私は似た気配をあいつのものと間違えているんじゃないのか？

ひょっとしたら違うかもしれない。そんな考えが頭の中によぎった瞬間、私はこの扉を開ける勇気が持てなくなってしまった。

もう絶望を感じたくなかった。

希望を持ってこの扉を開けて、屋上にいる人物が待ち望んだ人物じゃなかったら、私はまた立ち乗る事が出来るだろうか。

2年8ヶ月という時間は余りにも長過ぎた。

あいつが行方不明になった時だって、みんなの、大和の、タカの、ワン子の、キャップの、京の、ガクトの、モロロの、風間ファミリーの仲間の力を借りて心を持ち直す事が出来た。

そして今、最大級の期待が私の心の中に広がっている。

もし、この期待が自分の思ったものじゃなかったら、私の心は持ち直す事すら出来ないほど崩れてしまうんじゃないだろうか。そんな恐怖が湧きあがって来たのだ。

そんな葛藤に悩む私の手を、両脇から優しく包む2つの手。

ハッとなり見ると、ワン子と京が私を安心させるような笑顔を浮かべて、優しく私の手に自分たちの手を添えていた。

この時になってやっとみんながすぐ後ろまで来ていた事に気付いた。

その存在を感じて、私は何を馬鹿な事をしているんだろうと思った。

またあの時と同じ1人で突っ走ってしまっていた。

1人じゃないんだ。

みんながいてくれる。

みんなだって私と同じ思いなんだ。

だからみんなで共有すればいい。

希望も、葛藤も、そしてこれから感じるであろう喜びも。

自分を落ち着かせるように目を閉じ1度息を吐く。

それ見て私の中の緊張や葛藤が和らいだのを感じ取ったのだろう、

手を重ねていたワン子と京が側を離れ私の後ろにつく。

目を開け正面を見据えた私は、1歩勇気を持って踏み出すようにドアノブを回し屋上へと続く扉を押し開いた。

side out

side 直江大和

いきなりの姉さんとヒロの行動に驚き。

何かと思って見ていたら急に部屋を飛び出して行った姉さんにさらに驚き。

それを見ていたヒロの『屋上に行く』の言葉に、何に驚いていたのかすら分からなくなるほど驚いていた。

急激に変わっていく状況に、なんとか食らいついて行くようにヒロの背中を追い屋上へと続く扉の前に辿り着く。

先に行ったはずの姉さんはドアノブを掴んだままの状態で固まっていた。その表情から珍しく葛藤が見て取れた。

迷っているというより恐怖しているその感じに、俺は思いもよらない衝撃を受けた。

あの川神百代が恐怖を感じている？

いつも自信に満ち溢れ、圧倒的な力を持ち、恐怖なんて感情はとっくの昔に失くしたと言っても過言じゃない姉さんが、屋上に続く扉を開ける事に恐怖を覚えていた。

この衝撃は２度目だ。

１度目は兄弟が行方不明になり縋るように閉じ籠った時に感じた。あの時は初めて見る『弱さ』に衝撃を受けたけど、今回は『恐怖』を感じている姿に衝撃を受けた。

だがだからこそ気付いた。

姉さんに『弱さ』を見させたり『恐怖』を感じさせる人間なんて１人しかいない。

この扉の先にあいつがいる。

ヒロはそれに気付いていたのだろう、心配そうに様子を見るワン子と京の背中に無言のまま手を添え、姉さんの隣へと押し出した。その行動にヒロの言いたい事を悟ったのだろう、振り向いて小さく頷いた２人は両脇からそっとドアノブを掴む姉さんの手に自分たちの手を重ねた。

手が触れた事で、やっと俺たちが後ろに来ていた事に気が付いたのだろう。

小さく息を吐いた事で葛藤していた心が落ち着いていっているのを感じ取る事が出来た。ワン子と京も姉さんがもう大丈夫だと判断し

たのだろう、重ねていた手を放す。

そして姉さんは掴んでいたドアノブを回し、扉を押し開き屋上へと足を進め、俺たちもそれに続く。

扉を開いたその先。

屋上のフェンスに手を置き、夕闇に暮れる川神の工業地帯を眺める背中が視界に入った。

男だった。

背を向けているから顔は分からないが、夕闇にも映える腰辺りまである漆黒の髪が風になびいている。背はガクトと同じか少し低いぐらいだろうが日本人男性の平均身長よりは高い事は分かった。

だが何より、真っ先に感じたのは懐かしさだった。

姉さんたちのような武道をやっていない俺たちにも、はっきりと感じる事の出来る懐かしさを、視界に映るあの背中から感じる事が出来た。

誰も何も言わない。

違う、誰も何も言えないんだ。

俺たちを包む静寂に、これは夢なんじゃないかと疑いたくなった。

見る夢にしては都合が良すぎるのも分かっている。集団で同じ夢を見る事なんてあるわけないと分かっている。こんな事を夢だと思っ

ているなんて馬鹿な事だというのも分かっている。

でも、みんな壊したくないから誰も言葉を出さない。

自分たちから言葉を発したら、この光景が壊れてしまうんじゃかという思いが、俺たちの中に広まっているのが分かる。

だからみんな待っているんだ、あいつから声を掛けてもらう事を。

そんな俺たちの雰囲気を悟ったのか、そいつは背を向けたままフェンスから手を下ろし、右手を頭に持っていき後頭部を掻き毟った。

ひとしきり掻いた後、手を下ろし後ろから見ても分かるほど大きく息を吐くと、ゆっくりと俺たちの方に振り返った。

まだ遠くて顔がはっきりと見えないのに、込み上げてくる懐かしさが増した。

足元に置いていたバッグを右肩に掛け歩み寄ってくる姿を、俺たちはよく知っている。

全てを包んでくれるような、いつも見守ってくれるような雰囲気を、俺たちはずっと求めていた。

先頭にいる姉さんまで、後3歩ぐらいのところで足を止めた。

まだ俺たちは誰も何も言わない。

今度は何か言いたくても声が出せない。

今声を出したら、意味不明に泣き叫んでしまいそうで。

俯けていた顔をゆっくりと上げ、ちょっとだけ困ったような苦笑いを浮かべた表情で、俺たちが待ち続けた言葉を紡いだ。

「待たせて悪かったな、みんな……遅くなったけど……ちゃんと帰って来たよ」

その言葉が俺たちを包んでいた静寂を全て打ち消した。

「ジン！！」

真っ先に動いたのは姉さんだった。

物凄い勢いで兄弟に抱きつく姉さん。

そんな姉さんを揺らぐ事なく受けとめ、まるでやっと見つけた大事な宝物を大切に包み込むように、優しく愛おしげに抱き締める兄弟。

「ジン！　ジン！　ジン！　ジン！　ジン！　ジン！」

まるで迷子なってしまい、やっと見つけた親に縋りつく子供のように名前を叫び続ける姉さんを、兄弟は嬉しそうな、でも泣き出しそうな表情で抱きしめ続け、万感の思いの籠った声で言葉を掛けた。

「ただいま……モモ」

「ふっ……くっ……うう……ううぅっ」

その言葉を聞いた姉さんは1度だけ大きく背を震わせた後、小さな嗚咽を漏らし泣き出した。

抱き合う2人を見て言葉を掛けるタイミングを失ってしまった俺たちを、兄弟は困ったよで嬉しそうな顔で見る。

そんな兄弟の表情を見た俺たちは互いに目配せをして、仕方ないと

ばかりに肩をすくめて苦笑いを浮かべあったのだった。

side out

side 暁神

「お帰り、兄弟」

モモが泣き止み落ち着くまで十数分。

その間ずっと見守っていてくれたみんな。代表するように1歩前に出て言葉を掛けて来たヤマとハイタッチをする。

ちなみにモモはまだ俺の腕の中にいる。

みんなの前で泣いた事が恥ずかしいのだろう、色んな意味で真っ赤になった顔を俺の胸に押しつけてみんなから見えないようにしていた。

みんなもモモの心情を分かっているのだろう、野暮な事は言わなかったし、あのガクでさえからかう事なく空気を呼んでいる。

それをモモも察しているのだろう、何故かぐずる赤ん坊のように小さく首を振りながらさらに顔を俺の胸に押しつけてきた。

抱き絞め腰に回したままの左手で、あやすように体を数回叩く。

少し不貞腐れたような雰囲気に小さな笑みがこぼれた。

ヤマが声を掛けた事で、俺に話すタイミングを掴んだのだろう、次々に仲間たちが言葉を掛けてくる。

「やっと帰ってきやがったな。全く待たせ過ぎだぜジン兄」

口端を歪めらしい笑みを浮かべるガク。

「でもホント、無事で良かったよ。お帰りジン兄」

少し涙の滲んだ目を擦るタク。

「もうちょっと早く帰ってくればいいのに……でもお帰りジン兄」

喜んでいるけど嫌味を忘れないミヤ。

「えへへ。お帰りなさい！　ジン兄！」

涙を見せながらも本当に嬉しそうなカズ。

「信じていたよ。絶対に帰ってくるって。お帰りジン兄」

穏やかな笑顔を浮かべるヒロ。

「よく戻ったなジン兄！　これで全員集合！　風間ファミリー復活だぜ！」

自信満々の顔で宣言するキャップ。

それぞれの言葉を受け取り全員とハイタッチをする。

この雰囲気。この感じ。みんなの言葉。みんなの笑顔。

本当に帰って来たんだと強く実感した。

俺の帰る所は、やっぱりみんなの、仲間の元なんだと思ったのは間違いじゃなかった。

「ああ、ただいま。みんな」

みんなの思いに、短くても万感の思いを込めて言葉を返した。
俺の言葉を受けて笑い合うみんなを見て、腕の中に感じる温かさに一層の愛おしさ募り、より一層モモを強く抱きしめた。
そんな俺を見ていたヤマが底意地の悪い笑みを浮かべる。

「さて、そろそろお邪魔虫は退散しようぜ」

そのヤマの言葉にミヤとガクが厭らしい笑みを浮かべ、口元を手で隠しながら屋上を出て行き、タクとヒロが少しだけ困ったような苦笑いを浮かべたものの、何か期待するような視線を向けて屋上を後にした。
キャップとカズは意味が分からないのか首を傾げていたが、屋上を出るように促すヤマに従い、最後は手を振って出て行った。

そして最後に残ったヤマは扉のドアノブを掴みこちらに振り返ると、

「ごゆっくり～！」

殴り飛ばしたくなるような底意地の悪い笑顔を見せて扉の向こうに消えて行った。

気を利かせたんだろうが、あからさま過ぎて逆に気まずくなる。恐らくヤマは分かってやったんだろう。あいつはそういう奴だ。

乗せられるのは癪に障るが、せっかく与えてくれた2人きりの時間

だ、今日はありがたく受け取っておこう。

「モモ、いい加減に顔を上げてくれないか？」

未だに俺の胸に顔を押しつけているモモに優しく声を掛ける。だがモモはまだ恥ずかしさが抜けていないのだろう、小さく首を振って拒否を示す。

そんな姿を可愛いと思いながらも言葉を続ける。今は何よりじっくりと顔が見たかった。

「2年8カ月振りに前より綺麗になった彼女の顔が見たいんだけど？」

「真っ赤になった彼女の顔が見たいなんて、なんて鬼畜な彼氏なんだ」

さっきと同じように無言のまま首を振って拒否するかと思っていたが、こんどはちゃんと言葉を返してきた。

2人きりだという事で少しは恥ずかしさが収まったようだ。

なら、もうひと押しをしておこう。

「モモ～顔を上げてくれよ。じゃないとキス出来ないだろ？」

「っ！？」

さすがにこの言葉には反応した。

言葉が終わるや否や、物凄い勢いで押しつけていた顔を上げ、涙で真っ赤になった目と恥ずかしさで真っ赤になった頬を俺に見せてくれた。

羞恥と驚愕と期待に染まったその顔が可愛くて仕方がない。

笑った俺を見て言葉につられた自分がまたしても恥ずかしくなったのだろう、モモはこれ以上無理なんじゃないかと思うほど真っ赤になると、再び顔を伏せようとする。

だが右手を顎に添える事でそれを阻止する。

顎に手を添えられた事で俯けることすらできなくなったモモは、真っ赤な顔のまま真正面から俺の視線を受け止めた。

忙しなく彷徨う視線が俺を真っ直ぐと捉えるまでじっと見つめ続けていると、観念したのかおずおずとではあるが彷徨わせていた視線を俺の視線と重ねてきた。

「ただいま、モモ」

視線がちょうど重なりあった時、俺は今度ははっきりと言った。

その言葉にビクリと体を震わせたモモは、力を抜き緊張させていた体を弛緩させた。

「おかえり、ジン」

そして1番見たかった最高の笑顔と共に返された言葉。

俺はその言葉を紡いだ唇に、自分の心の内から湧き上がってきた衝動に逆らう事なく、自分の唇を重ねたのだった。

第５１話　夜明けの刻、涙と再会（後書き）

あとがき～！

「第５１話終了。あとがき座談会、司会の春夏秋冬　廻です。今回のお相手は――」

「川神一子よ！」

「あれ？　今回は百代が相手だったはずなんだけど……」

「お姉さまだったら、唇に手を当てたままボーっとしてるわよ」

「使い物になってないのね……仕方ないっちゃあ仕方ないか」

「というわけでアタシが代わりに来わ！」

「はいありがとうね。さて今回のお話ですが、ようやく皆さんの要請にお応えして神と百代＆風間ファミリーとの再会となりました」

「本当にやっとジン兄と再会できたわ！」

「どういうシチュエーションにしようか悩んでいたところがあったけど、屋上で仲間を待ち『ただいま』を言う、ちょっとした王道ものの展開でした」

「最後なんかアダルティだったわ」

「そんなに言うほどだったかな？　恋人との３年近くの年月を経て

の再会だからこれぐらいはありだと思ったんだけど……純真無垢な君には刺激が強すぎたか」

「でもお姉さまが嬉しそうだったからアタシはそれで満足よ！」

「ホントにええ子やな君は。まあそういうことで今回はあまり言う事はありません。書きたいことは書いたつもりです」

「じゃあ今日はここまで？」

「うんここまで。ではまた次投稿もよろしくお願いします」

「よろしくね～！」

第５２話　夜明けの刻、これまでの事（前書き）

第５２話投稿。

神帰還エピソードはこれにて終了。

第５２話　夜明けの刻、これまでの事

「「「「「「「「「記憶喪失だったぁ！？」」」」」」」」」

全員の驚愕の声が重なる。

「おう」

それなのに何でもないように返すジンに、私たちは呆れた顔しかできなかった。

あの後、恥ずかしがりながらもジンに手を引かれてみんなの所に戻った。

部屋に入るや否や、ここぞとばかりに私をからかってきたガクトに制裁を加え、ニヤけた笑みを浮かべていた大和と京に殺気を飛ばし、呆れたような表情をしていたモロロとタカに同罪だと言わんばかりに睨を効かした。

ワン子とキャップは純真で分かってないので何もしないでおいてやる。

そんな事をしている私たちを懐かしそうに眺めていたジンの腕を取り、ソファーに座っていたいワン子に頼んで場所を空けてもらい、一緒に座る。

私たちに席を譲ったワン子はタカの隣に腰を下ろした。

いつもの定位置じゃない事に一瞬困惑していたジンだったが、私が腕を抱えるように両腕を回した事で、何をしたいのか理解したのだろう、小さく笑み浮かべて私のしたいようにさせてくれた。

ジンの腕を抱きしめながら肩に頭を預ける事が出来て、私は物凄くご満悦だった。

そんな私たちを見てガクトが表情を引きつらせ、大和と京がまたもニヤけた表情を見せ、モロロとタカがどこか諦めたような溜息を吐いた。キャップとワン子は言わずもがなだ。

一応、全員が席に着いた事でキャップがジンに質問を切り出した。

『この2年8ヶ月、どこで何をしていたのか』

その質問に答えたジンの言葉が『記憶喪失』だった。

「記憶喪失って……もう大丈夫なんだよね？」

モロロの心配そうな言葉にジンは安心させるように笑顔を浮かべた。

「当たり前だろ。っていうか、記憶が戻ってなきゃ秘密基地（ここ）に来るわけないだろ」

そう言って空いていた右手の人差し指で秘密基地の床を指しながら言う。当たり前のことなのにモロロが聞き返したのは、それだけ驚愕の事実だったという事だろう。

私も思わずその言葉を聞いた時、ジンの左腕を抱き締めていた腕に力が入った。

「じゃあ、記憶を取り戻したのはつい最近なのか？」

「いや、記憶が戻ったのは8ヶ月前だ」

そのジンの言葉に私は一瞬だけ頭の中が真っ白になった。
そして次に浮かんできたのは『裏切られた』という思いだった。

だってそうだろ？　８ヶ月も前に記憶が戻っていたのに私たちには何も連絡をしてこなかったって事は、私たちとの再会をジンはどうでもいいと思っていたんじゃなだろうか。
私たちはずっと待っていたのに、ジンは思い出してもすぐに私たちにもとに帰ってこなかった。それが何より物語っているんじゃないだろうか。

「モ～モ！」

嫌な考えに囚われかけていた思考を呼び戻すようなジンの言葉に、私は我に返る。
俯いていた顔を上げると、私の不安を取り除くいつもの笑みを浮かべたジンの顔があった。いつの間にか私の手にジンの左手が重ねられている。そして落ち着かせるように数回私の手を叩く。

「変な事考えてるだろ？」

「そんな事ない」

「順を追って説明するから、ちゃんと聞いてくれな？」

諭すような言葉に小さく頷く事で答える。
頷いた私に安堵の表情を見せたジンは、重ねていた手を放し私の前髪を撫でるように指で軽く掬った後、表情を戻してみんなと向き合った。

「さっきの俺の言葉にみんなも思うところがあるかもしれないけど、今は聞いてほしい」

ジンの言葉にみんなが頷く。
それを確認したジンはゆっくりと話し出した。

「みんなはあの事件の経緯は知っていると思う。あの時、子供を助ける事が出来たけど俺自身は川に落ちて結構な距離を流されたんだ。数日前から続いていた雨のせいで流れが早くなっていてな、なんとか体勢を整えようとしていた時に川底で頭を打ったんだ」

うろ覚えなのか視線を上に向け、思いだしながら話すジン。もう3年近く前の事でしかも急速な状況の変化が起きていた時の事だ、しっかりと覚えている方がおかしいのかもしれない。

「そのせいで気を失ってしまい、次に意識が覚めた時は車でどこかに運ばれている時。俺を見つけて救出してくれた人たちの車だったんだけど、その時に頭を強く打っているって言われたんだ」

そう言って後頭部のある場所を人差し指で叩きながら言う。恐らくそこが川底でぶつけたところなんだろう。

「その時は痛さで何も考えられなくってな、思考放棄してすぐにまた気を失った。で、次に目が覚めた時にはすっかりと自分の事を忘れていたってわけ」

おどけるように明るい口調で言うものの、はっきり言って笑えるような内容じゃない。
みんなもどう反応していいのか分からずお互いを見渡している。数秒どうするかを逡巡するかのような雰囲気だったが、こういう時の

交渉役は基本、大和の役目だ。

「それで、2年間はずっとその助けてくれた人たちの所にいたのか？」

「まあな、ホントいろいろあったよ……」

そう大和に答えたジンは何故か疲れたような声を出した。近くで見ていたジンの姿が一瞬だけ煤けたように見えたのは見間違いじゃないだろう。何やらいらない苦労を背負っていたようだ。

「なあなあ、その人たちってどんな奴らだったんだ？」

興味深げにジンに問い掛けるキャップ。

どうやらジンが2年もの間一緒にいたという事で、キャップの中では『面白い奴ら』というイメージが出来上がったのだろう。

それに対するジンはどこか困ったような雰囲気だった。

言えないっていうよりは言ってもいいのか迷っている感じだな。

「それについてはまた後でな」

困った笑顔を浮かべて言うジンにキャップはつまらなそうに口を尖らせた。

話を折られた大和はそんなキャップを呆れたように見ていたが、気を取り直すように息を吐くと再度ジンに話し掛けた。

「それで？　8ヶ月前には記憶が戻ったって言ったけど、正確にはいつ思い出したんだ」

大和の言葉に何を思ったのか、ジンはいきなり私の方に顔を向けてきた。肩に頭を預けて見上げていた私は、いきなり至近距離でジンと視線が合い思わず固まってしまう。
数秒じっと見つめ合う形になったが、こんな時になって改めて2年8ヶ月ぶりのジンの顔をじっくりと観察する。さっきまではそんな余裕はなかったからな。

端整な顔立ちにタカと同じ相変わらず女が羨むような髪質の長い黒髪を、いつもはポニーテールにしているが今日は纏めずに背中に流している。

本当に『格好いい』という言葉が当てはまる奴だ。

「見つめ合ってないで説明を続けてよ」

京の呆れた視線と共に掛けられた言葉に私はハッとなり、ジンはそんな私を見て口端を上げてちょっとだけ嫌味な笑みを見せた。
ジンはそのまま顔をみんなの方に向け話を続ける。

「記憶が戻ったのは去年の8月31日。奇しくもモモの誕生日だったわけ」

「あ、だからモモ先輩の方を見たんだ」

「そういう事だ。それでその日の内に大使館に行って、夜だったけどすぐに電話で川神院に連絡したんだが――」

そのジンの言葉に真っ先に何かを思い出したのだろう、大和が声に出さずに間抜けにも口をポカンと開けて私の方を見てきた。
向けられた視線の意味が分から眉をひそめる私に、大和は開けてい

た口を閉じ手で口元を隠しながら探るように問い掛けてきた。

「姉さん、去年の9月の初めに鉄心さんが急に海外出張になって2週間ぐらい帰ってこなかったの覚えてる？」

「ああ、あれか。結局何だったか聞いてなかったな」

「たぶんそれ、兄弟からの連絡を受けて行ったんだと思うよ」

「はぁ！？」

いきなりの話に私は思わず間抜けな声を上げてしまった。

だってそうだろ。あれは急だったがいつもの海外での講演だと思っていた。ジジイは海外でもその存在を認められている――恐れられていると言った方が正しいか――から、外国の首脳に呼ばれて講演をする事がたまにある。

あの時もそれの1つだと思い込んでいたから、詳しく聞くのをやめたんだが、まさかそれがジンの事だったとは思いも寄らなかった。

自分の勘に従って詳しく聞いておけばよかった！

悔しがる私に大和は表情を引きつらせながら言葉を続ける。

「アメリカと日本は日付変更線を越えるから1日ずれるんだ。兄弟が8月31日の夜に連絡をしてきたって事は、こっちでは9月1日の昼前頃になる」

「鉄心さんはすぐに向かうって言ってたな」

そういう事かジジイ！　だから帰ってきた時に私の顔を見て、底意地の悪そうな気味の悪い笑みを見せやがったのか！
待てよ！？　ジジイはジンの事を知っていたのに私たちに言わなかった、という事は？

「おい、ジン」

「察しがいいなモモ。お前が考えている通り、鉄心さんに驚かせるために黙ってろって言われてな、連絡も俺からするのは禁止された」

「あのクソジジイ！」

予想通りのジン言葉に私は怒髪天突く勢いで叫ぶ。
もしジンの腕を抱き締めていなかったら、今すぐにでも川神院に戻ってぶちのめしてやるところだ。ジンがいる事をありがたく思っておけ。

「でも８ヶ月はいくらなんでも遅すぎない？」

タカの少し不満げな声に、ジンは困ったような笑みを浮かべた。

「それは俺のせいでもあるけど、俺のせいとは言い切れない事情があってな」

要領を得ないジンの答えにみんなが首を傾げる。そんな私たちを見渡していたジンは、何かを決意するように小さく息を吐くと、急に表情を引き締め声を抑えて話しだした。

「ここからはオフレコで頼む。みんなを信頼しているから話すけど、実は俺を助けてくれた人たちっていうのが、あの国の非公式の特殊

部隊なんだよ」

突然の告白に私たち全員が言葉を失う。

あの大国の非公式の特殊部隊ってお前……何なんだその運が良さそうで悪い事態は！？　というか私たちはそれを聞いてもいいのかオイ。

秘密がバレた事で襲撃されても私としては大歓迎だが、大和やキャップ、ガクト、モロロの非武道連中には死活問題になるぞ。

「あ、あのさジン兄。僕たちがそれ聞いてもいいの？」

私と同じと事に思い至ったのかビビリのモロロが戦々恐々な感じでジンに問い掛けた。そんなモロロを安心させるようにジンは笑いかける。

「非公式だから表立ってない。つい漏らしたとしても誰も信じないさ。ただ――」

そこでいったん言葉を切り、何やら面白そうな事を考えた時の表情を浮かべるキャップとガクトに視線を向けた。

「積極的に言いふらすのだけはやめておけ。『口は災いの元』って言うぐらいだ、どこで誰が聞いているか分からないし、絶対に安心とは言い切れない。自分から言いふらしたせいでその部隊に襲撃されたとしても、俺は守ってやらんからな」

ジンの言葉が自分たちに向けられたものだと気付いたのだろう、キャップとガクトは血の気の引いた顔を物凄い勢いで縦に振って理解を示した。

恐らく世界中が知らない情報を持っているという事で自慢したかったのだろうが、その部隊と知り合いのジンの護りがなくなる事で、本能的に命の危機を感じ取ったんだろう。

私としては来てほしいところなんだがな。非公式の特殊部隊という事はそれなりの実力者の集まりに違いない。来てくれれば退屈せずに済みそうなのにな。

コンッ

考えていた事を悟られてしまったのだろう、ジンが私の頭を小突いて『物騒な事考えるな』と視線だけで諫めてきた。
怒られてシュンとなる私を無視するジン。

「そういうわけで、いろいろ調査する事があったし特殊すぎるケースだったため、帰国の許可かが完全に下りるまでに7ヶ月半もかかった。そこから日本大使館での行方不明取り消しの手続きにパスポートの再発行に出国準備等、いろいろあって帰国して日本に着いたのが今日だったってわけ」

話している内にその時の苦労を思い出したのだろう、最後は疲れたような声で話を終えたジンだった。私はそんなジンを慰めるように頭を撫でてやる。

自分のせいと言っていたがジンに非は余りないだろう。
確かにすぐに大使館に行っていればこんなに時間がかかる事はなかったのは間違いない。それに関しては確かにジンが悪い。

だがこいつの事だ、どうせ記憶が戻らなければ私たち――私と言い切れないのが悲しいが――のもとに帰ってくる資格がない、とか考

えたに違いない。
記憶喪失のまま帰ってきても結局私たちを悲しませると思ったんだろう。

帰ってきてくれる事が何より重要な事で、記憶なんてものは一緒に思い出せばいいのに、こいつは頭がいいくせに時々どこか抜けたところがある。

「それで、どうやって記憶を取り戻したの？」

穏やかになりつつある雰囲気の中でタカが掛けた言葉に、ジンは嬉しそうな表情で答えた。

「記憶を取り戻す手掛かりがないか、俺が発見された所に行った時にその当時持っていた荷物を見つけてな」

言いながらジンは足元に置いたバッグを開け、中から何かを取り出そうとしている。少し寂しいが邪魔にならないように抱えていた腕を解放する。
目線だけで謝意を伝えてくるジン。

「そこでこれを見つけて、その時に記憶を全て思い出したんだ」

そう言ってバックから折り畳まれたハンカチを取り出したジンはそれを私に向ける。
不思議そうに見る私に真正面から向き合うと、掌に乗せたハンカチを丁寧に開き包まれていたものを取り出した。

「あっ！」

それは私がジンにお守り代わりに持たせた、ジンからのプレゼントで貰った、小さな四つ葉のクローバーの形をした飾りの付いたペンダントだった。

呆然と見つめる私に、ジンはハンカチの上に乗せたペンダントをハンカチごと膝の上に置き、チェーンの部分を取り留め金を外すと、私の首の後ろに手を回し留め金をはめ直す。

実に2年8カ月ぶりに、私の胸元に小さな四つ葉のクローバーのペンダントが帰ってきた。

久し振りの首元と胸元の感触に、私はネックレスの飾りの部分を両手で大事に包み込んだ。

私は嬉しかった。

私とジンの新しい絆を結んだこのペンダントが、消えかけていた絆を再び繋げてくれたのだ。嬉しくて嬉しくて堪らなかった。

「本当に『お守り』になってくれたよ。それがなければ、もしかしたら俺は今、『百代の隣』にいなかったかもしれない」

ああ……ダメだ。

今日はなんて日だ。またしても涙が溢れてきた。

何か？　今日は人生で1番涙腺が緩い日なのか？　涙の大盤振る舞い日か？

ジンの優しい言葉を聞いて、溢れ出て止める事が出来ない涙を隠すように、またしてもジンの腕の中に飛び込んで顔を逞しい胸板に押しつける。

もういい。今日の私は羞恥心を投げ捨てる。後でみんなに、特に大和と京とにからかわれるだろうが今はどうでもいい。だって嬉しいんだ。ジンを身近で感じられる事が。ジンと心で繋がっているんだと感じる事が出来るのが。

そういった思いを全身で表すかのように、胸に顔を押しつけるだけでなく背中に腕を回し放さないといった風に抱き締めた。

みんなの呆れ果てる視線を受けながらも、優しく背中と頭を撫でてくれるジンの優しさを感じた私は、当分は甘え尽くしてやると心に誓った。

「そういえばふと思ったんだけどさ」

ジンの腕の中でその温かさに頬を緩めている時、本当に何でもない風な口調で京がいきなり話し出す。
そんな京に私以外全員の視線が集まるのを感じ取る。

「ジン兄、綺麗に纏めようとしてるけどさ、ペンダント見て記憶を取り戻したんでしょ？」

「ああ、そうだけど？」

「記憶喪失のまま帰国しても、モモ先輩に会えば戻ったんじゃないの？　そっちの方が確実な気がするんだけど」

「……」

その京と言葉に、私もジンも固まる。

今度は私たちにみんなの視線が集中する。

というか、おいジン。何か言えよ。そうやって黙ってるとまるで図星を突かれたように見えるぞ？　っていうか図星だろ？　それじゃあ何か？　私が待ったこの2年8ヶ月は思いっきり無意味だったかもしれないって事か？

ああ、何やらモヤモヤしたものが心から湧きあがってきたぞ。

「ええっと……モモ？」

私の雰囲気が変わったのを感じ取ったのだろう、何やら機嫌を窺うような声でジンが言葉を掛けてきた。

うん。今この状況でそういう声で問い掛けるのはやめようなジン。まるで――

「奥さんに浮気がバレた旦那のような声だな兄弟」

「ヤマ！？」

的確な表現だな弟よ。

ふふっ……ふふふふ……

今度は笑いが込み上げてきた。

「あ、あのなモモ？　確かにミヤの意見ももっともだけど、当時の俺はそんな事を考える事すら出来なかったわけで……」

うん。分かってるぞジン。お前は悪くない。

悪くないけど、この心の中にあるモヤモヤを発散させるためにお前に八つ当たりしても、バチは当たらないと思うんだ。

その辺はどう思う？　ジン？

第５２話　夜明けの刻、これまでの事（後書き）

あとがき～！

「第５２話終了。あとがき座談会、司会の春夏秋冬　廻です。今回のお相手は――」

「本編やっと帰還の暁神です」

「はい、やっと帰ってきて再会しました主人公です」

「帰ってきただけで3話も使うなよ。引っ張り過ぎって最近感想でも言われてるだろ」

「そうなんだけどね、書いてると自然とそうなっちゃうんだよ……反省しています。さて今回のお話ですが」

「読んだ通り、行方不明中の報告だな」

「その通り。まあこの話は必要ないかな、と最初は思ったんだけどやっぱり絞めというか、生きていたけど連絡しなかったちゃんとした理由を風間ファミリーに知らせておくのはやっておかなければ、と思ったんだ」

「物語の進行上、確かにあまり意味のある話じゃないのは分かるけど、風間ファミリー的には必要な話というわけか。ところで俺の説明でペンダントを見つけたくだりが事実と違うんだけど？」

「そこは優しさ。本当の事を言っちゃうと風間ファミリーにとって

隊長さんは厭な奴になっちゃうからね。本人は2年間の事を無駄だと思っていないけど、仲間たちにして見れば再会を先延ばしにした張本人だからね」

「まあ、許せないだろうな」

「そういうことで、事実とは違う言葉で説明させたってわけ。というか君自身の言葉でしょうが」

「俺が言ってるけど言わせてんのは作者のお前だろうが」

「そりゃあそうだけど……」

「それより最後はなんだ！　感動で終わらせろよな！」

「いや、なんかオチを付けたくて……前回が物凄い感動で終わったからね」

「必要ないだろ！？」

「ええ！？　噺ってのはオチを付けてナンボだろ！？」

「それは落語だ！」

第５３話　クリスの加入、忠勝との出会い（前書き）

第５３話投稿。

話が進みません。展開が遅いです。

第５３話　クリスの加入、忠勝との出会い

――２００９年　４月２５日　土曜日　ＡＭ６：００――

ｓｉｄｅ　暁神

川神学園は週休２日制度を取り入れているため、基本土曜日は休みになる。といっても俺は正確にはまだ川神学園の生徒じゃないので余り意味がない。
しかもまだ学生の気分になれない俺は、あっちにいた頃の規則正しい生活が身に染みているため目覚ましをかけなくても起きてしまった。

ちなみに時差は飛行機の中で数時間寝ていたため既に修正済み。

掛け布団をどけてゆっくりと上半身を起き上がらせる。そして視線はそのまま左へ。

うん、いつの間に潜り込んできたんだろうね、この人は。

俺の布団の中で、俺の横で、パジャマ姿で寝ているモモ。
昨夜は俺１人で寝ていたし、モモも自分の部屋で寝ていたはずだ。
モモが部屋に入ったのを確認してから俺も自分の部屋に入ったのだから間違いない。

気が付かなかった？　思っていた以上に疲れていたんだろうか？

まあそれはそれでいいが、まずはどうしてこうなったかを聞かなければならない。

俺は1度気持ちを落ち着けるように息を吐くと、少しだけ気合を入れてモモの姿をはっきりと視界に入れた。

何故気合を入れなければならないんだ、と思うかもしれない。だが今俺の隣で寝ているモモの姿を見てほしい。

我が彼女ながら完璧なプロポーションだ。

自己主張の強い胸は仰向けに寝ていても形が崩れていない。二の腕から胸筋が鍛えられえいる証拠だ。ほどよいくびれのあるウエストラインに、そこから伸びるしなやかな脚。無駄な筋肉も贅肉も付いていない理想的と言っていいほどの引き締まった身体。

そんな身体の持ち主がパジャマ1枚で無防備な寝顔をさらしているんだ。俺も健全な10代の男、朝っぱらからこの艶姿はある意味で心臓に悪かった。

「モモ、起きろ」

声を掛けながら体を揺すると、モモは寝ぼけ眼で俺を見る。そのままむくりと上半身を持ち上げると、こてんと頭を俺の肩に乗せてまだ眠いのだろう、欠伸交じりで言葉を発した。

「なぁんだジン……夜這いかぁ？　夜這いだったら起こさず襲えよ」

「いやもう朝だから。それよりなんで俺のベッドで寝てるんだ？」

「なに言ってんだぁ？　ここは私の――」

そこまで言って自分のいる場所に気付いたのか、ハッとなり急に覚

醒すると2度3度首を振り周囲を確認するモモ。そして今いるのが俺の部屋だと気付くと、バツが悪そうに苦笑いを浮かべた。

「悪いジン、寝ぼけてお前のベッドに潜り込んだみたいだ」

「みたいだな。でもなんで寝ぼけて俺の部屋に来る」

「えっとだな……」

さらにバツが悪そうになると、今度は暑くもないのに汗が溢れ出てきているのが見えた。たぶん冷や汗なんだろう。

さすがに追い詰めるのは悪い気がしたので、理由をモモの口から聞く前に俺から確認する事にしよう。

「俺がいない間、週に何度かこの部屋で寝起きしてたんだろ？　鉄心さんから聞いてる。その癖で夜中に潜り込んだ。違うか？」

「違わない」

申し訳なさそうに俯くモモの頭に手を置き優しく撫でる。俺にはそれに対して意見を言う権利は持っていない。モモを不安にさせていたのは俺だから、今回は何も言わずにいるのがベストだろう。

何も言わずに頭を撫でる俺の行動に、とりあえず責められているわけではないと悟ったモモは小さく嬉しそうな笑みを浮かべて撫でられ続けていた。

その後に朝食で呼びに来たカズに色んな意味で誤解されたのは言うまでもないだろう。うかつだったな俺。

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

ｓｉｄｅ　黛由紀江

父上、一筆啓上申し上げます。
由紀江が川神学園に入学し、数週間が経過いたしました。そちらはお変わりございませんか。

由紀江は未だに未熟ですが、１人だけお友達が出来ました。でも携帯電話を持っておらず、連絡先を知らないため休日は１人部屋で膝を抱え座る日々です。

けれど父上にお願いしてまで出てきたこの土地。必ずや掲げていた目標に達するために頑張ります。

暑くなるのが早いのでご自愛ください。　あらかしこ。

「手紙の書き方微妙におかしくね、まゆっち」

「いいんです、形式ばり過ぎると堅苦しいと父上が」

松風の言葉に筆を置きます。
しかしあれです、こうして家に手紙を出す事が唯一の楽しみとは、青春を生きる１０代の女として私は早くも間違えているのではないでしょうか？

ああ……もっとお友達が欲しいです。タカさん１人は寂しいです。

でもこの寮にいる風間さんたちのグループは楽しそうです。私も仲

間に入れてほしいと切実に願っています。もっと青春を楽しみたいです。

「なら行動に移そうぜまゆっち！」

「そうですね、行きましょう松風！」

私は父上から授かった刀を抱え、寮の部屋から踏み出しました。

目指せ！　友達１００人出来るかな！　です！

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

ｓｉｄｅ　ａｕｄｉｅｎｃｅ

「４番、ファースト、島津！」

「ガクトか、空振り取り易いね」

風間ファミリーの仲間は河原で野球をやっていた。

昨日の金曜集会で決めた通り、みんなが午前１０時ごろに集合し、何をするか決めていたわけでもなく動き、自然と野球をする事となった。

バッターとして立つ岳人と、正面でピッチャーをする京。胡坐をかきキャッチャーを務める百代。内野は１人もいないので京は遠くにいる外野に声を掛ける。

「外野連中ー、よろしくねー」

その声にそれぞれ手を振って答える大和と一子と神。
昨日帰国したばかりだというのに、もう仲間と遊ぶだけの余裕がある神だった。

そんな風に野球のような遊びをしているメンバーを、少し遠くで眺めているクリス。
その周りを声を掛けた翔一と、突き従うように後ろで立っている卓也と緋鷺刀が囲んでいた。

「野球……か」

「まぁ適当な投手対打者勝負なんだけどな。俺たちいつもこうやって遊んでるんだ」

風間ファミリーのメンバーの紹介を受けた後、小さく呟くように言ったクリスの言葉に、補足説明をするように翔一が言葉を続ける。
そうやって自分たちの休日の過ごし方を話している目の前で、翔一が言った勝負が繰り広げられていく。

気の抜けた京のボールを、何か言われたのだろう何故か驚きながら物凄いスイングのくせに空振りする岳人。
何やら文句を言っている岳人に、ケロリと全く悪気ない雰囲気の京。
だが後ろから大和の声が掛けられると一転、素直に普通にボールを投げた。

乾いた金属バットの音が響き、岳人が打ったボールは理想的な放物線を描き外野へと飛んでいく。

「行った！　これ球場だったら文句なくバックスクリーン直撃のホ

ームランだろ！」

喜び大声を出す岳人だったが現実は彼の思う通りにはならなかった。

飛んでいった打球をその場から1歩も動かず眺めるレフト一子、ライト大和。飛んでくるボールを眺めながら軽く膝を曲げたセンター神は、少しだけ力を入れて両足で地面を蹴ると、何の冗談か１０メートル近くもジャンプして易々とホームランボールをグラブに収めてしまった。

「あんなのありかよ！？」

「アウトはアウトだぞー！　見苦しいのは男らしくないぞーガクトー！」

「あっ、今のイラッときた！　次打席立て大和！」

どうやら次の勝負も決まったようだ。

「楽しそうだな」

そんなメンバーを見ていたクリスは口元に笑みを浮かべて素直な感想を漏らした。それを見た翔一は彼女は間違いなく仲間に入るという確信を持って言葉を掛ける。

「そう思うならクリスも仲間に入れよ。みんなで話し合ってもうＯＫは出てるんだ。歓迎するぜ」

「ありがとう。いきなりこんなにたくさんの友達が出来るとは、嬉しいな」

すぐに返事を返したクリスは、言葉通り本当に嬉しそうな笑顔だった。
それを見ていた卓也と緋鷺刀は、まだ少し何かを話している翔一とクリスを残し野球もどきをやっていたメンバーの元に近寄った。

「クリスと話し付いたよ。入るってさ」

卓也の言葉にみんな手を止めて視線を2人の後ろから近付いてくるクリスに向ける。

「おう、よろしくなー！」

真っ先に挨拶した岳人にならい、近くにいた大和、百代は思い思いの言葉でクリスに歓迎の言葉を掛ける。京だけは若干表情を変えたが、みんなで決めた事に反対はしないので手を上げるだの無言の挨拶をする。

「それじゃあ今夜は島津寮でプチ宴だな。川神院から肉を持って行くからな。その後は親密度を深めるために一緒に風呂だ！」

どうやら恋人が帰ってきても可愛い娘好きは治っていない百代だった。
神の性格からして度がいき過ぎない限りは注意しないだろうと思われる。百代自身も可愛がりたい気持ちなだけで以前から言っていたように決してレズではないのだ。

「クリス、こっちに入るってさー」

集まる仲間を見て外野から近寄ってきていた一子と神に、京が少し

大きな声で報告をする。それを聞いた一子は気持駆け足で駆け寄って来る。

「あっさりと加入したわねぇ。クリー！　このグループじゃアタシが先輩だからそこんとこ考えて敬いなさいよー！」

冗談めかして言う一子だったが、空気を読むのが苦手で下手な冗談が通じないクリスは、その言葉に表情を渋らせた。

「犬か……やはり何度見ても納得いかないな」

「……ワン子に文句があるわけ？」

その態度を見逃さなかった卓也は声を低くし、ほんの少しだけ嫌悪感と怒りを含ませた言葉をクリスに掛けた。
さすがのクリスもこの卓也の態度の変化はすぐに感じ取った。

「あ、そうではない。断じて違う。ただ……学長や百代殿と比べると、同じ一族とは思えなくてな……」

「あぁ、ワン子は養女だからな」

あっさりと言った翔一の言葉にクリスは驚愕の表情を見せる。だが翔一はそんなクリスの変化にもお構いなしで一子の過去を話していく。

「ワン子、元々孤児だったのを引き取ってもらってたんだけど、その引き取り手のおばあちゃんがなくなったんでモモ先輩……つか川神院が引き取ったんだよ」

「そうだったのか……」

「ん？　別に悲しい話でもないぜ。ブルーになんなよ」

「地元の人たちは大抵知ってる事だからね」

何故か落ち込むクリスを慰めるように翔一と緋鷺刀は声を掛けた。
それでもクリスの表情は晴れない。なにやら罪悪感を感じてるようだ。

「そうとも知らずに昨日、『川神院でお前だけ浮いている』と無神経な発言をしてしまったんだ……やはり謝ってくる」

「大丈夫だよクリスさん」

駆け出そうとするクリスを緋鷺刀が止める。それを見ていた卓也もさっきまでの態度を収め少しだけ明るい声で言葉を掛けた。

「ワン子もクリスが入る事に反対してないし、過程はどうあれ今は家族だから」

2人のその対応にクリスは昨日、自分の失言の後で大和が一子の頭を撫でていた事を思い出した。そしてそれが自分の行動に対する一子へのフォローだという事に気付いた。

「そういえばあの時、大和が犬の頭を撫でていた」

「さりげなくフォローしてんな、さすが軍師大和」

感心したような翔一の言葉に、やっぱり自分の考えていた通りなの

だと分かり、クリスはまたしても悪い事をしてしまったと言わんばかりの表情を浮かべた。しかし翔一も卓也も緋鷺刀もそんなクリスの態度を気にする事もせずメンバーの方へ歩いて行く。

「外野が1つ空いてるね。ライトに入ろうかな」

「ジン兄とタカとワン子の外野……もはや鉄壁の守備だね。僕も1塁なら何とか出来そうだし1塁を守ろうっと」

「いつまでそんな顔してんだ。気にすんなって。ほら来いよ！　クリス！」

そんな3人の姿を見て、ちょっとした事では揺るがない絆がこのグループにはあるのだと感じた。そして自分をその仲間に入れてくれると言ってくれた。

「ああ！」

それが嬉しくてクリスは翔一の言葉に力強く頷いた。

一方その頃の黛由紀江は――

「……クリスさんもいませんでしたね」

「外に遊びに出かけたんじゃね？　昨日転入してもう友達（ダチ）できたのかな～」

「異国にも関わらず初日で友達作り……凄い技術（ワザ）です」

「それなのにウチのまゆっちと来たら……」

「うわあああああああ！！」

黛由紀江、友達１００人出来るかな計画、残り９９人。

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

ｓｉｄｅ　源忠勝

夕暮れに染まる空の中、俺は多馬川の河原に足を運んだ。

そこには鍛錬なんだろう、ダッシュを繰り返す一子とそれを座って見守る１人の男がいた。

見かけない顔だ。風間たちのツレにあんな奴いたか？

俺は訝しく思いながらも差し入れを持ってきたのを思い出し、座り込んでいる男を避けるように走り終わり息を整えている一子に近付いて行く。

「一子、お疲れ。ほらよドリンクの差し入れだ」

「おータッちゃん！　いつもありがとー」

声を掛けスポーツドリンクのペットボトルを投げて渡した俺に驚く事もなく、一子は笑顔を見せると慌てることなく投げて寄越したそれを難なく受け取る。

そんな俺の行動にも何も言わずにこっちを見ているあの男。微笑ま

しそうに俺たちを見ているが本当にいったい何者なんだ？

「そうだそうだ！　タッちゃんにも紹介しておかなきゃ！　おーい！」

訝しげな俺の雰囲気に気付いたのか、一子は思い出したように声を上げると座っていた男に向かって声を掛け手を振る。

一子の呼び掛けに男は答えるように手を振りながら立ち上がり、付着した土を払うようにズボンを叩くとゆっくりと近付いてきた。

その姿を注意深く観察する。

背は島津と同じぐらいか若干低い。だがあいつのような無駄な筋肉が付いているのとは全然違う。身体つきは風間に近い、というより、あの長い黒髪のせいかモモ先輩を彷彿とさせる。

あの人が男だったらまさにこんな感じなんだろう。そう思わせるには十分の雰囲気を纏っている奴だった。

目の前まで来た男と視線を合わせるために少しだけ顔を上げる。高校に入ってから相手を見るために見上げるのは本当に珍しい事だ。

怪しい奴じゃない。それは目を見ればすぐに分かった。それどころか何だろうこの感じは。こいつの目を見ていると何故か安心感が心の中に広がっていく。

「タッちゃん？」

俺の様子がおかしかったのだろう、不思議そうに問い掛けてきた一子の言葉に我に返った。

「悪い一子、ちょっとぼうっとしていた」

呑み込まれかけた気分を落ち着かせるように顔を振る。どうやら一子には気付かれてはいないようだが、目の前の男は俺の雰囲気を感じ取っていたはずだ。

本当に何なんだろうなこの男。

「えっとね。タッちゃんには前にも話したと思うんだけど……」

「カズ、自己紹介するからいいよ」

一子の言葉を遮り1歩前に出たそいつは俺に向かって右手を差し出してきた。

「カズから聞いてる。源忠勝だよな？　暁神だ。よろしくな」

暁神。

こいつが一子や風間たちが言っていた『ジン兄』か……行方不明だって聞いてたが、ここにいるって事は無事に帰ってきたってわけか。

「俺もお前の事はいろいろ聞いてる。源忠勝だ。よろしくな『ジン兄』」

差し出してきた右手に俺も右手を差し出して握手しながら、少しだけ意地の悪い言葉を掛けてやる。案の定、俺の『ジン兄』の言葉に表情を歪め苦笑いを浮かべた。

「冗談だ。よろしくな暁」

「神でいい。俺はキャップたちと同じでゲンって呼ぶけどいいか？」

「ああ、構わねぇよ」

「そうか、じゃあ改めてよろしくなゲン」

そう言って神は握手した手を少しだけ力を込めて握り直すと、すぐに手を放して一子に向かって視線を向けて頷き背を向けて俺たちから離れて行った。

「おい、どこ行く？」

「何か話す事があるんだろ？　話し終わったら声かけてくれ」

そう言って俺たちから１０メートルほど離れたところで再び座り込んだ。

そんな神の姿をボケっと見ていた俺に一子から声が掛けられる。

「まあ、あんな感じの人だよ、ジン兄は。前にも話したけどアタシたちと同じ孤児なんだよ」

「覚えてるよ、川神院の門前に置き去りにされてたんだろ」

答えながらも嬉しそうな安心しきった一子の声に、俺はあいつが仲間内からどうして『兄』なんて呼ばれているのか納得する。

相手の雰囲気をいち早く察して、その相手に対して最適な行動を取る。どうやら風間や直江、島津とは違い俺としては付き合いやすい相手のようだ。

あの目を見た時に感じた安心感は、そういったあいつの性質や同じ孤児としてのシンパシーからだったんだろう。

珍しく出会えた事に感謝をしながら、俺は一子に元孤児院の仲間の話をするのだった。

第５３話　クリスの加入、忠勝との出会い（後書き）

あとがき～！

「第５３話終了。あとがき座談会、司会の春夏秋冬　廻です。今回のお相手は――」

「源忠勝だ」

「ゲンさん初登場」

「こんなところに呼ぶんじゃねーよ。バカ野郎」

「怖いね君は……さて今回のお話ですが、読んでの通りクリス本格加入と神と忠勝のファーストコンタクトです」

「意味あんのかこの話」

「原作通りに進めているからね、何より最初から神と君は気が合うと思っていたから出会いの場面は書いておきたかった」

「それは同意する。間違いなく風間たちよりは気を使わずに付き合える相手だ」

「たぶん神との相性なら大和や緋鷺刀より君の方がいいと思うよ。付かず離れず、でも何かあれば息が合う。友達というよりは――」

「戦友だな」

「そうだね、その言葉が1番当てはまる」

「んで？　次回はなんの話だ？」

「面倒臭いから話を進めてるね君」

「いいからとっとと言え」

「はいはい、次回は百代の言葉にあった島津寮で焼き肉でのプチ宴です。そろそろ原作どおりにいきながらもオリキャラ混ぜてのオリジナルエピソードをぼちぼちと入れていきます」

「まあ、よろしくしてやってくれ」

「最後にいい言葉を言ってくれるなんて……さすがゲンさん、やっぱり優しいね」

「うるせぇ」

第５４話　島津寮歓迎、焼き肉パーティー（前書き）

第５４話投稿。

第５４話　島津寮歓迎、焼き肉パーティー

ｓｉｄｅ　源忠勝

後ろから感じる期待の籠った２つの視線に思わず溜息が出る。

帰ってきたらいきなり飯作ってくれと言われた事にふざけんなと思ったが、まあ俺自身が腹減ってきたからついでに作ってやることにした。後で何か言われるよりは一緒に作っておいた方が楽だし。

そんな事を考えながらかけていた鍋の火を止める。

いい感じに出来上がったところで後ろにいる馬鹿どもに声を掛ける。

「飯が出来たぞ馬鹿ども。肉じゃがとかだがな」

歓喜の声を上げる風間を無視して直江に握り飯をも作っておいたことも伝えておく。

そう言うと何やら変に感動を始めやがったから言い聞かせておく。

「勘違いすんじゃねぇ……夜中に腹が減ったと叩き起こされちゃたまらねーからな」

そう言い捨てた俺は自分の部屋へと足を進めるのだった。

いい人と思われんのは癪だが、俺の自由を邪魔しなけりゃ大丈夫だろう。そうやああの１年女子、何をしたくてあいつらの前にいたんだ？　まあいいか。

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

side　直江大和

やっぱり心優しいゲンさんが作ってくれた料理を食べて3時間が経過した。
そろそろ姉さんたちが来るころだろう。京が居間にいるし出迎えは任せてある。

「こんばんわ！　貴方のお姉さんです！」

そんな事を考えているとノックもなしに姉さんが部屋に乱入してきた。そしてニヤケた表情のまま俺の部屋を見回す姉さんを見ているといやな予感しかしない。

「やっほー！」

後ろからワン子が顔を出した。
その瞬間姉さんの目が光ったように見えたのは俺の目の錯覚じゃないはずだ。

「聞いてくれワン子、大和が今エロ本読んでたんだ」

「ぎゃー！　えろーい！　変態ね！　変態なのね！」

姉さんの言葉を疑う事ないワン子。濡れ衣過ぎて涙が出てきそうだ。だって男の子だもん。しかも姉さんの容赦ないイジリは続く。

「しかもスポーティーなポニーテールっ娘がたくさん載った本だったぞ」

「あわわわわ……」

ワン子は震えながら俺の部屋から出て行った。

弁明する時間すら与えられないって最悪だよね。

「いい加減にして下さい」

「舎弟イジリもその辺にしておけモモ」

助けに入るのが少し遅いんじゃありませんか兄弟。あんたその顔を見れば分かるよ。ちょっと面白そうだと思って登場遅くしただろ絶対。

しかし本当にどうして俺はこの人と舎弟契約を結んでしまったんだろうか。あの時『うん』と頷いてしまった自分が恨めしい。ああ何やら懐かしい思い出が蘇ってきた。もし今の俺が当時の俺に会える事があるなら声を大にして言い聞かせたい。

『契約は良く考えてしましょう』

一応兄弟も一緒についてきた事が唯一の救いだったな。

そんな事考えていると京が部屋に来て炭焼きの準備ができた事を教えてくれた。

俺の部屋でグダグダしていてもしょうがないと、４人で一緒に居間へ行く。逃げたはずのワン子は既に椅子に座って準備万端だ。

恐らくさっきの事はもう忘れているな。俺にとっては好都合だった。

「じゃあ始めるか。大和は私の肉を焼け」

「京、姉さんのお肉を焼いて」

「クリス。こういう時は新入りが焼く」

「命令の交錯が激しいな……」

次から次に掛る言葉にクリスが呆れた声をもらした。
ワン子は食べる専門だし、兄弟は気付いた時にはみんなの世話をさりげなくやっているから言葉を振るだけ無駄だ。
帰国してわずか2日、既にファミリー内での自分の立ち位置に戻った兄弟を凄いうと思うか憐れと思うか、微妙な判断だ。

「ゲンさんバイトか……あ、2階の子も呼んでいいか？」

キャップが思い出したように京に言葉を掛ける。寮でやるからクリスだけじゃなく1年の子も歓迎してあげようと思ったのだろう。
実は男子が2階に上がるには女子の許可が必要。以前それを破って退学になった生徒もいたらしい。そいて問題なく京から許可を得たキャップはさっそく呼びに行った。

「ガクトもモロもタカも来ればよかったのに」

「ヒロは凛奈さんにつれられて外食、モロはじーさんの世話、ガクトは魍魎（もうりょう）の宴だってさ」

それぞれの理由を思い出しながら京の言葉に答える。
ヒロとモロの理由はまあありきたりなものだが、ガクトの理由がわけ分からん。

「最高に頭悪そうなネーミングだな。何だそれは」
姉さんがみんなを代表して呟いたのだった。

side out

side 暁神

結局、肉を焼くのはキャップの役になった。
バイトでいろんな事をやっていたらしいキャップは、そつなく肉を焼いている。
俺はそんなキャップの手伝いをしつつ、全員に満面なく肉が渡るように気を配る。意識してやってるわけじゃないけど、気がつくとこんな役ばっかだ。

カズは気にすることなく肉を食い続け、クリスもそんなカズの姿を見て呆れているが、食事の時に何を言ってもカズには意味がない。
まだガクがいないだけ大人しい方だ。
キャップも一応自分が声を掛けたという事で、1年生にも何度か声を掛けている。

「肉も柔らかいし、いい感じだな。どうだ黛」
「はいっ、これ、まいうーですね！」
「さーとっとと次を焼きなさいよキャップ！　急いで！」
「そんながっつくなって、しゃあねぇなぁ」

何やら会心の言葉を言ったような雰囲気だったが、横から割り込んで来たカズの言葉に気を取られたキャップは全く聞いていなかった。

「あれ、スルーされ気味でしたよ松風」

「状況は悪くなーい！　将棋で言えば歩を1つ進めたぜ」

何やら手持ちのストラップで腹話術を始めた。

この子もこの子でどうやら強烈な個性を持っているようだ。キャップがなんで連れて来たのか分かるような気がする。

ヤマから向けられた生温かい視線に気付き、何やら落ち込みつつもストラップと会話する事を止めない。

「それ負けじゃないですか！」

何やら1人ツッコミまでやってる。実に面白い子だ。

「はは、なんだこの面白い生き物は」

どうやらモモも気に入ったらしい。可愛い娘を愛でたい本能にかられたのだろう、後ろから1年生を抱き締めだした。

ヤマが俺がいない間にモモが可愛い娘を侍らせていたと言っていたし、ガクが止めさせろ言っていたが、俺としては別に咎めるつもりはない。

何事も度が過ぎなければ自由にしてやるつもりだ。束縛させたいわけじゃないし相手が女の子だったら特に嫉妬する事もない。

そんな事を思いながらモモと1年生を見てみると、何故か1年生が感激に打ち震えている。いったいあの子に何があったんだろうか。

「モモ先輩、そっちの肉を食ってどーする！」

「いやそれほど上手いこと言ってないからな」

ヤマをチラ見しながらミヤがモモに対して突っ込みを入れたが、逆にダメだしされて落ち込んでしまった。そんなミヤにクリスが接触を図る。

「げ、元気を出すんだ」

その言葉に顔を上げたミヤはじっとクリスを見つめる。クリスも視線を逸らす事なくミヤと正面から見つめ合う。

「辛いの好き？」

「そこそこは」

「イェー」

「い、イェー？」

クリスがミヤのトリッキーな動きに何とかついていこうとしている。そんなクリスを見て何を思ったのかミヤは自分の近くに置いてあったタバスコの瓶を差し出した。

「お近付きの印に……はい激辛タバスコ」

「これをどうしろと？」

「ダイレクトで飲む。辛党なら無問題（モーマンタイ）」

「正直すまなかった！」

速攻で頭を下げ差し出されたタバスコの瓶を押し返すクリス。君は悪くない。実に正常な判断だ。しかしミヤの辛いもの好きが修正出来ないほどになっているな。昔はもっとマシだったのに。

「焼けた？　焼けたわよね？　その肉食べていい？」

「まだ裏が焼けてねぇだろ、だめっ！」

「あぅー、でも食べたいわ」

「カズ、ちゃんと焼いた方が旨いんだからキャップの言う通りにしろ。とりあえず野菜でも食べて口直ししておけ」

くだらないところに2年と8ヶ月の空白を感じながらも、俺はキャップに駄々をこねていたカズに声を掛ける。

どこか不満げな感じだったが一応納得したのかキャップから離れて席につくカズ。そんなカズにミヤが自分の皿からキャベツを差し出す。

「とりあえずキャベツに塩つけたものでも食べてて」

それはつけているんじゃない、盛ってるって言うんだミヤ。案の定、カズもそのキャベツの状態にツッコミを入れる。

「それは塩をつけてるんじゃなくて盛ってるだけよ！　何よその山盛りの塩は！　塩の過剰摂取は病気に繋がるのよ！」

「ホント大食らいのクセして細かいんだから」

そう言いながらも盛った塩を落とす。強引に自分の好みを推し進めないのはミヤのいいところなんだが、それを理解出来ると思っているところが問題だ。

そう思いながら自分の取り皿の上の肉を食べお茶を飲んでた時、その後に聞こえた2人の会話に飲んでいたお茶を吹き出しそうになった。

「はいワン子あーん。何が欲しいかおねだりして口を開けないさい」

「アタシの口にキャベツをねじ込んで下さい」

「おねだり出来たな。お望み通りくれてやる。フフフ」

オイコラ待てお前ら。なんて会話してんだオイ。

というかミヤ、本当に俺のいない2年8ヶ月で何があった？　お前ちょっとキャラ変わりすぎなんじゃないか？

そんな思いを込めた視線をヤマに振る。それに気付き疲れ果てた溜息をついて首を振るヤマを見て、あいつもいろいろ大変なんだなと実感した。

恐らく川神学園に入ってから一緒にいられる事で、中学3年間に溜まっていたものが一気に噴き出したんだろう。さらにカズが純真な事も相まっていろんな事を面白おかしく仕込んでいる、といったところか。

実害がないのが救いだがこの場合、白過ぎるカズがいけないのか黒過ぎるミヤが悪いのか……どっちもどっちだな。

「おーい、焼けたぞー」

「先鋒お任せあれ！　肉は全てアタシのもの！」

「強引な！　物資の独占は軍律違反だ！」

何かにつけて言い合う姿を見るカズとクリスだが、根本のところは似た者同士だと思う。今の行動を見ても思うし、同族嫌悪とまではいかないが聞いたところによると初見で決闘を挑んだらしいから、お互いを競い合う相手として認識しているんだろう。

そんな事を考えているとご飯が炊きあがったらしくミヤがいるかどうか聞いて回っている。

「すいませーん。ご飯もう持って来ちゃって下さい」

既にお客様気分のカズに呆れながらも大盛りによそったご飯を渡すミヤ。それを見てたクリスもミヤに催促する。

「自分も貰えるだろうか？」

「白いのがたくさん欲しいですとおねだりして」

「？　白いのがたくさん欲しいです」

ミヤの言葉の意味を全く理解していないのだろう、クリスは不思議そうに首を傾げたが言われた通りの言葉を口にした。そんなクリスを見たミヤがどこか打ちひしがれた雰囲気を纏っていた。

本当に似た者同士だなカズとクリスは。いろんな意味で。

歓迎会もどきの焼肉パーティーも終わり、俺はヤマの部屋でくつろいでいた。

キャップはバイトに行った。夜中の引っ越しとか言っていたが、具体的な内容を聞くのが憚れたので何事もなくヤマと一緒に見送った。

女子連中は1年生を除いてお風呂に入りに行った。
その時のモモが少し危ない感じだったが、まあクリスぐらいの身のこなしがあれば拙い事にはならないだろう。自分の身は自分で守ってくれ。どうにでもならなくなったら助けてやる。

暇つぶしにとヤマの部屋でクッキーと一緒にトランプをやる。
ちなみにクッキーは昨日紹介してもらった。最初は俺が侵入した事に気付かない事に憤っていたが、俺が風間ファミリーの仲間だと分かると、途端にフレンドリーになった。
しかしクッキーが九鬼財閥が作ったロボットだったとはな。カズ→ヤマ→キャップの順で持ち主が変わったと言っていたが、いったい誰がカズにプレゼントしたんだろうか。何故かそこは教えてもらえなかった。

「ほい、フルハウス」

「だあ！　また負けた！」

「凄いね神は。マイスターまでとはいかなけど、かなりの強運の持ち主だね」

クッキーをディーラーにポーカーをしていた時だった。

ズドォォォォン

「な、なんだ!?」

「2階で爆発音がしたな」

驚くヤマだったが俺は特に驚きはしなかった。あの部隊にいたせいか爆発音に対して耐性というものが出来てしまい、ちょっとやそっとじゃ驚く事はなくなった。

「ジン兄ー！　大和ー！　大変よ！　女子のお風呂が――」

叫びながら部屋に掛け込んで来たカズに、いやな予感がした俺とヤマはとりあえず管理人の麗子さんを呼んだ方がいいと考え腰を上げた。

ヤマが麗子さんを呼びに行くと言ったので、俺はカズを伴って女子の領域である2階に上がる。カズに風呂場のある方に案内されると、そこにはモモとクリスだけではなくミヤも1年生も全員揃っていた。

「怪我とかはなかったか?」

風呂場を覗き込みながらみんなに問い掛ける。ぱっと見て怪我らしい怪我はなさそうだが一応聞いておく。痛いのを我慢されていても後で困るからな。

大丈夫との答えを貰い、どうしてこうなったかと周りを見渡していたら、麗子さんを伴ってヤマが戻ってきた。

「おや？　もしかして神ちゃんかい？　なんだい帰ってきてたのかい」

「ええ、心配をお掛けしました」

真っ先に俺に言葉を掛けて来たのでとりあえず当たり障りなく答えておく。

俺の言葉に数回頷いて嬉しそうに笑った麗子さんだったが、俺の後ろの風呂場の惨状に表情を歪めた。

「それで、いったい何が起きたんだい？」

「派手に風呂釜が吹っ飛んでます。老朽化していたのにモモが悪ふざけをしていた、恐らくその結果でしょう」

「おいジン、なんで私のせいにする」

「違うのか？」

「間違いありません」

俺の推測に文句を言ってきたモモに対して満面の笑みを見せてやる。と、顔を引きつらせて素直にモモは認める。

いくら自由にさせるとは言っても、悪い事は悪いとちゃんと認識させないといけない。

理由も本当に単純。恥ずかしがり必死に逃げるクリスを追い掛けて、力を抑えて取り押さえようとしたら、こんな結果になったらしい。

とりあえずモモには麗子さんにちゃんと謝らせておく。謝罪を受けた麗子さんは気にするなと言っていたが、謝罪するとしないとでは

大きく異なる。
モモも自分が悪いと感じていたため素直に俺の言葉に従った。

結局、これを機に先延ばしにしていたリフォームを一気にやることで話は終わった。麗子さんも後で鉄心さんに電話をすると言っていたから、俺たちは簡単な報告だけでいいだろう。

まあそのせいでリフォームの間、女子も1階の男子の風呂場を使う事になったため、ヤマの心労が増える事になった。

頑張れよヤマ。

女子風呂爆発事件が片付き、結局それが理由で今日は解散となり、俺とモモとカズは川神院への帰路を辿ってた。

「なあモモ。もしかして燻っているのか？」

先を元気よく歩いているカズに視線を向けたまま、横に並んで歩いているモモに声を掛ける。
その言葉だけで俺が何を言いたいのかを理解したのだろう、モモは大きく溜息を吐くと握っていた右手を放し今度は右腕を抱えて頭を肩に預けてきた。

「分かるか……」

「まあな」

「お前がいなくなった後な、なんて言うか……自分の中の戦闘衝動を時々抑えられないんだ。たまにタカに頼んで勝負してもらってい

るけど……」

「強い奴と戦えば戦うほど、その衝動がどんどん強くなるんだろ」

俺の言葉にモモは小さく頷いて答える。

恐らくこれが俺が行方不明になった事でのモモの最大の弊害なんだろう。

それまでは俺という常にいろんな意識――例えば『恋愛』といった意識――を向ける存在がいたおかげで、モモの生来の性（さが）である戦闘狂の部分に無駄な意識が向かなかった。

だがそんな存在であった俺がいなくなった事と、立ち直らせるためにヒロと戦った事が、戦闘狂の部分を表に出させてしまった。

俺にも責任の一端があるので、これに関しては何かしら手を打とうと思っていた。

肩に預けられた頭を優しく撫でる。

「とりあえず戦いたくなったら以前みたいに俺が相手をするよ」

「うん」

「それから当分は甘えてくれて結構。公衆ではきちんとしてもらうけど、2人きりの時はまあ好きに振る舞ってくれ」

「うん」

素直に頷くモモを可愛く思いながら、先に川神院の門に着いてこっちに手を振っているカズに空いている左手を上げて振り返した。

すぐには無理だろうが、徐々に以前の心持に戻ってくれればいい。

俺はもうモモの側から離れるつもりはない、そう心に決めているのだから。

第５４話　島津寮歓迎、焼き肉パーティー（後書き）

あとがき～！

「第５４話終了。あとがき座談会、司会の春夏秋冬　廻です。今回のお相手は――」

「椎名京。数年後には直江になってます」

「おいコラ、実に３９話振りのあとがき登場でいきなり何を言い出すんだ君は」

「作者に猛烈アピール。もしかしたらルート変更がおこるかも？」

「それはない！　さて今回のお話ですが、前回あとがきでの予告通りの歓迎会の焼き肉でのプチ宴です」

「最近はつまらないって言うか、無駄に進展しない話ばかりだね」

「原作通りの話に沿っているから、原作を知っている読者さんにしてみれば通過点みたいなものでしょう。実のところ作者は原作に沿う事でオリジナルエピソードを考えるための時間が出来て嬉しく思ってる」

「しょーもな。暴露してどうすんの」

「暴露してるつもりはないんだけどね……でもなんか最近の話は２話で１日が経過する計算なんだよね」

「そう考えるとゴールデンウィークの箱根旅行までに……」

「さらに１０話ぐらい積み重ねることになる……」

「まずいんじゃないの？　だらだらし過ぎな気がするよ」

「どうするべきなのかな……でもできるだけ削りたくないし」

「それでいてオリジナルエピソードを混ぜるとなるととんでもない話数になりそう」

「否定できない。なんとしなければ」

「なんとかしてね。ところで気になったんだけど、ジン兄が帰ってきたのにモモ先輩の奔放さが余り治ってない気がするんだけど？」

「それは本文でも書いているけど、神は基本放任主義で要所要所で厳しくするタイプ。百代の自由奔放なところが好きだから余り束縛はしないね」

「それが分っているからモモ先輩もジン兄を信頼しているってわけか。でもさすがに女癖だけは直させた方がいいんじゃないの？」

「自然に治ると思うんだけどな……この話ではある意味で神がいなくなった事での反動みたいなもんだからね」

「ふぅん……次回は？」

「いきなり話を変えたね。次回はお待たせ由紀江のファミリー加入です」

「それじゃあ、次回も期待せずにお待ちくださいね」

第５５話　最後のメンバー、由紀江頑張ります（前書き）

第５５話投稿。

第５５話　最後のメンバー、由紀江頑張ります

「何やらドタバタしてるが台所は空いてるぜー」

「では行きます松風……夕方に計画を発動させます」

「久々にまゆっち本気モードだぜ。激アツだぜー」

「はい！　あ、でも先に買い物に行きましょう」

「しまらねーな……まゆっち」

――２００９年　４月２６日　日曜日　ＡＭ１０：００――

ｓｉｄｅ　篁緋鷺刀

川神駅前商店街“金柳街”。

駅前のロータリーから続く道に並ぶ店で構成される商店街。

本屋からファミレス、昔ながらの八百屋や魚屋まであり、繁華街に大きなスーパーやデパートが出来ているが、僕としては情緒あふれる商店街の方が好きだ。

家を出る前に確認した買い出しリストを手に、最後の目的地である魚屋へと歩みを進める。

今日の夕飯の献立は既に決まっている。今夜は僕１人分だけだから簡単なものでもいいだろう。

凛奈さんは昨夜に続き今夜も新作の打ち合わせで外食らしい。というより僕は昨夜の打ち合わせの事は思い出したくない。

なんで関係のない僕まで連れて打ち合わせに行くのか不思議に思っていた。

最初は担当編集者さんやマネージャーさんが入学祝をしてくれるのかな、と思っていたが、連れられて行った料亭にいたのは見知らぬ女の人とその2人。

担当編集者さんの紹介で、今人気の少女漫画家さんと聞かされた時に物凄い嫌な予感がした。

だってあの人、僕が部屋に入った瞬間、凄く嬉しそうな楽しそうな、例えるなら面白い玩具を手にした子供のような顔をした。

案の定、嫌な予感は的中。どうやらこの漫画家さんが『男の娘』――男性でありながら女性にしか見えない人の事らしい――を題材とした新しい漫画を考えていて、僕に取材をしたいとの事だった。

うん、暴れても誰も僕を責める事は出来なかったはずだ。

だが僕は堪えた。

この紹介話は凛奈さんが言い出した事らしいから、暴れても取り押さえられるのが目に見えていたからだ。無駄な事はしてもしょうがない。

泣く泣く僕は顔で笑って心で泣いて握り拳で怒りを表して取材に答えたのだった。参考になったかは知らないけど。

だがどうやら打ち合わせ場所を高級料亭にしたのは、担当編集者さんとマネージャーさんのせめてもの罪滅ぼしからだったらしい。こ

の2人も凛奈さんに強引に進めさせられた、いわば被害者なのだろう。

別れ際に謝意と謝罪の意味を込めた視線を送っておいた。
きちんと受け取ってくれたので一応は溜飲を下げたのだった。

家に帰り上機嫌だった凛奈さんは、そのまま夜にもかかわらず自分の新作の執筆を開始した。気分が乗っていたから一気にやってしまおうと考えたのだろう。
僕としてはそのままずっと起きておいてほしかったが、朝を迎え僕が起きて来た時にはすでにベッドで就寝していた。

たぶん、下手すれば夕方まで起きてこないだろう。

そんな事を考えつつ目的地の魚屋へ着いた時、見知った後姿が視界に入った。大事そうに刀の入った竹刀袋を抱える姿、間違いない。

「まゆ？」

「あ、タカさん！」

僕の呼び掛けに必死の形相で買った魚を受け取っていたまゆは、声に気付くと嬉しそうな声をあげて振り返った。
その腕に抱えられているのは食材の山……とまではいかないけど、とても1人で食べるとは考えられない結構な量の食べ物だった。というより付け合わせのものばかりでメインの食材は余りない。

変わった買い物をするなと思ったが、そういえば島津寮は土日自炊だけど、材料は常に冷蔵庫に入っているからメインの食材は買う必要がないんだっけ。

「タカさんも買い物なんですね」

「そうだけど……まゆの方はどうしたの？　そんなにいっぱい買って」

僕の荷物を見て自分と同じ理由でここにいると察知したまゆに対して、僕もまゆの持つ荷物を指さして問い掛ける。

その問い掛けにまゆは少しだけ気合の入った声で答えてくる。

「はい、実は昨夜クリスさんとおっしゃる留学生さんの歓迎会に参加させていただいたんです」

「歓迎会って……島津寮での？」

そういえば遊んでいる時にモモ先輩が肉を持参してプチ宴をやるって言ってたっけ。僕はあの思い出したくもない用事のせいで断ったけど、まゆも参加していたんだ。

行けば良かったかな？

「はい。それでそのお礼として今日のみなさんの夕食を私が作ろうかと思いまして」

なるほど、どうして声に気合が入っているかと思っていたらそういう事だったんだ。そういえば以前、お弁当を交換しようと言ったけど拒否されてまだ実現していない。

僕より先に寮のみんながまゆの手料理を食べるという事実に、何故か少しだけ不満な気持ちが心に広がった。

「でも材料ってそれで足りるの？」

そんな自分の心の感情を表に出す事なく、再度まゆに問い掛ける。

対するまゆは嬉しそうに顔をほころばせた。

「実は実家から結構な量が送られて来たんです。でもさすがにお魚はありませんでしたので、買いに来たんです」

「そうなんだ。確かにいきなり魚を送られてもビックリするよね」

まゆの言葉に頷き少しだけとぼけて言葉を返すと、まゆも可笑しそうに笑いをこぼした。

「オイまゆっち、そろそろ帰らないと時間的にヤベーぞ」

またしても唐突に松風乱入。本当にタイミングが掴めない。

まゆは松風の言葉に腕時計で時間を確認する。僕もそれにつられて確認すると時間は午前１０時半を指していた。

それに気付いたまゆは僕に向き直ると小さく頭を下げた。

「すみませんタカさん、そろそろ帰って仕込みに掛からないといけませんので……」

「別に謝らなくてもいいよ。頑張ってね」

「はい。ではまた明日、学園で」

「うん」

別れの挨拶をして去っていくまゆに軽く手を振って答える。

姿が見えなくなるまで見送り、一息ついてそういえば魚を買いに来たんだと思いだし振り返ると、魚屋のおばさんが何やら厭らしい笑みを浮かべていた。

しまった……まゆとの会話をしっかり見られているのを忘れていた。

「仲いいわねヒロちゃん。彼女？」

それから３０分、恋話好きのおばさんの質問攻めに四苦八苦するはめになったのだった。

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

ｓｉｄｅ　黛由紀江

玄関から気配を感じました。
この気配から察するに直江先輩がご帰宅されたようです。

背中で感じるクリスさんの視線を受けながら、私は料理の手を止めずに進めます。と背中に感じる視線と気配が増えました。風間先輩と直江先輩と椎名先輩です。
どうやら私が料理している事に気付き台所に来たみたいです。

「あ、直江先輩。お、おおお帰りなさいです。き、きき今日は私が皆さんのご夕飯を、作りますから」

何とかいつもよりどもらずに、表情も険しくならずに言えたと思います。
そのおかげか、いつもなら顔を引きつらせて私を見る直江先輩が不

思議そうに眺めた後、居間にいるクリスさんに言葉を掛けました。

「どうなってるんだクリス？」

「……本人に聞けばいいだろう」

何故か怒りを含ませた声で答えるクリスさん。そういえば朝なにやらドタバタしていたようですが、どうやら直江先輩とクリスさんが関わっていたようです。

そんなクリスさんを呆れたような雰囲気で見ていた椎名先輩が、直江先輩に私が料理を作っている理由を教えました。

「焼き肉のお礼だって。料理得意らしいから」

「おお、そりゃあわざわざありがとう！」

直江先輩がとても喜んでいらっしゃいます！　ここは気合を入れてお答えしなければ！

「あ、いいんですいいんです！！　お礼に是非食べて欲しいんです！！」

ああ！　期待されるとは何とも心地良いものなんでしょう松風！凄くやる気が湧いてきます！　黛由紀江頑張ります！　最高の料理を作ってみせます！

（おー頑張れまゆっち！）

心に響く松風の応援を背に私は一生懸命料理を作ります。そんな私の後ろで何やら風間先輩たちがお友達のみなさんに呼びかけをして

いるみたいです。
椎名先輩が『モモ先輩たち』と仰っているので恐らく昨日、川神院から来た3名の方でしょう。風間さんが仰っている『ガクト』さんと『モロ』さんもいつも一緒に登校している方たちと思われます。

「タカはどうする大和？」

「呼ぶか。ヒロも今日は用事ないだろ」

その後聞こえた椎名先輩と直江先輩の言葉に、思わず料理の手が止まりかけました。

今、椎名先輩、『タカ』って言いませんでしたか？　言いましたよね？　聞き間違いじゃないですよね？　私の耳がおかしくなったわけじゃないですよね？

（オイラにもちゃんと聞こえていたぜ。確かに『タカ』って言ってたな）

松風も聞いていたという事は聞き間違いじゃないようです。
確かに毎朝の登校の時の人数は８人でした。遠目でしか見ていませんでしたが何となくタカさんに似た雰囲気の方がいらしたのは見ていました。

あれはやっぱりタカさんだったんですね！　私の願望が思わせていた勘違いじゃなかったんですね！　なんかタカさんとの出会いは私にとっていい事尽くしですよ松風！

（まるで運命の出会いだなまゆっち！）

う、運命だなんておこがましい！　あれ？　でも待って下さい。という事はもし私が風間先輩たちのグループに入る事が出来れば、タカさんともっとお近付きになれるという事じゃないでしょうか？

（おお！　まゆっち！　そりゃあ一粒で二度美味しいぜ！　タカっちにも食べてもらえるかもしれねーんだ！　こりゃ料理を頑張るしかないんじゃねーのか！？）

はい！　タカさんにも食べていただけるかもしれないんです！　黛由紀江、誠心誠意精魂込めて丹精込めて頑張らせていただきます！

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

ｓｉｄｅ　篁緋鷺刀

大和君から電話を貰い、凛奈さんには晩御飯を食べてくと言い残して、僕は島津寮の玄関をくぐった。

台所からいい匂いが漂ってくる。まゆが作った夕飯だろう。
これから出てくる料理に、自分でも何故か分からないが大きな期待をよせて僕は居間へ足を踏み入れた。
みんなはもう揃っていたようで、僕が最後だったけどちょうど料理をテーブルに並べていたまゆと視線がぶつかる。

「タカさん！」

「また会ったねまゆ」

みんなから突っ込まれると分かっていても、嬉しそうに小さな笑顔

を浮かべて声を掛けながら駆け寄って来るまゆを見ると、僕も嬉しくて笑みがこぼれて仕方なかった。

「やっぱりタカさんだったんですね」

「やっぱり？」

「はい、実は以前から寮のみなさんが一緒に登校しているのを後ろから見ていたんです。その中にタカさんらしい人を見かけていたんですけど……」

「確信がなかったって事だね。で、今日ここに僕が来た事で『やっぱり』って言葉になったんだ」

僕と会話をしているまゆの後ろで、モモ先輩と大和君と岳人君と京ちゃんの顔が、新しい面白い玩具を見つけたように表情が厭らしいニヤケ顔に変わった。

やっぱり間違いなくからかわれるね、あの顔を見ればすぐに分かるよ。ほら始まったよ。

「『タカさん』ねぇ……」

「『まゆ』だってさ……」

「やけに仲がいいじゃねーかよ」

「なるほど～あの1年が噂のタカのレズ相手だったとはな～」

「聞きたい事はいっぱいあるだろうが今は飯が先だ。せっかく作っ

てくれたんだから温かいうちに頂こう。尋問は後でも出来る」

大和君に京ちゃん、なんか物凄く含んだ言い方だね。
岳人君、そんなニヤケながらも嫉妬めいた器用な視線を送るのはやめてくれないかな。
モモ先輩、その噂に対して僕が嫌な思いしてるの分かっていて言ってるよね絶対。
ジン兄、助けてくれたのは嬉しいけど尋問は酷いんじゃないかな。
間違っていないから余計に悲しくなるよ。

とりあえずみんなジン兄の言葉に従って、僕とまゆに対する――殆どが僕に対してのみだと思うけど――追求をいったん止めて席に着く。
もう既にキャップと一子ちゃんと卓也君とクリスさんの４人は席に着いていた。キャップと一子ちゃんなんて目の前に並べられた料理を食べられるのを今か今かと待ち構えている。

僕も自分の行動に恥ずかしがっていたまゆを促して席に着いた。

「お、お口に合えば良いのですが……」

最後に僕が座ったのを確認してまゆが遠慮がちに切り出した。
テーブルに並ぶまるで料亭で出されるような料理の数々に、みんなそれぞれ感想を述べると一子ちゃんの『いただきます』の言葉にいっせいに箸を伸ばした。

花造りで盛られた鯛の刺身を口にしながらまゆの様子を見る。
何やら緊張した面持ちだが、あれはたぶん美味しいと思って欲しいと考えているんだろう。見た目すら凝っている料理の数々を見れば心配する事じゃないと思うんだけどね。

「おお、美味いなこの鯛の刺身」

「盛りつけも花造りで見た目も凝ってるな」

「春菜の粕漬けがいい味を出しているし、蕗の薹の湯葉包み揚げもカラッとして……」

まゆの心配もよそに料理はみんなに好評だった。特にクリスさんには日本料理そのものな献立の今回の料理に、まさに至福の時とでも言うような笑顔を浮かべていた。

みんなから与えられる称賛に、ちょっとだけおどおどしながらもまゆは素直に、でも少しだけ表情を強張らせながら受け取っている。

「あの、タカさんはお口に合いましたか？」

みんなとの会話の合間を縫って、まゆは隣に座っていた僕に耳打ちして聞いてきた。

きっとまゆはこういった行動がみんなに娯楽を与えているって事に気付いていないんだろうな。異性どころか同性の友達もいないって言ってたから。

「うん、思っていた通りの腕だね。やっぱり今度お弁当交換しようよ」

だが分かっていても僕は答えてあげる。今のまゆは友達とコミュニケーションを取るのが嬉しくて仕方ないんだろう。

噂も、からかわれる事も、今のところは僕が我慢すればいいだけだし。

「ありがとうございます」

僕の答えに満面の笑みを浮かべるまゆ。そんな彼女を見て自分たちに対する時の態度と、僕に対する時の態度の違いにモモ先輩が本格的に底意地の悪い笑みを浮かべ始めた。

今度はジン兄の援護は受けられないだろう。事実ジン兄は僕の視線を受けてしょうがないといった感じで肩をすくめた。

恐らくクリスさんを除くみんなは絶対に僕とまゆの関係を聞きたいはずだ。

「さ～てタカ～。話してくれるんだろうな」

笑顔と同じ底意地の悪い口調でモモ先輩が先陣を切った。

とぼけても無理だろうし正直に話をした方がいいだろう。だけどまず先手を打っておかなければならない事がある。

「分かったよ、聞かれれば答えるけどまゆには質問しないでね」

「どうしてだ？」

「さっきまでの態度を見ていれば分かるだろガク。質問しても緊張してまともに答えを返すのは難しいという事だ」

僕の言葉が意外に思ったのか、不思議そうに聞いてきた岳人君の言葉に答えたのはジン兄だった。

その言葉に今までの寮内と昨日の歓迎会でのまゆの行動を思い出したのだろう、寮住まいの４人とモモ先輩、一子ちゃんは頷き、それを見た卓也君もまゆの性格を察したんだろう頷いていた。

まゆ自身も今までの自分を振り返って恥ずかしかったのだろう、僕の隣で顔を伏せ小さくなっていた。

「まあいい。じゃあタカに聞くが、その子が噂の彼女か？」

「ぐっふ！　ゲホ！　ゲホ！」

唐突なモモ先輩の言葉に口直しに飲んでいたお茶を喉に詰まらせるまゆ。僕はそんなまゆの背中をさすりながら少しだけ困りながら答える。

「噂になってるのは知ってたけどそんな関係じゃないからね。そもそもその噂、僕が女って事が前提でしょ？」

「どっちから声かけたの？　タカのナンパ？　その子の逆ナン？」

今度は京ちゃんからだが、あり得ないって分かってて聞いてるよね。

「僕たちの性格を考えればあり得ないって分かってるでしょ？　ナンパじゃないけど声を掛けたのは僕から」

「出会ったのはやっぱ入学式か？」

やっとまともな質問をして来たのは大和君。こういう質問を待っていたんだ。

「再会は入学式だけど、３年前にまゆの故郷の石川県で１度だけ会ったんだ」

「そういえばその頃、凛奈さんに連れられて加賀温泉郷に行ってた

な」

僕の言葉にジン兄も3年前の事を思い出したのか、腕を組み考えながら僕の答えを裏付ける言葉をくれた。

ジン兄の言葉がちょうどいいきっかけだったので、僕は3年前のまゆとの出会をみんなに話した。まゆも所々ではあるが話に参加して僕たちの出会いを補完していた。ていうよりは、僕よりまゆの方が鮮明にその出会いを覚えている感じだった。

「ふ～ん、それで『タカさん』と『まゆ』って呼び名なのね」

「面白い出会いしてんな」

「でも凄い偶然だよね。昔1度会って本名すら名乗り合わなかったのに、3年後に同じ学校で再会するなんて」

僕たちのお互いの呼び名の理由に納得したといった感じで頷く一子ちゃん。当時の僕たちのやり取りに笑いが止まらないキャップ。ちょっとだけ興奮気味に僕とまゆの再会を感心したように言う卓也君。

でも1番興奮していたのはクリスさんだった。

「これはまさに運命ではないか！　幼き頃に出会った少年少女が大人になって再会する！　そして互いを想い合い結ばれる！」

それはどこの少女漫画の世界ですかクリスさん。

それよりあまり声高に言わないで下さい。ほら、まゆが恥ずかしさに耐えきれず再び俯いちゃったし、モモ先輩と京ちゃんが物凄くイヤミったらしい笑顔でこっち見てるし、ジン兄も大和君もそんな2人を見て呆れていないで何か言ってほしい。

そろそろ僕でも許容できなくなりそうだよ。

「で？　もうやっちまったのかタカ？」

無神経で場を弁えない、そしてまゆにとってセクハラ過ぎる岳人君の言葉に、ついに容量の限界が超えた僕は持っていた箸を手首のスナップだけで岳人君の喉めがけて投げた。

「グゲェ」

潰れた蛙のような声を出す岳人くんは、いつの間にか隣に移動していたジン兄が放った裏拳をまともに顎先に食らい、脳震盪を起こし気を失いテーブルに突っ伏した。

余りにも自業自得過ぎる結末に、誰1人として岳人君に同情しなかった。

第５５話　最後のメンバー、由紀江頑張ります（後書き）

あとがき～！

「第５５話終了。あとがき座談会、司会の春夏秋冬　廻です。今回のお相手は――」

「皆様お久しぶりです、黛由紀江と――」

「オッス！　オイラ松風だぜ！」

「すでに２人１組扱いだね君たちは……まあいいか、さて今回のお話ですがまゆっち仲間入り前哨戦とでも名付けておきましょう」

「１話で終わらせるつもりじゃなかったんですか？」

「ズルズル延びてるぜ、ボンクラ作者」

「ひどい言われようだ。確かに１話で終わらせようと思っていたんだけど、原作と違ってすでに緋鷺刀という友達がいるんだから、オリジンルシーンを入れるとどうしても１話で収めることは出来ないんだよ」

「という事は原作とはずれた展開になるということですか？」

「いや、大まかな筋は一緒。ただね……」

「どうやってタカっちを織り交ぜようか考えてる最中なんだろ？」

「鋭いね松風。まあそういう事。次の話で君が風間ファミリーに仲間入りを懇願するんだけど、緋鷺刀をどういう立場で発言させようか、結構難しいんだよね」

「あの、それはネタバレになってしまうんじゃないでしょうか」

「確かに……この話はここまでにしよう」

「それよりも作者、タカっちはまゆっちに対して特別な感情でも持ってるのか？」

「ま、松風！？」

「（松風が言うってことはこの子は緋鷺刀が自分に特別な感情を持ってほしいと思っているのかな？）……どうだろうね。どうしてそう思うんだ？」

「いや、文の所々にそう感じる言葉が……」

「もうやめてください松風！」

「おおう！　悪かったぜまゆっち！」

「セルフツッコミとセフル謝罪……なかなか面白い事するねホント」

第５６話　最後のメンバー、１１人目の仲間（前書き）

第５６投稿。

本当に展開遅いです。

第５６話　最後のメンバー、１１人目の仲間

「はいまゆ、これが最後だよ」

「手伝っていただいてありがとうございます」

台所の流しに立ち、食器洗剤の泡を洗い落した最後の皿をまゆに手渡す。

お礼を言いながらも受け取った皿を布巾で拭い、食器の水切り籠に置くと、今度は絞り水を切った布巾で水に濡れたシンクを拭く。僕もそれに倣いもう１つの布巾で流しを軽く拭く。

後片付けも自分だけでやると言い出したが、そこは有無を言わさずに僕も手伝った。

確かにまゆがおもてなしをしたのだから最後までやるのが筋だろうが、呼ばれたとはいっても友達なのだから遠慮はしてほしくなかった。

「まるで新婚さんだね大和。私たちもああなるよね」

「友達だからならないだろ」

「いいな～。なあジン、今度一緒に料理を作ろう！」

「料理よりも一緒に台所に立ちたいだけだろモモ」

片付けの最中も背中に感じる視線を少しだけ鬱陶しく感じながらも、とりあえず聞こえる声を無視して２人で手早く終わらせてみんなと同じ席に着く。

まゆがもてなした料理も食べ終わり、みんなは満ち足りた顔で食後のお茶を飲んでいる。どうやらまゆの料理はおおむね好評だったようだ。

みんなの態度でそれを感じ取ったのだろう、まゆもどこかほっとした様子が見て取れた。

「ふー、お前料理上手いんだなぁ。俺様食い過ぎた」

湯呑を置き感心したような岳人君の言葉に、まゆは少しだけ嬉しそうに返す。

「はい、小さい頃から母上に教えられまして」

「日本の食……誠に素晴らしい。今日に感謝だ。ただ……朝のアクシデントが無ければ最高の1日だったがな」

クリスさんも絶賛していたが、どうしてかその後続いた言葉はまゆではなく大和君に向けられたものだった。しかも『アクシデント』の部分をやけに強調しどこか軽蔑した口調だ。

「何か嫌な事でもあったのか？」

「お前……っ！」

何もなかったかのようにとぼける大和君に、クリスさんは怒りに顔を歪めたが、おどけたようにかわすその態度に唇を噛んで次の言葉を飲み込んだ。

後から聞いたのだが、どうやらこの日の朝に自主鍛錬をした後、お風呂に入ろうとしたクリスさんが服を脱いで下着姿でいる時に大和君が誤って脱衣所に足を踏み入れる、という事故が起きたていたらしい。
その前日の女子風呂爆破事件も同時に聞いた僕にとって、それは両者不注意だと思う。忘れていた大和君も悪いけど、脱衣所の鍵を閉めていなかったクリスさんにも非があったはずだ。

だが今はそんな事を知らない僕は、2人の態度に首を傾げるだけだった。

「よく動きよく食べたら、もう眠い、か」

「まさしくワン子だね」

満腹になって眠気が襲ってきたのか、一子ちゃんが椅子に座りながらも目を閉じて船を漕ぎ始めたのを見て、優しそうな笑みを浮かべるモモ先輩と呆れた表情の卓也君。
そんな穏やかな雰囲気が流れる中で、キャップがまゆに言葉を掛けた。

「で、なんか俺たちに話があるんだろ後輩」

「は、はい……！」

いきなり声を掛けられて、しかも自分の考えを見抜かれた事に驚きながらも、まゆは緊張感を漂わせた返事する。と、テーブルの下でみんなに見えないように手を伸ばして、僕の服の裾を震えながら親指と人差し指の2本で摘んできた。

「そういう目をしてるもんな。何か決意している」

キャップの言葉通り決意している。たぶんまゆはみんなとも友達になりたいんだ。

でも実質、友達と言っていいのは僕1人だけだし、まゆは自分から言葉を掛ける事にとてつもない緊張感と恐怖を抱いているんだろう。

摘んでいる指の震えから容易に感じ取れた。

僕は同じようにみんなから見えないテーブルの下で、裾を摘んでいるまゆの手に軽く触れ落ち着かせるように小さく叩く。

「不眠症か？　隣のタカに頼めば寝られるようにしてくれるかもな？」

「モモ、茶化すな」

恐らくテーブルの下での僕とまゆのやり取りを、気付いているであろうモモ先輩の茶化すような言葉を、間違いなく気付いているジン兄が窘める。

「そ、そ、そーいうのではなくですね」

モモ先輩の言葉の意味を分かってしまったのか、まゆは少しだけ袖を摘んでいた指に力を込め、頬も若干赤くして否定の言葉を口にする。

だからねまゆ、そういった態度は控えて欲しんだって。言ってないから分かんないかもしれないけど、そういった態度を取る度にね、ほら、モモ先輩とか大和君とか京ちゃんがニヤケた顔で僕たちを見てくるんだよ。収集つかなくなる前に助けてねジン兄。

ちょっとだけ期待を込めた視線に気付いたジン兄は、苦笑を浮かべながらも軽く手を振って答えてくれた。あれは分かったと受け取って問題ないと思っておこう。

「！　そうか、すまねぇな」

まゆの態度に何か気付いたのか、小さく笑みを浮かべた岳人君が急に謝ってきた。

「彼氏が欲しいってなら俺様は年下専門外なんだ」

何を言っているんだろうかこの人は。何をどう考えたらそういう言葉が出てくるのか、１回頭の中を調べてみたいよ。
案の定、みんな同じ思いだったのだろう。

「いきなり何勘違い発言してるだお前バカか」

「どう見てもタカといい雰囲気なのにね。バカでしょ」

「妄想発言だよね。バカだから」

「本当に周りの空気が読めてないよな。バカだけに」

「ははっ！　みんなからバカにさてるなガクト」

モモ先輩。京ちゃん。卓也君。大和君。キャップ。５人の情け容赦ないツッコミに岳人君は肩を落とし打ちひしがれる結果となった。

「カズー、人の話はちゃんと起きて聞こうな」

「みぎゃ！？」

そんなみんなを放置していたジン兄は、本格的に睡眠に移行しだした一子ちゃんの両こめかみを中指で押す。とたんに一子ちゃんはまるで電流を流されたかのように身体を大きく震わせると、なんか変な悲鳴を上げて飛び起きた。

いったい何をやったんだろうか。見た目には軽くこめかみを押しただけだったのに。

「容赦ないなお前たちは」

そんなみんなのやり取りにクリスさんが呆れた声を出した。
確かに容赦ないけど、これがいつもの風間ファミリーのやり取りだ。
そんな僕たちの考えを大和君が代表して答える。

「友達だから何を言っても、何をやっても許すのさ」

「大和わりぃ。借りた携帯ゲームのデータ消えた」

「ははは、労力分の賠償をしてくれればいいさ」

「おい！　全然友達な風に見えないぞ！」

そんな時もたまにはある。だからこその友達。
さっきの大和君と岳人君のやり取りだって冗談めかしたものだろう。
たぶん。

「や、やっぱりいいな！」

クリスさんと同じようにそんなみんなのやり取りを、心底羨ましそうに眺めていたまゆは、摘んでいた僕の服の裾を今度は握り締めると、意を決したように大きな声を上げた。

みんなの視線が集中する。

一層大きくなった震えを落ち着かせるため、僕は服を握りしめているまゆの手に自分の手を重ねた。少しでもまゆの勇気の力になればいいと思った。

そんな僕の思いが伝わったのかまゆは小さく頷く。

「……その空気が、凄く、いいですっ！　あの、あの……あぅ」

そこまで勇気を出しておきながらまゆは膝の上に乗せてる松風に助けを求めた。

「まゆっちＧＯ！　ここは天下の分け目だぜ！」

「うん、石田三成みたいな気分で行くね」

何故負ける方の気分で行くのかな、まゆは。後ろ向きな精神もここまで来ると憐れとしか感じられない。ほら、松風にもダメだしされてるし、松風に奮起されないと勇気が出ないのかな。

でも結局これって自分自身でダメだしして、自分自身で奮起させているだから、結果的には自分自身で立ち直ってるんだけどね。

だがそんなまゆを見てみんなは呆れたような会話をしている。

気味悪がって引かないあたりは、やっぱり風間ファミリーなんだと思えて、少しだけ良かったと胸を撫で下ろした。

そんな中でジン兄だけがどこか心配したような表情でまゆを見ていたけど、僕の視線に気付くと『何でもない』といった感じで首を振った。

あれはたぶん、僕たちには分からないジン兄特有の勘で、まゆの松風とのやり取りに何かを感じ取ったんだろう。

でも今何も言わないって事は、急いでどうにかする事じゃないってことかな？　いつか時期が来たら教えてくれると思うけど、僕も気に掛けておこう。

そんな僕たちのやり取りの最中、ようやく決心がついたのだろう、まゆは僕の服から手を放すと椅子から立ち上がりいきなり頭を下げた。

「お願いします！　私もみなさんの仲間に入れて下さい！　みなさんと一緒に遊びたいんです！　あの、私ずっと地元で友達いなくて……こっちに来てもタカさん以外の友達を作れなくて……」

震えながらも一生懸命言葉を紡ぐまゆ。

「そこで、みなさんが楽しそうにされていて……私も仲間に入れたらどんなに楽しいだろうって……だからお願いします！　仲間に入れて下さい！　何でもやります！　だから……その！」

まゆは自分の思いを一気に捲し立てた。まゆらしい不器用だけど一途で真剣で。でも想いの籠った言葉はみんなに伝わっているはずだ。

少し涙で潤んでいるけど瞳の輝きは真剣そのものだから。

そんなまゆを見て、みんなは声に出さず顔を合わせ視線だけで会議をしている。それに僕が参加していないのは僕の意見が賛成だとみんな分かっているからだ。

返事を待つ間も緊張で震えているまゆを安心させるために、気休め程度にしかならないかもしれないが背中を軽く叩く。

「黛由紀江さんだったっけ」

視線だけの会議が終了し、やっぱりキャップが代表して声を掛けてきた。こういう時、ジン兄もモモ先輩もキャップである翔一君の顔を立てる。

キャップは緊張するまゆに言い聞かせるように言う。

「今のままじゃ仲間には入れられない」

「……あ」

「だって仲間ってのは基本対等なもんだろ？　頭下げて何でもするから入れて、とかで入るもんじゃないよな。普通に『面白そうだから私も入れて』で、いいと思うぜ」

キャップの言葉にまゆは目を見開いた。

たぶん思ってもみなかった言葉なんだろう。まゆは友達が欲しいという事に囚われすぎていて、友達というものがどんなものなのかを忘れていたんだ。

まさに目から鱗が落ちたような表情のまゆは、再び気合を入れて言葉を発した。

「お、面白そうだから私も入れて下さい」

だけど――

「断る」

「はぁぁぁうっ!?」

ちょっと待ってよ!?

「「鬼かアンタは!?」」

余りのショックに倒れ込むまゆを慌てて抱き止める僕と、声を張り上げた卓也君の異口同音のツッコミが同時に入った。

「ハハハ冗談だよ冗談。これから一緒に遊ぼう!」

冗談って!?　さすがに今回の事だけはキャップでも許せない。

「冗談でも言っていい冗談と悪い冗談があるよ!　キャップはまゆの気持ちをちゃんと考えてさっきの話をしたんでしょ!?　それなのに何でそんな冗談が言えるのさ!」

声を荒げキャップに食って掛かる、普段いつもの僕らしくない態度に、当事者であるキャップもみんなも呆然となる。だけど今の僕はそれだけでは気が収まらない。

「落ち着けヒロ」

なおも怒りを込めてキャップを睨み付ける僕の頭をジン兄が軽く小突いてきた。

叩かれると同時に何かをされたのだろう、籠っていた怒りが何故か薄らいでいく感じを受けた。それを確認したジン兄は今度は僕の頭に手を乗せて、胡乱気な目でキャップを見る。

「ヒロの言う通り、ちょっと性質の悪い冗談だったなキャップ。悪気がないのが分かってるから何もしないが、もうちょっと場の雰囲気を考えて冗談を言おうな？」

「お、おう。わかった」

穏やかだが有無を言わせない口調に、キャップもバツが悪くなり素直に自分の非を認めた。それを見て小さく頷いたジン兄は、今度は僕の腕の中にいるまゆに視線を向けた。

「大丈夫？　ごめんね変なこと言って」

「だ、大丈夫です……僅かに意識が飛んだだけで……タカさんもありがとうございます」

ジン兄の言葉に気を持ち直したまゆは、受け止めた僕にもお礼を言うと力の抜けた身体を1度だけ揺らし、ゆっくりではあるがちゃんと立ち上がった。

そんなまゆを見てクリスさんは感心したような声を出す。

「言葉だけで長時間気絶するほど柔ではないな」

確かにそんな子じゃないけど、まゆにとって『友達』という言葉は希望であると同時に、ある種の心的外傷（トラウマ）になっているんだと思う。まゆにとって友達を作る事は1番の目標でありながら強迫観念にかられる事柄でもあるんだ。だからこそ、冗談と分かっていてもキャップの言葉にショックを受けてしまう。

今回の事に関しては、ちょっとだけどキャップを許せそうにない。

そんな僕の気持ちもお見通しなんだろう、ジン兄は落ち着かせるような慰めるような感じで僕の後頭部を掌で数回叩いたのだった。

「で、では、私も仲間で……いいのですね？」

「ああ！　いいぜ！」

まゆの縋りつくような確認の言葉に、キャップは笑顔で答えた。

途端にまゆは僕の服の袖を両手で握り締めると肩に額を当ててきた。

「うぅぅ～。嬉しい……ありがとうございますぅ」

「まゆ……」

いきなりの行動に驚いたが感謝の言葉と一緒に漏れた嗚咽に、まゆが泣いている事に気付いた僕はまゆの肩に手を置いて落ち着かせるように小さく叩いた。

でも恥ずかしい。人前で泣いてる女の子を慰めるのがこんなに恥ずかしいとは思わなかった。ジン兄もモモ先輩も再会の時こんな羞恥を味わったのに、何ともないような態度を取っていたのには素直に凄いと思うよ。

まゆを慰めながら僕は話しをする京ちゃんとキャップに視線を送る。
また新しくメンバーが増える事を1番嫌がるのは間違いなく京ちゃんだ。
キャップの言葉に頷く京ちゃんを見て、恐らくクリスさんに声を掛けると決めた時と同じやり取りが交わされているんだろう。
思うところが無いわけじゃないけど、僕だけの意見を押し切る事は出来ないから、何事も起こらず過ぎていくのを願うしかないかな。

「ところでさ、友達になったところで1ついいかな？」

どこか窺うような大和君の声に、まゆは僕から離れ小さく頷く。

「俺たちはある意味で慣れてるからいいんだけど……本気で友達を作りたかったら、まずその日本刀をいつも持ち歩くのだけはやめた方がいいよ。そのせいで第一印象を怖くしてる」

仲間内の女性陣をチラリと横見して、小さく苦笑いを浮かべて注意する大和君に、まゆはどこか困惑したような表情だ。

「帯刀なぞ日本ではよくある事ではないのか？」

「父上から授かったこの刀が原因？　でも国からは許可をいただいてます」

「新人2人はボケボケだなー」

どこか見当違いな答えを返すまゆとクリスさんに、モモ先輩が慈しむような視線を送る。みんなは苦笑いを浮かべるしかない様子だ。

「でもやはり刀を手放すわけにはいきません。これは私の魂でもあるんです」

「手放すなと言っていない」

そんな僕たちの様子を見ても、自分の魂を護るかのように刀を抱え直したまゆに、ジン兄が真剣な表情で言葉を掛けた。
そんなジン兄の雰囲気に呑まれたのか、まゆも真剣な表情で見返した。

周りにいる僕たちもその雰囲気に呑まれ、2人の会話を黙って聞く。

「刀は魂。素晴らしい言葉だけど所詮物の例えだ。道具は道具、魂は遣い手が込めてこそ宿るものであり、刀そのものに宿っているんじゃない」

そう言って右の人差し指でまゆが抱える日本刀を指差す。ビクリとして一層強く刀を抱えるまゆを見て、ジン兄は人差し指を戻し親指を立てると、今度は自分の胸に当てた。

「真の魂とは自分の中にある誇りの事だ」

ジン兄の言葉に、まゆは何かを感じたのだろう刀を抱えていた右手を放し、開いた掌を数秒だけ見つめると自分の胸に押してた。

「自分の中の誇り……」

「そういう事だ。だから年がら年中刀を抱えるのはやめような」

「はい、努力します」

まるである種の憑き物が落ちたような、少しだけ清々しい表情を浮かべたまゆを、ジン兄は小さな笑みを浮かべて頷いて見ていた。こういう事をあっさりとやってのけるのがジン兄の凄いところだ。

「さすがジン兄、含蓄あるナイスなお言葉」

「いつも思うけど、本当にこの人、僕たちと同い年なのかな」

「サバ読んでたりしてな」

「何か言ったかガク？　聞こえるようにもう1度言ってくれるか？」

穏やかな雰囲気を一転、岳人くんの言葉を聞き逃さなかったジン兄は、とても素晴らしい満面の笑顔を浮かべて岳人君に詰め寄った。

誰かが言った、『笑みとは本来攻撃的なものである』という言葉。時にジン兄はその言葉がピタリと当てはまる笑顔を浮かべる事がある。

岳人君、とりあえずご愁傷様。

「……賑やか……」

少しだけ騒がしくも実に僕たち風間ファミリーらしい雰囲気が漂う中で、まゆは小さいながらもいろいろな思いの込められた声をもらした。そして掌に置いた松風に話し掛ける。

「私は幸せです、松風……」

「良かったな～。歴史に残る瞬間だったな」

喜びを松風と分かち合っているまさにその時だった。

誰も聞きたくても聞けない、聞いていいのか分からず迷っていた事を、

「で？　それは何なのだ？」

まゆの掌の松風を指さしながら、いともあっさり訪ねたクリスさんだった。

第５６話　最後のメンバー、１１人目の仲間（後書き）

あとがき～！

「第５６話終了。あとがき座談会、司会の春夏秋冬　廻です。今回のお相手は――」

「篁緋鷺刀です」

「さて、今回のお話の事を語る前に1句」

遅々として　進まぬ展開　どうしよう

「なんですかいきなり」

「作者の心の川柳です。皆様すみません、今回で由紀江加入を終わらせて次回を神初登校をやろうと思っていたのですが……」

「1話延びちゃったというわけですか」

「その通り、故の心の川柳です。いやしかし本当に遅々として進まないね」

「自分で言っちゃあ意味ないですよ」

「そうなんだけどね……読者のみなさんが呆れて離れていかないのを願うばかりです」

「それでい今回の話は」

「読めばわかると思うけど、食後のまったりムードから由紀江加入懇願、諭し、許可までの話だね」

「言葉にするとすごく短いですね」

「短いね……なんで文章にするとこんなに長くなっちゃったんでしょうか？　ねえどうしてだと思う緋鷺刀」

「僕に聞かないでください。自分で自分の頭の中を覗いてみてはどうですか」

「できたら苦労しないよ……」

「だったら最初から質問しないでください。それで、この流れからすると次回は……」

「松風紹介から、全員の自己紹介、その後のちょっとしたひと騒動を1話にして終わらせます。必ず」

「その言葉はもう信憑性と説得力がありませんよ」

「うん、分かってる。では次投稿もよろしくお願いします」

第57話　最後のメンバー、楽しい仲間たち（前書き）

第57話投稿。

第57話　最後のメンバー、楽しい仲間たち

やっちまった……

それがクリスと黛さん以外の全員の心の声だった。

誰もが聞きたかった。でも誰もが聞いていいのか迷っていた。
この中で1番仲のいいヒロも理由は何となく察しているのだろうが、どういう言葉で聞いていいのか分からにから今まで深く聞かなかったのだろう。

空気の読めない人間とは時々凄い事をする。

今まさにそんな状況だった。

「それとは？」

クリスと同じように場の雰囲気を分かっていない黛さんは、問われた言葉をオウム返しに首を傾げた。だがそんな黛さんを見てもクリスは怯む事なく言葉を続ける。

全員が空気の読めないお嬢様に、とりあえずこの場を任せたのだ。

「その携帯ストラップと会話しているように見えるんだが」

「ああ松風ですね」

クリスの言葉に何に対して聞かれていたのかを理解した黛さんは、掌に乗せていた黒い馬のマスコットの着いたストラップをテーブル

の上に置いた。

「松風、ご挨拶を。しっかりとしなやかに、そして華麗に」

「オッス。オイラ松風。まゆっちの友達だぞ」

見事な腹話術だ。ストラップとして喋っている時は唇が殆ど動いていな。いっ○く堂も真っ青な完璧な腹話術だった。
みんな呆然となる中で黛さんは言葉を続ける。

「松風は父上が作ってくれた携帯ストラップです。いつか友達が出来て携帯が必要になったらと心を込めて……」

「で、今まで友達いなかったって事は、携帯は……」

「はい。必要が無いので買ってませんでした。ううぅ！」

ミヤの容赦ない問い掛けに、答えた自分の言葉で傷ついている黛さん。自虐にもほどがあるぞ。憐れを通り越してこっちまで哀しくなってきそうだ。
そんな黛さんを慰めるように背中を撫でるヒロ。

さっきから思っていた事なのだが、ヒロにしてはなんて言うか自分から積極的に人と関わり合うのは実は珍しい事だった。

個性の強い風間ファミリーだが、人との関わり合いにおいて1番積極的なのは情報・人脈を広げるのが目的のヤマで、次いで人見知りをしないキャップとカズ。モモとガクは普通でタクとヒロはどちらか問えば積極的に自分から関わる事はあまりしない。
ちなみにミヤはヤマとは真逆で仲間以外の人間に関しては殆ど排他

主義だ。

そんなヒロが黛さんに対してはいつもと違う態度を取る。否定はしているけど、これはお互いに特別な意識を持っているだろう。少なくとも黛さんにとってヒロは特別なのは間違いない。

「なんだか可哀想ねアンタって」

「ワン子に同情されるなんて、可哀想すぎる」

「どーいう意味よ！」

同情めいたカズの言葉にヤマはフォローを利かせたのか、友達がいなかった事ではなくカズに同情された事を不憫だと言い切った。それが分かっていないカズはヤマに食って掛かる。

しかしキャップはそれすら無視して黛さんに話し掛けた。

「なんでその携帯ストラップと会話してんだ？」

「私、ひとりで部屋にいる時に話し相手がほしくて、松風にいつも話し掛けていたんです」

何故かその姿がすぐに目に浮かべる事が出来る。

「するとある日、松風が返事をしてくれて」

「オイラに九十九神が宿ったんだな」

彼女の父親もきっと娘がひとりで自分の作ったストラップと会話しだすとは思わなかったはずだ。しかし、この子があの有名な剣術家

の娘なのか……少し子供の育て方を間違えてるんじゃないだろうか。

「そういう設定なのね」

ミヤの身も蓋もない言葉に黛さんは顔を歪めた。

「せ、設定……そ、そんな身も蓋もないこと」

「でも腹話術のようなものでしょ」

「……それを認めたら松風が松風でなくなります」

「まゆっち～。どこまでも優しい人間だ～」

ミヤの情け容赦ないツッコミにめげずに何とかかわし、松風の言葉を使って自分で自分を褒めている黛さん。案外いい根性をしている。ヒロもそう思ったのだろう。ある意味でヒロが1番黛さんのその行動を見慣れているが、さすがにこの会話には苦笑いを浮かべるしかないようだ。

「これからは遠慮なく私たちに話し掛けろ」

モモが話を纏めるように黛さんに声を掛ける。その言葉に黛さんは感極まってしまったのか無言で頷いて答えた。
それを見ていたキャップが感慨深く呟く。

「モモ先輩、まゆっち気に入ってるな」

「ま、まゆっち！？」

「何でそこで驚くのさ、まゆ……」

突然あだ名で呼ばれた事に驚く黛さんをヒロが呆れたような声で窘める。そんな2人を不思議そうに見ているキャップ。

「あだ名ダメか？　そのストラップで『まゆっち』って言ってるだろ？」

「い、いえいえ！　いえいえいえ！　いえいえいえいえ！　是非！」

「だから顔怖いよまゆ」

自分としては物凄く嬉しくて歓喜の表情をしているつもりなのだろうが、ヒロが言う通り今の黛さんの顔は相手を睨み付けるような表情で、子供が見たら絶対に泣くぞ。

この子もある意味で前途多難だな……

「じゃあこれからはまゆっちで」

ヤマの言葉にモモとヒロ以外が頷く。

今回は俺も『まゆっち』と呼ぶ事にしよう。本来俺の呼び方だと『ゆき』になるけど、誰も名前で呼んでいないしコユキとどことなく被る。

なにより1番仲のいいヒロが『まゆ』って呼んでいるのに、そのヒロを差し置いて名前で呼ぶのは憚れた。

そう思いヒロの方を見ると、俺の視線の意味を察したのか合わせていた視線を落ち着きなく彷徨わせる。どうやらヒロ自身、自分の気持ちにまだ気付いていないんだろう。

煽ってもいい事にならないし、ここは見守るのが1番だろう。

「私はまゆまゆって呼ぶぞ。まゆまゆ強いだろ？　そこが気に入った」

モモ1人だけ違う呼び名にしたようだが、やっぱり感じ取っていたか。

そう、まゆっちは強い。それも相当。恐らく俺たちの中ではヒロといい勝負――若干ヒロの方が上だろう――が出来るぐらいの強さは持っている。

そう思っていると、モモは謙遜するまゆっちに軽くだが拳の連撃を繰り出す。だが急な事に慌てながらもまゆっちはその攻撃を全部よけた。

おお、やるね。

その動きを見て取るなら、今の状態ではクリスよりかは、少し弱いといった感じだが、どうやらまゆっちはヒロと同じタイプだ。

自分から力をひけらかさない。自分が戦うと決めた時のみ、その力を揮う。御するよ言うよりは元々戦う事があまり好きじゃないタイプだな。

そういった意味でもヒロとまゆっちは相性がいいのかもしれないな。

「私などまだまだです……」

それでも謙遜するまゆっちだが、過度な謙遜は嫌味に繋がる。だが今のところまゆっちの実力に気付いているのは俺とモモと、恐らくヒロだけだろう。

「黛十一段の娘が何を言っている」

「父上をご存じなのですか？」

「うちのジジイも持ってるが、国から帯剣許可を貰えた剣聖だろう」

父親の名前をモモの口から聞いたまゆっちは驚きに目を見開いたが、俺としては言葉を聞いた時に一瞬ではあったか表情を変化させたヒロの方が気になった。

それも仕方ないのかもしれない。篁緋鷺刀と黛由紀江。この2人はある意味で因縁めいたもので繋がっている。

『十一段』。

この称号は彼が11年程前に授かったこの国でただ1人、最高の剣士にのみ許された名誉ある称号。その称号を掛けて2人の剣士が勝負し、それに勝った当時は剣聖十段と呼ばれていた黛氏が手にした。そして勝負し敗れたもう1人の剣士が、当時剣帝十段と呼ばれていた篁氏。

ヒロの父親だ。

勝負に勝ち『十一段』の称号を受けた父を持つ娘と、勝負に敗れその後病でこの世を去った父を持つ息子。その2人が同い年で同じ学園で出会った。

これはある意味で皮肉とも言える運命なのかもしれない。

まゆっちは気付いていないようだが、恐らくヒロは自己紹介した時に気付いているはずだ。それでも何も言わないのは、親の事は自分

たちには関係ないと思っているのか。あるいは言い出したくないのか。
チラリと横目で窺ったヒロの表情は、読み取ることができないほどいつもと同じ穏やかな表情だった。
俺はそこで考えを止めた。深く考える事じゃないのかもしれないな。
「よぅし！　新メンバーも加わった事だし、既存メンバーも含めここで1度全員で自己紹介をし合おうじゃないか！」
俺の考えが終わった事を感じ取ったのか、モモは小さく笑いながら一瞬だけ視線を向けると、みんなに向かって宣言するように言い放った。
自分の言葉に全員が頷くのを確認したモモは先陣を切って自己紹介を始めた。
「川神百代3年。武器は拳1つ。好きな言葉は『誠』！」
「川神一子2年。武器は薙刀。勇気の『勇』の字が好き」
「2年クリスティアーネ・フリードリヒだ。武器はレイピア。『義』を重んじる」
「椎名京2年。弓道を少々。好きな言葉は『仁』……女は愛」
「1年黛由紀江です。刀を使います。『礼』を尊びます」
次々に名乗りを上げ自己紹介をする女子を見て思う事が1つ。いつの間に時代は男より女が強くなったんだろう。なんかこのメンバーを見ていると本当にそう思えてくる。

「んで、男どもだが――」

「ちょっと待ったモモ先輩！　俺たちも自分で自己紹介するぜ！」

おざなりに紹介をされると本能的に悟ったのだろう、キャップは言い掛けたモモにストップを掛けると勢いよく立ち上がった。

「風間翔一２年！　武器は速さ！　好きな言葉は『自由』！　この風間ファミリーのリーダーだ！」

「島津岳人２年！　武器は力！　好きな言葉も『力』！　見よこの筋肉を！」

「２年師岡卓也。武器と言えるか分かんないけど得意なのは機械系。好きな言葉は『絆』かな」

「２年直江大和。武器は智謀。好きな言葉は『繋がり』。軍師を任されてる」

「箪緋鷺刀１年です。武器は刀。信頼の『信』の字が信条です」

みんなが言い終わって俺に視線が集中する。俺も言えってか。
期待に満ちた視線に小さく溜息を吐き俺は言葉を発した。

「暁神。武器は何でもだが基本は拳。真実の『真』を誇りにしている」

一通り自己紹介というよりはまるで武将の名乗りのようなものを終えてみんなを見回す。

しかしあれだな。人数では男子が勝ってるが女子は全員が武闘派で結構強い。勢いよく言ったもののそれを改めて実感したのか愕然としているキャップとガクとタク。

「女子全員が何かしらの武道をやってるね」

「俺様のタフガイさが霞むぜ」

「女の子が強い時代になったよな。男の立場がないぞ」

何やらこそこそと話し合っていがそれを悟って何やらやるつもりだなヤマは。

「あいや待たれい！　情けないぞ諸侯！」

「軍師大和！」

ヤマの声にキャップが答える。軍師と呼んでいるのをみると、結構な期待を込めてヤマの言葉を待っているようだ。

とりあえず静観しておくかと判断し手振りでヒロにも伝えておく。武闘派の女性陣に対して、はてさてどんな行動を取るか楽しみだ。期待を込めヤマの言葉を待つキャップとガクとタク。

「武力で負けている分、知力で勝負するんだ。男だってそう簡単に負けちゃいられねぇ。誰もが勇気を忘れちゃいけなんだぜ」

一気に捲し立て士気を高めるためか、宣言するよう格好いい事を言ってるようだがなヤマ、今この場でその言葉は拙いぞ。もう少し言葉を選べ。じゃないと……

「ほほー、よく言った。こっちへ来い」

思った通りモモに引きずられて女性陣の輪の中心へと連れて行かれた。

思いっきり誤解されてしかもそれを弁明する機会すらないんだろう。

あ、何か言ってモモに殴られている。あそこは弁明の出来る法廷なんかじゃない。モモが牢名主の獄中だ。

おお、何やらミヤがやる気だ。拙い方向に行かなければいいがな。

「ピンチの時は少年誌的展開なら仲間が来てくれるはず！」

イジられる寸前のヤマが女性陣の中から期待の籠った視線でこっちを見てきた。それに対するみんなの対応は――

「じゃあな……頑張って耐えてくれ」

「俺様も男としてのプライドを失いたくないからな」

「僕には到底無理だからさようなら」

だがこの場は少年誌ではなかった。ものの見事に助けを求めたヤマを見捨てるキャップ、ガク、タク。だがヤマも諦めず一縷の望みを持って叫ぶ。

「兄弟！　ヒロ！　強大な敵に立ち向かってくれ！」

ギャグのつもりかヤマ。まあそれすら分からないほど意外に切羽詰まっているんだろう。どうしていいか迷っているヒロの頭を抑えて、俺が代表して答えてやる。

「モモ、度が過ぎない程度に抑えておけよ。ミヤ、カズの教育上悪影響を及ぼす１８禁的行動に移ったら問答無用で止めるからな」

「兄弟ぃぃぃぃ！？」

言葉で俺が静観すると決めた事を感じ取ったのだろう、まさにこの世に神も仏もない、といった絶叫を上げるヤマを無視してヒロを連れて居間へと移動する。
ヒロもさっきの言葉でいざという時は俺が割って入るつもりだと分かったのか、特に何も言う事なくついてきた。

居間から状況を眺めているとイヤミったらしいカズと、呆れた感じのクリスにキャップが何かを言い返したが、次の瞬間にはガクとタクを連れて部屋から出て行く。
完全に見捨てられたヤマはまさに孤立無援状態。どさくさ紛れで女性陣の輪から抜けようとしたがクリスとミヤに阻まれ連れ戻される。

うろたえているうろたえている。
だがさすがにそろそろヤバいか。取り押さえられたヤマの服をミヤが脱がしにかかったのを見ると、カズの教育上悪影響を与えかねん状況になりそうだ。

その瞬間、戻ってきた3つの気配に気付き、モモがニヤリと笑みを浮かべて静観する選択を取った。俺もヒロに視線を送り手を出さないように釘を刺す。

さて、これで４対４。どういった展開になるかな。

ボーン

キャップの放り投げた煙幕に突然視界が白に染まり驚く女性陣をし
り目に、ガクを先頭にキャップとタクが部屋に侵入。

「そこだー！」

気配でガクの位置を察したのだろう、白煙の中クリスの気合の入っ
た声が聞こえてきた。気配で察するに急所に的確に攻撃が入ったよ
うだが、まだガクは倒れていない。あいつは言葉通りタフガイだ。
その間に2つの気配が近付きそのうちの1つが離れて行く。

何やら小細工を催したのだろう、部屋を出ていこうとする気配はあ
いつのものだ。

クリスがもう1撃入れてガクが倒れると同時にミヤの側をタクが通
る。これも恐らく作戦のうちなのだろう。あの中で1番気配に敏感
なのは弓を得意とするミヤだ。
そのミヤに1番気配が薄いタクをぶつける事で、一瞬でもいいから
遠ざかる気配から気を逸らすのが目的と見た。

案の定、ミヤは一撃でタクを仕留めるが、完全にあいつは部屋から
出ていった。

機転を利かせたまゆっちが窓を開ける。白煙が晴れたもののその場
に倒れている3人を見て、女性陣は部屋から出ていったのをやはり
ヤマだと確信したようで、カズが真っ先に部屋を出ていき、ミヤと
クリスも倒れている3人をちゃんと確認する事なく放置して出てい
った。

完全に引っ掛かったな。

部屋から出ていったのはヤマじゃない、キャップだ。
さっきやっていた小細工はこれだったとはな。背や体格が似ているしなによりバンダナという目立つアイテムがあるため、入れ替わるには格好の人材だ。ミヤもクリスも『バンダナ』というだけで倒れているのをキャップだと思い込んだ。

あの一瞬で指示を出すとはヤマも結構やるな。

だがただ1人残ったまゆっちが倒れているのがヤマだと気付き声を掛けている。
さて、今度はどんな手腕でまゆっちから逃れるかなと思っていると、ヤマは何やらじっとまゆっちを見つめて何かを言っている。
何を言われたのか分からないが、まゆっちは感激に震えると道を譲るように横に動き、ヤマは手を上げて部屋を出ていった。

そんな2人を何となく面白くないといった雰囲気で見ていたヒロの背中を叩く。いきなりの背中の衝撃に驚いたヒロに、俺はまゆっちの方に行くように視線で伝える。意図を察したヒロはどことなく恥ずかしそうに顔を背けてまゆっちの方に歩いて行った。

モモは既に外に出ていったであろうヤマを追い掛けている。４対４になるように自分が仕向けたのだ、これ以上ヤマをイジルような事はしないだろう。

楽しげに話をしているヒロとまゆっちを横目に、俺は気絶して倒れているガクとタクの介抱をする。

しかしまあ、なんともユニークな新人が2人も加入したもんだ。キャップも『面白くなる』、そういう直感でクリスとまゆっちを入れることを決めたんだろうが、本当にあいつの直感は大したものだよ。

これから始まるであろう面白く楽しい、それでいて忙しい日々を思い浮かべながら、俺は込み上げてくる笑いを止める事が出来なかった。

第57話　最後のメンバー、楽しい仲間たち（後書き）

あとがき～！

「第57話終了。あとがき座談会、司会の春夏秋冬　廻です。今回のお相手は――」

「ウーッス、俺様島津岳人だぜ」

「よ！　KOB！　実に23話振りのあとがき登場だな」

「なんだよその『KOB』って。なんかカッコイイじゃねーか」

「気に入ったか？　キング・オブ・馬鹿の頭文字を取ったんだんが」

「またしてもそのネタかよ!?」

「他にお前に何がある。さて今回のお話でやっと由紀江正式加入が終わりました。いやしかし、原作ではわずか十数分で終わるシーンをまさか3話もかかるとは思わなかったよ」

「無駄に話数を積み重ねただけだったな」

「うるさいぞKOB。由紀江は緋鷺刀の相手ヒロインでもあるんだ。そう易々とシーンを削るわけにはいかないんだよ」

「相手ヒロインねぇ……なあおい」

「なんだ？」

「俺様に相手はいねーのかよ。ジン兄はモモ先輩だし、聞くところによるとタカはまゆっちだろ？　大和も原作通りなら必ず彼女できるしよ」

「なんだ、彼女欲しいのか？」

「当ったり前ぇろ！　なにか？　言えば話に登場させてくれるのか？」

「吝かではない」

「なんだ？　やぶさかって？」

「その意味すら分からないのか……次のあとがき登場までに意味を理解していればそれこそ吝かではないな」

「ようし分かったぜ！　で？　次の登場はいつだよ？」

「さあ？」

「ふざけてんのかテメーは！？」

第５８話　力の一端、神ＶＳクリス（前書き）

第５８話投稿。

神、川神学園編入です。

９／２７　クリスの自称を訂正　私→自分　へ

第５８話　力の一端、神ＶＳクリス

――２００９年　４月２７日　月曜日　ＡＭ９：００――

果していったい何でこんなことになったのでしょうか誰か教えてくれませんかね。

目の前で対峙する人物を見ながら、どことなく他人ごとに考えてしまう。

そういえば初めてモモと勝負した時もこんな考えが脳裏をよぎったな、と懐かしい思い出に浸る。

傍目にはボケっと突っ立っているだけの俺に対し、目の前の人物は手にした武器を構えていつでも勝負を始められるよう臨戦態勢に入った。

俺たちを囲む生徒たちがその姿を見て歓声を上げる。俺はまだ戦闘態勢にすら入っていないというのに物凄い盛り上がりようだ。

周りに流されて受けてしまった以上はどうしようもないと分かっているが、『猟犬』と初めて手合わせした時の、日本人気質『場の雰囲気に合わせておく』、をまたしても発揮してしまった。

進歩してないな俺……

はてさてどうしてこんな事になってしまったのやら、開始の合図がされるまでの間、少し思い返してみよう。

§　§　§

今日はみんなより早く川神学園に着いた。

俺が川神学園に編入するという事は、金曜集会の時に仲間たちにはすでに話してある。ヤマなんかは俺が帰って来た事で月曜日に自分のクラスの編入生が俺だとすぐに気付いたようだった。

一緒に行くとごねていたモモはみんなと一緒に行くように説得してある。まあそのせいで帰りは絶対一緒に帰ると約束させられたけどな。

先に鉄心さんのいる学長室に顔を出し、その後職員室で担任になる先生と顔合わせ。今目の前にいる女性が俺が編入する事になる2年F組の担任、小島梅子先生。

「君があの暁神か……」

俺を見て何故か感慨深そうに呟く小島先生。

「えっと、俺が何か？」

「いや、3年前の事件を覚えているから君はある意味で有名だ。最初学長から君の話を聞いた時は、実は半信半疑だったんだ」

ああなるほど、そういうことか。

確かに俺は一時期、助けたアメリカの政治家が『英雄』と称していたため有名だったらしい。その時の俺は記憶喪失になっていたため

自分の事だとは露ほどにも思っていなかった。

「風間たちのグループとは幼い頃からの友達だと聞いたが？」

「はい、小学校４年生からですね……もしかしてそれで俺はＦ組に編入になったんですか？」

思い至った答えを小島先生に問い掛ける。俺が察した事に何故か満足気に頷いた先生は小さな笑みを浮かべた。

「その通りだ。編入試験の結果でいけば君は特進クラスのＳ組でも問題なかったが、日本に帰ってきたばかりだし友達が多い方がいいだろうとの学長の配慮だ」

最初ヤマたちから聞いた時は適当に決めたと思っていたが、少しは俺の事を考えてくれていたんだな鉄心さんも。

確かにいきなり特進クラスに入れられるよりは、仲間たちと同じな方が精神的にも楽だ。元々帰ってきても学校に行くつもりはなかったからな。

その事を小島先生に言うと、呆れた表情を浮かべた後で軽く頭を叩かれた。

「全く、少しは大人を頼れ。確かに君はしっかりしているがそれでもまだ未成年の子供だ。頼る事が出来るうちに頼っておきなさい」

本当に子供に言い聞かせるような小島先生の言葉に、少しだけ気恥かしさを感じながらも素直に頷いておく。言い返す事が出来ないのも本当だった。

俺が頷いた事を確認した小島先生は、もうすぐＨＲが始まるという事でついて来るようにと言って職員室から出ていく。
その後を言われた通りについて行き、特に話しもする事なく廊下を進む。他の生徒の姿は見えない事からＨＲ前にはみんなきちんと教室に入るようだ。
そんな事を考えていると先を歩いていた小島先生が１つの教室の扉の前で止まり振り返った。

「ここだ。とりあえず君は呼ぶまで待っていてくれ」

俺が頷くと小島先生は扉を開けて教室に入っていった。これからＨＲを始めるようだが、さり気なく教室の中の気配を探ってみると何やら騒がしい。
どうやら編入生の俺の事に対していきなり小島先生に何かを聞いているようだ。

「イケメンですか？　お金持ちですか？」

何やら透き通った女子の声が聞こえたが、今時の女子高生はこういう事を質問するんだな。こんなところにも２年８ヶ月の日本ブランクを感じる。

「静粛に！」

ざわめきだんだん大きくなってきた時、小島先生の厳しい声と鞭を打つ音が聞こえてきた。なるほど、先生が鞭を持っていたのはこういう時に使うためのものか。かなりの遣い手だとは思っていたが、日常でも生徒を叱るために使っていたとは。まさに教鞭の文字通りだな。

「もう来ているから質問は本人にしろ。入ってきなさい」

入室を促した小島先生の言葉に従い、俺は扉を開き教室の中に入る。教室内のクラスメイトになる生徒たちの視線が一気に集まるが、別段気にもならないし自分で言うのも何だが、緊張するほど初々しくもない。

女子の甲高い歓声と男子の何やら怨念がましい溜息の中、軽く見渡してみるとヤマたちは知っているので驚いていない。ゲンとクリスは驚いた顔をしている。そういえば話していなかったなと、驚いているその顔を見て今になって気付いた。

自己紹介と促されてチョークを手渡されたので、黒板に名前を書く。だが書き終わってチョークを置いた瞬間、クラスの雰囲気が一変した。

何やら緊張感の含んだ雰囲気に、おそらく俺の名前を見てみんな3年前の事件の事が頭をよぎったのだろう。さてどういう質問が来るかな、と思いつつ正面を向くとクラスメイトの表情は俺が思っていたものは全然違った。

「今日からみなさんと共に学ぶことになります、暁神です。よろしくお願いします」

当たり障りのない自己紹介をするも何も反応が返ってこない。さっきの反応といいこの反応といい、いったい何なんだろう。どう見ても俺の名前を知っているし信じられないといった雰囲気なのに、行方不明の人間を見ての驚愕じゃない。まるで『この人が？』といった感じの驚愕の表情をしている。

何が何だか分からず、思わず隣にいる小島先生に助けを求めようと

したその時だった。

『『『『『『『『『モモ先輩の彼氏！？』』』』』』』』』

仲間とゲンを除くクラス全員の叫びが１つになった。

だがそんな事どうでもいい。なんでみんな知ってんだよオイ。

俺はさっそくヤマに視線を向ける。あ、反らしやがった。次から次に仲間に視線を送るが同じように次から次に反らしていく。これは間違いなく全員が関わっている。いやよく考えろ。下手すればモモが元凶かもしれない。いや間違いなく元凶だろう。

後でしっかりと聞かせてもらうぞ。俺の言いたい事を視線で感じ取ったのだろう、ヤマは諦めたように溜息を吐き頷いた。

「自己紹介する必要が無かったな暁」

皮肉を込めた小島先生の言葉に俺は何も返せない。最初で最大級のインパクトを与えてしまったようだ。

これから続く高校生活に、早くも暗雲が漂い始めたような気がするのはきっと間違いじゃないはずだ。まあ風間ファミリーの仲間だとバレたら、穏やかな学校生活なんて無理なのは分かっていたが、いきなりモモの彼氏というのがバレるとは思ってもいなかった。

今時女子高生っぽい格好の小笠原千花さんの質問。

「モモ先輩の彼氏って聞いたけどホントなの？」

「本当だよ」

このクラスの委員長らしい甘粕真与さんの質問。

「いつ川神に戻ってきたんですか？」

「3日前の金曜日」

カメラを持った男子生徒、福本育郎の質問。

「モモ先輩とはもうやっちまったのか？」

「殺すぞ？」

これからの事に頭を抱えたいのを堪えながら、次から次にされる質問に簡潔に答える。どうやら月曜日の1時限目はSHR（ショートホームルーム）らしく俺への質問の時間になった。

ちなみに俺の席はゲンの左隣で前はの席はミヤ、右斜め前がヤマ、左斜め前がタク。キャップもカズもガクもクリスも割と近くの席に座っており、風間ファミリー&島津寮のメンバーが纏まっている感じだ。

「いいだろうか」

俺を取り囲みつつ質問を繰り返していたクラスメイトの中から、クリスの凛とした声が響いた。視線を向けると律義に手を上げて真剣な表情で俺を見ているクリスの姿。

あの目、何かを決意しているな。

そう感じ取り視線だけで質問を促すとクリスは頷いて俺の席の前に立つ。

「昨日の自己紹介を聞くに、暁殿は何かの武道を嗜んでいるとお見受けする」

「否定はしないな」

曖昧に答えておく。事実俺は武術も武道もやっていない。

俺の力や強さは『暁の一族』である故のものだから、正確にいえば武術・武道ではなく『武』そのものの体現しているのだ。

「貴殿は編入初日、自分もこの学び舎に通い始めてまだ2日。いきなりこんな事言うのは恥知らずかと思うのだが――」

そう言ってクリスは一瞬だけカズに視線を向けたが、すぐに俺に向き直ると制服のポケットからワッペンを取り出し俺の机の上に置いた。その行動に俺たちを取り囲んでいたクラスメイトがざわめき始めた。

「この学園の決闘制度をもって、貴殿の勝負を申し込む」

クリスの言葉に教室が喧騒に包まれる。

騒然となるクラスメイトには悪いが、俺はいったい何の事だか分からなかった。

クリスが俺と勝負をしたいというのは分かったが、その理由が分か

らないし決闘制度がいったい何なのか分からない。それなのに周りは俺を置き去りにして盛り上がる。
とりあえず制服を貰うと同時に受け取ったワッペンを取り出す。すると一層盛り上がり騒がしくなるクラスメイトたち。
これは受けておくべきなのか？
どうすべきなのか分からない俺は、周囲の喧騒に流されるがままにクリスの置いたワッペンの上に、自分の持ってたワッペンを重ねたのだった。

§　§　§

以上が事の起こりなのだが、果して俺に悪いところはあっただろうか？　流されて何も考えなかったのが1番の原因か……
決闘制度のことをたんとヤマたちに聞いておけば回避できた事だが、それを怠った俺も悪いし、クリスの真剣な表情を見て断るのも憚れたし、まあいいとしておこう。
「よージン、クリと勝負するんだってな？」
生徒の輪の中からモモが出てきて俺の隣に並ぶ。
「決闘制度を詳しく知らなかった結果だ」

「あはははは、そうか」

あっけらかんと笑うモモに俺は後でヤマに聞こうと思っていた事を問い掛ける。まず間違いなくモモが元凶だという確信を持って。

「なあモモ、お前自分が彼氏いる事を所構わず言いふらしてただろ？」

「な、何の事かな？」

この答えでもう分かった。間違いない。絶対に事の始まりはモモにある。あのクラスでバレていたのは幼馴染みの風間ファミリーが誰かに聞かれ、モモ自身が言っている事だから隠す事じゃないと判断したんだろう。

怒られるかと心配そうに見ているモモの頭に手を乗せて、怒ってないと教えるように軽く叩く。どうせいずれはバレる事だからそれが早くなったと思えばいいだけだ。

ただ周りの反応を考えると億劫になる。だってほらモモの頭に手を乗せているだけでいろんな感情の込められた物凄い数の視線が突き刺さる突き刺さる。

人気者の彼女を持った宿命か。

「これより川神学園伝統、決闘の儀を執り行う！　両者、前へ出て名乗りをあげるがよい！」

見届け・審判役の鉄心さんの言葉にモモの隣を離れ中央へと歩みを進める。クリスはずいぶん前から臨戦態勢で待ち構えていた。

「2年F組、クリスティアーネ・フリードリヒ！」

「今日から2年F組、暁神」

クリスの名乗りの時はひと際大きな歓声が上がったが、何故か俺の名乗りの時はブーイングが起きた。恐らくさっきのモモとのやり取りを見ていた生徒たちのものだろう。
人気者の彼女を持った宿命だな本当に。

「ワシが立ち合いのもの決闘を許可する。勝敗の結果は参ったと言わせるか気絶させるかのどちらか。決した後にも関わらず相手を害しようとするなワシが介入する。よいな？」

「承った」

「分かりました」

告げられた注意に答える。それに頷いた鉄心さんは1歩後ろに下がり手を振り上げ、

「いざ尋常に――はじめいっ！」

開始の合図と共に勢い良く振り下ろした。

開始直後クリスは俺に向かって突っ込んで来た。それに対して俺は足を肩幅ほどに広げ両腕をだらりと下げ、構えることなく待ち受ける。

「ハァッ！」

そんな俺を訝しく思っただろうがクリスは動きを止めることなく間合いに踏み入ると、裂帛の声と共に手に持つレイピアで鋭い突きを放ってきた。

クリスの間合いは俺の間合いより1歩広い。身長的には俺の方がリーチが長いが、武器を持っているクリスの方が若干間合いが広くなるのだ。

こちらが踏み込めば交差法的に反撃する事は出来るが、とりあえず様子見でクリスの攻撃を捌く事に決めた。

レイピアの切っ先が当たる直前に右腕を前に出し、人差し指と中指でその切っ先を挟むと間を置かずに手首を捻り肘を曲げると、突っ込んできた勢いを殺さず利用してクリスを後ろに投げ飛ばす。

周囲の驚きの声、その後で沸き上がった歓声と気配に、クリスが身をひるがえして着地したのを感じ取り、俺はゆっくり振り返る。

驚愕の表情を浮かべていたクリスだったが、俺と視線が合うとすぐに持ち直し再び切っ先上げて構え直した。

だが今度は無闇に攻撃を仕掛けてこなかった。どうやらたった1回の交差で俺の強さを読み取ったようだ。

俺からは仕掛けるつもりはないから、これを機にクリスの気をしっかりと探る。

素手のミヤよりは強いが武器有りだといい勝負だろう。カズとは引き分けだと聞いていたが現状はクリスの方が強い。カズが自分の特性を理解して戦えばいい勝負だ。

実際引き分けになった勝負、カズは最後何も考えずに薙刀をレイピアにぶつけたと言っていた。カズの特性は反射神経と速さにある。

頭であれこれ考えるよりも、戦いの流れに乗ってそこから感じたま

まに動く方がカズは強い。
あの勝負では最後にそれが発揮されたんだろう。だから引き分けに持っていけたんだ。

「どうしたクリス？　もう終わりか？　存分に掛ってきて構わないぞ」

完全に動きが止まったクリスに声を掛ける。
ただ対峙しているだけにも関わらず、クリスは汗が噴き出ているし息も荒くなっている。それを見た観客の生徒たちも何が起こっているのか分からず少しずつ騒がしくなっていく。

それもそのはず。特に構える事なく突っ立っているように見せいているが、裏腹に付け入る隙や踏み込ませる隙はいっさい見せていない。
それを分かっていて攻撃を仕掛けてくるか、それとも為す術なく降参するか。クリスの武に対する心構えが問われる事になる。

踏み込んでくればそれだけ自負と意気込み、強くなりたいという意思があり、降参すれば所詮そこまでだという事だ。

「ハァッ！」

迷いを断ち切り自分を鼓舞するかのように声を上げたクリスは、レイピアを持って突き出していた右腕をたたみ胸につけると、腰を落とし力を溜め地面を蹴ると再び俺に突っ込んできた。
最初の1撃よりもさらに間合いに踏みこんで、今度は連続で突きを繰り出す。だが刺突は至極軌道が読み易く、また真っ直ぐなクリスの気性からか虚撃（フェイント）が殆どないので簡単にかわす事が出来る。

攻撃が当たらない事に焦れてきたのだろう、だんだんと動きが雑になってきた。それを見逃さずに左半身になって右手で突き出された右手首を掴み、左腕で腰を払い攻撃の勢いを利用してクリスをひっくり返えす。

呆然となっているところに追い打ちで左拳を振り下ろすが、クリスはすぐに我に返り俺の攻撃を身体を捻ってよけると、勢いよく立ち上がって間合いを取る。

初めて俺から攻撃を仕掛けた事で歓声が湧き起こる。

だがクリスの心境は穏やかじゃないだろう。僅か2回の攻防だが自分では勝てないどころか勝負にならないのも感じ取ったはずだ。息を荒げ身体よりも精神的疲れが圧し掛かってきているはず。それなのに顔を悔しそうに歪めるあたり、負けん気は強そうだ。

まだまだ強くなるな、クリスは。

「まだ続けるか？　それともここで降参するか？」

俺の問いかけにクリスは首を振る。

「今の自分では貴殿の足元にも及ばないのは分かった。だが諦める事だけはしない」

言葉を切り右手を眼前に持っていきレイピアを掲げるように構え、まるで宣誓する騎士のような格好で言葉を続けた。

「次の1撃に自分の持てる全てを込める。受けてもらえるだろうか？」

「わかった。当てる事が出来たらクリスの勝ちだ」

俺が出した思わぬ勝利条件に一瞬だけ驚いた顔をしたが、すぐに真剣な表情に戻り頷くとやや右半身になり右腕を胸につけレイピアの切っ先を俺に向ける。そして腰を落とし重心を低くし脚に力を込める。

連続突きを繰り出した時と同じ構えだが、纏っている気の質が違う。言葉通り全力を込めた一撃必殺を狙ってるようだ。

次の1撃で決着と周囲の生徒たちも悟ったのだろう息をひそめるように静かになった。

「ハアァァァ！」

静寂を打ち破るような掛け声を上げたクリスは地面を蹴り突っ込んでくる。地を滑るように駆けて俺の間合いの1歩だけ外に足を着いた瞬間、クリスに向けてだけ殺気を解放する。

急に浴びせられた高濃度の殺気に一瞬だけ躊躇ったクリスだったが、押し返すように気を込めると間合いに踏み込み俺の喉をめがけて渾身の突きを放った。

が――

「あと1歩、踏み込めなかったな」

クリスの放った突きは俺の喉には届いていなかった。

声を掛けられたクリスはその瞬間にレイピアを手放し両手と両膝を着いてうずくまると、大量の汗を流し過呼吸気味に息を荒げて肩を上下させている。

それも仕方ないだろう。命のやり取りをしたこのない少女が高濃度の、それこそ素人なら気を失いかねないほどの殺気に当てられたんだ。踏み込んできただけでも凄い事だ。

ちょっとだけ大人げなかったなと反省しておこう。

「参り……ました」

荒い息のまま降参の意思を伝えたクリスを見て、鉄心さんの試合終了の号があがったのだった。

第５８話　力の一端、神ＶＳクリス（後書き）

あとがき～！

「第５８話終了。あとがき座談会、司会の春夏秋冬　廻です。今回のお相手は――」

「暁神です」

「大人げない暁神くんです。さて今回のお話ですが、神ＶＳクリス。いかがでしたでしょうか？」

「まさか真っ先にクリスに勝負を吹っ掛けられるとは思っていもいなかったぞ」

「今回は君の強さの一端を学園中に知らしめるためのものだったんだけど、実は迷ったんだよね」

「何を？」

「最初は百代と戦わせようと思ったんだけど、学園で戦う理由がない」

「当たり前だろ」

「次に百代ファンの人たちとの戦闘なんだけど、君が百代の彼氏だと知ってるのは２－Ｆのクラスメイトたちだけ」

「ヤマたちが話したのはクラスだけだもんな」

「そう考えると、１番相手にふさわしいのはクリスという事になる」

「確かに転入初日にカズから勝負を吹っ掛けられてるもんな」

「その通り、クリスもそれに倣って君に勝負を申し込んだってわけ」

「でもなんでクリスはそうしたんだ？」

「クリスの心情は書いていないからここで言うけど、普段の状態では強さを見極められなかったんだ」

「強いのか弱いのか分からない、でもそんな俺にモモが素直に従っているから不思議に思い、それだったら自分で確かめればいい」

「そういう答えに至ったってわけ。書いてもよかったけど無駄に長くなりそうだから省いたんよ」

「ここで言うのに意味があるのか？」

「あとがきってある意味でのネタバレの場だからね」

「いつからネタばらしの場になったんだよ……」

第５９話　Ｓ組訪問、歓喜と驚愕と不芳（前書き）

第５９話投稿。

ちなみに『不芳』は『ふほう』と読み、金融関係の決算分析で使われる言葉で、
意味は字の通り『芳しくない』『よくない』という意味です。

この話では『会いたくなかった』という意味で使いました。

第５９話　Ｓ組訪問、歓喜と驚愕と不芳

ｓｉｄｅ　ａｕｄｉｅｎｃｅ

川神学園には特進クラス『Ｓ組』が存在する。

学年成績上位５０位の優秀者の中で、名門大学への進学を希望する人間たちで結成されたクラス。

また川神市有数の名家の子息が集まるクラスでもあり、そのためか選民主義の思想を持つ者も少なくなく、他のクラスとは相容れない人間たちで結成されたクラスでもある。

今こうして道路を爆走する人力車に乗る男と、人力車を引っ張る女もそのＳ組の１クラスである２－Ｓの生徒だ。

「フハハハハ！　遅くなってしまったな」

「英雄様は将来この国を背負って立つ益荒男！　忙しくて遅れても仕方ありません！」

九鬼財閥の御曹司、九鬼英雄とそれに仕えるメイド、忍足あずみ。

彼らは今、遅刻したため少しでも早く着くようにと川神学園への道を爆走している最中だった。

「それでも急げあずみよ！　遅刻は遅刻だ！」

「はい、英雄様！」

答えと共にさらに一段と速度が上がる人力車。既に自動車と同等か

それ以上の速度が出ている。それでも笑顔を崩さないあたりやはりタダ者ではない。

「我は英雄（えいゆう）、だからこそ下々の者の手本にならねばならん。悠々と遅刻してはいかんのだ」

「はい、さすがでございます英雄様！　間もなく到着しますのでしばしのお待ちを！」

称賛の声を上げあずみはさらに速度を上げるのだった。

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

§　§　§

ｓｉｄｅ　暁神

俺とクリスの勝負も決し、まだ時間が残っていたがＳＨＲ（ショートホームルーム）は終わり残りは自習という名目の自由時間になった。

教室は小島先生からの連絡事項にあった進路調査の話題で盛り上がっている。

「進路希望調査か……うーん……悩むなー」

「冒険家だな。出世に生きるはくたびれるってね」

思わず呟いたであろうタクの言葉に、キャップが『決まっている』といった感じで答えを返した。実に自由奔放らしいキャップの進路だな。

「俺様、ウメ先生の旦那って書くぜ」

「勇者がいるぞぉぉぉぉっ！！」

とんでもなく無謀な夢物語、いや妄想を語るガクの言葉に、クラスメイトの1人で自称二次元人、大串スグルが大声で叫んだ。好きに語らせてやれ、夢ってのは叶わないから夢なんだ。よく言うだろ？　人の夢と書いて『儚い』って。今のガクにはまさにうってつけの言葉だ。

「兄弟はどうするんだ？　川神院？」

馬鹿な話しに盛り上がっているクラスメイトを呆れながら見ていたヤマが俺に話題を振ってきた。だが正直返答に困る話だ。

ついこの間まで外国にいて書類上は中学を卒業しているが、実際に俺は中学から高校に行くための進路というものを経験したことが無い。

高校ですら鉄心さんが手を回していなかったら行くつもりもなかった。そんな俺が進路希望と言われても正直ピンとこないのだ。

「そうだな、進学する気はないが、まあゆっくり考えるさ」

ヤマの言葉に肩をすくめながら答えていると、隣のクラスの担任が教室を出ていったのを気配で感じ取った。教室の時計を見てみると

1時限目が終わるのにまだ時間がある。

挨拶にだけは行っておくか。心配もさせたしな。

そう思い席を立つ。自習ということだが実質は既に授業間休みのようなもの。隣も担任が出ていったし、今から教室を出て隣の教室に行っても問題はないだろう。

「あれ、ジン兄？　どこ行くの？」

教室を出ようと扉に手を掛けた時、背にタクの声が掛る。俺は顔だけを向けて親指で隣の教室を指し簡潔に答えた。

「S組」

クラスメイト全員の間抜けな声を背に受け教室を出た俺は、F組のすぐ隣に位置するS組の教室の扉の前に立つ。

扉に手を添えたが少しだけ迷う。聞くところによるとS組は他のクラスと余り仲がいいとは言えないらしい。特にF組は落ちこぼれというか、ある意味での問題児たちばかりが集まっているらしく、選民思想があるS組とは特に仲が悪いそうだ。

そんなS組にF組の俺がいきなり入って行けば変な顔されるかと考えたが、編入初日だし友達に挨拶しに来ただけだから問題ないだろう。

「失礼しまーす」

特に深く考えず教室の扉を開ける。注目されいっせいに視線を浴びるが別段気にするほどのものじゃない。だがまあ、さすがに目の前

にいる女生徒（？）を見た時は驚いた。

「なに用じゃ？　高貴なこのクラスに下賤な輩が来るとはな」

着物だった。着物を着た女生徒（？）が目の前にいた。なんと答えればいいんだろうか？　ここは素直な疑問を口にすべきか？

「えっと……S組の生徒さんだよね？」

考える前に言葉が口から出ていた。だが俺の言葉を聞いた瞬間、着物姿の女生徒（？）は顔を歪めて声を張り上げた。

「高貴なる此方、不死川心を知らぬというのか！？　これだから下賤な輩は嫌なのじゃ！」

不死川？　ああ、三大名家と言われる不死川家のご令嬢か。なるほど制服ではなく着物を着ていたワケが分かった。

鉄心さんから聞いた事なのだが、学園に多くの寄付をしてくれる家の生徒は服装を自由に出来る特権が与えられるらしい。

三大名家ともなればそれなりの額を寄付しているんだろう。だから彼女は着物を着ているというわけだ。

「悪いね。俺、今日編入して来たばかりだから詳しくは知らないんだ」

「なんじゃ。という事はお前がF組に編入してきたという――」

「あ～！　あ～！　ああ～！！」

当たり障りなく答えた俺に、何やら言い返そうとした不死川さんの

言葉を遮るような大きな叫び声がS組の教室にこだました。
聞き覚えのあるその声に笑みを浮かべながら視線を送ると、驚き口を開けたまま俺を指さす榊原小雪の姿があった。

「よう、コユキ。元気にしてたか？」

「ジンにーだ～！」

満面の笑顔と歓喜の声を上げてコユキは俺に抱きついてきた。揺らぐ事なく抱き止めると頭に手を乗せて少しだけ荒っぽく撫でる。ちなみに俺の前にいた不死川さんはコユキに突き飛ばされた。
それはさておき、コユキがS組にいる事はヒロから聞いていた。出来るだけ早く顔を出して挨拶と心配させた事を詫びるつもりだった。

「心配掛けたなコユキ。金曜日に帰ってきたんだけど、いろいろあって挨拶に来るのが遅れた。悪いな」

「ううん！　ちゃんと帰ってきてくれただけで十分だよ！　お帰りジンにー！」

顔を上げ嬉しそうに、だが少しだけ目尻に涙を浮かべるコユキを見て、ちゃんとした感情がきちんと育っている事に安堵した。俺が行方不明になった事で、もしかしてコユキの心に何か悪影響を与えたんじゃないかと心配していたんだ。

だけど感じ取れるコユキの気配に暗い影はない。これもモモとヒロ、そして冬馬のおかげなんだろう。ちゃんと約束通り、あいつはコユキを守ってくれている。

その冬馬にも挨拶をしようと思っているのだが姿が見当たらない。

冬馬もコユキと同じS組だとヒロに聞いていたのにな。
そう思いながら教室を見渡しているとスキンヘッドの男子生徒が近付いていきた。

「おいおい、扉の前で何やってんだよ。目立ち過ぎ」

呆れながらも、嬉しそうに笑っているコユキを見て優しげな笑顔を浮かべるスキンヘッドの男子生徒。コユキが警戒していないのを見ると、この男子生徒が井上準で間違いないだろう。

「準！　準！　僕のヒーロー！　ジンにーだよ！」

思った通りコユキは彼を『準』と呼んだ。
呼ばれた井上はコユキの隣に立つと俺に向かって右手を差し出してきた。

「話しはユキから聞いてる。暁神だろ？　俺は井上準。名前はユキや若から聞いていたかも知れんが、よろしくな」

「ああよろしくな井上。そういえばモモやヒロには会ったか？」

抱きついていたコユキを優しく押しのけて、差し出された右手に右手を重ね握手をしながら、俺は同じコユキの友達のモモとヒロのことを井上に聞いてみた。同じ学校にいるんだ、何かしらの接触があったと考えるのが妥当だろう。

「モモ先輩は俺たちが入学した時、篁はあいつが入学した時に挨拶をしたよ」

案の定、考えていた通り挨拶は済ませていたらしい。だが驚いた事

にモモもヒロもまさか入学したその日に会っているとは持ってもみなかった。だが納得する。だからモモではなくヒロが俺にコユキのことを教えてきたのか。

「ところで冬馬は？　一緒に挨拶しておこうと思ったんだが……」

俺の言葉に井上が少しバツの悪そうな顔をした。何か言えないような用事でもあるんだろうか。そういえば確か葵紋病院の院長の息子だったな冬馬は。それ関係の用事か？

「ああ、若はなんていうか……“いつもの女遊び”に行ってると思う」

『女遊び』。何かを揶揄した言葉だろうか。あの冬馬がただ単に言葉通りの『女遊び』をするとは思えない。しかしそのままの意味の可能性も捨てきれない。

判断に困るところだがここは無難に受け答えしておいた方がいいだろう。

「あの冬馬が女遊びね……3年の月日は思ったより長いのかもな」

「否定はしねえよ。若にはお前が挨拶に来た事は伝えておく。あとで若が行くかもしれねえが、その時はまたよろしくな」

俺の言葉にも特に反応を示す事なく、同じように当たり障りない言葉を返してきた井上を見て、やはり何かしら理由あっての行動と考えておいて損はないだろう。

何かあった時、どうにもならなくなった時は相談してくれると信じよう。

「しっかし、なんでお前がここに？　それに制服を着てるって事は……」

井上の言葉に現実に戻る。

「今日Ｆ組に編入してきたんだよ。だから俺も今日から川神学園の生徒」

「ああ、そういえばさっきＦ組の編入生と留学生が決闘をやってたな。ありゃお前だったのか」

口ぶりからすると見ていないようだ。まあ特進クラスがいくら学園の制度と言え、ああいったお遊びめいたものに盛り上がるわけがないか。無駄な時間を過ごすよりは勉強しているんだろうな。

「あんな野蛮なもの、高貴な此方らが見るわけがなかろう。低レベルで騒がしいだけのＦ組とはわけが違うのじゃ」

俺の考えを肯定するように不死川さんが言葉を発する。だがよく分かる、彼女はまさにＳ組の思想を体現している生徒なんだろう。確かに他のクラスに嫌われるだろうな、これでは。

そんな事を考えていると覚えのある気配が教室に近付いてくるのに気付いた。考えるまでもない、この２つの気配は……

「フハハハ！　みなの者おはよう。九鬼英雄である！」

「おはようございまーすっ☆」

入ってきたのは思った通り、御曹司と『女王蜂』の２人だった。

さすがに驚いた。まさかこの2人も川神学園に在籍していて、しかもS組だったとは。これでS組の顔見知りは4人だ。

「さぁ、我に挨拶をする権利をやったぞ庶民共」

だが2人はまだ俺に気付いていない。『女王蜂』が気付いていないのもおかしなものだ。俺がここにいるわけがないと思い込んでいるのか、はたまたメイドをやって弱くなったか。
恐らく前者だろう。見る感じ弱くはなっていない。

「おっはー♪」

「はいはい、おはようさん」

「よう、朝から元気だな2人とも」

挨拶するコユキと井上に続いて軽い感じで2人に挨拶する。
声が聞こえてようやく俺がいる事に気付いたのだろう、訝しげに眉をひそめた顔で俺の方を見た。が、次の瞬間2人の顔は全く別々の表情を浮かべる事になった。

「ん？　おお！？」

「ん？　げっ！？」

御曹司は歓喜の表情を。『女王蜂』は苦虫を噛み潰したような表情を。正反対な表情だが口から出た言葉は主従一緒だった。

「「『黒髪（ダークネス）』！」」

「久し振りだな」

片手を上げて答える俺に御曹司は笑顔を浮かべたまま近寄ってきた。一方の『女王蜂』は顔を歪めたまま忌々しそうな視線を向けている。駄目だ俺。まだ笑う時じゃない。抑えろ。

「本当に久し振りではないか！　何だ、我に会いに来たのか？」

「悪いが違う。このクラスに友達がいたから会いに来たんだ。まさか御曹司も一緒の学園だったとはな」

「おお！　我がクラスにお前の友が！　フハハハ、世界とは狭いものだな」

全く言葉通りである。まさか日本に戻ってきて学園に編入した初日にコユキだけじゃなく、会う事はないと思っていた御曹司と『女王蜂』と再会するとは本当に驚きだ。

「ん？　川神学園の制服を着ているとは……お前」

少しの間、腕を組んで頷いていた御曹司は、やっと俺が川神学園の制服を着ているのに気付いたようだ。それに頷いて答える。

「ああ、記憶は戻った。これからも『友』としてよろしくな」

「フハハハ！　覚えていたかあの約束を！　積もる話もあるが済まぬ。我はこれから一子殿のもとに行かねばならん」

カズ？　なんで御曹司がカズに用事があるんだ？　あ、何となくク

ッキーがどうして風間ファミリーと一緒にいるのか分かってきた。
御曹司の雰囲気から察するにそういう事なんだろう。

「お供致します、英雄様ぁっ！」

教室を出ていこうとする御曹司に『女王蜂』が従順な声で駆け寄る。

駄目だ。笑うな。今はまだ駄目だ。腹筋が捻じ切れてもまだ笑うな。

「よい。お前も『黒髪（ダークネス）』と積もる話もあるだろう。我は一子殿を一目見たいだけ……察しろ、我が純真を」

「申し訳ありません！　お心遣い感謝いたします！」

俺が必死になって込み上げてくる笑いを堪えている間に、主従のやり取りは終わり御曹司は教室を出ていき『女王蜂』は下げていた頭を上げて振り返った。
その顔はさっきまでの従順なメイドとはかけ離れた表情をしていた。

胡乱気な視線で俺を見る『女王蜂』の姿を、改めて頭の天辺から爪先までゆっくりと順に見やる。そして右腕を上げ人差し指を突き出し『女王蜂』を指さす。

そろそろ準備はいいか？　本当に腹筋が崩壊寸前だ。さあ行くぞ。
3・2・1！

「ブハハハハハハハハ！」

大爆笑！

だって仕方ないだろ？　あの『女王蜂』が！　凄腕の傭兵として恐れられていたあの『女王蜂』が！　メイド服着て甲高い声を上げて！　従順な姿で他人に傅く！

これを笑わずして何を笑えというんだ！　腹が痛すぎる！　笑い殺す気か！？

「調子こいてんじゃねぇぞ！　『黒髪（ダークネス）』！」

俺の爆笑に耐えきれなくなったんだろう、『女王蜂』は腰の後ろに手を回し得意の武器である2本の小太刀を抜き、飛びかかろうと脚に力を込めた。

だが笑い過ぎて警戒を怠るなんて馬鹿な事はしない。俺は1歩踏み出し突き出したままの人差し指で『女王蜂』の喉元を押さえる。

出鼻を挫かれ顔を歪める『女王蜂』に、俺は一応笑い声を抑えたがそれでも肩を揺らしながら声を掛ける。

「教室内で物騒なものを振りまわすなよ」

「だったらいい加減その厭味ったらしい笑い顔を止めろ。不愉快だ」

「意趣返しだよ。あんた部隊を抜けた後、『俺』の情報流しただろ？　絶対に指差して笑ってやるって決めてたんだよ」

『俺』という言葉のニュアンスにこの状況が自業自得だと理解したんだろう。小さく舌打ちした『女王蜂』は小太刀を納め、腕を組みそっぽを向くと忌々しさを隠そうともしない声音で俺に言葉を掛けてくる。

「忍足あずみだ。ここではそう呼べ」

「忍足さんね……俺は暁神。これから同じ学校なんだ、よろしくな」

「知ってるよ。こっちに来た時にお前の素性は調べた。適当によろしくしてやるよ」

「あっそう。御曹司には？」

「言ってない。自己紹介なら自分でしろ」

そう言うと自分の席なのだろう、椅子に座りグランドの方を向いて完全に俺の無視を決め込んだ。下手な事を言って藪蛇を避けたいと見た。俺自身も特に挨拶以外する事もないし、今はこれでいい。

そう判断し視線をコユキと井上に向けると、案の定井上は驚いた顔をしていた。

「お前……あの2人と知り合いなのか？」

「まあな、御曹司が言うには『友』らしいけどな。っと、そろそろチャイムが鳴るな。俺はあっちに戻るよ。またなコユキ」

答えた後で教室の時計を見て、1時限目終了の時間が近付いている事に気付いたので、一応コユキには挨拶して俺はS組の教室を出た。

「うん、バイバ～イ！」

手を振るコユキに答えるように背を向けたまま手を振る。その時だけ『女王蜂』、いや忍足さんの視線を感じたがすぐに逸れたので特に何も反応は返さなくてもいいだろう。

廊下に出るとタイミング良く御曹司もF組の教室から出てきた。

「おお！　『黒髪（ダークネス）』！」

「暁神だよ。まだ名乗ってなかっただろ？」

「そうであったな。我は九鬼英雄だ」

尊大な態度に独特の笑い方、そして『我』という呼び方。分かってはいたが思った通り、九鬼財閥の御曹司で揚羽さんの弟か。だがどうやら英雄も俺のことを知っていたらしい。

「暁神……そうか、お前が姉上が言っていた」

「揚羽さんから聞いていたのか？」

「ああ、何でも初めての敗北を知った相手だと。お前の強さ。納得のいくものだな」

揚羽さんと戦ったのももう4年前の事だからな。

鉄心さんから聞いたけどあの人もモモと同じ武道四天王の1人らしい。あの日感じた通りの結果に少しだけ満足感が湧き上がった。

「姉上とは互いに多忙なため偶にしか会う事はないが、お前の事は伝えておこう。それから前に言ったがお前は我の『友』だ。これからは同じ学園で学ぶ仲だ。困った事があれば遠慮なく声を掛けよ」

「ああ、そうさせてもらうよ」

「うむ。ではまたな」

「おう」

英雄は尊大に頷き、俺は軽く手を上げて挨拶すると、同じタイミングでお互いの教室へと入っていく。

どうやら本当に退屈しない学園生活が送れそうだ。

第５９話　Ｓ組訪問、歓喜と驚愕と不芳（後書き）

あとがき～！

「第５９話終了。あとがき座談会、司会の春夏秋冬　廻です。今回のお相手は――」

「は～い皆さん。初めまして、井上準ですよ」

「ついに来たかハゲ。小雪も冬馬も登場早かったのに君はずいぶん遅かったな」

「お前が呼ばねーからだろうが！」

「それもそうか。さて今回のお話ですが神のＳ組訪問、いかがでしたでしょうか」

「なんかようやくまともに会話をした気がするぞ」

「まあ４４話は緋鷺刀と顔合わせだけだったからね」

「やっぱりそうだったか。そういえば今回のサブタイトルの意味って何なんだ？」

「神と再会した時のそれぞれの心情を表したんだよ」

「心情？」

「そう。小雪が歓喜。英雄が驚愕。あずみが不芳（ふほう）。特にあずみは会

いたくなかっただろうね」

「爆笑されてたもんな」

「３９話でも神が言ってたでしょ、『無事に日本に帰れて出会う事があったら絶対に指さして笑ってやる』って。それを実行したまでだよ」

「ところでその不芳（ふほう）っていったいどういう意味だ？」

「それは前書きを読め」

「いや俺たちには無理だろ」

「だったら自分で調べろ。ネット検索すればすぐだ。ではみなさん、次投稿もよろしくお願いします」

「終わり方おざなりだろ！」

第６０話　策士大和、賭場での前哨戦（前書き）

第６０話投稿。

もう６０話……それなのに本当に進まない。

第６０話　策士大和、賭場での前哨戦

ｓｉｄｅ　直江大和

昼休み。

俺はキャップとガクトとモロと机を並べて昼飯を食っている。ちなみに今日は学食のパンだ。売店のおばちゃんに頼んで俺とモロの分を取っておいて貰った。やっぱり人は繋がりが大事だよな。

「おい！　勝手にいなりを持って行くな！」

俺たちの隣でワン子と京とクリスが固まって昼飯を取っている。どうやら今日のクリスの昼食はいなり寿司のようだ。

昨日の朝に食べて気に入ったらしく昼も食べていたくせに、今日の昼食もいなり寿司とは。物凄い入れ込みようだ。そんなに美味いか？　いなり寿司って。

「ちょ！　取りすぎでしょ！？　どんなレートよ！？」

ワン子が叫んでいる。おかずの交換をしたようだが理不尽に持って行かれたんだろう。

クリスのいなり好きを考えれば分かる事なのに、やはりワン子は頭が足りないな。

「辛ッ！　辛い辛い辛いッ！！！」

クリスの絶叫がいきなり上がった。どうしたかと見てみると、どうやら京の激辛弁当を口にしたようだ。見るだけでどんな味か分かる

というのに、上手い具合に京に乗せられたか。

「麻婆豆腐」

「飲み物ではないだろう！」

さらに飲み物として激辛麻婆豆腐を飲まされたようだ。クリス、辛党にとってカレーや麻婆豆腐は飲み物だ。何が何と言おうが飲み物だ。それを身に染みて理解しただろう。

合掌。

兄弟はワン子と同じ川神院の料理人が作った弁当を持って、何故かゲンさんと何やら話しながら飯を食っている。ゲンさんも兄弟とは気が合うのか、俺たちの時のような嫌々ながらの雰囲気が感じられない。

「なあ兄弟、姉さん来ないのか？」

割入る感じにはなってしまったが、実は昼休みに姉さんが乱入して来るんじゃないかと心配だった。だが兄弟は呆れたような表情をしたが笑みを浮かべて答えた。

「公衆ではちゃんとするように言ってある。約束しない限りは来ないさ。それに今日は編入初日、騒ぎを起こしたくない」

さすが兄弟。姉さんの扱いに関してはお手の物だな。

そんな俺たちの会話を聞いていたゲンさんが、感心したような声を上げた。

「しかし、本当にモモ先輩の彼氏なんだな。昨日のお前とモモ先輩の姿を見なけりゃ信じられなかったぞ。しかもあのモモ先輩を呼び捨てにしてるし」

「そうか？」

「俺たちの中で姉さんを呼び捨てに出来るのは兄弟だけだよ。俺たちが呼び捨てにしたら速攻で折檻だ」

想像するだに恐ろしい。きっと物凄くいい笑顔を浮かべて逃げ道を塞ぎながら、ゆっくりといたぶるように近付いて来るに違いない。これ以上考えるのはよそう。下手した現実になりかねない。兄弟も俺の雰囲気を察したんだろう肩をすくめて小さく笑った。

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

ｓｉｄｅ　箪緋鷺刀

「今日の決闘、暁先輩凄かったですね」

机を並べて昼食を取っているまゆが、少しだけ興奮気味に声を上げた。

まゆが言っているのは、今日の１時限目に行われたジン兄とクリスさんの決闘の儀の事。先週の金曜日と今日と、クリスさんはある意味で２日連続で決闘の儀をやっている。これは凄い事なんだろう。

「まゆはジン兄の殺気を感じ取れたの？」

「はい、クリスさんにのみ向けられていたものでしたけど、僅かに」

まゆの答えに素直に凄いなと思う。

あの時、ジン兄の殺気を感じたのはいったい何人いただろうか。モモ先輩と鉄心さんは間違いなく感じ取っていただろうし、僕もまゆと同じで僅かに感じ取る事が出来た。

特定の人物にのみ殺気をぶつける事の出来る技術があるなんて思いもしなかった。少なくとも3年前のジン兄には出来なかった事。特殊部隊にいたという事がジン兄をさらに強くしたんだろう。

なんか目標がどんどん遠くなっている気がするな。自分が強くなっていると感じれば感じるほど、その開きが隔絶しているように感じる。

昔はそれでも近付いている感じを受けたけど、今日はさらに離された感じを受けてしまった。

「オイ、タカっち。それは食事時の会話じゃないんじゃないか」

「食事時の？」

「おう、少なくともまゆっちと仲良く食べている時に殺気云々の話はよそうぜ」

ツッコミに確かにと思う。何もお昼時に殺伐とした話しをするものじゃないな。この話はここまでにしておこう。

「ところでまゆ」

「はい？」

「明日僕がお弁当作ってるからまゆはお弁当なしで来てね？」

「うぇぃ！？」

突然の言葉にまたしても慌てふためくまゆを見ながら、同じ風間ファミリーになったんだから、そろそろ僕の提案に乗ってくれてもいいんじゃないかと思う今日この頃。

昨日の夕飯でまゆの料理が美味しいのは充分に分かった。しかも歓迎会のお礼だったらしい。歓迎会に参加していない僕がご馳走になったんだから、それに対するお礼をしても何ら問題はないはずだ。

だが何か理由を見つけて断ってくるだろうから、強引に進めた方がいい。

「昨日の夕飯のお礼だよ。『友達』なんだから受けてくれるよね？」

ちょっと卑怯かもしれないが、昨夜のあの騒ぎの時に大和君が使った方法を取らせてもらう。今のまゆは『友達』や『仲間』といった言葉に弱い。そこを突いて強引に行けば流されて頷くはず。

「は、はい！　分かりましたぁ！」

ちょっとテンパらせてしまったかもしれないけど、案の定肯定の言葉をいただけた。

「やるぜタカッち、女殺しの笑みだぜ、まゆっちもうクラクラだぜ」

あれ？　存外余裕そうだねまゆ。

「ねえ、やっぱり篁くんと黛さん付き合ってるのかな？」
「そうじゃない？　じゃなきゃ毎日机並べてお昼食べないわよ」
「ショック～！　篁くん狙ってたのに～！」
「そもそも私たち、入学初日のあれで印象最悪でしょ」
「「否定できない」」

そんな会話が教室の隅で行われている事に気付く事のない僕とまゆだった。

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

ｓｉｄｅ　暁神

放課後、モモを待ちながらみんなと教室でまったりとしている時たっだ。

「ち、ちくしょう、ちくしょおぉぉ！」

福本育郎、通称ヨンパチ――何でも体位４８手を全部言える事から付けられたあだ名らしい――が怒りながら教室に入ってきた。

「どうしたのサル？」

普段は気持ち悪いと嫌悪しながらも、こういうときはきちんと声を掛ける小笠原さん。クラスメイトとしての仲間意識はあるんだろう。

「腹が立つ事が２つあった。１つはカワイイ女子のスカートが風で

めくれたら中身がスパッツだった！」

物凄く力入れて言う福本。だが物凄くどうでもいい事だった。

「お前は今、泣いていい」

お前もかガク。

しょっちゅうこうなのか、と視線でヤマに問い掛ける。俺の言いたい事が分かったのだろう、ヤマは呆れた苦笑いを浮かべて肩をすくめて頷いた。

どうやら意外と日常茶飯事の事らしい。本当にどうでもいい事だ。

「それから賭場で麻雀やってたら大負けした。しかも相手は２－Ｓの女」

賭場？　この学校そんなものがあるのか？

詳しく聞きたかったが、福本の話しを聞くとどうやら負けた福本だけじゃなく、そのＳ組の女子はＦ組全員を『バカクラス』と言って扱き下ろしたらしい。

だから福本は自分では敵わないと分かっても気に入らないから、ヤマに助けを求めに来た、との事だった。

教室に残っていた全員が福本の話を聞いて雰囲気を悪くした。聞いてはいたがここまで険悪な仲だとは思ってもみなかったな。

「とりあえず見るだけ見てみるか。兄弟、モロ。ちょっと一緒に来てくれないか？」

そう言って立ち上がったヤマは俺とタクに声を掛けた。

今ここにいるメンバーは俺とヤマ、タク、ガクの４人。ミヤは部活。キャップはバイト。カズは修練のため既に帰宅。クリスは今教室にいない。
その中で俺とタクに声を掛けたという事は、場合によってはイカサマも辞さないという事だろう。
ますます賭場というところが気になったが、道すがら教えてもらえればそれで問題ない。

「ガク、悪いけど携帯でモモに連絡入れといてくれ。少し遅れるけど２－Ｆの教室で待っていてくれって」

「おう。了解した」

携帯を持っていないのでモモへの連絡をガクに任せる。
返事を受け取った後、こっちを見ていたヤマに頷いて答え立ち上がると、ヤマとタクの後を追って教室を出たのだった。

賭場はＢ棟４階の空き教室で開かれていて、教職員には秘密で行われている。
話しを聞くにどうやら学校側は気付きつつも黙認しているらしい。
恐らく人生の勉強、経験の場として一利あると判断されたんだろう。
破滅も自己責任。だからイカサマも有り、という事だ。

「あいつだ！　あの女！」

そう言って福本が指差したのは場違いに着物を着た女生徒、ってあれって不死川さんじゃないか。彼女の家柄からして賭場に足を踏み入れるとは思えないんだけどな。

「フッ、狙い通り雑魚が雑魚を連れてきたのじゃ、完膚なきまでに

劣等をシメてやるぞ」

考えが甘かった。どうやら格下だと決めつけている人間を嘲笑って優越感に浸りに来たらしい。家柄的な選民思想は仕方ないと思っていたが、どうやら彼女は物凄く甘やかされて育ったようだ。クリスとは正反対のベクトルで。

しかも部屋の雰囲気を察するに、不死川さんはこの賭場では新顔のようだ。新参者が我が物顔で賭場にいていいわけがない。優越感に浸っていてそれに気付いていない様子だ。

「ヤマ、俺がやろうか？」

雀卓に開いている席は1つ。声を掛けるがヤマは首を振って席に着いた。その動作の間に残りの2人を確認していたが、どうやら不死川さんとグルの可能性を考えているようだ。まあ可能性は限りなくゼロだろうがな。

そうして始まる麻雀。

不死川さんは何やらいろいろ癇に障る事を言って怒らせようとしているが、ヤマは気にも留めず軽く流しながら打っていく。観察しながら安手で回すヤマに対して、不死川さんは優越感に顔を歪めながら大きい手だけを狙って、それでもちゃんと回している。こういうところは確かにS組たる由縁なんだろう。

「麻雀は頭がものを言うゲームなのじゃ」

確かに言葉通りだ。キャップのような天運や強運。場を一気にひっくり返すような『何か』を持っていない限り、麻雀というゲームは

いかに効率よく打つかでかなり勝敗は左右される。
そういった意味では不死川さんの言葉は間違いじゃない。
だがまあ素直すぎる。確かに強いがそれは純正なルール内での強さだ。
オーラスに突入し現時点で1位は不死川さん、2位がヤマだが点差はかなりあり実質彼女の1人勝ち状態。それ見た福本が頭を抱えて叫ぶ。
「やっぱり頭のいい奴にゃ麻雀では勝てないのか？」
「その通りじゃ。格差社会の現実を噛み締めるのじゃ」
そうだな。ならば不死川さんは裏社会の非道さを噛み締めて貰う事になるだろう。
「ヨンパチ。後ろでソワソワされると気が散る」
言葉を掛けつつもヤマの手が動いた。不死川さんはヤマの後ろにいた福本の態度を、ご満悦の表情を浮かべて見ていたためヤマの動きに全く気付いていない。
雀卓を囲っている残りの2人もヤマの行動を黙認する。どうやら不死川さんの言葉に相当腹を立てていたようだ。
「もうすぐ結果出るからヨンパチは向こうで休んでなよ」
タクもヤマの動きを察してボロが出る前に福本を遠ざけた。
「さぁてサクッと勝つのじゃ！　あはは！」

自分の勝ちを疑っていない不死川さんは、場の雰囲気が変わった事に全く気付く事なく山からツモった牌をそのまま河に捨てた。

さて、存分に驚かせてやれヤマ。

「ロン」

「何じゃ？　今度は１５００点ぐらいか？　劣等種」

「大三元」

「なっ！？」

ヤマの和了役に間抜けにも口をポカンと開けたまま固まる不死川さん。

親の役満直撃。４８０００点。不死川さんは一気に1位から最下位に転落した事になる。しかも0点以下になり終局。現状の順位がそのまま結果になった。

「ぐっ、まぐれじゃ！　調子に乗るでない！」

それでもまだ信じられないのか、不死川さんは諦め悪く食い下がる。

「いいからお金」

それを無視してヤマは掛け金の催促をする。

その背中が強硬手段にきた場合の対処を任せたと言っている。動きから気付いていたが、やはり不死川さんは武道をやっているようだ。

だがそれほど強いとは思えない。素手のミヤといい勝負といったと

ころだ。

でも一応、抵抗するだけ無駄だと牽制程度に睨みを利かせておく。
そんな俺の視線の意味を感じ取ったのか、不死川さんは一瞬だけ恐怖に顔を歪めたが、視線を逸らしヤマを睨み付けると、

「くぅぅそ！　低レベルクラスのくせに！　覚えておくのじゃ！　うわぁぁん！」

泣いて出て行ってしまった。
まさか泣くとは思ってもみなかったのだろう、ヤマも一緒に雀卓を囲っていた生徒も数秒だけ呆然としていたが、思いだしたかのように肩を震わせた。

「あれま。仕方ない。後片付けするか。ども、黙認ありがとうございます」

肩をすくめて立ち上がったヤマは雀卓を囲んでいた2人にお礼の言葉を掛けたのだった。

「しかし、手際よかったなヤマ。慣れてるのか？」

教室へ戻る廊下を歩きながら、俺はさっきヤマがやってのけた牌のすり替えについて聞いてみた。

「コツコツ根暗に練習していたんだよ。けどまあ、余り本番ではやらない。今回は2人とも黙認してくれてたし、相手がお子様過ぎたからね」

思っていた以上にスムーズな動作だったから、いつもやっているかと思っていたがどうやら違うらしい。
確かに残りの2人が黙認してくれなければ成功する確率はガタ落ちするだろう。だが言いかえればすり替えをしなければならないほどの強かったという事だ。

「そういう手、使わないと危ない相手だったね」

タクもそれが分かっていたのか苦笑を浮かべた。その言葉に肩をすくませたヤマはチラリと俺の方を見て少しだけ不満げに言う。

「俺はキャップや兄弟のような強い運を持ってないからな。正統派で強い相手には小手先を使わなきゃならないんだよ」

別に俺はヤマが言うほどの強運は持っていない。ただ相手の気配や動き、顔の表情、場の雰囲気を呼んでいるだけだ。強運とはまさにキャップのためにある言葉だろう。
だがそう反論したところで『そんなこと出来る方が異常だ』と言い返されるのは目に見えている。言うだけ無駄なら黙っておこう。
そう思いながら教室の扉を開けると、気配で感じ取っていたのだろう、俺の席に座っていたモモが手を振って出迎えてくれた。

「悪い。待たせたなモモ」

「いや、チカリンたちと話してて楽しかったから問題ないぞ」

笑顔で立ち上がったモモの側に寄り、待たせた事を詫びるように軽く頭を撫でる。その行為を嬉しそうな笑顔に変えて受け取ったモモは咎める事なく俺の言葉に答えた。

そんな俺たちを見て教室に残っていた女子は黄色い声を上げ、男子は嗚咽のような溜息を吐き、仲間たちは呆れたように肩をすくめていた。

「そういえば、ガクトから賭場に行くから教室で待ってろってメールが来てたが、もちろん勝ったんだろ？」

「勝負を受けたのはヤマだけどな」

賭場でのあらましを簡単に説明する。クリスもいたからイカサマした部分は省いたが、もし正直に話していたら絶対に咎めていただろう。

モモはどちらかと言えば結果重視の人間。経緯はどうであれ結果的に勝ったヤマを素直に褒めていた。

「よくやったな大和。という事で勝ち金よこせ」

強請（ゆす）る事も忘れない本当にゴーイングマイウェイな彼女だ。舎弟のヤマには同情の念を禁じ得ない。ここはモモの彼氏として、さらに一応は俺の舎弟でもあるヤマのために助け船を出そう。

「モモ、勝ったのはヤマなんだからいくら姉貴分でも巻き上げるのだけはやめろ」

左手で鞄を持ち右手でモモの後頭部を軽く小突く。

モモも半分、いや恐らく3割程度冗談だったのだろう、少しだけ不貞腐れたような表情を見せていたが、俺が帰り支度を済ませたのを見ると嬉しそうに腕にしがみ付いてきた。

「公衆ではきちんとするって約束だっただろ」

「今日は一緒に帰るって約束しただろ。なら問題ないはずだ」

そう言われてしまうと反論できない。

公衆ではきちんとする代わりに約束をしたらモモの自由に振る舞う、という約束を交わしている。確かに朝、一緒に帰ると約束したのだから、今ここでモモが俺と腕を組んだとしても、咎める事は出来ないという事だ。

「今日はこれからどこに行く？」

「携帯ショップ。俺、壊れたままのずっと持ってるからな」

「なら任せろ！　私と同じ機種にするぞ！」

「はいはい」

満面の笑みを浮かべて引っ張るモモを見て、可愛いし仕方ないか、と思う俺はやっぱりモモにベタ惚れで甘いんだろうな。

モモと腕を組んで教室を出ようとした時、背中に羨望（じょし）と嫉妬（だんし）と諦観（なかま）の視線を感じながらも、そんな事を思う俺だった。

第６０話　策士大和、賭場での前哨戦（後書き）

あとがき～！

「第６０話終了。あとがき座談会、司会の春夏秋冬　廻です。今回のお相手は――」

「高貴な此方、不死川心じゃ」

「泣かされ心ちゃんです」

「泣かされてなどおらぬ！　それからちゃん付けで呼ぶでない！」

「さて今回のお話ですが、原作通りの大和ＶＳ冬馬の前振り、布石になるお話です」

「無視するな！　何のためのゲストじゃ！？」

「しかしみなさんどうですか？　心ちゃんって現実にいたら絶対嫌われますよね。ゲームだから許せる性格だけど現実だったら絶対にムカつきますよね」

「下賤な輩に高貴な此方を理解できんだけじゃ！」

「勘違い野郎のお馬鹿で絶対陰口叩かれまくりですよね」

「聞いておるのかお前！？」

「さて。今回ストーリ的には少し短かったので、緋鷺刀と由紀江、

神と百代のちょっとしたイチャつき振りを書きました」

「いい加減にせんか！　不死川の力でお前を潰すぞ！」

「いやしかし、緋鷺刀と由紀江はほのぼのしてていいですね。たまにですけど松風の存在を忘れます。マジです。だから唐突に話に参加するのです」

「此方がここに居る意味は何なのじゃ！？」

「話は変わりますが、神は今日が初登校の日です。なのに何でしょう、物凄く溶け込んでます。最初のクリスとの決闘→S組での小雪、英雄、あずみとの再会→賭場でのやり取り見学。物凄く濃い1日ですね、編入初日で経験する事じゃない」

「無視するなと言っておるだろ！？」

「さて、次回はさっき言った通り大和VS冬馬、そして神と冬馬の再会です……たぶん」

「う、ううぅ……」

「そういうわけなので、あまり期待しないでお待ち下さい」

「お前なんて豆腐の角で頭を打って死んでしまえばいいのじゃあぁぁ！　うわあぁぁぁぁぁぁぁぁん！！」

第６１話　新生風間ファミリー、全員の登校風景（前書き）

第６１話投稿。

あとがき予告を裏切りました。すみません。

第６１話　新生風間ファミリー、全員の登校風景

――２００９年　４月２８日　火曜日　ＡＭ７：００――

最後のおかずを並べてお弁当の完成。
今日は３人分を作るから時間が掛かるかと思ったが、１人分増えたぐらいではそんなに差はなかった。

蓋を締め布で包みながら時計を見ると７時を過ぎた頃。家を出るのはまだ早いが、その前にやらなければならない事がある。
ちゃっちゃと朝食の準備をし、エプロンを外し椅子の背もたれに掛ける。制服の上を羽織りながら短い廊下を歩いたその先に怠惰な魔王（りんなさん）の居城（のしんしつ）がある。

「凛奈さん、朝だよ」

起きていないのは百も承知だが礼儀としてドアをノックして声を掛ける。案の定、返事は全くないがどうやら完全に寝入っているわけではないようだ。
部屋の中の気配はもぞもぞと緩慢な動きを繰り返している。意識は何となく覚醒しているけど起き上がるのが面倒くさいといった感じだろう。

なら一発で目覚める言葉を贈ろう。

「凛奈さん。起きないとプライベート用ノートパソコンのハードディスク、クラッシュさせるよ」

「私の緋鷺刀秘蔵画像集（シークレットマイコレクション）に手を出すな！」

部屋の中から絶叫が聞こえてきたからもう大丈夫だろう。ドアから離れてリビングに戻る。
椅子に座り自分で作った朝食を食べていると、眠たそうな顔だがスーツに着替えた凛奈さんがリビングに現れ僕の向かいの椅子に腰を下ろした。

「もう少しましな起こし方をしろ」

「今日は取材があるからなんとしても起こせ、って言ったのは凛奈さんだよ。普通に起こして起きてくれるならあんな方法取らないよ」

軽く睨んで来た凛奈さんに対して堪える事なく言葉を返す。
以前、起こしてもなかなか起きなかったから本当にノートPCのハードディスクを物理的にクラッシュしようと事がある。寸前で起きて来た凛奈さんに止められたが、その事件以降は僕の本気を分かってくれたらしく声を掛ければちゃんと起きてくれるようになった。

「おい緋鷺刀、なんで今日は弁当が3つあるんだ?」

朝食を取りながらテーブルの上に置いてあった弁当の包みを見て、凛奈さんは不思議そうに問い掛けてきた。
いつもなら僕1人分だけだし、凛奈さんが出かけるときは2人分作る。それが3つあれば疑問に思って当たり前だろう。隠す事じゃないので素直に答える。

「友達の分。日曜日に島津寮でご馳走になったからそのお返し」

凛奈さんの箸が止まった。
視線を上げて見ると、困ったような悲しいような表現しがたい表情

を浮かべていた。

「あの子の分か？」

「そうだよ」

「緋鷺刀……」

「凛奈さんの言いたい事は分かっているよ。でも僕たちには関係のない事のはずだよ」

言いたい事は分かっている。でも本当に僕たちには関係のない事だ。正確に言うなら確執を持ってるのは『篁家』だけであり、彼女の家はあの事に関しては既に終わった事で思うところは何もないはずだ。

特に彼女は僕の事を覚えていないのだから話して蒸し返す事はしたくない。せっかく『友達』になれて彼女も『仲間』が増えたのを喜んでいるんだ。

これ以上へんな事を話して彼女を困らせるような真似はしたくない。

「そうか……ならそれでいい。私はただ要らない心配をしているだけだ。お前がこれ以上傷つく事だけはないようにしたい、そう思っているだけだ」

凛奈さんの気持ちはありがたく受け取っておく。

「うん、ありがとう」

「それから1度家に連れて来い。じっくりと見てみたい」

「考えておくよ」

話しを変えるように言った凛奈さんだったが、その顔が厭らしい笑みを浮かべたのを見逃さない。連れてくればまず間違いなくイジられる。僕も彼女も。

それが分かっているのにそう易々と連れて来るわけがない。

簡潔に答えた僕を詰まらなさそうに見ている凛奈さんを無視して、食器を重ね流しに持って行く。振り返り流しを指さし、視線で後片付けを任せますと合図を送ると不満げだったが頷いて答えた。それを見て取った僕はテーブルに置いてあったお弁当の包み2つと鞄を手にし、リビングを後にする。

「行ってきます」

「行ってらっしゃ〜い」

語尾を伸ばした挨拶を背に受けて僕は玄関のドアを押し開いた。

学園へ向かう道を歩きながら凛奈さんが言いたかった事を考える。確かに心配するのは分からないでもない。僕と彼女は他人から見れば本来なら相容れない者同士のはずだ。

幼かった頃に起きたあの事は、間違いなく僕たちの心に何かを与えたはずだ。あの事に立ち合った僕は希望と目標を貰った。同じように見ていた彼女が何を感じたかは分からないけど。

でも彼女は僕と再会した時そのことに対して何も言わなかった。それとなく探りを入れても覚えている感じはしなかった。

忘れたのならそれで良かった。覚えているのは僕だけでも全然問題ないし、凛奈さんにも言ったように僕たちには関係のない事なんだ。

「おはよう、タカ」

後ろから卓也君の挨拶の声がしたから考える事をそこで止める。今は難しい事を考えていても仕方がないんだ。

「おはよう、卓也君」

隣に並んだ卓也君に挨拶を返す。

みんなと集合する川沿いの道まであと数分。それまでにいつもの自分に戻しておかないと気配の変化の機微に聡いジン兄に気付かれる。

失礼かもしれないけど、和み系でまさに一般人の卓也君と当たり障りのない話しをして気分を戻しておこう。

そう考えた僕は凛奈さんの新作の話を卓也君に漏らしながら歩みを進めた。

数分歩いていると前方にみんなの姿があった。どうやら今日はまゆも一緒に登校しているようだ。

「みんな、おはよー」

「おはよう」

卓也君に続き挨拶しながらみんなと合流する。１０人と大所帯になったメンバーで学園への道を進んで行く。

みんながいつもの他愛のない会話をしているのを、後ろにいるまゆの隣に並び一緒に眺める。

「今日は一緒に登校してるんだね」

「はい、みなさんに誘っていただきました。嬉しいです」

誘ってもらって嬉しいって……別に一緒に登校する事ぐらい誘う誘わない関係ないと思うけど、まゆにしてみればそれだけ大きなイベントなんだろう。余計な事にツッコミを入れるのはよそう。

と、そうだお弁当を渡しておかなければいけない。

「はい、まゆ」

バッグからお弁当の包みを1つ取り出しまゆに手渡す。言われるままに呆然と受け取ったまゆは、今自分の掌に置かれたのがお弁当だと気付くと、穏やかな顔が一変した。

「ほ、本当に作ってきたんですか！？」

「うん。昨日約束したじゃん」

「いえいえ、た、確かに頷きはしましたけど！　まさか本当に作ってきて頂けるとは思ってもいなかったわけでして！」

「タカっち、まゆっちテンパってるけど期待してたんだぜ。現に今日お弁当作ってきてねーもん」

「松風！」

テンパって慌ててるわりには綺麗にひとりツッコミをするまゆ。だけどとりあえず期待はされていたんだと分かってホッとする。表向きは遠慮してるけど心では待っていてくれてたんだろう。

松風はある意味でもう1人のまゆだ。その松風が言うんだから間違いないだろう。

結局まゆは僕の説得に折れて受け取ったお弁当を大事そうに鞄に仕舞った。

それを見て思わず笑みがこぼれた時、前方から嫌な雰囲気を感じて慌てて視線を向ける。そこにはジン兄と腕を組みながらもこちらに顔を向けてニヤリと笑っているモモ先輩の姿が。

見られていた。よりによって1番見られたくなかった人に。

からかわれるのを覚悟していたが、見なくても気配だけで僕とまゆのやり取りを理解していたのだろう、咎めるようにモモ先輩の頭を軽く叩いたジン兄のおかげで、最悪の状態は免れる事は出来た。

胸を撫で下ろし心の中で感謝する。ありがとうジン兄。

そんな僕を不思議そうに見ていたまゆだったが、急に大和君が笛を吹いた事をに驚き慌てて視線を前に向けた。そのまま視線を固定して僕に問い掛けて来る。

「大和さんはどうして笛を吹いたんですか？」

「見てれば分かるよ。もうすぐ来るから」

百聞は一見にしかず。言葉で説明するよりも実際に見た方がいい。

「おはよー！　誰か呼んだ？」

数分の間を置く事なく、みんなの前方から一子ちゃんが元気よく走

ってきた。それを見たまゆは混乱したような納得したような複雑な表情を浮かべる。

「えっと、まさかあの笛って……」

「その通り、一子ちゃんを呼ぶための笛で通称『犬笛』。一応風間ファミリーは全員持ってるんだ」

そう言って制服のポケットに入れてあった笛を見せた。まゆはどう答えを返していいのか分からないのか苦笑するだけだった。
どうやらクリスさんも大和君の説明を聞いて納得しているみたい。
クリスさんは目に見えるものは信じるタイプだから余り疑問に思わないだろう。

総勢１１人。
キャップ、ジン兄、モモ先輩、大和君、一子ちゃん、岳人君、卓也君、京ちゃん、クリスさん、まゆ、そして僕。

その風間ファミリーが全員揃い橋の入口に差し掛かった時、その２人は待ち構えていた。

「兄者！　あれが川神百代じゃけぇのぉ！」

「ウム。噂にたがわず美しい。満点で合格だな」

見るからに筋肉自慢の２人組―顔が似ているから兄弟だろう―が待ち構えていた。言葉から察するにモモ先輩の挑戦者だ。

「今日はゴッツイ２人組だな」

大和君の言葉が全員の気持ちを如実に表していた。

「川神百代とお見受けするけんのぉ！」

「そうだが」

「我らは地元では知らぬ者のいない仁王兄弟。道場の世継ぎを作るために強い嫁を探している」

目的がはっきりしているのはいいけど、それを今言う必要はないと思う。あれは既に自信というより慢心だ。地元敵なしって言ってたけどそのせいで天狗になってる。

「ガクトが2人いるみたい。筋肉バカ」

「俺様の方が断然知的にナイスガイだぜ」

京ちゃんの呟きに岳人君が心外といった感じで反論している。それこそ今ここで言う必要ない事だと思うんだけど、これがいつも通りの僕たちだ。

「あんたたち、純粋な勝負か嫁探しか、どっちだ？」

珍しく怒りを含ませた声で問い掛けるジン兄。自分の恋人が勝手に嫁扱いされているから仕方ないと思うけど、本当に珍しい。

そんなジン兄の雰囲気を察したのか、モモ先輩以外のみんなが1歩後ろに下がった。それを見て何か勘違いしたのか、ジン兄の変化すら気付いていない挑戦者たちは笑みを浮かべ出した。

「勝負なぞしなくても俺たちの圧勝だけんのぉ」

「嫁探しだ。俺と弟の相手をする嫁のな。ワハハハ！」

完全に怒らせたよこの2人。

ジン兄っていつも冷静で泰然自若に振る舞ってるけど、モモ先輩の事になると意外に怒りの沸点が低い。モモ先輩が馬鹿にされるような事は殆どないから僕たちしか知らない事だけどね。

「兄者！　俺はこっちの男装しているオナゴの方がいいけんのぉ」

一瞬でカタがつくだろう思っていた僕の耳に、理解しがたい言葉が入ってきた。

誰が発した言葉か確認するために周囲を見渡していると、僕を指さし卑しい笑みを浮かべる挑戦者の1人が視界に映った。

なにこの筋肉達磨。もしかして僕のこと言っているのか？

「胸のない女は女じゃないと言っていたくせに、どういう風の吹き回しだ」

「胸などどうでもいいぐらい、顔が物凄い好みじゃけんのぉ！」

胸なんてどうでもいい？　顔が好み？　ああ。そうか。間違いない。男子の制服着ているのに僕を『女』だと思ってるんだこの筋肉達磨。これはアレだよね。別にブチのめしてもいいよね。だって人の尊厳踏み躙っているんだからある意味で正当防衛だよね。

チラリとみんなの方を見ると、キャップと大和君、岳人君、卓也君が額に手を当てて大きな溜息を吐き、モモ先輩と京ちゃんと一子ちゃんが憐みの笑みを浮かべ、クリスさんとまゆだけが不思議そうに

首を傾げている。

「よし、やるかヒロ」

「そうだねジン兄」

掛けられた声に、持っていた荷物をまゆに手渡して預かってもらい1歩前に出る。アイコンタクトだけでどっちの相手をするのかを相談する。

するまでもないけどジン兄が筋肉達磨兄、僕が筋肉達磨弟の相手をすると速攻で決まった。

まず僕が先に前に出る。筋肉達磨弟が筋肉達磨兄の前に立っているから必然的に僕が先に戦う、いや叩きのめす事になる。

自分がこれからどうなるかも分かっていない筋肉達磨弟は、より一層卑しい笑みを浮かべて僕を見ている。

「素直に進み出るとはなかなか可愛い――ガフッ！？」

言葉は最後まで続かなかった。

僕は音もなく筋肉達磨弟の懐に入ると、言葉を遮るように左拳を鳩尾にめり込ませる。その時点で呼吸困難に陥ってるのは感じ取れたが、この程度で終わらせる気はさらさらない。

この筋肉達磨弟は人の尊厳、いや僕の男としての尊厳を踏み躙ったんだ。この程度で許せるわけがない。

呼気をすぼめ気を練り、足、足首、膝、腰、肩、肘、手首の順に練り上げた気を通しながら捻じりを加え、左脚を強く踏み込むと同時

に螺旋に廻らせた力を一気に左拳から解放する。

【師走・橙柊(とうひいらぎ)】

１０メートル近く吹っ飛んでいった筋肉達磨弟はピクリとも動かなくなった。

それを見て一応はスッキリしたから溜飲は下げる。

本当なら【睦月・白水仙(しらすいせん)】か【神無月・紺菊(こんぎく)】のどちらかで仕留めたかったが、あいにく刀を持っていなかったから出来なかった。

あ、まゆに借りればよかったんだ。頭に血が上っていて気が付かなかった。やっぱり怒りで我を忘れるといい事ないね。

吹っ飛んでいった筋肉達磨弟を驚愕の表情で見ている筋肉達磨兄を無視して、僕はきびすを返し後ろに下がる。

交代するように前に出たジン兄は、未だに呆然としている筋肉達磨兄に呆れた声で言葉を掛けた。

「なにボケっと突っ立っているんですか仁王兄弟のお兄さん」

場違いなほど丁寧で穏やかな声音が逆に恐怖を呼び起こす。

声を掛けられた筋肉達磨兄も同じように感じたんだろう、ビクリと体を震わせると物凄い冷や汗を流しながら振り返った。その視界に映ったのは恐らく満面の笑みを浮かべたジン兄の姿だろう。

僕たちからは背中しか見えないけど、ジン兄の纏う雰囲気から有無を言わさない時の笑顔を浮かべているんだろうと見なくても分かった。

モモ先輩ですら恐怖を感じる笑顔だ。筋肉達磨兄の心境は想像するに容易い。

「さて、貴方はさっきなんと仰いました？　俺の聞き間違いでなければ、モモを嫁にすると言いましたよね？」

「あ、いや、その」

筋肉達磨兄は既にしどろもどろでまともに会話すらできない状態だ。恐怖で身が竦みまともに思考が働かないんだろうけど、誰も責めはしない。

あのジン兄を見て冷静でいろという方が難しい。だって見慣れていないまゆとクリスさんは冷や汗を流している。といっても見慣れている僕たちも余り近寄りたくないけどね。

「残念ですけどモモは俺の彼女なんですよね」

「そ、そそ、そうなんですか」

あくまでもジン兄の口調は丁寧で穏やかだ。可哀想なくらい怯えている筋肉達磨兄の方が場違いに見える。

「さて仁王兄弟のお兄さん。貴方はこんな都都逸（どどいつ）を知っていますか？」

「は？」

「『人の恋路を邪魔する奴は馬に蹴られて死んじまえ』」

言い終わりジン兄が動いたと思った瞬間、筋肉達磨兄はまるで糸の

途切れた操り人形のようにその場に崩れ落ちた。

全く見えなかった。何が起きたのか全然分からなかった。
動いたと思ったのも気配が一瞬ブレたのを感じ取っただけで、視界の中のジン兄は動いた風には見えなかった。
周りのみんなを見てもモモ先輩以外は呆然としている。たぶん僕と同じで何が起きたのか全く見えなかったんだろう。

「相変わらず凄いなジン。目を凝らして見ても残像しか見えなかったぞ」

自分のために怒ってくれたのが嬉しかったんだろう、モモ先輩はジン兄の腕に抱きつきながら笑顔で感嘆の声を上げた。
やっぱりモモ先輩は見えていた。でもそのモモ先輩ですら残像しか見えなかったって……いったいどんな動きをしたんだろうかジン兄は？

「しかし本当に凄いな。ジン兄殿もそうだがタカ、お前も強いんだな」

僕に向かって感心した声で話しかけて来るクリスさんだけど、そのツッコミどころ満載の呼び名は何でしょうか。

「あの、クリスさん？　その『じんにいどの』とはいったい何ですか？」

さすがのまゆも我慢できなかったらしく僕と同じ疑問を口にする。
それに対してクリスさんは不思議そうな表情で言葉を返してきた。

「なにと言われても、みんなにそう呼べと言われたし、みんなもジ

ン兄と呼んでいるから私もそう呼んでいるだけの事。何かおかしいのか？」

「それをジン兄に向かって言ったの？」

「言ったが苦笑を浮かべるだけで何を仰らなかったぞ」

いやクリスさん。それは苦笑じゃなくてたぶん泣きたかったんだと思うよ。でも本当に可哀想だねジン兄は。ついに入ったばかりの留学生にまで『兄』呼ばわり。

「まゆ、まゆはちゃんと先輩って呼んであげてね？」

「？　分かりました。『ジン先輩』と呼びますね」

「オイラはみんなと同じで『ジン兄』って呼ぶぜ」

不思議そうに首を傾げたが素直に頷くまゆ。だけど松風で追い打ち掛ける気のようだ。

それでも少しでもいいからジン兄の救いになればいいかな、と思いながら僕は先を行くみんなを追って橋を渡り学園へと向かうのだった。

第６１話　新生風間ファミリー、全員の登校風景（後書き）

あとがき～！

「第６１話終了。あとがき座談会、司会の春夏秋冬　廻です。今回のお相手は――」

「久し振りだな、川神百代だぞ」

「おおう、２１話振り。５１話あとがきでは使いもにならなくなってたな」

「うるさいぞ、それよりお前、今回は大和と葵の勝負じゃなかったのか」

「はっはっは、前回あとがきの予告を見事に裏切ってしまって申し訳ありませんでした読者の皆さま」＞（＿　＿）＜＞（＿　＿）＜＞（＿　＿）＜

「で？　なんでこうなった」

「はい、今回のお話なんですが、本当に大和と冬馬の勝負をやるつもりだったんですけど、ちょっと原作を確認プレイしていたら挑戦者仁王兄弟のシーンって、神と緋鷺刀でやれるなと思ったのが原因です」

「ああ、なるほど。嫁探しに来た奴らだから私の彼氏であるジンは間違いなくキレる」

「それと緋鷺刀を女に間違えれば緋鷺刀もキレる」

「ちょうど2対2になるから書いてしまえと勢いで」

「その通り！」

「威張れる事じゃないだろ！　相変わらず計画性ないなお前！」

「いやホントすみません。あとちょっとずつなんですけど、緋鷺刀と由紀江の今後の展開のための種蒔きをしなきゃいけないので……」

「それが冒頭での凛奈さんとの会話シーンか？」

「その通りです」

「蒔いたのはいいけど腐らせるなよ？」

「肝に銘じておきたいと思っている所存でございます。さて、次こそ予告通り大和と冬馬の勝負になる！　……はずです……たぶん」

「なんでそんなに自信なさ気に言うんだ？」

「1話で終わるかな？」

ＰＶ５０万突破記念　オリキャラ設定（前書き）

ＬＯＶＥかわかみ風でいきます。

ＰＶ５０万突破記念　オリキャラ設定

「はぁいＥｖｅｒｙｂｏｄｙ．　元気にしていたか。現世は秋だね、運動会だね、小さい子供のブルマ姿が見たいねと思う今日この頃、ラジオ番組ＬＯＶＥかわかみ番外編が始まるよー。パーソナリティーは俺、井上準ことロリコン――っておい原稿作成した奴！　何だよこれ！？」

「うるさいぞロリコンハゲ。さっさと進行しろ。司会者でもあるんだろお前」

「おいお前！　『ロリコンハゲ』のルビに『井上準』てふって俺の名前呼んだだろ？　文が読めないからってなめてんじゃねーぞ！」

「だからうるさいぞ偏執的幼女愛好家。いいからさっさと番組を進めろ。見ろＡＤさんもでかでかと『とっとと始めろ』と書いたスケッチブック掲げてるだろ」

「何だよこれイジメかよ。チクショー……ハイハイ分かりました。では改めてＬＯＶＥかわかみ番外編、パーソナリティーはいつも通り俺、井上準。そして今回は番外編ですので特別ゲスト――」

「春夏秋冬廻です」

「ほんとに誰が呼んだんだろうねこんな奴……」

「おい、ペドフィリア。ゲストの前で堂々とそんな事言うなよ。それよりこの手紙をお前に渡せと言われていたんだ」

「あん？　これってモモ先輩から？　なになに……『今回のゲストは私が呼んだ。もし何か失礼な事があったらそれ相応の制裁が待っているからな。楽しみにしておけ』……って！？　何だよこれ！？」

「そのままの意味だろ。どうする変態幼女趣味野郎（いのうえじゅん）。どうやら今回、ゲストの正体を知らなかったの君だけのようだな」

「いい加減、ちゃんと、俺の、名前を、呼んでね、作者さん……」

「何故にひと言ずつで区切ってるんだ？　分かったよ井上準」

「ありがとうね。では気を取り直して始めたいと思います。さて、今回は特別編という事で作者をゲストにお招きしての進行となるわけですが……いったい何をやるんだ？」

「おいあっち見ろ、ＡＤさんがなんかスケッチブックに書いて掲げているぞ」

「ホントだ、なになに……『オリジナルキャラの詳細設定』？　って事らしいですが作者さん的にはどうですか？」

「そうだね、そろそろ出すべきだろうかな？　ロング座談会でも後で出すって言ったしね。どんな風の形式で出そうか？」

「形式ってどういう意味だよ。公式ホームページのキャラクター紹介と同じようにすればいいんじゃないか」

「なるほど……それだと少しだけ拙い点があるな」

「なんだよ、拙い点って？」

「脳内で外見イメージはあるがＣＶイメージは全く考えていなかった」

「……必要があるのか？」

「だって公式ホームページのキャラ紹介と同じ形式を取るならＣＶも必要だろ？」

「いやそうだけどさ……それこそ読み手さんの自由に想像して考えてもらった方がいいんじゃねえか？」

「そうかもしれないけど、実は緋鷺刀の方はイメージはあるんだよね」

「なるほどなぁ、だからもう片方にも作者の脳内イメージだけど付けたいって事か」

「そういうこと。だけどちょっと拙い」

「今度はなんだ？」

「神の方は外見イメージに引っ張られてる」

「おいおい、そりゃホントに拙いんじゃないのか？　パクリになっちゃうんじゃないかい？　タグにも追加しなけりゃならいんじゃないかい？」

「あくまでも脳内イメージだからな。まあ今回は表記しないでおこう。脳内イメージだしな」

「何やら逃げ道作ってるな。じゃあ発表してもらっていいか？」

「ウィッス！　では発表しますので下記をお読みください」

「一応これラジオ！　そういう発言禁止！」

・暁　神（あかつき　じん）

「自分の中の誇りだけは決して譲るな」

武士テーマ「真」

身長　１８５ｃｍ
血液型　Ａ型
誕生日　８月８日　獅子座
一人称　俺
あだ名　ジン　ジン兄　兄弟　神様
武器　なんでも　基本は拳
職業　川神学園２－Ｆ
家庭　孤児　川神院居候
好きな食べ物　百代の作った料理
好きな飲み物　オレンジジュース
趣味　人間観察　ものまね（声真似）
特技　百代を抑えること　周りを立てること
大切なもの　仲間　川神院の家族
苦手なもの　雨
尊敬する人　坂本竜馬（なんとなく）

風間ファミリーのナンバー2的な存在。

翔一不在時の代理キャップ。大和の参謀補佐。なにより仲間内で唯一、百代をコントロールできる人物。

ファミリー加入は百代と同時。故にメンバーは当時百代の同級生か上級生と思っていたため、その名残と仲間内の立場から百代と大和以外は「ジン兄」、大和は百代に強引に舎弟契約をされたため「兄弟」と呼んでいる。

赤ん坊の頃に川神院の門前に置き去りにされていた。置手紙により名前は本名だが戸籍上は孤児で、現在は川神院の居候。置き去りにされていた日が雨だったためか、今でも雨の日が若干、苦手。

百代をコントロールできるの言葉通り、精神面だけでなく戦闘面でも上回っており、その強さは別次元の言葉すら超越している。

泰然自若で物静かだが、融通が利かないわけではなく、自らの行った行為に誇りがあり、その結果に責任が持てるのならば、行き過ぎた行為でない限り大概は寛容する懐の深さも持っている。

・箪　緋鷺刀（たかむら　ひろと）

「信じ続ければいつかやり遂げれるよ」

武士テーマ「信」

身長　１６７ｃｍ
血液型　Ｂ型
誕生日　１０月２６日　蠍座

一人称　僕
あだ名　タカ　ヒロ
武器　日本刀
職業　川神学園１－Ｃ
家庭　両親とは死別　現在は叔母と暮らしている
好きな食べ物　うどん
好きな飲み物　烏龍茶
趣味　絵を描くこと
特技　家事全般
大切なもの　父の形見の日本刀
苦手なもの　高い所（高所恐怖症）
尊敬する人　父親　黛十一段

風間ファミリーの中で唯一の下級生。翔一、大和、一子と同じチームの最古メンバー。

実家は鹿児島だが、訳あって川神市に住む叔母の家に幼い頃から暮らしており、実家とはほぼ絶縁状態のため、家族は叔母だけといってもいい。その叔母の住むマンションが翔一の家の目の前だったため、小学生になる前から翔一たちと一緒に遊んでいた。素直で中性的な外見（ほぼ女顔と言っていいが）をしているため、よくからかわれるが、からかい過ぎると強制制裁が待ち受ける。

実家は名のある武家の末裔であり、本人も剣の才能はかなりのもので、川神院でもその腕は認められるほどのもの。普段はおとなしいが、刀を抜くと途端に凛々しくなる。

風間ファミリーの中では意外とノーマルな常識派。師岡と並んでグループのツッコミ役だが、性格と一番年下という立場から、あまり大声をあげてのツッコミはできない。

「以上がオリキャラ、暁神と篁緋鷺刀の設定です」

「なあ、名前の下にあったセリフはいったい何なんだ？」

「言いそうな言葉っていうか、設定した武士テーマにちなんだセリフ」

「なるほどね、ところで篁って身長も誕生日も黛と同じなんだな。これって分かってて設定したのか？」

「決まってるだろ。そういった共通点を作る事でお互いにある種の運命めいた何かを持たせてたかったんだよ。他に質問は？」

「暁の趣味のものまね（声真似）ってなんで趣味なんだ？　普通なら特技の方になると思うんだが……」

「そう、すげぇ声真似だぜ。あの青木〇治も真っ青なほどの声真似だ。だが本編には一切出す気はないし、あくまでも遊び程度にやるだけだから特技じゃなくて趣味にしたってわけ」

「特技のモモ先輩を抑えるって……暁にしかできない事だろ」

「そうだね。だから特技なのさ。ちなみに緋鷺刀の特技、家事全般は本編読んでたら分かると思うけど、凛奈と分担していたせいで得意になったってわけ」

「なるほどねぇ、これ以上詳しい設定はないのか？」

「ないわけじゃないけど、これ以上詳しいのは物語が全部終わった後だな」

「ネタバレが含まれるのか？」

「そんな事はないとは言い切れないかも。若干ネタバレ部分が無きにしも非ずな気がするような雰囲気を感じている」

「ずいぶん遠まわしで曖昧な言い方だなオイ……っと、もっと突っ込んで聞きたかったがどうやら時間が来たようだ」

「そのようだね」

「ではではみなさん、ＬＯＶＥかわかみ特別編、これにて終了になります。本編の方も楽しみに待っていて下さいね～」

「もうないかもね」

「お願いだから書いて下さい！」

「ところで聞きたいんだけど」

「何ざんしょ？」

「これってラジオでやる意味あったのか？」

「いくら貴方が作者でも番組の根底を否定するような質問はしないでね……つうかアンタ作者だろ！？　なんでアンタがそん事言うわけ！？」

「それじゃあ、さよ～なら～」

「おい無視して終わるなよ！」

ＰＶ５０万突破記念　オリキャラ設定（後書き）

もう少し詳しい設定はまた後ほど。

第６２話　軍師と策士、大和ＶＳ冬馬（前書き）

第６２話投稿。

第６２話　軍師と策士、大和ＶＳ冬馬

「ハァイエブリバディ。携帯の待ち受けを自分の写真にしてるナルシストはいないかな？　今週もラジオ番組ＬＯＶＥかわかみがはじまるよー」

教室のスピーカーから流れて来る、毎週火曜昼休み恒例の番組に耳を傾けながら昼食を取る。

俺も周りはいつも通りのキャップ、ガクト、モロ。今日はゲンさんが昼休みになるとすぐに教室を出ていったから兄弟も机をくっつけている。

クリスは今日もワン子と京の３人で食べている。なんだかんだいがみ合っているがワン子とは仲良くしていると思う。

他愛ない話をしながらラジオを聴く。

「パーソナリティーは２年でスキンヘッドの井上準」

「人生、純情一途桜花爛漫。３年の川神百代だ」

「なんか口上がおかしくないっすか？　まあいいや、最近さらに温かくなってきましたね」

「そうだな、今の私は人生で最高の春を迎えているぞ」

何やら姉さんがおかしい。

このラジオは姉さんの暴君ぶりをいかんなく発揮するものなのに、何だろうか今の姉さんは無邪気に遊ぶ子供のような口調になってい

る。

兄弟には昼休みなってすぐに説明はしておいたから驚いてはいないが、箸を止めて興味深そうにスピーカーに視線を向けて聞き入っている。

「今日は気分がいいから私が1枚目のメールを読んでやる。『小さい子が好きな準さん病院に行ってください』。ははは、お前リスナーからも突っ込まれてるな」

「病院か……小児科なら喜んで。あで！」

「次不当な発言したら骨外すぞ」

「あててて……ん？　ちょっと待って下さいね。どうやら今日になって大量に送られてきた質問があるようです」

その言葉と共にスピーカーから何やら紙を纏めているような音がもれる。

何だろう、何故か面白そうな事が起きそうで面倒くさい事が起きそうな、でも総合的に考える厄介事になりそうな予感がしてならない。同じ事を感じたのか兄弟も微妙な表情をしている。

「代表してこの子でいいかな。では読み上げますよー。『モモ先輩に質問です。昨日の下校時と今日の登校時、男の人と腕を組んでいたましたけどあれは誰ですか』。同じような質問が２００通以上来ております」

「おお、先週お前らが否定していた噂の私の彼氏だ。名前は暁神。

覚えておけよ～」

学園全体放送の番組で名前を呼ばれた途端、兄弟は頭を抱えて机に突っ伏した。

その直後――

ええぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！！

校舎全体を揺るがすような叫び声がそこら中から沸き上がった。

昨日のクリスとの決闘、今日のラジオでの姉さんの暴露、編入わずか2日で学園最大級の有名人になった兄弟。

クリス以外の風間ファミリーのメンバーが突っ伏した兄弟の背中を慰めるように叩いた。形だけの同情は示してやるよ兄弟。だがこれが姉さんの彼氏としての運命だと思ってくれ。

「暁神って言うと、昨日2－Fに編入してきた奴ですよね」

「何だハゲ、知ってたのか」

「ええまあ、ちょっとは。そうですか……モモ先輩の彼氏、本当にいたんですね。そいつに物凄く同情しますよ」

「おいハゲ、どういう意味だ？」

「どういう意味って、モモ先輩の彼氏なんてきっと毎日が拷問――ウッギャァァ！」

バイオレンスなラジオだったが、今は誰も聞いていない。

すでに教室前の廊下に人だかりができ始めている。きっとみんな兄弟の事を見に来たんだろう。だが兄弟は無視を決め込んで机に突っ伏したままだ。

教室まで入ってくるようなツワモノな生徒はいないみたいだから、俺たちもとりあえず様子見でいよう。必要ないかもしれないけど。それから一応兄弟を守るように周りを囲む事も忘れない。

「おい大和！　昨日のS組の女子がお前を呼んでるぞ」

そんな少し騒がしい昼休みを過ごしていると、廊下の人だかりを掻き分けてヨンパチが俺に声を掛けてきた。

「は？　昨日の女子ってあの賭場にいたアレか？　今度は何で勝負だよ」

「賭場じゃねえよ、屋上に来いってさ」

若干面倒くさかったから適当に答えた俺に、ヨンパチは天井を指さして言う。

屋上という事は賭け事ではないだろう。だがあんな世間知らずのお子様お嬢様がいったいどんな勝負を吹っ掛けて来るか少しだけ興味がわいた。

それに行かないでチキン呼ばわりされるのも嫌だ。

「ワン子、京。ついて来てくれる？」

「はいご主人様。あなたの安全バッチリガード」

「バトルになりそうならアタシにお任せ」

呼び掛けに答えて立ち上がるワン子と京。それに続いて兄弟も立ち上がる。

「俺も行くよ。半分は当事者だからな。場合によっては俺が引き受ける」

兄弟が来てくれるなら百人力だ。でも恐らくついて来る理由の9割はこの状況から抜け出したいからだろう。でなければワン子も京もついて来るのに、兄弟が同行する理由ははっきり言ってない。

みんなそれが分かっているから特に突っ込まず兄弟の言葉を受け入れたのだった。

「よく来たのじゃ！　その度胸は褒めてやる」

屋上に足を踏み入れると、そこには昨日泣いて逃げていった着物姿の女がふんぞり返って立っていた。

その虚栄に近い自信はいったいどこから来るんだろうね。

「それで、用件は何？　まさか告白？」

「なんで高貴な此方が下賤なお前に告白をしないといかんのじゃ！」

おお、物凄い勢いで怒鳴り返してきた。昨日の泣いた事はすっぱり忘れているようだ。

「今日は本格的に“決闘”を申し込むのじゃ！」

「余り乗り気がしないね」

「闘うのは此方ではない。葵君、頼んだぞ。こ奴をぶっ倒すのじゃ！」

こっちの言葉を無視してさらに他力本願かよ。本格的にダメなお嬢様の典型だなこの女。だけど今はそんな事はどうでもいい。

葵冬馬。常に学年成績トップの男。

我がままお嬢様の後ろにいた葵は、何やら優しく話しかけると衆人観衆の前にも関わらず我がままお嬢様を抱き締めた。そしてさらにその耳元で言葉を掛けている。

「何あの生物。腹が立つ」

どうやらプレイボーイという噂は間違いないようだ。京はああいったチャライ態度を取る男を物凄く嫌っている。

抱き締め終えた後も優しく笑みを浮かべた葵は、振り返りこっちに歩いて来る。ほんの一瞬だったが視線を俺の斜め後ろにいた兄弟に向けたが、何もなかったように戻し胡散臭い笑みを浮かべて目の前で止まった。

「やぁ、直江君。こうして話すのは初めてですね」

「そうＤＥＡＴＨね」

「２－Ｓの葵冬馬と申します。改めてよろしく」

「何度か賭場で顔は見てるね。直江大和、ヨロシク」

お互いに挨拶を終えると周囲が騒がしくなる。特に女子たちが色めき立っている。確かこいつキャップやゲンさんと並んで『イケメン（エレガンテ）四天王（クアットロ）』なんて呼ばれているんだっけ。

「私は女性が大好きですが、男性も好きですから」

「聞いてないし知りたくもないわそんな事！」

穏やかに笑っているが物凄く不気味だぞこいつ。だいたいの奴はひと言ふた言話しをすればどんな奴か予測できるのだが、まったく本性が掴めない。

「直江君には恨みはないですがこれも運命。昨日彼女が負けた倍の金額で私と勝負して下さい」

「クラスメイトの仇討ちで決闘というわけね。何で戦う？　肉弾戦なら代役が行くぞ」

俺の言葉に脇にいたワン子と京が1歩前に出る。

「大和の剣！　川神一子！　大和の敵を打ち払う！」

「大和の鞘！　椎名京！　大和の剣を受け入れる！」

アホな事をいう京の頭をはたく。何だそれは。普通は盾だろ。

京の言葉に隣にいたワン子は苦笑い、後ろにいる兄弟は呆れたような溜息を吐く。そんな俺たちのやり取りを胡散臭くない穏やかな笑みで見ていた葵だったが、すぐに元に戻り声を掛けてきた。

「私自身、頭脳労働派ですから」

「そこらへんは話が合いそうだな」

「話が合うと言われると少しときめきますね」

「大和、目の前の男から変態の匂いがする」

どうやら同種の匂いを嗅ぎ取ったようだ。だが京の言葉に何も返さない。それは俺がお前を変態だと思っているし、言葉を返して変に突っ込まれたらややこしいからだ。

そんな事を考えていると昼休み終了のチャイムが鳴った。

「昼休みが終わったな。放課後またここで。きちんと決着をつけよう」

「はい喜んで。受けていただきありがとうございます。しかし時刻と場所を決める……まるでデートの約束みたいですね」

既に精神的な攻撃が始まっているのだろうか。的確に怖気の来る言葉で胸を抉ってくる。顔が歪みそうになるのを懸命に堪える。

「愛を込めて『大和さん』とお呼びしていいですか？」

「やめてくれ、せめて直江さんで」

本当に本性が掴めない男だった。

葵冬馬。２－Ｓに所属。
川神市最大の規模を誇る葵紋病院院長の１人息子。
成績は学年で常に１位。全国模試トップの常連で常に１０位以内。
以上の情報から学園でも指折りの秀才と言っていいだろう。しかも彼は賭場で勝ち続けているし、１度は勝負をしてみたかった。

「うん。イケメンで優しいし、学校で３本の指には確実に入るモテモテ君だよ。イケメンだし」

「イケメンって単語、２回出てきたよね今」

小笠原さんからの情報にモロが呆れたように呟いた。確かに出てきたけど今はどんな情報でもいいから知りたかった。
後ろでヨンパチやガクトがなんか言っているが今は無視。

「小笠原さんも葵冬馬だったら付き合ってもＯＫ？」

「超ＯＫだよ。あんな物件そうそうないし」

今の女子高生は男を物件扱いするんだな。少し勉強になった。だがその言葉を聞いて黙っていない奴がいる。スグルだ。

「ふん。男を物件扱いとは……これだから立体女は困る。一次元違うだけで堪ったもんじゃない。レディ・ビッチが！」

「キモい欠陥住宅がなんか言ってるんですけど」

遠距離での嫌味の言い合い。俺を挟んでのやり取りでなければいい

んだけど勘弁してほしい。時間が無いんだ今は。

「おいおい。言い争いは――」

「クリス、大丈夫だから」

余計にややこしくなる前にクリスの参戦を阻止しておく。

その後も大した程ではなかったが、小笠原さんからの情報で何となく人物像が見えてきた。

はっきり言えば俺と同じタイプだ。ならば俺が俺を倒す計画で策を練ればまず負ける事はない。学年１の秀才も恐るるに足らずだ。

友達にも声を掛けるという小笠原さんにお礼を言って作戦のための行動を開始する。

「あと５分で次の授業だぞ」

「５分で結構いけるさ」

声を掛けて来る兄弟に答えながら、まず誰に声を掛けるべきか考えながら俺は教室を出たのだった。

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

ｓｉｄｅ　椎名京

「ジン兄は動かないの？」

教室を出ていく大和を一緒になって見送るジン兄に声を掛ける。

たぶんあの葵冬馬は大和と同じタイプの人間だから、勝負に勝つための仕込みをするにしても被るところが出て来ると思う。そうなると条件のいい方が仕込みに有利。

今回、大和はたぶんお金を使う。そう考えると病院の院長の1人息子のあっちの方が有利になる可能性が高い。

でもジン兄が動けば最悪互角にする事は出来るかもしれない。私はそんな期待を込めてジン兄に言葉を掛けたのだ。

「いや、俺は何もしない」

「なんで？」

「俺はまだ編入して2日目だぞ？　話が出来るような顔が無いし、今はしたくない」

げんなりして言うジン兄を見て、そう言えばモモ先輩の爆弾発言があったのを思い出す。今も廊下は人だかりが出来てひと目ジン兄を見ようと生徒がごった返している。

「それに、いい加減ヤマもフォローされるのは嫌だろ。あいつにもちゃんと誇りがあるんだ。それを傷つけるのは俺もしたくない」

そう言ってジン兄は安心させるような笑顔を浮かべて、私の頭を撫でたのだった。

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

side　直江大和

放課後。決闘のため再度葵冬馬と向かい合う。

小笠原さんが言い触らしたのか野次馬が多い。だいたいがF組とS組の生徒たちだが、他のクラスや他学年の生徒も集まっている。ただちょっと気に入らないのは葵の後ろは女子で固められているのに、俺の後ろには仲間たちがいるが殆ど男しかないな。

なんだこの構図……まるでモテる男に嫉妬する男がひがんでるみたいだ。

「賑やかな勝負になりそうですね……では決闘です」

「受けたぜ」

地面に置いた葵のワッペンに、俺が自分のワッペンを重ねるように置く。

決闘の成立に声援が湧き上がる。ただし俺の声援は野郎の嫉妬剥き出しの応援で、葵の声援は女子の期待の籠った応援。なんか早くも負けた気分だ。

この学校でこんな露骨な取り巻きがいるのも、姉さんとこいつぐらいなものだろう。後々は兄弟とヒロにも出来そうだが。

「頭で闘うとして、何で決闘しましょうか？　一応、新品のトランプかサイコロは持って来ましたが……」

「ギャラリーには分かりにくい。観客が多いんだから分かり易くてみんなで楽しめる勝負がいいだろ」

相手が用意したものを使っての勝負なんて負けるに決まっている。準備いいように言っているがあからさまに怪しすぎる。

周囲を見回しながら何か使えるかを探す。といってもこれも仕込みだから大した意味はない。だが自然に決めたように見せなければならないから、無駄な事だがとても大事な動きだ。

その自然な動きのままグランドに視線を落とす。放課後という事で陸上部が練習しているのを指さしながら葵に提案する。

「今、陸上部がタイムを計ってるだろ。あの最後の組に走る４人の中で、誰が１着になるか賭けないか？　ギャンブル好きなら問題ないと思うけど」

「なるほど。簡易的な競馬ですね……面白そうですが、グラウンドには他にも人がいます。陸上部以外でも問題ないのでは？」

既に駆け引きは始まっている。主導権を取られるわけにはいかない。

「１番盛り上がりそうだし、何より１番結果が早く着く。他に何か提案があればどうぞ」

「……直江さんの言う通りですね。構いません、それでいきましょう」

競技は決まった。適当に決まった事に慌てている生徒もいるけど、競馬というのは運で決まるものじゃない。出走直前の馬の状態を見るように、賭けの対象となった走者４人のテンションなどを観察すれば、正解率を上げる事が出来る。

しかも４人が走るのは次の次、しばらく観察する事も出来る。

「あの４人、Ｂ組の人たちだね。誰が速いかなんてもとから４人のタイムを知っていれば有利になるよね」

「ああいうの、タイム似たもん同士が走らねーか？」

モロとキャップが後ろで走る人間の組み合わせについて話しているが、実際俺にしてみればそんなもの関係ない。

「私は１番手前のイガクリ頭の人に掛けます」

「俺は１番奥の髪束ねてるロンゲを選ぶ」

上手いこと分かれた形になったがこれにはホッとする。同じ奴を選ぶとせっかくの仕込みが駄目になってしまうからな。

賭け対象の計測レースが始まった。

俺が賭けたロンゲの奴が１番前を走っている。だがそれも当たり前だ。今走っているあいつらは買収に露骨に弱いから出来レースで頼む、とさっきの休み時間に工作済み。打ち合わせでロンゲが勝つと決まっている。

葵ならこの競馬じみた決闘に乗ってくれると思っていた。

「俺の勝ちだな、葵冬馬」

確信をもった言葉に、葵は口端を歪めた。

「――それは、まだ分かりませんよ」

「おい、あのロンゲ急に速度落ちたぞ」

「ちょっ、イガグリ頭に抜かれちゃったよ！」

何！？

ガクトとモロの声に慌ててグランドを見ると、葵の賭けたイガグリ頭が1番にゴールした瞬間だった。

「俺が負けた……」

いやでも待て、打ち合わせは完璧だったはずだ。それなりの金も積んだしあいつらも納得したはずだ。だけどそれでも、ああいう欲で動く奴が俺を裏切ったって事は……

「危ない危ない、ひやっとしましたよ」

まるで勝ちを拾ったかのような少し嬉しそうな声を上げる葵。しれっと何ともないように振る舞っているけどこい……

「私の勝ちですね」

そう言った葵が俺に顔を近付けて耳元で囁く。

「仕込みに行ったら先手を打たれていたので驚きました。おかげで当初の予定より出費がかさみましたよ。直江さんより好条件を出さないといけませんからね」

やはりさらに上の欲に流されたって事か。だがこいつ、単なる金持ちの坊ちゃんじゃない。仕込みをしているくせに陸上勝負に待った

を掛け俺の反応を見て楽しんでやがった。いい性格をしている。

「面白い勝負でした」

「今回は見事にやられたよ」

スッと手を上げると、グラウンドで柔軟をしている2人組や、走り高跳びを続けていた男、それを見ていたテニス部の男も合図に気付き、がっかりな顔をした。

自分たちが賭けの対象にならなかったので報酬を貰えないと分かったのだ。

「ふふふ」

それを見ていた葵がいきなり笑い出した。どうやら俺が陸上部以外にも仕込みをしていた事に気付いたようだ。

元より大がかりな賭けにするつもりだった俺と違い、葵はトランプややサイコロを用意したせいで仕込みをする時間が短かったはず。

それでも1番最初に仕込んだのが俺と同じ陸上の計測出来レース。

「私と貴方は近しい考えを持っていますね、直江さん」

「……そうだな、葵冬馬」

この反応、やはりトランプとサイコロにも仕掛けがあったな。

「いつかリベンジさせてもらうぜ」

「楽しみです」

次に勝負する事になっとき、必ずやり返すと宣言した俺を、葵は楽しそうな、そして嬉しそうな笑みを浮かべて見る。

お互い同族嫌悪なんて感情は抱かない。

全く自分と同じ思考を持つ存在。言い換えれば鏡合わせの自分自身だ。

さっきの休み時間に感じたちょっとした高揚感。自分が自分の策を持って自分を倒す、それがまさに現実になろうとしている事に、俺はえもいえない興奮の覚えるのだった。

第６２話　軍師と策士、大和ＶＳ冬馬（後書き）

あとがき～！

「第６２話終了。あとがき座談会、司会の春夏秋冬　廻です。今回のお相手は――」

「皆さんこんにちは、葵冬馬です」

「今回の勝者です。久し振りだな」

「ええ、本当に久し振りです。この間は準がお世話になりましたね」

「えいえい。さて今回のお話ですが原作通りに君の勝利に終わったわけですが」

「何か含みのある言い方ですね」

「まあね、本当は神が動いて引き分け、あるいは大和の勝ちにしようかと思ったんだけど、さすがにそこまでやっちゃうと大和の成長にならないから原作のままにしたんだよ」

「私は助かったと考えていいのでしょうか？」

「どうだろうね」

「それで、私と神君の再会はいつ頃に？　ユキと準はすでに挨拶を済ませていますからね」

「とりあえず次回で」

「しかし、言ってしまっていいのか分かりませんが、私とユキが原作と違う心境ですから完全に『竜舌蘭ルート』がない状態ですけど何か考えが？」

「一応はね」

「それは？」

「さすがにそれは言えないね。でも少しずつ物語に絡ませていこうと思ってる。次回にも少しだけど登場させるつもり。あくまでもつもり」

「登場しないかもしれないって事ですね」

「逃げ道作っとかなきゃね」

「小賢しいだけですよそれは」

「頭のいいやつに言われるとマジで心を抉られる言葉だね……」

第６３話　再会の２人、決意と葛藤（前書き）

第６３話投稿。

第６３話　再会の２人、決意と葛藤

ｓｉｄｅ　風間翔一

「……おいおいおい」

「ゲームなら全員の印象値マイナス１だぜ。勝ったら１枚絵出てたかもしれないのにな？」

「結局負けとか。超カッコ悪いんですけど？」

「がっかりだぜ軍師さんよ。俺は信じてたのに」

「何これ、負けた瞬間にコレってめちゃくちゃ酷くないか？」

おーおー。ガクト、スグル、チカリン、ヨンパチの容赦ない言葉が大和に突き刺さってるぜ。これが俺たち２－Ｆのいつものやり取りで俺たちらしさだが、さすがに今回は大和もへこんでるな。ジン兄とモロに背中を叩かれて慰められている。

しゃあねーな。ここは一丁リーダーたる俺が仇を討ってやるか。それに負けってのはやっぱり気分が悪いしな。

「それでは私たちはこれで」

「――待てよ」

屋上から出ていこうとする葵たち声を掛ける。気分良く帰りたいんだろうがそうは問屋が卸さねーぜ。

振り返った葵を指差す。これから起こる勝負が楽しみで笑いが止まらねぇ。

「大和を倒すなんてやるじゃねーか。俺とも遊んでくれよ」

「キャップ」

後ろからの大和の声に手を軽く振って応える。

「俺と大和は友達なんでな。仇討ちだ」

「私が出てきたのもクラスメイトの仇討ちが目的……いいでしょう、ならば今1度お相手しましょう」

俺の言葉に少しだけ何かを考えていた葵だったが、小さく笑顔を浮かべると自信に満ちた声で答えて来る。相当自信があるようだが、それでビビる俺じゃねーぜ。

「待った！　若が2度も闘う事はねぇよ。昼休みの怪我は何とか治ったしな、俺がやるぜ」

だが思わぬ乱入者が来やがった。

葵といつもつるんでいるハゲ……確か井上とか言ったか、そいつが俺と葵の間に割り込んできやがった。

やる気を削がれそうにもなったが俺と同じで友達の代わりにやるってんだ、受けてやろうじゃねーか。

「え？　まさか決闘2連戦？」

「いいぞいいぞ！　2タテして2－Fの自尊心を打ち砕くのじゃ！

高貴な此方も大満足じゃ！」

後ろからチカリンの驚きの声と、向こうから大和と葵の勝負のきっかけを作った着物女の声が聞こえてきた。
しっかしあの女うるせーな。自分じゃ何もしてねぇのになんで偉そうにしてんだ？
でもまあ今はいいか、勝負に集中しねーとな。

「風間、確か足速いんだったよな？　噂は聞いてるぜ」

「ああ。逃げ足となるとさらに凄いぜ」

俺は自由な風だからな。走る事に関しちゃあそれなりに自信がある。
まあモモ先輩とかジン兄とかには追い付かれるけどな。

「俺も自信あるんだよ。足で勝負しようぜコラァ」

「乗った！　報酬は大和の負けた分って事でどうだ？」

「それは俺が稼いだもんじゃねーしな。半額ってところだ」

大和の仇討ちだから負けの分を取り返してやろうと思ったけど、どうやら上手い具合にはいかねーようだな。さてどーすっかな。

「キャップ、俺の負けは俺が取り戻す。それでいいぜ」

考えている俺に大和の声が掛った。考えれば俺が勝てばきっかけになった勝負の勝ちも入れると大和はトータルで損はしてないな。ふん、なら問題ねーか。

「分かった、とりあえず半分取り返してやる」

「またも決闘の成立じゃ！」

着物女の声に俺たちの周りにいた奴らの歓声が上がった。

いいねいいねこの感じ！　やっぱ勝負事の始まりこんなテンションじゃなきゃな！

「じゃあ下に行こうか。グラウンド借りようぜ」

「まあ待てよ。ここから校門見るよな？」

屋上からグランドに行こうと促した俺を止めて、ハゲは校門の方を指さして問い掛けてきた。言われる通り確かに見える。

「ああ。くっきりとな」

「こっからスタートして校門をゴールにしないか？」

なるほどね。ただ走るだけじゃなく一種の障害物競争みたいなもんか。それなら普通にグラウンド走るよりよりも面白そうだ。

「階段を駆け下りるの超速いんだぜ俺。小学生の時それやって保健室に運ばれた時さ、『お前5段飛ばしの準だ』って保険医に称号貰ってっから」

「保健室に運ばれるようじゃ駄目じゃん」

モロのツッコミが入るけどこいつ面白いな。しかも自信満々に提案してきた意味が分かったぜ。勝てる見込みがあるからって事だろう

が、俺がそんなもんで負けるかよ。

「いいよそれで。やろうぜ」

俺が受けたと事で競技が決まりましたしても歓声が上がる。着物女が決闘の内容を職員室に伝えに行くようだからそれまでに準備運動だけしておくか。

「わざわざ相手が得意な種目で受けなくてもいいだろ」

「自信満々なほど負かした時に気分がいいからだろ、キャップ？」

軽く屈伸していると不安そうな大和の声が掛ってきたが、俺の気持ちを代弁するかのようにジン兄が答えた。

さすがジン兄。よく分かってるぜ。

そうしている内に校内放送で決闘開始の合図と一緒に、邪魔にならないようにアナウンスが流れた。教師たちも対応早いじゃねーか。だがこれで思いっきりやれるって事だな。気合が入るぜ。

「さーて！　じゃあやろうぜ！」

「悪いが、Ｓ組の連勝で終わらせてもらう」

そう言うとハゲは俺らのクラスの委員長のもとに歩いて行った。何する気だあいつ？

「あの、２－Ｆの委員長」

「はい？　何ですか」

「俺の活躍、ぜひ見てて下さい」

何だあいつ、敵のクラスの生徒に声援をお願いするなんて面白れーことすんな。大和もモロも他のみんなも呆れてるぜ。ホントおかしい奴だ。

「それでは位置について」

どうやらご丁寧にアナウンスでスタートの合図を送ってくれるらしい。それに乗って俺とハゲは不公平のないように屋上の中央に並ぶ。チラリと横を見ると自信満々なでさらに気合が入っている。勝つ気満々なんだろうが、度肝を抜かしてやるからせいぜい今のうちに浸っておきな。

「よーい……どん！」

「おおおりゃあぁあ！　ロケットスタートォォォ！　階段５段飛ばしの連続を見せてやるぜ！」

合図とともに凄まじい勢いで屋上の入口へと駆けていくハゲ。さらに叫びながら校舎の中へと消えていった。物凄い気合いだなホント、ありゃ言うだけはあるぜ。

「おーおー、確かに速いじゃんあのハゲ」

俺はその場から動かずに見送った。

「何してるさキャップー！　早くいかないと！」

「諦めたのですか？」

早く行けば勝てるってもんじゃないぜモロ。諦める？　この俺が？
馬鹿な事言うんじゃねーよ葵。風ってのはな誰もが思ってもみない所に吹くんだぜ！

「階段から下りればいいなんて単純思考、それでは風のように自由な俺には勝てないぜ！」

俺は入り口とは逆方向に走っていく。その先にあるのは落下防止のためのフェンス。だがそんなもので俺の自由を止める事は出来ないぜ！

「俺は……跳ぶぜっ！！」

躊躇いなんかない。足に力を入れるとフェンスを飛び越えて一気に飛び降りると、１番近くにあり１番大きい木に飛び移る。
背中の屋上が何やら騒がしくなってるがそんなもん知ったこっちゃないね。
飛び移った木の幹を滑るように下り地面に着地する。ここまでショートカット出来きたら圧勝だが手を抜くつもりはない。

「えっ！？　なんであいつがもうあんな所に！？」

生徒玄関から出てきたハゲの声が遠くから聞こえ、全力で追いすがってくるのを気配で感じるが、もう遅すぎるぜ！

「強風暴風台風突風旋風烈風疾風怒濤！！　風をとらえられるモノなどこの世にありはしない！」

そのままゴール地点の校門を突き抜ける。
おおっと、そういやあ今日はバイトの日だったな。面倒くせーからこのまま行くか。大和に鞄と報酬の受け取りをメールで頼めばいいし。

よっし！　そうと決まれば突き進むぜ！

side　out

side　暁神

兵どもが夢の跡――程ではないが、夕闇に差し掛かった屋上は放課後直後の喧騒が嘘のように静まり返っていた。

モモを何とか説得して1人残ったが、そのお陰でヤマが弄くられるだろう、負けた事をイジってやると言っていたが……まあ何とかするだろうヤマなら。たぶん。

そんな事を考えながら屋上で待ち続ける。
約束をしていたわけじゃない。でもたぶんここで待っていればあいつは来るだろうと思っている。屋上なら決闘2連戦が終わった後だからポッカリと空間が開くので人に見つからずに会うにはちょうどいい。

別に悪い事をしようというわけじゃない。たぶんあいつは他人に見つかりたくないんだと思う。その思いを汲んだからこそ今ここで待っている。

「お待たせしてしまいましたか？」

「いいや、１０分も待ってないさ」

後ろから掛けられた声に小さく笑みを浮かべて振り返る。そこには同じように小さく穏やかな笑みを浮かべた姿があった。

「お久し振りです神君。先ほどはご挨拶できなくてすみませんでした」

「いや、いいさ。こっちも挨拶しなかったからな。でも本当に久し振りだな冬馬」

２度目の出会いの時のようにお互い右手を差し出して握手をする。少しの間だけお互い目をじっと見た後どちらからともなく手を放し、俺はフェンスに背を預け空を見上げ、冬馬はフェンスに肘をつきグラウンドを見下ろした。

「行方不明とニュースで聞いた時は驚きましたが、ご無事だったんですね。昨日編入してきたとユキと準から聞いたときもまた驚きましたよ」

「それは悪かったな。特に驚かせるつもりはなかったんだけどな」

どこか責めるような口調の冬馬の言葉に、おどけるように返す。実際驚かせるつもりなんてなかったのは本当だ。編入に関しては鉄心さんに言って欲しいぐらいだ。

だけどおかげでかしこまって話をする雰囲気じゃなくなったのはありがたかった。とりあえず事件後の経緯を簡単に説明しておく。

「記憶喪失だったんですか……波乱万丈な人生ですね」

「全くだ。たまには穏やかに過ごしたいね」

「それはあなた次第ですが……彼らの仲間で、さらにモモ先輩の彼氏ならばそれは当分無理というものですよ」

「分かってるんだから突っ込むなよ。別に悲観してなんかいないし、楽しんでるぐらいだからな」

お互い声を出して笑う。

変わっていない。このどこか問答めいた会話の応酬が、初めての出会いと再会の時の事を懐かしく思い出させてくれる。

少しの間、他愛のない話をした後で俺は思っていた事を切り出した。

「コユキの事……ありがとうな」

「さて、何の事ですかね？」

「とぼけるなよ。コユキの心、約束通りちゃんと守って育ててくれた事、感謝するよ」

あの事件の後コユキが養女になると分かった時、俺が冬馬に頼んだ事は1つだけ。それが『コユキの心を守ってちゃんと感情を育てること』。

本当なら俺がやりたかった事だったけど、コユキが養女になって冬馬の近くにいる事を選んだのだから、その役目は俺じゃなく冬馬なんだと思い託したのだった。

「俺は自分が行方不明になった事が、コユキに心に悪影響を与えたんじゃないかと思っていた。でも再会した時のコユキは笑ってたけ

どちゃんと泣いていた」

言葉を切り視線を向けていた冬馬と目を合わせる。真剣なその瞳に俺も真剣な思いで言葉を紡ぐ。

「それを見て俺は安心したんだ。コユキはちゃんと戻っている。あの時の壊れかけていた心じゃなく、ちゃんと人としての心が育っていると確信したんだ」

「それは私だけの手柄ではありません。モモ先輩や篁君のおかげでもあります」

「そうかもしれない。でも1番の功労者はお前だと俺は思っている。だから“ありがとう”な」

改めて送った謝意の言葉に、冬馬は苦笑を浮かべて息を吐いた。そして俺と同じようにフェンスに背を預けると空を見上げた。

「本当にどうして、神君の言葉は私の心に簡単に沁み込んでしまうんでしょうね」

右手を胸に当て目を閉じて呆れたような、でもどこか喜びを含ませた声音で呟く冬馬に視線を送る。その表情はどこか泣き出してしまいそうな子供のように見えた。

だけどそれもほんの一瞬で、すぐにいつもの穏やかな笑みが顔に浮かんでいる。

あの一瞬の表情はいったい何を意味するんだろうか。どことなく心の奥底で悲痛な決意をしていると感じ取れるからあんな表情に見えたのだろうか。

冬馬は俺に対して懺悔したがっている。そんな気がした。

「冬馬……」

「はい、何ですか？」

思わず声を掛けたが何を言えばいいんだろうか。
俺は冬馬がいったい何に対して決意したのかを知らない。冬馬も俺に話すつもりはないんだろう。それなのにいったいどんな言葉を掛けられるというんだ。

冬馬の決意に関して俺は完全な部外者なんだ。

「そろそろ『神君』って呼び方やめないか？　今の俺には似合わないだろ」

聞く事は出来ない。思っていた事とは別の事を口にしてしまった。
冬馬の方も思ってもみなかった言葉に少しだけ吹き出していた。

「それもそうですね。ではなんと呼びした方がいいでしょうか？」

「呼び捨てで構わないって前にも言っただろ」

「それは魅力的ですけど準と被りそうですから」

そういえば井上の名前は『じゅん』だったな。そして俺が『じん』。
確かにややこしくなりそうだ。でもそうなると候補は絞られるな。

「私も『ジン兄』と呼んでもいいですか？」

「それだけはやめてくれ！」

速攻で否定する。留学してきたばかりのクリスにまで呼ばれているんだ。しかも『ジン兄殿』。余りの事に泣きたかったけど苦笑しか返せなかった。もうこれ以上同い年に『兄』呼ばわりされたくない。結局、いまさら苗字で呼ぶのも他人行儀という事で、今まで通りの『神君』で呼ぶ事に決まった。

話題を変えるための苦し紛れの発言なのになんで俺は疲れてるんだろうか。

疲れた溜息を吐く俺を見ていた冬馬は制服のポケットから携帯を取り出した。恐らくマナーモードにしていたんだろう。

「ユキからの呼び出しですね。『いい加減に帰るよ』だそうです」

携帯を操作しながら苦笑を浮かべてメールを読み上げる冬馬を見て、俺を改めて空を見上げる。話し始めた時は夕闇だったが、いまでは完全に日が沈み部活動をしていた生徒も後片付けに掛っていた。どうやら思ったより時間が過ぎていたようだ。

「積もる話はまだまだあるけど、今日はこの辺で解散するか」

「そうですね。いつまでも貴方を拘束しておくとモモ先輩が怖いですからね」

軽口叩く冬馬の肩を小突く。それに対して肩をすくませた冬馬は持っていた携帯を仕舞い直すと、寄りかかっていたフェンスから離れ屋上の入口へ歩みを進めた。

顔を見なければ言えるかもしれない。そう思いその背中にさっき掛けられなかった言葉を掛ける。

「冬馬、お前が何をしようとしているかは分からないが、決意したのは感じている。俺が口を挟む事じゃないかもしれないが……困った時の愚痴ぐらいは聞いてやるよ」

俺の言葉に体を震わせ立ち止まった冬馬だったが、大きな息を吐き緊張を和らげると、振り返らなったが苦笑を浮かべていると分かる口調で答えた。

「そうですね。その時になったら存分に愚痴を聞いてもらいますよ、神君」

そう言い残し小さく手を振った冬馬はそのまま校舎の中へと消えていった。

ああ言ったのだから、何かあった時の相談はしてくれるだろう。核心には触れる事は出来ないだろうが、少しは力になれかもしれない。

そんな事を考えながらポケットの中で激しく揺れる携帯を取り出す。モモからのメールだと確認した俺は小さく息を吐き携帯を操作しながら屋上を後にしたのだった。

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

ｓｉｄｅ　葵冬馬

新しく手に入れた情報を、今までの情報と照らし合わせながら、私

は屋上での神君の別れ際の言葉を思い出していました。

たった数分間言葉を交わしただけなのに、私の胸の中の決意を見抜くなんて本当に彼は凄い人です。ユキの言う通り、彼は私にとっても『ヒーロー』なのかもしれません。

でもだからこそ、私たちの問題に彼を巻き込むわけにもいかないし、いくら本人が決意したからといっても、彼から託されたユキを巻き込んでしまった事への罪悪感も感付かれるわけにはいかないのです。

彼に示してもらい、彼に勇気をもらい、彼に導いてもらい、そして何よりも1番大切な存在を手にするきっかけすらもらった私が、これ以上神君に頼るのはおこがましすぎます。

だからこの問題は私の手で決着をつけなければならないのです。

「根を詰めすぎるなよ若」

いつの間にか後ろに立っていた準が手に持っていたティーカップを机の上に置きました。どうやら気付かないほど考え込んでいたようです。

「そうですね。準の意見も聞きたいですし、少し休憩にしますか」

持っていた書類を準に手渡し、私は置かれたティーカップを手に取り喉を潤す。中の紅茶は私が1番好きな味。どうやらユキが淹れてくれたもののようです。

「おい若……これって」

「ええ、まだ確かではありませんが、信憑性は高いと思われます」

「マジかよ……」

信じられないといった準の言葉に私は首を振って答えます。たったそれだけで私の言いたい事が分かってしまう準は、悔しそうに顔を歪めると眉間を抑えて顔を伏せました。

私には準の葛藤が手に取るように分かります。それは私も感じた葛藤と同じものだからです。

暫く顔を伏せていた準は、諦めたようなそれでいて決意したような大きな息を吐くと、私に向かって言葉を掛けてきました。

「若……でもこいつは」

「ええ、川神市のお偉いさんですね」

「とうとうここまで来ちまったってわけね」

「今ならまだ後戻りできますよ準？」

試すような、でもどこか期待の籠った私の問い掛けに、準は頼もしい笑みを浮かべました。

「人を試すのはやめてくれ若。どこまでもついて行くって言ったろ？」

「そうでしたね……ありがとうございます、準」

力は着々と蓄えられています。でも立ち塞がった壁を越えるにはまだ足りません。もう少し力を蓄える必要がありますね。

あの日、貴方に示してもらった道で私は私の思いのまま突き進みます。もしこの道の果てに何があろうとも、私は決して後悔しません。だから例えどんな状況になっていようとも、この道の果てにたどり着き全てが終わった時でも、私は貴方と『友』である事を誇りに思っていてもいいですか？

神君。

第６３話　再会の２人、決意と葛藤（後書き）

あとがき～！

第６３話終了。

今回のお話、キャップと冬馬の視点を入れてみましたが、どうでしたか？

難しいですねこの２人。

１番心配なキャップらしさは表現出来ていましたか？

そして冬馬視点。

はてさて、何が起こるのやら……原作知ってる人は分かっちゃうかな？

どのように冬馬たちの話が展開するかは今後のお楽しみで。

では次投稿もよろしくお願いします。

さて、今回座談会形式にしなかた最大の理由を発表します。

今後の展開を考えている中で、物語にそれなりに関わるオリキャラを２人出すことに決めました。

いつ登場するかはまだ未定で、おそらく結構終盤の方になります。
そしてそのオリキャラ1人の名前を読者の皆様に決めて頂きたいのです。
（もう1人はすでに決まっていますので）

候補は3つ

1．御神　渚（みかみ　なぎさ）
2．逢逆　刻（おうさか　とき）
3．簒　臣屠（かがり　じんと）

以上の3択から『これがいい！』というものを選んでください。
物凄いDQNネームですが気にしないでください。
ちなみに設定を少しだけ。

・男
・頭がいい、どちらかといえば策士タイプ
・川神学園卒業生・現在大学1年生
・結構いいところのお坊ちゃん
・風間ファミリーとは○○する

今のところ明かせる設定は以上です。
集計結果で1番多かった名前で登場させます。
他力本願になってしまいますが、よろしければご協力お願いします。
活動報告の方にも同じ質問をおいております。

第６４話　休日、それぞれの過ごし方（前書き）

第６４話投稿。

第６４話　休日、それぞれの過ごし方

――２００９年　４月２９日　水曜日　ＡＭ８：００――

ｓｉｄｅ　直江大和

今日は２９日。祝日。ゴールデンウィーク突入。

体内時計が平日のままのせいか、つい朝起きてしまったがまだまだ眠い。

意識半分ぼうっとしながら廊下を進むと、中庭にてクリスと遭遇。

朝から鍛錬なんて元気がいいな。運動すれば頭がクリアになるって言ってるし、それもいいと思うけど今はやる気が出てこない。

覇気がないって言われても仕方ない。俺は武闘派とは違うのだ。それに昨日は夜遅くまで勉強していた。これは本当だよ。

それに休みの日をどう過ごそうがその人の自由だ。そう言うとどこか納得しないような表情を浮かべたクリスだったが、それ以上何も言わず外に出ていった。

未だに刺々しいドイツ娘。思想の違いは実に埋めにくい問題だ。

寝直そうと思って布団の上で寝転がっていたが、逆に目が冴えて眠る事が出来なかった。仕方ないので朝シャンでもして本格的に目を覚ます事にしよう。

以前の事故を鑑みて脱衣場の前で扉をノック。思った通り散歩に行っていたクリスが汗を流すために中に入っていた。

俺が声を掛けた事でクリスもこの前の事故を思い出してしまったのだろう。少しうろたえながらも怒気の籠った声を上げた。

仕方なく扉から離れ廊下でこの前の事件で見てしまったクリスの姿を思い浮かべる。だって俺も男だもん。いやしかし、白くてすらっとした綺麗な体だったな。

そんなふしだらな思い出に浸っているとまゆっちが声を掛けてきた。挨拶のあと何を考えていたかを問い掛けられ、咄嗟に日本の行先を考えていたと嘘を言うと信じてしまった。
しかもコンビニに行くから何か必要なものはないかと、役に立ちたいオーラを持って聞いてきたので思わず漫画雑誌を頼んでしまった。

役に立てるのが嬉しいのだろ、意気揚々と出ていったまゆっちは驚くべき速さで帰ってきた。

5分も経ってないんだけど……大概この子も規格外だね。しかも買ってきたのは違う雑誌。しかも俺が待っているからと頼んだ分だけを買ってきて自分はもう1度行くと言う。

いい子なのは間違いないけどこれじゃあ友達とは違う気がするんだよね。でも嬉しそうなまゆっちにそれは言えない。
とりあえず、余り気を使わないようにと声を掛け、もう1度コンビニに向かうまゆっちを見送った。

その背中を見ながらクリスとまゆっち、新人2人は果して仲間たちと上手くやっていけるかなと思い悩む俺だった。

side out

side　川神一子

目の前で繰り広げられている攻防を、ジン兄に言われた通り何も考えずにただひたすらに見続ける。

お姉様の放った左蹴り上げを鼻先ギリギリの紙一重でかわすジン兄。その勢いのまま今度は踵落としを繰り出すお姉様だったけどジン兄はまたしても紙一重でかわす。

ジン兄は全く動いているように見えないのにお姉様の攻撃を次々に、まるで羽毛のようにかわしていく。

あれも防御の技術なんだと思うんだけど、やっぱりジン兄は凄いな。あんな事たぶんお姉様も出来ないんじゃないかしら。あ、お姉様の場合は出来てもやらなさそうね。

手合わせの展開は一方的、お姉様ばかり攻撃してるけどジン兄はクリーンヒットどころか1度も触れさせてもいない。
お姉様の攻撃はアタシでもギリギリ見えるぐらいの速さなのにジン兄は目をつぶっている。それなのにお姉様が触れることすら出来ないなんて凄すぎるわ。お姉様も楽しそうに笑っているし。

それから数分間、同じように攻防が続いてるけど、お姉様の攻撃が見えなくなってきた。たぶん少しずつ速くなっているんだ。
集中して見なきゃついて行く事なんか出来ないわ。

右の突きがかわされると同時に左の突きで鳩尾を狙うお姉様。すり抜けるようにジン兄が自分の左前に動くのを見たお姉様は伸びていた左腕を曲げ肘鉄を放つ。

またしても紙一重でかわされたけど、お姉様はそれを見越していたようで左脚を軸にして身体を捻じり鋭い右回し蹴りでジン兄の左側頭部を狙った。

次の瞬間、何が起きたのか全然見えなかった。

ジン兄が動いたのかなと思った時にはお姉様は道場の床に仰向けに倒れていた。だけど反撃を受けたお姉様はちゃんと分かっていたみたいで嬉しそうに笑っている。

あの笑顔は前に何度か見た事があった。行方不明でいなくなる前に何度かジン兄と勝負している時の、対等かそれ以上の相手と闘えて嬉しそうなお姉様の笑顔。
その笑顔を見る度に頑張ろうという思いと、もしかしたら追い付けないのかもしれないという思いがアタシの中に湧き上がってくる。

自分が強くなればなるほど感じる2人との圧倒的な差。“血”を受け継いでいない自分。たどり着けないんじゃないかという恐怖。現実を受け入れたくない拒絶。

心が沈みこんでいっているのが分かっちゃう。

「カズ！」

そんなアタシにジン兄の厳しい声が掛った。

そうだった。何をやっているのよアタシ。ジン兄は何も考えずにただひたすら手合わせを見ていろ、って言ってたじゃない。
今は考えて落ち込んでいる時じゃないわ。そんな暇があるならひたすら強くなる事に集中しなきゃ。ジン兄が見ていろって言うんだか

らきっと見続けるだけでもアタシのためになるはずよ。

そう、アタシはアタシの夢と目標のために立ち止まってなんかいられないのよ！

決意を新たに目を凝らして見てから数分後、ジン兄とお姉様の手合わせは結局最後はどうなったか見えなかったけど、やっぱりジン兄の勝ちで終了した。

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

ｓｉｄｅ　椎名京

川神駅前商店街“金柳街”にある川神書店。
キャップが週に2回ぐらいバイトを入れている古くからの本屋だ。

うん、今日も店の中から店長とキャップの威勢のいいやり取りが聞こえてくる。このやり取りって立ち読みしてる間の結構いいＢＧＭになってるね。

でもなんでここの店長、『バッキャロー』を連呼するんだろ。小さいころから知ってるけど未だに意味分かんない。

なにやら最近新しく出来た大型の本屋に客が流れていかないよう、対策会議を開いている模様。地域密着型って素晴らしいね、こうやって堂々と立ち読み出来るし。
大型の本屋ってこのところ殆どの本にカバーがしてあるから立ち読み出来ないし。

キャップ、前金で商店街の福引き券の束を貰って嬉しそう。これは本気になって対策のための企画を練るだろう。頑張るのはいいけどあんまり頑張り過ぎないでねキャップ。とばっちりはゴメンだから。

でも福引きは期待しておくね。キャップの強運でいいもの引き当ててね。出来ればみんなで旅行とか行ければ嬉しいな。

そして大和と2人っきりになって……フフフフ。

旅行は男女を解放的な気持ちにしてくれるって言うから、既成事実を作る最大のチャンス。近頃結構可愛い女子が2人も加入したから大変だよ。でもジン兄が帰ってきてモモ先輩とイチャついてるから、大和も彼女欲しい気持ちが少しは強くなってるはず。そこを狙えば……フフフフ。

「黙々と立ち読みしているバッキャローがいる……時々買ってくれるけど、今日は冷やかしと見たぜ」

大和との愛の妄想をしていたら、どうやらこっちに飛び火した模様。キャップも近付いてきた。

「はいはいお客さん。それ買うの？　買わないの？」

「ヒ・ミ・ツ」

「おぅい」

呆れたようなキャップにほくそ笑む。

しかしキャップは凄いよ。いつもバイトしててさ。ワン子といいキャップといい、その情熱はいったいどこから来るんだろ。

「今日は本屋か、ホントバイト熱心だね」

「まあな。見識を広げるため――っておい話題逸らすなよ。京ぉ、俺も雇われの身なんだよ。仕事中は例え仲間でも……」

話題逸らし失敗。こういう時は鋭いよねキャップ。でもこのまま引き下がるのもなんか面白くない……よし。

「じゃあ今読んでる章が終わったら買うかどうか淑女的に判断するよ」

「ちなみにその章っていつ終わる？」

「巻末まで続く壮大な章」

「ふざけんなバッキャロー！」

キャップ、口癖までうつってるよ。

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

ｓｉｄｅ　師岡卓也

川神駅前商店街“金柳街”のファミレス『〇スト』。

急に街でのナンパは古いって閃いたらしいガクトは、無謀にもウェイトレスを口説くと言い出した。本当に無謀だと思うよ。街中のナンパすら成功した事ないのに。

しかもコーヒーセット頼んだのも知的に見えるからって事らしいけ

ど、ガクトそのものの外見が全く知的に見えないのに気付いてないんだよね。僕が頼んだクリームソーダを馬鹿にするし。

目の前でガクトがウェイトレスをナンパしようと呼び出しベルを押した。

「見てろよぉ。獅子座の恋愛運は今日完璧なんだぜ」

それはどこの星座占いの結果だよ。星座占いは雑誌や番組によっていろいろ違うんだから、1つの結果を信じても全く意味ないんだよガクト。言葉にするだけ無駄だから言わないけど。

僕の優しい言葉（頭の中だけの）も通じず、ガクトはコーヒーのお代わりを注いでるウェイトレスに言葉を掛ける。

「今日は人少ないっすね～」

「そうですね。祝日だからもっといてもいいのに」

接客業だからだと思うけど、ガクトにも当たり障りない言葉で答える。

「見た感じ学生っぽいけど、もしかして川神？　バイトいつまで？終わったら俺たちと遊びに……」

ガクト、ウェイトレスの顔色が変わったのに気付いてないよ。こりゃどう見ても予想するまでもなく失敗だね。いつもの事だけど。

「やだ何ですか、いきなり急に。やめて下さいそういうの。キモチ悪い」

案の定、すぐに嫌悪感いっぱいの表情になって急ぎ足で逃げて行っちゃった。残されたのはどうして失敗したのかすら気付いていない呆然としたガクト。いつも通りだね。

「……あれ？　馬鹿なこのナイスガイな俺様が」

「ドン引きされてるじゃないのさ。ダメダメじゃん」

「まぁ、よく考えればいつもの事だ。ハハハ」

「それもそうだね。あはははははは」

すぐに立ち直ったガクトにならって僕も笑う。これもいつもの事。

「おかしくねぇよ！！」

出た出た時間差切れ。これもいつもの事だからさっきの笑いに乗ったんだよ。しかも負け慣れてるのは事実なのにいつになったらガクトは気付くのやら。

それから少しの間、不毛なやり取りを繰り広げてしまった。それがなお一層ウェイトレスたちに悪印象を与えている事に気付かないガクト。

まあ僕も気付かなかったんだけど、別に僕はナンパとかしたいわけじゃないから痛くも痒くもないんだけどね。

ちょっとだけショックだったのは僕の心の中だけの内緒。

「じゃあリョウの野郎、薬マジでやってたのか」
「最近、親不孝通りでよく薬売ってるって話だよ」
「なんかキめてる奴増えてるよな」
「どかっと売ってる人がいるらしいよ」
「よく知らないけど、そーいうのは取り仕切る怖い大人がいるんじゃね？」
「うん。だからいつか売ってる人シメられると思うな」
「怖ぇけどキョーミあるな。薬試してぇ」
「今の話聞いていて……ケージ君勇気あるよ。ハンパねぇ」
「ま、今は窓割りゲームがあるから退屈しねーけどな」

お互い不毛な言い合いだと気付き一時休戦していると、隣に座席に座っていた2人のチャライ格好をした男の人たちの話が聞こえてきた。

「……物騒な話だね。僕たちには縁遠いよ」

「お前は気が弱いからな、ウチの女性陣より心配だ」

心配してくれるのは嬉しいけど、別の意味で僕はガクトが心配だな。ああいった人たちってのは男だけじゃない。声を掛けるのは女の人の場合もあるから、ガクトならホイホイついて行っちゃいそうだよ。囲まれても力でブッ飛ばすって言ってるけど、そういう連中は狡賢さこそがお家芸だからガクトの足りない頭じゃあまず無理だと思う。

本当にそんな事になったら大和かジン兄に頼ればいいかな。

そんな事を思いつつ、結局駅前でナンパする事に決めた学習能力のないガクトを放っておく事も出来ず、一緒にファミレスを出る。

結果はどうなったって？

「今日負けても次に勝つ！　明日天気になぁれ！」

いつも通りの連敗街道まっしぐらだよ。ホント飽きないねガクトは。

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

ｓｉｄｅ　篁緋鷺刀

電話越しで泣いて懇願するマネージャーさん頼まれて、打ち合わせをすっかり忘れていた凛奈さんを叩き起こして見送った僕は、昼食も終わり暇を持て余していたので隣町の七浜まで足を運んでみた。特に目的があったわけじゃないけど中華街をうろつく。

今日の晩御飯になるような食材でも買って帰ろうかな。そう思いながらもお店を覗き込んでいたら、同じようにお店を覗き込んでいるまゆが隣にいた。

「奇遇だね、まゆ」

「うひゃあわぁ！」

よほど集中して見ていたのか僕の声にいつも通りの意味不明な悲鳴を上げて飛び上がった。振り返り見開いた目が僕を捉えると、安心したように息を吐いて胸を撫で下ろした。

「タカさんでしたか」

「ごめんね、驚かせて。そんなに集中しているとは思ってもいなかったから」

「いえいえいえいえ！　タカさんは悪くありません」

謝る僕にまゆは物凄い勢いで首と手を振って言葉を返してきた。これ以上はさらに恐縮させるだけだからここまでにして、話を変えた方がいいかな。ここで会うとは思ってもいなかったから聞いても問題ないだろう。

「七浜（ここ）にはまゆ1人で？」

「はい、私と松風だけです」

「おいタカっち！　オイラの事忘れんなよ」

すでに1人扱いなんだね松風って……まあ、もうひとりのまゆと考えれば確かに1人扱いは間違いじゃないんだけどね。

お互い特に理由もなく、まゆも『1度七浜に来てみたかったんです』という事だったので簡単に案内する事にした。僕自身そんなに詳しいわけじゃないけど、他県民のまゆを案内するぐらいなら出来る。なんだか3年前と立場が逆になってちょっと新鮮だ。

「3年前と立場が逆になりましたね」

同じ事を思ったんだろう、まゆが小さく笑いながら言葉を掛けてきたから頷いて答えた。

少しの間ぶらりと案内できる範囲だけでまゆに七浜を紹介する。途

中で中華街名物の中華饅を買って（物凄く遠慮してたけど無理矢理奢った）2人でかぶり付きながら歩いていたら、前からジン兄とモモ先輩が腕を組んでこっちに来るのが見えた。

先に僕たちに気付いたジン兄が手を上げて挨拶をしてきた。それに対して僕は同じように手を上げて、隣にいるまゆは小さくお辞儀して返した。

モモ先輩が笑ってる。凄く嫌な笑顔だ。絶対何か言われる。

「よう、タカにまゆっち。何だ、お前たちもデートか？」

ほらからかわれた。しかも予想通りまゆがテンパる。

「デッ！？　デデデデデデートォ！？」

「まゆ落ち着いて。そんなんじゃないからねモモ先輩」

「そうだな。遠くから見たら女同士の買い物姿だったしな。ハハハ」

無差別な砲撃はやっぱり僕にも降ってきた。

分かってはいたけど……いや分かりたくはなかったけど、友達に言われると落ち込みがハンパないから指摘してほしくなかったよモモ先輩。でもそういう時にフォローを入れてくれる人が今はいる。

「モモ、あんまりからかうな。ヒロはまゆっちの案内か？」

「うん、さっき偶然会ったから案内がてらぶらりとね。ジン兄たちはやっぱりデート？」

「当然だ！」

何故かモモ先輩が答えてきた。ジン兄も呆れてるけど肯定するように頷く。

でも改めて見るとジン兄とモモ先輩は凄く絵になる。女の人としては背が高いモモ先輩だけど、ジン兄の方が１０センチちょっと高いから身長差も理想的だと思う。何より２人とも端整な顔立ちをしているし長い黒髪も相まって凄く目立つ。

そういえば帰って来てからジン兄が髪を纏めているのを見ていないけど、何か理由があるのかな。

「じゃあ、俺たちはもう行くけど。また明日な」

「じゃあな～！」

機嫌のいいモモ先輩を連れてジン兄は僕たちの横を通り過ぎていった。振り返って暫くの間その背中を見送った僕とまゆは、どちらからともなく視線を合わせて小さく笑い合った。

「やっぱり素敵ですね、ジン先輩とモモ先輩」

「昔からあんな感じだったけど……そうだね、ある意味で理想的な関係なんじゃないかな」

どことなく羨望のまじった声音で呟いたまゆの言葉を肯定するように頷く。ちょっとだけモモ先輩の甘えっぷりが凄いけど、３年会えなかった事を考えると許容範囲内だと思う。

でもいつまでもここで突っ立っているわけにもいかない。時間は有限だ。

「じゃあ僕たちも行こうか、まゆ」

「はい、タカさん」

楽しそうに笑うまゆを見て心が温まる。それがどうして感じるのか今は分からないけど不快な事じゃないから深くは考えず、僕はまゆと並んで中華街を散策するのだった。

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

ｓｉｄｅ　■■■■■

何だ、行方不明だって聞いてたけどあいつ帰ってきてたのか。

しかも最後に見かけた時よりめちゃくちゃ強くなってやがる。あいつを相手にするとなると駒が足りねぇかもしれねぇな。

最悪は俺自身が相手をすりゃあいいと思うが、クライアントはどう言うかねぇ……あの人の執着振りもスゲェけど、あいつの前じゃ意味ねぇしなぁ。

ま、今俺が考える事じゃねぇか。とりあえずはあいつらをもっと強くすることが俺のやる事だからな。あの人もあいつが帰ってきてるのに気付いてんだから何か対策を立てるだろう。

祭りがいつ始まるか分かんねぇが、どうやら退屈せずにすみそうだぜ。

第６４話　休日、それぞれの過ごし方（後書き）

あとがき～！

「第６４話終了。あとがき座談会、司会の春夏秋冬　廻です。今回のお相手は――」

「暁神です」

「今のところあとがき最大登場回数を誇るオリ主です」

「そうだったのか？」

「そうなのだよ。さて今回のお話ですが、特に言うことはないです。まあ読んでの通りそれぞれの休日の過ごし方だね」

「その割にはヤマとクリスとカズのセリフがなかったな」

「そこら辺は突っ込まないで」

「しかも俺とモモは2回も出てきたな」

「そこも突っ込まないで」

「まあ、いいけど。それよりカズは原作より強くするのか？」

「そのつもり。その一環として君と百代の手合わせの見取り稽古をさせた」

「となる原作通りにはならないのか？」

「それに関しては今は秘密。大和が一子ルートなのはすでに決定事項だから、その中でどうなるかはお楽しみという事で」

「まだ決めてないってオチだろ？」

「そうとも言うかもね」

「そうとしか言わないだろ。それより最後の視点って誰だ？　俺の事知ってるみたいだけど……」

「たぶん、原作を知っている人はすぐに分かると思うけど、今は伏せさせてください」

「前回同様、今後のための種蒔きか？」

「その通り。この話も辺にして次投稿もよろしくお願いします」

「展開ゆっくりだけどよろしくしてやってくれ」

前回あとがきのオリキャラの名前の投票ですが、悲しい事に思っていた以上に反応がありませんでした。
催促する形になってしまいますが、感想やひと言など必要ないので投票だけでもしていただければと思います。
登場は当分後になりますので、しばらくの間受け付けますのでご協

力ください。

第６５話　ファン鉄則、武神の彼氏に手を出すな（前書き）

第６５話投稿。

神、圧倒的です。

第６５話　ファン鉄則、武神の彼氏に手を出すな

――２００９年　４月３０日　木曜日　ＡＭ５：００――

ｓｉｄｅ　暁神

まだ日が昇りきらない朝方。

目が覚めた俺は、またしてもベッドに潜り込んでいたモモを起こさないように音も立てず、気配も揺らがせずに起きる。

思うんだがどうしてモモが潜り込むのに気付けないのだろうか。寝ていても気配が近付くと普通なら気付くんだけどな。

何か特殊な事でもしているんだろうか、モモは。

とりあえず【空穂（くうほ）？】を使い足音を消しながらトレーニングウェアに着替えて部屋を出る。暖かくなってきたとはいえ、廊下はまだ少し肌寒さが残っていた。

その途中でカズの部屋の前を通ったがすでに気配はない。そういえば朝は新聞配達のバイトをしていると言ってたな。

靴に履き替え玄関を出て軽く準備運動にかかる。

とりあえず多馬川まで走って河原で朝の修練をしよう。今日の修練は余り他人に見せたくないから出来るだけ人目のないところがいい。この時間帯のここら辺りだったら河原がちょうどいいはずだ。

準備運動を終え身体を軽く揺らしながら、俺はとりあえず市内一周するために走り出した。

side out

side 川神百代

みんなと一緒に登校して、学園の門を通ったその直後だった。

グラウンドに並ぶのは５０人の馬鹿な男ども。

火曜日のラジオでの私の暴露にいずれは動き出すと思っていた男の私のファンたちだ。ジンがいない間は女の子しか興味がなかったから存在自体忘れかけていたけどな。

思っていた以上に早く行動しだしたけどこれは喜べる事じゃないな。月曜日のクリと決闘を見ていなかったのか、それとも見ていても彼我の実力差に気付かなかったのか。

何人かインターハイ常連の奴もいるというのに、ジンの力の一端を感じ取れなかったのは嘆かわしい事だ。

「貴様が暁神か！」

「そうだけど？」

先頭にいた―あれは確か男子剣道部の部長だな―男が怒りの籠った声でジンに問い掛けた。というよりは怒鳴った。疲れた声で答えるジンに一層怒りが積もっているのが赤くなる顔で容易に分かる。

理由が分かっているくせに律義に付き合ってやるあたり、やっぱりジンは甘いけど優しいな。私の中のジンへの好感度は上限がないぞ。

「あーこりゃアレだな、ラジオの」

「そうだね、間違いない」

「なんだなんだ？　なんか楽しそうな事が始まりそうな予感がするぜ！」

「キャップは大人しくしててね、ややこしくなるから」

「これみんなモモ先輩のファンなんですか？」

「そうだよ、巻き込まれる前に下がろう」

「クリー！　特等席に行くわよ！」

「引っ張るな犬！」

「それじゃあ頑張れよ兄弟」

私だけを残してファミリーのみんなはグラウンドでこれから起こる事に備えて、見学しやすいところへさっそく移動していった。

それを見ていたジンはこれから起こる事に頭を抱えるように額を押さえて溜息を吐いた。

「それで？　あんたたちはこんなところで何やってんだ？」

「知れた事！　貴様が川神さんにふさわしい男かどうか見極めるためだ！」

大きなお世話だなホント。男どもはこうだから嫌なんだ。私に告白

する勇気もないくせに誰かが私と付き合う事を許さない。何様だお前たちは。

その分女の子は可愛い。私の気を引こうと必死になって競い合っている。私が自分のファンでも女の子ばかりを優遇したのはそういった理由からだ。

もちろんジンがいたから男に興味がなかったという理由もあるぞ。

「あんたら何様のつもりだ」

低く抑えたジンの声が響いた。

「モモが誰を好きになって、誰と付き合うかなんてモモの自由だ。それを見極める？　なに上から目線でモノ言ってんだ」

放り投げられたジンの鞄を受け取る。ポケットから取り出した髪止めゴムで下ろしたままだった長い髪を後頭部で一纏めにしたジンは数歩、男たちの方に近付いた。

何事かと集まっていた野次馬たちの中から女の子の黄色い悲鳴が上がった。

これだからジンのポニーテール姿を見せたくなかったんだ。髪を下ろしたままでもジンはカッコイイが、髪を束ねた時の姿は3割増しで凛々しくなる。私が惚れ直すぐらいカッコイイんだから他の女の子たちが黄色い声を上げるのは仕方がない。

仕方がないが気に入らない。あれは私のものだからな。

「それで、見極めるために決闘を申し込むつもりだったんだろうが、俺にそれを受ける義務なんてないだろ？　相手をとやかく言う暇が

あったらモモに認めてらうように自分を磨け」

「ぐっ……」

行動を見抜かれ、しかも出鼻まで挫かれさらに遣り包められ言葉に詰まる男子剣道部部長。ややこしいから代表だ。確かあいつが男のファンクラブの代表だったはずだ。

その代表だが、あれはたぶん雰囲気にも気圧されているな。急にジンの雰囲気が変わって驚いているに違いない。

「鉄心さん、そこにいますよね？」

「ふむ、気付いておったか」

いきなり私の後ろから現れるジジイ。ていうか気配消して人の背後に立つなよ。

睨みつけてやるがジジイは飄々とした顔で私の視線をやり過ごすと、代表と向き合っているジンの隣へ歩いて行った。

「して何の用じゃ、神？」

「決闘って変則的に受けてもいいんですか？」

「お互いが納得すればの」

何か考えがあったんだろう、ジジイの言葉に頷いたジンはもう1度ポケットに手を入れ決闘のワッペンを取り出すと、それを人差し指と中指にはさんで目の前の代表に突き出した。

「お望み通り決闘は受けてやる。ただし、俺1人対あんたら全員だ」

さすがに男のファンどもも、周りにいた野次馬生徒たちも言葉を失ったようだ。

まあそれも無理はないだろ。代表して話している男子剣道部部長だけじゃなく、同じ男子剣道部、男子柔道部、男子空手部、拳法部、ボクシング部、相撲部、ラグビー部といったインターハイ常連の武道やっている奴らからガタイのいい奴らが揃っているんだ。

それなのにそいつら全員を一気に1人で相手をするとジンは言っている。普通に考えたら無理に決まっているし驚くなと言う方が無理だろ。

ジンにしてみれば朝飯前どころか昨日の晩飯前だろ。意味分かんないし言葉の使い方も違うかもしれないが、それだけ簡単すぎて結果なんて分かり切った事だ。実際勝負するだけ無駄な時間使うだけだろ。

「ふざけるな！」

さすがにジンの態度が頭にきたんだろう、物凄い剣幕で怒鳴る代表。だがジンの方はどこ吹く風といった感じで怒鳴り声を聞き流している。

「本来ならふざけるなと言う権利は俺にあると思うんですけど。さっきも言ったように誰と付き合うかはモモの自由。見極めるなんてふざけた理由での決闘を俺が受ける義務なんてありません」

言い聞かせるようにゆっくり言葉にするジンだが、あれはもうかな

りキレかけているな。声音が平淡なのにどんどん敬語になっていってる。
あれはジンがキレかけている何よりの証拠だ。これが穏やかで丁寧な口調になったらもうアウト。完全ブチ切れ状態だ。

「それでも引き下がらないようですしね、俺もこれから何度も決闘を受けたくないですし、貴方たちも手っ取り早く終わらせる事が出来るような代案を出したのですから感謝してほしいくらいですよ」

終わったな。完全に切れたなジンの奴。
チラリと仲間の方に視線を送ると、ジンの雰囲気の変化の意味を理解していないクリとまゆまゆ以外、全員が手を合わせてファンどもを憐れむように合掌していた。

さすが旧知の風間ファミリー。みんな同じ思いのようだ。

「面白い、俺たちの誰かが勝てばお前は身を引く、それでいいんだな？」

ジンの言葉に会議をしていたがどうやら受ける事に決めたんだろう、代表は確認するかのように問い掛け、ジンは無言で頷いた。

てオイ、いつの間に勝負で負けた方が身を引く事になったんだ。私の意見は全くの無視か。ジンが負けるなんてありえないって分かってるが、いったいどういった作戦会議をしていたんだお前らは。

「後悔するなよ！」

「誰に言ってるんですか？」

代表が男のファンたちの総意でワッペンを地面に叩きつけると、ジンもその上に自分のワッペンを重ねた。

「決闘の成立を受理する！　場所はグラウンド！　武器使用はあり！　勝敗の結果は相手を気絶さえれば勝ち！　変則１対５０の勝負！　１０分後に開始する！　見届け役兼審判はワシが務める！」

ちょうど側にいたジジイが決闘受理を宣言し、野次馬たちは怒号のような歓声を上げたのだった。

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

ｓｉｄｅ　ａｕｄｉｅｎｃｅ

彼にとってそれは、かつてのあの日の再現に見えた。

今から2年前、彼は入学式で1人の女生徒を見かけた。凛々しく美しく、そして無駄のないプロポーションを見て彼は今まで感じた事のない衝撃が胸を貫いたのを感じた。

それが一目惚れだと気付いたのは数日後の事だったが、彼はどうすれば彼女の気を引けるかずっと悩んでいた。

そこで思いついたのが決闘と呼ばれる制度を使う事だった。

彼は強かった。

中学3年間毎年全国大会に出場したし3年連続で表彰台に立った。

2年連続で全国1位にもなった。当然なのだろうか彼は中学でモテた。

ルックスは自分でも悪い方ではないと自負していたし、実際中学の

3年間で彼女に困った事はなかった。

彼は強かった。そして天狗になっていた。

自分が勝てば、強さを見せつければなびかない女はいないと思い込んでいた。だからこそ彼女に決闘を申し込んだ。そして彼女は特に何も言う事なく彼の決闘を受けた。

その時の彼の頭の中は、これで彼女を自由に出来るという興奮でいっぱいだった。自分が負ける事なんて微塵にも思っていなかった。だから彼は見逃した。そして気付かなかった。

決闘を受けた彼女が喜々として笑っていたのを見逃して、その彼女は自分程度では扱う事の出来ない女だという事に気付かなかった。

気付いた時には宙を舞っていた。

地面に倒れ伏した自分を見る彼女のつまらなそうな目を見た時、彼は唐突に悟った。

『この女は自分なんかが触れていいような存在じゃない』

それは神の啓示にも等しかったかも知れない。

彼はその瞬間に崇拝する存在を手に入れたのだ。

自分がたどり着く事すら出来ない高みから見下ろす至高の存在。自分を見下ろす彼女の姿は、未だに脳裏に焼きついて離れないほど鮮明なものだった。

それから彼は同志を募った。集めるのは簡単だった。

彼と同じように強さに自信を持っていて、彼女によって打ち砕かれた男たちは、彼ほど強烈な衝撃を受けてはいなかったが、大概が彼と同じ気持ちを持っていた。

打ち砕かれて怯える奴らは必要なかった。ただただ彼女の強さを崇拝する者達だけを集めた。結果２年間で５０人もの同士が集まった。

彼らにしてみれば彼女は既に神聖な存在になっていた。
触れてはならぬ存在。近寄る事の出来ない存在。そして人とは隔絶した存在。

彼らにとって彼女はそういう存在でなければならなかった。

だからこそ、その男が許せなかった。

彼女が腕を組み、ふやけきった嬉しそうな笑顔で、まるで普通の人間のような態度を取るのが許せなかった。

その男のせいだと思った。その男がいるせいで彼女が堕落する。その男がいるせいで圧倒的な強さを持つ彼女が弱くなっていく。
彼女は崇高でなければならない。彼女は超越でなければならない。
彼女は自分たちと同じであってはならない。

だから決闘を申し込もうとした。全員と１度に勝負するという予想外な展開になったが、彼らにとって有利過ぎる条件で決闘は受理された。

勝ち目はあると思っていた。
インターハイ常連のメンバーもいるし、ガタイなら武道系部活にすら負けないメンバーもいる。

しかも相手はその男1人に対してこっちは50人。卑怯じゃない。向こうが提案してきたのだ。よほど自信があるのだろうが彼らにしてみれば誰か1人が勝てば勝ちになる。

余りにも有利過ぎる条件に絶えず笑いが込み上げてきたが、それも決闘開始の合図とともに引っ込んだ。

まず最初に突っ込んでいった2人が左右に10メートル近く吹っ飛んでいった。

呆然となる彼らを無視して男が動く。まるで普通に散歩をするかのように近くにいた10人の間を通り抜けた後で指を鳴らす。糸の途切れた操り人形のようにその場に倒れ伏すメンバー。男が何をやったのか全然分からなかった。

何が起きたのか分からず呆然とする中で、1人のメンバーが我に返り俄然と男に向かって突っ込んでいった。

相撲部の部長で全国大会1位の高校生横綱。大学横綱とも対等に立ち回り卒業後に角界入りするのが既に決定している。そのぶちかましに耐えれるのはこの学園では彼女だけだ。

まともに受ければ吹っ飛ぶ。よけたとしてもその隙をついて大人数で仕掛ければ問題ない。メンバー誰もがそう思っていた。

予想は大いに外れた。

男は相撲部部長のぶちかましを、あろう事か左の人差し指1本で受け止めたのだ。手を抜いていないのは顔を真っ赤にするメンバーを見れば一目瞭然だった。

数秒間指1本で受け止めていた男は指離すと、支えを失ってあらん限りの力を込めた勢いのまま突っ込んできたメンバーの鳩尾に、カウンター気味に肘鉄をめり込ませた。

気を失い倒れ込むメンバーを振り払うように左手でどかした男は、残りの人数を確認するように見渡し頷くと右手の人差し指を立てて、挑発するかのように『かかって来い』というように動かした。

それを見ていた残りのメンバーの内２０人がいっせいに男に向かって突っ込んでいった。逃げ道を塞ぐように輪になって迫っていく。２０人はそれぞれ空手部５人、テコンドー部５人、ラグビー部５人、彼以外の剣道部５人だ。

まずラグビー部の５人がその体躯とスピードを活かし、男を取り囲むようにタックルをする。対する男は沈み込むように腰を下ろしたかと思ったら、何をしたか分からなかったが突っ込んできたラグビー部５人を吹っ飛ばした。

その間を縫うように、剣道部５人が突き出した竹刀の剣先が迫ってきたが、男はジャンプして５本の突きを同時にかわす。
だが空中に浮いた事で隙が出来る。同じように考えたのか空手部２人とテコンドー部２人が空中にいる男に向かって、それぞれ得意の飛び蹴りを放った。

誰もが当たると思ったが、次の瞬間に男の姿はより高いところにあった。よけられた事に呆然となる４人に男の蹴りが容赦なく入った。

遠くから見ていた彼には見えていた。
男はジャンプした後、重なっていた５本の竹刀を足場にしてもう１

度ジャンプしたのだ。しかもその瞬間に足場にした竹刀を持っていた5人の剣道部を蹴り倒す事までしていた。

地面に着地したのを狙って、残りの空手部3人とテコンドー部3人がいっせいに襲い掛かったが、男は着地するその体勢のまま沈み込み足払いで1回転すると、バランスを崩した6人を立ち上がる勢いのまま振り上げた右脚蹴りで全員を１０メートルは吹っ飛ばした。

蹴り足を戻した男は無造作に歩み寄ってくる。

もはや恐怖なのか何なのか分からないまま、自分を鼓舞するような叫び声を上げて、次から次へと男に突っ込んでいく残りのメンバー。それを次から次へと殴り飛ばし、蹴り飛ばし、投げ飛ばし、打ちのめす。

まるで流れ作業のように淡々とこなしながら近付いて来るその姿は、長い黒髪も相まってまさに彼女を彷彿とさせるものだった。

男が目の前に来た時になってようやく、立っているのは自分含めて3人だけなのに彼は気付いたのだった。

真っ先の動いた空手部部長は右上段蹴りを放とうとしたのだろうが、蹴り足が上がる前に男の右上段蹴りをくらって倒れた。
その隙をついて男の襟と袖を掴んだ柔道部部長は、投げ飛ばそうと瞬間に膝から崩れ落ちた。恐らく何か攻撃を受けたのだろう。彼には全く見えなかった。

1人残った彼はもう何が何だか分からなくなり、持っていた竹刀に力を込め、自分でも何を言っているのか分からない雄叫びを上げて男に向かって突っ込んで行った。

そして次の瞬間、あの時の2年前と同じように宙に舞ったのだった。
地面に倒れ伏し自分を見下ろす男の姿を見た時、彼はまたしても悟った。
『この男は自分なんかが到底及ぶ存在なんかじゃない』
と――
「そこまで！　勝者、暁神！」
決闘の終わりを告げる鉄心の号に、野次馬で取り囲んでいた生徒たちは何の反応も出来なかった。
５０対１の変則的な決闘。
だが始まってみればそれは一方的な展開だった。開始から終了まで僅か5分。圧倒的すら超越するこの現状は川神学園の生徒にとって川神百代以来の衝撃だった。
嬉しそうに勝者である暁神に駆け寄る百代の姿を見て、百代のファン全員、それこそ男女の垣根を超えてある１つの鉄則が生まれた。
即ち――『暁神には手を出すな』

第６５話　ファン鉄則、武神の彼氏に手を出すな（後書き）

あとがき～！

「第６５話終了。あとがき座談会、司会の春夏秋冬　廻です。今回のお相手は――」

「前回に引き続き、暁神です」

「さて、今回のお話は神ＶＳ百代もファン（男子限定）でお送りしました。しかも変則的な三人称……二人称って言うのかな？　でしたがいかがだったでしょうか」

「あんな奴がファンなんてモモも可哀想だな」

「あいつらは特殊だよ」

「それもそうだな、なんかある意味で宗教化していたな」

「どうする事も出来ない圧倒的な、しかも綺麗で凛々しい存在が現れたら、人間の取る行動って３つぐらいだと思うんだよ」

「どんな行動だ？」

「１つ目は恐れて触れないでおく。２つ目は憧れてみんなで共有する。３つ目が崇拝して神聖化する。あくまでも作者の考えだけどね」

「なるほど。普通のファン、特に女子が２つ目で、今回俺が相手をしたのが３つ目のファンだったってわけか」

「その通り。しかも川神学園の武士の末裔が多くて武道やってるやつが多いから、そういう奴ほど3つ目になるんじゃないかと思ったんだよ。一般の人たちにしてみれば超越すぎて現実味がなく、武道やっている人たちにしてみればはるかな高みにいる人に感じるだろうからね」

「否定できないな。けど本文最後を見るに、俺はモモのファンたちには1つ目に認識されたのか？」

「そういうわけじゃない。基本的には百代と同じで2つ目の扱い。だけど決闘をする君の姿と駆け寄っていく百代の姿を見て、手を出したり文句を言えば自分が無事にすまないと感じ取ったから、あの鉄則が生まれたわけ」

「ってことはなにか？　俺もモモみたいにキャーキャー言われるのか？」

「百代とセットでね」

「頭が痛くなりそうだな……平穏な学園生活はどこに行った」

「頑張れ、学園最強カップル。もはや全校生徒公認だな」

「……それで？　次回は？」

「（話そらしたな）次回は原作エピソードの1つ『窓割り事件解決編』の前振りと大和リベンジです。では次投稿もよろしくお願いします」

第６６話　大和のリベンジ、学園からの依頼（前書き）

第６６話投稿。

第６６話　大和のリベンジ、学園からの依頼

兄弟の圧倒的過ぎる決闘が終わり、俺たちは校舎に入った。

廊下はさっきの決闘に興奮冷めやらぬ感じだったが、何やら雰囲気がそれだけじゃないような感じだ。興奮というより喧騒、ざわめきに近い。

「何かあったのかクマちゃん？」

ちょうど騒ぎの中から出てきたクマちゃんに問い掛けると、ケーキを食べながら答えてくれた。

「今度はこのガラスが割られてたんだって、もぐもぐ」

その言葉と指差した方を見ると、数枚の窓ガラスがガムテープと透明なビニールで応急的な補修状態になっていた。

そういえば兄弟の編入とクリスとの決闘で忘れていたが、月曜日の朝のＨＲでウメ先生が、

『昨夜Ｃ棟２階の１部の窓ガラスが何者かによって叩き割られていた。我が校にとっては珍しい事態だ。何か知って言う事があれば言ってくれ』

って進路希望調査の話の後に言っていたな。

しかしこの川神学園の校舎の窓ガラスを割るなんて、いい度胸しているけど無知もいいところだな。怖いもの知らずじゃすまないぞ。

学長の鉄心さんもさすがに今回は重い腰を上げるだろう。

同じ意見だったクマちゃんから食べていたガトーショコラを1個お裾分けしてもらい、教室に入り席に着くと、前の席のワン子が食べ物のにおいを買い取ったのだろう、さっそく声を掛けてきた。
さすが犬。

「何それおいしそうじゃない大和」

「クマちゃんに分けてもらったケーキ。ワン子少し食べるか？」

「うん！」

元気に頷くワン子にもらったガトーショコラをひと切れ渡す。もし尻尾があったら物凄い勢いで振ってそうだ。
ちょうどいい、それ見て何か言いたげなクリスにも声を掛けておくか。

「クリスもどうだ。甘くて美味しいぞ」

「朝から教室でケーキなぞ非常識だと思え……まぁしかし違反ではないのなら……自分も……ごほん。もらうかな……」

俺の言葉に眉をひそめて諫めてきたが、美味そうに食べるワン子を見て意思が揺らいだんだろう、わざとらしく咳払いをしてちょっとだけ嬉しそうに笑顔を浮かべて欲しいと言い出したが――

「なんかブツブツ言っている間に食べちゃったんだけど」

「くっ……」

甘いものが好きって言っていたが、そこまで残念がらなくてもいいだろ……

そんな悔しがるクリスの横手からガトーショコラが差し出される。急に出てきたソレに驚き視線を向けると、兄弟がさっき俺たちが食べていたものと同じガトーショコラをかじっていた。

「食べたかったんだろ？」

「あ、ありがとう」

大人しくお礼を言ってガトーショコラを受け取るクリスの頭を軽く撫でた兄弟は自分の席へ着いた。俺は体を捻り左斜め後ろの席の兄弟に声を掛ける。

「クマちゃんからもらったのか？」

「ああ、お近付きの印に2つお裾分けしてもらった。でもさすがに2つはちょっと多いから欲しがってそうだったクリスに渡したんだよ」

嬉しそうにガトーショコラを食べているクリスと、羨ましそうに見ているワン子を眺めながら、兄弟は小さな笑みを浮かべて答えた。本当にどう見てもその姿、同年代には見えないんだよ兄弟。同学年の俺たちに『兄』と呼ばれたくないならまずその兄貴気質を直せ。恐らく生まれつきだから無理だろうと思うけどね……

昼休み――

「――というわけで再戦希望だ」

俺は賭場で葵冬馬と再度対峙していた。

昼休みになり昼飯も食い終わり、本でも読んでゆっくりしていた時、モロが賭場に葵がいると言う情報を持って駆け込んで来た。

リベンジする機会を窺っていた俺は、思っていた以上に早くやってきた再戦のチャンスにやる気が出てきた。

雪辱を晴らすと宣言するように言った後、教室を出る。後ろで何やらいろんな言葉が飛び交っていたが、ワン子、京、モロ、ヨンパチ、スグルなど結構な人数がついて来てくれるようだ。

ただクリスもつて来た事には驚いた。言葉を聞くに俺が雪辱を晴らしたいという心意気を見届けるようだ。賭けという行為が気に入らないという前提ではあるみたいだけど。

途中でモロが心配そうに声を掛けてきたけど、勝算はあると言い返しておく。

勝算がないのに雪辱を晴らすなんて言うわけがないだろ。時間が時間だ、トランプ勝負に持っていけばまず負ける事はない。

そんな思いで葵冬馬に再戦を申し込んだのだった。

「いいですよ」

葵はあっさりと俺の申し出を受けた。

隣にいた井上が少し心配そうに声を掛けていたが、どうやらその井上の負けを晴らすためもあり受けたようだ。

その後ろであの着物姿の女生徒が、相も変わらず無駄に偉そうに何

か吠えてる。ああいう相手は気にしないのが1番だろう。無視無視。

「何で遊びましょうか？」

「トランプで勝負をつけるのはどうだ」

何で勝負するのかを聞いてきたのでこちらから提案する。時間の都合もあり断る事はないと確信があるからの提案だ。

「私もトランプは好きですから問題ありません。でも気が合いますね私たち、今度デートしませんか？」

「この人、本気でそのケがあるの？」

「さぁな、ノーコメントという事で1つ」

マジでヤバい感じがしたのでとりあえずいつも一緒にいる井上に問い掛けるが、返ってきた答えは曖昧で判断のつかないものだった。自分で考えて判断しろって事かよ。

「まぁ、いいだろう。俺に勝てればな」

「種目を指定して下さい。ババ抜きでもしますか？」

俺の言葉に妙に嬉しそうに言う葵に、マジでそのケがあるような気がしてならない。だが言ってしまった以上は負けるわけにもいかない。何より俺の身が危ない。そんな気がしてならない。

「時間がかかりすぎる。今は昼休みだから……ポーカーでどうだ？」

「今はそういう気分ではありません」

やはり最初の申し出は断ってきたな。前回の反応を見るからにこちらの提案には仕込みがあると絶対に分かっているだろう。思った通り警戒している。

こいつと俺は同じタイプの策士。俺だって相手から最初に提案されたものは断る。そう考えれば断ってくるのも予想通り、作戦の内だ。

「そうだな……裏返し状態の1番上のカードの数字を2人で当てる。KとA（キング　エース）が隣どうしで数字が近い方が勝ち。このルールでどうだ」

「それは手早くていいですね。たまには完全な運否天賦（うんぷてんぷ）も面白いものですね」

よし！　こちらの提案に乗ってきた。最初の提案を断ったからこそ、それよりも早くしかも周りからは完全な運でしか決着をつけられないと思わせるルールだから、葵も受け入れざるを得ないだろう。

まあ、それが分かってての提案なんだけどね。

新品のトランプを使う事にもまたひと悶着あった。

棚にあった未開封の新品トランプを使おうとの葵の言葉を俺はスルーした。

ネットで買っておいた、目の焦点をずらせばカードの模様が見えるマジックカードを、あらかじめ新品のカードボックスの中に入れておいたのだ。

そのカードを選んだのは葵自身になるから文句を言わせない状況を作るつもりだったのだが、さすがの葵はそれを警戒してか、一転、下の売店で新しく買ってこようと提案してきた。

それを俺が却下する。

棚のトランプに拘るのは不自然だから、最初は了承した。だが自然な流れだったがそれに流されるわけにはいかなかった。

売店を仕切るおばちゃんはお世辞に弱く、葵のようなイケメンに目が無い。俺が仕込んでいるように葵も仕込んでいると考えれば、提案してきた売店が怪しい。

同じようにマジックカードにすり替えられていると考えた方が無難だろう。

結局、井上が京を連れて校門を出てすぐにあるコンビニで買ってきてもらう事になった。

「しっかりコンビニで買われたトランプだよ」

「見ての通り、封も開けてないぜ」

購入されたレシートも確認して中身を開ける。葵にもしっかりと見せカードに印をつけないつもりがない事を証明するように中身を取り出して広げていく。

「ジョーカーが2枚。スペードの1から始まりK（キング）へ。その後はまたダイヤの1から……数も見た目も並びも普通のトランプですね。問題ないかと」

「ああ、俺も見た感じ問題ないぜ。じゃあ――」

お互いが普通の新品のトランプである事、仕込みをする隙がなかった事、させなかった事を確認し問題ないと判断した。

綺麗に揃えたカードの山をキッチリ半分にして両手で持ち、親指を使って交互に混ざるようにリフルシャッフルでカードをシャッフルする。
俺の手元を見て葵が感心したような声を出した。

「シャッフル、凄く鮮やかですね。プロみたいです」

「まぁね……ある程度切って、と」

葵の声に答えながらカードを切る作業の繰り返しに集中する。これに失敗したら意味がない。真剣に、だけど素振りを見せずあくまでも自然にリフルシャッフルを9回行ってカードのシャッフルを終える。

「カットをどうぞ」

「では、こうして……こう……さぁ時間もありません。賭けましょうか」

切り終えたカードの山を差し出し、受け取った葵は山の上から数十枚のカードを取り、それを1番下へと移し俺に返してきた。
俺はそれを受け取りながら、葵が上から何枚のカードを取ったのかを思い出す。

俺と葵、お互いの後ろでギャラリーたちが完全な運勝負になっている事に騒いでいるのを聞き流しながら、俺は必死に頭の中で計算をする。
周りのみんなは運勝負だと思っているが、実はこれは運勝負なんかじゃない。タイミングと技術によって完全にコントロールされたイ

カサマ勝負だ。だが今この場で誰にも気付かれなければそれはイカサマじゃない。

葵が山の上から下に移したカードはだいたいの枚数しか分からない。しっかり見る事が出来なかったのが悔やまれるが、いつまでも黙ってると怪しまれる。覚悟を決めるしかないか。

「そうだな。俺はK（キング）に賭けよう」

「では、1番遠い6で」

定石通り、葵は俺の予想から1番離れた数字に賭けた。この反応からするに葵も俺の仕掛けたイカサマには気付いていない様子だ。

勝ちは確実になった。

「正解はお前がめくってくれ」

「ではいきますよ……」

言葉に従って、俺の持つカードの山の1番上のカードをめくる。そのカードはダイヤのK（キング）で俺が賭けた数字ズバリのカードだった。

ピタリと当てた事でギャラリーが盛り上がる中、負けた葵は何かを確認するように隣にいた井上に問い掛けていた。

「準、直江さんは何回カードをシャッフルしてましたか？」

「んー確か……8、いや9回だったな」

「ですね。直江さん……やりますね」

どうやら気付いたようだ。

今回、俺が仕掛けたイカサマは結構神経の使うものだった。

キッチリ半分に分けたカードの山を、9回ちゃんとしたリフルシャッフルで混ぜると、混ぜる前の元の並びに戻るのだ。後はカットした部分から見当をつけて言うだけ。

今回はしっかりカットし枚数が見えなかったから、ピタリ賞は出来過ぎな結果だ。

だがそれを確認したところを見ると、恐らくシャッフルが終わって山を差し出した時には疑っていたんだろうけど、確信がなかったからそのままスルーしたってところか。

あの時点で言い出さなかった葵は、イカサマを指摘するタイミングを失ったのだ。

経緯はどうであれ、結果は俺の勝ちだ。

だがこの程度の勝ちじゃまだまだだし、今回は運だと思われている。

いつか葵とは小細工だけじゃなく、ちゃんとした智謀策略を駆使したスケールの大きい勝負をして勝ちたい。

「今回は負けましたが……いずれ本当の決着をつけましょう」

「ああ、そうだな」

同じ思いだったんだろう、昼休み終了のチャイムが鳴り賭場がお開きとなる中で、お互い視線を合わせて笑みを浮かべたのだった。

放課後、キャップの収集メールで俺たちは２－Ｆの教室に集まる事になった。
今いるのは俺と兄弟、姉さん、ガクト、モロ、キャップ、ワン子の７人。ヒロは今日剣道部に顔を出す日だったが『やる事はやった』と召集には応じた。
まゆっちも剣道部の見学に来ていたらしいから一緒に来るとの事。
京はクリスの捜索。

数分後、ヒロがまゆっちを連れて、京が茶道部でお茶を飲んでいたクリスを連れて教室に入ってきた。集合したメンバーを見渡しキャップが招集した理由を切り出す。

「よっし！　これで１１人揃ったな！　みんな喜んでくれ！　久し振りに『依頼』が来たぜ！」

思いがけない臨時収入の機会に俺たちは盛り上がるが、新入生２人と転入生２人は訳が分からず首を傾げていた。

「なあ、依頼って何だ？」

「俺たち、部活の練習試合の助っ人なんかで雇われる時があるんだ。それを依頼って呼んでる」

「大抵お目当てはモモ先輩とかの運動能力だけどね」

代表して質問をしてきた兄弟に、俺とモロがかいつまんで説明する。
ちなみに彼氏の振りをする依頼とかもあるのだが、大概がキャップが引き受ける。これからは兄弟やヒロにも飛び火しそうだが……兄弟の場合は姉さんが許さないし、ヒロだと女友達に見えるか……

そんな感じだが、難しい理由でもないから4人ともすぐに納得した。

「つまり、よろず屋。何でも屋か」

上手い表現のクリスに同意しておく。そしてあくまでも校内の問題しか引き受けないという事を付け足しておく。そうしないと際限なく引き受けそうだからなこの勧善懲悪のお嬢様は。

「報酬は食券で受け取る。今回は1人上食券8枚。依頼は討伐クエスト、『窓割り犯人を叩き伏せろ』だ」

「おお、リッチ！　しかも結構やりがいのある依頼ね」

「それ、依頼に回ってきたんだ」

ワン子が喜びの声を上げる。あれは報酬の多さもそうだが受けた依頼の内容にも嬉しがっているな。対照的に京は変わらず冷めた反応だ。

「よくもぎ取ったな」

「もぎ取る？」

競り落としてきたキャップを褒めるガクトに、システムを知らないクリスは訝しげに呟いた。

何でも屋みたいな事は俺たち以外にも、友達グループや部活の仲間で集まりいくつか存在する。その全部に順番に公平に依頼を回していくのが理想的なのかもしれないが、生徒に回ってくるほどの依頼はそうそうない。

そのため代表者を呼んで競りにかけ、競り落としたチームが責任持って依頼を果たすというシステムを作ったのだ。

依頼の詳細は、川神学園初の窓ガラス割り事件を起こした犯人を懲らしめて捕縛しろとの事。
セキュリティ会社の警備員を突き飛ばす人間が犯人グループにいて、取り押さえたのに逃がしてしまったらしい。
情報によると犯人グループは5人～7人。逃走は自動車と原付を使用。警備員が音を聞いたとの事。ガタイがいいのが1人いるらしく、そいつが警備員を突き飛ばしたのだろう。

情報はそれだけで十分。今夜さっそく警備しろって事だな。

「ちなみに依頼主は宇佐美先生(ヒゲ)だぜ」

「ヒゲ？」

「2－S担任の宇佐美先生。ヒゲ生えてるからヒゲ」

依頼主の呼び名の意味が分からず呟いたヒロに簡単に説明をしておく。何とも捻りのないあだ名だが分かり易いから浸透している。

「武器は教室のレプリカ使っていいってよ。学長が出張るには小さい事件だけど、何とかしろと上から言われたらしい。でも本人面倒くさいからって俺たちに依頼が回ってきた」

レプリカ武器使用の許可が出ているのを聞いてワン子が一層機嫌を良くする。暴れる気満々だなあいつ。
そんな中で兄弟が携帯で誰かに連絡をしているのが気になったが、まあ何かしらの周到な用意をしているんだろう。俺が気にしても仕

方ない。

「いい臨時収入だ。換金出来るから受け取っておけジン」
「そうだな。少しでも懐の足しになればいいか」
「ちょっと危険な依頼だぞ。俺様に任せておけ」
「冗談言わないでよガクト、アタシはやるわよ」
「むしろガクトが危ない気がするけどね」
「僕は元から戦闘に参加する気ないんで斥候で」
「大丈夫だガクト。みんなでやれば問題ない」
「新・風間ファミリーのお披露目だな」
「いつもこんなことやってたんだ……退屈しない学園生活だね」
「え……え、と。みなさんやりますので私もやります」
「受けるが自分は報酬はいらない。もらわなくても捕まえる」

クリス以外全員が食券を受け取った。報酬をもらうもらわないは個人の自由だが一応1枚ぐらいもらうように言ってもクリスは断固として受け取らなかった。
見返りを求めないとまで言い切るあたり、正義のスイッチが入ったらしい。

そんなクリスの行動に京が何やら小さく呟いた。恐らく自分と全く違う思考回路をしているクリスを理解しかねているんだろう。とりあえず余った食券は換金して秘密基地の維持費に回しておくか。

「A棟、B棟とやられているから次の狙いはC棟だろう。恐らく相手はバット系の凶器を持っているだろうから単独ではなく二人一組（ツーマンセル）で行動……こんなもんか。軍師大和、なんか意見あるか？」

「特には。組み合わせだが、キャップとワン子、クリスと俺、まゆっちとガクト、姉さんとモロって感じで。京は屋上で狙撃、兄弟と

ヒロは遊撃で頼む」

キャップの言葉を引き継ぎ、俺が発表した組み合わせに誰も異を唱える事なく頷いて答えた。モロを姉さんと組ませたのは情報伝達のため。戦闘は姉さんひとりで何の問題もない。

モロの男の尊厳は傷つくだろうがな。

作戦も決まり、ワン子たちもレプリカの武器を手にして気合が入っている。

遊び場を間違えて俺たちの学園を荒らす奴らに容赦なんか必要ない。存分に叩きのめしてやる。主に女性陣たちがだろうけどね……

神「しかし5人ともと武道やってる女子ってのも凄いな」

翔「武士戦隊サムライレンジャーと名付けよう」

百「私はブラックだろうな」

一「レッド！　アタシレッド！　クリはイエロー決定！」

ク「良く分からないがイエローは正義か？」

卓「5人とも正義だよ」

ク「ならば色などこだわらん。イエローで結構」

京「私は静かなる色、青希望」

由「あ、あの……そもそもどういった内容のお話ですか？」

百「そんなまゆまゆは癒し系だからグリーンだな」

緋「同じ武道やってる僕たちはどうなるんだろうねジン兄？」

京「タカは6人目の仲間でホワイト、ジン兄は司令官のシルバーだね」

緋「僕が仲間って……外見が女っぽいからじゃないよね？」

岳「だははははは！　良く考えたら受けるな！」

大「何がおかしいんだ？」
岳「5人女子なのに、女の色のホワイトがタカってどういう事だ？
つい笑っちゃうだろ
これ！　はははははは！」

翔・神・大・卓・緋「「「「「（思ってても言うなよ。南無阿弥陀仏）」」」」」

ガクトが笑えなくなるのに3秒もかからないのだった。

第６６話　大和のリベンジ、学園からの依頼（後書き）

あとがき～！

「第６６話終了。あとがき座談会、司会の春夏秋冬　廻です。今回のお相手は――」

「直江大和です」

「今回リベンジ決めた大和君です。さて今回のお話ですが、前回予告通りとなりましたから深くは言いません」

「おい、それでいいのかよ。俺のリベンジと窓割り事件の前振りってことだけど、結構セリフ端折ったな」

「まあね。ぐだぐだセリフ言っててもさらに展開が遅くなると思ったから、今回はちょっとセリフ切りを多くした」

「その割には食券受け取るシーンと戦隊もののオチは書いたな」

「まあね、このシーンはキャラの特性が出ているセリフだから切りたくなかった。あと食券受け取る場面のセリフは行間を詰めたんだけど、あれはさすがに１１人全員が喋るから行間あけるととんでもない事になるだろうから詰めた」

「まあそうだろうな。行間あけるとセリフだけで２２行？」

「考えたくないね」

「それより気になったんだけど、キャップが依頼を競り落としたシーンは切ったのか？　一応そういうものがあるってのは説明してあるけど、あのシーンを切るのは流れ的にどうかと思うんだか……」

「ああそれ、番外話として別に投稿した」

「なんでまた？」

「今回の話に入れたかったんだけど、文字数がとんでもなくなってしまうんだよ。えっと……計算すると９３００文字になったな」

「以前のアンケートでほとんどが長くてもいいって意見だったろ。別に１万文字いっても問題ないんじゃないか？」

「いや問題ないんだけど……１度超えちゃうと歯止めが利かなくなっちゃうと思ったからやめたんだよ。これ以上１話の文字数が増えると自分的にはさすがにねぇ……それにあれはあくまでも参考程度だから」

「どうせ話が進めば文字数増えてくんだろ？　こだわってても仕方ないだろ」

「否定できないね……まあそれは追々ってことで。じゃあ次もよろしくお願いします」

「何話で１万文字いくか賭けるか？」

「誰がやるか！」

外話　競りってみよう（前書き）

第６６話で切った競りのシーンです。

外話　競りってみよう

「よぉハゲ。葵の奴、大和に負けて悔しがってたか？」

競りの行われる空き教室で待っていると、入ってきた風間が俺に声を掛けてきた。

つーかいい加減その『ハゲ』ってあだ名どうにかしてくれねーかな。モモ先輩がラジオで『ハゲハゲ』言ってるから広まっちまったけど、俺はハゲじゃなくてスキンヘッドなんだけどね。

まあ、行っても無駄だろうけどな。

「それどころか惚れてたよ。ライバルだってな」

完全にロックオンしてたよ若の奴。

まあ、あれは自分と同じタイプがいたから嬉しいんだろうけど……

時々俺たちですら振りなのか本当なのか分からなくなるからな。

「なんかアイツ、予想つかないリアクションするな」

「風間ほどじゃねーと思うがなぁ」

予想の斜め上をいくのはお前とモモ先輩だけで十分だっつうの。

あーでもあれだな。今朝のあの決闘見てると暁も規格外の言葉ですら片付ける事が出来ない奴だよな。あれがモモ先輩の彼氏ねぇ……

ある意味納得だ。

「お、集まってるでおじゃるの」

「ふむ、今日は6人かネ？」

だべってると2人の教師が入ってきた。

体育教師のルーと歴史教師の綾小路だな。ルーはいいけど綾小路は生徒に嫌われてるからなぁ……あんま関わりたくねぇけど今は関係ないか。

「案件は1つだ、の」

「それでは競りを始めるヨ」

「ではマロが案件を詠み上げるでおじゃる」

「お願いしまス、綾小路先生」

「ガラス割れ　己の道も　また割れる～」

察するに校舎の窓ガラスが割られた事件だな。担任（ウチ）の宇佐美（ヒゲ）先生も言ってたけど、ついに学長も動いたってわけね。

でもなんですぐに生徒の競りに回されたんだ？　普通に考えれば教師連中が先に動いて、それでも手が回らない時に競りに回されるはずなんだけどな……

ああ、任されたのヒゲか。面倒くさいからすぐにこっちに回しやがったなあいつ。ちゃんと仕事しろよな全くよぉ。

「頼み料は上食券２００枚ダ」

「これはなかなか大きめの依頼じゃねぇか」

ルー先生の言葉に競りに参加している奴らから感嘆の声が上がる。
風間なんて見てみろ、ガキ大将のような笑顔で嬉しそうにしてやがる。

とりあえず俺から始めるか。

「やれやれ。ユキの暇つぶしのためだ。１９０枚！」

「ＹＥＡＨ！　１８０マーイ」

すぐに声を上げたのがエセ英語で話しをする骨法部の主将。これでこの人、この学園の生徒会長なんだぜ？　ホント大丈夫かよこの学園。

「１７０枚にて候」

次いで声を上げたのが弓道部の主将。この人もこの人で美人なんだけど、何故か時代劇の堅っ苦しい武士のような言葉遣いをする。

「１６５枚」

無難に５枚下げて声を上げる。
ユキの暇つぶしだけど別に取れなくてもいいって言ってたしな。レートのコントロールに専念して、あわよくば取れればいいか。

「１６０枚！」

ありゃあ朝の決闘で暁にやられた空手部の主将じゃねーか。側頭部蹴れらて首が鞭うちになったんだろうな、首のギプスが哀愁誘うねぇ……鍛えが足りないのか暁が凄すぎるのか、たぶん暁が凄すぎる

んだろうな。

「１５０枚です！」

見かけねえ顔だし制服が真新しいから1年女子か……1年がこの時期で競りに参加するなんて本来なら無理なんだけど、卒業生か先輩か誰からか聞いたんだろうね。

可愛いけどもう5年早く会いたかったな。

「１４０枚にて候！」

「１２０マーイ！　ＷＯＷ！」

どんどん報酬が下がってるけど、そういやぁまだ風間が1度も声を上げてないな。なんかすっげー嫌な予感すんだけど。こいつ本当に予想外な事やりやがるからな。

「１２０枚……他にはいか、の？」

「アイムウィナー！　ジャストドゥイット！」

声が上がらなくなったから綾小路が確認している。しかしなんだ、骨法部の主将なんてもう勝った気でいる。まだまだ甘いなぁ……学園で2番目に自由な奴がここにいるの忘れてるよ。

え？　誰が1番だって？　聞くまでもないでしょ。

「８８枚！」

「パードゥン？」

ほら来た。

あり得ない下げ方だな。報酬の価値を思いっきり下げるようなレートに、さすがに全員が驚愕の表情を浮かべているよ。

「８８枚だ」

確認するように言わなくてもみんな聞こえてるよ風間。安心しろ、それより低く言って依頼受けても誰も得しないからお前で決定だよ。

「８８枚。他にいないカ？　いなければ風間に落札」

「詳しい説明をするでおじゃる。他は去りゃ！」

思ってた通り競りは風間が落とし、綾小路が退室を促してきた。落札できなかった奴は内容を聞く事すら出来ないのがこのシステムのルールだ。

「やれやれ。相場を無視しないでほしいもんだぜ……」

まあ、風間ファミリーの連中は損得関係ないんだろうね。暇つぶし、面白い遊びとして依頼受けてんだろうな。あのメンツと風間の無茶な落札を見ればそうとしか思えねーよ。

全く、無邪気に学園生活を謳歌出来る奴は幸せだねぇ……

外話　競りってみよう（後書き）

こんな風なやり取りがありました。

準視点でやらせていただきましたが、どうだったでしょうか？

以降もこんな風に切ったシーンを外話で書くかもしれません。

第６７話　討伐依頼達成、異なる思想と深まる溝（前書き）

第６７話投稿。

第67話　討伐依頼達成、異なる思想と深まる溝

side　暁神

夜。

鉄心さんの許可を得ているので俺たちは校舎にとどまり、日の暮れた校舎の屋上で犯人たちがやってくるのを夕飯を食べながら待っていた。
ちなみに今日の晩飯は〇ックのバーガーだ。キャップとカズにひとっ走りしてもらい人数分買ってきてもらった。

「ひっかひはれよへぇ。ふひのはっこうのはどはるはんへ」

「カズ、口の中に物入れて喋るな」

行儀悪いのはその場で注意する。指摘されたカズは口を抑えると、どうやら食べる方に集中したらしく言葉は続かなかった。言いたい事は分かっているし、俺が引き継ぐか。

「この学園の窓ガラスを割るなんて、何考えてんだろうな犯人たちは」

「何も考えてないと思うな。遊び・ゲーム感覚、新聞に載ったら面白い。そんな感じじゃない？」

タクの答えで間違いないんだろうけど、人が事件を起こすには必ず何かしらの理由がある。理由のない事件なんてただの事故、ものによっては災害と同じものだと俺は思っている。

今回の犯人たちも、もしかしたら何かしら思う事があっての行動かもしれない。考えすぎなのは間違いないだろうけど、駄目だな、こういう考え方は。

「悪を行う者のいい分などくだらないに決まっている。聞くだけ無駄であろう」

意気込んで言うクリス。
その考えを否定するつもりはないが、クリスはいささかそれが過ぎる傾向にある。

ヤマから聞いていたが軍人の親馬鹿に溺愛されて育ったお嬢様か…
…恐らく自分の価値観をいつも肯定されて育ってきたんだろう、他人の思想と衝突した事が殆どないはずだ。だから自分の信念と正反対のヤマとぶつかっている。

どうにかしないと間違いなく仲間内で問題になる。キャップの事だから明日の金曜集会にも呼ぶだろうが、そこでぶつかったらミヤが間違いなくキレる。
対策立てようにもこういう問題はぶつからないと解決できないしな。行き当たりばったりになるが、その時になってから考えるしかないな。

先送りという形になってしまったが今は依頼を果たす事を優先しよう。俺は持ってきた物を渡すためまゆっちと話しているヒロに声を掛ける。

「ヒロ、鉄心さんから許可は得てある。コレ使え」

こっちを向いたヒロに持っていた物を投げて渡す。急に渡されて驚

いていたヒロだったが危な気なく受け取ると、手にした物が何か分かったんだろう急いで包みを開ける。

出てきたのは日本刀。

「ジン兄！？」

「一応な」

驚いて俺を見るヒロに簡潔に答える。場合によっては使う事もあるだろう。ひと言で言いたい事は理解できるはずだ。案の定、ヒロは数秒考え込むように眉を寄せていたが黙って頷いた。

実はヒロ、かなり厳しい条件があるが特別に国から帯刀を許可されている。

その条件が、まず鉄心さんが許可する事。使用できるのは1日だけ。使用したら2ヶ月は許可が下りない。この3つの条件を守る事で限定的な帯刀許可を持っているのだ。

まゆっちは驚いているだろうな。まさか自分以外にも特別に帯刀許可をもらっている人間がいるとは思ってもみなかったはずだ。

「タカさんも帯刀許可をもらっていたんですか！？」

「こりゃオイラもビックリ仰天だぜ！」

「まゆと違ってかなり限定的だけどね」

苦笑いを浮かべるヒロにまゆっちも笑顔で返す。

なんか和むなあの2人を見ていると。お互いを少なからず想ってい

るんだろうけど、２人とも自分の気持ちに気付いていない様子。お似合いだと思うけど他人が干渉する事じゃないしとりあえず様子見だな。

と、穏やかにそんな事を考えている内に、どうやらおいでなさったようだ。

「来たぞ。車と原付が同じ速度で学園に近付いている。人数はまだ分からないが、感じる雰囲気からまず間違いなく犯人グループだ」

俺のその言葉に全員が頷いて準備に取り掛かった。

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

ｓｉｄｅ　椎名京

「さーて。今日も窓叩き割ってやりますよぉ！」

「ケージ君、ワルカッコイイよ！」

「人気学校の窓割るの気分いいＹＯ！」

「ストレス解消にはもってこいってかぁ！？」

「ハッスルターイム！」

「ま、何かあっても僕たちにはボブ君がいるしね」

「見つかっても、ま、また助けてくれるよね？」

「マカセトケ！」

「ウーシ、今日は一層派手に１階から４階まで全部のガラス割っちまおうぜ！」

「と言ってるな。人数は６人、１人がグラウンドで車の側、１人が

校門近くで原付で待機、残り４人は丁度いい事に各階に分散したな」

気配で人数確認したのはいいけど、よく屋上からグラウンドにいる人間の会話が聞こえるねジン兄。私なんか目視できるのがやっとだっていうのに、ホントチートな感覚器官持ってるよこの人。

ジン兄の情報をタカがモロに伝えている。これで間違いなく全員に伝わるだろう。機械関係はモロに任せて問題ないからね。

「じゃあ僕も行ってくるよ」

「気付かれるなよ」

最初の役目を終え次の行動に移るタカにジン兄が声を掛ける。その言葉を背中に受けたタカは手を上げるだけで答えると、以前キャップがあのハゲと勝負した時のように、フェンスを飛び越えてグラウンドへ降りていった。

大概タカも規格外だよねホント。

「じゃあ俺も動くかね。ちゃんと仕事しろよミヤ」

「もちろんだよ。大和の命令ならどんな不可能も可能にする女。それが私、椎名京」

決まったね。最高の決めゼリフになったよ。

そんな私を呆れた苦笑いを浮かべて見ていたジン兄は、失礼な事に大きな溜息をついて肩をすくめると、さっきのタカと同じようにフェンスを越えて飛び降りていった。

……ジン兄が飛び降りたところって確か飛び移る木も何もなかったよね？　って事はグラウンドまで一直線……ジン兄だし大丈夫だね。うん。

さて、大和から託された仕事に専念しようっと。

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

ｓｉｄｅ　師岡卓也

４階で待っていると廊下の向こうから人が来た。

あれって外国人？　見間違いじゃなければ黒人だよね。ガタイ良さそうだから普通ならちょっと怖いけど、隣の人の存在がそれを全く感じさせなくする。

うわぁぁ、新しい玩具を手に入れた子供のような顔だよ。普通なら微笑ましいけどモモ先輩子がその顔すると相手が憐れに見えてしょうがないよ。

「フンフンフーン！　ンー今カラ、ガラスをブレイク♪」

「ブレイクするのはお前なんだけどな」

気配消して近付くのも人が悪い。ほらムチャクチャ驚いてるよあの外人。

「川神百代。この名前を悪夢と共に思い出すがいい」

カッコイイ決めゼリフ言えるほどの余裕があるんだねモモ先輩は。

「パンチをクラエ！」

「拳というのはな、こうやって突くものだ！」

恐らくあの外人はボクシングをやっていたんだろう。素人の僕には到底よける事の出来ないパンチを放ってたけど、相手が悪すぎた。いやホント可哀想なぐらい悪すぎたよ。

外人のパンチが届く前にモモ先輩のパンチが鳩尾に直撃。恐ろしい事にあのガタイの外人が廊下の端まで吹っ飛んでいったよ。

「余りにも弱すぎる……」

つまらなさそうに呟くけど、モモ先輩が余りにも強すぎるんだよ……

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

ｓｉｄｅ　黛由紀江

「な、なんだＹＯお前ら」

ガクトさんの前にバットを持った犯人さんがいらっしゃいます。私とガクトさんは3階を任されていました。

でもガクトさんは凄いです、バットを持った相手に臆することなく立ち向かって行っています。

何やら犯人さんが『ボブ君』なる方を呼んでらっしゃいます。４階に行った1番気が強かった犯人さんの1人でしょうか？　あ、モモ

先輩が吹っ飛ばしてしまったようです。

「観念してお縄になれ。俺様を怒らせないうちにな」

な、なにやら少し過激な雰囲気になってます。ここは落ち着かせた方がいいですよね？

「あの、穏便にはすませられないのでしょうか」

「無理だろ。こういう手合いっていうのは――」

「チッキショオオ！　捕まりたくねぇぇえ！」

は！　ガクトさんの言葉の途中で犯人さんが持っていたバットを振り上げてこちらに突っ込んできました！　大変です！　あれが当たったら危なすぎます！　黛由紀江！　今がお役に立つ時です！

（行けー！　まゆっち！　お前の力を見せてやれー！）

松風の心の声に押されて、私はガクトさんと犯人さんが交錯する直前にバットを斬り捨てました。

見事なショルダータックルで犯人さんを吹っ飛ばしたガクトさんが、どうやら落ちていたバットが斬られている事に気が付つかれたようです。

「まゆっちバット斬ったのか？　いつの間に？」

「わ、私などが差し出がましいとは思ったのですが、それで殴られたら大変ですからっ！」

「いやサンキュ」

よ、良かったです。お役に立てました！　私がガクトさんのお役に立つ事が出来ました！　しかもお礼まで頂いたんです！　嬉しすぎです！　……あれ？　でもガクトさん私をじっと見てます。どうしたのでしょうか……

「わっ！」

「ひゃあうっ！　あわわ、や、やはり何かまずかったのでしょうか呼吸する事は許して下さいあのあの私に至らないところがあったら直します成績表に頑張り屋さんって書かれましたから」

「オイラからも言っておくから遠慮なく言えー」

「お前が遠慮してんだろうがっ！」

はわわわわわ!?

side　out

side　川神一子

2階を任されたアタシとキャップ。とりあえずキャップに言われたように犯人を挟み撃ちするために待機していたら、犯人の1人がへっぴり腰でやってきた。

「よし、やってやる！　これはただのガラス破壊じゃないんだぞ、病んだ社会への警鐘だ！」

何かわけ分かんない事言ってるけど、通り過ぎたから作戦通り教室から出て、逃げ道を塞ぐように廊下で仁王立ちしておく。来るかな？　来るかな？

「圧倒的に許せねぇ、校舎の痛みを思い知れ！」

「あぎゃっ！」

おー！　キャップの飛び蹴りが面白いほど綺麗に決まったわ。おおー！　来たわ来たわ！　廊下を這いつくばってカッコ悪いけど犯人がこっちに来たわー！　よーし！　ここはカッコよく名乗りを上あげる場面よね！　お姉様が言ってたもん！

「川神院次女、川神一子！　推して参ったわ！　ここを通りたくば腕ずくで来なさい！」

さあ来なさい！　お姉様みたいに1撃で仕留めて――

「ひぃぃぃ、助けてくれぇぇぇ」

「って！？　ちょっと土下座ぁ！？　アタシの出番は！？」

「もう戦意喪失かよ。悪ぃワン子、こんな俺を許せ」

うううううう、不完全燃焼よー！！

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

ｓｉｄｅ　直江大和

1階を担当していた俺とクリスの視界に犯人の1人がやってきた。しかも何やら若者の主張をしていてこちらに気付いていない。丁度いい挟み撃ちにしよう。

「俺が行くからクリスは反対側に回り込んで退路を断ってくれ、そうすれば簡単に討ち取れる」

「回り込む間に窓ガラスが割られてしまうだろう」

「俺が会話で時間を稼ぐから」

「まどろっこしい。それに挟み撃ちは卑怯だ。自分は正面から堂々と行くぞ、直江大和」

止めるよりも早く行っちゃったよ。

「我が名はクリスティアーネ・フリードリヒ！　義の道を貫くが為、暴虐の輩を成敗する！　行くぞ賊！　お前に――む？」

しかも勢いよく飛び出したはいいけど予想通り、名乗りを上げている最中に逃げちゃったじゃないか。それを防ぐために回り込む作戦だったっていうのに、ホント人の話を聞かないねこのお嬢様は。

「賊め。逃げたとはひとかけらの誇りも持たぬのか」

「だから退路塞いどけってあれほど言ったのに」

正々堂々と公正である事を大事してやるべき事を取り零した。以前

思った事が現実になったよ。それでも自分は悪くないって思ってんだろうなクリスは……

「直ちに追撃を掛ける」

「必要ない」

逃げた場合の時も想定済み。ちゃんと保険はかけてるよ。

side out

side 暁神

1番気配が強かった奴は4階、モモが相手か……可哀想に。
そのほかの階も動き出したようだから俺もグラウンドで車の近くで待機している奴の側に近付いて行く。たぶん逃げる時のドライバー役だろう。足を潰しておこう。

「夜のお勤めご苦労さん」

「な、なんだい君は？」

意外とインテリ系の外見だな。とても少年犯罪グループに入るような奴に見えないが、ここにいる以上は言い逃れは出来ないしさせるつもりもないけどな。
だけどまあ、とりあえず理由は聞いておくか。

「それで？　どうしてあんたたちはこんな事してんだ？」

「な、何の事だい！？」

「言い逃れは出来ないよ。監視カメラも動いてるから状況証拠ばっちり。それにほら、逃げられないし」

無造作に手を上げた直後、何かが破裂するような音が夜のグランドに響いた。確認する事もない。俺の合図に合わせて屋上でミヤが放った矢が、車のタイヤに突き刺さりパンクさせたのだ。

「タ、タイヤに矢が！？　どこから！？」

「で？　どうしてこんな事してるか教えてくれる？」

驚いているのを無視してインテリ眼鏡に問い掛ける。答えは返ってこないと思っていたが何故か饒舌に喋り出した。

「ぼ、僕はもうウンザリなんだ！　ひと言めには勉強勉強！　小さい頃から自由な時間すらなかった！　いい高校！　いい大学！　いい企業！　僕は母さんの操り人形じゃない！　１回大学受験に失敗したからって何が悪いんだ！」

饒舌というよりは、どこから矢が飛んでくるか分からない恐怖でパニックになってるな。きっと今自分が言っている言葉すら何言ってるのか分かってないんだろう。

しかしあれか、今までずっと親の言うままにエリート街道を進んでいたお坊ちゃんの初の挫折。そして初の反抗ってやつか……

「そうだな、あんたの言い分も分からなくもない」

「え？」

「だけどな――」

俺が同意した事に驚いたインテリ眼鏡の鳩尾に軽く拳を入れる。
確かに言い分は分からなくもない。だがやっている事を許せるかどうかには全く関係のない事だ。

「親への反抗反逆大いに結構。だがそれは自分の意志と自分の責任で周りに迷惑を掛けないようにやれ。今あんたがやってる事はただの喚き散らしの八つ当たりだ」

苦しいだろうけど意識はまだあるはずだ。ちゃんと言い聞かせるために手加減したんだ。だがまあ、言いたい事は言い終えたし、そろそろ意識飛ばして楽にしてやるか。

踏み込んだ足に力を入れもう1度鳩尾に衝撃を通した結果、インテリ眼鏡は意識を失った。

「他の奴なんか知った事か！　車に乗ってトンズラこいちまえ！」

気を失ったインテリ眼鏡を横たえていると、どうやら1階でクリスが取り逃がした犯人の1人が車で逃げるためにこっちに向かって走ってきたな。

「げぇ！？　タイヤがパンクしてる！？」

どうやら車が使えない事に気が付いたようだ。どうしようかと考えているようだけど、そんな時間があったら逃げろよな。うちの有能な猟犬がすぐに追いついて来るぞ。ほらな。

「逃亡者発見！　神妙にしなさい！」

「な、なんだてめぇ！　近寄るんじゃねぇ！」

逆ギレしてポケットからナイフを取り出したようだが向ける相手が悪い。普通の一般人とは違うんだ。そんなものでカズをビビらせる事なんて出来ないよ。

「何このナイフ、叩き落としてほしいのかしら？」

「あっ！」

「突きぃっ！」

結果は予想通り。何の感慨もなくあっさりとナイフと叩き落とされ、腹に薙刀の鋭い1撃を捻じり込まれた犯人の1人は膝をついて悶絶するのだった。

「敵将！　アタシが討ち取ったわ！」

ここも終わったな。後はヒロだけだけど心配するだけ無駄だな。

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

ｓｉｄｅ　篁緋鷺刀

グラウンドで起きている騒動を見てヤバいと思ったんだろう、校門近くで見張り役をしていた犯人の1人が原付のアクセルを回して逃げ出した。

結構なスピードでこっちに向かってるけど一応声を掛けておく。

「止まって下さい！　もう逃げても無意味ですよ！」

「うるせぇ！　どかねーとひき殺すぞ！」

予想通りやっぱり聞いてくれない。本当は使いたくなかったけど、言っても止まらないなら強制的に停止させるしかないか。

塞ぐように道路の中央に立っていたけど少しだけ右に移動する。それを見て僕が道を譲ったと思ったんだろうさらにアクセルを回しスピードを上げた犯人。

余りスピードを出してほしくない。大きな怪我を負わせたくないんだけど……ジン兄や大和君的には『自業自得』なんだろうな。

腰を落とし左手に鞘に入ったままの刀を持ち右手を柄に添え、意識を集中しタイミングを合わせるように息を吐く。

そしてすれ違いざまにハンドルの部分――ライトやメーターが付いているヘッド部分って言うのかな？――を居合で斬り落とす。

「うえ！？」

急に操作のきかなくなった事に驚いた犯人は、そのままコントロールを失い倒れた。

結構大きな衝突音がしたけど、見てみるとどうやら前輪が側溝にはまって倒れたみたいだからそんなに大した怪我はしていなだろう。

これ以上騒がれても近所迷惑だし気を失わせた方が手っ取り早いと判断し、僕は倒れた事で痛みにのたうち回っている犯人に近付いて

行った。

side out

事件は犯行グループ全員を捕まえる事で一件落着を迎えた。

全員怪我もなく、万事滞りなく解決かと思われたが――

「だから言っただろ。後ろに回り込むって」

「まさか敵がここまで脆弱とは思わなかったぞ。武器を持っているから開き直って向かってくるかと思えば……腑抜けが」

「これからは俺の言う事も少しは聞いてくれ」

「大和はどうにも策に走りすぎる。こちらに正義がある以上、正攻法で行くべきだ」

「で、今回みたいに逃げられたらどうする？」

「追いかけて捕縛する。あれなら自分も追いつけた」

「あぁそーですか」

万事滞りなくとはいかなかった。

大和とクリス。思想の異なる2人の溝はさらに深くなったのだった。

第６７話　討伐依頼達成、異なる思想と深まる溝（後書き）

あとがき～！

「第６７話終了。あとがき座談会、司会の春夏秋冬　廻です。今回のお相手は――」

「俺！　風のように登場！」

「はい、キャップ登場です。さて今回のお話ですが原作シーンの討伐依頼達成です」

「またしても長々と１話でやっちまったな」

「はっはっはっは。分かってんだから突っ込まないでくれ。まあ原作とは少しだけ違うんだけどね」

「犯人が６人になってるし、原付が追加されたな」

「神と緋鷺刀の相手が欲しかったんだよ。でもまあ程よくまとまったと思うけどな」

「うまくいってたと思うぜ。でもよぉ、なんで各階の視点は戦ってない奴の視点なんだ？」

「客観的な視線の方が書きやすいから。別に神や緋鷺刀のように相手したキャラの視点でもよかったんだけどたぶん文章がもっと長くなる」

「なんでだ？」

「相手をしていないキャラの視点だからこそ、犯人たちのセリフを切る事が出来るんだ」

「あ、そう」

「なんだよ、納得できないのか？」

「面倒くさいから手を抜いただけだろ？」

「さぁて、何の事かな？」

「目が泳いでるぞ」

「……さて！　次回ですがクリスと由紀江が初めて金曜集会に参加します。原作では避けて通れないイベントですがなんとかこの物語らしくしていこうと思います！　では皆さん！　次投稿もよろしくお願いします！」

「あ！　逃げたな！」

第６８話　仲間のため、悩むナンバー２（前書き）

第６８話投稿。

第６８話　仲間のため、悩むナンバー２

――２００９年　５月１日　金曜日　ＡＭ８：１０――

ｓｉｄｅ　篁緋鷺刀

今日は一子ちゃんのトレーニングもなく、登校中に１１人全員が揃った。

公衆ではきちんとすると言っていたジン兄だけど、登校中は公衆に入らないのかな。火曜、水曜、今日の３日しか経ってないけどいつもモモ先輩と腕を組んで登校している。

ジン兄の表情から察するにモモ先輩の我がままだと思うけど、それを許している時点で甘いよね。岳人君なんか羨ましそうに見てるし、京ちゃんなんか大和君を物欲しげに見てる。

頑張れ大和君。

「今日、金曜集会な」

「ウィース」

唐突なキャップの言葉に真っ先に京ちゃんが答える。

ゴールデンウィークも始まったから、たぶん今日の金曜集会で明日からの連休の予定を決める事になると思う。連休中は部活の方は顔出さなくてもいいって言われたし、とりあえずみんなと遊ぶ事に問題はないかな。凛奈さんの急な旅行に引っ張り回されなければだけど。

「まゆまゆとクリは金曜集会は分からないだろ。妹よ。放課後は基地に案内してやれ」

「アイアイサー……ところで、このアイアイって何の略？」

モモ先輩の頼みに一子ちゃんは喜んで答えた。その後の疑問は何がしたくて問い掛けたか分かんないけど。

ちなみに『アイアイ』は『Ａｙｅ　ａｙｅ』の事で、主に海軍や海兵隊なんかで使われる上官の命令を受けた時の返答の事。『Ａｙｅ』は『はい』とか『了解』とかの意味を持っているから、『はい、分かりました』って意味なんだって。凛奈さんからの豆知識。

「……はぁぁ」

そういえば合流してからまゆが感嘆の溜息を吐いてばかりいるけど、何か朝から嬉しい事でもあったのかな？

「まゆ？　どうしたの？」

「あ、いえ、今朝、大和さんからプレゼントを頂きまして。実は私……親戚以外からプレゼントを貰ったの初めてだったんです」

「そ、そうなんだ」

大和君からのプレゼントって……たぶんあの災害時緊急避難セットの事かな？　僕も川神学園入学と同時に貰ったからたぶん間違いないと思うけど。

「大和さんが私の初めての人です！」

ちょっと待ったまゆ！　その発言はさすがにヤバすぎるよ！

「小娘がぁぁぁ！」

予想通り京ちゃんが物凄い形相でまゆを睨んでる。モモ先輩の命を受けた岳人君に取り押さえられた状態で、だけど。

「え？　え？　え？」

混乱しているまゆを落ち着かせるように背中を撫でて、とりあえずさっきの言葉の拙さだけは教えておこう。きっと嬉しすぎて自分の言った言葉の意味を全く理解していないだろう。

みんなもまゆの言葉のアヤだと分かってるからすぐに収まってるし……もう変な方向に話が行ってる。

「自分の男に操を初めて捧げた女を怒っただけの事」

「なっ！？　み、操だと！？」

「逆立ちして行くのもトレーニングかも」

「スパッツ履いててもはしたないからやめておけカズ」

モモ先輩がクリスさんをからかっているし、一子ちゃんなんて話も聞いてないし逆立ちをやりかけたところをジン兄に止められてる。

これがいいのか悪いのか分かんないけど、いつもの風間ファミリーらしさだった。

side out

side 暁神

昼休みになり、昼食も終わったからモモのところにでも行こう。
そう思って気配を探るとどうやら屋上でファンの女生徒たちと一緒に昼食の最中のようだ。やっぱやめよう。

昨日の昼休みをモモと過ごしていたら、モモのファンの女生徒に囲まれて騒がれた。別に嫉妬とか嫌味な態度を取られたわけじゃない。モモとセットでまるでアイドル扱いだった。
モモは『これで全校生徒公認だな！』と喜んでいたいが、俺としては辟易していた。ミーハーな女の子のテンションって、男は絶対についていけない。

「おい、神」

廊下に出てどうするかと考えていたらゲンが声を掛けてきた。どうやら俺が1人になるのを見計らっていたようで、少しだけ周りを警戒しながら隣に並ぶ。

「どうしたゲン？」

「ああ、ちょっと忠告しておきたい事があってな」

忠告ね……ゲンの雰囲気からして真面目な話らしいが、俺が1人になったところで話しかけてきたということは、仲間たちには余り知られらくない、あるいは余り気分のいい話じゃないって事か。

「それで？」

「親不孝通りは知ってるだろ？　最近そこで変な薬（モン）が出回っている。まだ表には出てきてねぇけど、かなり拙いモノらしいからな」

声を低くして言うゲン。思った通り余りメンバーには聞かせたくない話だな。うちには喜々として首突っ込みそうな奴らがいるからな。モモとかキャップとかガクとか。クリスも変に正義感を燃やしそうだ。

「しかも昨日、島津の野郎がうろついていやがったからな。それっぽい話は徐々にだが漏れだしてる」

「つまり、俺から仲間に注意を促しておけって事か……それはいいけど、なんで俺に話す？　ヤマでも問題ないだろ」

俺の疑問に口端を上げるゲン。この笑み……河原で自己紹介した時に浮かべた意地の悪い笑みと一緒だ。

「お前は連中の『兄貴』なんだろ？　だったらお前が注意すりゃあ言う事聞くだろ。なあ『ジン兄』？」

やっぱりからかってきた。妙に性格的に気が合うせいか、ヤマたちには決して見せないこういった態度を俺には見せてくる。嬉しくはあるが、からかうのは勘弁してほしいぞゲン。

「分かった、さり気なく忠告しておくよ」

「ああ、頼むぜ。無駄に俺の仕事を増やしてくれんなよ」

離れていくゲンの背中を見ながら、そういえば代行業のバイトをしてると聞いたのを思い出した。
親不孝通りに事務所を構えているらしい。そう考えると仕事の邪魔をするなという大義名分があるが、ゲンとしてはクラスメートを巻き込みたくないって気持ちだろう。

それを素直に表に出さないけど気にかける。なるほど、これがヤマの言っていた『ツンデレ』ってやつか。なかなか的を得ているじゃないか。

そんな事を考えていると、またしても別方向から声が掛った。

「おお、神ではないか。昼食はもうすんだのか」

声の主は英雄だったが、振り返る前に小さく息を吐き腹筋に力を込める。笑うなよ俺。廊下で爆笑したら恥さらしになるのは自分だ。
そう言い聞かせて振り返る。

「――っ！　よう英雄。そっちは相変わらず忙しそうだな」

何とか笑わずにすんだが次からは事前に表情筋にも力を入れておこう。『女王蜂』の姿を目にした途端、口端が歪みそうになった。しかもほんの一瞬だったにも関わらず目ざとく気付いたな『女王蜂』。
物凄い目つきで睨んでやがる。

「そうだ神。お前に伝えておく事がある」

おいおい、英雄もか。

「最近、堀の外の方ではガラの悪いのが派手に暴れているそうだ」

「『板垣3姉妹』とかいう名前を聞いたら近付かないようにして下さいねっ☆」

堀の外……親不孝通りのある一帯の事か。行方不明になる前もそれなりにヤバイ所だったが、どうやらずいぶんキナ臭い場所になったもんだ。

「危険なのか？」

「貴方なら問題ありませんが、一般人とは住む世界が違うでしょう。『君子危うきに近寄らず』ですねっ☆」

「わざわざどうも……英雄。少し忍足さんと話ししたいけどいいか？」

『女王蜂』の情報にもう少し詳しく聞いた方がいいと判断する。一応主である英雄に許可を求めておいた方がいいと思い声を掛けるとあっさりと了承が返ってきた。

「構わん。あずみ、我は一子殿をひと目見てくる。そこで待っていろ」

「かしこまりました英雄様っ！」

そう言って2－Fの教室に英雄が入っていくのを見送るとすぐに態度が激変した。雰囲気で分かる。俺としてはこっちの『女王蜂』の方が見慣れているから別に問題ない。まあそのせいでメイド服着てると違和感ありすぎて笑いが込み上げてくるんだけどね。

「おい『黒髪（ダークネス）』。いったいあたいに何を聞きてーんだ？」

「その『板垣３姉妹』って奴らの事をもう少し詳しく聞きたいくてね。調べてあるんだろ？　それで実際のところどれだけヤバイんだ？」

俺の問いに舌打ちし、顔を忌々しげに歪め頭を掻き毟りながらも『女王蜂』は律義に答えてきた。親切というよりは昔一緒の部隊にいたよしみだろうけど。

「最初は素人に毛が生えた程度だったが、どうやら最近はどっかの武芸者に教えを受けてるらしい。テメーからすれば大した事ねぇが、一般人には脅威って事だ」

「なるほどね……」

『女王蜂』の言う『一般人』がどの程度までを指すか分からないが、たぶん俺と同じ感覚で話していると思うからキャップやガク辺りは拙いな。カズも今現在の実力じゃあギリギリバヤイってところだな。

薬に危険人物。

こっちから踏み込む事がない以上、関わる事はまずないと思うが、こうして日常の学園生活の中にも徐々に広がり始めているのを考えると、向こうから寄ってくる事も１００％ないとは言い切れない。みんなに忠告をしなければいけないのは確かだが、新人２人、クリスとまゆっちのあの態度を見れば近いうちに必ず喧嘩が起る。

中も外も問題有り……少し頭が痛くなってきたな。

急にこめかみを押さえて黙り込んだ俺を訝しげに見る『女王蜂』の視線を受けながら、どうやって問題解決をするべきか考え込む俺だった。

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

ｓｉｄｅ　直江大和

秘密基地への道を歩きながら、俺はさっきであった不思議なお姉さんの事を考えていた。

大量の福引き券をもって商店街の福引きをやりに行ったキャップをも送った後、多馬川の河原の芝生で横になりながら知り合いにいろいろメールを送っていたら、陽気に当てられいつの間にか眠り込んでいた。

夕方になり慌てて起きた時、隣にその不思議なお姉さんが眠っていた。

呆然としていたら目を開き、『俺が気持ちよさそうに寝ていたからつられた』とか、『家族の次に寝る事が好き』とか、俺の土地でもないのに『ここで時々寝てもいい？』とか、思い返してみると本当に不思議な人だった。

春だしいろんな人が現れると感心してしまった。

そんな事を考えている内に秘密基地に到着すると、バイトのキャップとヒロとまゆっち以外全員が既に集まっていた。

聞けばヒロとまゆっちは屋上との事なのでそっちに顔を出すと、２

人並んで川神の工業地帯を眺めていた。

「ようヒロ。相変わらずまゆっちと仲いいね」

「まあ、1番最初のお友達だからね」

少し含ませた感じの言葉もヒロには通用しなかった。ていうより気付いていないねヒロの奴。ここは突っ込むべきか、何もしないでおくべきか、迷うところだ。

「わぁぁ……ここから真下を見るの勇気いりますね」

「落ちたら死（ダイ）な高さだね。ハードだな～」

「まゆ、古くなってるから余り乗り出すと危ないよ」

無邪気に声を出すまゆっちにさかさずヒロが言葉を掛ける。気の配りは兄弟に次いで聡いヒロだけど、なんかまゆっち相手だとみんなに対するものと違う気がするんだよな。

「す、すみません！　ついはしゃいでしまって！　わ、私、ご心配をおかけしてしまいましたか！？」

一転物凄い勢いで謝るまゆっちにヒロは苦笑いを浮かべて溜息を吐く。そして小さく首を振ってゆっくりと近付いて横に並び、落ち着かせるように会話に間を置き遠くを眺めると、それにつられまゆっちも一緒に夕日を眺めだした。

俺は少し離れて2人のやり取りを見る。

「……綺麗な茜空です。いい場所ですねここ」

「学校の屋上よりも天に近いからね。モモ先輩も気に入ってる」

「……」

「ホームシック？　まゆ？」

「あ！　え？　なんで分かるんですか？」

「何となく……夕焼けってそんな気持ちにさせるよね……戻ろうか？　みんなと一緒にいれば寂しくなくなるよ」

「はい、そうですね」

何なんだろうねこの2人の雰囲気。どう見ても友達同士じゃない。甘ったるいわけじゃないけど入り込めない雰囲気を見ると、兄弟と姉さんともまた違うある種のお互いを想い合っている理想の恋人同士に見えるのは何故だろうか？

いや、恋人というより長年連れ添った夫婦？

穏やかに笑い合う2人を見て、何故かそう思ったのだった。

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

ｓｉｄｅ　暁神

クリスがもてなしを受けている最中にヤマたちも戻ってきた。

和やかな雰囲気のヒロとまゆっちと違い、ヤマは何故か少し疲れた感じだな。２人の熟年夫婦っぽい雰囲気に当てられたか。お疲れさん。

「で、この棚には囲碁とか将棋とかのボードゲームが置いてあるんだよ」

１つ１つの棚を丁寧に説明しているタク。こういう時に率先して説明役を買って出るとは思わなかったな。まあいつもその立場のヤマがいなかった事と、タクもこの場所が好きだからだろう。雰囲気的にミヤの次にここに入れ込んでいるのはタクだと思う。

「凄いな。何でもあるんだなここは」

廃ビルの一室とは思えないほどに並んでいる棚を見て、感心したように呟くクリス。今のところ何も問題が起きる雰囲気じゃないけど、さてどうなるかな。頼むから無神経な発言だけはしてくれるなよクリス。

「みんなで持ち寄ったからな。クリも好きに持ちこめ。あとポップコーンだけはたんまりと常備してあるからな」

「今ならポップコーンを製造する過程を大サービスで見せてあげるよ」

モモの言葉にクッキーが少しだけ自慢気に言う。それはに俺も驚いた。

いや別にポップコーン製造機能に驚いたわけじゃない。あの九鬼財閥が最新のロボットにポップコーン製造機能がついていたい事に驚いたんだ。

クッキーは自分をご奉仕ロボットって言ってたが、いったい何を思ってこの機能をつけたんだろうね、九鬼の技術者たちは……謎だ。

「なるほど。クッキーが製造しているのか……だが今はいい」

さすが見たそのままを信じるクリス。俺が思った疑問なんか欠片も気にしなかっただろう。

「……ここは漫画の棚か」

「みんながそれぞれオススメを持ってきたから面白いのばっかりだよ。持ち出しも自由だから」

視線を移動させ漫画本が並ぶ棚をみるクリスにタクはちょっと楽しそうに言う。漫画やアニメ、ネットが好きなタクにしてみれば、自分の分野だから気合が入るのかな？

「『明日の○ョー』とか『○ースをねらえ』とか読んだ事ある？激アツよ！　今は『はじめの○歩』とかもオススメね！」

「スポ根系のストックはカズの趣味か」

いろいろなジャンルの漫画本があったが、誰が持ち込んだか分かるラインナップだったな。それでもスポ根系はキャップかと思っていたが、まさかカズだったとは……ある意味で納得ではあるが。

「電気は通ってねぇから、電気系統はクッキーのコンセントに繋ぎな。こんな感じでほら。電力源だからよ」

「ははっ……やだっ……あ、と、突然はマナー違反だ」

ガクが急にクッキーについていたコンセントに何かの電源コードをさした。すると突然くすぐったそうな笑い声を上げるクッキー。ロボットに触覚はないからああやって反応するようにプログラミングされていると思うんだか……本当に九鬼の技術者はいったい何を思ってクッキーを作ったんだろうか。

「携帯ゲームソフトとかも置いてあるんだ。これは僕のこだわりのソフトだから面白さは保証付き。ネタソフトも押さえてあるよ」

生き生きと話すタク。やはり得意分野、しかも唯一タクが風間ファミリーないで上位に食い込む事が出来るゲーム関係の話は本当に嬉しそうに話す。

しかし最近のゲームは本当にクオリティが凄い。俺自身あまりゲームには興味がないから知らないが少なくとも3年前より凄くなっているのは疎い俺でも分かった。

実は先日の水曜日にここで少しゲームをやらせてもらったのだが、操作は思ったより簡単だった。だけどそれを見ていたヤマとタクに『初心者が玄人顔負けの操作をするな』と口を揃えて言われた。

あれって実は慣れるまで結構時間がかかるものらしかった。全然そうとは思わなかったけどな。レスポンスも若干遅く感じたぐらいだったし。

「うーん」

一通りの説明を受け終えたクリスは何やら考え込んでいる。

だがあの表情にあの雰囲気……嫌な予感がしてならない。先手を打って止めるべきか。それともここで言わせてぶつけさせるか。

逡巡は一瞬。何も言わずに成り行きに任せよう。

昨日も思ったが、こういった問題はぶつからなければ意味がない。クリスには自分の考えが何においても正しいわけじゃないと分からせるため、ミヤには悪いが自分の居場所はここだけじゃないと少しでも依存を下げるため、この問題は避けるわけにはいかない。

ヤマもいるし、あのキャップがいるから何とかなるだろう。いつまでも俺が出張っても意味がない。少なくとも俺がいない2年8ヶ月の間、何も変わる事なく風間ファミリーは存続したんだ。

これぐらいの問題で揺らぐ仲間じゃない。俺はそれを信じればいいんだ。

それじゃあ、問題提起を頼むぜクリス。

「で？　この場所はどういう意味があるんだ？」

俺の期待通り、クリスの口から場の読めない言葉が出たのだった。

第６８話　仲間のため、悩むナンバー２（後書き）

あとがき～！

「第６８話終了。あとがき座談会、司会の春夏秋冬　廻です。今回のお相手は――」

「どうも、暁神です」

「いろいろ考え込んでいるオリ主。ハゲないように気をつけようね」

「大きなお世話だ！」

「さて今回のお話ですが、まあ分かりやすく言えば『周りにいろんな問題がありますよ』と言う事です」

「思いっきり端折ったな。間違っちゃいないが作者としてどうよ」

「そのまんまだからどうしようもないだろ。いちいち解説するにも時間がない」

「同感だな。ところで薬の話、竜舌蘭ルート潰しておきながら出したんだな。あれも今後のための種蒔きか？」

「一応ね」

「で、板垣家も出すと」

「まじこいの二次創作やってんだもん。板垣家は出さなきゃだめだ

ろ」

「いや、出さなきゃ駄目っていうルールはないだろ」

「でもあれだけ個性の強いキャラを出さないわけにもいかないだろ。今後の展開にもからむように構想しているんだから」

「てことは、釈迦堂さんも出るわけね」

「もちろん出すよ。でもまあ今後の展開についての話はここまで。下手するとボロが出る」

「はいはい、で？　次がミヤブチ切れのシーン？」

「なんかそれだけ聞くとヤバいシーンになりそうだな……間違いじゃないけど、クリス問題発言→衝突→一応の解決のシーンをやります」

「一応って……」

「間違ってないだろ？」

「間違ってはいないけどな……」

第６９話　仲間のため、此処が在る意味（前書き）

第６９話投稿。

今回少し難しかったです。

第６９話　仲間のため、此処が在る意味

「この場所はどういう意味があるんだ？」

この女は今なんて言った？

「遊びたければ家でもいいだろう」

家でもいい？

「わざわざこんな所に集まる意味が分からないぞ」

こんな所？　集まる意味が分からない？

「少なくとも、建設的な行為ではない」

なんであんたなんかにそんな事言われなきゃいけないんだ。

「このような廃ビルはさっさと取り壊すべきだな」

ああ、そうか。

こいつはいらない奴なんだ。私たちの聖域を否定する馬鹿なんだ。

私の世界を無遠慮に破壊する崩壊因子なんだ。

こいつは――――敵なんだ。

ｓｉｄｅ　暁神

「お前、死ねよ」

囁くような声だった。

決して響き渡るような声でも、透き通るような声音でもなく、ただひたすらに暗く淀みを含んだ呟きだった。

だけどその呟きは瞬く間に部屋全体に広がった。

部屋の温度が下がった。恐らくここにいる全員がそう感じたはずだ。

そう感じるほど今のミヤの雰囲気は危険極まりないものだった。

滅多に見せない本気の怒り。徹底的に敵を排除するという意思を持った、まさに言葉通りに殺す事すら厭わないような殺気を放っている。

「っ！？」

その殺気をもっとも強く受けたクリスは言葉を詰まらせた。

「よくも……よくも好き放題言ってくれたなぁぁ！！」

「京！　やめろ！」

ヤマが真っ先に声を上げたと同時に、モモがミヤを押さえていた。

危うくクリスに飛び掛かるところだったが、俺と同じように冷静に状況を見ていたモモがすぐに反応したのだった。

恐らくモモもこうなる事をあらかじめ予想していたんだろう。

だが押さえられたからといってミヤの怒りが収まるわけがない。

「分からないだろお前には！　この場所が！　この空間が！　どれだけっ！　どれだけ大切なのか！！」

怒りと悲痛がまじり合った叫び。ミヤの心の声を表した言葉。普段冷静なミヤの突然の豹変にクリスは驚きついて行けていない。だがそれすらお構いなしにミヤは言葉を続ける。

「だからこんな新参者を入れるの嫌だったんだ！　壊すべき？　よくもそんな事をこの場所で言ってくれたな！？　何様だと思ってやがる！」

ミヤにとって許せない言葉だったに違いない。

秘密基地（ここ）を神聖化し、金曜集会（このじかん）を拠り所にし、仲間（みんな）に依存しているミヤ。

確かにクリスの言葉は自分の考えを押し通しての言葉かもしれない。けど俺はこのミヤの心もどうにかしなければならないと思っている。

今のミヤにとってこの秘密基地（へいそくさ）での仲間（れたせかい）との時間が全てになっている。

その考えは、今回のクリスの言葉とは全く別の意味で問題を起こす事になるだろう。

だが今はいずれ起こる問題よりも目の前の現実だ。

「み、京。待て、話を……」

「さっさと帰れ！　お前なんか仲間でもな――」

「京！」

とりつくしまもなくクリスを拒絶するミヤだったが、それでも言ってはいけない言葉がある。それが口から出る直前に、ヤマはミヤを抱き締めた。

「落ち着け」

「大和……だって、だってこいつ！　この場所を侮辱した！　否定したんだ！　ゆ、許せないよ……！」

最も信頼しているヤマに抱き締められた事で、多少の落ち着きを取り戻したものの、今度は感情が怒りから悲しみへと移行している。その証拠にだんだんと声が震えだした。

「ヤマ、もっと強く抱き締めてやれ」

怒りよりも悲しみの方が受け止めやすい。怒りは理不尽しか与えないが、悲しみは慰めを誘う。ミヤも別に慰めてほしいわけじゃないと思うが、今は思いを吐き出させる方が先だ。

「ああ。京、もういいから」

「う……うぅ……うぅぅぅうう」

俺の言葉に答えヤマはミヤを強く抱きしめると優しく声を掛けた。ミヤもまたそんなヤマに縋りまたしても珍しく呻き声を上げ泣いた。

場は静まり返っている。

クリスとまゆっちはどうしてこうなったのか分かっていないが、俺

たちはミヤの気持ちが痛いほど分かる。だから今は何も言わないし、言うべきじゃないと思った。

「な……何だ。何が気に障った。自分は正しい事を言ったはずだが……」

本当にどうしようもないお嬢様だ。この状況になってもまだ自分の非を理解していない、自分の言葉でどうしてこうなったのか雰囲気を読めていないクリスに、呆れすら通り越してしまった。

確かに価値観の違いを言葉にして伝えるのは難しい。それなのにクリスはその価値観を自分の中の物差しだけで判断して『いい』『悪い』『必要』『不必要』を決めている。

それを今まで否定されなかったからこそ、今こういう状況になっているのだが、もう少し空気だけは読めるようになって欲しい。今この状況で、そういう発言をする事がどういう結果に繋がるのか全く分かっていない。

「クリス、やっぱりそれが正しいとまだ思ってるの？」

反応したのはタクだった。

「あ、ああ」

「じゃあ、本当にさよならだね」

「え？」

小さく声をもらしたクリスは、タクの言葉の意味を全く理解出来て

いないようだった。呆然となるクリスを無視してタクの容赦ない言葉は続いた。

「ちょっと残念だけど仲間にはなれなかったね。でも学校ではまた普通に話そうよ！　それじゃあ気をつけて帰ってね～」

これは少し予定外だった。まさかタクまで切れるなんてな。

それほどタクもこの場所に依存をしているのかと思ったが、雰囲気から察するにどうやら違う。場所じゃなくタクは仲間の絆を大切にしているんだ。だからこそミヤを傷つけておきながら何が悪いのか気付いていないクリスを許せないんだろう。

「え……あぅ……え？　あ、あの」

ミヤだけじゃなくタクまで不穏な雰囲気になった今の状況に、まゆっちは対応できずオロオロしている。いつもならすぐにフォローするヒロも、何か思うところがあるんだろう、何もせずにまゆっちを見ていた。

「理由を言ってくれ！　納得できない！」

納得できない。確かにそうだろう。自分では正しい事を言ったはずなのに、ミヤとタクに拒絶されたのだから。だが周囲を見回すクリスに俺たちは言葉を掛けない。

ヤマはカズに目で『何も言うな』と釘をさしている。モモも俺が何も言わない事を不思議に思ったのか視線を向けてきた。

その視線に俺が腕を組んだままで肩をすくめ、特に動くつもりはないとの意思表示をすると、『分かった』とばかりに小さく頷いた。

「……あー……なんつーかな、んー」

「私が言ってやろう」

沈黙に耐えかねたガクが何かを言おうとした時、それを遮るようにモモが声を上げた。クリスの視線を真っ直ぐに受けて、そしてモモも真っ直ぐ見返してはっきりと口にした。

「クリ、お前ウザいぞ」

「え……？」

戸惑うクリスを無視してモモは続ける。

「意味がないってのも、建設的じゃないってもの、全部お前の物差しだろうが。私たちは理屈じゃなく、好きでここに集まってるんだ。誰に指図されようがやめる気はないぞ」

きっぱりとモモに言われクリスは視線を彷徨わせる。ようやくこの雰囲気が自分のさっきの言葉のせいだという事を、おぼろげながらも理解し始めたんだろう。さっきまでブレなかった気配が揺らめき出した。

「自分は、ただ……」

「もうよせクリス。ここではお前が悪い」

「悪い……自分が悪だと！？」

ヤマの『悪い』の言葉にはさすがに反応したな。いや、恐らくクリ

スの反応する言葉を選んで口にしたんだろう。矛先を自分に向けさせるためか、面と向かって言い合うためか。さて見物だな。

「この周囲の空気が分からないのか？」

「悪などでは断じてない！　確かに自分の物差しではあるが自分以外も普通この意見のはずだ！　何故それが悪になるか分からないな！」

確かに普通なら同じ意見だろう。だがそれをこの場で言うか言わないかの違いだ。クリスはそれを分かっていない。

『悪』の対義語は『善』だ。『正義』じゃない。確かのクリスの言葉は『義に正しい』のかもしれないが、この場の俺たちの中では『善』じゃなく『悪』になるんだ。

「お前はさぁ、なんて言うか、頑固すぎる。いい機会だから少し反省しろ」

「お前に説教されたくはないな。いい機会と言うなら自分も言おう。大和の行動の数々、策と言えば聞こえがいいが、お前はただ“せこい”だけではないか」

指差すクリスにヤマは飄々と答える。

「ああ、せこいしズルイし卑怯だぜ。ただの褒め言葉に過ぎないなクリス。俺は勝てばいい。ただそれだけだ」

「見下げ果てたな。それを肯定するとは」

ヤマを侮辱するクリス。それが自分の物差しで言っている事にまだ理解していないようだ。１０人が１０人、同じ容姿の人間が１人もいないように、同じ考えの人間も１人もいないのにな。

「大和は仲間がなるべく無傷になるよう、そのための策を出しているんだよクリ。ま、基本せこいってのも確かにあるけどな」

咎めるようにクリスに行った後、後半はヤマに向かって言葉を掛けたモモ。確かにヤマは切羽詰まったり、覚悟を決めた時以外は基本せこい策を弄するからな。

「仲間のために？　……今ひとつ理解出来ない」

それは軍人の娘で軍人の父を尊敬する娘としては致命的な言葉だよクリス。
作戦や策略に『卑怯』なんて言葉は存在しない。そう思うのはそれを見た個人の判断だ。命令されれば自分が『卑怯』と思う作戦を遂行しなければならない。それが軍だ。

それすらも理解していないのだろうか、クリスは。

「あのっ、自分ごときが口を挟んで恐縮ですが……その……余り怒らないで、落ち着いて、その」

「そろそろ、そういうのやめようよ、まゆ」

突然声を上げたまゆっちにヒロの冷たい言葉が掛る。思いもよらない、恐らく今まで掛けられた事がないヒロの声音にまゆっちは身を固まらせた。

「丁寧に喋るのは別にいいけど……いちいち『私ごときが』とか言うのは駄目だよ。それじゃあキャップが言った事を全く理解していない事になる」

ヒロは言葉を切ってまゆっちと向き合う。同い年という事もあるんだろうけど、やっぱりヒロはまゆっちに対しては余り遠慮をしていない。

「人の顔色を伺いながら物を言うのは、度が過ぎると不快を与えかねないよ。いいまゆ、僕たちは“対等”の仲間なんだ。その仲間に遜(へりくだ)ってたら逆に失礼だよ」

「は、はい……」

これなら特に口出しする事もないか。まゆっちも仲間内で唯一の同い年で1番の友達のヒロの言葉ならちゃんと意味を理解するだろう。となると、残りは――

「……さっきから意味不明だ」

苛立ちを含んだ声で呟くクリスにどうやって分からせるかだな。言葉を掛けようと思ったが、今回は出来るだけ傍観に徹しようと思っている。ヤマが何かを言うみたいだから任せるか。

「さっきの何が意味不明だ、お馬鹿娘。クリス、お前の大切な持ち物を言ってみろ」

「持ち物？」

「ああ、何でもいいから言ってみろ。物理的なものだぞ」

なるほど、そうやって分からせるって事か。さすが頭が回るね。

「……親からもらったぬいぐるみなどとか」

「俺はぬいぐるみの良さなんて分からないな。部屋がかさばるから捨てちまえよ」

「貴様！！」

物凄い迫力で詰め寄ってるけどなクリス。ヤマの言葉はさっきお前がミヤに言った言葉なんだよ。それを分からせるためにヤマもクリスの迫力に負けじと睨み返している。

「お前のさっきの行動のマネだ、馬鹿！　お前のぬいぐるみが俺たちにとってのこの場所なんだ！　誰が何を大事にしてるかなんて人それぞれだろ。それを侮辱していいはずがない」

ヤマの指摘に息を呑むクリス。ようやく理解したようだ。

「……そうか、それだけ大事な場所だったんだな……自分の今の怒りと同じ気持ちだとすれば、さぞ先ほどの発言は腹が立っただろう……」

どこか悔いるように言うクリスをみんながじっと見つめる。少しの間後悔するように俯いていたが顔を上げ、何かを決意したような瞳で周りを見渡したクリスは、勢い良く頭を下げた。

「椎名京、みんな、謝罪する。すまなかった。今後はこのような発言をしないと誓う。だからここにいさせて欲しい」

「そ、その……私もすみませんでした！　まだまだ勉強不足です！　そ、それでも！　それでもまだ私もみなさんと一緒にいたいです！」

自分の非を認め潔く頭を下げるクリスと、まだまだ遠慮がちなのは治ってないけどしっかりと自分の気持ちを主張したまゆっち。

謝罪と、心からの言葉を聞いて、一応みんな溜飲は下がっただろう。さて、じゃあそろそろ来る我が風間ファミリーのリーダーに全てを纏めてもらいましょうかね。

「おっーーす！　いやいやいや聞け聞けお前たち！　俺の運たるやまさに豪運と言っていい領域だぜ？　ガラガラ回しまくって豪華景品ＧＥＴだぜ！　ささ、寿司の残りをつまみつつもみんなで俺の偉大さを祝ってくれ！　まぁ今日のネタは卵だらけだがな！　……ってあれ？　何だこの空気？　ずるいぞうみんな！　俺のいない間に何青春っぽい気まずい雰囲気になってるんだよ！！」

気まずい雰囲気なんのその。キャップの登場で全てが吹っ飛んだのだった。

「ま、１回ぐらいこういうの、仕方ねぇわな」

ヤマの説明を聞き終えたキャップの感想。確かにその通りだがいともあっさりひと言で終わらせるあたり、キャップのキャップらしさと言うか。それで場を納めてしまう辺り、本当に不思議なカリスマを持つ男だ。

だがそれでもまだ少し納得のいかないミヤではあったが、キャップに命令されたヤマがフォローするから、そのうち浮上するだろう。

「とりあえずみんな、今ちょっと気まずい思いをした関係を修復する意味で、連休旅行にいかねーか？」

また唐突な意見だなキャップ。

「旅行！？」

「いきなり発言したなお前」

キャップの言葉に今までずっと黙っていたカズがいち早く反応したのを見て、ガクが呆れたように呟いた。

「いやー、アタシもさっきクリに言おうとしたけど、直江さんちの大和君がアイコンタクトで自重って」

「僕としてはジン兄の沈黙の方が怖かったよ」

黙ってた事の種明かしをするカズの言葉につられたのか、タクがちょっとだけ顔を引きつらせながら言った言葉に全員の視線が俺に集中した。

それじゃあ種明かしとまではいかないが一応言い訳っぽく言ってみるか。

「別に俺が諫めても良かったけど、今回は傍観に徹した。それにキャップも言ったけど、1回はこういった問題を早めに起こさないと、後々はややこしくなるからな」

「って事は、ジン兄はこうなる事を最初から分かってた？」

鋭いねヒロ。その通りだと頷いたら今度はミヤからは冷めた声、クリスからは不機嫌そうな声が掛けられた。

「人が悪い。極悪だよジン兄」

「では何故、あらかじめ教えてもらえなかったんだ」

言いたい事は分からないでもないけど、もう少しオブラートに包んで欲しいね。

ミヤには悪かったと思うがクリス、お前は言っても分からないだろ？　何で教えなかったかは充分に心身で感じ取ったはずだから、あえてもう言葉にはしない。

だけど、これで新しい風が風間ファミリーの中に通った。これを機にミヤの心の依存を少しでも解消出来るようにしていかなければならないな。

改めて感じたが、かなり拙いところまで行ってる。どうやらもう１度仲間内で問題を起こさないといけない時が来るようだ。それだけは心に留めておこう。

「ま、終わった事を蒸し返す必要もないだろ。それでキャップ、旅行ってのはもしかして商店街の福引か？」

「おうよ！　見事引き当てて来たぜ！　２泊３日箱根旅行団体様招待券！」

そりゃまた凄いな。キャップはそれ以外が残念賞のティッシュだったのが悔しいようだが、それでも十分過ぎる成果だ。絶対天運を司

った守護霊がついてるねキャップは。

その後はキャップがバイト先からも持ってきたネタが卵だらけ寿司パティーで、穏やかにまったりと時間が過ぎていった。

箱根旅行が3、4、5日で明日準備の明後日出発。
ちょっとした連帯感が生まれた怒られた者同士。
ミヤはヤマに1回だけだが食べさせてもらって機嫌復活。

そんな中でまゆっちが見つけたフォトスタンドに入った1枚の写真。
7年前の夏の日。竜舌蘭を守った昔話をクリスとまゆっちに話して聞かせた。
そして50年後、今度はクリスとまゆっちも一緒に写真を取ると新しい約束をして、今週の金曜集会は終わりを迎えたのだった。

卓「ねえちょっとキャップ。この招待券10人までなんだけど?」
京「私たちは11人……ガクトの留守番確定だね」
岳「なんで俺様なんだ!」
翔「1人ぐらいどうにでもなるだろ。気にすんな」
大「いや、どうにもならないぞキャップ。でも実際どうする?」
由「あ、あの……」
緋「自分だけ行かないって意見はなしだよまゆ」
松「こいつは手厳しく見抜かれちまったぜまゆっち」
ク「1人だけ別に予約すればいいだけだろ?」
一「のけもの扱いは嫌よー。みんなで行ってこそ楽しいのに」
神「その事だけど、俺とモモで別に予約するから、招待券は9人で

使ってくれ」

9人「「「「「「「「「「「え？」」」」」」」」」」」

百「恋人同士のあま～い時間を邪魔されたくないしな。な、ジン？」

神「その気持ちも無きにしも非ずだが、久し振りに2人っきりの時間が欲しいからな」

第６９話　仲間のため、此処が在る意味（後書き）

あとがき～！

「第６９話終了。あとがき座談会、司会の春夏秋冬　廻です。今回のお相手は――」

「川神一子よ！」

「最後のおまけを抜くと、本編でたった2回しか喋っていません。ワン子です」

「うるさいわね！　大和に睨まれたんだからしょうがないでしょ！」

「どんだけ躾けられてんだよこの犬っ娘は……まあいいか。さて今回のお話ですがどうだったでしょうか」

「どうと言われてもね……アタシほとんど見てただけだし」

「いやだからこそ客観的に感想が言えるだろ」

「キャッカンテキって何？」

「それすら分からんのかワン子……もういい。さて今回は神視点でやらせていただきましたが、思った以上に難しかったです」

「難しかった？」

「書いてて思ったけど、今回を神視点にしたら結構な上から目線に

なってしまった」

「そうかな？　ジン兄っぽいと思うけど」

「そうでもないと思うけどな。まあ今回の神視点でやった1番の理由は、原作のこのシーンを見たときの作者の気持ちをそのまま代弁してもらいたかったから、って思いもあったからね」

「どこら辺が？」

「まあ、クリスに発言に対する神の考えの殆どなんだけどね。その中でも『悪の対義語の事』とか『作戦策略に卑怯なんてない』ってのは本当に考えた事」

「ふーん……よく分かんないわ」

「あ、そう……」

「それで次回はどうなるのよ？」

「旅行前日か、旅行当日か、どちらかです」

「ハッキリしないわね」

「たぶん前日の準備……だと思いますのでまた見てやってください」

第７０話　箱根旅行、準備の前日（前書き）

第７０話投稿。

やっと旅行編です。

第７０話　箱根旅行、準備の前日

――２００９年　５月２日　土曜日　ＡＭ９：００――

ｓｉｄｅ　篁緋鷺刀

「緋鷺刀、とりあえず言われた通り明日の宿泊予約取っておいたぞ」

「うん、ありがとう」

凛奈さんにお礼の言葉を掛けながらも少し遅めの朝食の後片付けを続ける。

昨日の金曜集会で連休中に箱根旅行に行くことが決まった。確かに決まったけど出発は明日。急な出発に宿の予約なんてしていない。そこで『温泉旅行好きの凛奈さんなら箱根湯本にも馴染の旅館があるんじゃないか』とのジン兄の言葉に、ダメ元で予約が取れるかどうかを聞いたら２つ返事で引き受けてくれて、今日の朝一で予約を取ってくれたというわけ。

ちなみにその宿、凛奈さんが執筆活動中によく籠る馴染の宿だったため、多少の無理がきいたらしい。本当にありがたかった。

「しかし大部屋１つと２人部屋１つ、ねぇ……」

予約で取ってもらった部屋の事を呟いていたと思ったら急に黙り込んだ凛奈さん。

今回の旅行での部屋割は、モモ先輩とジン兄が２人部屋で残り全員

で大部屋になった。キャップが言うには大人数で行くんだから部屋も当然大部屋らしい。高校生の男女が大部屋で寝泊まりするのはどうかと思うけど、たぶん修学旅行みたいなノリなんだと思う。

まあ、大部屋になった事で京ちゃんが舌打ちして大和君は安堵していた。２人の気持ちも分からないでもないけど、あそこまであからさまなのも凄いよね。

そんなこと思い出し、黙り込んだ凛奈さんを不思議に思いながらも、後片付けも終りシンクを綺麗に拭き終えて振り向いた時、爆弾発言が飛び出した。

「緋鷺刀、大人になってくるのは構わないが避妊は――」

「何言ってるんだよ凛奈さん！　２人部屋はジン兄とモモ先輩だからね！」

「――ちゃんとしろと暁の坊主に言っておけよ」

え？

何？　ジン兄への伝言だったの？　突拍子もない凛奈さんの発言を遮るように言ったけど……もしかして僕、墓穴掘った？

その思いを肯定するように、凛奈さんの顔に厭らしい笑顔が浮かべている。まるで最高に面白い玩具を手に入れた時のような笑顔。あれは間違いなく僕をイジリ倒す気満々の顔だ。

身の危険が差し迫っているのは間違いないが、逃げようにもリビングの入り口は凛奈さんの後ろ。逃げ道なんて最初からない袋小路に

突っ立っている僕。

「さぁて緋鷺刀君？　君はいったい私が誰と誰の事に対して言ったと思ったのかな？　叔母さんにも分かりやすく教えてくれるよね？」

こんな時だけ喜々として自分を叔母さんって言わないでよ。それだったらこれからも叔母さんって呼びますよ？　まあそう言ったら地獄だと思うけど……

みんな……僕はもしかしたら旅行に行けないかもしれない……

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

ｓｉｄｅ　黛由紀江

「お掃除、お掃除」

寮の前の道を箒で掃きながら、私は昨日の案内された秘密基地での金曜集会でのあらましを思い出しました。

タカさんが言った言葉。私たちは対等の仲間。

確かに私はみなさんに認めていただき風間ファミリーに入る事が出来ました。でもその後私は何をしたでしょうか。タカさんの言われるように、喜んでもらいたい一心で何か役に立てないかを探し、嫌われたくない一心でずっと顔色を伺ってばかりでした。

でも友達がいなかった私には、友達との付き合い方が分かりません。タカさんの言葉の意味は痛いほどに分かります。ですが何をどう行

動すれば『対等』になるかが分からないのです。

「よう。朝から何してんだ？」

少し思い悩んでいたらガクトさんがいらっしゃいました。

「あ、ガクトさん。おはようございます。寮の外回りを少し掃除しようかと思いまして」

「んなもん、うちのかーちゃんにやらせとけよ。管理人なんだからさ」

確かにそうなのかもしれませんが、掃除とかをしていると心が落ち着くんです。考え事をする時は何か家事をしながらの方が捗るのってておかしいですね。

「これは好きでやってる事なので」

「ま、そう言うなら別にいーけどな」

そう言って苦笑いを浮かべるガクトさん。でもちょうどいいタイミングです。少しみなさんに聞きたい事があったのでガクトさんにお伺いしてみましょう。

「あの……ガクトさん、質問なんですけど」

「おう、何だ？」

「昨晩から、友達の接し方、というのを考えていたんですが、良く分からなくて……あの、何かコツみたいなものはあるんですか？」

「分からねーな」

ええっ！　わ、分からないんですか！？　あんなに仲のいい風間ファミリーのみなさんがいらっしゃるのに、どうすれば仲が良くなるか分からない！？　は！　もしかしてそれは誰かに聞かなくてもお友達がいればおのずと理解出来るものだんでしょうか？　そうなると私には到底至る事の出来ない命題じゃないですか！

「テンパってるところ悪いんだけどよ、俺様が『分からねーな』って言ったのは、タカとは仲いいのになんでそんな事聞くのかが、分からねーから言ったんだ」

「え？」

それは言ったどういう意味でしょうか？　確かにタカさんとはみなさんよりもお友達らしいお付き合い方が出来ていると自分でも思いますが……

「なんつーかさ、タカと話している時のまゆっちって壁がない感じがするんだよな。自然つーのかな。そんな感じ」

そうかもしれません。タカさんとは昔1度出会い、その時は一期一会の出会いだと思い込んでいたし、私を在るがままに見てくれたから、素直に相対する事が出来ました。
そして川神学園で再会し恥ずかしすぎる姿を見せてしまったので、タカさんに対しては何と言いますか、在りのままの自分で相対するのが当たり前に思っていたんです。

「いきなり俺様たちにもタカと同じようにしろとは言わねーけど、

壁だけは作らねーでほしいな。遠慮なく言える間柄にはなってるつもりだぜ。みんな」

「はい、分かりました！」

後は私の心持ち次第という事ですね。頑張ります！

side out

side 直江大和

「よし、パーティーグッズもしっかり買った」

「これで明日の準備は出来たな」

俺と京は明日の準備も兼ねて買い物をしていた。

本当は京とじゃなくてキャップと一緒に行こうかと思っていたが、あいつは朝一でどこかに消えていた。それで仕方なく京を連れて商店街へと繰り出したわけだ。

しかし昨日は大変だったな。まあそのお陰でクリスもまゆっちも前より風間ファミリーに馴染む事が出来るとは思うが、実は未だに俺とクリスの個人的な溝は完全に塞がっていない。

昨夜も寮に戻った後、クリスは俺が朝プレゼントした災害時緊急避難セットを返そうとしてきた。一応持っておくようにと返却は拒否し、俺が仲間のために策を考える事は理解してくれたが、完全に俺自身の考えを理解したわけはないらしく、もう少し考える時間が欲

しいと言われた。

ソレには俺も反対しなかった。考え方はそう簡単に変わるわけがないし、ましてや自分の思想とまるで正反対な考え方をすぐに理解しろと言うのも無理な話だ。

俺の方はクリスの考えも理解できるし、上手く付き合う事も出来ると思っているから、後はクリスの方から理解してもらいたい。

風間ファミリーに入った以上、付き合いは学園を卒業しても恐らくずっと続くだろう。いつまでもギクシャクしていてもつまらないし、そんなの疲れるからな。早めに理解してほしいもんだ。

「ちょっとゲーセン見てくか？　モロがいるかもしれないし」

「うん、そうだね」

いったんそこで考えを終え、京に声を掛けてゲーセンの自動ドアをくぐった。

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

ｓｉｄｅ　川神百代

「ワン子、いつも通り海まで走ったら休憩だ」

「うんっ！」

「海まで走るのか……まあそれぐらいなら軽いしな」

夕暮れの道を私はジンとワン子と一緒にランニングしている。
今日の修練のメニューも殆ど終わり後はこのランニングだけ。目的地はその都度変わるが今日はワン子のリクエストで海まで行くことになった。

「よーし！　ラストスパートダーッシュ！」

「おいカズ。海まで距離あるのにもうラストスパートかよ」

「最近は飛ばすからなぁ……待てー！」

一段と速度を上げたワン子の背をジンと一緒になって追う。だが頑張り続けるその後ろ姿を見る度に、私はどうする事も出来ないもどかしさを感じる。そんな私の心を感じ取ったのか、ジンは走りながらも私の頭を軽く小突いてきた。

『考えすぎるな』そう目が言っているのを見て小さく頷き返す。

たどり着いた海は、沈んでいく夕日に照らされ茜色にその姿を変え輝いていた。

私は夕日が好きだ。沈みゆく太陽に照らされる空は、赤と青の色がまじり合い独特の雰囲気がある。その一瞬の時間が時折私の心を表しているかのような感じを受ける。
逆にジンは朝焼けが好きらしい。登る朝日に照らされ黒から白んでいく空が心を洗い流してくれるのを感じるらしい。さすが『暁』なだけの事はあるな。

「ふぃー。走った走った」

「全く練習熱心だなワン子は」

「あれも一種の才能だろ。努力を苦に感じないんだから」

身体にかかる疲れを気持ちよさそうに感じさせる笑顔で海を見つめるワン子。その熱心さに私とジンは呆れた。

「いつまでもお姉様たちの後ろを走ってるわけにはいかないわ。いろいろな意味でね！　アタシちょっと海に浸かってくるねー！」

何がワン子を突き動かしているか分かっているから、返す言葉が私にはなかった。

ワン子の目指すものは私と同じ位置に立つ事。それがどれほど難しい事なのか本人もちゃんと理解している。それなのに諦めず、ひたすら前を向いて突き進んでいるワン子に、私は次期当主としての決断をしなくてはいけない。

素足を海面に着けてはしゃぐワン子の姿を、夕日の眩しさとは違うもので見る事が出来ない。そんな私の背中を優しく押し出す温かい手。

いつも私を支え励ましてくれる手に感謝し素足になると、ワン子と並ぶように海に入る。

「冷たいが……心地いいな」

「うん……綺麗な夕日だねお姉様」

後ろにいるジンの優しい視線を背に姉妹で隣に並んで夕日を眺める。

だけど夕日を眺めるワン子の目はいったい何を見据えているんだろうか。

「川神の夕暮れがこんなに綺麗って事はさ、きっと世界各地の夕暮れも絶景だね」

「そうかもなぁ」

「アタシも学校卒業したらお姉様たちと合流するから。世界各地の武者修行……楽しそうよね！」

私は学園を卒業したら、とりあえず修行と言う事で世界各地を回ると決めている。これはだいぶ前からジジイとの約束でそのために私は学校に行っているのだ。ちなみにジンも一緒に行くと約束してくれている。

「私たちと一緒にか。普通に野宿とかするかもしれんぞ？」

「いいじゃない。眠くなったら大地に寝転んで、各地を転戦し名を広め見識を広げ、移動は走り。何もない荒野をお姉様とジン兄と一緒に走っていく。これもロマンよね」

「化粧っ気のかけらもないな」

本当にただひたすら真っ直ぐ私を追いかけてくるワン子。嬉しくもあり悲しくもある。だけどそれを伝える事が出来ないから、おどけて言うしか出来ない。

「内面を磨く時期と考えればいいわ。人生の経験値を積むことの方が何よりも早く追いつくための近道だと思うから――セイッ！」

突然の鋭い正拳にも見てからの反射で難なく防ぐことが出来る。“持つ者”と“持たない者”の絶対的な壁が私とワン子の間にある。それがこの一瞬の攻防に現れていた。

それが分かっていてもワン子は諦めない。

「前にも言ったわよね。アタシがライバルになるって。アレ、冗談じゃないからね。アタシは本気だから」

「……ワン子……」

「よーし帰って組み手よ。頑張るわー！」

まるで自分を奮起させるような声を上げ、素足のまま波打ち際を走っていくワン子の姿に、どうしても言い出せないでいる自分が情けなかった。

「そろそろアレを言う時期が来ているんじゃないのか？」

歩み寄ってきたジンに頷く事でしか返せない。そんな私を優しく撫でてくれる手はいつもより温かく感じた。

「ジン……お前はワン子ならいけると思っているのか？」

「どうかな……俺は“持つ者”の方の人間だ。どう考えていても“持たない者”の立場になる事は出来ないさ」

「じゃあお前が最近、ワン子の修行を見てやっているのはなんでだ？」

この間の休日もそうだ。ジンは私との手合わせをワン子に見せた。しかも何も考えずにただひたすら見る事に集中しろとまで言い聞かせて。
ジンがワン子を強くさせようとしているのは明白だ。

「俺はただ、やり残して結果を待つより、やり切って結果を待つ方がカズのためだと思ったからだよ。悔いの残らないようにしてやるのが精一杯さ」

「精一杯か……」

それでも必ず言わなければならない時が来る。本来ならジジイの役目だったのを私が無理矢理奪った。次期当主としての1番最初の仕事を自分で厳しいものにしたんだ。

判断の時、私はどんな顔で告げ、ワン子はどんな顔で受けるんだろう。願わくば、笑っていられればいいなと思いながら、先を行くワン子を追いかけるように走り出したのだった。

side out

side audience

「Was ist die Dame?（お嬢様からですか？）」

「Oh. Freunde scheinen sich auf eine Reise morgen offenbar zu gehen.（ああ。どうやら明日から友達と旅行に行くらしい）

」

「Ｉｃｈ　ｖｅｒｓｔｅｈｅ．　Ｉｎ．（そうですか。では）」

「Ａ　Ｊａ，　ｅｉｎｅ　Ｅｉｎｈｅｉｔ　ａｕｓｒｅｉｃｈｅｎｗ？ｒｄｅ．　Ｖｏｒｂｅｒｅｉｔｕｎｇ，　ｅｉｎ　Ｌｅｕｔｎａｎｔ．（うむ、１個部隊で十分だろう。準備を少尉）」

「Ｉｃｈ　ｖｅｒｓｔｅｈｅ，　Ｌｉｅｕｔｅｎａｎｔ．（了解しました中将）」

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

ｓｉｄｅ　篁凛奈

「帰ったぞ」

「あ、お帰りなさい、凛奈さん」

玄関のドアを閉めると奥から緋鷺刀の声が聞こえた。気配からキッチンにいるのが分かるが、確か今日の夕飯の当番は私だったはず。訝しげに思いながらもリビングに続くドアを開けると、案の定、夕飯の準備をしている緋鷺刀の姿が目に入った。

「どうした？　今日の夕飯は私のはずだったが？」

「うん。明日は僕の当番だけど旅行でいないでしょ？　だから代わりにね」

律義な奴だな。別に構わないというのに。だがまあ、せっかくの申し出だし受けておくが、丁度いいし話をしておくか。
私は鞄の中から人数分の乗車チケットを取り出してテーブルの上に置いた。

「緋鷺刀、明日の電車の乗車チケットも買っておいたぞ」

「ええっと……どうして？」

「ついでだ。どうせその場で買うつもりだったんだろ？」

「そうだけど……え？　ついでって？」

気付いたか。夕飯の準備をいったん中断して私の正面の椅子に座る緋鷺刀。それを確認して私も話を切り出す。

「私も行くからな」

簡潔に述べた私の答えに数秒間固まった緋鷺刀は、考え込むように眉を寄せた後、恐る恐る伺うように問い掛けてきた。

「もしかして……僕たちと一緒に箱根に行くの？」

「そうだ」

その答えだけで私のスケジュールを理解したんだろう、緋鷺刀は苦笑いを浮かべた後、小さく肩を落として溜息を吐いた。

元々ゴールデンウィークは休みだった。先日の遅刻した打ち合わせの時にそう決まった。だが完全に休むわけにはいかないから、箱根

にある馴染の宿に泊まりつつ、次回作の構成を練ろうと思っていたところだった。

そう考えていた矢先、緋鷺刀に『みんなで旅行に行くから宿を取って欲しい』と言われたので同じ宿に予約を入れ、どうせなら一緒に行った方が面白いだろうから、予約していた便をキャンセルして全員分の乗車チケットを買ったというわけだ。

まったりとしながら行くつもりだったが、行き帰りぐらい騒がしくても別にいいだろう。あいつらと一緒にいれば退屈しそうにないからなら。

「安心しろ。部屋は別だし日中もお前たちと一緒に行動する事はしないさ。私も自分の骨休めのためだよ」

「それは分かってるから」

心配そうだが、お前の考えている事ぐらい分かっているさ。私とあの子を余り会わせたくないんだろ？　易々と会わせてくれない事は分かっていたからな、多少強引だったかもしれないが私の方から会いに行く形を作ったまでだ。

だがまあ安心しろ。別にお前が不安に思っている事をするわけじゃない。違う意味で不安に思っている事はするかもしれないが、ただの好奇心からだ。

「凛奈さん。本当に変な事しないでね」

「任せておけ」

私はただお前がご執心の黛十一段の娘さんをひと目見たいだけだよ。
はてさて、お前を虜にした娘はいったいどんな娘かな？　今から楽しみだな。

第７０話　箱根旅行、準備の前日（後書き）

あとがき～！

「第７０話終了。あとがき座談会、司会の春夏秋冬　廻です。今回のお相手は――」

「篁凛奈だ」

「ついに本編へ殴り込みに来ましたね」

「物騒な物の言いをするな。そうやって書いてるのはお前だろ」

「いやそうなんだけどね。さて今回のお話ですが、ようやっと７０話で箱根旅行前日まできました」

「最初から旅行当日をやればよかっただろう」

「いやそうなんだけどね。いやしかしまさか貴女が原作に入り込んでくるなんて」

「だから、お前がそうなるように書いているんだろ……ところでなんで私が旅行に同行することになったんだ？」

「最後のシーンはマジでその場での思い付き」

「行き当たりばったりだなオイ」

「なんで思い付いたかって言うと、現在の風間ファミリーは１１人

↓電車の座席は基本2人並び→1人だけ余る→ならもう1人連れて行けばいい→誰が1番妥当か→そうだ凛奈さんにしよう。以上が頭の中の流れです」

「本当に行き当たりばったりだな」

「確かに思い付きではあるけど、一応は貴女と由紀江の出会いというか、顔合わせをさせたかったという思いもある」

「私は彼女と何かしら関わるということか？」

「どうかな……緋鷺刀と由紀江の関係に家の問題は避けて通れないけど、貴女をどうやって関わらせようかは今考え中だね」

「その心は？」

「今のところ篁の家では緋鷺刀の味方は貴女だけだからね」

「そうか……それで次回は？」

「旅行1日目」

「それしか考えてないというわけだな」

「そういうことで、次投稿もよろしくお願いします」

第７１話　箱根旅行、篁凛奈の嫁チェック？（前書き）

第７１話投稿。

凛奈さん大暴走？

第７１話　箱根旅行、篁凛奈の嫁チェック？

――２００９年　５月３日　日曜日　ＡＭ１１：２０――

ｓｉｄｅ　直江大和

「いやぁ、僕たち１１人でしょ？　こういう特急電車は４人座席がデフォ。ジン兄とモモ先輩が２人席になったとしても残り９人。４×２＝８で１人あぶれると心配したんだけど結果オーライだね」

安心したように言うがなモロ、いったいどうしてこうなったのか疑問を持たないのか？　持たないんだろうな……電車に乗る頃からやけにテンション高かったからな。

ちなみに席順は右窓際から俺、ガクト、通路を挟んでモロ、キャップ。向かいに京、ワン子、通路を挟んでクリス、ヒロの順に座っている。兄弟と姉さんは俺たちの後ろの席。

そして俺は今回、何故こんな事になったのか、混乱する事態を招いた最大の理由の人に少しだけ身を乗り出し視線を向けた。

そこには姉さんと兄弟の向かいの席に座る凛奈さんの姿。そしてその隣でガチガチに固まったまゆっちの姿があった。

どうしてこうなったか思い返してみよう。

――遡ること２０分前だ。

最初に集合場所に到着していたのはヒロだった。まあヒロが集合時

間の１０分前に到着しているのはいつもの事だから特に気にしなかったが、さすがに隣にいる人を見たら驚いた。

女性としては高めの背はヒロと余り変わらないぐらい。少しだけウェーブのかかった長い髪をポニーテールで纏め、カジュアルな格好をしていても細いフレームの眼鏡が知的なカッコよさを醸し出していた。

間違い、この人は――

「ん？」
「お？」
「ああ！」
「あれ？」
「え？」
「おお！」
「げぇ！？」
「うん？」
「えっと？」

「凛奈さん？」

「おう、ガキども。元気で何よりだな」

困惑するみんなを代表して声を掛けた俺に、答えるように手を上げて挨拶を返してきた。だが本来ならいるはずのない人の登場に、いまいち状況が呑みこめない。それを見かねてヒロが説明を始めた。

「一昨日、凛奈さんに宿の予約を取ってもらうって決めたでしょ？　どうやら凛奈さんも元々2泊3日で箱根に行く予定だったらしい

から、同じ宿にして行き帰りも同行する事にしたみたいなんだ」

そう言ったヒロが配ったのは、俺たちが乗ろうとしていた特急電車『スーパービュー踊り漢（こ）』の乗車チケットだった。これってもしかして凛奈さんが購入したのか？　そう思って顔を上げると笑みを浮かべた凛奈さんの顔があった。

「一応、私が保護者として同行するからな。行きと帰りの電車賃は奢ってやる」

簡潔にそれだけを口にすると、浮かべていた笑顔を消し半眼で睨みながら兄弟の前に立った。そして次の瞬間には無遠慮に放たれた顔面への右拳を、姉さんに抱きつかれていない右手を上げて受け止めていた兄弟の姿があった。

攻撃した瞬間も、受け止めた瞬間も全然見えなかった。

「おい、暁の坊主。帰って来ていたのなら顔を出せ」

「俺が帰って来てまだ今日で１０日ですよ？　それにすぐに学校に編入したんですから顔を出す暇なんてないですよ」

苦笑いを浮かべる兄弟につまらなそうに鼻で笑い、掴まれていた拳を振り払い今度はクリスとまゆっちの前に移動した凛奈さんは、兄弟に見せた表情とは違う穏やかな大人の女性の笑顔を浮かべていた。

物凄い変わり身の早さだ。

「初めまして。クリスティアーネ・フリードリヒさんに黛由紀江さんだね？　甥の緋鷺刀から聞いている。私は篁凛奈だ。よろしく」

突然の自己紹介に呆然としているクリスを小突く。それでようやく我に返ったクリスは1歩前に出ると凛奈さんに言葉を返した。

「はい、よろしくお願いします。自分の事はクリスと呼んで下さい」

「は、初めまして！　黛由紀江です！」

クリスにつられてまゆっちも1歩前に出て頭を下げた。それに頷いて応えた凛奈さんだったが、まゆっちを見た時、少し眉をひそめたような顔をしたのは俺の見間違いだろうか？　でも何事もないようにまゆっちの頭を優しく撫でる凛奈さんに、俺は首を傾げるしかなかった。

「そろそろ時間だな。行くぞお前たち」

腕時計で時間を確認した凛奈さんは、保護者と言うよりは引率者のように俺たちを牽引してプラットホームへと歩いて行った。その後ろをぞろぞろとついて行く俺たち。

出だしでいきなり驚かされたが、まあ相手は昔から知っている凛奈さんだから特に緊張する必要はないな。1人、いや2人を除いて。

ヒロは恐らく気が気じゃないだろう。凛奈さんがまゆっちにどんなちょっかいを出すかわからない。だけどそれを咎めると後が怖い。まゆっちもヒロの親族が来ている事で、ある意味で緊張しているのが分かる。だって見るからに困惑している。

「座席はとりあえず12席を纏まって取った。暁の坊主と川神の戦っ娘はどうせ隣に並んで座るんだろ？」

「当然です」

凛奈さんの呆れた言葉に姉さんが自信満々に答える。いつも不思議に思っていたんだけど、姉さんは凛奈さんに対しては敬語で話す。

姉さんが敬語で話す人は少ない。しかも1度でも手合わせをして認めた人に限る。だけど俺の知る限り姉さんと凛奈さんが手合わせした事は1度もないはず。なのに敬語で話しているのを見ると、手合わせをしなくても凛奈さんの強さが分かるって事だろう。

さっきの兄弟を殴り掛る瞬間が見えなかったんだ、どれ程かは分からないが間違いなく強いのは理解できるけどね。

「ああ、それから黛さん？」

「は、はい！？」

急に声を掛けれて裏返った声を上げたまゆっちを優しく見ていた凛奈さんだったが、次の瞬間、ヒロを愕然とさせ、まゆっちを恐縮させるひと言を放った。

「一緒に座ろうか？」

このひと言でヒロとまゆっちの旅行は試練から始まったのかもしれない。

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

side　黛由紀江

こ、これはいったいぜんたいどういう事なんでしょうか？　なんで私、モモ先輩とジン先輩の向かいで今日が初対面のタカさんの叔母様である篁凛奈さんと一緒に並んで座っているんでしょうか？　ああ、タカさんが向こうの座席から心配そうにこちらを見ています。

あの、でも私、本当にこれからどうなってしまうんでしょうか？

（落ち着けまゆっちー！　焦ったってどうしようもねーぜ！）

そ、そうですよね松風。落ち着かなければいけませんよね。だって隣に座ってらっしゃる方はタカさんのご家族なんですから。粗相をするわけにはいきませんよね。

（まゆっち……まるで旦那の姑に怯える若奥様みたいだぜ……）

わ、わわわ若奥様ってどういう意味ですか松風それってそれってそれって私とタカさんが結婚するみたいじゃないですかそんな事あるわけないじゃないですかだってまだ私たちはお友達でしかないんですよいやでもそれが決して嫌というわけではなくてですね出来ればそうなれたらいいかなぁなんてちょっとは思ってみたりなんかしない事もなくてですねっていったい私は何を考えているんですか！？

（おおおお落ち着けまゆっち！）

無理です無理です無理です落ち着くなんて出来ませんよ！

「とりあえず混乱するのだけはやめよう、まゆちゃん」

「ま、まゆちゃん！？」

ま、ま、まままま『まゆちゃん』！？

（いきなりものスゲー攻撃がキターーーー！！）

もう駄目ですもう無理です松風どうにかしてこの状況を脱する事が出来たら私の骨を拾って下さいねお願いします！！

（まゆっちーーーーー！？）

side out

side audience

「ひやひっはひはいほうふは？　はひゅっひは？」

食べ物を口に入れながらも、由紀江と凛奈の方を気にする岳人。

「ガクト、口の中に物を入れて喋るな。行儀悪ぞ」

そんな岳人を眉をひそめて注意するクリス。

「それよりこのお弁当、まゆが作ったんだよね？　勝手に食べていいの？」

気にしつつも自分たちだけが昼食を取る事に戸惑う緋鷺刀。

「問題ないよタカ。向こうにもさっきお弁当渡したから」

本当は覗きたいけど位置的に出来ないから諦めた京。

「京の言う通りだヒロ。まゆっちもみんなで食べてもらった方が嬉しいだろ」

何かあっても神がいるから大丈夫だと判断した大和。

「それよりキャップを起こさなくてもいいの？」

自分の肩に頭を乗せている翔一の方が気になる卓也。

「放っておけばいいじゃない。起きなければ食べる量が増えるわ」

食べる事の方が優先で他はどうでもいい一子。

「ＺＺｚｚｚ」

昨日何故か一足先に箱根に行って帰ってきて興奮で完徹し今になって寝ている翔一。

実にマイペースな風間ファミリーのメンバーだった。

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

ｓｉｄｅ　篁凛奈

第一印象は、穏やかで可愛い娘、だった。

少し人見知りするようだけど礼儀正しく姿勢も正しい。厳しく、それでいて大切に育てられたのが良く分かり、実に剣聖黛十一段のご息女らしい娘だと思った。

今のこの姿を見るまでは。

緋鷺刀が言っていた通り面白い娘だ。

私の隣に座って混乱しているのが実によく分かる。少し険しい表情のまま握り拳を膝の上に置いて身体を凄く震わせているし、目は見開き冷や汗というか脂汗というか、そういった類の汗を流している。本当に面白い子だ。もう少し混乱させてみようかな？

「とりあえず混乱するのだけはやめよう、まゆちゃん」

「ま、まゆちゃん！？」

裏返った声で呼ばれた名前を繰り返したのを見て、より一層混乱しだしたのが手に取るように分かる。駄目だ。本当に面白くて可愛い。なんだろう、このやたら保護欲を掻き立てられるような可愛さは。これなら緋鷺刀がご執心なのも分からんでもない。

だがまあ、これでは埒が明かない。少し身近な話題を振って落ち着かせよう。

「君は、あの剣聖黛十一段の娘さんなんだろ？」

「あ、え、あ……はい。父をご存じで？」

父親の話題を出された事でどうやら少しは落ち着いたようだ。まだ

緊張感は完全に抜けていないようだがこちらの話を聞けるほどまでには余裕が戻ったらしい。
父親の事を聞いた途端に表情が柔らかくなった。どうやら父親を本当に尊敬しているようだ。ここら辺は緋鷺刀と同じだな。

「剣術を嗜んでいる者で『剣聖十一段』の名前を知らない者はいないさ」

「ではその、篁さんも剣術を？」

「それなりにね。それと私の事は凛奈でいい。他のガキどもにもそう呼ばせているし。それよりも……たぶん緋鷺刀は尋ねなかったと思うが……『篁』の名前は聞いた事あるかい？」

恐る恐る苗字で私を呼ぶから、遠慮しないで名前で呼ぶように言う。
そしてそれと同時に、彼女は『篁家』の事をどこまで知っているかを探ってみる。
暁の坊主の気配が一瞬だけブレたのを感じた。どうやら『篁』と『黛』の間に起きた事を知っているようだし私の意図も察したらしい。
相変わらず聡い奴だ。

「はい。鹿児島に居を構える一族で、歴史は黛より古いとか。若くして亡くなられた『剣帝』篁十段は素晴らしい剣士だったと父も言っていました」

「緋鷺刀が『篁家』の一族だと気付いていたのか？」

「そうではないかと思っていました。篁の家名はそうあるものではないですし。ですが改めてお尋ねするもの失礼かと思いまして……」

やはりこの子は忘れている。いや、覚えていないんだ。

あの『十一段』の称号を掛けた勝負の時、兄さんは『黛十段も娘さんを連れていた』と言っていた。勝負した本人がそう言ったのだから間違いない。それなのにこの子が覚えていないという事は、尊敬する父が勝ったのが嬉しくて、それが強く印象に残り勝負をしていた相手の事を覚えていられないほどのものだった、という事なのだろう。

緋鷺刀がやけにこだわるわけだ。確かに覚えていないのならそれに越した事はない。変に話す事で思い出し、せっかく仲良くなった緋鷺刀とこの子の仲をわざわざ拗らせる必要もないだろう。

そもそも、当事者でない私が言う事でもないか。もしこの娘が思い出したとしても、それを解決するのはこの娘と緋鷺刀、そして黛十一段だ。私が出る幕じゃない。

「あの……それで『まゆちゃん』とはいったい？」

ああ本当に可愛いなこの娘。天然で上目遣いの使い方を知っている。

「駄目か？　緋鷺刀が『まゆ』と呼んでいるから呼んでみたのだが……そうだな、苗字だと後々アレだな。よし『由紀ちゃん』と呼ぶが構わないか？」

「はいもちろん問題ないですって言うかむしろ嬉しいぐらいです！」

「やったなまゆっちー！　また新しいあだ名が増えたぜ！」

おお、これが噂の腹話術で喋っているストラップの松風か。緋鷺刀はあまり突っ込むなと言っていたが、まあどうしてこうなったかは

だいたい想像はつく。野暮な事は言うまい。

「君が松風か。噂は聞いている。私が篁凛奈だ」

「おうよ、よろしく頼むぜ凛奈っち」

「相変わらずいい根性してるよなまゆっち……」

今まで何も言わずイチャつきながら私たちの会話を聞いていた暁の坊主ポツリと漏らした。言わん事は分からんでもないが『凛奈っち』か……なかなか新鮮で悪い気はしないな。よし、松風の場合は許そう。他の奴が言ったら速攻で折檻だがな。

「しかしなかなか渋い名前だな松風。前田慶次郎利益の愛馬か……加賀前田からか？」

「話分かるじゃねーか凛奈っち。意外と博識だぜ」

「はっはっは、これでも作家だ。その手の知識はそれなりだと自負している」

打てば響くなこの娘。これなら退屈する事もなさそうだ。緋鷺刀との相性は良さそうだが……うん、私との相性も悪くはない。いい娘を捕まえたな緋鷺刀。

「和気あいあいとするのは別に構いませんけど、そろそろお弁当をつまんだ方がいいですよ。下手したらモモに全部食べられますよ？」

「私はそこまで大食らいじゃないぞ」

こんな時でもイチャつくんだなお前たちは。そう思いながらも差し出された重箱からおにぎりとおかずを、自分と由紀ちゃんの分として半分ほど重箱の蓋に移し膝の上に置く。

さっき緋鷺刀がこのお弁当は由紀ちゃんが作ったと言っていたな。緋鷺刀曰く結構なものらしいが、はてさて腕前の方はどれ程かな？

「しかし、相当まゆまゆを気に入ったんですね凛奈さん」

割り箸を手渡しながらの川神の戦っ娘の唐突な質問に私は首を傾げた。確かに言われるように瞬く間に緋鷺刀に次いでのお気に入りになったが、それがバレるような表情は見せていなかったはずだが？

「バレてないと思ってるようですけど、名前の呼び方がモモたちと違ってますから、相当のお気に入りだって事がモロバレですよ」

言われてみればそうだな。余り気にした事なかったが私が『ちゃん』付けで名前を呼んだのは、後にも先にも兄さんの奥さんで緋鷺刀の母親の緋華瑠（ひかる）さんだけだった。といっても私がまだ中学に入る以前までだったが。

そうか……それ以来なのか。なんか感慨深い気がしないでもないな。

そう思いながら煮物を箸でつまみ口の中へ。

煮物を真っ先に口に運んだのには意味がある。実は『煮物ほどその料理人の料理の腕が分かる』と言われるほど重要な料理なのだ。

っ！？　こ、これは！？

「お、お口に合いませんでしたか？」

目を見開き固まった私を見て由紀ちゃんが心配そうに問い掛けてくるが、私はゆっくりと咀嚼して十分に味わってから飲み込むと、箸を揃えて重箱の蓋の上に置いた。
そんな私の行動にますます心配そうに顔を歪める由紀ちゃんと向き合うと、私は両手で心配そうに震える彼女の両手を包み顔の前まで持って行く。

「由紀ちゃん」

「は、はい！？」

完璧だ。
実に完璧だ。
料理の腕もそうだが味付けも私と緋鷺刀好みだ。
この年齢でこれだけの煮物が作れるなんて、きっと幼いころから躾けられて来たんだろう。まだ見ぬ由紀ちゃんのお母さん。私は貴女に感謝します。

もはや疑う余地もない。この娘なら問題ない。

「緋鷺刀の嫁に来ないか？」

ブハァァ

「どうわ！　きったねー！　なに急にお茶吹き出してんだよヒロ！？」

「うわ！？　急に起きないでよキャップ！」

「気管に詰まったのか？　すまない誰か手拭いを持ってるか？」

何やら急に向こうが騒がしくなったな。

「他人事のように見てますけど、凛奈さんの爆弾発言が原因ですよ？」

「爆弾発言も何も2人とも――おい、まさか」

思い至った事実に私は言葉を切った。それで私の考えが分かったのだろう、暁の坊主は苦笑いを浮かべて肩をすくませた。

どうやら勇み足をしてしまったようだ。

緋鷺刀も由紀ちゃんも、少なからずお互いを思っているようだが、どうやら2人ともその気持ちに全く気付いていないらしい。私としては緋鷺刀の方はあそこまで意識しているのだから自覚していると思ったがそうでもないらしい。由紀ちゃんは明らかにそっち方面に疎そうなのは見て分かるが。

ふむ……果してこれは成功になるのか失敗になるのか……これを機に互いが意識し合ってくっついてくれれば御の字だが、逆に拗れたら拙いな。早急に何かしらの手を打つべきか？

これでもかというくらい真っ赤な顔で固まり、ニヤついた川神の戦っ娘に頬を突かれている由紀ちゃんを見ながら、私は今後の2人の展開についての策を考える。呆れ返った暁の坊主の視線にも気付かないほど真剣に。

後に私は思う。

あの時が人生で1番物事を考えた瞬間だったな、と。

第７１話　箱根旅行、篁凛奈の嫁チェック？（後書き）

あとがき～！

「第７１話終了。あとがき座談会、司会の春夏秋冬　廻です。今回のお相手は――」

「……篁緋鷺刀です」

「何やら物凄く不機嫌というか……覇気がないね」

「……ええ……まあ」

「さて今回のお話ですが、旅行１日目の箱根へ行く電車の中でのシーンなのですが、原作シーンの面影などまったくもってありません」

「完全なオリジナルシーンになってましたね」

「少しは原作にあるシーンを出すつもりだったんだけど、凛奈さんの存在がそれを全て吹っ飛ばしました」

「……おかげでこっちは気が気じゃないですけどね」

「いやしかし凄いね凛奈さん。書いてて楽しい楽しい。どうしよう、本編にもっと絡ませたくなった」

「お願いですからやめてください」

「うーん……本編に出せるだけの設定は十分にあるんだけどな」

「お願いですからやめてください！」

「読者のみなさんに聞いてみようかな？」

「お願いですからやめてくださいって言ってるじゃないですか！？」

「あ、はい。ごめんなさい。えっと……本編何か質問ある？」

「えっと、電車内の座席って卓也くんが４人座席がデフォっているけど、描写文読むと違うような感じを受けるんですけど？」

「あれはね、１列４人っていう意味だと思うんだ。特急電車の座席って向い合せにできるじゃん。８人だったらちょうど２列向かい合わせに座る事が出来るでしょ？」

「そうですね」

「ちなみに座席図はこんな感じ」

―――
―由　凛―
　　通
―百　神―
―――　―――
―大　岳―　―卓　翔―
　　路
―京　一―　―ク　緋―
―――　―――

「何となく分かりました」

「というわけで今回はここまで、次投稿はおそらく宿に到着～1日目終了までだと思いますのでよろしくお願いします」

第７２話　箱根旅行、露天風呂の素敵なひと時（前書き）

第７２話投稿。

凛奈さんまたも大活躍？

第７２話　箱根旅行、露天風呂の素敵なひと時

ｓｉｄｅ　川神百代

「……」

「……」

駅から旅館へと向かうバスの中、隣同士で座っているのに実に気まずそうだな、タカとまゆまゆは。まあ、あの電車の中での出来事を考えると無理はないか。

この現状を作りだした原因の凛奈さんは１番後ろの座席で満足そうに２人を眺めているし。しかし驚いたな。あの緋鷺刀至上主義の凛奈さんがいとも簡単にまゆまゆを認めるなんて。

それほど気に入ったという事なんだろうが、本人たちはあんな状態だしな……私とジンに続くファミリー内カップル誕生はまだ先になりそうだ。

あーしかし暇だな。バスに乗らずに旅館まで競争だと走って行ったワン子とクリが心配だからって、ジンも一緒に走って行ったからな。優しいのはいいが彼女放ったらかしにすんなよな全く。

「おい、戦っ娘」

大和でもイジって憂さ晴らしでもしようかと思ったのにな。だが凛奈さんに呼ばれたのら行くしかない。何故か本能がこの人を敵にしてはいけないと警告するんだよな。１度も手合わせした事ないのに未だに分からん。

「何ですか？　凛奈さん」

「お前と暁の坊主だけ別の2人部屋を取ったんだか、その部屋について少し説明をしたくてな」

説明もなにも、部屋は部屋だろう。食事や寝るのはみんなとは別なだけでそう変わりのあるものじゃないはずだ。私としてはジンと一緒に寝泊まりできるだけで十分だけどな。

「まず1つ目。予約特典で家族風呂に入れる」

なに!?　家族風呂だと!?　という事はあれか!?　恋人同士の嬉し恥ずかしドキドキイベント『一緒にお風呂』のフラグが立ったと言うのか!?

「そして2つ目。恋人特典で1番見晴らしのいい露天風呂を1時間無料貸し切りだ」

おお!?　1番見晴らしがいい!?　という事はあれか!?　恋人同士の心ときめくラブラブイベント『満天の星空を寄り添って見上げる』のフラグまで立ったと言うのか!?

つまり今回のこの旅行で、ドキドキラブラブイベント『満天の星空を一緒のお風呂で寄り添って見上げる』を経験できると言う事か!?

テンション上がってきたーーー!!

「それからこれも渡しておくぞ」

ウナギ登りのテンションのままハンドバッグから取り出した何やら箱みたいなものを受け取る。５センチ×１０センチぐらいの長方形の箱。チョコなのかと思い箱に書いてある文字を読む。

こ、これは……っ！？

凛奈さんから手渡されたモノ。

それは兵士がサバイバルで水筒代わりにもしたり、子供たちが風船代わりに遊んだりするという、いわゆるひとつの“幸せ家族計画（コンドーム）”だった。

って思惑モロバレかい！！

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

ｓｉｄｅ　直江大和

宿についてもキャップはまだ眠っている。

いい加減起きろと言いたいが、今日はこれから夕飯まで自由行動になるからそのまま寝かせておいてやるか。

「キャップも寝てるしジンもいないし、代理で私が仕切るぞ。温泉は２４時間入り放題。夕飯までには時間が余っている。とりあえず好きに行動しろ」

姉さんの号令のもと、各自思い思いの行動を取り始めた。

凛奈さんは宣言していた通り、宿に到着して代表でチェックインを済ませたら、常連という事で顔見知りなんだろう、女将さんと世間

話をしながら離れの方に歩いて行った。
姉さんも自分と兄弟の荷物を持って、仲居の人の案内で予約していた2人部屋の方へと向かった。

さて、残りのメンバーを見てみよう。

ガクト→たぶん女湯覗くための下準備に下見に行ったな。
モロ→さっそく部屋に備え付けられているゲームに取り掛かったよ。
キャップ→未だに寝てる。いつ起きるんだろうこいつは。
京→部屋で芦ノ湖を眺めながら本読んでる。ブレない奴だ。
ヒロ→気まずさは解消したのかまゆっちとお土産見てる。
まゆっち→少し緊張しているけどヒロ一緒にお土産見てる。

さて、俺は何をしようかなと思ったが、いくらなんでも走って登ってきている3人が遅い気がした。もう1時間以上たってる。

兄弟がついているから無駄な心配だとは思うが、様子見に旅館の前で少し待ってみるか。携帯に連絡しようにも預かった荷物の中にあったしな。

「お？　お出迎えかヤマ？」

俺の姿が見えたのかゆっくり速度を落として隣に並んだ兄弟。息ひとつ切らしてないのはさすがと言うべきなんだろうな。しかも余裕の先頭だ。後ろにいるワン子とクリスが豆粒に見える。

「そらぁぁぁラストスパートォォォッ！」

「絶対に負けん！」

もうすぐ旅館の前だ。そろそろ止まる……っておいおい！　全く減速する気配がないんですけど？　しかも勝負に集中しすぎて俺が目の前にいるって気付いてないね２人とも。

「ゴォォォルッ！　同時かっ！　やるわね」

「犬もな！　スピードは互角か！」

２人が同時に旅館前のロータリーを走り抜け、ザザッと土煙を上げながら停止した。というか停止して土煙を上げる程のスピードって、人間に出せるのか？

え？　俺は無事なのかって？　ああ無事だ。ぶつかる直前に隣にいた兄弟が俺を引っ張ってワン子とクリスの直線上からどかしてくれた。おかげで正面衝突は避ける事が出来た。

「時間かかりすぎな気がするんだが何してた？」

息を整えているワン子たちを見ながら兄弟に問い掛ける。何となしに理由は分かってるけどね。

「カズがな、どうせなら山道を行こうとか言い出したんだよ。でも時間掛けるわけにもいかないから、俺が先行してルートを決めて走ってきたってわけ」

その行動で間違いはないだろう。ワン子たちに任せていたらもっと遠回りになって時間がかかっていたに違いない。ＧＪだ兄弟。

「だから葉っぱとか体についてんのか。クリスもいちいち挑発に乗るなよ」

「誇りがある。勝負を避けるわけにもいかない」

どうやら俺の呟きが聞こえていたようで、息を整えたクリスが少しだけ怒りの籠った声を上げた。クリスの言い分も分からんでもないけどね。でももうちょっと柔軟になれよ。

「走る服装じゃないだろ……時と場合を選べ」

「むっ」

俺の言葉に反論を取る姿勢を見せたが、

「はいはい、言い合いは後。カズもクリスもとっととお風呂行って汗流して来い。女の子がいつまでも汗臭くちゃ示し悪いぞ」

遮るように手を叩いて注意をする兄弟に出鼻を挫かれる結果になった。

「カズ、クリス引っ張って行ってこい」

「うん！　それじゃあ行くわよクリ！」

「ま、待て犬！　自分で歩ける！　引っ張るな！」

兄弟の命を受けてワン子は問答無用とばかりにクリスを連行していった。まだ何かを言いたそうなクリスだったが、あの決闘以降、兄弟に対してはある種の尊敬に近い感情を持っているらしい。素直に言葉に従った。

うん、この場に兄弟がいて本当によかった。本当に。
でも本当にどうにかならんのかねクリスは……

side out

side audience

豪勢な夕食も終り、今日1日目最後のイベント。至福の温泉タイム。
旅館と言えば温泉。温泉と言えば露天風呂。露天風呂と言えば覗き。
そう、今まさに覗きが決行されようとしていた。

「では、男湯を覗きます」

ただし、女湯で。

「やめときなさいよ。ってか大和以外の男が見えたらどうするの京的に」

覗きをしようと男湯と女湯の仕切りに近付いて行く京に、一子が咎めるように声を掛けた。その指摘にそこまで思い立っていなかった京はハッとしたように立ち止った。

「その可能性を考慮していなかった。では聞き耳を立てるぐらいで……京イヤーは地獄耳」

「これって普通、男の方がするものじゃあ……」

「はっはっは。いいじゃないか由紀ちゃん。たまには男女逆転があ

っても」

耳の後ろに手を当てて聞く事に集中している京を見て、由紀江が少し戸惑っているのに対し、凛奈は面白そうに豪快に笑っていた。

一方その頃の男湯は――

「いい湯だね。温泉いいなぁ～」

「たまにはこういうのもいいなぁ」

「そうだね。箱根は何度来てもいいね」

卓也、大和、緋鷺刀の3人は食後の温泉を穏やかに満喫していた。だがそんな風に静かに温泉を楽しめない人間が風間ファミリーにはいる。そうそれは。

「見ろ貴様ら！　俺様のこの筋肉美！」

島津岳人である。

温泉にタオルをつけるのはタブー。しかしお湯にも浸かっていないのに腰にタオルも巻かず、素っ裸でボディービルのポージングのような姿勢を取る岳人に、卓也のツッコミが刹那の時間も置かず入る。

「少しは隠してよ！　グロいんだよガクトのは！」

「男同士でいちいち隠す必要もないだろ」

それに対して答えたのはもう1人の素っ裸の男、翔一であった。そ

れに呆れたような苦笑いを浮かべて緋鷺刀が小さな声で呟く。

「キャップと岳人君は堂々としすぎだよ」

だがその声は小さすぎで翔一と岳人の耳には入っていない。緋鷺刀も聞こえるように言ってないから別に問題はないのかもしれないが、ここでは大きな声で言っておくべきだったと後で後悔する事になった。

「俺様のマイサンは銃で例えるとバズーカだな」

岳人は下ネタに走り出した。それに何気なくツッコミを入れるのは大和。

「まだ1度も対象に向けて発砲した事ないけどな」

「訓練ばっかでよー。砲身は磨いてんだけどな。って何言わせんじゃいコラ！」

下ネタ話が得意でない卓也と緋鷺刀は、そそくさと3人から離れて端っこの方に移動した。どうやら話しの対象になるのを少しでも避けるための行動のようだ。余り意味がないだろうなと緋鷺刀は思っていたが卓也はある意味で必死だった。

「そういうテメーのジュニアはどーなんだよ大和」

「俺のはマグナムだね。重い1撃をドスンと。キャップはマシンガンっぽいな。連射性能が良さそうだ」

岳人の話に悪ノリする大和に緋鷺刀は呆れるしかない。神がこの場

にいない今、止めてくれる人がいなくなった以上は話が自分たちに飛び火するのは避けられないだろうと悟った。

「下品！　げーひーん！」

耐えられなくなった卓也の言葉に緋鷺刀は頭を抱えたくなった。今ここで声を出せば話題にしてほしいと言ってるようなもの。案の定飛んできた。

「チラッと見たが、ヒロはスナイパーライフルっぽかったな」

「ははは、『目標を狙い撃つ』ってか？」

「まゆっちも大変だなぁ。失敗すれば1発ってか？」

例えて言う大和。笑う翔一。ニヤケた顔の岳人。3人に対していろいろとツッコミたかった緋鷺刀だが、下手に反応すればさらにイジられると分かっていので必死に耐えていた。

それが功を奏したのか、標的は緋鷺刀から卓也へと移った。

「モロの水鉄砲は革のホルスターに入ってるからな」

「僕だって好きでそうなってるわけじゃないよ……」

小さい声ながらも反応する卓也を見て緋鷺刀は小さく溜息を吐いた。反応しなければさらに踏み込んで突っ込まれる事はない。それを知っている緋鷺刀は卓也に同情の念を抱いたのだった。

だがその反応を見逃さなかったのが翔一。

「あのさ、それってもしかして……」

「いいか、遠回しに言うんだぞキャップ。それが優しさだ」

翔一の言いたい事を理解している大和は言葉を選べと注意を促した。しかし感性が自分と違う事をすっかり忘れていた。

「剥けてないのか」

「うわぁぁぁ！」

言葉の直撃をくらった卓也は恥ずかしすぎてお湯に潜ってしまった。そんな卓也の姿に緋鷺刀は同情と哀愁の念を抱かざるを得なかった。

「頭を撫でるように優しく言ったのになぁ」

「遠回しどころか最短距離な表現だな」

「言葉のチョイスが殺しにいってるとしか思えねぇよ」

訳が分からず首を傾げる翔一に、ある種の戦慄を受けた大和と岳人が少しだけ呆然とした声音で呟いた。そんな仲間たちを眺めながら、緋鷺刀は呆れた溜息を吐くしかなかった。

「よし、それじゃあ俺にモロの大事な部分見せてみ？　俺が剥いてやるからよ」

「嫌だよそんなイベント！　いったい誰が幸せになるのさ！？」

「リーダーとして心配なんだよ。恥ずかしがんな。お前あだ名モロだろ？」

「そーいう意味のモロじゃないって知ってるでしょ！？」

本当に呆れるしかない緋鷺刀だった。

場所は変わって再び女湯では――

「おお～ぅ……コレは凄い展開だった……」

聞き耳を立てていた京はお湯の中で悶えている。そんな姿をクリスは呆れたような半眼で眺め、一子は訳が分からず首を傾げ、由紀江は聞こえたのだろう若干頬を赤くして俯いていた。

「ねぇ凛奈さん。マグナムってどんな銃だっけ？」

初な反応をする由紀江をご満悦な表情で眺めていた凛奈に、京の疑問が飛んできた。男湯の会話が聞こえていた凛奈は、年頃の娘としては興味津々過ぎる京の問い対し、咎めるどころか満面の笑みを浮かべて答えた。

「大口径ならグリズリーだって倒せる立派な銃だ」

「屈強なモノを装備してるんだね大和……」

何かを妄想し再び悶え出した京に、クリスと一子はもはや視線すら向けずに由紀江と一緒に談義を咲かせている。どうやら完全無視する方向で決まったようだ。

和気あいあいと話をしている3人をと悶えている1人を、凛奈は温

泉の中にある大きな岩に背を預け眺める。しかし花を愛でるような穏やかな雰囲気とは裏腹に、その目はまるで獲物を捉えた鷹のように鋭かった。

「あの……凛奈さん。そんなに見つめられると非常に気になるのですが」

恥ずかしそうに声を上げるクリスだったが、言葉を掛けられた凛奈は予想の斜め上をいく言葉を返してきた。

「ふむ、正義っ娘は８０・５８・８１。犬っ娘は７７・５４・７９。弓っ娘は８４・５９・８３。由紀ちゃんは８８・５６・８７といったところだな」

「なっ！？」
「ほへ？」
「おおぅ」
「ひゃう！？」

ズバリ言い当てられて真っ赤になり胸を隠すクリスと由紀江。感心したように拍手をする京。何を言われたのかあまり分かっていない一子。そんな４人の反応を楽しみ愛でながらも凛奈の言葉は止まらない。

「弓っ娘は相変わらず肉付きがいいな。逆に犬っ娘はもうちょっと肉が必要だな。正義っ娘はスレンダーだがもう少し胸が欲しいと思っているだろ？　由紀ちゃんは安産型か……しかし年齢らしからん肉体だなぁ」

ゆでダコ状態の由紀江にズバリと悩みまで言い当てられて言葉もな

いクリス。慣れている京と一子は特に思う事はない様子だった。

「出た。モモ先輩すら驚愕させた凛奈さんの特技『女体計測スカウター』。久し振りに見たけど錆びついていないね」

「な、なんだそれは!?」

「凄いでしょ。1センチの誤差もない高性能らしいよ」

「そんな事を聞いているのではない！」

声を荒げるクリスに対してクールな京。由紀江は未だに固まったまま動かない。そんな3人を無視して一子は無邪気に問い掛けた。

「ねーねー！　凛奈さんとお姉様の数字は？」

「んー？　興味あるのか犬っ娘？　戦っ娘は９０・５８・８８だな。服の上からの誤差修正だから確実ではないがな。ちなみに私は８８・５７・８６だ」

こっちもこっちもで下ネタに走る女湯だった。

そして再び男湯では――

「あっちも盛り上がってんなぁ」

声は聞こえていないので何の話で盛り上がっているかは分からないのが、女性陣にとっては救いなのかもしれなかった。だが感心する翔一を無視して岳人が欲望まみれの声を上げる。

「大和。俺様は明日覗きがしたいぞ！」

「覗き？　やめろよ。そんなんではしゃぐのはお子様だぜ……なんて言うのは素人だ！　覗きたいのなら覗け！」

「お前のその柔軟な考え方、俺様好きだせ」

岳人の欲望を増長させるような声を上げる実にノリのいい軍師。そんな大和に緋鷺刀はたましても溜息を吐くのを止められなかった。

「覗いても凛奈さんに殺されるだけだよ」

一応の注意を無駄だと分かっていても促す緋鷺刀に、岳人は人差し指を立てた手を軽く揺らして、何故か自慢げに答えた。

「隣を覗くなんて自殺願望は俺様にはねぇよタカ。だが調べて分かったのよ。山の下の方にも旅館があってな、頑張ればそこの女湯が見れるかもしれん」

「ネットで調べたらその旅館、明日から女子校生のラクロスチームが泊まりに来るみたいなんだよね」

「わざわざ調べてあげたのか。優しいねモロは」

岳人の言葉に付け足すように言う卓也に、労りの言葉を掛ける大和。それに対して卓也は呆れたような苦笑を浮かべるしかない。

「ガクトが俺様の健康状態に関わるって言うからさ」

「ははは！　女子校生ラクロスチームかぁ。上手くいきゃお前、天国への扉が開くかもしんねーぜ？」

もはや浮かれるしかない岳人。それを見て呆れる卓也。執念の凄さに少し引き気味の大和。興味がないので話に加わらない翔一。そして緋鷺刀がポツリと呟いた。

「地獄への扉じゃない事を、一応だけど祈っておくよ」

こうして、邪念たっぷりの1日目は終わったのだった。

第７２話　箱根旅行、露天風呂の素敵なひと時（後書き）

あとがき～！

「第７２話終了。あとがき座談会、司会の春夏秋冬　廻です。今回のお相手は――」

「師岡卓也です」

「久し振り、革のホルスターに入った水鉄砲のモロ君」

「こんなところに来てまでイジられるの僕！？」

「はてさて今回のお話ですが、原作通り旅行１日目の温泉でのシーンをやりました。まさかの女湯でのやり取りが追加されましたけどね」

「なんであんなシーンを追加したんだよ」

「凛奈さんてすごいね」

「そのひと言で全てが分ったよ」

「いやしかし本当に凛奈さんは書いてて楽しい。急遽思い付きの箱根旅行参加だったけど、もはや作者の意思を超越したキャラになってしまった」

「超越って……いったいどうしたのさ」

「いやね、神や緋鷺刀、それから原作にないシーンとかを考える時は、このキャラならこんなセリフを言ってこんな動きをするだろうな、って考えながら書くんだけど、凛奈さんのセリフと行動はほとんどその場の勢い。登場したら考えなくても勝手に出来上がるんだよ」

「凄いねそれ……」

「だからもう本当に楽しいんだよ」

「その分、割りを食うのがタカとまゆっちだよね」

「否定しないね。前回の話で凛奈さんの中では由紀江は緋鷺刀の嫁に決定したからね。後々イジられまくるんだろうな2人して。お気に入りには容赦ないからあの人」

「ところで温泉シーンでジン兄とモモ先輩が全く出てこなかったけど？」

「それはね、一応恋人同士で家族風呂に入ってるからね。みんなとは違う場所なんだよ」

「そのシーンは書くの？」

「投稿するよ。1話にするのは短いから閑話か外話だね」

「いつ？」

「今日の投稿と明日の投稿の間？」

「大雑把だね」

第７３話　箱根旅行、桃の花の言の葉（前書き）

第７３話投稿。

閑話、外話ではなく本編にしました。

第７３話　箱根旅行、桃の花の言の葉

ｓｉｄｅ　川神百代

案内された部屋で後から来るジンをとりあえず待つ。

気配からしてもうすぐ来るのは分かる。どうやらワン子とクリの先導で山道を走ってきているようだ。相変わらず面倒見のいい奴だな。

湧き上がってくる苦笑のままテーブルに備えられているお茶を用意する。ジンの奴が息切れとか疲れとかあるわけないのは分かっているが、労いのためのお茶を入れてやるのもいいかもな。

ジンが帰ってきて今日で１０日。

何故だろうな。不思議と自分の中に穏やかなものが常に満ちていて、あれほど飢えていた戦闘衝動が嘘のように大人しくなっている。最初はジンが帰ってきた事が嬉しくて、それで気が回っていないものだと思っていたが、どうやらそうでもない事が最近になって分かった。

自分が幸せなんだと思える。

もちろん、闘いたいという衝動が全部なくなったわけじゃない。それは私の生まれ持っての性質（たち）だし武芸者である以上は避ける事の出来ない性（さが）だ。

それでもジジイたちがうるさく注意していた頃に比べると格段に収まっている。

満たされているんだ。ジンが隣にいる事で。

でもただ隣にいるだけでここまで満たされているんだ。もし心だけじゃなく身体も1つになったらどれ程の幸せを私は得るのだろうか。それが少し怖くて物凄く楽しみ。

もちろん今日はそのつもりでいるし、ジンもその気でいてくれているはず。じゃなきゃわざわざ私たちだけで別の部屋を取るなんて事はしない。そもそも言い出したのはジンの方だからな。

だから凛奈さんに幸せ家族計画（コンドーム）を渡された時は珍しくうろたえてしまった。使うべきか否かは迷うところなんだがな。

それよりも勝負下着はいつ身に着けるべきか。やっぱアレか。夕食食った後に温泉だからその後だよな。脱衣所まで一緒だとバレちゃうけど……まあいいか。どうせジンに見せるためのものなんだから。

お？　どうやら彼氏が来たようだ。さて、第一声は私らしくいくか。

side out

side　暁神

「遅いぞージン。可愛い彼女を放ったらかしにするなんて重罪だぞー」

襖を開けて謝罪をする前に声が飛んできた。どうやら俺が謝るのを分かっていて出鼻を挫いてきたな。だがまあ、一種のコミュニケーションだなこれも。その証拠に声は咎めているが顔は笑っている。

「はいはい、悪うございました。では可愛い彼女を放置した彼氏にはどんな罰が待ち受けているんでしょうか？」

おどけるように言ってもモモは不機嫌にならない。それどころかより一層笑顔を深くすると座っている横の畳を叩いた。どうやらそこに腰かけろと言う事らしい。

素直に従ってモモの隣に腰を下ろす。すぐに腕に飛びつくかと思ったが、俺が来る前から用意していたんだろう、テーブルの上に置かれていた湯呑に急須からお茶を注いで俺の前に置いた。

さて、これはいったいどういう意味なのだろうか。

「とりあえず労いのお茶だ。飲め」

何に対しての労いなのかはよく分からないが、差し出されたお茶を無碍に返すほど人でなしじゃない。ちょうど喉も乾いていた事だし、ここは素直の受け取っておこう。

「これが罰なのか？」

お茶を一口含んで問い掛けると、モモは満面の笑みを浮かべる。

「そんなわけないだろ。もっと凄いものが待ち構えているぞ」

凄いものねぇ……でもなんだろう、このままいけば罰というよりご褒美になりそうな予感がするんだが……果してこの予感は当たるかな？

そんな事を考えながらお茶を飲み干し湯のみを置くと、笑顔のままのモモに問い掛ける。

「これからどうする？　夕飯まで自由行動だけどまだ3時間近くあるだろ？　どこか行くならどこまでもお伴するが？」

モモの事だろうから外に行くだろうと思っていたが、その予想は裏切られる結果となった。

俺の問いかけに答える事なくモモは満面の笑みを浮かべたまま立ち上がると、外の景色が見えるようにと開け放たれていた障子のある壁際に座る。

突然の行動に首を傾げている俺に視線を向けると、正座して座った自分の太腿を叩いた。

コレはあれか……いわゆる“膝枕”というやつを誘っているのか？

真意を計りかねている俺を呼ぶようにもう1度太腿を叩くモモ。どうやら本当に膝枕をしてくれるらしい。そうと分かれば遠慮をする必要もない。

座ったままの姿勢ですり寄り横になってモモの太腿に頭を乗せる。数回頭の位置を調整するように動かすとモモはくすぐったそうな声を漏らした。そして程良い位置を見つけて動きを止め真上にある俺を見下ろしているモモの視線と重なる。

「これも罰なのか？」

「ああ、そうだ。これも罰の1つだ」

『1つ』って事は他にもあるって事か。でもこれってもはや罰じゃなく本当にご褒美だぞ。後頭部に感じる温かさと柔らかさに思わず口元が緩む。そんな俺を見る笑顔のモモは幸せそうだ。

「気持ちいいか？」

「ああ、最高だ」

「そうか」

言葉数少ないやり取りの中でも十分に心が満たされているのが分かる。３年前はこんな雰囲気になった事はない。大人になったと言うよりは、子供じゃなくなったと言うべきだろう。

もちろん一緒に出かけたり遊んだりするのも楽しい事には間違いないが、それだけじゃなくただ一緒にいるだけで幸せを感じる事が出来るようになった。

「ジン」

「ん？」

「好きだぞ」

ゆっくりと梳くように俺の髪を撫でるモモが、いろんな想いが込められた声で言う。それに対して俺は目を閉じてゆっくり頷く事で返す。

言葉で返してもよかったが、何故か口にすると陳腐になりそうな気がして声に出せなかった。だがそれでも想いは伝わったようで、髪を撫でる手がより優しいものになったのを感じた。

「眠たかったら寝てもいいぞ。まだこっちの生活スタイルに慣れてないだろ？」

どうやら気付かれていたらしい。
確かに時間で区切られた生活をする学生の生活スタイルにはまだ慣れていない。それまで2年8ヶ月もある意味で時間に自由な生活をしていたんだ。たった10日で慣れる方が難しいのかもしれない。

「それに加えて仲間の事、ワン子の事、そして私の事。帰ってきて10日しかたってないのに少し頭を働かせすぎだ」

「そうか？　そんなつもりはないんだけどな……」

「そこがお前のいいところだが、彼女としてはもう少し甘えて欲しいな」

つまりは『甘える事』が『罰』なわけか。だが確かにこれは『物凄い罰』だ。

基本、俺は誰かに甘えるという事に慣れていない。孤児だという事を小さい頃から知っていたからか、川神院のみんなや鉄心さん、モモの両親が俺の事を家族だと思っていてくれているのは分かっていたが、どこか遠慮して思いっきり甘える事が出来ない自分にも気付いていた。

だから俺は誰かに思いっきり甘える事はないんじゃないかと思っていた。

だけどそうか。俺はモモには甘えてもいいんだ。
『家族』で『友達』で『仲間』だけど、他の人たちとは違う『恋人』という特別な繋がりのあるモモ。きっとこの世界で1番、俺の隣にいるのが当たり前な存在。

でもなんで今更気付いたんだろうな。もっと前からモモに甘えていただろ、俺は。

モモがいたから、両親の事で悩む事がなかった。モモがいたから、風間ファミリーの仲間とも出会えた。モモがいたから、記憶を失っている間も自分には帰る場所があるんだと信じる事が出来た。

良く考えたら、モモに甘えっぱなしじゃないか。

だがそうか、モモは俺がこの世界で唯一思いっきり甘える事の出来る存在なんだ。いや、それも違うな。俺にとってモモは切り離す事の出来ない一部なんだ。

『暁神』は『川神百代』がいるからこそ存在しえた。なんかそんな感じがしてきた。

自分の思い至った考えに含み笑いしている俺を、不思議そうに見下ろしているのが分かる。でも纏っている雰囲気はちっとも変っていない。

「それじゃあ、お言葉に甘えて眠らせてもらうけど、モモは暇じゃないか？」

「そんな事ないぞ、お前の寝顔はなかなか見れないからな。この際じっくり観察させてもらう」

「イタズラ書きだけは勘弁してくれよ」

「そういえばやりたい放題だな」

おいおい、なんだよその反応は。注意しない方がよかったじゃないか。まあ言葉のやり取りだけで本当にやる事はないと思うけどな。

「モモ」

「うん？」

「好きだ」

さっき言えなかった言葉を、モモと同じようにいろんな想いを込めて言う。言葉は返ってこなかったが気配で頷いたのは分かった。それでも想いは伝わってきた。

まるで真逆のやり取りに、俺もモモも小さな笑いを零す。

『好きな人』から『愛しい人』になり、やがて『かけがえのない人』になっていく。人を好きになり求める事は、この過程を進んでいくという事なんだろう。

なら、もう次に進んでもいいか。

眠気に誘われ薄れていく意識の中で、俺はそんな事を思った。

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

ｓｉｄｅ　川神百代

湯船に浸かり今日１日に疲れをほぐすように両腕を伸ばして伸びをする。

恋人予約特典となっている1番見晴らしのいい露天家族風呂は、凛奈さんの言った通り物凄く素晴らしいものだった。

入口以外の壁が全面ガラス張りになっていて風景をさえぎる物が何もない。最上階の端に位置しているからこそ構造だが、覗かれる事がないからこの解放感はかなり気持ちがいい。

腕を下ろし顔を上げると、後ろにいるジンの胸に背を預け満天の星空を眺める。今の私はジンに後ろから抱き締められて座っている状態だ。ジンの腕は私の脇を通りお腹の前で手が組まれ、私もその手に自分の手を重ねて置く。

包み込まれているような体勢に嬉しさと幸せが込み上げてくる。

幸せと言えばさっきの食事の時もそうだったな。ジンは物凄く恥ずかしそうだったが、誰も見ていない、私たち2人っきりという事で何とか納得させて、横に並んでお互いの箸で食べさせ合った。

今までファンの女の子たちには、弁当とかを食べさせてもらった事があったが、それとは全く何もかもが違った。
その時は嬉しい楽しいという感じだったが、ジンに食べさせたり、ジンから食べさせてもらうと真っ先に幸せという感情が湧き上がってきた。もちろん嬉しい楽しいという感情もある。

でもあれだな、世の女の子が恋人のためにお弁当を作りたいという気持ちがよく分かった。それを自分の手で食べさせてあげたいという気持ちも物凄く理解出来た。
だって出された料理を食べさせるだけであんなに幸せになれるんだ。
それが自分の作った料理となると格別だろう。

よし決めた。連休明けから私もジンのためにお弁当を作ろう。そして毎日食べさせ合いをしよう。私たちは全校生徒公認のカップルなんだ。どこでイチャつこうが誰にも文句は言われないはずだ。

あぁー。なんか本当に毎日が充実していきそうだなぁ。

「なに笑ってんだ、モモ？」

「笑っていたか？」

「ああ、なにやら嬉しそうに笑っていたぞ」

顔には常に笑みが浮かんでいるのだから雰囲気の変化で感じ取ったんだろう。そんなジンに私は全身の力を全て抜いて完全にその胸に寄りかかった。それでもブレる事にないその身体に安心感が募る。

「どうした？」

私のいきなりの行動に少し不思議がりながら、それでも変わらない穏やかな声で問い掛けてくる。

「恥ずかしさはなくなったか？」

「未だに恥ずかしいよ」

全然そうとは思えない落ち着いた声だ。だが2人部屋を予約した特典を説明した時、ジンは物凄く恥ずかしがった。食事を食べさせ合った時もそうだったが、どうやらジンには恥ずかしさに対するボーダーラインがあるようだった。

そのラインを越えなければどんな事でも恥ずかしがらないが、超え

てしまうと逆に私が戸惑うほど恥ずかしがる。

意外な一面だなホント。けど私たちは恋人同士なんだぞ。これからそれ以上に恥ずかしい事をするかもしれないのに大丈夫かこいつ。だけど今はそれより――

「しかし、男に寄りかかるのがこんなにも安心するものだとは思わなかったな」

「それはなりよりだな。俺はモモより背が高くなって結構安堵してるんだけどな。3年前はそんなに変わらないぐらいだったからな」

そうだったな。付き合いだした頃は私の方が背が高く、3年前は同じぐらい。だから再会した時の私を見下ろす視線が凄く新鮮だったな。

私が抱きついた身体。私を抱き締める腕。その全てがジンが“男”になったのを物語っていて柄にもなくドキドキしたな。あの時。

あの時の感覚を再度味わいたくて、私を抱えていた腕を外させ正面から向かい合うように体勢を入れ替える。そうなると私の視線はちょうどジンの顎辺りに来るから上目遣いに見上げれば、見下ろすジンの視線は私の顔と自慢の胸に注がれる事になる。

この体勢もなかなかにいいものだ。

「そういえば、お前と一緒に風呂に入るのって何年振りだっけ？」

「そうだな……7年振りじゃないか？　初めて勝負をしてからは一緒に入らなくなったからな」

恥ずかしさを逸らすためのジンの質問だったが、そういえばそうだ。あの勝負以降に私はジンを異性だと強く認識して、無性に恥ずかしくて一緒に風呂に入るのをやめたんだったな。
それが今、こうして向かい合って抱き合いながら一緒の風呂に入っている。お互いあの時と違い身体は完全に大人になって。そう考えるとちょっと不思議だな。

「モモ……」

優しく掛けられる声にその想いを感じ取る。
目を閉じると頬に手を添えられ唇が重ねられる。啄むようなキスの繰り返しの後、少し顔を動かして深く繋がり舌を絡め合う。

「ン、ふ……ン」

重ねた唇の間から漏れる自分の声に興奮が高まっていく。ジンの首に回した腕に力を込め、もっと強くしてくれと催促する。

「！　んんっ……ふ……ンッ」

私の想いに応えるように舌の動きが激しくなると同時に、背中と腰に回されていた手がゆっくり撫でるように動く。その感覚からもたらされる快感が背中を昇り頭のてっぺんまで突き抜けていく。

幸福と快感。そして深く唇を合わせている事で酸素が足らなくなったのか、頭の中がぼうっとなっていく。

「ぷはっ……」

唇が離れ足りなくなった空気を取り込むように大きく息を吸い、力

が抜けるそのままに任せて、額をジンの肩に当て身体全身を預ける。
背中を撫でていた右手が今度はうなじに移動し、左手は未だに腰を撫でている。

断続的に襲ってくる快感に下腹部辺りが疼き始めているが、今は触れ合う肌の温かさと、聞こえるお互いの鼓動を感じながら、溶けていくような幸福の中に身を委ねていたかった。

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

ｓｉｄｅ　暁神

半ばのぼせかけていたモモをお姫様抱っこで脱衣所まで運び、少しだけふらついているのを支えながら身体を拭くのと着替えを手伝った。

その時に見えた下着なんだが、何と言うか……アレがいわゆる『勝負下着』というものなんだろう。モモらしいと言えばモモらしい下着だと思うんだが……少し大胆だったな。

「へっへ～」

ふやけきった笑顔で俺に身体を預けるモモの腰に手を回し、倒れないように支えながらゆっくりと部屋へと戻る。

なんだかこの数時間で羞恥のボーダーラインがどんどん低くなっている気がする。１度経験したせいかご飯を食べさせ合うのも一緒に風呂に入るのも、次からは抵抗なくやれてしまうだろう。
いいのか悪いのかは分からないが、モモが嬉しそうならそれでいい

か。

風呂に行く時よりも倍の時間をかけて部屋に戻ると、既に布団が敷いてあった。

うん、それは問題ない。だって旅館だ。食事が終わって風呂が終われば、仲居さんの仕事なんて布団を敷く事だけだ。うん、仕事熱心な仲居さんなのはいいことだ。

だけどいくら恋人予約をしていたとはいえ、ここまでからさまだとどう反応していいか分からん。

「おお～！　広いぞ～！」

固まる俺から離れてモモは敷いてあった布団に機嫌よくダイブしだ。モモの言葉通りその布団は広かった。

大人が2人並んで寝るにはちょうどいい広さのクイーンサイズの布団に枕が2つ並べてある。ふと思い部屋の押し入れを開けると、1人用の布団2組は畳まれたままそこに仕舞われていた。つまり、今敷かれている布団はわざわざ別の所から持ってきたという事だ。

恋人予約の特典だからってここまでするか普通？　いやだがちょっと待て。この旅館は凛奈さんの馴染の宿で、女将さんとは8年近い付き合いだと言っていたな。

考えるまでもない。間違いなく凛奈さんの入れ知恵だ。

溜息が出そうになるのを何とか堪える。

ここまで御膳立てされているのに何も起きなかったらなんて言われるか……いや何か起こしてもなんか言われそうな気もするがそこは

今は気にしないでおこう。

決めただろ。次に進むって。

「モモ」

部屋の照明をギリギリまで落とし、布団に腰を下ろすとはしゃいで転がっているモモを抱き寄せる。抵抗する事なく体を寄せるモモを、胡坐をかいた脚の上に乗せて横抱きにして唇を重ねる。

風呂の時と同じように、数回啄むようなキスを繰り返した後で舌を絡ませて繋がりを深くすると同時に、身体を支えていた右手で脇を撫で、左手で浴衣から覗く太腿を撫でる。

そんな俺の動きに快感を感じているんだろう、時折身体を強く震わせるモモを見て、唇を重ねたまま布団に横たえさせ一層動きを大胆にしていく。

重ねていた唇を離し、荒い息継ぎを繰り返しているが快楽に染まり潤んでいるモモの瞳を真っ直ぐに見つめ、最後の言葉を掛ける。

「いいか?」

穏やかなで幸せそうな笑みを浮かべて頷く。そんなモモの前髪をかき上げ額にキスをして、浴衣の帯をほどきながら、もう1度想いを伝えるように深く唇を重ねる。

２００９年5月3日日曜日。

今日この年のこの日から、俺にとってモモは『好きな人』から『愛しい人』になった。

第７３話　箱根旅行、桃の花の言の葉（後書き）

あとがき～！

第７３話終了。

前回のあとがきにて神と百代のシーンは閑話か外話として投稿すると言いましたが、書いているうちにどんどん文字数が増えていき、本編と変わりないほどにまでなってしまったので、予告とは違い本編の１話として投稿させてもらいました。

はてさて、今回のお話はいかがったでしょうか？

甘いような甘くないような。

イチャイチャしてるようなしてないような。

とりあえず『穏やかな恋人の時間』というものを演出してみたんですけど……

どうだったでしょうか？

ある意味で私にとってはこれが限界です。

ああ～でも百代らしさが余り出てなかったかな？

おとなし過ぎるような気もしないではないですが……

難しいですね。

あ、ちなみに題名にもなっている桃の花言葉は、

『あなたに夢中』『あなたの虜です』『愛の幸福』。

他にも『天下無敵』『チャーミング』という意味もあり、百代にピッタリですね。

さて、次は旅行2日目。

頑張ってやりますので次投稿もよろしくお願いします。

ところで、第63話のあとがきでアンケートを取ったオリキャラの名前。
なかなか反応が少ないですが、ここで中間発表?みたいなものを。
現在まで頂いた票数は8票。

1. 御神　渚（みかみ　なぎさ）　4票
2. 逢逆　刻（おうさか　とき）　4票
3. 簫　臣屠（かがり　じんと）　0票

という現状になっております。
まだ投票は受け付けていますので、どうかよろしくお願いします。

第７４話　箱根旅行、犬と猫と猟犬と（前書き）

第７４話投稿。

サブタイトルに深い意味はありません。
なにが誰を指すかはすぐ分かりますよね。

第７４話　箱根旅行、犬と猫と猟犬と

――２００９年　５月４日　月曜日　ＡＭ９：３０――

ｓｉｄｅ　直江大和

旅行２日目。外は爽快な天気だ。

今日は自然の中で釣りなどをして遊ぶことに決めている。ちょうど旅館の方で釣り竿の貸し出しをしていたので人数分を借りて、今はロビーで着替え中の女性陣と別の部屋の兄弟たちを待っている。

ちなみに凛奈さんも誘おうとしたのだが、ヒロ曰く。

『誘っても来ないと思うし、そもそも起きてこないんじゃないかな？　下手したらたぶん夕方まで寝てると思うよ』

低血圧以前の問題だと思うんだがどうだろうか？　ただのズボラな気がするんだけどな。お仕置きが怖いから正面向かって言えないけど……

そんなわけで、男５人がロビーのソファーに座って知恵の輪（キャストリング）を解いている最中だったりする。

「はい終了」

意外と思われるだろうが、要領がいいのか発想力がいいのか。この手の遊びは俺よりもヒロの方が得意。予想通り今回もあっという間に解いてしまった。レベル的には１番難しいのを渡していたのにな。

次に俺。こういった物は全体の構造や大きさを見ればだいたいの解き方は分かってくる。理論的に考えるものならまず遅れを取る事はない。

「へぇ、キャストリング……知恵の輪か」

急に上から掛けられた声に驚き顔を上げる。そこには兄弟とその左腕を抱きしめて肩に頭を預けている姉さんの姿があった。
まあ、声を聞いて誰かは分かっていたけど気配を消して近付いてきたなこの2人。咎めるように少し睨んでやると悪ぶれる事もなく自由な右手を上げて応える兄弟。

ん？　なんだ？　なんか姉さん、雰囲気柔らかくなったか？　いや姉さんだけじゃない。2人の雰囲気が昨日とは少し違うな。
何があったかはまあ予想通りなんだろうけど……突っ込むだけ野暮か。藪をつついて蛇を出す趣味は持ち合わせてない。

これから姉さんのとばっちりが減るのを考えれば、歓迎すべき変化だしな。

「おしゃ！　ヒロや大和ほど早くなかったが解けたぜ！」

隣で上がったキャップの歓声に視線を向ける。
勘や閃きが凄いキャップはこういったものも感性でやり遂げる事が出来るから侮れない。下手すりゃ俺より早い時がある。

「後はモロロとガクトだけか。とっとと終わらせろよ」

「ガク、力で壊すなよ。タク、視線を変えて全体を見ろ。そんなに

難しくないぞ」

未だに苦戦しているモロとガクトに姉さんのはっぱと兄弟の注意が掛けられる。

「ちまちましたのは苦手なんだよな、ちっくしょー」

「えっと……あ、そうか！　ここをこうすれば……」

既に諦めているガクトは解く事をしないで指先でイジっているだけ。モロの方は兄弟のアドバイスのお陰で解き方を見つけたようだ。女性陣がロビーに姿を現した頃には既に解き終わっていた。

「みんなお待たせー！　さぁ行きまっしょい！」

ワン子が代表して声を掛けてきたので、それに頷いてキャストリングを袋に入れ上着のポケットに仕舞い、ソファーから立ち上がり脇に置いてあった釣り竿一式を持ち上げる。

「釣りの手続きはしておいた。竿も借りたぞ」

「本当、立派な竿だね。触っていい？」

「今手に持っている釣り竿なら触っていいぞ」

朝っぱらから下ネタに走る京を適当にスルー。舌打ちして悔しがっているがそれもスルー。いちいち付き合っていられない。

「日本は免許なくても釣りが出るのが素晴らしい」

「ジャーマンでは必要なんですか？　大変ですね」

感心しているクリスにまゆっちが何故か『ドイツ』ではなく『ジャーマン』と言って言葉を掛けた。そんなに仲良くなりたいんだなまゆっち。君の努力は必ず報われる。たぶんね。

それからクリス、釣り自体には許可はいらないが漁法によっては許可が必要なものもあるからな。そこんとこよく調べとけ。

「な～ジン～、部屋でまったりと過ごしたいぞ～。２人っきりでいたいぞ～」

「はいはい。今日はみんなと一緒に遊ぶって最初から決まっていただろ？　それに夕方になれば好きなだけ２人っきりになれるんだ。今はこれで我慢な」

駄々をこねる姉さんの額にキスをする兄弟。恋人としてはごく普通のスキンシップなのだろうが、俺たちにしてみれば意外な光景だった。

普段は姉さんの方からああいったスキンシップがあるだけで、兄弟が自分からするよな事はなかったはず。しかも人前で。だがお構いなしに自分からスキンシップを取ってる。

どうやら予想通り、昨夜とうとう一線越えたねこの２人……同じようの悟ったのだろう、俺を見るストーカーもどきのヤンデレ幼馴染みの視線がねっとりしているよ。

ここはあれだ、純真で微笑ましいワン子や、初な小学生のような恋愛もどきをしているヒロとまゆっちを見て心に清涼感をもらおう。

うん、そうしよう。

side out

side 暁神

見晴らしのいい適当な場所を選んで釣りを始める。

「よっしゃ！　ヒィィット！　いきなりヤマメだぜ！」

1番に駆け出し釣りを始めたキャップはもう得物を釣り上げたようだ。しかしまあ全身全霊で満喫しているな。殆ど野性児だぞ。
そんなキャップを呆れたように見ているタクに声を掛けてやる。

「どうだタク？　お前もたまにはハメ外して野生に戻ってみるか？
――っと、モモ、引いてる。釣り上げろ」

「任せろ！　フィィィッシュ！」

話の途中で竿が引いたのでモモに指示を出す。機嫌のいいモモは某釣り漫画のような声を上げて竿を引き上げた。釣れたのはキャップと同じヤマメか。
釣れて喜んでいるモモの頭を撫でながら、右手だけで咥えた針を外し大きな石で囲って作った簡易生簀に魚を放り込む。

「僕としてはジン兄とモモ先輩の現状に突っ込みたいんだけどね……」

タクの呟きに改めて自分たちの姿を客観的に思い浮かべてみる。
俺はちょっと大きい岩の上で胡坐かいて座っている。その上にモモが胸に背を預けて座っていて竿は2人で1つ。モモは両手で竿を持

っているが俺は右手だけで、左手はモモの腰に回している。
確かに客観的にみればべったりし過ぎだろうが、俺たちは恋人同士だ。しかも今は仲間内しかいなんだから別に問題はないだろう。

「言っても無駄だモロ。兄弟と姉さんは1歩大人の階段を上ったんだから」

「大和ぉ～私たちも今夜上ろうよ～」

墓穴掘ったなヤマ。イジってくれるのは別に構わないが自分も標的にされるのを忘れるなよな。お前がちゃんとした相手を決めない限り虎視眈眈とお前の貞操を狙う肉食獣がいるんだからな。
それからモモの機嫌が良くて助かったな。普段ならお仕置き確定の言葉だったぞ。

「さぁって、アタシは釣りの前に修行修行！」

ここに来てまで修業とは、相も変わらずカズの努力には舌を巻かれるよ。そんな可愛い妹の姿に嬉しそうだが少しだけ憂鬱そうな笑みを浮かべたモモを軽く撫でてやる。
数秒間だけ気持ちよさそうに目を閉じていたモモは目を開けると勢いよく立ち上がった。

「時間はたんまりあるしそれもいいだろう。ワン子、私が稽古をつけてやる」

「やったー！」

岩から飛び降りるモモにカズは無邪気に喜んで駆け寄る。ああいう

姿を見ると仲のいい姉妹に見えるが、何故だろう、大好きなご主人様に遊んでもらえて喜ぶ犬にも見えてくる。
もし尻尾が生えてたら物凄い勢いで振ってるんだろうなきっと……

「京、格闘修行だ。妹と一緒に稽古つけてやる」

「謝々（シェイシェイ）」

なるほど。素手のミヤが強く感じたのはモモが時折格闘の稽古をつけていたからか。弓が得意なミヤは基本遠距離。早打ちが出来ても中距離が精々で懐に入られると厳しいものがあるしな。
弓術の流派の中には弓を薙刀に見立てて中近距離の間合いを補うところもあるけど、ミヤの遣う椎名流弓術にはないんだろうか。
ああ、だから薙刀を使うカズと一緒に稽古しているのか。でも今は薙刀持ってないよな？　やっぱり今度それとなく聞いてみるか。

「今日も地道に鍛えて着実に強くなるのよ！」

「ジーン！　ちょっと行ってくるけど私の分も釣っておいてくれ！
3匹以上釣ったら後でご褒美な～！」

強くなっていく事を何やらヤマにアピールしていたミヤを引きずって行く川神姉妹。モモの言葉にヤマとガクがニヤついているがまあいい。
了解の意を伝えるために手を振って応えたのを見て、モモは上機嫌にスキップしそうな足取りで山の方へと向かって行った。

そういえばひたすらに釣りを楽しんでいるキャップはいいとして、ヒロ、クリス、まゆっちの3人はどうしているんだ？

「悪いなまゆっち」

「いえいえ。お、お任せ下さい。クリスさんのためなら火の中水の中虫の中！」

「でも出来れば触りたくね～」

そう思って様子を見るため視線をそちらへと向けると、どうやらまゆっちが余り虫を触りたくないクリスのために餌をつけてあげているようだ。お嬢様クリスはそれに対して何も思うところがない様子。でもまゆっちも女の子だしな。本当なら虫を触りたくないんだろう、微妙に震えているし松風が本音を語っている。それでも役に立ちたい一心で我慢してるね。

「まゆ貸して。代わりにつけてあげる」

「タカさん」

お、見かねたヒロが餌をつけるのを代わってやってる。明らかにホッとしてるねまゆっち。さり気ないフォローだが、ああいった優しい気遣いがまゆっちの中のヒロの好感度を上げていっているんだろうな、きっと。

昨日の凛さんの爆弾発言のせいか、まゆっちはあからさまにヒロを意識しているしな。といっても遅れていたまゆっちがヒロに追いついて同じラインに立ったってところかな。

和気あいあいと穏やかな空気が流れているが、さっきからキナ臭い気配が森の中を駆け回っている。動いているの十数人だけど、配置

されている人数は1個部隊ぐらいいる。明らかに軍人だ。

俺に用事か？　だけどあの部隊が今更俺に接触するとは思えないし、どこか別の部隊が情報を嗅ぎつけてきた可能性はないとは言えないが、それこそ宝くじの1等が当たるかどうかの確率だろう。

当てそうな豪運の持ち主なら確かにこの中にいるけどな。『ひゃっほーい！』なんて叫んで10匹目の魚を釣り上げている。

「よう。お疲れさん」

そう思いながらも1人だけ戻ってきたモモに労いの言葉を掛ける。雰囲気から察するに、どうやらモモも森の中の気配に気付いているな。

「ワン子と萌え萌え京タンは？」

「いない時だけ京をいじってやがる。やっぱお前サドだな……」

気配に気付いていないヤマとガクはいつ戻りのやり取りをしている。まあ俺たちも気付かせるわけにはいかないからいつも通りの振る舞いをしているんだけどな。

向こうを見てみると、恐らく気付いているであろうヒロもまゆっちとクリスを不安にさせないために普段通りの振る舞いをしている。

「組み手に入ったからな。後は好きにやらせるさ。それから大和、京に無理矢理襲われる覚悟はしておけよ」

「はっはっは、姉さんこそ兄弟に捨てられないように頑張るんだな」

虚勢を張って言い返した直後、ヤマはあらん限りの力を振り絞ってその場から逃げ出した。それを眺めるモモの目は逃げる草食動物をじっくりと見定める肉食動物のそれだ。

「んー、そういう負けず嫌いなところは気に入ってるぞ。３０秒だけ待ってやるー！　逃げろ逃げろー！」

３０秒で逃げるだけ逃げても、ものの１０秒で捕まるだろう。だけどモモがこの場を離れるいいきっかけになったな。今森の中を動いてるキナ臭い十数人の気配はモモが何とかするだろう。

「な、なにやら狩りが始まりそうな雰囲気ですが？」

「いつもの姉弟のコミュニケーションだから大丈夫だよ」

「またずいぶんと過激なコミュニケーションだな」

ここにはヒロを始めまゆっちとクリスもいるし、俺が離れても大丈夫だな。さり気なく視線を送るとヒロが小さく頷いたのが見えた。

それじゃあ、１番強い気配が近付いているカズとミヤのところにでも行くか。知った顔が来ているみたいだし、久し振りの挨拶でもしておこう。

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

ｓｉｄｅ　川神一子

ええ～っと。この人誰だろ？

突然現れた3人目の気配に、アタシも京も組み手を中断してそっちに視線を向ける。

「お見事です、サムライガールたち」

おお！　外国人だわ！　しかも軍人よ軍人！
アタシたちより高い身長に迷彩服って言うのかな？　その服が物凄く様になっているわ。あの眼帯も威圧的だけどなんか強者って感じがしていいわね。

「？　こんな所に人が……」

なんか小さく京が呟いているけど今はどうでもいいわ。この外国人どこから来たのかしら？

「ほれぼれするような動きでしたね2人とも」

ま、間違いないわ！　さっきのは聞き間違いじゃなったのね！　大変大変、京にも教えなきゃ！

「ちょ！　日本語よ！　外国人が日本語しゃべったわ！」

「や、クリスだってそうでしょうが」

あれ？　そういえばそうね。クリがいるのも当たり前になっちゃって全然外国人だと思わなかったわ。あははは。

「私も武術に心得があります。貴女たちのお稽古に私も混ぜなさい」

何やら凄く上からの物言いだけど闘えるのならそんなの問題なしよ。軍人と闘うなんて初めてだし実践訓練大歓迎！　強くなれるならなんだってやるわよ！

「なんだか面白そうだわ！　受けて立つわよ！」

「いい返事です。それでは構えなさい」

「ちょっとそんな安請け合いして――」

来る！

アタシと同じように感じた京も言葉を切って反射的に飛び退いた。さっきまで立っていた場所を外国人の鋭い飛び蹴りが振り下ろされていた。軍人だから当然だと思っていたけど――

「京！　この外国人、相当鍛錬積んでる！」

「うん、強い……展開の速さに戸惑ってられないね」

すぐに力量を修正しないといけないわね。なめてかかるとすぐに返り討ちにあいそうだわ。

「2対1でいいでしょう。掛かって来なさい」

不利な状況でも態度が揺るがない。それだけ自分の力に自信があるようね。でもまあ間違いじゃないわね。素手の状態ならアタシと京じゃ2対1でギリギリ勝てるぐらいだわ。

でも、強いのなら全力でいける！

「川神院、川神一子！　行くわよ！」

気合を入れて外国人に向かって行く。
アタシの武器は速さ。わざわざ相手の出方を伺う必要なんてない。
拳と蹴りの連撃を繰り出して外国人を後退させる。
でもアタシばかり攻撃して、相手は防戦一方だけど全部見切られて
いるのが分かる。攻撃の速度を上げてもまともに攻撃が入らない。

「なかなかの動き、認めてあげてもいいでしょう。が、私から見れ
ばまだまだ。野ウサギに等しい」

背中を奔る嫌な気配に攻撃の手を休めてすぐに回避行動に移る。直
後に私がいたところを物凄い勢いの蹴りが通り過ぎていった。
即座に攻守の入れ替わり。なんとか蹴りの連撃を防ぐけど、１撃の
威力がアタシとは比べ物にならない。このままじゃあガードの上か
ら削られる。

いったんと大きく間合いを取ると、それを埋めるように京が相手に
向かって行った。

腕の痺れが取れるまでの間、京が外国人の相手をしているけど駄目
だわ。素手の時はアタシの方が優位に立てるんだから、今の京じゃ
１対１は厳しい。
外国人が飛び上がった隙に後ろに下がって間合いを開けたけど、さ
っきまで京がいた場所は相手の蹴りで少しだけ陥没してる。

「京、コレ稽古と言わず真剣（マジ）で行くわよ」

「ん。本気出す」

目配せをしてアタシがまず相手に突っ込んでいく。なんか言っているけどそれを無視してダッシュした勢いを殺さず体勢を低くして相手の足を刈るように蹴りを放つ。これが――

「【蛇屠り（へびほふ）！】」

「おっと危ない、だがここまま踏み潰して……」

空中に飛んでかわすのは予測済みよ！　さっきの攻撃は囮なんだからもう次の攻撃の溜めは出来てるわ！

「【鳥落とし】！」

思ってもみなかったアタシの対空の攻撃に対応できず、直撃をくらった外国人は、体勢を崩しながらも何とか着地をする。けど、アタシたちの攻撃はこれで終わりじゃないわよ！

「次は私！」

着地の隙をついて京が外国人に襲い掛かる。まだ体勢が完全じゃない外国人は京の顔面に牽制のための突きを放ったけど、それで止まるような京じゃないわ。

力の入っていない突きを振り払うように打ち上げると、京はその腕を掴み身体を回転させて外国人の懐に潜り込んだ。

行け！　京！

「せやっ！」

背負い投げが綺麗に決まり外国人は背中から地面に叩きつけられ

た。体勢が整っていない状態で投げられたから受け身は取れていないはずだわ。

お互いの健闘を称えるようにハイタッチで手を叩き合っていると、投げ飛ばされた外国人が無言のまま立ち上がった。

「まだやるわけ？　勝負ついたじゃん」

「……Ｈａｓｅｎ　Ｊａｇｄ.」

何か小さく呟いたけど、雰囲気が変わった？

感じた違和感に従って京と2人で突進してきた相手を挟むように左右に広がる。

「頭に血が上っているなら――」

「これで終わりよ！」

京と一緒に止めの蹴りを繰り出したけど、外国人は何かを取り出すとアタシたちの蹴りを左右の手で普通に受け止めた。この感触、この硬さは木。でもって両手に持つ武器と言えば――

「トンファーか！」

「Ｈａｓｅｎ　Ｊａｇｄ！」

武器の正体を見抜いた京を最初の標的に定めた外国人は、手に持ったトンファーを回転させた1撃を繰り出した。それを何とが防御した京だけどそのガードごと吹っ飛ばされる。

「京！」

アタシは体勢の整わない京を庇うように前に出る。何とか時間稼ぎをしたいけど、トンファーを持った相手となんて闘った事ないからよけるので精いっぱい。っていうかこの外国人、トンファーの遣い手としてはたぶん物凄い一級品なのは間違いなわね。

「トンファーキック！」

「ぐっ！？」

いきなりの蹴りがアタシの腹部を直撃し吹き飛ばされた。振り回すトンファーにばっか気を取られて蹴りの注意を怠っていたわ。てかジン兄の言葉をすっかり忘れてた。戦闘中は無駄な考えはしちゃいけないんだったわね。

「けほっ、こりゃ死合いね……武器がないのが痛いわ」

「このテのは遠距離から射るに限るんだけどね」

アタシも京も武器が今ここにないのが悔やまれるわ。得意の武器があればもうちょっとマシな戦いが出来るんだけど……ないものを悔やんでもしょうがないけど、これじゃまた負けちゃうかな。

「ハハハ！　Ｈａｓｅｎ！　Ｊａｇｄ！」

外国人が高らかに声を上げた瞬間、アタシと京の間を何かが突き抜けて行き、それを感じたアタシは恐怖に動く事が出来なかった。たぶん京も同じだと思う。

それは殺気だった。

でも今までこんな高濃度で高密度の殺気なんて浴びた事はない。しかもこの殺気はアタシたちに向けられてものじゃないのに、それでも全身が竦み上がってくる。

「オイ、『猟犬』さんよ。俺の大切な仲間に何してんだ？」

なんとか顔だけを動かして声のした方を向く。

そこには今まで見た事なほど冷めきった表情をしたジン兄の姿があった。

第７４話　箱根旅行、犬と猫と猟犬と（後書き）

あとがき～！

「第７４話終了。あとがき座談会、司会の春夏秋冬　廻です。今回のお相手は――」

「おーっす、俺様、島津岳人だぜ」

「オッスＫＯＢ。元気にしてたか」

「いい加減にそのネタから離れろ！　俺様＝馬鹿じゃねぇ！」

「馬鹿だろ。さて無視して今回のお話ですが、まあごらんの通り旅行２日目で神と『猟犬』の対峙直前までいきました」

「また変なところで引きを作りやがって」

「いいだろ別に。次を読んでもらうための手法だよ。やり過ぎるのも問題だけどな」

「すでに何度か注意受けているじゃねーか。そのうち読者が離れていくぞ」

「うっ！　馬鹿のくせに核心突きやがって……」

「だからいい加減に『俺様＝馬鹿』から離れろよ！」

「はいはい分かったよ。で？　何か今回の話で質問はあるか？」

「質問はねーけど要望ならある」

「なんだ、言ってみろ」

「モモ先輩とジン兄が昨夜何やってたかこう、詳細に鮮明に描写した話を書いてくれ」

「ピピー！　教育的指導！　君は先ほどの発言で今後一切のあとがき出場の権利を永久剥奪されました。よって君の出演はこれが最後です」

「な！　横暴じゃねぇか！」

「うるせい！　作者としてはあれが精一杯なんだよ！　１８禁なんて書けるか！」

「だからって永久剥奪はねぇだろ！　ちょっとした冗談じゃねーか」

「その本音は？」

「８割本気だ」

「本当に本能に忠実な奴だな……ところで前回の宿題は終えたか？」

「は？　前回の宿題？　そんなもんあったか？」

「やっぱお前、Ｋ（キング）・Ｏ（オブ）・Ｂ（バカ）だわ」

第７５話　箱根旅行、ドイツ軍人たちの誇り（前書き）

第７５話投稿。

親馬鹿再登場。

第７５話　箱根旅行、ドイツ軍人たちの誇り

ｓｉｄｅ　ａｎｏｔｈｅｒ

今、私の目の前に立っているのは８ヶ月前に忽然と姿を消した男。
記憶が戻り生まれ故郷に帰ったと聞いていたが、まさかお嬢様の様子を見るために訪れたこんな所で再会するとは思いもよらなかった。
ですが出会えたのなら僥倖。

過去４度手合わせをして全て完膚なきまでに打ちのめされているから、この場で一矢報いるとしよう。先ほどの稽古で身体は十分にほぐれいているからな。

だが解せん。何故この男がここにいる。偶然にしては遭遇率が良すぎる。いや待て。そういえばこの男は今何と言った？

『俺の大切な仲間』

聞き間違いでなければそう言ったはずだ。つまりこの野ウサギたちはこの男の仲間で、私はその仲間に手を出したという事なのか？
だからこの殺気か。気を抜けば傅き逃げ出したくなるほどの高濃度で高密度の殺気。戦場でもこれ程の殺気を受けたのは１度だけ。あの時に似た恐怖が奥底から這い出てくるのを感じる。

もしかしたら私は、踏み込んではいけない領域に土足で入っていったのかもしれない。そう感じるのだった。

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

side　暁神

『猟犬』がカズとミヤの側に近付いているのは分かっていたが、まさかこんな展開になるとは思わなかった。そういえば初めて会った時も俺と勝負するためだったな。そう考えると予想できた事だったがすっかり忘れていた。

と、まずいまずい。ここで殺気を出していたらカズとミヤにも当たってしまうな。ていうか現在進行形で当てられて恐怖で竦んでいるな2人とも。

歩みを進めて2人を庇うように前に立つ。これなら殺気に当てられる事がなくなるから少しは楽になるだろう。

「久し振りですね『猟犬』さん。まさかこんな所で再会するとは思いませんでしたよ」

「それはこちらの言葉です『黒髪（ダークネス）』。よもやのような所で貴方と相対する事になるとは思いもよりませんでした」

このような所ね。確かに『猟犬』さんはそう思うかもしれないが、俺はここに到着するまでにある程度の予測はついていた。

考えれば簡単な事だ。クリスの父親はヤマ曰く『親馬鹿なドイツ軍人』。そして『猟犬』さんの気配。その事実から考えて『親馬鹿軍人の部下でクリスの様子を見に来た』といったところだろう。

俺の方は記憶喪失だったから本名を教えていない。だからクリスが連絡しても『暁神』＝『黒髪（ダークネス）』という考えはなかったんだろう。

「記憶が戻って故郷に帰ったのは知っていましたよね？」

「もちろんです」

やはり。なら本名は教えておこう。

「暁神ってのが本名なんですよ。覚えておいて下さいね」

クリスの関係者なら俺の名前に心当たりはあるはずだ。なんてたって編入初日にクリスが決闘を申し込んできたんだ。その経緯も父親に報告しているはず。案の定――

「貴方がお嬢様が圧倒的強さの前に負けをお認めになったという『暁神』でしたか。納得しました」

『お嬢様』ね……やっぱりクリスの父親の部下で間違いないようだ。だが現状はそれで説明がつくものじゃない。明らかに諍いが起きていて武器を持っていないカズとミヤを攻撃する気でいたはずだ。

「まあ、ここで会った事は置いておくとして、それよりもどうしてこんな状況になったのか説明をしてほしいんですけど？」

「それは不要です。ここで出会ったのなら私と勝負しなさい。今度こそ貴方を打ち負か――」

最後まで言葉を言わせない。殺気を一層強くしそれに圧されて身を強張らせた隙に間合いに踏み入ると、『猟犬』の首に左手を添える。力は全く入れていないが放つ殺気からいつでも首の骨を折れるという事は伝わっているだろう。

「説明をしてほしいと言っているんです」

殺気と共に有無を言わせない声音で言う。こっちは勝負なんてするつもりはさらさらない。場合によっては強制的に退場してもらうつもりだ。

「うわ！　こっちにも軍人かよ」

「おお？　何やら面白い展開になってるな。勝負中か？　それともこれからやるのか？　後者だったら私に譲ってくれジン」

モモがヤマを連れてやってきた。後ろから残りの仲間の気配も来ている。それから森の中を動いていたキナ臭い気配も全て消えている。思った通りモモがヤマを追い掛けた後で仕留めたな。

後は目の前の『猟犬』さんと近付いてくる１つの気配だけ。近付いてくる方はそんなに危険な雰囲気は感じないから『猟犬』さんだけどうにかすればとりあえず場は収まるか。

「悪がモモ、勝負じゃなくて尋問中だ」

俺の言葉に『猟犬』さんの気配が揺らいだ。どうやらモモの事は知っているようだ。だが今は俺に首を押さえられている状況にあるため、さすがに無駄口を叩くような事はしなかったみたいだ。

もう少し殺気を圧し掛ければ説明をしてくれるかな……と思ったが、どうやら時間切れのようだ。

「何の騒ぎだ？　……あっ！」

クリスの登場と共に殺気を消し首を押さえていた左手を放す。変に押さえこんでいる場面を見られるとお門違いな詰問を受けかねない。

ここは何もなかったように振る舞うのがベストだ。
その意図を『猟犬』さんにも視線を向けて伝えると、黙って頷いてくれた。

「クリスお嬢様」

「マルさん！」

「何だ。もう終わりか」

「え？　クリ知り合いなの？」

再会を嬉しがっている『猟犬』とクリスをよそに、つまらなさそうなモモの頭を撫でて慰めてやる。カズは予想外の事に戸惑っていし、ミヤはクリスがらみのとばっちりだと理解したのだろう、疲れたような半眼でクリスたちを見ていた。

「何やらややこしい事になっているな」

「父様！」

今更出てきてなにを言っているんですか貴方は。というか貴方が軍を率いてこなければこんな状況にならなかったって理解してますか？　してませんよね。してないからこそ軍を率いていきたんだろけど。

親馬鹿。ここまで来ると病気だよ。

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

side　篁緋鷺刀

えっと、これっていたいどんな状況なんだろう。

森の中にあったちょっと危険そうな気配をモモ先輩が仕留めた後、ジン兄のとんでもない殺気が一子ちゃんと京ちゃんがいた方から感じられたからみんなで急いで駆け寄ったんだけど……

「紹介しよう。私の部下のマルギッテ少尉だ」

「マルギッテ・エーベルバッハです。覚えなさい」

そこにいたのは噂の超親馬鹿軍人なクリスさんの父親と、やけに上から目線の口調で話す眼帯をし迷彩服を着た女性の軍人だった。その後、なにやらクリスさんの父親が一子ちゃんと京ちゃんに謝罪をしているし、京ちゃんが心底迷惑そうな顔で答えている。

言葉の意味から察するに、このマルギッテさんって言う軍人さんが、稽古中の一子ちゃんと京ちゃんに勝負を吹っ掛けてきて、ヤバくなりそうだった時にジン兄が割って入ったって事らしい。

「その若さ故の無鉄砲さが私は嫌いではない」

「それで襲われた方はたまらいねけどね。でももういいや……めんどい」

全くもって京ちゃんの言葉通りだと思う。ただ稽古をしているだけで襲われちゃあ堪ったもんじゃない。なんかその辺り、このマルギッテさんはモモ先輩に通ずるモノがありそう。

それから、さっきからジン兄が表情のない顔でずっとクリスさんの父親とマルギッテさんを見ている。たぶん2人の動きを観察して何かあったらすぐに割り込むつもりだね。
モモ先輩もさりげなく大和君たちを庇うように前に立っているし。

「アタシはよくないわよ！　やいマル！」

「野ウサギが私を呼び捨てに！？」

「今度はお互い武器有りで勝負よ！」

「人を指さすのはやめなさい。マルもやめなさい」

勝負の結果が気に入らなかったらしい一子ちゃんの再戦の約束に、マルギッテさんは再戦の話よりも指差されて名前を省略された事を注意している。この人もどこか焦点のズレた反応をする。ドイツの軍人家系ってこんな人たちばっかなのかな？

そんな一子ちゃんたちをよそにクリスさん親娘は話をしている。

「父様。なぜこのような場所に？」

「理由は1つに決まっているだろ。友達同士で泊まりがけの旅行に行くなどという電話をもらっては、父親としてはいてもたってもいられない。心配で駆けつけたのだ」

「それでわざわざ。父様。自分は幸せ者です」

聞いていたけど凄い過保護の溺愛だね。みんなは凛奈さんも過保護

の溺愛だって言うけど、ここまで物凄いものじゃなくてよかった。
あとクリスさん、そこは感激するところじゃないから。

だけどその言葉に岳人君が食って掛かった。

「オイおっさん。そんなに俺様たちが信用ならなのかよ？」

「信用とかそういう問題ではない。旅行と聞いてただ心配だっただけだ。とはいえ、私も子煩悩のバカ軍人ではない。せいぜい１個部隊を率いて様子を見に来た程度だ」

「十分にも程があると思うんですけど……」

心からの言葉が思わず呟きとして漏れた。子煩悩じゃないって……様子を見るために１個部隊を動かす人を見て、子煩悩のバカ軍人じゃないと言う人はたぶん貴方以外にいませんよ。

「キャップ、珍しく何も言わないね」

「どうしたら銃見せてくれるかなと考えてんだ。なんか軍人用の銃とか撃ってみたいじゃん」

「無理だと思うな……」

キャップは相変わらずだし、卓也君もそんなキャップの答えに半ば呆れたように言葉を返していた。

終わってみれば笑い話にもなるかもしれないけど、僕たちにしてみれば本当にいい迷惑だと思う。モモ先輩と京ちゃん、大和君に岳人君は完全に呆れを通り越している。まゆなんて事態に全くついてい

けず僕の後ろでひたすらオロオロしていたよ。

「娘が大好きな父親か。彼氏とか出来たらそいつ苦労しそうだな。ははは」

「愛しい娘に彼氏が！？　ふざけるなぁ！」

大和君の不用意なひと言に、クリスさんの父親はさっきまでの穏やかな雰囲気が嘘のように激昂すると、軍服の上着の中から銃を取り出すとその銃口を大和君に突き付けた。

「不穏当な発言はやめてもらおう少年。私が穏和でなかったら発砲していたぞ」

突き付けられた銃を見て顔を引きつる大和君だったが、次の瞬間、誰も動く事も声を出す事も出来なくなった。

「K？ｎｎｔｅｎ　Ｓｉｅ　ｂｉｔｔｅ　ｉｎ　ｓｃｈｌａｍｐｉｇ？　Ｄｅｕｔｓｃｈ－Ａｒｍｅｅ　Ｇｅｎｅｒａｌｌｅｕｔｎａｎｔ　Ｆｒａｎｋ・Ｆｒｉｅｄｒｉｃｈ．（いい加減にしてくれませんか？　ドイツ軍クランク・フリードリヒ中将）」

ジン兄がいつの間にか大和君とクリスさんの父親の間に立ち塞がり、左手で突き付けていた銃の砲身を握り潰しているかと思うと、右手は人差し指と中指だけを伸ばし喉元に添えていた。

さらに殺気とは違うけど重圧がかかりそうなほどの闘気を放っていて、周囲に身を隠しているであろう残りの軍人たちにも牽制をしている。

「Dies ist nicht Ihr Land Japan. Wenn sane Erwachsene, die d?mmer Verhalten, unterlassen Sie bitte.（ここは貴方の国ではなく日本です。良識のある大人なら、これ以上の愚かな行動は控えて下さい）」

「『Darkness』！（『黒髪』！）」

「Bitte nicht bewegen gibt. 『Jagd Hund』.（動かないで下さい。『猟犬』）」

たぶんドイツ語なんだろう。ジン兄に詰め寄ろうとしたマルギッテさんが何かを言われて動きを止めた。

殺伐な雰囲気の中で対峙するジン兄とクリスさんの父親。でもさすが歴戦の軍人。圧し掛かるほどの闘気を受けても平然としている。

「Ja, Sie haben 『Darkness』 oder war. Offenbar schien unh?flich zu sein. Der Versuch, sich zu entschuldigen. Will Kurenai hat so unterdr?ckt?（そうか、君が『黒髪』だったのか。どうやら失礼な事をしたようだ。謝罪しよう。だから抑えてくれないだろうか？）」

ドイツ語で何かを言われたジン兄は、闘気を鎮めると両手を下げて後ろに下がった。同時に僕たちの周りを包んでいた不穏な空気も霧散した。

「君のような強者がクリスの近くにいれば安心だが、マルギッテも君たちと同じ学び舎に転入予定だ」

「本当ですか！？　父様！」

「ああ、だが私とて同じクラスに入れるほど過保護ではない。隣の２－Ｓだな。優秀なマルギッテに相応しい特進クラスだ」

十分な過保護だと思うんだけどな。もうみんな呆れ果ててツッコミすらしない。ジン兄もいつも通りの雰囲気に戻ってるし。

「そうだ。森の中にいるお前の部下を１０人ほど撫でといたぞ。ちゃんと回収しておけよ」

「なに？　我が精鋭をか？　マルギッテ！　確認しろ」

モモ先輩の言葉に配置していた自分の部下がやられたのに驚愕しつつも、状況確認を促すクリスさんの父親。まあ、やった本人のモモ先輩が言うんだから間違いないけどね。

「……連絡不能。制圧されていますね」

「ふむ……今回の事はお互いに遺恨なしとしよう。こちらもマルギッテが襲い掛かったようだからな。それで構わないかね？　『黒髪（ダークネス）』？」

「そうですね……こちらもバカンス中ですし。それと俺の名前は暁神です」

ジン兄を僕たちの代表だと見たのだろう。クリスさんの父親は妥協

案のように提示し、ジン兄も肩をすくめながらその提案を呑んだ。
お互いに無駄な衝突は避けようと考えたんだろう、終わりはある意味であっけなかった。

「部下は責任持って回収していく。ではなクリス」

「はい！」

元気に返したクリスさんの答えに満足そうに頷き、クリスさんの父親はマルギッテさんを伴って去っていった。まるで嵐が去ったかのような静けさが辺りを覆う。

「マルチーズか……覚えたわ！」

「覚えてないからね。マルしか合ってないからね」

そんな中で決意を秘めたような声音で言う一子ちゃんに、卓也君の呆れたツッコミが入ったのだった。

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

ｓｉｄｅ　直江大和

クリスは俺の隣で上機嫌に釣りをしている。やはり父親に会えたから機嫌がいいんだな。

ちなみにあの後、俺たちは川に戻りみんなで釣りを再開した。
キャップは大量に釣った魚を売るために川下に駆けていき、兄弟は釣りをする気を失くした姉さんと一緒に川に入ってイチャついてる。

ガクトは2人を羨ましそうに眺めながら釣りを続け、京とモロは釣り上げた魚の周りで何やら雑談中。ヒロとまゆっちも仲良く釣りをして、ワン子はもはや釣りそっちのけ訓練してる。

今は俺とクリスしかいない。上機嫌だし説得するなら今だろう。

「クリス。お前の父親カッコイイな。誇り高い軍人なんだろ？」

「ああ！　自分の誇りでもある！」

食いついてきた。あとは話に乗っていき自分のペースに持っていけばいい。

「自分たちはそもそも軍人の系譜でな、自分の曾祖父も戦地で大義を胸に立派いに戦い、立派に散った。武勇伝を聞く度に自分にもその血が流れていると思うと熱くなる」

「軍人って凄いんだなぁ。でも軍ってのは作戦を使うよな？」

「そうだな、戦において作戦は重要だ」

よし！　やっぱり軍の話に持っていけば思った以上に柔軟になった。あとは畳み掛けていけば何とかなるな。

「そう、重要で大事な事なんだ。正面からぶつからず、被害を下げるための作戦があるのも知っているし理解できるだろ？」

「まぁな。実際奇襲作戦などもやるしな……何が言いたいんだ、大和？」

こっちの意図がまだ理解出来ていない様子。まあこの話だけで分かってもらう事が出来ないのは予想済み。畳み掛け開始だ。

「つまり、俺のやってる事はそういう事だよ。策を用いるのも味方や俺自身の被害を減らすため。軍隊に置き換えると分かるだろ？勝つための作戦、生きるための策。これを否定するとお前の誇りでもある軍の在り方の否定にも繋がるぜ？」

「む……？　む？」

思った通り困惑している。今のうちに纏めてしまおう。

「まぁそういうわけでさ、クリスにはせこいズルイって映るかもしれないが、これが俺なんだ。そこんとこ理解してもらった上で、ある程度は仲良くしようじゃないか」

これで上手くいくはず。クリスの誇りを刺激して完全に納得させるのではなく、そういう在り方の人間もいるという事を分からせればいいだけ。意外と簡単だったな。

「……よくわからん」

だが答えは俺の予想外の言葉だった。

「……お前が言ったところで説得力がない。いや、言葉に重みがない？　あるいは口先だけと言い換えるべきか？」

口先？　今こいつ『口先だけ』って言ったか？　俺がどう思い、ど

ういう考えでこういう在り方をしているのかも深く考えないで、自分の価値観だけで人の言葉を『口先だけ』と言いやがった。

完全に理解してほしいと言ってるわけじゃない。ただ認めてほしいだけ。それなのに言うにことかいて『口先だけ』？　もう我慢ならない。

「好き放題言ってくれるな、オイ」

声を低くして少しだけ凄みをもたせて言うが、クリスは俺の雰囲気の変化に気付く事なくつらつらと自分の考えを口にする。

「仲間を思いやる心はよく分かっている。そして今の言葉も受け入れたいのだが……身体が拒否している。やはりそう簡単には納得できんな」

身体が拒否ね……だがなクリス、お前のそれは拒否でもなければ納得できないとかそういうモノじゃない。お前は父親が俺と同じ事を言ったら無条件で納得するはずだ。

お前は俺の考えを認めていないんじゃない。俺を自分の下だと、自分より弱いと見下してんだ。

だから俺を認めない、認めたくないんだよ。自分より弱い口先と小手先だけでタイプだと思っているんだ。端から自分と対等だと思っていないんだよ。

穏便に済ませるつもりだったが、もうどうでもいい。こうなったら力ずくで分からせてやる。

「そうかい。ならもう言葉で分かってもらおうとは思わない」

「何？」

「勝負だクリス。説得力がないってんなら力ずく俺という人間を認めさせてやる」

当然の宣告に一瞬だけ呆然としたクリスだったが、俺の言葉を理解した途端に口端を上げて笑みを浮かべた。

「なるほど、力が伴えばさっきの言葉にも説得力が宿るな。面白い。その勝負受けた」

その笑み自体が既に俺を見下してんだよ。終わった後、はたして今と同じ笑顔を浮かべる事が出来るかな？　精々今のうちに優越感に浸ってな。

見せてやるよ。策士の闘い方ってのをな！

第７５話　箱根旅行、ドイツ軍人たちの誇り（後書き）

あとがき～！

「第７５話終了。あとがき座談会、司会の春夏秋冬　廻です。今回のお相手は――」

「椎名京！　花の女子高生！　将来の夢はお嫁さん（大和限定）！」

「いやにハイテンションだね……」

「今回本編でたったひと事しか喋ってないからね。少しは存在感出そうと思って」

「そうですかい。さて今回のお話ですが書いていて思った事がある」

「なに？」

「どこかで中将の名前を出したい」

「なんでまた」

「だって緋鷺刀視点の時いちいち『クリスさんの父親』って表現するのがメチャクチャ面倒くさかった」

「確かに言われてみればそうだよね。まあそのうちどっかで言う機会あるでしょ」

「っていうかたぶん、本編には関係ないところでクリスが仲間に紹

介しているだろうな。『自分の父様はドイツ軍の中将なんだ。名前はフランク・フリードリヒ。誇り高き軍人だ！』とか言って」

「あ～言ってそう」

「というわけで、もし次にクリスの父親が出てきたときは『フランクさん』、あるいは『中将さん』と表記しますのでよろしくお願いします」

「ここで言ってどうすんのさ。しょーもない」

「というわけで今回の内容は大和ＶＳクリスの前哨戦のようなものになりましたが――」

「クリスは許せない。大和を馬鹿にするやつはみんな敵だ」

「怖いよ京さん」

「でもまあ、大和のカッコイイところが見れるからそれはそれで」

「切り替えも早いね。ところで実は原作とちょっと変えようかなって迷ってる事があるんだよ」

「なに？」

「大和の体調。原作通りで行くかそれとも変えるか……次投稿までには考えます。でも原作と違う風にすると勝負が面倒くさいな……」

「ホントしょーもない」

第７６話　箱根旅行、愚かな行為の代償（前書き）

第７６話投稿。

今回も凛さんがいい味出してます。

第７６話　箱根旅行、愚かな行為の代償

ｓｉｄｅ　風間翔一

釣り上げたヤマメを売ってやろうと川下の人たちの所に行ったけど、結局売る事は出来なかった。それでもまあバーベキューの食材と物々交換が出来たからよしとするか。
これで俺たちの昼飯のバーベキューの食材が増えたしな。魚はジン兄が人数分釣ってたし大丈夫だろ。

「丁度いいところに来た。今面白い事になってるぞ」

意気揚々とみんなの元に帰ってきたらいきなりモモ先輩に声を掛けられた。

「何？　よく分からんが俺がいない間にずるいぞぅ！」

この間の金曜集会の時みたいに俺抜きで楽しんでんじゃないだろうな。だがよく見たら何やら面白そうな事が起きてるじゃねぇか。大和とクリスが何やらヤバそうな雰囲気してやがる。

考え方の違いでちょくちょくぶつかってたからな。本格的に喧嘩になっちまったか？

ふむふむ、話を聞くに思った通りお互いの考え方の違いについて、ついに大和の堪忍袋の緒が切れやがったな。いつもはクールにすかしてるけど、変にプライド高いしな大和のやつは。

まあ、言葉にしたらそれを必ず実行するのが俺たちの軍師。こうな

っちまったらテコでも動きゃしねぇ。思う存分にやらせてやるか。

「大和とクリスが勝負……“決闘”をねぇ……事情は超分かったぜ。だがまあ結局勝負に行き着いたな」

いつかこうなるんじゃねぇかとは思っていたけど、思ったより早かったな。ジン兄からも本格的にぶつかるまでは様子見をしておけって言われてたしな。

「モモ、キャップ。何で勝負するかは平等に第3者の俺たちが決めよう」

「そうだな、川神院の名にかけて平等にやってやるぞ」

勝負方法についてジン兄の言葉通りでいいか。モモ先輩も川神院の名前を出したからどっち有利って状況にはしないはずだ。2人とも仲間内には甘いとこあっけどこういった勝負事とかになると厳しいからな。

「分かりました」

「ああ、任せるよ」

クリスも大和も了承した。任された以上は最高のモノにしてやるぜ。

「単純な戦闘ならクリス有利。頭脳なら大和有利。なんだか考えるの楽しいなモモ先輩！」

「ああ、これは面白……ごほん。やりがいがあるな」

やっぱりモモ先輩はノリがいいぜ。必ず平等にはするはずだからきっと不利な事も平等にするような勝負を考えるはず。今からそれがどんなものになるかワクワクが止まらないぜ。

「そこはかとなく不安なんだか？」

「まあ、姉さんが川神院の名前を出した時は真剣な時なんで大丈夫……たぶん。だから頼むぞ兄弟？」

「安心しろ。行き過ぎたものでない限りは見守ってやるから」

「「だからそれを止めてくれ！！」」

なにやら大和とクリスがジン兄に懇願しているけどまあいいか。とにかく今はどんな勝負方法にするかを考えるのが先だ。今日は無理だし明日にすっか。

「ま。それは明日の朝やろうぜ。今は釣り釣り！」

「ああ。それまでに準備もあるからな」

「よかったな。ほぼ1日覚悟を決める時間が出来て」

「「いやだから止めて下さいよホントに！！」」

だははは。息ぴったりじゃねぇか。

ん？　なにやらまゆっちが言い掛けようとしてたけどガクトに聞き返されて引き下がっちまった。それを見てたヒロが疲れたような溜息を吐いてるけど……

なるほど、まゆっちのアレに対してヒロは口出す気はねぇようだな。
あっちもジン兄に様子見をしておけって言われてるけど……

まゆっちのことはヒロがいれば大丈夫か。1度同じような事を経験してるしな。だからこそ口出す気がないようだけど、はてさてまゆっちはいつ勇気を出すか、それも楽しみだな。

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

ｓｉｄｅ　島津岳人

大和とクリスが勝負する事になりやがった。

まあ決まってからは喧嘩する事はなかったが、お互いに闘志剥き出しで夕飯の空気が殺伐としてやがった。だが今はそんな事はどうでもいい。

「フッフッフ。俺様出現。右よし左よし」

「安心しろ。周囲に人はいないぞ」

んな事は分かってんだよ大和。気分だ気分。これから行こうって所は隠密行動じゃなきゃダメな所なんだから、行く前から気を張っておくにこした事はねーだろ。

「じゃあ早速、下の旅館の風呂覗きに行こうぜ」

「何故俺を誘う？」

何故？　オイオイ大和君よぉ。それを俺様に聞くのかよ。分かっていて聞くなんてそんなに俺様の評価が知りたいようだな。よーし、耳の穴かっぽじいてよく聞いておけよ。

「キャップはお子様で女体に興味なし。モロはビビりまくりのチキンボーイ。タカにはまだ早い大人の領域。ジン兄はモモ先輩が怖くて誘えない。だが俺たちの中で1番エロいお前なら！」

「俺はそこまでエロくないぞ」

客観的に判断できないとは軍師として駄目だぜ大和。俺様は知ってるんだぜ、ジン兄が帰ってくる前の頃はよくモモ先輩に抱きつかれていたけど、その時に胸を押しつけられて鼻の下伸ばしてたのをよ。そこで俺様は思ったのよ。こんなエロトークが出来るのは仲間内でお前だけだとな。

「分かったよ。お前がヘマして見つからないように一緒に行ってやる」

ふぅん。言い訳がましく言ってるが顔のニヤケが隠しきれてないぜ。だがさすが俺様と同じ導かれし者。ついて来てくれると信じていたぜ。

「ところで、覗きポイントは分かってるんだよな？」

「1日目に調べ済みだぜ。俺様天才」

「兵は神速を尊ぶ。早速行くぞ」

「では覗き（ぼうけん）に出発だ！　女体（ざいほう）を求めて！」

俺様たちは大いなる夢と野望のため、部屋を出ようと1歩踏み出した。

「何をやってるんだお前たちは」

だがロビーへと続く廊下に腕を組んで呆れ顔のジン兄とモモ先輩がいやがった。
着替えと何やら鍵のようなものを持ってるところを見るに、どうやら昨日と同じこれから『2人で一緒に家族風呂』のようだ。羨ましいぜチキショー。俺様も女と一緒に風呂に入りてー。
だが今はそんな事を考えている時じゃねぇ！

「大変だ大和！　いきなりラスボスだ！」

ひのきの棒すら装備してねぇのに初っ端からラスボス2人組ってどんなゲームだよチキショー！　しかも潜んでいたわけじゃなく偶然にも遭遇するなんてエンカウント異常だろ！

「キャップやタク、ヒロに声を掛けずにガクとヤマの2人組……時間は夕食が終った後……この先は玄関ロビー……別の旅館の女風呂に覗きに行くのか」

何なんだよこいつの洞察力!?　もはや超能力と変わらねーじゃねーか！　ズバリ言い当てられて俺様も大和も固まる以外出来ねぇ。
ここでジン兄に見つかったとなるともう強制終了（ゲームオーバー）じゃねーかよ。

だが絶望に包まれる俺様たちにジン兄の意外な言葉が掛った。

「止めはしないけど、警察沙汰にはならないようにな」

「「へ？」」

間抜けにも俺様と大和の声が重なる。こういう時のジン兄は場合によっては物理的手段すら使って止めに入ると思っていなのだが……

「っと、そろそろ時間だな。行くぞモモ」

「ああ！　今日も1時間たっぷり身体を暖め合おうな♪」

そう言い残してエレベーターに向かうジン兄とモモ先輩。

これってアレか？　俺様たちを注意するよりもモモ先輩と一緒に風呂に入る時間の方が大切だと？　あのどちらかと言えば硬派っぽいジン兄がバカップルになり下がっちまったってか？

俺様の前でイチャつくんじゃねぇ！　羨ましいじゃねーかよバッカヤロー！

「おいガクト。ぼさっとしていないで行くぞ。せっかくラスボス2人がただの通行人A・Bになったんだ。この機を逃すな」

おおっとそうだったな。時間は有限だ。障害物が自らどいたのならありがたく進ませてもらうぜ。

「ふっふっふ。聞いたぞぉ坊主ども」

だが玄関ロビーを後1歩で踏破しようとしたその時、地獄の底から這い出てくる悪魔のような声が後ろから聞こえてきた。しかもこの声、ヤベェ人に見つかっちまった。
振り返ったその先にいたのはやっぱり凛奈さんだった。

「大変だ大和！　隠しボスが現れやがった！」

「くっ。気配を消して俺たちの会話を盗み聞きしてましたね」

何なんだよこの覗き(ぼうけん)は？　難易度高いってレベルじゃねーぞ。最初のエンカウントのラスボスから上手く逃げても、次のエンカウントで隠しボスと遭遇なんて、クソゲーどころかバグゲーじゃねーかよ。

チクショー。神は俺様たちを完全に見捨てたのか？

「私も行こう」

「「はい？」」

「私も女体観測に行くといったんだ」

余りの展開について行けない俺様と大和。だが先に我に返った大和が俺様に恐る恐る問い掛けてきた。

「隠しボスが手を組むと言っているが？」

「つーか凛奈さんは普通に風呂に行けばいいでしょうが」

だが俺様の主張にも凛奈さんは不機嫌そうな顔をした。何やら気に

障るような事でも言ってしまったのか？　やっぱりここで強制終了（ゲームオーバー）なのか？

「私はただ純粋に己の特技を磨きたいだけなのだが、その視線が露骨すぎるらしくな、風呂場では妙に警戒されてしまうんだ」

「特技っていったい何ですか……」

大和よ！　細けーことは気にすんな！　俺様も気にはなるが今はそれどころじゃねぇ！　もしかしたらこの人は隠しボスじゃなくて最強（チート）な仲間かもしれねーんだぞ！

「で？　どっちだ？　どこに行けば観測できる？」

やはり神はまだ俺様たちを見捨ててはいなかった！　よもや奇蹟のイベントが今目の前で起きようとしてるぞ！　これはバグゲーじゃなく神ゲーだったんだ！

「頼もしい味方がついたぜ！　こっちだ！」

ロビーを抜け玄関を抜けロータリーを抜け、俺様の先導で山の中へと入っていく。大和に言ったように既に昨日の昼間に絶好のポイントは調べてある。

向こうからは絶対に見えないがこっちからは全てが丸見えになる、最高にして至高の覗きポイントを俺様は発見したのだ。やっぱ天才だろ俺様。

「覗き場所（ポイント）到着。標的（ターゲット）はラクロス部女子学生」

「距離があるがまあいいか。遠距離計測の精度を上げるいい機会だ」

今思うのも変かもしれねーが、この人の感性は時々訳が分かんねぇ。なんかこうやって一緒に行動してるとモモ先輩がもう1人いるような錯覚を受けちまう。

あの人がもう1人って冗談じゃねーけどな。

「さぁ、この茂みを掻き分けると黄金理想郷（エルドラド）が……」

ぐふふふ。待ってろよ女子学生（きんぎんざいほう）の裸体。今俺様がお前たちを拝みに行くぜ。

ビーッ　ビーッ　ビーッ

あん？　なんだこの音？　なにやら俺様の勘が最上級の危険を訴えてやがる。

フシンシャハッケン　ケイビタイセイレベル4

警報装置だと!?

「なっ？　こんな装置昨日の昼間はなかったぞ!?」

「ちぃ！　夜の間の警報装置か。敵も考えるな」

感心してんじゃねーよ大和！　せっかくラスボスを回避して最強の仲間が入ったってのに、こんな初歩的簡易罠（ブービートラップ）に引っかかるたぁ、やっぱりこれはクソゲーだぜ!

「お？　対応早いな。６人ほどこっちに向かって来るぞ」

「警備員の動きめっちゃ迅速だな」

「私はいくらでも切り抜けられるが、お前たちは無理だな。逃げようにも間違いなく姿を見られるだろうな」

いや凛奈さん。あんたなんでそんなに余裕なんだよ。女だからか？　女だからなのか？　何とが出来ねぇか大和！

「安心しろガクト。女性の凛奈さんがいる事で言い訳が出来る」

おお！　そういやぁそうだな！　なるほど、だから凛奈さんは余裕なのか。見つかったとしても女の凛奈さんと一緒なら散歩して道に迷ってたで済むもんな。

「何で私がいちいちお前たちの言い訳に付き合わねばならんのだ」

呆れ果て不機嫌な声でそんな事を言ったと思ったら、おもむろに少しだけ腰を落としまるで突き出す動作の直前のように腕をたたんでいる凛奈さん。

「幸いにもすぐそこに川が流れている。お前たちはその川を上って旅館に帰れ」

「おいおい！　下の川まで高さスゲーあるぞ！」

「まさか落としたりしませんよね？　ハハハ……」

大和も声が引きつってやがる。だが待て大和。俺様はさっきこの人

を『もう1人のモモ先輩』と思った。こういう時のモモ先輩の行動を考えれば……

「問答無用だ。自業自得と思え」

「うぉおおおぉぉぉ！？」

「バカなぁぁぁあぁぁ！？」

俺様と大和はまだ肌寒い5月の夜に川の中へ放り込まれた。

結局このオチなのかよぉぉ！？

side out

side 川神百代

「お？」

「どうした、ジン？」

昨日と同じように貸切露天家族風呂で一緒に湯船に浸かっていたら、ジンが急に声を上げた。

ちなみに今日のジンは昨日の恥ずかしさが嘘のように堂々としているし、夕食の食べさせ合いも普通にこなしていた。完全に恥ずかしさがなくなったわけじゃないようだが、何故かつまらなかった。

あの恥ずかしさで真っ赤になるジンがもう見れないなんてな。でも

少しだけ頬を赤くして優しく微笑むジンも私の胸をときめかせるから良しとしよう。

「ヤマとガクの悲鳴が聞こえたからな。どうやら覗きが見つかって警備員が駆け付ける前に、凛奈さんに川に突き落とされたようだ」

「ここから聞こえたのか、相変わらずふざけた感覚器官だな」

大和たちが凛奈さんと一緒に覗きに行ったのは気配で分かっていたが、悲鳴なんて全然聞こえなかったぞ。だがジンが言うから間違いないだろうが、自業自得だな大和にガクト。

しかし弟もアホだな。明日クリとの決闘があるっていうのに覗きになんか行って……風邪ひいても知らないぞ私は。

「ヤマの奴……風邪ひかなきゃいいけどな」

同じ事を思ったんだろうが今はどうでもいいだろ。もし大和が風邪ひいても自業自得なんだ。それよりも今は私との時間を大切にしろ。私以外の事を考えるな。

そう訴えるように、横抱きに抱えられていた私はジンの首に回していた腕に力を込めて、自慢の胸をジンの逞しい胸板に押しつるようさらに身体を密着させた。

その行動に私の想いをちゃんと受け取ったのだろう、ジンは小さく笑いを零すと濡れた手で私の頬に触れて顔を上げさせると、間をおかずすぐにキスをしてくれた。

私たちの熱い夜は始まったばかりだぞ。ジン。

side out

side 直江大和

さ、寒い夜が始まった。

俺は布団の中に潜りながら震えだしそうになる身体を何とか押さえる。

体調が悪くなり始めているが、このまま眠れば何とかなるかもしれない。そう、このまま何事もなく眠ることが出来れば。

「草木の眠る丑三つ刻。今宵こそラブゲット」

今、俺は京による貞操の危機に瀕していた。

男女同部屋とはいえ、就寝する時は東と西で男女に分かれ境界線を敷いていた。ちなみにクリスの提案ね。

男子が女子側の境界線を越えて陣地に入ると、捕虜としてあらゆる尋問という名の拷問を受けるらしいが、正直誰ひとりそんな真似はしないのでどうでもよかった。

だが、出来れば女子が境界線を越えて男子の陣地に入ったときも、何かペナルティを作ってほしかった。

「こら京！　布団に入ってくるな！」

だたでさえ体力が落ちかけてんのにお前の相手はしてられないんだよ！

「ククク、もう遅いよ。侵入した今の状況、下手に騒いだら一緒の布団にいる事がバレるよ。そしたらあら不思議、既成事実が！」

た、性質悪いなオイ！　冤罪だろどう見ても！

眠りたいのに。眠らなきゃいけないのに。京の攻撃を捌かなきゃけないなんてハードすぎるどころじゃないぞ。下手すりゃ意識失いそうだ。

「くしゅん！」

「くしゃみだ」

「だから体調悪いんだって」

「私が看護する、私にうつして」

「いいから布団から出てけっちゅーねん！」

その後、何とか京を説き伏せて退散させたが、無駄に体力と頭脳を使ったせいでマジでヤバい。明日はクリスとの勝負だっていうのに……

オレサマ、サムケ、トレナイゾ？

第７６話　箱根旅行、愚かな行為の代償（後書き）

あとがき～！

「第７６話終了。あとがき座談会、司会の春夏秋冬　廻です。今回のお相手は――」

「お、おう、直江大和です」

「体調悪そうだね。あははははは」

「っていうかお前、前回のあとがきで原作とはちょっと変えようかなっていってただろ。なんで原作通りになってんだ」

「え？　変わってたでしょ？」

「どこがだよ！」

「だって一緒について行ったのが百代じゃなく凛奈さんだし。投げ飛ばされたんじゃなくて突き落とされた。ほら２つも原作と違う部分がある」

「そこじゃねーよ！　俺の体調の面も言ってたろ！　げほげほ！」

「興奮するな。もっと体調悪くなるぞ」

「悪くしてるのはお前のせいだろ。原作と違うと期待してたのによ」

「いやだって……体調を良くすると勝負内容が原作と違っちゃうで

しょ？　そうなると勝負内容を考えるの面倒くさいもん」

「そんな理由かよ」

「うんそれだけ。いやしかし凛奈さんの存在は本当にありがたいね。最初覗きに行くシーンは百代が神と一緒にいるからどうしようかと思ったんだけど、凛奈さんがいてくれたおかげで代役になったよ」

「結局、俺たちのたどる道は最初から決まってたってわけか……」

「運命だね」

「そんな言葉で片付けるんじゃねぇよ……で、次が？」

「そう、旅行３日目の君とクリスの対決」

「やっとかよ……げほげほ」

「大和くんの体調が思わしくないので今日はこの辺で。次投稿もよろしくお願いします」

第７７話　箱根旅行、大和とクリスの決闘の始まり（前書き）

第７７話投稿。

なんでこんなに展開遅いんだろう……

第７７話　箱根旅行、大和とクリスの決闘の始まり

――２００９年　５月５日　火曜日　ＡＭ８：００――

ｓｉｄｅ　ａｕｄｉｅｎｃｅ

３日目の朝。

旅館の朝食はバイキング形式だった。各々が自由に食べたい物を皿に取り自分の席に戻る中、数ある席の一角に大量の皿が置かれたテーブルがあった。

信じられない光景かもしれないが、この大量の皿にのっている食材を消化しているのは１人の少女――川神一子である。

「しかし、改めて見ると凄まじい食欲だな、犬は」

「私はご飯の代わり程度です」

「まゆっちもなかなかだと自分は思うぞ」

「夜明けぐらいに起きて山の中で修行してきたもん」

お腹が空いている理由を聞くが、同じように朝練をしていたクリスでも一子のような量の食事はお腹に入れるのは無理だと思っている。でもここまで威勢のいい食べっぷりは見ていても不快感はない。

「お前はこの先も病気とは縁がなさそうだな」

「うん！　そう思い込んでるし」

「毎日激しい鍛錬・たっぷり食事・寝たいだけ寝る。ワン子に病魔が入る込む隙、一切なし」

感心して言うクリスに天真爛漫に答える一子。京もそれを肯定するような言葉を続けた。そんな2人を微笑んで見ていたクリスは、隣で食事をしている由紀江の手元に視線を落とした。

「まゆっちは食べ方も綺麗だが、箸の使い方も完璧だな」

「ああ。育ちの良さがにじみ出ているな」

「そ、そんなものでしょうか？」

急にクリスと百代に褒められて恐縮するしかない由紀江。彼女のしてみれば物心ついた頃から躾けられて覚えた事で、家族みんなも同じようなものだから完璧と言われてもピンとこないのだ。

「まぁここに露骨な比較対象がいるし」

勢いよく料理を口に掻き込む一子を呆れたような目で見ながらの京の言葉に、百代が少しだけ苦笑を浮かべて答える。

「ウチは食事作法は奔放な方だからなぁ。仲間内で箸の使い方が上手いのはジンとタカと大和だな」

ここにない男性陣の食事風景を思い出しながら言葉にする百代。それに感心したように頷いていたクリスは、少しだけ落ち込んだような声音で言葉を発した。

「自分もそんなに悪くないと思っていたが、まゆっちの食べ方を見るとまだまだ未熟だと痛感している」

そう言って落とした視線の先にあるのはアジの開きが乗った皿。クリスの言うように由紀江の食べたものと比較するとずいぶん食べるところが多く残っていた。

元々、箸を使う文化のないドイツ人のクリスなのだから別に落ち込む必要はないのだが、クリスはそうは思わないらしい。

「日本に来てまだちょっとでここまで馴染んでるなんて、私には凄すぎると思いますよ」

そんなクリスに由紀江は箸の使い方はもちろん、日本の風習に早くも馴染んでいる事を称賛する。自分が未だに仲間と完全に打ち解けていないのに、異国人であるはずのクリスが自分よりもみんなに溶け込んでいる事が羨ましいのだ。

「ああ。気にするな。少しずつ進めばいい」

そんな由紀江の心情を察したのか、百代は穏やかな声でクリスにも由紀江にも励ましになるような言葉を掛けたのだった。

「そういえば、大和さんまだ寝ているんですかね？　部屋を出る時はまだ布団の中でしたけど……」

心配そうな由紀江の声に京は昨夜の大和の状態を思い出す。

体調が悪そうだったのに自分のせいでさらに悪化させてしまったのではないかと思い、ちょっとだけ反省する京。大いに反省しないのは未だに看病して好感度を上げる隙を探しているからだ。

「さっさと起きて朝ごはん食べればいいのにね」

「ま、ジンも部屋に行ったし、男たちが起こして連れてくるだろう」

「私、ちょっと様子を見てきますね」

楽観的な川神姉妹にそれに同意するように頷く京とクリス。だが由紀江だけは朝の起きた時の気配で大和の様子が少し変だと感じていた。取り越し苦労になればいいと思いながらも席を立ち部屋へと向かうのだった。

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

ｓｉｄｅ　篁緋鷺刀

大和君は風邪をひいた。

昨日の夜、宣言していた岳人君と一緒に他の旅館の女湯を覗きに行ったけど、途中で警報装置に引っかかり逃げようとした時に、一緒にいた凛奈さんに川に突き落とされたらしい。

キャップと卓也君と一緒に露天風呂に入っていた時、ずぶ濡れで飛び込んできた大和君たちから聞いたけど、自業自得としか言えないよね。って言うか凛奈さん、貴女は何がしたくて一緒に行ったんですか。

でもまあそれは置いといて、岳人君も一緒に川に落ちたっていうのに、風邪をひいていないのはなんでだろうね。やっぱり『〇〇は風

邪をひかない』ってのは本当なのかな。

とりあえず今はジン兄に言われてフロントに解熱剤をもらってきたから、早めに部屋に戻ろう。

今日はクリスさんとの勝負だけど、大和君の性格なら無理してでもやりそうだな。卓也君は止めるだろうけどまず止まりそうにないね。大和君、根は凄い負けず嫌いだし。

ジン兄に期待したいけど、あの人は無茶な行動でもその結果に自分で責任を取る気概があれば、相当ヤバくならない限り止めないしなぁ。

とりあえずやるだけやらせて、本当にヤバくなりそうだったら止める。という方向に行くんだろうな。きっと。

そう思いながらも廊下を進んでいると、部屋の扉で聞き耳を立てているまゆの姿があった。でも気配を消し切れていない。あれだとジン兄は当然として、恐らくキャップにもバレるね。

「にゃ、にゃぅーん」

いきなり猫の鳴き真似をして安堵の溜息を吐いたかと思ったら、今度は何を言われたんだろうか、ラップ調?で猫の鳴き真似を始める。

「にゃーにゃっにゃっ、にゃっにゃっ、にゃ」

「なにやってんの、まゆ?」

「うわっひゃぁ!?」

さすがに可哀想に思えたから声を掛けると、まゆは１０センチほど飛び上がった。振り返ったその表情は驚愕と羞恥で真っ赤になっていたけど、声を掛けたのが僕だと分かりホッとしたのか小さい気を吐いた。

「ヒロ、まゆっち連れて入って来い」

ジン兄の声に扉を開けてまゆを促して部屋の中に入る。

布団にうつ伏せに寝ている大和君の背中にジン兄が両手を置いている。気休め程度だけど体内の気の流れを調整しているんだろう。活性させて直りを早くしているのか、停滞させて症状を分からなくさせているのかは判断できないけど。

「あ、あの。私みなさんを呼ぼうと部屋に来て……そしたら」

「うん。聞いたって事だね。だからお願いなんだけど、俺が熱出してる事、秘密にしてほしいんだ」

見つかった事の言い訳を始めるまゆだったが、それを強制的に遮るように大和君が言葉を発する。声音からしてお願いじゃなくて命令になってる。

「あ……でも……」

「おいおい。無理はよくねぇ。よくねぇよー。体大事にしないで知能派名乗れるかっちゅー話だぜ？」

「松風のそう言ってますし、ここは」

言いたい事は分かるけどねまゆ、それは松風じゃなくてまゆ自身が

言わなきゃダメだよ。それじゃあ大和君は納得させる事は出来ないよ。

「ひ・み・つ・で」

「あぅあぅあぅ……わ、分かりましたぁ」

うん。笑顔で言う大和君が怖かったのも否定しないし責めるつもりもない。けど本気で止めたければそこで引き下がらずにもっと強気で言わなきゃダメだよ。

金曜日の事件の時に『対等な仲間』って言ったけど。まゆも分かっているとは思うけど。なかなか勇気を振り絞れないんだろう。

僕も結構勇気を振り絞ったけど、それが意外と大変なんだよね本当に。

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

ｓｉｄｅ　クリスティアーネ・フリードリヒ

自分と大和は今、昨日釣りをした河原で対峙している。これから昨日決めた決闘を始めるためだ。

キャップとモモ先輩とジン兄殿が自分と大和の間に立ち、他のみんなは少し離れたところでこちらの経緯を眺めている。まあ、観客というわけだな。

「これよりクリス対大和のタイマンを行うぜ」

「進行はキャップ、ジャッジは私とジンだ」

「という事になったからよろしくな」

昨日のモモ先輩の様子からそこはなとなく不安ではあったが、ジン兄殿がジャッジというならそんなに酷い内容にはならないだろう。大和も自分と同じような考えだったのだろう、3人の言葉に反論する事なく頷いた。と、それよりも――

「やや風邪気味とのことだが？」

「なぁに問題ないさ。さぁやろうぜ」

朝食の時に体調が少しだけ悪いから薬を飲んだと言っていたから声を掛けて見たが、取り越し苦労だったようで見た感じでは辛そうではない。本当に風邪のひき始めぐらいの症状なのだろう。

ただまゆっちが物凄く心配そうな気配なのが少し気になるが、まあ彼女が他人を心配するのはいつもの事。そんなに大げさに考えるものじゃない。現に何かを言い掛けていたが犬に聞き返されても何も言っていないし、気にするほどの事じゃないな。

「私とキャップで3分ほど考えた。公平な決闘法を」

「んで、結局の所、川神戦役の縮小版をやろうかと」

3分しか考えていないという事に物言いがないわけではないが、それよりもキャップの口から出た『川神戦役』という言葉が気になった。

戦役というからには戦いの事だというのは間違いないが、何故『川

神』がつくのだろうか？　あの地の歴史に戦はなかったはず。

「川神戦役？　何かとてつもない戦いの予感が」

自分と同じ事を思ったのだろう、まゆっちが少しだけ慄きながら呟いた。そんな自分とまゆっちの気配を察したのか京の説明が入った。

「これは中国での言うところの“童貫遊戯”。南宋の時代に童貫という元帥がいて、彼が敵国の遼との間でやっていたものなんだけど、兵力を失わずに戦の優劣を決められる優れたシステムとして……」

「ずるいぞぅ京！　俺が解説するんだ！」

「……しょーもない」

説明する役を取られて悔しがるキャップに京の冷めた視線が向けられている。

しかしそうか。無駄な兵力を割く事なく勝負を決めるための制度。戦をせずに優劣を決めるとは素晴らしいものだな。

だがそれをやろうというにしても自分たちは兵士など持ってないぞ？

「これはな、主にクラスとクラスがやり合う時に使われる決闘法で、まずはこれを用意する！」

そう言ってキャップがどこからともなく取り出したものは――

「クジ箱？　……その中に戦う種目が入っていると？」

「その通り。クジを引いた種目で戦う。それを繰り返して先に5勝した方が勝ちだ」

「なるほど。中に入ってる勝負はどのようなものだ？」

「知力重視、体力重視、感性重視……いろいろなもんだな。クリスに有利なものもあれば不利なものもある。つまり勝つには様々な力が問われるわけだ。本来は出た勝負に対して強い奴が行く団体戦なんだが、今回はそれをタイマンでやってもらうぜ」

総合的な能力を問われるというわけか……確かに公平な勝負になるかもしれないが気になることがある。勝負が始まる前に徹底的に聞いておかなければ大和より方法の少ない自分が不利になりかねん。

「5回続けて自分に不利な勝負が出てしまったら？」

「平等にクジは入れた。内容もジンに確認してもらっている。普通ならそこまで偏らないが……」

「偏ったらそれもそれ。『運も実力のうち』って言うだろ？　自分の有利な勝負を引き寄せる運もまた『力』の1つだよ」

自分の疑問にモモ先輩とジン兄殿が答えてきた。確かにその通りだ。かつての功績により英雄と呼ばれるものたちも他の者にはない何か、それこそ『運』と言っていいモノを持っていたからこそ、後々に英雄として語り継がれるだけの偉業を成し遂げているのだ。

そういった意味ではまさに『運も実力のうち』なのだろう。

「俺は〇リ〇リ君が5回連続で当たった事あるしな」

〇リ〇リ君？　日本で作られている当たり付きアイスの事か？　そ

れが5回連続で。犬たちがキャップの運は神懸かっているとよく言うが、どうやら本当らしい。

「それを全部食べてお腹壊したとこまで言おうよ」

どうやら話には続きがあるようだ。なにやらキャップが遠い目になりながら語り出した。

「……あの時、俺はバスの中で地獄の腹痛と戦った。何度隣の席に座るワン子に『もうダメ』と訴えた事か……」

「それは犬も災難だったな。大丈夫だったのか？」

「うん。アタシが隣でどれだけ必死に励ましたか」

犬も当時の事を思い出したんだろう。遠い目をしているがキャップと違いどこか疲れた雰囲気を纏っている。相当大変だったのだろう。

「はは。あん時のお前、涙目だったからな」

「隣でお腹痛いって人間が『もう、ゴールしていいよね？』とか言えば涙目にもなるわ！　あの時は本当に死んじゃうんじゃないかと思ったんだからね！」

笑い事じゃないぞキャップ。いや、今だから笑い事に出来るのかもしれないが犬は本当に災難だっただろうな。幼い頃の出来事なのだろうが変な心的外傷（トラウマ）になっていなければいいがな。

「話が逸れたがジン兄の言う通り『運も実力のうち』。いいな」

「ああ。複数回戦えるならクジでも問題ない」

「同じく。種目をキャップと姉さんが決めたってとろこがチト不安だが、兄弟が監修しているのならそれほどひどいものはないだろう。そのラインも微妙だけどな」

さっきまでずっと黙ったままの大和も同意した。しかしここでそんな不安を煽らないでほしい。いや、まさか既に大和の作戦が始まっているのか？
おのれ、相も変わらず卑怯な男め！

「そいじゃあ、まずじゃんけんをしてクジを引く番を決めてくれ」

勝負する方がクジを引くルールなのか？　公平性を選ぶなら進行役のキャップかジャッジのモモ先輩、あるいはジン兄殿がクジを引けば問題ないと思うのだが。

「クジを先に引けるメリットって何かあるのか？」

そもそもクジを引いて種目を決めるというのな、らどちらが先に引いても大した有利不利の差はないはずだ。だがそれを決めるという事は必ず先に引く事のメリットがあるはず。
案の定、私の問いはモモ先輩の言葉で解消された。

「引いたクジによっては種目が２つ書いてあったりする。その２つのうち、そちらん種目で闘うかはクジを引いた方が自由に選べるんだぞ」

「そりゃ１枚でも多く自分で引いた方がいいわな」

なるほど。それならば先に引く方がメリットがある。運の事を考えれば±0なのかもしれないが、自分で選べる事を考えれば少なくとも不利になる割合は減るだろう。

「了解した。始めよう大和」

ひと通りの説明の中で特に質問する事もない。クジもキャップたちが作ったものなのならば大和が不正を働く事もないだろう。ジン兄殿が監修をしているのなら無茶な事もない……と思いたい。

だが、意気込んでじゃんけんを始めようとした自分に、大和は意外な言葉を掛けてきた。

「クリス、俺はチョキを出す」

なに!?　何故こいつは自ら出す手を先に私に告げるのだ？　分からん。そんな事をしていったい何の得になる。私に先手を渡しても問題ない何かがあるというのか？

だがクジに不正は出来ないのは間違いないはずだ。大和もさっき1枚でも多く自分で引いた方がいいと言っていたではないか。なのに自分に勝ちを譲るのはその言葉と矛盾してはいないか？

いや、待てよ……っ!?　そうか！　こいつ嘘をつく気だな！

という事は、チョキを出すと言って自分にグーを出させ、その実、大和はパーを出す気なんだ。得意の口先だけの言葉だな。こしゃくな。ならばチョキを出してやる。

これで自分の勝ちは間違いない。ふん、いくら策士を気取ろうが所

詮お前は口先だけだ。そんなお前が軍の崇高な作戦を立てる参謀と同じであるわけがない。

さぁいくぞ！

「じゃんけーんっ　ぽいっ！」

だが結果は自分の予想を裏切った。

自分が出したのはチョキ。対する大和が出したのはグー。

「ナニッ！？」

何故だ！？　何故大和はグーを出した！？　あの言葉が嘘ならパーを出すはずだ！？

「はぁ～、やれやれ、予測通り過ぎる……やり易いなぁ、クリスは」

なんだその溜息の後の上から目線な言い方は！？

いや待て。『予測通り過ぎる』だと？　それはつまり。さっきのは自分が大和の言葉を疑ってチョキを出す事まで見越しての言葉だったという事か？　裏の裏を読まれたのか！？

「む……！　むむむむむーっ！　腹立つ！　大和腹立つーー！」

地団太踏んでもこの怒りのぶつけようがないではないか！　大和も腹立つがその策にまんまとはまった自分も情けなくて腹立つぞ！

卓「ま。前哨戦は大和の勝ちってところだね」
京「こういう風に思考が読みやすい相手だから、勝負しても勝てるとふんだんだろうね大
　和は」
緋（風邪さえひいていなければ最初から策に頼らなくても勝てるんだろうけど……）
由（やっぱり……止めるべきだと思います。でもそんな差し出がましい事しても大丈夫な
　んでしょうか……あぅ）
緋（まゆもなんか葛藤してるし……言うのなら早めにね）
一「暇ね～。早く始まんないかしら」
岳「だからってこんなとこでスクワットしてんじゃねー」

第77話　箱根旅行、大和とクリスの決闘の始まり（後書き）

あとがき～！

「第77話終了。あとがき座談会、司会の春夏秋冬　廻です。今回のお相手は――」

「ただいま人生順風満帆！　川神百代だ！」

「テンション高いね」

「ああ！　やっとジンとひとつになれたんだ！　これからの私の人生、勝ち組は決まったもんだろ！」

「そうですね」

「なんだその投げやりな言い方は」

「テンションについていけないんだよ。さて今回のお話ですが原作通り旅行3日目、大和とクリスの勝負となりました」

「その割にはお前、1話使っても勝負までいかなかったじゃないか」

「はっはっは。本当に申し訳ありません！　また変に引きを作ってしまいました！」

「無駄に朝食のシーンとか、クリの心情に文字数を使い過ぎだ」

「いやまあそうなんだけどね……返す言葉もないけど言い訳させて

もらっていい？」

「なんだ。言ってみろ」

「とりあえず勝負は原作通りに進めるんだけど、最後の勝負だけオリジナルにしようかなと考えているわけでして……」

「ほう？　それで？」

「でもまだ決めかねているし案もまだ完成していないから……」

「時間稼ぎ？　そういう事か？」

「ええっと……はい、そうです」

「……」

「……」

「死ぬか？」

「ごめんないさいごめんなさい！　どうにかお命だけは！」

「お前の命なんかいるか。その代わり私とジンのイチャイチャ話をもっと増やせ。本編じゃなくてもいい。閑話でも外話でも問題ない。いいな」

「了解しました！　それでは次投稿もよろしくお願いします！」

第７８話　箱根旅行、プチタイマン川神戦役（前書き）

第７８話投稿。

第７８話　箱根旅行、プチタイマン川神戦役

先にクジを引く権利は大和が取得した。

取得というよりはクリスが献上したようなものだが、とにかく大和は早く終わらせるためには１つでも多く自分が有利な勝負を引かなければならない。

神のお陰で少しは体調が良くなったが、それは体内をめぐる気の流れを緩慢させて風邪の症状を鈍くするもので、動き続ければ体内の気は活性化して風邪の症状も悪化していくことになる。

早急に終わらせる事が大和のすべき最重要事項だった。

「さぁ、栄えある第１試合の種目を決めるクジを引けぃ弟！」

百代の言葉に従い、大和は翔一が差し出したクジ箱に手を入れた。

「あんッ！　そ、そこはぁ」

突然京が艶っぽい声を出す。刹那の間も与えず神は一子の両耳を塞ぎ、卓也と緋鷺刀は飲んでいたお茶を吹き出し、岳人は興奮して鼻の下を伸ばしている。

間近でそれを聞いていた大和だが完全無視を決め込み箱の中を探る。

「今日の運気を試してみるか」

「な、中を掻き回すなんてぇ」

「誰かそいつの妄想行為（イマジネーションプレイ）を止めろ」

無視していた大和もさすがに我慢ならなかったらしく見学していた仲間に助けを求めた。こんな時、真っ先に動くのがみんなのお兄さん、暁神だ。

「ミヤ～、時と場所を考えような～？」

「はいやめます」

物凄い笑顔で言われた京は脊髄反射並の速度で返答した。さすがは風間ファミリーのヒエラルキーの頂点に君臨する男である。リーダーの翔一すら御する事の出来ない問題もこの男のひと言で終わる時もある。

「さぁて……俺はこの赤い紙を選ぶぜ！」

赤い紙のクジを箱の中から勢い良く取り出し、隣にいた百代へと手渡す。百代は手渡された４つ折りのクジを開いて中を確認すると、口端を吊り上げて笑みを浮かべた。

「弟よ。お前凄いクジ運してるな」

「どんなもんよ」

そんな百代の言葉に、大和は内心ガッツポーズをする。その言葉を信じるのなら内容は自分の得意分野のクイズ勝負などの頭脳系だろう。

だが大和のその希望は次の百代の言葉に儚くも消え去った。

「じゃーん！　金網Ｄｅａｔｈ　Ｍａｔｃｈ！」

「ははは！　殺せよ！」

体力なんて使う事すら許されない体調だというのに、最も引いてはならない勝負を引き当ててしまい、笑うしかない大和だった。

「……よりによって肉弾戦系を引いてどうするのさ」

大和の状況を理解している男性陣を代表して卓也のツッコミが入った。だがそんな事言われなくても分かってはいるが、不運としか言いようのないこのクジ引きの結果に、反論する事が出来ない大和だった。

「ふふふ。これは面白いなぁ大和？　ははは」

肉弾戦系の勝負は自分に有利だと分かっているクリスは既に殆ど勝利を確信している。自分がクジを引く事なく勝利を得る事が出来る状況にクリスも笑うしかない。

「特殊なルールとか何もないよね？」

「寝技ありだ。良かったな。試合にかこつけてあちらこちら触れるぞ」

「なっ！？　ふ、不埒だぞ大和！」

「俺は何も言ってねーだろうが……う？」

ルールの確認をしたのに何故か冤罪被せられそうになる大和だった

が、そんな性質の悪い冗談のせいもあるのか少しだけ熱が高くなったような気がしてならなかった。
少しだけ頭がボーっとするがそれを悟られないように努めて普段通りの声を出す。

「種目、まさかこんな競技ばっかりじゃないよね？」

「お前が最高に不利なのを初っ端に引いただけだ。自分でな」

「姑息な手段を使うから運に見放されるのだ」

体調が悪いのを最初から見抜いている百代は、意地を通して勝負をしようとする大和の意思を尊重して特に何も言わずに普段通りに接している。
一方のクリスは、大和の調子の悪さに全く気が付かず、説教めいた口調で言葉を掛けていた。

「金網デスマッチって言うけど……どうやって金網を作るの？」

そんな中、もっともな緋鷺刀の疑問が響く。
今いるのは何の変哲もない河原。金網どころかその金網を架ける支柱すらどこにもない。こんな状況でどうやって金網デスマッチをするというのか。
だがその疑問も解決できる人間がここにいる。

暁神だ。

神は緋鷺刀の疑問に答えることなく、大和とクリスを囲うように直径5メートルほどの円を地面に描くと、しゃがみ込み両手の親指と人差し指中指の3本で自分の描いた円の線に触れ、呼気を整え体内

の気を解放した。

【天嶺（てんりょう）・雷燼宮（らいじんぐう）】

パチン

まるで静電気が発生した時のような破裂音がしたかと思うと、2人を囲っている線に淡い青光りが灯り青白い円が出来上がった。

あまりの状況に呆然とする中で、大和が少しだけ震えた声で神に問い掛けた。

「兄弟？　今……なにやった？」

その問い掛けに神は足元の小さな石を1つ手に取り立ち上がるとそれを掌で転がしながら答える。

「何をって、円状に描いた線に俺の気を充填させて一時的な闘気の結界のようなものを作っただけだ。時間が経つか、あるいは俺が触れれば解けるようになっている。でもって効果はこの通り――」

手に持っていた小さな石を円の内側に投げ込んだ瞬間、さっきと同じように静電気が発生した時の音が聞こえた。

それを見てまさかと思った大和は自分の足元に転がってきた石を拾う。その瞬間に指に静電気が奔ったのを感じてある種の確信を得た。

そしてよく見てみると石の表面が少しだけ帯電している。

それから推測するにつまり――

「俺たちを囲む円柱状に静電気の壁があって、それが金網代わりっ

てことか？」

「その通りだ弟よ！　ギブアップか3秒間静電気に触れ続けたら負けとなる。安心しろ。ピリッと来る程度だから問題ない」

正しく答えを導いた大和を褒めるような口調で言うも百代だったが、大和は心の中で『手の込んだことするんじゃねーよ兄弟！』と思っていたが口には出さなかった。

あまりにも不可思議な現象を起こした神に対し、周りは誰も何も言えなかったが、同時に『この人なら何でもありだな』と思ったのだった。

「お前の気骨、見せてもらうぞ」

取り囲む状況にも動じることなく、既に戦闘態勢に入っているクリスに対して、肉弾戦系の勝負では端から勝ち目がないと分かっている大和はやる気すら沸いてこない。そんな対照的な2人を雰囲気を面白そうに見ていた百代が勝負開始の号を上げる。

「それじゃ第1試合。いざ尋常に、勝負！」

開始と共に駆け出そうとしていたクリスだったが、それを押し留めるように大和が手を突き出してきたため訝しげ思い足を止める。たったそれだけの動作でクリスの突撃を防げた大和は、一気に勝負を決するために言葉を掛けた。

「クリス、俺は例え勝負でも女の子を素手で殴るような真似は出来ない」

だがクリスはその言葉が自分を侮辱しているように聞こえ、目元を厳しくして大和を睨んだ。

「それは自分を戦士として見ていない愚弄だぞ大和。これは誇りを掛けた勝負。遠慮は無用。来い」

「勝手な自己満足は覚悟の上だが、もう1度言う。俺は女の子をぶん殴るなんて出来ないのさ。だから次の勝負で頑張ることにするぜ……ギブ……アップ」

「死闘に幕！　第1試合勝者、クリスー！」

大和のギブアップ宣言に翔一が勝者の名乗りを上げる。だがそれでは納得できないのはクリス。当然のように不満の声を上げる。

「釈然としないぞ！　結局お前は逃げるのか！？」

「逃げるわけじゃない。他にいくらでも競いようがある。他で負けるつもりがないからこそ今ここは退いただけだ。納得していないなら次の俺の戦いぶりを見ろ」

クリスも大和の言い分を理解出来ないわけではない。不利な状況を何の準備もなしに対応するのは愚かな事。大和が肉弾戦系の勝負を不利と考えているのは百も承知だから、その中でももっとも不利な今回の勝負を避けただけの事。

戦術的撤退。次のための力の温存。軍でもよく行われる作戦だ。

大和は間違っていない。客観的に見ても賛同できるところは多い。

だが何故か心が納得しないクリスだった。

「はい、解説の京さん。今の攻防の説明をして下さい」

「えー、第1試合の大和の狙いはこんな感じでしょう。『肉弾戦系では勝てっこない。なら余計なダメージを受ける前にギブアップすべき。だがただ参ったをするだけでは相手が納得しないのでそれらしい理由をこじつけよう』。といったところだね」

「なるほどねぇ。大和、あんたって人は」

そんな大和の心情を的確に見抜く京に呆れる卓也。幸いにもクリスの耳には入っていなかったらしく、余計な言い争いが起きる事はなかった。

「ええい、それでは次だ次！」

元々勝つつもりで、勝つ算段も大きく、間違いなく勝てたはずのクリスも、降って湧いた棚ボタのような勝ち方にいい気分ではなかった。

「ほらクジを引けクリ。面白いの当てろよ～」

「では……これだ！」

クリスから手渡されたクジを開いた百代は少し意外そうな顔をした後、勝負をしている2人を見て面白そうな声で勝負内容を述べた。

「今回は少し大和有利かもしれんが面白い。歴史雑学。テーマは“武器”。出題者はタカとまゆまゆ」

突然の指名に驚く緋鷺刀と由紀江。急に注目を浴びたせいで由紀江は慌てて緋鷺刀の背中に隠れる。その行動に京と岳人がニヤけた笑みを浮かべるのを見て、緋鷺刀は小さく溜息を吐いた。

「面白そうなもの引いたな。それジン兄が考えた奴だぜ。勝負内容は聞いての通り。テーマである武器にちなんだ歴史の雑学問題をヒロとまゆっちに出してもらい。2人がそれを答える。簡単だろ？」

「ちょっと待て、出題者が2人という事は2問なるという事だろ？　正解数が同じだった場合どうやって勝敗を分ける？」

勝負内容を説明する翔一にクリスが勝敗についての問題点を挙げる。だがその疑問に答えたのは勝負の発案者である神だった。

「出題者の2人には複数解答ある問題を出してもらう。勝敗はより多くの答えを当てた方が勝ち。これなら文句ないだろ、クリス？」

矛盾のない回答にクリスは納得して頷く。

一方、突然の出題権を与えられた緋鷺刀と由紀江はどんな問題にするかを考えている。出題するのは複数解答のあるもの。雑学だから歴史的な出来事そのものでは拙い。しかも知識豊富の大和と日本かぶれのクリスの勝負になる問題となるとかなり限られてくる。

「どうするまゆ？」

「なくはないですけど……テーマが武器ですからかなり限られてしまうんじゃないでしょうか」

「例えば、新撰組隊長連中の使ってた刀とかどうだい？　オイラ近

藤と土方と沖田しか知らねーけどよ」

無責任な発言の松風に緋鷺刀は苦笑をする。松風はある意味で由紀江の本音が出る。さっきの言葉からは、出題が難しいのか適当に出せばいいと思っているのかの判断は出来なかったが。

緋鷺刀は考える。

テーマが武器と決まっている以上は出題できるものは限られている。それに自分たちを出題者として名指しした事にもきっと何か意図があっての事。

そして気付く。この勝負に関しては大和有利だという事。

競技となるクジの殆どを百代と翔一が作ったというのなら、勢いとノリで作られた競技も多いはず。第1試合の金網デスマッチがいい例だ。

大和の風邪を予測していたわけではないが、落ち着いて頭を使う競技を神はあらかじめ入れていたのだった。

そして緋鷺刀と由紀江を出題者に選んだのにも意味があった。

クリスはある意味で日本マニア。場合によっては日本人ですら知らない知識を持っている。もし出題者が卓也や京だったらクリスは答えてしまうかもしれない。

だから神はテーマを武器に決めて、剣術家系の緋鷺刀と由紀江を出題者としたのだった。

「まゆ、オーソドックスに『五剣』と『三槍』でいこう」

緋鷺刀の意図をすべて読む事は出来なかったが、由紀江は言葉に頷

く。恐らく『五剣』の方は大和もクリスも正解するだろうが、『三槍』の方は難しいと由紀江は思っている。
それ以前に由紀江はそれ以外の問題を作ることが出来そうになかった。

緋鷺刀は考える。この勝負、第1試合とは逆の構図。勝負開始前から自分不利なクジをクリスが引いた。今回の勝負は大和の勝利がほぼ確定されているのだった。

「タカにまゆまゆ、問題は出来たか？」

少しだけ打ち合わせをしていた2人は百代の言葉に頷き、視線を大和とクリスの方に向ける。いつの間に用意したのか既に解答用のスケッチブックとマジックを持っていた。

「よし！　では問題だ！」

百代の掛け声に最初に由紀江が1歩前に出る。話し合いで先に問題を出す方も決めていた。由紀江も最初から分かっていた事だったため、混乱する事なく落ち着いて問題を述べる。

「えっと、1問目は数ある有名な日本刀の中で『天下五剣』と称される刀を全て答えてください」

「2問目は『天下三槍』と称される槍を全て答えてください」

由紀江が言い終わると同時に緋鷺刀も出題する。これは体調が芳しくない大和の事を思っての事で、解答正解数の多い方が勝者になるのなら、問題を纏めてしまえば時間が早くなると思ったからだった。

勝手な行動だったが、大和の風邪を知っている神や翔一も、体調が悪いのを見抜いている百代も何も言わなかった。大和もクリスもそういうルールなのだろうと思い疑問を持たなかった。

「問題は出た。内容からして正解数は8個だな。より多く答えた方が勝ちだからな。それじゃあシンキングタイムは5分だ」

神の言葉にスケッチブックに解答を書き始める大和とクリス。
大和は特に悩む事なく答えを書き込んでいく。雑学と分かった時点である程度の問題を予測していたのだ。出された問題もその予測内のものだから悩む事はなかった。

逆にクリスは手が止まった。日本が好きで、日本の歴史も自負できるほど勉強してきた。だから由紀江が出した問題の方は思い出せば書く事は出来たが、緋鷺刀の問題は難しかった。クリスは日本の歴史の中で有名な槍は1本しか知らなかったからだ。

「はいシンキングタイム終了〜！　答えを見せろ」

百代の宣言に2人揃って答えを書いたスケッチブックを前に出す。
書かれている答えは大和が8個。クリスが6個。知らないものを書いても仕方ないと腹を括ったクリスは自信のある解答だけを書いた。

見比べてみるとクリスの書いた6個の答えは大和も書いている。それを見たクリスはこの勝負、自分の勝ちがなくなったと判断した。
引き分けの可能性が残っているは確かだが、知識豊富の大和が取り零すとは思えなかったからだ。

「それじゃあタカにまゆまゆ。答えを頼むぞ」

「は、はい。『天下五剣』は童子切安綱・鬼丸國綱・三日月宗近・大典太光世・数珠丸恒次の5本の事です」

「『天下三槍』は御手杵・日本号・蜻蛉切の3本だよ」

結果、クリスは書いた答え全部正解だったが大和は全解答8個全て正解。クリスの予想通り今回の勝負は大和の勝ちで決着がついた。

「第2試合、歴史雑学勝負は大和の勝ち！」

翔一の勝ち名乗りで第2試合が終了した。これで1勝1敗。互いに想定内の結果になっているが、大和としては体調の事もあり早く勝ちを積み重ねたかった。

「しっかし、大和はともかくクリスはよく知ってたな。俺様全く分かんねーぞ」

「凄いわよねクリ。日本人のアタシたちより日本に詳しいじゃないかしら？」

「ワン子、そこ褒めるトコロ違う」

「どっちかって言うと、クリスの知識はマニアだよね」

観客席では勝者の大和を褒めるよりも、クリスの凄さを感心していた。勝ったのに誰もなにも言ってくれない仲間に少し落ち込む大和だった。

「俺の勝ち。1勝1敗だな」

「……振り出しか」

余裕がありそうに言葉を口にする大和だったが、状況は刻一刻と自分不利へと変わっていく。何もしていないとボーっとなって意識が遠のいていきそうな感じを何とか繋ぎ止めている。

早く勝負を決しなければ。いずれその前に自分が倒れる。

そう感じながら、大和は第3試合の種目を引くべくクジ箱に手を伸ばした。

第７８話　箱根旅行、プチタイマン川神戦役（後書き）

あとがき～！

「第７８話終了。あとがき座談会、司会の春夏秋冬　廻です。今回のお相手は――」

「どうも、暁神です」

「さて、今回のお話ですが久し振りの一話通しての三人称」

「何か理由あってか？」

「クリス視点にしても大和視点にしても他人視点にしても今回はやりにくいと判断したから。大和はまともに思考が働かないし、前回でクリス視点やったけど意外と難しかったしね」

「それで全部三人称ね」

「そういうこと」

「ところで、勝負内容が原作と違うのはなんでだ？　結果は同じみたいだけど……」

「何と言うか……原作通りでもよかったんだけど、せっかくオリキャラがいるんだから君と緋鷺刀にも少しばかし勝負に混ざってもらおうと思ってね」

「ふぅん。ってことは次の勝負内容も変更するのか？」

「そのつもりだけど、アレだけは原作通りやろうと思う」

「ああ、アレはね」

「そう、アレは」

「俺たちだけで納得して大丈夫なのか？」

「原作知ってる人はたぶん分かると思うけど……知らない人はなんの事か分かんないよね」

「いいのか悪いのかはよくわからんがな……ところでヤマとクリスの勝負、あと何話続くんだ？」

「分かんない」

「オイ……」

「実際何話かははっきり言えない。たぶん２・３話だと思う。だから『Ｃｈａｐｔｅｒ５　箱根温泉激闘編？』はあと５・６話で終了かな？」

「本当だろうな？」

「たぶん……きっと……そうなればいいかな？」

第７９話　箱根旅行、一進一退の攻防？（前書き）

第７９話投稿。

何度も言います。展開が遅い……

第７９話　箱根旅行、一進一退の攻防？

ｓｉｄｅ　暁神

「さあ、第３試合のクジを引くぞ」

今度も頭脳系を。

きっとヤマはそう思っているはずだ。見た感じでは風邪はそんなに酷くは見えないが、時折ボーっとしている事が多くなった。

俺が書いた動く事なく頭を使う勝負は思った通りヤマの勝ちで終わったが、あと俺が作ったクジは１つ。そっちの方は体力も使うから出来れば早く引いてほしいところだ。

「変なの引きそうだな。お前少し芸人気質だから」

「そういうのはガクトの役目だって」

モモがからかうようにクジ箱を探るヤマに言葉を掛ける。だがヤマは軽くガクを貶すような言葉を吐き引いたクジをモモに手渡した。

「これでいいのか？　お？　これはこれは、またも互角勝負だな」

受け取ったクジを開いたモモは、一瞬だけ感心したような声を出したが次の瞬間、物凄くいい笑顔になった。

あ～、なんか物凄く嫌な予感がするのは俺の気のせいじゃないはずだ。

「肝試しゲーム！　私が考えて入れた対戦案だ！」

おお、モモの言葉を聞いてヤマが少しふらついたな。嫌な予感がしてというのもあるだろうが、辛そうだな。とりあえずまだ解熱剤は効いているようだが、ヤマとして早いとこ決着をつけたいところだな。

「あ、あのぉ」

まゆっちがモモに声を掛けたな。どうやら大和の状態を見て止めに入ろうとしているらしい。強く言い切れば恐らくモモもキャップも止めるつもりだろうが、果してまゆっちは言い切れるかな。

「どうした？　トイレか？」

「い、いえ何でもないです」

結局言い切ることが出来ないまゆっちだった。後ろでヒロが呆れた溜息を吐いている。

心配なら声を掛けやればいいと思うんだが、どうやらヒロもヒロなりに考えがあるみたいだし、金曜集会の時も『対等だよ』と諭していたしな。それ以上はまゆっちの勇気に期待してるって事か。

「競技の説明をするから静かにしろ。騒いだら骨外すからな」

やけに気合入ってるなモモの奴。そういえば、もしクジが引かれたら自分が内容説明すると言ってたから、クジの紙には『肝試し』しか書いていなかったな。

と、そんな事を考えていたらモモが手招きしてきた。何だ？

「取り出したるは細長いチョコのお菓子ポッ○ー」

そう言って近付いた俺に手に持ったポッ○ーの端を咥えさせる。何だろう、物凄く嫌な予感がするんだが……

「ジンをお前たちに見立てる。端を自分で咥えて反対側の端を異性に咥えてもらう。そして異性が端の方からだんだんお菓子を食べていくので……」

予感的中！　おいちょっとやめろモモ！　みんな見てる！　っていつの間に俺の頭を両手で固定した？　いやだからやめろって！　恥ずか――

「ンッ」

ポッ○ーを咥えていたため声を出せず、心の中で抵抗の声を喚いたものの空しく、あっという間の速度でお菓子は食べていき瞬く間に俺の唇とモモの唇は重なってしまった。

見てる見てるみんなに思いっきり見られている。

ミヤ、カズの目を隠すのはナイスと言ってやりたいがガン見しすぎ。ガクにタク、衝撃的なのは分かるが口を開けすぎ。ヒロ、目線を逸らすのが速かったな。それぐらいの速さで止めてほしかったよ。クリスにまゆっち、真っ赤になって顔を伏せるのはいいがチラチラ視線を感じるぞ。ヤマ、何だその『どうしようもないバカップルだな』的な視線は？キャップ、お前はそのまま純粋に生きてくれ。

ってオイ！　モモ！　舌まで入れるな！　いい加減にしろ！

「ぷは」

俺の雰囲気の変化を感じモモは唇を放した。だがそのいかにも『満足です』って顔が可愛いから何も言えないじゃないか。しかしあれだ、またしても羞恥のボーダーラインが下がりそうだ。これがモモの狙いかもしれない。

「顔が接近してくるのに何秒耐えられるかを競うチキンレースだ。口を離したらゲームオーバー」

「だったらキスする必要全くなかったじゃないか！」

キスしても何ら変わることなく説明を続けたモモに、タクのツッコミが即座に入った。まさにその通りだ。接近を何秒耐えられるかの勝負なら俺たちがキスする必要なんてない。

つまりモモ的には『ただ単にしたかった』。それだけの理由だろう。

「見つめ合って食べないと無効だからな。ははは」

「これは互角じゃなくて自分に不利な気がするが……」

上機嫌なモモに対し、クリスが若干不安げな顔で言葉掛けた。

確かにどこか潔癖なフシがあるクリスには重荷だろう。あの父親のせいで異性との触れ合いなんて殆どなかったに違いない。手に取るように分かる。

「いやぁ、恥ずかしいのは男も同じさクリス」

物凄くいい笑顔で言ってたら言葉に説得力ないぞヤマ。あれか。運が自分に向いてきたからいけると思っているのか？　そうだとしたら甘いぞ。モモの提案した勝負がそう簡単なモノなわけないだろ。

「じゃあ俺から先にやるぜ。ほら、スクワットしているワン子！　カムヒヤ！」

「カムヒヤ？」

「こっちに来い」

予想通りカズを指名したな。確かに異性なのは間違いないが、異性である事を殆ど気にしなくていい相手なんてこの中ではカズぐらいだ。

「これを反対側からゆっくり食べてこい」

「おー。いただきま～す！」

案の定、ヤマが咥えたポッ○ーの反対側の端から、カズは言われた通りに食べ始めるが何の躊躇いもない。そのままゆっくり顔が近付いていっているが、ヤマもカズもお互いに何の羞恥も感じていない。カズなんてヤマの肩に手を置いて最後まで食べ切ろうとしている。

傍から見たらキスする寸前の格好なんだけどな……

よく考えてみるとヤマとカズの身長差って、俺とモモの身長差と大して変わらないんだよな。て事は、俺たちも傍から見るとキスする時はあんな風に見えるってわけね。

そんなくだらない事を考えていたら唇が触れる寸前でヤマは顔を引いた。

「ざっとこんなもんだ」

「美味しいわね。大和、次は？」

「いや。もういい、スクワットに戻れ」

得意満面なヤマにもっとお菓子が欲しいのか催促するカズだったが、頭を撫でられ気持ちよさそうに目を細めたら、言われたままにヤマから離れてスクワットを再開した。

ヤマ……勝ったつもりでいるだろうがそうは問屋が卸さないぞ。忘れるな、この勝負はモモが作ったモノだという事を。そんなに簡単な勝負なわけがないだろ。

「まぁ、今のそれ無効なんだけどな」

ほらやっぱり。

「なんでやねん！」

信じられないといった感じで声を上げるヤマの頭をモモは鷲掴みする。

「馬鹿野郎。なに勝手に相手を選んでるんだ。相手は私が平等かつ公平に割り振る。大和の相手は……」

「まさか“あいつ”はないよね？」

モモの言葉に恐る恐る問い掛けるヤマ。だがそんな怯えるような雰囲気に満足したのか、モモは物凄く上機嫌な声でヤマの相手を指名した。

「そういう奴を相手にしてこそチキンレース！　京！　出番だぞ！」

「ゲームとはいえ、もし、唇が合っちゃえば……もうそのまま責任とって結婚だね」

指名されたミヤは僅かに頬を赤く染めモジモジしながらも、ぶっ飛んだセリフを口にしながらヤマの前に歩み出た。うんミヤ、それは本当にストーカーみたいで怖いぞ。

対するヤマは貧血患者のようにふらりと上体が揺れる。体調の悪さも相まってマジで精神的にキツイのが来たな。後で骨は拾ってやる。頑張れヤマ。

「どうした弟。まさかこれもギブアップか？」

挑発めいたモモの言葉にヤマが体に力を入れて否定する。

「いや、やるよ姉さん。さすがに2度も逃げられん」

「そうだそれでいい」

大和の気概を褒めるような笑みを浮かべたがそれも一瞬、すぐにお気に入りの玩具をイジリ回すような底意地の悪い笑みに変わった。

「じゃあまずは大和が咥えて。はいあーん」

ミヤが差し出したポッ○ーを咥えたヤマだが、あの顔はなにがあろうとも絶対に唇を合わせないようにと決意したな。お前の気持ちは分からんでもない。たった1回キスしただけで人生の墓場に連れていかれたら堪ったもんじゃないだろ。
だがミヤはなかなか始めようとしなかった。

「どうしたやれよ京。カウントできねーだろ」

「まぁまぁ私も心の準備があるから1分は待って」

訝しげに問うキャップに時間が欲しいと答えるミヤ。しかし心の準備と言っても、常日頃チャンスを狙っているミヤにはあり得ない事だろ。
何か考えているのか？　それとも本気の本気でヤマにキスするつもりか？

「1分ちょい経過。はじめるぜ？　セットアップ」

1分経過して開始を宣言したキャップに、ミヤは素直に従いヤマが咥えていたポッ○ーの端を咥える。その瞬間、ミヤの顔が邪悪に歪んだのを俺は見た。

「スタート！」

キャップが開始を告げた直後、ミヤは咥えたポッ○ーを噛むことなく物凄い速さで一気に口の中に飲み込ませた。そこまでしてヤマの唇を奪いたいかミヤ……
ヤマもその殺気紛いのモノを感じ取ったのだろう、頭突きじみた勢いで迫るミヤの顔を、本当に間一髪で回避してみせた。

「あっぶね！　つーか食う速度速いんだよ！」

「……ちっ、惜しい」

舌打ちまでしてそんなに悔しいのかミヤ。拙いな、どうにかして矯正させないと仲間内から警察に厄介になりそうなのが出そうな感じだ。ストーカー行為は犯罪だぞミヤ。

「ヤマの記録は1秒ジャストだな」

「ふふふ。たった1秒以上耐えればいいのか、この勝負、もらったな」

結果を聞いて既に勝ち誇っているクリス。自分の時どうなるかって考えが全くないね。不公平だと不満を口にするヤマにモモが耳打ちしてるけど……なるほど“あいつ”が相手ならクリスもきついぞ。ヤマも納得してるし。

「見て。ここ大和がさっき1分間口をつけてた場所」

まだ食べていなかったのかミヤは勝負に使ったポッ○ーを手に持ち、反対の手でヤマがずっと咥えていた個所を指さす。

「それが何だと言うんだ」

「ふふっ……ぺろぺろ……れろ」

嫌な予感がしたんだろう、顔を歪ませて問い掛けるヤマに勝ち誇ったような、優越感に浸ったような笑顔を浮かべたミヤは、嬉しそう

に舌を伸ばしてヤマが咥えていた場所を舐めた。
以下はヤマの電話での会話です。

「はい、こちらゴールデンウィーク青年相談室」

「幼馴染みの女の子に……ストーカーされてるんです」

「ほう、ストーカーねぇ」

「はい。確かに顔は凄く綺麗だけどその分、性質が悪いというか……この前なんか俺を起こす時にバスト８４の胸を顔に擦りつけながら――」

「自慢なら他でやれやぁあああ！　こちとら女と同棲しようとして部屋借りたら女が『実は本命の彼がいて貴方とはお遊びだったの』と言ってフってきたんだよぉ！」

「見捨てている国に逆に見捨てられたとは皮肉な」

確かに自慢にしか聞こえないな。電話を取ったお兄さんも強く生きてください。貴方にはきっといい出会いが待っていますよ。人類の約半分は女性ですからね。

「では自分の番だな。フッ。１秒。軽い軽い」

勝ちをすでに確信しているクリスは上機嫌だ。まあ、相手が“あいつ”だと知らないからの余裕なんだろうな……と思っていたら何や

ら相手を選びだした。

「それでは相手だが。んー……ジン兄殿頼めるか？」

タクはクリスの視線が自分を捉えたのを見て小さく体を震わせたが、すぐに外されて俺が指名されたのを見て、安堵したようながっかりしたような溜息を吐いた。
ていうかクリス、ルール忘れてるだろ。

「だからなに勝手に相手指名してるんだ。そういうゲームじゃないからコレ。そ・れ・と。私がいる目の前でジンを指名とはいい度胸してるなクリ？」

「はいストップ。落ち着こうなモモ」

俺を指名したことでクリスにヤバい感じに殺気を放とうとするモモを横から抱き締める。空気読めないクリスだからもしかしてと思っていたが、まさに予感的中するとは思ってもいなかった。あらかじめモモの横にいて助かったよ。
そう思うだろ、クリス？

少しだけ殺気をあびたのだろう、冷や汗を流して2・3歩後ずさりしているクリスに安心させるように苦笑い浮かべて頷いてやった。
あからさまにクリスは安堵の息を吐いた。

「で、では、自分の相手は？」

恐る恐る問い掛けてくるクリス。どうやらモモが誰を指名するのか何となく分かっていたからヤマと同じような行動に取ったようだ。
モモも俺に抱き締められている事と、そのクリスの表情に溜飲を下

げたのか、途端に面白そうな笑顔を浮かべた。

「クリの相手は自称ナイスガイ、ガクトだ！」

「はぁぁい！　ご指名入りましたぁぁ！」

モモの指名に上機嫌の答えて何故か上着を脱ぐガク。

「なんで脱ぐの！？　それじゃあ本当にただの変態だよ！」

まゆっちに見せないため庇うように前に出てガクに苦言を呈するヒロ。格好いいな、まゆっちの好感度上昇中だぞ。ガクの裸を見てなのかヒロの行動に対してなのかは分からないが、顔を赤くしてヒロの背中に隠れているまゆっちだった。

さて、結果は何と言うか予想通りの展開になった。

上半身裸で鼻息荒く待ち構えるガクの気持ち悪さに耐えきれなくなったクリスが、ポッ○ーを咥えることなくガクの顎に掌底を放ちノックアウトさせた。

記録もポッ○ーに口すら付けてないという事で０秒。ヤマの勝ちになった。

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

ｓｉｄｅ　黛由紀江

大和さん、相当具合が悪そうです。

クリスさんにはばれないように取り繕っていますが、時折ふらついていますし、顔色も勝負を開始した時より明らかに悪くなっています。

モモ先輩も京さんも気付いているのに何故か止めようとしません。

（きっと大和の男気を無駄にしたくねーんだよ）

分かっています。部屋で大和さんの覚悟は私もこの目で確かめました。でも、だからと言って今は無茶をする時ではないはずです。確かにお互いの信念を掛けた真っ向勝負なのかもしれませんが、これは言い換えればただの喧嘩じゃないですか。体の調子を無視してまでやることに何の意味があるんですか？

ああ、次の試合が始まってしまいました。

クリスさんが引いたクジはどうやら選択できる勝負のようで、クリスさんは神経衰弱とポーカーの２択から神経衰弱を選びました。

（賭けごと嫌いなクリ吉らしいけど、大和にとっちゃ冗談じゃない文字通りの『神経衰弱』になりそうだぜ）

ジン先輩とキャップさんがシートを広げてトランプをばら撒いているその間も、大和さんは辛そうに息を吐き倒れそうになる体を何とか支えている感じです。あんな状態ではめくったトランプの数字を記憶なんてできっこないですよ。

モロさんが先ほどから心配そうな視線を送っていますが、大和さんはそれに気付いても問題ないと小さく首を振るだけです。

そして勝負が始まりました。けど大和さんが不利なのは明らかです。

クリスさんも記憶力がいいらしく位置が分かり始めたら殆ど取りこぼしをされません。

「大和少しやばそうだな。熱が戻ってきたか」

「あ、気付いた？　うん、相当きていると思うよアレ」

ガクトさんとモロさんが私の隣で大和さんの体調を心配しています。でもそれなのにどうしてみなさん止めようとしないんですか？　無理を押してまでやっている大和さんを見てなにも思わないんですか？

「まゆはどうしたいの？」

訳が分からなくなった私に、タカさんが声を掛けてきました。

「僕は言ったよね。『対等の仲間』って」

その言葉に小さく頷きます。確かに金曜日の事件の時に遜(へりくだ)って出た私の言葉を遮って、タカさんは『僕たちは対等の仲間なんだ』と仰いました。でも今これって対等の仲間のやる事なんですか？

「僕は大和君の意地が分かるから何も言わない。心配だけど、大和君が自分からやめない限り僕は止めない。これも仲間を対等に尊重しているからそこなんだ」

分かります。みなさんが大和さんの事を思っているのは見ていれば分かります。でも……

「でもねまゆ。僕がそう思っているだけで、みんなは別の思いがあって大和君を止めないんだと思う。同じ思いに同調しているんじゃ

なくて、みんなそれぞれの考えがあって行動しているんだ」

それは……

「まゆの気持ちは分かるよ。心配だから止めたい。無理してまで戦いをするのは仲間じゃない。確かに僕にもその思いはあるよ。でも勝負が必要な事だとも思っている。大和君のためにもクリスさんのためにもね」

それじゃあどうすればいいんですか？　大和さんのためクリスさんのため、みなさんお2人を尊重してなにも言い出さないのならどうしようもないじゃないですか。

「でも尊重する事だけが対等って事じゃないよ」

え？

「何でも言いたい事を言う。それも“対等”だよ、まゆ」

あ……そういう事だったんですね。

みなさんは私に対等な位置に立てる場所を用意してくださっていたんですね。

考えれば私が恐る恐る言い出そうとしていた時も、みなさんちゃんと聞いて下さっていました。それなのに恐縮して言い出せなかったのは他ならぬ私自身じゃないですか。

後は、私の“勇気”だけだったんですね。

ああ！　大和さんが咳き込み始めました！　い、今行くべきですよ

ね松風！？

（そうだぜ！　まゆっちの勇気を見せてやれ！）

第７９話　箱根旅行、一進一退の攻防？（後書き）

あとがき～！

「第７９話終了。あとがき座談会、司会の春夏秋冬　廻です。今回のお相手は――」

「引き続き、暁神です」

「はいよろしく。さて今回のお話ですが大和ＶＳクリスの勝負、第３試合と第４試合をお送りしました」

「お送りしましたって、第４試合の描写殆どなかったじゃないか」

「由紀江視点からだったからね」

「さらに第３試合で全体の４分の３も使ってるしな。しかもガクとクリスのシーン端折ってるし」

「いやそれがな。原作通りにやってたら思った以上に長くなっちゃったんだよ」

「なにが原作通りだ！　俺とモモのキスシーンなんて必要ないだろ！？」

「いや、百代ならやりそうな気がしたんだよ。この物語を考えた時、あの時に百代に彼氏がもしいたら絶対に見本としてやってキスすると思ってたらかね。その空想・妄想を現実にしたまでだよ、あっはっはっは」

「笑い事じゃねぇよ！」

「まあそれは置いといて、と。最後の由紀江視点のシーンですが、結局、緋鷺刀に背中を押される感じとなりました」

「本来なら1人で勇気出して言うんだよな？」

「原作ならね。松風の応援？も入っているけど。でもせっかくこの物語では緋鷺刀がいるんだからちょっと介入してもらいました」

「着実にまゆっちの中でヒロの高感度が上昇しているな」

「今のところ上限知らずでしょ。凛奈さんの爆弾発言もあるしな。もはや由紀江の緋鷺刀への好意は刷り込み（インプリンティング）に近い」

「ひな鳥が最初に見た動くものを親と思うってやつか？」

「意味は違うんだけどね。初めての友達、しかも異性。なにも言わずに松風を受け入れてくれて、初めて穏やかに接する事が出来た相手。初めて自分自身そのままで接する事のできる相手。由紀江にとって緋鷺刀って物凄く大切な存在になりつつある」

「それなのにまだそれに気付いていない」

「お互いにね」

「もどかしいな」

「本当にそうだね。では次投稿もよろしくお願いします。大和ＶＳ

クリス。決着……かも？」

第８０話　箱根旅行、意地と誇りと最終試合（前書き）

第８０話投稿。

ここまで来てまだ箱根旅行が終わらない。

いったいこの物語、何話まで行くんだろう……

第８０話　箱根旅行、意地と誇りと最終試合

ｓｉｄｅ　暁神

戦績は2勝2敗で白熱している。

見ている方には楽しい展開になってきているが、風邪を押して勝負に参加しているヤマはかなり限界に来ているな。クリスは顔が赤くなっているのを見て怒っていると勘違いしているが。

だがさすがにヤマの体調の悪さを見抜いているミヤとモモは拙いと感じ始めたんだろう、少し心配そうに声を掛けた。

「大和。熱上がってきてない？」

「ああ。ちょっと額触らせてみろ」

ヤマも心配してくれているのは分かっているが、ここでやめるわけにはいかないはずだ。体調管理も勝負の内、初めから絶不調だったとバレたらクリスにどう言われるか分かったものではないからな。

「心配ご無用……げほっ」

強がっちゃいるがついに咳が零れた。と、どうやらそれを見たまゆっちが決意したらしい。ヒロに背中を押された事もあるんだろう、ありったけの勇気を振り絞って声を上げた。

「もうダメです。松風、私は行きます！」

「行け！　行っちまえまゆっち！　まゆっちならきっと出来るぜ！　今まゆっちは勇気と言う名の坂を自転車で上ってんだ！　止まれば倒れて下まで真っ逆さまだぞ！　ペダルをこげー！」

「い、いきなりどうしたのよまゆっち！？」

声を上げたがまず最初に松風で自分を励ますあたり、実にまゆっちらしいやり方だ。その突飛のなさは隣でスクワットしていたカズが驚きの声を上げるほどだ。

「そ、その！　大和さんは熱が上がってきたのではなく、元から……かなり高熱だったんです！」

「おい、まゆっち！」

勝負が始まる前、旅館の部屋で黙っていてと脅迫まがいのお願いをしていたからヤマはまゆっちが言う事はきっとないと思っていたはずだ。性格を考えれば仲間に入って日の浅い今ならはっきりと意見を言う事はないと踏んでいたんだろう。
だがそのまゆっちが1番にヤマの現状を暴露した。

「熱を薬で抑えて戦っていたんです！」

「まゆっち黙って」

止めるため凄味を効かせた声を上げるけたようだけど、今のまゆっちには効かないぞヤマ。

「だってだって！　もう黙って見ているなんて出来ません！　体調が悪いのを無理に押してまで戦うのが友達なんですか！？　わ、私

は今まで友達いませんでしたけど、それは違うと思います！　だって……友達っていうのは……その、良く分からないですけど。こんなんじゃなくて、その……私はただ、大和さんとクリスさんには仲良くしてほしいだけなのに……うぅ」

言いたい事を吐きだし、目に涙を浮かべたまゆっちを慰めるように、ヒロが後ろから手を伸ばし頭を優しく撫でた。そんな姿と真正面から真摯な言葉を投げかけられて、ヤマとクリスは言い返す言葉がないようだ。

興奮した気持ちを落ち着かせるようにヒロに撫でられるままでいたまゆっち。だが少しだけ落ち着きを取り戻したようで、未だ泣いて震える声だったが言葉を続けた。

「す、すいません……新参な私が生意気な事言いまして……でもどうしても……言いたくて」

「いや、良く言った」

「ああ。思った事はズバッと言ってもらわないとな」

咎められるかと思ったのだろう。だけど予想を超えた褒め言葉が返ってきたため呆然となるまゆっち。それを安心させるようにヒロがもう1度頭を撫でた。本当にまゆっちにたいしては無条件で優しいなヒロ。

「弟ぉ。お前薬で誤魔化していたのか。てかジンも1枚噛んでるだろ」

「まぁな。ヤマがやる気だったし。ヤバくなったら止めるつもりだ

ったけど……今回はまゆっちに先を越されたな」

どうやら誤魔化しが薬だけでないと感じたモモは、誰が施したのかすぐに見抜き隣にいた俺に苦言を呈した。だが悪い事をしつもりはない。

「ったくさぁ。どーでもいい時はすーぐギャーギャー騒ぐくせに、こうやってツライ時は黙っちゃってさ」

その横でカズが呆れたようなからかうような言葉をヤマにぶつける。でもこういう時のヤマが意地を貫き通そうとするのは最初から知ってるだろ？　案の定、ヤマは不貞腐れたような言葉を返した。

「正直に言ったら確実に不戦敗扱いだろ。それだけは絶対にお断りだ。まゆっちは仲良くしてほしいと言ったけど、これはそのためには絶対に必要な戦いなんだ。クリスに俺を認めさせるためにな。だから何があろうと引き下がれない。これは俺の“意地”なんだ」

「分かるぜその意地。男だな大和」

盛大に頷いて同意するガク。俺もその意地は分かるがお前はそれを言う権利を持っていないぞ。ヤマがこんな状態になったのは元々はお前のせいだからな。そこを忘れるなよガク。

「ガキンチョだなぁ。だが久し振りに年下らしいとこ見たな」

「ま、普段のヤマらしからぬ行動だけどな」

対してモモはどこか嬉しそうだ。普段大人ぶってるヤマの年相応らしい今回の行動が、可愛いものを愛でるという琴線に触れたんだろ

う。
だがまだ話が纏まったわけじゃない。ヤマの意地も通し、お互いに納得させる方法を取らないといけないしな。それじゃあ提案しようか。

「ヤマ、クリス、良く聞け。これ以上まゆっちを心配させるのも悪いし、ヤマの体調もかなりヤバい」

黙って俺の言葉に頷く2人。どうやらこのまま話を進めても反対意見は出ないだろう。ならさっさと先に進めよう。

「戦績はお互い2勝2敗の五分。そこで勝負を5本先取から3本先取に変更。次の試合で決着とする。という事でどうかなまゆっち。あと1勝負だけやらせてやってくれ」

2人にルール変更を告げた後、最後はまゆっちに確認をする。

「わ、分かりました。それでいいです」

まゆっちも我慢ならなくて言葉にしたけど、ヤマとクリスの気持ちをちゃんと理解している。だから俺の提案にも特に反対することなく同意してくれた。

それに今回、ようやくまゆっちは自分の意見を臆することなくぶつけてきた。年下だからと遠慮がちだったが、これを機に仲間らしくなってくれよ。まあヒロがいるから大丈夫か。

「やるじゃんまゆっち！」

「これからも言いたい事があればドンドン言え」

「1年だからってかしこまる必要ないんだぜ」

「そうそう。おどおどしてると気を遣うから今ぐらいが丁度いいかもね」

「俺様への愛の告白も早めにな」

「いやそれは絶対にないからね」

口々に遠慮のない言葉を掛けられて少しだけ呆然となるまゆっち。
だがその表情が段々と驚きに変わっていく。どうやらみんなから認めてもらったとこに気付いたようだ。
そんなまゆっちの肩をヒロは優しく手を置く。

「今、まゆが思ってる通りだよ。もう場所は用意されていたんだよ。あとは勇気を持つだけだった。頑張ったね」

「はい！」

お、いい返事にいい笑顔。あれがヒロ以外の人の前でも出来るようになれば友達なんてあっという間に増えていくよまゆっち。ヒロは横からかっさらわれないように十分気を付けないとな。

「それじゃあラストバトルだ。ヤマ、クジを引け」

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

ｓｉｄｅ　直江大和

兄弟の言葉に従ってキャップの持っているクジ箱に手を突っ込む。

意地を張ってあんなこと言ってみたが、まゆっちが言い出してくれて実は助かっていた。前の勝負の神経衰弱の頃からかなりヤバい状態になっている。

次でラストバトルになるがキツイのには変わりない。種目次第では勝つ事が出来るが運動系の勝負になったらお終いだ。

神に祈りながら引いたクジを姉さんに渡す。

「ラストバトルはこれだ。『変則ケイドロレース』」

読み上げられて瞬間、敗北を覚悟した。

なんだそれは？　聞くからに肉体酷使の競技じゃないか。これが都合のいい時だけ神頼みした報いかよ。

「落ち込むにはまだ早いぜ大和。この競技もジン兄が考えたものだ。きっと普通のケイドロとはわけが違うぜ」

なるほど。兄弟が考えたものならば何かしら特別なルールがあるはずだ。『変則』って付いているぐらいだしな。第2試合目の勝負の時のようにお互いに公平な内容になってるはずだ。

「すまないが『ケイドロ』とは何だ？」

「えっと、鬼ごっこの一種で数人のグループに分かれて警察役と泥棒役になって――」

ケイドロを知らないクリスがモロから説明を受けてる。その間、俺

は立ったままの状態で朝部屋で施してもらった体内の気の流れの調節ってやつを兄弟に再度やってもらう。

多少なりの改善があるものの、朝のような劇的な効果はない。兄弟が言うには俺自身の気が昂っている状態にある事や、気の鎮静化はやる気の鎮静化に繋がるため大した事は出来ないらしい。

それでも体が楽になったのは間違いから文句はない。ちょうどクリスの説明も終わったみたいだし、兄弟に勝負内容を発表してもらう。

「それじゃあ勝負内容を説明する。基本的なルールは変わらない。警察役が泥棒役を全員捕まえたら勝負ありだが、この勝負には変則的に泥棒側の勝ちもある」

なるほど、捕まえる警察側の一方的な勝ちではなく、時間切れ以外にも泥棒側の勝つ条件を作っているって事か。変則の意味はそこにあるのか。いや兄弟の事だ、他にもまだルールがあるに違いない。

「チームの人数だが、警察役は2人に泥棒役は3人」

「ちょっと待ってくれジン兄殿。それでは警察役の方が不利ではないか。人数は同等にするべきだと思うのだが」

クリスの意見に兄弟は首を振って否定する。

「いや、人数的な不利はない。何故なら警察は犯人を捕まえる必要がないからだ。その事に関してはこの後説明するから先にどっちがどちらの役をやるか決めてくれ」

さらりと流され納得のいかないクリスだったが、兄弟が不公平な勝負をするわけがないと信じているようで小さく頷くと俺の方に視線

を向けた。その視線の意図を察するに、自分が警察役をやりたいと言ったところだろう。だから人数の不利にツッコミを入れたってわけか。

俺はその視線に『どうぞ』とばかりに掌をクリスに見せて権利を譲った。

「自分が警察役をやる」

「つーわけで俺が泥棒役だな」

正義大好きのクリスが勝負のための役とはいえ泥棒を選ぶはずがない。分かりきった結果だったんだろう、兄弟だけじゃなく周りのみんなからも苦笑が漏れた。
その反応に少しだけ恥ずかしそうに顔を赤くするクリスだった。

「OK。それじゃあ変則ルールの説明だ。今回、勝負の鍵を握るのは『宝物』があるという事。まあただのサインボールなんだけどな。ポイントに設置したこの『宝物』の争奪。開始地点は泥棒役有利で始まるから警察役はこの『宝物』を泥棒役から奪い取れば勝ち。泥棒役はこの『宝物』を死守すれば勝ち」

「やはり不利ではないか」

不満げな声を出すクリスに兄弟は再度首を振って否定する。

「最後まで聞け。泥棒役は死守すれば勝ちだが、その『宝物』をリーダーであるヤマに渡さなければならない。そして受け取ったヤマはそれをゴールまで持ってこなければならない。泥棒役は死守と運搬をしなければならないが、警察役は奪うだけでいい。しかも『宝

物』は2つ。泥棒役は2つとも手にしなければならない。そして制限時間は30分。どうだ？　人数的な不利はこれでチャラになるはずだ」

なるほど、確かに不利はない。状況によっては泥棒側が不利になる可能性も十分にある。なにせ警察側は2つの『宝物』のうち1つを持っていればその時点で負けはなくなるんだからな。

俺に渡さなければならないが、俺の体調から考えると実質2対2のようなもの。奪えば勝ちのクリスの方が有利かもしれない。つまり頭を使わないと勝てない、クリスの裏をかかないとダメだって事か。

結構厳しいルールじゃないか兄弟。だが面白い。やってやるよ。

「開始地点だが、警察役が山頂の展望台。泥棒役はふもとから少し進んだ所。『宝物』設置ポイントは中腹。ゴールはこの河原。勝負内容に質問はないか？　なければ互いのメンバー選びに行くぞ」

俺とクリスはお互いに目配せをした後、兄弟の方を向いて無言で頷く。それを見た兄弟も頷いて言葉を続ける。

「キャップはゴール地点で待機、俺とモモは勝負中の審判、ガクとタクにはポイントで『宝物』の受け渡し。だからメンバーは残りの4人。カズ、ミヤ、ヒロ、まゆっちの中から選んでくれ。ちなみに残った1人はキャップと一緒にゴールで待機な」

選んでくれって……公平じゃなくていいのかよ。こういう時はコイントスとかして選ぶのが普通だと思うんだが……

「大和、お前から選べ。自分は後で構わない」

そんな事を考えていたらクリスから声が掛けられた。意外なその言葉に真意が何か分からず訝しげに見るものの、クリスには特に意図はない様子。体調を鑑みての憐みかと思ったがそうでもない。

よほど勝つ自信があるという事なんだろう。ならば選らばせてもらう。

「ワン子と京。よろしく頼む」

「うん！　頑張ろうね大和。アタシも全力で行くわ」

「承知。大和のためなら例え火の中水の中布団の中」

ワン子、いい返事だ。京、最後の言葉はいらん。だがこの2人ならチームワークにも期待できる。俺との相性も勝負するという事に関してはかなりいい。あくまでも勝負関する相性だからな。もし警察役だったらヒロを選ぶんだけど……

「では自分のパートナーはタカに頼もう」

「わかった。よろしくねクリスさん」

どうやらクリスは俺と同じ考えだったらしい。４人の性能を考えれば、パートナーが１人しかいない警察役はヒロが最適だ。

あぶれた形になったまゆっちは兄弟や姉さんが言うには凄いらしいけど、未知数だしな。どこまで期待できるかが読めない以上、多少実力は劣るかもしれないがチームワークが期待でき、付き合いの長いワン子と京の方が作戦を立て易い。

「やめるなら今のうちだぞ」

クリスが聞いてくるがそんなもん答えは決まっている。

「誰がやめるか。俺にも意地と誇りがあるんだよ」

「誇り」

「本気で勝ちに行く時は常に勝ち続ける。持てるものを駆使して最小限で最大限の結果を求める。それが俺の意地で誇りだ」

自分の胸に拳を当て言い放つ。誰になにを言われようがこれが俺の信念だ。

俺には兄弟や姉さんみたいな圧倒的なものなんてない。キャップのようなカリスマや運もない。ワン子や京、ヒロのように武術も習っていない。ガクトのような力も、モロのような機械系の深い知識もない。

持っているのは小賢しい知恵と浅く広い他人との繋がりだけ。

クリスの言うように小手先なのは認める。だけどそれは必死になって手に入れたモノだ。それが劣るなんて思われたくない。それは俺自身を否定される事。

だからお前に勝って俺の誇りを証明してやる。

「クリス。これで決着だ」

胸に当てていた拳をクリスに向かって突き出す。

「受けて立つ！」

意図を察したクリスは俺の拳に自分の拳を合わせた。

「よぅし！　それじゃあ準備にかかるぞ。開始の合図は携帯で連絡する。ちゃんと準備しておけよ」

そんな俺たちを見て笑っていた姉さんの掛け声に、警察役のクリスとヒロ、設置ポイントに立つガクトとモロ、そして審判役の姉さんも山道へと歩みを進めた。

その後ろ姿を眺めながら俺は考える。泥棒側の俺たちが勝つには作戦がモノを言う。状況に応じて３つ４つ作戦を練らなければいけないな。場合によっては俺が動く作戦も必要だ。

されそれじゃあ、クリスに俺の誇りを認めさせるための体を張った作戦を立てますか。

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

ｓｉｄｅ　篁緋鷺刀

山頂へと向かう道すがら、僕とクリスさんは作戦を考えていた。

「制限時間３０分か……少し厳しいかもしれないな」

「そうだね。いち早くポイントに着きたいところだけど……やっぱ

り距離的には大和君たちの方が有利だね」

お互いに地図を覗き込みながら意見を出し合う。

勝負のためにもらった地図には、それぞれの開始場所と設置ポイントの場所にチェックが記されている。

『宝物』がある設置ポイントは山頂の展望台に行くための2つの道の中腹。正規ルートの道に1つとそれとは違う遠回りの道にもう1つ。両方行くか、それとも片方に絞るか、それだけでもかなり勝敗の行方は変わってくる。

「タカは大和がどう考えるか読めるか？」

「ごめん、全く分からない。こう来るんじゃないかっていう予想は何となく立てられるけど、その予想の斜め上を行くからね、大和君は」

言外に考えるだけ無駄という意味を持たせて意見を返す。恐らくクリスさんも分かっているはず。たぶん確認のために僕に聞いてきたんだろう、その証拠に僕の言葉を特に咎めるような事はしなかった。

「なら自分たちは自分たちで作戦を考えるべきだな」

「そうだね。それが無難かな。気にし過ぎてたらそれこそ大和君の思惑通りなりそうだし……」

こう考え込んでいる事態、既に大和君はお見通しだろう。僕たちじゃあ大和君の裏をかく事なんて無理に決まっている。ならば正攻法で行くのが1番だ。

「近い方のルートに2人で全力で向かおう。自分たちはどちらか1つ『宝物』を持っていればまず負けないのだからな。運が良ければ先に『宝物』を取れるかもしれない」

「うん妥当だね。あとはその場所に一子ちゃんと京ちゃん、どっちが来るかだけど……それはその時になってからだね」

「その通りだ……手を抜くなよタカ？」

その言葉はちょっと心外かな。確かに僕は年下だし遠慮することもあるけど、これでもみんなとの付き合いはクリスさんより遥かに長いんだ。それに、勝負事で遠慮する事だけは絶対にしないよ。

「大丈夫だよ。勝負に関してだけは譲るつもりはないから」

僕の答えに満足そうにうなずいたクリスさんは、自信に満ちた笑みを浮かべて山頂へと続く道を駆け上がっていった。

その後ろ姿と見つめながら僕は考える。

大和君の作戦が読めないからこそ正攻法で行かざるを得ないけど、相手は一子ちゃんと京ちゃん。その2人が大和君の作戦を実行する。一筋縄どころじゃないね。

懸念事項がなくなったわけじゃないが、やっぱり考えるだけ無駄かな。

どんな勝負になるか分かんないけど、やるからには負けるつもりはないけどね。

第８０話　箱根旅行、意地と誇りと最終試合（後書き）

あとがき～！

「第８０話終了。あとがき座談会、司会の春夏秋冬　廻です。今回のお相手は――」

「再度引き続き、暁神です」

「３回連続だね。そういえば３回連続で同じ人なのは初めてじゃないか？」

「そうなのか？　８０話もやってて今までなかったのって不思議だな」

「そうだね。まあそれはいいとして、さて今回のお話ですが、やっとのことの最終試合。しかも完全オリジナル競技となりました」

「その割には競技説明だけで半分以上使ってるな」

「アウチ！　痛いところ突かれちまったぜ！」

「松風の真似なんかやめろ。全然似てないし気持ち悪いからな」

「はいすみません。でも本当にごめんなさい。展開遅いのは分かってんですけど一応ルールはきちんと説明をしておかないといけないと思いまして……」

「それはそうなんだけどな。まあ今回はいいとしておこう。それで

？　次こそ決着か？」

「……どうなろうな。1話で収まれば決着。収まらなければ2話で決着だね」

「何なんだお前のその計画性のなさは。ちゃんと見通しをつけろよ」

「前からの事だからどうしようもないよ。あはははは」

「笑い事じゃねぇだろ。というか読者を満足させる事が出来る勝負にできるんだろうな？」

「あはははは……出来ればいいなぁ……」

「自信ないのかお前……こんな奴の書いたものですけど、次投稿もよろしくお願いします」

さて、以前アンケートを取りましたオリキャラの名前。
待っていてもこれ以上入りそうにないので、今回で発表したいと思います。
では結果発表。オリキャラの名前は――

逢逆　刻（おうさか　とき）

に決まりました。
投票して下さった読者の方、本当にありがとうございました。
今回決まりましたオリキャラが出てくるのはまだ先なため、皆さん

が忘れた頃に登場するかもしれませんが、どうぞこれからもよろしくお願いします。

第８１話　箱根旅行、変則ケイドロレース（前書き）

第８１話投稿。

第８１話　箱根旅行、変則ケイドロレース

ｓｉｄｅ　直江大和

『聞こえるかー！　ジーン！』

兄弟の持つスピーカーフォンにした携帯から姉さんの声が聞こえる。
姉さんから連絡が来たという事は、どうやらクリスたちも開始位置に着いたようだ。

「おう、こっちも準備は整った。いつでもいいぞ」

作戦を伝え終えた俺たちを見て兄弟が電話の向こうの姉さんに準備ＯＫの言葉を掛ける。
屈伸をしたりして軽く準備運動をしているワン子と京の横で、眼を閉じて始まりの合図を待っている俺に携帯越しの姉さんの声が届く。

『大和ー！　試合の進行は私とジンが責任を持って監視してるからな！　ヤバいようなら強制的に止めるぞ！』

「了解だとよ。分かってるよなヤマ？」

熱で大きな声を出せないから頷く。それを見た兄弟が代弁して姉さんに伝えてくれた。
言葉ではああ言っている姉さんと兄弟だけど、たぶん本当にヤバくなるギリギリまで俺のしたいようにさせてくれるはず。だったらその思いに応えなきゃいけないな。

『よし！　では最終戦！　始めっ！』

「そりゃあぁぁぁぁ！」

「行ってくるね！　大和！」

姉さんの開始の号と同時に、ワン子と京はそれぞれの道を設置ポイントへと駆け上がっていった。

俺たちが勝つためには本来なら全員で正規ルートの方の設置ポイントに行き、『宝物』を取ったらそのままもう片方の設置ポイントに行くのが正攻法。
こっちの方が人数が多いのだから例え接触したとしても1人で逃げる事が出来る。

だけど今の俺の状態を考えると集団で行動した場合、足手まといなる算段の方が高い。俺たちが勝つには俺が2つの『宝物』を持ってゴールをしなければならないのだから。

とにかく、序盤はワン子がどれだけ早く設置ポイントに着くかにかかっている。頼むぞワン子。

俺は先を行く背を眺めながら、出来るだけ速く道を駆け上がれるように足を進めた。

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

ｓｉｄｅ　クリスティアーネ・フリードリヒ

「よし！　では最終戦！　始めっ！」

モモ先輩がふもとにいる大和たちに聞こえるように携帯を片手に持って開始の号を上げた。

「打ち合わせ通り行くぞタカ！」

「はい！」

それと同時に今登ってきた道を全力で駆け下りる。設置ポイントが近い正規ルートの方を行く正攻法。結局自分たちが勝つにはこの方法が１番正しい。

問題は犬と京、どちら近い方の設置ポイントに来るのかなのだが、タカの言う通り、恐らく自分では大和の作戦を見抜く事は出来ない。

先にクジを引くのを決めた時のじゃんけん。第１試合の勝つために潔く勝負を捨てる作戦。第２試合の深い知識。第３試合はいいとして。第４試合も体調が悪くなければ自分が負けていたかもしれないほどの記憶力。

そして最終試合であるこの『変則ケイドロレース』のルールを聞いている時のあの真剣な表情。

認めよう。

大和の戦い方は確かに常に勝つ事を考えたものであり、誇りあるものだ。常時のせこさはまだ納得できないが、あのような考えを持つ者がいる事は認めよう。

だが、認めたからといって勝ちを諦めたわけじゃない。私に自分が真に強い男だと認めさせたいのなら、なにがなんでもこの勝負を勝ってみせろ、直江大和！

「クリスさん！」

「なんだ！？」

坂道を全速力で走りながら声を掛けてきたタカに言葉を返す。この状況で声を掛けてきたということは、恐らく今向かっている設置ポイントに来る相手の事だろう。

案の定、自分の考えは正解した。

「恐らくこのルートの設置ポイントに来るのは京ちゃんで間違いない」

「その根拠は？」

「走りながら林を見ていたけど、所々ショートカット出来そうな獣道があるんだ。たぶん一子ちゃんは朝の鍛錬で森の中を駆け回っているだろうから……」

「なるほど、まず遠くの設置ポイントに犬と大和が向かって『宝物』を取ったら、犬の案内でショートカットでこっちに来るという事か！」

考えたようだがその作戦、少し穴があるぞ大和。せっかく犬がショートカットの道を知っているのだから、まず正規ルートの設置ポイントに全員で行き、その後で遠い方の設置ポイントに犬の案内でショートカットして行く。

自分ならそういった作戦を立てる。その方が戦力を分散させる事もなく安全で1番確かな作戦だ。どうやら熱のせいでまともな思考が

出来なかったようだな。

体調不良には同情するが悪いな大和、これで自分たちの勝ちが確定したようなものだ。そうと分かればその勝ちをより確実にするために急がなければ！

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

ｓｉｄｅ　暁神

お。どうやら正規ルートの設置ポイントに最初に着いたのはミヤのようだが、すぐそこまでクリスとヒロが来ているな。恐らくミヤもそれが分かっているだろう。

どうやらクリスたちは正攻法できたようだ。

警察側はどちらか片方の『宝物』さえ確保できればまず負ける事はないからな。多少位置的に不利でも近い方に2人で一緒になっていった方が圧倒的に有利に立てる。

本来なら泥棒側も一緒になって正規ルートの設置ポイントに行くのが正攻法だが、今のヤマの体調を考えればその作戦は取れないだろう。

だからこそ順当な作戦である両方の設置ポイントに向かう作戦を取ったようだが、あのヤマの事だ、順当な作戦なわけないな。きっと何かしらのクリスたちの裏を取るだろう。

っと、カズの方が設置ポイントに到達するにはもう少し時間がかかるようだが……ヤマのペースが遅い。体調の悪さが相当影響しているようだ。

俺は携帯を取り出しモモに連絡を取る。

『なんだ、ジン？』

「ヤマの様子を見てきてくれ。体調悪いにしても少しペースが遅い。止めるまではしなくていいが、１度続けるかどうかの意思確認だけしてくれ」

『分かった』

通話が切れたと同時にモモの気配が動いた。ってオイ。ルート無視でヤマのいる位置まで一直線かよ。

でもまあ、意思確認をしろと言ったがヤマがやめる事はないのは分かっている。だがある意味で最後通牒を渡しておこう。

ヤマとクリスのお互いの誇りのために必要な勝負なのは間違いないが、まゆっちが言ったように体調が悪いのを無理に押してまで戦う事でもないのも確かだ。本当にヤバくなったらヤマの意思なんか関係なく強制的に止める。

お。どうやらミヤとクリスたちが接触したようだ。

『宝物』を受け取ってからミヤが動かなかったのが少し気になるところだが。さて、いったい何人が俺が言ったルール説明の中に含まれていた隠し（アンダー）ルールに気付いたかな？

それを知ってる知らないでかなり状況が変わるが……楽しませてもらうかな。

side out

side 川神百代

駆けつけた時、大和は途中にある橋の欄干に背を預けていた。歩けないほどヤバい状態なのか？

「おい大和。大丈夫か？」

声を掛けたらビクリと体を震わせて顔を上げた。どうやら私が近付いていた事に気付かなかったみたいだ。マジでヤバい状態なのかと思って顔を見るが、顔色の悪さはそれほど変わっていない。

まあ、最初からかなり悪かったからそう変わるものじゃないけどな。

「どうしたの、姉さん？」

「どうしたの、じゃない。ジンからお前の様子を見てこいと言われたんだ。動けないほどヤバいのか？」

私の言葉にどうやら自分が止まっていたことが原因だと気付いたようだ。一瞬呆然としていたがすぐに苦笑を浮かべてきた。どうやらまだ少しは余裕がありそうだ。

「心配し過ぎだな兄弟も……俺がここで止まっているのはワン子を待ってるからだよ」

ワン子を待ってるだと？

確かのこの道の先にある設置ポイントに向かっているのはワン子だ。

だがそれが大和がここで待っていることにどう繋がるんだろうか。
向こうでは京とクリたちが既に接触している。
状況は大和たちの不利なはずだが、こいつのこの落ち着きよう……
全部作戦の内って事か。

私からすれば小賢しいことだが、体調の万全じゃない今の大和が取れるもっとも効率のいい作戦なんだろう。こいつは相手が自分の体調が悪いという事を知ってるからそれすら取り込んだ作戦を立てたに違いない。

ホント、普段は腑抜けなくせにやる時は徹底的だな。まあ、そこが気に入ってるから唯一の舎弟にしてんだけどな。

「もちろんまだ続けるつもりだよな、大和？」

「当然。兄弟に意思確認しろって言われた？　姉さん？」

全くこんな状態でもよく回る頭だ。根っからの軍師だなホントに。

「ああ、ジンもまだ止めなくていいって言ってたし本当に意思確認だけだ。だが、お前なら分かるだろ？」

「最後通牒的なものだろ？　分かってる。だけどまだやめるわけにはいかないんでね」

そんな事は言われなくても分かっているよ弟よ。お前が自分の意地と誇りを掛けている時は仲間の誰も言葉では止められない。それこそあのジンですらな。

と、どうやらワン子が設置ポイントに着いたようだな。ならもうすぐこの道を戻ってくるだろう。そろそろ審判として役割に戻らないとな。全体の気配はジンが探っているから大丈夫だが、所々では私がちゃんと見ていないといけないしな。

「じゃあ私は戻るからな」

「うん」

おっと、戻る前にこれだけは言っておかなければ。

「大和」

「なに？」

「審判としては公平だが、姉としては応援しているぞ」

大和は一瞬呆けたような表情を浮かべたが、すぐに笑みを浮かべると自信に満ちた声音で答えてきた。

「売った喧嘩だ。絶対に勝つよ」

ああ、それでこそ直江大和だ。

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

ｓｉｄｅ　川神一子

「到着！」

「うわぁ！　ビックリした！　どっから出てくるのさ！？」

林の中の道を通ってショートカット。設置ポイントに飛び出したらそこに待ち受けていたモロがビックリしてた。

あっちゃー、失敗失敗。驚かせるつもりはなかったんだけどね。エヘヘ。でも山は既にアタシの庭だし、こんな近道ぐらいなんてことないわ！

「いやぁ。でもワン子が来てくれて助かったよ。もしかしたらあっちの方にみんな行っちゃうかと思ってたから。ほらこっちてちょっとジメジメしてない？」

「あはは、こっちって少し暗いしね」

あははは、確かにモロの言う通りね。大和も体調が万全だったらみんなで向こう側の設置ポイントに行くって言ってたし。あれ？　でもモロがそう言うって事はクリとヒロは京が向かった方に行ったって事よね？

ええっとええっと、こういう時は何番目の作戦だったかしら。クリとヒロが2人一緒になって近い方のルートに行った場合は……確か作戦2と3ね！

で、ええっと……あ！　時間の確認ね！　腕時計腕時計！　開始から8分で着いたわね。という事は……ええっと、大和なんて言ってたかしら？

確か順調にいけば京が向こうの設置ポイントに着くのが……5分だったわよね。で、クリたちが到着するのが6分。で、アタシが１０分以内に設置ポイントに到着した場合は……

そうだ！　作戦３の方だわ！

「思い悩んでるところ悪いんだけどさ、『宝物』いらないのワン子？」

「わあぁぁ！　いるわ！　いるに決まってるじゃない！」

差し出されサインボールをひったくるように奪い取る。１番大切なこれを忘れたら大和になに言われるか分かったもんじゃないわ。それに大和の足を引っ張ったとなったら京が……

あわわわわ。怖い！　怖すぎるわ！　大和と京の同時のお仕置きなんて怖すぎて夜おトイレに行けなくなっちゃうわ！

「今度は恐怖に打ち震えてるのは別にいいんだけど、いいの？　いつまでもここにいて」

「うわぁぁあ！　そうだったわ！　早く行かなきゃ！　ってどっちの作戦か忘れちゃったじゃない！」

「なんでそこで僕に当たるのさ！　大和にお仕置きされる事を考えながら思い出せばいいじゃん！」

お仕置きなんて嫌よぉぉ！　っておお！　思い出したわ！　確か作戦３だったわね！　モロのせいで忘れたけどモロのお陰で思い出したから文句言えないじゃない！

あわわ！　そんな事考えてる場合じゃないわ！　早く大和の所に行かなきゃ！　えっと確かこの道の途中にある橋の所に大和は待って

るって言ってたわよね？　とりあえずそこまで速攻で戻ってすぐに京の所に行かなきゃ！

待ってなさいよ！　大和！　京！

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

ｓｉｄｅ　椎名京

お、来た来た。やっぱりクリスもタカもこっちのルートを選んだね。えっと時間は6分。私がここに到着してから1分後。大和の読み通り、ここまでは作戦2と3の通りだけど、ワン子はあとどれぐらいで向こうの設置ポイントに着くかな。

まあ、ワン子の足なら開始から１０分以内に着くでしょ。そう考えれば作戦は3の方だね。でも１０分か……１０分も2人を相手にしのがなきゃいけないのはちょっと厳しいね。クリス1人なら何とかなるけどタカも一緒となると……2人と武器を持っていないのが不幸中の幸いかな？

でもこれをしのげば大和に褒めてもらえる。ククク、恋する乙女は不可能を可能にする。ここで頑張ればきっと大和は私にメロメロになるはず。

美味しい！　実に美味しいねこの役！　負けた大和を慰めて絡め取るのも良かったけど、こっちの方法も悪くない。実に悪くない。

「ムッ！　やはり京か！」

「や」

私を見つけて足を止めたクリスに手を上げて答える。あんまり驚いていないところ見ると、私がこっちに来るのは予測済みって事だね。大和の作戦を呼んだのかな？　クリスの頭じゃ無理だね。

「やはりタカの言った通りか。犬と大和は向こうの設置ポイントから林の道を通ってこっちに来る算段だな？」

あれま、クリスじゃなくてタカが読んだんだ。まあ確かに私もここに来るまで林の中にいくつかの獣道を見つけたけど。ワン子、朝の鍛錬で山を走り回ったって言ってたしね。タカはそれを見抜いたってわけだ。

やっぱ侮れないねタカは。

「だが解せんな」

「ん？　なにが？」

なにかおかしい事でもあるかな？　クリスたちがそう考えてくれてるなら十分作戦は実行できるけど、まだ見抜かれていないからクリスが不思議に思うところなんてないと思うんだけど。

「『宝物』は持っているんだろ？」

「うん、そこにいるガクトからもうもらっているよ」

言いながらさっきもらったモモ先輩のサイン入りのボールを手に持

って見せる。あ、ちなみにガクトは少し離れた場所にいるけど、さっきから誰かと電話してるみたいだから私たちの会話には参加してない。

決してガクトの存在を無視していたわけじゃないからね。うん、本当だからね。

「では何故ここに留まっている？　早いところ大和たちと合流した方がいいのではないか？」

「ノーコメントで」

本当に正攻法の作戦はすぐに思いつくんだね。でもねクリス？　私の大和がそんな真っ正直な作戦を取るわけないでしょ。場合によっては相手の裏の裏の裏すら考えてるんだからクリスには大和の作戦は読み取れないよ。タカなら分かるでしょ？

「大和君の作戦なんだろうけど……さすがに分かんないね。逃げる事も隠れる事もしないなんて。何か意味があるの？　京ちゃん？」

「ノーコメントで」

タカはやっぱり分かってる。ダテに長い付き合いしてないもんね。でも完全に読めているわけじゃないみたいだから戸惑っている。

うん、いい感じ。じゃあそろそろ始めようかな。

私は持っていた『宝物』をパーカーのポケットに入れる。そして全身の筋肉をほぐす感じで数回その場で軽くジャンプ。そんな私の突然の行動を訝しげに見ていねクリスとタカは。

ああいう顔をするって事は、２人はジン兄の説明に含まれてた隠し（アンダー）ルールに気付いていないね。まあ私もワン子も大和に言われるまで気付かなかったから馬鹿にすることなんて出来ないんだけどね。

じゃあちょっとだけ驚いてもらうかな。

最後に１回だけ大きくジャンプしてそのまま屈伸。伸びあがる勢いを利用して地面を蹴り、クリスに向かって蹴りを放つ。

「なっ！？」

「っ！」

さすがタカ。反応いいね。恐らく考えてもいなかった不意の攻撃に身を固まらせたクリスを庇って私の蹴りを受け止めるなんて。でも掴まれたら厄介だからすぐに離れよう。

この中じゃ私が１番近接戦闘弱いしね。着かず離れずの攻撃じゃないと時間稼げない。

「いきなり何をする京！」

怒ってる怒ってる。うん、でも私は別にルール違反は犯してないからね。怒られるのは筋違いってもんだよクリス。

「岳人君。ジン兄はなんて言ってた？」

でもタカは何か気付いたね。私の蹴りを受け止めた腕を擦りながら何か考え込んできたと思ったら、急にこっちを見学してたガクトに

声を掛けた。しかもジン兄の名前まで出した。間違いなく気付いたね。

「相変わらずスゲーなお前も。京の1回の攻撃だけで気付くなんてよ。俺様、さっきジン兄に聞くまで全然気付かなかったぜ」

「そんな事はどうでもいい！　いったい何なんだ！？」

そんな事扱いはさすがに可哀想だよクリス。ほらガクトちょっと落ち込んじゃったじゃん。まあいつもの事だからすぐ復活してるけど。

「隠し（アンダー）ルールだとよ」

「隠し（アンダー）ルールだと！？」

「そういう事か」

ガクトの言葉をオウム返しに言うクリスと違って、やっぱりタカは気付いたみたい。

「どういう事だ、タカ！？」

「ジン兄は『宝物』の争奪と言った。泥棒側は“死守”して警察側は“奪取”すれば勝ち。でもその言葉の本当の意味は設置ポイントへの到着スピードの事じゃない。さっき京ちゃんがやったように、相手への攻撃も“有り”なんだ」

「だがそれは！」

「ジン兄は『相手を攻撃しちゃいけない』なんてことはひと言も言

ってない。種目に『レース』ってついているからって僕たちが勝手に勘違いしただけだよ」

その通り。

つまりこの『変則ケイドロレース』は速さも、戦略も、そしてチームの力も試される勝負。その全てを合わせた作戦を考えた方が勝ち。そういうルールなんだよクリス。

チームの力を全て合わせた作戦を考えさせたら大和の右に出るメンバーはファミリーにいない。

だからね、大和が負けるわけないって事。

第８１話　箱根旅行、変則ケイドロレース（後書き）

あとがき～！

第８１話終了。

勝負の途中ですので今回は座談会はなしで。

いやしかし、久し振りにいろんなキャラでの視点で行きましたが大変ですね。

位置をばらせけさせた自分のせいでもあるんですが、皆さん的にはどうですかね？

まあそれはそれとして、宣言通り、１話では終わりませんでした。

あははは。

でも次でたぶん終わります。たぶん。

今回のように視点変更を頻繁には行いませんのでそんなに長くなる事はないです。

あくまでもたぶんですけど……

見通し立ってなくて本当にもし訳ありません。

では次回でたぶん決着になると思いますので、よろしくお願いします。

第８２話　箱根旅行、決着の時（前書き）

第８２話投稿。

大和ＶＳクリス、決着。

第８２話　箱根旅行、決着の時

ｓｉｄｅ　クリスティアーネ・フリードリヒ

隠し（アンダー）ルール。

そんな話は聞いていない。いや話していないからこその隠し（アンダー）なのだろうが、だからと言ってすぐに納得できるものじゃない。

いや違う、認めろ。気付かなかった自分が悪いのだ。

大和が不正をしたわけでも、ジン兄殿が不公平な説明をしたわけでもない。ただ自分が言外に含まれた意味に気付けなかっただけだ。

タカが言っていたように、ジン兄殿は１度も『攻撃してはいけない』とは言っていない。ルール説明の時に言葉にしたのは『宝物』を“争奪”する事。泥棒役は“死守”して警察役は“奪取”する。

これだけを聞けば『宝物』をめぐって争うことは当たり前に考えられる。だが次に続いた『ゴール』と『制限時間３０分』と言う言葉と、競技の名前に『レース』がついているという事が、その考えを気付かせないための目隠し（ブラインド）になったのだ。

だが気付かせる要素はもう１つあった。それがメンバーを選ぶ時だ。

ジン兄殿は自分と大和の仲間に犬、京、タカ、まゆっちの４人から選べと言った。良く考えれば全員が武道をやっている。その４人の中からメンバーを選べと言う事は、言外に闘うかもしれないと言っているようなものだ。

そして大和はそれに気付き、自分は気付かなかった。

ただそれだけだ。

だが、だからといって自分が負けるとは思っていない。奪い合いに闘ってもいいと言うのならこちらが俄然有利だ。武器を持っていない状態でも自分なら京に勝てる。

そしてこちらにはタカがいるという事だ。タカは犬や京よりも強い。あの朝の登校の時に見た強さからの推測だが間違いないだろう。2対1という事もあるが、少なくとも今この現状で自分たちが負ける要素はどこにもない。

「なるほど。この場に留まったのは隠し(アンダー)ルールを最初から理解していたからか」

「そだね。気付いたの大和だったけど」

やはり大和か。つまり京がここに留まったのは作戦通りという事。それほど京の強さを信じているのか？　いやそれはないはずだ。付き合いの短い自分ですらタカと京、犬との力量差が見抜けているのに、幼馴染みの大和が理解していないはずがない。

今この勝負をしている5人の中で1番強いのはタカだ。それはなにがあろうとも変わることのない事実。ならば何故だ。何故大和は京をこの場所に留まらせた。

考えられるのは時間稼ぎぐらいだが……そうか。林をショートカット出来る犬が大和を連れてここに来るんだ。そうすれば人数的に3

対2になる。さらに犬は間違いなくもう片方の設置ポイントの『宝物』を手にしているはず。

その状態で京と合流し、2つの『宝物』を持って大和がゴールへと向かう。全員が一堂に会した場所から離れていけば、後ろから追い付かれる心配をする必要がない。それに大和が離れても状況は2対2。大和がゴールするまでの時間稼ぎ位なら犬と京なら出来る。

そういった作戦か！

「戦いの最中に考えごとはしない方がいいよ」

目の前にいた京の繰り出した拳をかわし、大きく間合いを取るため後ろに飛び退く。その空いた間合いを塞ぐようにタカが自分と京の間に立つ。だが京もタカとはまともに闘う気はないのか慎重に間合いを取りながら後ずさる。

「タカ！」

「邪魔をするなっていうのはナシでお願いねクリスさん。勝つためにはまず、京ちゃんの持ってる『宝物』を奪わないといけないんだよ」

そんな事は分かっている。だが自分たちが勝つことのできる条件はもう1つあるはずだ。

「制限時間（タイムリミットオーバー）30分経過は期待しない方がいいよ。ジン兄は制限時間がきた場合、どっちが勝ちかなんて言ってない」

今、京はなんと言った？

自分の前に立つタカも同じように呆然としているのが雰囲気で分かる。そんなタカが意外だったんだろう、京は少しだけ驚いたような声を上げた。

「あれま。さすがのタカでもそこまでは気付いていなかったんだ」

待て、それはいったいどういう意味だ？　いや、問いただす前に思い出せ。ジン兄殿はルール説明の時に何と言った？

確か泥棒役の勝利条件と警察役の勝利条件。その後に制限時間が３０分と説明して……

そうだ！　確かに制限時間終了（タイムアウト）した後の勝者はどちらなのか明確に提言しなかった！

だが待て！　では何故制限時間を決めたのだ！　経過しても勝者がないのなら制限時間を設定した意味がないではないか！

いったいどういうルールになっているんだこの勝負は！？

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

ｓｉｄｅ　直江大和

そろそろ京がクリスに隠し（アンダー）ルールの事を話して、さらに制限時間の事もバラしている頃だろうな。

自分が考えた作戦とはいえ、絶不調の体調で林の中の獣道を１人で

走るのかなりキツイ。いや体調が悪くなくても俺には十分にキツイんだけどね。

ワン子から受け取った『宝物』の兄弟のサインが書かれたボールを眺めながら、この『変則ケイドロレース』のルールを思い返す。

この勝負、確かに『宝物』の争奪が鍵になる。人数や開始地点の関係上、泥棒役である俺たちが確かに有利に見えるが、ルール上は圧倒的に警察役が有利だ。なにしろ警察役はどちらかの『宝物』を奪えば勝ちなんだからな。

だが『宝物』が2つあり、遠回りのルートの方にも設置ポイントがあるという事が、実は泥棒役に有利に働く。それが何故かというと、警察役の行動を予測し易くしているからだ。

どちらか一方を確保すればいい警察役にしてみれば、どちらの道を選ぶかは明白。泥棒役の方が開始位置が近いのだからわざわざ遠回りのルートの方に行くメリットは何もない。十中八九、近い方の正規ルートに行くのが予測できる。

ルートごとの設置ポイントに向かう順当な作戦を取れば、正規ルートの方は2対1の状況になりうるが開始位置が泥棒役の方が近い場所にあるから、先に辿り着け『宝物』を確保する事ができる。それに遠回りルートの方は警察役が来ないのだから当たり前に確保できる。

そこまでくると状況上有利な泥棒役と、ルール上有利な警察役が五分五分の状態になるんだ。

そしてこの状態になるからこそ、隠し（アンダー）ルールを理解しなければなら

ないんだ。

『争奪』『死守』『奪取』の意味。そしてメンバーを選ぶ際の４人が全員武道を習っているという事実。『レース』と『制限時間』の言葉に惑わされずに気付かなければならない隠し（アンダー）ルール。

『相手への攻撃も有り』というルールに気付けば作戦はガラリと変わる。この勝負は『速さ』だけが求められるんじゃない。全てにおいてチームとコンビの『総合力』が問われるという事だ。

しかしまあ良く考えたものだな兄弟も。俺でもきちんと全てを把握するのに数分はかかったぞ。

それから制限時間の事。悪いがクリスたちには混乱してもう事にした。京の事だ、遠回しに誤解させるような説明をするに違いない。

だけど兄弟も人が悪い。意図的に制限時間が過ぎた場合の勝者の事を口にしなかったな。普通に考えれば警察役の勝利だと分かるはずだが、言葉にしなかった隠し（アンダー）ルールのせいで意味があるように思えてしまう。

あの制限時間の設定は勝負を長引かせないためのもので、『攻撃も有り』という隠し（アンダー）ルールを気付かせるためのものだ。時間無制限だったらただ普通のケイドロになるからな。手っ取り早く終わらさせるためでもあるんだろう。

ルール説明時に読解力も求めるのはかなり厳しいだろ。

そしてもう１つ。俺の体調を慮（おもんばか）っての設定だ。本当にさり気ない気の回し方が上手いよな兄弟は。

と、もうそろそろ例のあの場所に着くな。時間的にもワン子も京たちのいる正規ルートの設置ポイントに着いた頃だろう。

合流後は状況を維持しつつ後退する作戦を間違いなく実行しているだろうが、俺の方があそこまで5分で着けるか？　それ以前にまたあそこから飛び降りなきゃいけないのは体調的には物凄くキツイ。

たぶん俺の作戦は兄弟と姉さんには動きでばれていると思うけど、俺の意思を尊重してくれているから止める事はないだろう。

「げほ、ごほ」

正直、かなりヤバくなってきた。走り続けることで体調は刻一刻と悪化の一途をたどってるな。止まるともう走れなくなりそうだ。

「着いた……」

息を切らしながら足を止める。眼下には川。この場所は昨夜、ガクトの甘言に惑わされて覗きに行った時、逃げるために凛奈さんに突き落とされた場所だ。

ここから川に飛び込んで進めば、正規ルートの橋と交差してゴールへの最短最速のショートカットになる。そう、飛び込めば。

暗かったから分からなかったが、日中に改めて見ると思ってた以上に高いぞ。いくら下が川だったとはいえよく風邪だけで済んだよな俺も。ガクトに至っては風邪すらひいてないっていうのに。

たぶん凛奈さんは怪我をしなように突き落としたはず。そして今の

俺は風邪をひいて熱も出て体調は最悪。下手すりゃ怪我じゃ済まないかもしれない。

だが飛び込まないという選択肢は持ち合わせてはいない。本気で勝ちに行く時は常に勝ち続ける。それが俺の意地だ。

「行くぜ！」

奮い立たせるように声を上げ地面を蹴る。

今の俺の気力を支えているのはその意地と誇りだけなんだよ！

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

ｓｉｄｅ　クリスティアーネ・フリードリヒ

ああもう！　何がなんだか分からなくなってきた！　結局自分たちが勝つにはどうすればいいのか全く分からないではないか！

京の言葉が正しいと言うのなら勝負のルール上、警察役が勝つ事など不可能だ。だがあのジン兄殿がそんなルールを作るわけがない。説明を受けたルールは間違いなくどちらにも有利不利になるものだが、警察役に勝利条件がないとなると勝負自体が成立しなくなる。

大和の体調を考慮しての勝負かと思ったが、勝負のクジを作ったのは昨日の夕食前だと聞いた。大和が風邪をひいたと分かったのは今朝になってからだ。それに大和が確実にあのクジを引くなんてことは予想できない。

ルール説明時に咄嗟に変更したとも考えられるが、それはジン兄殿やモモ先輩、キャップに対して失礼だ。勝負は公平にすると宣言していたではないか。

ならばやはり制限時間に対しても隠し（アンダー）ルールがあるのか？　自分たちはそれにまだ気付いていないだけか？　もしあるとすればそれいったいどのようなものだ？

「だから戦いの最中の考えごとはしない方がいいよって言ったでしょ？」

「くっ」

またしても目の前にいた京。放たれた蹴りを何とか身を捻ってかわし再度大きく間合いを取る。追撃を掛けようとしていた京だったが、横からのタカの攻撃に慌てて飛び退く。

さっきから自分を標的に狙い、タカの攻撃に対しては過剰なほど間合いを空けてよける。やはり闘えば不利だという事を理解しているようだ。

つまり、自分たちが積極的に2対1の状態に持っていけば、間違いなく京の持っている『宝物』を奪う事が出来る。

だがこの正々堂々の勝負を2対1にする卑怯な事は自分には出来ない。それ以前にもし『宝物』を奪えたとして自分たちの勝ちが確定しない以上、無意味ではないだろうか？

「クリスさん！　戦いに集中して！　さっきの言葉は京ちゃんの誤（ミ）認誘導（スリード）だよ！　考えれば考えるほど混乱する！」

なに？　誤認誘導（ミスリード）だと？

「制限時間の設定に深い意味はない！　ジン兄は口にしなかったけど、時間が経過すれば僕たちの勝ちなのは間違いないよ！　３０分なのも大和君の体調を考えての時間なだけ！」

「あれま、バレちゃった」

考えてみれば確かにタカの言う通りだが、悪びれない京に怒りが込み上げる。。

「嘘をついたのか！　京！」

「嘘はついてない」

「なに！？」

「さっきタカも言ってたじゃん。ジン兄は時間経過した時の勝者を言っていない。私は事実そのままに言葉にしただけ」

聞きようによっては屁理屈にしか聞こえないが、確かに京の言う通りだ。どんな意図があったかは分からないがジン兄殿が言葉にしなかったのは事実で、京はその言葉通りに言っただけ。

この場合、どちらに対して自分は怒ればいいんだ。誤認誘導（ミスリード）を差し向けた京か？　それともそのように捉える事の出来る説明をしたジン兄殿にか？

いや違うな。読み切れなかった自分が１番悪いのだ。この勝負が『総合力』を求めている以上、ルール説明の時に正しく理解する読解

力が求められていたという事なのだろう。

大和は勝負開始時点でそれに気付いていた。そしてれも含めての作戦を立てた。そして今、京が不利な状況にもかかわらず自分たちと闘いこの場所に留まり続けている。

そこから導き出される答えは1つ！

「やはり犬が来るための時間稼ぎか！」

「その通りよクリ！」

言葉と共に林から飛び出してきた犬が、タカに向かって勢いそのままに飛び蹴りを放つ。気配を察知していたであろうタカは腕を上げてその蹴りを受け止める。

だが犬は器用にもタカの腕を踏み台にすると、弧を描いて京の隣に着地した。

「来たわよ！　京！」

「ちょっと遅いワン子」

宣言した犬に苦言を呈しているが、顔が笑っているぞ京。後は大和が来るだけだろうが、一向にその気配が感じられない。これはどういう事だ？

「おい犬。大和はどこだ」

「作戦なんだから言うわけないでしょ。バッカじゃないのクリ」

「なんだと!?」

言うにことかいて馬鹿だと!?　お前には言われたくないぞ犬!
っと、いかんいかん。冷静になれ。下手な挑発に乗るのは得策じゃない。

犬の言う通り、大和が来なかったのはきっと何かしら作戦なんだろう。恐らく犬が受け取った『宝物』は大和が持っている。だが京が受け取った『宝物』はまだパーカーのポケットに入れたままのはず。大和が勝つには2つの『宝物』をゴールまで運ばなければいけない。

必ずどこかで受け渡しがあるはずだが……俄然、状況は自分たちに有利だ。2対2になったことで遠慮なく闘わせてもらう。それに自分とタカ。犬と京。戦力は明らかに自分たちの方が上だ。

どんな作戦を考えたかは分からないが、お前のその作戦、正面から打ち破らせてもらうぞ、大和!

「京、あと何分?」

「3分。制限時間(タイムアウト)終了まで8分。大和の体調を考えるとギリギリ」

「それじゃあ、さっさと実行するわよ!」

「言われなくても!」

何やら相談をしていたかと思ったらいきなりきびすを返し坂道を下っていく犬と京。ってちょっと待て!　自分たちと闘うための相談

をしていたのではないのか！？

「クリスさん！」

「分かっている！　追うぞ！」

いきなりの行動に呆気にとられたがすぐさま追いかける。自分は闘う気満々だったのに何か気分を削がれた感じだがまだ勝負は続いている。

不意を突かれてかなり差が開いていたが、犬が京に合わせているのか徐々に距離は詰まってきた。だがこれも解せない。走力なら犬の方が速いのだから『宝物』を犬に渡せばいいのに未だに京が持ち続けている。

いったお前はどういう作戦を立てたんだ、大和。

もうすぐ橋。だがその前で追い付く。そう思った時だった。

「【蛇屠り（へびほふり）】！」

いきなり立ち止まった犬がしゃがみ、追い付いた自分たちの足を刈るような蹴りを放ってきた。急な攻撃にもなんとか立ち止まり脚に負担がかかったが飛び退いてかわす。

その間に京は橋の中央に着き、パーカーのポケットから『宝物』を取り出したかと思ったら、何を思ったのか川下に向かって思いっきり投げ飛ばした。

いったい何を！？

そう思い先ほどの1回だけで攻撃をしてこなくなった犬を追い越して橋に辿り着く。そして橋から川を覗き見た時、大和の作戦を全て理解した。

「しまった！」

自分の視線の先に、川下を走ってく大和の背中があった。

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

ｓｉｄｅ　直江大和

ドンピシャ！　さすが京！　ナイスコントロールだ！

飛んできたボールをキャッチ。あとはゴールに向かって全速力で走るだけだ。きびすを返した時にチラリとクリスの姿が見えたが、あそこから全速力で追いかけてきたとしても、ギリギリ俺の方が先にゴールに着く。

ワン子と京にはこの後はクリスたちの邪魔をするなと言ってあるから、間違いなく追いかけて来るだろう。あとは俺とクリスの純粋な速さの勝負だ。

「げほっ、ごほっ」

川に入ったせいでさらにさらに体調はヤバい。今止まったら間違いなく歩くことすらできなくなる。だから走り続ける。

「ハァ、ハァ、負けるわけにいかないんだよ！」

俺をどこか侮って見下しているクリス。その考えを粉砕したかった。もはや誇りなんてどうでもいい。もう意地だけだ。

汗だくになって、水浸しになって、ふらつく足を鞭打って走る。こんな姿、本来の俺のキャラとはかけ離れている。誰にも見られなくて良かった。ってかなんで俺はこんな時までつまらない見栄を張ってんだよ。

「くっ」

くだらない事を考えたせいか一瞬だけ視界が暗転した。だがここで気を失うわけにはいかない。気合を入れろ！

「揺るぎない意志を糧として闇の旅を進んでいく！」

好きな言葉を口にして意識を繋ぎとめる。

走れ！　ゴールまではもう少しだ！

体に言い聞かせて顔を上げる。ゴール地点でキャップが手を振っている。その向こう、山道の方から疾走するクリスの姿が視界に入った。

最後まで勝ちを諦めないのはさすがだ。俺に追い付けば『宝物』を奪うなんて簡単だもんな。

だが！　ほんの少し遅かったな！

「俺の、勝ちだぁぁぁ！！」

最後の力を振り絞って地面を蹴る！　受け止めてくれよキャップ！

「えぇぇぇ！？　飛び込んでくんのかよ！？」

「よけるなよキャップ！」

何か喚くキャップに兄弟が注意しているが、今の俺には言葉なんか全く聞こえていない。１秒でも早くゴールする事が何よりも先決だ！

勢いのまま俺はキャップに突っ込んだ。

「どわぁぁ！　ビチョビチョだぁぁ！」

「勝者！　直江大和！」

息を切らし、キャップにもたれかかる俺の耳に、兄弟の上げた勝者の名乗りだけはしっかりと届いたのだった。

第８２話　箱根旅行、決着の時（後書き）

あとがき～！

「第８２話終了。あとがき座談会、司会の春夏秋冬　廻です。今回のお相手は――」

「う～い。直江大和です」

「体調悪いのに呼んで悪いね」

「いやいや別にかまわないよ～」

「クリスに勝てて少し機嫌がいいね。さて今回のお話ですが、読んでの通り最終勝負の決着となりました」

「なんか、勝負状況の描写というより、俺とクリスのルールに対する考え方の話になってるぞ」

「あははは、否定はしない」

「否定しろよ……なんでこうなった？」

「実は状況の描写にしたら今回、文字数半分にも満たなかった」

「半分にもって……なんで？」

「考えてみろ。京とクリス、緋鷺刀は牽制程度の軽い争いをしているだけ。君と一子はただひたすら走ってる。一子は合流してもすぐ

走って逃げて、最後は君が京からボールを受け取ってゴールする。これを文章にすると３０００文字ぐらいで終わる」

「それで１話書けるぐらいになれよ……まあそれは置いといて、ところで今回の俺の行動、原作とほとんど変わらないじゃないか」

「うん、君の行動と最後の結果だけは原作と同じにしようと考えてた。それに原作で京とクリスが取った作戦を織り交ぜて、今回君が考えた作戦という事にした」

「勝負内容が変わったなら俺の行動も変えろよ……」

「クリスに認めさせるには体調の悪さも鑑みずに行動する方が説得力が出るでしょ？　だから原作通りの行動にした」

「納得できるけど納得したくない」

「あはは、君にしてみればそうだろうね」

「笑い事かよ……まあいい。それで次回は？」

「箱根旅行の最終話かな？　書きたい事が多くなれば２話に増えるかも」

「相変わらず計画性ないな」

「あはは、そうだね」

「朗らかに肯定するなよ……」

第８３話　箱根旅行、勝負が終わって（前書き）

第８３話投稿。

第８３話　箱根旅行、勝負が終わって

ｓｉｄｅ　暁神

「なるほど……そういう作戦だったのか」

ぶっ倒れているヤマの代わりにミヤがクリスに自分たちの作戦の全容を話していた。クリスも納得したようだけど、なんで俺は睨まれているんだろうか？

「どうしたクリス？」

「ルール説明。少し底意地が悪いではないか、ジン兄殿」

どうやら根に持たれてしまったようだ。

確かに意図的に説明しなかった場所が多々あった。読解力に期待して言わなかったが、クリスはミヤに言われるまで全く気付かなかったらしい。

「それは悪かったよ。読み取ってもらうのも勝負に含めたからな。底意地が悪かったのは認める。だが……」

「分かっている。負けたのは他でもない、自分自身が原因だ」

そこまでかしこまる必要はないんだがクリスは意外と重く捉えたようだ。ヤマに負けた事か、それともルールを読み切れなかった事か、どちらかは分からないが少なからず思う事はあったようだな。

「少しは、ゼイ、ハァ、俺の実力が分かったか」

見栄張ってるなヤマ。キツイなら早く休めばいいのに何としても認めさせる言葉は自分の耳で聞きたいって事か。まあそのために頑張ってきたんだから仕方ないか。

さて、クリスはどういう反応を返すかな。

「ああ。そうだな、許せ。お前は強い男だ。自分自身が未熟。またそれを思い知らされた」

「分かればいいんだ！　分かれば！」

言うだけ言って気を失ったな。まあヤマとしては聞きたい言葉は聞けたんだから満足だろう。ところでおいミヤ、熱を計るつもりなんだろうが股間に手を置く必要はどこにもないぞ。ヤバい行為に移る前に止めろよタク、ヒロ。

しかし、クリスは意外とあっさりヤマを認めたな。自分が感じたり見たりした事は素直に受け入れるって事か。素直なのはいいけど、これからヤマやミヤにいろんな嘘を吹き込まれたイジられるんだろうなきっと。

だが、ヤマが気絶したなら好都合。少しクリスに言い聞かせておくか。

「クリス」

「なんだ、ジン兄殿」

「戦いにおいて作戦は重要だ。それは理解しているだろ？　そして

この勝負でヤマが勝つために作戦を考える人間だという事も理解したはずだ」

「はい」

俺の雰囲気を感じ取ったのか、クリスは居住まいを正し口調も丁寧にし真正面に向き直った。周りのみんなも俺たちの雰囲気を察して黙って見ている。

「だが、まだ普段の時も策に頼るのは認めていない、納得していないはずだ。違うか？」

「それは……」

押し黙り視線を逸らすクリス。素直なのはいいが少しは腹芸やポーカーフェイスを覚えた方がいいな。すぐに感情や考えている事がバレるようじゃ駄目だぞ。今は関係ないからそこには触れないけどな。

「じゃあ1つ聞く。例えばタクのような体格の人間がガクのような体格の人間3人に取り囲まれて暴力と受けていたとしよう。クリス、お前ならどうする」

まあ、答えは分かり切っているんだけど一応聞いてこう。そこから考えの違いを指摘してやった方が分かり易いだろう。
しかし自分で言っておいてんだが……ガクが3人。想像したくないな。

「ガクトが3人、気色悪いわ！」

「てかただの喝上げ現場でしょ」

カズにミヤ、思っていても口にしてやるな。雰囲気で分かるが落ち込むなガク。ただの例え話だ。

「無論、正面からそいつらを懲らしめる。その程度なら自分には作戦など必要ない」

「そこだよ」

「え？」

即座に言葉を返されて戸惑ってるな。金曜集会の時にモモが言った言葉と同じ意味になってしまうが、理解させるためにはしょうがいないか。

「お前の物事の判断は常にそこから始まる。『自分ならこうする』。それがお前の考えの基準になっている。だからそれにそぐわない人間がいたら、無意識に見下しているんだ」

「ち、違う……」

「違うのなら、何故ヤマを認める事が出来なかった。この勝負をするきっかけになった時にどうして『口先だけ』という言葉を使った。もしお前の父親がヤマと同じ事を言葉にしたら、お前は無条件で納得しただろ。違うか？」

俺の畳み掛けるような言葉に何も返せずただ黙り込んで視線を逸らすクリス。そう思っているフシがあるから視線を合わせられないんだろう。本当に素直だな。

しかし責めるような口調になってしまっているけど、別にクリスをいじめたいわけじゃない。ただ少し強く言わないと理解できないと思うからこうなっているだけだ。

「正直に言え。この勝負が始まる前、どこかでヤマを自分より弱いと決めつけていただろ？」

「……はい」

俯いたまま絞り出すような声でクリスは返事をした。ヤバいな。そんなつもりは全くないのに凄く落ち込ませている。誤解は早めに解かなければ拙い事になる。

「別に悪いとか、責めているとかじゃないから顔を上げてくれ」

意識して穏やかな口調にすると、少し安心したのか緊張していた雰囲気も和らぎ下を向いたまま忙しなく動いていた視線も定まり、クリスはゆっくりと顔を上げ俺を正面から見た。そして苦笑を浮かべている俺を見て明らかに安堵したように小さく息を吐いた。

怖がらせたかったわけじゃないけど、少し失敗したな。とりあえず、もう少し口調を和らげて話を続けるか。

「１０人が１０人、同じ容姿の人間がいないように、人はそれぞれ持つ力も違えば考え方も違う。出来る事と出来ない事も違うんだ。お前に出来る事がみんな出来て当たり前って事はまずあり得ない。それは分かっているよな？」

さっきまでとは違い真っ直ぐと見据えて頷くクリス。それをちゃんと理解しているのなら大丈夫だ。俺はクリスの頭に手を乗せて少し

荒っぽく撫でる。

「『自分ならこうする』という明確な指針を持つのはいいことだが、それに囚われると世界を狭めることになる。『あの人ならどう考える』『この人ならどう行動する』という柔軟な考え方をもてば、視野は広がり自分の出来る事がもっと多くなるはずだ」

撫でられて少し困ったような表情を浮かべるクリスだったが、俺はそれを無視して撫で最後に軽く頭を叩いて手を放す。

「でもすぐにそうしろと言われても出来ないと思う。だからとりあえず、風間ファミリーの仲間にはそういう考えで接してくれ。そうすればヤマの信条もきっと理解出来るはずだからさ」

「はい！」

最後は少しおどけるように言った俺の言葉に、クリスは思っていた以上に元気な声で返事をしてきた。なんだろう、どこか説得を間違えたか？　物凄い尊敬の目で見られているんだが……

それから気絶したヤマを休ませるために旅館に戻ることになった。俺は少しだけ寄る所があるとみんなを先に行かせたが、案の定モモが渋ったので言う事を1つ聞くと約束をしてみんなと一緒に帰らせた。

約束した時のモモの顔が物凄く気になる。はやまったか？　お願い事の予想はだいたいつくが時々予想の斜め上をいくからな。それなりに覚悟をしておく必要がありそうだ。

まあそれは後にして、そろそろ声を掛けてやるか。みんながいなく

なるのを待っていたようだし。

「もう出て来ても大丈夫ですよ『猟犬』さん」

「人払い、感謝します。それと私の事はマルギッテと呼びなさい。敬語も不要です」

茂みを掻き分けて林から『猟犬』さん改めマルギッテが姿を現した。雰囲気からして勝負をしに来たといった感じじゃないな。俺個人に勝負とは違う用があるみたいだ。

「それで、俺に何の用だ？　さっきのクリスへの説教に対する苦言か？」

少しからかうような口調で問い掛けてみたものの、マルギッテの雰囲気は全く変わらない。怒るでもなく呆れるでもない。まるで探るような目で俺の姿を注視している。

どうやらかなり真面目な話らしい。聞く態勢を取り頷くと、マルギッテは変わらず俺を真っ直ぐ見たまま質問を投げかけてきた。

「あの夏より８ヶ月、貴方はいったどこにいましたか？」

思いもしなかった質問だ。てっきり俺の事を調べ上げた結果、不明な点を聞いてくるものとばかり思っていたんだけどな。

でも何故今そんな事を聞いてくるんだろうか。記憶が戻って帰国した事は知っていると昨日言っていたのに。

「どこにって、あの国の日本大使館にずっといたけど？」

「それを証明できますか？」

「信用できないのか？　なんだったら確認してもらっても構わないぞ」

やけに食い下がるな。会って話をしたのは数回だし、殆どの時間は手合わせだったが、終わった事に関していちいちこだわるような性格じゃなかったはずだ。

しかも俺が記憶を取り戻して、大使館に滞在して、日本に帰国した事なんてマルギッテには殆ど関係のない事だ。多少は事情聴取されていたかもしれないが、それでも気にするような事じゃないはず。

それ以前にらしくない。こんな本題から遠回りの質問をする性格でもないはずだ。

「らしくないな。言いたい事があるならはっきり言ったらどうだ？」

俺の言葉に目を見開いたがそれも一瞬。すぐに目を閉じて少しだけ顔を下げる。たぶん話す事を頭の中で整理しているんだろう。

数秒、その姿勢のままでいたマルギッテは顔を上げ目を開き、再度俺を真っ直ぐ見たまま話を始めた。

「昨日、貴方の殺気を受けた時、半年前にある戦場で良く似た殺気を感じたのを思い出したのです。最初は勘違いかと思っていたのですが、改めて思い返して、『良く似ている』のではなく『全く同質』な殺気だと気付きました」

「なるほど……だから俺がどこにいたのかを確認したかったってわけね」

「その通りです」

「でも悪いが、俺があの国の日本大使館にいたのは間違いないからな。さっきも言ったように確認してもらってもいいぞ」

「いいえ。それには及びません。私は貴方を信用します」

首を振るマルギッテに苦笑を返す。曲がりなりにも信用はされているようだ。

話はどうやらそれだけだったらしいが、俺には引っかかる事ばかりだ。『良く似た』なら別に何とも思わないが、『全く同質』と言われると気にならないわけがない。

あの時俺がマルギッテに放った殺気は普通の殺気とは違う。暁の業（ワザ）の1つで【滲心（ししん）】というものだ。それと全く同質の殺気を感じたという事は、その殺気を放った人物が『暁の一族』である可能性がかなり高いという事だ。

俺以外に『暁の一族』がいないなんて都合のいい考えはもちろんなかった。少なくとも両親のどちらか、そしてその祖父母のどちらかが生きていれば俺以外の『暁の一族』がいる。

さらに親の兄弟や祖父母の兄弟。暁の“血”と“武”がどういった方法で覚醒するのかは知らないが、少なくとも俺の血縁は確かに存在している。その中に覚醒した者がいてもおかしくはない。

気にはなる、が、調べる事の出来ない以上、どうする事も出来ないのが現状だ。とりあえず情報だけは仕入れておこう。

「マルギッテ、あんたが感じた殺気の持ち主。誰だか分かるか？」

どうやら俺からの質問を待っていたらしい。すぐに答えは返ってきた。

「明確に姿を見たわけではありませんが、傭兵たちの中に広まる噂からその傭兵ではないかと推測しています」

「噂？」

「『相対する者全てを容赦なく殺め、その返り血で真紅に染まる姿はまさに悪魔の様だ』という噂。それ故にその傭兵は『紅血の悪魔（クリムゾン）』と呼ばれています」

『クリムゾン』……噂の内容からして日本語では『紅血の悪魔』って感じか。

「話は以上なので私はこれで。クリスお嬢様をよろしくお願いします」

そう言って小さく頭を下げたから手を上げて応える。それを確認して頷いたマルギッテはきびすを返し再び林の中へと姿を消した。

その後ろ姿を見送りながらも考える事はさっきの話。

俺の殺気と全く同質の殺気を放つ傭兵。噂と言いながらもマルギッテほどの力を持つ軍人がそれを信じるという事はかなり信憑性は高い。紛争のない平和な日本にいる限り関係のない話だと思うが、気に掛けるにこした事はないだろう。

でもまさか『暁の一族』の可能性の高い人間の話を、外国人に、し

かも戦場の噂として聞くとは思ってもいなかったな。
ある意味で予想を裏切った出来事に、俺は苦笑を浮かべながら宿への道を歩き出した。

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

ｓｉｄｅ　川神百代

どうやら大和が目を覚ましたようだ。
膝枕をしている京と何やらやっているようだが、まあいつもの事だ。
気にするようなもんじゃないな。寝ている間にジンが大和の体内の気の巡りを調整していたし、今から薬も飲むし、体調ももうしばらくしたら良くなるはずだ。

「ほらクリ、さっさと携帯番号をみんなに教えろ」

「ああ。ちょっと待ってくれ」

私の言葉に少し顔を赤くして視線を手もとの携帯に落とし操作をするクリ。この程度で恥ずかしがるなんてウブだなクリも。

今の私の体勢だが、胡坐をかいて座っているジンの上に横になって座り体は回された左腕で支えられている状態だ。ちなみにこれはさっきの約束した『言う事を１つ聞く』でお願いしたものじゃない。
この体勢は私にとってはもうデフォだ。そんな事でせっかくのお願い事を使うわけにはいかないからな。

周りのみんなももう慣れたもので、誰も私たちに文句を言う奴はいない。もっとも、最初から文句など言わせるつもりはないがな。

「……よし、赤外線送るぞ」

「オッケオッケー」

「うん、来たよ」

「こっちも問題なし」

「クリスさんのメアド、ＥＤＯとか入ってるね」

「おー、俺も来たぜ」

「あれ？　俺様こねえぞ？」

私も確認。うん、来てるな。ジンの方を見ると頷きながら操作しているから問題なようだ。と、なにやらガクトが赤外線通信が来ないとか騒いでる。日頃の行いが悪いからだな。どうやら問題なく届いたようだが。

「ま、松風。赤外線とはなんですか？」

「ちょ、まゆっち。そんな事も知らないで女子高生なんてＪＯＢやってんのかよ。やべえって」

「しょぼ～ん……です」

何やら相変わらず面白い事をやってるなまゆまゆは。お、どうやら

タカがフォローに入るようだ。本当にまゆまゆの事になると行動早いな。

「まゆ、帰ったら携帯を買いに行こう」

「え？」

「持ってた方が連絡取り易いでしょ？　毎月の電話代はかかるけど、携帯は安いのは本当に安いからね。それに、僕もまゆが持っていてくれた方が嬉しいから」

「は、はい！　私も嬉しいです！」

お～お～。天然ジゴロだなタカ。まるで口説き文句だぞ。お互いに気付いていないからいいけど……いや、この場合よくないか。あ、しまった。くっそ、せっかく携帯を操作していたんだからさっきの会話、録音しておけばよかった。そうすれば凛奈さんと一緒にイジレるのに。

その後、嬉しすぎて夢見心地になるまゆまゆを見てみんなで笑ったり、クリとまゆまゆが大和の容体を心配したり、と穏やかな空気が部屋を覆っていた。

クリも少しだけだが柔らかくなったし、まゆまゆも自分の意見を言うようになった。ジンが危惧していた事は確かに起きたが、これで2人も本格的に仲間入りしたな。

「よーし！　後は2人に川神魂を授けるぜ」

「川神魂？」

キャップの突然の宣言に首を傾げるクリとまゆまゆだが、確かにキャップの言う通りだな。川神学園に通う以上、知っておいてほしい志だ。

「こういう詩（うた）がある」

私はジンの脚の上から下り、居住まいを正してクリとまゆまゆに視線を向ける。

――光灯る街に背を向け　我が歩は果て無き荒野
　奇跡も無く標も無く　ただ夜が広がるのみ
　揺るぎない意志を糧として　闇の旅を進んでいく――

「これが川神魂だ」

雰囲気にのまれたのか、真剣な表情で聞き入るクリとまゆまゆ。そんな2人に私の言葉を補うようにガクト、ワン子、キャップの言葉が掛けられた。

「あえて荒野を行かんとする男の詩（うた）だぜ」

「女のアタシだって分かるけど、長いわ」

「勇往邁進。ひと言で言えばそういう事だな」

全く、せっかく私がカッコよく言ったのに簡単に纏めるなよな。まあ間違っちゃいないが。それとガクト。ワン子の言うように別にこの言葉は男だけのものじゃないぞ。

「勇往、邁進」

「困難をものともせずに、ひたすらに突き進む……そういった意味の四字熟語だよ」

言葉を噛み締めるように呟くクリに、タカが言葉の意味を教える。難しく言う必要もない。恐れることなく進めという事だ。

「いい言葉だな」

「はい。前に進む意思が溢れる言葉ですね」

「辛い時は口にすればいいさ。同じ旅を行く仲間がいる。声にするだけでも力が湧き上がってくるはずだ」

言葉の意味に感銘を受けているクリとまゆまゆにジンが声を掛ける。いつか必ず自分の壁にぶつかる時が来る。そんな時にこそ思い出してほしい。そんな気持ちからだろうな、きっと。

「それさえ刻み込めば、他には何も言う事ねーよ。ってなわけで！みんな揃った事だし、本当の意味で新しくなった風間ファミリーの門出を祝って乾杯しようぜ！」

「急に話を切り替えるのはやめようなキャップ」

キャップの言葉にツッコミを入れる大和。どうやら多少なりとも調子を取り戻してきたようでひと安心だな。

しかし乾杯は悪い事じゃないな。どうやらみんなも反対するような事もないようで、全員が飲み物の入ったグラスを手に取った。私は

ピーチジュース。ジンはオレンジジュースだ。

「えー。若葉かおる頃となりましたが……」

「堅っ苦しいわよー！」

「てか僕たちを相手に口上なんて意味ないでしょ」

乾杯の前の挨拶に入ろうとしたキャップにワン子とモロロのツッコミが容赦なく入った。うん、遠慮ないやり取りがまさに私たちの証拠だ。

「分かったよ。じゃあ簡潔に行くぜ。楽しくやろう。それで十分だ。カンパーイ！」

「「「「「「「「「「カンパーイ！」」」」」」」」」」

11個のグラスがカチンとぶつかり合う音が、これから恐らく、死ぬまで続くであろう新生風間ファミリーを祝う鐘の音になった。

第８３話　箱根旅行、勝負が終わって（後書き）

あとがき～！

「第８３話終了。あとがき座談会、司会の春夏秋冬　廻です。今回のお相手は――」

「暁神です」

「ほいよろしく。さて今回のお話ですが――」

「変な伏線みたいなもの仕込んだなオイ」

「おおう、いきなりのツッコミ。まあその通りなんだけどね」

「ちゃんと伏線になるんだよな？　俺としてそこが１番心配なんだが……」

「他の事で心配しろよ。っていうか思いっきり君が関わっているのに心配するところそこなの！？」

「当たり前だろ。ちゃんとした伏線にならなきゃ心配するだけ損だろ」

「間違っちゃいないが……スッゲー馬鹿にされてるような気がしてならないんだけど？」

「気のせいだ。ところで、結局今回で終わらなかったな」

「ははは、終わらなかったね」

「計画性ないなホント」

「返す言葉がないね」

「まあそれはいい。でも次は本当に終わるよな？　多ければ2話って言ってたからな前回のあとがきで」

「……」

「なんで視線を逸らす？」

「それでは皆さんまた次回お会いしましょう！　ではサラバ！」

「……終わるかどうか分からないってことか」

第８４話　箱根旅行、占われる未来（前書き）

第８４話投稿。

第８４話　箱根旅行、占われる未来

ｓｉｄｅ　暁神

芦ノ湖のほとりにある遊歩道をモモと腕を組んで歩く。

他のみんなは遊覧船の方に乗り込んだが、モモが２人っきりになりたいと言ったので俺たちは乗らなかった。俺としては遊覧船に乗ってみたかったが、今日は部屋以外ではモモと２人っきりになっていなかったのを思い出し、彼女の可愛い我がままに付き合う事にした。

「しかしあれだな。たまにはこうしてゆっくり歩くのも悪くないな」

「確かにそうだな。何かにつけて騒がしいメンバーが多いからなウチは」

それに今日はヤマとクリスの勝負もあったしな。いつかぶつかると思っていたがまさかこの旅行中にぶつかるのはさすがに予定外だった。

これもあの親馬鹿軍人のせいだ。そうに違いない。俺はそう思う事に決めた。

「なあジン」

「どうした？」

「何かあったのか？　少し雰囲気がいつもと違うぞ」

バレてる。

出来る限りいつもどおりしていたつもりだったが、どうやらモモには通用しなかったようだ。昔からそうだった。俺はモモにだけは隠し事が出来ない。上手く隠しているつもりでも何故かモモには見抜かれてしまう。

モモは『彼女としての勘だ』って言うけど、たぶんいつも一緒にいるからこそ僅かな気配の変化を察する事が出来るんだろう。もちろん、勘も十分あり得る。

「あの後、ワン子たちを襲った軍人……確かマルギッテだったか？　そいつと何か話をしたんだろ？」

「気付いてたのか」

「当たり前だ。いつも通りの雰囲気でいられるから大したことじゃないんだろうけど、ほんの僅かでもブレる程度の事ではあったんだろ？」

かなわないねホント。的確に見抜いてくれる。

だけどモモに言う事じゃないのも確かだ。確信があるわけじゃないし関わり合いになる可能性は殆どゼロだ。話をして変に心配させる事じゃない。

「モモの言う通りだけど大丈夫だ。本当に大した事ないからな」

これ以上話す事じゃない、という意味を持たせた言葉で返事をする。俺から話すつもりがないのだからこれで納得してもらうしかない。モモも俺の伝えたかった意味を察したのだろう。それ以上は追及することなく小さく息を吐くと、俺の肩に頭を預けてきた。

「私はお前を信じているからな。もし、相談するんだったら真っ先に私に話せよ。いいな」

口調は命令だったが懇願するような声音だ。俺は肩に預けられているモモの頭を撫でることで、了承の意を示す。完全に納得したという雰囲気ではなかったが、どうやら溜飲は下げてくれたようだ。

静かな沈黙が俺たちを包む。丁度いい、暫くの間この沈黙を保ったままゆっくりと遊歩道を散策して風景を楽しむとするか。

そう思い、言葉も交わさず腕に感じる重さと温かさにそれなりの幸せをかみしめながら歩いていたら、急にモモが組んでいた腕を解き正面から俺を抱き締めた。運がいいのかどうかは分からないが今俺たち以外に遊歩道を歩いている人の姿はいない。

突然のモモの行動に驚いたが、どこか悲しげな寂しさを纏う雰囲気に、俺は何も言わず腕を背に回ししっかりと抱き締め返した。

「で？　急にどうしたんだ？」

少しの間抱き合い、モモの雰囲気が落ち着いたところで行動の真意を問う。その問いにモモは俺の背に回した抱き締める腕に力を込めた。

なんかこの状況、秘密基地の屋上で再会した時と何となく似ているな。何かモモを不安にさせるような事をしたかな？

「再会してまだ日が経っていないから思うのかもしれないが……時々、お前が私に黙ってどこかに行ってしまいそうな不安を感じるんだ」

モモの言葉は完全に予想外のものだった。俺が思っていた以上にモモの心は不安定だったという事なんだろう。

「想いが繋がって、身体も繋がったからなのかもしれない。私らしくない女々しい考えなのかもしれない。でも、私はお前がいなくなったら、どうにかなってしまいそうで怖いんだ……」

縋るような雰囲気で顔を上げたモモの唇に、間髪入れず自分の唇を重ねる。それと同時に背に回した腕に力を入れてより強く抱き締める。さらに深いつながりを示すように重ねた唇を割って舌を絡める。

時間にして1分も経過していないだろう。唇を離し力の抜けた身体を俺に預けるモモ。その身体をしっかりと抱き止め左手は腰に回し、右手は頭を撫でるように髪に指を絡ませて優しく梳く。

「安心しろ。もう俺はお前の前からいなくなる事はない。もしどこか行くことになったら、絶対にお前も一緒だ」

抱きしめられたまま小さく頷くモモに思わず笑みが零れる。それが聞こえたんだろう、モモの雰囲気が少しだけ不貞腐れたようなものに変わった。恐らく自分が不安に思った事に失笑されたと思ったんだろう。

そう意味で笑ったわけじゃない。俺は嬉しかったんだ。弱さなんてないんじゃないかと思うモモが、俺の前では不安をぶつけてくれて甘えてくれる。それが無性に嬉しくてたまらない。

暫く抱き合っていたがどちらからともなく離れ、今度は腕を組むのではなく手を繋ぎ指を絡ませる。そのまま視線を合わせお互いに小

さく笑みを零した後、またゆっくりと遊歩道を進む。
その途中に湖が見え、遊覧船が通るのが見えたからそちらに視線を向けると、何かが船から飛び出して湖の中へ落下していくのを見た。

「……」

「……」

さっきまでとは違う微妙な沈黙が俺とモモの間に流れた。

湖に落ちていったあれって……間違いなくキャップだよな？　バンダナ付けていたし、何より気配で間違えようがなかった。

確認するようにモモに視線を向けたら、同じように俺の方を向いて、全く同じ意味を持たせた視線を送ってきた。お互いの視線の意味を悟り、同時に溜息を吐く。

キャップ、お前はいったい何をやっているんだ……

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

ｓｉｄｅ　篁緋鷺刀

船尾で湖を眺めていたら何かが湖に落ちる音が聞こえ、何が落ちたんだろうと思っていたら船がゆっくりと速度を落とし、いつの間にか止まっていた。

こういった遊覧船は時間通りに定期航路を通っているから止まるような事はないんだけどなぁ……エンジントラブルなか？　まあその

うち動き出すから気にする事じゃないか。

「こんな所にいたんですねタカさん」

「まゆ？」

後ろから掛けられた声に振り向く。視線が合うとはにかんだ笑顔を浮かべるまゆに僕も笑顔で答えると、１歩横に移動して所を開ける。その行動の意図を察したまゆは僕の隣に並んだ。

「そういえば船が止まったけど、従業員さん何か言ってた？」

暫く一緒に湖を眺めていたけど、少し気になりまゆに問い掛ける。するとまゆは体を震わせ気まずそうな表情を浮かべ視線を逸らすと、何やら言いにくそうに答えてきた。

「えっとですね。バンダナをした男の人が……その、湖に落ちたらしく……」

「あ、うん。分かったからそれ以上は言わなくていいよ」

キャップが何かをして湖に落ちたってわけだね。つまり、船が止まる前に聞こえた何かが湖に落ちる音の正体はキャップだったってわけだ。

なんて言えばいいんだろう。やる事なす事、いつも周囲を騒ぎに巻き込むよねキャップは。それがいい方向だけなら全く問題ないけど、悪い方向にも平等に起きるだからある意味で凄い。ジン兄曰く。

『あいつはそういう星の元に生まれているんだ。どうにか出来るも

のじゃないよ。本人が楽しんでいるんだし、特に言う事もないさ。俺たちはいい事が起きたら一緒に喜んで、悪い事が起きたら一緒に解決してやればいいだけだよ』

らしい。的確にキャップと僕たちの関係性を表した言葉だよね。

「他のみんなの反応は？」

予測は出来ているけれどとりあえず聞いてみる。まあ、まゆの口から出た言葉は実にその予想通りだったけどね。

「一緒にいた京さんとモロさんとガクトさんは他人のふりして無視を決め込んでます」

「やっぱりね……でもそれじゃあどうしてまゆはここに？」

「一応、タカさんにも報告しておこうかと思いまして……」

ああ、そういう事ね。恐らくキャップと一緒にいた大和君と一子ちゃんとクリスさんは直接原因を見ているから報告の必要はないか。

「うん、わざわざありがとね」

「いえいえ、お礼を言われるほどのものじゃありませんから」

少しは仲間に慣れたみたいだけど、まだ恐縮する癖は直ってないみたいだ。

でもそれも仕方ないかな。仲間に入れてほしいと懇願してから１０日。金曜集会で注意されてから５日。そして今日、本当の意味で仲

間になったようなものだし、急に変われというのも難しいしね。

徐々に対人スキルを上げていけばいいだけの事。なにしろジン兄や大和君といった最高のお手本が近くにいるんだ。参考にして人と接する機会が増えれば、恐縮する癖も自ずとなくなるだろう。

そんな事を考えている内に船が動き出した。どうやら落ちたキャップを救出したんだろう、にわかに客室の方が騒がしくなってきている。戻って巻き込まれるのもあれだし、もう少しここにいようかな。

「旅行はどうだった、まゆ？」

心配そうに客室の方に視線を何度も送るまゆに声を掛ける。いきなりの事に戸惑っていたけどすぐに穏やかな笑みを浮かべた。

「ちょっとしたハプニングもありましたが、楽しかったです」

「僕たちの場合、ハプニングがない方が珍しいけどね」

主にキャップが原因。時々モモ先輩のもあるけど。苦笑を浮かべた僕にまゆも小さな笑い声を漏らした。

「私、学校の行事以外で同年代の人たちとこういった旅行に行った事ないんです。だから本当に嬉しくて……」

思い出して悲しくなったのか、それとも嬉しくて声に出来ないのか。体を小さく震わせ言葉を詰まらせて俯くまゆ。僕たちにとってはいつものような騒がしい日常の延長でしかない今回の旅行だったけど、まゆにとってはそれこそ僕たちには分からない想いがあるみたい。

まゆの気持ちは僕には分からないけど、少しでも何かしてあげたくて、震える背に手を当てゆっくりと落ち着かせるように小さく叩く。

「男ならここは抱き締めるべきだぞ緋鷺刀」

「うわぁ！？」

「はうわぁ！？」

いきなり後ろから掛けられた声に、僕もまゆも驚きお互いに1歩飛び退き離れる。知った声だから確認しなくても分かっているけど、それでも一応声のした方に視線を向ける。

予想通り、そこにいたのは凛奈さんだ。っていうか、なんで遊覧船に乗ってるんですか？　バス乗り場で集合って決めてましたよね？

「ん？　ああ。なに、思った以上に執筆作業がはかどってな、予定していた分は既に終わったんだ。それでお前たちが遊覧船に乗る予定だったなと思い出してな、私も時間を合わせて乗り込んだというわけだ」

気配から僕の疑問を感じ取ったんだろう、凛奈さんはあっさりと答えた。別にそれはそれで全然構わないんだけど、黙っている必要はないと思うんだけどな。乗り込む時にひと言、声を掛けてくれればいいのに……たぶん、黙っていた方が面白いと思ったんだろうね。

「まったく。お前はそんな顔をしているが男だろ。いい雰囲気なんだから抱き締めるぐらいの甲斐性を見せろ」

「ちょっと待って！　いったいつから見てたの！？」

というかそれ以上もう言わないでよ！　ほら見てよ！　まゆが真っ赤になって俯いちゃったじゃないか！

「いつからって。もちろん由紀ちゃんがお前に声を掛けた時からだ」

それって最初からじゃないか！　って事はこの人、気配を消して覗いていたって事！？　性質悪いにもほどがあるよ凛奈さん！

あまりの事に返す言葉のない僕を無視して、凛奈さんは真っ赤になって俯いているまゆに近付くとその両肩に手を置く。ビクつきながらも顔を上げたまゆに真剣な表情で視線を合わせる凛奈さん。

なんだろう……雰囲気真面目なんだけど物凄く嫌な予感がしてならない。

「由紀ちゃん」

「は、はいぃ」

「緋鷺刀の嫁になる事は考えてくれたか？」

「はうわぅわぁ！？」

嫌な予感的中だよ！　もういい加減にしてくれませんか！？　僕もまゆもいっぱいいっぱいだから！

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

ｓｉｄｅ　直江大和

何とかキャップを無事に引き上げ、船は再び動き出した。

クリスは突き落としてしまった責任を感じてずぶ濡れになったキャップに付き添って行った。いま甲板にいるのは俺とワン子だけだった。

「んー風が本当に気持ちいいわー」

目を閉じて気持ちよさそうに風を受けているワン子を眺める。元気で純真で、疑う事をしないワン子。そんなこいつに俺はずっと聞いてみたかった事があった。

今、周りに仲間は１人もいない。丁度いいから聞いてみるか。

「なあワン子」

「な～に～、大和？」

「お前の夢って、川神院の師範代になることだよな？」

「うん、お姉様の手伝いが出来るようにね」

いつの頃からだろうか、ワン子はまるで自分に言い聞かせるかのように夢をみんなに語っている。天涯孤独になった自分を助けてくれた姉さんを助けるために、いずれ川神院の総代になる姉さんの手助けをするために自分は師範代になるんだ、と。

そのために毎日の修練を欠かしてない。それどころが厳しい川神院の修練以上のものをいつもこなしている。

その姿が時に妬ましく見えるほどワン子は頑張り続けている。

自分が、かつて子どもの頃に目指した夢をいつの間にか諦めてしまったのに、ワン子は子供の頃から夢を実現させるために今も邁進している。

それを見て自分が情けなく感じる時がある。だから聞いてみたかった。

「その夢、諦めようと思った事はないのか？」

だが、俺の言葉にワン子は不思議そうな顔をしただけだった。

「なんで諦める必要があるのよ。だって結果はまだ出てないじゃない。やりもしないで諦めるなんて事、アタシには出来ないわね」

ああ、そうか。今は叶わなかった時の事を考えていないんだ。そんな事考える前に叶えるための努力をしている。だから真っ直ぐ進めるんだ。

純粋に、ただひたすら夢のために進む姿は、こんなにも綺麗なんだ。

「ワン子」

「うん？　なに？」

「その夢、俺も応援してるからな」

急な俺の言葉に、一瞬ポカンと間抜けに口を開けたワン子だったが、すぐに満面の笑顔を浮かべ嬉しそうに頷いた。

「うん！」

今からでも諦めた夢を目指すのは遅くないかもしれない。ワン子の笑顔を見て、俺はそんな事を思うのだった。

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

ｓｉｄｅ　篁凛奈

旅館の前で駅に行くためのバスを待つ中、ガキどもは占いの爺さんに声を掛けられ、面白そうだからを占ってもらっている最中だ。

まあ、バスが到着留守までまだ１０分あるんだ。丁度いい暇潰しにはなるだろう。

「お主は素晴らしい気質をしておるな。人としての魅力に溢れ、絶対的な強運にも恵まれておる。お主は自分の信じるままに進みなさい。それが最良の結果を生むはずじゃ」

的確に風間の坊主の人なりを見抜いているな。

占い師ってのは胡散臭い奴も多いが、あの爺さんはどうやら本物のようだ。道具を使わず相手の気質を読み取って行く末を占っている。そんなこと出来る占い師はそうそういないからな。

「お主は可もなく不可もないのぉ。じゃが自分を信じるのは良い事

じゃな。その思いは大事になさい」

はは、島津の坊主は良くも悪くも普通ってわけか。何を落ち込んでるか知らないが、普通ほどいい事はないぞ。波乱万丈なんて疲れるだけだ。

「現実と夢の葛藤。現状と将来への不安。お主は迷いがあるな。じゃが思いを貫きなさい。それがお主の未来をよりよいものにしてくれるはず」

現実と夢の葛藤か……師岡の坊主は家の事があるからな。現実を1番考えなければいけないのはあいつなんだろうな、きっと。

「お主は強い信念を持っておるな。じゃがその信念がお主の世界を小さきものにしてしまっている。心を広げなさい。さすればお主の可能性もまた広がるはずじゃ」

正義っ娘は爺さんの言葉に真剣な表情で頷いている。どうやら思うところがあったようだ。そういえば旅行初日の時より雰囲気が柔らかいな。何かあったなこれは。後で緋鷺刀から聞き出すか。

「閉ざされた世界と一途な心。いずれそれがお主の未来に立ち塞がることになる。道標の光を見失わないようにするのじゃ。想いもまた1つではないぞ」

不機嫌になるな弓っ娘。明らかにお前の将来を危惧してるんだから素直に受け取っておけ。そのうち分かるさ、お前のその危うさがきっと不協和音を生むって事をな。

「夢と思いの壁。進むべき道は1つに在らず。じゃが今の道も行け

るところまで行きなさい。思いは時に壁を越える力にもなる。そして全ては自分のためである事を忘れぬように」

意味深だな犬っ娘。よく分かっていないようだが、お前の川神院師範代の夢。どうやらかなり厳しい道のりになりそうだが、頑張れよ。

「前を進む者への憧憬。幾多の選択。進むべき道はお主次第じゃが、お主は支える者であり指揮する者。変わる事なく在り続けよ。そうすればお主の未来は約束されるじゃろう」

直江の坊主が支える者ね。指揮する者ってのは分かるけど、いまいちピンとこないな。どうやら同じ事を思ったらしく首傾げているな。

「過去からの来訪。忘却の事柄。お主は近い未来、進むべき道を見失うかもしれない。じゃが傍らの友と正面の想い人が必ず助けてくれる。心をしっかりと持ちなさい」

おお、想い人の言葉でチラリと緋鷺刀を見たな由紀ちゃん。やっぱり少なからず想ってくれているようだな。だが、少し嫌な占い結果になったな。

「過去のしがらみ。再び繋がる因縁。追い求める背中がお主を待ち受けておる。お主は思いのままぶつかるがよい。それが縛る鎖を断ち切る力となる」

やはり避けては通れないな緋鷺刀。それにしても『再び繋がる因縁』ね。占いだから絶対とは言えないが、出来れば当たってほしくない結果だ。

「ほほほ、これはまた凄い。切れる事のない絆。絶対的存在。お主

には何も言う事はない。自分を信じ、想い人を信じれば未来は絶対じゃな」

これまた凄い結果だな戦っ娘。まあお前と暁の坊主なら何があっても大丈夫そうだ。それこそ全人類を敵に回しても何とかしてしまいそうだしな。

「ん？　これは……っ？」

何やら暁の坊主を見ていた爺さんが息を呑んだ。思い思いにお互いの占いの結果を推測していたガキどもも黙り込んで、爺さんの次の言葉を待った。

「どうしたんですか？」

「いや……伝えていいものかどうか……私では判断が付けられん」

訝しげに問う暁の坊主に、爺さんは戸惑ったような言葉を返す。それに対して少し考え込んでいた暁の坊主は爺さんを真っ直ぐに見て言葉を返した。

「構いません。教えてください」

自分を真っ直ぐに見る暁の坊主に爺さんはその視線に迷いがないのを見て取ったんだろう、諦めるように息を吐くと居住まいを正した。

「分かった。では伝えよう。お主は近い将来、最大の試練を迎える。鏡合わせの落ちた明星。それに纏わり付く荊の蛇。夕闇がお主とその仲間たちを巻き込むことになる」

意味深過ぎる占いに誰もが言葉を失う中で、暁の坊主だけが変わらない口調で爺さんに言葉を返す。

「俺の未来が、みんなを巻き込む危機を招くって事ですね」

「その通り。じゃが悲観することはない。お主は繋がりを大切にし、1人ではない事を忘れなければきっと夕闇は晴れる」

「分かりました。心に留めておきます。ありがとうございました」

暁の坊主がお礼を言った丁度その時、宿の前の停留所に駅に向かうバスが止まった。占いの結果のせいか少し空気が重いな。爺さんにはちょっと悪いがあえて言葉にさせてもらおう。

「行くぞガキども！　占いはしょせん占いだ！　いちいち気にするな！　乗り遅れた奴は問答無用で置いて行くぞ！」

私の言葉に一応は重い空気は払われたようだ。現金な奴らに呆れると同時に、占い師の爺さんに謝罪の意を込めて頭を下げる。私の意図を理解してくれていたのだろう。気にするなと言うように首を振って答えてくれた。

それに対してもう1度感謝の意を込めて頭を下げ、私はバスへ乗り込んだ。

最後の最後で、何やら全員の未来に暗雲が漂うような旅行になってしまったが、まあこいつらの事だ、きっと何とかしてしまうんだろうな。

つまり心配するだけ損だ。楽観的に行け。それがお前たちだろ。

な？　風間ファミリー？

第８４話　箱根旅行、占われる未来（後書き）

あとがき～！

「第８４話終了。あとがき座談会、司会の春夏秋冬　廻です。今回のお相手は――」

「篁凛奈だ」

「はいお久し振りです。さて今回のお話ですが――」

「これでもかってな具合に意味深なものを詰め込んだな」

「ははははは。ちょっと調子に乗りましたね。原作にも箱根旅行の帰りのバスに乗る前に占いのシーンがあるから入れてみたんだけど――」

「乗り過ぎだ。どうする気だ、最後の占いのシーンの全員の結果」

「深い意味は特にないんだけどね、それぞれのこれからを簡単に示唆したものと思っていただければ……」

「そう思えないものもあるが？」

「そうだね。特に神の占いの結果は物凄く重要なものです。今はそれ以上言えません」

「緋鷺刀や由紀ちゃんの結果もか？」

「2人の結果は読んでいただければ何となく予測できるんじゃないかと思います。貴女の心情も書かれていますからね」

「まあな……」

「とりあえず、今回で箱根旅行の大まかな終了となります」

「待て。大まかとはなんだ？」

「うん。次回で川神に着いてからの事をちょっと書こうかなと思って……あくまでも予定だから変わる可能性は多々あります」

「終わり方が締まらないからだろ」

「それもあります。まあ、意味深な終わり方でもいいんですけどね。あ、そういえば今回ついに８０００文字を超えました」

「どうでもいい事をいちいち報告するな」

「こっちにしてみればどうでもいい事じゃないんだけど……」

「知るか」

「グダグダな終わり方ですが……次投稿もよろしくお願いしますね？」

第８５話　箱根旅行、旅行の終わり（前書き）

第８５話投稿。

問題を残し箱根旅行編終了です。

第８５話　箱根旅行、旅行の終わり

ｓｉｄｅ　■■■

「行っちまいましたなぁ……いいですかい？」

「問題はありません。顔を見るだけ十分ですよ」

あれが暁神か……なるほど。君が言うように普通の人とは違う『何か』を持っていそうだな。何より彼女に近い雰囲気があった。

だが気に掛けるほどじゃない。力だけの人間などどうにでも出来る。

「どうするんです？　あいつが相手となると今の駒じゃあ足りませんぜ」

「それも大丈夫ですよ。切り札はまだありますから。しかし、本当に彼らはこちらの計画の邪魔になるんですか？　言ってはなんですが、ただの高校生でしかありませんよ？」

君が言うから一応はそれなりの準備はしているが、ただの高校生に何が出来るというのだろうか。だが君は確信を持っているようだ。

「ええ、まず間違いなくあいつらは事が起きたら首を突っ込むでしょう。直接にしろ間接にしろ関わってくるのは確かですよ」

君にしか分からない何かがあるという事か……まあ、彼らを幼い頃から知っている君の言葉だ、一応信じるとしよう。

「そうですか。それならそれを見込んだ根回しもしておきましょう。では帰りましょうか。釈迦堂さん」

「へいへい、了解しましたよ。依頼主（クライアント）様」

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

ｓｉｄｅ　暁神

さっきの視線は何だったんだろうな。

やけに俺たちを注視してたけど、騒がしくしていたから見てたって感じじゃなく、明らかに俺たちを観察していた。

そのうち１つは釈迦堂さんだったし。

七浜に行った時もそれとなく気配を感じたからもしやとは思っていたけど、こっちに戻ってきてたんだなあの人。川神院を破門されてもう４年ぐらいか？

隣に座っているモモの様子からして、気付いていたのは俺だけか。凛奈さんの方にも視線を向けてみるが気付いた様子はない。

気配の消し方が上手くなってけど、破門されてから強くなったってのも何か皮肉な感じだな。いや、破門されたからこそ型にはまることなく自由に出来るから強くなったって事か……あの人は昔からどこか野性的なモノがあったしな。

鉄心さんにはそれとなく伝えておくべきか……いや、鉄心さんの事

だ、恐らく釈迦堂さんが戻ってきているのはとっくに気付いているはずだ。川神院の事は川神院に任せておけばいい。俺が出る幕じゃないな。

「オイ、聞いてるのかジン」

「聞いてるよ。明日、みんなでまゆっちの携帯を見に行くんだろ？」

急に話を振られても問題なく返す。考え事をしていても話はちゃんと耳を通って頭の中に入っている。

まゆっちの携帯の事だが、未成年が携帯を買う場合は親の許可が必要だ。まゆっちは親元を離れているからショップで承諾書をもらい親元に郵送して、署名と捺印をもらった承諾書を返送してもらわないと駄目だ。

あるいは、親に地元で契約してもらい、機種を郵送してもらうという方法しかない。

まあ、どちらの方法を取るにしても、携帯を手にするのに5日から1週間ぐらいはかかるだろう。

それを知ってまゆっちが物凄く落ち込んでたけど、ヒロに任せれば問題ないだろう。いつの間にか自然にファミリー内でまゆっちの担当がヒロになっている。

俺たちにしてみれば同学年、同じクラスという事もあるからなのだが、凛奈さんにしてみれば上手くいったとほくそ笑んでいる事だろう。あの背中が如実にそれを表してる。実に楽しそうだ。

気にかかる傭兵の噂。予言めいた占いの結果。最後に感じた意味あ

りげな視線。

めでたしめでたし、で終わらなかった旅行だが、今は気にしたってしょうがない。情報が少なすぎるし、いつどのように起こるかすらも分からないんだ。神経を張り巡らせても疲れるだけだし、みんなに勘付かれちゃ元も子もない。

結局、何かが起きてからしか対応できない一介の高校生でしかないんだ。思い悩んでいたって意味ないか。

携帯談義に花を咲かせるみんなを眺めながら、俺は自分の中でそう締め括った。

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

ｓｉｄｅ　直江大和

夕日も完全に沈み、夜になりようやく島津寮へと帰ってきた。

「ただいまー」

「おう」

「お帰り、マイスター」

代表して玄関の戸を開け挨拶すると、そこにはゲンさんとクッキーの姿があった。っていうかゲンさんが出迎えてくれた事が物凄く意外なんだけど……

「勘違いすんじゃねぇぞ。後でいちいち部屋に挨拶にこられたら面倒だからここにいただけだ」

俺の言いたい事を先に悟ったらしいゲンさんが言葉を掛ける前に説明してきた。言葉はぶっきらぼうだけど本当に面倒見がいいよねゲンさんは。

「旅行、楽しかったですよ！」

「ああ、本当にな」

「部屋に帰るまでが旅行だからね」

暫く玄関で少し雑談を広げていた俺たちだったが、京はさっさと自分の部屋に戻って行った。あいつも仲間以外の人がいると途端に冷めた行動とるよな……兄弟が少し心配そうにしてたけど、どうしたもんかねホント。

「で、直江、土産は？」

「後で持って行くから茶菓子用意して待ってて」

少し無茶振りをしてみる。だがさすが僕らのゲンさん。予想通りの返しをしてくれた。

「調子に乗んなボケ。今回だけだぞ。洋菓子系と和菓子系、どっちがいいかぐらいはせめてもの慈悲で聞いてやる」

「洋菓子系で」

やっぱり優しいゲンさんだった。ちなみのゲンさんへのお土産だけど、最初はネタものに行こうかなと思ってたけど、今後の付き合いとかもあるから兄弟の提案に従って箱根寄木細工の秘密箱にした。

クッキーへのお土産も同じ物にしろとキャップも兄弟に言われていた。そのお陰か、いつもなら旅行に行った後は必ずお土産の事でクッキーに追い回されているキャップだが、今回はそれ定例行事がなく、クッキーも満足していた。

その後、お土産を部屋に持って行くつもりだったが、逆にゲンさんが大量のケーキを持って俺の部屋に来た。どうやらバイトで貰った余り物らしいが、食いきれないとのことでお裾分けしてくれたようだ。

交換するようにお土産を受け取ったゲンさんはすぐに部屋に戻って行った。もっと楽しくお話をしたかったな。どうすれば兄弟みたいにナチュラルに接してくれるんだろうか。

そんな事を思いつつ、女性陣にもケーキをお裾分けするため京に電話して2階に上がる許可をもらう。

いやしかしまさかその直後に、クマのぬいぐるみを抱き締めて部屋の中を転げ回るクリスを見るとは思ってもみなかったね。しかも物凄く異様な空間と化しているクリスの部屋も見てしまった。

何と表現したらいいんだろうねあの部屋。日本とぬいぐるみの融合。これを笑わずして何を笑えというぐらいに爆笑もんだった。

そのせいで理不尽に踏みつけられることになったが、その時に俺は理解したのだった。

『こいつは面白い奴だ』と。

side out

side 暁神

眠っているカズを背負って川神院への帰路を行く。

疲れて電車の中で寝るのなら分からんでもないのに、なんで解散した後で歩きながら眠るのかねこいつは。良く食べ、良く遊んで、良く寝る。健康優良児のカズらしいと言えばそれまでだが、さすがにこれはね。

「ふふふ」

ずり落ちそうになるカズの位置を直すように背中を揺すっていると、隣でモモが何やら小さな笑い声を零した。何か笑われるような事したか？

「どうした？」

「いや、そうしていると本当の兄妹に見えて微笑ましくてな」

ああ、そういう事か。

確かに同学年だけどカズは“妹”って感じが強いな。こう何と言うか、見守ってやりたい、みたいな感情がある。もちろん仲間たちにもそう思う時はあるが、カズに対してはそれが顕著になる事が多い。

そんなこと思ってるからヤマに『根っからの兄貴気質だな』なんて言われるんだろうな。

だがモモにカズと兄妹のように見える、と言われるのは悪い気分じゃないな。何故なら――

「数年後には兄妹になってるんだ。いい予行演習だよ。まあ、頭に『義理』ってのがつくけどな」

「なっ！？」

思わぬ俺の反撃に頬を染め固まるモモ。つまりはそういう事だ。

漏れ出そうな笑い声を噛み締めながら、固まっているモモをそのままにして歩みを進める。数秒で硬直が解けたモモは恥ずかしいのか嬉しいのか分からないが何やら悶えていたが、すぐに俺の横に並び身を寄せるようにして隣を歩く。カズを背負っているため腕は組めないがその顔はご満悦そうだ。

しかし、余りこの件に関しては口にしない方がいいな。言葉にした自分も思った以上に恥ずかしかった。モモが固まったお陰で顔を見られる事はなかったが、俺も間違いなく赤くなってたからな。でも、同じ思いでいてくれている事だけは分かったし、今後もたまになら口にしてもいいか。

そんな事を考えながら帰り道を進んで行くと、川神院の山門が見えてきたと同時に何やら懐かしい気配を感じた。約４年振りに感じる気配だけど恐らく間違いない。これは……

「フハハハ。久しいな百代。それに暁神」

山門の前で腕を組み尊大な態度で待っていたのは、やはり九鬼揚羽さんだった。しかも何故かその横に従っているのは英雄の専属のはずの『女王蜂』忍足あずみだった。

揚羽さんと『女王蜂』の組み合わせか……まさかと思うがあの事か？

「久し振りだなぁ、揚羽さん。私と勝負して負けて以来か？」

「で、あるな。約1年振りか」

そういえば鉄心さんがそんな事言ってたな。揚羽さんは高校を卒業すると同時に九鬼の軍需部門の統括をする事になり、まともに勝負が出来る時間が取れなくなるから最後に本気で死合いをしたって。

結果はモモが勝ったらしいけど、それでも四天王の座は守っているらしい。確か今の武道四天王ってモモと揚羽さん。それから鉄乙女さんに橘天衣（たかえ）さんだったか？

違うか、橘さんは少し前に四天王以外の人に負けたって鉄心さんが言ってたな。ということは橘さんに勝った人が新しく四天王入りしたって事だろう。

「それで？　今日はまた私と勝負しに来たのか？」

「それも面白そうだがすまんな。今日はそっちの暁に用があってな」

「ジンに？」

俺に用事ね……考えられるのは英雄の事か、あるいは今日聞いたあ

の事か。

視線だけでどうすると問い掛けてくるモモに、背負っていたカズを預ける。そんな俺の行動に蚊帳の外にされるのを理解しんだろう、不貞腐れたように口を尖らせるので宥めるように頭を撫でてやる。暫く撫でていると満足したのか、俺の手から離れたと思うといきなり伸びあがってキスをしてきた。

思いっきり不意打ち気味な行為に反応できなかった俺を見て、イタズラが成功した子供のような笑顔を浮かべるとカズを背負って逃げるように山門をくぐっていった。

残されたのは、呆然となる俺と、からかう様なニヤケ顔の揚羽さんと、呆れた様な半眼で見てくる『女王蜂』だった。

「仲睦まじいな、暁」

「盛ってんじゃねぇよ『黒髪(ダークネス)』」

く、反論できない。『女王蜂』なんかここぞとばかりにイジってきやがる。まるで鬼の首を取ったみたいだ。ていうかお前猫被らなくていいのか？　あれは英雄の前だけなのか。

だがやられっぱなしというのも性に合わない。やり返すか。

「仲睦まじくて申し訳ありませんね。男日照りの2人には刺激が強すぎましたか？」

厭味ったらしく言うと反応速度は予想以上に速かった。

「はっはっはっは、我に喧嘩を売っているのか、暁？」

「死にてぇのかテメェは？」

「買いましょうか？　返り討ちにしてあげますよ？」

３人とも笑顔を浮かべているのに雰囲気は殺伐としている。傍から見ると物凄く滑稽な光景に違いない。っていうかこんなアホな事してる場合じゃないだろ。

「話を戻しましょう。それで、俺に用事って何ですか、揚羽さん？」

俺の言葉に自分を取り戻したんだろう、揚羽さんは取り繕うようにわざとらしく咳払いをし、『女王蜂』はバツが悪そうに視線を逸らした。

この手のからかいはもう止そう。なにより女性に失礼だな。

「うむ。暁、我が九鬼の軍需部門の統括をしているのか知ってるか？」

「ええ、鉄心さんに聞いてますけどそれが何か？」

「ああ、実はお前に確認しておきたい事があるのだ。あずみ」

揚羽さんの言葉に、横に従っていた『女王蜂』が俺の前に立つ。まさかと思うがこの雰囲気、恐らく聞かれる事はマルギッテと同じ事だな。

「オイ『黒髪（ダークネス）』、お前『紅血の悪魔（クリムゾン）』って傭兵を知ってるか？」

案の定、思ってた通りの言葉だ。

何か俺の周りで動き出しているのか？　いや違うな。これは俺自身の行動が招いた結果だ。俺が記憶喪失の間、あの部隊にいたからこその今こんな状況になっているんだ。

留まらずにすぐに大使館に行っていれば『女王蜂』や『猟犬』と深く関わる事はなかった。そうすれば2人ともその『紅血の悪魔（クリムゾン）』の噂を聞いても、俺を思い浮かべる事はなかったはずだ。

なら受け止めるしかない。自分の行動の結果は何があろうと自分で責任を持たなければならないんだ。

「聞いた事はあるな」

「どこで聞いた？」

「今日、『猟犬』に聞いた」

「『猟犬』？　ドイツのマルギッテ・エーベルバッハか？」

頷くとそこで会話を切り考え込む『女王蜂』。たぶん俺と『猟犬』の繋がりを考えているんだろう。だが難しい事じゃない。考えればすぐに分かるはずだ。

「そうか、F組の留学生はドイツ軍のフリードリヒ中将の娘だったな」

「そういう事だ。で？　俺にそれを聞いてどうするんだ？」

俺の言葉に返答を渋るかのように顔を歪める『女王蜂』は振り返り揚羽さんの方を見た。恐らく答えていいのかの確認を取ったんだろ

う。『女王蜂』は無言で頷く揚羽さんに小さく頭を下げると、さらに真剣な表情で話し出した。

「3ヶ月前、中東にある九鬼の軍需施設に傭兵部隊が襲撃を掛けた。目的なんかは一切不明だったが、その傭兵部隊の1人に、施設にいた警備隊の半数が殺された。あたいもその時、視察に行かれた英雄様の護衛でその場にいたんだが、その傭兵の気配が知ってる奴に良く似ていてな」

なるほど……つまりそれが――

「後々に『紅血の悪魔（クリムゾン）』って呼ばれてる奴だって分かったんだが、テメェの気配と本当に良く似ていたんだよ『黒髪（ダークネス）』」

つまり俺に疑いが掛けられてるってわけね。だから半年間同じ部隊にいた『女王蜂』と、軍需部門統括で昔1度だけ手合わせした事のある揚羽さんがここに来たってわけだ。英雄の奴、言葉通り俺の事を揚羽さんにそのまま伝えたな。

「悪いが俺じゃない。言葉で言って信用してもらえるとは思ないけど」

「案ずるな。我もあずみもお前がそのような事をする人間ではないと知っておる。ただその傭兵を知っているかどうかを確認したかっただけだ」

全く身に覚えがない事だから両手を上げて降参のポーズを取る。それに対し揚羽さんは俺の言葉を否定するように言う。どうやらマルギッテと同じで、それなりに信用はされているようだ。

「名前を聞いたのも今日初めてです。顔を見た事もなければ姿を見た事もありませんよ」

「ふむ……そうか」

俺の言葉に考え込む揚羽さん。これ以上聞かれても分からないんだからどうしようもないんだけどな……でも気になるな。マルギッテや『女王蜂』すら気に掛けるほど俺に似ている気配を持つ傭兵。

ああ駄目だ。占いの結果のせいか悪い方向にしか繋がらない。とりあえず今は考えるな。相手は戦場の生業とする傭兵だ。俺から首を突っ込まなければ向こうから来る事はないんだから。

「暁、家族や親族の事――」

「悪い揚羽さん。俺、捨てられてたのを鉄心さんに拾われてるから、望んでる答えはあげられませんよ」

「っ……すまん」

遮り答えた俺の言葉に、揚羽さんはバツが悪そうに謝罪してきた。さすがの『女王蜂』も驚いて目を見開いてたな。

別に何でもない事だけど、俺自身が気にしていない事で空気が悪くなると非常に居心地が悪い。こう、悪気がないのに相手を泣かせてしまったような感じでどうも苦手だ。

「まあ、そういうわけで、俺はその『紅血の悪魔（クリムゾン）』については名前を今日知った、ぐらいしか情報は持っていないって事です」

「そうか。時間を取らせて悪かったな」

務めて明るく言う俺に、揚羽さんも同調してくれた。

「上がっていきますか？　お茶ぐらいしか出せませんけど」

「まるで自分の家のようだな」

「自分の家ですからね」

調子よく会話を続けた事で完全に重苦しい空気は払われた。誘ったのは冗談ではなく本当なので、促すように手を上げたが、揚羽さんは小さく首を振った。

「我もこれから用事があってな、時間が差し迫っておる。お誘いは嬉しいが、またいずれ時間に余裕のある時にな」

「そうですか」

「うむ。ではあずみ、帰るぞ」

「はい、揚羽様」

歩きなのか、それとも近くに車を止めてここまで来たのか、きびすを返して去っていく2人の背中を見えなくなるまで見送る。

その間も考える事は傭兵『紅血の悪魔（クリムゾン）』の事。

今日という短い間に違う人から3回も同じ名前を聞くと、さすがに気にしないでいられない。今まで気にも留めていなかった自分の家

族や親族について、1度は調べてみるべきなのかと思わなくもない。

でも、俺が捨てられた理由が、その捨てた人が俺を家族や親族と関わらせたくないからだとしたら、逆に首を突っ込む事になるんじゃないだろうか。あの占い師、本物っぽかったし予言めいた結果が本当になったら、俺がみんなを巻き込む事件に関わる事になるから下手な動きはしたくない。

結局、今まで通り生活しながら、情報を集めつつ徐々に小さく行動していくしかないって事だな。事件に直面したら大した差はないかもしれないが、心構えをするしないで変わってくる事もある。

バスの中で考えたように、何かが起きてからしか対応できない一介の高校生でしかないんだ。思い悩んでいたって意味ない。

大きな息を吐くことで鬱憤を吐き出し、頬を叩くことで気持ちを切り替えた俺は、地面に置いてあった3人分の荷物を担ぎ、川神院（じぶんのいえ）へと入った。

第８５話　箱根旅行、旅行の終わり（後書き）

あとがき～！

「第８５話終了。あとがき座談会、司会の春夏秋冬　廻です。今回のお相手は――」

「川神百代だ」

「隙あらばイチャつこうとする百代ちゃんです」

「いいだろう、私とジンは恋人同士なんだから」

「そうですね、さて今回のお話ですが、まあ読んでの通り今後のための伏線をいくつかバラ撒いています」

「ついに釈迦堂さんも名前が出てきたな」

「そうだね。ちなみに第６４話の最後の視点『ｓｉｄｅ　■■■■』は釈迦堂さん視点でした」

「分かる人にはモロバレだろ？」

「だろうね。■が５つだから『釈迦堂刑部』の５文字そのままだしね」

「それで？　最初の視点は誰なんだ？」

「ひ・み・つ」

「気色悪い言い方するな！　今時点で名前出せないってだけだろ！」

「まあね。原作知ってる人は釈迦堂さんが一緒にいる時点でどんな人物像になるかは分かると思いますが。あの人物がこの物語における〇〇的存在になります」

「そこで伏字する意味があるのか？」

「小賢しいと思っていただいても結構。読者にバレていても物語に出来なければそれはいつまでも伏線になってくれるんだ」

「拾ってこその伏線だろ。まあ拾い忘れはないんだろうけどな」

「さすがにね。さて、いよいよ謎の人物として浮き上がる『紅血（クリム）の悪魔（ゾン）』。その正体は……いずれ物語で語られます。いずれ」

「また変な逃げ道作ってるな。どうせまだ考えてないだけだろ」

「いや、さすがにそれはないけどね。でも今はやっぱり触れられないって事で。では次投稿もよろしくお願いします」

第８６話　強さの在り方、暁神の本質（前書き）

第８６話投稿。

第８６話　強さの在り方、暁神の本質

――２００９年　５月６日　水曜日　ＡＭ９：００――

ｓｉｄｅ　暁神

川神院の武道場。

本来、この時間は門下生たちの修練が行われているが、今日は師範代以下全ての人間が海まで駆けて行き、砂浜で修練を行っている。

ぶつくさ文句を言ってたモモも、カズの言葉に折れて門下生たちと一緒に海へ行った。故に、今この川神院の武道場に残っているのは俺と鉄心さんだけだ。

正確に言うのならわざと残った、が正しいだろう。その理由も実に簡単。俺と鉄心さんが手合わせをするためだ。

俺は川神院でお世話になっているが川神流の遣い手じゃない。それは幼い頃から変わらない。時々モモと手合わせする事もあるが、あれはあくまでも“俺”という個人の身体能力での手合わせだ。

本来の“暁”としての手合わせは、川神院では鉄心さんにしか出来ない。

モモにも出来ないわけじゃないか、まだ力に頼るところが多々あるから恐らく“暁”としての俺と手合わせしたら１分も持たないだろう。

「準備は出来とるか？」

武道場の真ん中で正座をして瞑想をしていたら鉄心さんが声を掛けてきた。閉じていた目を開き正面に立つ鉄心さんを真っ直ぐに見る。

「問題ありません。そちらは？」

「こちらも万端じゃ。では結界を張ってくれんかの」

鉄心さんの頷き細く息を吐き、それを止めると同時に武道場の床に手を着き体内で廻らせた気を解放する。

【天嶺（てんりょう）・封靈宮（ほうれいぐう）】

武道場の中央を中心として建物全体を囲う気の結界を展開させる。この結界を張るのには意味がある。１つは周囲に被害を与えないための。そしてもう１つが外に俺たちの手合わせを気付かせないため。というよりは、モモにバレないために張っているんだけどね。

もう１度だけ気を廻らせて結界の強度を確認する。特に問題はないな。

今回、結界として張った【天嶺（てんりょう）・封靈宮（ほうれいぐう）】は俺自身の気だけではなく、その土地に流れる気脈も使うため、使う場所によってはその強度に天と地ほどの差がある。

まあ、この土地は寺院が建立するほどだから気脈自体は問題ない。かなりの無茶をしない限り結界が破綻する事はないだろう。

「すまんのう。お主の業（ワザ）に頼ってしまって」

立ち上がる俺に謝罪する鉄心さんだが、特に気にはならないので首

を振って答える。俺と鉄心さんが手合わせすれば周囲が無事にすまないのは分かり切っている事。被害が出ないような事なら喜んでやりますよ。

「では、始めるかの」

「そうですね。時間は？」

「門下生たちが帰ってくるまで2時間ってとこかのう」

「じゃあ、それまでには終わらせましょうか」

決めるのは制限時間だけ。俺と鉄心さんの手合わせにルールなんてものはない。どんな力や業を使ってでも相手を倒せばそれで終了。ずっとそういう手合わせをしてきた。

まあ、まだ1度も勝った事ないんだけどな。

だが今回は日本に戻って来てから初めての手合わせ。年月で言えば実に5年振りぐらいだ。あの時はまだ本来の意味で『覚醒』していなかったが、マルギッテと初めて手合わせした時に俺は“暁”として『覚醒』した。

もしかしたら今日初めて、最強の武神、川神鉄心に勝てるかもしれない。

「ゆくぞ！　暁神！」

「来い！　川神鉄心！」

同時に膨大な闘気を放出する。

まずは闘気のぶつけ合いをするのがこの手合わせの暗黙の始め方だ。
しかし思った通り力の強さはモモの方が上だが、気の強さは量・質、共にまだ圧倒的に鉄心さんの方が上だ。

武芸者としての年季が違うってことなんだろうが、ここで引くわけにはいかない。今まではいつもここで圧し切られて主導権を握られてきた。
だがさっき言ったように、あの頃とは俺自身が違うんだ。負けるとは微塵も思っていない。

「ほっほっほ。強うなっとるな神」

「5年前とは違いますからね」

闘気のぶつけ合いはほぼ互角。数十秒経過して圧し負ける事は圧し勝つ事も出来ない。このまま続けるのもそれはそれで面白いかもしれないが、埒が明かないのは確かだ。
ならきっかけを作って一気に局面を変えるのも1つの手だな。

呼気を整える事で放出しぶつけている闘気の質を一気に変換。鉄心さんの闘気も巻き込んで一瞬にして掻き消し、武道場内を空白にする。

「【封殺(ほうさつ)】か！？」

驚いている場合じゃないですよ鉄心さん！

闘気を掻き消したと同時に床を蹴り、一瞬にして鉄心さんの間合い

の内に踏み込むと、捻じるように突き出した両掌を鳩尾の前で重ねる。

俺の意図を悟って飛び退こうとしているけど、少し遅いですよ。

【双咬穿（そうこうせん）】

衝撃と闘気を掌から撃ち出す。

だが直撃したはずなのに手応えが殆どない。恐らく内功・外功を駆使してダメージを最小限にしたんだ。【封殺（ほうさつ）】で気を全て掻き消された状態から一瞬でそれだけの事をするなんて。本当にこの人は凄い。

「まさかあれだけの気を一瞬にして掻き消すとはのう。いやはや末恐ろしい奴よのう」

「俺としては結構いい不意を突いたと思ったんですけどね」

ああも何もなかったかのように立っていられると、ちょっとばかりプライドが傷付くな。まあ、目標は高く遠い方がいいってよく言うけど。

気持ちを切り替え床を蹴る。瞬時に間合いに踏みこみ闘気を纏った拳の連撃を繰り出すが、受け止め、捌かれ、いなされる。

一瞬だけバランスを崩した隙を突かれ脇腹に掌底が入る。即座に両手で鉄心さんの腕を挟み放たれるであろう衝撃を相殺する。

同時に身体を捻り沈み込ませ、右手で手首を掴み左手で腕を抱え込み背負い投げを放つ。が、手応えがない。投げると同時に床を蹴って勢いを殺された。

それを理解した時には投げの途中で両手を放し、空中で体勢を整えている鉄心さんの顔面に向かって左拳を叩きこむ。
逆に掴まれて同じように投げ飛ばされる体勢になったが、鉄心さんの背がこちらを向いた瞬間に右掌底を添える。そのまま床を踏み衝撃を透そうとしたが、勘付かれて掴まれていた腕を離し間合いを開けられた。突き出した腕は虚しく空を突くだけとなった。

間合いが開いた事で一瞬の停滞が生まれる。

だがその停滞を動かすように2・3度軽くジャンプする。その後で足場を確認するように床を数度足先で叩く。

足場は問題ない。あとは鉄心さんに通じるかどうか。だが考えていても意味はない。やってみなければ分からないからな。

軽く上体を揺らしながら、鉄心さんを中心に円を描くように移動する。それに合わせて鉄心さんも身体を動かし常に俺の正面に位置するようにしている。
気を廻らして全方向からの攻撃に対応できるようにしているのに、常に俺を視界に入れるなんてかなりの警戒様だ。それだけ認められているって事だろう。

ならそれに応えよう。

再び床を蹴り鉄心さんの間合いに踏み込む。その瞬間に驚きで気配がブレるのを感じる。それも当然だ。俺は鉄心さんの背後から近付いたのだから。

さっきまで視界に入っていたのは気で作った囮。俺自身は気配を殺

し最初の位置から全く動いていない。

【歩術・虚齎陽炎（ほじゅつ・うつしかげろう）】

認識を誤認させて相手を惑わす歩法。暁の業（ワザ）の1つだ。だが動けは気付かれるのは分かっている。あくまでも先手を取るためのものだ。肉薄した時にはこちらを向いているのは予想通り、だがこちらは既に次の攻撃の準備は終わっている。

右拳を鳩尾に当て右足で床を踏みしだき、引き絞った弓から矢を解き放つかのように身体を捻じり伸ばし右腕を突きあげる。震脚によって発生した衝撃は、身体を捻じる事で螺旋の力も加わり右拳に一点集中、鉄心さんの身体を撃ち抜く。

【螺孔昇（らこうしょう）】

一撃必殺にも近い技だが防がれている。【双咬穿（そうこうせん）】を放った時と同じで内功と外功で防がれた。多少のダメージはあったと思うが行動不能までには至っていないだろう。

思った通り、鉄心さんは空中で体勢を整えると両足で床に降り立った。

さて、これでも駄目となるとどうするべきか。【空蠍（くうかつ）】か【燕毘龍（えんびりゅう）】か。状況に応じてどちらかで行こう。

「こちらから本気を出さんと、お主は本気を出せんか、神？」

急な鉄心さんの言葉の意味が分からない。

「どういう意味ですか？」

俺は本気を出している。現に鉄心さんに向かって躊躇う事なく技を仕掛ける事が出来た。手加減抜きの全力で。だけどそれでも鉄心さんは俺を否定した。

「気付いておらんようじゃが、それはお主の悪い癖じゃ。相対する人間の強さに合わせて闘う。圧倒的ではあるが相手を傷付けない程度の強さに抑える」

そんな事ない。そう反論したいのに声が出せなかった。そして気付いた。反論できないという事は心の中でそう思っている、それを肯定している自分がいるんだという事に。

でも本当にそうなんだろうか？　もし本当ならどうして俺はそんな事をしていたんだ？　どうしてそんな事をするようになったんだ？

全力で向かってくる相手に、全力で応えない。俺はそんな失礼な事をしていたという事なのか？

「それはお主のせいではない。見誤るな神」

戸惑う俺を落ち着かせるように鉄心さんは穏やかな声音で声を掛けてきた。でも、俺のせいじゃないっていうのはどういう意味なんだろうか？

その疑問に、鉄心さんはゆっくり答えてくれた。

「それは同等の強さを持つ者がおらんが故の弊害じゃ」

同等の強さ持つ者がいないための弊害？　何だろう。昔同じような

事を言われたような覚えがある。そう、あれは確かモモと初めて勝負をした時だ。あの時も鉄心さんに言われた。

強さの比較対象がいないせいで自分の強さを自覚出来ていない。

あの時はモモと勝負をする事で自分の強さを自覚する事が出来た。

鉄心さんの言葉はあの時の言葉と同じような意味なのだろうか？

「心の本質が『闘争』のモモなら、精神の混濁、戦闘衝動の暴走に繋がるが、お主の心の本質は『調和』じゃ。故にお主は無意識に力を抑えて闘っておる。恐らく上限の設定をモモより若干上ぐらいにしておるのじゃろう」

「そんなつもりはないんですけどね……」

「無意識じゃからの。だがさっきも言ったように、それはお主のせいではない。言うなればワシのせいじゃ」

鉄心さんのせい？　それこそ意味が分からない。無意識とはいえやっているのは俺なのに、どうして鉄心さんが自分のせいと言うんだろうか？

そういえば、俺が自分の力を自覚出来ていない事も自分のせいだと言ってたな。

「力を自覚させるためにワシはお主とモモを闘わせた。結果、お主はモモに勝ち自分の強さを自覚した。そこまではワシの思い描いた通りの結果じゃった。だが、その結果がお主の力の上限を作らせてしまった」

ああ、そういう事か。だんだんと鉄心さんの言いたい事が分かって

きた。

「お主の心の本質は『調和』。故にお主は自分が突出した存在になるのを無意識に避けたのじゃ。それと同時に強さゆえに孤独になりかけていたモモを救うために、モモより少しだけ強い、という自分の強さを作り上げたのじゃ」

だから鉄心さんは『自分のせい』だと言うのか。モモと闘った事で俺が自分の力を自覚したけど、そのせいで上限を作ってしまったと……

確かにそうなのかもしれない。俺の心の本質が『調和』だという事も別に否定はしない。でも貴方は思い違いをしていますよ鉄心さん。

確かに貴方の言う事も原因の1つなのかもしれません。でも結局は俺自身の利己主義（エゴイズム）が生んだ結果なんですよ。

今なら分かる。俺は孤独になりたくなかったんだ。

親に捨てられたと言う過去が、俺の心に確かな心的外傷（トラウマ）を残している。だから場が壊れるのが怖いんだ。積み上げてきた繋がりが途切れてバラバラになり、自分が孤独になるのを極端に恐れているんだ。

みんなは俺を『面倒見のいい兄貴分』と言い、風間ファミリーというグループも、俺がいるから今こうして変わらずいられるなんて評するけど、それは違うんだ。みんなとの繋がりに縋っているのは他でもない俺自身なんだ。

居心地のいい『風間ファミリー』と言う空間を壊したくないから、俺はみんなに気を配りフォローをするんだ。仲間のためじゃない、

自分のためにやっているんだ。

ったく、いまさらそんな事に気付くなんてな。これじゃあミヤの事を強く言うなんて出来ないじゃないか。

「神」

「はい」

掛けられた声に思考を中断して顔を上げる。視界に穏やかな笑顔を浮かべる鉄心さんの姿が映る。なんか、何を考えていたかなんて全部見抜かれていそうだ。

案の定というか、その声は俺を諭すものだった。

「自分の力を恐れるな。これまでお主が築いてきたものは、その程度の事で壊れるものではない。仲間たちを、ここの家族を信じておるのじゃろ？」

「はい」

「なら信じ続ければよい。少なくとも、モモは何があろうとも、もうお主から離れる事はないじゃろうて」

うわぁ……同じようなことをモモに言って、モモからも言われたけど、恋人の家族にまでそう言われると物凄く恥ずかしい。

顔が赤くなってるのを自覚して思わず視線を逸らす。それを見てもなにも言ってこない鉄心さんだが、ニヤケた雰囲気じゃなく、穏やかで少しだけ嬉しそうな雰囲気なのが救いだな。鉄心さんが俺たちの関係を受け入れてくれているのは分かっていたけど、初めて言葉

にして認めてもらったような気がする。

うん、でも確かに鉄心さんの言う通り大丈夫と思える。いまさら俺がどんな人間であろうとも、風間ファミリーのみんなも、川神院のみんなも、変わらずに俺と接してくれると信じられる。

「では、本気で行くかの」

「はい」

仕切り直し。ここからが本当の意味での本気の手合わせ。

目を閉じ心を落ち着かせる。マルギッテと初めて手合わせした時のように、意図的に自分の意識を切り替える。頭の中に無数のスイッチがありそれをＯＮへと切り替えるイメージ。そして全てのスイッチを切り替えた瞬間――

“暁神”は誕生した。

何故か分からない。でも、はっきりとそう理解した。今、初めて俺は、自分自身の意思で自分の全ての力を解き放ったという事を理解したのだ。

目を開け正面にいる鉄心さんを見る。険しい表情をしているのを見るに、どうやら俺の変質を感じ取ったらしい。膨大な量の気を練っているのが分かる。鉄心さんも間違いなく本気でくる。

最強の武神、川神鉄心の本気。

いったいこの世界中に、何人の人間がそれを見る事が出来るんだろ

うか。結界を張っていなければ間違いなくモモにバレているな。

「ゆくぞ！　川神流奥義！」

【顕現の参・毘沙門天】

闘気で具現化された神々の化身。その化身から繰り出される拳を無造作に上げた左手で受け止める。驚愕の表情をしているけど鉄心さん、まだまだ驚いてもらいますよ。

受け止めた左手を捻じるように回す。それに呼応するかのように具現化していた闘気の毘沙門天が一瞬にして霧散した。

【反魂葬刹（はんこんそうさつ）】

相手の闘気に同量で全く正反対の質をもつ闘気をぶつけて消滅させる暁の業（ワザ）。

「ヌゥ！？」

驚く鉄心さん。床を軽く蹴った次の瞬間、俺は既に鉄心さんの鳩尾に右掌底を当てていた。恐らく俺の動きは全く見えなかったはず。鉄心さんから見ればまさに瞬間移動に等しいだろう。

踏み込む事もせず突き出す事もしない。俺はただ鳩尾に当てた右掌底を軽く押すだけ。

それだけで、鉄心さんは気を失いその場に倒れ伏したのだった。

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

ｓｉｄｅ　川神百代

私が川神院に帰って来た時、院内は騒がしかった。
海での修練が終わり珍しく現地で解散となった。後は帰るだけだったのでぶらりと仲見世通りを散策し、お昼を少し過ぎた頃に戻ったのだ。
だけどこれ、騒がしいと言うよりは興奮している、と言った方が正しいな。
武道場の方の気の残滓からジンとジジイが手合わせしたのは分かる。またしても私がいない時にやりやがったなあの２人。
いつもそうだ。恐らくジジイが見せたくないんだろう。私がジンの強さに触れて戦闘衝動が強くなるのを避けたいんだ。
私としてはジンが傍にいれば満足だ。その証拠にジンが帰って来てから戦闘衝動は大人しい。ジジイだってそれを感じ取っているはずだ。
今の私は戦闘衝動よりもジンの強さに追いつく事の方が大事だ。同じ位置に立って同じ景色を見たい。この気持ちはワン子と同じだな。
「あ、お姉様！　お帰りなさい」
「ワン子か、ただいま」
そうだちょうどいい、ワン子にこの騒がしさの原因を聞いてみるか。
まあ、ジンとジジイの手合わせの余韻かなんかだろうと思うけど。

「ワン子、なんだってこんなに院内が騒々しいんだ？」

「ああ、この騒ぎね。なんでもジン兄がじーちゃんを倒しちゃったんだって」

は？

おいワン子、お前さっきなんて言った？

ジンが……ジジイを……倒したぁ！？

「ワン子！　それ本当か！？」

「う、うん。料理長さんが倒れているじーちゃんをジン兄が介抱しているのを見たって……」

思わず詰め寄った私にビックリしながら答えるワン子。だが今はそんな事を気に掛ける余裕は私にはない。

勝った？　あの私ですらギリギリ勝てないであろう最強の武神、今だ世界中の武芸者を震え上がらせる川神鉄心に勝った？

ふ、ふはは、ふはははは！

やっぱりお前は最高だ！　暁神！

そんなお前の彼女としても誇らしいが、同時にお前に追いつくことがどれ程困難な事か分かったぞ！　だがそれでいい！　お前は常に私の目標でい続けてくれ！

小さい頃、強さ故に孤独になりそうな私を救ってくれたお前だ。今度は私がお前の隣に立ちその孤独を癒してやるからな。

待っていろ、ジン。

第８６話　強さの在り方、暁神の本質（後書き）

あとがき～！

「第８６話終了。あとがき座談会、司会の春夏秋冬　廻です。今回のお相手は――」

「暁神です」

「最近、このあとがき座談会がつらくなってきました」

「おい。いきなりか」

「なかなかネタが……最近は本編の補足説明的なものになってる気が……」

「最初からそうだろ」

「痛いとこつくね。こんなんだったら『外伝？　～毎日が記念日３６５日の小噺～』をあとがきとしてやればよかった」

「その通りだな。で、今回の話は？」

「結局やる事ってそれしかないんだよなぁ……さて今回のお話ですが、自分でもよく分からなくなりました」

「オイ！」

「一応は鉄心と君と手合わせを書いて、その中で君が本当は本気を

出していなかったってことを説明したかったんだけど……何やら支離滅裂に……」

「時折思うんだけどさ、お前って話全体の見通しを立てていない時もあるけど、1話の流れの見通しを立てていない時あるよな？」

「うん、あるね。時折勢いだけで書いてる」

「あっさり認めるなよ！　読者に物凄い失礼だぞ！」

「でもどうしても勢いだけで書いちゃう時がある。そういう時って時々途中で何を書いているのか分からない時がある」

「問題発言だな……」

「こんな作者が書いている問題いっぱいありな物語ですけど、これからもよろしくお願いします」

「上手く纏めたつもりだが、問題先送りしてるぞ……」

第８７話　緋鷺刀の憂鬱、臨時教師の正体（前書き）

第８７話投稿。

第87話　緋鷺刀の憂鬱、臨時教師の正体

――2009年　5月7日　木曜日　AM8：30――

side　篁緋鷺刀

高校3年間。

それは人それぞれ思い思いの青春を過ごす貴重な時期だ。

勉強に打ち込むも良し。バイトに精を出すも良し。スポーツに全てを懸けるも良し。友達との関係を広げるも良し。

そんな風に自分のやりたい事をやりたいように過ごす時期。特にこの川神学園は生徒の個性を尊重し、ある程度の自由が許されている学校でもある。

え？　何が言いたいかって？　それはつまりですね――

「えっと、しっかりして下さい、タカさん」

「そうだぜタカッち！　こんな事で挫けんなー！」

机の上に伏せって項垂れている僕に、まゆと松風の慰めの言葉が掛けられる。

ありがとうまゆ。その優しい言葉も優しい気遣いも本当にありがたい。でもごめんね。今の僕には全く励ましにも労りにもならないんだ。

だって誰がこんな事予想できる？　たぶん大和君にもジン兄にも予測できない事だよ。それらしい素振りなんて一切、見せていなかったんだ。感じ取れと言う方が無理だよね。

それでも現実は変わらない。今目の前で起きている現象を直視しなければならない。幻覚であって欲しいとの願いを込めて顔を上げる。

やっぱり現実はそんなに甘くなかったね。

「今日より産休に入った君たちの担任に代わり、このクラスを担当する事になった臨時教師の篁凛奈だ。担当科目も同じ国語。よろしく頼むぞ」

何が言いたいかというと、つまり、少なくとものこの1年間、僕の学園生活に『平穏』の言葉がなくなったというわけです。

side out

side audience

小島梅子は頭を抱えていた。

彼女の悩みの種はそう多くない。基本は生徒たちの事に関して。たまにしつこく誘ってくる同僚の宇佐美巨人の事が鬱陶しくて悩む事はあるが、それは本当にごくたまにで殆ど気にかけていない。あとは母親からの結婚の催促ぐらい。

だが、今の彼女を悩ませるのは産休に入った同僚の代わりに来た臨時教師の女性――篁凛奈だった。

「一緒にお昼取ろう、小梅さん」

「小梅さんと呼ぶなと言っているだろう！　篁！」

掛けられた間抜けな呼び名に即座に反論をする。今日、職員室で何度そう呼ばれた事か。可及的速やかにこの呼び名をやめさせなければすぐに生徒たちに広がる。それだけは避けたい梅子だった。

朝、学園長の鉄心の紹介で凛奈を見た時、梅子は血の気が引くという症状を言葉通り体験した。

1年C組の担任で国語の教師が産休に入るのはゴールデンウィーク前から決まっていた。その欠員を埋めるための臨時教師が来るのも当たり前で、既に人選もすんだ後だった。

『誰が来るかはその日のお楽しみ』と言う鉄心の言葉に、大人としてそれはどうなのかと思う梅子だったが、特に気にはかけていなかった。誰が来たとしても同僚として接するだけ、そう思っていたからだ。

だが、いざゴールデンウィークが開けて初日の職員会議。鉄心に伴って職員室に入ってきた凛奈の姿を見た時、『何故ここに？』と思い、その後、臨時教師として教鞭を取ると聞いた瞬間、何の冗談なのかと声を上げたくなるほどの衝撃だった。

そして、梅子の姿を捉えた凛奈の第一声が――

「お久し振り。小梅さん」

手を上げて気楽に挨拶をする凛奈と、挨拶された梅子に教師たちの

視線が集中した。血の気が引き貧血になって倒れなかった自分を褒めてやりたかった梅子だった。

小島梅子と篁凛奈。

この2人は大学の先輩後輩の関係にあった。

真面目で几帳面、ストイックな性格で同性に慕われていた梅子と、自由奔放で多彩な才能を持ち、男のような振る舞いで同性にも異性にも人気が高かった凛奈。

正反対とも言える性格なのに何故か凛奈は梅子に懐き、梅子も凛奈とは自然体で付き合えた。恐らく武道を修めているという共通事項があったからだと梅子は思っている。

傍らに立ち、自分待っている凛奈を横目に見て小さく溜息を吐いた梅子は、諦めたように席を立ち凛奈を伴って食堂へと向かった。

席の確保は凛奈に任せ配膳カウンターへ。福利厚生で配られている食券を使ってきつねうどんを注文。乗せられたお盆を持って凛奈の待つ席へ行く。

さっそく女生徒に囲まれている凛奈を見て、変わらないなと思う梅子。

大学時代、同じように同性から人気はあったが、梅子は憧れの対象として見られ、凛奈は親しみやすい友人という感じだった。そういった意味で凛奈の周りにはよく人が集まった。

「悪いな。小島先生と昼食を一緒にするんで、席を空けてくれないか？」

座る場所がなくどうするかと考えていた梅子に気付き、自分を囲んでいる女生徒に声を掛ける凛奈。その言葉で梅子の存在に気付いた女生徒たちはクモの子を散らすかのように離れて行った。

小さな溜息を吐き空いた真正面の席に腰を下ろす梅子に、凛奈は早速面白そうな声音で問い掛けた。

「相変わらず遠巻きに見られているな、小梅さん？」

「教師は畏敬されているぐらいが丁度いい。それと小梅さんはやめろ」

「じゃあここでは小島先生で」

『ここでは』と言う言葉の意味を追求したかった梅子だが、藪を突いて蛇より性質の悪いものが出てきたら厄介と考え言葉を飲み込んだ。

両手を合わせ目を閉じ、小さく礼をして『いただきます』と言葉にしてから箸を取り食事を始める。そんな梅子の姿を見て、相変わらずの几帳面さに凛奈は小さな笑みを零した。

「なんだ？」

「いや、相変わらず几帳面で真面目な方だな、と」

「人はそう簡単には変わらん」

「ごもっとも」

これだからこいつは扱いにくい。梅子はそう思う。

自由奔放だが不真面目じゃない。ちゃんと節度を弁え大人な対応が出来る。だが親しい相手には遠慮がない。多彩な才能を持ちどんな分野も一定以上の成果を上げる天才肌だが嫌味がない。男の様な立ち居振る舞いも様になるから違和感を感じない。

総じて他人から嫌われる事が殆どない。篁凛奈とはそういった人物なのだと梅子は評している。

「お前こそ、本業の方はいいのか？」

凛奈の本職は作家だ。高校1年生の時にデビューして以来、出す本全てがベストセラーになるほどの人気作家。梅子も大学時代に何度か原稿で読ませてもらい感想を述べた事もある。

そんな順風満帆とも言える作家生活を送っているのに、臨時とはいえわざわざ教師になる必要はどこにもない。本業と副業が逆転しているような状態だ。

「問題ない。３ヶ月ぐらい前に声を掛けられていたし調整はしてある。ストックも推敲すれば出せる奴が１０本ぐらいあるしな。そもそも、数年休む程度で揺らぐような稼ぎはしてないさ」

あっさりと言ってのけるその姿に嫌味を感じないのは、裏打ちされた自信と実績があっての事。あとは梅子が凛奈がそういう人間だという事を理解しているからだ。

「では何故、臨時教師の話を受けた。私にはそこが分からん」

「深い意味はないさ。ただ面白そうと思っただけだ。ああ、あとお気に入りのガキどもが全員生徒として在籍しているからかな」

本当に口が悪い。外見は悪くないのだからこの口の悪ささえなければ、大学在学中にもそれなりに異性と恋仲にでもなれただろうに。凛奈の変わらない姿に、自分の現状を棚に上げてそんな事を思う梅子。

「お気に入りと言うと風間たちのグループの事か？　お前の甥もそのグループに入っていると聞いたが……」

1年C組に凛奈の甥である緋鷺刀がいるのは知っていた。大学生の時、しつこいぐらいに甥っ子の可愛さを聞かされていた梅子は、入学した緋鷺刀の姿を見て『ああ、あれが……』と思った。

「最近は2人増えてさらに騒がしくなったがな」

自分が対応を任せたクリスと黛十一段の娘の事だろう。島津寮の寮生の顔ぶれを思い出し、また個性の強いメンバーが集まったものだと考えるが、本当に面白そうに笑う凛奈を見て、梅子は呆れるしかなかった。

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

ｓｉｄｅ　直江大和

「いやしっかし驚いたな。まさか凛奈さんが臨時教師でくるなんてな！」

「ホントそうね！　学校に来る楽しみがまた増えたわ！」

「美人女教師か……いい響きだぜ」

面白い玩具を見つけたような表情のキャップ。それに頷いて同意するワン子とガクト。対照的に物凄く不安そうな顔をしているのが言わずもがなのヒロだ。

今は昼休み。今日はキャップの召集の元、ここ屋上で臨時の集会が開かれていた。

お題はさっきキャップが言った『凛奈さんの臨時教師就任』について。

ヒロの不安は理解出来る。かく言う俺もヒロほどではないが不安に思う事がないわけではない。あの強烈な印象を放つ凛奈さん登場は、間違いなく俺たちの学園生活に過激すぎる刺激を与えるだろう。

それを歓迎してるのはキャップとガクトだけだろう。ワン子は知り合いが増えた事を単純に喜んでおり、俺と同じ考えなのはモロだけだろう。京は元より興味ナシを貫いている。クリスはまだ凛奈さんの破天荒さを知らないから特に思うところはないだろうし、姉さんと兄弟は何があろうとも動じないタイプだ。

「ほらジン。次はこれだ。あ～ん」

「分かった。分かったからゆっくり食べさせてくれ」

今も姉さんを胡坐をかいた脚に乗せて、姉さんの手作り（！？）の弁当を1組の箸で食べさせ合って、堂々と俺たちの前でイチャつい

ている。それを羨ましそうに見ているガクト。鬱陶しいから物欲しそうな顔はやめろ。それと俺たちの前イチャつくのはやめてくれ２人とも。何故なら――

「好きです大和。だからあ～ん」

「友達でお願いします。それとお前の超絶激辛弁当なんぞ食えるか」

京のアプローチをかわすのが面倒くさいんだ。対抗？してか２人がイチャつくと積極性が３割増しなるんだ。だから俺の平穏のため自重してほしい。

姉さんが怖くて声に出せないから目で兄弟に訴える。それに対して『悪い』と目で答えてくれるがな兄弟。雰囲気が全く悪びれていないんだよ！　このバカップルが！

話が逸れたな。えっと、それで今回の事件で１番気が気じゃないのがヒロとまゆっちだろう。先日の箱根旅行で凛奈さんの爆弾発言のせいで、あの人の存在が自分たちの学園生活にどんな影響を及ぼすのか予想がつかないはずだ。

「しかし凛奈さんは作家のはずだろう？　教師になれるのか？」

今日も好物のいなり寿司をお弁当にしているクリスが疑問を口にした。

そう言えばそうだよな。凛奈さんの本職は作家。ペンネーム『高咲（たかさき）凛華（きりんか）』の名前で文学・ミステリー・ＳＦ・ライトノベル、ジャンル何でもありで出す本全てがベストセラーになる超売れっ子の作家のはず。

「それは問題ないよ。凛奈さんは大学で教職課程を取っていたから教師になるのには何の問題もないよ」

落ち込みながらも律義にクリスの疑問に答えるヒロ。箸の進み遅い。と言うか動きもらしくなく緩慢だ。それほどまでの衝撃だったんだろう。何かと甲斐甲斐しく気を使うまゆっちの姿が何故かヒロの哀愁を誘う。

強く生きろヒロ。学園生活はまだ始まったばかりだ。

「っていうか、なんで教職課程を取る必要があるんだあの人？　高校生の頃から作家として成功していたんだろ？」

姉さんのもっともな質問だが、はっきり言ってあの人と俺たちの価値観はだいぶ違う。さすがのヒロもそこまでは聞いていないのか首を振った。だがその問いに答えたのは意外にも兄弟だった。

「以前聞いたんだけど、作家として稼げなくなった時に食いっぱぐれないための保険らしい。あと他にも会計士とか司法書士とかの資格も持ってるらしいぞ」

安定した職種をチョイスしているあたり、実にあの人らしい。っていうか教職課程って保険で取るようなものか？　会計士も司法書士もメチャクチャ稼げる職業じゃないか。

ああ、でも凛奈さんだからと言われると納得するしかない。あの人物凄いインパクトあるけど、それに負けず劣らない天才なんだよな。

俺は知り合ってからあの人が困ったところを1度も見た事がない。

「でもジン兄はよくタカの知らない事も知っているよな」

「相性いいからでしょ。凛奈さんもジン兄を特に気に入ってそうだし」

「モロロ、私の前で面白い事を言うな」

モロ、ご臨終。ガクトのさりげない疑問に答えたつもりだろうが、時と場所が悪かったな。

だが笑顔を浮かべてゆらりと立ち上がろうとする姉さんだったが、後ろから兄弟に抱きすくめられて立ち上がる事が出来なかった。

「落ち着こうなモモ。タクは別に深い意味があって言ったわけじゃないんだ。いちいち反応するな」

「だがな」

「それとも俺が信じられないか？」

「そういうわけじゃない。でも……」

不貞腐れる姉さんを横抱きにして、慰めるように頭を撫でながら優しく抱き締める兄弟。何やら甘ったるい空気が流れてきた。

京が触発される前に移動しよう。ワン子とキャップの間にいれば京も無理には寄ってこないだろう。純真オーラは不純な人間に対する最強の楯になる。

「嫉妬してくれるのは嬉しいけど、もっと自信を持て。俺にはお前しかいないからな」

「うん」

あの姉さんが従順に頷いた。いったいお前は何をしたんだ兄弟。聞きたいけど聞きたくない。聞いたら姉さんのノロケが終わりなく続きそうな気がしてならない。それ以前にこの甘ったるい空気を誰かどうにかしてくれ。俺たち仲間の前だと姉さんどころか兄弟も自重しなくなった。

ガクトと京は羨望の眼差しで見ている。クリスとまゆっちは雰囲気に当てられて顔を赤くして俯いている。モロとヒロは諦めているのか無視を決め込んでいる。キャップとワン子はそもそもあてにならない。

俺か？　俺しかいないのか？　このバカップルを止めるのは俺しかいないのか？

よし！　ならやってやる！

「えっと……姉さん？　兄弟？　もう少し場所を弁えてほしいんですけど？」

はいヘタレで申し訳ありません。
邪魔をしたせいで姉さんの理不尽な暴力にさらされるのだけは勘弁願いたい。だからどうして強く言う事が出来ないんだよ。

「悪い悪い。気を付けるよ」

ああでもさすが兄弟には通じたようだ。これからは姉さんの事はどんな些細な事でも兄弟に任せよう。そうしよう。そうした方が仲間のためだ。

「でもヒロは大変だっただろ。凛奈さんの性格だったら間違いなくヒロとの関係を暴露してるだろ？」

気を取り直して話を戻した兄弟の言葉に、ヒロが乾いた笑みを浮かべた後、思いっきり肩を落として大きな溜息を吐いた。その様子から大変では済まなかったみたいだな。

会話をする気力もないのだろう、うなだれるヒロに変わってまゆっちが話し始めた。

「凄かったですよ。苗字が同じという事でクラスのみなさん真っ先にその質問をされましたから」

「そんでもって凛奈っちが宣言するみたいに『緋鷺刀は私の甥っ子だ！』って言うもんだからよ。タカっちは休み中ずっと質問攻めだったぜ」

「あと、凛奈さんが作家の『高咲凛華』だと気付いた方もいらっしゃって」

「本人に聞きゃーいいものを。わざわざタカっちに確認するんだぜー。オイラちょっとタカっちが可哀想に見えたぜ」

饒舌だなまゆっち。だが宣言するように言うって……何故だろう、そのシーンがいとも簡単に思い描けてしまう。それはそれは物凄く嬉しそうに宣言したんだろうな。

だけどさすがにまゆっちを巻き込むような事はするつもりはないだろうな。旅行中に見せていたあのノリはあくまでも俺たち仲間内の時だけだろう。いくら凛奈さんがまゆっちを気に入っていて、ヒロ

の嫁にしようとしていても、それを学校まで持ち込むような事はしないはずだ。

しないはず……そう思う事は自由だろう。うん。

そんな事を考え散ると校内放送のチャイムが鳴った。何事かと全員が耳を傾けるなか、聞きなれた尊大な声が、学校のあちこちに設置してあるスピーカーから聞こえてきた。

『生徒の呼び出しをする。１－Ｃの篁緋鷺刀と黛由紀江。至急視聴覚室に来るように。もう１度言う。１－Ｃの篁緋鷺刀と黛由紀江。至急視聴覚室に来るように。以上だ』

みんなの視線がいっせいにヒロとまゆっちに集中する。

どうして呼び出されたのか理由が分かっていないまゆっちは首を傾げ、思い当たる節があるのだろう、ヒロは頭を抱えて蹲っていた。

もう１度言おう。強く生きろヒロ。学園生活はまだ始まったばかりだ。

「行こう、まゆ……行った方が被害が少ないからね……」

「？　はい、分かりました」

食べ終わった弁当箱を片付けて、ゆっくり立ち上がりまゆっちに手を差し伸べるヒロ。まゆっちも呼び出された理由を未だに考えてたが、ヒロの言葉に従い弁当箱を片付けると手を取り立ち上がる。

「じゃあ……行ってくるね」

「お先に失礼します」

律義に挨拶をして場を離れる2人。

可哀想に。ヒロは完全に前後不覚の状態だ。未だにまゆっちの手を握ったままなのに気付いていない。まゆっちもヒロの憂鬱そうな雰囲気に気を取られ、手を繋いだままなのに気付いていない。

あの状態で視聴覚室まで行くつもりだろうか。途中で気付けよヒロ。じゃないと凛奈さんの思惑通りに進んでしまうからな。

それから凛奈さん。頼みますから本当に自重して下さいね。せめて2人が登校拒否にならない程度には抑えて下さいね。

それから三度言おう。強く生きろヒロ。学園生活はまだ始まったばかりだ。

第87話　緋鷺刀の憂鬱、臨時教師の正体（後書き）

あとがき～！

「第87話終了。あとがき座談会、司会の春夏秋冬　廻です。今回のお相手は――」

「……篁緋鷺刀です」

「元気がないぞ！」

「誰のせいですか誰の！　僕に何か恨みであるんですか？」

「いや、そんなもの全くない」

「だったらなんで凛奈さんが臨時教師として学園に来たんですか！？　しかも僕とまゆのクラスの担任って！」

「いや、面白そうだったから？」

「……そうですか……」

「さて今回のお話ですが、本当に本格的に本編に割り入ってきました凛奈さんです。今回の話でちょっとした彼女の設定も出てきましたね」

「小島先生の大学時代の後輩とか、ジャンルを選ばない作家とかですね……」

「ちゃんと応えてくれるあたり君はいい子だ。でも実は凛奈さんを本編に入れたのには理由があるんだ」

「どんな理由ですか……？」

「凛奈さんを登場させると君と由紀江の関係を進展させやすい」

「……否定はしません。でもそれなら別に教師にする必要はないんじゃあ？」

「あと動かしやすキャラだから日常のドタバタ劇のためのカンフル剤になる。それに学園にいた方がちょくちょく登場させやすい。夏休み突入前までは基本舞台は学園内だからね」

「そのうち僕より目立ちそうですね」

「そんなことはないよ。凛奈さんはあくまでも脇役だよ」

「そうですか」

「今日はやたらとテンション低いな。このまま続けても仕方ないしここまでにしよう。では皆さん、次の投稿もよろしくお願いしますね」

第８８話　由紀江の目標、友達１００人出来るかな？（前書き）

第８８話投稿。

第８８話　由紀江の目標、友達１００人出来るかな？

――２００９年　５月８日　金曜日　ＰＭ５：００――

「１年Ｃ組、黛由紀江――」

「は、はい？」

いつもの金曜集会。まだ来ていないメンバーがバイトのキャップ１人という状況で、ミヤのいきなりの言葉にまゆっちが戸惑いながら答えた。

思っていた以上に響いたその２人の声に、自然とみんな手が止まり視線が集まった。

「前から思ってたんだけど、なんでＣ組なの？　まゆっちならＳ組でも問題なさそうだけど」

「それを言うならタカもだよね」

ついでと言った感じでタクが疑問を重ねた。

言われてみれば確かにそうだな。まゆっちは厳しく育てられていそうだし、見た感じも優等生っぽい。ヒロも昔から勉強できたし優等生だった。

「運動神経もよさそうだしな」

寝ているカズに膝枕をしてやっているモモが呟くように言う。運動神経はいいって言葉で片付けられないだろう。２人とも身体能力はかなり高いはずだ。

「S組は辞退しました。競争するのもいいんですが、私は友達が欲しいので」

「S組は辞退しんたんだ。競争ばっかりじゃ疲れるし、せっかくの学園生活は楽しまなきゃ」

ほぼ同時に同じような答えを返すヒロとまゆっち。お互い意外だったのか驚いたように顔を見合わせている。

なんと言うかこの2人、基本的な思考というか価値観が良く似ている。だからまゆっちはヒロに対しては気兼ねすることなく接する事が出来るんだろうけど……どこまで似ているんだろうか。少し気になるな。

「あんなクラスに入ったら勉強勉強また勉強だ。いい判断だぜ、タカ、まゆっち」

「ありがとうございますっ！」

「あはは、そうだね」

おいガク。それはお前が勉強したくないから出てくる言葉だろ。だいたいS組を選ぶ生徒は勉強をしたいから選んでんだ。いい判断だとは言わないぞ。

ヒロはそれが分かっているから苦笑いを浮かべているけど、まゆっちは褒められたと思ったんだろう、謝礼までしてる。本当に素直な娘だ。

「で、肝心の友達の方はどうなのかな？」

「ごほっ、んんっ、ごほんっ、ごほんっ」

タクの質問に答えたのは松風の咳払いだった。ヒロがそんなまゆっちを労わるような目で見ている。そんな2人を見てタクも悟ったのだろう、苦笑いを浮かべる。

「察したよ、同学年の友達はまだタカ1人なのね……」

ズバリと突っ込まれて肩を落とすまゆっち。慰めるように肩を叩いているが、そう言えばヒロはクラスに馴染んだんだろうか？　中学からの友達も何人か川神学園に進学したと聞いているけど、なんかいつもまゆっちと一緒にいるイメージが強いんだが。

「タカさんは順調にクラスに馴染んでいっているんですが、何故か私、刀の所持とか置いといても怖いと思われてるみたいで……笑ってるつもりなのに顔が引きつるというか……ほら、どうですか私の顔？」

そうか、まゆっちに掛かりきりと思いきや、ヒロはヒロでちゃんとやっているんだな。うん、それと悪いんだけど、その顔は本当に怖いねまゆっち。

「怖ぇな」

「怖いよ」

「大人しく財布出すレベルだね」

「あぅうぅぅ……」

ガクとヤマとタクの容赦ない意見にテーブルの上に『の』の字まで書きだした。さすがに掛ける言葉がないんだろう、ヒロもどういていいのか分からずただひたすら慰めるように背中を叩くだけだった。そうするうちに多少は気持が浮上したのだろう、まゆっちは俯きがちだが話を続ける。

「笑おう笑おうと心がけてはいるんですけど……」

「そこまで意識しているせいじゃないのか？　もっと自然体で笑ってみればいいと思うけど」

それこそヒロと話している時のような感じで接すればいいと思うんだが……駄目か。それこそ無意識だからどうな風にヒロと接しているのか分からないか。ままならない矛盾だな。無意識を心がけている時点で意識しているようなものだからな。

「でもさぁ、意識しないと思ってる時点で意識してるって事で難しいよねー」

まゆっちも同じ事を思ったんだろう、松風で代弁している。時折本当に本音が松風から漏れるまゆっちだった。それはそれで面白いが、やはり気にかかるな。たぶん対人経験が増えていけば自ずと変わっていくとは思うが……早急に注意する事でもないか。

「刀を使っている時のように集中するのはどうかな？」

代案的にヒロが言うもののまゆっちは小さく細かく首を振る。

「それが対人関係となると、どうしても刀を使う時のような冷静さを保てなくて……」

「……なるほど、それは重症だ」

お手上げと言った感じが漂う声音でモモが呟いた。見放してやるな。まゆっちには死活問題なんだ。きっと新しい生活で多くの友達を作ろうと意気込んで川神学園に入学したんだろうから。

「出来れば直したいです！　みなさんも私の顔が怖かったら教えてください！　直してみせます！」

「その意気だまゆっち！　頑張れ！」

「あ、ありがとうございます！」

意気込んで宣言するまゆっちにクリスの応援の言葉が掛けられる。それに元気よく答えたのはいいんだけどねまゆっち。既にその顔が睨みを利かせているんだが……

『前途多難っぽいな……』

その場にいるまゆっち以外全員の思いが1つになった瞬間だった。

「でも不思議だよね。そんなに人と接する事に緊張でガチガチになるのに、何でタカとは自然体でいられるの？」

「おお、俺様もそれ気になってた」

「まゆっち、タカと一緒にいる時はいい笑顔するよね」

「そ、そうでしょうか？」

タクとガク、ミヤに言われて恥ずかしそうだが自覚がなかったのか、戸惑いながらも不思議そうに首を傾げるまゆっち。言われて気付くという事は当たり前になっているってことなんだろう。

3年前に1度会って打ち解けている前提があるからなのかもしれないが、たった1日にでヒロと打ち解ける事が出来るんだ。まゆっちの課題は落ち着いて話しをするまでの過程だな。それさえクリア出来ればきっと友達は増えていくだろう。

「なあ、ヒロにまゆっち。これからいくつか質問するけど答えてもらっていいか？」

「えっと……いいけど」

「はい、分かりました」

いきなりの俺の言葉に戸惑いながらも了承してくれた。みんなは不思議そうに面白そうに様子を伺っているが、そんなに面白いものじゃないぞ。

「それじゃあまず、今の身長は？」

「１６７だね」

「１６７センチです」

背の高さは今は同じか。確かに並ぶと目測でも同じぐらいの高さだったな。まあこの質問は特に意味はないんだが出だしで突っ込んだ質問はしない方がいいとの考えからだ。

「誕生日は？」

「１０月２６日だよ」
「１０月２６日です」

ヒロは知ってたけどまゆっちも誕生日が一緒？　同学年だから生まれ年も一緒だな。それにはさすがに２人とも驚いてお互い顔を合わせている。

「血液型は？」

「Ｂ型」
「ＡＢ型です」

ここで違いが出たか……だが確かＢ型とＡＢ型は相性が良かったはず。

「好きな食べ物は？」

「うどんだね、やっぱり」
「蕎麦ですね」

これも違うが麺類というのは同じか。確認するつもりで聞いてるが、所々本当に似ているところがあるな、この２人。

「得意な事は？」

「家事かな？」
「幼い頃から習っていたので家事が得意です」

ここでも全く同じ答えが返ってきた。まゆっちは躾けの一環で教え

られていたんだろうけど、ヒロは必要に迫られてだもんな。凛奈さんも出来ないわけじゃないらしいけど、基本そこら辺はルーズな人だし。

「闘うことに関してはどう思ってる？」

「必要がなければやらない。でも闘う時は全力で」

「争い事はあまり好きではありませんが、避けられないのならば全力を出します」

戦闘に関しての姿勢は言葉は違えど意味は全く一緒だな。無駄な争いはしたくないけど、やらなきゃいけない時は全力で立ち向かう。そんな感じだ。

「最後。尊敬する人は？」

「父さん」

「たくさんいますが、強いて言うのなら父上です」

これもまた同じ答え。やっぱりと言うかなんというか……そういう事なんだろう。思った通りの結果に何度か頷いていると、不機嫌そうなモモの声が掛けられた。

「１人で納得していないで教えろ。いったいお前は何が知りたかったんだ？」

その声に周りを見渡すとみんな同じような視線で俺を見ている。ヒロとまゆっちも不思議そうな表情。まあ１番わけが分からないのはこの２人だろう。

答えを反芻して確認していただけだから、別に１人で納得していた

わけじゃないんだけどな。確証みたいなものも得たし、説明を始めるか。

「さっきタクたちが言ってただろ。まゆっちがヒロ相手だと自然体でいられるのはどうしてか、って」

頷く一同。

「俺もそれは不思議に思っていたんだ。その理由も何となく推測出来ていたから、確認のために2人にいろいろ質問をしてたってわけ」

「それで？　その推測の確証は得たのか？」

代表してヤマが尋ねてきた。それに頷く。

「といっても俺の推測の確証に過ぎないからそれが本当だと思うなよ。あくまでも俺がそう思っているというだけだ。それでもいいなら話すけど？」

みんな……というよりはヒロとまゆっちに対して確認するように問い掛ける。さっきも言ったがあくまでも俺の推測。真実は違うかもしれないし、場合によってはヒロとまゆっちに失礼なことかもしれない。

言外にそういった意味を含ませての確認だったが、ヒロもまゆっちも特に考え込むことなく頷いた。本人たちがいいというのなら話すか。

「ヒロとまゆっちはたぶん、性格的というか……心の在り方というか……そういった本質的なところが良く似ているんだと思う。言い

方は悪いかもしれないけど、まゆっちはそれを本能的に感じ取ったんじゃないかな？」

「私とタカさんが本質的に似ている？」

「そう、だから他の人と接する時の壁みたいなものがないんじゃないかな」

そう締めくくると、ヒロもまゆっちも思い当たる事があるのか妙に真剣な表情で頷いている。しつこいようだけどこれはあくまでも俺の推測でしかない。もしかしたら他にもっと別の理由があるかもしれない。

3年前に会ったという事は、まだヒロは中学1年生の頃。あの頃は今よりもより女の子に間違われていた時期だから、まゆっちは初見はヒロを女と思っていたはずだ。そういった理由もあるのかもしれないな。まあこれもあくまでも推測だけどな。

「でもよー、それだとタカっち以外の人とは親しくなるのは難しって事じゃねーのかい。その辺まゆっちにどうすればいいのか教えてやってくれよジン兄」

む、そう来たか。言ってしまっていいのか分からないが1番の問題は松風なんだろうな。正直あの腹話術の会話がまゆっちのイメージをマイナスにしている。

趣味程度なら意外の言葉で済むんだろうが、常時あの会話をしているからな。俺たちはある意味で突拍子のない事柄には免疫があるから慣れるのは早かったが、普通の人はたぶん引く。

でも今のまゆっちに松風の存在は絶対なんだろうな。離れる事は出

来ない関係なんだろう。まゆっちの今までの孤独を考えればそれを指摘するのは憚れるな。

「まゆっちはさ、人と接する時に1番に考えてる事って『役に立ちたい』じゃないかな」

「えっと、はい、たぶんそう思ってます」

「それも悪い事じゃないんだけど、それは友達になった後、その友達が困っている時に考える事だ。初めからそんな考えだと善意の押し売りになる」

「で、ではどうすれば？」

「友達になりたいのなら、キャップが言っていたように『ただ友達になりから』っていう理由だけで十分だよ。そこに損得の感情なんてない。あとは1人が繋がれば輪は広がっていく。そうすれば友達なんてあっという間に増えるさ」

難しかったか？　言い終わった途端にまゆっちが考え込み始めた。俺としてはこれ以上ないぐらい正解に近い答えだと思ったんだがな。

「ジン兄、ちょっと抽象的過ぎ。もう少し具体的な方法を教えてあげなきゃ」

苦言を呈するヒロ。抽象的と言われてもな。友達を作る方法なんてそれこそ人によりけりだ。そう思ったのかみんなもそれぞれ意見を出し始めた。

「よく人をジャガイモと思えば緊張しないって言うから、全員をタ

カだと思えば大丈夫なんじゃねぇか？」

「ガクト、それは大勢の人間の前に立つ時の通説だから意味ないよ。誰かのやり方を参考にするのはどうかな？」

「まゆっち。大和を参考にするのがいいよ。私の大和は知り合いがいっぱいいるから」

「俺はお前のじゃない、お前が自慢げに言うな。でも俺のやり方が参考になるかな……」

「自然体というならキャップをお手本にすればいいではないか」

「あそこまで自由奔放に振る舞うのはまゆまゆには厳しいだろ」

ミヤとクリスの言うように、ヤマとキャップはいい手本なんだろう。だが人脈を広めるために知り合いを多く作っているヤマなんて、目的がそれだから深い付き合いをしないから友達とは違うだろう。

まゆっちは『知り合い』じゃなくて『友達』が欲しいと思っているから、ヤマ自身が言うように恐らくあまり参考にならないだろう。それ以前にまゆっちにヤマのやり方は向いていないな。

キャップはそれ以前に参考に出来ない。あいつは友達も面白い面白くないの基準で感性で選んでるからな。モモの言うようにあそこまで自由奔放な振る舞いはまゆっちには無理だ。

と、そういえば知り合いになるのも友達になるのも、どちらもきっかけは些細な事だな。教えてくれと言われて深く考えすぎたか。

「まゆっち」

「は、はい」

みんなの意見を聞いて若干混乱気味だったまゆっちに、少しだけ声を強くして呼び掛ける。小さく身体を震わせて返事をしたあと、こっちを向いたまゆっちに代替案的なものを教える。

「友達になりたければ、まずは自分から話しかける事だ。緊張するかもしれないけどそこは勇気を出してな。その後は相手の好きな事をに共感を持って、自分の好きな事も教える。友達ってのは対等だから相手の事を知ったら自分の事も知ってもらう。そうすれば自ずと自然に仲良くなれるよ」

「お、おおお……」

胸の前で腕を組んで身体が細かく震えている。雰囲気からして何やら感激しているけどいったいどうしたんだろうか。そんな事を考えているといきなり松風が吠えた。

「まゆっち！　天啓だ！　神託だ！　天の声だ！　神の導きだ！　オラクルだ！」

「はい！　何やら目から鱗が落ちたような感じですよ松風！」

これはどう対応すべきなんだろうか……何やら物凄い尊敬の眼差しで見られているんだけど……っていうかお前ら、そんな微笑ましいものを見るような目でまゆっちを眺めているぐらいなら何か声を掛けていやれよ。

「僕も出来るだけ力になるから、頑張ろうねまゆ」

「はい！　頑張ります！」

ああ、まゆっちに友達が出来にくい理由の1つが分かった。ヒロといるせいで2人が付き合っているっていう噂の信憑性を高めているんだ。

ヒロはあの外見だもんな。狙ってた女子は多いだろう。そういう女子にしてみればまゆっちと友達になるのに抵抗があるだろうな。

そんな女子ばかりじゃないと祈るしかないけど、頑張れまゆっち。

「しっかし、本当に前途多難だなまゆまゆは。表情とか心構え以前にまだいろんな問題がありそうだけどな」

松風の事だろう。どうやらモモも俺と同じような危惧を感じているようだ。だがさっきも思ったけど、今すぐそれを注意する事は出来そうにない。言うならもっと交友関係を広めてから。

そして出来れば、その新しい友達に指摘してほしい。

まあ、それは追々として。実は俺も今日、モモに聞いておきたい事があるのだ。いやしかし、これを聞いた時にはビックリしたね。

「モモ」

「ん？　なんだジン？」

隣に座ってカズを膝枕しているモモに声を掛けると、カズの頭を撫でて笑みを浮かべてながら聞き返して来る。その状態ならそうそう

動けないだろう。なら問い詰めるか。

「いろんな生徒に借金しているって聞いたけど……ホントか？」

動きが止まった。どうやら図星らしい。まあ『女王蜂』が直接愚痴を零しに来たんだから間違いはないだろうと確信はあったけどな。

「だ、誰に聞いた？」

「情報元は秘密だ。さてモモ。バイトやっているんだろ？　なんで借金をする必要があるんだ？」

「そ、それは……」

口籠るモモだが、だいたいの理由は分かっている。恐らく目的と結果が真逆になっているんだろう。そんな俺の考えを肯定するようにヤマが言う。

「姉さんのは借金返済のためのバイトだよ。だからすぐに金がなくなるんだ」

「大和！」

なるほど、やはりそういう事か。

学生のアルバイトは本来、社会に出る前に『お金を稼ぐための仕事を経験する事』が大切で、報酬の給料は二の次だ。だがモモは『借金返済のためにお金を稼がなければならい』からバイトをする。

目的と結果が逆転しているぞ。ここは少し強く言い聞かせる必要が

あるな。

そう思いモモの方に視線を向けると、何故が冷や汗を流して身体を小さく震わせている。

うん？　何やら怯えているけどどうした？　俺は笑顔を浮かべているだけだぞ？　そんなに震えると膝枕してやっているカズが目を覚ますぞ？

うん？　お前たちもどうした？　なんでそんなに離れている？　部屋の隅になんか行かないで元の位置に座ったらどうだ？　まあ、今はどうでもいいか。

さぁてモモ。ちょっっっっっとの間、俺の説教を聞いてもらおうか？　ああ、拒否権はないぞ。これはお前の将来のためにとても重要な事だからな。

容赦しないから覚悟しろな？　モモ？

その後、秘密基地で1時間の説教。家に帰ってからもさらに1時間の説教の後、月曜日に全員に全額返済する事を約束させた。手持ちがないとの事だったので今回だけは俺が立て替えて返済もしなくていい事にした。

しかしそうしてしまう辺り、やっぱり俺はモモに甘いんだろうな。

ありがとう、と大げさにも抱きついてくるモモを抱き止めながら、俺はそんな事を思ったのだった。

第８８話　由紀江の目標、友達１００人出来るかな？（後書き）

あとがき～！

「第８８話終了。あとがき座談会、司会の春夏秋冬　廻です。今回のお相手は――」

「えっと、師岡卓也です」

「よろしくな、モロ。さて今回のお話ですが、まゆっち頑張れ、友達は簡単に出来るぞ！　という事です」

「確かにそうだけど、凄く端折った言い方だね」

「難しく言ってもしょうがないだろ。ただでさえ本文は小難しい言い回しを使って書いてるっていうのに」

「でもそれって、簡単な言い回しじゃ書けないって事？」

「さすがツッコミマスター・モロ。容赦ないね」

「だからそんな称号欲しくないって言ってるでしょ。ところで途中でタカとまゆっちのプロフィールが質問の形式で出てきたけど？」

「深い意味はないぞ。ただ似ている設定を出しただけだ」

「そうなるようにタカの設定を作ったんでしょ？」

「その通りだ！」

「開き直ってるよこの人……」

「お前、そこは開き直らなきゃ。ちゃんと由紀江の設定を意識して緋鷺刀の設定は考えたんだから」

「でも誕生日や身長を同じにする必要はなかったんじゃないの？」

「身長はそうかもしれないけど誕生日は狙ってやった。小っ恥ずかしいけど運命的なものを少しでも感じてほしかったからね」

「ホント恥ずかしいよね」

「うるさい！」

「で？　最後のあのオチは？」

「そのままオチとして見てやってください。それ以外の理由はありません。オチになっているかどうかは責任持ちませんけど」

「無責任だよそれ！」

「ではまた次もよろしくお願いします」

「また強引な終わり方だねホント……」

第８９話　現状の確認、それぞれの思う事（前書き）

第８９話投稿。

第８９話　現状の確認、それぞれの思う事

――２００９年　５月１１日　月曜日　ＡＭ８：１５――

ｓｉｄｅ　直江大和

朝の登校時間。

今日も今日とて１０人の大所帯で学園への道を歩く。といっても完全にひと纏めになって行動しているわけじゃない。

兄弟と姉さんのカップルがひっつき、ヒロとまゆっちの２人が会話をしながら少し後ろを、ガクトとモロが漫画雑誌を読みながら前を行く。京は変わらず俺の側を離れず、クリスはその日によって誰の隣にいるか変わる。今日は京の隣だ。最後にキャップはみんなの周りを行ったり来たりだ。

ちなみにワン子は朝の修練の途中。たぶん変態橋ありで追い付くだろう。

いやしかし本当に兄弟が帰ってきてくれて嬉しいね。なんせ姉さんの機嫌がいつもいい。不満なんて感じていないだろう。そうなれば俺への被害は最小限で済む。

いや、最小限じゃないな。姉さんの事に関してはもう全て兄弟に任せればいい。これで俺はこれからは京の鬱陶しいアプローチを何とかすればいい。

昨日の夜なんか俺が風呂にから上がったタイミングを見計らって脱衣場に入ってきたし、人のトランクスを持って行くし、その代わり

に自分の脱いだばっかりの下着を置いて行くし、好きの言葉と共に俺の手を自分の胸に押し当てるし……

そこの羨ましいと思った奴！　確かに役得かもしれないがコレがかなりキツイんだよ！

分かるか！？　1歩踏み込んだ関係になったらあとは老後の人生まで付き添われるんだぞ！？　俺はまだ高校生だ！　まだ２０歳（ハタチ）にもなっていない未成年だ！　それなのになんで人生の墓場に自分から足を突っ込むような事をしなければならない！　重い想いはキツイんだよ！

何度も説き伏せようとしても返される言葉は同じだ。

『大和は私を助けてくれた』
『大和以外の男は男じゃない』

これも考えものなんだけどな……受け入れればいいじゃないかとよくモロやガクトに言われるんだが、別に俺は好きになってほしいから京を助けたわけじゃない。

あの時俺が京を助けた1番の理由は、自分が情けない人間になりたくなかったからだ。つまりは自分自身のプライドのために京を助けたんだ。感謝される事でもなければ好きになってもらえる事でもない。

その事も京に話しているのに全く聞き入れてくれない。分かっていて、それでも俺の事が好きだという。

京の俺に対する好意ははっきり言って刷り込み（インプリンティング）だ。助けたのが俺じ

ゃなく兄弟やキャップだったら、きっと京は俺を好きにはならなかったはずだ。

だから俺は京の思いに応えられない。応えるわけにはいかないんだ。

応えられない想いを与えられ続けるのは正直言って物凄くストレスにもなる。その辺はちゃんと京も理解しているからいつもは軽いコミュニケーションの延長で好意を表すが、時折思い出したかのように直接ぶつけてくる時がある。

昨日なんてまさにそれだ。

別段京が嫌いなわけじゃない。異性として意識しているけど、俺にとって京は友達なんだ。恐らくそのカテゴリーから外れる事はないだろう。

恐らく京もそれを感じ取っているはず。それなのに諦めることなくアプローチをしてくるその姿は、本当にストーカーみたいだ。

以前姉さんが彼女を作ればいいと言った。俺もその意見には同意する。京は俺に彼女が出来たら思うところはあるだろうが、仲を壊すような事はしない。それだけは信用している。

でもだからといって、そのためだけに彼女を作る気にはなれなかった。たったそれだけの理由で彼女を作るのは京に対して失礼な気がするからだ。

だから今の俺は京の年を経るにつれだんだんと激しくなっていく肉体的アプローチを、なんとか理性を総動員してスルーして耐えているのだ。

そんな京を兄弟はだいぶ前から危惧していた。

俺への一途な想いもそうだが、仲間以外の人に対する排他的な態度と依存にも近い仲間意識。『閉ざしている世界』と兄弟は京の心の内をそう評した事がある。

「なに大和？　私の事じっと見て。胸ならいつでも見せてあげるよ。好きです」

「なんでない。俺は変態になりたくない。お友達で」

結局、どうする事も出来ない現状では今まで通りの事しかできないのだ。

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

ｓｉｄｅ　暁神

「みーんな！　おっはよー！」

多馬橋にさしかかる前にカズがタイヤを引きずりながら駆け寄ってきた。今朝も早くから新聞配達のバイトをしていたっていうのに、本当に元気な奴だ。

「わぁぁ……凄い練習量ですね毎日毎日」

「オイラ、ごっつ尊敬するぜ。まさに修行一筋だぜ」

まゆっちが感嘆の声を上げてるけど、それも無理ないだろう。本来ならカズの練習量は明らかなオーバーワークだ。それを毎日繰り返

しているのだから本当は身体のどこかに無理がたたってもおかしくない。
それなのにいつもと変わらないでいられるのは、身体の頑丈さもそうだが、何より回復速度が普通より早いんだろう。

「そりゃそうよ、アタシはみんなよりスタートダッシュが遅れたぶん頑張らないといけないしね！　だからアタシは今日も走るわ！　うりゃー！」

努力を苦と思わない性格に恵まれた身体の頑丈さ。ただの武芸者になるのならこれ以上ない才能かもしれないが、カズが目指しているのは川神院の師範代。それだけじゃ越えられない壁がある。

あいつはその壁にぶつかった時、どういう答えを出すんだろう。走っていく背中を見ながらそんな事を思う。

「行っちゃいましたね……１０年も経たずにあそこまで強くなるなんて……」

「努力の賜物だろうな。そこは尊敬する」

いつも近くで見ていた俺たちにしてみれば、当たり前すぎるカズの姿にクリスとまゆっち、新入りの２人は感心する。才能のあるこの２人の目に、努力を続けるカズはどんな風に映っているんだろうか。

「本当に凄いな……」

誰にも聞かせる事のない小さな声で呟くモモ。腕を組んで至近距離にいたせいで俺の耳にはその呟きが聞こえてしまった。

複雑な思いの混ざり合った言葉だな。モモはモモで、カズのあの姿を見る度に決断しなければならない辛さに苛まれているんだろう。その事に関しては部外者である俺は口を出す事は出来ない。せめて気付かないでいてやる方が優しさだろう。

「いつかモモ先輩と肩を並べたりして」

「あのワン子が？　ハハ、そりゃ無理ってもんだろ」

「でも面白そうだな～。姉妹対決か……結構美味しい賭けになりそうだな」

お気楽なタクとガクとキャップ。３人は武道の世界の事を余り知らないから、カズの歩む道の厳しさもそれに決断を下すモモの辛さも分からないんだろう。でもそれは責める事じゃない。

その道を進むと決めたのはカズで、それに決断を下す役を引き受けたのはモモだ。武道をしているメンバーと、空気を読むのが上手いヤマは、何となしにそれを理解しているのか、キャップたちのような話に加わる事はなかった。

と、先に行ったはずのカズが橋の手前で止まっている。何事かと思ったがどうやらモモの挑戦者がいたらしい。常人より強い気配があった。

「モモ先輩。どうやらいつもの挑戦者みたいだよ」

「ははは、これはいいタイミングだ。ちょっと鬱憤晴らしに行ってくる」

ヒロの言葉に嬉しそうな声を上げてモモが小走りに駆けて行く。それに手を振って見送りながら、まあ勝負は一瞬だろうなと考える。

案の定、なにやら勇者の証とか、自分より強い奴に会った事がない云々と言っていた相手は、モモの繰り出した蹴りで発生した竜巻に巻き込まれ一瞬で倒れ伏した。

あー、どうやら鬱憤は晴れなかったようだ。どことなく不満そうな雰囲気が漂っている。帰ってから息抜きをさせないと駄目だなあれは。

携帯で川神院に連絡を取りながら、俺は放課後の予定を考えていた。

side out

side 黛由紀江

今はお昼休みの時間です。

いつもならタカさんと机を並べてお弁当を食べるのですが、昼休みなってすぐに教室に来られた凛奈さんに引きずられるように連れて行かれました。従って今日は私1人でお昼を取っています。

それはいいのですが――

「ま、松風。何故かいつもよりも注目されているような気がするのですが……」

「おう、今まゆっちはお立ち台に立ってヒーローインタビューされ

るプロスポーツ選手なみに目立ってるぜ」

や、やっぱりそうですよね？　私何かしたんでしょうか？　お昼休みは常に注目されていましたけど今日ほど視線を集めた事は今までなかったはずですよね？

はっ！？　もしや知らないうちにクラスメイトのみなさんを不快にさせるような事しでかしてしまったのではないでしょうか！？

どうしましょうどうしましょう松風いったいどうすればいいんでしょうか今日に限ってタカさんがいない事の時に私はいったい何をしてしまったというんでしょうかああ見られています特に女子のみなさんの視線が視線が視線が怖いものがまじっていますよ何かヒソヒソ話されていますよきっと私の事を話しているに違いありませんごめんなさい謝りますからどうすればいいんでしょうかぁ！？

（落ち着けまゆっち！　タカっちがいない時にテンパったら取り返しつかねーぞ！）

はっ！？　そ、そうですね。今日はいつもフォローして下さるタカさんがいらっしゃらないのでした。お、落ち着かなければいけませんよね。

それでも顔を上げる勇気はありません。視線が物凄く私に向けられています。でも本当にどうして今日に限ってこんなに注目されているんでしょうか。やっぱりタカさんがいらっしゃらないからなのでしょうか……

「そういやあ、入学してからタカっちとお昼一緒じゃないの今日が初めてじゃね？」

「確かに言われてみればそうですね。学園にいる時はいつも一緒に昼食を取っていましたね」

「クラスメイトにしてみりゃあ、それが珍しいからまゆっちを見てるんじゃねぇかとオイラは思うんだよ」

そうなんでしょうか？　それとは違った気配を感じなくもないんですけどね。ただ地元の時とは違う遠慮がちな視線じゃないのはいいのですが……この視線の意味もよく分からないですけど余りいいものじゃないですよね、きっと。

だってヒソヒソ話をされながら見られるのは余りいい気分じゃありません。

（でもよーまゆっち。ここらで金曜集会の時、ジン兄が言っていたように勇気を出して友達作ってみようぜ）

それはいい考えですね松風。タカさんも力を貸しくれると仰っていましたが、１度は自分自身だけの力でやってみないといけないですよね。

（それじゃあ差し当たって隣の席の少女に声かけようじゃーか）

い、いきなり高ランクの任務ですよ松風！　ＮＡ○ＵＴＯ的に言えばＳランク任務です！　下忍以下の私には到底完遂できない任務ですよ！？

（いや！　そんな事はねー！　まゆっちのスペックはオイラが１番よく知っている！　その気になればＳランク任務なんて朝飯前だぜ

！　行けー！　行くんだまゆっち！　お前の力を見せてやれー！）

松風の心の声援を受け、私なけなしの勇気を振り絞ります。そうです。ジン先輩も仰っていたではありませんか。まず何より勇気を出せと。

私の周囲の現状を鑑みるに、恐らく待っていては友達は出来ません。ならばどうすればいいか。答えは1つしかありません。自分から友達を作りに行くしかないんです。

松風！　タカさん！　見守っていて下さい！　黛由紀江！　行きます！

（おお！　行けまゆっち！　オイラは隣で、タカっちは空から見守ってるぜ！）

それじゃあタカさん亡くなられた方みたいじゃないですか！？　っと、今はそんな大ボケをかましている暇はありません！

さあもう1度！　黛由紀江！　行きます！

「あ、あのぉ～……」

「――なんであの場面で打たれるかな？　キャッチャーはいったいどんなリードをしてんのよ……せっかく最終回まで勝ってたのに最後の最後で逆転サヨナラってどういう意味？　しかもサヨナラ逆転満塁ホームランよ？　しかも今年ドラフトで入ったばっかの高卒ルーキーによ？　しかも代打のプロ初打席によ？　なに物凄い自信つけさせるような事してんの！」

こ、怖い！　怖いですよ松風！　何やら物凄い怨念めいた雰囲気が

あとからあとから、これでもかと言うぐらい溢れ出ていますよ！

「なんかヤベー奴に目を付けっちまったんじゃね？」

「で、ですが、あんな可愛らしい外見をなさっているのに……」

「人は見掛けによらねーって事だな。また1つ大きくなったぜまゆっち」

そうですね……って綺麗に纏めてどうするんですか！？　ああ！　いったい私はどうすればいいのでしょうか！？　タカさん！　早く戻ってきて下さい！　お願いします！

「黛さんがまたストラップと会話してるよ」

「顔もめちゃくちゃ怖いし」

「なんか落ち込み始めてるし！？」

「「「総じてなんか怖い！　早く戻ってきて篁君！」」」

そんな内容のヒソヒソ話がクラスのいたるところで起きているのに、私は気付くどころかそんな余裕すらありませんでした。

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

ｓｉｄｅ　川神一子

足元を狙っての払い斬り。1回転して横薙ぎ。切り返して逆袈裟の斬り上げ。手首を返しての振り下ろし。勢いと共に腕を引き力を解

き放つように連続の突き。

アタシとしてはかなりの速さで攻撃したのに、ジン兄は余裕すぎるぐらい余裕でかわし、最後の突きは刃を指2本で挟んで止められた。薙刀を引いて間合いを空けようと思ったのにビクともしない。

え？　ちょ！　なにコレ？

かなり全力で引っ張っているのに、涼しげな顔でたった2本の指でアタシの全力と渡り合うジン兄。やっぱりお姉様と同じで凄いわ。

今日の夕方はお姉様が１００人組手を行うから道場で修練は出来なかった。どこでやろうかなと考えていたら、ジン兄に誘われて手合わせをする事になったの。

場所を多馬川の河原に決めて、そこに向かう途中で寮に帰るところだった大和とばったり遭遇。ジン兄が『ついでに見ていけ』って言って帰りたがってた大和もムリヤリ引っ張ってきた。

さすがの大和もジン兄にはかなわないみたいね。っていうか、アタシたちの中でジン兄の上に立てる人っているのかしら？

前に京が言ってたけど、アタシたちのヒエなんとかってものの頂点に立ってるのがジン兄だから、誰も逆らうこと出来ないらしいわ。

よく分かんないけど、アタシたち風間ファミリーの中でジン兄が１番偉いって事よね？　うん、それなら分かるわ。

それで大和が見学している中、アタシとジン兄の手合わせが始まったってわけ。

「軽い。自分の持ち味が速さだと分かってるのはいいが、手先だけ

の攻撃になってるぞ。フェインでない限り、1撃で倒すつもりで攻撃しろ」

厳しいお言葉をもらう。でも速さを生かそうと思うと余り力入れられないのよね。1撃で決めようと思うとどうしても溜めを作らないといけない。でもそれって速さとは真逆の事よね。

「それは分かるんだけど……えっと、力を込めようとなると、どうしても溜めを作んなきゃいけないでしょ？　そうするとせっかくのスピードが……」

思ったままの事を言葉にするとジン兄は少しの間考え込んだ。そして見学していた大和を呼ぶとアタシの前に立たせた。

「えっと……俺に何をさせようってんだ、兄弟？」

いきなりの展開に困ってる大和。アタシの前に立った事でもしかして手合わせさせられると思ってるのかしら。さすがにそれはないわよ。大和には悪いけど、手合わせして為になる事はないわよね。でもジン兄は大和の疑問に答える来なくアタシたちに指示を出して来る。

「カズ、左腕を上げて肘を伸ばして掌をヤマに向けろ。ヤマは右腕をカズのように上げろ。ただし握り拳だ。で、その拳をカズの掌につけろ」

訳が分からないまま言われた通りにする。お互い腕を突き出した状態でどうしていいか分からないアタシたちはジン兄の方に視線を向ける。

「ヤマ、その状態のまま押してカズを動かしてみろ」

「いや無理だから」

ジン兄の言葉に大和がすぐにツッコミを入れる。うん、悪いけどアタシも大和に押されたぐらいでグラつくような鍛え方はしてないわ。いったいジン兄はなにをやらせたいのかしら。

それでも言われた通りにアタシを押しのけようとくっつけた拳に力を入れて押してるけど、肘が伸び切った状態じゃあろくに力なんて入んないわよ。

案の定、全く動かなかったアタシに大和が溜息を吐く。それを見て小さな笑いを零していたジン兄が大和に何やら耳打ちした。それを聞いて怪しそうな顔をしている大和。

なにを言われたんだろ。そんな事を思っていると大和が呼吸を整えるように小さく息を吐く。何かやるんだ、そう思った瞬間、アタシは後ろに押されて尻もちを着いていた。

え？　何でアタシ押されたの？

「分かったか？」

「全然分かんないわよ～」

差し出してくれたジン兄の手を掴んで立ち上がる。分かったかなんて言われても全く分かんない。何がどうなったのよいったい。現に押した大和も呆然としている。

大和が力で押すために溜めを作った風には見えなかったし、それ以前にさっき言ったように肘が伸び切った状態じゃ大した力も出ない。なのにさっきかなりの力で押された。

「力ってのは溜めを作らなくても伝える事が出来るんだ。足の踏み込みと身体を捻じる事によって生まれる回転エネルギーを使えば、予備動作なしでもそれなりの力を出せる。さっきヤマには右足に力を入れると同時に腕を捻じれって伝えたんだ」

「そうなんだ。それだけであんなにも力が出るもんなんだね」

「まあな。それにお前の武器は薙刀だろ？　基本の攻撃は薙ぎ払いや斬り下ろしだ。身体全身を使っての攻撃が多いから、知っておいて損はないはずだ」

そうれもそうね。今まで素早さ（スピード）と体力（スタミナ）をつける事だけを考えてきたから、力に関しては自分向きじゃないって諦めてたところもあったし。

ちょっと技術的なモノが必要かもしれないけど、努力だけは人には負けない自信があるわ。

「しっかし、捻じりの力って凄いんだな。俺がワン子を押し倒す事が出来るなんて」

「ボクシングにもコークスクリューってパンチがあるだろ？　力の弱い者がそれを補うためのれっきとした武道の技術なんだよ」

感心してる大和にジン兄が説明をする。確かに武道に技術だけどあんまり考えた事なかったな……じーちゃんかルー師範代に聞けば教えてくれるかな。それともジン兄に聞いた方がいいのかな……あ、

でもジン兄は川神流じゃないからダメか。

「しかし押し倒すね……もう少し言葉の使い方があるだろヤマ」

「そこで上げ足取るなよ！」

何やら言い争ってるけどジン兄に聞いてもいいのかな？　よし！
ダメもとで聞いてみよう！　ダメだったらダメで後でルー師範代に聞けばいいもんね！

「カズ、基本は教えるから準備しろ。応用は後でルー師範代に聞けよ」

意気込んでいたら先にジン兄に声を掛けられちゃった。でも教えてくれるっていうんなら大歓迎だわ！

「うん！」

強くなれるならなんだってやるわよ！　今のアタシに立ち止まるなんて言葉はないんだから！

目指すは川神院師範代！　その目標までノンストップなんだから！

第８９話　現状の確認、それぞれの思う事（後書き）

あとがき～！

「第８９話終了。あとがき座談会、司会の春夏秋冬　廻です。今回のお相手は――」

「川神百代だ」

「はいよろしくね。さて今回のお話ですが、いろいろなキャラのエピソードが進み始めました」

「いろいろありすぎて何が何だか分からんな」

「そりゃ君が頭悪いからだろ」

「いい度胸だなお前。地獄見るか？」

「俺をノしたら座談会終わるからな。さて話の方だけど、とりあえず原作の一子ルート、京ルート、由紀江ルートを徐々に始めたって感じだな」

「一気にやる気なのか？」

「そのつもり。とりあえずは大和の一子ルートを中軸として、京ルート、由紀江ルートを織り交ぜていく。その間に君たちのイチャつきエピソードも織り交ぜようかと」

「どんどんやれ！　私は大歓迎だ！」

「はいはい。分かりましたよ」

「ところで、大和はワン子、タカはまゆまゆだけど、京のルートは誰がやるんだ？」

「神がやる。京ルートは京の心の救済を目的で織り交ぜるから、外の世界を気付かせるのが神の役目にした」

「寝取りはないよな？」

「ない。絶対にない。安心しろ。それから神は全てのルートに少しずつ関係していきます。主人公ですから」

「最近は主人公らしくないけどな」

「すみません。では今回はこれにて」

「短いぞ？」

「ちょっとした連絡事項がありますのでこれまでにしてください。それでは次投稿もよろしくお願いします」

活動報告にも書きましたが、連日投稿を終了しております。
結構キツイところまで来ていたので、無理に続けるものじゃなですよね？

約3ヶ月近く続けていましたが、最近は書き溜めが出来ませんでした。
今もストックのない状態ですので、思い切って止める事にしました。

これからは早くても2日に1回。
出来れば3・4日に1回。
遅くとも1週間に1回。

のペースで投稿していこうと思います。

毎日毎日読んでくださっている読者の方には本当に申し訳ありません。
ですがこれからもどうぞご愛読、よろしくお願いします。

第９０話　ＬＯＶＥかわかみ、特別ゲスト登場？（前書き）

第９０話投稿。

４日ぶりの投稿。そろそろ１００話が見えてきたな……

第９０話　ＬＯＶＥかわかみ、特別ゲスト登場？

――２００９年　５月１２日　火曜日　ＰＭ６：００――

ｓｉｄｅ　川神百代

目覚ましの音が部屋に響き渡っている。

私はかぶっている布団から手を出し、目覚ましを見ることなくスイッチを押して鳴り響く音を止める。時間は確認するまでもない。６時だ。

まだ意識が半分眠ったまま寝返りをうつ。分かっていた事だが隣で寝ていたジンはもういない。朝の修練に行ったんだろう。

ジンは自分が起きた後、しっかり１時間後に目覚ましをセットして出ていく。私としては起きるまでずっと一緒にベッドの中にいたいが、ワン子と同じで朝起きて修練するのが日課になっているらしく、逆にそれをやらないと調子が悪くなるらしい。

朝の修練、私の場合は気が向いた時しかやらないけどな。

しっかし、あいつの体力はどうなっているんだ。昨夜の閨事も結構激しかったし、私は半ば気を失って眠りについたんだぞ。

だいたい２時間ぐらいの事情だったが、私は１０回ぐらいイってしまったな……なんとなしに身体がダルイ気がするし、腰も微妙に痛いぞ。

なのにジンのやつはいつも通りに起きて、いつも通りの日課をこな

している。あいつがおかしいんだ。うんそうだ。私がそう決めた。

でも旅行での初体験以降、タガが外れるとまでは言わないがかなりの回数をこなしているな。お互いに身体を合わせる事の気持ちよさと心地良さを知ってしまったし……

物凄く俗物的に言っちゃあアレだが、２人してハマってるって感じだ。

これでいいのかと思わなくもないんだが……まあ今はいいか。とりあえず起き上がるまでの３０分。至福の微睡みタイムを満喫しよう。

私の枕の横においてあるジンの枕を手に取る。あいつの匂いがする枕を抱き締めながら、あいつの温もりを感じる布団の中で、起きたばかりのこの時間を過ごすのが今の私の日課になっている。

出来れば時間ギリギリまでこのままでいたいのだが、旅行の時に決心したように、ゴールデンウィーク明けからお弁当を作っている。これが以外と時間がかかる。６時半ぐらいには起きて作りださないといけないから、この至福の時間も３０分ぐらいしか満喫できないんだ。

しかしあれだな。ジンのために弁当を作ってやりたいけど、ジンのベッドの中でずっと微睡んでもいたい。コレはある意味で究極のジレンマだな。幸せのジレンマではあるけどな。

そうこうしている内にもう３０分経とうとしている。そろそろ起きて準備に取りかからないといけないな。名残惜しいが今度は昼の至福の時のために今は起きるか。

ベッドから降りて伸びをする。気だるさと腰の微妙な痛みは取れな

いが気になるほどでもない。瞬間回復を使えばあっという間だが、なんと言うか……幸せの名残だからなくなってしまうのもなんか勿体ないなから使わないようにしている。

事情の後、眠る私に着せてくれたんだろう、パジャマ代わりにしているジンのTシャツを脱いでベッドの上に放り投げる。上半身は素っ裸、下着は下しか着けていない。

その格好でジンの部屋にあるタンスの1段を開ける。すると不思議、私の下着や服が仕舞われている。

いや、不思議でもなんでもない。ただ単に私がジンの部屋に浸食しているだけだ。

あいつが帰って来てから寝る時はほぼ一緒。自分の部屋に着替えに帰るのが面倒くさいからジンの部屋のタンスの1段を勝手に拝借させてもらったのだ。今のジンは服も少ないからタンスの空きは十分あったしな。

ちなみに私の制服もジンの部屋のクローゼットに入っている。

ジンの奴も間違いなく気付いているけど何も言ってこない辺り、言っても意味がないと思っているのか、それでも構わないと思ってくれているのか……悔しいがたぶん前者だろう。私も言われてやめるつもりはさらさらないけどな。

下着とお揃いのブラを取り出し着ける。む、揉まれて大きくなったか？　ちょっとブラがキツイような気がしないでもないな。まあ、1センチぐらいの増量なら今のでも問題ないか。本格的にキツクなったら買い換えよう。ジンのお金で。

制服を着込み部屋を出て洗面所へ。顔を洗って歯を磨いた後、調理

場へ顔を出す。

「おはよう百代ちゃん」

「おはよう」

料理長さんの挨拶に言葉を返し、連休最後の日に自分専用に買ったエプロンを着けて調理場に立つ。気分は新妻。うん、悪くないな。

「それじゃあよろしくお願いします」

「はい、任されました」

この料理長さんが私の料理の先生だ。筋がいいと褒められたので俄然やる気になっている。

自分でも驚いている事なのだが、ジンに料理が美味しいと褒められたり、料理上手だと褒められると、『もっと美味しいものを作って食べてほしい』なんて乙女チックな思いが込み上げてくる。
私も女なんだなぁ。でも悪い気分じゃない。

「それじゃあいつも通り出汁巻き卵からやろうか」

「ああ」

今日の弁当も愛情たっぷりの最高のものにしてやるからな。待っていろよジン。

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

ｓｉｄｅ　暁神

なんで俺は今こんな所にいるんだろうか？　誰か説明してくれない？

目の前にいる奴に視線を送る。表現しがたい表情をしているな。

廻らせてガラスの向こうの連中に視線を送る。いっせいに逸らされた。おい。

隣に座っているモモに視線を向ける。嬉しそうに昼食の準備で弁当を広げてる。ここで食べる気かよ。

え？　ここがどこだって？

学校には必ず存在する放送室だ。そして目の前にいるのが井上準。ガラス越しに見えるブースにいるのが放送委員のみなさんだ。

もうお分かりだろう。今日は火曜日。そして今は昼休み。そして放送室にいるモモと井上。校内ラジオ番組『ＬＯＶＥかわかみ』がもうすぐ始まるのだ。

それでなんで俺がここにいるかというと、昼休みが始まり火曜日だからラジオがあるなと思いながらモモが弁当を持ってくるのを待っていたら、そのモモに問答無用で放送室まで引っ張られてきた、という単純明快な理由だ。

「あの～モモ先輩？」

「なんだ？」

３段の重箱を広げている最中に井上に声を掛けられ、若干ながらも

機嫌が悪くなるモモ。だがビビるな井上。向こうでＡＤ役の女子生徒が掲げるスケッチブックにでかでかと『モモ先輩に準備いいか聞いて下さい』と書いてあるんだ。パーソナリティーの仕事をちゃんとこなせ。

「始めてもよろしいでしょうか？」

「ん？　ああ、もう時間か。いいぞ、始めてくれ」

井上に言われてようやく開始時間が迫っている事に気付いたようだ。さっきまでの不機嫌を引っ込めてあっさりと答えるモモ。あからさまに安堵の溜息を吐いているな、井上も放送委員も。

「なあ、モモ？」

「なんだ？」

「もしかしなくても放送室（ここ）で弁当を食べるのか？」

「当たり前だろ」

当たり前なんだ……しかもお前、今日も箸を１膳しか用意してないじゃないか。ってことは見知らぬ放送委員の目の前で食べさせ合いをしろというのか。何なんだこの公衆羞恥プレイは。

すまんヤマ。この間お前に自重しろと言われたばかりなのにどうやらその約束は果たせそうにない。それどころか全校生徒に知れ渡ってしまいそうだ。

それでも、まあいいかと思っている辺り、どうやら俺もかなりモモの行動にほだされきたようだ。『バカップル』と揶揄されるのを否

定できなくなってきたな。

お、どうやら放送が始まる様だ。ブースからキューのサインが出た。ちなみに放送委員の間では今回のモモの行動には触れない事で決まったようだ。

マイクのボリュームを上げ井上がいつもの口上を始める。

「ハァイブリバディ、ゴールデンウィークも終り5月も半ばに差し掛かって来たね。5月病対策はしてるかな？　今週もラジオ番組ＬＯＶＥかわかみが始まるよー。パーソナリティーは俺、修行僧こと２年の井上準と――」

間が空いた。

いつもならこの後にモモの口上が続くのだが、今は俺に弁当を食べさせる事に集中（？）しているから気付いていない。目線で井上が俺に振ってくる。本当に俺はどうしてここにいるんだろうか。

差し出された出汁巻き卵を食べながら、モモの背中を小さく叩く。訝しく俺を見てくるので反対の手でマイクを指さすと、意図を察したようで小さく頷きやっと始まりの口上を上げた。

「人生、鴛鴦之契（えんおうのちぎり）暁神一筋！　川神百代だ！」

なにを言い出すんだいったい！？　危うく飲んでいたお茶を吹き出すところだったぞ！

何とかむせることなくお茶を飲み込み軽く睨むが、モモはどこ吹く風といった感じで全く反省の色がない。

いやもうバレてるからいいんだけどさ。改めて全校放送で言う事はないだろ。ああでも大丈夫か、たぶん殆どの人間が『鴛鴦之契（えんおうのちぎり）』の言葉の意味を知らないだろう。
知ってるヤマは呆れて凛奈さんはほくそ笑んでいるに違いない。

「ええっと……どうもすいませんねみなさん。今日はちょっと特別ゲストが来てるもんだらモモ先輩のテンションがおかしくなっております」

「おいハゲ。誰のテンションがおかしいだ。適当なこと言ってると関節外すぞ」

「急に素に戻んないでくださいよ！　物凄く心臓に悪いじゃないですか！」

そう言いながらも俺に文句があるような視線を向けるなよ井上。仕方ないだろ、放送委員のカンペに喋るなって書いてあるんだから。
それといつ俺が特別ゲストになったんだ？　それから井上、とっとと進行しろだとよ。

「では改めて今週のＬＯＶＥかわかみ。先ほど言ったように今日は特別ゲストが来てます。来てますっつーかモモ先輩が勝手に連れてきたんですけどね」

「私の昼休みは卒業するまで予約でいっぱいなんだ。火曜日だけは仕方なくこのラジオに出てやる。ありがたく思え」

指差す俺に気付いてブースの方を見た井上は、カンペに書かれていた言葉を見て慌ててパーソナリティーとしての仕事を始めた。

モモもちゃんと掛け合っているが、俺に弁当を食べさせる事は忘れていない。ちなみに俺、食べさせられるだけでモモはちゃんと自分で食べてる。まあ、1膳しかないのだから同じ箸なのは言わずもがなだが。

「相も変わらず自由奔放っスね……まあそこがモモ先輩らしいですけどね」

お前も苦労してるんだな井上。ていうか放送委員のみなさんも申し訳ない、こんな自由奔放な奴を野放しにしてしまって。これからはちゃんと俺が面倒みますので。

と、そんな事を思っているとモモとくだらない掛け合いをしていた井上が目配せをしてきた。紹介に移るんだな。分かった、いいぞ。

「はい！　ではそろそろ特別ゲストの紹介に行きましょうか！　と言ってもたぶんみなさん予想できていると思いますけどね」

「いいからとっとと紹介しろ。いい加減キレるぞ、私が」

「モモ先輩がっスか!?　はい！　分かりました早くやりますから拳振り上げるのだけはやめて下さい！」

はい落ち着こうなモモ。今ここで井上をのしたら放送自体が終わってしまうだろ。まあ、それはそれで問題はないと思うんだが、1度はこういう事をやってみたかったしすぐに終わるのはしのびない。

振り上げた左拳を両手で包み優しく撫でてやる。途端に機嫌が良くなったモモは零れるような笑顔を浮かべると、唐揚げを摘んで俺の口元に運んできた。

「はい、あ～んだ」

声出しはＮＧだから口だけを空ける。だがモモの前に置いてあるマイクのスイッチは入っている。なにやってるか学校中にモロバレだな。もういい自棄だ。開き直ろう。

そんな俺たちを見て顔を歪める井上に、物凄く申し訳ない思いが湧きあがってくる。とりあえず俺の紹介を早くしてくれ。ほら、ブースの方の放送委員も早く進めろってカンペ出してるだろ。それに行動だけじゃモモを止める事は出来ないんだから。

「っとすみません。目の前の光景に驚いて声が出ませんでした。ちなみに何やってたかのツッコミはしませんよ。触らぬ神にたたりなしですからね。では、改めて特別ゲストの紹介。皆さんのご想像通りの噂のあの人。２年Ｆ組の編入生。暁神だ！」

「えっと、どうもよろしくお願いします」

やっと喋る事が出来たな。これでモモの行動を抑える事が出来るな。っておい、何つまらなそうな顔してんだよお前は。

さて、グダグダな始まりだったけどこの放送、ちゃんと進行して終わらせること出来るんだろうな？

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

ｓｉｄｅ　直江大和

教室のスピーカーから兄弟の声が聞こえてくる。

昼休みになった直後、物凄い勢いで教室に入ってきた姉さんに、拉致られるような感じで連れて行かれた兄弟。１分でも１秒でも一緒にいたいという思いからの姉さんの行動だと思っていた。

だが今日は火曜日。昼休みのラジオ番組『ＬＯＶＥかわかみ』がある日だ。いったい兄弟を連れてどうするんだろうと思った矢先、スピーカーから聞こえてきた姉さんの甘ったるい声に、俺とモロとガクトは飲んでいたジュースを盛大に吹き出した。

無邪気に楽しがっているキャップとワン子。呆れ顔の京。そして俺たちの反応に眉をひそめ注意してくるクリス。きっとヒロとまゆっちも盛大なリアクションしてんだろうな。

いやしかし姉さん。そこまでして自分と兄弟の仲を生徒教師関係なく学園全体に広めたいのか。広めたいんだろうな……自慢したいんだろう。自分と彼氏がどれだけ想い合っているのかを。

そんな事はさておいて、スピーカーに耳を傾けよう。いったいどんな放送になるのか実は物凄く興味がある。

「しかし、目の前の光景が今でも信じられんのだが……」

「見た事は信じてくれ」

「ジン、こんなハゲは放っておいて弁当食べろ」

「俺の存在完全に無視ですかモモ先輩……ちなみにこの２人、１つの箸でお弁当を食べていますよ～」

放送室でもやっているのか姉さん……さっきも『あ～ん』って声が聞こえたからまさかとは思っていたけど……ごめんなさい放送室にいるみなさん、意味はないかもしれないが心の中で謝っておきます。

「どこにいようと変わらないねあの2人」

「マイペースだからね。ジン兄もモモ先輩も」

そうだなモロ。それと京。それはいい意味でか？　それとも悪い意味でか？　どっちも駄目な気がするのは俺の気のせいじゃないはずだ。

「仲睦まじくていいではないか」

「そうよ！　お姉様が幸せならそれでいいのよ！」

確かに仲睦まじくて幸せなのは俺も歓迎するよクリス、ワン子。でもそれにも限度ってものがあるだろ。特に最近は兄弟が姉さんにほだされて自重しなくなってきているんだ。
まあ、行き過ぎれば兄弟が窘めるんだが、最近その『行き過ぎ』の範囲がどんどん小さくなってきてるような気もするが……たぶん大丈夫だろう。

「ところでハゲ。はやくメール読めよ」

「そうしたいんですけどね、せっかく暁が来たんだから質問のメールが来るのを待ちましょうよ。できればその間に弁当食べ終えてほしいんですけどね……っと、そう言ってる間に何通かメールが来たみたいですので読み上げますねー」

やっとラジオらしくなってきたな。しかし兄弟への質問か……

「俺様たちも何か送ってみるか？」

「そりゃ面白そうだな！　よし！　やろうぜ！」

「キャップもガクトもなに馬鹿なこと言ってんのさ！　僕たちがジン兄に何を質問するの！？」

「モロの言う通りだよ。意味ないとこやるな」

アホな事を言い出したガクトとキャップを窘めるように突っ込むモロの言葉に同乗する。つまらなそうな顔をしてるけど、下手な質問すると怒られるのがオチだぞ。あの満面の笑顔で怒るのは怖すぎるからな。

「たくさん質問がありますのでどんどん行きますよー。まず『モモ先輩との馴れ初めは？』」

「なんだそれは……」

「私が中1、ジンが小6年の時のホワイトデーにジンが告白してくれたんだ！」

「そーですか……次！　『モモ先輩との出会いは？』」

「一応は生まれた時からだが、物心ついた頃っていうなら俺が2歳、モモが3歳ぐらいか？」

「それは普通に生まれた時からでいいだろ」

「生まれながらにしての幼馴染みですか……次！　『いつもモモ先輩と一緒に登下校してますけど、どこに住んでいるんですか？』」

「川神院の居候」

「ひとつ屋根の下、さらに同じ部屋で寝起きしているぞ！」

「それは言う必要ないだろうが！」

全くもってその通りだぞ姉さん。なにやら学校中のいたる所から悲鳴（じょし　のこえ）と怒号（だんしのこえ）が響いているが、恐らく姉さんのファンクラブたちだろう。俺は知らない。何も知らないったら知らないからな。

強く生きろよ兄弟。まあお前なら大丈夫だろうけどさ。

「俺様なんか興奮してきたぞ！」

「なんでガクトが興奮すんのさ！？」

「なんとハレンチな！」

「ハレンチって……しょーもな」

「ホント仲いいよな、あの２人」

「うん、家の中じゃいっつも一緒よ」

中の反応はいつも通りだし。きっとヒロも姉さんの発言を聞いて呆

れ果ててんだろうな。まゆっちは慌てふためいていそうだな……松風暴走して一層クラスメイトに変な顔されてなきゃいいけど……

ていうか、今も質問続いてんだけど半分以上が姉さんとの関係ばかり。兄弟本人に対する質問なんて殆どない。あんな決闘までやって目立ったっていうのに、この学園の生徒からすれば兄弟の素性よりも姉さんとの関係の方が大事なのか。

ある意味で物凄いここの生徒らしいけどな……

「ほい次！　『モモ先輩と初めてデートした所はどこですか？』」

「それって付き合ってからか？　それとも始めて2人っきりで遊びに行った時か？」

「普通は前者だろモモ。定番の遊園地だよ。ていうか当時小6にも関わらず俺が全部奢ったような……？」

「その頃から苦労してんだな……次！　『モモ先輩とはもうやっちゃったんですか？』」

「よし、そのメールを送ってきた奴、っていうかガクだろ？　あとでお仕置きだから覚悟しておけ」

「ちなみに私はもう生娘じゃないからな」

「だからここで言う必要はないだろ！　モモ！」

「何気に爆弾発言だな、モモ先輩……」

本当にいつまで続くんだろうか？　このグダグダなラジオ放送は…

…

第９０話　ＬＯＶＥかわかみ、特別ゲスト登場？（後書き）

あとがき～！

「第９０話終了。あとがき座談会、司会の春夏秋冬　廻です。今回のお相手は――」

「暁神です」

「読者の皆様４日ぶりでございます」

「しょっぱなから空けたな。２日に１回の投稿じゃなかったのか？」

「出来ればって前回も書いてあったでしょ。基本は３・４日に１回の投稿。遅くても週１投稿を心がけることにしたの」

「いずれ週１が当たり前になりそうだけどな」

「が、頑張りますよそこは！　それは置いといて、さて今回のお話ですが、あまり深い意味のある話じゃないね」

「自分で言うな。でもまあ確かに、読んだ限りじゃあモモのちょっとしたノロケ話だな」

「はっはっは。まさにその通りだよ。イチャ話ってどうやって書いたらいいかあんまり分かんないから、とりあえず思ったように書いてみたって感じだね。読者の皆様の反応が少し怖いですけど」

「どうしてだ？」

「『これのどこがイチャ話だ！』って思いっきり突っ込まれそう」

「先に言うなよそういう事。本当だったとしても突っ込みにくいだろ」

「そう言うって事は君もそう思っているってわけだ……」

「……では皆さん、次投稿もよろしくしてやってくださいね」

「おいコラ！　こっちの質問に答えてよ！」

第９１話　京の心、その想いの居場所（前書き）

第９１話投稿。

何とかギリギリ１週間。

第９１話　京の心、その想いの居場所

ｓｉｄｅ　椎名京

外の世界はつまらない。

必要なのは自分の心が許せる内側の世界だけ。

他人は疲れる。

必要なのは自分が自分らしくいられる仲間だけ。

私には愛する人と優しい仲間がいれば他には何もいらない。

他人との付き合いも。世界との繋がりも。

私に必要なのは“みんなと秘密基地”だけでいい。

鏡を見るとどうしてもあの女の顔を思い浮かべてしまう。

似ている自分がどうしようもなく滑稽に思えてくる時もある。

でも私はあの女のようには絶対にならない。

他人と関わらなければそもそも問題なんか起きない。

私はただただ大好きな人だけを想い、それを知っているみんなと過ごす事が出来ればいい。

内側の世界は私を傷付けない。

閉ざした世界は私に優しい。

変わらない世界は私の望むもの。

それが――椎名京の世界の真理で絶対だ。

§　§　§

――２００９年　５月１４日　木曜日　ＰＭ４：３０――

過去の記憶を見ている。

――強いて言うなら性よねぇ。私だってそうしたくないけど、何故か欲しくてたまらなく歯止めが利かないのよ――

あんたの言葉は全て気に障った。あんたのせいで私の幼少期はは最悪のひと言だった。きっと大和たちに会わなければ今の私はこの世界に存在していないだろう。

――私は貴女が嫌いよ。見た目が私にそっくりだもん。戻れない若い頃を思い出して嫉妬の嵐だわ――

私もあんたなんか大っ嫌いだ。そっくりと言われて嬉しいと思った事なんか１度もない。あんたの娘として生まれてきた事を私は幸せ

だと思った事すらない。

――ふ、むかつくガキ……ほんとアタシにそっくりだわ――

そうだね。それだけは認めてあげてもいい。お互いを好きになれないってところだけは本当にそっくりだねクソババア。

――断言してあげる。男と女の友情って適応されないよ。特にあんたのような女がいるならね――

知った風な口を聞くな。あんたに私の友達の何が分かるっていうんだ。私は絶対あんたと同じにはならない。間近であんたの事を見ていたんだ。誰があんたと同じになるものか。

――私の子だから分かるわ。あんたのせいでその男女グループ、ボロボロになるよ。あんたが男を惑わしたりして力関係が狂って――

ならない！　風間ファミリーはボロボロになんか絶対にならない！　みんなの事、何も分かってないのに好き勝手い言うな！

――ふん、どーだかね――

いいからさっさと出ていけ。ここにあんたの居場所なんて最初っからなかったんだ。とっとと出ていって結局同じこと繰り返して野垂れ死ね。

――なんつー目付きするの母親に向かって。あー不幸だわ。あんたなんて産むんじゃなかったわ――

不幸はこっちだ。子どもは母親を選べないんだ。あんたの娘として

生まれてきた事が私の最大の不幸だ。

結局それが、私と母親（あのおんな）が交わした最期の言葉になった。

そこで目が覚めた。

周りを見渡してみるとここは放課後の教室だった。大和が机に伏せって寝ている。そういえば起きるのを待ってるのも暇だったから本読んでたんだった。その途中でうとうとしていたみたい。

でもなんていう悪夢。あんな女の事を夢に見るなんて。

夢の中で夢だと理解できたのはとても簡単な理由だ。母親（あのおんな）はもうこの世にはいない。

あいつは半年前、あっさりと病気で死んだ。私は死んで清々して嬉しいぐらいだったのに、1番裏切られたはずのお父さんは凄く悲しんで泣いていた。

あんなに浮気されていてもお父さんはあの女が好きだったらしい。悲劇を通り越して喜劇とすら思った。でもその一途さは自分に遺伝してると思う。

だって私は大和以外の男を想った事はない。というより私にとって直江大和以外は男ですらない。

悔しいけど容姿はあの女と似ている。鏡を見る度に似ていく自分を呪っていた時期もあった。でもそのおかげで凄く女らしい肉体（からだ）を手に入れる事が出来た。そこだけは感謝してやってもいいかもしれな

い。

あの女の淫らな部分（みとめたくない）も似てきているのはどうしようもないけど、私には同時に一途なお父さんの血もちゃんと流れている。

エッチな身体だけど一途な愛。なんていい響きなんだろう。

まあ、キャップやジン兄、ガクト、モロ、タカは男と認めてもいいけどそれ以前に仲間だからね。意識する事すらない。

そんな事を考えながら本を呼んでいる。ちなみに凛奈さんお勧めの愛憎取り巻くミステリーだ。なかなかのチョイスだね。

「あの、椎名ちゃん」

委員長の甘粕さんが駆け寄って声を掛けてきた。返事をするのが面倒臭いから視線を向けるだけで答えると、私の意図をちゃんと察してくれたらしい。世の中こんな人たちばかりだと疲れないんだけどな。

「これからみんなで仲見世行くんですけど。一緒に行きませんか？」

そういう事ね。この子は結構こういう風に誘ってくる。委員長としての使命なのかこの子自身がそういう性格なのか……たぶん後者だと思うけど面倒見がいいんだ。

でも私からすれば鬱陶しいだけだ。

「……いい」

簡潔に答えて本に目を戻す。無駄に他人と付き合うつもりはさらさらない。たとえそれがクラスメイトであってもだ。

「あ、あぅ……そうですか」

委員長はしつこく誘う事なく引き下がった。少し悲しそうな顔をしていたけど私には関係ない。あの子も本当に諦めないね。何度か誘ってくるけどいい加減無駄だって分かんないのかな。

なんか向こうで委員長と小笠原さんとあと誰だったけ？　ああ、確か羽黒さんだったっけ。その3人が何やら私の事で話し合っている。

「つーか椎名、何考えてるか分からねーし！」

「ちょっ、羽黒声大きい！」

別に気にしないし気にもならない。他人に自分の考えを分かってもらおうだなんて思った事なんか1度もない。私の事を分かってくれるのは風間ファミリーのみんなだけでいい。

特に大和には私の考えていること全て知ってほしいけどなかなか上手くいかない。なんか絶妙なところでスルーされてる。

それに比べてジン兄とモモ先輩は羨ましいなぁ。お互いのこと何でも分かってそう。ジン兄も元々そういう性格だけど、モモ先輩ってああ見えて人の心の機微っていうのかな、そういったものに敏感でよく見ているんだよね。

「んだよ、ファックな気分。サガるわ～」

「気にしないでね椎名っち、じゃあね～」

「また明日です」

気にする以前って感じだったから無視していたら3人は教室から出ていった。小笠原さんと委員長は声を掛けてくれたので、一応頷いてはおく。挨拶に対していだけは最低限、返しておかないと後で大和に無視されてジン兄に説教されちゃう。

ジン兄の説教は怖い。別に声高に怒鳴ったりくどくど言葉を言い募る事はしない。言い聞かせたい事を簡潔に言うだけ。ただし常に笑顔で。

その笑顔が物凄く怖い。なんて言うのかな、『目が笑っていない』っていう意味が初めて分かった笑顔だったねあれは。

「邪魔するで候」

「主将」

今度は弓道部の主将が来た。また催促だねあれは。

私は一応、弓道部に所属している。タカと同じで頼まれて入っただけで義理なんてものは存在しない。私はだた弓の腕を鈍らせないために入ったに過ぎないし。

「椎名、たまには部活に顔を出すで候。お前の腕をみんなに伝えて欲しく候」

やっぱり思った通りだ。

「……パスします」

「……明日は？」

食い下がってきた。面倒くさいな。

「考えておきます」

「待っているで候」

無駄たと悟ったのか、当たり障りのない返答に少しだけ肩を落として主将は教室から出ていった。何を期待していたんだろうねあの人。

ていうかあの人、なんで部の中と外で言葉づかい使い分けてんだろ。疲れる生き方してるねホント。

「椎名、今日も部活には行かないのか？」

今度は小島先生。主将が教室から出ていくのを見て私に声を掛けたんだと判断したんだろう。この先生、いつも鞭を使っているけど一応弓道部の顧問なんだよね。

今日は何なんだろう。悪夢を見て、関わりたくない他人に誘われ、自己鍛錬のためだけに入った部の主将に催促され、最後は先生。今日は厄日なんだろうか？

「小島先生、入部条件は私が気が向いた時にだけ行ってもいい、だったはずだけど……」

「ああ、だから強制はしない。頼んでいるんだ。ふるいに掛けられた1年生を見てほしい」

ああ、本当に面倒くさい。私は慣れ合うために部活に入ったんじゃない。懇願されて大和に言われて仕方なく、でも自分の鍛錬のためになると思ったから入ったんだ。

小島先生だって頼んでも無駄なの分かってるはずなのに。

「……では良き日を選んで行きます」

「すまんが頼む」

面倒くさくなった時は当たり障りのない返答に限る。答えを返せば変な相手でない限りそれ以上突っ込んで言葉を掛けてこない。

『善処します』『誠意努力します』『見計らってやります』等々。曖昧で答えを先延ばしにする政治家お得意の返答だけどこういう時は役に立つね。

小島先生がいなくなって教室には寝ている大和と2人っきり。

大和と起こすつもりはない。こんな風にゆったり流れる時間は嫌いじゃない。まるで本当に世界から隔絶されているような感じがして好きだった。

そうだ、大和が起きたら基地に行こう。金曜集会じゃないけどきっと誰かいるはずだし、いなくてもクッキーが警備でいるもんね。

放課後の教室。なんか少しだけうなされている大和を横目で眺めながら、私は穏やかなで緩やかな2人の時間を楽しむように、ゆっく

りと本の続きを読み始めた。

side out

side 師岡卓也

秘密基地でジン兄と2人、金曜日にみんなでやろうと言っていたゲームのダウンロードクエスト配信の予習をやっていたら、京がやってきてすぐ後に大和も来た。

まあ、京は大和が部屋に入る前に屋上に行っちゃったんだけどね。

「なにやってんだ？　モ○ハン？」

「うん、新しいダンロードクエスト配信されたじゃない。あれ予習しておこうと思ってさ」

「兄弟は？」

「まあ、今時の日本人男子高校生の日常社会復帰のためのリハビリだ」

何やら難しい言葉を使って持っていた携帯ゲーム機を大和に見せるジン兄。リハビリって間違っちゃいないけどなんでわざわざそんな言い方をするんだろうね。

でもこの人、ゲームでも規格外だよね。始めて2週間した経っていないのにもう僕より圧倒的に操作が上手い。格ゲーなんて何度パーフェクトで負けた事か。

唯一、ファミリー内で誇れる事もあっという間にジン兄に抜かれるなんて……まあ、この人は普通の人間の規格の外に存在するに人だからね。比べるだけ無意味って感じかな。

「はい大和。コーヒーが入ったよ」

「ありがとうクッキー。京は？」

コップを受け取りながら大和が先に部屋に入ったはず京の事を尋ねてきた。

「屋上でボーっとしてるみたい」

「京はあそこからの夕日が大好きだからねぇ」

クッキーの返答に付け足すように僕も答える。

このビルはここらの建物では結構高い方で、屋上に行けば見晴らしもなかなかもの。とくに夕暮れ時になると工業地帯と海が広がる景色は街中ではあるけど見てみる価値はあるんじゃないかな。モモ先輩も好きだって言ってたし。

「ねぇねぇジン、大和。僕は京を見ていると心配なんだ」

「いきなりどうした、クッキー？」

大和にだけじゃなくジン兄にも聞く辺り、クッキーもジン兄の僕たち風間ファミリーので立ち位置を理解したみたいだ。まあ、力だけじゃなくて精神的にも僕たちのヒエラルキーの頂点に立ってるから

ねジン兄は。

「だって京は余りに大和一途じゃないか。もしも大和が他に恋人を作ったらどうなる？」

それは僕たちみんなが思っていた事だ。でもどんな結果になるかも分かっている。大和もジン兄もきっとそれは理解していると思う。

「考えるだけでも恐ろしいが……うぬぼれた言い方かもしれないが、たぶん変わらないよ」

「だな、騒いでヤマに嫌われるよりもチャンスを待ち、再び仲良くなろうと狙うだろうなミヤだったら」

やっぱり2人とも同じ事を考えてた。でも本当にそんな感じだね京は。まず何より大和ありきだし、自分の行動で大和が気分を害するような事はしないはず。

でもそうなったらより一層、他の人との繋がりを持たなくなりそうでちょっと怖いんだけどね。

時々、京の存在が透けて見える感じを受ける時がある。僕がよく言われる『影が薄い』っていうのとは全然違う、まるで自分から周りを拒絶して存在感をなくそうとしているみたいに。

ちょっとゲーム的な表現になっちゃったけど、京にはそんな感じが時々していた。

「大和は京と恋人になる気はあるのかい？」

何度もモモ先輩やワン子が聞いてた質問をクッキーも大和に投げか

けた。

確かにそれが1番手っ取り早い方法だと思う。大和が京の想いに答えてあげればきっと上手くいくはず。でもたぶん、大和はそうしないんだろう。

「俺は京を助けた。が、別に付き合うために助けたんじゃない。あいつには広い視野を持ってだな――」

「もう僕それ聞き飽きたよ！　とにかく京は大和が好きなんだから想いに応ええばいいじゃないか！　大和に誰か好きな人がいるなら分かるけど、でもいないなら京の想いを受け取っても――」

「クッキー」

いつも通りの大和の返答に興奮するクッキー。だけどジン兄の声に言葉が止まる。

張り上げた声でもなければ張り詰めた声でもない。ただただ呟くような声だったのにこの部屋の雰囲気を一変するほどの力があった。

思わず僕と大和も視線を向ける。ジン兄は変わらずゲームを続けて視線も画面を見たままだった。それでも意識が僕たちの方に向いている。何故だか僕にもそれが分かった。

「ヤマは真剣にミヤの事を考えているからこそだ。一途過ぎる想いに対する答えは、向けられる方にもそれなりの覚悟が必要なんだよ。受け入れるにしても断るにしてもな」

そう言い終えたジン兄が僕にゲーム機を返してきた。

あ、クエスト終わってる。あ！　僕の方は敵にやられてた！　僕たちの話に耳を傾けて言い聞かせるように言葉を発しているのに、変わることなくゲームを続けれるなんて……本当に凄いな。

「兄弟？」

立ち上がり部屋を出ていくジン兄に大和が声を掛ける。それに対して天井を指さすジン兄。

「ミヤの所に行ってくる。ちょっと話したい事あるしな」

そう言って部屋を出て行ったジン兄を見送った後、ちょっとの間だけ静寂が部屋を覆った。それを破るように大和が大きく息を吐いた。大和の気持ちが分かる分、ちょっとだけ同情してしまう。

「大変だよね。想いを向けられる方も」

「まあな。中途半端にだけはしたくないからな。兄弟が言ったけど、受け入れるにしろ断るにしろ、きちんと答えを出さなきゃな」

仲間としては京の想いも大事だけど、それに応えなきゃいけない大和の大変さも分かってあげたい。僕たちに想像なんて出来ないだろうけどね。

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

ｓｉｄｅ　暁神

「黄昏てんなミヤ」

屋上の落下防止のフェンスの上に腰かけ、夕焼けを眺める背中に言葉を掛ける。その視線は本当に夕焼けを見ているんだろうかね。

「落ちたらお前といえど死ぬぞ」

「そうなる前にジン兄が助けてくれるでしょ」

信頼されているんだろうな。本当に落ちそうになったらもちろん助けてやるけど、ミヤなら何とかできるだろ。こいつも何かと凄いからな。

「それで？　何か愚痴りたい事でもあるんじゃないのか？」

「学校……つまんないなぁって……」

思ってた通りの言葉が返ってきたな。やっぱり中学3年間、みんなと離れていたせいで小学校の頃より他人への排他主義が酷くなってる。そろそろ修正しないとヤバいか。

「俺たち以外の人たちとも交流してみろ。クラスメイトともそれなりに心を開けば学校も楽しくなるぞ」

言葉で言って聞く事はないとは分かっている。ヤマやモモがそれこそ去年1年間、同じことを何度も言って聞かせたらしいからな。ヤマの言葉にすら従っていないんだから俺の言葉に頷くはずがない。

「必要ない。私には風間ファミリーが、そして大和が全て。他には何もいらない」

分かっていた答えとは言え、はっきりと本人の口から出るとやっぱり考えてしまうな。でも言い聞かせられないのなら気付いてもらうしかないな。

ミヤが抱えている想いの矛盾に。

「なあミヤ。お前にとってヤマが全てだって言うが、世界に男はヤマ以外にもたくさんいるんだぞ」

「私にとって直江大和以外は男じゃない」

「それまでしてヤマが好きか？」

「うん大好き。大和だから大好き」

やっぱり気付いていない。

さっきミヤは『大和だからだ好き』と言った。何もおかしなところはない。人を好きとはそういう事だ。俺とモモだってお互いだから好きで愛おしいんだ。

だが、ミヤの言葉は俺たちとは全く違う意味だ。それに気付かせなければならない。

「ミヤ」

「なに、ジン兄？」

俺の真剣な雰囲気を感じ取ったんだろう、フェンスから下りて向き

合うように振り返り、真正面から俺を見た。聞く態勢が出来なのなら遠慮くなく言わせてもらおう。

「ヤマを好きだと言うなら。どうして好きになったかを思い出せ」

「どういう意味？　私は大和だから――」

「宿題だ。ちゃんと思い出せよ」

疑問・反論を受け付けるつもりはない。ミヤの言葉を遮って言いたい事を言い終え、俺はきびすを返して屋上を去る。

困惑している気配を屋上に感じるが、今回ばかりはちょっと厳しくいかせてもらう。ミヤ自身に気付いてもらわなければならない。

その想いは恋から生まれたものじゃないんだって事を。

人を好きになる過程は『何故好きになった』から始まって『だから好き』に変わっていく。だけどミヤには始まりの部分を飛ばしてしまっている。それがさっきの『大和だから好き』の言葉に表れていた。

ミヤの想いは刷り込み（インプリンティング）だ。

イジメられていたのをヤマが助けた時、恐らく初めて父親以外の異性に抱き締められ護られたんだろう。それがあまりにも強烈過ぎて、当時のミヤはその感情を恋と思ったんだろう。

その時から、始まりの理由のない恋が生まれたんだろう。

確かに、今のミヤはヤマに恋をしてるんだろう。それを否定するつもりはない。ちょっと行きすぎたところはあるが、ヤマといる時にミヤの雰囲気は『恋する女』そのものだと思う。

だからそこ矛盾に気付いていてほしい。そうしなければ、ミヤ本人だけじゃない。受け入れるにしろ断るにしろ、想いに答えを出すヤマも傷つけてしまいそうな気がして仕方がない。

あとは本人たち次第だが……仲間依存その他排他主義もあるし、もう少し様子見てヤバくなりそうならそれとなくフォローに入るか。

第９１話　京の心、その想いの居場所（後書き）

あとがき～！

「第９１話終了。あとがき座談会、司会の春夏秋冬　廻です。今回のお相手は――」

「椎名京だよ」

「１週間振りでございますいかかお過ごしだったでしょうか皆さま！」

「１週間ぶりっていうかかなりギリギリだよね」

「あははは……なんとか間に合ったね。さて今回のお話ですが――」

「納得いかない。なにあれ？」

「今回は君の心情に少し触れてみたんだけどね」

「それは別にいいんだけど、最後のジン兄とのやり取りっていったい何なの？　私の大和への想いを疑うの？」

「疑っていないけど、原作やってて作者が感じた事をそのまま神に代弁してもらたってわけ」

「あんな風に感じたんだ」

「そういう事。もちろんこれは作者が勝手に感じた事ですのであま

り深い意味はありませんのでツッコミはなしでお願いします」

「読者の反応が怖いんだね」

「不興を買ったらまずいからね。では次回でまた会いましょう」

「終わるの早いね」

第９２話　穏やかな昼、描く未来予想図（前書き）

第９２話投稿。

皆様、遅くなって申し訳ありませんでした！

第９２話　穏やかな昼、描く未来予想図

――２００９年　５月１８日　月曜日　ＡＭ８：１５――

ｓｉｄｅ　暁神

いつもと変わらない登校風景。

今日はカズも家から一緒だ。今朝はいつもの走り込みをさせず、この間教えた身体を捻じっての力の入れ方の練習を見てやったからだ。教えた件に関して鉄心さんに何か言われるかと思ったが逆に嬉しそうだったな。まあ、モモはちょっとだけ複雑そうな顔をしていたけど、純粋にカズが強くなることは喜んでいた。

「そう言えばそろそろ球技大会か体育祭の話が出るな」

前を行くヤマの言葉に全員が視線を向けると、俺とヒロとまゆっち以外は頷いている。

球技大会は分かるが体育祭って普通は秋の行事だろ？　まあ最近は梅雨入り前に体育祭をやる学校も増えてきているらしいけど。それとさっきヤマは『か』って言ったな。つまりは球技大会か体育祭のどちらかしかやらないようだ。

「この時期に体育祭があるの？」

俺と同じ疑問を持ったヒロがヤマに問い掛ける。隣のまゆっちも同じで首を傾げている。

確かに俺たちがいた中学校は夏休み明けから準備が始まり、だいたい１０月の中頃に文化祭と併合して体育祭をやったな。球技大会もゴールデンウィーク明け５月中頃だったし。

「ああ、川神学園は早いんだ。６月の終わり頃かな。球技大会か体育祭か水上体育祭のどれか」

「なんだその水上体育祭ってのは」

「読んで字のごとくだぞジン。海でやる体育祭だ」

モモの言葉に納得する。なるほど川神湾の砂浜でやるっていう事か……目的は恐らく女生徒の水着姿だろう。実に鉄心さんらしい。尊敬できる人ではあるんだけど常時のあのふざけたところがなければもっと尊敬できるんだが……

まあ、球技大会になろうが体育祭だろうがやる事には変わりはないんだ。程良く普通の人の定義に外れない程度に頑張るか。

――なんて数十分前に思っていたのだが……

「今年は今週末土曜日に球技大会。６月の末に体育祭を行うことになった」

月曜１時限目のＬＨＲ（ロングホームルーム）での小島先生の連絡事項で、教室は歓声に包まれた。特にキャップとガクが吠えてる。カズもか。

「よっしゃあ！　燃えてきたぜ！」

「俺様の活躍の場が増えて最高だぜ！」

「やってやるわよー！」

元気だなホント。運動に自信のない連中が呆れた顔で見てるぞ。まあ、ヤマとかタクはどちらかと言えば頭脳労働派だからな。あまり身体を動かすって事はしたくないんだろう。

と言っても、ヤマはやる時はやるしタクもなんだかんだ言ってみんなについて行くし、やっぱそこは風間ファミリーだしな。

「ゲンは真面目に出るのか？」

出場する競技を選びながら、喧騒に包まれる教室で1人机に突っ伏しているゲンに声を掛ける。寝ていないのは気配で分かっていたしな。

「巨人（オヤジ）がウルセェからな。一応はサボらずに出るさ」

オヤジ……宇佐美先生の事か。そういえばゲンもカズと同じ孤児院で育って、今は宇佐美先生が保護責任者だって言ってたな。

あの人自身はどこかゆらりとしてて捉えどころがない感じだけど、自分の人生の反省なのか、いい加減だけど意外と生徒の事を考えているようだし、恐らくゲンも高校ぐらいは出ておけって言われたんだろう。

「そうだ神」

それだけで話が終わるかと思った時、ゲンが声を低くしたと同時に雰囲気も変わった。この感じ、ゴールデンウィーク前に注意を促し

てきた時と同じだな。つまりは例の薬（アレ）関係か。

「以前話した最近出回っている変な薬（モン）だが、少しずつだが表に出始めている。そうそう関わる事じゃないと思うが気を付けておけ」

「了解だ」

思った通りだったな。ゲンの言う通りそうそう関わる事じゃないが表に出始めたとなればヤマの情報網に引っかかる可能性もある。前の時はそう急ぐ事じゃないからまだ注意を促していないが、事情が少し変わったとなれば早めに話しだけはしておくか。

「ゲン、現物は手に入らないか？」

「どうするつもりだ？」

「注意を促すにしろ現物があった方がいいからな。無理にとは言わないがもし手に入るようなら1つ回してくれ」

「……分かった。オヤジに聞いてみる」

俺の言葉に少しだけ考え込んだ後、一応は了承の言葉をもらえた。駄目もとで頼んでいる事だから芳しくなかったとしても落ち込む事はないしな。

手に入り次第――いや、ゲンから結果をもらってから金曜集会でみんなに話すとしよう。下手に先に話して首を突っ込まれたら厄介だしな。面白半分でガク、興味本位でキャップ、正義感でクリスが何するか分からないし。

そこで話を終えてゲンが再び机に突っ伏そうとした時、教室の前の方で競技のメンバーを決めていたキャップが俺たちの方に来た。

「ジン兄！　ゲンさん！　出る種目、バスケにしといたぜ！」

「風間テメェ、なに勝手に決めてんだよ」

それはお前、参加せずにずっと自分の席に座っていたからだろ。俺の方は最初からヤマにみんなと同じ競技にするように頼んでいた。まあ、頼まなくてもゲンのように当たり前に一緒にされていたのは間違いないだろうがな。

「メンバーは？」

「俺とキャップ、ガクト、兄弟、ゲンさんの５人。補欠にモロだ」

言い争っているキャップとゲンをしり目に、近付いてきたヤマに問い掛ける。返ってきた答えは予想通り、いつもの顔ぶれだった。

「補欠って事だけどタクはいいのか？」

「いいも悪いもないよ。僕は運動苦手だし、下手に出場してみんなの足引っ張るの嫌だしね」

納得しているならそれでいいか。でもせっかくの球技大会だ、１試合ぐらいはタクも出場させよう。ヤマとゲンがいるからフォローは十分に出来るだろう。

そうこうしている内に男子はバスケとサッカー、女子はバレーとテニスのダブルス、それぞれの競技のメンバーが決まったようだ。

さっきヤマが言ったように俺たちはバスケ、カズたちは甘粕さん、小笠原さん、羽黒さんとでバレーに決まったみたいだな。

さて、普通ならこれで滞りなく終わるはずなのだが今回はそうもいかないらしい。クラスメイト全員が気になる事があり小島先生の言葉を待っている。

気になる事と言うのが、ＬＨＲ（ロングホームルーム）が始まって最初に配られた球技大会のプログラムだ。

実はさっき決めた競技は午前中に準決まで進め、午後一で決勝を行うようになっている。そしてその後に大きく空いた空白。そこに書いてある『マル秘』の文字。

なんだろうなこの『マル秘』、嫌な予感はしないけどまともな競技じゃないのは確かだろう。

「ウメせんせー！　今年は『川神ボール』はやらないんですか？」

ヨンパチが手を上げて言う。っていうか『川神ボール』って何だ？　だがそんな俺の疑問もよそに話は進んでいく。

「学長が新しい競技を思いついたらしくてな、今年は川神ボールではなくそちらをやるらしい。ちなみに競技内容は当日まで内緒だそうだ」

ろくな競技じゃないのは確定したな。

あの人の考えた競技だ。きっと普通の球技なわけがない。確かに球技は『球を使う競技』であって既存の競技だけが球技じゃない。球

を使う競技である以上『球技』なのは間違いないだろうが、出来れば常識範囲内であることを祈ろう。

無理かもしれないけど。

「競技内容は教えられないらしいが参加人数は9人らしい。よってこれより代表メンバーを決める」

「俺たちがやるぜ！」

間髪入れずキャップの声が上がった。だがちょっと待て、お前今『俺たち』って言ったよな？　つまり俺たち風間ファミリーは参加確定って事か？

同じ事を思ったのだろう、ヤマとタクの表情が歪んだ。カズとガクとクリスはやる気の表情。ミヤは表情が変わらない。恐らくみんながやるならやる、といったところだろう。

「そりゃあいいな！」

「うん、風間君たちなら問題ないよね」

タクが何かを言おうとしたが、言葉にする前にクラスメイトの喧騒に呑み込まれてしまった。キャップのカリスマはこんな所でも発揮されるんだな。既にクラス全員がひとまとまりになっている。反論するだけ無駄だぞタク。

「それは構わんが風間、お前たちは8人だ。1人足らんぞ」

小島先生の言う通りだ。2－Fに在籍している風間ファミリーは俺、

キャップ、ヤマ、ガク、タク、カズ、ミヤ、クリスの8人だ。競技の人数は9人。ちょうど1人足りない状況だが……ん？　あと1人？　おいキャップまさか。

「その問題は既に解決済みだぜウメ先生！　残りの1人はゲンさんだ！」

やっぱりか。つまりキャップの言う『俺たち』というのは『風間ファミリーと島津寮』という意味だったという事だ。

「オイコラ風間！　勝手に俺を頭数に入れてんじゃねぇ！」

案の定、反論の声を出すゲン。だけど意味ないだろうな。すでにクラス全体で意見が一致している。どう考えても覆る事はないだろう。つまり、反論するだけ無駄だという事だ。

さらに――

「えー、やろうよタッちゃん」

カズにまでそう言われて断る事の出来ないゲンであった。

結局、学長の考えたマル秘新競技の我らが2－F参加者は、キャップの一存で風間ファミリー・島津寮チームとなったのだった。

昼休み。

屋上でモモが作った弁当を食べたあと、設置してあったベンチに寝転がる。ちなみにモモの膝枕でだ。

それを見た屋上にいた女生徒――恐らくモモのファンの娘だろう――数人が黄色い声を上げたが最近は特に気にならなくなってきた。

「いい天気だな」

「そうだな」

太腿に乗った俺の頭を撫でながら雲ひとつない空を見上げながら言うモモに同意する。昼食後の穏やかな雰囲気と枕にしているモモの脚の温かさと柔らかさに気を抜くと眠気に意識を持っていかれそうだ。

そんな俺の気配を察したのかモモが穏やかに微笑んで見下ろしくる。

「このまま午後の授業サボって屋上でまったりとしたいなぁ」

魅惑的な提案だがそれに乗る事は出来ない。

「賛成したいところだが授業は受けろ。鉄心さんにお前の勉強を見てくれって言われてるんでね」

「いや待て。何でお前が私の勉強を見るんだ？　私の方が学年1つ上だぞ？」

俺が知るか。鉄心さんに言われたんだから仕方がないだろう。なんでも俺が受けた編入試験、実は3年の最終過程の試験だったらしい。しかも全教で科平均95点とのこと。はっきり言って自分でも驚いた。

「権力に屈するとは、情けないぞジン」

「別に権力に屈したわけじゃない。純粋にお前を心配しているだけだよ」

とりあえず言われたから話題に出してみたが、モモは進学するつもりもないだろうし、成績も定期試験で赤点を取らなければ何とかなるはずだ。とりあえず次の定期試験前に集中的に勉強をやらせるか。

勉強の話もそこで一区切り、短い昼休みだが穏やかな時間が流れている。

モモは変わらず俺の髪を梳くように撫でているし、俺も俯く事で流れているモモの髪を指先でいじる。お互いに何も言葉にしないが2人に流れるゆったりとした雰囲気を共有する。

旅行の時にも思ったがこういう時間が凄く好きだ。

「フフッ」

そんな事を思っているとモモが小さく笑いを零した。声に出す事なく視線でどうしたと問い掛けると柔らかな笑顔を浮かべたまま小さく首を振った。

「いや、私ともあろう者が、こんな穏やかな雰囲気を嬉しく感じるなんてちょっとおかしくてな」

「悪い事じゃないだろ？」

「ああ、全然悪い事じゃないな。でもお前が帰ってくるまでの自分を顧みると、今こんなに穏やかにいられるのが本当に不思議でしょうがないよ」

俺が行方不明と分かった直後のモモの様子はヤマから聞いていた。
俺の部屋に引き籠るなんてモモらしくない行動もあり、完全に立ち直るまで結構な時間がかかったらしい。
しかもそれ以降は戦闘衝動を持て余して常に挑戦者を求めていたと鉄心さんから聞いた。

それなのに今、俺と一緒にいる事で穏やかにいられるのが不思議なんだろうな。でもそれは別段不思議な事じゃない。お互いを大切に思って、お互い一緒にいられると事に幸せを感じればきっとみんな同じ思いを感じるはずだ。

髪先をいじっていた指を放し手を上げてモモの頬に触れる。モモも撫でていない方の手を俺の手に重ねる。視線の交錯は一瞬。小さく笑みを浮かべたモモは重ねていた手を握ると頭を下げてキスをしてきた。俺も抵抗することなくそのキスを受け入れる。

「「「きゃぁぁぁ！」」」

数人の女生徒の歓声が聞こえた。

唇が離れた後、苦笑いを浮かべる俺とは対照的に、『してやったり』といった笑みを浮かべるモモ。こいつもここが屋上で周りに生徒がいる事をちゃんと分かってやったようだ。

既に全校生徒どころか全教員にすら公認されているんだ。いまさら照れる事でもないが、もう少し時と場所を考えればよかったな。

「昼休みあと何分だ？」

「15分といったところか」

「寝る。時間になったら起こしてくれ」

「どうしよ～かな～？」

「起こさないと今日の夜は自分の部屋で寝ろ」

「わ、分かった。必ず起こすぞ」

それでいい。それじゃあ少しの間だが眠らせてもらうとするかな。

side out

side 川神百代

すぐに寝入ったジンの顔をじっくりと眺める。

全く、可愛い彼女に意地悪するのはいただけないぞ。その端整な顔に落書きしてやろうか？　それも面白いがこいつの間抜けな顔を周囲に見せるのもなんとなく嫌だしとりあえずやめておこう。それ以前にペン持ってないしな。

穏やかな風が吹く屋上。

遠巻きに私たちを見る視線がちらほらある。そっちに視線を向けると数人の女の子たちがこっちを見ているので小さく手を振ってやると歓声を上げて手を振り返してきた。可愛いな。

でも最近はファンの女の子たちも私とジンが一緒にいる時は気を利

かせているのか、近くに寄ってくる事はしない。大和が言うには、

『姉さんと兄弟の雰囲気に当てられるから誰も近寄らないんだろう。それ以前に2人きりを邪魔して姉さんの不興を買うのが怖いんだろう』

ということらしいが私はそこまで狭量じゃないぞ。まあ多少は不機嫌になるかもしれないがな。

そんな事を考えながらジンの髪を撫でその寝顔を見ていると笑みが零れてくる。こんな風に無防備な表情を私の前だけ見せてくれる。それがたまらなく嬉しかった。

なんて言うんだろうか。信頼されている？　うん、それは間違いないが言葉にするのは難しいな。一番しっくりくる言葉は『愛されている』だな。

フフッ、本当に不思議だ。この私が『愛されている』っていう言葉に凄く心が満たされている。でもたぶん、それはきっと私も同じ想いをジンに抱いているからだろう。

言葉にするのは恥ずかしいが、私もジンを『愛している』んだろう。だからこんな風にジンの寝顔を見ているだけでも心が満たされて嬉しいっていう感情が溢れ出てくるんだ。

3年前とは違う。中学生の時の恋愛がどれだけ子供っぽかったかがよく分かる。もちろんその時の『好き』という気持ちを否定するつもりは全くない。あの時も間違いなく私はジンが好きだった。でもどこか『恋人』っぽくしようと形に拘っていたような気もする。

今のように自然にお互いが大切に思えるような関係じゃなかったのは間違いないだろう。こんな風に感じるようになったのは、たぶん子供じゃなくなったからだろうな。肉体的にではなく精神的に。

私とジンはこのまま結婚するんだろうな。

漠然とだがそんな事を最近思うようになった。強く意識しているわけでもないし別に結婚願望が強いわけでもない。でもそういう風になるんだと確信している自分がいる。たぶんジンもそう感じてくれているはずだ。

結婚か。自分で思っていてなんだが似合わない乙女チックな考えだな。でもうん、自然にそう思えるのも事実だし否定する気もないし、いつかその時が来るのを心待ちにしておこう。

ジジイもワン子もジンなら大歓迎だろうし、武者修行している両親もジンが相手なら諸手を挙げて喜ぶだろう。

あ～でもその前に子供が出来たらどうしようか？　避妊なんてしていないし。ていうか私としては避妊はしたくない。出来たら出来たで私は嬉しいだけだ。

元々進学するつもりはないし、学園を卒業したらそのまま修行の名目で世界を回ることにしているからな。もし子供が出来ても修行には行けなくなるが別に何の問題もない。

うん、子供を作るのもいいかもしれない。私とジンとの間に生まれる子供だ。きっと武の才能に恵まれた凄い子に違いない。出来れば一姫二太郎が理想的か？　でも最初は男の子の方がいいかな。きっとジンに似てとてもいいお兄ちゃんになるだろうな。

でもそうなると私は主婦か。いや私は川神院の総代になる事が決まってるからどちらかと言えばジンの方が主夫か。ハハ、どっちも似合わないな。

だがちょっと待てよ。私とジンが結婚した場合どっちの姓を名乗ることになるんだ？

ジンは孤児で私は川神の跡継ぎ。そう考えるならジンが婿養子という可能性の方が高いな。そうなると『川神神』か……『神』の字が2つ並んで漢字だと語呂が悪いな。『暁百代』は悪くないんだが。

そこまで考えて急に可笑しくなってきた。

ああ、本当に似合わない。こんな事考えるキャラだったか私は？恋人との将来の姿を思い描く。本当にそこら辺の恋する女の子の様な事を考えるなんてな。

でも悪くないな。

と、そろそろ昼休み終了のチャイムが鳴るな。約束通りジンを起こそう。

本音で言えばこのまま午後の授業をサボって2人でいたいが、そうすると今夜は自分の部屋で1人寂しく眠らなくてはいけなくなる。ジンはやると言ったらやる男だからな。情け容赦なく問答無用に私を追い出すだろう。

それはいただけない。今の私にとって夜、ジンと一緒のベッドで寝る事は明日のための活力の源、既にライフワークになっているのだからな。1日でもやめたら死活問題だ。

さて、どうやって起こそうか。

ここはやっぱりあれか？　目覚めのキスってやつか？　うんそうしよう。

では眠れる王子様。今お姫様のキスがお前を夢の世界から連れ戻すぞ。覚悟はいいか？

第９２話　穏やかな昼、描く未来予想図（後書き）

あとがき～！

「第９２話終了。あとがき座談会、司会の春夏秋冬　廻です。今回のお相手は――」

「川神百代だ」

「乙女な妄想をしておりました百代ちゃんです」

「うるさいぞ。それ以前にお前はやらなければならない事があるだろ」

「はいその通りです。まずはお読みいただいている皆さん、本当に申し訳ありませんでした。以前、最低でも週１で投稿すると言っておきながらその条約を反故にしてしまいました。まあそれは体調面の事でどうしようもなかったところではありますが、活動報告でも昨日中に投稿すると言っておいたのにそれすら出来ずに今日投稿。本当に申し訳ありませんでした」

「約束破りまくってるなお前」

「返す言葉がない。本当に申し訳ない」

「謝れば済む問題か？」

「謝る以外に何をやれというんですか貴女は？」

「切腹？」

「死ねと！？」

「裸踊り？」

「文面じゃあ意味ないでしょ……まあそれはさておき、今回のお話はあまり深い意味のある話ではありません。球技大会と体育祭の前振り。後はジンモモのまったり空間を書きたかっただけ」

「私の未来予想図は何だったんだ？」

「ただの文字稼ぎ。では今回はこの辺で。次回はもう少し早く投稿したいと思います」

「身も蓋もないなお前」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1838v/

真剣に私と貴方で恋をしよう！！

2011年11月14日00時39分発行